THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春季大附錄號

第四十年　第四號　第四百四十六號



美術家
軍人
事務家
學生
今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は
腦病良藥
健腦丸
を要求す
島村博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN
効上
腦充血　神經痛　頭痛　眩暈
腦膜炎　腦貧血　耳鳴　健忘
逆上症　卒中　中風　便秘
特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。
藥價
五回分　金拾錢
四日分　六拾錢
一週分　壹圓
二週分　壹圓九十錢
三週分　貳圓七十錢
五週分　四圓
十週分　七圓
全國各藥店に取次す
本舖　大阪市順慶町　東京市堀留町　丹平商會藥房


水ぬるむ頃
微醉
春を謳ふも
人生の一義
サクラビール
帝國麥酒株式會社

大正十四年

中央公論

四月一日發行

春季大附録號

第四十年 第四號

第四百四十六號

「春が來る」「樞府の修正」其他

◎「春が來る」

春が來る、春が來る、一年中の最も樂しい、華やかな春が來る。早く來て呉れ、一日も早く、一刻も早く。十一月、十二月、一月、二月。三月ももう央に近いと云ふのに、昔ははやてのやうな寒風が吹き、夜半から黎明にかけては氣溫がぐつと下る。冬は餘りに長過ぎる。全く厭き飽きする。

だけれど、亞細亞大陸から起つて、リマン海流を亘り、日本海を吹き荒らして來た寒い風は、日一日と其勢ひを失ひ。赤道直北に起つて西に流れ、比律賓群島と臺灣の東から東北の方向を取り、本邦の太平洋岸一帶を洗ふ黒潮の流れは、日一日と其溫かさを増して、凍てついた土の中に窒息してゐたもろ〳〵の草の種は、凍てた土の融くると共に、一齊に其芽を出し初め。木の枝の皮の所々に身を潜めて、くつついてゐる點々のやうなものも、葉となるものは、伸びて緑りの若葉となり、花となるものは、膨らんで紅い蕾となる。鳥は朝早く巣を出でて朗らかな聲で歌ひ、蛇は穴を出でて午后の陽に鱗光る其背をさらす。萬物すべて嬉々たり又陽々たり矣。此間に在つて人獨り遊ばざらんや、樂まざらんや、笑はざらんや、歌はざらんや、踊らざらんや、舞はざらんや。一年三百六十五日、樂しき、華やかなること春の日の如き幾日ぞ。人生六十、假りに七十とするも、心に煩ひなく、身に病ひなきこと果して幾年ぞ。人よ―若きも老いたるも―われ聲を大にしてすべての人に告げん。遊べる時に遊べ。樂める時に樂め。笑へる時に、歌へる時に、笑へ、歌へ。踊れる時に、舞へる時に、踊れ、舞へと。

◎「樞府の修正」

「樞府の修正」。第五十議會の新聞記事に於て、此五文字ほど際立つて讀者の眼を刺戟した文字は他に無から

ある。一つには[illegible]一人となり。[illegible]たくなつたゝめもあらう。又一つには「二大政黨」「貴革案」の如き、憲法附屬の法律命令の重大なる改正が[illegible]閣に上つたゝめもあらう。「樞府」の活動が著しく目立ましくなり、一にも「樞府」、二にも「樞府」で、「樞府」の態度と衆目を聚ふことが、「政府」の最大最重最要の政務となつたかの如き觀を呈した。

與黨二派の間にも意見の相違はある。殊に「政友會」は動もすれば、政府と憲政會に向つて、併して見たり拗ねて見たりする。併しいはゞ與黨である。且つ此所姑らく獨立的行動を取り得ざる政友會である。結局はどうにかなし得る望がある。貴族院は「貴革案」提出があるので、何となく機嫌がわるい、佛頂面をしてゐる。併し之も世界の大勢と、永年の積惡の報いで、下手に頑張れば、遠からざる中に、數倍乃至數十倍した痛手を負はなければならない。堅氷の漸くなるを觀て秋風の到れるを知り、一葉の墜ちるを見て秋霜の近づけるを察するの明があらば、國民や政府の強要を待たず、自ら進んで、自らを改革する位の決斷あつて然るべきだ。だから之も結局までにはいろ／＼の面倒はあらうが、結局は何とか纏まりの着くべき問題である。

只こゝに樞密院なるものがある。固より自主的に發案し、開議するを得ず。個人的に行動し、上奏するを得ざる機關で、必らず至尊の「諮詢」を待つて會議し、「會議」の結果の奉答を以つて意義を生ずるものではあるけれども、至尊の「御諮詢機關」と云ふ、憲法上特殊なる重大權能を有し、而して其議決は政治上何等の義務を負はない。其議長は永い間伊藤山縣の如き首相級以上の人物であり、又伊東巳代治、平田東助の如き黑幕的人物の跋扈した所であつて見れば、どの內閣でも、なか／＼手に負へない代物であつた。尤も之も時勢と共に其中心人物も變り、今日では大學系統の學者肌の人物が重きをなしてゐるやうにも見える。現に其議長は大學總長たりし濱尾子であり、副議長は同じく大學教授たりし一木博士である。一木博士宮相に轉任すれば穗積博士其後任に內定又顧問官、山川、富井博士等の顧問官は曾て皆大學教授たりし人々である。だから政爭の渦中に卷き込まれて、變な馬鹿げた事をする氣遣ひはなからうと思ふけれども、何にせ、お年齡がお年齡であつて、自分の子供よりもお孫さんを相手にするに相應はしき方々であり、且つ大學教授といへば聞えはいゝが、一方から云へば、それこ

二官僚の本家本元であつて見れば、新時代の事々物々に對し、保守的にして消極的なる見解を取るに至るは、數の免れざる所である。衆議院に於てさへ、老人側の捉へざる我國の政界に於て、「樞密院」と稱する、憲法上不可侵の特殊的權能を有する此老人共の威張るのは何等怪むを須ゐない。

併し――併しだ。英國の憲法仕込みの加藤首相よ、十年在野黨として雌伏した憲政會よ、「護憲」を旗印として聯合した與黨三派よ、「普選尚早」とつい先達まで叫んでゐた政治家までが、「國民の政治的能力と訓練」が、最早や普選を與ふるの時機に達せりと明言して居るではないか、此今國民の政治的覺醒よりも「樞密院」の廿六七名の御老人の方が怖いといふのか、「普通選擧法案の御修正――々承知致しました」「貴族院改革案の御審議よろしくお頼み申す」――「日露基本協約は是非共成立するやう御審議下さい。其代り治安維持法案は誓つて成立させまするで御座りませう」と、憲法上國政料理の全權能を有し、憲法上百般輔弼の全責任を負ふ内閣の首相及び閣僚等が、戰々兢々、恰かも一代將軍秀忠が、駿府の大御所に伺候するが如き態度を以て、一々伺ひ立てるのみならず、一々唯々諾々の結果を觀るに至つては、苟くも「護憲」の爲めに現内閣を成立さした國民は、恐らくは一人も默許し能はぬであらう。

保等は加藤首相に求むるに「練達の士」や「老練な皮肉」の人たるを以てせずして、「改革の斷行」と「立憲的行動」の人たるを以てする。

「樞府の修正」の五文字が、大きな活字を以て、日々の新聞紙の上に出没つてゐるのを看る毎に、國内の政權問題に冷靜なる我等の心胸も、義憤の焰に燃ゆる。

◎「血迷つたりな政友本黨」

日本に於ては、如何なる在野黨も、内閣を乘つ取るか、又は政府のお味方黨となれば、必らず軟化する。元老・樞密院・貴族院・軍閥。此等の保守的諸勢力と妥協せずには、實際政治の齒車を廻轉し得ざる我國の政界に於ては、自黨が内閣を組織するか、或は時の政府のお味方黨となれば、在野當時の主張を裏切つても平氣だ

し、又少くも、自ら[illegible]ことだけは[illegible]してゐる。其言ひ[illegible]ない事を[illegible]ゐるのは、[illegible]言」したり、臨時に「[illegible]」したりしない。第一次桂内閣の「不言實行」も、[illegible]等は、「宣言」や「声明」の、必らず自縄自縛に陥るべきを知つてゐるからだ。大隈のやうに、大風呂敷の張り放しになつたり、尾崎のやうな陸軍縮少論者が、入閣して忽に朝に[illegible]論者に早替りしたりするのは、實際政治の経験が乏しいのと、人間が少し正直過ぎて、口数が多い為めだ。

併し、萬事が保守的になり、消極的になり、妥協的になる日本に於ては、せめて主張丈けでも其反対の方があるのは人意を强うするに足る。少くとも気休めにはなる。此意味に於て、在野黨は民黨であり、左黨であることが普通であり、又望ましくもある。加藤内閣以前の憲政會は、随分影の薄い消極的の黨派であり、犬養老の率ゆる黨派は其名の變化する如く其内容も變化し、或時は「好意の中立」と云つて「[illegible]」を掲つたり、（第二次大隈内閣時代）或時は「厳正中立」を標榜しながら「好意の援助」をしたり（第一次山本内閣當時）犬養老自身は「憲政擁護」で桂を斃る運動をしながら、第二次山本内閣の遞相となつたり、三菱とは始中終變な關係があつたり、随分気紛れな憲政の神様であり、アテにならぬ「四十年の清節」ではあつたけれど、兎に角、大體として「民黨」の臭ひがし「左黨」の面影丈けはあつた。

然るに、今の唯一の民黨といはるゝ政友本黨はどうだ。なつて居らん（の一語で盡きる）。施策の方針も立つてゐなかつた。「普選」には「所帯主」だ。そして「婦人参政」だと。那智な老黨が、跡取息子に小遣銭も呉れない癖に「小遣はやられぬ、併し今に全財産をやる」と云ふの格だ。殊に奇怪な極なのは「軍備は縮少する譯に行かぬ、師團減少は以ての外だ」と、それこそ以ての外ではないか。陸軍の四個師團削減など手緩るいにも程がある。半減乃至三分の一減が、今や識者間の定論となりつゝある。「陸軍縮少不可」など云ふ、與論よりも寧ろ愚論に、共鳴するものは、恐らく田中義一と彼を取巻く軍閥位のものであらう。床次總裁を[illegible]な男と思つたことは、僕は昔から一度もなかつたけれど、斯やうに馬鹿げたことを平気で云へる男とも實は思つてゐなかつた。所謂貧して鈍し、窮して亂したものか。

併し、一方聞く所によれば、彼等には彼等らしい劃策があるらしい。今の内閣もそろ／＼人氣を失ひかけてゐる。平時にあつて内閣の壽命の短いのは近來の慣例だ。反動黨保守黨の擡頭は世界的機運で　伊のファシステイの成功はそれの著しい例であり、英の保守黨内閣の成立も、それの他の一證だ。もうお鉢は我々に廻つて來る時分だと云ふので、よりよく謀議を凝らしてゐる。田中義一將軍が一方の旗頭で、大木遠吉伯が他方の旗頭だ。例の後藤新平子が又例の如く遊軍隊長だ。何十萬とかの軍資金もイザと云へば直ぐ出るやうに調へてあると云ふのだ。僕等は政權が、何人の手に、又は何黨派の手に歸するかについては大した興味が無い。けれども今のやうな、政黨にも、況して一般國民には尚更ら、何等の根柢なき、いはゞ陰謀政治家と云つても差支なき人々が、不正な、少くも陰密な手段で作つた金を以て、無頼漢や、壯士や、政治ゴロとも云ふべき者共を使嗾して、國政を自己の手に收め得るものと思つてゐる、その愚劣なる頭腦を憫笑し、又其妄想を憎惡せざるを得ない。僅かな日腐れ金や、食ひ扶持を當てがつて、殖民地ゴロを使つたり、浪人壯士を使つたりした舊い黴の生えた遣り方で、大正十四年の日本國民――而も今度いよ／＼普通選擧權も得る――を左右し得るものと誤解するならば、それこそ彼等自ら、彼等の手で以て、彼等の墓穴を堀るものであることを警告するに止めて置く。

政友本黨の諸公よ。床次總裁よ。もう少ししつかりして呉れ。日本の實際政治は、實に保守的に、妥協的になり易い政治だ。在野黨たるもの、せめては監督丈けでも、當局者を叱責し、鞭撻して呉れなくつてはどうする積りか。

◎「東京市水道吏員の水天宮詣で」

昨年の冬からずつと東京附近には雨が少い。爲めに水道の水が減じて、二月上旬には市民の飲料水にも不安を感じ。又電力の供給も不十分となつて、此方は二月から二割減とかにしたと云ふので、電燈が馬鹿に暗くなつた。電燈の事は今姑らく措く。夏の暑い時の、水の節約も隨分困りもんだが、寒い時の渴水騷ぎなどは、滑稽を通り越して寧ろ悲慘だ。

「[illegible]」「[illegible]」「あと一日」「あと二日」[illegible]

出作にたて[illegible]、いろ／＼の[illegible]に出たものだしによつて[illegible]に日数十何とかの人たちを入れて、[illegible]の工事をした為めに、飲料水の心配に、今の日もゾ／＼させたといふ話だ。

此間にあつて、僕の眼を惹いた一記事がある。それは東京市水道局の技術課長とかの[illegible]が、久しく[illegible]さるを怨んで、日本橋は人形町の水天宮様に日参して、東京市民の為めに祈願をしたと云ふ記事である。

科學がローマンスを破壊し、神秘を征服し、夢を打ち壊はしたのは昔の事で、今では、科學こそ、新しきローマンスを製作し、新しき神秘を創造し、新しき夢を見せて呉れる本家本元となりつゝある。[illegible]だの、殺生石だの、人魂だのの魅力は全く失せて、レントゲン、活動寫眞、ラヂオなどが奇々妙々不可思議の感を抱かしめる。人類の原始的欲望であつて、アビスニアの王子ラセラスを悩ました空翔ける希望は、今や飛行機によつて完全に達せられたのみならず、それが、郵便を配達したり、宙返りをしたり、爆弾を投じたり、世界一周をしたりする所まで進み、此の先きまだ何處まで進むか見當がつかない。其外、瓦斯、殺人光線など云ふものに至つては、人間が之を發見發明しながら、人間自ら之を制御するの術なきに苦しむでゐる。親が自分の産んだ不良少年、不良少女の所置に苦む如くに。——付て「現實」の權化の如くに見えた「科學」が、今や人間の「空想」を迎り起し、「實用」の埒外に飛び出して、新しき「ローマンス」を作製し、新しき「神秘」を創造し、新しき「夢」を織り出してゐるのみならず、逆に人間を脅威し、人間を冷笑して、「ざまア見ろ！」をしたり「ヤーイ、ヤーイ、ヤイ、ヤイ、ヤイ」をしたりしてゐる。

かゝる「科學」の力の進歩し、文運[illegible]なる時代にあつて、「水道」の管理をしたり「電力」の經營をしたりすることは、最も常識的なる科學の勢力圏内に属することで、固より「神頼み」や「佛け祈り」とは何の關係もない事柄である。如何に日本の文明が模倣であり、随つて「お手軽式」であり、「間に合せ」であり、「上つ面」であつて、近世文明の頂點に觸るゝことが遠く、科學文明の本質を掴むことが不確かなりとはいへ、[illegible]たる「降雨圏」であり、「出水圏」であり、随つて「流域圏」であつて、電源となるべき「水力」は[illegible]

たることが分り切つて居るのに、少し雨が途切れると、電力三割減の已むを得ざるに陥つて、十六燭の電燈と行燈時代の行燈とどつちが明かるいなどと洒落にもならない洒落れでも云つて、不平を紛らすより外ないとは、餘りに情けな過ぎるぢやないか。(鬼怒川とか猪苗代とか桂川とか云ふ大きな既設會社の獨占的排他的買收的行爲が如何に一般市民の禍を爲しつゝあるかよ！) 又「水道」などは「電力」以上に非科學的に經營されて居ると云ふより外はない。僅か百數十名の人夫で以て「井の頭」の「池水」を二日もイヂれば、危險區域を脱すること出來る程の事ならば、平常少し心を用ひさへすれば、何にも時々大騒ぎをしなくても濟むではないか。夏の燃けつくやうな炎暑に、「水の節約」などしなくても濟むではないか。本當をいへば、眞夏の中は、水は使ひ放題に使ひもしたし、又使ひ放題に使はして、其料金を頂く方が、水道經營から云つても悧巧ぢやないか。「神頼み」や「佛詣り」をする暇があつたら、たゞ「科學」的に經營し、「科學」的に擴張するの途を講ぜぬのか。

尙一歩を進めていへば、殖林事業に心を用ひて、洪水及び旱魃の憂を除くやうな國家百年の大計を忘れぬことが必要であると共に、ラヂオを放送すると同じ心持で、夏の燃ゆるやうな雲の峰の中から、電力を利用して、突如夕立の如き雨をザア〳〵降らしたり、數十日雨降らずしてカラ〳〵に乾燥した冬の灰色の空から、矢張り電力を利用して、或は春雨の如くしつとりと、或は秋雨の如くじめ〳〵と雨を降らして見る位の藝當は「水源國」日本に於ては、さう頭を使はなくても出來さうなものぢやないか。「溪流」の「水力」を利用して「電力」を增加する意志さへあれば、今の十倍位の「電力」は容易に得らるゝと云ふではないか。米國では未だ成功せぬけれど、空中の「雷公」を捉へる方法(空中の電氣をロハで使用する方法)をいろ〳〵試みて居るといふではないか。「水力」に惠まれたる日本だ。電力利用位は世界に先んじて何か一つ位やり出したつて別に恥ぢにもなるまいし、極りわるくもあるまい。

それにしても、水道局某庶務課長の如き高天ヶ原的人物が「お役人」で通り、「大新聞」が之を賞揚的に記載し、「一般世間」が何等之を怪まざるを見ては、僕等は思はずも長大息するを禁じ得ない。

(三)「普選萬歳」

隨分長い間の國民の要求であつて、而も容易に實現されなかつた普通選擧法案は、今次議會に於て大多數、以て遂に衆議院を通過した。委しく云へば明治三十六年の第十八議會以來の問題であつたが實に、大正十四年三月二日午後十時卅七分最初の提案以來廿三年目にして、總投票數三百九十の中、二百九十三の大多數を以て通過した。初め五個の大綱目について所謂「樞府の修正」があり、政府は之に屈服したけれども、衆議院の鬪爭(主として政友會)更に之を再修正し、被選擧權二十五歳を三十歳とするの一綱目だけを樞府に讓歩し、他の四綱は悉く再修正し、最初の政府の原案通りに通過した。此文を草するの時は、貴族院委員會に於て審議中(若槻内相と水野前内相との一騎打の問答中との噂)で、今日迄いろ／＼質問やら、激論やら、議案撤回論やらあつたけれども、結局は大した修正を見ずして通過すべき運命にあると信ずる。國民大多數の深刻なる怨府となることは、貴族院と雖も、喜ばざる所たるべきを以てゞある。此案に於て若し衆議院が貴族院と衝突せば「兩院協議會」となり、衝突せざれば「樞密院拒絶」(樞密院には其儘承認するか拒絶するかの二途あるのみにて再修正と云ふ事無し)となり、何れにしても、容易ならざる難關と見て居る人があるけれども、僕は結局に於て、今度は兎に角普選案が通過するものと樂觀してゐる「一勢」成り「一機」熟してゐるからである。細目本節については、いろいろ議論の餘地はある。又次の選擧からといふのでは、板倉子の毒舌の如く、此か「三年間のお預け」の氣味もある。併し、大綱已に定る。細目の改正豈に難からんや。既案苗已に長ず。三年にして其果實必らず喰ふべしである。僕等は誌上の言論以外、實際運動に加入せぬと云ふ年來の主義によつて、普選問題にも、旗を揮つたり、大道を練つて歩いたりはしなかつた。併し十數年前より普通選擧促進の言論を載せ、殊に吉野博士の「普通選擧論」其他專門學者の研究を公けにし且つ、此問題と「政治教育 及び國民の覺醒」に對する啓蒙的及び普及的の勞を取つて渝らざりしは、本誌讀者諸君の知悉せらるゝ所であらう。僕等は讀者諸君と共に「普選萬歳」を三唱して筆を擱くことにする。―― 大正十四年三月十一日病床にて T・T生 ――

中央公論



第四十年第四號
春季大附錄號
第四百四十六號

政治的ミュテーションに當面して

杉森孝次郎

第一部

一　現代日本の政治は環境政治を缺く自體跼蹐政治だ

「……又選擧區ハ原則トシテ地方代表、又ハ利益代表ノ意味ヲ持ツベキモノデナイノデアリマスガ故ニ……」。これは大正十四年二月二十一日の衆議院に於ける、內相の普選案提出說明內の、選擧區に關する部分の一部として、翌日の「速記錄」に見いだされる。

闘ひ前へつゞけて。これは「……[illegible]ニ於テハ[illegible]ノ[illegible]……[illegible]……[illegible]タコトハ。申シトル改正ノ一點デアリマス。大選擧區制ニ於テハ。既ニ屢々試ミラレタモノデアル。各自ガ人物ノ[illegible]シテ居リマスケレドモ。何レモ適當ナツト分デアルト認メ難イト存ジマス。ソレ故ニ今回ノ改正ニ於テハ。兩者ノ長所ヲ採ツテ其短所ヲ除キ。新ニ中選擧區ノ制ヲ採用セントスルノデアリマス……」といつてゐる。そしてかれは。日本一區制については。いかなるかたちに於ても言及してゐない。

大正十四年一月二十一日の「東京朝日新聞」夕刊に、「唯一の反對黨、本領を發揮はこの時、けふ政友本黨大會に於て。床次總裁の演說」と標題した演說錄がある。それは、「帝國の外交は現政府に何等一貫せる經綸を認むることが出來ない苟も一定の經綸を樹て帝國外交の衝に當らんとするならば必ずや先づ帝國の地位に鑑み世界の平和と文化とに對する使命を考慮し茲に外交の根本方針を決定せねばならぬ。即ち帝國外交の根本方針としては平和的なることと經濟的なることと及び自主的なることとで之は寸時も忘るべからざることである殊に東亞大陸の富源を開發して彼我有無相通ずるの道を講ずるは大陸をして經濟的に活かしむると同時に帝國をして經濟的に活かしむる所以である國民をして眼を大陸に注がしむる事は最も經世に志あるものの專念すべき所であらう」に始まり「……區制の問題に就ては大選擧區比例選擧制は理論としては可なるべきも……現行の小選擧區制を維持する事が寧ろ我國情に適したりと信ずるものである……」と展開してゐる。

私は。ここに採錄された兩氏の公言は。兩氏の意見であると同時に。國民の公見。即ち輿論としての意見をも。相當に帶んだものだと考へる。

日本は一國家だ。それが宇宙そのものでないことはいふまでもないが、それは現存の社會そのものですらない。いな、

それは、現存の單一なる社會的實在の全體ですらない。國家日本は、實質的には、現存の一社會組織の全體ですらなく、一政治組織のそれですらない。

現存の國家日本には、それの政治的環境がある。これは、現存の社會日本に、それの社會的環境があるといふ一層全體的、基礎的、綜合的事實内の一部的事實だ。

いはゆる外政、外交、國家の對外關係、國際政治等は、この事實に對する多少の認識、評價、またこの事實の多少の部分にほかならない。外務省の存在は、國家自身がこの事實を公認してゐることを意味する一現象だ。國際法、國際聯盟、四國協約、九國對支條約、日佛關稅協定、日露條約等、等は、したがつて、勿論同樣の意味を持つ。

社會經營が政治だ。國家は、現在に於けるその執行機關だ。現在の社會が、どの一國をもそれの全内容とせず、一部的内容としてゐることは眼前の事實だ。斯かる時代に、各國家にそれの政治的環境があることは、各國にそれの社會的環境があるといふ根柢的事實が否定されない限り否定されない。日本についていふならば、社會日本が、經濟的にも、學問的にも、藝術的にも、思想的にも、宗教的にも、文藝的にも、社會的に純全自足でなく、多少依他的であるならば、その限りに於て、國家日本は、獨り政治的に純全自足であることは出來ない。

部分的社會が、それの環境的社會からの支配を多少受けないことは出來ない。これは、その部分的社會が部分的社會であること、即ち全體的社會でないことの一必要件だから、自明、必然、無論だ。

經濟的必要が人生の基礎的必要であることはいふまでもない。國民としても、國家としても、したがつて、この基礎的必要を持つこともいふまでもない。もしもこゝにこの基礎的必要を充たすための必要件を根本的に缺いた國民または國家があるとするならば、その國民または國家の生存は、それに相當した不安全、不確實のものであるほかない。

現在の日本は、しかるに、この如き國家または國民としての資格を多分に持つ。どうしてかといふに、日本の日本は、原料に於ける自足、自給、自治、獨立を缺いてゐるが故にだ。原料に於ける自給りを缺くならば、いかに國民が一個の、技術力、科學力、經濟力、資本力等は自足的であつてさへも、生産自治は不可能だ。したがつて消費自治が絶對不可能だ。

地上一社會、人類一國が或程度以上に發達してゐるならば格別、また複數以上に國際主權國家間の關係が或程度以上に、制度的及び實質的に、社會化されてゐるならば格別、さうでない今日、原料的自治力を缺く國家の主權性もしくは獨立性は、不可測の危險と困難をすくなくとも豫約してゐるものだといはねばならん。現在の日本は、好むか好まぬかは別問題として、事實上斯かる國家の存在を有力に自證するもののすくなくとも一だ。

斯くの如き實情の日本が、もしもそれの外政にむかつて可能的最善を盡さないでゐるとするならば、最惡形式の環境自が意味する災禍が、その日本の頭上にふりかゝつてゐるといはねばならん。

しかし、現在の日本が、外政にむかつて可能的最善を盡してゐない證據は、最初に引用した當局及び在野の二政治家の演説の內にもあると私には考へられる。

二　日本一區制が衆議院議員選擧區制第一則として採用されべきだ

衆議院は國會だ。それは縣會ではない。それは他のいかなるかたちの地方會議でもない。政府が直接に國民のものである通りに、國會は直接に國民のものだ。國會と政府は、それぞれに、立法と執行を唯一の目的とする組織だと、現制の趣旨に從うて判斷しても、その執行が直接に國政執行を意味する如くに、その立法は直接に國法制定を意味する。

いはゆる外政は、それが日本のである場合には、一全體としての日本の立ち場からする世界的環境經營だ。いはゆる

中、小、大選擧區の如きは、しかるに、いづれも、一全體としての日本ではない。全日本國ではない。「選擧區ハ原則トシテ地方代表ノ意味ヲ持ツベキモノデナイ」といふ内相の意見は正しい。しかし、それが正しい意見であるが故に、「新ニ中選擧區ノ制ヲ採用セントスルノデアリマス」といふ内相の意見は正しくない。

國家日本が、それの政治的環境を全然無視してゐるとは勿論考へないが、完全に有視してゐないことは事實だ。外人から見た日本は別だが、日本人自身の聰明なる愛國意志から見た日本は、それの政治的環境を餘りに不完全に有視してゐる。

英は島國だが、海岸から歐大陸對岸が明視される位置にある。日本は、最も近い亞大陸からさへも、比較にならぬ遠距離にある。絶海孤存の生活を、したがつて久しく續けた。加ふるに徳川氏の鎖國方針によつて、さもなくば有望な多少の機會も浪費され、内面的細工に腐心する必要と習性が助長された。

この習性の自然的繼承者としての明治、大正の日本が、政治的環境に對して、もつと有能でありえなかつたことは、その見地からしては必ずしも不思議でない。しかし、事實の原因と目的の必要とは問題が別だ。原料的自治力なき日本が、獨立の一國家として、久しく安泰たりえない理は明白だから、實質的に日本を大陸化する努力は、現在の日本人の、自己及び子孫のための根本的一必要事だと確認される。

日本の實質的大陸化は武力的大陸奪取をば意味しない。恐らくはいふまでもない現代日本人の、これは、一常識だ。そんなものは、もはや、惡であるよりも愚だ。方法に於ても、動機に於ても、武力的侵略でなしに、しかも日本を實質的に大陸化することが、日本の現在の根本的一必要なのだから、問題はいよ〳〵單純でない。

この單純でない問題を解決する方法は、したがつて極めて複雜だ。かぞへ切れないほどの側面をそれは持つ。しか

し、これの一種消極的な條件は、國民へ興味と注意とを喚起させることによつて、すべての國民に平和的政治に對する一つの意識を起させる方法を國民自身が造るにある。そして、單なる政治組織の一部分的改正によつても、さうした事を或いは或る程度に致しうるだらうと私たちには考へられる。

衆議院議員の選擧區は一國一區であることが原則としては各國の場合に當然だ。しかし、との事はしばらく問はず、現在の日本について考ふる限り、これは、現實の一必要だと考へる。現在の日本に取つての最低限必要の國策と考へられるものは勿論甚だ多いが、これはその内の一だとさへ考へられる。

日本は國土狹小だ。これだから國際的社會環境に對する國民の努力を餘計に必要とするわけでもあるが、こんなに狹小だから、全國一區制を採用するための自然的不便もすくない。支那の一省、アメリカの一州を考へて見ても、國土日本の小はつくづくと考へられる。

すくなくも外政を目的とする限り、或ひは特に外政を目的とする場合には、といふやうな條件つきでもいいから、區制組織の一要件を全國一區制に求めることは、現在の日本國民からする至當の一要求だと考へられる。

區制組織が單純なものであつていい時代は疾うに過ぎた。現代の選擧區制としては、日本の場合に於ても、各種生産業別、各種及び一般消費必要別、臨時問題別等が、その組織内の或要件として確立される必要がある。國内の各地方別も、適當の位置をその組織內に持つべきだ。

しかしながら、外政一般が關する限り、また國內に全國的な內政、例へば選擧權擴張、普選、稅制等の修正及び改正、義務教育年限延長、國民教育の國庫負擔、それから文官任用令、或ひは國防に於ける國際協調を必要とする以外の純自治的部分等及び等が關する限り、國內の選良を直接に國內に求め、見いだし、推擧する制度を設けてきた區制

は、國内の選良を、それらの一國一區的問題が關する場合にも、間接ながら國内に求める便宜的方法だと想信する人があるかも知らぬが、それは單なる想信ではありえても、事實と知識に責任ある考察ではない。

區制が專ら地方單位であるあひだ、「選擧區ハ原則トシテ地方代表、又ハ利益代表ノ意味ヲ持ッベキモノデナイ」といかに呼號しても、それは無責任だ。區制が專ら地方單位であるあひだ、選擧が地方代表または地方的利益代表の意味を專らもしくはすくなくとも主として持つことは、制度そのものが必然生む結果だから、制度そのものが當然負ふべき責任だ。現制は、地方代表または地方的利益代表を選擧人及び被選擧人に强制する制度にほかならない。

現在の議員諸氏は、及び既成諸政黨は、すでに築いた地方的地盤を愛惜する、或ひはそれに執着せざるをえない私利的及び私情的關係を深く、不可抗的に持つてゐるかも知れん。さうすれば、日本一區制の建設は、望みを新來即ち未來の立候補諸氏と政黨とに懸けるほかない。しかし、全國一區以下の小區制下には、すくなくとも當分は、新人物の院内出現の可能そのものすらも甚だ薄弱だ、

日本一區制を區制組織の一部内容として採用することは、それ自身、決して大改制ではない。けれども、その効果は、法制上の單なる一部的改作と云つた程度のものには決して止まらないだらうと想察される。いはゞ國民の氣字、これを機會とし、これに刺戟され、保護され、强制され、教導されて、顯著なる恢廓を致すに相違ない。その國利と社會益とは、多種にして甚大だ。

盆栽は日本の一名物だ。しかし、深儉、遠達、大がそこには絶望的に缺けてゐる。震災前の日本橋あたりの中産階級の庭屋や、した町附近の通俗信者を多く持つ古い宮祠などのなかには、狹い庭と小さい建造物に、極度の細工的苦心及び腐心を見せたものが通則的に夥しい。サビといひ、ミガキといはれるもの〻なかにも、小經濟の悲哀はあらはだ。

日本の現在の政治的不安は、正義と●すべき本質に觸れ入れたことに起因するといふことはいふまでもない。日本には、國民的氣宇の淺小、矜誇を、政治的努力に能ふ限り、救濟するにある。原料なき不能力、技術力、科學力、資本力、日本力が神經衰弱的、ヒステリ的に變態化する如くに、彼等なき不能と能力が自他破壞的及び卑劣的に變、發する如くに、實質的に大陸化しない日本は、根柢的元氣活力を大滸に消費し去つて、無問題の國民化する危險さへある。

土地あつての人。人あつての社會及び文化だが、現在の日本は、原料としての土地を缺き、生活場としての土地をもそれに次いで缺く。農村そのものが、荒澤、田園、自然の氣候を人間に生み育てる場所ではなく、無解決の生活苦及び社會問題の中心化して來たことが、日本の問題が、それの原因と事情と條件の最大決定力あるすくなくとも一として、無土地にあることを、最も科學的に論評する。

全國一區制は、新聞によれば、最近年の伊太利に於ては多少實驗されたらしい。私は、伊國の場合についてはそれ以上たらんの知識を持つてゐない。ただ、私は、伊の場合をそれだけの程度に知つた以前からして、一區制の可能に心をひかれ、いくらかは構想もし、一再のみならず簡單ながら公表もした。伊が既に多少の實驗を敢てしたとすれば、それを精査し、參知する價値は無論ある。

しかしながら、全國一區制は、現時にあつては、日本の如き、また伊の如き原料缺乏國にとつて最も急要である事は確實だ。なによりも土地に不足してゐる國が、國民の氣力と聰明に於て餘りに低弱でないならば、全國一區制は、方法の一小部分として、自然に發明されねばすまぬ性質のものだ。

全國一區制が、アメリカの如き、英帝國の如き、またロシヤの如き大原料所有國、大領土國によつて先例を示される可能は絶無に近い。

三　一制限國際盟團の形成が日支露間に必要だ

全人類を成員とする社會はすでに發生した。それは發達の途を急ぎつゝある。しかし、それはなほ幼稚だ。地上は多數の主權國家によつて、同時に、陣取られてゐる。そして、その多數主權國家の或ものは、原料的自治力に於て比較的に富足してゐるが、他の或もの或ひは多く乃至すべては、前者との比較に於て、多少原料的無自治力者だ。

原料そのものは純たる或自然物だ。それには人性と共通のなにものもないが、即ち意識性はないが、それは人力の結果でもない。けれども、一主權國家が原料を、もしくは原料としての土地をいかに大きく、または小さく所有するかによつて、その國民及び全人類の幸、不幸は、現代及び今後の世界に於ては、不可測大に決定される。

勞働力、技術力、科學力、經營力等は、それぞれに、人力の或種類にほかならない。人力とは人に固有の力といふ意味だ。これらの諸力が或人々の所有である關係は、當然、不當然の議論を許すよりも先きに、必然、自然、または本質的だ。勞働は手に、手は頭に最も直接の原因關係を作つてゐるといふ事實が、すべての人力は或人々の所有だといふ意味を明示する。

社會進歩の一要件は、人力の必然的各私有者が、自然力を共有し、共營する方途に於ける進歩であらねばならん。文明は人が自然を征服することだと假說される。社會進歩は、その征服に於ける人間協力の發達を意味するものであらねばならん。

人格目的說または人格主義の道德說と、主權國家の名義に於ての原料私有とは兩立しない。社會目的說とこれともまた勿論兩立しない。現代の純理的聰明は、しかるに、價値の求心極を人格に求め、遠心極を社會に求むる水準程度にま

事實に到達した。ただ、現代の[illegible]

權の名義及び形式に於ての原料私有、また同く土地私有は、そしてこれの國際的公認に、その一つの礎たる

現制下に於ては、一面に於て、原料が使用されずに腐朽する可能なる多少不可避であると同時に、他面に於て、人口が

使用されずに腐朽する可能が多少不可避だ。例へば支那及びシベリアの原料と、日本の人口とは、多少その可能を現實に示す。

今回締結された日露條約は、それの原因に對する分析的考察の結果に於ても深大なる意義を示すが、それはしばらく措き、それが今後に生じうる價値、即ちそれの將來的可能に於ては、その可能に對する綜合的考察の前には、更に遙かに深大なる意義を示す。

國土としての土地の國際的公開の曙光がそこには看取される。土地とは、この場合にも勿論、原料及び生活場を意味する。露領シベリアの或部分が、日本にむかつて公開されたことが新日露條約の一內容だ。われらは、ここに新國家原則及びしたがつて新國際原則、新社會經濟、新政治の有望なる一發生を明認し、確信しないことは出來ない。

露が日に對して採つた方法を、われらは、支が日に對して、更に新たに採り來たることを希望する。露及び支は、原料と生活場に於て、多少それを腐らし、多少それを遊ばせてゐるほどに富有だ。日は、その兩者に於て、極端に行き詰まつてゐる。日に於ては、內包的耕作方法は、その語の廣義適用に於て、すでにそれの極限可能を大體に於て越えた。例へば農作は、現在の日本に於ては、藝術としては成り立つが、生計としては成り立たない、立ち行かない實情にある。この實情は、國交發達と共にいよいよ增進する確實がある。近い及び遠い大陸に於て、米産は、小麥、大果、漁價、豐富が現實の事實であると同時に、確實に增進する可能だ。姉崎附近の、山上猫額の田畑は、藝術としては有價値

かも知れんが、生計としては悲痛だ。しかし、日本全國が、いまや、生計としての姥捨附近農勞者の爲す事を必要に迫られていよ〱絶望裏求生的に爲し進みつゝある。

外延的耕作方法の機會を發明するほかに、人間日本の立ち行く瀬はない。その瀬は、しかしながら、接壌大陸にこれを求めることが最も自然だ。比較的に同文、同種族の支那、比較的に民族的偏狭心薄きロシヤ、また比較的に進歩的聰明の先驅者及び信者たる兩者、更にまた比較的に最も日本との盟國を形成するとの自己必要をも發見しうる國際的位置及び事情にすくなくとも目下及び近き將來にわたつて環境づけられ、且つ多少は内因づけられもしてゐる兩者、この兩者との間に、日本は、いかなる共通目的を發見しうるか、また發明しうるかを、精確に、完全に先づ研究する必要を持つ。そして、その共通目的の達成を中樞條件として、三國一體の大社會を新たに保育すべく三國協力の端を、日本としては、日本の力に及ぶ限り開設すべきだ。すでに開設されてゐる多少の端があるとするならば、それに加へて更に新たに開設すべきだ。しかし、事實として、すでに開設されてゐる多少の端の如きは、現在の目的からいふて、有視される程度のものではない。むしろ、現在の三國間には、新たなる共榮の種を蒔くべく、先づ燒き拂はねばならない荊棘と雑草が叢生して、協力のための出動のほとんど各の正大路を鎖さしてゐる。

專制と卑屈は新時代のタブーだ。また日露支間に於ては、專制と卑屈は、たとひ企てられても、すくなくとも目下の情勢に於ては、早ゝ不成功に終はる必要がある。

しかし、成功、不成功は別として、專制と卑屈は原則的に非認される。日露支盟國の形成は、本質的友人意志、正義意志、社會意志の具體的一發現、現實的一方法としての意味を、それの基礎意義とするものであらねばならん。また、さうでないならば、これは成功もしない。

人類の目的は、各人民なる國家の平和をめざして、健全なる世界を建設することにあるならば、ここにいふべき、もここ分界とする。社會が各々不完全なれば、しかし現在ある程度に、地上を一化し、人類が同一程度に擧らすことが、將來にして來た今日、部分的聯盟の形成は、綜合的目的をば決して有せず、事情的方法としての目的を有するだけのものであつておらねばならん。

しからばその事情とはなにか。それは日支聯盟に特有の事情か。他にも存する普遍的性質の事情か。またその事情は、現代社會の進歩的脚力をもつてして、觸れ動かす傾勢を避け、飛び越すことを許さない性質のものであるか。

これらの諸問は、それは現代に於ける一つの普遍的事情であり、また不可避的事情であるといふ明確な答へによつて報ひられる。

先づアジアと地續きのヨーロッパを見る。歐洲聯盟が形成されないならば、或ひは多少それ以上または以下の、しかし現在の歐洲各國よりは綜合的な聯盟が形成されないならば、今世紀の殘餘に於ける歐洲各國の運命は、大戰を劃期として、いよいよますます内憂外患に堪えがたいものとして證據立てられるだらうとは、次第に廣まりつゝある、そして最近、時と共に新現象によつて證據を妥當化されつゝある考察だ。歐阿聯盟が形成されるならば原料的自治關係は大改革を受ける。勿論、そこには、黑人の正當位置の決定及びその他無數の大小難問題があるけれども、歐洲白人の構想力が、殊に英人のそれが、現在よりも完全な實質的大陸生活の政治組織化へむかつて發達しつゝあることは、制限國際聯盟の形成を必要とする事情の普遍的存在の一大部分昝として、充分に注意される價値がある。

アメリカの赤道以北及び以南の兩大陸が合衆國を勢力中心として迅速に全一化しつつある最近十數年來、殊に大戰以來の傾向は、制限國際聯盟の、現代に於ける最も手數人らずの、輪廓に於て簡明な、實力に於て有效な、經濟に於て先

發な――たとひ内容に於て必ずしも充分に複雜でない、即ち困難と故障と苦労が足りなくて他の參考となりかねる關係を比較的に多分に固有したものであることは否まれないとしても――發生及び發達だ。

部分的國際聯盟としての制限國際聯盟の形成を必要とする事情は、かくして、遍在的だと概斷され且つ確認される。しからば、その必要が眞に必要であること、即ち不可飛越的であることの確實性は、いかなる分析的及び綜合的說明を許すか。

モンロー說、帝國主義、民族自決の運動及び原則、それから國際聯盟、これらは、いづれも、近代に於ける多少の社會的現實だ。そのいづれもが、多少不完全なものであることは疑ふ餘地がない。しかしながら、そのいづれもが、一層綜合的な計劃を建てるための多少の活材料たる本質を有するものであることは、その不完全が注意される以上に注意される。

いかなる惡、不正、不完全も、それが無でなく有である限り、それは全然無意義ではない。有を無化することは出來ないが故に、有としての惡、不正、不完全を無化することは出來ない。それらは、しかしながら、善化、正化、完全化されうるが故に、さうされることによつて、無化されたかの如き觀をば呈しうる。そして、この一原則的公理は、モンロー說、帝國主義、民族自決、國際聯盟等の各の場合にも、勿論、例外を許容しない。

モンロー說は、それがアメリカだけの方針でなく、同時にヨーロッパの、またアジアのといふやうに、地上に於ける相當各部の方針とされるならば、民族自決の擴大形にほかならない。それは、現在の民族自決主義よりも一層綜合的な民族自決主義にほかならない。また帝國主義は、それが地上に於ける統治關係の全一を意味する限りに於て、國際聯盟以上の國際聯盟だ。人類一國が完全に實現されゝば、戰爭は單なる內亂程度のものとして可能であるに過ぎなくなる。

[illegible]防止の方法として、これ[illegible]

明確だ。

ただ、現在の性質及び形式のモンロー主義、帝國主義、民族自決主義、國際聯盟等に依頼する限り、モンロー主義はアメリカの勝手を保護し、帝國主義は經濟的及び武力的優越國の專制を保護し、民族自決主義は社會の原始的部落化による混亂、崩壊、分裂、退歩、粉碎を保護し、國際聯盟は略取り競爭及び賭博に於ける優勝者の「勝ち逃げ」制度、勝つて勝負を全廢する主義を保護する結果を、多少の善果と共に、持つことを避けることは出來ない。

しかしながら、現代に、アメリカの新モンロー主義、數に於てすくなく、形に於て大きな帝國主義、形に於て小さく、數に於て多くの民族自決主義、形に於て大きく、力に於て薄弱な國際聯盟が在ることは、いづれも、時代の深必要に、多少無意識ながら強要されてゐるといふ大きな意味を持つ。この深必要に傾聽して、出來るだけ精力の浪費を省き、善き本作用を極大限化し、惡しき副作用を極小限化する綜合的計劃を建てることが、現代の政治的聰明の一大必要務であらねばならん。そして、その計劃は、制限國際聯盟の建設のほかないと考へる。すくなくともこれを一要件とするものであるほかないと考へる

建設とはいうても、歩調を揃へて、同時に各制限國際聯盟の形成が企てられる必要はない。一部に於けるそれの着手及び進行は、おのづから最も有効に他部に於けるそれの發達を催進する。一面に於て、歩調を揃へる努力を拂ふことは善い。歩調が揃ふまでは、各部の着手及び進行を許可しないことは惡るい。また各部が、それまではそれを差し控へたり、遠慮したり、躊躇したりすることは惡るい。なぜかといふに、その方法によつては、制限國際聯盟は、つひに行力に始まらない。行動が觀念を、本能が理性を先導する賢明が、この場合に於ては殊に確實に甚大だ。

現在の支那の政務當局者及び參政有力者が、一、二、三氏その他無數諸氏のかたちに於て、及び殊に全國民のかたちに於て、なかんづく新興進歩的生命部分に於て、親日、親露、國民主義形成、接壤諸民族聯盟の方途に、無限の内包力を表示し來たりつゝあることは、鐵を、それが灼熱してゐるあひだに打つことの必要をわれらに勸說する。日支間、日露間の今日の關係と、露支間のそれとは、制限國際聯盟の一形成にむかつて、充分に享用すべき機會であらねばならん。

支那の治外法權の撤廢、關、鹽稅制の廢棄、改正、新設を一條件とする支那財政の獨立化、鐵道、鑛山及びその他の主要産業のすくなくとも一時的、そして大部分的國有化、「勢力範圍」、「租借地」、「開戶」等の廢棄及び主權國家的領土保全と社會意志的、特殊友善的、協保的原則による根本的改釋、例へばこれらに對しては、日本は、すくなくとも國際關係國の一として、自由と責任が許す範圍に於て、日本　身の最善を盡すに吝であつてはならん。目的と方法と事情に關して知識及び良心ある確信が成り立つ限り、日本は國際的に怯であつてもならん。

支那の内的問題に對しては、日本は、國家としては、諸外國と共に、無干涉を方針とすべきであることはいふまでもない。それは方針だから、無關心ではない。日本及び諸外國の支那内事干涉を一律的に否定する、充分に積極的な對支的責任及び友善をそれは意味する。最近、日本政府は、この方針を多少採用したと風聞する。國家原則と國際關係が大體に於て現在通りのものである限り、この方針は、殊にまたすくなくとも對支關係の場合に於ては、一貫不易の、そして完成の餘地ある限り完成の必要ある、一原則的方針であらねばならん。勿論この方針は、それの基礎意識に於ては、したがつて現實方法に於ても、いかなる一國に對する場合をも例外としない。近い過去に於ける列國の對露内事干涉の失敗及び罪惡は、この方針の價値を有力に裏書きした一例であつた。殊にまたすくなくとも對支關係の場合に於てはといふたわけは、それが眼前現實の比較的に明視される位置に、この瞬間の私にとつてあるからといふ制限に對する責任

悲しい使命的表示にほかならない。

國家としての資格に於ては、いかなる一國も、したがつて支那の内事に干渉すべきでないが、國家としての資格から合理的、合法的に識別される私人及び私的團體としての資格に於ては、他國の内事に對する干渉に付て論評されたないが、友善意志の、また研究的、批判的、理性的意見の發表は、それが道徳的自由の範圍内のものである限り、あまねく國際に認容され、保護されねばならん。

この私人としての資格に於て、國際的社會から、支那の内事に對しても、傾聽すべき意見がすでに多少現はれた。有價たる多くの意見が、日本からも、また殊に日本からは、ますます發達的に現はれることが、制限國際聯盟形成の興味及び見地からしても自然に深く希望さる。

私自身にも多少の私見がある。しかし、この瞬間はそれを書く適當の機會でない。

勿論、私人として支那の内事に對する意見を持ちうるためには相當に支那を知る必要がある。支那を深く、全く知らないでは、支那に關する善い意見は發生しやうがない。支那をよく知るためには、實見、實聞、體驗の各種方法が、間接的學知及び經驗と共に、限りもなく必要であることはいふまでもない。この方面の努力が、日本から、國民的、社會的現象として顯著な程度に、成るべく早く發達することがまた深く希望される。

國民外交といふ言葉が、現代及びかなりに遠い將來にわたつての一標語たる價値を有するものであることは容易に考へられる。國民外交の實現は、しかしながら、先方の國民に關する、自國民の、自國民間に相當に深く、廣く行き渡つた知識が先づ準備されてゐることを、それに必要な一方法とする。

支那研究、支那學知、及びロシヤ研究、ロシヤ學知は、知識はそれ自身或目的價を有するが故に、その見地からして

も有價だが、國家的、國民的に、自己が先方の善友であり、先方を自己の善友として持つためには、最も必要な方法的一條件だ。

自他相知ることが深く、全くないならば、善友的協力關係は、そこに、完全なる發達及び實現を期待することが出來ない。日本が支那及びロシヤを知る必要は、支那及びロシヤが日本を知る必要と同一原則のいはゞ一適用にほかならない。日本としては、當然尊敬すべき先方の自由を尊敬する範圍内に於て、先方が日本を知るための機會を造ることに怠慢、吝嗇、臆病であつてはならん。知られるほど自他のために幸福であることは、國際關係の場合に於ても、至深の一理想であらねばならん。優秀なる眞價、即ち大いなる本質的公價の所有に對する自信ある者は、古來、完全に他に知られる欲求を必ず持つた。宗教の開祖及び信徒の場合は、純眞なる布教部分が關する限り、この法則の一例證たる側面を持つ。國家日本、國民日本、社會日本、文化日本は、他によつて完全に知られることを自他の幸福と信じ得る國家、國民、社會、文化の一所有者であることを、勿論、理想の内に默解しまたは明識してゐるものであることが必要として希望され、自覺される。

自己改善は、本質的に、原則的に、綜合目的を豫想したかたちに於て、必要な事であるから、それのあらゆる特殊的、具體的關係に於て、したがつて必要であることはいふまでもない。それは、またしたがつて、すべての對他關係の場合に必要だ。日露支聯盟を形成する目的からいうても、日本自身の出來る限りの自己改善は、日本の直接の努力が關する限り、日本自身の自由意志、自己決定力に責任づけられた道徳的至上命令の一であるといはねばならん。

これは自明として理解せらるべき事理だ。しかしながら、自明理が必ずしも現實に於て自明理化されてゐない。國民の痛深なる反省と、この反省にもとづく甚大なる努力とが、この關係に於ても限りなき不安と、責任と、必要とを、各

の日本人の輿論の統一にむけることといふ目的にない。

社會は人から成り立つ。國は社會の一形だ。吾人日本の文化は對米日本政治の民は要件だ。吾人日本民族の發想は無限だが、その方法の種類もまた無限だ。そして、方法中の或ものは制度政治にある。政治的、經濟的、教育的諸般のそれにある。

國民外交は實質外交を意味する。それは國民の全面的、常時的外交を意味する。今日の外交は形式外交だ。それは國民の全面的外交ではなく、外務省が意味するだけの一部面外交だ。それは國民の常時外交ではなく、強請的、一時的、奪取的形式に於ての臨時外交だ。それは百姓の生産の如き實業外交ではなく、投機外交だ。粗雜なる國家觀念と、空疎なる愛國感情を內容、條件、背景とする發作的、痙攣的、反射行動的外交でもそれはある。國家的利害も、國民的安危も、それが今日の外交の衝動として見いだされる場合、平素の心がけなき、品性的準備を缺く不良性のものだ。恒の努力なくして、恒の努力あつたかの如き結果のみに、それの收得に、それの獲取に、あとさきの考へもない懸命的興奮の努力を傾倒する性質のものだ。例へば對支二十一個條中の或ものはこれでなかつたか。

實質外交としての國民外交、國民の全面的、常時的外交としてのそれは、勿論、自國民中の各員が、先方國民のすべて及び部分に、出來るだけ深厚な接觸、交通の關係を造り、持ち、いよ〳〵持つことを第一要件とする。しかし、それと同時に、政府的、國家的直接形式以外の諸形式に於ける、その意味に於て私的、自由的、民間的または民衆的諸形式に於ける團體、組織、結社の、國境超越的、或ひは國際橫斷的自然發達が、國民外交實現のための主要件だ。

內政方面に於ても、或ひは內政方面に於てはすでに、最近時の進步的大勢は、同樣の性質を著明に示す。立法及び行政は、それが國內的性質のものである場合には、議會及び政府は、むしろ單なる事務局、形式的手續き執行の場所でも

つて、決定力、原動力は、國内の一般的及び關係當部分的輿論の手に次第に移行しつゝある。國内政治は次第に自治化しつゝある。現在の憲、政、革聯合內閣の出現そのものが、不完全ながらこの大勢を證據立てる一現象であつたが、衆議院に於けるいはゆる普選案の上程及び通過は、また多少不完全ながらこの大勢内の一現象であつた。

もしそれ先進諸外國、殊に英國の最近代及び最近時に於ける立法史を見れば、なかんづく産業に關するそれを見れば、資本家組合と勞働組合とに、立法の發源地は迅速に移行し來たつた跡が顯著だ。すくなくとも勞働立法に關する限り、勞働省も出來た。これは間接ながら勞働組合の發達に最も負ふ。勞働組合自身の一延長にほかならぬものとも見られる。議會に於ける勞働黨の發達も、いふところの大勢以外の現象ではない。

原内閣當時に、一部教授二學級一教員を條件とする、教育費國負擔が政府方面から主張された際、全國の教育者組合が反對の氣勢をあげ、確實な影響を及ぼしたことなども、また勿論同じ大勢内の現象であつた。

國民外交は、それの革命的最大要件の一としては、各種文化的自由組合の自然的自由發達に最も厚く依賴し、且つ期待せねばならん。どうしてかといふに、これよりも實質的な外交はない。

內政生活に於て、また廣く國内的社會組織一般に於て、專制と專屈に慣れた國民は、したがつて官吏や政治家も、またしたがつて外交史や、對外政治行動に多少の時間を割く當局以外の政治家及び民衆も、先方の事情を自國の原則から自然に類推して、先方の輿論や、國民的全實情を充分に有視せず、少數の當局吏や、有力者のみに目をつける。過大、不當の注意をかれらにむける。信頼、希望、期待を專らかれらに集中する。曾て米國との外交に於て、國務官や大統領の顏色、語聲に視聽を集め、幻滅の經驗に終はつたことはその一例だ。外政當局者としても、平時及びしたがつて臨時に、先方國民の輿論と社會的實情に第一の注意を拂ふ必要があることは、經驗がすでにこれを明示する。往年の援段政

來た。日本としてただにおには[illegible]

一發現にほかならなかつた。

官吏と役人は、どこでも長上者の意思を目的とする環境的必然があるが、日本には、この環境的必然をこの國内に比していまなほ餘りに強大だ。目下、この事情がやゝ救除されつゝあるが、この事情を、出來るだけ根本的に救除しないたらば、内に國力、社會力、人生力、文化力伸びきかえないと同時に、外方發達も出來ない。

字面通りの元老は衰勢を、不徹底的ながらも、更に角増加しつゝある。しかし、或かたちの元老主義は、新時代の進步的一必要である國民外交とは兩立しない。地から生えた、人格的、人性的、人間社會的、道徳と理想と文化の根深源から純粹に、直接に、自由に流れ來たつて形成された制度、慣習、學説、常識でなくては、それの所有者としての國家、國民、社會でなくては、外交を有意義に經營することは出來ない。

しかし、交通が國際に發達するにしたがつて、國家は自然に、そして進化的意義を充分に帶んで、即ち國家自身からいふならば自己の存在理由の完成としての意義を帶んで、一層[illegible]合的な社會に融化する必然があるから、國家の進化的或ひは大社會化的溶解が必然だから、地上の全人類は、各所的、各時的に、社會的意義ある適當の職業、專門、生活に忠愛を勵行すれば、國家的及び社會的萬事はおのづから結果する。生産的社會及び消費的社會が、その各の各種形に於て發達し、經濟的にも、學問的にも、藝術的にも、道徳的にも、私交的にも、遊樂的にも、社會が伸達しうる限り伸達し行くならば、今日のいはゆる外交は、國民外交の形式に於てさへも、有意義に自然に用のないものとなる。されば、外政の根本要件は、内にむかつて、國民の各自の個性と職業と生活とに、出來るだけ自由な、出來るだけ組織的な發達の便宜を増設するにある。そしてその邪障を出來るだけ完全に除去するにある。かくして、外政は、それの目的に於て

の如く、それの方法に於ても、内政に歸るかたちに於て内政につひに屬し、内政の改善を待ち、内政に對する改善的努力を待ち、それとの協力下に始めて可能だ。

國家の進化的大社會化は、しかしながら、比較的に關係の深厚な接壤或ひは隣接國との協力下に、いふところの制限國際聯盟團形成への努力のかたちに於て、それの最も具體的な部分的實現を可能にされる。日本としては、先づ支那及びロシヤとの間に、これを企て、そして成功させることが、國際的一義務だともいへる。

制限國際盟團といふ用語に於ける「制限」は、選擧制が、普選制を目的としながら、事情的に多少制限選擧制である場合と同様の意義に於て使はれたのだ。完全國際盟團が、勿論、制限國際盟團の一目的だ。完全國際盟團は、しかしながら、また勿論、完全社會を目的とする。

四、國際聯盟の存、廢、改、及び新國際聯盟形成は問題とされる價値なきか

最初に國際聯盟成立當時の事情を回顧する。

國際聯盟は、大戰の直接產物の一であつた。その事實上關聯して、それは、事實上、ヹルサイユ條約と姉妹關係の血縁または情縁あるものであつた。ただ、ヹルサイユ條約に於ては、代表的戰勝國たる英及び佛が自然にそれの原動的、決定的位置に始終し、國際聯盟に於ては、戰爭を片づけるにあづかつて最も力あつた、しかしながら戰爭の實質的責任者、したがつてまた犧牲者では決してなかつた米國が、しかも比較的に平和的理想主義者たる民主黨系の最恰適人格者たるヰルソン氏によつて政治的に代表された米國が、それの原動者となつてそれを開始し、英及び佛が、それの決定者となつてそれを仕上げた。

この努力の際に、そしてそこに、[illegible]ロイド・ジョージ[illegible]一的努力であつた。その努力の際に、しかしながら、戰爭國民のすくなくとも[illegible]に於ける中心[illegible]一人であつたが、ほとんど戰爭そのものゝ關係者でさへあつたが、そして勝利者として終はつたが、かれらは、米國の力を借りずして開戰し、自力が許す限り自力によつて奮戰し、つひに自力足らずして米國の力を借りることによつて終戰した。

この一聯複雜の事情が、國際聯盟の成立を可能にするに、しかもあの通りのしかたに於てのそれを可能にするに、あづかつて最も力ある一事情であつた。

故ウィルソン氏は、現代政治家の水準からいうて、稀れなる品性力及び理想力ある、また進步的知識力ある政治家であつた。しかしながらかれは、いかなる意味に於ても現代に於ける一大革命家として期待されうる人ではなかつた。現實に對する洞察力と、可能に對する構想力に於て、かれはむしろ或社會政策家以外及び以上ではなかつた。

ロイド・ジョージ氏は、品性に於てウィルソン氏ほどに純ならず、一「校長」が期待されうるかたちに於てウィルソン氏ほどに良ならず、しかしながら、資本主義的、帝國主義的國家の晩勢を多少改革的、發展的に維持、經營する能力に於て、殊にその範圍內に於ける非常の智功を國家が必要とする危機、難局、亂れの場合に處する能力に於て、彼らへ向きに當具者であつた。けれども、かれは、現代に於ける社會的先覺者、革制者として、その方面の輿論を背景とする公人では、すくなくとも國際聯盟の形成に從事した當時のかれは、確實になかつた。

クレマンソー氏に至つては、古るき、頹廢した、外患と內紛に持ち切れなくなつた祖國を、一人が示しうる限りの決意と集中的努力を示すことによつて、能く救ふことに成功した晩節及び晩功稀絕の教練者であつた。しかしかれも、國際聯盟の形成に參畫した當時のかれはすくなくとも、それ以外の生命をば持つてゐなかつた。

ロイド・ジョージ氏が代表した英國は、多少の世界的野心をなほ殘する老いたる一大帝國主義であり、クレマンソー氏が代表した佛は、保守的最低限必要の經營を最高限目的とする現狀維持的　對獨生存競爭的國民主義そのものであつた。前者には多少の僞善を裝ふ餘裕があり、後者には必死懸命のむきだしほかなかつたといふだけの差を除けば、兩者ともに、要するに傳統的または習性的國民主義の世界內のものであつた。兩者は、一つの比較的に大きなそれと、一つの比較的に小さなそれとの現實的姉妹形にほかならなかつた。

國際聯盟發起者としてのヰルソン氏の動機の純眞は、比較的に最も疑はれない。しかしながら、ロ氏が代表する英と、ク氏が代表する佛のそれは、決してヰ氏のほどに、ヰ氏のゝやうに、單純なものではなかつた。

英が、勿論ロ氏が代表する英が、最初、國際聯盟に一發起者、一贊加者として關係する內意を缺いてゐたことは、むしろ反對の內意を持つてゐたことは、極めて確實な事實だ。戰禍は、英國自身に取つても甚大であつたけれども、當時の英は、或ひは當時の英ですらもが、それに懲りて、遽かに國際主義を發心する心的狀態には決してなつてゐなかつた。當時の英は、むしろ冷靜に帝國主義的善後策に腐心する方に、大體としては確實に傾いてゐた。メソポテミアの油田、アフリカに於ける獨領の英帝國併合、これら及びこの種の興味がロ氏の英の主要興味であつた。

その英が、どうして國際聯盟に發起及び贊加を誓約するに至つたのかといふに、それはヰ氏の米國に對する利害の打算からであつた。

當時、ヰ氏の國際聯盟形成熱は不可抗的のものであつた。かれは、渡佛、英して、直接に佛、英の政治家及び國民に意見を發表した際にも、佛、英が、國際聯盟形成に充分の協力を齊しないならば、米國はむしろかれらの敵位に立つ國際主義的必要に當面せざるをえない所以をさへもほのめかした。その井氏は、當時、勿論、戰敗の獨、獨等をも、聯盟內に入れる

[illegible]

[illegible]

たのだといふ[illegible]を、かれに一言のみならず[illegible]

ける國家としての挨拶辭や演說の場合などにも、激越の[illegible]を含んで、[illegible]あるしたがつて公表[illegible]はなかつた。

獨逸を加盟させない必要をば、殊にクレマンソー氏が、直接にヰ氏にむかつて說明し、言葉に[illegible]なかつたとは、そしてつひに納得させたとは、當時新聞その他によつて喧傳された一插話であつた。

兎に角、終戰前後、即ち國際聯盟形成の努力がヰ氏米國によつて指導的、威壓的であつた當時、英佛政治家の内心には一大新不安が發達した。それは、米國を怒らすことによつて、獨逸を強からしめることであつた。米國の支持が當[illegible]を離れることだけですら堪へがたい。況んやそれが獨逸に傾向する多少の可能さへ考へられるとあつては、ヰ氏米國の拒ぐべからざる意志に對しては最低限犧牲の妥協、兩國の策を建てるほかない。

この必要が産んだ發明が、時の關係を大體的に測するならば、即ち上來記述した多少の事實上の國際關係を背景裡に、自由に許す立ち場からいふならば、將軍スマッツが起稿して公表した『國際聯盟(一實際的提案)』(一九一八年十二月)であつた。

國際聯盟の中心發起人、米國大統領ヰルソンは、かれが一九一八年一月に公表した、當時有名の十四箇條の中にかなり程度の、輪廓的原則意見をば、國際聯盟の原案としても、自然に懷抱してゐたにちがひない。しかしながら、それ以外及び以上に、かれがどれほどの國際聯盟具體案を、かれ自身だけの胸中に於てだけでも、[illegible]形成し、評價したかは、つひに疑はしい。信頼すべき多少の材料、及びかれ自身が、國際聯盟設立のための第一回公式相談會の席上に於て明言

した内容等に徴し、すべてを綜合して考ふるに、かれには、別に具體案はなかつたらしい。スマッツ案が、いはばかれの原則的公約に充分なる考察、反省を經由せずに、散漫的に取り入れられたらしい。

しかしながらスマッツ案は、要するにロ氏英國の立案にほかならなかつた。その論據はありあまる。ロ氏と將軍スマッツとの關係もその一だが、スマッツ案そのものが、最も有力にそれだ。

どうしてかといふに、そこには、一時、ロ氏英國の神經を倒にした「十四個條」中の「海洋の自由」は巧みにかげをもとどめない、或ひはかげだけをとゞめてゐる。「海洋の自由」は、勿論、英の海軍力的帝國主義に對する否定を暗意したものであつた。その他、植民地の一般的自決、露より撤兵して、露をして自決自治せしむること、保護貿易の撤廢、外交の公開、等及び等は、「十四個條」中の或生命部分であつたが、スマッツ案に於ては、或ひは全然的に、或ひは實大的に、非實在だ。

米國自身が、非氏の意に反して、つひに聯盟參加を拒否した原因のうちには、對個人的、黨派的性質の部分は勿論あつたが、また非氏の國際聯盟案そのものが全體として、當時の米國の最も發展力ある、現實的支配力ある輿論を餘りに不正當に、不適當に、不精確に、要するに不完全に代表したものであつたといふ最大部分はあつたが、現に成形を多少確實にした國際聯盟が、餘りに西歐國本位のもの、したがつて第一に英國本位のものであることが、また有力なる一部であつたことは、他の諸事實と共に、最初から周知の事實だ。英帝國の優越票數の問題は、その中の一現象にほかならぬ實證をも、すくなくとも部分的に勿論帶んでゐた。

國際聯盟に關する限り、非氏には原則案だけがあつて具體案がなかつた。それゆゑに英國案が勝利をえたことは、一面の事實だ。しかしながら、もつと重要な事實は、非氏の原則案そのものが、したがつてまた要するに成立國際聯盟の

戰爭目的を喪失せるのが、ただ徒らに漂ひ迷つてあつたといふことであらねばならん。

國際聯盟は、それが一つの政治としての社會的行動、即ち行爲であることを此處から目的としたるその目的に關する具體的目標からすれば、しかしながら、成立國際聯盟には、何等明確なる目標がない。何等これが新たになかつたに、國際平和、國際正義、國際協調、要するに理想的國際社會建設を、政治的、制度的に、現代に於て目的とするものとしては、成立國際聯盟に於ける原則實踐は、餘りに現實の事情と必要に對して遠い理想力と、可能に對して貧弱な實行力とを示すものだといふ、すくなくとも部分的に深刻な遺憾が避けられない。

成立國際聯盟は、一面に於ては、必要を餘りに狹く限つて見た。それは、戰勝國及び現在の富強國の必要のみに制限した傾きがある。それでは、しかしながら、有力な國際聯盟たる資格に缺ける。

成立國際聯盟は、戰爭防止を、抽象的、理念的、形式的に目的とした不完全がある。戰爭は、それ自身としては、非認すべきものであることはいふまでもない。そして、現代の文化程度を最低限文化として考ふる限りに於ては、戰爭は絕對的に非認される。しかしながら、過去に於ては、例へばアメリカの獨立戰爭の如きは、無意義でなかつた。今後の方針としては、有意義の戰爭を、戰爭でない、平和的な、即ちもつと純粹に文化的な、社會的な方法によつて一層有意義に代替する、したがつてそれを廢絕する途が開かれねばならん。

無戰爭は必要だ。しかしながら人生にはそれ以上の必要がある。綜合的意義に於ての社會的、文化的、道德的生存が即ちそれだ。戰爭否定は、この必要の一適用にほかならない。恐らくはいふまでもない常識的目標だ。

現代諸國家の公認原則を見れば、しかるに、それの多少の改作、或へはすくなくとも消極的要件としてでは、それをそのまゝに保存しての單なる戰爭否定は、徹底を缺くと思はれるものが甚大に含んでゐた。

國家主權のかたちに於ける土地即ち領土の國際的私有制の或ものは即ちそれの一大部分だ。

人は土地に依賴する。直接には、原料及び生活場としてのそれに依賴する。與件として承認せざるをえない人の根本關係の、これは、一だ。

現代の國家主權の範圍と、國民の生産力及び消費的必要とは、しかるに、人類各自の眞の必要に對して出來るだけ忠實なかたちに布置、配列、整理されては勿論ゐない。けれども、この現狀を改正または改善する努力に、合理的見地から適當な、充分な保護を與へない限り、國際平和は、方法の根本的一要件を缺いた目的であるほかない。

成立國際聯盟を見るに、原料及び生活場としての土地の自然的現在狀態と、それの使用の自由としての制度的現在狀態との關係に對して、餘りに習性的國民主義及び資本主義の原則を、それに進歩的技術を加へずに、假定してゐる物足らなさが目立つ。それは、したがつて、政治的國際聯盟たる觀を、經濟的國際聯盟たる最も實質的な一要件を缺いたかたちに於てのそれを、呈する。けれども、經濟的社會組織を缺乏した政治的社會組織は、現代に於ては、政治的社會組織としての第一要件に於て不具なものだ。

戰爭は人間の理想として許すべからざるものだ。現代に於てこの關係は前古無比の程度に發達した。しかし、人間の理想として許すべからざる、殊に現代に於てその意味を著大に増加したものゝ一は、貧乏、なかんづく最も原料缺乏に制度的に原因づけられるかたちの貧乏だ。

國際平和は、國と國との中間の無戰爭を消極的に意味するものであつてはならん。各國の内的平和條件を實質的に完成する國際的努力を第一に意味するものでなくてはならん。聯盟規約條項第二十三が、殊にその項内の細目第一及び第六が意味する公例、通商に關する多少の規定の如きは、いかにもヱルサイユ條約との殊深關係が承認されてゐるといふ事實

に利用し得る程度のものであつて、[illegible]ことも のだ。

現代の實情に立脚して考察する限り、原料及び生活場としての土地の使用に對する國際關係を良好に改善する努力を缺乏した、單なる分割、通商の條件に對する部分的、表面的改善の努力が、その土地を餘りに小さく持つ國々にとつていかに無効のものであるかは、多く考へて見るまでもなく明瞭だ。

例へば日本の如きは、農を全部自作農化し、工を全部生産者自治化してさへも、或ひは農、工、商を完全に國營化してさへも、或ひは生産及び分配を最も完全に當事者の自治及び國營の兩要素を調節したかたちに組織してさへも、農民の貧は大して救はれず、工民の所得も大して増さず、國富そのものも大して浮揚しえない原料的及び生活場的制限を全國家の政治的國際環境のかたちに於て固有してゐるではないか。

それが全然過去に於ける諸外國、或ひはいかなる一外國もの罪過に責任づけべき性質の關係でないことはいふまでもない。しかしながら、それは全然日本自身の原罪として諦めべき理義のものでもない。國際的人道主義に發達を與ふる餘地と、機會と、可能と、そして必要とがある限り、それはこれらの所有者の責任であるといはねばならん。

國際正義は、成立關係、聯盟が、意識的に目的とする一性質でもある。此點からいふても、單なる現在的戰爭防止策がこれの主要努力であつていゝ理由はない。人性と社會に對して綜合的に根本的な原則的積極策を建てることによつて、戰爭を自然に根絶に導くとが、現代に於ける國際正義的、國際平和主義的見地からする戰爭防止策の第一用意點でなくてはならん。

地上に存在する各主權國家が、すくなくとも最低限必要の原料的及び生活場的自治能を持つことが、しかるに、この第一用意點に於ける主要性質だ。どうしてかといふに、多少野蠻的に、且つ誇張修辭的にいふならば、戰ふて生きるか、

戰はずして死ぬかの存亡線上に、現代に於ける狹小領土國は立つてゐるといふ關係さへもそこにはある。死は、すくなくとも常人に取つて、戰爭よりも恐ろしい事ではないか。況んやその死が、本質的社會價値の死をも多少意味し、その戰爭が、決戰を意味する場合に於てをや。

現代に於て、地上の各主權國家が、原料的及び生活場的に、自治力者化する方法としては、且にしかるに、制限國際聯盟團形成の方途に、國際的協力を充分に發動させることが、一先要件だ。

聯盟規約條項第二十一には、モンロー説が意味する如き、國際大地方内的相互理解、特別親交を、平和を目的とする見地からして、特に是認してある。

制限國際聯盟團形成は　たまく、この條項に純化的發展の機會を與ふる方法としての性質を持つ。なぜ純化的といふかといふに、特にモンロー説といふが如き　アメリカに狹隘ある性質をそれは帶ばず、もつと原則的に、一般的に、國際大地方自治をそれは意味し、且つもつと經濟的、實質的必要に對する意識を　社會的、人道的、人類愛的、及び綜合自己的見地からして、それは充分に、積極的に　その平和目的及び方法に帶んでゐるものだからだ。ここで綜合自己といふたのは、勿論、各人のそれだ。

成立國際聯盟は、これを補觀し、綜合的に整理するに、對火用水設備式だ。火事の原因と緣因を、人工光線や建築を、もつと科學的に強化したものに改作することによつての根本的防火方法ではない。これは、國際不和及び戰爭に對する、制限的、無能的側面から見られた「勢力協調」式、「政府政策」式のものだ。

そこには、戰爭、平和が、餘りに淺く、餘りに偏に見られ、愛せられ、全人類的社會厚生の用意が足りたすぎる。

またその恐れかた、愛しかたが、戰勝帝國主義國の立ち場からのそれに、成立事情に自然に支配されて、すくなくとも多

や、結局[illegible]ことである[illegible]ことを。ただし[illegible]たい。

併て遠征に與つたジェノアはあつたが、いまだ[illegible]ないまでいだ[illegible]によつて[illegible]、[illegible]はれの

戰勝帝國主義的勢力を退嬰して、これに代つて[illegible]る、一層新たなる式[illegible]均勢を保持する様に導かれるものだとして明哉された。エルサイユ條約のそれについては、公平なる批評が不完全ならも比較的に發達した現代平和の時代にたかつては、それが比較的に乏りだからでもあらうか、まとめた批判が比較的に發達してゐたい。

日本は勿論、どれほどの分析的及び綜合的考察を費やしての上であつたかは別問題として、すくなくとも時門關係に於ては、西洋先輩國のあとを追うて加盟した。そして意味に於て、なかんづく最も英のあとを追うた形跡がある。當時、英國における最高役のすくなくとも一人であつたグレー氏が、テキハキとした物の言ひかたで、日本の決意をうながし來たつたことは、その當時の光景は、いまなほ私の記憶にも新鮮だ。

國際聯盟は、成立當時の各國を基本としていふたらば、當時の自由黨系によつて最も正直に協同救濟主張され、保守黨系によつて、傾向的に、しかしながら多少消極的にさうされ、保守黨系によつて、最も打算的にさうされた。何時、内心最も懐疑的であつたものはこの最後のものであつたにちがひない。しかしながら、その自由黨系は、新時代の世界的必要を經營すべく餘りに非實際的であつた。その勞働黨系は多少不充分に綜合的であつた。そしてその保守黨系は、自利的原則に對する進歩的理想による反省を缺いてゐた。

けれども、新時代の社會經營としての政治は、國内的にもさうだが、國際的には、規模が、もしくは對象物がたきいだけになほさら、精神に於て實行的、個人または國關に於て原則的、そして方法に於て充分に綜合的であることを重大要件とする。

しかるに、成立國際聯盟は、精神に於て充分に實質的殊に經濟的でない。更に殊に國際原料關係及び生活場關係の意義に於てそれでない。それはまた方法に於て充分に綜合的でない。且つそれはまた意識的及び殊に無意識的に習性的國民主義及び資本主義の知識と聰明を、餘りに固形的にそれの原則内に包藏してゐる。

新渡戸稻造氏は、去月即ち大正十四年一月の『太陽』に於て、國際聯盟についての論說唱道のなかで、「國際聯盟を否定しようとする人々の論理の根據」として、特に鬪爭本能に注意してゐる。氏の判斷を裏書きする材料が世間にあることは事實だ。そしてその材料としての鬪爭論そのものが多少不完全なものであることは勿論争へない。また、鬪爭本能不可否定の見地からして國際聯盟を否定せんとする企てが、餘りに單純な、非綜合的な、そして多くの意味に於て悲しむべき性質のものであることも、多く說明するまでもなく明瞭だ。

しかしながら國際聯盟には、單なる鬪爭本能不可否定の見地からでない、もつと複雜な、もつと有力な見地からして、多少の不滿足を結論づける諸點がついに不可避であることは、幸か不幸かは別問題として、恐らくは現代に於ける多少の人々の、すくなくとも私自身の現在或ひは從來の批判意識が關する限り、事實だ。

もしこれが國際聯盟の功績と素と有望性とに關しては、私自身にも相當に多大の積極的意見がある。

これを抜きにしては、例へばヘーグ平和會議そのものが、決してそれがひとへに無視されまたはフィアスコ視される多くの場合に於けるほど、それが値ひする無力、不成功のものではなかつた。兎も角もあれほどに準制度的形式を一とたび成しえたもの、またあれほどに一時たりとも輿論の內容化しえたものは、それが大體の傾向と方針と趣旨に於て社會進步的理想性のものである限り、形に於て崩れ、現實に於て失敗しても、なほ且つそれは、社會心理のむしろ無意識的な深處にそれの根柢を張る必然がある。それは、いはば有形に死して無形に生きる。古来の僧侶的、不實備理想主

[illegible]・多少十字的・片手落ちな[illegible]に、なほこの性質を帶びてゐた。

國際聯盟が、すくなくともこの見地から評價して、したたかのしろものであることに多くいふまでもない。これは人類史上に於ける畫期的なる一大先驅的努力、運動、及び成功だとさへも過當に評價しえられる。それがヴェルサイユ條約との姉妹兒たる共礎的關係上、それが現に、實に醜はれた世界戰爭に對する反動的性質を濃厚に含んだものであるほかなかつたことは、またさうでないならばこれはあの程度にすらも成功しえなかつただらうことは、國際聯盟に對する批判的考察者の深く理解せざるをえない消息だ。無論、それは、その反動的性質と共に直接に戰勝帝國主義の性質をも帶んだ。その反動的性質がこれを非實際的なものとなし、その戰勝帝國主義的性質がこれを非理想的なものとなしたことも、したがつて一概にこれを批難することは正當でない。

國際聯盟は、國際關係をもつと完全に社會化する方途に於て、一つの有力なる足場を新設した。これによつて、今後の一層完全な國際社會化的努力は、さもなくばあつたであらう多くの困難をすでに排除されて見いだし、またさもなくばなかつたであらう多くの便宜をすでに準備されて見いだす。例へば私がいふところの制限國際聯盟團形成の努力の如きも、國際聯盟のために邪魔される意味をば極小限化、絕無化しうる程度に持ち、それのために助成される意味をば最大に持つ。

精神分析學派の人々は好んで「鍊金」といふ警語を用ひる。制限國際聯盟團形成の如きは、或意味に於ては、成立國際聯盟を鑛材とする一鍊金にほかならぬものともいへる。

しかしながら、それは問題の實質的一側面だ。成立國際聯盟を、それの名義と形式とに於てそのまゝ保存することが、成立國際聯盟そのものゝ根本意志にさへも最も忠實な方法であるか、ないかは全く別の問題に屬する。國際聯盟の

ための國際聯盟ではなく、もつと深遠な目的のためのそれであるのだから、その目的の達成のために、國際聯盟の廢棄さへもが必ず不必要だとは即斷されない。況んやそれの多少の改作に至つては、いふまでもなく必要だと考斷される理由があることは、原料的及び生活場的國際關係に對するそれの設備の有無及び完全不完全を見ても明示されてゐる。

宗教の祖師の眞意と眞價とは、多少の後世に及んでは、甚だしば〳〵、それの名義的及び形式的信徒によつて代表されるよりも、一見それの敵位に立つものによつてさうされる。一創始者と同時代に於てさへ、かれの本意をかれ自身以上に完全に所有する他人があることもしば〳〵だ。この一原則的事情は、國際聯盟の場合に於ても例外を見いだす先驗的必然は勿論ない。されば、成立國際聯盟を廢棄して、新國際聯盟を形成する合理的可能も、決して絶望すべきものではない。

現在の事情と問題は、國際的社會民をして、また諸國民、諸民族をして、正及び善の見地からして、最も賢明なる選擇を成立國際聯盟の保存、廢棄、改作、新國際聯盟形成の各種可能間に決定せしめる多少の自由を示す。この自由をいかに善用すべきかは、現代人、殊にかれの政治意識にとつての一のすくなくとも一問題たる社會價を持つ。

五　土地所有制は完全社會有を原則的方針とし、國有、國際有の或形をそれの當面の事情的方針とすべきだ

土地所有の制度は、原則的方針としては、完全社會有であるべきことは、多く考究するまでもなく明確だ。ここで完全社會というたのは、第一に、社會の範圍に於ける完全を意味したのだ。社會とは、勿論、人間協力の別稱だ。

土地は、社會經濟的見地からしては、しば〳〵注意された通り、原料及び生活場を最も主として意味する。

しかしながら、土地は、この理由からして、種々に分類さるべきである。

例へば原料的見地から考察した理由としての土地の如きは、比較的に最も純粹に自然のものである性質を持つものに屬する。油田の如きは、勿論それに附屬したものとして類別される。

同じ土地の範圍内でも、例へば森林地としての土地の如きは、人爲的部分を比較的にすくなく持ち、自然的部分を比較的に多く持つ。森林は、大部分、自然力によつてすくなくも成長する。現在の多くの場合に於ては、發生し且つ成長する。人力は、それを見つけること、多少それを保護し、助成すること、交通設備をそれに關係づけること、それから、伐採、運搬、製材等、等へと、次第にそれの世界を展開する。

海洋を土地附屬の一種として見るならば、水産殊に魚類の大部分は、多く人力を待たずして自然に蕃殖される。狹義の農作地、殊に例へばわが國の稻田の如きは、多大の人力を必要とする。稻または米としての原料は、鐵、松、ニシンとしての原料との比較に於て、人力を待つ程度に於て甚だ高い。或は、原料としての前者は、原料としての後者に比してといへば一層精確だ。米の如きは、例へば鑛物、森林、魚類の如きに比しては、それ自身、すでに自然的生産物ではなく、人爲的製作品だ。

もしそれ生活場としての土地の代表位にある都會地の如きは、最も多く社會力に負ふ。

例へばこのやうな種類別を、土地に發見する必要は現代に於ては殊に增大してゐる。またいよ〳〵增大しつゝある。

そして、その種類別に應じて、土地所有の關係をも種々に類別し、組織する必要が勿論ある。

現代の制度及び慣習に於ては、しかるに、土地の所有は、概略的にいふ限り、絶對無條件的、無識別的私有にゆだねてゐる。原料及び生活場としての土地が、その意味即ち價値を生ずるために、いかなる割合ひに於て人力、社會力、自

然力を必要とするかといふ問題は、現代に於ける土地所有の一般的關係にほとんど取り入れられてゐない。

生産の方法が、一般的に、現代に於てはいよ〳〵ます〳〵集團力、社會力に負ふやうになつて來たこと、またなつて行きつゝあることはここに特にいふまでもない。そして、所有關係は、しかるに依然として舊時の私有制に、大體に於て、なほ代表されてゐることも、特にここに注意を新たにするまでもない現代社會組織、殊に經濟組織の中心的不完全事實だ。そして、土地中心の生産及び所有關係に於てこの不完全は殊に甚大だ。

不勞收益の價値を最も大きく生むものとして、土地私有は疑ひもなく第一位にある。私有とは、原則的には、その所有物を、その所有者が、社會價あるしかたに於てなりとも、社會價なきしかたに於てなりとも、反社會價あるしかたに於てなりとも、自由に扱つてさしつかへない公認權を意味する。使用のすべての可能内に、いかなる選擇をほどこしてもさしつかへない公認權が、即ち私有性の原則的意義だ。

けれども、社會の一部が、土地をいかに使用するかは、結果に於ては、多少必ず社會的だ。社會利害的だ。土地が主として原料及び生活場を意味する現代に於て、代表的にいへば、工業生産的及び都市發達的現代に於て、それは最大社會利害的でさへもある。

これを全社會的に見るならば、廣大なる、そして原料豐富の土地を、及び住みうべき土地を、國際社會的自國領土のかたちに於て私有する國家が、例へば原料握り腐らせの可能を選擇する、或ひは外來移民及び歸化不許可の可能を選擇する結果が、いかに國際社會害でありうるかは、容易に考想しえられる。

國際土地公有が、かくして、土地所有關係に於ける當面の進化的一要件でなくてはならん。

けれども、これが完成されることは、現代諸國家の原則の上に於ける遙かの、遙かの推化が、先づ、同時に、及び結

果として、完成されることを予定する。すくなくとも[illegible]

進化的必要及び傾向には、早晩、その前提を、徑路化せざるを得ない。

完全なる土地國際有こそ、いつの事か知れない千山萬嶽のかなたの、いまはただ叫ばされるだけの燈臺だとはしても、今回の日露條約ですらもが、その介在に一新進路を展開した意味を持つ。現實にのぼるよりも遙しと目されたこれも、地崩れ山くだけて壯士死し、然るのちに天梯石棧相勾連するに至つた。土地國際有の理想に、これよりも艱難な努力を豫想するが、さきに進むほど途は開けて行く。

しかしながら、土地國際有は、順序として土地國有を先件とすると同時に、論理としてこれを除外しない。國際的に公有を必要とする土地は、先づ國內的に公有を必要とすることは勿論だ。なぜかといふに、特に國際有に意味があるわけではない。純自然物としての土地をば、人間が協力してこれを使用することに意味があるのだ。

孟子は天爵と人爵とを聰明に識別して天爵本位を主張した。それとは別な意味に於て、現代は、人德と天德とを聰明に識別し、そして天德に對する人德の主位關係を實現する必要を持つ。土地は、人間からいふ限り、人間にとつて有用な自然物としての天德にほかならない。

第二部

六　現代日本の政治は國民的聰明不足の故に自體經營のための最善原則を敢取しない狀態にある

日本の現代或ひは現在の政治が、環境經營としての側面に於て、多少賞讃ならものであることに、第一部に於て注意し

た。

日本の現代或ひは現在の政治に、勿論、それよりも先きに、自體經濟としての最主要側面に於て、それ以上に遺憾なものだ。

環境を上外方に譬へるならば、日本の現代或ひは現在の政治は、好んで跼しつゝあるかたちだ。天蓋無限に高きにかかはらず、それはみづから求めてかゞみ、せぐくまりつゝある。敢て國際的に直立濶歩する姿勢を取らない。

自體を下内方に譬へるならば、日本の現代或ひは現在の政治は、好んで蹐しつゝあるかたちだ。地盤充分に厚きにもかゝはらず、それはみづから求めて戰々兢々、深淵の上の薄氷を履むが如くに、ぬきあし、さしあしの状態にある。

兩者を通じて、原則意識の淺薄即ち缺乏が、それの原因だ。

日本の現代或ひは現在の政治が、それの自體經濟的側面に於て、いかに底ぢからなき、拔き足式のものであるかは、例へば最近、即ち第五十議會に現はれた治安維持法案——この一文章が公刊される頃には法令化してゐるかも知れない——を見ても明確だ。

内に自立してゐないものが、獨りそとに對してのみ、例へば最初に引用した床次氏の演説に於ける、いはゆる「自主的」であることは出來ない。「外交の根本方針として」「自主的」であることが「寸時も忘るべからざることである」ならば、内政の根本方針として「國民が自立的であることは、同様に、しかも一層根本的に、寸時も忘るべからざることであらねばならん「國民をして眼を大陸に注がしむる事は最も經世に志あるものゝ專念すべき所であらう」に異存はないが、それの併行的及び先行的要件として、國民をして眼を大本、大源、大道、大則に注がしむる事が、最も經世に志あるものゝ專念すべき所であることを深刻に意識しないことは出來ない。

しからば、いふところの[illegible]、[illegible]、[illegible]にに[illegible]それは[illegible]、[illegible]、[illegible]、には
ない。更にしからば、その[illegible]にたにか。それは、人[illegible]を中心とする[illegible]の[illegible]を[illegible]目的とする性質のものだと、多少[illegible]則には、[illegible]される目的のあるものだ。いひかへるならば、これは、人性に對する絶對的完成の要求だ。最も人性に忠實な方法の[illegible]だ。人性に全然不忠實な人はない。人は、すべて、人性に多少忠實であることを目的としないことは出來ないやうに條件づけられてゐる。人が最も缺くところのものはその目的を充分に方法ある目的化することによつて再認する聰明力だ。かくしてわれらは、例へば愛國を目的としながら、しばしば非愛國的結果する無方法または不完全方法を採取する。これよりも普通なことはない。

原則意識に徹底しないでは、徹底した原則意識を持たないでは、人はなに事をも、なにものをも完成することは想ひも寄らぬ不可能事だが、社會經營としての政治に於ては、この關係は殊に明確に重大だ。原則なき社會經營は、原則なき個人經營即ち修身よりも、社會が各個人を成員とするだけに、無理だ。したがつて困難だ。われらは、國家內政に於て、また質にこの無理、したがつて困難を強て目し且つ忍び、しかもさうしつつあることを自覺しない狀態に、從小ならぬ規模及び程度に於て、現にある。

原則なき社會を、もつと原則ある社會に進化させることが、世界共通の不斷の必要であることはいふまでもないが、現代及び現在の日本は現代及び現在の日本として、多少特殊なかたちに於て、この必要を勿論持つてゐる。

この特殊必要に充分に開眼しない政治意識は、それだけ不完全なものであるほかない。わが現在の政治意識を通視して、或ひは概觀して、なに人かその不完全が意味する不安を、日本國民としては、深く、強く感ぜないことがつひに出來ようか。それは、不幸にも、つひに出來ない必然がある。

政治を道徳のしもべと見ることは許されるが、道徳を政治のしもべとすることは、最後の結論として、決して出來ないがゆゑに、最初の、及びいかなる途中の方法または現象としても、それの全價値が問はれる場合には、斷々乎是認することは出來ない。

道德は可能なものか。それはまた必要なものか。そのいづれもであるとするならば、それはなにか。國民は、政治生活の立ち場からしても、更に新たにこれを問ひ、そして答へる努を取つて辭い理由があると考へる。

道德專門の人々のいはゆる道德と、爾餘の人々のそれとが、兩者ともに、かれらの純理意識に於てなにであり、かれらその現在の、國民としての政治意識に於てなにであるかを、かれら自身、再問して見ることの價値が、多少ともわれらのすべてに確實に、現實にあると考へる。

私は、道德は人の道だと考へる。充分に再認されたかたちに於てのそれだと考へる。人の道、人の規範、人の當爲及び當在に對する認識よりも、年經て幼稚なものは絕無だらうかとさへも想はせられる材料がある。そしてその材料が、われらの現在の政治意識の世界に於けるほとんど支配的な全部にさへも呈視されるやうに考へられる。

道德は人の道だといふ揚らくは公認されてゐる思想を、國民の一員として、同胞國民と共に、われらの直接の政治生活に適用するかたちに於て、私は、なほ考へて飽かない興味を持つ。

七　充分に實質的、原則的、隨つて綜合的であることが此際殊にわが國民の常識的及び專門的政治人によつて要件視されべきだ

政治は空想でなく實行だ。政治は私事でなく公事だ。社會のための社會經營が即ち政治だ。

これは一種の綜合、もしくはこれの對象的、內容的事實としての政治にとつては公理だ。しかしながら、政治は常に人間の營みの一種だ。これは人の政治行為だ。人性は、多少、本質的に於てここにも發露する。

政治は政事でなく公事であり、手段のための技術であることをこれの形式的一要件とする關係上、これの外性は無い。實行的諸關係に關する限り、これの外には原則だ。この關係の、內容を示さう。

この事實か、人性に於ける多少の相應性と結合して、政治は、現實的には、常に多少、時あつては非常に、實行界に於ける最も卓越な、しかしながら最も廣く支配するセンセーショナリズム及びセンチメンタリズムとして自己を示す。

內包關係に於ては、實行的人間世界が關する限り、政治よりも有假定な、派生質な、手段的な、奉仕的位置にあるものはないのだが、たゞそれの外延關係に於て、政治は最も代表的なものであるがゆゑに、その關係を充分に理解しない從來及び現在の政治人は、それを職とする政治專門人即ちいはゆる政治家の場合に於ても、また間接にこれに關係する政治職以外の人々の場合に於ても、外延に於ける實質の政治の自然的及び當然的優越性を、全く反對の內包に於けるそれにまで、不聡明な權力によつて擴充してそれを實在視し、それの脚下に卑屈し、それを潜稱な、しかし有害なかたちに於て禮拜し、讃仰する。

政治ゴロ、或かたちの「國士」、或かたちの「選舉氣分」、デマゴグ、宰相狂、大臣狂、議員狂、これらはすべて、多少これを例示する。

例へば科學者が、政治家よりも、世間的に著しいことは、いまだ殆ど例外的事實だ。ここに著しい一例を示る。

しかしながらこれは勿論幼稚を意味する一現象だ。政治は虚業、虚榮、或意味に於てひとへにハデなものであるべき筋合ひのものではない。それは眞正政治の素性たるべきものでは決してない。

眞正政治の素性は、農場勞働、工場勞働、事務所勞働の性質を、それの本質とするものであらねばならん、實行は比較的にジミだ。正直に生計を意味する實行に於て殊にさうだ。政治は、しかるに、第一に生計としての實行を最も組織的に、包括的に經營することをそれの責任とする。

もしも政治が、例へば競馬の如き、或ひは興業藝の如きが、現代に於けるそれらのものの或側面が比較的に明示するやうな性質に於て、それの存在を顯著にしてゐるならば、そこには、あるべきものが多少缺け、なかるべきものが多少附帶されてゐることが理解される。

政治が一つの實質業であらねばならぬとするならば、常識的及び專門的に政治に從事する人々が、また相當に實質的品性であらねばならぬ理由は明確だ。即ちかれらは、或意味に於ての役者及び觀劇者のやうであつてもならず、或意味に於ての公開賭戲者及び觀戲者のやうであつてもならぬ理由に明確だ。

社會經營が關する限り、實質的意義を最も代表する位置にあるものは、殊に現代に於ては、經濟だ。そして、社會的救濟はなんかづく最も實質的必要隨つて事業であり、社會的興當これに次ぐ。

政治が、修辭藝術としての演說を重大に意味した時代及び社會は、古代アゼンスのやうに、經濟的奴隸所有制が公認された時代及び社會によつて代表される。近代の歐米が、帝國主義及び資本主義に對する懐疑、批評、否定の思想と運動の發達につれて、次第に演說本位でなくなつて來たことは、この意味を多少持つ。

政治家といへば先づ辯舌を聯想させる時代は、わが國に於ても次第に過去に屬しては來たが、いまなほ充分に過去に

悶しないであることは、わが國の政治建設が、それだけ幼稚であることの一證だ。

情操安詳といひ、技術云といひ、まして言語を云のばめるといひ、哲性個々といひ、これを社會的なくし屬せしめんとする現代政治にとつてどれほどの價値をよみ認されべきであらうぞ。これらは、かへつて、しばしばその代表者「一般者」的、「講釋師」的、デマゴグ的、特權的階級者的、不當な階級者的魅力及び思想の持主的表論たる示威を持つ。

しかし、世間が買はない品をば商賈人も店頭に飾らなくなる必然があるから、雄辯が政治家の資本の如くに持て囃されるあひだ、それが現代の事實である限り、その社會なり、國民なりの政治意識は悲しむべく低能、白痴に屬する、或ひは近いものだといはねばならん。かへり見るに、わが現在は、いかなる程度にそれの超越者または例外者であるか。

雄辯の如きは、眞の政治家にとつては、實に一末技たる位置を辛うじて要請しうるものにほかならない。そんなものが有用であるほど、その社會の政治心の稚弱を、それは意味するものだからだ。

交際上手、金離れの善さ、私的世話力、これらも、人氣、子分、情實がらめ等の種々形に於て、反政治性をいかにも分にも帶びうるものであるから、それらの性質や能力が政治家の間調とされるあひだ、その程度は、即ちその社會の政治心の發達に反比する。

社會のための社會經營が即ち眞正政治だから、政治家の資格は、社會のためを思ふ精力、社會のためを知る能力、社會のためを實現する意志力及び實行力によつて要件づけられる。現代に於ては、しかるに、社會のために、奴隸、奴隸、それから奴隸的習性及び環境に對する啓蒙及び廢棄によつて代表される。

みづから多分、或ひは大いに、奴隸的思想及び感情の持ちぬしであるが故、どうし[illegible]こと

が出來やうか。けれども、現代或ひは現在の、すくなくともわが國の、多くの老ひたる及び若かき政治家は、或方面に對して聰察且つ傲慢なだけに、他の或方面に對して餘りにみづから好み求めるかたちの奴隸的思想及び感情の實現者ではないか。

もしそれ社會的救貧及び興富に至つては、わが現在の政治家は、大體に於て消費者、しかも贅澤なる消費者氣分の持ちぬしであつて、消費階級と生產階級との社會的分離發達に對する批判的觀察或ひはこれに近いものを持つための準備に缺け、準備を欲するだけの新意志にも甚だしばしば缺けてゐる。

政治が外延關係に於て實行的社會の全圓を蔽ふことだけが不完全ながら知られてゐる。これが內包關係に於ては自分の脚の上にでなく、經濟その他の、もつと基礎的、實質的な生活必要及び生活內容の脚の上に立つてゐる、その意味に於て比較的に淺いものだといふことは不完全程度にすらも知られてゐない現在の實情下に於ては、前記のやうな弊端は自然に發生する必然がある。衆意識に於ての群衆心理がそこには機會をえる必然があるからだ。

衆意識に於ての群衆心理とはなにか。それは、幅に於て廣く、底に於て淺く、力に於て、殊にそれが政治に關するものである場合には、淺皆深ながらに實行性。行動性を孕んだかたちに於て強い、支配質及び強制質あるものだ。

衆意識の群衆心理は、ひとへに外延的なものだ。多數人に共通の本能、衝動、習性、聰明、想像、興味、意志、思想、感情、傾向等からのみそれは成り立つ。しかしながら、一社會內の多數者に共通のそれらが、質に於てすぐれたもの、優秀なもの、進化したものであらうわけがない。例へば美食慾及び好色心の如きは、最も多數者に共通の心理的な、或ひは心理的及び生理的な或ものだ。

美食慾や好色心は、それ自身として惡でないことはいふまでもないが、文化力に於て或程度以上に發達した社會に於

ては。これらが自身に固有の[illegible]に於て實現せらるためには。[illegible]

てこれらは反省され。意識に意識づけられる必要がある。

いはゆる政治的性格の場合に於ては。しかるに。[illegible]脱却き。例を個人の可能性に於て比較的に多大な多數者共同的關心が主として一般的である。一人或いは比較的一小部分の各責任に。それの結果が歸すると考想される制度下にはすまじき[illegible]的または[illegible]的行為を。責任を負いもする[illegible]識的打算にも轉援されて。多數一同的行動に於ては各人が容易に[illegible]する。

かくして、政治の外延的充分化は、第一部に於て主として注意した如くに、現代殊にわが現在の一大必要だが、政治の内包深に於ける派生的、假定的、手段的位置及び關係を明視することが、目下及び將來の政治の、殊にもわが國のそれの、根本的一必要事だと確認される。

政治を、それの内包深的當然關係にしたがつて意識することは、政治を實質化することを必然的に意味する。

例へば階級鬪爭、無產政黨形成等の思想と運動とには、多大の時代的及び社會組織的意義が意識的及び無意識的に附着されてゐることは、多く考へて見るまでもなく明確だが、同時に、實質的社會救濟及び實質的自由解放の必要と方法と實現に充分の注意と努力を向ける、多少なほ滿たされざる必要の存在が、わが現在の社會を見ても見出され、察信される。

例へば保險業の如きは、一日も早くこれを完全國營及び多少その他のかたちの公營に移す努力を社會的に必要とする一事ではなからうか。老、幼、病者に酷にして、死亡率低き壯者に厚い保險制の如きは、また地震その他の大災に對しては責任を負はない、及び負へないそれの如きは、私營に伴ふ必然的現象ではあるが、いなそれであるから、そしてそれ

は限りに両輪に非人道的且つ非社會的であるから、比較的に容易に着手しうるそれの公營化に着手すべきだと考へる。

信用組合を發達させることによつて資金銀行に最も自然的な廢滅を機會づけること、消費組合を、もつと科學的、組織的、社會方法的に發達させることによつて私營分配者として一仲介者の過多を自然に削除すること、生産者直營の廣義販賣組合を發達させることによつて同様の效果を持つこと、乃至例へば質屋の如きをすらも、それが必要である限り、廣義生産者組合の事業内容中に取り入れうる限り取り入れること、おほよそかくの如くにして、生産、消費、分配、金融に於ける搾取、被搾取、浪費の諸關係を、形式に於て原則的改制でないまでも、、實質に於てそれの實質的逝排を意味する種類の救社會惡的行動には、餘力を殘さないやうにしたい。

經濟が、生産、消費、分配の各方法に於て、次第に完全に、そして直接に保團力化し、社會力化される必然及び必要は、今日に於ては、もはや多く問題とされる餘地はない。現代の政治としても、同時に、公然にこの必然及び必要に、政治的努力に能ふ限りの保護と整理を與へる必要があることはいふまでもない。そこに現代政治の一生命的責任がある。

原則的革制、社會政策、院内努力、組合行動、輿論喚起、これらの各種形が、社會的救貧を一焦點として組織的に方法用されることは、政治の見地からしても一目的であらねばならん。

その事自身が相當に有力な原則意識の所有を先づ必要とする關係があることはいふまでもないが、經濟そのものが、本體として、要するに人間生活または人生或ひは文化に於ける基礎的一部内容にほかならない。完全なる原則意識の所有は、この關係からして、政治にとつても、また政治にとつては殊に、必要視されねばならん。**政治は、實に、それの外延に於て、全社會を一延體と見、これに完全なる一延關係を造ることを自身の存在理由とすべきものだからだ。統一**

は、實に、聯合の一様性にだからだ。しかるに、無前時の良一にかゝはらず、生産の方法が、したがつてまたそれにつた方法、近にしたがつてまた消費の方法が、分配、消費、その一切にこれにも然作ろて、その變化自身の内的一必然性として、いよ〳〵集團的、直接的、一定の方法にするにもかゝはらず、所有權及び經營權のみは依然として、各人自給的、各家族自給的、各小經營自給的時代に於て見る同様に自然、當然であつた私的性質のものに委されてゐることは、富の分配の、したがつてまた消費の、及びまた生産自身の、社會止的、社會即ち公衆的決定方法に不忠實な方法であるばかりでなしに、その所有權及び經營權の持ち主をして封建的專制君主的心狀を自己に形成せしめ、被使用人及び被雇用者をしてその對側に立つ者の心狀、即ち奴隷根性または卑屈心を自己に形成せしめる。

けれども、人の世にあつては、威張ることと卑屈することよりも惡いことはない。兩者は勿論因數的、相待的だが、即ち一方に威張る者がなければ他方に卑屈する者のあららうやうもなく、一方に卑屈する者がなければ他方に威張る者のあらうやうもないが、どちらかといへば、一方に卑屈する者があるからこそ、他方に威張る者が出來るのだといふ關係の方が、その逆の關係よりも一層根本的だ。卑屈こそ、最も人性の根本傾向にそむく。人の世の百弊は卑屈に淵源するとさへもほとんど無理なしにいひえられる。かくして、自尊、自敬は、いく多の事情によつてしひたげられながらも、たほかついかなる奴隷的環境及び習性の人々にすらも、種々の場合に、種々のかたちを取つて死に切れずに、性根強く生き殘つてゐる。「侮辱」、「輕蔑」に對する憤慨は即ちこれを意味する。

人生及び文化の、したがつて社會の根本的一要件は、卑屈の解放にある。身體的、物質的、したがつてまた經濟的奴隷狀態からの超脱、それの解放よりも、精神的奴隷解放の方が遙に深い必要だ。

いはゆる水平社運動に對する批判は到底單純なものではありえないが、そこに最も注意される、そして人生哲學的に極めて有意義な一事は「侮辱」及び「輕蔑」に對する憤慨がそこに常に顯著たる現はれをなした事だ。西洋の國事犯的囚人が、不食絶命を選んだ例は最近代にもまゝあつた。これらの現象に徴しても、いはゆる經濟的生活の富足またはいかなるかたちに於ての成立もが、必ずしも人生の至深、至高、即ち支配的目的でない原則は窺はれる。

いな、必ずしもではない、それは決して人生の支配目的たる位置をば要請しえない原則的關係がある。經濟は、畢竟するに人生の基礎的一必要件ではあるが、完成的全要件でもなければ、至要件ですらない。

ここに於てか、社會のための社會經營を任とすべき政治としては、完全人生哲學的原則の所有をいよ〳〵必要とするといふ結論が避けられない。

ひるがへつて考察するに、わが現在の政治は、それの原則に於て、したがつて方法の上に、いく多の深刻なる卑屈を保護する性質を、それ自身内具してゐる。政治組織の内に卑屈保護が大いにあり、經濟組織の内にまた多少、いな大いにそれがあるゆゑに、いはゆる教育の如きは、殊にそれの公制的部分の如きは、政治的及び經濟的社會からの不可抗的威力及び魅力ある强壓と誘惑との下に、みじめな卑屈主義を扶植しつゝある。

いはゆる道徳、倫理、實に宗教そのものまでもが、わが現在の事實としては、教育同様に、いな自然それ以上に、政治的及び經濟的原則の奴隷となつて、卑屈の强制及び强信に腐心の限りを盡しつゝある概狀だ。

卑屈は、實に、國民の骨髓を腐蝕してゐるとさへも概斷しえられる。しかしながら、すくなくとも日本の現在の實情に立脚していふ限り、卑屈解放は、これを國民の生活、思想、文化一般の上に實現するためには、先づ政治が自己救濟を實現する必要がある。社會經營の中心權力者いな責任者たる位置にある政治が、第一にそれの原則に於て、したがつ

ここれのた点において。[illegible]に於ける卑屈は[illegible]に飽きらない。つゝ[illegible]始めてもこれは絶対的に行きたやみ、行きつきる。

卑屈が非認される理由は深刻だ。成長と卑屈とは両立しない。しかるに、成長は人生の絶対的及び積極的目的だ。それは個人及び全宇宙のそれであるとさへも推断される。

個々の日本人が、いはば真理を理想とし、實在を基礎とするかたちに於て、廣大な天地の自由を確認しうるやうに、政治は意を用ひなくてはいかん。

卑屈非認は勿論原則のすべてではない。これは單なる政治原則だけのすべてですらもない。しかしながら、一つの當面的根本病としての卑屈を治癒するためにすらも、わが現在の政治は、完全原則貫徹に所有の手を着ける必要がある。

國民的救貧及び興富に代表される實質的必要が、わが現在の政治によつて閑視され、そしてそれが出來るだけ根本的に對策されねばならんことは、過説しえられないほどの急大務だが、わが現在の政治は、それと同時に、充分に人生、文化、及び社會の根本原則に開眼し、したがつて眼前及び身中現在の卑屈の解放、救除にも氣力及び時間の限りを盡すべき必要を持つことも、そのために智慧を絞る必要も、過説しえられない急々大要務だと斷言される。

政治の立ち場からしても、救ひ除くべきものゝ第一線上に貧と卑屈とがあり、興こし設くべきものゝ第一線上に富と人格的、人間的自他敬愛があることを、私はここに更に再認する。

現に開會中の第五十議會に提出され、兩院を將に通過せんとしつゝある法案中にも、現在の日本の卑屈主義的原則或ひは卑屈的習性に讃揚立てられる條原則を、當局者には氣づかれず、または反對の方向にさへ氣づかれたから、多少滲んだ部分があるとは、不幸にして、稀有の例外ではなく、通則的現象中の、眼前偶在の一、二例にほかならない。

この卑屈主義、卑屈的習性を根治しない限り、それがおのづから根絶されざるをえないほどの眞なる、全い、大きな原則意識を新たに所有しない限り、興國など想ひも寄らない。興人なくして興國はありえないからだ。しかるに、卑屈主義的政治原則は興人主義の敵だ。國賊といふいまはしい名を折典的に眞に値ひするものがあるとすれば、その黑表のなかには、その卑屈主義的、反人格主義的政治原則が、實に々々、濃く、太く、大きく書かれてある。

例へばいはゆる治安維持法案を見よ。そこには、或ひはそこにも、それの影は絶無か。その法案の場合に於ても、問題の生命點は第一にそこにある。

愛國は愛眞、愛善、愛正の一適用にほかならぬものでなくてはいかん。わが現在の政治家と政治常識とは、この自明理を見なほすべき理由を持つ。

教育はそれの倫理的原則部分に於て國營、倫理學說はそれの國民生活的、殊にもそれの政治生活的適用部分に於て同じく國營だから、教育者自身、倫理學者自身、またそれに迎合することを本意としてゐる概狀だから、なにが眞、なにが善、何が正かを知る方法を、自己の小學校以來の被教育内容に問ふことに求めたり、かゝへ儒者的學者や先生の言說に照らすことに求めたりすることは徒勞だ。それはたかゞ、ウソのうは塗りとしての增罪的効果を持ち得るにすぎない。成長した自己の、純眞赤裸の判斷力及び思考力を信頼して、物の道理を靜かに篤と考へて見ることが、そのためのなによりの方法だ。わが現在の政治的愛國には、考へずに信じられた、考へさせずに信じさせる部分が堪へがたい程度に甚大だ。わが現在の政治家及び政治常識にむかつて、明徹した原則意識、人生の大道の意識を確實に所有することを要求する理由は、これの未完成はおろか、それのほとんど全然的未着手にある。知覺の民、現象の民、そして根本深的識力と觀力に缺けた民で、われら日本國民はいまなほ、或ひはすくなくともいまは、あるといふことを、政治的日本の

國內現代的政治へ努力及び[illegible]、政治及び現在の事實について見るに從つても、[illegible]に[illegible]にせうなる。

わが現在の政治が、もつと科學的、綜合的に責任化せられ、また原則觀に於て、現代の科學的說明としてはそれ以上出り進むことは出來ない程度にまで徹底させられる必要に、ほぼ上に說いた通りだが、これは、同時に、出來るだけ綜合的なものである方途に、國民の政治構想力及び組織力によつて進化させられねばならん。

實行が關する限り、政治よりも綜合的である必要を假計に持つものはない。それの外延關係が第一にこれを說明する。英語のいはゆるステーツマンシップの如きも、これを出來るだけ有意義に解するならば、それの主要性質は綜合的であることだ。出來るだけ充分に綜合的であることは、社會がどんなに進化しても、依然として政治の一根本要件だ。

社會的存在の各部分に、多少の本質的意義の顯在または潛在を豫想してそれを探求し、そして發見し、それを材料とする協力的一全體を構想し、それにむかつて現存の社會的全存在を仕事づけることが政治の方法でなくてはならん。この關係上、政治は、社會の成長と共に、社會の成長が可能である程度に應じて、常に一層包括的に、いはばまた寬大的になる必要を持つ。しかし、包括的とは單なる布呂敷の作用のかたちに於てのそれでは勿論ない。またその寬大的も、無條件的綱紀廢滅をば勿論意味しない。

外政上の多少の積極望と、內政に於ける參政權分配の發達の見込が比較的顯著に現前した機會に、國民の政治心は自然に活潑、豐富であるに相違ないが、私としては以上書いたやうな事をも考へる。

農村振興の社會的新基準と農業、農民、農村の三問題

中澤辨次郎

一、農村問題とは何乎

農村振興の聲は全國到る所の農民から叫び出され、今やこれが中央都市に集つて一國の輿論となり、轉じて政黨の政綱中に織り込まれ、更に政府の重用政策の一にならうとして居る。此の時に當りて農村振興に對する新検討を遂げ、その適路を明かにするのも決して無用ではあるまい。

所で農村振興に對して論及せんとせば、先づ順序として我國現下に於ける農村問題を一般的に検討するとの必要を感じる。何んとなれば農村振興と云ふのは、世の中で一般的に論じられて居る農村問題の對策であり、更らに一歩進めて論ずれば、農村疲弊と云ふ事實を前提として、それを解決せんとする對策に外ならないから、農村振興策を論じやうとするには、勢ひその前提たる農村問題から論及しなければならないと云ふことになる。

扨て然からば我が國の農村問題とは何を意味するか、私は此の問に答へる前に農村問題そのもの丶字義を解明して置き度い。實を言ふと今日一般に論じられて居る農村問題なるものは、一種の新聞語であると言つて差し支へない。新聞と云ふ偉大なる流行語製造機關に依つて、喧ましく唱へられ、農民と共に和し、學者亦此の新聞語に引き摺られた形ちになつたのが、我國現下に於ける所謂農村問題である。從つて專門家は兎に角として、一般の人は農村問題が何物であるかをハツキリ會得しては居ない。何人にも一通り解り切つて居る問題であるかの如く

思惟されて居乍ら、その實はその概念さへも解つて居ない。特に驚く可きことには、此の問題の如きは可なりハッキリ意識して居る者の如く思はれて居る社會學者、經濟學者、特には此の方面の專門家である農政學者の間に於いてさへ、此の問題に對する明確な概念がないと云ふ例を見せ付けられた。其處で私は今更ら六菖十菊に類せるの嫌ひはあるが、最初先づ農村問題に對する概念を明かにして置き度いと思ふ。

二、學者新聞熟語に走る

今日多くの人々は一口に「農村問題」と云つて居て、此の中には小作問題も、農業問題も、農民生活に關する問題も、農村衛生、農村計畫に關する問題も、乃至農村教育、農業教育に關する問題も、移民問題も一切、合切一つにして論じ合つて居る。然し乍ら斯樣な樣々な問題を一つにして論じて居る所から、福田德三君邊りをして、『農村問題が混沌として居て、其の本體を知ることが出來ない』と嘆ぜしめたり、亦『農村問題を論ずる論者の頭が混沌として居る』と思はさせる餘地を與へたり、更に進むでは彼一流の獨斷たる『農村問題を解決するの途は、農業を資本主義化することにある』等と、彼亦自分の頭が此の問題の前に混沌として居ることを自白して居る。農村問題を解決するに農業を資本主義化することが必要である等と云ふのは、途轍もない迷論であると同時に、彼の學者的研究價値を落すことにも相當するから、失禮乍ら斯うした迷論に耽つて居る學者達に一道の光明ともならば幸であると言ふ考へから、筆の序に此の點を少しく解明して置き度い。

私をして率直に言はせるならば、我が國に農村問題なるものはあり得る。然し乍らその農村問題の具體化したものは、一般の考へて居られるやうな性質のものではあり得ない。少くとも一般に考へられて居るやうな、非組織的な農村問題は、今日の研究問題の對象としては、早くも更らに組織化され分科化して終つて、別の名目の下に具體化した問題となつて居り、今日に於いては漠然たる農村問題は、殆んどあり得ない。假りにそうした問題があり得ても、それは今の所さして具體化した問題とはなつて居ない、と斷言するを憚らない。

恰かも今日漠然と言はれて居る都市問題の裡に、工業問題、商業問題（若しありとすれば）、勞働問題、住宅問題、道路下水問題、都市衛生問題、食糧品供給市場問題及び其の他が包含されて居るとしても、實際の專門的研究問題としては、都市問題と勞働問題とは混同して論ずることを敢へてして居ない。勿論都市社會問題と言へば、その中には當然勞働問題を廣義の意味

之に於いて取扱ふが、都市問題と呼ぶには、[illegible]で言ふ[illegible]に於て農村問題を別に區別するのが普通である。

之れと同様に農村社會問題と言へば、此の中に小作問題を取扱ふが、單に農村問題と言ふ場合には、その中には小作問題を區別するのが普通である。從つて今日農村問題と漠然言はれて居る問題の中には、可成り種々雑多の問題を非科學的に取り扱ふて居るが、本來は農村問題と言へば、恰も都市問題の中に於いて都市計畫問題を指摘し得るやうに、農村計畫問題を指して居るものと思へば、さしたる間違ひはない。少くとも「村」と云ふ自治體の上に起こる、公共的方面に關する問題を指して居る。從つて今の所謂農村問題と云ふ概念の上の問題は、農村に起つて居る他の具體的問題の爲に、一つ一つ分科化して、それぞれ一つ宛の具體的問題となつて我々の當面に現はれて居るのである。從つて之れを研究して行くものは、分科化した問題にそれ〲統轄と秩序とを與へて、之れを井然たる理路の下に科學的研究の對象とすることを努めなければならない。

苟も堂々たる農政學者が新聞熟語の鼓吹に和して、それに追隨するの所論は取る可きではない。福田德三君並に那須皓君が『改造』紙上に於いて新聞熟語に走らせられ、市井でよくやるドン栗の脊競べ論を擬し、苟も問題の根核に觸れることのない實際の論議をやつたが、何れも起き上つて[illegible]、中[illegible]一社會的地位に鑑みて我々の云ふ所以である。

三、農業　農民、農村の三問題

我國現下に於いて一般的に稱呼せられて居る農村問題は、大體三つの重要素から成り立つて居ると云ふことが出來る。之れを鮮明に言ひ表はせば、農業、農民、農村の三つの主體の上に起こる問題から構成されて居る。少くとも此の三種の要素が織り込まれることに依つて一般的に言ふ農村問題が形成されて居るのである。之れを更らに我々の研究的立場から分科化して言へば第一は農業と云ふ作業そのものゝ上に起こる問題を主體とし、第二は農民そのものゝ上に起こる問題を主體とし、第三は農村(と云ふ特定の場所にある自治體)そのものゝ上に起こる問題を主體とする。此の三種の主體を中心として起こる問題を混一して農村問題と稱して居るのが一般である。

然し乍ら我々の立場から言へば、之れ等三種の主體を別にする問題は、その間に一脈の有機的聯絡は認めるが、混然として之れを一種の農村問題の中に包括することは出來ない。農村問題と農民問題とを分化し、農民問題と農村問題とを分科し、同時に農村問題と農業問題とを分科して論及せんとするものであ

る。即ち問題の主體を異にすることに依つて、別箇な部門を設け、その本質を明かに認めて論及を進める者であるから、福田君の如く農村問題の本體を見究めるに、決して戸惑ひはしない。從つて今頃此の問題の本體が解らない等と言つて悲鳴を擧げるの必要も認めない。

今日農村問題に對して何か論じやうとする位の者は、大マカではあるが、此の位ひの問題に對する整理をして、之れに處するの覺悟がなければ、徒らに問題を紛糾させるに止まるから、此の問題解決の將來の爲に手を引くが宜しい。

新聞熟語である一般的に言はれて居る農村問題の如きも、斯くの如く問題を一つ一つ整理し、分科して論及するとに依つて初めてその本體乃至本質が分明する。即ち一般的に言はれる農村問題の裡の農業と云ふ仕事そのもの丶上に起こる問題の本體は何かと言へば、農業經濟問題であるが如きそれであり、亦農民そのもの丶上に起る問題の本體は何かと言へば、之れを縱に論ずれば農民の生活問題であり、之れを横に論ずれば農民と云ふ「人」と「人」との關係に起る社會問題、特に小作問題であり、更らに亦農村そのもの丶上に起こる問題の本體は何かと言へば村と言ふ自治體範用上に起こる問題のそれである。此の外の問題は今の所、此の本體に附隨的の問題であつて、本體の解決することに依つて、その支體の問題は自ら解決され可き性質のものであると言つて敢へて過言ではない。

斯くの如く問題を分類整理することに依つて、我々は敢へて那須浩君が言ふ『農村問題は文明問題である』と云ふやうな逃避的論樣を取るの必要はない。農村問題が漠然とした『文明問題』で適切に說明出來るものなら、之れを更らに農村問題は人類進化乃至社會進化の一過程上に於ける問題であるに過ぎないと言つた方が、更らに大きく更らに適切に問題を逃避的に漠然化し得るであらう。此の漠然化の論理の尻を(門外者であると自ら言ふ)喧嘩の好きな福田君に抑さへられたのも亦所以ある哉だ。

今日我國で一般に言はれて居る農村問題は、斯樣な實際放れのした文明問題であると說明するには、餘りに現實的な問題であり過ぎる。私は之れから努めて逃避的論樣を避け、なる可く現實の問題として所謂農村問題を解剖し取敢にその對策を討して見度い。

第一、農業問題の檢討

我々人類が生活して行く上に於いて、農産上の生産物たる穀物を主要食糧として居り、且つ副食物の大部分も亦それの生産

[illegible]

[illegible]なければ[illegible]

し得ない關係に置かれてある限り、農産（[illegible]）[illegible]を増すに要する農業の將來は、人口の増加するに從つて益々その使命が重大となるから、その前途は次第に發達となるであらうことが想像される。假りに一歩譲つて、科學が現在の我々の頭では、想像することすら出來ない程、大なる進歩を遂げて、我我日常に要する主副の食料は云ふ迄もなく、その他衣住に要する總べての原料までも製造することが出來るやうな所謂科學萬能の時代が、若し來るものと考へれば、其の時は勿論、現世界の各地で經營されて居るやうな農業は、其の科學の威力の下に立ち所に征服されて終つて、完全にその跡を絶つに相違はない。然し乍ら主として無機的第一次生産に携つて居る現在の科學工業が、有機的第一次生産たる農業上の生産物に等しい製造をなし得る時代が來るとは、今の人智の程度の下に於いては、容易に想像することさへも許るされない。從つて科學工業が農業に入り換はり得ると云ふことを前提に於いて、今日の農業を考へることは、今の所、あまり必要はない。果して然らば農業に考へた農業の現在並にその將來は、一時的の消長はあらうが、恒久的には決して悲觀すべきではない。

[illegible]ても[illegible]出來ない。[illegible]日本に於ける現在の[illegible]立場に置かれてある。[illegible]濟的に行き詰つて居る。私はその理由を[illegible]い。

（一）

我が國が農業國として、千年に近い歴史的な習慣（特色）を持て居ることは、世界的に隠れもないことであるが、同時に我が國はその反面に於いて、農業上に於ける後進國としての經濟的悲哀（弱點）を有して居ることも自認せねばならぬ。[illegible]此處で重用な考へねばならぬことは、後進國の農業に、新進國の農業より常に國際的關係に於いて、大なる劣勢を持つて居ると云ふことである。而も大なる統制を受つて居ると云ふ點である。此のことは今日の農政學者が明かにこれを指摘して居り、本質に於いて、我が國に於ける米が外來の統制を受け、雜穀が國需方面の雜穀に牽制され、綿、繭が國際市場のものに牽制されて終つた歴史のあるが如き、如何に[illegible]を證明して

居る。此の顯然たる國際的にして、而も歴史的事實は　當面少しも休止することなく　刻々として今日尙ほ我が國の農業を脅威し、所謂農政學上の研究題目たる『農業恐慌』を惹起せしめ　時々全國の農業界を振撼して居るのである。農作の當年若くはその翌年に於いて、地主階級により關稅引上げ若くはその復活運動が熾烈に起こされるのは、正に此の問題の影響の結果の一端の例を適示するものに外ならない。

惟ふに我が國の農業が　斯くも新開國の農業に脅威される所以のものは、我が國に於ける農業上の生產費が　餘りに多く懸り過ぎると云ふ點に、その根本的原因を止めるのである　生產費が懸り過ぎるから從つてその價格が高過ぎる。高過ぎるから廉い新開國の農產物が　關稅といふ障壁を突破して浸入し來る　少くとも機會さへあれば何時か浸入せんとして待ち構へて居る　此の爲に我が國の農業は常に外國の農業に牽制されて、その產物の如きも　農業者の所望するやうな利益を得ることが困難となつて居る。果して然らば　關稅の障壁を更らにより以上高く設備することに依つて　國內の農業保護策を講ずれば我が國の農業を完全に保護することが出來ると云ふ論者があるかも知れない　議論的る結論である　關稅を引き上げることに依つて外國產の農產物が國內に流入することを防ぎ、以つて今日の農業を保護すれば　國民全般の必要とする食糧其の他を自給し得る途があるかと云ふに、それは決してない。少くとも我が國の如く人口が過稠で、一町步當りの耕作が約九人內外の人口を給養しなければならない割り宛てになつて居る國に於いて、それは全然不可能であると云ふことが出來る。それも國民全般が今日以下に生活して、馬鈴薯、甘藷（此の兩作物は一反當りから生產し得る總カロリー高が、他の各種の農產物に比較して二三倍にも上つて居て最も大である）を常食とすることを厭はず、養蠶の如きも全廢し、桑畑を變じて專ら食作物を栽植すると云ふ非常手段を取るならば、或は食糧丈けの一時的自給は可能であるかも知れない。が斯くの如き非常政策は平時に於いて行ひ得るものではない。よし平時に於て行ひ得ても一時的自給手段であつて　年々石川縣か福井縣に相當する一縣宛の人口を增加して居る現勢にある我が國に於いては　斷じて恒久的の手段として取ることは出來ない。斯くの如く考へれば關稅の障壁を徒らに高くして、農業保護（現在の國際狀態から言へば地主保護）策を取つた所で、國の必要とする物資は國內で自給し得るものではない。從つて出來る丈け國內の農業振興策を計ることは勿論必要であるが、孤立的食糧自給政策を立つることは、國家百年の大計を誤るものである。少くとも現在の如き小作制

[illegible]
く許可することは困難である　[illegible]には[illegible]
ては如何に農業を保護することが必要であつても　二つの[illegible]
制限に關税を引き上げて、外國の農業の脅威を取り除く得ない。苦るしい經濟立國上のヂレンマがある　現に此のことは農業者以外の者の產業政策上の見地からも　常に國家に向つて有力な運動が試みられ、地主運動とは反對なる關税引き下げ、若くは撤廢運動が斷續的に行はれて居る事實に徴しても　外國農業の壓制を防止することの困難であることが覗はれる

（二）

第二に我が國に於ける農業が經濟的に行き詰つて居る一例として、我が國の農業經營の規模に就いて考へて見度い。

由來我が國は地形が宿命的に狹少である。其の上に地上の大部分は山嶽に蔽はれて居る。今之れを土地の面積に徴しても、我が國の内地總面積は、參謀本部調査に依つて三千八百八十七萬四千町歩弱あるが、農業用耕地は此の内の僅々一割六分の六百十四萬町歩（農商務省調査）ある丈けに過ぎない。此の外將來擴張し得る耕地の見込が約二百萬町歩に上つて見るが、三千年懸りで六百萬町歩强の土地を擴張し得たに過ぎない、過去の

[illegible]
として、[illegible]
[illegible]に約一億の人口を[illegible]して居る我が國の現[illegible]すれば
[illegible]くの如き耕地擴張の[illegible]たる[illegible]に、決して[illegible]
地擴張[illegible]上はならない。假りに人口の増加率は現在の[illegible]人に付き十一人内外の増加率だ、將來漸減して行くものと推定しても、耕地の擴張されるに就いては、耕作限界にある耕地をも經濟的に可耕し得る經濟的理由が新たに發生する事を必要とするのであるが、此の理由は前項に於いて述べた「農業恐慌」に依つて、時々その發生し得る事情が釀出される。斯くの如く有來ると、我が國全體の絶對的耕地面積は今後國家並に民間の努力に依つて、今日以上擴張されることがあつても（實際に於いては一方に國家の開墾政策としての助成法があるにも拘らず、小作問題、並に農業全體の經濟的不利なる状態から、現耕地でのものが放棄されて、荒廢化されたり、或は都市文化の進展に伴ふ、住宅、工場等の建物敷地並に鐵道、河川、道路等の敷地に潰廢される面積が、開墾面積に比適して居る……最近一兩年の状態では）人口に對比する相對的の耕地面積は、今日以上擴張することは仲々容易の業ではない。

果して然らば現在我が國に於ける耕地面積は一農家當り約一町一反歩前後に及んで居るが、之れ以上一戸當りの耕地面積を擴張することは至難であると云ふことが解かる（假りに現在の農業者が經濟的理由から今日以上激減して一農家當りの耕地面積が増加することがあつても、國民全體としての一人當り耕地は増大するやうな氣遣ひはない。）

由つて立論の基準としては、現在一農家當りに割り付けられて居る耕地を以つて、農業經營の規模を論じても、決して妥當を缺いては居ない。所で問題は現在の一農家當りの耕地面積であるが、均分すれば前記の如く一農家當りの耕地面積は一町一反弱であるが、此の開耕地の分配が必ずしも左樣に均等には行はれて居ない。從つて大部分の農業者は五反未滿乃至一町歩未滿の耕地を耕作することに依つて生計を維持して居るのに過ぎない。左表は即ちその一般を表示するものに外ならない。

五反歩未滿の耕作農	三五・三二％
一町歩未滿の耕作農	三三・五〇％
一町以上の面積耕作農	三一・一八％

即ち全體の約七割までは一町歩未滿の土地耕作者（大正十一年末現在）を以つてみたされて居る。殊に驚く可きことには、北海道の如く内地とは全然事情を異にし、三町歩以上五町歩未滿の耕作農が全體の二割五分一九を占め、五町歩以上の耕作農が三割三分七一を占めて居る（寒地故内地に比し極めて人力的に粗放農である）特別事情の下にある地方を包含する全國平均の耕作反別狀態が前記の如き有り樣であるから、北海道を除外した内地の一戸當り耕作反別が如何に狹小過ぎるかは想像に餘りあると思ふ。假りに北海道を除く全國農業者の七割までが、約七反歩の耕地を五人の家族（一農家當り人口は國勢調査の結果に依つて五人一分）で耕作するものと見做し、一反當り二石の米（計算の便宜上田と見做し）を收穫し、一石當り五十圓に販賣し得たとしても、全收穫金に投下資本を少しも差し引かないで、七百圓であるに止まる。此の外裏作として悉く麥作が出來るとしても、之れが收支計算をすれば農業者に少しも利益を齎す餘地はない。現にそれが證據には麥作（小麥を別とする）は年々耕作經濟上、引き合はぬと云ふ理由の下に、減少しつゝある事實が何よりの證據である。斯くの如く觀ずれば田の裏作たる米の收穫は農民唯一の收入を擧ぐ可き途であり、而もその米を一石當り五十圓と云ふ高價に賣り拂ひ得るとしても、彼等の全收穫は七百圓に止まるに過ぎない。此の内から肥料代を拂ひ、農具、農舍費、土地資本に對する利償並に公課負擔等を差引く時に、一石當り五十圓に賣却した場合であつても一反當り三十

[illegible]

みなば、日本の農[illegible]て居るかの[illegible]ことを[illegible]分なるものがある。[illegible]の大部分（即ち七割近く）は經濟規模が狭小過ぎて極めて困難なる經濟的立場にあることが了解されることゝ思ふ。

（三）

第三には我が國の農業は、その經營形態が少くも資本主義化されないで居るに拘らず、經營の基本である土地だけは資本主義化されて居る。即ち全國六百十萬町內外の耕作の內その約半數なる二百八十萬町步の耕地は地主の手許に兼併されて居つて、全國に渉る三百七十萬の小作農階級（大正十一年末現在）は收穫の平均五割五分六厘（農務局調査に依る）を土地資本の下に回收されて居る。のみならず彼等は、農業經營の果實たる農產物に對して、極端なる市場支配を受け、自己の生產した果實に對して日に日に夫れに價格付ける機能を奪はれて居る。例へ農業者が如何に大なる努力を拂ふて米を生產しても、一度び市場に現はれて商品となれ[illegible]

[illegible]經濟的接觸者であれば、此の商品取引に於いて、[illegible]の自由を獲得出來るが、今日の如き所謂[illegible]階級の多き、小資力者の群生であつては、[illegible]斯くの如き經濟的地位の獲得は不可能である。從つて自己の生產物たる[illegible]に對して、資本主義經濟制度の下にある商品市場支配を受けるに止まる。

即ち今日の農業者の多くは農業經營の基本たる耕地は資本主義化されて地代たる名指の下に過當なる使用料を徵收され、其の生產物たる果實は資本主義の[illegible]機關たる市場に於いて商品支配を受け、一面に經濟的[illegible]（[illegible]搾取）を受けて居るのである。夫れと合はせるに外國輸入物の[illegible]を受けることゝなる。今日の農民は[illegible]の經濟的[illegible]に依つて、所謂資本主義制度下に於ける[illegible]を受けて居るものに外ならない。斯くの如き經濟的環境に於いて、僅に日本の[illegible]

經營が行れる程、經濟的餘力はあり得ない。我が國の小規模農業が次第に之の經營困難に陷る亦理の當然とす可きではないか。

四

第四に我が國の農業が　諸外國の農業の如く、資本主義化せる經營を行ひ得ない缺點のあることを檢討して見度い。一般農業は世界を通じて商工業の如く之れを徹底的に資本主義化することに困難なる共通の點がある。それは

第一、農業は天候の支配を受けることが商工業より特に甚大であること。

第二、農業は季節的にその繁閑の差が甚大であつて、之れに適當なる副業を織り込むにあらざれば、勞力運用上に至大なる不利を作ること。

第三、農業は收穫漸減の法則に支配されること甚しく、商工業が大體に於いて收穫漸増の法則に支配されるものであるのとは事情反對であること。

第四、農業は商工業の如く資本を縦（即ち機械等を利用して集中的）に利用し得る餘地が尠く、横（分散的）に利用することが多きこと。

第五、農業は作業が工業の如き同種作業に對し習練的分業が行はれず、時々場所を移動することが多きこと。

第六、農業は土地の肥力並に天候の良否に待つ所大なる爲め生産の果實を豫め測定し難く、從つて資本主義的組織利潤獲得計畫を事業着手以前に立て難きこと。

第七、農業は商工業に比して資本の一廻轉が極めて長時間を要し、且つ利潤を得ること尠なきこと。

等の特異の點があるからである。然かるに我が、日本に於ける農業は、更らに地理的支配を受けることが甚しい。之れを例へすれば山嶽丘陵に富むで居る結果、耕地は甚だ狹い面積に渉つて傾斜面に跨つて居り、且つ其の結果として耕地面積を小區劃となす必要（田に於いては特に水平に保つ必要上此の弊が甚しい。）があり、更らに水田が多い結果、水中に漬つても差し支へない機械を發見するに困難を感じる。從つて我が國の農業經營を大經營組織とするには、何うしても一面に於いて機械利用の程度を增進することの必要を生ずるのであるが、水中に漬つても差し支へない特種の機械等をも工夫した後でなければ、俄かにそれに着手することすら出來ない。

農業には一般的に言つて、商工業とは特異の事情があるにも拘らず、更らに我が國の農業に於いては、前記の如く地形上尚ほ更ら、特異の事情がその機構を支配して居るから、例へ資本

おくべき[illegible]

化することは[illegible]なる[illegible]の下に[illegible]

は前述の如く、經營形態の點に於ても[illegible]のものと、經營の果實たる生産物丈けに對しては、資本的に資本主義化し行はれ、少くとも資本主義的經濟制度の支配を受けて、その利潤の大部分を彼らに所謂合法的手段の下に搾取されて居るのである。此の點から言つても我が國の小規模農業は、その前途に於いて經濟的利益の伸張を計る可き途を阻止されて居るものと見て差し支へない。

（五）

第五に我が國の農業は更らに一層産業革命の齎せる結果に依つて直接に大なる經濟的脅威を蒙つて居る實狀を述べて農業問題對策の研究の資に供し度いと思ふ。

從來農業は自給經濟の底深く潰つて居た産業であつた。恐らく十八世紀末に於いて歐洲を風靡した産業革命が起らなかつたなら、眠るともなく、醒むるともなく、太古から現代へ、現代より更らに永遠の未來へと、自給經濟の底深く眠り續けて行けた産業であつたかも知れない。何故ならば農業は只それだけで、それに從事する農業者（が欲望の增進乃至その刺戟を受け

[illegible]

[illegible]

然かるに十八世紀末、[illegible]來たる機械と蒸汽の發明は、その[illegible]を[illegible]義的產業の根本を根本から覆へし、[illegible]動的資本經濟、といふよりも寧ろ他動的資本主義經濟の[illegible]を迎へしむるに到つた。此處に於いてか從來久しく自給自足的産業として、個人を經營して居た農業の基本組織に一大破綻を生ずるに到つた。

一切の農業問題は此時から出發する。少くとも我が國に於ける新らしい意味の下に起つた農業問題は、産業革命の餘波を受つて俄然一大振動を起すに到つたと言ひ得る。近頃朝野に八釜しく論じられて居る農村救濟正しくは農業救濟に其れの對策として論ぜられて居る農村（前同）振興問題の如きも、之れを唯物史觀的立場から論ずれば、其のホンタウの根據は實に此處に基因して居ると言ふ事が出來る。故に私は之れより暫く其の推移を追ふて農業經濟形態の變遷を調べるであらう。

第一に擧げねばならない例は、産業革命下に於ける産業形態の一大變動であらう。即ち一般經濟進化の過程に於ける資本主──手工業の、工場工業化即ち機械工業化の例は、產業革命に

於いて最も容易にこれを見ることが出來る。

從來自給經濟を株守して居た農業と云ふ經營形態の範圍は極めて廣いものであつた。例へば米麥を主とする穀作、養蠶、養畜、養魚工藝用作、茶樹、果樹及園藝作、植林等を取り合はせることに依つて、兎も角或る程度の經濟的獨立生活を營み得る形態が備つて居た。此の外、交換經濟に待たねばならぬものは、鹽並に砂糖（之れは南國地方では自給出來た）の少量と特殊工業上の生產物に依つて製造される家具並に裝身具及び農具等に過ぎずして、而も之れ等は全生活必需品の總計から言へば、極めて少量に過ぎなかつた。斯くの如き狀態で農業はそれに從事する農業者に多年自給經濟主義を持續せしめた。勿論之れには、上に鎖國主義、消極主義を施政方針として居た封建政府の指導支配の原理が強く働いて居たことを、見逃すことは出來ない……。

兎も角斯様な狀態で、自給經濟主義を主として居た時代に於ける我が國の農業の裡には、棉花を栽培することも包含され、之れを紡ないで織つて着ることさへも包含されて居た。其の他、麻を作つて衣を染め茶を作つて喫んだ、煙草も作る。酒も作れば、味噌も、醬油も、油も乃至紙の如きものさへも製造し自給して居た。況んや耕ぞ磨での操作、穀物の搗白、製粉等の作業は、耕作の間々に、悉く自家用勞力を以て處理して居たのである。

然かるに此の農業形態が最近何う變遷して居るかと言ふに、棉花の栽培は最初に述べた新開國の農業發展を受けて、一とたまりもなく大恐慌を來たし、今日に於ては大體に於いて生產費の廉い印（度）綿に驅逐され、更らに之れを紡ぐことは紡績會社の手に奪はれ、織ることは機械會社の手に奪はれ、更らに最近の新らしい現象としては、裁ち縫ひすることさへも、專門の裁縫師の手に奪はれ、農業者の子女の手には裁縫の完全なる能力のある者が、極めて僅少となつて終つた。次いで麻亦、印棉と同一運命に陥り、最初印度麻に生產費の關係で驅逐され、更らに今日に於いては、その印度麻も次ぎに起つた化學工業上の生產物たる化學染料に完全に征服されて居る。茶、煙草亦一般の農業より分離して專門の營業機關の手に移り、米、麥、豆は作つても酒を作ること、味噌、醬油を作ることは、それぐ專門醸造業者の手に奪はれ、菜種油の如きは最も早く、石油鑛業に驅逐され、現在に於いては更らに電氣事業の手に其の役割が轉嫁した。此處までは如何にも家內工業乃至手工業の、工場工業乃至機械工業化の一過程として、亦餘儀ない農業の敗北として批判するとしやう。然し乍ら產業革命の波は其の勝手を更らに細かい所にまで働かして農民の手から、其の業態の一部分を

[illegible]

このやうに[illegible]

行はれて行き、[illegible]ことと、所を取つて使ふこととの、今や

それぐの經營設備のある専門事業に行はれて居る。斯く云ふ

くして指揮せんか、行はれて行くものは別の農業形態中の一部分だけに止まる可き問題ではない。然る可きは、我が日本の現在に於ける農業本態とも言ふ可き、穀物乃至その副態とも言ふ可き[illegible]、今や大なる脅威を受けて居ることである。少くともその傾向が表兆して居ることを感知しなければならない。

私は此の點を更らに項を改めて検討して見たいと思ふ。

（六）

第六、我が國の農業はその副業に屬する部分、といふよりも第二次的生産者しはその目的に供す可き原料生産に屬する農耕が、前述の如く單に農業たるの地位を失ふて、他の産業組織の下に統制されて行く許りではない。農業本態たる穀作農の地位も決して安心は出來ない。更らに現在の農業副態として、國家の産業經濟上最重用の地位にある養蠶業が、一大脅威の下に置かれてある。今例を農業の本態である前者に取つて検討して見るに、假りに米の石當り生産費を、今の普通農業經濟學が教へ

[illegible]

[illegible]された[illegible]、この[illegible]すれば[illegible]に

つて居る。米一石に對する生産されて居る[illegible]に

企業利潤が認められない程、高い生産費を要する[illegible]は、世界何れの地方に於いても發見し得られない。早い話しが我國に於ける米作は依然として地主本位の價値が重大の地位に置かれてあつて、この上に小作人の勞力除りに人爲的に引約となつて居る。一石の米を生産するに自作農で十五人、小作農計算では約三十人（即ち反當り一石の收穫と見て、その半分の一を小作料として支拂へば、石當りの小作農の勞力は自作農の倍となること）を要する。今勞銀一人當り、一圓と見積れば自作農計算で三十圓となり、小作農計算で勞力代だけでも六十圓を要する。故に私が今の農業經濟學の教へる所に從いて計算すれば石當り五十圓の生産費を要すると云つても、決して架空の計算ではないことが讀者に了解される筈だ。

然し乍ら一方外米の生産費を調べて見ると西貢、ラングン地方に於いては、石當り五六圓乃至八九圓であり、米國加州に於ける米の生産費でさへも、二十[illegible]圓である。[illegible]圓も此の地方の米は、日本人向きの[illegible]具備して居る[illegible]ではなかな

いない。斯くの如く生産費に於いて大なる差額がある以上、日本米が外米にその價格を脅威されることは言を待たぬ。唯だ現在の内米が僅かに之れとの競爭に堪ゆる所以のものは、關税の障壁（産地に於ける輸出税、及び消費地たる我が國の輸入税）があることゝ、味即ち傳統的嗜好の相違に待つ計りである。所が嗜好の點は麥類には全然問題とはならぬ。就中小麥の如きは内地産よりも寧ろ米國産の方が質が優良であるとさへ言はれて居る。斯くて麥類は味が問題でないとすれば、後の頼みの綱は單に關税と云ふ障壁に待つ計りである。然かるに此の關税は徒らに引き上げることを國策上不都合とする。何故なれば關税を引き上げることに依つて、國内の食糧品價格を引き上げることは、延いて勞銀を引き上げ、一般工業上進んでは農業上の生産費を引き上げるの結果を招致とし、産業政策上の不得策となる。假りに此の不得策を度外視するとしても、關税に依つて直接保護を受けるの階級は、生産に從事せずして、物納制度の恩惠に依る企業利得の獲得者たる、地主と云ふ一部の階級を利するの結果となるだけであるからだ。從つて當局が地主の傀儡であるならば即ち止む。何も然らずして國家の大局より施政方針を決定するものであるならば、無制限なる關税引き上げは斷行出來ない。果して然らば前述の如く生産費に於いて既に大なる差額がある以上、之れに例へ、産地の輸出税、商人の利潤、手數料、運賃、關税、仲介料、内地商人の手數料等を加算しても、尚ほ且つ外國産の穀物は安價であるに相違はないから、次第々々に此の脅威が加つて、終には我が國の農業本態に對して、大改革を促されずには居はない。少くとも我が國の農業本態は、今日の如く土地資本の價値を絶大に認め得さる可く、亦反當り三十人の勞力を要するが如き極端なる人力的集約耕作法は、近き將きに改革さる可き運命にあると斷言出來る。

次に後者の農業副業とも見る可き養蠶の前途であるが、之れ亦實に悲觀すべき運命の下にある。何んとなれば一貫目の繭を生産するに、十圓内外の生産費用を要すると云ふ。我が國の現在に於いて見る養蠶方法では、之れと同量を生産するに、此の半額内外で生産出來る支那の養蠶に、早晩國際競爭場裡に於いて驅逐されるは必定である。更らに恐る可きは今日世界各地で研究されつゝある人造絹絲工事が、漸々成功しつゝありて、今日までの缺點として居た耐火、耐水性の點や、強靭性の問題、色澤の問題、糸の細さの問題等が漸々解決されつゝあるから、斯くて絹糸と殆んど同性質の糸を化學工業の手に依つて一度び生産されることになれば、自然蠶と云ふ小さなる蟲の口より繭間に吐かれる糸の苦徒てて價格より、大機械の手よ

[illegible]
[illegible]一あ[illegible]
[illegible]る日が來るのに、餘りに遠いたくのことではあるまい。我々は現に過去に於いて、既に人造染料の門内に於いて早らい經驗を嘗めて居る。天然油が石油乃至電氣に依つて、於ける面の變へるのを見て來た。人造絹糸が天然絹糸に驅逐され得ないと何を保證に言ひ得られやう。人智特に科學的智識には無限の發達性がある。然かるに我が農業技術には科學工業を壓倒し得る進歩向上を予想し得る見込みが今の所吾人にはない。斯くて進まんか、我が國の農業は是非とも那業に驅逐され、次いで科學工業に驅逐され可き運命にある……と云ふことを何人に否定出來やう（此の項及び前項は拙稿大正十一年版『村落興業全滅論』參照のこと）

（七）

第七、我が國の各種農業は斯くの如く總ゆる方面から見て、經濟的に技術的に行き詰りつゝある。一つは國際的經濟干係に於いて、他の一つは國内に發達せる機械工業乃至科學工業の爲めに、……而も斯くの如き諸事象は我が國の農業に對して何を意味するのであらうか。

[illegible]
氣候、[illegible]
に、[illegible]
農業本意として[illegible]は、この[illegible]が
も[illegible]と云ふことが出來ると思ふ。少くとも、既に農家されることのない事實に於いて、今日の如く米麥乃至繭[illegible]ふやうに單純化した農業の經營でなく、米麥作養蠶は勿論のこと、麻、棉、茶、煙草其の他百般の日常必要品を自給し得た農業經營の方法には、各種の安全瓣が附隨して居たと云ふことが出來る。米作で不作な時なれば畑作で補ひ、畑作一失敗すれば桑作で補ひ、桑作で失敗すれば棉作で補ひ得る途が（も少し何らず）あつた。のみならず、各種農產物の加工作業をも自家に於いて營むで居た干係上、四箇的に起こる時間を調節して勞力の經濟を計ることが出來た。然るに今日に於いては前述した如く之れ等の便を總べて機械工業の手に奪はれて居る干係上、農業と云ふものは單に米麥を主とする穀作乃至養蠶を主要業務とする丈けに止まつた。勿論所に依つては果樹、園藝、畑作物の栽培が盛んとなつた地方もあるにはあるが、之れ等と雖も夫れ々々其の栽培を專門とする農業に轉向して行きつゝあるから結局では何せんとする經濟には決して何にしたい、卽ち今日の如

業は昔日の農業に比し、その業態が次第々々に專門化して來た。從つて昔日の農業は收益の途が「多元」であつたが、今日の農業は次第に「一元」化さんとしつゝある。然かるに農業が專門化すると云ふことは、單に收益の一元化を招致して危險である許りではない。農業本來の性質たる天候の支配を受ける率が甚大となり、且つ時節的に生ずる繁閑の差を益々增大する點に於いて、專門化することに依つて生ずる利益を相殺する丈けに止まらず、其處に大なる危險を醸す。今日全國到る所の農業者が、最早此の危險に得堪えずして、適當副業を探求するの急なる、此の危險の如何に大なるかを反面に於いて裏書きするものではあるまいか。

斯くの如く觀察すれば、今日の農業なるものは、機械工業乃至科學工業の發達に依つて、天候の支配を受けること最も多き穀作單一專門的乃至養蠶專門的となり、且つ國際間に於ける生存競爭域の最甚大なる貿易に之の本能的に制限を負ひつめられ、極めて危險性のある投機的事業化して終つたのである。昔日の農業は他の商工業に比し比較的に安全であつたかも知れないが、今日の農業は斯くの如く觀察することに依つて、少しも安全たる職業ではなくなつて居る。寧ろ商工業よりも資本回收時間の遲緩することに依つて、別言すれば失敗の回復至難き點に於いて、危險なる職業となつて來たと云ふことが出來る。農業の救濟する所以ある哉。此の農業の振興策を講ずるには、勿論商工業とは特異の政策を必要とする。と云ふことも此の點から發生するのである。

（八）

第八、我が國に於ける農業の各種行き詰りの實狀は、前記の如く大様七項に分けて論じた所に依つて、略々分明したことと思ふ。斯くの如くして其の病因が判明した以上、之れを治療する方法も夫れ〳〵讀者各位に於いて、案出することが出來るであらうが、今私の信ずる治療法を參考の爲め、之れより簡明に指示して見やうと思ふ。

前述の如き各種原因に依つて行き詰つて來た我が國の農業を振興するには、勿論各種の對策を講じなければならない。が私は紙面を惜む（誌面に限りがあるから）の必要上、大體に於て之れを應急的對策と根本的對策の二方法に分けて論じて見度いと思ふ。

一、應急的對策

我が國に於ける農業不振の狀態を回復するに最も焦眉の急を

[illegible]
い。然[illegible]
此の如[illegible]ことは、[illegible]することに相當する。而して其の生産費を低下する手段としては勿論生産費中最大費目に該當する部分に對して特別の手段を講ずる必要があるのである。

今我が國の農業の主體である米作に於ける生産費を例に取つて檢するに、最大費目に該當するものは、既述せるが如く、土地資本と勞力資本の費目であるから、從つて生産費低下の第一手段は此の二大費目を削減するより外に方法はない。第一土地資本であるが、我が國に於ける耕地の價格は今日に於いて、少しく高過ぎる。少くとも農業用の土地としての價格としては高過ぎる。往年好景氣の際は、反當り三千圓にも昇騰した耕地があつた。今日の如き不景氣時代に於いても、尚且つ千二三百圓を維持する所が稀れではない。全國平均價格としても六百圓になつて居る。假りに之れに對して五歩の利子を見積れば反當り三十圓の利子となる。一反の生産費に對して三十圓の利子が計算されると云ふことは、之れを米作として一石（平均我が國の米田は反當り二石内外の米が取れる）當りに對し自作農で十五圓の利子が加算されると云ふことである。更らに小地主計算及小作農計[illegible]

[illegible]ある。一石[illegible]圓[illegible]に、我が國に於いては[illegible]るを[illegible]生産費を低下[illegible]は、耕地の價格を低下する手段を取ることである。少くとも今日の全國平均價格の二分の一に低下したければ、我が國の農[illegible]に此の價格を維持することは困難、[illegible]に不利に陥つて、終には[illegible]常なる末路に終るに相違はない。然し乍ら之れが實行の方法に就いては、可なりの困難が伴ふから、簡單に論ずる譯には行かない。從つて今此處でそれを評論するの餘裕を持たないから、それは他の機會に讓ることとする。

第二は、勞力資本であるが、一體我が國の農業は餘りに人力的に集約的であつて、資本的に粗放であり過ぎると思ふ。米作一反當りの勞力が三十人も用するやうな實状であつては、到底農業を有利經營することは出來ない。從つて今後の農業は之れを逆に人力的には較々粗放的となし、資本的に集約法を取る可きである。勿論農業の性質にも依るが、假りに米作反當り三十人用する勞力は、其の三分の一に節約する。用ふる[illegible]三分一の十人内外に節約する手段を講ずるにある。此の方法には[illegible]

の如く一箇當り耕地面積を小區劃とせず、亦今日の如くその小區劃耕地を單獨耕作するとを避けて、共同的耕作を行へば、蓋して至難ではない。(それには勿論耕地整理促進策を講ず可き必要のあるとは言を待たない。現に此の實績は、新潟縣、岡山縣、福岡縣下等に於ける共同農業經營組合に於いて舉げつゝある。

斯くの如く土地資本、勞力資本に對し相當の節約的手段を講ずれば、我が國の農業は今日の生産費計上方法に依つても、その約二分の一に費目を低下することは決して至難ではない。斯くの如くすれば、日本に於ける農業と雖も、決して不利なるものではない。相當有利經營が行はれる。

次に應急的方法として講ず可き手段は農産物の價格を安定する手段を取ることである。出來ることとなれば公定することと勿論結構である。然し公定に對しては農業者に對して別にそれに依つて損失を生じたる場合の報償手段を定めて置かねばならぬから、取り敢へず安定する方法を講ずることである。その手段としては農業者に對し、共同販賣機關を設けさせ、以つて此の機關に公正價格の決定權を與へる。更らに此の機關を都市に延長し、今日の農倉販賣斡旋所の如き消極的斡旋に止めず此の機關が直ちに都市消費地に於ては、商人の關與する事に依つて利潤を網みされることのない、農産物市場を特定し、今日の米穀取引所乃至正米市場、雜穀市場のやつて居る仕事を此の機に包容すべきである。而して此の市場に於ては、少くとも農産物をして投機の具に供されることを嚴禁し、今日の市場に於いて見るが如き空賣買の餘地を止めざるとが肝要である。此の方法が完成すれば、資本主義的經營形態を取り得ないで居る農業上の生産物が、資本主義市場に於いて單なる商品として取り扱はれ、市場支配を受けることを避けることが出來る。少くとも農産物が生産費以下に低下して、農業者が損失すると云ふやうなことは防止されると思ふ。此の外應急的方法として論ず可きものは幾らでもあるが、一と先づ此の位ひに打ち切つて、次の根本的方法に移ることゝする。

二、根本的對策

根本的對策としては、農業經營形態を擴大することが第一である。而して此の形態の擴大されたもので基本となるものは、個人經營ではない。前項に於いて一寸論及した如く共同體である。共同經營でなければならない。即ち農業の如く自然の支配を受けることの大なる職業、季節的に生ずる繁閑の差の大なる職業、農閑期に於いて適當なる勞力消費の途なき職業、生産の果實を豫め測定出來ない或る意味に於て危險を意味する職業、

[illegible]つりに依つてのみ、初めて今日の經濟的[illegible]に[illegible]本來の目的を達することが出來るのである。勿論今日の農業者の如き、共同作業に熟練の者をして共同作業に向けるには、農業教育（農村教育とは異なる）に待つ所大である。然し乍ら今日の農業教育の如く、單なる技術的教育に終始して居て、大局的な社會的教育特に經濟教育を無視した教育制度に待つ可きではない。農業の技術的教育上より無視することは出來ないが、在來の單純なる技術的教育では何んにもならぬ。更らに科學的系統立つた技術的教育に進めなければならぬ。即ち單に農業上の技術に止まらず、例へば人造絹糸に對する教育、農産物を有機的に處理して今日の機械工業乃至科學工業に奪はれた部分を、再び農業と云ふ範圍の業態に取り入れ、以つて季節的に生ずる繁閑の差を調節す可き、有機的聯絡のある職業教育となす可きである。米に例を取れば今日の如く單に玄米を以つて販賣することを避け、之れを白米にまで搗白して販賣する。更らに進むでは菓子の原料、飲料（酒の釀造の如き、冬期の或る特定期間だけであるから、農閑期利用には最適の勞力調節法である）原料にまで進めて販賣する。蠶繭に例を取れば今日の如く單に繭

[illegible]云ふ作業の内に於いて行はれなくてはならぬ。

其の他凡べて各種の農業上の生産物を市場に出して販[illegible]に、而して消費者の手に渡すと云ふことを經營原則とし、[illegible]れば、農業の外業的の農産物がある[illegible]、特に畜産業の如き今日の農業と組合はせるに於いて、最も適當である。例を牛に取れば耕作の副産物たる飼料乃至農村工場製造後の副産物たる糟を以つて牛を養ひ、牛は排泄物たる糞尿を肥料に供して、牛の糞尿は大なる肥料成分はないと云ふが、之れを豚に置換すれば其の糞肥は土壤改良上偉大なる效果があるを肥料として[illegible]し、更らに牛の乳はその儘若くはコンデンスミルクとなし、又はバター、チーズを製造し、更らに牛の肉は罐詰にまで進めて販賣する。特に之れ等の有畜農業を經營する上に於いて、我が國が地理上有利の點にあることは、農業電化の極めて容易なる點にある。我國到る所山嶽丘陵に富み、且つ「水源」と「落差」を備へて農業者の手を待つて居る。唯だ遺憾に堪へざる點は、農業者が個人的に或程度源の夢を貪つて居る間に、之れ等の「落差」が悉く水電ブローカーの手に水利權を奪はれて、掌握されて居ることである。然

し乍ら之れと二絶對的に水力が農業に對して、その門戸を閉鎖して居るものと見做して排斥する必要はない。國家が特別の水電政策を講じ、水電専門企業者の權利よりも、實際に之れを活用して國家の富源を開拓する農業特にその經營主體、勿論此の場合の經營主體は今日の如き個人的經營主體でなく、共同的經營主體である。之れを特定的場所關係から言へば「村」と云ふ自治體、そうした法人格に對し優先權を與へ、轉じて農業共同經營體にその權利を運用せしむる手段を講ずれば、今日可なり水電ブローカーに依つて全國的に水電網が張られて居るが、彼等の手から或る程度までその水電網を解放するとも出來るし、亦た新たに水電事業を起こす餘地も生ずる。現に我が國に於いても、村若くは村の組合に依つて水電事業を經營し可なり好成績を收めて居る所が、長野縣の下伊那郡、並に神奈川縣の足柄郡下にある。唯だ之れ等の組合は現在の所、單に自家の燈用として電力を起して居るに過ぎないが、之れ等は將來更らに進めて耕作上に水電を利用し、前述の如き農産物處理上の動力として、電熱として利用する事になれば、初めて我が國の新農業は、科學的にもその形態を完成し、必ずしもその行き詰りを嘆ずるの必要もない。特に今日の農業經營に於て、有形消耗資本として高價を餘儀なくせられて居る金肥即ち化學肥料の問題の如きも、農業電化の進むことに依つて、空中窒素の固定をなし、之れを直ちに利用し得るに到ることも考へ得られるのであるから、何れの點より觀察するも今日の農業教育なるものは、徹底的に改革し、之れを科學的經濟的に進むる所の教育方針を樹立し、眼界を單に國内の事情のみに拘泥せしめず、廣く世界的ならしめ、農業の將來を世界的立場から、極めて大局的に觀察し、その商機を周知せしむる手段を講ず可きである。

惟ふに今日我が國に於ける農業の如く、各種の理由よりして、その經營形態を資本主義化することの困難なる事情の下にある農業をして、經濟學者ではあるが門外漢である福田德三博士の提唱するが如く、之れを強いて資本主義化する必要はない。勿論農業經營形態の個人主義化を計ることは、既述の如き理由から不得策であるか、共同經營化することを以つて必要とする。其の方法論は他日改めて別論したい）營利を企業經營の根本目的とする資本主義化を避けて、必要本位な經營、厚生本位の經營をなす可きである。由來農業は此の論の第四項に於いて述べてあるやうに、營利を根本目的とする資本主義化に對しては、先天的に相添ひ難き種々なる自然的人爲的事情を以つて居る。斯かる事情を人爲的に大なる犠牲を拂つて克服し、以つて資本主義化すると云ふことは、此の一點から論じても資本主義化

に於ける貨幣で資本的に經營せしむることとなるのである……に依つての資本主義化は困難である。

之れを要するに今日の我が國に於ける農業問題を根本的に解決するの途は、農業の資本主義化を計ることにあるのではない。資本主義の持つ特長丈けを取り入れて、農業經營形態の中に入れ、以つて農業が先天的に持つ自然的人爲的缺點を補ふことにある。例へば資本主義が持つ科學的經營形態、乃至資本主義が持つ經營の果實に對する統制機等は、勿論農業經營に取り入れて差し支へない。然し乍ら反面に於いて資本主義が持つ八天下式生產は農業には禁物である。八天下式自由生產、それもその生產目的が唯だ單に營利と云ふ一點に止まつて居るが爲に、其處には果實處分の上に於いて、偉大なる犠牲が支拂はされて居る。即ち全國の新聞紙一面の廣告を獨占するが爲に、萬金を投じて尙ほ且つ足れりとしないやうな販賣政策は、農業には斷じて取り入れることは出來ない。何んとなれば農業には例へ個人經營を排して共同經營に移つても、左樣な餘力もなければ、亦その必要も生じないからである。

此處に於いてか農業は、必要本位の經營となし、厚生本位の經營に邁進すべき特性を備へて居るものであると云ふことが出來る。此の外に農業經營の目的はなく、此の外に農業本來の振

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第二、農民問題の検討

現時の我が國に於いて八釜しく論ぜられて居る農民問題、農村問題の直接的目標は、農業そのものではない。農民そのものであり、農村に棲むで居る農民が自分の人と人との關係である。少くとも社會問題として論ぜられて居る場合の農村問題は、農民の社會關係、從つてその生活關係がその中心對象となつて居る。然し乍ら此處に抽象的に農民と云つても、農民は今も昔の如く農業を職業とし、而も農村に居住して居る關係上、勿論農業、農村の問題と分離して論ずる譯には行かない。否其れ等にはそれぞれ有機的不可分の關係にあることは、今更此處に贅言する迄もない。——（一般に農民問題と言ふ場合には此の種の問題をも悉く混一して居る）——

次に我が國の農業が自然的人爲的兩種の關係から、營利生產をなすに甚だ困難を感ずる事情の下にあると云ふことは前項に於て既に述べた。營利生產に不適當であると云ふことは、必然にその生產物の交換價値の低いものであると云ふことを意味する。云ふ迄もなく營利經濟時代に於ては、使用價値の高い……

を生産するより、交換價値の高いものを生産する方が、營利經濟の目的に添ふ最良捷徑である。然るに農業上の生産物は既述した如く、第一次(原始)生産である丈に、使用價値は頗る高い、(我々は今の所之れの供給を受けずには生活して行けない程そのものに貴重を感ずる。)がその交換價値は必ずしも高くはない。否寧ろ第二次生産たる工産物に劣ること數等である。多くの場合に於いて工産物は農産物よりその交換價値の高いのを普通とする。即ち粗製農産物より精製工産物はその市場價格が實際に於いて高いのはその常例である。故に第一次生産に携はり、粗製農産物を市場に供給して精製工産物を買ひ入れねばならぬ經濟的立場にある農民は、第二次生産に携はり精製工産物を供給する商工業者より、極めて不利なる交換經濟を營むで居るものであると云ふことは、此の點から考へて直ちに一般に首肯される所でなくてはならぬ。從つて今日の農民は、農業(少くとも今日に於いて見るが如き限局されたる農業)に從事して居るが爲めに、他の然らざる商工業者より經濟上甚大なる牽制を蒙むつて居るものであると云ふことが出來る。少くとも農民は前項に於いて述べた如く、その收穫物處分の上に於いて、價格の決定權を商工業者に奪はれ、市場支配を受けて居ることは否むことの出來ない事實である。抑々今日問題とされる一切の農民問題はその第一歩を此の點から發足して居るのである。今日の資本主義經濟制度の下に於いて、農民が經濟的に潤ほされる程度が極めて低いと云ふ點に問題の基調は横はつて居る。同時に此の經濟干係が必然に農民對都會人の政治干係となり、社會干係となり、生活干係となつて居る。

勿論此の點は獨り我が國の農民のみに限らず、我が國の農民と同樣な經濟的立場にある國の農民の悉くに、やはり同樣な理由を以つて充て嵌まる農民獨特の經濟不利の關係である。

斯くの如き經濟的に不利なる職業に從事して居る農民が、資本主義萬能、從つて營利生産以外に何等その生産目的を有さぬ經濟社會に於いて、次第に困窮するのも決して偶然ではない。實に我が國今日の農民は、その自作農たると小作農たるとを問はず、亦地主自身の言葉に依れば、地主それ自身すらも一般に疲弊し困憊し切つて居る。殆んどその生活に經濟的に光明がない。從つて前途希望がなく生色がない。簡單に言へば今日の農民は全て資本主義經濟社會に於ける被搾取者として、國際的にも國内的にも現時の經濟組織から二重の支配を受け、次第に窮乏の境地に追ひ落されて居る。少くとも日用必需に名を馳せる營利經濟が持つ偉大なる牽制作用に強く壓迫されて生活不安に陷つて居ることは否定出來ない。

以上は我國に於ける今日の農民問題を檢討しやうとする場合に於いて、問題の基本に根據的に働いて居る經濟關係を略述したのに過ぎないが、之れから段々農民の對外的及び對內的經濟關係、生活關係、社會關係、政治關係等が如何なる狀態にあるかを檢討して見度い。

一、

一個農民の經濟關係は極めて複雜である。單に人爲的關係に於いて前述の如き經濟支配を受けて居る丈けではない。自然的關係に於いても、これに劣らぬ經濟支配を受けて居る。之れが必然に前記の人爲的經濟關係と相俟つて今日の農民を窮迫せしめる大因である。例へば、今日の農民は農業を常職として居り乍ら、冬が來ると約三ケ月は殆んど失業狀態に入る。冬期は農民の失業期である。就業せんとする農民の手に冬の魔力は大なるブレーキを懸けて失職せしめる。僅かに南國地方の農民が此の脅威を免かれて居る丈けであつて、我が國に於ける大部分の農民は、冬期失業狀態に入る。彼の北陸東北方面の細小農が、冬期上京して都市自由勞働者の職を脅威するのは彼等が冬期の失業より生ずる生活不安を除去しやうとする唯だ一つの努力の現れである。斯くの如く季節的に惠まれざる職業にある者は、恐らく農民と其の生活に於て農民に之れに比するものはあるまい。

更らに農民が季節的に生ずる失業を、假令他部門に職を求め一上京等に依つて免れたとしても、彼等の職業は常時天候の支配を受けて居る。何となれば今の農業技術では、天候を左右することは出來ない。從つて如何に米價騰貴の前兆が發生し、假りさうであつても、米作は或る程度以上は天候任せである。殊更ら澤山取らうとしても一朝にして水泡に歸する憂ひがある。特に農民が營利の目的を貫徹するに不便を感ずる點は、農業過程を季節的に短縮し得ない點である。例へば籾種を蒔く時に米價が高くても、米價には變動がある。必ずしも穫り入れ期の秋まで高價を維持するとは限らない。從つて蒔く時高かつたものが、穫り入れて賣る時には安くなるかも知れない。さう云ふ場合早く穫り入れて賣らうにも、肝心の米作の方は言ふ事を利かない。即ち米作過程を或る程度以上人爲的に短縮出來ない缺點がある。のみならず、且蒔き付ければ、そのものが如何に下落しても、他種作物も亦時期に支配されて居る關係上、それを取り捨てゝ他作物に轉換出來ない。例へ出來るとしても斯くの如き姑息的手段を講じて當面の不利を免れやうとすればする程、農民それ自身の損失は大となる。以上は單に一年作の作物のみを問題にしたに過ぎないが、之れを桑園、果園、山林植付の如き

多年性作物に置き換へて考へて見れば、その危險率は益々大となる。而も一方農産物が、生糸と謂ひ、米麥と謂ひ、主として市場の投機目的物となり、その價格には資本主義經濟が持つ必然の特性たる激變が常に發生して居るから、農民は極端に此の價格の激變に翻弄され、己れそれ自身は投機の圏外に立ち乍ら、他動的に日々投機を試むることを餘儀なくされて居る。斯くの如く觀じ來れば今日の農民は、己れの生命を打ち込むで經營して居る農業そのもの丶本質を、取引市場の賭具中へ骰子として投じて居るものであると評しても決して妥當を缺いては居ない。此の農民が人爲的自然的經濟關係から、極めて危險なる經濟的地位にあることは、以上の常識に依つて何人にも容易に首肯される所でなければならない。今日の農民は斯くて人爲、自然兩種の經濟關係から、次第にその生活を脅威され、最早今日に到つては、それが彼等の生活を否定せんとする迄に大なる困難となるに到つた。

二、

次に今日の農民はその經濟生活の上に於いて、然らざる他の者、主として都市生活者に對して地理的に與へられざる生活をして居る。例へば文明の表象とも見る可き、交通、通信、運輸等の機關に就いて考へて見ても、都會民なれば十分二十分を徒費することに依つて容易に求むる汽車、電車を利用することが出來る。然かるに彼等は一時間二時間を消費し、而も三里の道も遠しとせずして歩るかなければ多くは之れに投ずることは出來ない。亦彼等は各自親戚間に急を報ず可き必要の場合が生じ電信を利用しやうとしても、特使便としての高額料を特に拂はねば多く用を足すことは出來ない。更らに托送荷物に對しては多大の割増運賃を支拂はねば受け取ることが出來ない。之れ農村の農民は、その住居が散在的であつて、「局」に離れ「驛」に遠い地理的障害を受けて居る結果である。此の散居と云ふ地理的基本障害は更らに進むで例へば人命に關する事件が發生しても、適當に之れを救濟し得ない關係にある。第一彼等が經濟的資力の薄弱であると云ふことは暫く別問題として、今日の農民には適當なる醫療設備が與へられて居ない。都會には公共的治療機關が略々完備して居るのみならず、開業醫の如きも有り餘る程ある結果、日使ひ若くは電話等の簡便法に依つて極めて短時間内に極めて安價に堂々たる一流の醫師を招くことも出來るのであるが、農民は例へ藪醫師を招くにも急場の間には合はない。里餘を遠しとせず、その上に乘り物を以つて迎へねば容易に來診を仰ぐことすら出來ない。のみならず供給不足の關係

と。要するに[illegible]に現はれて[illegible]當然であつて、農民の父兄は[illegible]れて居ない。怜しげた所謂「取りたげさん」の中に置いて居る。從つて是れなり、見た處。若くは手當不良の結果不良者になる者等が極めて多い。斯くの如く有形なる農民は、今日の如き醫療設備の下に於いては消除すること、近来することも大いに休み／＼しなければならぬと云ふ状態にある。教育費關係然かりである。彼等は義務教育費に於いて市民に比して倍三倍の負擔（戸數の乏しい關係上、一戸當りが負擔する額が極めて大となる）をして居り乍ら、其の子弟をして都市小學校の如く完備した設備の下に學ばし得ず、優良の教員（經費の關係上代用教員等が農村小學校には多い）に就かしめることが出來ない。のみならず、小學校以上の教育機關は總べて都市に設けられて居る關係上、市民に比し多大の遊學費を出費しなければならぬ。斯くの如く犠牲を拂ふて教育した子弟の優良分子は、後に到りては多くは都市に吸收されて終ふ。又た金融機關に就いて考へて見ても、彼等は最も少く之れ等の恩惠を受け取り、最も多く吐き出さねばならぬ立場にある。例へば彼等はその零細餘金を郵便貯金、簡易保險、勸業債券等の極めて低利なる形（多くは四五分）に於いて吐き出し、之れを都市に吸集されて、市[illegible]は、[illegible]れ。[illegible]一般く農民へ[illegible]なる組[illegible]の田畑を[illegible]に依[illegible]往々にして[illegible]しる。其の結果農民金融は極めて不圓滑であつて、所謂[illegible]彼等の耕地を[illegible]する。斯くして有形なる農民は其の子弟が都會に吸收される許りではない。勞力の結晶である金も亦都會に吸收されて居る。即ち一人一[illegible]して都會に集中しつゝあるの[illegible]居るに[illegible]ない。

今日の農民が娯樂機關、慰安休養の設備から遠ざけられて居る事例は[illegible]備へうした昔日の[illegible]機關は勿論の[illegible]、運動[illegible]所さへ持たない。偶々彼等の[illegible]して[illegible]居り、をやらうとすれば、多くの場合風紀を[illegible]する[illegible]い制限を受けて居る。年に一回か二回、[illegible]員でも訪れゝば、その多くは消費[illegible]。勸信貯蓄の宣伝か、或は低級な教育物か、然らずんば[illegible]方々の[illegible]

伏し拜み得るに過ぎない。伊勢參り、東京見物そうした方面の遊山は彼等の一生の唯一の念願であるが、その多くは一生に一度すらその目的を達し得ずに、儚なく死むで行きつゝある。最も之れ等の事例に對しても多少の例外がある。それはたゞ纔かに農村に棲むで居る一部分の地主のみが此の享樂を獨占し得ると云ふ例外である。斯くて擧げ來れば今日の農民は、今日の文明の總ゆる設備、今日の文化の總ゆる機關から遠ざけられ、その恩惠に浴し得られずに居る階級であると云ふことが出來る。此處に農民文化開發の問題が發生する所以である。

三、

農民は以上の如く社會文化の惠澤に浴することが甚だ尠ない。けれども不感なる農民は、今の所之れに對して何等の不平を漏らしては居ない。その多くは當然なる宿命であるかの如く怺らへてゐるかに見える。然し乍ら一方都市市民の受くる文化の惠澤は一より二へ、二より四へと日一日と厚くなり。今までは人間の掃溜であるとまで極言された所が都市計畫に相俟つ衛生施設等の改善に依つて、都市市民の衛生狀態は面目を一新し、今日に於いては都會、必ずしも人間の掃溜ではなくなり、市民の保健狀態は頓みに向上しつゝある。之れに反して農村に於ける農民は前述の如き衛生施設の不完備と、農民それ自身の經濟的資力の薄弱は、過勞（農民は己れ夫れ自身の體を機械の地位に据えて極端に自己酷使を行つて居る。農業の機械化問題は此處に於いてか人道的意味を含んだ農民の救ひ出し問題となる）に對する適當榮養と適當休養とを攝り得ない狀態にある。左表を一目したなら何人も農民の榮養狀態に寒心せずには居られまい。

農家 家族六人 食物調査（生活程度中）

	朝食	晝食	晩食
十月廿一日	米一升三合、味噌五十匁、菜漬三十五匁	菜漬三十五匁	米一升三合、味噌五十匁、茄子漬五十匁、酒五勺
十月廿二日	米一升三合、味噌五十匁 菜漬三十五匁	茄子漬三十匁	米一升三合、鹽引若干、茄漬三十匁 酒一合
十月廿三日	米一升三合 味噌五十匁 茄子漬三十匁 菜漬三十匁	蝦五匁、味噌五匁	米一升三合、味噌五十匁、茄漬六十匁 鹽引十匁 酒五勺
十月廿四日	米一升二合、味噌五十匁 茄子三十匁ナットー十匁	瓜漬十匁、蝦五匁 ナットー十匁	米一升二合、菜漬二十匁 ナットー十匁、酒五勺
十月廿五日	米一升二合 味噌四十匁 菜漬三十匁、ナットー十匁	瓜十匁、蝦五匁	米一升、味噌十二匁、鹽引十匁 酒一合
十月廿六日	米一升、味噌五十匁、菜漬三十匁、ナットー五匁	ナットー十匁 瓜漬十匁	米一升二合、味噌五十匁、茄子十匁、蝦五匁、酒一合

（備考）晝食に米のないのは、米を食はないのではない。朝夕の餘りを共に廻すのである。たゞ晝炊きをしない丈けである「秋田縣山本郡富根村に於ける農村保健衛生狀態實地調査報告」第一一三頁參照）

此の調査該當地方農民は幸ひにして米作地であるから主食を米として居るが、普通農民の主食は米七麥三乃至米五麥五の程

[illegible]
一つ[illegible]はならないのは、[illegible]人のでいいのであ
る[illegible]農村の常識であるが、一般の農民は[illegible]に酒を飲むことすらも可能であると云ふことである。[illegible]的の如きも農民としては決して不良の方ではない。然し乍ら一度之れを都市民に比較して見たらば如何、循環の最下級自由勞働者と雖も、恐らく之れ以上の榮養を攝つて居るとであらう。況むや生活を持つ都市勞働階級の榮養狀態に於いてをやである。魚肉、獸肉等の動物性の食物は、今の農民の食卓から、殆んど影を沒してゐる。僅かに一週一二回鹽の辛い所謂「鹽引」鮭又は何の[illegible]の一二片が食卓に現はれ、それが彼等に無上の珍味となる位なものである。今更に内務省が靜岡縣周智郡宇刈村に於ける小學兒童の辨當調査物を檢査せる所に依ると、百人中梅干し丈けのものが四十九人、澤庵、茶漬丈けの者が二十八人に及んで居た。

農民の榮養狀態は概述して斯くの如し。されば彼等の榮養狀態は日一日と不良に傾き、今日までは農民と謂へば健康そのものゝ如く代表視されて居たのであるが、それは事實調査の結果に依つて忽ち幻滅して終つた。近來一部の衛生當局者に依つて農村壯丁の體位低下の事實が發生したのに因を留め初めさせたのは、證の間の消息を物語るものに外ならない。農民の[illegible]は

[illegible]
[illegible]
農民は、農村特有の巨大な[illegible]
い。同じ農民は[illegible]中の[illegible]
堆肥　屋敷等の汚物を直接（手で）取り扱ふ如きに[illegible]
果　他業者の容易に[illegible]し得ない[illegible]に晒されて居る。甚だしきは百人中九十人迄は罹病者となつて居るが、已でれ等は之れに氣付かず、只僅かに作業能率の低下を感じて居るに過ぎないと云ふ狀態である。最も多く見られる寄生蟲は、蛔蟲及び鉤蟲であつて、前記靜岡縣山本郡富根村に於いて調査せる所に依れば、百人中前者は七十六人、後者は六十一人の多きに及んで居る（「農村保健衛生實地調査報告」第六[illegible]頁、内務省調査參照）其の他十二指腸、東洋毛樣線[illegible]蟲、横川吸蟲、肝ヂストマ等を合せた有病者は百人中八十七人九に上つて居た。而して全くの無病者は纔かに一割二分強に過ぎざる有樣であつた。其他山口縣吉敷郡平川村に於いては以上の寄生蟲の外、肺ヂストマ、[illegible]線蟲等の有病者を合せて、百人中七十四人の多きに上り（同上一三八頁參照）、靜岡縣周智郡宇刈村に於いては、十二指腸蟲、東洋毛樣線蟲、蛔蟲、鉤蟲のみにて百人中男八十八人同　女九十人の多きに上り（同上九頁參照）靜

井縣今立郡粟田部村に於いては、十二指腸蟲、肝臓ヂストマ等に、約八十八人の多きに上つてゐた。(同上四八頁參照) 此處に於いてか農民榮養、農民保健の改善問題は、農民の對内的問題として重大問題視されねばならぬ。一切の人生上に起る問題は其の歸結を各個人の能力の如何に置いて居る。農民問題と雖も亦然りである。此の點から鑑みて、農民の榮養改善、農民保健施設の完備を期することは、農民問題解決の要諦であり、同時に農業問題の解決の要諦であり、農村問題解決の要諦である。

今日の驅け出し農村論者の多くは此の點を全然看却して亦顧みないが、吾人は之れを大なる遺憾とする。

四、

次には少しく方面を換へて農民と兵役關係、農民と政治關係、農民と公課關係とを概説して見度い。

兵役は勿論、國防に乃至國權維持の必要上、國民の平等に負擔すべき義務であるから、今更ら兵役そのものに就いて彼や此言ふ可き筋合のものではないと信ずる。然し乍ら兵役の結果が農民に荷重であつて、其の他の者に輕減される傾向があるとすれば、國民負擔の平等を論ずる必要上、大いに論究する餘地が存する。

農民の體格は今日市民に比して必ずしも優良であるとは言へない。(前項參照) 然し乍ら農民は國民中の大多數を占めて居る階級である。のみならず農民は粗製濫造の氣味はあるが、兎も角都會民より子弟を多く持つて居る。尠くともその出生率は市民の千人に就き二十一、二人であるに反し、二十五六人に及むで居る。論は條岐に渉るが、農民は適當の娛樂慰安休養施設のない結果、其の本能は人口增加の途を開拓する方面に使用されるらしい。既に農民は現在人口數に於いて多く、その出生率に於いて高い結果、兵役負擔の割合は市民より遙かに多い。各師團聯隊の兵卒が農民子弟に依つて大部分を占められて居るのは紛れもないその實證である。

然かるに農家に於ける壯丁は、多くの場合に於いて農業經營の人的主體である。尠くとも彼等は働き盛りの勞力的農業支持者である。從つて日本の農業の如く小規模經營の農業に於いて、此の働き盛りの勞力を無償で奪はれると云ふことは、農家の一大致命傷である。商工業者が一管理人としての壯丁を失つた苦痛とは到底比較にならぬ程大なる苦痛を負ふ。況むや之れに依つて年老いた父母が養はれ、幼い數人の弟妹が扶養されて居た場合に於ける農家(農民は過勞の結果比較的に早く老年い、從つて第二の後繼者を早く使ひ出す傾向がある)に於いて

は、一家の[illegible]いでもないが、其中に自作を[illegible]其の一[illegible]に対しては、其法はただ之れ[illegible]する途には厚くになつて居ない。壮丁を出した農家の現状は悲惨である。田は荒れ、畑は瘦せ、そうして一家は人為的飢餓に襲はれる。名誉の合格だ、国家の干城だと賞賛されて入営する壮丁に、一家の私を抑へ、国家の一大事に奉ず可く、口に萬歳を唱へるが、恐らく心では泣いて行くに相違はない。若しそれ一旦戦端が生じ、此の壮丁が肉弾となつて砕けた場合を想像せよ、一家は忽ち破滅して行くではないか。

斯くて農民は一戦争毎に疲弊して行くに反し、翻つて都市の商工業者を顧みるに、彼等の子弟の多くは志願兵なる形式に依つて期間を短縮され（中等教育を受けて居る関係上）のみならず、戦時中は需要の増加に依つて儲け、戦後は物資の不足で好景気付き、戦争の結果何れも膨大なる富を重ねて行く。彼の日本に於ける有数なる富豪連が、戦争成金であることは、余りに人口に膾炙して居る事實ではないか。少くとも我國の資本家と言はれて居る資本家で戦争の結果潤されて居ないものは極めて尠ないが、之れに反し農民は血税として最も大なる負擔を最も多く支拂ひ乍ら、戦争の結果受くる商工業資本家のやうな利益は[illegible]につて行く。[illegible]とも[illegible]なる[illegible]の農民の[illegible]にはならない。従つて農民の為には[illegible]は消極的に国防科目の程度に止めねばならない。況や戦争を惹らして一将の功を遂げさせるやうな戦争は絶對に避けねばならぬ。軍備は職業的軍閥者の為に濫用す可きものではない。況んや兵器品の[illegible]代表させて儲けやうとする一部資本家の野心に煽動されて、之れを徒らに發動せしむることは、最も慎まねばならぬ。然らざれば多数農民を益々窮地に陥れる許りである。農民と兵役関係には斯くの如きものがある。農民問題を検討するには須らく此の點にも充分なる考察を遂げ、國民平等の負擔をして、農民のみに偏重せしめないことを心掛けねばならぬ。

三、

農民と公課関係 — 今の世の中に農民程大なる負擔を為して居る職業者は居ない。農民は他の何れの職業よりも重い公課を負擔して居る。農民はさらでだに純農の如く各種の理由から経済的に潤されて居ることが尠なく、従つて経済的負担力は薄弱なる

にも拘らず、彼等は之れに依つて更らに一層窮迫を來して居る。

勿論之れは農民が一面に於いて隱すことも持ち運ぶことも出來ない土地と云ふ基本課税物件を持つて居ることゝ、他面に於いてはその住居が都會民に比し、著しく散在的である結果、一定面積に要する土木費、教育費が驚く可き多額に上り、從つて農民一戸當り乃至一人當りの擔荷する割合が増大する爲めである。

言ふ迄もなく農民の負擔する基本地租の總額は七千四百萬圓であつて、之れを所得税の一億四百萬圓に比較すれば、三分の一以下の小額であり、僅かに營業税の七千七十萬圓を凌駕して居る位ゐに過ぎず總租税收入七億四千三百六十萬圓に對比して僅かに一割弱であるから、一國財政の上から言へば、往昔とは著しく事情を異にし、その重用性を失ふて居る。然し乍ら農民の負擔して居るものは地租許りではない。中産階級程度までは所得税を負擔し、それ以下の階級は通行税及消費税（之れは市民とも同樣ではあるが）並に自家用醤油釀造税等を負擔し（小作料は地主に納付するものであるから暫く除外して）此の外に地方税納付關係に於いて、地理的理由たる散居關係から、彼等の公課負擔額は商工業者のそれとは甚だ大なる懸隔が發生する。のみならず、現行税率は商工業者に薄く、農民丈けに厚く規定されて居る。試みに最初農民の負擔する基本租税たる地租と、商業者の營業税とを比較して見るに、前者は地價に對し百分の四箇半である。今假りに反當り地價五十圓とせば、此の土地から米二石五斗の收穫をあげ（大いに努力して）之れを石當り三十七圓に賣却したものと見做して、收入高の一萬分の三百五に相當する。然かるに營業税は卸賣業の場合賣上の一萬分の八乃至十一であり、小賣業者の場合に一萬分の二十乃至三十であるに過ぎない。更らに進むでその地方税たる府縣税を比較するに、農業者に對しては地租一圓に對し八十三錢以内と規定され之れを收入高に比すれば一萬分の二百五十三となり、商業者に對しては營業税一圓に對し四十一錢以内と規定され、假りに賣上高の國税一萬分の十五として計算すれば、府縣税は一萬分の六・七五にしか相當しない。市町村税に於ては前者百分の六八であり、後者六一である。此の外農民に對しては反別割として平均反當り一圓の課税が府縣及町村税として課されて居る。

此の不公平がある結果、之れ等の公課負擔を綜合して農民と商工業者との總合計負擔を比較すると、工業者は農民の約三分の一で足り、商業者は農民の約二分の一で足りると云ふ結果が發生する。即ち左の如し。

業別	收益總額	國税	縣税	市町村税	同合計	負擔比率
農業者	五六、六八一圓	三二九	四六八	一、〇六一	一、八六〇	一〇〇

[illegible]者	[illegible]	四[illegible]	一[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]者	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	二一

更らに此の外農民は例へ一反の土地であつても一畝、一歩の土地であつても所有して居りさへすれば其の年收入が千圓以下であらうが五百圓以内であらうが、それには頓着なく必ず公課一切を課税される。それに反し商工業者は小資力者には免税の特典を與へて居る。即ち製造業者は資本金壹千圓未滿又は從業者三人未滿なるとき、同三人未滿の運送業、印刷業、出版業、寫眞業、並びに資本金千圓未滿の貸付業、賣上二千圓未滿の物品販賣業、建物賃貸價格百圓未滿の席貸業、從業者四人未滿の宿屋料理屋業者等は總べて無税である。斯くの如き不公平は唯だに之れのみには止まらない。例へば農民の財産である土地の登録税と商工業者の主として持つ株券の名義書換料を比較して見るに、登録税は賣買價格千分の三十五の課税なるが故に、五百圓の土地を賣買すれば十七圓五十錢の所有權移轉登記料を支拂はされ、之れと同額の株券名義變更料は僅々十錢にて事足ると云ふ状態である。

以上は單にその一例を示したのに過ぎないが、それにしても今日の農民は他の商工業者より恐ろしく重い公課を割賦されて居るものと謂はねばならない。農民が一般に公課負擔の荷重を持つには、その[illegible]つて農民公課負擔の[illegible]要なる地位にある。[illegible]ては農民の負擔を商工業者と同一程度率までに引き下げるか、國家若くは地方の財政に之れが許さぬとすれば、商工業者の課税率を農民と同一率にまで引き上げ、以つて負擔の公平を期するか、然らずんば地方税を以つて負擔して居る教育費、土木費等重用費目をそれ／＼國家支辨として、農民負擔を出來るだけ可能の條件に於いて速かに輕減しなければならぬ。然し乍ら此の最後の方法に訴へる場合と雖も税率に多少の手心を加へて出來るだけ基本負擔の公平を期することを忘れてはならぬ。

六、

翻つて然らば斯くの如く農民の公課負擔が荷重なる所以は何れにあるか、此の點を究めれば勢ひ農民と政治の關係が分明すると思ふから、之れより暫くその原因を探究して見度い。惟ふに今日の農民位ひ政治的に無自覺なるものも尠ない。都市の資本家から出た金を以つて所謂貴重の一票を買收され、而して選むだ代議士を自己の御味方代表の如く信じて顧みぬのが今日の農民ではないか。就中彼等は政友會、從つて現政友會派に

政友本黨の如きを掛け代へのない御味方農民黨であるかの如く信じ切つて居り、選擧毎に此の數の增加するを見ては、歡呼して居るが、何くんぞ知らむ彼等の信じて居る代議士は逸ち早く都市に於ける資本家の懷ろに飛び込むで居るのである。少くとも彼等代議士は農民の政治的利益を代表することよりも、都市資本家の利益を約束する立法に參與しなければ選擧運動費を支辨することが出來ないのである。這の間の消息は農民黨益々增加して農民議員を名乘る代議士の次第に減少しつゝある左の一表を見れば何人にも容易に首肯されやう。即ち第一回選擧に於いて六百人の議員中百二十九人の農業議員があつたのであるが、昨春五月第十五回選擧の結果に徵すれば、總議員數（百六十四人を增して）四百六十四人に增加して居るにも拘らず、農業議員は僅か六十九名に減少して居るのである。

選擧回數	總數	農業者	選擧回數	總數	農業者	選擧回數	總數	農業者
第一回選擧	三〇〇	一二九	第六回選擧	三〇〇	一三四	第十一回	三八一	八一
第二回選擧	三〇〇	一四四	第七回	三七六	一二〇	第十二回	三八一	八〇
第三回選擧	三〇〇	一〇〇	第八回	三七六	一二一	第十三回	三八一	七一
第四回選擧	三〇〇	一〇〇	第九回	三七六	一四四	第十四回	四六四	九一
第五回選擧	三〇〇	一二八	第十回	三七九	一一九	第十五回	四六四	六九

斯樣に依然として、最も多く選擧權を與へられて居る農民が（國稅負擔の關係上）最も持たない代表者を立法府に送つて居ると言ふ奇現象を呈して居るのである。此の選擧關係、從つて政治關係は還元されて直ちに彼等の經濟關係を呪咀する因子となる。公課負擔率が前述の如く不公平であるにも拘らず、之れがその儘放任されて居るのはその一例である。更らに彼等が產業獎勵費として國家より間接の助成金を受け取る場合、その大部分は商工業者の爲に奪はれ、銀貨改鑄利益金の一部分でもなければ所謂農村振興費（政府益金一億三千萬圓の內僅かに二百五十萬圓）として還元されぬと云ふ狀態である。表面的に考へると農民は政治的に最も勢力があるらしく思はれる。然かるに事實は之れに反し、既述の如きものがある。所謂「政治の商工化、資本主義化」が行はれて居るのである。最近農民問題が、次第に政治的問題に觸れむとして居るのは、その背面に斯樣な不公平が潜在して居るからである。

七、

以上は大體農民を單一の階級と見て、市民特に商工業者と比較して、經濟上、政治上彼等が如何に不遇の境遇にあるかを述べたに過ぎない。一口に謂へば今迄の研究は主として農民の對外的關係であり、生活關係であると言ふことが出來るが、之れだけが今日の農民問題として研究に値いするのではない。此

の三者內の何れの[illegible]、[illegible]
たもので、何を言ふも第一問題としては最も重大なる事に、之れが三者の對內的關係の問題である。小作問題が所謂「農村問題」の中心的問題として、盛んに論議の焦點となつて居るのは、其の著例であるが、其の他自作農の生活問題並に其の經營構成の問題、地主の處分問題並に純然なる農業勞働者の生活問題等が重大視されるのも此の理由に依る。

斯う述べて來ると一と口に「農民」と言つても其の中には、種々なる階級があることが、聰明なる讀者には既に氣付かれた苦である。言ふ迄もなく農民には種々なる階級がある。而して其の各種階級は、それぐ經濟的地位を異にして居る。從つて階級的利害を異にして居る。此の社會關係、階級關係をハッキリ意識して居なければ、之れから研究しやうとする農民の對內的問題を公正に意識することは出來ない。

農民は之れを大別して次の如く分つことが出來る。即ち地主、自作農、小作人、農業勞働者の四階級である。

第一、地主

一、耕作に從事せざる地主（地主）

二、耕作に從事する地主（地主兼自作農又は自作兼地主）

第二、自作農

一、自作農

二、自作兼小作農

第三、小作農

一、小作農

二、小作兼自作農

三、小作兼農業勞働者

第四、農業勞働者

一、農業勞働者

二、農業勞働者兼小作農

三、農業勞働者兼他職勞働者

此の外特有の例ではあるが、地主兼小作農、小作兼地主と云ふ曖昧關係の地位にある者もないではない。即ち自宅直接の土地を小作し、遠隔の地にある所有地を小作に出して居る場合に主として發生する關係ではあるが、斯樣な特有例のあることは少しも大局には影響ないから、此處では唯だ斯うした例もあり得ると云ふことを示して置くに止める。

今右の內、第一に屬するものを農村に於ける有產階級、第二に屬するものを中產階級、第三及び第四に屬するものを無產階級と大別し居る。斯う分類して來れば何も社會學の一頁でも瞥見したことのある人には、此の種の階級が單一なる「農民」と

稱せられることに依つて、その對內的經濟關係、生活關係、社會關係が共通であり得ると考へる者は恐らくあるまい。事實に於いて地主と云ふ有產階級と、自作農と云ふ中產階級との利害は必ずしも相一致しては居らない。況んや地主と無產小作人の利害に於いてをやである。

八、

地主と小作人の經濟的社會的地位が全然反して居ることは餘りに明かな事實である。(此の點は後述する所に依つて更らに一層よく分明するであらうが)然し乍ら今日の地主は努めて此の點を曖昧の裡に葬り、現代、尚ほ封建制の遺制たる小作關係をその儘維持しやうとして居る。而して目覺めた小作階級の鋒尖きをあらぬ方面に轉換させる手段として、次の如きことを言つて居る。

「今の農村問題は都市と農村との鬪爭だ。市民と農民の對抗だ。我々地主と小作人が同じ農民であり乍ら、徒らに內訌喧嘩して居る可き時ではない。大いに對外鬪爭を試みねばならぬ時だ」と。

立論の是非は此處で問ふ必要はないが、彼等の言ふが如く地主その者が果して農民であるか何うか。此の點を究めて置くことは農民問題檢討の上に可なり重用な點である。見受ける所今日の地主階級の多くは既に「土」から足を洗つて居るではないか?

抑々此の地主階級は、經濟上社會上如何なる地位にある階級か?彼等の地位を知るには先づ此の點から究めねばならない。

嚴密に言へば今日の地主は、農村に棲んでは居る(居ない不在地主も居る)が決して農民ではない。地主は飽く迄も地主である。別名に貸地業者、小作料取立業者であると云ふことは出來るが、決して農民であるとは僭稱できない。一般に地主を農民と稱するのは大なる間違ひである。恰も都市の宅地々主が其の職業別から言へば地主若くは貸地業者であるやうに、農業を自ら經營して居ない農村の地主は、地主であり貸地業者である丈けであつて、決して農民であるとは言へない。然かるに彼等は封建經濟の遺制を今日尚ほ繼承して居る關係上、直接農業に携はらずして(一部の地主は自作若くは一二の農業勞働者を雇ひ入れて小面積を自己の計算でやつて居る者もあるが、此の場合と雖も地主たる貸地業が本業であつて、自作農業は副業である場合が多い)生產者たる權利を獲得して居る。之れは言ふ迄もなく對小作人關係に於いて、地代即ち小作料を封建制その儘「物」で徵收して居つて「金」で徵收して居なつたと云ふ偶然

[illegible]と、[illegible]において[illegible]見、[illegible]にあ[illegible]して、[illegible]において、生産物の取得すべき分量の俗限に對する監督に関与する、農業利潤を専ら收い[illegible]て獲得し得ると云ふ、初めて封建の體制に生まれた階級なのである。

既に一般が知悉して居るやうに封建時代に於ける領主階級の農民政策は極めて徹底した收奪主義であつて、本名作渡等をして耕作せしめた「百姓は殺さず生かさず、取れる丈け取れ」と云つた徴貢制度は、實際に厳守されて居た。而してその方針の下に農民の徴米された基本租米額は「五公五民」又は「六公四民」の割合(多少の變遷はあつたが)を保つて居た。當時の地主階級は、此の額の上に多少の地代を加へて小作人より小作料を徴收して居たに過ぎない。然かるに基本租税が既に收穫高の二分の一以上に及ぶ厖退であるから、彼等地主の取分は如何にも少額であつた。彼等は領主と小作人の中間に挾まつて差徴する所が餘りに少なく、到底それ丈けでは地主としての位置を滿足に保つて行くことが出來なかつた。其處で當時の地主は悉く自作をして居た。從つて封建時代に於ける地主は地主であつて同時に農民であつた。然かるに一度び封建制度が破れて、資本主義制度がそれに取つて代はると、政府に上納する租税は物納[illegible]一[illegible]た。[illegible]帯として之れを改めさせた[illegible]小作料に依然として封建的[illegible]其の[illegible]行にない。從つて其の[illegible]大體に於て[illegible]以上に[illegible]結果、此の封建の體制に於て[illegible]ことが[illegible]收穫は自作するよりも寧ろ土地を貸すことに依つて收穫高の三分の一以上を小作料として徴收する方が有利となつたので、此處に於いてか彼等の足は段々耕地から離れ、農民ではなく單なる借地業者と化するに到つた。

斯くの如く封建時代に於いて既に高率なる收奪を受けて居た農民の分付に、當時の地主の取分を加へたるもの、其の儘今日の小作料となつて居るのであるから、此の額が今日の合理的の分配を意味して居るものでないことは自明の理である。今日多數の小作人が封建時代の封建の體制を承繼するに相携して、依然として之れを改正運動(小作運動)を起こして居るのは、如實にそれが高率であることを反證するものである。と同時に此の封建の體制が今日に承繼されると云ふことは、サツキにも言つてある如く、此の分配關係が必然に生産者の地位にあらざるものに對して生産者としての權利を獲得せしめ、且つ經濟的優越の地位を利用して都市に於ける市場支配を爲さしめ、生活必需品をして彼らに

資本主義的利潤獲得の具たらしめる恐れがあるのである。都市に於ける米穀商人と大地主階級の結託並にその間の取引事情を知悉する者には何人にも容易に這の間の消息に通ずることが出来るであらう。斯くて断じ来れば地主階級は封建の遺制に隠れて極めて合理的に社會に對して二重の搾取を行ふて居るものであると云ふことが出来る。即ち一つは對内的に實際の生産者たる小作人階級の經濟的地位を掠し、他面に於いては己れその地位にあらずして社會より生産者として利潤獲得を行ふて居るのである。然し乍ら附け加へて言つて置かねばならないことは、地主は生産の一機關たる土地の所有者即ち地主であり、貸地業者であり、資本家であり、有産階級である。之れ以外に彼等の社會的經濟的地位はあり得ない。最も彼等の中にも我々の斯うした論を中諦するやうに、二三反の小耕地を自作（事實に自分では手を下さず、他より勞働者を雇ふて單に自己の計算で自作經營をこ）して居る者がないではない。然し乍ら斯うした地主も事實に於いて地主と云ふ職業（若しさう言へれば）が本業であつて、農業自作の分は副業であるから、之れを稱するに地主であり、資本家であると云ふ論議を少しも曲げる必要はない。殊に次に示す中地主の如きは、田畑合せて三反、蠶紙五枚を飼育して居るが、その收入百六十三圓よりも、他面に於いて純然たる都市資本家としての要素即ち株券額面一萬圓を所有して居り、其の方の配當四百五十圓の收入の方が約三倍に上つて居る事實は、前者の農民たるの資格を相殺して餘りあると言ふものである。此の外に三千圓の貸金の利足收入すら副業的自作收入より既に多い。

中地主の生計状態（家族八人、女中一人）

一、財産

（イ）土地所有面積、田十三町、畑六町八反、宅地二反、

計二十町歩

（ロ）貸金三千圓

（ハ）株券一萬圓内拂込金七千圓内二千圓分は無配當

（ニ）産業組合出資二百圓拂込み済

二、副業（地主の地位から見て）

（イ）田一反歩、畑二反歩（内一反歩は桑園、一反歩は野菜畑）

（ロ）蠶紙年内通じて五枚（種紙）を飼育す

三、收入金　七千九百十三圓

四、支出金　七千二百三十九圓三十四錢

五、差引殘高六百七十三圓六十六錢

內譯

〔一〕[illegible]

一、小作料 二〇〇石 七[illegible]
一、貸金利子 年八朱 二四〇・〇〇〇
一、株券配當金 年九朱 四五〇・〇〇〇
一、産業組合配當金 一〇〇・〇〇〇
一、自作米一石八斗 六三・〇〇〇
一、繭賣却代（生繭十八貫） 二〇〇・〇〇〇
一、雜收入 五〇・〇〇〇
合計 七・九一三・〇〇〇

〔二〕支出の部

一、公課 二・九六七・三四〇
一、生産費 六五・〇〇〇
一、飯米 三五〇・〇〇〇
一、其他の家計費 三・八五七・〇〇〇
合計 七・二三九・三四〇

〔三〕其他家計費の内譯

一、雇人料（女中一人、外に臨時雇男三〇人） 二三〇・〇〇〇
一、購入食料品（味噌、酢、野菜、乾物、肉類、大小豆、豆腐、茶、菓子、牛乳、果物） 七五〇・〇〇〇
一、特殊嗜好品（主人、父と二人一日酒二合、煙草同二人にて一日三十錢、其の他ビール、サイダー等） 一九七・〇〇〇
一、[illegible]費（[illegible]） [illegible]
一、[illegible]費（[illegible]） [illegible]
一、消耗品（電燈料、[illegible]） [illegible]
一、什器（[illegible]） [illegible]
一、教育費（中學生一人、小學生二人分の學用費） [illegible]
一、醫藥費（診療代並に常備藥費） [illegible]
一、交際費（村協會其他[illegible]） [illegible]
一、祭事費（年一回の法要、家祈禱、氏神例祭、[illegible]其他） 一八〇・〇〇〇
一、寄附金（神社佛閣、法人、團體、新聞社への寄附金等） [illegible]
一、雜費（伊勢參宮、都見物等年一回の遊覽費） [illegible]
合計 三・八五七・〇〇〇

此の表は某縣の中地主が[illegible]に對して「自分は農民である」と云ふ事實の立證として自己の家計を自ら周密に調査して提出したものに外ならない　然し乍ら不幸にして前記の如く農民であると云ふ立證となるより　反つて地主である資本家であると云ふ反證を吾人に提出して呉れた丈けであつた。

而して此の表に依つても了解されるが如く今日の地主は決して彼等の言ふが如く困つては居ない　公課負擔は可なりして居るが　彼等に事實[illegible]

民が、總べての生活費を差引いた純利益が一ヶ年六七百圓もあるとすれば、決して此の階級が疲弊して居るとは言はれない。況んや此の計算では一石の米が三十五圓で計算されて居るが、之れが一石四十圓に騰貴（本年の如く）して居れば、之れ以上百圓を增收し、若し五十圓に騰貴するとせば、更らに三百圓の增收となる。斯くても尙ほ地主は疲弊し困憊して行くと言へるであらうか如何。

九、

地主の經濟的社會的地位は大體前述の如きものがある。之れに反し無產小作人の經濟的社會的地位は何うあるか。之れから之れを究めて見度い。言ふ迄もなく小作人は實際の農民であり、且つ我が國の農家戶數の七割を占むる最大多數を占むる農民階級である。然かるに彼等は封建の遺制たる小作制度の鐵則に拘束されて居る結果、肥料、種子、農具其の他の有形資本を悉く自辨し、更らに勞力と云ふ無形資本も勿論自辨し、地主よりは單に土地丈けを借り入れて居るに過ぎないのに、地代として收穫高の二分の一以上を支拂はねばならぬ。其の結果實際には生產者であり乍ら收益處分の場合に當面すると何時でも幻滅の悲哀を感じ、生產者とは表面の名目であつては、實際には消費者（大部分の小作階級然かり）としての經濟的地位に退却させられる。と云ふことは直ちに彼等の經濟的地位が一様二重の意味に於いて被搾取者たることを餘儀されて居ることを物語る。即ち生產者たるの一面に於いては、その上層階級たる地主より收益分配の上に於いて、搾取を受け、消費者たるの他面に於いては、一般資本主義經濟制度の上から合理的に橫の關係の搾取を受けて居る階級であると云ふことが出來る。此の農民が疲弊する、困憊する、蓋し當然であると謂はねばならない。果して然らば彼等小作農の實際に於ける生計狀態は如何？

小作農の生計調査（家族八人）

一、耕作反別田六反步、畑四反步

二、收入金五百十圓三十九錢

三、支出金六百十九圓〇五錢

內譯

（一）耕作の部（拙著「最近の小作問題」一三四－八頁より再錄）

(1)米作收入（大正九年調査）

米收穫高　三〇俵　六〇〇・〇〇圓（收入）

(2)米作支出

肥料代（金肥五八圓堆肥一〇圓）　六八・〇〇圓（支出）

種子代（種籾一斗八升）　九・〇〇（同）

小作米（十 石 俵） 二八〇、[illegible]（[illegible]）

(3)麥作收支

麥收穫高（裸麥六俵小麥四俵） 一〇七・二六（收入）

肥料代（豆粕一九圓、[illegible]六圓） 二五・二〇（支出）

種子代（九升分） 二・五七（支出）

(4)蔬菜及桑園收支

蔬菜 甘藷（七畝二〇〇貫） 一六、〇〇
　大根、蕪、菜、瓜類 三〇、〇〇（收入）
　種子代及肥料代 七、〇〇

桑　園（收入） 三三、〇〇

肥料代（豆粕一九圓二〇錢人糞尿五圓） 二四、二〇（支出）

(5)畑作全部の小作料（支出） 二九、〇〇

農具損料（支出） 一〇、〇〇

差引益金 三三〇、三九

(二)勞働收入の部

主人被傭賃銀（日支り[illegible]年被傭賃金） 一五〇、〇〇

娘（十九才）の勞働（季節[illegible]賃[illegible]一五圓 手内職工賃一五圓） 三〇、〇〇

差引收入總合計 五一〇、三九

(三)生計費、（支出の部）

一、被服費（内娘分四〇圓） 七〇、〇〇

一、[illegible]（[illegible]） [illegible]

一、[illegible]品（[illegible]） [illegible]

一、副[illegible]品（[illegible]） 六[illegible]

一、[illegible]代 五六、〇〇

一、[illegible]類（白粉[illegible]圓、菓子六圓） [illegible]、〇〇

一、消耗品（石鹸、其他） 一〇、〇〇

一、交際及娯樂費（[illegible]） 一〇、〇〇

一、教育費及治療費（[illegible]治療代主として[illegible]） 一七、〇〇

一、旅行費及化粧品費（[illegible]化粧品[illegible]） 一九、〇〇

一、租稅（[illegible]） 一一、六〇

一、理髮代 三、一〇

以上支出合計 六一九、〇五

之れを前述の地主生計と比較して如何ッ今日農民疲弊、農民困憊の聲は高いが、中央に上京して之れを訴へる得るやうな階級は少しも疲弊して居るのではない。中央に出て來る旅費も持たない斯くの如き小作人階級並に之れと五十歩百歩の自作農階級（此の生計は煩はしいから略す）が眞に疲弊窮乏を告げて居るのである。即ち田畑・町歩の土地を耕し乍ら、年年[illegible]月より

に農業勞働に訴へ、更らに十九才になる娘を季節屋に出して、而も尚ほ・ケ年・百〇八圓六十六錢の缺損を來して居る此の種の階級が眞に困窮して居るのである。此の際、注意しなければならないことは、此の調査は大正九年であつて米價を一石五十圓に見積つた計算であることだ。と云ふことは一石の米が例へ五十圓に騰貴した所で、此の種の階級に今日の分配關係に於いて、今日の營利經濟關係に於いては、到底その窮乏を告げずには居られない階級であることだ。從つて生産者の地主にあらずして生産者の營利を獲得して居る今日の地主階級が、米價さへ騰貴すれば一般農民は潤ふかに吹聽するのは、最も狡猾な詐僞政略である。米價騰貴に依つて直接最大に潤ふのは眞の農民にあらずして農民に名を騙る地主である。從つて彼等が揭ぐる農民振興策としての米價維持は、實は地主擁護策としての米價維持であつて、眞の多數農民は之れに依つて潤される所は極めて鈔ない。それよりも此の種の階級の當面の要務は、分配關係を合理的に改正するにある。少くとも大正の現代に封建の遺制を其の儘承繼することの不都合を變除するにある。多數農民が實際に於いて米價維持乃至引き上げの運動をおこすことよりも、小作關係の改善を叫んで、小作料の合理的輕減運動を起こして居るのは即ち此の理由に依る。此點に於いても小作問題に農民問題として最も重大なる意義を有し、之れが解決策の當否は頓がて彼等が對外的關係にある農民問題解決の爲に至大の影響を來すものであることを顧みねばならぬ。何んとなれば小作階級は農民の七割（農務局調査）を占めて居る絕對多數階級であつて、此の階級の經濟關係、小作關係を改善することは、同時に彼等の生活關係を改善し向上せしめる最有力の方法であるからだ。

惟ふに一切の對外的關係の問題を解決せんとせば、先づ對內的關係に於いて相拮抗して居る力の齟齬を殺がねばならぬ。農民問題に於いても亦然りである。地主階級が自作して居るが如く彼等も亦農民であるならば（實際は農民的地位には居ない）兎かく對內的小作關係に於いても、小作人も亦人間として生活して行かれる程度まで一大讓歩を敢行し、先づ取り敢へず小作問題の解決を計つて後に自ら（對外的地主問題を考ふ可きだ。後に殘つた農民亦此の對內的經濟關係が眞に解決されることに依つて、前述した各種對外的經濟關係、社會關係の解決に猛進し得るであらう。此の外論ず可きものに、自作農問題、純粹農業勞働者の問題などあるが、紙數を制限されて居るし、大部は地主對小作人關係に於いて盡してあるから此處には省く。）

六、

之を要するに農村問題は、今日八釜しく論ぜられて居る所謂「農村問題」の人的中心問題であつて、取り分け最も重大視す可き點は、農民間に内在する「人と人」との社會關係乃至經濟關係の合理的解決をなすことが先決問題である。此の社會問題解決を基礎としてこそ初めて、地主問題の對外關係を如何にすべきかと言ふことが決定する。現在殆んど小作農と五十歩百歩の地位にある自作農を如何にすべきかと云ふことも決定する。而して同時に三百十二萬の農業勞働者の地位を如何にすべきかと言ふことも決定する。何となれば我が國に於ける農民問題の發生する根本は、耕地に對し農民並に一般人口が過多であつて、その適當比率が取れて居ない」と云ふ一點と、農民に携つて居る農業そのものが、他の大きな經濟制度の關係から、到底農民としての經濟實務に携つて居ない者までを、農業に依つて扶養して行く餘地がないと云ふ二點に存するからである。斯くの如く討究し來ると、農民問題は一面に於いて農業そのものからではなく、農民が農業を如何に處理して行く可きかの問題であり、亦彼等が總ゆる文化の恩澤に潤ひ得ず、現代に振れ得ず、現代に振り落されて居る境涯を如何にして改善し、一般文化

[illegible]およに政治經濟[illegible]を制す可きかの一點に[illegible]對内的に今一歩を進めて、農民そのものゝ間に於ける[illegible]これ關を如何にして適當に解決すべきかの問題である。然し此中に述べた如く、[illegible]の問題こそは、當面の農民問題として最も重視されねばならぬ。政府は此の問題に對するに常に寧ろ眠れる小作調停法を施行し、之に依つて當面を糊塗せんとするものゝ如くであるが、斯くの如きは此の問題を更らに一層紛糾させることですれ、決して根本的對應策ではないと云ふことを一言附言して置いて此の項の筆を擱く。

第三、農村問題の檢討

此處で言ふ農村問題とは、農民の問題のみを意味するのではない、同時に農業の問題を指すものでもない。何となれば農村には農民丈けが棲むで居るのではなく、農民以外の各種職業（無職者も居る）に從事して居る者が棲つて居て、夫れ等の人々にも共通した「村」の問題があり、亦農業と云ふ特定の仕事の上の問題以外に「村」そのものに基調した各種の問題が農村に於若くは發展の上に起てゐる。それ等一切の社會關係、經濟關係の

問題を指して農村問題と云ふのである。從つて私の云ふ農村問題は一般が漠然と農業の問題も農民の問題も一所に混一した所謂「農村問題」とは大いにその意味を異にして居るのである。

一、

農村問題として最初に論じなければならぬものは、村の財政行詰りの問題である。山村僻地で村有地乃至村有財産多く、それから收益した金で村費一切を償ひ得るやうな模範村は別問題として、現今全國到る所の農村は、文化の進運に伴ふ教育費、土木費其他の激增に依つて極端に財政が行き詰つて居る。昨年福島縣下の某村に於いて小學教員に對し給料支拂ひ不能の問題を起こせるが如き、亦今年逸ち早く山梨縣下の某村に於いて小學教員が村から支給される俸給の延滯に困却し、終に一種の手形を發行して商人より米鹽の資を求めたるが如き、之れ皆村と云ふ自治體の財政行詰りを來して居る結果に外ならない。數年來八釜しくなつて來た義務教育費國庫負擔額增額問題は之れが最も具體化された問題である。特に此問題で留意を要するのは都市の自治體に於いては、總歳出に對し、僅々一割五分四厘にしか相當しない教育費の問題は、多く意とするに足らないが、農村に於ける自治體に於いては平均四割八分五厘（內務省調査に依る）に上り、就中戸數尠くして地域の廣い村の如き、一村に二校以上を有する場合には六七割に及ぶことすらある。斯う云ふ農村に於いては、教育費支辨の調達立たず、終に前記福島縣、並びに山梨縣下に於いて起つた問題の如き醜態を孕むのである。從つて斯くの如き農村に於いては教育費國庫負擔を增額すると否とでは、實に村の盛衰を左右する程重大問題となる。現今教育關係者、全國町村長會並に帝國農政協會等が主となつて（市の自治體代表者は加らず）義務教育費國庫負擔增額運動を繼續して當局並に各政黨に對し、熱心これを唱導して居るのは、實にその理由を此處に有するのである。今參考の爲め道府縣、市、町村に於ける歳出中教育費が如何なる地位を占めて居るかに左にその計數を示さう。

教育費種別	大正貳年度分	歳出對指數	大正十二年度分	歳出指數
道府縣支出	一六、〇七一、四五一圓	一六八	七五、六八八、三七九圓	三二六
市の支出	一三、六三一、五三三	一一八	六五、六七一、五六五	一五四
町村支出	四七、八八八、九七二	二九二	一八七、三九九、四〇三	四八五

現在國庫より支出して居る義務教育費負擔額は四千萬圓である。（實際は此の外、市町村立小學校教育費補助二百萬圓、公立學校職員年功加俸補助四十一萬〇七十六圓、教育資金利子當金二十五萬五千〇七十圓、一年現役國庫補助五十萬六千六百九十八

圓一千二百十七萬一千八百七十[illegible]之れを更らに二千萬圓増加して、六千萬圓にしやうと云ふ[illegible]國庫の負擔なのである。而して此の[illegible]は其の一千萬圓を増額することが農村振興の最も有力なる方法であると叫むで居る。

惟ふに今日農村自治體の財政窮迫は僅か千萬圓の問題で解決されるやうな小問題ではない。前記の如く總歳出に對し約二分の一を占めて居る際二千萬圓の有無は、有るは無きに勝ること言ふ迄もないが、根本に於いて義務教育費は全部國庫支辨(その資金は軍備の科學的整理に依つて之れに充つれば足りる)にまで進まねば到底各町村の財政を救ひ得るものではない。況むやその教育當事者の如き、最も貴重なる事業に携はり乍ら、村の財政如何に依つては福島、山梨の二の舞ひを踏み、食はずに教壇に立たねばならない絶大なる生活不安に襲はれる憂ひがある。從つて義務教育費は須く國庫の全額負擔として、之れに携はる教職員の生活を安定せしめ(兒童に對しては學校より食事を供せ、特に貧家の兒童に對しては眞先きに)同時に町村自治體の財政を豐富ならしめ、その餘力を驅つて中産階級(農)以下無産階級(農)に對する町村附加税並に戸數割等の大減額をなす可きである。單に義務教育費を國家負擔にした丈けでは、之れが恩典を直接最も多く受ける階級は特に農村有産階級になるから、爲政の任にある[illegible]一つ[illegible]て、その[illegible]入れて初めて[illegible]たる。[illegible]のみを以て、これを[illegible]國民の[illegible]信ずるは大なる誤りである。[illegible]が、彼の地租の輕減問題、乃ち地租の[illegible]問題も亦然りで基本地租の輕減を地主に行ふならば、それが直ちに小作人に對しては小作料の輕減を約束することに相當しなければ、徒らに富者に對してのみ輕減を計る不公平を[illegible]、同じくてそれを行ふ可きではない。

二、

惟ふに農村各個に於ける財政の窮迫は、農村教育をして極端に萎縮沈滯せしめて居る。教職員に對し適當な[illegible]をなす可き財源を缺くが故に、正當の資格を有してその任にあるものに[illegible]の半數にも充たず、その多くは義務教育終了後[illegible]な講習を受けた程度のものが、代用教員としてその任にあるのである。斯くの如き現状に於いて、農村教育上十分なる成績を舉げ難いのは、蓋し見易い事理に屬する。況むや之れが更らに延長されて農村補習教育に到れば、言語に絶するものがある。米

櫃のガタついて居る教員が、一ケ月五、六回の特別手當で空腹を抱へ乍ら夜間授業を機械的に繼續して居ると云ふ現狀ではないか。其處に教育の徹底されやう筈はない。其處に農民子弟の向學心を滿足せしむべき何物もない。斯くの如くして農民子弟の優良分子は、離村向都を企てる。村に止まつて居たのでは彼等の向學心は永久に癒やされる時がない。人口の都會集中原因は勿論他に各種の理由を幾多有することは言ふ迄もないが、その理由の有力なる一因、尠くとも農民子弟の素質優良なるものが離村向都する原因は此處にある。本縣人口益々增加して（村役場吏員の手數を繁からしめ）現住人口比較的に增加せざる、一見不可思議の現象も亦此處にその一因を有する。今日農村に於いて人口の離村することを頻りに嘆ずる者がある。農村民の一部分が離村することは必ずしも悲歎すべき現象ではない。寧ろ殘留農民に對して後進活躍の途を與ふることに相當する。日本の如く土地の狹少なる國に、日本の如く小規模經營の多い農業國に、增加する人口が自然に離村することは大いに歡迎こそすれ、決して之れを抑止すべきではない。要は質の問題である。人物缺乏の農村に於いて、改む可き因襲多き農村に於いて、素質の優秀なるものゝ離村することが大なる問題となるだけである。然るに農村教育の現狀が今日の如き狀態であれば、随と仰ぐ可き師へ缺くから、その優良分子が悉く都市に向つて集中する、蓋し當然のことであらう。

農村文化の向上、農村財政の整理、之れ悉く有爲なる人材の手に待たねばならぬ。然し乍ら農村の教育現狀前述の如きものがあり、有爲なる人材相次いで離村する現狀に於いて、果して之れを何れの日にか求め得られやう。農村教育上十分なる成績を擧げんとせば、教職員の素質を向上せしめなければならぬ。」教職員の素質を向上せしめるには、彼等の生活を安定せしむるより外に途はない。此處に於いてか前述の義務教育費國庫負擔法は二重の意味に於ける文化的使命を有する。農村振興上喫緊の重要事項である。特に都市は農村より人材の供給を受け、物資を吸收し、且つそれに依つて生産されたるものゝ消化を農村に求めて居る以上、農村に於いて負擔偏重に陷つて居る教育費を國民全體の平等負擔とすることは、都村平均發上焦眉の急務である。

三、

次に農村問題として重大視すべきは、農村に完全なる金融機關を缺いて居る點であらう。勸業銀行を親銀行とする農工銀行はある。然し乍ら此の銀行の何の部分が何の程度に於いて農村

の[illegible]に依つて[illegible]けられ[illegible]居る[illegible]く[illegible]に今日の[illegible]には[illegible]乃至三の同[illegible]得る[illegible]れを[illegible]用し得る地位にあるもの[illegible]信[illegible]かに[illegible]有産階級の一部分に止まる。此の外産業組合法に依る信用組合と云ふ金融機關がある。然し乍らモト唯此組織に出來て居て、而も七八分以上一割五分に及ぶ金利機關、特にこの[illegible]金の極めて零細なる額である點に於いて、此の機關が何處まで農村を潤して居るか。近頃出來た特別法律に依る産業組合中央金庫は此の種組合の親銀行となつて金融の中樞に携はることになつて居るが、之れとて普通銀行の兼制に逢ひ、且つ基本利率必ずしも低廉ならず、その上に普通銀行と異はり、極めて繁雜な手續を要する仕組みを、而も事務澁滯の常習犯者たる官吏の古手に携はらしめて居る現狀に於いて、此の金庫が何處まで農村の金融に資する所があるか、蓋し大なる疑問である。該法施行前農村方面の興望は實に絶大であつた。此の中央金庫が設けられることに依つて農村金融は充實せられるものかの如く過信されて居た。然かるに該金庫法施行後二ケ年にして早くも四十九議會に「農村金融機關の完備」（政友本黨提案）「農業金融の充實」（憲政會提案）の建議案が出た。例に依しても、中央金庫が未だ以つて農村金融の一端をだに[illegible]し得られないもの

であることを[illegible]

[illegible]ふにかくて[illegible]つて[illegible]金庫は且つ[illegible]く、今日[illegible]吏の擱排所たるかの觀を呈し、[illegible]した人々の間の機關たるかの如く人[illegible]借賃にも大なる機關を要する機關であつてはならぬ。人[illegible]作者は極めて不利[illegible]し、[illegible]用に携はる人の爲に大切な[illegible]徒消することを避け、資金そのものゝ能力を充分農村に活用せしめることを第一とする。第二にはその資金は低額で極めて低利（年利三步高くとも五步以上に出でざること）であつて、而も努めて長期融通でなければならぬ。而して之れが運用は中央政府の預金部自ら之れに當り、町村をしてその實務（恰も東京市が實業小資金を對人信用にて貸し付けて居るが如く）に携はらしめ、府縣之れが監督の任に當らしむ可きである。斯う云へば人或は府縣並に町村の事務さらでだに繁雜を極めて居る際に到底斯くの如き新務を擔當するの餘地はないと云ふかも知れない。然し乍ら之れは餘りに現在に膠着せる迷妄觀である。郡制廢止以前に郡制廢止の可能を我々はその當局から聞いた例がはない。然し實際郡制廢止の爲に何等事務の澁滯せざるのみか、既に今日に於いては郡役所そのもの、從つて事務に携つて居る人に尋ねてさへ廢止して差し支ないと云ふ事に[illegible]なつて居

る。殊に今日の府縣制の如きは封建時代に於ける遺制の繼承であつて、産業の進歩、交通機關の發達顯著なる今日、此れを此の儘の府縣で制整せしむることは國策上多大の不利を來たして居る。之れに地理的產業的適當の分合を與へて調節すれば、今の四十有餘府縣は恐らく十數縣乃至多くとも二十數府縣に纏めて、而も最も能率的な行政事務を執らしめ得られるであらう。少くとも今日に於いて見る知事の爲の府縣、屬吏の爲の府縣ではなく「國民」の爲の府縣が成立するに相違はない。勿論この中樞的組織の整理には必然末梢組織たる町村の科學的整理分合を必要とする。町村の單位を今の少くとも二倍、小村に對しては數倍に統制して、此處に人件費・役所費の整理を爲すと共に、他方能率的き吏員を選拔して之れに高給を與へ、而して其の事務に專念執掌せしめたなら、農村金融特別機關を設けても決して事務の錯雜は來さない。況んや之れに要する費用の如き、年々一億を生み出すことは此の徹底的行政整理に依つて差して困難であるまい。現在道府縣の經費は三億三千二百二十七萬六千五百四十八圓(大正十二年)町村經費は二億八千二百十六萬六千八百十圓(同上)合計七億・千四百四十四萬三千三百五十八圓であるが此の内、土木費、教育費、勸業費、社會事業費、警察費、公債費、電氣瓦斯事業費等は其の儘としても其の他の道府縣費一億一千百四十三萬九千百九十九圓、並に町村費三億一千六百六十四萬四千六百二十三圓計四億二千八百〇八萬三千八百二十二圓の、四分の一を此の費用に生み出せば足りる、行政整理と云ふからには少くとも此の位の整理を斷行するにあらざれば、整理と誇稱する譯には行かない。而も斯くして生じた冗費は前記の如き途を以て農村の生産資金に供すると共に、他面整理した冗員は產業部に民間方面に於ける生産機能にそれぞれ配屬し得る途を立てゝやる可きである。斯くの如くせば從事員たる「人」の爲の機關ではなく、廣く農村住民全體の爲の否な國民全體の爲の機關たらしめることも可能である。此處に於いて初めて農村金融の完全なる果實を擧げられるのである。此の根本に觸れずして、參千萬圓の中央金庫や、二百五十萬圓の農村振興費には燒け石に水である。畢竟は僅に一時逃れの彌縫策たるを免れない。

四、

以上は單に農村教育、農村金融に關する一私案を述べたのに過ぎないが、此の外農村問題として重要な地位を占めるものに、農村計畫の問題がある。例へば僅きに既に一言したことがあるが農村に於いては今や人口問題を一樣の異なつた意味の下

[illegible]ならないのである。一つは農村に人材[illegible]じ、之れを如何にして補給すべきかと云ふことであり、他の一つは農村に人口過剩を感じ、この人々に如何にして適當なる職業を與ふ可きかの問題である。農村人物の拂底は必然自治體運用上多大の支障を來して居るが、若い生氣潑潮たる人材は選ばれた村の自治運用には携らうとはして居ない。彼等の手腕は村の自治運用に與る可く餘りに力が有り餘り過ぎる。從つて村の自治は老廢的分子の跋扈するに任かせてある。其處に事務澁滯の原因を孕む。其處に利權本位の村政が布かれる。其處に其の日暮しの姑息因循な施設が生れる。之れ等の廢頽的空氣を一掃するには、何うしても前述したやうな行政の大整理、それに伴ふ自治體の大整理を必要とする。産業系統を考慮し、且つ地理的交通運輸上の關係を根幹とした村の分合を適切に行つて、若い新人の腕を揮はしめるに充分な新區劃新舞台を與へる必要がある。他の一面は土地に配す可き一般人口の過剩を、農業問題の所で論じた如く、農業經營形態を改造することに依つて、收容するの策に出づ可きであるが、今の農村當事者は此處に考慮を傾けぬ。此處に農村の悩みがある。今日の如き有様で推して行けば農村に餘つた人口は都市に排泄するより外に途はない。然し乍ら日本の如く工業資源の貧しい國—例へば鐵がなく、綿がなく、[illegible]に於いて[illegible]を收容し得るかど既に問題である。[illegible]へられないではないが、此に於いて人口[illegible]、南洲方面において支那移民を[illegible]居る今の現状に於いて、何處へ移民すべきかど問題となる。一南米方面においてのみ、その排出口を見出して居るが之れとて何時迄無制限に行かれ可きものではない。斯く觀じ來れば農村の人口は或る程度まで斯農業を開發(農業問題參照)することに依つて收容しなければならない。それには農業を獨逸の大企業家がやつて居るコンセルムの形式に則り、粗生産より精生産に、一の仕事を他の仕事に聯結することに依つて、冬期農民の失業を防止すると共に夏期に於ける一時的繁忙を調節せしむるにある。此の計畫は勿論個々の農民の手に待つ可きではない。須く村で一定の計畫を立る。一村の力で及ばなければ數ヶ村聯結して之れに當る。斯くしてこそ初めて農村の過剩人口は收容されるのである。斯くしてこそ農村の人材、農村にその力を振ひ得る餘地を發見し得られるのである。斯くしてこそ初めて農村百年の計畫はその緒に就くことが出來る。之れ以外に農村百年の計はない。之れ以外に農村人口の適當なる收容途はない。況んや今日八釜しい農村社會問題、特に小作問題の解決途の如きにおいてをやであ

る。」

五、

段々述べ來つて既に與へられた紙數を超過した。此の外農村當面の問題が可なり多く堆積して居る。がそれ等に就いて一々詳說して居る餘地はないから、之れから一括してその概說を試みやう。

先づ第一に述べねばならぬ問題は、村の共有財産に就いての問題である。多くの村には動産不動産何れかの形式に於いて多少の財産がある。その財産が極めて尠ない場合には差したる問題は起らない。然し乍らその財産が相當の額に達して居つて、相當の收入を生む場合には、收入處分若くは收入の過程に於いて往々大なる問題を發生し、之れが爲め一村の動搖を來すことが尠くない。勿論その財産が特定の部落有であつて、部落の者に依つて共同に使用收益される場合には、その問題は極めて圓滿に保たれる。然しその財産が村の財産に屬し、村が之れを收入の一財産として之れに依り村税其の他の支辨を計る場合には、その收入及支辨方法に就いて前記の如く問題となる。何んとなれば今までの多くの村に於ける政權は地主階級が掌握して居る。而して此の種の階級は、村の財産を最高度まで運用し、それに依つて生ずる資金を村税に轉換し、以つて自分達の村税負擔の直接輕減を計らうとするのが常である。然かるにその財産を最高度に運用すると云ふことは、必然にそれを使用若くはその果實を購入し、利用する地位にある村の無産階級をして價格の競爭を强ゆるの結果となる。勿論その價格が無入札で極めて低廉である場合には村の有産階級間より之れを購入利用して私利を計るが、既に今日に於いては、無産階級監視の限が鋭いため故意に之れを爲すの餘地はなく、多くは村內競爭の形式を踏むのを常とする。競爭となれば村內の何人にも機會均等であるから「物持ち」でない無産階級は村のものである以上幾分の特定價格で購入出來るであらうことを想定に於いて、何れも或る程度の競爭入札を行ふ。そうすると當然安く買入れられ可きものの亦は借り入れらる可きものも、段々一般市價に比適して來る。否な或る場合にはそれに超過するところへある。斯うなると無産階級は村有財産を利用する上に於いて既に相當の犧牲を支拂はされるのみならず、進むではその收入に依り村税の輕減される場合、村の政權を地主に預けてある以上、地主本位の輕減率が村會に於いて決定されるのは見易い事理である。現に此の例は愛知縣八名郡三上村に於ける「寄洲不定地」問題に於いて如實にこれを知ることが出來る。該村に於いてはその「不定地」

に[illegible]の上に於いて、[illegible]果、之れが他の原因と合して終に無産階級の政府的自覺を促し、大正十一年の村會改選期に於いては一躍に小作人が村政を掌握して終ひ、積年の弊風を一掃するに到つたと云ふ政治改革さへ行はれた。現に此の村は今日に到るも小作人に依つて其の政權が執られて居る。三上村の例は單にその一例であるが、之れに似通つた村有財産に絡まる問題は無産階級の自覺するに從つて隨所に發生して居る。此の問題を今後何う片付けるかは、之からの農村問題解決の上に可なり重要な地位に置かれてある。其の他全國の農村が地價修正の必要に迫られて居る。明治初年、その當時の社會制度、交通狀態並に地味に依つて設定された地價は既に今日の事情とは全然相容れぬものとなつて居り、昔日の沃土今日必ずしも然らず、昔日交通不便の地にありしもの、今日は交通至便の地位に變る等、その間に大なる變遷が行はれて居る。從つて五十年以前に適當であつた地價は、今日多くは不適當の地價となり、其處に國税は勿論地方税負擔の上に於いて大なる不公平を生ずるに到つて居る。之れが改正を計るは村として否な國家として當面最も必要なことゝなつて居る。

此の外農村には造林と治水計畫の問題がある。上流に於ける河[illegible]水害も[illegible]起き出るのみならず、[illegible]する。然るに今では、河川の上流に於ける村と下流に於ける村との間には何等の聯絡が取れて居ない結果、上流村民の利益の爲に下流村民の利益は何時でも否定され勝ちである。亦中には[illegible]村民と下流村民の間にさへ聯絡がない結果、[illegible]續ければその間には直ちに水喧嘩を發生する。今の水利組合では到底此の間の調節を計り得られない結果、今日の我が國に於いては水不足、亦は水過剩の爲に米作が適當に行はれない田地が五十萬町歩近くあるの狀態である。此の種の自然的原因に由來する問題も、農村の大なる問題である。而して之れを解決するの道も前述の如き農村の有機的結合策を置いて外にはない。

次には農村衛生、農村住宅の問題がある。農村の衛生問題は必然に農村の住宅問題の解決を待たねばならぬ。何んとなれば今の社會に於いて農民位ひ原始的不衛生的な住居を爲して居るものはないからである。彼等の住宅は動物と雜居（牛馬）である。彼等の住宅は日光の照射（家屋の奥行が比較的に深か過ぎる關係で）が極めて不充分である。從つて彼等の家族には病患者が續出し易い。亦之を治療すべき機關を持つて居ない（農民問題參照）。彼等の飲用水は雨水進入勝手の堀井戸が然らずん

ば河水である。斯様に述べて來ると右を向いても左を向いても一から十まで疑點を以つて終始して居る。從つて農村衛生問題は農村住宅問題と共に研究されねばならぬ。此の外農村問題としては道路の計畫、學校・社寺、會堂等の施設乃至改善の問題、並に農村社會政策としての防貧施設、兒童及婦人の問題・公設市場（購買販賣兩用の）整備の問題乃至都村の水平問題等がそれぞれ殘されて居る。而して之れ等の問題は今の農村事情から洞察して、可なり重大な問題であり、一日も忽かに附して置けない問題であるが、今はその餘裕がないからその評論は之れを他日に期したい。

結論

農村問題を分ちて農業問題、農民問題、農村問題の三つに分科した私は愈々簡單にでも結論を付けねばならない。

惟ふに農業、特に日本に於ける農業の如き自然的人爲的兩樣の原因から、資本主義化の困難なる事情の下にあるものを、強いて資本主義化さんとするは至愚である。多大の犧牲を拂ひ、其の上に失敗することを念頭に置かなければ室咲きの梅の如く、或は一時的に資本主義化し得られやう。然し乍らさうすることが農業問題（福田君の農村問題）の解決となるものではない。否なそれは反つて問題の新らしい盛り返へしである。農業問題の解決は既に第一項に於いて論決したやうに、一に懸つて農業を社會化することにある。各個經營の不利を排して共同經營となし、個人主義的營利生産を排して、社會的必要生産にその基準を置く可きである。之れ以外に農業問題の根本的解決法はない。次に此の農業經營を擔當すべき農民に對しては、對内關係の軋轢を先づ第一に解決しなければならない。而してその解決の基準は、生産者の地位にあらざる者に生産者としての經濟的利益を奪はれることの不合理を合理化すれば宜しい。分配關係に於いて守られて居る封建の遺制を改めて社會化すれば宜しい。而して土地の所有を知らぬ實際の耕作農に耕作權の確立を約束すれば宜しい。斯くて最底級農民の經濟的地步を安固ならしめることに依つて、中産階級と同一經濟的社會的地位を獲得せしむると共に、他方土地を所有することのみを知つて耕すことを知らぬ階級に、經濟的にその土地を耕さすには居られなくするか、若しくはその地位を引退せしめ、斯くて四階級に分れて居る現在の農民を、次第に耕作農（農業の經營形態が擴大した曉きにはその一端の事務を擔當させても同義になる）と云ふ單一の階級化さしめる。即ち農民と言へば經濟的にも社會的にもホントウの農民であることを立證し得る地位に落ち付かせ

る。斯くの如くすることに依つて、初めて[illegible]の經濟的階級に對する政治も各個にせず、共同目的となすことが出來るし、亦その政治の負擔も大いに削減し得られる。其の他の對外的社會關係、經濟關係、政治關係は斯うすることに依つてのみ、初めて一切が解決されるのである。最後に農村の問題は、その重點を少數の利益から多數の利益へ、有產階級の保護的施設より、無產階級の保護に置くことに依つて、教育及教育費の問題も、人口乃至人材の問題も、村の衛生、村の住宅、村の財產處分問題、造林、治水、道路其の他一切の問題解決の基準が自ら其處に求められるであらう。

之れを要するに一般の所謂「農村問題」は、之れを唯物史觀的に言へば農業がその本體となるかも知れないが、社會的に考へればその中核に坐する農民問題が本體であつて、農業の振興も農村の繁榮も、畢竟は農業を經營し、農村に居住する農民の生活が安定することに依つてのみ、初めてホントウに解決され可きである。（終）（一四、一二、三）

（追記）

倚は筆者の農民問題に對する見解を、詳細に知らんとする讀者は、左の如き諸種の拙著參照を乞ふ。

（一）「小作制度論」（二）「農民生活と小作問題」（三）「小作問題の新

▽環境と文化との關係を論じて儒教の體系及び其革新に及ぶ

文學博士　市村瓚次郎

右一篇は本號に掲載の筈なりしも、頁數制限のため已むなく次號に繰延べたり。この旨并びに讀者の諒知を乞ふ。

廿世紀の謎 世界の驕兒 米國及び米國人の研究（第一部）

米國人の特質、特色

法學博士　米田實

一、

面積三百七十萬方哩の領域に一億一千萬の人口を擁し、七千億圓の國富を抱ける北米合衆國は、十九世紀末より二十世紀前半にかけて、殆んど世界の一大脅威となつて居ると云つて宜い。其政治的壓力は少くとも南隣の獨立國「メキシコ」から南に亘り、グワテマラ、ホンヂユラス、ニカラガ、サルバドル、コスタリカ、パナマ等の中米諸國並に南米の北端に位する二三ケ國に及び、今や殆ど是等を保護國同様の地位に置かんばかりとなつて來た。又其經濟的政治的勢力を云へば、獨り中米一帶に止まらず、南米並びに歐羅巴に及び而して我亞細亞にも及ばんとしてゐる。歐羅巴の戰後の恢復が米國副大統領の名を冠りした獨逸賠償問題解決の「ドウズ」案に、其萌芽を發せんとし、英吉利、佛蘭西、伊太利その他歐羅巴諸國が例外無く二百四十億圓を數ふる對米債務の跡始末問題に惱みつゝあるは、誰か今日之を知らぬものがあらう。又東洋に對しては二十六年前米國々務卿ヘイ氏の支那門戸開放通牒以後、一九二一年及び同二年にかけてのワシントン會議に於ける諸條約に亘つて、誰も如何に同國の勢力が揮はれつゝあるかを看取するに難からないであらう。殊に此國や昨今金貨四方より集り財政狀態更らに一層良好となり、對外活動の機會益々多きを加へんとしてゐる、見よ同國は過去四年間に二十五億圓てふ驚くべき減税を斷行し、四十八億六千萬圓と云ふ巨大なる公債償還をも行ふて、今や國家の費用は一年間四十二億圓を減少し得たではない乎。爲めに米

國民の中央政府公債額は、一九二一年に於ける[illegible]から昨年末に於ける[illegible]即ち約二割に減少を見たではない乎。而して此好況は同國の投資に影響し、昨年夏を以て終る一年に於ける同國内の有價證券吸收高一百億圓に達し、昨年十二月を以て終る一年間に海外公債に應募せる金高二十億圓に達したのである。經濟的に見て斯く好都合なる境遇に立ち大いに世界に活躍するの機運に在る米國が、目下殊更らに世界の視聽を惹きつゝあるのも誰か不思議とするものがあらう。而して斯くの如き時期に於て自然何人の頭にも浮び來るは、米國とは如何なる國であるか、米國人とは如何なる人民であるかと云ふ問題であらねばならぬ。今中央公論社が此問題について各方面の研究及び意見等を集むるのも、亦た極めて時宜に適せる企圖ではあるまい乎。

依つて予も諸名家の驥尾に從ひ少しく米國及び米國人の特質等について、所見の一端を述べて見たいと思ふ。

二、

然らば則ち予の米國及米國人觀はドウかと言ふと、先づ米國と言ふ國は、人間の奮闘氣分が驚く可き自然の恩寵に育てられて、最も自由に、奔放的に發揮せられ居る壇場であり、又た米國人と云ふ[illegible]

[illegible]

く、[illegible]

と、我儕と云ひに[illegible]りと[illegible]に現はしつゝある人民だと評し度いのである。勿論今日の米國は人口的に見て世界各民族の寄合地であり、又た米國と言つても、文化の[illegible]以下諸都市を中心とする人口稠密で且つ衣食足り[illegible]て心ならずも禮節を知つた階級を含む東部もあれば、之より一段落ちる市街[illegible]中心の中部もあり、野性が一層多い南部、西部もあり、一律に論じ難いには違ひ無いが、大體に於て一貫した特色を擧ぐれば、斯く言ふの外は無いのである

而して予は此米人の特色を擧ぐるについては、米國は大體に於て此米人の長所の結果として世界第一の富國となつて居り世界で資源若くは必要とせらるゝ産物に於て第一位を占め、或は然らざる場合も、少くとも第二位を占めつゝあることを同睨せねばならぬ、試みに其一端を言はうか、先づ第一に金産額について之を見るに、約三年前即ち大正十一年の統計に照すも、米國は一億圓を産出して居る、之に次で濠洲は四千萬圓を産出し、加奈陀は三千九百萬圓をメキシコは二千八百萬圓を産出し、我日本の如きは九千圓位しか産額がない。唯米國を凌駕するに三億五

千萬圓を産する阿弗利加あるに過ぎないのである。銀に於ては一億六百萬圓を産し、唯一歩をメキシコの一億三千萬圓に輸するのみで、世界第二位を占むることと金に於けるが如くである。轉じて金銀よりも一層世界の必要品である鐵石炭石油等の鑛物について之を見るに、米國は正しく其第一位を占め居ると云つて宜い。即ち一年に於けるその銑鐵産出高は二千七百二十一萬噸であり、獨逸之に次いで八百四十萬噸、佛蘭西五百二十一萬噸、英國四百八十九萬噸を産出してゐる。鋼鐵に於ても米國は三千五百六十萬噸を産して第一位に居り、獨逸之に次いで九百十四萬噸、英國五百八十三萬噸、佛蘭西四百四十七萬噸を算して居る。石炭にありては米國は常に世界に於ける石炭産額の三割五分以上を占め、大正十年の數字に徴するも實に五億六百三十九萬噸を算して第一位に居り、之に次いで獨逸は一億六千八百六十萬噸を産出して第二位を占め、英國は一億六千五百七十八萬噸を産して第三位に在る、佛蘭西は第四位に落ち日本百耳義等は其後に續いてゐる。石油にありては、世界産額十億樽の中米國は實に七億三千五百萬樽を占めて第一位に居り、英佛以下世界の諸國は遙かに其後に瞠若たる有樣である。今日世界の工業が鐵石炭及び石油を中心とせる形態に鑑る時、米國の諸事業が目下非常な隆盛を來せる所以も自から明かであらう。ところが獨り是ればかりではない、棉に於ては米國は國内に一千七百萬英町の棉作地を有し、其産額五十億封度に達して印度に二倍し埃及に十倍してゐる。我日本に需要する棉の如き主に米國に仰ぎつゝあるは世人周知の事實である。次に家畜類について見るに、牛の數に於て米國は印度にこそ及ばないけれども六千六百萬頭を有して世界第二に居り、佛蘭西獨逸英國等に比すれば少くとも之に四倍若くは五倍せる有樣である。羊に於ては濠洲にこそ及ばないが三千五百萬頭を有して、獨逸佛蘭西に七倍し英國に對しても尚五割方上位に立つてゐる。豚に於ても六千三百萬頭を有して世界に獨歩しつゝある有樣である。穀物の産額は小麥に於て世界産額の四分ノ一を占め、大麥コーン等にありても世界産額の半分若くは三分ノ二を占むる有樣である。

形勢斯の如くなれば海外貿易にありても年額約二百億圓に上り、殆ど英國と伯仲の間にあり、獨逸佛蘭西等に對しては或は三倍――或は四倍し我日本に對しては約七倍を唱へて居る。而して其國富は如何と言ふと英國の二千六百億圓、佛蘭西の一千八百億圓、獨逸の八百億圓、伊太利七百億圓、我日本の四百五十億圓に對して實に七千億圓の巨額を唱へて居るのである。

以上は米國の富と其事業の盛大なる一部を不完全ながら紹介したものであるか、玆に於て問題は起る、斯の如く物質的に發

をなし居るのは何故であるか。是れは、米国人の壮大なる活動と持続なる努力と云ふ[illegible]まつた結果であると共に又た一つには人の過去に於ける、否な現在をも含んでの活動振りの所産と其、反映と評す可きものではなからう乎、

顧みると十五世紀にコロンブスが米国を発見し、次ぎに十七世紀に米大陸移民の途に行はれて以来、欧羅巴より渡航し来れるものゝ生活は、其境遇の必要上奮闘的生活たらざるを得なかつたのである。既往に於ける人間の長き努力により開発せられ居る欧羅巴に於て、過去より継続せる状態を維持せんとする生活とは異り、新しき場所に於て厄介なる自然の障害を征服し、自己の事業を打立てねばならないのが即ち彼等の苦しき然かも或意味に於ては楽しき運命であつた。其苦境と奮闘振は決して尋常一様の事ではなかつた。十七世紀に渡米せるジョンスミス等一行の記録によれば、一隊五百人の中生き残れるもの僅かに六十人に足らずと云ふ如き痛苦も嘗めたのであつた。此困難なる事業の戦闘に於て兎も角も耐え忍び生残つて行くには、非常なる気力と強大なる勤勉とを兼備するにあらざれば到底できないのであつた。而して此点に成功したもの丈けが適者遺存の原則に従つて残り後の米人社会を造り出したのである。今日の米人は斯の如きものゝ子孫として、その気風を継紹しつゝあるこ

とゝ[illegible]如何にして[illegible]
[illegible]
殊に発見された[illegible]
當に[illegible]以上の[illegible]
ある、これは何故であるか。三百年前の米国は自然の富源に於て大なる可能を被れる場所であつた[illegible]である、若し東部より之れを云へばヴージニア、ペンシルヴェニア、紐育諸州に跨つて居るアパラシヤン山脈は豊富なる石炭を有し、その上に此山脈から流れ出づる水流は今や米国内数千の工場に対して、動力を供給する源泉となるに便利であつた。一転西部に至つて云へばロッキー山脈を合む西部一帯の高地は驚くべく豊富な金銀銅鉛等の鉱物を含み、アパラシヤン山脈とロッキー大山脈との間に横はれる平原は、極めて肥沃なものであつた。然も此大沃野にはミスシツピー、ミソリー両河を始めその他大小の河流ありて理想的灌漑を為す等天恵の地勢を占めてゐる。米国には一鎖の山から石炭の谷を通して石炭の山を産むと云ふ奇観があるが是れその如何に自然の富源豊富であるかを代語する奇態と云つて差支ない。斯くの如き富源ありたればこそ、米人が征服し得さ自然の障害と戦ひ偉大なる忍耐と努力とを発揮したことは亦全なる報酬或る意味若くは或場合に於ては之れが相當する以上の

報酬をも收め來つたのであつた、併し之が故に彼等の努力の價値を輕視してならぬことは無論である。それは兎も角としても、我等が忘れてならぬことは彼等の努力が天惠に依つて豫期以上の報酬を得ることゝなると彼等は自分の努力の無用で無く、有効であり、又た賢明な手段であつたことを悟り、此信念と經驗とに刺戟せられて益其努力を傾倒するやうになつて來たのである。即ち奮鬪主義は自然が與へた報酬に依つて、その極めて有用なものであることを深く彼等自身頭腦に浸潤せしめ、爲めに社會を擧げて其氣風に赴くことゝなつたのである。斯くの如くにして奮鬪振は益々發揮せられ同時に益天然の資源は開拓され富力愈增加して來れるは是豈必然の結果ではあるまい乎。

それに、此點に關聯して、米人の奮鬪主義涵養に貢獻した重要なものとして、忘れてならぬのは、米國の領土が年を逐ふて西方に擴張せられたことである、此結果、最初活動せる東部地帶に人口が幾分でも增加すると、自由を好み冒險を愛する彼等は、漸次西へ〳〵と進み未だ手を附けざる地帶に活躍することが一層容易になつたのである、その領土の西進を見ると最初十三州しかなかつたものが、一九〇三年には三千萬圓を以て八十萬方哩のルイジアナを買收し、一八一九年には一千萬圓を以て十數萬方哩のフロリダを買收した。更に其後明治維新前（一八六七年）に於ては一千四百四十萬圓を以て、面積五十九萬方哩のアラスカ買收を行つた。此外或は武力に愬へ、或は巧妙なる術策によつて、隣國メキシコより得たる土地の如きも實に九十三萬五百九十方哩に達して居た。其第一は一八四五年のテキサス合併により三十六萬方哩を獲得し、其第二は一八四八年グワタルペ、イタルゴ條約により五十二萬方哩を獲得し、最後は一八五三年カズフデン條約により四萬五千方哩を獲得したのであつた。斯く領土の擴大するにつれて米人は所謂フロンテア、ライフなるものを引續き實驗し得たものであつた、此のフロンテア、ライフなるものが米人の今日の如き奮鬪的性格を陶冶するに最も力ありしは言ふ迄も無い。即ち彼等は歐羅巴に於ける如く狹小なる土地に多數人口が集合するにあらずして、廣き土地に散布して居り而も山あり野あり河あり湖水あり、時には猛獸の襲擊さへもあると云ふ地帶に於て活動しつゝある間に、彼等が自から養つたものはやはり他の束縛を受けず、自由に我儘に働くと云ふことであつた。餘り他に賴らず自己を恃み堅固な意志と忍耐とによるの外、成功は不可能なりとの考へが彼等の腦裡に浸み込んだものであつた。

今日の米國は從前とは異つて來た、少からず國內の事情に變化を呈して來た。其第一は云ふまでもなく人口の增加でなけれ

ばならぬ、今より六十年前の米國人口は一方哩五人しかになかつたのであるが、九十年前には一方哩七人に増加した。右等數字を茲に掲ぐる必要はないが、その後人口は漸々増加し來り一八八〇年（今より四十年前）に於ては全人口五千萬人を算し、一八九〇年には六千二百萬人を數へ一方哩二十一人平均に増加した。而して一九〇〇年には七千五百萬人に増加して一方哩二十五人となり、一九一〇年には九千百萬人に増加して一方哩三十人となつた、越えて一九二〇年には一億五百萬人を算して一方哩三十五人平均となるに至つた。そこで今日は前の所謂フロンテア、ラインと云ふやうなものは漸次無くなつた、少くとも減少して來た。尤も斯う云ふ生活に於て長く養はれた米人の氣象は、現在に於ても依然として殘存するのである。即ち從前は農園生活鑛山生活が重きを爲し、工業的都市的生活は極めて微少なる分子を占むるに止まつたのであるが、近來都市的工業的生活が驚くべき發展を見ると、米人の活動範圍も多少變化せさるを得無い。併しながらそのフロンテア、ラインに於て養はれたる剛健にして奮闘的なる彼等の性質は、形の異れる事業に移つても、換言すれば都市的生活及び工業的生活に於ても、唯少しく姿を變へて現はれ來るのである。從つて工業的生活に於ても驚くべき個人の奮闘的活躍振を示し、都市的生活に於ても競爭に於けたる定住的生活を營ふことは[illegible]なく、[illegible]爭と努力振を示して居る。而して一面に於ては[illegible]くとも今日米國の富力を來すに至れる次第を爲して[illegible]すべきでもないことである。

是等の點は米國人の特色として今日吾々の諒認しなければならぬ所であるが、同時に認めて差支ないことは、斯う云ふ生活から來たもの、常として幾多の缺點がある。その第一は磨かれて居無いと言ふ短所の存在することである。例へば米國人の如く佛蘭西人の如く、富源が開拓若くは消費せられつゝあつて[illegible]の上危險の地境に多數の人口集合し又た獨立國家が互に境を接して居る歐洲の舊世界に住むものには、協調の必要上、商人なり に自制し讓歩し、協同生活の爲めに自己を空うする必要あるので、大分丁寧で謙遜勝ちであるが、ところが米人は之に反し粗野である。禮讓をも解せない傾きがある。第二、米人は一面に於はるやうな惡人ではない、寧ろ善人である。單純で淺薄な點があつて、甚だ愛す可きところもあるが、其の代りに恐ろしく野次馬的である。たとへば日本人迫害等の例でも、之が若し英國人であれば、假りに日本人を嫌つたとしても之に惡口を放ち、毆ると云ふが如きことはないが、米國人は併いと思へば直に惡口を云ひ毆つたりする、そのかはり談合の結果等により徐々諒

解すれば釋然として融和することも極めて速かである。此等は米國研究者が忘れてならぬ所であらう。

三、

次きに予が米國人の特質として擧げねばならぬのは、その極端なる個人主義であること。それが非常に個人の自由を重んじ、財產の神聖を盲信するところから、政府の如きも、單に個人の便利の爲めに打ち立てられた機關としか考へて居ないこと是れである。即ち先づ米人には多少他人に迷惑をかけても自己の目的を達し生活を改善せんとする傾向あること、其事の是非善惡に拘らず疑ひなきところである。斯る傾向は事業家等に於て最も烈しいが同時に政黨員政治家等の場合に於ても同様である。而して之はどうして起つたのであらうか、其源を質せばやはり英國に於て發達せる個人自由の思想が遠因したるに相違ない。即ち米國に行はれた政治哲學は古くからあつた、アングロサクソンの「リバテイ」と云ふ説であり、英國哲學者ロックの思想などが最も深く米國に入つたものであつた。政府の如き米人から見れば單に個人が自己等の相互的便宜の上から、社會の平和を維持すると同時に、平和裡に仕事を運ぶ手段方法として作り立てた一の機關たるに過ぎないとしか考へて居ない。それ故政府の働く區域權限の如きも極めて狹き範圍に制限され、必要以上に個人の仕事に干渉せしめてはならないと云ふのが彼等の考へである。此思想の現れとしては所謂天賦人權說を本にして書き出されて居る、米國各州の憲法やら各學者の著述等がある。(無論佛國に入つた思想も交つて居るが)即ち總ての人は天然として自由であり獨立である。そして如何にしても他人によつて奪はるべからざる權利を有つてゐる。其權利の中には自己の生命と自由とを享樂し防護する權利、及び財產を所有し之を防護する權利並に幸福を求めて之を得るの權利等を數へてゐる。之はトーマス、ジエツアソンの筆に成つた一七七六年八月二日の米國獨立宣言に徴して知らるゝ所である。

We hold these truths to be self-evident that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights; that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness. That to secure these rights, Governments are instituted among Men, deriving their just powers from the consent of the governed

又た米國四十八州の憲法中、一例としてオハイオ州憲法から引用しやう。同州憲法の權利の保障に曰く

"All men are by nature free and independent, and have certain inalienable rights, among which are those of enjoying and defending life and liberty, acquiring, possessing, and protecting property and seeking and obtaining happiness and Safety."

之はオハイオ州憲法ばかりでは無い、米國四十八州の憲法等には大いに高調されて居る思想なることを忘れてはならぬ、尤も、國家を離れて權利なるものが無く、天賦人權説は正當のものにあらずとの論はその後歐羅巴に行はれ、米國に傳はり、大學などでは相當に説かれて居るが、之は所謂アカデミツクの問題であつて一般人民には關係はない。一般人民は、小兒時代から、米國獨立の宣言やら或は米國建國の精神を反映するワシントンの告別やら、之に似た思想のものを讀んでゐるので、不知不識の間にそれを深く腦裡に刻込んで居るのである。ソコデ彼等が個人本位となるのは寧ろ當然のことであらう。殊に前項に述べた彼等の思ひ切つた我儘な奮闘生活が此個人主義の思想と極めてよく合致することは言ふ迄も無い。尤も序に附言するが茲に云ふ米國人の個人主義は必ずしも日本の一部に於て考へらるゝが如き極端の利己主義そのものではない、所謂吝嗇なる猶太人支那人と同一の利己主義ではない。米國人の利己主義は我[illegible]

[illegible]ロツクフエフーでも、カーネギーでも、イイストマンでもナユークでも近来著しく[illegible]公共[illegible]事業の寄附金を[illegible]では無い乎、是等の連中は非常に努力し往々他人を蹴倒し、幾多の犠牲を生ずるも顧とせず、直進猛闘するが、併し其得たる富は進んで世間に散じて惜まないのである。現にロツクフエフーは十一億五千萬圓をアンドリユー・カーネギーは七億圓を、クリーブランド財團は三億圓を、ヘンリー・フリツクは一億七千萬圓を夫々公共事業に寄附してゐるでは無い乎。その他米國に於て公共事業に寄附せられたる金高は古きは問はず近年の部のみを以てしても、五十億圓と計算せらるゝ有様である。吾々は米人の利己主義を云為するが、其意義に於ては單に黄金を搔集める所謂守錢奴の如きもので無いことを、公平なる見地から彼等の爲めに一言辯解して置かねばならない。

話は枝葉に亙つたが、根本問題に後かへりして、更も何ら個人主義である上に又た極端な活動振りに依りて、政府より民間の[illegible]國に見るやうな官僚民衆は無い、否なそれ程迄に[illegible]

ろ民間事業の奴僕たらねばならぬとの考へが、事業家階級に多いことを忘れてはならない。而して之が著しき例は、同國の外交機關が驚く可き程、資本家の道具化して居ることが是れである。

昨年共和黨中進歩分子ウイスコンシン選出上院議員ラフオレツト氏が、同黨より離れて別に進歩黨を樹立し、新しき政綱を發表して國民に問へる中に、最も注意を惹けるものは米國々務省を以て「米國資本家に傭はれたる機關なり」と指摘せることであつた。それは云ふ迄も無く米國の外交機關が常に米國人の在外事業の發展に極端に努力し、之が爲めには對外干渉も敢て辭せないことを指摘したものである。而して之が顯著なる實例は則ち米國の對メキシコ政策であつた。見よ一九一一年米國政府が三十年勤續の大統領デイアス氏をして位を去らしめ、米國境近き地帶に於て叛亂せるマデイロをして大統領たらしめたのは何故であつたか、是れデイアス氏が其執政の終りに近づくに從ひ、從來協力せる米國資本家と離れ、英國資本家に厚意を表し來つた結果ではなかつたか。又一九一三年米國大統領ウヰルソン氏がメキシコ假大統領ウエルタ氏に反對し、米國境近き方面に於て叛亂を起せるカランザ將軍を助け、遂に翌年ウエルタ氏をして其位を去らしめたのも、やはり米國石油會社の活動が民主黨政府を動かした結果ではなかつたか。その後一九二〇年秋オブレゴン氏正式にメキシコ大統領に當選したけれども、米國は遂に約三年間に亘り之が承認を拒否し、漸く一昨年八月下旬之を承認したのであつたが、其久しきに亘る不承認はメキシコ政府をして米國石油會社に大讓歩を爲さしめんとした爲めではなかつたか。即ち一九一七年以前から所有せる米人會社の油井產出石油に對するメキシコ政府の課税を防止せんが爲め、故らに其承認を肯んじなかつたのではなかつたか。ところが一昨年八月漸く承認するに至つたのは、實にメキシコ政府が米國不承認の結果、公債を外國市場に募集すること能はず、非常なる難局に會し遂に屈服を餘儀なくされ、米國政府と妥協案を講ずるに至つた爲めではなかつたか。獨り是ればかりではない、昨年インマン氏によつて指摘されたるが如く、目下約二十のラテンアメリカ共和諸國政府中、如何なる形式下に於けるを問はず、米國の干渉から免れ居るものは僅か六ケ國しかない、米國は實に其十一ケ國に對して其國の財政權を管理する形式に於て干渉を行つて居る、更に六ケ國に對しては單に財政的干渉に止まらず自國軍隊を上陸駐屯せしめて居る有様である。最も顯著なる例として知らるゝものは、米國が中米ニカラグア國に在つて「自己」の兵力により多數ニカラグア人の反對せる政府を支持しつゝあることとである。這は何故であるか、ニカラガに事業的

對し[illegible]關係を有する大民[illegible]に
出でたるものは、彼等の[illegible]ではあるまい[illegible]
米國が水兵を上陸せしめ干渉した歴史を有するハイチー共和國
は如何、同國憲法を修正させてまでも米國會社に土地所有權を
與へしめたではなかつたか。啻に是れのみに止まらない、現に
米國はトルコのメソポタミヤに於ける石油問題について英國と
爭ひつゝあるが如き、ペルシヤに於て其自己の石油會社の活躍
を援助しつゝあるが如き、或は翻つて支那に於て無線電信問題
其他に就て自國會社を後援しつゝある其熱心なる遣り口の如き
皆所謂米國に於ける私人若くは私人團體が、政府を動すの力強
大であり、又た政府の外交が常に其營利會社の發展を圖るに汲
汲たる實情を證するものでなくて、何であらう。要するに米國及
米國人を見るものは個人主義強く又た民間團體の實力も強く、
此點で一も政府、二も政府と言ふ官尊民卑の東洋の所謂「君子
國」と大差あることを忘れてはならない。

四、

說き去り說き來ると、米國は專ら物質的國家であり、高き理
想もなければ道德もなき我利々々亡者の寄合所帶のやうであ
る。併しながら吾々は又た公平を失はするが爲めに同國の一邊

に[illegible]
[illegible]
の[illegible]
[illegible]物質的發展思想を代表せるものは[illegible]ヴァージニア
州方面であつた。之と異り理想を崇拜し宗教信仰を[illegible]ぶ思
想に深かつた系統は、誰も知る如く一六二〇年有名なるメーフ
ラワー號に乘じてプリマウスに上陸し、[illegible]清
教徒であつた。之は新英州方面で引續き代表せられた。ところ
が日を逐ふて物質的發展は盛んとなつたけれど、同時に[illegible]
的道德的思想は主にキリスト教會若くは大學での地域[illegible]を
中心とし、引續き其生命を失ふに至らなかつた。殊に米國が獨
立したる當時に於ては英國は強者であり米國自身は弱者であつ
た。ソコデ弱者に都合よく強者に不利なりし新英州の道德論は、
新政府を成立せしめ新國民を奮起せしめたる上に於て極めて必要
であつたのである。然らば今日に於て斯の如き米人側の理想主
義的現れは何處に發見せらるゝ乎と言ふと、予が平素[illegible]とする
のは、米國の外交が極端に利己的態度を取り南米中米に於て
不當なる行動を敢てしたる場合、多くは國內に於ても必ず識
者若くは知識階級より[illegible]なき意見及非難の聲が起ることで
ある。他國に於ては夫れ程自由な批評が自國の外交等につい

て起らない場合にても、米國にありては斯の如き非難の忌憚無く高調せられて居るとである。其聲は大局より見て或は微弱であるかも知れないが、併し米人に取つては一の光明であり師表であることを疑はぬのである。予は此等の少數の正しい學者と批評家の存在に對して尊敬を禁じ得無いものである。併し之は一部超凡の名流につき言つたのであるが、一般米人に對する批評では無い。然らば一般米人の場合はドウかと言ふと、それは米人の重大なる利益に惡影響無き場合に於て、始めて正義の聲が起るので、就中米國に近きメキシコ中米でなく之より遙に遠い支那或はペルシヤ等にありて始て所謂正義の友となり弱者の支持者たる例が多いのである。米國は露西亞に對して一九二一年頃飢饉救濟の爲め、多額の金員を費消した。アルメニヤその他近東地帶に對する救濟事業の如きにも數百萬圓を投じて悔ゆる所がなかつたが、是等の救濟は少しも米人の重大なる利害と衝突することゝ無くして、自己の人道上の信念と理想とを滿足せしむる行爲なることを忘れてはならぬ。而して米國人民がその重大な利益と背反せざる場合に、道徳と理想との味方たらんと欲する傾向は、往々自己等の私利の爲めに無關係な國民を利用せんとする事業團、陰謀組をして驚く可く僞善的な陋劣な猾策を弄せしむる機會を造ることをも亦た記憶せねばならぬのである。

併し人或は言はう、そんな事は孰れの國にも見る事例では無い乎と。洵に然り、唯だ米國に於ては、その程度が一層極端であることを言ふに外ならぬのである。

五、

以上で予が言はんとする米人の氣風の大體は説明したつもりであるが、尚一言附加したいと思ふことがある。それは米國に行はるゝ人種的僻見につきてゞある。即ち此點につきては米國の宗教家が多年高調して居た人類平等の精神から、米國人が一歩一歩離れて來たことを否認することが出來無いのである。これは如何なる點から來たのであるか、恐らくは米國人口が我日本本土のそれの如く同一民族にあらずして、幾多の民族を含み、社會が完全に統一融合されざる結果であらうと思ふ。蓋し米國人口は昨年に於て一億一千萬と數へられてゐるが、假りに一九二〇年（大正九年）の人口統計の一億五百萬人を本として解剖すると、此中には一千萬人の阿弗利加黒人が居り、之に次いで二十五萬人のインヂアン土人が居り、十一萬の日本人、六萬人の支那人が居る。支那人日本人の如きは唯地方的に言へばカリフォルニヤ、ワシントン州など太平洋岸に集つて居る。局部的に見れば、決して無意義に閑却すべきものとも云はれない

であらうが、[illegible]の見方[illegible]國の[illegible]に[illegible]ことにはならない。ただ斯かる以上のみを以てしても既に全人口の十分ノ一は白人以外の異人種たることが判る。更に進んで殘りの九千四百萬の白人如何と見るに、其約三分ノ一以上は米國人ならざる外國人系たることを忘れてはならぬ。即ち外國に生れたる白人々口は一千四百萬を算し、之に外國生れの白人を父母とする兒女を合算する時は其數實に三千六百萬人に達するのである。是等の中には無論英人系のものもあるが、相當に多數を占むるものに獨逸人が居り伊太利人が居り露西亞人が居り、波蘭人が居ることを認めねばならぬ。斯く檢し來る時眞の米國人は全數の五割餘にして、他の四割餘は別人種若くは別人種ならざるも外國人系統の白人であることが分る。然かも是等の多くは米人と異れる言語を話し、別の宗教を信じ、別の習慣を有するものであることを忘れてはならない。而して社會學の原則に從へば斯く異れる民族が集團する社會に於て、其社會が動もすれば寛容的でなく、壓迫が行はれ衝突が行はるゝことを、何人も考へねばならぬのである。即ち人種の系統を同うし、同時に文學宗教思想の同一なる社會に於ては、其社會の個人關係も政治も待遇も極めて寛大であり自由である。ところが人種の系統を異にし宗教を異にし教育を異にする民族が容合て、然も各民族の勢力決して之

しい[illegible]生じ易く、政治上で[illegible]ある。[illegible]想にかぶれ來りつゝあることも[illegible]の現象と云ふのであらう、

古き時代のことは姑くおき、十九世紀より二十世紀にかけての米人を見るに、人種差別待遇の思想漸く擡頭し年と共に増進しつゝあつたことは、最も注意すべき點であらうと思ふ。其具體的の現れとしては種々の事實がある。例へば米國四十八州中多數の州では早くより白人種と異人種との結婚を禁ずる法律が設けられて居る。日本人と白人との結婚も或法によつて許されない。之について、憲法論が提起せられ其不當を爭はれたのであるが、裁判所は皆々其正當なることを認むるの解決を下して來た。斯る法律が早くから米國に出來たのはアングロサクソン民族が異人種と結婚をしないと云ふ特性の現はれと見ても差支ない。蓋し佛蘭西人西班牙人等は外國に移住しても多くは雜婚をする例へば南米等にては西班牙人の血と土民の血を混合するもの極めて多く、佛蘭西植民地にも之を發見するが、英國植民地に於ては雜婚は少ない。それだけアングロサクソン民族の所謂ソリダリチーなるものが維持されてゐるのであつて、米國のみならずアングロサクソン民族の多い何れの地方にも同一の結果が生

じて居る。而して此レーシアル、ソリダリテーを守る米人の風こそは民族と民族との待遇を異にする原因の一とならなかつたと言へるだらうか。

尤も米人が人種平等的な、博愛な道り口に出たことも少くは無い。其主なる一例を擧ぐれば一八六八年（明治元年）米國が定めたる憲法補則第十四條である。同補則は恰も人道主義を標榜して起れる奴隷廢止の南北戰爭後制定せられたものだけに、極端に人種平等主義に貢獻する規定であつた。何となれば「何れの州も其法權に服する人に對し均等の法律の保護を拒むべからず」と規定したのである。即ち人種の差別如何に拘らず「人は米國の法律の前には均等に立つものなること」を保證せられたのであつた。同法制定の動機は美しかつた米國建國の精神に遠因を發し、近くは南部諸州の黒人奴隷に對する北部人道主義者の運動が國民的良心を覺醒せしめたる結果であつて、世界の何れの國にも有しない美しい規定として現はれたのである。

世界諸先進國の憲法を讀むも其市民及び人民の權利を保障する規定はあるが、人の權利を保障した憲法はない。即ち「人」と言ふとそれは市民に限るので無く外國人であつても同じく人であるからである。而してそれが均等である以上、外國人に對しても均等の權利を保障するものである。而してそれが白人種たると黒人種たると日本人支那人たるを問はないとは言ふ迄も無い。此規定は一旦米國政治の道德的價値を世界に高からしめたものであつた。併し之が適用は遺憾ながらその後になつて漸次不徹底となつた。米國法廷等は此憲法の保障せる均等の待遇なる文句を徹底的に効果を發生せしむることを避け出したのである。即ちその均等なる文字に變な解釋を下したのであつた。保護の均等、待遇の均等は必ずしも同物的と云ふ意味ではない、一換言すれば一つのものたるを要せず二つのものであつても善い、甲と乙とであつてもそれが相比較して等しければ善いと、言ふのである。此見地からこそ世間に喧しく論議される隔離學校問題等が起つたのである。即ち米國各地方では白人種と異れる黒人種及び支那人との間に學校を別々にし、黒人、支那人等に對し隔離學校を造つたのである。米人の論者は辯じて曰く、白人及び黒人若くは支那人等の有する法律上の保護は同物にあらずして均等である、均等は二個のものであつて別物である、唯二者が相等しいと云ふに止まる、そこで學校の如きも白人の學校以外支那人の隔離學校黒人の隔離學校を造つても善い、唯だ之に對して白人の教育機關に劣らざる丈け設備を爲すに於ては、「同物」とは言へぬとも、「均等」たるを失はないのでは無いかと。世上此主張に對し衷心から首肯し得る人、抑も幾許かあらう。

憲法修正第十四條問題は之れ位ゐにするが、[illegible]
を見ると判然に於て人種的差別の行はれてる事は[illegible]ない。即ち南
部諸國に於て黑人は社會的に種々の虐待を被るのみならず、政
治的には所謂讀み書き資格なるものが設けられ、米國憲法了解の能
力有無を口實としてそれが白黑人間に偏頗に適用せられて否々
參政權を奪はれて居る。それればかりでない、俗に云ふグランド、
ファザー、クローズなるものが南部諸國の憲法に在り即ち其祖
先が投票權を有して居たものゝ、子供に參政權を與ふと云ふが
如き、奇妙なる規定に依つて、祖先以來市民として投票權が有
する白人種の便宜を圖つて居た。而して奴隷廢止以後新しく市
民權を得たる黑人種にはそんな祖先が無いので政權を奪はれて
居るのである。誰かその人種的排斥の猛烈なるに驚かぬものが
あらう。若し夫れ米國人が支那人及び日本人に加へたる人種差
別待遇の如きに至つては、世上度々繰り返へされたところ、今
更ら之を說くの要があるまいと思ふ。而して米人は今や白人種
中に於ても差別策をとらんとし、南西歐洲系の排斥を企つるに
至つた。即ち、昨年四月議會を通過せる移民法に於ては、一八九
〇年の人口率により其百分の二を各國民の一年間入米數と定め
て所謂クオタローローを含めた、是れ專ら伊太利人及び南部歐
羅巴人の制限を目的とせるとは拒み得ざる事實である。是れ亦
たに[illegible]
た。今や白人中に[illegible]
分子に[illegible]して、[illegible]
要するに米國人口の[illegible]人によつて[illegible]、其[illegible]
が外國移民及び移民系統によつて占められて居る異人種混合の
社會狀態の下に於て、米人が政治的にも經濟的にも社會上にも
原則に從ひ人種的不寛容の態度を發成し來り、それが今日の現
象に現はれつゝあることは、遺憾ながら米國及米國人研究に於
て見逃すべからざる點である。

六、

序でだが唯此間に於て最も皮肉に感ぜらるゝは、斯の如く人
種上の差別待遇の極めて盛なる米國に於て、性による差別待遇
の甚だ少いことである。換言すれば世界各國間に於て男女同權
が完全に現はれて居るのは獨り米國あるのみである。現在婦人
參政權なき國も少くない。佛蘭西伊太利を始めとし西班牙葡萄
牙は勿論米國と隣せる中米南米諸國亦其例である。併し世界大
戰後婦人の權利は漸次伸暢され來り、英國は大正七年法律によ
り婦人に參政權を附與し、獨逸又一九一九年憲法に於て同樣參
政權を與ふるに至つた。併しながら何れの國と雖も米國の婦人

參政權の早く行はれた國はない。勿論米全國に亘つて婦人參政權の附與する憲法補則を見たのは一九二〇年であるが、幾多の州は之に先じて同權を與へて居たのであつた。即ち一八六九年(明治二年)ワイオミン州が先づ同權を與へ、次で一八九三年コロラド州が之を與へ、爾來ユタ、アイダホ、ワシントン、カリフオルニヤ、オレゴン、カンサス、アリゾナ、モンタナ、ネバタ等の諸州相尋で同權を與へて居た。現在英國に於ては三十年以上の婦人に同權を與へらるゝに止まり、男子の如く二十歳以上のものが同權を有してゐる譯ではないが、米國にありては男女は完全に同一である。それのみならず各種の要職は婦人の爲めに開放され、辯護士の如き明治二年(一八六九年)イリノイス州に於てブラッドウエル孃が其嚆矢を爲せる以來、裁判官辯護士たるの婦人續出するの有樣である。英國が一九一九年十二月始めて婦人の無資格を法律より取り除き、一九二〇年最初の婦人辯護士を出せるのに比して格段の相違である。婦人にして州の最高法院に判事たるものもあれば、一州の知事となるものも續々現はれつゝあり、その他各種の職業上に於ける婦人の不利なる狀態は年と共に除かれた。參政權の如き諸文明國で形式に於ては婦人に與へつゝも男女間の差別は依然として盛なるに反し、米國にては迅速に男女均等に向つて居る。最近共和黨の如き其黨內の代表に於て男子五割女子五割の主義を採らんとする傾向さへ生じつゝある。已に上述の如き人種差別待遇を特長とする米國が性に於ける無差別待遇を特長とせんとしつゝあるについては、吾々は一種の皮肉を感ぜざるを得ない。併しながら翻つて考ふるに米人自身が速かに性の無差別待遇に進みつゝあるのは同國が矢張り舊國たる歐洲諸國の如く傳統に惱まさるゝ淺いことの賜であらう。唯だ孰れにしても矛盾は矛盾である。但し米人が性の平等待遇と人種の特別待遇との矛盾振りの皮肉を自ら悟るの日は何時であらう乎、予は之を知るを得ざるを悲むものである。

アメリカは成長しつゝあり

芦田　均

一、

太平洋岸から汽車でアメリカを東に横切る旅人はロッキー山からミズリーの岸に出るまでの風景を丁度興安嶺からザバイカルの原野に連るシベリヤの風景に似通つて眺めるであらう。ミネソタの境を越してミスシツピー沿岸の沃野に入ると、エニセイ、オビの河水に洗はれた西部シベリヤの平野に出た心地である。更に東してアルバニーからハドソン河の岸に沿ふ紐育セントラル、ラインの急行列車で窓に入る風景に見とれる者は恰もヴオルガを通りすぎてロシヤ黒土帶のステツプを横切る列車に、膨大に浮上る印象と似通つた心地になると云つても遠くはない。紐育の町の「百萬の足をもつマツハツタン」の摩天樓は、遠く野末に眺めて尚且つ燦として眼を射るモスコー八百八十寺の金色の尖塔と相對比してこゝにアメリカ精神とロシヤ魂とを赤裸々にして立たしめた感がある。

アメリカ大陸を表として、ロシヤ大陸（それは太平洋からカルパツト山脈の麓まで只より外に遮るものなき野と林の陸續を假に名づけてかく呼んだ名である）を裏として、レーニングラードと紐育とが背中合せになるやうに繼ぎ合せたら、アメリカは堂々として日の照る表の門であり、ロシヤは陰鬱しいステツプの奥に[illegible]。

スラーヴは[illegible]東へ東へと[illegible]であり、アメリカ人は西へ西へと起上つた[illegible]である。歴史家の[illegible]何と数へてみようとも人類の原始的精神は遊牧であつたことは疑ひない。人類は其食料と日の光とを求めて新しい土地に移り住んだ。地上の[illegible]如何に[illegible]に充足せらるゝかの程度に比例して遊牧の習慣が決定せられたものに外ならぬ。

アングロサクソンは文明西漸の流に乗つて北米に來り、スラーヴは文明東漸の潮流に追はれて、カルパツトから徐々にウラルを越して擴がつた。英國人が歐洲の邊境生活者であると同じ意味に於てアメリカは歐羅巴の邊境生活者でありスラーヴも同樣に邊境生活者であつた。唯アメリカ人は新しく征服した土地に工場を建て、ロシヤ人はお寺を建てゝ歩いた。アングロサクソンはアリアン人種の「動」的要素を繼承し、スラーヴはその靜的分子を代表してゐる。アングロサクソンは積極的であるが故に野をひらき山を平げて行く處として自己の意力を揮はない處はない。スラーヴは受動的なるが故に蒙古人に下つて被征服の位置をとり入れ、ギリアークを[illegible]處へてこゝに地球上の陸地の七分の一の[illegible]アメリカ人

の征服は谷水の汪洋として山野に溢れるが如き勢を以て行はれロシヤの膨脹は冬が來て氷の結ぶが如くに自然に行はれた。

二、

人類の起原は一の種族より始まるとの論を肯定せしめよ。そして各民族の固有の性癖はその周圍の境涯に依つて異り、風土と人口と富源の多少と、最後に歴史と傳統とに依つて差異を生ずるものであるとの前提を承認せしめよ。こゝにアメリカは其廣大無邊の領土と寒帶より熱帶に跨る氣候の變化とを領し、一億一千萬の人口を容れても、土地は耕して猶餘りあり、資源は全世界を養ふて尚ほ掬き切れない程の資庫とも見られる。その上に大西洋と太平洋は外敵の侵入に對して金城鐵壁の守よりも更に固い防備となつてゐる姿である。

かゝるが故にアメリカ人の精力と活動とは舉げてその内部の充實に向けられた。働けども稼げども無邊際に擴がる新天地は新しい人間を包容して餘あるが故に競走を怖れず、反對を知らず、移住者は一目散に個性の擴大に急いだのである。

資源は莫大であり、精力は何ものの制肘をも受けない新世界に於ては進歩を左右する最大の要素は「時間」である、苟くも無限の需要を眼前にみて事業を初めた者は出來る丈け其仕事を大仕掛に、出來る限り迅速に仕上げることを考へなければならない。古い世界に於て事業を爲す者は先づ其基礎を固めることを考へるのであるが、アメリカの如く日々に變化する新世界に事業を初めるものは凡てが試驗的にそして勢ひ一時的ならざるを得ない。

紐育はアメリカ人の文化の都ではない、土木請負師の假住居である。此處に住む者は繁昌の時期を待つて居る餘裕はない、進んで成功をつかみに出かけるのである。

物事を考へ／＼行ふ際がないからアメリカ人は物事を熟考しないが、然し失敗と成功とを見きめる丈けの腦の働はこれを沈思熟慮と名づけ得る働であるかも知れない。

土地と富とが際限もなく大きいから地理的影響が凡ての經濟と道義を支配してゐる。但し歴史的に觀察すればアメリカは少さい、殆んど無視し得る程に少さい。エヂソンの電氣發明事件を除いては二十世紀以前の世界歴史から抹殺しても影響がない程の微々たるものである。ローマ、アテーンの廢墟を一日で見物することの出來ないのは、累々たる石ころの堆積の大なるが爲めではなくして、其石ころの歴史を學ぶのに長い年月を必要とするからである。アメリカを見物することはアテーンを見るよりも容易である。ナイヤガラの瀧もグランド・キヤニオンも、

一國ゐ一つの纏まれる意志に決して、故にアメリカ人の心理と心理作用とを理解することはナイヤガラ見物とは別問題であつて多少の時間をかけなければならない。

三、

アメリカ人は歐羅巴から移住した寄合世帯の民である。然しアメリカ人は飽くまでアメリカ人にして歐羅巴人ではない。歐洲の文化とアメリカの文化の差は數千年といふ年月である。歐洲の歴史は希臘、ローマの展開であつて、最近世に至つての變化は蒸汽機關と電氣の發明に起因するものである。米國の歴史はヂエームス・ワットが蒸汽機關を發明した一七六九年から始まる。それ以前の困難と歴史は歐洲諸國にとつてこそ意味があるけれども、米國に取つては唯無用の背景に過ぎない。米國は社會として、國として、一の有機體であるに相違ないが、無機的には恐るべき一の機械である。唯物論が大西洋の岸から太平洋岸まで發威を揮ふて突拔けてゐる許りでなく土地の廣いことと、資源の豐富なことが唯物論的思想にプレミアムを附けて、土地を征服したアメリカ人に富を征服せしめた「優美」とか、「プロポーション」とか、逸樂とかいふ言葉は數と、地位と、馬力と、殊に弗とを標準するアメリカ人の多數には沒交渉の觀念である。

アメリカ人にとつては[illegible]
も未だ多くの[illegible]
のやうに未開の天然の富を[illegible]
んとする意力ある人間の[illegible]物質の上に[illegible]して了つた。斯は
物質を測る標準であるのみでなく、人の[illegible]を計る標準でもある。
歐羅巴人から見ればアメリカ人は間に合つた有數である。この石炭から出來る丈の能率を得る爲めに一定の時間の内に仕事をはめ込んで經濟的に最も都合よく仕組んである。フォードは自動車が數百萬のセリーとして作上げられる許りでなく、近代のアメリカがフォード心理を作り出してゐる。ヘンリー・フォード自身は新らしき工業の編者を案出したものと思つてゐるかも知れないが考へて見れば彼も亦時代の產物の滿たる一人に過ぎない。

四、

英人はスポーツを愛し、アメリカ人はゲームに熱狂する。從つて英人はゲームに於て米人の敵ではないが、アメリカ人のもたないスポーツマンシップを了解してゐる。アメリカ人はそのスポーツに於ても勝負の爲めに方法を擇ばない非ながた多い。それ許りではない。アメリカ人のスポーツは餘りに商業的に

車を描いて競技を機械化して了つた。

英國人のゲームを爭ふのは仕事の前後に於ける行樂の爲めであつて、勝負は畢竟其の結論として爭はれる。アメリカ人は屢々ゲームの爲めにゲームに沒頭する。從つて勝たんが爲めにはゲーム即ち一のビヂネスとならざるを得ない。行樂に非ずして勞働となる所以である。職業的野球者が恰もフォード自動車の如く一定の型の内に動いて居るのは最も著しい例證である。

アメリカ人と英國人とを汽車に乘せたら、アメリカ人は機關士になり英國人は車掌になる。アメリカ人は常に何事かをして暮さなければ止まない、英國人は凡てを監督し、支配することを好む。其の中へ日本人を乘せたら、明らかに乘客たることを擇ぶに相違ない、而も車掌、機關士を手古摺らせる乘客に……

五、

各洲が各洲の首府を持つ以前にはアメリカに首府はない。巴里がフランスを代表しロンドンが大英帝國を統率するような意味の首府は存在してゐない。地理的の條件に從つて南部、北西部、西部はオールド・イングランド諸州と多くの相違を持つてゐるが、さてその各地方にも特に中心となる都會のある譯ではない。其結果は各州毎に地方的特色をもち各州の各市が皆異つた色彩を帶びてゐる。デトロイト市の市民が無作法であつてもワシントン市の住民は閑雅であり、フイラデルフイアの市民が物見高いに比べて紐育の住民は極端に自己中心であるが故に一分間も靜止してはゐない。

そこで昔の因襲と歴史の背景がないにも拘らずこの地方的精神は又地方的保守主義を養つた。アメリカの政治は今以てこの鄕黨心の表現に依つて左右せられてゐる。アメリカの議會は民主黨のプラツトフオームで動くのでもなく、共和黨の綱領で左右されるのでもない。上院議員や知事やボッスの鄕黨心で動いてゐる。

アメリカの新聞は同じように地方的色彩で充滿してゐる、アメリカには一の全米的新聞もない。之を英吉利の新聞に比較すると頗る興味ある對照を發見することが出來る。倫敦の新聞は全世界の出來事を相手としてゐて、カムチヤツカの地震でもスピツツベルゲンの洪水でも皆立派な記事として取扱はれるが、紐育の新聞はカムチヤツカの地震よりも第五大路の藥種屋の殺人事件の方が大事件として取扱はれる。

アメリカの政治制度は著しく新聞の發達を妨げた。それはかういふ事情から來て居る。英吉利では議院政治の確立と共に民論が忠實に政治の上に反映するようになつた。議會は民衆の代

要であつて、議院に其意見を貫徹せんためにすることが出來る。議會の討論が政府を左右し、内閣を動搖せしめるといふのであるから議會の討論は新聞にとつて正に大事件であつて、政治家の演說はスポーツ以上の興味を以て迎へられる。

然しアメリカのコングレスの討論は無駄が多くて活氣に乏しい。一般の興味の中心となり得ないから記事としての價値が少い。從つて社會記事が大きな見出しで跋扈する。議會の討論にも世界の出來事にも興味をもたないが、他に何等かの大きな變つた出來ごとを求めよとあらば、新聞紙は勢ひ警察と裁判所からセンセーションを搜して來る外にない。ロンドンの新聞はセンセーションの助をからずして深く廣く生活にふれて行く、そこに英國趣味の高雅な點が見出されるのである。

巴里會議後にヴェルサイユ條約が調印せられた時、巴里の「クム」紙は第一頁に四段の記事を掲げ、タイムスは二段のスペースを費したに過ぎなかつたが、ニューヨーク・タイムスは之に全紙一面を充當した。それはアメリカ人が世間の出來事に昂奮し易いことを示すものであり、英國人が冷靜に物事を處する傾向を暗示してゐるものである。

六、

[illegible]に云へば例へばウイルソン、ルーズヴェルトといふ如き政治家とロイド・ジョージ、ポアンカレ、クレマンソーなどの政治家とを比較すると其處に著しい對照が現はれてゐる。この對照は必ずしも現在の政治家の間に限られたことではなく、十九世紀を通じて既に存した事實であつた。勿論當時世界の舞臺にもアメリカの政治にもその例外はある。ビスマルク、ナポレオン、カヴールといふ如き人はその例外の著しいものである。

然し概して云へばアメリカの政治家の特長にダイナミックで力強くて、自力本位である點であり、歐洲の政治家は一般に靜的であつて、自己の出發點を忘れ得ない。ポアンカレは傑出した辯護人で、理論家で、冷靜な明晰な頭腦の持主であるし、ロイド・ジョージは終始、民衆を率ゐ、民衆に引摺られる政治家である。歐羅巴の政治家は政界に出た時に既にその進むべき途がきまつてゐるのであるがアメリカの政治家はよく其針路を變へて平然としてゐる。ウイルソンでもルーズヴェルトでも一生を通じて屢々其政策を變へたのみならず其の風貌さへも變つて來てゐる。

ロイド・ジョージが獨逸との戰爭を引受けたのは民衆の聲を代表しただけのことであり、[illegible]

家の危機に面した時もこれと同一の事態であつた。然るにアメリカに於てはウイルソンの就職の時にもルーズヴエルトの就任の時にも一般民衆は次の大統領の政策が如何なる色彩を帶びるであらうかといふ事さへ明白に知らなかつた。殊にウツドロー・ウイルソンの世界戰爭に對する態度に於ては最も明白にその政策の變化を見ることが出來る。もしウイルソンが歐羅巴の政治家であつたならば彼は變說改論の故を以て激しい攻擊の的となつたに相違ない。歐洲人は常に一定の政綱政策を通じて政治家を見てゐる。

ルーズヴエルトの對トラスト政策は最初（一九〇六年）カーネギーを驚かした程であつたがいつの程にかそれも變色した。タフトの大統領時代に入つて、ルーズヴエルトは民主黨と共和黨の双方に戸迷した結果遂に進步派の統領となつて了つた、これ等も歐羅巴では多く見られない現象である。

アメリカの政治家は絕えずエヴオリユーションの途上にあるとでも云はうか、少くも彼等は變化を怖れない、故に時として實質以上に偉大に見へ、又時として歐羅巴の政治家よりもずつと傑出したものに思はれる。ウイルソンでもルーズヴエルトでも世界の政治家として見られたのはこの點に負ふ處が尠くない。

太平の世には歐羅巴式の統一のある靜的政治家が其の任務の色彩を以て優れるものと考へられるのは尤である。然し風雲の際にはアメリカ式の政治家がより多く世間の期待に副ふことが出來る。實際家が一躍して大使となり、教授より一變して大統領となつて皆相當の手腕を發揮したのはアメリカ人のこの特質あるが爲めである。アンドリユ・ヂヤクソンは西部の判事から將軍となつてニユーオルリンスの戰役に勝ち、ついで大統領として見事な治績を殘してゐる。リンカーンは名もなき地方政治家から、あれ丈けの大政治家になるのに僅に數ケ月の時間を費したに過ぎなかつた。リンカーン以來の名大統領と云はれるクリーヴランドも亦、もと名もなき一法學生であつたたが一度大統領となるに及んで、無比のステーツマンシツプを發揮したのである。

概して云へば歐羅巴の政治家は適應性を欠いてゐる。アメリカでは意見を變へることとは悪德ではない。要は其人が個性を失はず自己に忠なるや否やに依つて判斷せられるのである。個人の性格が確かである以上、民衆はその政治家を信任して疑はない。アメリカの政治家は獨斷を嫌ふ、個々の事實を事實として研究し、之を一般的の理論と關係なく檢討する。彼等は又屢々決心をした以上頑强に之を主張する。然しこの主張は必ずしも

一致した結果[illegible]ならばこれを變更すべき明白な理由があるか、若くは境遇が變化するまでは其の決心を變へてくる。

要するにアメリカの政治家は深い考を拔けて遠い目的に進せんとする旅人の如きものである。活動力と企業心と突進力、樂天的な氣風とに滿ちてゐる。然しその見解は時として狹苦しいから大局を見ることが出來ない、ウイルソンの失敗の根源は彼の一徹な偏狹な心であつた。

歐羅巴の政治家の責任觀念は中世紀以來の憲法論でこれ上げたものであるがアメリカの政治家は少しも古い因襲と傳說をもつてゐない、自己が責任の地位にあるのは自己の個性に對する信任の結果であると考へてゐる。例を擧げよとならば幾らもある。世界戰爭の當初に於て英國の外相エドワード・グレーは戰の避く可らざることを刻々に知り乍ら和平の決を議會の判斷に任せて自ら責任を取ることをさけた。英吉利人より見ればこれが立憲的行動であつたのであらうけれども、アメリカ人の見地から見れば、これは勇氣と決斷を欠く行爲とも見られるであらう。此間の相違は責任觀念の考であつて、アメリカ大統領は自ら政治の衝に當るにも拘らず、其責任は神と良心とに對する外何人にもこれを負はない、[illegible]には議會には[illegible]

[illegible]たこの[illegible]

これは英國人の了解し得ない[illegible]

歐羅巴の政治道德は自制の觀念から發達してゐる。政治家はこの自制の基礎の上に政治的法則を發し、自己の政見を[illegible]に當嵌ることに苦心して居る。アメリカの政治家は民衆の信任を以て自己の個性に對するものと心得、その政見は[illegible]に於いて行動する。從つて民衆は政見を通じて政治家を見ず、人其ものの性格を論じにおくことを忘れない。ワシントン、ジャクソン、リンカーン又はクリーヴランド等の大政治家は皆その時に於てアメリカ人を率ゐるに充分な人であつた。彼等は其政略や技巧によつて人心を得た者ではなく、其個人的性格に依つて國民の代表者となつたものであつた。換言すれば人格一つのもつて[illegible]になつたのである。

七、

アメリカは大きい、それ丈けに膨脹の國である。膨脹が[illegible]して極しく權衡を失ふことに氣がついてない。其の物質的膨脹に[illegible]見せられてゐる[illegible]にしい。[illegible]メリカ人は[illegible]ない。[illegible]

の片意地の爲めに國際聯盟を發起し、喫煙を停止し（少數の州で）、アルコールの飲用を禁ずる法律を出した。市民の多數はふんだんに煙草をくゆらし、酒をのむことを願つてゐるのであるが、不思議な力で多數が引摺られて行つてしまふ。氣まぐれの風が紐育の一角に吹き初めると全市六百萬の市民が忽ち之に靡いて僅に十數人の熱狂者が全紐育を掌中に收める。それがアメリカである。

佛蘭西で酒精の禁止法を議會に出す者があつたら、フランス人はその議員を罵詈するに相違ない、政府が之を實施したら恐らく暴動を覺悟しなければなるまい。アメリカの禁酒法も勿論嚴守されてはゐないが、それでも容易にこの禁止法が廢止されさうにも見えない。アメリカ人はバーを去つて家庭を發見し、アルコールの代りに自動車を買つた。禁酒法はアメリカのモーラルを救つたのみならず、アメリカ人の經濟を救つた。

アメリカを知らむとする者は紐育のウールウオースの塔を諒解しなければならない。それは單に世界一高い大きい建物であると云ふ許りではない、その建物を組立てた鐵と石とに智的な靈的な或ものを見出さなければならない。こゝにアメリカの魂が籠つてゐる、何かしら大きな理想が潜んでゐる、あの四角な木材を突立てたやうな建物の内にローマのフオーラムにも巴里の凱旋門にも負けまいとする何ものかゞ潜んでゐる。少くともアメリカ人にはかく思はれてゐるのである。

アメリカの未來は底の知れない未知數である。現在の人口が四倍五倍に增加して――その時期は案外早く來るものと思はれるが――西部の片田舍まで資源が十二分に開發せられ、文化の風が吹き渡る時に、アメリカはどう變化するであらうか。アメリカは其特有の文明を產み出しつゝあるが然しこの新しい文明がどんな形で固定すべきかは茫漠として見きめが附かない。「アメリカは成長しつゝある、そして尙無限に成長するであらう。」これだけが現在最も安心して斷言し得る言葉である。（一四・一一・一〇）

此小篇を草するに當りフーフー氏の論文に負ふ處多いことを附記して置く。

米國海軍と日本

水野廣德

○富國と强兵

國家の強弱を最も確實に試驗するものは戰爭である。戰爭を行ふものは兵力である。兵力とは戰爭の爲めに國家が行使し得る總ての戰鬪力である。國家の兵力には常備のものと非常備のものとがある。此の常備兵力が普通所謂軍備なるものである、軍備は之を空間的に區別して陸軍と海軍と空軍とに分たれて居る。今米國海軍を研究するに當り單に年鑑式に數字を羅列することを避け、軍備の本質的に考へて見たい。

抑も兵力は常に人と物との二要素より成つて居る。物とは弓矢刀鎗銃砲艦艇等の如き、敵を攻擊し或は己を防禦する兵器である。兵器が家庭工業或は個人技能に依つて製作せられたる刀鎗時代に於ては、兵力は直接國家經濟の支配を受くること極めて薄く、鎗一筋、刀一振あれば之を世襲して子孫に傳へて戰場に臨むことを出來た。而して刀鎗には多少の利鈍のありしは云へ、正宗の名刀も無銘の新刀も、人を斬り人を殺すに於て多くの差違は無かつた。當時の戰法は一人一敵主義にして、一騎當千の勇士はありしも一銃當千の兵器はなかつた。故に多數の兵器を造くるよりも寧ろ優秀の戰士を作ることが[illegible]肝要の途であつた。兵力の主體は武器よりも寧ろ人にあつたのである。而して兵器を造るには資本を要するも、人を作るには資本の代りに訓練の年月を要した。斯くて世襲的に戰爭を專業とする武士なるものゝ出現を促がした。在れば此時代に於ては經濟力の如何に大なるも直に之に依つて兵力を增大すること能はざると同時に、經濟力は縱令乏しきも人の訓練に依つて大なる兵力を養ふことが出來たのである。即ち經濟力と兵力と、換言すれば富國と强兵とは各獨立的に存立し、富國にして弱兵なるものもあれば、貧國にして强兵たることも有り得たのである。素より富時と雖ども戰爭に巨額の經費を要したるは、古今[illegible]常に[illegible]用金なるもの[illegible]

斷かる軍用金は單に戰時に於ける流用資金として必要なるもので、平時に於て兵力を養成維持する爲めに要する資金とは全然性質を異にして居る。

往時經濟國際道德佝ほ低く、國際公法未だ定まらず、弱者に對する侵略征服が强者當然の權利と認められたる時代に於ては、從令國は貧しきも兵力さへ强ければ富國を征服して其の富を侵換することが出來た。故に富國强兵の兩全を得ずとすれば、富國弱兵たらんよりは寧ろ貧國强兵たる事が自己保存の途であつた。されば各國ともに國を擧げて兵力の增大に力めたのは時代の然らしむる處である。即ち國防の上に於て兵力は主で經濟は從であつた。彼の所謂軍國主義思想なるものは此處に發生したのである。我國の軍國主義者が今尙ほ「古來富國弱兵にして亡びたるものあるも、貧國强兵にして未だ曾つて亡びたるものを見ず」などと說くは、斯かる舊夢に拘はれて居るが爲めである。

刀劍廢れて銃砲の發明せらるゝに至り、兵器の製造は家庭工業より工場工業に移り、個人技能より機械の能力に轉じ、茲に初めて狹き範圍に於ては兵器と工業、廣き範圍に於ては兵力と經濟との密接なる關係を生じた。爾來兵器の發達進步に伴ひ兵器工業は益大規模となり、兵力の增大には直接經濟力の後援を必要とするに至りたるのみならず、兵器の精鋭は一銃當千の器の出現に依りて一騎當千の士をして全然無力ならしめ、兵力の主體は人よりも寧ろ武器たるに至つた。斯くて世襲的武士なるものは自然に消滅し國民皆兵主義となつた。即ち刀劍を振ふ人の戰爭より人を使役する器械の戰爭に轉じたのである。殊に歐洲大戰の實驗に依り、戰爭の勝敗は一に精鋭多量なる兵器彈藥の供給如何に依つて決することと明らかとなり、之が供給不充分なるものは、人如何に多く、人如何に勇なるも、到底勝利を得ること不可能となつた。而して精鋭多量の兵器彈藥を製造するには大工業力を要し、大工業を營むには大資本を要し、大資本を得るには大なる經濟力を有たねばならぬ。故に經濟力大ならざれば大なる兵力を保持運用することが出來なくなつた。是に於て兵力と經濟力とは主從其の地位を轉換し、兵力を强くせんと欲せば先つ經濟力を增さねばならぬことになつたのである。即ち富國は强兵を保ち得るも、貧國は到底强兵たり得なくなつたのである。現代に於て富國と强兵とは二にして一である。此の理を覺らず、自國の經濟力に目を閉ぢて徒に軍備軍隊の數を算へて强國を誇る國民こそ哀れである。

○富强米國

米國は現代に於ける世界第一の富國である。其の國土は廣く。其の人口は多く。其の工業は盛んに。其の物産は豐富に。而かも其の財力に至りては世界の金の三分の二を所有せりと云へ傳へられて居る。從つて米國は世界第一の富國である。少くも世界第一の強國たり得るの資質を備へて居る。兵力の競爭に於て世界何れの國も其の矢面に立ち得るものはないであらう。曾て八八艦隊を計畫し米國海軍と競爭を試みたる我國の如きは忽にして財力涸渇し。華府會議の開催に依つて辛ふじて醜状を暴露せずに濟んだ。英國の富と大とを以てするも今や米國と競ふの力なく。華府會議に於ては千年傳統の國是たる海軍優越權をば脆くも抛棄した。華府協定が曲りなりにも案外容易に成立したる所以は。會議の背後に潛む米國の偉大なる富の力の威嚇が與つて力ありたることを否むことは出來ない。左れば若し米國にして世界の平和を念とせず。其の國力の許すに任せて軍備の擴充に力めたらんには。世界を舉げて銑砲艦艇の製造所と化せしむるに至るであらう。

米國の富は大である。米國は英國と竝んで實に國際的資本國である。世界の三井三菱である。現代經濟組織の下に資本家が國内に於て跋扈する如く。資本國が國際に於て跋扈するのは止むを得ない。無産者が資本家の横暴に苦しむ如く、無産國が資本國の[illegible]て國家の權力を自由にする如く。資本國は[illegible]の兵力を自由にする。ここに[illegible]るであらう。世界所有權の既に決定したる今日資本國の望むところは現状維持である。無産國の望むところは現状打破である。國際聯盟や華府會議の軍備縮小が世界平和と云ふ美名なる精神に因據せることを我等は寸毫も疑ふものでない。併しながら形に現はれたる事實の上より見れば。恰かも資本國が已に有利なる現状維持の爲めに無産國の擡頭を抑ゆる一種の國際的治安維持法であるとも考へられる。乃ち之に依つて資本國は枕を高ふして其の既得の權利を樂しむことが出來る。資本家を擁護する爲めに治安維持法が必要なる時代に於て。資本國を擁護する軍縮會議の必要なるは當然と云はねばならぬ。とは云へ我等は華府協定を以て斯かる不純の目的と信ずるものでない。我等は華府協定が大にしては世界の平和。小にしては日本の安寧に寄與すること甚だ大なるを認めるものである。縱令一部論者の言ふ如く。米國の日本壓迫の爲めと假定するも。萬一米國にして軍備縮小の代りに兵力競爭の途に出でんか。日本が之と對抗せんが爲めには我等國民はパンの代りに火藥を嚼み。衣の代りに鐵を捲かねばならぬであらう。國際政局の上より米國の軍縮を[illegible]

るには、單に軍艦の隻數噸數を比較して多寡を論ずるばかりでなく、軍備の奥に潜む或物を考へねばならぬ。

○米國國防の大弱點

北米大陸の中央部に占據し、約三百萬平方英哩の尨大なる面積を有する米國は、東には約三千海里の海岸線に依り大西洋を距てゝ歐洲と相望み、西には約千五百海里の海岸線に依り太平洋を距てゝ亞細亞と相對して居る。而して其の東西兩海岸は北は北氷洋に塞されて通ずるを得ず、南は巴奈馬運河の開通までは遠く南米の南端を廻つて辛ふじて相通ずることが出來た。左れば巴奈馬運河の開通前に於ては東海岸の紐育より西海岸の桑港に到るには、紐育より英國に到る距離に約三倍半し、西海岸の桑港より東海岸の紐育に到るには、桑港より日本に到る距離に約二倍半し、東西兩岸互に相呼應することが出來なかつた。左れば歐洲に對する大西洋海軍と東洋に對する太平洋海軍とは全然獨立海軍の狀を呈し、相互應援の戰機を捕ふることが出來ない。是れ勢力の集中を以て戰略の第一要件とする海軍作戰上に於ける米國々防上絕大の缺點不利であると云はねばならぬ。

之を以て東西兩海岸の連絡を容易ならしむる爲め巴奈馬運河の開鑿は米國々防上絕對の緊要事で、縱令如何なる犠牲を拂ふとも遂行せざるを得なかつたのである。巴奈馬運河開鑿の爲め米國の執りたる手段は國際正義の上に於て重大なる不法行爲であつた。併し同國の安全の爲めには隣國を併呑するも可なりとせば、獨り米國の不正のみを責むることは出來ない。

巴奈馬運河の開通に依りて米國東西兩海岸の連絡は著しく短縮せられたりとは云へ、然かも尙ほ紐育より桑港に達するには約四千五百海里を算し、紐育倫敦間よりも尙ほ遠く、桑港橫濱間よりは稍や近く、十五海里の速力を以てするも運河航過時間を加へて十四五日を要するのである。其の集中作戰と兵力移動の困難なることと我が橫須賀佐世保が指顧の間に相響應するが如きと同日の比ではない。之をしも大國の悲哀とでも云ふべきか。東には英國、西には日本の大海軍國を控へ、各之に備へねばならぬことは、米國に取りては國防上治し難き大弱點である。東の方英國に備へんが爲め、其の艦隊を大西洋に集むれば太平洋が留守となり、西の方日本に當らんが爲め、其の艦隊を太平洋に移せば、大西洋が空となる。左れば米國は現在華府協定の海軍勢力を以てしては、同時に日英兩國を敵として戰ふことは出來ないのである。是れ華府會議に於て米國が日英同盟の廢棄を要求したる所以にして、海軍協定に依りて海軍勢力を制限する以上、米國としては國防上當然の要求である。米國が其

の[illegible]たる海軍擴張の任りを[illegible]、[illegible]の不利を思ひながら、五五三の比率を以て甘んじたるに、米國として相當大なる犠牲であることを諒とせねばならぬのである。

米國は北に加奈太と境を連ね、南に墨西哥と境を接し、其の延長數千哩に達するも、何れも米國に取りては恐るべき敵でない。左れば其の國境に於て一座の堡壘を設けず、一門の砲を備へず、其の陸軍の如きも日本に十一倍する國土に對して正規軍僅に十五萬人に過ぎない。米國の恐るゝところは寧ろ海外の敵である。即ち東に在つては英國、西に在つては日本である。而して米國の最も恐るゝ處は日英の聯合である。故に軍事的見地より言へば、日本が米國を牽制するには英國と親善關係を保つことが最良の策であらねばならぬ。日英の[illegible]は軍事的に於て米國の最も希望するところである。日本が隣邦露支と親善を保つことは國策上總ての點に於て必要且つ有利なるも、彼の日露獨聯盟の如き大戰前の夢を追ふて米國に當らんとするは、是れ英米の聯提を促成するもので、而かも其の衝擊の局に立つものは獨り我が日本である。

○米國海軍と日英海軍

華府海軍協定は誰が何と評しようとも、又其の動機が何れに

あ[illegible]

あ[illegible]日[illegible]

	隻數	排水噸
米國	一八	[illegible]
英國	二二 內[illegible]一	[illegible]
日本	一〇 內[illegible]	[illegible]

である。建造年代並に備力等を考慮すれば[illegible]に於て五五三の比率となる（陸奧存置の爲め日本は艦力に於て若干不利となれり）。

巡洋艦以下の補助艦に至つては華府會議に於て比率量に協定するを得ざりしも、米國は過去の[illegible]政策に於て專ら主力艦中戰艦の建造にのみ重きを置き、自ら巡洋艦の建造を怠りたる爲め、其の現在勢力は主力艦に對比して極めて劣勢である。多年モンロー政策に立籠つて世界の政局外に超然したる米國は、海軍の必要に目覺めて世界の海軍競爭場裡に乘り出でたるは一八九八（明治三十一年）に於ける米西戰爭以後にして、殊に日露戰爭の結果日本海軍の勃興に刺戟せられたる以來である。此時に至る迄米國は世界の[illegible]として、又世界の[illegible]有國として、歐洲に於ける各國海軍の何れに[illegible]、其の海軍の如きも[illegible]の下位に在り、日本と[illegible]

ある。然るに布哇を併合し、比律賓を占領し、領土が海外に存するに至るや、米國民は漸く國家意識に目覺めて國防の必要を認識すると共に、戰爭に對する興味と恐怖とを感ずるに至つた。

初めて國防の切要を悟りたる米國民が其の長き海岸線に立つて世界を眺めたる時、東に強大なる歐洲の海軍諸國あり、西に新興氣鋭の日本あるを見て、忽ち不安と恐怖との念に驅られ、突然として海軍擴張の叫びを舉げた。「海軍擴張」と「巴奈馬運河開鑿」とは忽ちにして米國民の合言葉となり、巨資を惜しまず之が實行に着手した。由來海軍の主任務は國土の防衞と海運の保護とである。而して國土の防衞に任ずるものは主として主力艦にして、海運の保護に任ずるものは專ら巡洋艦である。防衞すべき長大なる海岸線を有する米國、海運に待たずして自給自足し得る米國が、其の海軍の急速擴張を行ふに當り、先づ國土防衞に任ずべき主力艦に重きを置き、海運保護の巡洋艦を後にしたるは、後進の海軍國たる米國の海軍政策としては不當の計ではなかつたのである。

斯かる事情の下に米國の巡洋艦は極めて劣勢である。其の實勢力は恐らく日本よりも劣つて居るであらう。既に主力艦の協定が成立したる今日は、米國が其の巡洋艦の擴張を企つるは、戰爭を目的とする軍事的見地より論ずれば當然と云はねばならぬ。唯問題とすべきは立國の基本を海運に據する日本並に英國に取りては、之が保護に任ずる優勢なる巡洋艦は絶對に必要なるも、自給自足の米國に取りては巡洋艦の必要は多く戰略戰術上の要求に過ぎない。多少の語弊はあるも、我は死活の問題彼は便宜の問題である。米國が強ゐて巡洋艦の大擴張を行ひ、延いて海軍競爭の端を作るが如きことあらば、米國が常に口にする世界平和と軍備縮少の誠意を疑はざるを得ない。併しながら現在の米國巡洋艦が其の主力艦に對比し甚だ劣勢にして軍事上の要求に副はざることを我等は否認するものでない。故に米國が戰爭を目標として巡洋艦の擴張を行ふに對し、我等は軍事的に之を拒否するの辨を持たない。

艦齡十五年未滿の日英米三國巡洋艦の現在勢力（建造中並に未起工のものを含む）を比較すれば左の通りである（多少の誤差あるを免れず）、

日本	二五隻	一五六、二〇五噸
英國	四七隻	二六七、七九〇噸
米國	一八隻	一五五、〇〇〇噸

驅逐艦に至りては米國は三國中に於て斷然頭を抜き、艦齡十一年未滿のものに就きて見るに、

日本　一〇〇隻　一一九、四七八噸
英國　二〇六隻　一四二、六七五噸
米國　二九六隻　三三七、五四一噸

である。米國が斯く多數の驅逐艦を有するは、歐洲戰爭中獨逸潜水艇の破壞と米國運兵船の掩護用として戰時特殊の要求に促され急造せられたるに由るのである。されば主力艦に對比して巡洋艦の不足せるに反し、驅逐艦は寧ろ大きに失して居るのである。

次に潜水艇に於ては現在勢力

日本　七八隻　七七、四七四噸
英國　七四隻　六〇、三一八噸
米國　一三一隻　九九、七三四噸

にして是れ亦米國は第一位を占めて居る。

○補助艦艇と華府會議

華府會議に謂ふ所の補助艦なるものは巡洋艦、驅逐艦、掃海艇、敷設艇、航空母艦の如き主力外の水上航艇と潜水艇との總稱で、之を水上補助航艇、潜水艇、航空母艦の三部類に區分して居る。華府會議に於て米國より提出したる補助艦艇の比率原案は左の通りであつた。

	水上補助艦艇	潜水艇
日本	二七〇、〇〇〇	五四、〇〇〇
英國	四五〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇
米國	四五〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇

右に對し日英兩國は孰れも主義に於て米國に同意したるに拘らず、英佛の關係に於て遂に不成立に歸し、僅に航空母艦に於てのみ左の比率が協定せられたのである。

日本　八一、〇〇〇噸
英米　一三五、〇〇〇噸
佛伊　六〇、〇〇〇噸

斯くて水上補助艦艇及潜水艇は各國の自由建造に放任せらるること〻なり、今日既に巡洋艦建造の競爭を見んとするに至りたるは誠に遺憾の至りである。現在に於ける日英米三國の水上補助艦艇勢力（巡洋艦及驅逐艦）を比較すれば、

日本　二六五、六三三噸
英國　五一〇、四六五噸
米國　四九二、五四一噸

となり、日本の現勢力は華府會議に於ける原案と略等しく、英米は共に二割程を超過して居る。故に若し日本が此等三國間の比率を米國原案の如く決定するとせば、日本

今日巡洋艦の擴張を爲し得ないのである。必要か不必要かは別とし、自國の優勢なる驅逐艦の勢力を度外に置き、單に巡洋艦の不足のみを唱へて之が擴張を圖るは、華府會議に於ける自國提案の精神を無視するの謗を免れぬのであらう。

元來軍備の大小は他國のたと相對的であるとは云へ、軍備に絶對の限度なるものはない。國力にして之が實動に支障なければ軍備は其の本能上多々益辨ずるのである。茲に國際協定に依る軍備制限の必要が生ずるのである。或國が其の資力の有るに任せて無制限に軍備を擴張する如きことあらば、世界の不安爲より大なるはない。我等は速かに第二華府會議が開催せられて一層有効なる海軍協定の制定せられんことを望むや切である。

○米國海軍と太平洋

英米戰爭を假想したる場合、米國が日本に顧慮することなく其の全艦隊を大西洋方面に集中し、而かも乘員の技能と艦艇の機能とが同一なりとせば、勝敗は一にチャンスに屬する。日米戰爭を假想したる場合、米國が後顧の憂なく其の艦隊の大部を太平洋方面に集中するを得ば、日本海軍の侵襲を防止することが出來る。殊に布哇にして其の守りを失はざれば、日本海軍は恐らく布哇以東に策動することが出來ぬのであらう。布哇こそは太平洋上に於ける米國海軍作戰の中心である。米本國より四千海里乃至六千海里を距て、而かも防備の制限せられたるグアム、比律賓の如きは、米國に取りて戰時何等の重きを爲すものでない。

米國は本國並に屬領に大小二十有餘の軍港要港海軍根據地及び造船所修理工場貯炭所等を有して居る。而して其の大多數は大西洋岸に位置し、太平洋岸に在るものは「ピユーゼット、サウンド」「メーヤアイランド」「サンペトロ」「サンディエゴ」等である。元來米國の太平洋岸は海岸線の屈曲少なくして良港好灣に乏しく、「サンディゴ」は航空隊の根據地、「サンペトロ」は驅逐艦潜水艦の根據地、「メーアイランド」は修理工場に過ぎず、目下計畫中なる桑港の大軍港完成せざる今日、太平洋岸に於て大艦隊の策源地たり得るものは僅に「ピユーゼットサウンド」の一軍港あるのみである。而かも米國海軍は其の主力艦十八隻中、十二隻と之に伴ふ巡洋艦驅逐艦以下多數の艦艇を太平洋方面に配して居る。亦以て米國が如何に太平洋方面の防備に重きを置けるかを窺ふことが出來る。太平洋に對する警戒は言ふ迄もなく日本に對する警戒である。日本が財政難に苦しみながらも而かも倘ほ遺り繰り算段して大海軍を備ふる所以も亦主として米國に備へんが爲めである。

最近年度に於ける[illegible]に對し[illegible]にして一國民の負一割余に當つて居る。之に對し日本の海軍費の比率は[illegible]余當にして國民の一割余である。即ち日本國民の海軍費負擔は米國民の負擔に比して約二倍半の割合である。更に米國の國富は少くも日本の國富に五倍して居る。故に國富に比して海軍力を備へんとすれば、米國の五に對して日本は一の比率である。然るに實際に於て日本は米國の五に對して三の海軍力を有して居る。即ち日本の海軍負擔率は米國の夫に三倍して居る。夫れだけ日本の文化施設は米國よりも遅れる譯である。而かも此文化進歩の差は算術級數でなく、幾何級數的に增すのである。我等の子孫の代に於ける日本文化の差を思ふ時、我等は徒に日本海軍の優勢を謳歌するの氣にはなれない。

抑も日本と米國とは互に十六吋の砲口を差向け、五千海里を距てゝ睨み合はねばならぬ理由があるのであらうか。惟ふに米國と雖とも、武力に依つて日本をブツ潰す氣は無いであらう。日本と雖も武力を以て[illegible]非律賓を奪ふ心を持たぬであらう。他國との關係を離れ、日米兩國の間に於て假りに相互の軍備を撤廢したる時、米國より不法に日本の利權を支那より驅逐するであらうか、日本の移民は無理やりに米國に向つて[illegible]するであらうか。武力が有つてすら[illegible]し得ざる事は武力が無ければ尚ほ

[illegible]ない事で[illegible]る。[illegible]
の要素に[illegible]

○米國民と米國魂

如何に己惚强き日本の軍人とても、如何に[illegible]なる日本の軍國主義者とても、數字を瞞くの力なく、米國の國力が日本の國力よりも遙かに優つて居ることを否認しない。而かも[illegible]等が日米戰爭を唱へ其の勝利を說く唯一の根據は人の問題である。彼等は口癖の如く日本人の忠誠を說き、勇敢を說き、愛國心を語り、大和魂を以て世界に冠たりと稱へて居る。我等とて戰場に於ける日本軍人の忠誠と勇敢とを疑ふものではない。出征凱旋兵士に對する御祭的歡迎を見ては、さうした日本人の愛國心の旺盛を認めざるを得ない。歐洲戰爭の實績に目を閉ぢてなりと、大和魂の世界に冠たらんことを欲するものである。

兵力が人と物との結合力である以上、兵力の[illegible]たる戰爭に人の優秀を必要とするは言を待たない。併しながら前述べた如く、現代兵力の優秀は人よりも寧ろ物に屬する。物の優秀は人の優越よりもヨリ多く兵力の能率を高からしめる。而して物の要素は資と[illegible]とである。[illegible]る。同じの日本の[illegible]も、米國の[illegible]、其の[illegible]

ど左等がない。唯單に於て米國は日本に對し五と三の優越を持して居る、故に人に於て日本が米國に對して三と五の優越を保ち得るならば、即ち米國の彈丸が三發我に命中する間に、日本の彈丸を五發彼に命中せしめ得るならば、算數上に於ては日本の海軍は米國の海軍に對抗し得る勘定である。然るに測距より照準發射に至る迄殆んど機械化したる現代の射擊術に於て、是だけの優越を保ち得ることは大なる疑問である。

日露日獨の戰爭に於て大に大和魂を發揮し、「勇敢なる小褐色人」との世界的喝采を博したる我國民は、曾て歐洲人の戰爭勇氣を疑つた。血を見れば逃げ出し、砲聲を聞けば腰を拔かすかとさへ疑つた。然るに歐洲戰爭は我國民の豫想を裏切り、獨逸魂、佛蘭西魂、英吉利魂など續々優良品が現はれ、世界の專賣特許と信じたる大和魂をして顏色なからしめた。唯亞米利加魂だけが未試驗に殘つて居る。左ればにや我が國民は今尙ほ米國人の戰爭勇氣を疑つて居る、否な寧ろ之を輕蔑して居る。拜金國民が一死奉國の精神などを有つは潛越かの如く考へて居る。恰かも歐洲戰爭前、獨逸人が英國民を評して「十露盤持つ手で鐵砲は打てぬ」と嘲つたのと同一心理である。此の獨逸人の輕侮心こそ、獨逸を今の悲境に沈倫せしめたる一因である。

米國の軍隊は陸海軍ともに全部志願兵制度である。從ふて海軍の如きは常に募兵難に苦しんで居ることは事實である。愛國心を自負し、兵役を名譽とする我國の如きも、徵兵制度を廢止せば果して幾千の志願兵を募集し得るかは大なる疑問である。故に兵役志願者の少なきことを以て直に其の國民の勇怯を卜知することは出來ない。歐洲戰爭の際米國は僅に一個年間に二百萬の軍隊を編成したる驚くべき歷史を持つて居る。

米國は勞銀の高き國である。金儲の多き國である。勞働者の生活の安易なる國である。從ふて職を不自然且つ不愉快なる海上に求むるの必要がない。是れ米國海運業の發達が後れ、米國海軍兵の志願者少き理由である。華府會議に於て米國海軍に許されたる人員十一萬五千に對し、米國は更に同發時に水兵八萬六千、海兵一萬九千、合計十萬五千人に減員し、爲めに多くの艦艇は定員を缺いて居ると云ふことである。或は水兵募集難に由るのかも知れない。併しながら戰前百噸以上の船舶五百五十萬噸を有したる米國は今や約千九百萬噸（日本約四百萬噸、英國約二千二百萬噸）の船舶を有するに至りたるが爲め、戰時海軍兵の充實は困難ではあるまいと信ぜられる。

米國は世界各國民の寄合世帶である。斯くの如き國民に愛國的團結力と義勇奉公の精神とが有るや否やは多少疑はしき問題である。併し歐洲大戰に際し米國民が示したる擧國一致の愛國

的行爲に、決して他の國に於て[illegible]人の在米獨逸人をして[illegible]に對せしむ。米國人の米國なるものを奪ふことは出來ぬ。白人に對する獨逸人に對してすら倘ほ然りである。況して日米戰爭を豫想する場合、彼等の團結するは必然の勢である。

太平洋海軍の戰爭は鐵艦を以て圍まれ、海水に依つて限られた逃げも隱れも出來ぬ軍艦内の作業である。銃劍の突撃でもなく、斬壕の强襲でもなく、唯大砲を操縱し、機械を運轉するばかりで、個人の技術は戰の勝敗に多く關係しないのである。しかもナイアガラの瀑布の上を綱渡りしたり、紐育の摩天閣の上に[illegible]著でないことを[illegible]と。[illegible]はない。

我等は米國人の米國魂を以て戰ふることの偉大なると共に[illegible]備ることはたしかなる事である。米國の兵力を改造するに當り、其の人的要素は彼我同等のものとして考慮するにあらざれば、更國民に對したる獨逸人の心理を繰り返へすであらうことを恐れる。

米國に於ける政黨勢圏の現狀

外務省亞細亞局長　木村鋭市

よくアメリカの政治及び外交に關して屢々耳にする事はアメリカでは弗が政治を支配して居る、三百の財力の中心巨頭が政治外交を左右するといふ意味で外交は所謂弗の外交である、斯う云ふ風に屢々人の口に上せられる所であるが、米國現時の政情を實際に見ると必ずしも三百の經濟上の大勢力が人の謂ふが如く政治を支配して居るものでない。アメリカの政黨の勢力範圍即勢圏又は原動力の變遷に就ては大體三期に分けて考へなければならぬではないかと思ふ。所謂第一期は十九世紀の[illegible]から

十世紀の初めに掛けてアメリカが盛んに東の方から西の方の人跡の到らない所謂ミソシツピーの河畔からロッキー山を越して太平洋沿岸まで發展する最も盛んな時期である、アメリカの人はこれをパイオニヤの時代と云うて居る、パイオニヤ即先驅者が未開の曠野に移住定着の魁けをする時代、即西部諸國開發時代でその時代に於ては少なくとも所謂邦が政治を支配して居る。否、大なる事業家資本家が政治を支配して居る、何故さう云ふ風になつたかと申すと、アメリカの發展は全く鐵道の結果である、あのアメリカの大陸を横斷する所の數多の鐵道が敷設された時代の話である、これが第一にアメリカの經濟上の發展の原動力になつて居る 隨つて鐵道が先づ未開の地に敷かれて、さうして鐵道會社が要所々々に市街を開いた、これをシカゴから以東と以西に分つて見ると、シカゴ以西は少なくとも鐵道會社の力に依つて新に開かれたと云うて宜しいのである、この時代に於ては村も町も都會も皆鐵道を中心として出來た、隨つて鐵道會社と云ふものゝ、この地方に對する勢力は他の者がこれを動かすことが出來なかつた、所謂ハンダビルとか、ハリマンとか云ふやうな當時の連中が盛んにアメリカの政治の裏面から、又表面から左右して居つた時代である、御記憶であらうけれども滿洲鐵道中立問題に就ても、最初にその問題を考へた者は所謂ハマリンである、即ち鐵道王の勢力が獨りアメリカ内のみならず、アメリカの外交上にも大なる勢力を有つて居る、況んや政黨の方面に於てはニユーヨークを中心とした鐵道關係の財力が大いに勢力を振つたのである。

第二期は即ち鐵道の發達に作つて各種の製造工業が西部に勃興した時代である、その以前までは東部諸州、所謂ニユーイングランドの關係の十三州の方面、例へばマサチユセッツであるとか、殊にフイヤデルヒヤをその中心として有ゆる工業盛んになつた時代は既に去つて、更にさう云ふ製鐵事業も、銅山に關する事業も、他の各種の工業も漸次東部諸州から轉じてシカゴから以西の方に盛んになつた、例へばアメリカの工業中で一番大きい製鐵、殊に製鋼事業は、大體諸君の耳に屢々觸れて居る所の所謂ユーナイテツト・スチール・カンパニイがピッツバルグを中心にして大合同會社が出來た、これは矢張り東部諸州が中心である。これに對抗して中部の方のベツレヘム・カンパニイと云ふものがある。これが今言ふユー・エス・スチールに對抗する程勢力を有つて居る、石油に關してはヒヤデルヒヤが中心であつて、殆んど我々が地理や歴史を學ぶ時に、石油其物は東部のヒヤデルヒヤが中心であつたやうな時代を思ひ起す、併し其後今は却つて太平洋沿岸カリフオルニヤ方面、それから南部

[illegible]つ[illegible]
として居る時代が來て居て、ピッツバーグが[illegible]
まで尚ほ優勢を占めて居るけれども、既に中西部の方でカンサスシチーの如き急激な勢ひを以て工業の中心地とならんとして居る。是等の例を以て見ても所謂工業が東部諸州のみならず却つて中部及び西部の方に新たな勢ひを以て發達した時期である、

　それから第三期は歐洲大戰後の最近に至るまでの間にあつて獨り工業ばかりではなくして農業と云ふものが一つの企業として大いなる勢ひを成した、これは申すまでもなく歐洲戰爭中ヨーロッパ大陸が殆んど戰の巷に化して、各種の農業は數年間中止同樣の有樣であつて、これに對する食料品の産地としてはアメリカの中部から西部へかけての農業を大規模に、一つの大企業として大勢力の下に行はれた、その結果が戰爭後に於ては直ちに農産物の過剩、所謂オーバー・プロダクションの問題を起したやうな有樣であつて、アメリカに於ては歐洲大戰後に農業と云ふものが工業と相匹敵すべき統一ある重大な經濟上の勢力になつたのである、それから歐洲大戰中には從來の東部沿岸諸州に於ては既にその材料品其の製造能力も世界を相手にしてやるに不足の時代が來たから、戰爭中にアメリカの中部、所謂シ

[illegible]
[illegible]
つて居つて見る時には、[illegible]
が出來て居るやうな有樣であるが、中には[illegible]後にこれを凌駕したり又は破壞したものもあるけれども、尚ほ中西部及び西部の諸州に於ては戰爭時代に發達した工業の勢力と云ふものは非常に擴がつて居る、私は統計表を以て數字で詳しく說くことをしないが以上三期に於ける東部諸州と中西部太平洋との經濟上の勢力關係をパーセンテージを以てお話をして見ると、第一期所謂鐵道王が經濟上及び政治上の中心勢力であつた時代に於ては、大體シカゴ以東と以西は生産能力から云ふても八對二の割合である、第二期の所謂戰爭に到るまでの間、即ち各種の工業がシカゴ以西に興り出した時、さうして戰爭が介在的になつた時期、さうして戰爭に至る迄の時代はシカゴ以東が生産能力が六、これに對して西の方は四、所謂云ふ時代である、私は戰爭後殊に最近の時代を見ると、既に殆んど五對五の關係になつて居はしないかと思ふ、我々日本でアメリカの政治の勢力及びその政治上の原動力に關して東部よりの向き[illegible]に依つて學んだ所は、恐らくこの六對四の時代のことではないかと思ふ、排日問題に關しても、カリフォルニヤの排日は

聲が盛んであつても、東部諸州に於ける勢力を占めて居る時の政府及び政黨の聲に依つてこの排日の聲を暫く抑へることも出來た時代である、即ちルーズヴェルト時代までがその時代だと私は考へる、けれども私はルーズヴェルトの時期は所謂第二期と第三期の正に代り目にあつた時期と思ふ、この經濟上の勢力の分布が三期に依つて割合を異にして居ると云ふことは同時に米國の政黨の勢力範圍及中心勢力の變遷を語るものであると確信する、今までのシカゴ以東の方の諸州の向背、シカゴ以東の政治家の向背、それ等の識者の輿論に依つてアメリカの政治が左右せられると云ふやうな考へをまだ有つて居るとすれば、既に私は戰爭後のアメリカの經濟上の大なる變化、經濟上の勢力の分布の大なる變化、隨つてこれに伴ふ政治上の勢力の分布の關係を誤解して居るものではないかと思ふ、少くとも私自身も三年前にアメリカへ行くまではこの誤解をして居つたのである。

これが如何に政治上に現はれて居るかと云ふことを政黨に就て申して見れば、御承知の通りアメリカには共和黨所謂レパブリカン、民主黨所謂デモクラット、この二大政黨があつて、殆んど第三黨と云ふものはなかつた、この兩黨の勢力範圍は殆んど地圖で明白に書き現し得るやうに明らかになつて居つた、それはアメリカの中部ワシントンからこの緯度に沿うてミスシツピー河迄眞直ぐ東西に線を描いて見ると此の線の南北のワシントン以北が共和黨の勢力範圍、ワシントン以南が先づ大體デモクラットの勢力範圍、さうして中西所謂シカゴ以西並にカリフオルニヤ、ワシントン、オレゴンの如き太平洋沿岸の諸州と云ふものはこの二大政黨の勢力爭ひの最後の所謂決勝點ではあるけれども、全體から見ればその勢力といふものは微々たるものである、選擧法の上に於ても明白である、アメリカの下院は各州に依つて、その州の人口に比例して議員の數を出すのである、例へばニユーヨーク州の如きは一州で非常に多くの議員を出す、一番多くを出して居る、それで先づ從來の見當から云ふと、ニユーヨーク州、ペンシルバニヤ州ニユージヤーシー州ヴアージニヤ南北カロライナそれからメーン、マサチユセツツと云ふ方面、所謂東部の沿岸の大諸州の選出議員といふものが議會に於ては非常な多數を占めて居つて、それが政黨內、隨つて議會に於ても中心勢力である、今日に於てもその數は減じないけれども、所謂中西部及び西部の諸州に於ては經濟の發展殊に工業の勃興と同時に人口の劇増を來し議員數も非常なる増加を爲して居る、故に下院に於ては今日では今申した西部諸州と東部の諸州とを比較して見ると云ふと、議員の數に於ては却つて西部の

[illegible]

[illegible]を占めて居る、東部諸州は之に及び南と二ッに分れて各々その長年の歴史的の政策の基礎を作つて居るけれども、これだけでは最早アメリカの下院も政策も動かせないやうな時期に達して居る、この最も著しく現はれた例は、從來は工業的中心點は所謂ワシントンより北の方、即ちレパブリカンの共和黨の根據地に多い、これに反してデモクラッチ黨の方は所謂南部諸州と申して黒人を使役して棉其他の農産物を主として作つて居つた南部諸州を中心として居るからして、兎角共和黨に對して、殊に大統領選擧の場合の如きは一籌を輸して居つた、ところがヒューズとウイルソンが大統領の選擧を爭ふ時になつて、西の方の殊に太平洋の沿岸のカリフオルニヤの投票の結果に依つて、以外にもウイルソンが勝つた、即ち今までは經濟上の勢力から見て長年負けて居つた所のデモクラットが遂ひにレパブリカンに勝を占めた、これは殆んど人の意想外とする所で、最後のカリフオルニヤの投票のあるまではもう共和黨のヒューズが當選確實と云ふので騷いで居つたのに、一夜にしてその形勢を變じたのは、所謂從來の勢力が最早シカゴ以東の東部諸州の向背のみに依つては決らない、所謂私の前に申した西部の方の勢力に依つて、少なくとも[illegible]

[illegible]何に向背を決するかに依つて[illegible]方の意嚮の如何に依つて左右されるやうになつた[illegible]ウイルソンが[illegible]選ばれたのも亦この西部の力に依つて選ばれたと云つて差支へない、最近ハーディングが[illegible]共和黨を[illegible]に大統領に選擧せらるやうになつたのも、これはハーディングと云ふその當時までは、單に政黨内の凡庸な候補の一人として、大統領とか又は一黨の首領になる程の人とは思はれなかつたけれども、この人を從來東部ばかりから出して居つたのをやめて、思ひ切つてシカゴ以西の所謂新しい勢力の方からハーディングと云ふ人を引張つて來て、さうして西部の方の勢力を共和黨の方に轉ぜしめた政策の與かつて力ある所である。

斯う云ふ風に今日のアメリカの政黨の關係はルーズベルト以前の時代とは違つて居る。所謂第一期第二期頃であつたならば、ニューヨークのバンカーである、又は大なる鐵道王たり、又は大なる石油王なり、大なる製鐵事業の王樣と云はれる所謂千萬の長者が政治上に勢力を及ぼし得た、即ち東部の方に中心を有つてゐる大なる經濟力がアメリカの政治を動かし得たのである、今申したやうな次第で經濟上の分布の大變化と共に政黨

の勢力關係も非常に混亂を來した、殊に前に述べたやうに農業と云ふもの丶勢力が經濟上に大なる力を成すやうになつてからアメリカの政黨關係は著しく變化を來した。即ちデモクラット、レパブリカン以外に第三黨の現はれるやうになつたのはこの農業の勢力、而してこれをバックする西部の諸州の力、更に語を換へて言へば前に述べたる所の西部地方の經濟上の大發展と云ふものが遂に第三黨をも生出さんとするやうなことになつたのである。第三黨の最も最初の發芽は、歐洲大戰中より後に掛けて歐羅巴への農産物の輸出が盛んであるからして、農業を大規模にやつて大生産をなし、さうしてオーバー・プロダクシヨンをやつた結果、甚だしきに至つてはインデヤン、コン、所謂玉蜀黍の如きはこれを運搬する費用も支辨出來ない、寧ろこれを賣るよりかは百姓は家でストーブに焚いて石炭の代りにした方が宜い位な窮狀まで陥つたのである。このオーバー・プロダクションの結果農産物の値が非常に下つたと云ふことの爲めにファアマース・ブロック、所謂農民團と云ふものが下院内に興つた、さうして中央の約七つの農民諸州が一緒になつて時の政府及び其時の有力な勢ひを占めて居る政黨に對して已れの要求が通らなければ何時でもその黨を脱するの勢ひを示した。殆んどハーデイングの終り頃まではこのファーマース・ブロックーーまだ政黨にはならないがーー農民團は少なくともアメリカの上下兩院の勢力を支配して居つたのである。そのファーマース・ブロックの一番中心になるウイスコンシンの上院議員のラフオレットと云ふ人がこの度の大統領選擧に第三黨として名乘りを擧げたのも、このファーマース・ブロックを頼りにしてやつた問題である。既に私のアメリカから歸る前に假令大統領選擧には敗れても第三黨を組織すると云ふことを宣言して居つた。尚ほこの第三黨は勞働團體と接觸を保ち、又急進的な分子をその配下に集め、さうして農民黨を集めたならば相當の勢力として少なくとも今回の大統領選擧の時にはクーリッヂ所謂共和黨の候補者、デヴイス所謂民主黨の候補者も、遂ひに憲法の定める全體の投票の過半數を得ないやうな形態に陥つたから知れない、その結果は遂に大統領選擧は現在の下院に於て行ひ、副大統領の選擧は現在の上院に於て行ふ、斯う云ふやうな變態的狀況に陥つたかも知れない。丁度大統領選擧頃にカナダ及びヨーロッパ方面の農作の不作の爲めに、アメリカの小麥及びコーン所謂玉蜀黍其他の穀類は一躍一ドルの値段に復して、茲に豐年萬作の聲が起つたから、所謂農民團の起つた本、即ち穀類の低落の爲めにする不平と云ふものが無くなつた。そこで急進黨並に勞働團體を背景にして居るラフオレットは農民團を掴み得な

よつた[illegible]であるか、併したならこの[illegible]の[illegible]に於ては[illegible]な[illegible]円[illegible]、又[illegible]には[illegible]政治[illegible]までも[illegible]して居る時代があつた時代になつたと云ふことは、アメリカの政治[illegible]一[illegible]長く對立して居つた時代、或はニユーヨークを中心とするミリオネーヤの手に依つてアメリカの政治までも動かさるゝと云ふやうに考へられた時期は今日では既に去つたのではないか、これを引括めて申せば、少なくとも歐洲戰爭までは經濟上の中心大勢力は東部に蟠踞して全國を動かし從て政治も東部の方に依つて動いた、併しながら少なくとも歐洲大戰後に於ては西部の方の經濟上の勢力は非常に發達した、工業は勿論のこと農業の偉大なる企業としての勢力は重大な原因である、それのみならずもう一つ附け加へて置きたいことは、アメリカの金融に關しては何人もニユーヨークにアメリカの金が全部集まつて居る、アメリカのニユーヨークのモルガンとか、或は其他の銀行にアメリカの金は全部あるやうに思はれて居るけれども、これは非常な間違ひではないかと思ふ、歐洲大戰中ヨーロッパに各種の生産品を非常な勢ひで輸出した結果、田舍にも殊に今まで未開地であつた所と思はれて居つた西部地方の田舍の隅々までも金が澤山落ちたことは驚くべきものがある、隨つて地方の銀行に大なる金を持つて居ることも忘るべからざる點である、昔はニユーヨーク[illegible]ヤー[illegible]た[illegible]ーピヤトにして[illegible]と云ふ[illegible]を出受[illegible]するやうな時には、[illegible]し[illegible]中西部[illegible]方銀行の力を借りなければならないのであるが、これは僅々ドル[illegible]治ドル外[illegible]と云ふ[illegible]が汎く[illegible]まつて居る日本のなかには、アメリカの西部の經濟力の[illegible]並にこれに伴ふ政治上の中心勢力を考へる時に、閑却してはならない性[illegible]の一つの點であると[illegible]へる、故にアメリカの現在の政治の關係は不安の時代と[illegible]ある、今後西部諸州の經濟上の更に一段の發展如何に依つては、私は長年維持して來て居つた所の共和黨と民主黨と云ふ二大黨派の對立は、或はこの經濟上の大變化の爲めに動[illegible]しない か、最近のラフオレット一派の第三黨の大統領[illegible]に[illegible]い失敗を見て、その第三黨を起さしむるやうな[illegible]を認むる[illegible]の勢力を認めないのは皮相の觀察たるを免れぬと思ふ（了）

世界金融の中心に對する英米の爭霸戰

法學博士　堀江歸一

金融中心點の意義

英國の世界金融の中心點たる地位は何時頃から始まつた事實であるか、正確なる時期を以つて、之に答へるを得ないが、兎に角十九世紀の後半國力の發展する勢甚だ盛であつて、國際經濟上に覇を稱するに至つた時からであることは、疑を容れざる所である。然らば一國が國際間に於て、金融の中心點たらんとするには、何を以つて其資格とし、又其要件とす可きであらうか。抑も亦一國の市場が如何なる狀態を備へた場合に、吾人は之を呼ぶに、金融の國際的中心市場とするを得るかと云ふ問題に就て、一考しなければならない。

今日經濟上に於ける內外孰れの取引を問はず、信用の利用は極度に發達し、正貨の使用を省約しつゝあることは、爭ふ可からざる事實であるが、同時に正貨其ものが信用を支持する基礎と爲り、正貨の存在并に利用の何としても省約する能はざる場合がある。國內の取引に於て然るが如く、國際間の取引に於ても、亦同樣であつて、國と國との間に存する貸借の差額は結局金に依つて、決濟されることを必要とする。一方に國內に於ける取引は紙幣、銀行券、信用證券の類を以つて、決濟されるとしても、是等の目的物が能く金貨と同一の價値を保つかどうかは、一國の經濟生活に重要なる關係を及ぼす所であつて、所謂金紙の間に於ける同價流通と云ふことが一國の信用を決定する上に、關係するもの少しとしないのである。

即ち對內的に云つても、國際的に考へても、一國が國際金融上に於て、一の地步を占めようとするのは、第一其國は若干の金を持たなければならない。啻に國內に若干量の金の存在するのみならず、第二其金は何時に於ても、外國から補充される道があり、其道のあることに依賴して、其國は金の外國に向つて、輸出される場合に、何等の制限を加へない。第三斯の如く一國に於ける金の出入の自由である結果として、其國の貨幣は

當面の點に於て、[illegible]であり、[illegible]ることを要件と從つて、國內市場の取引を集中することを必要とし、海外內國に於ける資金の供給豐富であつて、金利歩合又低廉であり、諸外國の爲めに、資金調達の要求に應じて、之に應ずるに窮まらざる地位に居ることも又必要であると考へられる。

世間では貿易上に於ける有利なる差額即ち輸出超過と云ふことに重きを置き、出超の狀勢が確實に繼續しなければ、以つて國際金融上に於ける地步を獲得する能はざるやに考へる者があるようであるけれども、是れは必ずしも正當の見解とすることを得ない。一國が輸出超過の地位に居つても、貿易外の關係に於て、此出超額を凌駕する債務を負う場合には、其國の經濟的地位は危殆なりと云はなければならない。一國に取つて肝要なるは、國際貸借の全般に亙つて有利なる差額を持つて居ることであつて、此差額の一部を何時でも金貨の形で、內國に回收し、又他の一部を諸外國の求める所に應じて、貸付金として、融通することを辭さない。斯くて其國の國際金融に於ける中心市場たる地位が確立するに至るのである。

國際金融の中心點としての倫敦

倫敦が年來國際金融の中心點として、活躍したのも、要するに其の[illegible]れた資本は[illegible]されて、利子利潤が國內に回收され、[illegible]に活躍し、其時期に依つて、[illegible]め、之に對する通貨が英國の收入と爲り、保險料・[illegible]の貿易關係外に於ける收入と爲り、此等を合せて金額を以つて輸入超過を決濟して、何ほ餘るものがあり、此餘つた金額が金貨の形で回收されたり、外國に向つて貸下されたりし、前者は以つて英國に於ける金貨の在高を豐富ならしめ、後者は以つて英國の國際貸借に於ける地位を強固ならしめたのである。斯る狀勢の下に、磅貨の價値が最も強固であつて、國際貸借の基準にたてられたのも敢て異とするに足らないのである。

金融中心移動說

斯る英國の狀勢に對して、一の大なる脅威と爲つたのは、歐洲戰爭中輸入超過が劇增し、國際貸借上の收入[illegible]のみを以つてしては、之を決濟するに難く、對外債權に屬する資本其ものを讓渡したり、又は新に外債を募集したりして、之に當らなければならないことゝ爲つた一事である。斯くて此形勢の現はれると共に、之に對する策として、[illegible]に或は[illegible]

止し、或は外國に對する資本の放下を制限した。二者共に已むを得ざる所であつたことは、當時の狀勢に於て、認められるであらうが、對外債務の加重しつゝある場合に、金の輸出を禁止したことは、磅貨の價値を下落せしめることゝ爲り、當時價値の確實であつた弗貨や、瑞西法（フラン）に對して、磅貨の價値の低落するもの甚だしかつた。即ち資本輸出の制限、金輸出の禁止、磅貨の價値低落等は相重なつて、英國の經濟社會を危險なる地位に陷らしめると共に、倫敦をして國際金融の中心點たる從來の特權的境涯から、遠ざからしめる結果を齎したのである。

斯くして倫敦に代つて、國際金融の中心點であるやに考へられたものは、實に紐育であつた。從來北米合衆國が世界有數の富國であり、紐育が其代表的都市であり、國内に於ける經濟的中心地として、商業の殷盛を極めて居つたに拘はらず、尚ほ國際金融の中心點と爲ることに就ては、殆ど問題にすら上るを得なかつたのは、何故であつたかと云へば、

第一、合衆國は國際間に於ける債務國であつて、外國に對して債務の元利金支拂に忙しく、輸出超過に依つて、漸く之を決濟する狀態に居つたこと、

第二、加ふるに南部西部諸州に於て、產業の經營に資金を要すること、少からず、金利步合の標準點は常に高く、諸外國に對して、資金を融通する餘裕を存しなかつたこと、

第三、國内の金融制度、金融機關共に不備であつて、手形引受の方法に依つて、割引市場を發展せしめる道なく、隨つて容易簡單に對外金融の行はれる便を缺いて居つたこと、

第四、北米合衆國は千九百年の貨幣法に依つて、貨幣價値の單位を純金と決定し、表面に於ては純然たる金貨本位制と爲つたものゝ、多年來貨幣政策を誤まつた結果、本位貨幣以外に大額面の貨幣や、通貨が無制限法貨として、國内に流通し、貨幣制度の根柢鞏固なりと稱するを得ざること、

の諸點に歸着するのであつて、是等の缺陷の除却されざる限り、合衆國が國際金融上の局面に立つて、活躍すると云ふが如きことは、到底望む可からざる所に屬したのである。然るに歐洲戰爭以來合衆國の經濟的狀勢には一大變革を來し、國際金融に於ける一大勢力たるに至らしめたことを否定するを得ない。歐洲戰爭に依つて、合衆國の經濟社會に生じた變動の最も大なるものは輸出超過の劇增であつて、從來の對外的債務を決濟して、餘裕の綽々たるを見るを得た。此餘裕は如何に處分されたかと云へば、第一は對外債務の決濟に充てられ、第二は對外放資に供され、尚ほ殘れるものは、金貨の形態を以て、國内に囘收されることゝ爲つたのである。斯くて歐洲戰爭の數年間を通

こゝに、右の[illegible]いたのであるが、[illegible]として
國は債務國たるため、[illegible]して、債務國たる[illegible]依存するに至り、國内に金貨の流入し、又其保有さるるもの少なからざる爲めに、貨幣流通形態も亦以前に比化して、改善されたし、千九百十四年歐洲開戰と相前後して、國立銀行制度に代つて、開始された聯邦準備金銀行の制度は合衆國の金融並に銀行組織を一新し、金融の對外的發展に資する幾多の便宜が備へられるに至つたのである。

一方に既に英國の經濟的實力に右に述べた如き損傷を告げて、褪色の歴然たるものゝある他の一方に、合衆國の經濟的勢力に如上の發展を來し、殊に其對外金融上の關係に一新を告げるに至つたとすれば、此機會に於て、多年英國に依つて、掌握された國際金融の中心點たる地位が合衆國に移轉すると云ふ説が生じたり、又合衆國に於て、此種の希望が盛に爲つたりするに就ては、自ら道理ありとしなければならない。殊に最近數年間を通じて、

第一弗貨の價値が磅貨に對して、常に高く、且つ確定してゐること、

第二合衆國の對外放資に於ける實力は益々旺盛であつて、多々益々諸外國の要求に應ずること、

[illegible]であること。

第四、合衆國が第一[illegible]ち、其國際收支に依つて、何時でも第一[illegible]配するを得ること

の諸點の明瞭であるに隨ひ、國際金融中心移動説は大[illegible]に其高きを致して、已まざることゝ爲つたのである。

金融中心の移動容易ならず

右の如き金融中心移動説にも、多少の道理はあるのである。殊に普通の道理から云へば、國際貸借上の債權國は同時に輸入超過國であつて、債權收入と輸入超過とが相殺されることが常であるのに、合衆國の場合に於ては、此事例に反し、債權國であつて、一方に輸出超過國を兼ねて居るのである。即ち此事たる、合衆國が原始的産物に富み、之に對する歐洲諸國の需要の強烈であることの爲めに生ずる結果であつて、合衆國特殊の事情であるが、此事情の下に、合衆國に對外債權收入に加ふるに、輸出超過に對する代金の受入れを以つてし、益々其對外放資力を大ならしめて、已まないのである。

然しながら對外放資力の旺盛であると云ふことだけを以つ

て、合衆國が國際金融の中心點たるを得たと考へるのは、聊か事の早計に失するものではないであらうか。紐育は世界地理の上から云つて、國際間の中心點たるを得ない弱點があり、又中介貿易の大規模に行はれる場所たるに不可能であり、加ふるに合衆國全體として、産業發達の成熟期に達して居らないと云ふことが認められるのであつて、是等の缺陷は相重なつて、紐育をして國際金融の中心點たらしめる上に於て、大なる妨害たらざれば已まない。唯歐洲戰時并に其直後紐育が世界の金融取引を一手に集中し、又弗勘定を以つて、諸國の資金を吸收する狀態を呈した爲めに、金融中心移動說を醸成するに至つたもの丶此事たる、要するに國際金融中心としての倫敦の活動の停廢されて居つた間に生じた偶然の結果であつて、斯る際に、紐育が倫敦に代つて、國際金融の中心點だとするが如き、一場の火事場泥棒に類するの嫌なきを得ないであらうか。私の疑を懷く所である。

或は歐洲戰爭に依る經濟並に財政上の打擊が何時までも英國を惱まし、英國の經濟を衰頽、爲すなきの狀態に陷らしめたならば、國際金融の中心點たる地位は早晚紐育に依つて、占められたかも知れないが、斯の如き狀態を生ずることは、英國民の自尊心の許さゞる所であり、又其利害から云つて、默過する能はざる所であつて、之を避けて、一日も早く戰前の面目を復する爲めに戰後英國が國運の恢復に努力した跡は容易ならざるもののありと認められる。即ち財政の整理、通貨の減縮、並び行はれて、財政の國民經濟を壓迫する勢を緩和し、國内に於ける生産資本の供給を潤澤にして、産業の振興を促し、物價問題の解決と相俟つて、貿易の趨勢を有利に導いたことの諸點は英國の經濟的復興として、特に著明なる事實であつて、其效果は次第に經濟社會の全體に及び、

第一、一時停廢の狀態に居つた資本の對外的融通も最近數年間に略ぼ復舊し、今や諸外國にして資金を他國に於て、調達しようとするものは、必ず英國に之を求めざる可からざるに至り、英國が國際貸借に於ける受取勘定の有利なるに乘じて、斯る要求に應ずるに苦まざること、

第二、戰時戰後を通じて、米の弗貨や瑞西の法貨に比較して、廉價であるを免かれなかつた磅貨も其後次第に價値を恢復し、今や殆ど其平準相場に達するを得たこと

の如き、英國の經濟社會を有利なる方面に展開した動かす可からざる事實であると云へる。

唯今日に至つても、尙ほ英吉利が金輸出禁止を解除しないこと、英國の金利步合が合衆國に比較して、多くの場合を通して、

[illegible]

にも從せざること、[illegible]て、道路の存することを示すものであるか、其れ等も亦商工業の[illegible]從するものと見て、誤りがないであらう。即ち私が國際金融の中心點の移轉容易ならずと論ずる所以である。

然しながら同時に吾人の考へなければならないことは、國際金融に對して、合衆國の干與する領域の次第に擴張されつゝあるの一事であつて、見方に依つては國際金融の中心點は將來英米兩國の間に兩分されると云へるかも知れない。即ち從來の如き一個の中心點に非ずして、二個の地方的中心的の對立すると云ふ狀態が合衆國今後の努力に依つて、出現するかも知れず、或る場合には、兩國が聯合して、國際金融の衝に當り、他の場合には兩國が互に、競爭するに至ることが想像される。其れにしても百年前に於ては勿論、五十年前に於ても、尚ほ一個の農業國として、單に原始的産業の産出する物資の豐富である以外に、特に經濟上に誇る可き何ものをも持たなかつた北米合衆國が今日に於ては、一個の輸出工業國と爲り、續いて國際金融の一中心點たらんとするに至つたのは、吾人の驚嘆措く能はざる所である。

故に今後の狀勢を想像すると、英米兩國の金融中心に對する

下[illegible]其[illegible]豫ねなく、[illegible]を得たい、現に其[illegible]る道の倚はつて[illegible]することは、[illegible]方に英國が貿易外の收入[illegible]たい、[illegible]に經濟技術の倚はれる人を得て[illegible]つたりすることは、自ら[illegible]をして從來の地位を固守せしめる所以と[illegible]つて今後[illegible]年の間は世界金融の中心的勢力は英米兩國の間に分持され[illegible]勢を以つて、推移すると見るのが至當であり、[illegible]は自ら此事實に動かされて、種々の[illegible]を生ずるであらう。多くの國が英米兩國に於て、[illegible]の決濟を求めたり、兩國の[illegible]方に於て資金を調達したりするのも、亦[illegible]とするに足らないのである。

日米問題の過去と將來

ギルバアト・ボールス

支那問題その他の極東問題に關聯して、惹起する日米問題それは、こゝには別問題とする。そして、北米合衆國内に居住する、日本移民から生ずるところの問題にのみ、考察を限局することゝする。さらに、思索の明透をはかるがために、これを二項目に分つのが、便宜であらう。一は過去に對する遺憾の念他は將來に對する希望の心である。

遺憾なりし過去

もとより、わたくしは、深き自咎の心をもつて、最近米國議會の通過せる排日法に對し、遺憾の念を告白するものである。しかし、わたくしが、兹に主として言ひたいことは、かゝる排日法の通過を可能ならしめたる事態の發展を、未前に防止せんがため、過去において、適當なる手段を採らざりしことの遺憾である。以下遺憾の點を列擧する所以は、それが、將來に對し、重要なる啓示となると、信ずるが故である。

一、はじめて日本の勞働者が米國に移住した事情については、和歌山のヘイル博士（Dr. J. E. Hail）が、一八九三年、ワシントン州からカリフオルニア州にかけて旅行した當時、米國の農業者と工業者とが、しばしば、日本人勞働者の移住を希望したものであることを、述べてゐる。わたくしはまた、金子子爵が、わたくしに、度々こう言つてゐられたことを記憶してゐる。米國の事業家が、米國官憲の支持の下に、はじめて、日本政府に對し、（米國政府にではない！）日本勞働者の渡米を許可せられたき旨、要求し來つたるとき、子爵は、當時農商務省の當局として、この企案には決定的反對の意を表し、これ將來の禍根たるべしとなしたのであるが、つひに、四圍の事情に制せられて、遺憾ながら許可を與へたのであると。尤も、こうして一度口火がきられてからは、日本人の方で、熱心に渡米を希望するに至つたのであるが、とにかく、最初日本人勞働者の渡米について、眞個に責任を負ふべきものは、米國の事業家なの

ないといふ事實[illegible]
お[illegible]てあるといふことを。ただしは、[illegible]
たのである。

二、次に、かくの如くにして渡米し來れる日本人勞働者を、適當に分散せしめるといふことについても、またかれ等に、教育の機會や友誼的援助を與へるといふことについても、過去において、なん等の手段も計畫もとれなかつた。これは、米國の事業家と、官憲と、教育家と、宗教家との怠慢である。現狀に照してこれを考ふるに、もし、紳士協約の成立より十年前に、これ等の諸點について、愼重なる注意が拂はれてゐたならば、かゝる紛議の大部分は、除去され得たであらうと信じられる。

三、それから、この問題の眞相について、正確・公平・科學的なる研究が、永い間抛擲されてあつたことである。それは、排日運動が起つて後も、抛擲されてゐたのである。徒らに、排日煽動家に挑戰したり、この東西勞働者の紛議には、なん等重大な經濟問題社會問題はないといふことを、輿論に承服したりするために、時間や精力を空費するよりも、日米兩國の指導者は、むしろ、直ちにこの問題の根本的解決に、努力すべきであつた。尤も、この點について、わたくしの個人的遺憾を表白するのは、これで、或る個人または團體を、非難しやうといふの

[illegible]
[illegible]今[illegible]
おいては、[illegible]
提するには、[illegible]ものであつたからである。

四、日本政府の行動も缺點があつた。（イ）には、排日法が議會に上程されない前に紳士協約の規定を、自發的に、もつと嚴重に適用すべかりしこと（排日の氣勢のはなはだ盛んにして決定的なるに鑑み、協約の條項により、渡米者數を限定すること）（ロ）には、二重國籍問題や外人土地所有法について、決定的な手段を採るべかりしことである。これ等の問題の解決は、當時において、日本政府の採り得る手段としては、米國の排日煽動家との戰に、かれ等を屈服する武器として、最も有力なるものであることは、すでに明白であつたのである。排日法が通過してから此等の點に對して採つた態度も、遲まきながら、有効でなくはない。しかし同様の手段でも、もつと早くやつたら、もつと〱有効であつたらうにと思はれる。

五、米國において、對日問題解決の建設的努力の中心が、大部分、紐育市に集中されてゐるといふことであるにしても、これ等の諸團體例へば教會聯合協會（Federal Council of Churches）とか、或は特許組織された日米關係[illegible]

(Committee of American-Japanese Relations)の如き、その達成せる素晴らしい事蹟については、深厚なる喜悦を表するものである。しかし、昨年、しかも移民法案が懸案となつてゐたころ、わたくしがワシントン府にあつた時、米國民に對して、日米問題の公正なる解釋を與へんと努めつゝある個人や團體が、あまりに、紐育市にある中心機關に、全然賴り過ぎるといふ事實を、これまでよりも深く明らかに見たのである。議員諸公が、ワシントン府において、移民法案を討議する際、かれ等の熱心に聽かんと欲するところは、ペンシルヴエニアとか、イリノイとか、オハイオとか、その他の諸州では、如何に考へまた如何に言はれつゝあるかといふことであつて、紐育市における各種團體の本部から來た、偏重なる事實の陳述を讀んだり、これを考察せんとするのではない。しかるに、ワシントンの議員に對して、事實を提供するの仕事を、紐育市の諸團體に任せきつたことは、却つて、米國各地方において、公正なる人々が、自ら事實を蒐集して、直接に議員に抗議を提出し、もつて排日法の通過を阻止せんとする努力を、妨げたるの觀がある。

六　排日法の通過が、一部の日本人をして、米國人を全部的に否難するに立到らしめたことである。わたくしは、すでに述べたるところの如く、排日法案の通過については、深い自辱の念をもつて、これを遺憾となすものであり――微力を盡してこれが阻止に努めたのであるが、しかし、日本人が、米國人に對して、嫌厭の情を表白し、或は進んで、他にまでかゝる惡感を喚起せしめんとしたところで、日本にとつて、或は有色人種にとつて、それが何になるであらう。この點について、昨年九月、わたくしが日本に歸つたとき、それは、かの苦き緊張時より、程經ぬときであつたに拘らず、米國民の善い方面が、また日本人の間に、廣く認められてゐるといふことを見て、わたくしは喜悦の情を禁じ得なかつたのである。

希望ある將來

わたくしが、過去における遺憾の點を詳說したのは、たゞ過去の失敗から教訓を攝り、將來に對するわたくしの希望を、表白するの準備にすぎない。わたくしが、「將來の希望」といふのは、かの曖昧模糊たる無形事をさすのではなく、確固たる事實に基く有形的信念を意味するのである。そして、その事實に則して、日米の親交と協力を達成せんがため、わたくし自ら、この身を捧げんとするところの、その「希望」をいふのである。しからば、かゝる希望とは何であるか。

米國についての希望

一、[illegible]一九二二[illegible]の下に行はれたる、太平洋[illegible]共に、わたくしは希望をおくものである。

（イ）、この調査に基く現實の事實は、太平洋岸における日本人その他の東洋人について惹起したる問題に關し、これを正解せんと欲する人々に、有益なる資料となるであらう。元來この調査は、かゝる目的のために企てられたものではないが、目下最も重要なる問題は、紳士協約實施以來の、日本移住民の數と、その出生及び移住によつて增加せる數とについて、信賴しうべき資料を必要とすることである。なぜなら、右については、頗る意見が岐れてゐる。その證人として、二つの言説をあげるに、一九一〇年乃至一九二〇年の十年間について見るに、國勢調査の結果は、日本人人口が激增して、約五十四パーセントにたれることを示すのである。（トレヴア氏、一九二四年移民法の解剖）今日合衆國（布哇を含む）にある日本臣民の數は、十五年前よりは少いのである。（一九二四年十月一日、ジヤパン・タイムス社説）そして、人は、前説を承服しないとしても、後説の據所を發見するには、困難を感ぜざるをえないであらう。

（ロ）、人種調査」が、太平洋岸諸大學の學生及び社會學者に與へたる刺戟と指導とは、健實なる結果を生ずるにちがひない。[illegible]シントン[illegible]き、わたくしは自ら[illegible]

（ハ）個人は、如何にして、また何故、他の人種に對して、その人種的態度を決定するかといふことについて、こゝに、科學的研究の確定的端緒を開いたものであるが、すでに、多數の人々は、その政府の思想や經驗によつて、何故他の人種を好むか、または嫌ふかについての解答を、自ら提示するに至らしめたのである。

（ニ）二以上の人種の住居する地方[illegible]區内において、[illegible]な、また公平な、人種調査を行ふ方法について、[illegible]なる經驗をえたわけである。わたくしが、サンフランシスコで、パアク博士の事務所を訪ねたとき、博士は、わたくしに向つて曰ふやう、太平洋岸人種調査の計畫を始めたとき、人種調査とはどんなことをするものか、モデルとして提供してよいような報告書をすでに有する地方團體は、たつた一つしかなかつたと。すなはち「シカゴにおける黒人」といふ報告書が、[illegible]の模範的人種調査で、これは、一九一九年、現在駐日米國大使たるバンクロフト氏が委員長となつて、行つたものであるさうな。われ等は信ぜんと欲する人種問題に關する偏見に、たとへ多年

の錯誤あつたりと雖も、いまや地方團體の人種問題に關する純正科學の發達は、この曙光を見るのであると。これによつて、聰明なる人種問題協力の達成は、いたく促進されるであらう。確定的にして、公然靜然たる事實に直面することは、恐怖と猜疑とを除去し、一致と協力を促すものである。これは、普通の人種間交渉が、親意を生ずるものであるといふのではない。——この交渉は、聰明なる指導をえざるときは、反對の結果を招き勝ちなものである。

二　次に米國において、日本人そのもの、並に、日本人の居住する太平洋岸介地に關する眞の事實に就いて、全國的な啓蒙運動の起つたこと、正義と禮讓とに則して、日米の親交を求むるところの、日本人の深甚なる熱望を滿足せしめうるが如き方法をもつて、米國人の合法的要求を充すべき建設的手段の研究が盛んになつたことである。この方面にはすでに多大の努力が拂はれてゐるが、しかし、多數の教育家・實業家・婦人倶樂部指導者・宗教家・ならびに勞働指導者たちに、この啓蒙事業を、もつと有効に活躍せしめんと、試みつゝある。しかも、その決意の最も強烈なのは、カリフォルニアに於ける諸團體である。

三　米國において、人種間の理解と協力を增進せんとする運動が、一層盛んになつたことである。かのサトロープ・ストッグアド（Sathrop Stoddard）の「有色人種の擡頭」にあらはれた人種的爭鬪の激發や、ク・クラックス・クランの勃興も、それより強い人種的親善方面の進步を見るとき、わたくしの希望を涸らすことはできない。昨年、米國における黑人問題の研究に長時日を捧げたるわたくしは、躊躇するところなく言ふ。米國の人種問題は、事態急にして困難なりと雖も、近年に至つて具體的の進步を見たと。その例としては、（イ）黑人の福利を增進するため、全國の代表的白人及び黑人指導者によつて、「全國都市聯盟」なるものが成立、發達し、米國の參戰以來、北部の工業都市に侵入して、これ等の工業中心地に、人種間協力を促進してゐる（ロ）南部と北部とを通じて、多くの都市に、人種間委員會が、成立し發達した、この運動は、米國教會聯合理事會の分科會として組織されたもので、有能なる黑人を、事務總長としてゐる（ハ）本年は全米國を通じて、基督教會内に、廣汎にして自覺的なる、人種問題の研究が行はれる。このため特に、二冊の教科書が編纂され、そのうちの一は、有名な基教指導者たる、スピーア博士（Dr. Robert E. Speer）の著である。この研究を行ふにあたり、基教指導者たちは、告白して曰く、これまで基督教會は、全體として、その創設者エス・キリスト

教師にして生活たりし、[illegible]に、さき立つてゐたと。これと同時に、基督教大會の指導者たちは、この基督教會の汚點を拭ひ去らんがために、全力を舉げて努力せんと、その決意を表明したのである。わたくしは、カリフオルニア及びワシントン兩州において、この人種問題教科書を、各自の教會で教へつゝありし、約七百名の男女と、十日間に亘つて親密な交際を行つた結果、この運動が、英米基督教者の生活のうちに、深く浸透してゐることを發見した。(ニ) これに呼應して、米國加奈陀及び英國の諸大學の基督教協會内にも、同樣の運動がある。一九二三年の暮から一九二四年の始めにかけて、約六千の學生が大會を催した。わたくしは、三日に亘つて、この大會に出席したときの、偉大なる靈感と經驗を忘れることはできない。これ等の大學生は、現下の最も緊急なる諸問題を研究するため、數個の團體に分れたのであるが、そのとき、人種間の親交と協力といふことが、第一の議題として選ばれたのであつた。(ホ) 方々の大學に、人種問題を研究するため、特別の講座が設けられはじめた。わたくしは、一九二三年十二月、テネシー州ナツシユヴイユの、ヴアンダビルト大學において、人種問題の講座をもつてゐる教授の下に行はれた。人種問題の討論會に出席した。この種の講座を特設してゐる大學も、ほかに大分[illegible]あると思はれる

(ヘ) 一段上の人種の間に於ける[illegible]において、[illegible]の人種問題に對する[illegible]を促進するため、[illegible]となりしこと。太平洋沿岸の[illegible]や工業都市で、十二分の成績を擧げ、大いに[illegible]と猜疑とを除去したもの六七につき、[illegible]をもつてゐるわたくしは、この運動こそ、日米の親交を促進するための諸綱領中最も有力にして根本的なる手段なりとの確信を持するものである。わたくしは、昨年の夏、一人の山林監督人が、こんな話をしたのを聞いた。それは、山火事のあつたとき、灌木や地草などを、相當の廣さまで刈り取つてしまへば、それで戰は勝ちだ。大樹に燃えうつてゐる火は、その樹が燃けるだけで、遠くまで擴がるものではない、といふのである。或る所では、唯一人の人が運動を起して、それによつて、[illegible]や[illegible]や煽動を、防止したり調停したりしてゐる。ある所では、一人の牧師が運動の中心となつて、激しい紛爭を[illegible]に[illegible]せしめた。或はまた、ある大都市において、日米協會[illegible]の[illegible]解の具體的基礎を固めたのは、大部分、たゞ一人の[illegible]指導者の功績によるものさへある。わたくしは、この點について、いくら強調しても、過ぎはしないと思ふものである。なぜなら、

これぞ、來るべき數年間に亘り、日米兩國民が、その思慮と精力の大部分を、集中せざるべからざる事項であると、信ずるが故である。地方團體の間に、軋轢と誤解と壓擦との存する限り、排日煽動者は、そこから宣傳の材料を得て、遠近の地方團體人民に、影響を與ふるを得るであらう。わたくしは、排日法の通過に對し、多大の遺憾を感ずる者であるが、排日法そのものが、日本人の居住する地方團體内において、相互の理解を促進せんとする努力に對し、なんら障碍を與ふるなきことについて、兩國民は、ともに、感謝すべきものであると思ふ。

〔五〕最後に、わたくしの希望するところは、さらに根本的なる立法手續であるが、それも、上に述べた通り、米國議會が、どんな法律を、通過しようが、しまいが、また日米兩國間に、どんな條約協定が實施されようが、しまいが、地方團體内の軋轢の存する限り、排日の煽動は、止むものではない。しかし、わたくしは、日米間竝びに他の東洋人種問題解決の一手段として國内立法の重要性を、低く評價しようといふのではない。その具體的立法綱領として、わたくしの推奨したいと思ふものは、日米關係全國委員會、及び、米國基督教會聯合理事會の支持せる、次の案である。すなはち、一九二七年より、日本移民を列國並みのクオータ法の下におき、現在の歸化法を修正して、何國人と雖も、米國の市民たるを得せしめんとする運動にある。因に、歸化法については、米國議會は、憲法の修正をまたずして、これを修正しうるものなることは、記憶に値する。もとより、この立法案に賛意を表すると雖も、これが、激しい反對をうけるであらうことに、眼を閉がんとするのではない。また、何時この目的を達しうるや、それを豫言しようといふのでもない。しかし、この立法綱領こそ、最も公正且つ根本的なるものにして、これが急に實現せられずとも、その間において、上に記せし全國的啓蒙運動を施行するについて、その最もよき目標となり、またその鬪戰となることに、確實であると信ずる。

日本についての希望

一、次の諸點を觀點として、米國に對し、引續き堪忍の德を示されたきことである。

(イ)、過去における日米の親善は、國家的であつたばかりでなく、家族的であり個人的であつた。そして、數十年に亘る、最も緊密にして先天的なる人道的經驗であつた。

ロ)、排日法の通過が、不明、不必要、頑惘なりしことの、最も明瞭にして適確なる證據は、米國人の日本に對する友誼を破壞するどころか、米國民大多數の、日本及日本人に對する好意を

[illegible]しめたといふことであつて、[illegible]日法の實施直後において、[illegible]し自分の[illegible]人的經驗を語るならば、排日法の施行前において、[illegible]も、排日法施行せざりしことだ。その施行後においては、[illegible]にしてよく日米親善の大眼目を貫くを得たことである。昨年の夏、日本から米國へ歸つた友人達から、最近數ケ月の間に受取つた手紙によると、かれ等は、排日法の日本に對する影響について話してくれといふ。方々からの招待で、とても應じきれないといふことである。そして、その犯せる過誤をあらため、日米親善の實、有理にして堅實なる基礎の上に樹てんとする運動が、すでに世の注意を喚起してゐるといふことである。

（八）、日本自體が、他國民、ことに支那人及び朝鮮人（尤も朝鮮は日本帝國内であるが）に對する關係について、困難を感じつゝある事實を思ふならば、米國人の苦衷もまた同察しうることと思ふ。そして、米國としても、日本人の正義と公平とに對する熱望を滿足せしむべく、何事も出來まいと考ふる人は、日本の對朝鮮、對支那問題を考へなければならぬと思ふ。わたくしが、上述のやうなことを言ふのは、大それたことだと思はるゝかも知れないが、過去十數年に亘つて、わたくしは、支那や朝鮮の同胞諸子に向つて、支那人や朝鮮人に對し、日本が正當な

[illegible]した經驗を有するのである。いまでも記憶すること[illegible]九年の九月、二人の朝鮮人[illegible]日本人[illegible]本政府教育の正式代表者であつた）と旅行し、朝鮮に行つたときであつた。一人の年老いた朝鮮の基督教信者が、[illegible]く朝鮮人の苦しめつゝある苦い經驗を物語つた後、足下（同行の日本人）は、東京に歸つてから、ほんとに、わたくしたちのために、何をやつて貰へることができるかと訊ねたのである。[illegible]日本人は答へた、わたくしたちにどれだけの力があるか、自分にはわからぬ。しかし[illegible]はわれ等に力を與へるであらう。[illegible]て、日本の他の人々も、朝鮮に[illegible]べく、また、[illegible]たちを助力するであらう。その後、朝鮮にある人たちからの度々の通信によつて、現總督の統治の下に、これ等の希望は着々と實現されつゝあることを知つて、大いに喜ばしく感じつゝあるのである。この希望もまた一日にして達せられないではない。

（一一）われ等は、日本人も米國人も、[illegible]東西兩洋の人々とともに、一大問題――その解決は、われ等兩國民今後數十年に亘[illegible]命に關するのみならず、人類全部數百年に亘る運命に、重大な

る關係を有する――に向つて、共に苦難しつゝあることを、片時も忘れてはならぬ。この苦難に徹せる或る日本の友人が、あるときわたくしに向つて、終局の解決は將來にあることは認めるが、それでは現代に對して、なん等の慰安を齎らすものではないではないかと、失望の意をもらした。しかし、現在の難點を解決する上に、多少具體的進步を見ること位は、必ずしも一生待ち暮らすほどではあるまいと思ふ。たとへさうであらうとも、日本人のやうに、全國民が連綿たる一家族であるといふ思想に、永く訓練された國民は、他の個人主義的國民が、勇氣を失ふ場合にも、なほ後世に希望を繋ぎうるであらうと思ふ。

二、第二の希望は、日本の最良の人民が、米國の最良の人民と提携して、健實なる日本親善運動のために、さらに勇を鼓して、その努力を繼續されつゝあることである。排日法の通過後、米國で繰り返へし訊ねられたことは、日米關係の將來をどう考へるかといふことであつた。わたくしは答へた。「日本に歸つて、日本の最良の人々が、米國の最良の人々に對し、どの程度まで信用をおかなくなつたか、その程度をわたくしの眼で見るまでは、確然たることは申し上げられませぬ。」昨年の九月早早、日本に歸つて以來、わたくしの最も喜びに堪えなかつたことは、日本人にして、もはや日米親善に努力するのが嫌になつたといふやうな人は、極く少數であつたことである。もとより、かく失望に陷れる人々に對しては、同情を禁ずるを得ないのであるが、しかもなほわたくしは、多くの人々に向つて協力を訴へ得るとともに、いかに組織堅く資金多き排日宣傳にあつても、びくともしないやうな日米親善運動が、米國において、着々として盛になりつゝあることを、深く信ずるのである。わたくしとしては、これよりもなほ深く徹底して、平和運動者の精神的態度や道德的勇氣なるものは、友人たらんとするものの態度如何によつて、一浮一沈すべきものではないとまで、言はなければならぬ。この點において、多くの日本人にして、かれ等の思索と胸奥とは、個人的・人種間的・國際的友誼の、最も深き泉より、湧き出ずるものであると、言明さるる人々の言説によつて、多くの獎勵を得るのである。

これを特定的にいふならば、現在において最も必要なることは、日米兩國において、相互の教育、社會、經濟、衞生、政治、宗教、その他の公共的事業について、事實と事情の釋明とを、互ひに交換することである。特に現在の米國にとつて必要なことは、日本における、進步的保守的思想運動を、概觀的に提供さるゝことである。これまでになされた、また現在なされつゝある、日本の生活に關する紹介のうちに、その醜い面白からぬ

傾向を、決定してかゝるのを許へないが、しかし、日本に[illegible]いては[illegible]や、●[illegible]のものを紹介するについて、最も必要なことは、[illegible]として、いかに[illegible]してそのまゝに直面し、いかなる困難と苦痛とも敢てしつゝ、思[illegible]である。（完）

米國移民法についての再考察

高木八尺

一、

所謂米國新移民法案が大統領裁可以後の一種の大打撃として我が國民の心を痛ましめてから、やがて一個年になる。移民法の問題は果して既に終結を見たる事件かと云ふに決してさうでない。私の見る所では移民法の問題は依然として日本の大問題なるのみならず、又同時に廣く文明世界の宿題であると思ふ。何故であるか、少しく之について述べたい。

米國議會が一九二四年の米國移民法に所謂「排日條項」を含ましめたることは、從來の日米交涉の顛末に鑑みて、同時に國際間の慣例に反し、且少くとも國際信義を無視したる行爲であつた。又差別待遇は、正義公平の原則に反するのみならず其人種の別に基くものなるときは殊に一層不快の念を深からしむること、我が政府の抗議書中に指摘せられし所以である。私は昨年國會通過の當時、如何なれば米國議會は、斯の如き不幸事を仕出來したかと云ふ實際の事情を研究し、人にも訴へて見たのは例へば本誌七月號）我國の主張を認め、事件に對する相手方の言ひ分や立ち場をも、十分に了解した上の議論にしたいとの願に出でたに過ぎない。私の試みたのは相手の辯解ではなかつた、對手の了解を努めたのであつた。そして事件は彼我から、早くは昨冬から云はれた。私の態度を、人は[illegible]と評してくれた事もあつたが、何れにしても[illegible]

居た、のみか寧ろ明るい心で将来を眺めた。

二、

移民法の問題に関聯して、私の如何にしても忘るゝことの出来ない米国史上の一事件がある。他でもない、例の「パナマ運河通航税」問題であつて、今より僅か十年前の出来事であるから、思ふに之を記憶さるゝ人も少くあるまい。該事件の経緯の概要を顧るに、米国は英国との間に、一八五〇年の條約及一九〇一年の條約によりて、パナマ地峡を横切る運河の通航につき、絶対の平等差別を約したるにも係らず、大統領タフトの時代に、彼の署名し且擁護に努めたる、一九一二年の法律によりて、合衆国の船舶を優遇する差別的通航税を制定した。英国は先づ非公式の抗議を試み、同年末重ねて正式の抗議書を提出したが、米国国務卿の回答は要領を得なかつた。然るに玆に興味あるは米国々内に起つた差別税反対の声である。一九一三年の初頭、エリヒユ・ルートは先づ上院に於て反対の獅子吼を挙げ、次第に輿論の覚醒を来さしめた。差別撤回論は漸く勢を加へた。同年春ウイルソン代つて大統領となり、翌一九一四年三月に至り遂に議会に対して所謂「差別的免税條項」の削除を慫慂した、而して同年夏に及んで、やうやく此の改正法の制定を見たのである。此の間約二ケ年、諤々として倦まず、輿論を誘導せし国民の指導者の努力も察するに余りあるが、自己の行為の非を鳴らす声に耳を傾けて、遂に自ら其の非を改めたる議会と米国民其のものを、私は偉なりと見る。更に偉大とも云ふべきは、此の事件に際して英国の態度を指導せし頭脳である。一九一二年此の難関に処した駐米英国大使は「アメリカン・コンモンウエルス」の著者ブライス卿其の人であつた。ブライスは流石に米国民を知る名大使であつたと言はうか、所謂「陳述」に於て英国の為めの主張を言明した以後は、彼はよく待つことを弁へて居たのである。然るに面白い事には前述の如く、正論は米国民自身の内部から起つた、国内の公法家、政治家の中、免税條項の非を唱ふる者次第に数を加へた。私は今少しくルートの演説に就いて所謂国内の正論の性質を見たいと思ふ。

三、

ルートは人も知る如く米国屈指の政治家であり又国際法の権威である。彼は深く米国の不当なる立法を憂へた。上院議員であつた彼は、前述の如く、一九一三年一月廿一日議会に於て「パナマ運河航税に関する合衆国の責務」に就て大演説をした。

「議長、昨年の夏の終り頃、引続き約九ケ月に亘りて問か

れたりし時以來[illegible]に、パナマ運河の管理に關する法律案中に、外國船舶と[illegible]米國[illegible]とに[illegible]し、別的の通航税を課する一條項を[illegible]したる其の點に於て、我が國[illegible]中、思慮あり見識を具へて居られ、政府として當然其の後援を欲するが如き幾多の人士が、深く遺憾とする所である。該規定は、全世界に與ふるに、合衆國は、パナマ運河の使用につき、從來屢々聲明したる嚴粛なる約束を拋棄して、條約義務の違反と思はるゝことを敢てしても、自己の爲めに特殊利益を計つて居るとの、痛感すべき印象を以てして居る。此の、文明世界の意見といふものを、吾人は輕蔑に無視することを得ない「人類の抱く意見に對し、適當なる尊敬」を拂ふことは、「米國獨立宣言」を作せし吾等の父祖たる殖民地民の、動機の一として同宣言に掲げられた所である」

と云つて、彼は其の堂々たる大議論を始めた。而して、彼は上院に向つて「我等が踏み込みたる立ち場」が、どんな種類であるかを述べんと欲する故に清聽を乞ふ、と前置きして、卅頁に近き長演説をした。

彼の演説の要旨は、「合衆國の今後採り得る道に二途ある。即ち一には此の事件を仲裁々判に附して、若し我に理あらば、我

すに當ての目的に[illegible]
自身[illegible]
[illegible]規定を[illegible]一[illegible]と論ずるに至つた。

彼は先づ、一八五〇年のクレートン・ブルワー條約より說き起し、半世紀後のヘイ・ポンスフォート條約に至る迄の交渉に基いて、米國は英國に對し、常に、將來開鑿さるべき運河の使用に關し平等無差別の權利を約したりし所以を述べ、此の事實に照して、沿海貿易に從事する米國船舶に對し通航税を免除せんとし法律は、條約義務に違反するものなる事を指摘し、更に、コロンビア(一八四六年)條約及パナマ(一九〇一年)條約を援して、益々此の事實を明示するものなることを示し、且つ、パナマに對する當面の責任者ルーズヴェルトの所謂「文明より受けたる委任」の思想を回顧し、以てパナマに於ける米國の權利其の物の根據に論及して、パナマ條約の基礎をなすものは、「人類共通の利益」の爲めに世界の通路として運河を開放するといふ「嚴肅なる信託」なるに因り、該地帶が米國の版圖に役ふことは許されずと指摘して居る。

彼は更に語をついで、何が「沿岸通商」なるかの定義、何が一國の管轄に專屬する内政事項なるかの其の、等に關し[illegible]

れる見解ある事をのべ、而して、かゝる解釋上の異論に基く差別稅擁護論を反駁し、更に論旨を進めて云ふには

「議長、（因に、米國上院に於ける演說は凡て議長に對して述べらるゝ形式をとる）、英國は一九〇一年のヘイ・ボンスフォート條約の解釋を聲明して來た。其の解釋と同じ見解に基く議論は、私が上に述べた所である。乍然私はもとより自分が誤つて居ることはあり得ると思ふ。私は今迄も幾度か間違つた。此の條約の解釋に關して異れる見解を取らるゝ議員諸君の方が、反つて正しいことはあり得ると思ふ。現在は然か思はぬ私としても、反對なる議員諸君の批評と公正とを思へば、誰か、我のみ是にして他は非なりと斷言するの愚を敢てしよう。議長、畢竟するに、彼等と私と、何れが正しきかの問題を決するものは條約の解釋如何である、問題は翻つて條約の解釋にある。」と、

玆に於て、彼の論鋒は一轉して、條約の解釋に關する論爭は、當に仲裁裁判に附せらるべきものであると說くに努めるのである。

四、

元來米國は仲裁々判の主義を世界の前に主唱し、率先して其の實行に努めて來た國である。而して英國との間には一九〇八年の仲裁裁判條約がある。今若し如上の「條約の解釋」に基く紛爭を、仲裁々判に附し得ずと、米國が云ふならば、それは米國自らが自分の顏に泥を塗ると同じである。そこでルートは曰、

「議長、若し我が國が此の條約の解釋より起る問題を、仲裁々判に附することを拒絶するが如き倨傲なる態度を採るとすれば、それは單に嚴肅なる條約上の責務に對する我が國の背反行爲であるのみならず、我が國民が屢々世界の前に聲明し、人類に向つて慫慂し來れる主義を裏切ることとなる。」

「これは嫌惡すべき僞善の罪に我れと我が身を宣告することである……かゝる事を敢てせば我等の自尊心はそも、どうなるのであらう」「嗚呼、我等はパリサイの徒であるか、我等は不誠實にして詐僞であつたか？……合衆國は、其の議會も大統領も、皆僞りの假面を被り、巧言を弄し、迎合を謀りながら、一朝、直接利害の問題起れば、其の一切の聲明と約束と主義とを廢棄して恥ぢない、と云はれて我等は默認し得ると思ふか。」

と。論じて玆に到ればルートの舌鋒は再轉して、「抑々かく迄に我等を難境に立たしむるは何の故か」と問はざるを得なくな

な[illegible]るに[illegible]する所「[illegible]の利得」である、ここで我の[illegible]會は其の結末に進んだ、彼は云ふ

「議長、我等が自[illegible]心を[illegible]にして獲り得る道は、一の選擇について決意するあるのみ。即ち我等は此條約の解釋を伸長々[illegible]に附するか、然らざれば我等は一度取りし道より潔く退くことを決すべきである。」

彼の愛國の情は、其の精神に切々として人を打つものがある。「議員諸君、希くば今我等が茲に爲しつゝある事が如何の意義を有するかを一考して頂きたい、」と云つたとき、老功の政治家ルートの面も其の熱誠に輝いたであらう。彼は言を續けて

「吾等は祖國を愛し、又其の歴史を誇りとする。我等は皆其の將來に希望を懸け、其の好評を欲する。我等は我が國が其の光榮ある過去に成したるより、更に偉大なる事を文明の爲めに成就し得んが爲め、世界各國の間に處して、必要なる力あらん事を欲する。」然るに我等はそれにも係らず、今、世界の人の頭に、米國人は契約の義務を逃るゝに敏捷狡猾なる人間なりとの印象を與へんとして居る。我等は約束に不忠實なる人間として世の定評を得てよいだらうか、「全世界の人が米國を目して、「合衆國には氣をつけろ、うまく利用されるから」と云ふ樣になり。米國人は利巧で、すばしこく、相手の隙につけ込み、加ふるに

彼等は[illegible]」と[illegible]ルートが云つた時、十六人[illegible]人なるアイデンティチーが突然議場より一[illegible]云ふ事が出るのではないか」と[illegible]ルートは續けて日

「今は、丁度それです、その[illegible]云ふ事を、[illegible]に受けねばならぬ様な事を。今日我々が[illegible]していつたらた。而してルートは次の如くに其の演説を結んだ

「議長、大國民たることは誠に結構なことである。併し、而[illegible]の大を以てのみして、一國を大國となすことは出來ない。一國が大國たらんと欲すれば、夫は、其の精神に於て偉大でなければならぬ。寛厚なる心を持ち、高貴でなければならぬ。そは凡て卑しきと、下劣なる事を[illegible]め、唾棄せねばならぬ。そは其の前言に忠に、條約を守ること忠實でなければならぬ。そは文明に對して有する自國の使命に誠實でなければならぬ。我等は凡てと等の事を我が米國について信ずればこそ、我等は我が國に誇りを感じて居た。然り、さればこそ異國人も亦、一度足を此の地に踏み入れば、此の偉大なる民主國の一部となるを誇りとするのである。」

「議長、其の大なる事業の光彩を曇らしめるに、[illegible]小なる目利の暗影を以てし、我等自らの行爲によりて、人類の我等に對する尊敬を打毀ち、爲めに今後幾十年かの間、此の目

由なる共和國か、人道の向上進歩に參與する努力を減殺するの結果となれば、其の不幸は如何に大であらう。「議員諸君、若し卿等と私とが、アメリカをして、自由と正義への進歩に於て世界の先驅たるを得しめ來りし、かの光明あり精氣ある理想を破毀したる責任者となるとすれば、そは如何に大なる不幸であらう。」

五、

以上、長々と私がルートの演説を引用した所以は、一つにはパナマ通航稅事件と今我等の問題たる移民法事件とに少からぬ共通の要素を認むるからである。又二つには、如何なる種類の議論が米國議會を動かし、國論を動かしたかを知らんが爲である。而して第三には、米國上院が（それには近年我が國には甚しき不快の印象を與へたものであるが）十年前には、其の内部より起れる正論に對し、坦懷に謙虛に、耳を傾けて、遂に自ら其非を改めるに至つた事實を興味深く思ふからである。

それにつけても想起さるゝは討議の自由の貴さである。といつて私は米國議會を目して完全なる討議場と爲す者ではない。又其賞讚してきるでもないが、併然、單に右の一例について見るも、一法律制定の半年後、自己の所信を披瀝して堂々國家の立法の非を攻むる反對の叫を擧げるルートが、一方にあれば、他方に、上院は心を虛うして傾聽の態度をとつて居る。而して自由なる討議、論究を重ぬること、更に一年有半にして、遂に法律の改正を見たのである。

餘談に亙るが、米國に於ても言論の自由は一時甚しき拘束を受けた。大戰の餘波を受けて、一時は米國は世界の最大不自由國なるかの觀を呈したこともあつた。然れども言論、討議の自由は、所詮はデモクラシーの生命である。故に何れの國を問はず、識者は近時、愈々其の價値を認めて其の發達を希ふ。思想のみよく思想に勝ち得る。此の意味に於て、曾て合衆國政府の行へる過激主義者禁錮或は追放の方針は、自由國の依つて立つ根本義の沒却なりとして、識者の間に顰蹙された。又、暴力に訴る現時のクー・クラックス・クランの如きも、此の意味に於ては、究極は、米國民中の一部の自殺的行爲に歸着する。力による抑壓は、それが政府より出づると、民衆より出づると、將又議會内に起るとを問はず、討論による進歩を生命とする自由國の觀念と並立し難いのである。

却說、前述の如くにして、一時世を騷がしたパナマ通航稅の問題は結末を見た。若し、世に何人にもましてこに對して欣快の情に堪えないものがあつたとすれば、恐らくはそは、當時既に

故國に歸りて、[illegible]
[illegible]
の生前久しきに日米親交を唱へられた、又米國に[illegible]することが[illegible]くなる。我が外務大臣が今又今回の移民法事件に關することになつたのは、奇しき因縁と云はうか。待つものは[illegible]の態度を取らるゝ外相の胸底に、必ずや、平静なれども煩悶たる確信の存すべきことを、私は疑はない（本年一月二十二日議會に於ける幣原外相の演說参照）

六、

先きに私は移民法の問題とパナマ運河稅事件とに共通の點を認むると云つた。然し、此の言葉には色々留保を附けなければならない。即ち、兩事件を比較するに、先きのパナマ運河法の場合に於ては、條約違反の行爲は餘程明瞭であつた、又仲裁々判に附すべき義務も殆ど疑の餘地が無かつた。然るに移民法問題に就ては之等の點に關する明確の度は餘程少ないと見るべきであらう。又前の事件に於ては事柄は要するに金錢利害の問題である。然るに今回の事件に於ては、事態其物は、純粹に移民禁止方法の形式の問題であるとしても、其の背後には、米國側の立場を云へば、同國內部に於ける某分子の[illegible]といふ花

[illegible]
にして[illegible]かく滿足なる今回の[illegible]堂々に當る事件に[illegible]の關係の問題が解決するまで、又同時に既に存在する所の日本幣原男子の將來の問題が[illegible]

威然に思へ、自由の[illegible]に於て[illegible]仰せし米國、優秀國民の世界に於ける平和の使命を高唱する米國、ノーディック種族の優越を誇る大國、東洋木國の民に其の將來の光明を與へると誇れる米國、其の米國が、東洋の一國日本に對して、この非禮を行つた。日本は、彼に對して正々堂々の抗議を送つて以來、紳士として、對手の自[illegible]を信じて居る。其の日本は曾て、黄禍の象徵として、中國の保護國として、時には、亞細亞的帝國主義の代表として、世界の眼に映ぜし國であつた）米國民は如何に批判ふか。若し人間の歷史に或るべきこそ、崇高偉大なる世界的ゲームたるものであるとすれば、其[illegible]の世論に行はれて居る、と私は云ひたい。

七、

ルートの言葉を以てすれば米國民は常に「人類の彼等に對する尊敬」に鑑み、「アメリカをして自由と正義とへの進歩に於て世界の先導たらしめ」んが爲めに「其の理想に於て偉大」ならしむる事を努むべきである。而して、現に、其の種の努力は行はれて居る。

全國に於ける基督教諸教會の總聯合フエデラル・カウンシルは昨年來「一九二五年のプログラム」を作るに際して、日米の問題を重要なる一項目に掲げ、排日條項を含む移民法の制定を以て、議會が國際交誼の通則を無視せる顯著なる背反行爲なりと認め、「事件は終局したるに非ず、何等かの友誼的調整を要す」「曾て國務卿ヒューズの主張せる如く、又前大使ウッズの慫慂し來れるが如く、移民の制限に於て、日本にも比率制を適用すべく法律の改正を行はしむるを、米國基督信徒の强き要求とせん」との決意を示して居る。（二月十三日ジャパン・アドヴアタイザ參照）

私は此の種の事業が絕大なる困難事なるを率直に認める。此の點は前に一言せし我が外相の演說中にも指摘されし如く「法律は法律を以てするに非れば改廢することを得ず、」「問題の解釋には「畢竟、米國國民一般の、我が國民並我主張に對する正當なる理解に俟つ外ない」のである。乍然、幣原外相が議會に於ける演說の結末の一句を以て私も本稿を結ぶ言葉としたい。

「米國國民の血管の中には正義を愛する建國當時の精神が依然として流れて居ることは疑を容れませぬ、私は其事實が實際に證明せられる時期の來るべきことを期待する者であります」と。

無限の富源に恵まれ、百五十年の順境に生ひ立つて來た米國は、國民としては若い。若くして財を積み、精力に溢るゝ者が、理想を抛つことは人生の悲劇である。私は米國民が、一度高き聲に耳を傾くれば、眼前幾多の困難障碍を排して、正しきに向つて邁進する事を疑はない。

義務の囁き低く、「汝斯くすべし」と聞ゆるとき、
若人は答へて、「我爲べし」と云ふ。

When Duty whispers low Thou must
The youth replies, I can

とは今も昔も、米國人持愛の一句であるに相異ない。私は米國の友として、ルートと共に「米國が、其の光榮ある過去に成したるより更に偉大たる事を、文明の爲めに成就せん事」を庶幾する者である。一四、三、一二、

十二大家傑作頒布會

今回左記十二大家の傑作各一枚を十二ヶ月に組合せお頒けす。作品は毎月一枚宛配布し一年間にて十二枚即ち十二ヶ月全部取揃ふやうにせり。會費が此の如く低廉なるは、筆者諸先生が特別の好意を以て揮毫下さる故なり。御希望の方は左の規定御覧至急御申込み下されたし。

規定

一、本會の筆者は左の十二大家なり。（いろは順）

石井柏亭先生	山村耕花先生
大谷句佛上人	山内多門先生
小川芋錢先生	近藤浩一路先生
田中頼璋先生	北野恒富先生
中村不折先生	木村武山先生
野田九浦先生	飛田周山先生

二、會費一ヶ月金參拾參圓　送費｛内地 金六十錢／海外 金九十錢

但し毎月一枚宛を配布する故、二月に第一回の配布を受けたる方は、來年一月迄に十二枚全部の配布を受け終り、三月に第一回の配布を受けたる方は、來年二月迄に十二枚全部の配布を受け終るなり。

三、申込み金等一切不要、會費及び送費は揮毫出來たる分より毎月一枚宛を代金引換郵便にて送附し、現品と引換へに頂戴す。東京市内は郵便によらず毎月御屆けし其節會費を頂戴す。

四、作品は、巾一尺二寸長サ四尺八寸の紙本へ頗る入念に揮毫せし人物、花鳥、山水等適宜に取合せたる十二ヶ月（十二枚）なり。此の十二ヶ月は必ず前記十二大家の作各一枚宛を以て組合せたるものなり。

五、作品の大きさは、本寸六曲屏風に盛貼り仕立（[illegible]）として、丁度よき寸法なり。又幅物としても巾、長サ共紙本の理想的大きさなり。尚ほ全部配布したる後ち、御希望に應じ屏風も幅物も（箱附共）實費にてお仕立す。

六、申込期日は、三月三十一日限りとす。但し期限内と雖も申込み豫定數に達したる時は謝絶す。

七、作品は、申込みを受けたる月より揮毫出來順に配布す。發送の際は毎回必ず書面を以て御案内す。

八、申込みは、普通の葉書又は手紙に「十二大家傑作頒布會に入會す。[illegible]の分より毎月一枚宛代金引換郵便にて送附相成度申込み候」と記し住所姓名を明細に記入し、なるべく姓名の下に認印を捺して（東京市麹町區元園町中央美術協會）宛投函のこと。

東京市麹町區元園町一ノ一九

中央美術協會

電話番町 長 四谷五一九二番
振替口座東京二九七番



長門峽游記

黑頭巾

其一

日本の名勝にして、長門峽の如く、その名の速に著はれたるはなかるべし。耶馬溪は、山陽、探勝後、十二年を歷て、始めて耶馬溪圖卷、及び圖卷記を作り、漸く世上に喧傳するに至れり。元來、耶馬溪は、交通の衝路に當り、好風景たるは早く知られしも、唯だ、これを以て海內第一と推稱するは、山陽を以て始とするなり。長門峽は位地の險僻なるが爲に、近來に至るまで全く世間に知られず。內外、一二有志者が、榛莽を攀ぢ、絕壁に沿ふて探險を試みしも、僅に大正以來の事に屬す。およそ全國、到處、山水の奇勝を賞揚するには、皆、これを耶馬溪に擬せざるはなし。此の峽も、當初、或は、これを長門耶馬溪と稱せし者あり。既にして遠近、遊賞の客、續至し、漸く世上に喧傳せられ、耶馬溪以上といふ者あり。吾儕も亦た一遊を試みるに至れり。吾儕、平生、四海を以て家となし、天下の山水を跋涉すること三十年、且つ此國の出身なるを以てして、此の奇勝あるを知りしは大正九年に始まり、その後、三年を經て、初遊の道に上る。長門峽の遊、吾儕としては寧ろ甚だ後れたりといふべし。然れども其の奇勝と、その趣味とを、詳かに探賞、考究して、以て、これを天下に傳ふるは、則ち吾儕を以て嚆矢とするならん。

長門峽の名を附して、此の峽谷、及、附近地帶を統一したる

は大正九年にして。保勝組合。成立し。翌年。峡中の旅路工事を竣成し。鉄道に。長門駅を新設するあり。峡中の旅館。峡口より峡に至る川下りの設備等も亦た成り。続いて十二年。内務省。第一回の名勝地に指定せられ。今や。峡中の白櫻。紅楓の美観を以て。錦上に花を添へて。更に。その名勝たるを喧伝するに至れり。櫻の嵐山。紅葉の高尾。ともに好山水なりとはいへども。山水の奇勝を以て雄たる所以にはあらず。月瀬は。拙堂の月瀬記勝の一文に由つて著はる。山陽は同游せしかども。山水記を作らず。月瀬記勝の傳ふるは。渓谷に充満する梅花の精趣を写すの巧なるにあり。長門峡は耶馬渓と同じく。其價は。純ら山水美にあり。花と紅葉とを頼るに非ず。山陽の耶馬渓評は。厳冬の候にして。萬木落葉し。巌骨。悉く露はる。山水の大に奇なる所以のもの。赤裸々に。その真相を呈し。一個の紫紅だも。これを粉飾するものなし。彼が。耶馬渓山の清痩を愛すと称し。圖各は。淋漓たる墨沈を以てしたるもの。一に。石を肌とし。樹を衣とする渓谷美に共鳴するに外ならず。若夫。長門峡に於けるも亦た同じ。純ら。その山水美を称揚するにあり。峡を挙げて。宛然。墨藍を以て描ける絶奇山水の一大横幅を展開せるが如きにあるなり。而して此の天然の一大横幅、實に。天下に得難きなり。

其二

大正十三年十二月、吾輩、東京より来り、十三日、山口を経て、御堂ヶ原より長門峡に入る。天、偶、雪を飛ばし、群山、皓白し、一路、銀世界を穿つて進む。徂徠の峡中紀行に、その同行者が徂徠に向ひ、文人、甲州の峡中を探るは、これを始とす。天、恐らくは風伯、雨師を召集して道路を清掃するならんといひし一節を思起して、微笑せざる能はず。此行、吾輩、左脚を病み、肩輿を倩ふて行く。既にして雪、霽れ、渓に、雪未だ淺し。輿夫の草鞋、雪を帯びて行に響く。御堂ヶ原に長門峡駅あり。駅前、一塊の丘、餃山といふ、碑を立て長門峡と題す。篠目川を渡り、丁字川を右に見て、櫻ヶ峡に入る。阿武川、東北より来り、西南より来る篠目川と、此に正面衝突をなし、二水、奔騰、合流して西北に向ひ、阿武川といふ。十里にして海に至つて、北海に朝す。長門峡は、その渓間四里の奇勝にして、丁字川を以て始まる。抑、丁字川は天下稀有にして、且つ、これを以て開幕とするの奇勝は、此の峡の外に未だ聞かず。丁字川より十町許にして、千湯洞口に至る間を、峡の序幕とす。総て在峡の奇景、未だ出現し来らず、所謂、例は處女の如きものの此間にあり。然れども名山水を探るには、名士に訪ふが

細し。皆明、周[illegible]一変するのとき、[illegible]く、[illegible]景彼を看破するを要すると同じく、[illegible]分、平由凡[illegible]にるを味ふべきなり。樹木は、銀杏、黄楊、櫟、たふ、[illegible]の楓等の外に雜木多し。野生の躑躅、殊に多し。紅葉等[illegible]して[illegible]世、山に舖く。櫻を殺えて櫻峽と名づく。兩岸迫つて、巨岩、河床をなし、奔流、忽ち絶壁を劈んさいて飛ぶ。千瀑洞口といふ。峽の第一瀑布なり。此に於て光景一變して、峽谷美の第一線揚る。左右、斷崖の奇岩、巨岩、相對して睥睨し、開いては相憎ほり、迫つては相搏たんとし、[illegible]の怪石、入り亂れて、磊々として溪中に起伏し、水、激して鳴る。水聲は長門峽の音謡なり。溪路四里の間、淙々颯々として[illegible]を揮ふ。急湍激瀬に到るごとに、悄然たる水の[illegible]を聽く。溪すべて瀬ならざるはなし。千瀑洞口の次に馬瀬、[illegible]瀬、上和智瀬、下和智瀬、父の瀬、[illegible]の瀬、湯の瀬より、峽口の[illegible]瀬に至るまで、名づくるに瀬を以てすると、せざるとを問はず、すべて是れ大小の瀬ならざるはなく、不自由なる[illegible]律を以て綴用するに、百の瀬が、永劫不斷の溪譜を奏しつつ、變化自在の千峰萬嶂を背景とし、[illegible]する奇嶺を以て登場の名優とし、花卉を女優として、その間に點綴せしめ、雨を旅とし、霧を裳とし、杜鵑、鶯、河鹿を以て[illegible]として、或は獨唱、或は合奏せしめ、月[illegible]とし、[illegible]とし、[illegible]す[illegible]石[illegible]、[illegible]、[illegible]たい。

千瀑洞口より[illegible]、溪を[illegible]に入[illegible]て谷とし、岩[illegible]い[illegible]水[illegible]く[illegible]、岩[illegible]を[illegible]らし、[illegible]、[illegible]戸に[illegible]し、往[illegible]して、[illegible]の[illegible]起伏す、[illegible]に、[illegible]下に瀑布あり。水、[illegible]を[illegible]て[illegible]り。[illegible]の間に[illegible]は[illegible]仙の如く、水に[illegible]の如く、[illegible]仙、[illegible]するに似たり。興夫いふ、御堂ヶ原より湯ノ瀬に至る間、[illegible]、その中、尤もよく深奥なる好景を[illegible]ケ淵とすといふ。興夫も亦た山水の[illegible]を知りたるにはあらず。[illegible]、溪、少なことと、蛇腹に[illegible]を飲むが如く、[illegible]、膨れて、紺碧の深潭、湛へて淵をなす。則ち舟人なり。數十の[illegible]、此に集まり、[illegible]、[illegible]に[illegible]す。甚くべく、[illegible]ふべし。これを峽中の[illegible]と[illegible]の多きより見れば、此の峽は[illegible]溪といふべし。舟入の次に[illegible]ノ床あり。岩[illegible]、[illegible]をなす、[illegible]は[illegible]の[illegible]なるべし[illegible]佳なる。[illegible]の紅葉、火の如く、草木凋落すれば[illegible]、[illegible]にあり、水に[illegible]あり、峽谷の精彩、[illegible]、窮なし。大釜淵、[illegible]橋、一々、水石を品評して河淵に在れば、[illegible]、道を[illegible]斷崖の中腹に、[illegible]を[illegible]て[illegible]し、[illegible]

くること、兩岸の、岸を立つて深淵に臨むが如し。右、岸巖なるざるはなく、巖高く岩角に樹を帶ぶるを峰とし、更に大なるを峯巒とし、水走つて巖を分ち、巖、削立して天を刺す。唯だ水と石と此峡をなす。水澄み、石怪しくして、大小各巖の筆法、明かに見るべし。その水中に浸すものといへども、岸上より望んで鮮かに辨ずべし。天意、無形の筆を揮つて、畫書の岩を描き成せるものにあらずや。廣瀬は、畫面の稍大なるものとす。

峡中に寺なく僧なし。岩には坊主岩あり。陸放翁の入蜀記を讀むに、山水絶奇なるところ、必らず寺なきはなし。耶馬溪中には幾多の寺あり、此峡には唯寺の遺址を存するのみ。かくの如き山水畫の長卷には一箇の寺を畫きたく、一人の僧を點景したくもあり。一の點景俳もなかりし長門峡の山水の、如何に、寂然たりしかを想像するに餘あり。

限無き奇巖、亂れて收拾す可らず。高島洞に至る。洞内より望めばパノラマの如し。岸走り岩蹴つて洞口に入る。耶馬溪の洞門の月は山陽を驚喜せしめたり。此峡の洞門は二あり、ともに月なし、明月に、此に來らば、南窓を開いて溪山を望むが如く、満天爛然として、洞門より樹峯、悉く碧潭に倒映し、依稀、寂として、唯だ水音のみ天地に滿ち、水中の樹峯、悉く響あらん。佳景獨ひとり佳景の一字を占有す可らず。臨の洞の水のみ臨の如きにあらず、到るところの潭、皆な可し。淺潭、鏡揚するとき、斜日、これに映ずれば樹峯を浮かしめ、凝し溪水の極めて洞冷たるものなり。上和智瀬、下和智淵、岩小屋淵、猪渡を經て、對岸に生雲溪を望む。釣橋あり、紅葉橋といふ。生雲溪は峡の支流、生雲川の山水なり。橋を渡つて生雲溪を尋ぬべし。

其三

山陽、耶馬溪を記して、路、田疇、頗に游ぶべしと云へり。耶馬溪は古來、牛車を通じ、到るところ觀大に開す。長門峡は絶えて人烟なく、御堂原より湯瀬に至る二里の峡路、僅に一軒の茶屋ありしのみ。峡路は蜀の棧道に比すべし。古木、岩角を攀ぢ、絶壁に沿ひ、懸崖に附し、樹根を攀ぢて、下俊の岡岸を渡る。世人、何ぞこれを危くせん。山中の人、皆、仙客なりし。山陽の如く、一瓢に川瀬を臨り、酔来、微吟して、時に、筆を揮いて、溪山を寫しつつ行く如きは、此峡には、夢想するを得可きにあらざりし。

紅葉橋上に立ち、往路を回看して、溪山の幽邃を思ふ。路迫つて肩輿の通ず可らざるとき、乃ち輿を下つて徐ろに山水を觀る。限無き危巖、危岬、先を爭ふて、來つて、畫幅を揮毫せん

[illegible]井に入りて、[illegible]此に[illegible]

[illegible]行く、大[illegible]ふしたると多く異なる[illegible]るに似たるなり。但だ[illegible]眼、専ら水行に注ぎ、水行と[illegible]ともに相得て、陶然として[illegible]

下深河は古名、[illegible]といふ。上[illegible]より生ず[illegible]に下るの間、兩岸相迫るところ、此を[illegible]しとす。時に、山[illegible]を渉る者、此所に[illegible]したらん。[illegible]は、[illegible]、大物を[illegible]し[illegible]くして[illegible]に及ぶの[illegible]や、[illegible]淵は、[illegible]に浮び、行く行く、[illegible]水に[illegible]し、[illegible]下[illegible]なるを[illegible]、ともに水に映じ[illegible]も、山中を行く[illegible]を水面に見る。舟人は[illegible]中の[illegible]淵なり。兩岸の[illegible]を收めて、[illegible]たり。[illegible]に至り、[illegible]、左右より水に向って[illegible]し、[illegible]直ちに行[illegible]より[illegible]、[illegible]画、必らず[illegible]、[illegible]、水を[illegible][illegible]

[illegible]

和留瀬の巖崇の節勢なほ已まず、水流、瀬を爲して、屏々、段落を作りつつ、兩岸の青嶂、溪とともに低きに就き、右岸の峯勢、緩るむところを猪渡といふ。山中の豪猪、水を渡つて對岸に到るの熟路に當り、獵夫の、伏兵を設くるところといふ。峯勢緩むこは生斐川の來るなり、二溪、合流して、溪勢、大に振ひ、水量の倍加して、溪幅の張らざるが爲に、流水は地底より噴くが如く、渦卷き騰ぼつて、兩岸の巖嶂を動搖せしめつつ、汪洋として漲ぎり奔る。その下流に紅葉橋あり。水聲石影を踏んで橋を渡れば、空に倚して、溪樹より溪樹に浮び行く。

峽の支流、北岸より來り注ぐもの多し。これより先き、大谷淵に大谷川あり。小川にして、溪情の語るべきものあらずといへども、鈴茶屋の趣味を添うるに足る。鈴が茶屋は大谷淵に臨み、閑散なる一亭、茶あり、酒あり、水に俯して廻椽を設く。月下の水、鳴つて光る。椽に踞して水石を眺り視るも可なり。・夜、此に宿して、溪聲の間に、崖上の草蟲の喃やくを聽くも亦た可なり。蓋し峽中、初めて得るの旗亭、峽に入つて一里、漸く渇を覺ゆるのとき、溪間に酒旗の飜へるを望むを得る、是、また溪聲の一風流にあらずや。生斐川は右岸第二の支流、谷景多し。紅葉橋を渡り右轉して川に沿ふて進めば生斐溪なり。柚淵及び柚瀧、暗淵及び飛瀧淵あり。淵の後に瀑あり、瀑の許、必らず深淵あるなり。

其四

生斐溪は、本流と頗る趣を異にするものあり、溪狹く、水清く、巖々、嶂々、皆、樹、衣を纏ひ、飛沫、水面を覆ひ、翠色、空に滴たり、晝大白日といへども、溪氣に澎湃たる雨氣、人の袂を濕うす。幽邃の極なるかな。巖として樹あらざるはなく、樹として苔あらざるはなく、淼々たる霧、溪樹蔭に漂ひ、哀々たる鳥鳴、密林を漏る。水烟重く、日色冷やかなり。柚淵及び暗淵、上に密林の翠光、濃やかなるあり、下に深水の飽くまで碧を凝らすあり。翠、碧、合圍の如く、一たび其境に入れば、陰森の氣、人をして夏なほ肌に粟を生ぜしむべし。暗淵は殊に暗し。淵廣く、洞暗く、山鬼水妖の窟宅するに非るやを疑ふ峽中すべて河虎なし、河獺あり。山民、或は傳ふ、暗淵に妖物の潛めるあり、大さ河獺の兒の如し、日暁、薄暮、しば／＼水面に出沒し、溺者の睾丸を貪ぼり狙ふ。蓋し峽の、險奇を極むるを以てして、古來、溺死者少からず。その亡魂、化して妖物となり、悉く暗淵に集まるといふもの則ち是なり、名づけて川餓鬼といふと。川餓鬼、今、ありや、なしや。此の外、峽中、更に一箇の狐狸妖怪を語るものあるを聞かず。此峽ほどの幽奥、

[illegible]にして[illegible]の[illegible]なきこと、[illegible]なりし。[illegible]ものあるなり。また以て、[illegible]なるを知るべく、これを[illegible]の[illegible]なりとするも、[illegible]不可なりといはん、[illegible]暗淵、[illegible]その数[illegible]にして[illegible]なるものたり[illegible]規模なりとするのみ。神淵の全景は、前方の暗淵より望むべし。神淵は三折して暗淵に瀉ぐ。第一段は第二段よりも遥に後方にあり。想ふに、今より幾十萬年の後、第二段、第三段が水蝕の爲に消磨し去るべく、或は神淵が、その全姿勢を保持しつつ、その位に退却し去るとき、即ち淵と瀑布との間に、洞道を現出せしむるなるべし。今の暗淵は、既に此の時代に到達せるものならずんばあらず。暗淵の前、谽谺として甚だ暗し。唯だ暗淵を流れ出る水、岩礁に激して、奔騰して白光を放つ。暗淵は洞道なり。幅凡六間、奥行二十間ばかり、その間、兩側の岩壁、削立すること十丈、洞中の水、深黒にして冷々、その静寂を極むること、瀑八丁を縮めて此に貯ふるが如く、陰慘の氣、人を襲ふ。洞中より更に奥に、遥に、一道の懸泉の燦として輝くを望む。則ち飛兎瀑なり。暗淵の前、岸に沿ひ、水中の巖より巖に飛んで、暗淵に到り、洞に入つて飛兎瀑を見るを以て、生雲溪の奇勝第一とす。水、巖を齧して、滑らかなること玉の如く、暗淵に出入するの客、戦々兢々たらざるはなし。抑、水[illegible]

[illegible]

[illegible]軟弱なるものは、地盤と岩石と相俟て後退し、即ち[illegible]は、[illegible]の大部分、堅硬なる山岩にして、軟弱なる部分に、此陣に[illegible]。則ち何處までも、紙袋の儘に[illegible]るなり。然れども[illegible]努力は、紙袋より脱するにあり。長門峡は、その大部分、岩質粗剛岩にして、地溝と並び、頗る硬質なるを以て、浸蝕の後退に後れて、地盤が踏み留まることあり。生雲溪の[illegible]瀑の壁岩質、殊に硬し。浸蝕、後に後れしたるに、地盤のみ[illegible]然として存し、當時の姿を示すもの。則ち暗淵なる[illegible]、洞窟は途中に残り、[illegible]、[illegible]、日を光らし[illegible]あるもの。則ち[illegible]の飛兎瀑なり。

生雲溪より本流に歸り、紅葉橋[illegible]に立ちて、[illegible]て上流を[illegible]すれば、奔流、遠く天より來るを、波濤の[illegible]する間に、巨人の巻を指點するを得べし、巨人の巻、或は、[illegible]岩といふ、[illegible]岩は峡中、所々にあり、此にあるを最大なるものとす、[illegible]のうち、屹然として巍たる[illegible]に、[illegible]て、[illegible]

く、臼ならしめば、杵は消磨し盡くして、臼底に殘骸を留むるなり。釜ならしめば、溪水を熱して湯となし、以て、釜底の石を煮るべし。實に、此の巨人の釜こそ、天地の悠久にして、此の風景の開闢の神秘なるを默語しつゝある雄辯家なる可けれ。奔流に送らるる溪中の石礫、偶、微妙の機會に觸れて、此の地の岩質の窪處に停着し、水勢に煽られ、轉々反側すること若干回にして、端無く、また奔波に浚はれて去る、石と石との一瞬の奇緣にあらずや。此の石礫、永劫、此の岩頭に再來せず。溪流、息まず、次いで他の石礫を送り來りて、間斷なく、一瞬の奇緣を繰返さしめ、かくの如くすること幾百星霜の後、岩質の窪處は漸く窪み、遂に穴となり、洞となり、洞、漸く深くして、石礫を住着せしめ、奔波の注ぐごとに、洞中の石、廻轉して、洞壁を磨し、久しきを積んで洞を抉ぐり、終に釜となせり。釜を造るに、釜の石を以てせるものなり。その形は釜にして、その成生は臼なり。されば、これを釜といふも可なり、臼といふも可なり。此の釜を抉りし巨人の手は、久遠の水にして、その鑿は則ち釜底の石ならざればあらず。地球の前途は、猶ほ遼遠にして、此の釜は未だ完成されざるが故に、巨人は、鑿を釜底に放在するなり。實に、此の巨人の釜こそ、名山水を舞台として、天地の創造を物語りつゝある、趣味の象徵たらずんばあらず。

抑、此のお釜石、既に幾年を經たるぞ。此の鑿、能く幾寸を穿つぞ。或地質學者の說に據れば、丁字川の創生は、廿萬年前にありといへり。丁字川の創生以前の太古には、阿武川、未だ此峽に入つて宗となるに到らず。生山溪を以て本流とせり。隨つて丁字川を發して、今、吾輩の立てる紅葉橋に至るまでの溪谷は、未だ無かりしなり。此のお釜石は、紅葉橋の上流にあるを以て見れば、下流のお釜石よりも若しといへども、此の直徑一間の釜を抉ぐるに、なほ廿萬年を要したるたらん。然らば即ち人壽百歲といふとも、此の釜の抉ぐらるゝ一分一釐なるを見るに過ぎざるを哀しむ。此のお釜石、今や水面に現はれ、奔波、不斷に釜に瀉がず。これより以後、更に釜の抉ぐらるゝは、いよ／＼悠久の日に待つならずんばあらず。吾輩、輿夫に問ふ、此の溪水の漲ぎつて、お釜石を沒するは、一月幾回、一年幾回なるを知るや。輿夫答ふ、溪、屢、漲ぎつて岸に及ぶ、漠として水を見るのみ、回數を記存したることなしと。若し、何人か、峽中の風雨、出水を統計して、釜中の石の廻轉と、その磨力とを考へば、以て、お釜石の將來をトするを得ん。

四面、千嶂、萬峯、皆青し。喬木林のうちに楓樹多し。霜葉時節、此の橋の幽致、想像するに餘あり。唐詩の一句、以て、

岩の極に達すべく、いはく紅葉橋の下なる

其五

紅葉橋より滝見橋に至る十町の間は、此の渓谷美の大序幕ともいふべし。長門峡の水、神秘の旋律を奏しつゝ、最初の一音、櫻雲峡は最低調たり。下深洞口に至つて忽ち高調を呈し、これより高低、緩急、左右に錯綜し、唐人、寒滑、和智渕の諸勝を経て、更に高調を加へ、紅葉橋を過ぐれば第一断魚瀑あり。此に至つて琴線、皆張り、一音は一音よりも急に、第二、第三の断魚瀑及龍宮淵に至るに及んで、森羅萬象の一切が緊張の極に達し、渓谷の最高潮を開かしむ。場面の推行は旋律に伴ふ。此の間、岩石といはず、樹木といはず、峯巒といはず、山神、水精、悉く感應し、共鳴して、山水絶奇の大序幕を見せしむ。吾等を以て見れば、四里の峡程、此の間を以て、長門峡の風景第一とするなり。此に近くして右岸の山中に、雪舟の草庵の址あり。

紅葉橋を右に見て、やがて北游洞を過ぐ。洞中より先づ下流の形勢を見る。脚下乱れ砕け渓いよいよ深し。洞を出れば、脚下に第一断魚瀑鳴る。渓中に巨岩、林布し、右岸より左岸に、岩を伝うて、踏んで渡るべし、水流、その間に激して咆哮に形

碍し、[illegible]
持ち、[illegible]
崇い、水面を両[illegible]
落り、巖稜、左右、相[illegible]
て、水を開けて注ぐ、これを第二断魚瀑とし、渕を[illegible]といふ。
巖壁、四方に迫りて、僅に、渕は井の如く、[illegible]。
満渓の水を湛へて、一大壮観となすものなり。

両岸の峭壁高く対峙し、左岸、殊に[illegible]。これを[illegible]丹の山とす。千仞の絶壁、岩面、悉く樹あり。その山腹[illegible]百の老樹、枝を交し、山巓の間[illegible]を懸げ、手を揮つて、深渓に向つて、[illegible]く、巨壁、径八寸、樹間を経て[illegible]現し、[illegible]枝に垂れ、大蛇の[illegible]辺は、此渓にあり。人々、[illegible]踏み、岩面を擢え、仰げば[illegible]し、氣息奄々として、大牛を行くが[illegible]も、此に至つて一向を[illegible]此の難道をいふ。長門峡の一大奇観、[illegible]しは、此の行路[illegible]なる。然れども、その[illegible]

未だ俗塵に汚されず。若し山和六百、秘して埋みたるならずんばたらず。

不言巖より以前の古道は山巓を行く。雪卅の草鞋は、山の彼方にあり、彼が寫生したりと稱するところあれども、未だ、その君を見ず。彼は、此の山巓より渓谷を俯瞰して、興趣、煥發し、崖を下り荊棘を穿つて秘境を探りしならん。若し、當時、此の渓底に、一二の人家ありとせば、山巓より俯瞰するに、谷翠、映發して、満溪、湧くが如く、人物は皆、寸許。盤中の物象に能く活動すと見えしならん。佛說に、如來、身を虚空百由旬に躍らし、十方國土、無量衆生を下覧するに、猶ほ掌中の菴摩羅果の如しといへるもの、また此の境にあるか。然れども古、此の渓嶽、更に人無し。石、空しく峙ち、水、獨り鳴る。蘇東坡は、山の登るべく、水の游ぶべきあれば、裳を掲げて人に先だつ。其の幽然として獨往し、泉石の上に逍遙するに當りては林作を棄し、澗濱を拾ひ、水を酌んで飲む。觀者、以て、仙人となせりといふ。想ふに、雪卅の平生、軀の輕くして飄颻の人たりしを疑はず。則ち庵を結んで山中にありといへども、遠く此の渓谷に上下すること仙人の如く、花を摘み、果を拾ひ、石に踞し、水を飲み、翩然として行き、黯然として佇み、悠然として自得すると、渓中の木石と同じかりしならん。吾靠の如きも、文章に沒頭して三昧に入るとき、自から酒間を忘るるのみならず、時に上戸すことをも好まず。古人の、山水に於けるも亦た然り。支那の蘇東坡、日本の雪卅、ともに水を酌んで泉石三昧に入る、必ずしも酒仙たるを要せざるなり。

渓底、すべて石ならざるはなく、岸として石ならざるはなく、石は石英粗面岩ならざるはなく、堅石の、大塊の彫刻の中に、一道の水を送るもの、則ち長門峽の風景なり。故に、此の渓の水や、極めて清冷、極めて澄徹。譬へば玉盤に水を満へたるが如し、これを攪せども濁らず。今、吾が、脚下の水、その全體を擧げて、激揚、飛沫し、狂飆の高調に達するを見、吾目は恰び、吾胸は躍る。水を抱すれば、翠として仙界の玉漿たり。これを满酌して、以て、泉石の興味に熱せる腸に澆かんとを思ふ。また忽ち李太白を思ふ。

李太白は、深山を望んでは酒泉たらしめんことを願ひ、淡水に臨んでは、此の江、若し變じて春酒とならば、麴蘗は即ち糟邱臺を築くべしと歌へり。誠に天下の酒仙なり。然れども山水は必ずしも酒仙の版圖にあらず。此の渓流、癖あり、當さに一矢を李太白に酬ゐずんばある可からず。此の水、詩人を醉殺せしむ、俗界の酒にあらず。瀧頭は則ち玉漿、斷岸は則ち玉山。百の玉盤、千の玉山は則ち此の渓山にあらずや。百年三萬六千

日、月、酒ふくまば百川の如く、深くとも、長江、黄河、[illegible]玉山、倒れず。大海は酒として玉骨は溶け、長々臥す、早く彼をなさん。手を拍へば点となり、舌を鼓すれば時となる。花前に酌へ、月下に酌み、雪に酔かり、雲に倒し、心の赴くところに随つて酌んで、長へに酔くことをなけん。昔、見ずや。玉帝はいよ／＼深く玉山はいよ／＼高し。遥かに望めば深水、滔々として緑玉を漲らし、沸々として滴滴の初めて醗酵しつゝあるが如し。鸕鷀杓鸚鵡杯。玉泉を酌めば、激浪、洪濤、巨觥に漲らん。

吾猶、嘗て、ひそかに酒泉を以て自から擬せしこととたきにあらず。今や酒を廃し酒を思ふこととなし。水を以て酒に換へ、陶然として泉石に酔ふ。酔態、爛漫として、渓を下る。此の水、流れて巴江となる。巴江は則ち此の清渓の下流たり。吾猶心と此の江畔に生れ、少年にして江水を楽しむ。五十年にして、今日、初めて上流を酌み、欣然として少年の心あり。此の声、山霊水伯、尤も善く相識るべし。

其六

渓水、愁を流し去つて、第一断魚渓より滞無に到る。丘称いよいよ奇なり。まさに是れ黄大痴が得意の舞台、彼たらば紙上を拙へて一々模寫するなるべし。[illegible]の変幻、四時の[illegible]を抜[illegible]

[illegible]くる山水の自ら伝ふるを[illegible]て京に帰るや、[illegible]江水[illegible]山中、すべて、これを一日に[illegible]はる。同時に、[illegible]思ひ、また山水に名を付けす。同じく渓流水をおくに、数月にして功を畢はる。一日と、数月と、甚しく百代の患をなせり。吾猶、長門峡を観ることと一日、これを写するには四五十日を経たり。吴道子の一日と李思訓の数月とを比ね備へて、ただ、その質を峡谷せしたるに足らずといへども、仿遊を回想して、自から実模、默照するの楽、いつまでも尽きざるべし。

かくの如き渓山、須らく絹を以て紙本に描くべし。山水は数十重に到り、樹木は数十種を下らず。渓路、曲折し、[illegible]茫たり。滞無は、群峰も高く、奇岩、列峙し、大天山、中大山、小天山の三系、群を抜く。密林は外に密を加へ、樹々、鬱蒼、更に蒼潤を増し、山色、深潭に映じて、いよ／＼生動す。行頭の、水面に現はるるものなしといへども、無数の乱礁、多く水中に潜躍し、深碧の水、無数の紋を描かきつゝ流る。渓ににに画なく、[illegible]は水底より来つて、水面に[illegible]を開するに似たり。峰影、樹影、岩影すべて水中に描写する両渓の倒影、彷に[illegible]しつゝ、[illegible]

六曲三三、水路に映じて、峙つたけく、穴中に澄澈の林間ある
か、岩上に湧出たる岩泉の流るゝなり。水氣は立つて天を被し、
谷深、深々、蒼々として林歡に滿ち、行人、皆酔ふ。
峡に入つてより山、岩、石。石、岩、樹。此に至つて樹あつ
とも酷。岸へは奇怪なる樹木の滿身の深し、風雪いて伸びたら
ん如く、藤林、芳草、厚く岸を掩ひ、蒼々、鬱々として流水に
迫る。僅に、林木披いて岩を點ずるのみなるは磊贖たるを知
る。峡の兩岸、瀑布多し。千疊洞口より此に至るまで、岩、石
間に隱れて見えず。此に至り、林谷披くところ、右岸に白糸瀑
現はる。山中の神女、降り來るかと思ふ。翠壁の間に純白の細
糸を垂るゝが如く、高十五六間、簾を掲げて淑やかに仙姿を岩
潭に映せしむ。峡中の瀑布の、もつとも優美にして愛すべきも
のなり。蓋し丁字門より龍宮淵に至るまで、峡の上半、前人、
或は龍宮溪と名づく。此より龍宮淵には、水程すでに近し。白
糸瀑は龍宮の簾櫳なり。神女、此に現はれ、溪路を指點するな
るべし。

其七

峯轉じ、溪廻り、一曲、一曲よりも奇に、一溪、一溪よりも
美なり。往路を回顧すれば、兩岸の峯巒 左右より重なり合ひ、
近きより遠きに至り、左右に迭り、峡へ三歩入れば、〇〇〇
なる如く、盡未竹の衣裾の長皮の重疊せるが如し。溪流、その
間を縫うて來り、水行、龍蛇の奔走し來るに似たり。三つの瀑
魚瀑に至り、峡谷美の佳調、急劇にして、溪峡は最高調に達
す。而して第一瀑より潛龍に至るの間、水聲、俄かに謹えて、
谷相は飽和點に迫り、爽々たる石勢の精彩、石花の將に開かん
とするが如く、利刃の將に鞘を脱せんとするが如く、第二瀑に
至るや、忽ち滿を引いて放つ。滿溪の形勢、簡よりも急に、直
ちに第三瀑に殺到し來る。
潛龍の水、左に轉回し、浴々として行くこと數丁にして、險
勢なる峙石相の迎峙して前路を遮ぎるに遇ひ、乃ち急に右に轉
じ、旋回の勢、河床に小段落を劃して、前進することを有たざれば
くもあらざるに、更に、一箇の金城鐵壁、前面に屹立して奔
流の進路を塞ぐ。滿溪の草木、金城鐵壁の雄姿を仰ぐ。幅十間
直立十丈、一巣殆んど一塊石ともいふべし。此のた岩壁、立ち
はだかり、胸を張り、脚を踏み出め、以て、怒觸し來れる全溪
の奔流を押返さんとす。奔流、全力を擧げて突撃するも、大岩
壁の堅陣、抜く可らず。然れども奔流、退、回す可んや。此に
於て突撃の勢、急轉して河床に向ひ、その堅壁を穿つこと數段。
溪流、大呼、怒號して崩れ瀉ぐ。水煙、濺沫の如く峡谷を蔽ふ。

[illegible]相交し、水、石、[illegible]、水また[illegible]、激突、相[illegible]、互に秩序なしといへども、此に至りて、各[illegible]、水の形、形勢、[illegible]。遂に、此所に[illegible]し、互に[illegible]けて以て、[illegible]し、水、石の[illegible]、[illegible]して、此時[illegible]り、谷[illegible]へ、水、石ともに立ち、両岸の草木、皆、色を添[illegible]す。

第二淵より第三淵に移到する間、僅に二町に過ぎずといへども、断崖、絶壁及び河底よりして、左右の岩石間、すべて同質、憤怒せる大岩塊の連絡にあらざるはなく、淵を[illegible]けて、[illegible]大岩塊を抉り成せる門字形の峡淵たり。峡淵は石の世界たらずんばあらず。水は、その深底を流れ、人は、その中腹を行き、蒼林秀草、その両傍に密生す。峡に入りてより行きたらざるはなしといへども、峡の全景が密蔵し、緊張し、秩序の深潤たることと、此の如きは未だ無く、長門峡の骨髄、茲に成るものなりといふべし。かくの如く緊迫せる石景に、かくの如く草木の繁茂するも、また始めて見る。況んや樹木、皆、石皮を覆ふが如くならずして、直ちに石皮下より生え出でたるが如くなるをや。樹木、隙間なく、密密として生え、緑陰、悉く深くして深淵の如く、寂として一滴って光らざるはなく、[illegible]

[illegible]

[illegible]可からざるが為に、石突、石[illegible]、岩間か、[illegible]く、満ちきたらんとしつつ[illegible]一水、一寸の流に、一滴不明の[illegible]を[illegible]し、大[illegible]的に展開せんとし、幾多の小旋回、大旋回を、[illegible]り、無数の小段落、小瀑布をなして[illegible]く、小幅、飾りに似たくして、傍に、余波、悉く凝結し、白雪の大塊、[illegible]して一轉る。[illegible]円段するもの、悉く大小の片となり、互つかなくして、此の大光景を行く、山間水[illegible]色に[illegible]を下らしむ。

峡頭に立てば、乾坤、緑樹と岩壁との中にあり、[illegible]に、稀世の大門[illegible]を、一條、[illegible]

[illegible]

つて霧となり、大珠、小珠、霧閑氣に滿ちて、天地、濛として、すべて容明を行く。石といふ石、すべて霧を吹かさるはなく、樹といふ樹、すべて露を滴たらさざるはなく、石、水に漂うか。水、石を孕むか。喬木は、昔、水中の藻の如し。興は滝の如く、人は魚の如く、此の刹那、三千世界、渾べて水と水蒸氣との淨土ならずんばあらず。

黄金の球に、水を密閉して、大壓力を以て壓迫すれば、水分は終に球に浸み、球を潤うす。かくの如くすること久しければ、香霧は噴霧氣に滿つるに至るべし。今、吾儕の立てる世界は則ち、それなり。石を以て、永劫に、水を包圍して、攻めて、此の香霧界を創造し來る。世に不死の人なく、人に創世の力なし、その眼、山水の創造を見ず。その心、創造の努力を考察するを樂しむ。水石の攻守の努力、則ち水蝕の藝術にあらずや。今、吾儕は、水蝕の藝術の大殿堂に身を置き、藝術の性命に同化するの快樂に醉ふ。眼前に、活ける水蝕は、刻々に精彩を放ち、一瞬、一瞬に、溪開き、危礁亂立し、斷崖千尺、相擁して重圍をなし、一面の巨巖、溪を横ぎつて、龍蟠虎踞し、最後の大鐵堤を築いて、奔波を塞ぐ。河幅の膨らむに隨ひ、水勢大に起り、奔波、勇躍、飛騰して、左岸の巖壁を砕き、亂礁を揺かし、斷崖に衝ひ、溪聲、百雷の鳴るが如く、最後の大鐵堤を突破し、奔流、分れて二條の大瀑、幾條の小瀑となり、競ふて驩呼の聲を擧げつつ、澎湃として飛び下る。水神、瀑布の容に現はれ、滿谿の山靈を麾いて、奔流の凱歌を聞かしむ。飛瀑は悉く球玉。白玉、無數、轉々、飛躍し、落ちて瀧壺に注し、白玉、推かく亂れ積んで、唯だ、珠玉を見て水を見ず。

如上は、第三斷魚瀑の大觀なり。瀑下の碧潭、則ち龍宮淵とす。右岸の絶壁、水聲に拱ぐられ、草木剝落して、嶺に至つて、綠樹始めて伸びて、影を深淵に送る。左岸、溪路に接して、一塊の巨巖、水中に突出し、瀧壺を臨視す。恰も、大瀑布の上流の石陣の勇士、なほ奔流を追尾して此に來るが如きたり。試に礁上に立ち全景を見よ。天上の銀河、落ちて懸崖をなし、群峯、重疊して、雲霧を揭ぐること、天造の紺青の大地を瀑布上に置くが如し。溪、忽ち開き、河幅、擴がり、洋々たる水、滿谿の喜を湛へ、紺碧に輝やいて流る。行くこと百間ならずして、野口呂川の小溪、右岸の喬木林を穿ちて來り朝し、歡迎の溪譜を奏す。溪口の小橋を雪舟橋といふ。

其 八

紅葉橋より雪舟橋に至る絶景の大舞臺を概括する佳名、未だ無し、宜しく、これに則して雪舟峽といふべし。此間の山水、

仙境。もつとも雪舟に由緒あり。初めて此峡を発見し。[illegible]せ。身を。この中に置いて。この勝景に耽りしものは雪舟なればなり。

雪舟橋に立ちて。野戸呂川を望めば。高松。古松。[illegible]ところに懸泉あり。幽致。遂に掬すべし。雪舟淵といふ。淵上の路を辿つて。深く山中に入れば。野戸呂村あり。雪舟寺の遺址ありといふ。山民。これを寺屋敷といふ。今。炭竈あり。昔々。吹針山人。山水癖あり。此の山中に[illegible]たりしとき。[illegible]く此峡の奇勝を探り。併せて雪舟遺愛の木佛を。その遺址に発掘し。これを樵夫の家に托して祀らしむ。その後。近迩の参詣者。絶えずして。此の木佛。眼病に霊現ありと称す。山民の伝説にいはく。雪舟。支那より帰り。天台山の風景を巡回して措く能はず。山口に在りしとき。宮野村の長谷渓谷に祈る。観音の霊夢を得て。東北に向つて。深山幽谷を探り。遂に。白猿に導かれて此の山中に来るや。[illegible]として天台山かと疑ふ。[illegible]を結びて茲に留まること一年なりと。此の事。文献の徴すべきなく。雪舟の詩。此の峡中の地名を題するものを留めず。雪舟の逸事。未だ世上に精究されたるものを見ずといへども。雪舟。山水を溺愛して。深く僻境を探り。幽奥に閑居することは。此峡に[illegible]からず。此峡の如き。彼が山口の[illegible]に[illegible]逍遥[illegible]し、

[illegible]こ。山口より[illegible]しこの[illegible]り此に来[illegible]しか[illegible]は。[illegible]見れば。近代[illegible]し。文献なしといふとも。口碑。[illegible]彼。果して此峡に[illegible]したりしとせば。彼や。此門峡の開山たらずんばあらず。須らく碑を下して雪舟を再興し。以て。此峡の探賞者をして。千古の[illegible]しめよ。

雪舟橋に立ち、深山を眺望しつつあれば。この[illegible]に[illegible]す。雪舟は、実に[illegible]中の[illegible]たるべし。[illegible]に映ずるもの長門峡は果して何物、[illegible]あり。[illegible]の中、[illegible]。悉く[illegible]く。俊人。[illegible]の遺像を、この山央に[illegible]に雪舟寺の門[illegible]、また悉く[illegible]を出さ。以て。雪舟の像を[illegible]らず。吹針山人、また昔一[illegible]に、此峡の[illegible]を[illegible]。[illegible]々、峠。[illegible]。樹々。峠。[illegible]にして。[illegible]。[illegible]に[illegible]し、[illegible]世界のうちに、[illegible]の[illegible]を以て、[illegible]の[illegible]を[illegible]く。一[illegible]、[illegible]の水、この間に[illegible]して。[illegible]に、[illegible]し。[illegible]く[illegible]水中に[illegible]。[illegible]し、[illegible]

ものあり。四里の長峡、千萬の樹幹、悉く氷柱を垂れ、銀世界、銀の瓔珞、その幾億なるを知る可らず。雪の大觀、また雪舟橋に至つて極致を呈す。大瀑の飛沫、悉く氷結し、飛んで巖樹に當つて碎く。群峰、喬木の雪崩れて溪中に瀉ぐ。無限の珠玉を碧潭に投ずるが如く、響、淙々として銀世界に鳴る。珠玉の雨かな。龍宮淵は、水蒼く、螢光、湛然たり。四方、銀世界の光景、措つて此に照映し、一波、一波、雪に泣して、碧、皆瑩くが如し。鶺鴒の群、その中に浮游し、色彩の研麗なる、江山に煥發す。雪の峡、聞いて、その神を傳ふるを得るや。語つて、その精を極むるを得ずと。

吾儕また一たび大雪に、此の峡谷の奇を探らんことを思ふ。蓋し此の峡中に住する四五年なること、坎蛙山人の如くなるに非れば、恐らくは、かくの如き絶景を目撃するの好機會を得易からざるべし。

其九

龍宮淵は峡中絶勝の一、龍宮傳説は、風景愈に神秘的の印象を與ふ。此峡、前後、通じて、龍宮淵と稱するもの三あり。御堂原の雄淵、飛鬼瀑の兒淵、而して此の龍宮淵は則ち雌淵なり。今や此の雌淵もつとも著はる。およそ龍宮淵といへば、則ち此を指していふ。

御堂原の雄淵は、陰徳太平記に、傳説を載するを以て見れば、此峡の一部、早く世間に知られしは、御堂原にして、大内氏の首都たる山口に近きが爲なりしなるべし。雄淵の龍宮傳説は、宛然、ダンテの神曲、地獄篇を讀むに似たるものなくんばあらず。御堂原の水畔、時に、龍宮の太鼓を得たりといふ。兒淵には多く記すべきなし。雌淵、則ち雪舟峡の龍宮淵は、浦島と俵藤太とを相合はせたらんが如きものあり。雄淵には龍王あり、閻魔王あり、登場する人物、概ね古英雄にして、男性的の場面なり。雌淵は專ら乙姫を脚色して、女性的の優美なる舞臺とす。

およそ三の龍宮淵、ともに鶺鴒の群棲するところ、龍宮淵は則ち鶺鴒溪たらざるはなく、特に、山水の尤も明媚にして、鶺鴒群の尤も盛んなるを雌淵とす。峡中の戀愛塔は則ち此の龍宮淵の溪畔に立てらるべし。峡中、第一の雄壯、莊嚴なる斷魚瀑を下れば、直ちに此の乙姫傳説の艶彩ある舞臺に續く。山水の雰圍氣の變化、配合の妙を極むるものにあらずや。蓋し峡中の勝景、戀愛と女性とに關するもの少からざるを以て見れば、古來、山民、此の峡谷を以て、理想的の戀愛郷とするなるか。鶺鴒淵、戀の瀬、雛床、大鍋、小鍋、釜ケ淵、床淵、夫婦岩等あり。輿夫いふ、今の夫婦岩は、昔、戀岩なりと。蓋し深居、

[illegible]

して此の氣分を[illegible]するものは[illegible]。

龍宮淵の右岸、吊橋の下、巖頭に掛茶屋を設く。以て、龍宮淵を大觀すべし。則ち龍宮亭なり。遥に、一段の斷魚淵、段々として、潺湲を重ねて、遂に悠然として碧淵に注ぐを望む。左右、數十丈の斷崖、壁立して、碧潭を擁し、水深く、水、盤り上がつて、中流は岸下よりも高し。峽に入つて、始めて、水の汪洋たることと此の如きを見る。此の光景、四五丁に亘る。上に斷魚瀑あり、下には逆噴の重疊するあり。四面、皆、青山。水中の影、描くが如し。楓樹、殊に多し。秋晚、四山の紅葉、碧潭を環ぐつて、影、水を染め、全淵の水、爲に燃ゆるが如しといふ。今、吾儕の來る、既に霜雪を經て、紅葉、悉く凋し、淡山、一の紅粉を施すなし。譬へば麗人の、新に沐浴して素肌を見するが如く、却つて眞氣の、人を動かすものあるを見る。山水を網版にするは、三色版の色彩を加ふるよりも、着色せざる寫眞版の淡々たるの、氣韻あるを覺ゆるが如し。峽中の水面、石を以て見れば、四里の長峽、石の隱現の畫卷をなす。石の出沒、則ち水面、波瀾の變化を生ず。斷魚瀑より龍宮淵に入つて、巨岩、皆、水面下に隱れ、水は無數の暗礁を含み、大なる渦紋を描き、渦巻と渦巻と、相鬪れて、水面を旋回せしめつ

[illegible]

を控へて、[illegible]

四壁の翠微を以て[illegible]、峽中の[illegible]し、殊に、山水の美なるのみにあらず、四時の[illegible]はる縁起を見ること、[illegible]さに龍宮傳說の舞臺に適當なるべし。一瀑へ、水上に[illegible]らいふ。上古、江府の漁夫、[illegible]を携へて此に來りしとき、[illegible]龜、水を出でて、岩上に來たり、忽ち化して一少女となる。漁夫を招く。老猫、嶋をなすこと久し。乙女、命から、[illegible]を救はんが爲に、誅伐の大任を汝に托せんとすといふ。漁夫、托を受けて、老猫を誅す。乙女、乃ち導いて龍宮に到る。門、殿、瓦礫、珊瑚を草とし、珠を砂とす。滿眼の花、みな少女なり。漁夫、無上の歡喜に浴し、滿身の寶玉を託せ、送られて[illegible]に還り來る。水、自から湧き上がつて、山谷を埋め、[illegible]、門上の家に着く。村の人、すでに[illegible]を隔つ。漁夫、[illegible]を保ちて逝く。爾來、その里を江府と呼ぶ。江府谷は、これより一里の下流にあり、形勢、自ら別乾坤をなす。峽中の[illegible]の、なり

龍宮傳說は、一々、勃發あり。[illegible]、既に死するの後、[illegible]宮淵は無限の淵叢たり。鯉、鰌を、[illegible]、[illegible]も上つて[illegible]に集まり、[illegible]、もつとも多く、[illegible]にして[illegible]

魚梯を登つて、斷魚瀑の上に到る。四時、鶯鳴、偕和して、龍宮の音樂を溪上に聞く。山鶯、啼いて櫻花より霜楓の初に及ぶ。山吹、川つつじ、躑躅を綴ひ、水に接して、遍ねく碧潭を綠どり、天に杜鵑あり、水に河鹿鳴く。河鹿に更け行く夏の夜、誰か、龍宮亭に坐して三昧に入るものぞ。殘月、微茫として、溪山、靜寂を極むるとき、青舟瀑のほとり、佛法僧を聽くといふ。龍宮、神女の化粧、水面に浮び、川つつじとなると傳ふる者あり。然れども龍宮の遺珠、此に止まらず。溪上、多くの南天あり、梅もどきあり。霜葉、落ち盡くして、綠陰に、南天の紅實、閃めき、梅もどきは高く山腹に鮮やく。ともに紅玉を以て溪山に綴くが如く、燦として深山に映す。草間の寒いちごは、宛然として溪上の珊瑚珠ならずんばあらず。ひとり神秘巖のみ、龍宮に近くして、默して語らず、水三昧に入るものの如し。是れ昔、諸佛悉く辭し去り、唯だ一女人、世尊の坐に近く殘つて、定に入れるものと同じく、龍女、千年、獨り定に入つて覺めざるものにあらずや。たとへ百千の文殊菩薩、その神力を盡くすとも、龍女をして出定せしむるを得じ。これより下方、十二億河沙國土を經て、罔明菩薩、遠く、此の世に出現し來て、神秘巖の前に至り、鳴指一下せば、乃ち神秘、始めて能く、定より出て、神女、太古の眠に、嫣然、一笑して、溪上に立たん。

龍宮淵の水、洋々として渦卷き下ること十町にして、溪勢大に開き、水落ち石出で、水、潺湲として鳴つて流る。これを繼瀨といふ。暮色、蒼然として到り、肩輿、灯を點じ、岸上の林間を穿つて行く。林缺くるところ、時々、水光を照らし見る。谿、濶く、山、遠く、水、大に開け、左岸、燈光數點、天上の星、落ちて川中に閃めくを望む。湯瀨の溫泉なり。

其十

龍宮淵より湯瀨に至る約廿町、一の瀑布なし。瀨の岩を開き、航路を作りて小舟を通じ、川下りを試むるを得ば、神秘を一轉せしめ、峽中の一勝たらずんばあらざるべし。

此の奇勝の峽谷に、溫泉を有するは、天惠淺からず。湯瀨の一話、その趣味を語るに餘あり。草創の時、此の溫泉、未だ發見されず。百五十年前、山民、偶、猪鹿の、此の泉に浸して痼瘵を治するを見て、靈泉なることを知るといふ。時、海潮寺和尙、乃ち此に山房を築く、これを湯瀨の開基とす。

此夜、陰曆十七夜に當り、月色、皎然、瀨は皆光かる。溫泉に浴し、悠然として溪聲を聽く。若し夫れ峽に入つて風雨に逢はば、此に淹留して、峽中の朝暮、氣象萬千、無限の變化を樂

[illegible]
流水の如しと。行雲流水の文に、行雲流水の生涯に存たに[illegible]は
ず。行くべきに行き、住まるべきに住まり、以て、青山流水の間に行樂せんのみ。此夜、萬翠樓に宿す。樓、溪流に架す。窓を開けば、皆、水。溪聲、階に滿つ。

燈を挑して、峽中の趣味を語り、更の移るを忘る。夏は蚊なく、河鹿多し。萬點の螢火、溪を埋むるといふ。然れども世人、未だ寒月の清趣を知らず。螢火、以て、寒を慰するに足る。溪聲、月を撲げ、月冴ゆること刃の如し。峽中、竹、稀なり。唯だ此地、溫泉、氣暖かにして、孟宗竹を生じ、早く筍を得る。山うど、柚、蕨、わさび、山芋は、溪味の醇なるもの。山には山鳥あり、水には鮎あり、瀑布の下、到るところに、鰻兒、群集し、巖に攀づること蟻の如し。山果には椎と栗と、もつとも多し。溪上に、いちご多し。およそ此の仙地に來る、誰か、佳肴を期せん。心、閑にして淸淨たり、須らく溪味を味はひ、併せて俗腸を一掃するを要す。仙人、松子を摘み、霞を飧ふの偶然ならざるを知るなり。世間、柚味噌と稱するもの、柚の中に味噌を詰む。溪中の柚味噌は、則ち味噌の中に柚を漬け、併せて山うどを漬け、數年を經るに隨ひ、仙味あり、近來、溪中の旅館、則ち遠く海味を獵らし、客に饗す。珍肴、

[illegible]
峽中の[illegible]、[illegible]
本の[illegible]す。暖、夢、醒めて、溪聲、[illegible]も
つて、戸を推せば、月、天に在り。[illegible]
に臨り、溪聲に迎ふ。[illegible]とし、月を[illegible]とし、[illegible]にして
覺えず自から微吟す。朝、溪聲に洗ひ、溪聲に浴し、淸流に臨んで、昨來、經過したる山水の追想に耽ける。また[illegible]の奇景を想像す。樂、陶然として盡きず。酒仙、まさに用ゐて、昨夜の美醉を回想し、また前後の酒を思ふて、、獨坐、悠然として微笑するが如くなり。

其十一

峽中の探勝、溪路、概ね右岸にあり。その右岸にあるは、唯だ近崎より金剛溪に至るまでなり。古名、金郷谷(かなごう)、一轉して金郷溪となり、再轉して金剛溪となる。湯ノ瀬より金剛溪口にいたる半里、溪口より猿溪の大瀑布を窮むる所に十町許。右岸の行程、短かしといへども、その奇勝、恐らくは右岸の大きに匹敵するに足るものあり。

湯の瀬より橋を渡り、四五丁にして近崎に至る　[illegible]流　右岸
し　左岸・[illegible]　[illegible]用して　これに沿て道あり　[illegible]　[illegible]

く、碧淡に映じて、杜甫の詩、渚清砂白鳥飛廻の情致あり、峡中、唯一の境なるべし、これに面し栃崎谷あり、谷に臨み、長峡館あり、雅潔なる旅館なり、その傍に、萩焼の陶窯あり、長門峡焼と称す、栃崎谷は小流のみ。然れども維新時、此より船を繋して、山中の租米を萩城下に運送す。舟路危険にして覆溺少からざるを以て舟運廃して既に百年。然れどもこれを以て、萩の人、峡を溯つて、湯渕までを知りし者、往々あり。湯渕以南に溯ぼる者なかりし。栃崎を下つて、右に、大天狗、小天狗、の双峰、列峙するを仰ぐ。栃崎は、霧殊に深し。大天狗。小天狗ともに相呼んで、霧海に浮ぶ、頗る奇景ありといふ。また下ること数丁にして、左岸に江廾谷の渓口を望む。栃崎より舟を逆つて谷を溯ぼる。淡、深からずといへども、左に、二つの瀑布を見て、竜渦瀑に至る。峡中、第一の大瀑布なり。高さ卄間、巨石、累積して、段落をなし、水、左右に分れ飛ぶ。大驟雨、健馬の蹴に灑ぐが如きものあり。淡路は瀑布の左に沿ひ、螺旋して、淡上に到る。途、瀑面の前より離れつつ、その上流に及ぶを得べし。瀑布に対面して大柱石あり。石柱、突立して天半に在る。これに並んで、一平面の石、帯の如く聳ゆ。山塊、単に、これを帆石といふ。既に大柱あり、天帆、共とするに足らず。宜しく題するに、天帆岩を以てすべし。

江廾より歸り、前路を続く。対岸の烏帽子岩、獅子岩、ともに峡中の奇岩たるを失はず。淡中、隣岸、急流、昨日、経過するところの如し。但だ、未だ、暫らく、その傑特なるものに逢はざるのみ。犬戻は、絶壁の上、僅に路を通ず。犬といへども躊躇するの意。犬戻に対して、恰も、左岸に親不知あり、断岸、扶ぐるが如く、奔波、巌脚を洗ふ。また行くこと四五町左岸に、帝釈岩を望む。金剛淡、右より来り注ぐ。金剛川、水量、生雲川に倍す。此に於て、河幅、大に開き、水、汪々として流る。前面に、切窓、切窓の峻峰、列峙するあり、右に白瀑山あり、三面、皆、奇峯、而して水潤く、山遠く、風景壮活、奇峻、併せ得る。峡に入つて以来、未だ見ざるところなり

其十二

耶馬渓は、本渓と、支渓と風景の規模を異にするのみにして、特質の顕著なるものあるに非ず。故に、山陽は、唯だ、その本渓を見たるのみなりといへども、耶馬渓の大観を得たるなり。長門峡は則ち然らず。二の支渓、各、特質を発揮し、本渓に対して、相譲らざるものあり。生雲渓、暗淵の幽趣なる、金剛渓、猿渓瀑の捷奇なる、神渓、魚固瀑の明爽なる、皆、本渓の有せざるところにして水量に及ばずといへども、趣味に於て、本渓に劣

[illegible]林なたに、水清んに、明かに、渓谷の[illegible]としても、頗る趣にに[illegible]渓谷美は[illegible]、殆んど隠なり、石流を以て見れば、耶馬渓には支渓多し。長門峡には支渓なし、生雲渓、金剛渓、[illegible]渓 ともに水流に於ては支渓といふを得べし 趣味に於ては、長門峡の別渓たらずんばあらず。

長門峡の山水美の要諦を識らんとするものは、本渓と、ともに必らず別渓を渉らざる可らず。耶馬渓は、本渓より新耶馬に入つて、更に巌石の奇険を増す。淡窓の詩に、危峰抜地光於箭、旋樹攀巖勿似若といへるもの、新耶馬に入つて、益、鋭を加ふ。或は本渓の企及す可らざるほどのものもあり。渓潤、稍、小なるのみ。巨巌、側立し、砥の如く、柱の如く、流水を擁塞す。水、これを揮つて游ぐこと能はず。質るが如く、迸るが如くにして、石罅よりして進出す。則ち耶馬渓に在つては、支渓に入つて、ますます本渓の山水美の精髄を窮はすものなり、長門峡は則ち、これに反す。支渓は、皆、樹木蔚蒼として、密林、ますます密を加へ、巌壁、悉く密林の陰に隠る。樹色を見て、巌壁を見ず。金剛渓は、その尤も雄なるものなり。雨木の密林は、此峡の特色の一、而して本渓に於ては、水石の世界に密林あり、支渓に於ては、水木の世界に奇岩、時つて 金剛渓は、則[illegible]

[illegible]心[illegible]八个、[illegible]すべし。新耶馬は、渓、狭くして[illegible]に、散見し、金剛渓に、[illegible]闊く、[illegible]の巨岩、特地に、二つの光彩を映発するが如き[illegible]

[illegible]、[illegible]の[illegible]左に見て、金剛渓に入る。大[illegible]の[illegible]木、水中に立ちたるが、依々として情を含み、幽[illegible]に拱へて、阿武川、本渓の水、吾が金剛行を祝するが如し。大[illegible]に[illegible]り。人無し、関して山水亭といふ。北に山を負ひ、前に渓を[illegible]け、渓に臨む、隠君子の枕老すべきところなり。渓に沿ひ、[illegible]道に由つて進む。渓[illegible]、生雲渓に似し、進むに随ひ、[illegible]いよいよ[illegible]かに、渓谷、大に迫る。二つの[illegible]門を過ぎて石門に到る。石門は渓[illegible]にして、絶壁、裂けて、自然の石門をなす。門の中央、高きを以て、前後に段階を刻す。蓋し千仭の懸崖、[illegible]道の設くべきなし。天造、[illegible]を断崖に示さんが為に、奇[illegible]を施し、仙境の門を造つて、人を導くものにあらずや。峡中、猿もつとも多きは金剛渓なり。白猿山に群棲あり。[illegible]林、密[illegible]、風の暁、月の夕、嘯聚するとき、山水、またこれに[illegible]。[illegible]の落葉、雨々として下るなり。石門は仙洞なり。[illegible]、[illegible]する所以のものか、[illegible]ろなし。[illegible]人、[illegible]

護る。鮮苔、厚く封じて、古氣、人を逼ふ。門に當るの斧車は則ち巴柯なり。森然として、矛戟を、その間に交うるが如く、雜木は衆卒なり。旗幟つねに鮮明にして、白雲、新綠、紫藤、紅楓、四時の精彩、人目を奪ふものあり。新綠は水の如く石門に溉ぐ。紫藤花、頗る多し、巨瓣、各、長さ數尺、光彩、絢爛として綠樹に交はり、旆旌を烟霧の間に望むが如し。霜楓、火炎よりも紅に、焔、深潭を焦す。石門は、宛として石不動なり。紅楓の衛生を以てすれば、峽中第一にして、而して水石、相得るの奇觀、また固より天下に稀なるべし。楓樹の紅袍、脫すれば、霜雪の白衣來る。嚴冬の節、石門のうち、日氣、稀なり。氷柱、列垂し、白刃を陣ぬるが如く、これを擊てば鏘然として鳴る。石門の離何、嚴にして、此の前後、道、特に狹くして糸の如し、老藤の巨莖、力士の腕よりも肥えたるが、石邊を繞ぐり、天造の欄干をなす、これに傳ひて、石門を經過することを得る。仙境の秘景、眼前に展開し、溪聲、自から仙樂を奏するが如くなり。

群峰、また屛障を見せず。岩は、水中に點在するのみ。群峰は皆、綠樹の塊、その堆積たるは、きやべつの華菜の如く、或は、紺青の塊の如く、碧流は、綠青を以て畫けるが如く、紺、碧、天を染めて、天、爲に青し、前面に、巨大岩壁、削立、數百尺、併べて是れ岩石の一大塊、續いて、更に、また一大塊、ともに峭偉なる山中の英雄なり。綠樹の列峰を排し、青綠の幕を開いて、屹然として出現し來る。儀容、堂々として四隣を壓す。前者を大金塊といひ、後者を金松巖といふ。峽中一塊の大石として、かくの如く崇嚴なるものなし。巖下、碧水、群巖の間、殊に魚多し。山民、松火を照らして夜漁するに、火光、巨岩に返照して、巨岩、ともに金色に輝く。巨岩、靈あり、黄金を藏するかと疑ふ。依つて名づくといふ。此の靈水、則ち此の金塊を生ずるか。金松巖、殊に、その面、磨滑にして、直立す。もつとも威風あり。朝陽に映ずれば、燦として輝やく。まさに是れ山中の二大仙、此に來り下つて、化して此の巨大岩となるものにあらずや。金松巖は則ち金仙巖なり。碧流より拔け出でて、水に浮べるが如く、また老仙、その纖脚を、急流に洗ひつつあるが如し。脚下に散在する群礁は、皆、仙童の、水中に嬉戲するなり。白雲、片、下つて岩頭に搖曳するは、仙伽の來り待つなり。行客、若し、此の仙境の秘鑰を探らんとせば、請ふ、これを、此の二大仙人に問へ。盡日、相對して、興厭、飽くることなかるべし。

水を隔て丶、遙に、二大仙人の默許を得、此身、飄々として羽化するものの如し。行くこと三四丁、眞に一步の間なり。心、躍つて猿溪瀑の碧玉殿に入る。金剛溪の大舞台。群巒、開いて、

[illegible]たり。[illegible]

相迫し、両岸、巖石の、紺青の大壁、屹立して、翡翠瑠璃の玉簾を結ぐるに似たり。空山、清水、寂寥たる乾坤。緑玉の壁、碧玉の水盤。日、輝いて、玉、みな彩霞を生し、瀬き透明のヴエールを掛ふ。玉、玉と映れて、滴々、瑩々、玉盤、皆、響あり。唯だ、かくの如きのみならしむるも、亦た、仙界の大舞台たるを失はず。

此の碧玉殿の中央、三層の岩盤を以て、[illegible]大設備の為に、豫め仙壇を築く。緑玉の群岫、最深きところ、仙宮の扉、開らけ、一道、碧玉の水、滔々、流れ来つて、壇に登り、忽ち三方に濺ぐ。神仙、碧玉殿に現はれ、千萬斛の珠玉を以て、崎壁より四方に向つて散亂せしむるが如きあり。層々、仙壇に飛び散つて、岩盤の技法の深淺に隨ひ、水流、千態萬狀を描き、自在に奔飛す。此の仙壇の岩盤、その石脈、節理の妙趣、人間の想到するを得るところにあらず。蓋し、特地造醸、その神力を傾けて、此の超絶せる意匠を逞しくし、以て、此の碧玉殿の中心を造り出せる、一大傑作にあらずや。若し、猶、仰いで、これを望めば、玉泉、直ちに仙壇の頂より噴出し、四方に向つて迸ばしる。仙壇の第一段は、高一二間、峭立す。第二段は、[illegible]らずして、[illegible]の絶頂より出造して、[illegible]第三段に至つて、[illegible]白珠、碧玉の大駿、[illegible]如何なる高僧を以ても、人間、左に、[illegible]地、唯だ水聲の中にあり。[illegible]、水、[illegible]に、珠玉の瀧を傾けて、[illegible]、仙壇を[illegible]するなり。此の時、仙壇、忽ち一條の石瀧、一部の石[illegible]、[illegible]にあらず。但だ降り上がつて横溢しつゝある水[illegible]を見るのみ。[illegible]仙壇の上を、水が迸ばしるとは見[illegible]、[illegible]、自から湧き立つて、以て、碧玉殿の中央に、[illegible]、「水の白玉塔」を築きたるならずんばあらず。[illegible]、既に、遍ねく天下を行く、山中の瀑布を見ること、また多し。然れども、また、かくの如き仙瀑を發見したることあらず。これ實、海内稀有の一大仙瀑にあらずして何ぞや。

瀑布は、水の彫刻たるものなり。然れども、[illegible]の瀑布、僅かに懸り、或は[illegible]をたすといへども、[illegible]、[illegible]に[illegible]するを、つねとす。かくの如きに、[illegible]の[illegible]として、[illegible]

す。世尊、獅子吼せしとき、壇は、三方に向つて悲衆を引く。此の猿渓瀑布は、必ずしも懸泉にあらず。その岩盤の仙壇は三方に向つて、水を逆らす。まさに是れ、水の大雄辯を揮ふべき、理想的の演壇たらずんばあらざるべし。

此の大瀑布に面して、緑陰に、淡如たる一草亭を設く。山果あり、草餅あり、情酌、粗肴、以て客を慰む。亭、未だ名なし、吾輩、試みに命題して、李白亭といふ。欄に踞して瀑布を觀る。飛沫、霧をなして、濛々として鬢髪に付くこと、雪片の如し。悉く珠玉たり。冷々として、これを久しくすれば、冷、骨に透る。何人か、一杯の酒、熱腸に澆いで、以て、彼の白玉塔に對することを欲せざらん。日々、幾多の佳客、此に來て悉く、觀瀑の李白となるならん。抑、李白が觀たる廬山の瀑布は飛流直下三千丈、疑是銀河落九天なるものなり。一道の懸泉、天より下る。その痛快、想ふべしといへども、また此の三層の白玉塔、直ちに地底より噴き出づるの雄奇なると、果して如何ぞや。李白は生前、銀河泉を見て、白玉塔を想像するに及ばざりしなり。彼、若し、此に來らば、また酒一斗、詩百篇、飽くまで白玉塔に耽溺して、天子呼び來るとも、歸去せざりしや必せり。

白玉塔は、碧玉渓の須彌壇たり。慈悲心鳥の啼く夕、殘月、夢の如き曉、群仙、須彌壇を繞つて、自在に浮游するを見るならん。碧玉殿は、元來、須彌壇の爲に造るなり。水の須彌壇、かくの如く莊重、美麗なるは、江湖、極めて得難し。山水行者、須らく此に來つて、讃嘆、禮拜せずんばある可らず。

金剛渓の樹舞台は、これを以て終はる。然れども碧玉殿の背後に、また一の奥の院あり、背景の雄嶽を穿ちて、碧流を洄れば、別世界あり。奇景の、人を驚かすものなしといへども、川つつじ極めて多し、杜鵑多し。兩岸の水際、すべて川つつじの叢を以て彩どる。則ち是れ仙渓の花壇なり。無數の青邸花、に浮ぶ。花開いて、雲、低迷する頃、嬋妍たる仙女、籃を携ふて、降り來つて、花を摘むならん。世人、碧玉殿に詣る者、概ね白玉塔に面して、心醉ひ、目、眩して歸る。仙渓の花壇あるを知る者といへども、極めて稀なり。坎蛙山人、吾輩に語る。碧玉殿に、山鶯と、杜鵑と、もつとも多し。群鶯の囀と、杜鵑と、渓を隔てて、ともに亂れ啼いて、終日、息まず。白玉塔に向つて、駱賓の讃辭を歌ひつつあるが如きなりと。

金剛渓の歸途、再び金仙殿を望んで、相[illegible]せば、殿下の木中に一岩、崢嶸として、大隈侯の再生を見るが如きものあらん。大隈岩、則ち是なり。蓋し大隈侯の才、春雨の如くなるも、碧玉殿の須彌壇下に參して、猿渓瀑の大雄辯を聽き來らば、歸途

[illegible]り。

其十三

取入口は長門峡の風景の大舞台なり。およそ探勝の興、一つあり。柳宗元の所謂、曠如たるものと、奥如たるものとの二なり。曠如は、展望の快濶なるもの。奥如は、山水の幽深なるものをいふ。長門峡は、幽邃にして瑰奇なるものなり。奥邃の亡も深きものなり。断魚渓、暗淵、猿渓渓、みな、これを代表す。群巒、断岸、碧潭、密林、これを綜粹して、更に、幽邃を加へて、飽くことを知らざるものなり。これ此峡、山水の大観なり。ひとり取入口に到れば、幽邃の中、稍、快濶あり、瑰奇にして、稍、曠逸あり。峡中、雰囲氣の一變化を見る。これより下流、渓幅すべて膨らみ、両岸、相對峙する列峰の間隔、次第に加はり、吾が神氣も亦た暢び、約一里許にして高瀬に至る。高瀬は峡口なり。これより川下り舟、五里にして萩に至り、此水、日本海に朝す。

取入口の大舞台の大立物は切岸、切嶽なり。金間渓、合流するところ、本渓の水量、倍加し、水、三叉淵をなすところ、水勢、汎濫し、數十百の群峯、悉く影を蘸す。三叉淵より三方の

[illegible]

[illegible]

さ、岸人に向って[illegible]

は、ともに峯といふよりも、寧ろ峰といふべし。両岸、[illegible]

る双峯、正面に奔流を迎へて[illegible]す。その[illegible]の

巨巌、磊塊として、水中に兀然、[illegible]し、[illegible]

與へざらんとするもの、ゝ如くなり。巨岩の双峙するものを夫婦

岩といふ。その一個の巣、大蛇峨の大手の巨柱に擬すべし。然

れども、これ特に、巨大なるものを指していふのみ。その他、

岬を前ぐ、手を携へて双峙するもの何ぞ限らん。[illegible]より仰

げば切岸、切嶽の双峯、峻岸、[illegible]、[illegible]可ならず、林木、[illegible]

し、その絶頂、直ちに天を摩す。[illegible]の面に

石佛を安置す。先年、野田内の[illegible]人[illegible]、[illegible]

造り、千[illegible]口より高瀬に至るまでの間、[illegible]の地を

探れて、これを安置し、以て、行旅の[illegible]

石佛は其の一なり。かくの如き[illegible]の絶頂、定めて[illegible]後より迂

回して、辛うじて、これを安置するを得たるべし。その[illegible]

その勇敢、また以て峡中の探勝に特書すべし。[illegible]に

も、前に近きところに、佛像を刻するらしきものあり。[illegible]

んで、[illegible]として[illegible]中の[illegible]の如し。その[illegible]の[illegible]、更に[illegible]く

べし。然れども吾儕を以て見れば、此の影像、人工に非ず。自然の渲染、恍として佛體を出現するものなるべく、行客の渴仰に値せずんばあらず。切窗の絶頂の石佛は、縹緲として、天上より此の大舞台の絶勝を俯瞰す。恰も山中の神仙、此に在て、溪上の行人を觀るが如く、生けるかと疑ふ。嘗て放翁の入蜀記を讀むに、「三山磯を過ぐ、磯上、新に龍祠を作る、道人、半醉して、巌岸嶄絶の處に立ち、行舟を下觀するあり、これを望んで人をして寒心せしむ、亦た奇士なり」といふ一節ありしを思ふ。彼、石佛をして道士ならしめば、亦た此感をなさしむべし。此の迎峯の下、百年前、行舟を逆す。舟路の安穩を祈るが爲に名劍を水底に植えて龍神を鎭めしことあり。その跡なほ存す。また入蜀記に、およそ山、江に臨む磯といふとあり。則ち三山磯は山の一部、江中に突出して斷崖をなせるものなるべし。

金剛溪を超えて、切窗、切窓の右方、時雨山あり。此の大舞台の最高峯なり。山民、此の山色を以て晴雨をトす。山頂に雲掛るとき、溪は時雨るるなり。時雨山に對し、金剛溪を挾んで白猿山あり、白猿山を望んで、本溪の右岸、帝釋岩あり。巨岩、帝釋天に髣髴たるを以て名づく。峽中奇岩、佛體の形をなすもの稀れとなし。唯た僅に此の一岩のみ。人、或、則ち切窗、切窓の雄觀に配するに帝釋天を以てし、此の大舞台を標榜せしむるものにあらずや。此大舞台の奇蹟、更に吾目を惹くものあり。これを取つて、この峽谷の創造を論ずるに足るもののなくんばあらず。蓋し數十萬年前の地變、此の峽谷美を創成するに當り、阿武川、合流して、新たに本流となり、水量、倍加したるを以て、此の峽谷を若返らしめ、以て、天下稀有の好山水を造り出せりとし、峽谷美の創成を、專ら水力に歸す。これに反し、或地質學者は、地變に由る地盤の龜裂に歸因するものとするあり。地變の動機なる三原山の噴出に際し、これに遠からざる此の峽谷、豈、多少の影響を受るなしとせんや。峽谷の若返りたるは、水力の倍加に由るを疑はずといへども、地變が影響したる岩盤の龜裂も亦た想見すべし。白猿山の中腹、一大巨岩、半空に聳ゆ。その右肩、恰も一大雷斧を以て、縦に切割り、直ちに地中まで切り下げたらんが如く、高廿間許の縦溝を剖して、切離されたる一岩、峨を立てたる如くに峙つ。此の奇岩、ただ名なし。これを雷斧岩といふは如何。此の種の雷斧石、此の大舞台の所々にあり。他は竹、切窓の對岸にあり。白猿山のを第一雷斧岩とし、他は山勢に隨ひ、漸次に番號を附すべし。また是れ峽谷無數の奇岩の中に特筆すべきものなり。

抑、長門峽のうち、水量の大なる、峰巒の無數なる、山水の

[illegible]なる、[illegible]の谷の山水と[illegible]思ふ[illegible]し山陽は山水に[illegible]ずるに、[illegible]れにその岩石、畫法を、作品に[illegible]す。彼に[illegible]ばなり。彼の詩、書畫及び[illegible]に關するもの頗る多し。或は、夜深く、春容しくして酒盡き、燈燭の下、[illegible]と共に書畫を[illegible]て、開披書軸古畫帖の間あり。彼が、いかに畫法に苦心せしかを見る。彼が耶馬溪に到るや、無數の奇觀、彼の眼前に展開す。黄大痴、倪雲林、王叔明の山水畫、活きて躍動するあり。此に於て、彼、驚喜して措く能はず、夢寐にも忘るることなし。[illegible]後、十有二年を經て、猶ほ能く[illegible]、默運して、耶馬溪圖卷を作れり。彼の斯遊は、耶馬溪を觀來つて、著るしき進境を示せるなり。然れども長門峡の岩石の怪剛なること耶馬溪の比にあらず、其染の變化自在なるは、彼にあらんも、畫法の俊逸なるは則ち此に存すべし。山陽、若し此峡を見たりしならば、その感興果して何如。畫法の研究に於ける、更に、成發するところありしを疑はず。彼、多く長州の人物と交はり、長州と關係少からず、長州古今の人物を論ずること殊に多し。ひとり此の奇山水を見るに及ばざりしを惜む。

峡の石勢、かくの如し。この水、また看過せざる可らず。蘇東坡は水に造詣し、水を記し、水を論ずるに於て古今に秀出す。

[illegible]り、[illegible]者といへども、[illegible]して、す、以て、これを[illegible]則ち[illegible]となる。然れども、その品格、[illegible]と、[illegible]の間に[illegible]ふに過ぎざるのみ。[illegible]り。始めて新意を用して、[illegible]、山とともに[illegible]し、物に隨ひ、形を賦し、水の[illegible]を[illegible]くす、[illegible]す。その後、蜀の人、黄筌、孫知微の二人、皆、その筆法を得たり。始め、知微、[illegible]湖灘水石四堵を大慈寺[illegible]院の壁に畫かんと欲するに、經營[illegible]、歳を經て筆を下さず、一日、[illegible]として寺に入り、筆墨を求むること甚だ急に、袂を[illegible]ふこと[illegible]し。須臾にして成る。輸瀉、跳蹙の勢をなし、洶々として屋を崩さんとするものあり。知微の死後、筆法、中絶すること五十餘年、近來、成都の人、蒲永昇、酒を嗜みて放浪し、性、畫に適し、始めて活水を作る。王公富人、或は、勢力を以て畫を求むれば、永昇、輒ち嬉笑して捨て去る。その自から畫かんと欲するときは、貴賤を擇ばずして、頃刻にして畫いて與ふ。[illegible]共に、壽寧院の水を臨寫す。[illegible]日、これを高堂[illegible]に掛くるに、陰風、人を襲ひ、毛髮、爲に立たしむといへり。東坡、[illegible]するところの水の畫家、多く蜀に出でし[illegible]に偏す。蜀中山水

溪谷の間、水石の變化を觀ること、もつとも熟せり、隨つて水情を得るにあらずや。長門峽は則ち活水の一大粉本として、天の與ふる所以のものならずんばあらず。水、石、相逢ふて變化至らざるなし。これ皆、水を畫くを教ふる天然の大畫伯にあらずや。直ちに此の活水に對して三昧に入るべし。水を畫くは師を擬すが如し。亦何にあらず。活水に面して、渾然として自覺するを要す。

今や此の三叉淵の大舞臺、取入口を以て水境を劃さる。金剛溪の合流點の下、堰を作つて取入口とす。水力電氣の原動力としての水流を攝取するなり。此の大舞臺に臨するは、水流の猛勢よりして、三叉淵といふを妥當とすべし。此の堰より少しく上流に、橋を架して金剛溪に渡る。路次橋といふ。溪流、巖、滑きり、飛、躍、落つ。渡所もまた趣味少からず。抑、阿武川は地上の銀河にして、路次橋は則ち水邊の鵲橋ならずんばあらず。天、澄み、星、円らかなる夕、路次橋に立たば、數十町の銀漢、累く水中に映じ、星宿爛々として、天、水に在り。水は星宿を湛へて、南より北に流れ、銀河、落ちて峽中に横たはる。橋上の人、宛として鵲の橋の上に立つなり。仰げば、空に銀河輝やき、俯して溪に銀河の流るるを見る。天、水か。水、天か。牽牛織女星、今、自から擬すべし。切窓峯下の大蛄皆、亦た直ちに、天に登つて天蛄星となる。宜しく溯すべて吾が身邊にあり。乾坤、始めて此の清溪の上流にあるなり。此の刹那、六に臨んで歌はざる者は人にあらず。

其十四

路、再び右岸に歸り、切瀧、切窓の懸崖を右岸に望んで溪を下る。二峯の下、巨巖、數十百、群峙し、恰も二峯の頂より手に任かせて投げ込みたらんが如し。蓋し下瀨洞口以來、三叉淵に至り、水量、尤も加はり、水石攻守の大勢、切迫し、譬へば水、石、兩陣入り亂れて、手彈、肉彈を以て格鬪するが如きもの、此の壯圖觀なり。取入口、未だ設けざりし以前、水、溪に滿ちて切瀧、切窓の峯脚を浸し、巖々たる双巖、水に浮ぶが如く、頗る壯觀を極め、峽中第一流の絶景たるを失はざりしが、取入口、設けられて溪殆んど枯れ、これより魚飛瀧に至るまでの、無數の急湍、激瀨を失ふに至る。ありし昔の奇景を想像するは難し。水減じて、石、また無聊に苦しむなるべし。然れども水落ち石出で、奇巖、殊に、その奇を逞しくするもの無きにあらず。

巨巖、虎の如し。切窓に對して、坐して蒼穹を嘯す。切瀧、切窓の間、峯腰、殊に石斛多し、白花咲いて雪の如きとき、天

[illegible]

[illegible]し。水は、深く[illegible]す。[illegible]然、[illegible]抱いて水面に[illegible]如し。其、樹光の[illegible]、化して[illegible]となると傳ふ。[illegible]岩に相に似たり。再び[illegible]殿は[illegible]の故事に由って名づく。峡中[illegible]の巨岩とす。ドろこと數十にして門の如きにあたる。或は小[illegible]床ともいふ。[illegible]の[illegible]床、兩岸より相迫つて、中に溪流を通ず。飛んで渡るべし。形勢、極めて木曾の[illegible]床と相似たるものあり。然れども、これを小[illegible]床と稱するは當らず。古來、峡の人、ここに來り、溪上の逍遙を試みしところといふ。入峡以來、ただ此の如き絶好の閑遊の好場を見ず。誰か、絶壁渓流の長門峡に、此の如き安息地あることを想像せんや。此の[illegible]床、左岸は白く、右岸は紅し。白きを丈夫席とし、紅きを婦人席とし、兩岸に幔幕を張り、急流を挾んで相對せしめば、華やかなる妹背山を現出せしむべし。此の溪、小[illegible]床といふよりも、寧ろ妹背山といふべし。峡中の風景、此に至つて、その八九分を經過す、山麗水佾、恐らくは此に場を設けて、花道の[illegible]するならずんばあらず。

[illegible]漸く鋭き、四圍の光景、稍、爽快にして徐ろに愛翫すべし。群峯、[illegible]林多く、紅楓の燃ゆるなしといへども、黄葉、[illegible]を交へ、淡彩を以て描ける畫[illegible]の山水の如く、却つて人を動[illegible]

[illegible]を[illegible]の如くに空中を[illegible]し。[illegible]として[illegible]を出で[illegible]ふ。[illegible]魚取の名、適さわしからず。宜しく改めて魚[illegible]とす[illegible]茶あり、逍遙茶屋といふ。探勝の[illegible]に、山中の[illegible]は一山[illegible]とを賣る。腰を卸して、酒、茶、以て、[illegible]空、何を以て逍遙といふ。顧みて[illegible]一水、一石、悉く眼中に在り。一山の水、石、[illegible]あり。何ぞ賢愚あらん。一切の人物、[illegible]何ぞ[illegible]て貴賤をあらん。逍遙の[illegible]お此の山水境にあり。逍遙茶屋の主人、恐らくは[illegible]以て自ら任ずるならん。[illegible]

對岸の[illegible]は、別に小[illegible]をなす。[illegible]を深め、ま[illegible]峡中の一天地なりといふ[illegible]岩、[illegible]として[illegible]し、鮎魚の、[illegible]倆、これに對して、[illegible]の[illegible]魚[illegible]しとき、鮎魚に[illegible]する[illegible]

すんば、則ち強弓毒矢を以て鰐魚を殺し盡さんといへり。鰐魚文は則ち最後通牒なり。韓退之をして、此の鰐石を見せしめば、果して何と言はん。古來、此の峽谷、吏人なしといへども、王化、自から蓄ふ。鰐魚、化して石となり、萬古、溪潭に安んじて、敢て人畜を侵さず。鰐魚、自から山水三昧に入るもの、則ち此の鰐石ならずや。發電所を過ぐ。取入口に收容したる水、此に至つて再び溪に還り、水漲つて高瀨に至る。高瀨は、長門峽、掉尾の勝境。奇岩怪石の舞臺にあらずといへども、人烟、山水の間に布置し、馬鈴、時に、溪聲に和し、家家、字んで仙家の如し。長門峽の趣味、窮まるが如くにして大高瀨に至つて、更に一新境を開く。

其十五

高瀨に至り、長門館に投ず。館と名づくといへども、[illegible]然たる一草亭のみ。部落、五十軒、旗亭四、多くは溪畔に沿ふ。これひとり高瀨の地に據るもの。時、已に斜陽。炊烟、處々、溪樹を漏る。

亭に上り、炬燵を擁し、脚を伸ばして、粗茶の數碗を喫す。體、穩やかにして、神暢ぶ。此日、吾輩、輿を捨て、徒步して風景を見る。此に至つて、狹中棧道の苦、甘きこと飴の如し。諸友と笑つて奇景を語る。庭上、風呂場の後の旃檀の大木、枝幹、嵯峨として半空にひろがり、葉、悉く脫し、黃實、豆のやうなるが枝に滿つ、砂金を空中に撒くが如し、旃檀を隔つて水聲を聞く、佩環を鳴らすが如し。急湍あらん、其所を見ず、心、唯だ、これを樂しむ。溪上の二仙士、來りて仙境の趣味を說く。膳に上ほるの白菜、白、水晶の如し。河魚、また皆、鹵に香ばし。昨日來、經過する狹中の風景、悉く話頭に題へり來る。山水の靈、奇、仙士に托して言はしむるものにあらずや。高瀨に鍾乳洞群あり、造物、山水の奇巧を地上に存する以所のもの、此の峽谷に於て未だ足れりとせずして、更に、地中に向つて絕奇の山水を描き出すもの、則ち此の鍾乳洞群ならずんばあらず。二仙士、一は琴原、一は紫鶴。ともに一夜、夢中に、長眉の老仙より綠玉杖を授けられ、以て、此の鍾乳洞群を發見せるものなり。乃ち明日の探勝を約し、五更にして別る。夜、靜にして水聲ますく大に、雨聲を交うるを知らず。戶を排すれば、山雨、澗に滿ち、四落の點滴、瀑布の如くに瀉ぐ。二仙士、水天冥濛の中に沒し去る。

翌十五日、夜來の雨已まず。午後、風、雨を吹いて、雨、寒山に映じ、斜に銀箭を射るが如し。終日、一草亭に坐し、窓を開いて、烟雨中の溪山を望む。若し雨中に人あり、雨を隔て

て、[illegible]

らん。[illegible]は高瀬に至つて、山、斜に、浜[illegible]し。[illegible]一二丈

山に対す。深峡より出して一山腹に登る。多少人家。[illegible]として

て。その間に點綴するあり。坂を渡る人、野良の人物の如し。

筏、棹いで波瀾をなす。村を清木といふ。経路、左して一茂樹の

邱を過る。前に巨岩見ゆ。大天狗と名づく。大天狗の石、楓

雨、明滅して一渓開く。山を負ひ谷あり、木津原なり。流水、隠

々として、その裾を介つて本渓に併す。水三叉をなすところ、一

巻、巍然として峡流を俯瞰す。瀬川の風雨、巻を打つて、水を俯

け海錨に注ぐが如く。山樹、皆鮑潤して毬の如し、巻下に激瀬

あるらし、今日、水聲、怒號す。昨夜の水聲、則ち此より來るなり。

一仙士來り ともに山水を論ず。柳宗元 永州八記。世人、

皆知らざるなし 然れども黄渓の如く、鈷鉧潭の如く、小石潭の

如きもの、此地 何ぞ限あらん。渓中、甚だ魚多し 香魚もつ

とも多し。陸放翁がいへる 南窓を開いて渓山に対すれば、游

魚、時に、水面を裂いて躍り出づ、秋日、これに映ずれば銀刀の

如きありの景趣 また此に見るべし。松陰先生の松下村塾記に

いへる 深川数十里、人能く窮むるなし 蓋し平氏の遺民、[illegible]

に潜匿するところといへるもの 即ち此の渓をいふ。[illegible]

子、清木あり。村に名づく。[illegible]の[illegible]。化して大天

[illegible]

[illegible]

すといへども 今[illegible]の山水[illegible]

出、彼等の後裔なるか

山口の林平右氏 峡口の茶屋[illegible] [illegible]し日[illegible]

の、長門[illegible]の尤も古きものなり 溪中 以下十数人 雨り

を作にまれし 手を[illegible]、而[illegible]して[illegible]るものあり [illegible]

謡の下 山中の隠坊湛の下方の[illegible]を渉る[illegible]もいたし

林氏の[illegible]、常に高瀬に住す [illegible] 恐らくは當時 其の[illegible]人

の手に成るものか 蓋し今に存て[illegible]べきものなり [illegible]

ふに 峡舟が峡中の[illegible]を[illegible]さる[illegible]べし 出[illegible]を

開するに、言へるあり。世に傳ふ[illegible]、[illegible]んと欲するとき

先づ、酒を汲み、茶を喫して[illegible]、これを[illegible] 或は[illegible]

を吟じ 悠然として無事を楽しむものに似たり。[illegible]にして[illegible]

坐 盤渉して[illegible]を流るに及んで、乃ち[illegible]として、[illegible]水

を得るが如しと 山水[illegible]の[illegible]。[illegible]、かくの如くなりし

を[illegible]ず、[illegible]、[illegible]の一[illegible]に坐し [illegible]べて[illegible] [illegible]に

人るなり 樹影、水[illegible]を[illegible]とし。[illegible]なり

風雨 [illegible]を[illegible]ふて[illegible]る。[illegible]、[illegible]の如し [illegible] 山[illegible]

花 満開して、終日、[illegible]、[illegible]の人、[illegible]にし

て　茶代、皆、清素。譬へば兩谷の草木の如し。これを久しくして、いよ〳〵樂しむべきを思ふ。溪山の奇趣、もつとも雨中に宜し。霧淋漓として、雨、自然の山水畫に注ぎて　帯を生ぜしめたるを思ふ。風、横さまに吹いて、雨中山色、更に生氣を帶び、時に、破墨山水の幀を示す。草亭　一日の臥游　南畫の清課に耽けるを得たるを喜ぶ。夜雨に、溪山を望む。およそ夜雨は情にして景にあらず。然れども今、溪の水光、草亭に明らかに、前村の燈火、參差として、微かに山容を浮べ、夜雨、畫くか如し。離筵、ます〳〵壯にして、畫景、悉く生動す。山水を、人生のうちに溶解せしむるとき、始めて此の如き趣致あり、人間なき峽谷には、かくの如き趣致なし。

瀧下、清話、泉の如く湧く。吾儕を以て見れば、長門峽の風景、必ずしも規模、雄大といふを得ず。峽中の溪幅をして、稍、廣からしめ、山をして更に高からしめば、理想的ならん。然れども水、壯にして、石、秀で、水石攻守の激烈なる、溪谷の構造、變化無數、いよ〳〵出でゝ愈、奇なる。石脈の節理及び皴法の俊英なる。雜木林の密列して、溪山の谷澗なる。瀑布の一大景にして、瀑布、皆、必ずしも高からざるも、多く傑特の姿態を具する、更に、花葉の妍麗なるありて、春秋の新粧を凝らし、鳴禽類の多様なる、これを要するに峽谷美の景情、悉く具備せざるはなく、況んや、石、硬く、水、豐かにして、風景甚だ皆く、精彩、變々たるものあり。地質學上、僅かに青年期に入るの峽谷美なるに於てをや。故に、長門峽は、壯大なる風景にあらざるも、典型的の峽谷美を以て、天下稀有の好山水たらずんばあらざるなり。

かくの如き好山水、何故に知られざりしや。固より地の險僻、幽邃なること第一理由なり。或は、萩城の要害とするが爲に、故さらに、その境を秘密にしたりといふの説は信ずるに足らず。大内氏の時、御堂原より下つて龍宮淵に至り、次に毛利氏の時、高瀬より溯ぼつて湯瀬に至る。その首尾、相通ぜざるもの、僅に一里の間なり。溪中に通運なかりしのみ。山上、自から部落あり、隨つて山道あり、溪谷に路の開かれざりしは、開くべきの富源なかりしなればなり。近來、始めて峽中の奇景を知るは、桂公、首相たりしとき、萩、山口間の鐵道を敷設すべき近徑を求めて、初めて此の峽中を測量せしめ、風景の美なるに驚く。然れども溪山、未だ俗樂に逢はず。山口高商の教師、英國人ガントレツト山水癖あり、御堂原に避暑し、流水に沿ふて溪中に入り、初めて激賞して、以て、天下の絶奇となし、これを内外に游說す。當時、或は、これをガントレツト峽と呼ぶ者あり。溪山、初めて知己を得たるなり。ガントレツ

ト。[illegible]中に於ては、[illegible]更、以[illegible]人で[illegible]たりといふ。[illegible]数[illegible]ンアリー[illegible]もあた[illegible]に、これを賞揚して、初めて耶馬渓以上と許すに至る。その後、数年を経て、山根武亮男、高島北海画伯を伴ひ、探勝を試みるあり。北海画伯、峡中の奇景を写し、得るところの[illegible]を、悉く寄捨して、初めて探勝の道路を作るを得しむ。長門峡が世に出るの縁由は、大略、此の如しといふ。

抑、発見には、[illegible]端のカルタを取るが如く、[illegible]将に、判下の端に驚くが如きものなくんばあらず。秋、山口の中間に横たはり、いづれよりするも、僅に四方里に過ぎざるの近区域に、かくの如き千古不発の奇勝あり。然れども発見の前、往々にして無名の発見あり。正史は黙して語らずといへども、コロンブスより数百年前に、既に、事實に於て、アメリカを発見し、これを占有して、その名を石に刻したる欧洲北方のノルマン民族あり。長門峡を激賞する者、必ずしもガントレットに始まらずして、その数百年前、早く既に発見者ありしこと、恰、コロンブス以前のアメリカの如くならざりしを知らんや。世人は流水の語を解せずといへども、恐らくは、峡中は、此の渓間の最初の俳聖たることを語りつつあるならん。但だ峡中はノルマン民族の如くに、彫刻したる石の記録を留めざりしのみ。[illegible]以前の[illegible]

[illegible]関して天下の奇勝となる[illegible]。彼れて、名山[illegible]世に流れて、学術の[illegible]、忽然として[illegible]なり。

柳宗元に、愚溪、八愚詩あり。愚の[illegible]字を以て[illegible]者、古今、唯だ柳宗元一人のみ。愚溪は冉溪たり。[illegible]愚邱、愚泉、愚溝、愚池、愚堂、愚亭、愚島、彼が[illegible]八愚山水なり。その説にいはく、水に冉谷の[illegible]するところにして、愚を以て名づくるは何ぞ。此の溪、流低くして溉灌に[illegible]可らず、これ其の一なり。[illegible]峻急にして、[illegible]大舟を入る可らず、これ其の二なり。幽邃、浅狭にして、[illegible]、これ其の三なりといへり。されば柳宗元をして見せしめば、長門峡は、[illegible]にあらずして、[illegible]あり、天下の大奇景なり。柳宗元、世に[illegible]て、愚の[illegible]を以て、[illegible]適に、大に[illegible]あるにあらず[illegible]

谷の最なるを賞ひ、自得せり。從つて見れば、此の同谷の如き所、泉、溝、島、堂、亭、皆つて得るべきもの、數へ盡くす可らざるならん。その最なるものは、利用にあらずして、純なる趣味をいふなり。

天下の奇山水のうちに居て、これを縱論するは、名士に直面して、これを論ずるとは異なり。譬へば、棧敷に坐して、名優の得意の場面を見るが如きものあり。感、極まつて、詩句を綴するあり。或は喝采、嘆息するあり。或は私語して批評するあり。舞臺の名優は、それ等に、一切、頓着することなくして、ます／＼入神の藝術を見すること、奇山水、人の批評に無關心にして、いよ／＼その奇を呈するが如きなり。此日、風雨。山水游に、計らず餘閒を與へ、目を舞臺より離して、縱ままにして、名優を月旦するを得たるは、意外の諧謔といふべし。奇山水の奇游、時に、風雨に逢ひ、淹留するは惡しからず。山水記の奇想、此の際に成ること多し。探勝の場面、隨つて變化を得るのみにあらず。餘閒に、名優と握手、談笑すると、同じき感興を、山水、風雨の淹留中に得る。況んや高瀬の佳境に悠游するを得たるをや。山陽の、耶馬溪に於ける、また雨に逢ひ、頗る奇景を得たり。然かも淹留すべき佳停なし。頗る日興を屈うて歸り去れり。柿坂の[illegible]亭は、高瀬の一草亭の清淺なるに比す可らざるなり。

抑、山水を見るは珠玉を見るが如し。徒に、これを愛するのみにあらずして、併せて、これを賞識するを要す。[illegible]、山水に於ける、これを愛して、これを賞識するを樂しむ者なり。夜深く、風雨ます／＼強し。談鋒、人の肝に迫る。天下の山水を論じて、天下の英雄に及ぶ。主客、ともに空腹を覺ゆ。主婦、來つて餅を焼き、且つ語る。溪中、頗る鯝鱧多し、村民、これを捕へるを不祥なりとして敢て漁せず、幽林には衣猴多し、群をなす。頗る老猴、榮々として孤居し、畑に出るものあるを聞くと。談、盡きず。網上の餅、危瑞の岩の如し、みな奇趣を生じて、烟霧を噴く。爐火、活々として、衝冠石の、崢嶸なるが如きなり。

其十六

趣味の高瀬、なほ語るべきもの少からず。名物は山鶺と杜鵑。幽窓に高臥して、自在に聽くべし。夏は螢、特に多し。赤溪と佐々連川の合流するところ、即ち高瀬川の鳴るところ、樹、壯にして石、奔せ、水、皆、鳴つて繁然たるところ、螢合戰を見る。山、水、草、木、みな螢ならざるはなく、天上の星斗、此に落ちて、碎けて散るかと疑ふ。下流、秋に近きところに螢火山あり。川下りの舟は、高瀬を發して、到るとこ

ろ、[illegible]
す。今此溪は、[illegible]
香魚は　此の[illegible]は峽中の主たるものにして、また江湖に、翻を作ふに足る。大にして大、その長、尺に除まり、香味、殊に芳醇を存る。此より下流は、魚小さく、香また若かず。此より上流、溪中みな鮎あり。龍魚湯、猿溪湯といへども魚梯あり。然れども上流は魚少なし。魚、多くして大なるは高瀬なり。螢火瀧は則ち鮎の名所なり。

蓋し魚梯は登龍門といふべし。龍門に至るもの、悉く登るを得るの理なし。而して鮎が魚梯を躋づるは、今の入學難の比にあらざるなり。極めて僅にして、稀有の幸運に會するもののみ、僅に魚梯に達するを得る。聞く、夏の候、龍魚淵下、龍宮淵、魚飛ぶこと尤も多し。流に向つて躋ぢんとして、流勢の激從ふものより、波を破つて空中に飛躍する無數の魚、幾百、幾萬の白銀を淵前に翻へして息まざるが如く、溪谷の壯觀とす。魚落ちて、また飛躍し、龍門に登らざればやまず。その中、幸にして、飛んで魚梯に達するを得るの魚、百に一もあることなし。飛ぶこと幾百千回、飛ぶもの幾十百萬、而して魚梯の幸運、かくの如く稀なり。瀑布の上流に、香魚の少き所以なり。抑、魚梯は魚世界の[illegible]ならずんばあらず。これに由つて此溪
[illegible]
[illegible]
るは　[illegible]に登るより[illegible]
ずき、既に魚梯を[illegible]
り。

うなぎは則ち[illegible]流の奥に見たり。魚梯を[illegible]して以下[illegible]瀑上に到る。試みに龍魚淵に見よ。側[illegible]、大淵[illegible]攀ぢて、滑らかなる巖上を、鰻、その全身を現はし、[illegible]て、徐ろに巧みに登り行く。かくの如くして、如何なる大瀑布も、鰻の前途を塞ぐに足るものなく、大海、數千尺の深淵に生れて、深山幽谷に溯ぼり、長江大河の泉源、一滴水に至らざるこを窮むるを得るものは、唯だ鰻あるのみなり。世間、[illegible]うなぎの如し、稀なり。順風に帆を揚げたるが如く、その[illegible]に進行するものを指して、漫に、うなぎのぼりといふは當らず。鰻は、間斷なく邁進する奮鬪、激流に耐して、つねに前途を貫見し、勇往、邁進して、その終に到るべきところを窮極せずんばやまざること、此の峽中のうなぎに見よ。

香魚は、燒くよりも、刺味を以て、芳香第一とすること、世人の知るところなり。然れども、[illegible]、極めて淸冽にして、[illegible]なること、此溪の如くなるにあらざれば、天下の香魚を得可ら

ず。都會人、多くは香魚の魚に觸れざるなり。山陽は山水に放浪したるも、香魚季節、香魚の好時季に逢はず。僅に、嵐山に至つて、始めて鮎を網漁し、その鹽燒を味はひ、始知香魚有如是の一句あり。彼、猶ほ未だ香魚の眞諦に觸れざりしを惜しむ。たとへ丹醸の醇且つ烈なるありといふとも、舟を清溪に浮べ、急湍の鮎を釣つて、その刺味を好下物とするに非れば、不可なり。鮎は、網するよりも、釣るに若かず。鹽燒は刺味に若かず。而して嵐山の水は、此溪の清冽なるに、遠く若かざるなり。

蘇東坡が赤壁游の魚は、松江の鱸に似たるに止まる。高瀬にも赤壁の奇勝あり、同じく斷岸千尺、江流、聲あり。東坡の赤壁の、江の大なるに比す可らざるも、奇巖、或は勝さるべし。牛馬の、溪に飲むが如きもの、熊羆の、山に登るが如きもの、巍然として高士の如く、冬日に峙つもの、奇勝、百を以て數たり。涼風に舟を放つて、佳酒と香魚とを携へば、此峽、赤壁の游、必ずしも東坡をして、獨り、その美を擅にするを得しめざるべし。鮎の外、鱒、脂腴にして軟皮なること、鱸の皮の美なるに勝ふべし。うぐひと蝦と、また共に滋味、豐たかなり。うぐひは方言いだといふ。海魚の溯ぼり來るもの。蝦は手長蝦なり。是等の魚蝦、必ずしも利遠に佳魚といふを得ず。清溪、急湍たるが故に、特地に香酸なるを致すのみ。河魚は運癖と異なり。泥土の水中に、美物を生せず。此峽の如き、清溪、急湍なれば、河魚すべて香魚ならざるはなきなり。およそ清溪の鮎は、皆、芳香ありといへども、往々、その腸に細沙を含み、肉に觸れて快からず。高瀬の鮎は則ち寸毫も沙を帶びず、腹を割くを要せず、直ちに、その腸を併せ食ふべし。これを以て、香醇に加ふるに、うるかの苦味を帶び、仙味の鍾、形容す可らず。碧潭の舟游、此の好下物あり、酒、仙醴の沆瀣の如し。天上の酒星、當さに瞥見して、涎を流すなるべし。

山中の人、健脚、驚くべし。高瀬の少女、十七八なるが、擔人、相携へて、峽中を、御岳原まで、一日のうちに往復し來るといふ。今の我輩の企及するを得るところにあらず。然れども、吉山水の遊覽、釣が錦拔けする如くなる可らず。須く悠々たるを要す。游峽の途、上下、二あり。山口を發して峽を下るとせば、生雲溪を經て、頻蝸谷、若くは湯瀬までを第一日とし、佗、溪を溯て、高瀬に至るを第二日とし、佐々連洞及び漣溪を觀て、阿武川を下り、萩に至るを第三日とす。萩を發して峽を上るに依り、則ち、これを逆行すれば可なり。長門峽の別溪は、沖溪の外、みな道程、短かし。而して、別溪を除けば、探勝の感興を遂ぐるを得ず。游峽の季節は、必ずしも楓樹の時を期

[illegible]
り、[illegible]中の[illegible]通、また[illegible]に[illegible]されて、[illegible]中の[illegible]を[illegible]を
何ここに至らんことを望みた。

下游は激湍に名あり。長谷の深[illegible]、固より[illegible]なるべし。山陽、耶馬溪を下游して、唯だ山水大奇といふに止まる。再び溯游するに及んで、始めてこれを激賞して、海内第一を以てするに至れり。吾等、今、此峡を下游し来る。更に、溯游を思ふて已む能はざるものあるなり。

其十七

大風雨の翌十六日、雨已み、すでにして、雲破れて、陽光、清溪を照す。歩して旃檀樹下に到る。軽舟、既に艤して、篝火、叢に待てり。溪、清くして、水、藍よりも青し。岸頭の諸人、みな水際に蹲まりて、吾行を送る。舟、忽ち奔波に乗じて顛落し、送者の顔、波頭に出没す。右岸は奇峰、削立し、左岸は山、披らいて、高瀬の部落あり。水に臨んで、竹林、瀟洒たるあり。竹林の間より人煙を望む。溪、回りて、両岸、相迫るところ、右岸の清磯、白石、磊々として、殊に愛すべし。これを白雲溪といふ。日夕、白雲つねに屯するを以て名づく。舟を繋いで一游せんことを思ふ。仙洞瀬を下り、舟、歸つて旅[illegible]つ下

瀬[illegible]、[illegible]
[illegible]ふ、一[illegible]、[illegible]
好山に[illegible]然趣といふべし。[illegible]、[illegible]し[illegible]り
中の仙境、溪山を指呼しつつ過ぐるに、後[illegible]、更に[illegible]されて、
前溪、忽ち軟州に消さる。吾等、唯だ黙[illegible]して[illegible]、[illegible]
流水を下るの桃花の如くに、溪[illegible]に[illegible]、[illegible]
として今[illegible]を過ぎ去るを楽しむ。仙[illegible]の[illegible]、[illegible]しも内容[illegible]
聴せず、漠然として、耳に、舟中の音楽の如し、また、或は
仙[illegible]の、溪山を語るを聞くに、手づから[illegible]の仙[illegible]を[illegible]
が如きあり。唯だ、趣味の[illegible]、迸はしるを覚う。陶然として、
その委曲を忘る。両岸の名[illegible]、[illegible]然として[illegible]することも、
両岸[illegible]紗の[illegible]作を以て、脚下の[illegible]に[illegible]るが如し。[illegible]して、
そのうちを過ぐるに、唯だ、その[illegible]に酔ふのみ。何、一一、
その模様を記憶するに遑あらん。およそ急流を下るの舟中、[illegible]
へに、断身を奔波に任かせて、浮沈、ただ、水の勢に自由するを要す。乾坤、舟に在り、舟、空に浮ぶ。これ舟下りの舟中の人生なり。波の低に深く沈むとき、河伯の面を見るかと疑ふ。波の背に高く浮ぶとき、山嶺ともに[illegible]せんとするに似たり。瀬また瀬、波瀾[illegible]、舟行、[illegible]を[illegible]る[illegible]し、[illegible]と、[illegible]

争ふて急灘を下る。

水、稍、緩やかなりと見れば、右岸、開いて緑樹の部落を望む。瀞溪、此に來り朝す。奇巖あり、巨礁、これを厚く密封し、亀兒、岩上に、背を曝らすあり。溪回りて、奔波また急に、忽ちにして平家山を過ぐ。水際、みな川つゝじ、低く水に貼し、返り咲の花、羞を含んで岸下に笑ふ。山中、殊に南天多く、紅珠、碧流に映す。所々、溪畔の部落、皆、畫くが如し。旅櫂の大木、渡頭に聳え、滿枝の黄實に、鴨、集まり鳴いて、行舟を送る。よぼの瀬には兜岩あり、紺碧の水、冬日に照る。船戸、楊、木瀬、熊谷を瞥見して、筏場を過ぐ。岸上、椎、たぶの茂樹舟中に映す。

此の川、その大、天龍川に及ばず、その險、球磨川に若かずといへども、その清、その奇。且つ溪上の風光、趣味饒かにして、江山、皆、親しむべく、また實に、江湖稀有の川下りたるを失はず。譬へば長江の畫卷を、忙がはしく展開するが如きあり。身は、畫中に在つて應接、遑あらず。水際、到るところ川つつじ及び山吹の返り花あり。舟、花影を碎いて奔る。花影、碎けて復た生じ、舟行、痕を留めず。個、遊蹤を思ふ。蓋し鴻の跡るや、雪も爪して、以て、その過ぐるところを記す。その來るや、雪消えて、痕尋ぬ可らず。人の遊歷、痕なきも亦此に喩ふべし。百華、四海に行くといへども、亦た此の如きなり。刀を以て奔流を斬る。奔波、何ぞ、これを止せん。浮世、一瞬にして、流水、萬古、窮なし。奔流に駕して一瀉千里を樂しむ。また此生の醉夢たらずんばあらず。

奔流を下るの舟、半醉して、坦途を行くが如し。一高一低、躍瀰として危からず。仙人、鶴に駕して、雲中を飛ぶも、また此の如くならずんばあらざるべし。高瀬より袋に至るが行程里、その四分の三は、急湍、奔波、一瞬の中に過ぐ。峽中四里の棧道、水を見て經過し、今、その水に浮ぶ。斯水。長門峽の水、依々として相思ふ。奇巖呼び、絶壁つまだてて舟行を送る。顧望すれば、千山萬峯、重疊として、峽中の山、既に雲中にあり。舟中、彼の群峯と相別れんとして、更に、仙士と、再び長門峽の山水を論ず。以て、山水の靈に、別を告ぐ。蓋し耶馬溪は散文の如く、長門峽は詩の如し。耶馬溪には、ところどころに絶景あり、以て、絶景と絶景とを繋ぐ。長門峽には絶景なく、緩間なし。一氣呵成の緊張を以て、變化縮出し、餘韻、奔流の輕舟に托す。または或は、淨瑠璃のさわりの長きが如く、終始一貫したる律調の緊張を以て、喝采を續けしむるなり。

明木川、來り朝し、河幅ますます廣く、水緩るみ、椿瀬、川上を過ぎ、平野披らけて、北海の大、直ちに江流を迎ふ。遙に、

城市、[illegible]の如く、[illegible]たり。[illegible]り。天下の一奇蹟、此天下に、某を走らすもの、[illegible]たるを知る。指月山は、萩の古蹟たり。

其十八

初めて長門峽を下るの翌年、一月。吾輩、再び萩に遊び、松下村塾を訪ひ、萩の名勝を觀、松陰の遺文を讀む。日夕、長門峽の山容を望む。山雲水煙、相招くものの如し。廿五日、飄然として再游の途に上る。自働車を驅つて、明木川の合流點に至り、これより扁舟に繫して、阿武河川を航す。天氣晴和、宛として陽春の如し。碧波、洶湧して吾を迎へ、長江、悉く[illegible]し來る。昨、一瀉千里に下りしところ、今、漸く勝景を指點して語るべし。此日、舟子二人、皆、屈強、群を抜く。舟を引いて瀨を上るに、快速なること車を走らすが如し。激波、その長蛇に激し、痛快、いふ可らず。此日、溯航約三里の急流、僅に二時間餘にして高瀨に達す。此の川を溯ぼること數千百回なる舟子といへども、未だ嘗て、此の快事なしといふ。吾輩、既に川下りの快游を知る。此に至つて、併せて溯游の快樂を得たるなり。

小督[illegible]に面る情趣あり。口碑に傳ふ、[illegible]、[illegible]人が[illegible]て[illegible]

[illegible]は、由來、江を下して[illegible]なり。[illegible]を[illegible]す。[illegible]には、[illegible]あり。山色、[illegible]山水相[illegible]く[illegible]し。[illegible]あり、風[illegible]に[illegible]流れて淵に入れば、澄むこと[illegible]に似たり。[illegible]に沈む。これを以て[illegible]、[illegible]といふ。

木瀨を溯ぼる。[illegible]似の[illegible]に[illegible]、[illegible]の、林[illegible]より江を俯瞰するものの如し。舟子、仰いで[illegible]居[illegible]老翁あり、百八歳、鶴髮、[illegible]、腰を伸ばして、[illegible]悦として仙翁の如しといふ。蓋し此の[illegible]の水を飲み、[illegible]淨の氣を吸ひ、壽を[illegible]す。[illegible]中、[illegible]、仙翁た[illegible]。先に[illegible]くるとき、[illegible]を聞きたり。今、[illegible]くに及んで、此の峽、果して仙境なるを[illegible]するに足れり。吾輩、老母あり、八十五の[illegible]に比すれば[illegible]に到る。吾輩、[illegible]、老母の爲に、[illegible]の[illegible]聞かん。[illegible]

失す。山水の麗、俗客の闖入を嫌ひしなりといふ。今、山色嫣娟として、仙洞瀬は仙樂を奏するに似たり。溪回り、竹林、群巒、碧潭、茅屋、宛に夢中の仙景の如し。仙境の高瀬、忽然として眼前に現はる。吾等は劉郎にてはあらざりしなり。

其十九

仙境といへば仙士を思ふ。舟、高瀬に到る。二仙士、既に待てり。再び長門館に投ず。庭上の山茶花、去年の儘に、尚ほ開いて待てり。半ば落花して、地に鋪く。諸絡、夕陽に臨つて沈まず。燈下に、去年の舊盟を續く。滿盆の白菊、いよ〳〵鮮妍、玻璃盤に白雪を盛るが如し。艷妓、傍に依つて、佩環を鳴らす。酒後、茗を煮る。夜色沈々として、茶鼎の聲を聞くを愛す。初は鼓瑟の如く、既にして笙を吹くが如し。峽谷の趣味を語るは、百合根を剝ぐと同じ。一枚、一枚、剝いで、一層、一層、ますます〳〵絕頂を加ふ。また或は深井を汲むに喩ふべし。汲めども〳〵いよ〳〵その深きを覺う。

長門峽の風景地帶に、更に複雜なる興味を加ふるものは鍾乳洞群の奇景なり。長門峽は、峽谷美のみを以て、天下に誇るに足る。鍾乳洞群は、峽谷美の要件をなすに非るなり。然れども、此の如き峽谷美と鍾乳洞と連絡せしむるに至つては、海內、更に比類を見ず。故に、長門峽を觀る者は、併せて佐々連の鍾乳洞群を觀ざる可らず。況んや佐々連洞は鍾乳洞美として特色すべきものあるに於てをや。長門峽の外、青海島の海岸美、秋吉鍾乳洞群とを合せて、世に長門の三大奇勝と稱す。三者、各、特徵あり、相雄して相讓らず。而して此の三奇勝の地位、相距ること遠からず。渾べて、これを綜合して一大風景帶となすを得べし。阿武川を下つて青海島に至る二里、秋吉に至る五里に過ぎず。秋吉には壯大なる世界的四大洞を有す。佐々連洞は、その廣さに於て對照するに足らずといへども、鍾乳洞として組織的に發達せる意味に於て、研究的の感興に滿ち、これを天然の地質學教室といふも不可ならず。既に、秋吉の四大洞を觀來れる者にも、別種の新趣味を鼓吹するに足るものなくんばあらず。

佐々連洞の發見は、長門峽の啓開するの數年後にあり。その發見の動機は、長門峽の啓開に刺激されたるものありといふを得べし。長門峽の右岸、群峯の背域をなす生雲、嘉年、藏目喜の諸村より、佐矢岩峰、頭角を現はして、金鯉溪に侵入し、更に、峽の右岸を縫うて高瀬の對岸に迫り、佐々連の鍾乳洞群を隱し、赤壁の背後を潜行して、突如として阿武川に迫つて、平家山となり、勢、大に張る。これより江を渡つて、筏場に及

[illegible]二重々として、石灰岩の[illegible]
り、遙に秋吉の石灰臺に續く。高瀬より川下りの兩岸、[illegible]
綿々として、鍾乳洞の發見を聞くといふ。長門峡の石英斑岩と、石灰岩との二大岩層、錯綜して以て、大風景地帶をなすものなり。然れども高瀬より下流の鍾乳洞は、未だ特稱するに足るものなし。平氏殘黨の傳統は、此の廣汎なる石灰岩層に分布し、夙に鍾乳洞群に、文學的興味を賦與したるものなり。秋吉鍾乳洞群の一巨洞、古來、景清洞として、尤も早く著はる。平家山の中腹の一洞、また平氏、潜匿の遺址と稱す。平氏のうち、此の風景地帶に、英雄的傳統を留むるものは景清なり。則ち知るべし、傳統の解釋として、石英粗面岩は平家に歸し、石灰岩は、景清に占領せられたることを。

夜深くして、鍾乳洞群の話、盡きず。秋吉の鍾乳洞群に山椒魚棲む。佐々並の洞群にも亦た發見せらるるを聞く。高瀬川の潺湲、草亭に還ふ。二仙士を送れば、微雨、偶、來る。明日の雨を憂ふ。

其二十

翌廿六日朝、雨、降る。草亭に坐して二仙士を待つ。紫峰來り、琴原來らず。前夜の約を守り、獨り古山溪に向つて、山岨[illegible]

[illegible]

[illegible]

江を渡つて、[illegible]に到り、[illegible]

左に本洞、右に[illegible]あり。[illegible]は、平氏[illegible]い

ふ。草亭より[illegible]、[illegible]川、[illegible]の如し。[illegible]

を測せず。佐々並渓に沿ひ、米、[illegible]し、[illegible]間[illegible]、皆、[illegible]、

盤谷を盤す。燃燈の數つらね行くが如し。[illegible]に、[illegible]中の[illegible]

界にして、[illegible]の盤旋すべき[illegible]。[illegible]たる[illegible]し、[illegible]

魚淵を最大とす。平氏の殘黨、此に隠匿するもの、偶然ならざるなり。今に於て、此を訪ひて、此に隠れば、何人か、これを發見するを得ん。嘗て、稗史を讀むに、石道の妖術あり。巖壁に近づいて咒文を唱ふれば、即ち形影、岩に沒して見えずといふ。長門峡に來り、此の盤谷に潜むものあらば、即ち石道の術を行ふ者ならずんばあらざるべし。風景、總べて石なり。石中に隠るるあるなり。若し、此の盤谷を以て、向ほ足らずとせば、景清の如くに、近に、鍾乳洞に隠れよ。盤谷の中、水、盡くして洲、[illegible]の[illegible]、太平に[illegible]る。石道の妖道人の如くに、食はず、飲まずして、石に隠るる者と、同日の話にあらず。[illegible]は、古より、山に隠るることあり。然れども、かく山川[illegible]に隠るるものを以て、直に、仙中ありとなす[illegible]し。

谷、渺茫として、音響を鎖いて、ますます幽谷に入る。霰、降る。山水、更に奇を增す。仰いで海雲山を望む。石灰岩、無數、山腹に人立し、敵兵、列を亂して算ひ下るが如きあり。平氏、背を、岩頭に就らせ、源氏の追擊軍を欺くと傳ふ。漢、漸く窮まり、佐々連の部落あり。家々、皆、紅瓦、屋垣みな清雅、窮谷中、かくの如く瀟洒たる小邑、得易からず。部落みな平氏の殘黨にして、悉く藤原氏を稱す。一村、紙を漉いて業となす。麴塵、富をなせり。若し游客、此地を過ぎなば、山陽が儷取の、登々峽路大將黑、肥斷夜童搗紙聲の句を憶起すならん。

佐々連を過ぎ、山腹を望めば、巨石、畜をなす如きもの二あり、右を佐々連洞となし、左を觀音窟とす。此の鍾乳洞群は四洞あり。他の一は甚だ小、他の一は合壁を穿ちて、觀音窟に併せらる。佐々連、觀音の二洞は、秋吉の鍾乳洞に較ぶれば、こそ、小規模なるを免かれざれ、これを海内に鍾乳洞に比して、その規模、その組織、實に、異數の奇觀たるを失はず。

其二十一

霰、激しく吹き荒る。人と深山と、すべて滿天の銀沙の灰裡にあるが如し。散石を踏んで、澗水を渡り、佐々連洞に向ふ。散石の一、鍾乳石の巨大、臼の如きを置くあり。則ち此の一塊石といへども、これを世間に出せば、大に珍重すべきものなるべし。

洞口は、宛然、大岩戸なり、二仙士は峽中の手力雄命ならずんば、あらず。觀音窟は、古來、洞口に、觀音を祀る。佐々連には、何もなかりしといへども、此の二洞口の奇偉なるは、山民、早く知る。但だ、押して巖扉を開いて、地底を探ること、二仙士の如きもののなかりしのみ。世上、發見すべきもの、應に眼前にあり。コロンブス新大陸を發見するに及び、探險熱、一世に流行し、新發見、續出すると同じく、長門峽、世に喧はるるや、發見熱、高潮に起り、二仙士を促かして手力雄命たらしめたりといふ。天岩戸、一たび開けて、光明、地底に透り、洞中の新世界、忽ち世に出づ。山鶯、無數、洞扉を繞つて啼く。人生の快事、新世界の發見に若くなし。長門峽は、橫に發見されたるもの、而して鍾乳洞は竪に發見されたるものならずんばあらず。抑、橫の發見は、南極と北極とに至つて窮まるべし。竪の世界は、上は比馬拉山の最高峯に至り、下は、即ち鍾乳洞の深底に至らん。石炭の竪坑は、いかに深く掘り得るとも、地上の人生を、地下に運び去るに過ぎずして、新世界の發見に非るなり。エヴェレストの絶頂に、未發の仙界あらん。縹緲として至り難し。鍾乳洞のうちを行くは、太古に溯ぼるが如し、人

[illegible]相、都べて一暗中の世界に[illegible]されて、[illegible]し、千萬年後の人間世界、豫め此に置き試みられしかと疑ふ。若し、研究者中の別世界を賞賛しつゝ行けば、造物者が地中に秘めおきたる神聖なる豫言記を讀むの感なくんばあらざるなり。

神聖なる地底の豫言記に、既に多く、人間の手澤を存するものは、早く開けて、これを[illegible]することを解せざる人々の手に依つて取扱はれたる鍾乳洞なり。鍾乳石、石筍等の幾多が運び去られ、或は純白の大理石の天井が松火に燻されたる如きは、これなり。秋吉の鍾乳洞群のうちにて、稍、小規模なれども、奇構、複雑を極め、且つ、未だ多く人間に觸れざるものを中尾洞とす。佐々連、觀音の二洞は、奇構、最も能く中尾洞に似て、更に新らし。海内、鍾乳洞群の、特に新奇なるものにして、神工の痕、淋漓として、その儘に存するものなり。

其二十二

洞口を天すだれといふ。玄關の前の風庭に比すべし。鷹爪を懸けたるに酷似する大鷹爪岩、門柱を擁ふ。石門を仁王門と名づく。門を入れば仁王殿あり。直下して、地底に向つて、長梯を下る。梯、幾回か屈折して、下つて已まず。[illegible]を排して余等[illegible]するなり。[illegible]不く消え、[illegible]す。[illegible]別世界、開く。[illegible]かと疑ふ。蝙蝠窟なり。[illegible]、四周、岩を穿つて直立し、直ちに地上に通ぜんとするものの如し。大煙突と称す。洞中、煙突穴少からず。これをこの洞の特色の一とし、而してこれをこの最も雄偉なるものとすべし。

天下の鍾乳洞、およそ此洞の如く、特色に富みたるはなく、行くとして、特異ならざるはなく、探勝者の[illegible]特色を記するなり。蝙蝠窟を出で、白銀廊下を通る。天然、坦道なり。辛うじて二人を併行せしむるを得べし。蝙蝠あり、[illegible]つて懸り、敢て飛ばず、試みに手を以て觸るれば、いよ/\益縮して、恰も巾布の如し。かくの如き廊下の如き、他に見ず。群居床に至る、火光に照映する鍾乳と石筍と、突兀として巨を抜うるが如く、地上、未だ嘗て此の奇觀を想像せず。およそ此洞の鍾乳、石筍、みな白色、美麗。而して此の群居床が第一とし、その尤も壯麗にして花朶の雄大なるが如きを花瓣廊といふ。荷葉廊下、浮彫天井は、石灰岩の浸蝕されて鍾乳石帶の如き[illegible]すものなり。この外に、[illegible]出ぐるが如き[illegible]

尼岩、傾斜岩とす。地上に風雨なし、地底に風雨、極みしなからん。

泥中の玉は、泥土のうちに數多の石筍を生ず。また鍾乳洞に極めて稀にして、此に見るものなり。大雪溪、洞内アルプスは地上の雪溪、アルプスを、髣髴として遠望するが如く、雪色、溪谷、眞に迫る。第一、第二、第三の石門を過ぎ、眼鏡あり、巨孔二つ、並んで天壁に見ゆ。三福門に到る。仙士と岩角に坐して、洞群發見の話を聞く。此地、まさに香を焚いて、地底の神靈を祭るべし、倘、香を携へず、地上の煙草を捧げ、且つ吸ふ。紫烟、漂ふとき、始めて地底に人生あるを覺ふ。仙士、皆語る。初に觀音廊を窮め、次に此の洞を開く。深穴に沿ふて未知の深淵を探る。發見の喜、天に登るが如く、探險の火、骨髓に燃ゆ。綱を繰うて閘井を下り、身を擲つて、窮孔を渉る。或は烟突孔を下るに、足の踏むべきなく、その深を測らず。行壁に向つて、四肢を張り、以て、體を一壁に支ふ。一寸先人生無し。溪上の青年、來りて事を共にするものあり。當時、諸人悉く危險の二字を忘るといふ。吾輩、今、地底にあり、發見の光景、歷々として、眼前に迫り、感激、描く能はず。坐ろに涙を催ほす。

三福門より更に地底に下る。大納戸、小蝙蝠、水郷を經て、迷宮に至つて窮まる。迷宮に名勝多し。最後迄行不歸といふ。洞奥の秘境なり、水郷以後、溶水、明鏡より下も明らかならず。蓋し觀音廊には水晶殿あり、岩壁の模様、鍾乳、石筍の陸離たる、絢爛として目を奪ふ。觀音廊の第一勝、水晶殿を推し、佐々池洞には水郷、迷宮を推す。洞に入れば、直ちに梯子を下り、廊に入れば梯子に登る。これを二洞の相違とす、その他、石灰岩の裂罅の壯大なる、鍾乳石に樹根を含める、及び鍾乳石の尖端の彎曲せる、皆、海内稀有にして、此の二洞の特色を誇るに足る。吾輩、地底に來つて始めて、地上の文章、未だ足らざるものあるを思ふ。地底は、地上より豫想すべきものにあらざるなり。嘗て、柳宗元、王安石の、鍾乳洞記を讀むに、只、洞中に入つて、洞中を記せず、文章といへども、地底を盡くは容易ならざるなり。但だ陸放翁、夢中に、鍾乳洞に遊ぶの詩、稍、その眞を得たり。蓋し洞底にあるとき、夢に遊ぶが如し。此の感、唯だ同遊者と、共に語るべきのみ。

歸途、故郷に歸るの道の如し。白銀廊下を再び過ぐ。先きの蝙蝠公子、既に去つて跡なし、洞裡、行路難あり、風雨なし。氣象、萬古、歷史を見ず。洞を出れば、地上、乾坤、霞の海湧く。霞のうちに透し見る遠山、嘗て吾が前生に見たるものの如し。吾輩は、地底より地上に再生し來れるならずんばあらず。

大山[illegible]日、花、[illegible]
梅花、水仙の如く、もし異邦に[illegible]、[illegible]も
此の如し、[illegible]の梅花、水仙花、まさに香を放つ、内山、花。

[illegible]

アメリカから高天ヶ原の蜃氣樓を眺めて

佐々木指月

その後の半年といふものは、外へ少しも出なかつた。から、家のなかに引きこもつて、日本字の本を讀んで、日本語でものを考へてゐた日には、からだは西洋にゐるとはいふものゝ、日本にゐるのと少しも變つたことはない。

日本人といふ、からだのなかに育ち上つた私の心は、たとへ何年西洋の日に照されても、つまりは日本の花をしか開かないものであるといふことが、近頃は、ことにしみ〴〵わかつて來た。

それならば、日本へまた歸りたいとでも思つてゐるのかといふとさうでもない。あんな國へ歸ることは、もう、こりごりだと、胸のどこかの片隅で心がさゝやく。

十年、日本へ歸つて、よほど私は疲れたと見える。日がたつ日もたたないでも、人目すらすごせない國。時々は地震があつて、一生かゝつて築いた土台も、だいなしになる國。おまけに狙はれなつてゐて、東の海から明日はどんな大鵬があふれるかといふことすら知らないでゐる國。淺草の觀音堂の境内を通りぬけると、昔の人が築いた文化は見上げるやうな塔にたつてきつてゐるが、その人々はもう、人達らず塚のかなたへ消え去つて、今では洋服に頭をさした人たちが、背中をまるめてあるこおること、その下を通るだけである。さうしてその人たちの知つてゐる作文は[illegible]たい。いや、[illegible]ない。この國はことに[illegible]たち日本[illegible]その[illegible]

見切つてしまつたのだつた。

考へて見ると、昔からどんな國だつて、その國固有の文明は一度花を開けばそれでおしまひだ。二度と同じ文明の花の開いたためしはないやうである。印度では、孔雀王朝阿育時代といふのが頂つ盛りの時節で、それは丁度紀元前二百十七年前後、佛滅二百十八年。シリヤ、エジプト、マセドン、エピロース、キレーネといつたやうな希臘地方の諸王國との交通を開いて、その頃の東西の文明はその交通によつて融合された。そのせいか、佛滅後印度地方に弘まつた佛教には、バビロンの文化の薰りが含まれてゐるといふのが西洋の佛教學者の説である。それから以後の印度はだんだん振はなくなつて、遂には今日の姿となつた。——こんなことは何も私が事新しく書くがものもなく、誰でも知つてゐることではあるが、ぬいてしまつたのでは、考へてゐることが人に通じなくなるから、御免を蒙つて書くわけだ。

で　序をもつて支那に及ぶと、支那の文明の頂つ盛りはいふ迄もなく唐時代で、紀元六百四十年前後、唐の太宗皇帝の頃は、今の支那とはわけがちがつて、その西境は遠くイイスタンペルシヤから、キアスピアン海の方までひろがつてゐた。のみならず外國の大使は、ネパール、マカタ、ペルシヤ、遠くは、コンスタンチノーブルの方からさへやつて來て、支那皇帝の闕下に伏し相たつた。子供の時に私はうちのおやぢから十八史略を教はつて、ええと、今ここに本がないからよくは覺えてゐないがそれ、是れより先、四夷の君長、闕に詣り、帝を天可汗と爲さんと請ふ。上の曰く、我れは太唐の天子たり、また下つて可汗の事を行はん乎といふくだりを習つたやうに覺えてゐるが、今考へて見れば丁度あれがこれに當るのだ。

絶世の美人楊貴妃にうつつをぬかして名をあげた玄宗皇帝の時代に出てくる安祿山なぞといふやつは匈奴、即ち、タークスの血をうけてゐた。祿山にもと營州の雜胡なりと史略にあつたと覺えてゐる。玄宗皇帝が祿山の大きな腹を指さして、此の胡の腹中何んのあるところぞといふと、祿山對して曰く、赤心あるのみ。なぞとうまくごまかしてゐたが、遂には自ら大燕皇帝と號するに至つた。その頃の匈奴の勢ひといふものは、セントラルアジヤ、今のイイストタルケスタンあたりに根を張つてゐて、支那もこれにはひどい目にあつてゐたのだつた。肅宗皇帝、紀元七百五十六年の頃から、支那は追々外國の軍隊を借り込んで、たび祿山の手に落ちた長安の都を攻め立てた。そのなかには四千人ばかりのアラビヤ軍が加はつてゐる。史略にも、回紇は、その子の葉護を遣はして、精兵四千人に將として

ぎる、といふのがそれだ。[illegible]
の船へ乗り込むありさまが目に見えてくる。
さて、それでは、その頃日本はどうしてゐたかといふと、女帝孝謙天皇の御即位が西暦七百四十九年で、瑜伽宗の道鏡なぞといふ坊さんが、大いに幅をきかしてゐた奈良朝時代のまつたゞなかであつた。瑜伽宗といへば所謂ヨギの哲学で、このアメリカにも、アビカアナンダなぞといふ印度の坊さんが来て、今頃しきりにこれをひろめてゐる。その頃の孝謙天皇は、今から思へば、ヨギの哲学の研究をしてござつた、何んとハイカラなクインぢやないか。ヨガといふのは梵語だ。唐にはこれを相應と譯し、英語ではこれをコンタクトと譯すのだ。日本語では、まじはるといふ言葉がそれに當つてゐる。
しかし奈良朝の文化は、あの大和の地方へ支那から移した、化ならば[illegible]の花で、その頃の日本人の多くは、文化どころかまだまだ[illegible]を從つてゐた。支那の古美術品は沢山このアメリカへ流れ込んで来てゐるが、唐紀の[illegible]物の人形などを見ると、女の髪や着てゐるものは、日本の天平時代のそれに全くよく似てゐる。なんともいへない優長なところがあつて、古昔よし奈良の都の雅子たちの生活も、それから推して忍ばれて、[illegible]たる思ひにうたれてしまふ。日本人が支那の境域から離れて、土地に

[illegible]
[illegible]法[illegible]
[illegible]
だ。なかにこまつてゐたものと、時には[illegible]
やうな様子もある。またこれから[illegible]面白さうといふ[illegible]
きぶれのやうなところもある。何しろ[illegible]日本のと同じに、[illegible]
の終りからこの大正へかけて、もう[illegible]の[illegible]。[illegible]
つて行きつつある[illegible]經文がこの[illegible]つてゐる。[illegible]
唐紙の帳場からも、あの厚い大[illegible]が[illegible]して了つた[illegible]
同じくこれを語つて居る。[illegible]
をよして、紺の腹掛けのお職人さんもつツかけ[illegible]に
乗れないといふ世界の[illegible]がこれを語つてゐる。
文化のよるときには文化だけがよるのぢやない。文化の[illegible]するときには文明だけが[illegible]するのぢやない。何から何まで入れかはつて、何から何まで[illegible]するのだから、[illegible]ければならない。それでは今後は日本にどこの文明を[illegible]のか？ そんなことにかまはれる[illegible]、[illegible]の目で見[illegible]かりきつてゐることだ。
日本の[illegible]と[illegible]
[illegible]日本の後[illegible]、[illegible]

れついて、少しも言葉が通じないのを、その難破船に乘り組んでゐた支那人が、海邊の砂に文字を書いて、それでやつと日本人にわかつて、その時その葡萄牙人が一挺の小銃を薩摩の奉行に贈つたことからはじまつてゐる。——なかなかくはしく知つてゐるだらう。知つて、ゐるわけだ。正月のおそなへのやうな大きな凸鏡で、エンサイクロペデアブリタニカの小さな活字を睨みながら書いてゐるのだもの。あいつはいつの間にか學者になりやがつたなぞと思はれてはならないから、ちよいとこゝらで種を明かして置く。

それから後のことは私がこゝで書くがものはない。で、話は飛んで、大正の今日となつて、西洋諸國との接觸は胼胝の出來るぐらゐはげしくなつて、今のバラックの銀座はどうか知らないが、先年私が日本へ歸つたときの銀座なぞは、なんだか西洋の出見世のやうな感じがするほどにまで、西洋くさくなつてしまつてゐた。たいていの若い人たちは英語がわかつて、ネクタイの結び方をしつてゐて、漢學の方はから駄目で、袴は男も行燈になつてしまつてゐて、死んでも親父の御宗旨のお寺の、お世話にはなりたくないといふやうな顔をしてゐた。私は日本に居る間、支那人ともつきあつた。印度人とも交際した。かれらも同じく洋服を着てゐて、英語は日本人よりうまかつた。さうしてやはり、かれらもその祖國のことはあまり知つてはゐなかつた。恐ろしいのは西洋文明の東漸であると私は思つた。淺ましいのは自國特有の文化をすつかり見くびつて、恥しいものかなにかのやうに思ひこんでしまつてゐるハイカラさんの態度だつた。歯が浮いてたまらなかつたのは、銀座のカフエかなにかに集まつて、女ボーイを相手にして、熱燗で西洋の詩かなにかを口ずさんででもゐやうといふ飛び切りのハイカラさんの群だつた。かれらは雨も降らないのに、黒の大きなネクタイを蝙蝠傘のやうに胸の上へひろげてゐた。これは西洋の文明に接觸してゐるのではなくして、西洋の文明に翻弄しちやつてゐるのだと私には感じられた。しかし翻弄も三年すればものになるとかいよいよものになる日がせまつた。だがそれは、甘つたるい惚れたはれたの殺し文句のやりとりではなしに、先づ火の雨が霞ケ浦の空の上から第一に帝都の上に降ると思はなければならない。

その結果はどうなるか？　西洋のお金がどんと日本へ流入して、日洋合辦の事業なぞが盛んに起つて、あたまの古い連中は腹を切り、あたまの新らしい連中は日本語なんか棚に上げてしまつて、美容院へでも日參しやうといふ女連は盛んに合辦の子を産んで、相も變らず手でもつて土でもほじくつてゐやうとい

ふ論中は、朝鮮から満洲、満洲から蒙古、蒙古からゴビの沙漠をつたはつて、昔の匈奴の住んでゐた中央亞細亞の高原へでも移住して、歴史はくり返すといふことがあるのだから、今度は背後から、また西洋諸國をおびやかすやうなことになると、私は今から豫言して置く。さうなると大和民族の膨脹は實にすばらしいもので、まことにもつてお目出たいわけだから何も悲觀することはない。

ゴビの沙漠をつたはつて、西藏の北を通つて、ビンづまりの山ふところの、タクラマカンの斜面から、カラコラムの山道、一萬八千三百尺を越えて、印度カシミヤの方へ出やうとするあのあたり一帶の國土はそもそもの昔からウラルアルタイ語族の古郷だといふではないか。日本人もやはりウラルアルタイ語族なのだから、或ひはあの邊が、その昔、八百萬の神々の集まつてゐた高天ヶ原であるかも知れない。すると、大和民族は古郷へ歸れることになるのだ。そのかはり いつも沙漠のごみのために、こびだらけになつて、顏ばかり洗つてゐなければならない。ゴビといふのは蒙古語で沙のことであるさうな。

話は少し横道へそれるが、ゴビの沙漠の一部には、カミの沙漠といふところがあるといふことだ。カ音は、いつも、ハ音に通ずるので、そこを、ハミの沙漠ともいふさうだ。ハミは、ハふに通ずる。ハムに通ずる[illegible]いふ言葉へ通ずる[illegible]と、[illegible]ふことと、太陽と同義語だとこれは[illegible]の日本の古語學者[illegible]ヴエデツクでは、カムといへば、神といふ意味もあるし、また食物といふ意味もある。カムダといへば水を與へるもの即ち[illegible]ふことだ。ヒといへば、膨らむといふ意味、また、織々になるなぞといふ意味で、ヒトリといへば人といふ意、また、父親といふ意味もある。したがつて、人間といふ意味にもなる。梵佛陀には、アンタラ、ヒタラム、マタラム、か、といふ言葉があるが、これは天と地とのあれだといふことで、父と母とのあれだとも、無論、譯せるわけである。ジユピタアの、ピター、英語でのフアザーなぞ、皆これ同じ語幹から出てゐる。また、ピター、プトラといへば、父と子といふ意であるが、日本語でひとつふたつ、つまり一二といふ言葉は、これと語幹を同じくしてゐる。かうなつてくると、日本語はどこから出たかといふやうな疑問は、もう、なくなつてしまふ。

さて、そこで、このカムと、ヒとを合はせると、カビとなる。ヴエデツクでは、カビといへば詩人のことで、聖者といふ意味も含まれてゐる。昔、ウヂヤナといふ聖者があつて、死後にその靈魂が、晩の明星となつて太陽を守護してゐるのだが、こ

の明星が夜あけ方に天の河を渡ると、太陽が東の海からあらはれるといふ神話が同じく梨倶吠陀にある。その聖者の名を、カピ・エジヤナとも呼ぶのである。

イジヤナは佛教では、カマ、即ち欲界の頂上、第六天にゐる神であるといふのであるが、それと一對の女神の名を、イジヤナアといつて、女性の名詞だから語尾の母音がのびてゐる。梵語では、イジヤナといへば酋長とか、または統御者とかいふ意味で、イジヤ、アカラといへばヒマラヤ山のことである。イジヤナといふ語は、文法上では呼格の名詞であるが、これが對格（アキユザテイブ）になつた場合なぞには、イジヤナム、イジヤナウ、イジヤナンなぞと變化する。

今、パミールの高原にゐるアリイアンスの一種族なぞは、相變らず、太古のまゝの、紀元前百二十年頃のヴエデツクを話してゐるといふのだから、お念があつたら出掛けて行つて、高天ケ原のありかを捜しあてたいものである。高天ケ原の、あまといふ語は、ヴエデツクでは、アムであつて、梵語では、オムと發音する。佛教の陀羅尼のはじめなぞには、よく出てくる語だ。それ、あの、唵の字がそれである。つまり、セノレツド、エツキスクラメーションを表はす語だ。今日の日本語では、敬語として用ひられてゐる、御の字がそれに當たるのだ。たから、その昔、天の宇受女といへば、今の、おうつさんのことであると思へばいゝ。敬語と日本人とは、神代からの離れ緣であつたと見える。

それから、豐葦原の中つ國といふのは、私の想像では、今の日本の國土ではなくつて、これは今の中央亞細亞の沙漠地帶がまだ沙漠にならないで、ゴビから、ずつと東の方の、タクラマカン——波立てる沙の海の花——の沙漠の方まで、一面の海、いはゞ亞細亞の地中海を形づくつてゐたときのことを云つたのではなからうかと思つてゐる。今でも河や湖水には、カミシといふ葦が一ぱいに生じてゐるといふことだ。それから木も植ゑてあるといふではないか。古事記を讀んでゐると、天地の初めの時には、一番最初に水のなかから葦が出てくる。それから泥地があらはれて、それから島があらはれる。で、大和民族のホームを中央亞細亞と定めて置いて、だんだん古事記を讀んで來ると、不思議にも私の想像は太古から滿洲、朝鮮の南を通つて、日本へ渡るための道を驅けまはる。ナーハンカイロ？ニーヤ、トントンデ、カイロなぞと私も馬の尻をたゝいて、あの邊を通つたことがあるのさ。

スウエン、ヘーデンといふ瑞典の旅行家、中亞細亞探險旅行者だが、千九百[illegible]年に、スタツクホルムで出版されたていうち

には、ケ[illegible]のなかには沙山の廢墟によつて、以前[illegible]地面の廢墟の[illegible]岬に記された記録のなかには、こ[illegible]讀んでも今の學者には讀めない古文字もあるといふことだ。昔いてあるさうだが。ことによつたら日本の神代文字がなかにまじはなからうか、と想像も出來ないこともないではないか。私の子供の頃、東京で出版されてゐたカムナガラといふ雜誌の表紙に、何だかそれが書かれてゐたのを今でも覺えてゐるが、今考へて見ると、これは紀元前五世紀頃の梵字に似てゐるやうにも思へる。

廢墟のうちには、紀元後になつて建てられた佛教の寺院なぞもあるさうだが。あすこの沙漠が沙のために住みにくくなつてしまつたのは、さう古いことではないらしい。でも今では日によると、何んともいへない細かい沙の霞がかかつて、それがためにはあらゆる活きものが窒息して死ぬさうだから。恐ろしいところといはねばならない。しかし澤山沃地もあり。そこには、コトタンとか、ヤーカンドとか、カシガールなぞといふ。昔の例民の殘して行つた都が今でもあるのだから、今の日本人が移住して、例の智慧を働かして、しきりに水でも撒いたら住みよくなるかも知れない。いや。日本人はそこから來たので。しきりに地面に水を撒くくせがあるのではないか。大きな海が干上つて、だんだん沼になつて行く頃の、中央亞細亞は、日を逐つた[illegible]

[illegible]まつたのに日は今でも日沒は沙山[illegible]なさうな。しかし[illegible]が。西[illegible]年の頃に。そこを通つた時には。もうところどころの沃地をのぞくの外は。一面に大沙漠になつてゐたらしく、それの記録にはたあるさうだ。

ちよいと書き入れあつまして。[illegible]おかしくなつてしまつた。私の[illegible]陀の研究はまだ發表もされないことであるが。ことによつたら間違つたことを書いてゐるかも知れないが。何のたら例の與太だと思つて讀んでくれゝばいゝわけだ。日本にも。獨逸仕込みの梵學者故原[illegible]來先生とか。或は高楠[illegible]とかいふその方の大學者もゐるわけだから。日本語とサンスクリトとの比較研究なぞも。近い昔に完成されて。立派な業界あるに違ひなからうが。海外にゐてさういふ書物の名をだに聞くことの出來ないのは殘念な次第である。だが恐らくは。梵學者は國語の方はドンケヤだし。國學者は梵語の方はノーリーにして。梵語その方の事は閑却されてゐるかも知れないね。すると。こいつはやはり。西洋人にやられてしまう仕事かな。そあさういふことにならないやうに。お願ひ申す次第である。

しかしながら、いくら大和民族の[illegible]限した[illegible]といつて、

昔し昔しその昔しの高天ケ原の方まで移住する氣づかひはないといふ人があるかも知れないが、さういふことをいふからして、今の日本人はまだ島國根性がうせてゐないといふのだ。私にいはせれば、今の日本人は、丁度母親のふところにゐる子供のやうに、一歩も自分の國から外へ踏み出さうといふ勇氣がない。また踏み出しても、内の陸離嬰が隣りへでも遊びに行つたやうに、ちよいと窘められると直ぐ、泣いて母親のところへ歸つてくる。もう日本人も、かれこれあの島國には二千五百年來もゐるのだから少しは育つて親に世話をやかせないで、自分で行くべきところを求めて散らばらなければ仕方がない。あまり子供が多すぎるので母親だつてやりきれない。

地圖をひろげて考へると、西藏の高原から奉天へ來る距離は、アメリカのロッキー山地帶から、シカゴへ來る程の遠さではないか。また奉天からゴビへ出て、沙漠づたひにハミへ出て、あれから中央亞細亞の盆地へ這入る路は、アメリカのコロラド河をさかのぼつて、モハベの沙漠から、死の沙漠をつたはつて、ソルトレーキの沙漠へ出て、あれからモンタナの盆地へ這入ると思へば大差はないではないか。アメリカの大陸を、ぼつぼつ歩きながら徒歩で橫斷して、サンフランシスコから、シカゴ迄、八ケ月とはかゝらない距離ならばたつた一日二晩の旅だ。今でもこの國にゐる人間は、例のかたぼこ馬車へ家族を乘せて、大陸のはてからはてへと移住して歩いてゐる。

ことに、あの亞細亞洲の裏まはりは、その昔、支那からペルシヤや、ローマへ出る近道で、キアラヴァンが、あそこを行つたり來たりして、その頃は、あそこが世界の中仙道であつたのだ。今でもまだあのイーストターキスタン一帶の國土は支那の屬領になつてゐる。ちよいと拜借するわけには行かないものか知ら？ 沙漠は殖林して、だんだん灌漑すると、しまひには樹木が自ら雨を呼んで、いゝ土地になつてくるといふではないか？

太古の高天ケ原人種が、二派に分れて遊牧して　後に日本で落ち合つたといふ說もあるが、高天ケ原の上にゐたアリイアン族を天つ神の種族といひ。下の沼地のなかにゐたモンゴール族を國つ神の種族といつたものであらうと私は思つてゐる。でその二つの人種がインターマリーして出來た子孫が、蒙古を過ぎて、遙々に朝鮮から日本へと渡つて來たものであらう。これも十年や廿年で移住したものではなくして、古事記の上卷の終りにあるやうに、日子穗々手見の命は、高千穗の宮に五百八十年もゐたのが本當であるらしい。記には、命の一族が、筑肉の韓國を通過する以前に、高千穗の宮は出て來る。韓國を齊通□解するのであるやうに朝鮮だとすると、高千穗の宮は命が海を渡

[illegible]話がいよいよ[illegible]しまつたので、[illegible]ない人があるといけないから、すこしくわしく書いて置かう。古事記に出てくる、あの、天つ日子、穂の瓊瓊杵のみことといふ人の若君をはなれて遥々と高天ケ原から降つてくるあたりだので、一度原本に当つて読んで見て貰ひたい。話は案外書かれてゐないのであるが、天の八重棚雲を押し分けて、稜威の打分きに打分きて、降つて来た神々は、——山の上から降りてくる有様が描かれてゐる。——やがて沼地へ降り立つて、天の浮橋に浮き締り揃り立たしといふのだから、沼の上へ樹の幹を伐り並べて、筏に組んで、それが上を通る人や馬の重みで沈まないやうに、左右へ杭を打ち込んで、勿論、底も知れない泥沼の上のことなのだから、さうしてしつかりと所謂浮き締りをつけて置いて、その上を渡つたものに違ひない。昔の国学者は、浮き締りといふのは、浮橋の上に整列したあり有様で、そり立たしは、そりは稜なといふ義、立たしは、渡するといふ義だといつてゐるが、少くとも、一種族がこれから遠征をしやうといふのだから、今の兵隊さんが閲兵するやうに、一時に揃つて用掛けたものでないことは分りきつた話である。今のアメリカの開拓人が、彼等の部落からそのトライブを分つて、他に移住させる様子を見たならば、そ[illegible]

[illegible]高千穂の[illegible]に降りまして[illegible]日向、即ち日に面した[illegible]の、[illegible]音吹である。[illegible]といふ音は、[illegible]の前に[illegible]音になる音で、[illegible]には、くしの[illegible]つてゐるのである。くしは、ヤキマックでは、ヤン[illegible]直くにといふ意味で、つくしのひたがといへば、直くに朝日の当る、といふ意味になる。古事記には、一つくだりの[illegible]になつて、此地は、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり、とあるのを見ても、筑紫の日向といふのは、一地方に限られた固有名詞ではないといふことがわかつてくると同時に、この民族の[illegible]きになつてゐる山陰から出て来たといふこともわかつてくる。

そこで、久士布流岳といふのは、[illegible]ふるといふ[illegible]立くて、これは、直ぐ直ぐに立ち上るといふことで、[illegible]はヲーソックシュッフーといへば、[illegible]上る[illegible]などといふ意味[illegible]ことになつて、[illegible]では、[illegible]といふ[illegible]を形容して[illegible]のである。

また、あもりは、あまおりが、語詞の上の約束から、その重なつた母音の音を變じたまでゞある。思ふに、山の上へ降りるといふわけはないからして、こゝは山の麓へさしかゝつたと見るべきであらう。恐らくは、泥海を越えて對岸の山の麓へ出たのではなかつたらうか？

そこで、少し行を置いて、こゝに膂肉の韓國を笠沙の御前に眞來通りて、といふ問題の文句が出てくる。私の考へでは、韓國といつても、その頃の韓國は朝鮮のことではなくつて、蒙古一體を韓國といつたものであらうと思ふ。語幹の上から考へれば、カラは日本語のくろに當る。青黑い色の義である。それから、こゝには、その語幹は、クウであつて、土といふ義であるのだから、からくにといへば、黒い土の國といふ意味でなければならない。今でも、裏海とアラル海との間の、ウストウルトの地方をカラクムといふさうだが、これも湖水の乾いたあとの、黒い砂の意味から來てゐるのださうな。さうして、それは、そこに住んでゐた、ヨムツ族の言葉であるといふことだ。このヨムツ族に就ては、書くべきことがあるのだが、話が前後してしまう嫌ひがあるから、それは他日に讓つて置く。たゞ、ヨムは、日本語の、よめ、即ち母といふ義にもあたるし、汝れかはつて來るところといふ義にもあたるといふことだけを記して置

から。

さて、私の考へでは、あのゴビの地方は、その頃は、海の底が、からになつてしまつてゐて、一面に黒く見えたものであつたらうと思はれる。膂肉といふのは、痩せた不毛の地であると、昔の國學者は解譯してゐるが、今は、それに從つて置かう。

で、笠沙の御前といふのが、これがどこであつたか、こゝでは、だいぶ、瓊々岐の命もローマンスを作られた。例のそれ、富士の女神、木の花の咲耶姫などといふ美人に出逢つたりなぞしたところだが、その所在は、高千穗の宮のありかを定めるのに、是非研究しなければならないので、私も苦心してゐるわけだが、笠沙といふ言葉から考へても、これは沙漠の沙が風のために波立つて、その先がかたまつて、下が抉れて、笠のやうになつてゐる、それをとつてつけた地名ではなかつたらうか。沙の穗を略すなどといふ言葉が古事記にはよく出てくるが、それと思ひあはしても、何もこれは、水のなかへつき出した岬であるとのみ、きめるわけにもゆかない。

その昔、汗族——ジンギスカン、クブライカン、などのあの汗で、それは蒙古語——王といふ義である——の居たところは、今の、カラコラムといふ古跡のある邊であつたらうといふ

ここらは[illegible]カツ[illegible]こ[illegible]れは[illegible]カラコラムで、これは[illegible]石の[illegible]といふ高原であるが、――もしかしたら、この邊に、[illegible]つたかも知れない。なぜならば、勿論、ここへ汗族が[illegible]行つ[illegible]都、ウイテールを築いたのは、紀元後八世紀の頃で、時代もおつと違つてはゐるが、そこは、シベリヤ境ひの大山脈から分れて出て、カアソガイといふ山頸のなかの、オルコーンといふ渓谷に添つてゐて、南に渺たる沙漠を見おろし、少しく北に寄り過ぎてはゐるものの、丁度、古の中央に當つてゐて、代々王者たるべきものの、住むに適した地の利を占めてゐるところださうだからである。

そこで、即ち、こゝは朝日のただ[illegible]國、夕日の日照る國なり。ここぞ、いと、よきところと詔りたまひて、邇々藝の命は、従來、山の上に住んで居られたのだからして、またもや、この笠沙の岬の後ろの方の山の上へ、底つ石根に宮柱ふとしり、高天ケ原に千木たかしりてましましき、といふわけであつた。

年代は西暦紀元前一千二百七十年前後、その頃の支那はまだ殷の紂王なぞといふ暴君が、妲己なぞといふ美人の膝にもたれかゝつて、酒池肉林長夜の飲を催してゐた時代で、今の朝[illegible]な[illegible]

ここ[illegible]の[illegible]をみたが[illegible]紀元前一千[illegible]十一年[illegible]後た[illegible]の頃の朝鮮を通過するに[illegible]の[illegible]の國の[illegible]の頃に[illegible]易、八卦の法も完成されたことをお[illegible]相談してゐると、どうも前宮に今の[illegible]うかと思はれる。その頃の北京は、[illegible]てくる、中央亞細亞地中海の水がまだ[illegible]島のやうに見えたかも知れない。支那大陸は、丁度[illegible]の頂にある通りに、浩々たる洪水、方に[illegible]懐み陵に襄る。浩々として天に滔る、といつたやうに、まだまだ水につかつてゐたに違ひない。支那の歴史に、この[illegible]ら、大洪水だ。

但し前宮の[illegible]は、高天ケ原の[illegible]したら、もとをたゞせば一族の分れであつたにちがひない[illegible]の海の前宮は、波の底でなかつたことは[illegible]

沖つとり　かも着く島に我がいねし　妹は忘れじ[illegible]とに。

と、その[illegible]へ行つた[illegible]

邊に沿つた、それを見てもわかることである。

これから、なぜ、龍宮は今の南島の邊であつたらうかといふと、古事記のうちに、一つ見のがすことの出來ない言葉がある。これは、海阪といふ語である。亞細亞地中海から渤海へ出るのには、その頃澤山の海阪があつたに違ひない。今の黄河なぞは、その海阪のうちの親玉であつたらう。豐玉姫は、赤ん坊を産むところをのぞき込まれた耻かしさに、姿、つねは海辻を通してかよはむとこそ思ひしを、吾が形を伺見たまひしが、いと怍かしきことゝ申して、即ち、海阪を塞きて返り入りましきと、古事記には書いてある。

ことに、穂々手見の命が龍宮から上つ國に歸るときに、和邇に乗つて歸るといふことが書いてあつて、そのうちの、一尋和邇は命を乗せて一日に上つ國へ到着したといふことであるが、和邇といつたとて、それは何も鰐魚のことではないと私は思ふ。ワハニは、ヴェデックでは、曳く人といふ意味で、その語幹は、ワハである。これは、導く、運ぶなぞといふ義だ。河水に沿ふてものを曳くといふ意味も含まれてゐる。つまり穂々手見の命は、曳船にのつて、一番直徑の短かい河流をさかのぼつて、上つ國へ歸られたといふことなのだ。して見ると、龍宮が、その頃はまだ黄河の水に吐き出された眞黒い洲のなかの、島の上にあつたのだといふことは、もう議論の餘地のないところである。

それでは、豐玉姫が、赤さんを産むときに、八尋和邇になりて這ひもこよひき、といふのはどういうわけだと疑ふ人があるかも知れないが、それは、お産をするところを形の上から見ていつた言葉だらうと思ふ。日本語にも、わなぐといふ言葉があつて、これは正に、女が内わに股をひらくことをいふ。赤子なぞが足を曲げながら歩むさまを　わなわな歩むなどといつたやうに覺えてゐる。いくらお産が重くつても、乙姫さまが鰐魚になるわけがないではないか。ことによつたら、この八尋和邇といふ言葉と黄河との間に何か比喩的な關係があるのではないかと思ふが、よく考へて見なければならないところだ。

かれ、日子穂々手見の命は、高千穂の宮に五百八十年ましましき。と、こゝは、昔の國學者は、日本大隅の國、高島山と定めてゐるが、それは、高天ケ原民族が日本へ渡つて後、あの地方の山に立て籠つたには違ひなからうが、この民族は移住したその場所々々へ、以前ゐたところの名をつけるので、後世のものが、取り違へてしまふのは無理のないわけである。日子穂々手見の命がいくら長命でも五百八十年も活きてゐることはないのだから、こゝには長い間の記錄が略されてゐると見なければな

らない。なぜ[illegible]

ることである。

で、豐玉姫の產みまつつた。彦[illegible]不合の命には、お子様がお四方あつて、そのうちのお一方は、西暦紀元前六百八十年の頃、日本へお渡りになり、殘りのお二方のうち、御毛沼の命は、波の穂を踏んで常世の國へお渡りになつた。常世の國といふのは亞細亞の國のことであるといはれてゐるが、私はさうは思はない。ヨといふ語は、すべて陰の力、ことに、西の力を意味してゐる。それ故、この命は、沙漠を渡つて、ターキスタンの力へお歸りになり。稻氷の命は、御妣の國として、海原、即ち支那の力へおくりだりになつた。と、から考へなければ、高天ヶ原種族の分布したありさまはわからない。

古事記も中卷に入ると、様子がぐつと變つて來て、混雜もくはしくなつてくる。さうしてそこからが今の日本の國土の上の事柄だと思はれる。尤もその土地々々の名は、前にもいつて置いた通り、あとから新しく移住して來たものがあると、前の名は變つてしまふから、決してあてにはならないのは、いづくの國も同じことで、このアメリカの大陸にも、さうした例は澤山ある。たとへて見れば、レニヤ山だ、昔はアメリカ印度人の言葉で名づけた、タコマ山であつたさうなものだ。しかもそれは

[illegible]

[illegible]氣になる地名のあるのは[illegible]。現に、スポーケンの高原には、エイトミリオンゴッヅといふところがあるさうだが、その昔、天高ヶ原の神々が、シベリヤからベーリング海の水を渡つて、アメリカの大陸の力へまでやつて來たのかも知れない。今でもアラスカの土人サイワシは、カヤークといふ小さな皮舟に乘つて、カムチヤツカの力まで行くさうだから、上代から亞細亞大陸との交通があつたことは爭へない。若し、風[illegible]、紛地容貌をして印度人の娘の盛裝したところでも見さしたならば、これは神代の風俗に違ひないといつて、袂をこぼしたかも知れない。あの勾玉や管玉をかけて、髪を、耳側とでもいふだらう、左右に分いて、赤く染めた幅のひろい皮の帶で角結しをした様子は、見るものをして――若しもそれが日本人なら――我が民族も、その昔は、あゝであつたかと思はないわけにはゆかない。

なにしろ、その頃の高天ヶ原人種は、今日の日本人種よりも餘程大國民的であつたらしい。今日の日本と來たら、日には、[illegible]は賦し、汽車はのろし、といつて[illegible]東京と大阪の間に[illegible]

にあつまつて、田舎には人の影法師も見えなくなる。で、まんべんなしに人間を國中に住まはせるためには、汽車はなるたけのろくしなければならない。なか〳〵日本も考へてゐるが、海外諸國との釣り合ひがそれではとれない。日本の農場へ機械を入れて、アメリカのやうな大農組織にして、一日に十里の田地を耕せば、その日のうちに日本人の半數は失業者になつてしまう。まんべんなく皆の口へ飯粒を抛り込むには、文明の機械は農業には禁物だ。それでは諸外國と産業上の能率を爭ふことは出來ない。職工だとてその通り、仕事に手間がかゝつたからとて、高くすれば買ひ手がない。安くすれば飯が食へない。いくら日本人が總がかりで稼いでも飯が食へなくてはしかたがない。一事が萬事だ。日本はそれ故に行きづまつた。太古の祖先が、住んでゐた土地に水氣がなくなるので、中央亞細亞のホームをあとに遠征したやうに、今度は人間が殖えすぎて土地に仕事がないので、大和民族はそろ／＼島を出なければならない。

しかるにた、こいつに出られては大變と、睨んでゐるのが西洋人だ。日子穗々手見の命は高原の沙漠から東海の蓬來山へ降らうとして、高千穗の宮で五百年の日和見をして居られたが、今日の日本人はもう、その島で五十年と日和見はしてゐられない。年頃になれば娘は嫁に出なければならないやうに、大和民族も、次男、三男は、その島から出て、大陸へ遠征しなければならない運命を持つてゐるのだ。自然、内に居殘る長男には他から嫁を貰はなければならない。うんと持參の金をもつてくる嫁なと選んで貰ふがいゝ。その金は、のべ金でもかまはない。

さてそこでだ。これから結論に這入るのだから、大きくパラグラフを纏へて置く。

今迄、書いて來た過去のことを綜合して、私は高天ヶ原民族の將來を卜することが出來る。といふのは、大體この民族には目立つたいくつかの特長がある。で、それに就て考へて見た迄のことである。

第一にこの民族は最初から混血兒であつた。インドアリーアン族と、モンゴール族との血が混つて出來たのが、この大和民族であつた。髮の毛の黑い、目の黑い、モンゴール族を見てからひと、といつてゐたところを見ると、この民族は、始めは、髮の毛も黑くなく、目の色も茶色でなかつたものと見える。獨逸のスピーエゲルといふ語原學者が、ヴエデック、パラクリトは、後にあの中央亞細亞の北の方へ追はれて行つた、アリスケといふ古族の言葉から派出したものであると、說いてゐるさうだが、若しやそのアリスケ族が高天ヶ原種族ではなかつたらうか。若しさうだとすると、我々の祖先は、その始めは中

た中亞細亞の高原の[illegible]になつてゐる、インド、ア[illegible]のあたりに住んでゐたのであるといふことになつてゐて、從つて吾々の祖先がつかつてゐた言葉ともいふべき大和言葉に、現在の世界の言葉の總本家ともいふべきことにきまつて來るのだ。

だが今日のところでは、我々の今つかつてゐる日本語は、ウラル、アルタイ語族によつて養はれてゐたところの、インド・アリアン語が、追々變つて、今日のやうになつて來たのであるとしか說明は出來ない。聞くところによると、世界大戰以前に於て、獨逸のカイザーは自國の學者たちに命じて 日本語及び日本民族の起原をサイエンテヒックに研究さして、ジャパノロヂイといふものを作り上げたさうだが、それはまた世界に向つて發表されてゐないらしい。しかし、それが發表されたら、迷惑する國も二三ケ國あるだらうといふ噂だ。で、そんな噂はともかくも、我々のもつてゐる普通の知識で考へても、自分たちの國にある古い記錄や、それから自分たちの話してゐる言葉が、この民族ははじめから混血族であつたといふことを はつきりと物語つてゐる。思ふに、吾々の祖先は、支那人の所謂、紫髯綠眼の胡人と、その血を同じくしてたに違ひない。

第一に、この民族は 毛色の變つた女が餘程好きだつたと見えて、上代から、神々さまの結婚は、悉く 違つた種族の女と[illegible]

[illegible]ブロンド髮を自分の伊邪那美として迎へてゐる。さうして後に、その伊邪那美に逃げられて、猛烈な喧嘩をしたあげく、[illegible]までしてゐる。結局、[illegible]の軍勢に山の谷まで追ひ返へされて、伊邪那岐の命は、[illegible]の溪谷へ逃げ込んだ。今そこをヤーカンドの溪谷といつてゐるかどうだか、そいつは當にはならない。さうして、そこから、命は殆んどからだ一つで小舟にのつて、筑紫の日向の、即ち日當りのいゝ山裾の方へきはられた。察するに、筑紫の日向とよばれたところは、その頃、方々にあつたものと見える。溪谷から逃れて一度海へ出られた命は、今度はまた別な溪流の入口の淺瀨へ舟を着けられた。今そこをカシガールの流域といつてゐるさうだ。があいつもあまり當にはならない。しかし、昔の支那人は、あの邊一帶を[illegible]國と呼んだ。これは間違ひのないところだ。昔は、餘程あの邊は、つまり今の支那ターキスタンの山續きになつてゐる東南に向つた方は、土地がよかつたものと見える。

さてまた、須佐之男の命は、今のタータア族の祖先たちだらうと思はれる、大山津見の神の一族の娘、櫛名田姫といふアルネットと結婚した。しかし後になつて、この須佐之男の命には、[illegible]

方、即ち伊邪那美の神の國、根の堅洲國の方へ移られた。アテル海、黄海のある方を、根の堅洲國といつてゐるところを見ると、豐葦原の中つ國、即ち倭の國は根の柔かい沼國だつたといふことがわかる。やまと、といふ名の語原をまだ正しく置かなかつたやうだが、ここらへ一つ挿んで置かう。

そもそも、やまとに、倭の字をあてたのは、恐らく支那人の用例に習つたものであらう。大國主の神が沼河姫に寄せた歌のなかに、やまとの、一もと薄、項かぶし、汝が泣かさまく云々といふくだりがあつて、記の編輯者、安萬侶は、そこに限つて、山處といふ字を當てゝゐる。これによれば、やまとは即ち山どころといふ意味になつてくる。私には、なぜ、やまとを大和と書いたかその起りはわかつてゐないが、記の初めの國生みのところに、大倭豐秋津島を生みたまう。亦の名は天つ御虚空豐秋津根別といふ。といふ文句があつて、これによつて考へると、やまとといふ語は、こゝでは豐秋津島の形容詞として用ひられてゐるのであるが、思ふにこれは、まと、といふ語に重きを置かなければならないのではあるまいか。やまと、は即ち纏なといふ意、間かといふ意、股といふ意で、陰といふ意味もそこにある。サンスクリトではマトリといへば母の義で、日本語では、ひといは父、ふたりは息子、みたりに即ちマトリで母に當つてゐるのである。ふたりは嫁たる、や、といふ語は、こゝでは單に語調をそろへるための冠字にすぎない。だから、おほやまと、とよあきず島といへば、産み出だされたるところの豐秋津島、或は、完全にクリエートされたところの豐秋津島といふことになるので、大和といふ漢字の意味は、まさしくそれに嵌つてゐるのである。だが、これは私一人の考へだからあまり當にして貰つてはこまる。

話が大分それてしまつたが、神代の歴史を考へると、戰爭ごとの數よりも、神さまたちが他の種族の女をよばつてまはつた話の方が多いやうだ。大和民族は昔から、ソフト、デプロマテストだつたと見える。序でだから、よばひといふ語の語原を一つ正して置かうか。よばひは、なにもくらくなつてから越中をうしろに引ずる意味ではない。ヴエデックでは、ヤバーといへば、つまり關係が兩性の間に結ばれたことをいふのだ。日本聖語でいへば、御婚あたはしたことをいふのだ。瓊々岐の命は、木の花の咲耶姫を、たゞ一夜御婚あたはして、姙娠された咲耶姫の貞節をうたがつた。咲耶姫、一宿にや姙める、是は我が子に非す、必ず國つ神の子にこそあらめと詔りたまふて、姫をすつかりこまらした。故に後來日本の女は、ひとよび子を生まないやうにといつて、婦人の前には必ず富士行者に祈らせること

になつてゐたといふ[illegible]、[illegible]

ふしたやうに見えてゐる。

木の花の咲耶姫も、やはり、タータア族の娘であつたらしい。後にはこの種族は支那へ侵入して、今の北京のあたりへ栄いた。しかしそれは後のことで、咲耶姫の時代には、シベリヤの方からゴビの西北へかけて住んでゐたものと見える。ロシヤの方へ移り住んだこの種族の末孫は、今このアメリカへも来てゐるが、その娘なぞは、黒目がちの大きな目に、なんともいへない色気を含んでゐて、色は白く、髪は黒く、顔がまんまろくつて、たかく〳〵どうして美人がゐる。これは今の日本人の遠い祖先の母方の血を分けた民族であるのだ。

第三に、この大和民族は、その昔から、自分の立ち場を他に譲歩することはなかなか上手であつた。敵と見ると例のソツトデプロマシイでその敵を味方にして、さうしてその味方に自分の領土を譲歩しては、また別な地方をめざして自分たちは進出した。戦争には強かつたので、それだけ心に余裕をもつてゐたものと見える。然しいくら前の方へ進んでも殿後を他にくれてしまふのだからして、領土はさつぱり殖まらずに、とう〳〵今の絶東の島国へ入り込んで、一進も二進も動きがとれなくなつてしまつた。もう他に譲歩しやうにも譲歩のしやうがなくなつ

た、こ[illegible]

しようとする[illegible]

になかなか[illegible]いて、[illegible]の技術の一[illegible]

して、その[illegible]上手[illegible]といふ[illegible]たい。[illegible]たい〳〵ただ

第二回目の[illegible]かくるぜ。[illegible]のたのはい

いか、いざこゝが川中島といふ時に、[illegible]おいと持ちな、[illegible]

の目に[illegible]が這入つてゐるぜ。[illegible]おや、[illegible]ないやうにかり[illegible]と

打ちにやられたつては、[illegible]マット[illegible]

緒にあるやつよ。

さて、さういふ話に[illegible]目に[illegible]して聞いて、[illegible]は、高天ヶ原民族に、最初、支那へ入り込もうとしたもの[illegible]うな。しかしその時支那はもう[illegible]以後の事で、[illegible]文化に浴した人間が住んでゐたのだから、[illegible]領するといふわけには行かなかつたものらしい。だが、[illegible]原族とは、切つても切れない血を分けた大陸[illegible]遂ひには支那全土を征服してしまつたのである。[illegible]も[illegible]に近ついてゐるが、[illegible]となつて、その大陸[illegible]族が支那を征服した[illegible]を[illegible]へ[illegible]その[illegible]

姫から母方の血をうけて、その頃、葦原の中つ國に於ては勢ひ並ぶものもなく、高天ヶ原の神々も、この一族には手こずつた。この族は代々、宇迦の山の山本にゐたと記には書いてあるが、宇迦はどうも汗族の都、ウイガールにあまりよく音が似てゐる。で、宇迦がウイガールであるかないかは分らぬとしても、この大國主の御族が汗族の祖先であつたことだけはたしかである。して見ると、後には支那四百餘州を横領した元はやはり我々とは御親類筋だつたといふことになつてくる。

クブライカンのクブと云ふのはターク族の意味であるが、日本語でいへば、頭といふ意味だ、記にも、天つ久米の命は頭椎の太刀を取り佩きなぞといふくだりがある。だから、クブライカンを日本語に譯せば、國の久布羅比之神つまり大國主の神といふ意になるのである。この久布羅比の神こそは、日本人が夢にもその名を忘れない、あの恐ろしい元主、忽必烈なのだ。弘安四年夏の頃に日本へ攻め込んだ彼の軍は伊勢の神風のために吹き飛ばされてしまつた。須佐ヶ男の命の血統だから天照大神にかかつては、どうも、かなわなかつたと見える。しかしその頃、西域に於けるクブライの勢力といふものは、北は今のポーランド、黒海の沿岸から、南はペルシヤ、アラビヤ、西にかけてはアルメニヤ、ビザンチユームを席卷してクブライ自身の大きな印を押した文書を、時の佛蘭西國皇帝にまで送する程であつた。

しかも、クブライは、その西域の兵を徴發して、支那へ攻め込んで、南宋の四十餘萬の大軍と戰つてゐる。支那はその頃、最早、宋紀もデクラインしてゐたが、それでも文天祥などといふ豪傑が現はれて、その毛色の變つた元の軍勢をなやました。だが、とう／＼宋は亡びた。天祥泫然として涕を出して曰く、國亡びて救ふ能はず、人臣たるもの死して餘罪あり。なぞといふ有名な文章が史略の終りの方にあるのを今でも諳んじてゐるが、負けた宋もなか／＼どうして豪かつた。

その時にくらべると、東洋諸國も國運は移つてゐる。新日本、若い日本と叫んではゐるものゝ、玉手函を開ひて見れば、我が國の若かつたのは遠い昔の事である。浦島の夢がさめて、故郷の亞細亞大陸を眺めれば、血を分けた親戚らしいものもゐない。しかし氣を落ちつけて考へれば、大亞細亞は開闢からまで、吾々祖先の住んでゐた國土なのだ。日本人はその島國だけが自分の母國と思つてはならないのだ。

第四にと、この民族の特長を擧げてくれればまだ／＼あるが、もう書くのも疲れたから、このくらゐにしてよして置く。ただ、今まで擧げた三つの特長のうちでモンゴールの血が多分に

[illegible]

[illegible]

だ。西陣人に[illegible]同好の[illegible]はひつてゐる。[illegible]

結成して来た因縁で、この同人は[illegible]

る。兎角毛色の変つた文明に[illegible]つたけになつて、そのために目[illegible]だなア。

[illegible]

——了——

太夫道中の研究

蕉魚

見ないもの馬鹿なら、一度見るもの馬鹿だと云はれる島原の太夫道中は、一度だけ見物すべきものなのであらう。毎年嵐山の花の噂が高くなる頃、お上りさんで賑はしい都の春を彩色する祭りでもあるのか。京の年中行事として太夫道中が廓内で演ぜられる。其の當日は四月廿日と定められ、若し雨天だと順延になる。それ故に雨勝ちな年には此の奇麗な年中行事を諦めることもあるさうだ。去年我等が態々見物に入洛した時にも、午後の二時に今まで花曇りだと思つて居たのが、ポツリ〳〵と落ちて来ると、芋を洗ふやうに押込んで居た見物が、雨の中を右往左往に廓内から出て往く、其のあとに見返せば、[illegible]を副へ物にした古木の樹を前に、刻る籬らしい心持に[illegible]る楽の大門に、今日太夫道中興行いたし候といふ[illegible]と書き改めたのに替へてあつた。[illegible]に[illegible]日に入[illegible]いて。再び島原へ出掛けた。

昨日も大門を締め切り、潜りからの出入なのだが、[illegible]限り潜りを閉ちて、一切往来止めにして了ふ。今日[illegible]で見物人は正午と共に十時前に往かなければならぬ。[illegible]の中の道筋の両側の家並の前に、[illegible]の上に[illegible]

うに仕切つた低い遮欄が設けてある。左右から此の遮欄が設けられたので、道路の幅は四尺ぐらゐに狭ばめられた。早朝から來て筵一枚に七八人も追込まれた群集は、携へた辨當も其處で食ふのである。さうして此の遮欄の中には老若ともに婦女が多く、孰れも歸りの近い市外からの見物らしい。それから横町毎に竹柵が設けられた物々しさには驚かされた。

太夫道中の道筋は、事務所（檢番）を出て、大門の通を上へ、左へ廻つて揚屋町に入り、角屋（揚屋）の脇の空地に作る臨時休憩所に溜り、それから隨宜に面々の馴染の茶屋へ往くのだ。例の八文字を踏んで通過する道程は、檢番から臨時休憩所まで、約二丁もあらうか。

道中開始に先き立つて拍子木を廻す。我等の見物した廿二日には、午後一時五十分に一番拍子木、三時五分に二番を打ち廻つた。此の兩度は羽織を着た若い者であつたが、三時卅四分になつて三番を打つたのは立付け姿の男であつた。三番の拍子木を聞くと、間もなく檢番の横町から練出して來る。大門を背に兩向きに行進が開始された。

先登には造り物の花籠を擔いた若者等が立ち、其の次が一振り細一といつて、太夫の中で容貌の美しい可愛らしく見へる者を撰んで、裲襠姿でなく振袖で出る。其の次から一番二番と順位を算へ、最後のを「終止め」と云つて、榮譽な任務とする。我等が見た終止めは若吉野といふ太夫であつた。

太夫道中の人數は近年十五人に極り、島原には大抵太夫が卅人内外居るから、其の半數づゝ此の日の行進に出る勘定だといふ。島原で太夫道中を毎年一回の定例にしたのは、何時なのか聞かなかつたが、云ふ迄もなく明治になつてからのことであらう。太夫といふものゝない江戸の吉原にしても、仲の町張りのオイランなる者が常に八文字で行歩して居た。まして太夫の亡びない島原では、揚屋へ往來する八文字は日毎に見られた筈だ。但だ太夫總員の半數を縦列にして一時に見ることは無かつたらう。それは年中行事になつてからの盛觀に相違ない。

芝居のやうな行装

二人禿に引舟を從へて悠揚に眼前に現はれた太夫は、耳に慣れない太夫といふ名稱ほど、目に珍しくはない。舞臺でも見て居れば、錦繪にも殘つて居る裲襠姿、それよりも他の遊女と違つて、彼の高級遊女だといふことを、際立たせるものはお齒黒を塗けて居るくらゐなものだらう、勿論今日群集を引付けたのは、彼の容色や衣裝ではない。太夫道中、八文字と呼ぶ例の行歩を見やうとしての見物なのだ。

八文字を踏むといふ足の行歩は、太夫各自が一町を踏むのに二時間を要する、道中する太夫は前夜の十二時に検番へ集り、直ぐに顔を拵へ着附けを済し髪を結ぶ、徹夜で騒いで、當日の正午に漸く第一番を勤める太夫の身拵へを畢る、續いて第二番第三番に出る者の仕度を濟す、其の間が凡そ三十分づゝはある、それで行進する太夫と太夫との間が都合の好い距離が保てるといふ、如何にも悠長な仕度であるが、それで適當に用辨されるのだから、八文字の行歩の氣楽千萬なものなのが知れやう、それだから幾人かの太夫が臨時休憩所に先着した時分に、未だ検番で髪を結つて居る太夫がある、勿論其の間も行進中の太夫があるので差支はない、最後の「傘止め」は全身に夕日を浴びて、光明赫燿たる體で出て來る、「傘止め」の後方には検番の強力な男衆が、道欄に狭ばめられた道幅ほどの青竹を横に持つて勢ひ込んで往く、是は「傘止め」が通過すれば太夫道中の終了たのだから、總べての見物が臨時休憩所に集つた太夫の群を見やうとして其處へ殺到する、横町毎に設備した竹柵は此の際に[illegible]、若し「[illegible]」へ一定[illegible]掛けて来る群衆を[illegible]しなければ、[illegible]必ず[illegible]されて了ふのだといふ、併こそ[illegible]は群衆から此に力を入れた凄しい様子を見せた、我等は[illegible]に[illegible]い押返しを[illegible]つた青竹を想起した、



天和頃の太夫　師宣筆

八文字の内外

錦繪に殘つたのや、俳優の扮装する傾城姿は、其の通りであつても、八文字を踏んで行くのは、京都の年中行事に於てのみ親しく目撃される、八文字に二種あつて内八文字を島原風といひ、外八文字を江戸風といふ、今日は内八文字の行歩を見物するのだ、同じやうに爪先を詰めて踵が開く八文字型でも、足を外から廻し込むのが内八文字、股を割つて踏み出すのが外八文字なのだ、内八文字は廻し込んだ引足をせずに二の足を踏み出すと、姿勢が崩れる、内八文字には必ず引足が附きものだのに、いま目の前を練つて往く十五人の太夫の中に、引足の心得のある者は二人しかなかつた。それも其の筈、太夫の

整つた者は一人もない、孰れも腰が据らないので皆浮いて居る、引足の心得がある者さへ腰がブラ〳〵なので、姿勢は引足の心得のない者と御同様だ、昔は正面を切つて脇き眼をせず、笑ひ顔を厳禁にしたといふのに、今日の道中は妙な流眄もすれば、嫣然たる一笑に嬌艶を振蒔くのが却つて得意らしい、氣の毒な太夫の今昔、ブラつくのも決して腰だけではなからう。

皆つれ〳〵に「揚屋の昔を初めて、身仕舞に帰る道中ゆたかにして、左右の對の禿、歩みながら眠れるほど、静に位を取つて淀い處なく」といひ、好色貝合に「前へ行くやうでも、一町のうちにて十間は跡へ戻る算用、お出迎しと待つ上からは、悉皆蜻蛉の江戸行也」といつてある、内八文字は斯ういふ特殊な行歩で、極々沈着なものであるから、腰のフラつく爲めに一歩々々動揺して、態度を不安にすることは何よりも禁物で、全體の調和は忽に破壊されて了ふ、胸算用に太夫と一般婦女とを比較して、別に變つた事もないが、起居が危うて、道中の腰がふら〳〵するだけといつたが、我等の眼前を行進する十五人の太夫は、夥しく身體が動揺して、昔見た山王や神田の祭禮に出た花車屋臺の上の人形のやうだ、其なら今日俄に何處から連れて來た婦女にも八文字が踏める、餘りに素人臭く、太夫らしくなさ過ぎるが、それも其の筈、今日島原で一人として八文字の稽習をした者はない、昔に島原は云ふに及ばず、太夫のない江戸の吉原でも、相應に稽古をしたのである、「女郎は道中が第一じや、足つまをそろへて持、此やうにあるいたがよい、さすが太夫の其風は今にすたらぬ見事也、さああゆみやれといへば、おたかは小づまを取、かゝ様かふ〳〵と、道中をけいこする」(傾城曉の鐘)や、「人の來ぬまに稽古せう、太夫道中揚屋入り、こんな物かと、小づまとり、踏のどちやうの八文字、きー文字もかにの横、ふぐい機嫌、猿はしい、おゆむとすれどさぐり足、おかしくも又おはれなり」(宮薗、里王子源の八文字)等に依つて、彼等が練習したことを顯著にする、

貞享元祿の時世粧

浮世草紙が盛に行はれた時代には、闊歩した婦女が好んで派手やかな遊女風を移し、往々にして八文字の行歩を眞似る者があつた、腰元に「小づまたてかゝけ、ぬき足のまねして、腰をよおらす姿」(五箇津餘情男)といふのがあれば、娘御にも「居腰蹴出しの道中」(一代女)がある、西鶴が美人の條件として、胴間常の女に勝れて長く、備つて腰据りて押立ゆかます といつたのも、柳里恭が八文字の一格を放れ、生れのまゝなる蹴出し歩み、腰のすはりは位ありと感服したのも、教養に得た

ない天賦の優越した姿勢の讚仰なのだ、從つて惜[illegible]は、生れながらの出尻はふらねば張合なく、鰐足かくす心からは、八文字ならでは歩行れずと罵つた、けれども新水代藏は、八文字をならはすに鰐足にあるき、すわらぬ腰をそりかへりと敎へ、佐渡島日記は、女形風は申すに及ばず、心をつくすべきなり、立ち身に成り候時は鰐足になるべし、腰ぼそに裾びらきよしとも諭した、

八文字のみならず、本邦婦女の行步に姿勢を整へたい希望から、切に腰の据りに腐心し、無理にも內髃になり、勉めて鰐足になつて、外國人から畸形だと云はれた、其の根本は內八文字の態度から起つたので、化粧秘傳が足のはこび賤からず狹からず、腰をつよく、たをやかに楊柳の春風に靡くが如くすべし、身もすこしそりたる心持なるべきかと、折衷妥協した注文を提出し、それが極めて適當なものに間かれもしたのである。



貞享元祿頃の太夫　一蝶筆

江戸風の外八文字

日本[illegible]ゆたかにて共におたなき風ぞ[illegible]しとあるのと、[illegible]風流に出江戸の巻の傾城の道中、都とは一風かはりて、はたはたと足どりとあるのを併べて見て、直ぐに京とは違つた江戸風の八文字があつたのに氣が附かう、其の模様は新吉原つねぐ草にある。

客あれば身拵へして銘々好の衣裳づくし、小紫高そめて江戸鹿子といふ物、世にはやりきり、紺蹴出し外八文字、居ていねり腰、足を道中とて見る人、武藏野に山の如し、宿より揚屋町まで、わづか一丁たらずの所を、此ごとく物靜にもあゆまるゝ事ぞ、秋の日には一時あまりもかゝりぬ、氣の短い客を亭主も慰めかねる程の際入なり、此道すがらの姿を見て、諸人思ひつくなれば、大事に掛らるべき戀のはじめ也、緋縮緬の內衣翻るやうに仕掛けて、白き足首ちらりと高もゝの移り見し時は、關目首切らるゝ鉄にても手前にあらば、違ふ事なかし、

內八文字は半圓を描いて足を廻し込むのだが、外八文字に踏み開くのだから股が割れる、緋の二布に紅のオチリたは[illegible]、ヒ

ラくしないやうになつて居た、それが如何にも返りの好いやうにして足の運びに依つて、高股を見せる仕掛けらしく見へたかも知れぬ、元祿といふ時世が淫靡な頃だつたので、吉原も大分ネバくしたのかも知れないが、一體外八文字は男性らしい豪濶な行歩で、緋縮緬とは調和しないものなのだ、

芝居の方では承應明暦の際に多門庄左衛門が、旗本奴の風俗を寫して以來、村山四郎次中村七三郎篠原九兵衛鎌倉團右衛門嵐三衛門と次々の俳優を名高くした、江戸で丹前、京で六法、大阪で出端と云ひ囃した道の行歩と同じく、大に威張つた武士の往き方を摸倣したものである、内八文字は慎重なもので、恐らく公卿衆の練足から轉化したのだらうが。外八文字は濶達な擬勢を見せたもので、内股が見へるの、二布が翻るのと、女らしい遠慮をする筈もなく、湯屋覗きでもしさうな根性で見るべきものではない、

神田雉子町堀丹後守屋敷前の攝津國風呂に居た湯女の一人が、女歌舞伎が禁止された後に、彼の身振を眞似て、玉ぶちの編笠に革付袴、木太刀の大小を帶し、濶達に男粧して、其處へ集まる若い旗本衆に喝がれて名高くなつた、其の湯女が承應二年八月から吉原の太夫になつた丹前の勝山である、當時に丹前風といはれた風呂屋通ひの若い武士の風俗に擬粧して居た湯女が、吉原の太夫になつて初めての道中を、廓の内外で齊しく目を簇て丶居た、太夫は道中する習ひであるが、湯女には例のないことだ、太夫が誰彼なしにする道中と同様なことをしては、天晴名物女の名折れになる、如何に目覺しいことを仕出すか否と、それが江戸中の大評判になつた、其の時勝山は大道狹しと外八文字に仲の町を濶歩したのである。其の威容に驚かないものはなかつた。殊に古參の太夫等は新參者が自分共の慣れた道中を何程拙く眞似るのかと、笑ふ積りで眺めて見たのに、是は又た爽快に颯る新しい足を遣つて除けられて仰天するより外に仕方がなかつた、勝山は一擧して廓内を制壓するのみか、殆ど天下の耳目を一新した、丹前役者の多門庄左衛門と奴傾城の勝山とは、恰も同時であつた、しかし孰れが先か知れぬ、或は庄左衛門が勝山を眞似たともいふが、俄に肯定すべくもない、只だ双方に其の第一人者であるのは疑はれまい、承應四年と云へば勝山が吉原へ出て滿二年になるかならぬかであるのに、島原へ同名の遊女が現はれ、『東には世に勝山のあるものを此名をかへてまけ山になれ』と嘲罵されて居る。色道大鏡が近世目のあたり見及びたる奴には、江戸の勝山、京には三笠藏人、大阪にては八千代御階大隅等也と名を連ねてあつても、右勝山の後塵を拜して起つた傑輩である。

勝山が外八文字に工夫した、其の以前には島原も京町も吉原も皆一様に内八文字なので、島原風も江戸風もあつたものではない、勝山が出てからも下り女郎といつて、京から吉原へ輸入した遊女は内八文字であつたらしい、けれども島原や新町へ奴風な遊女が輩出して、張り臂の外八文字が江戸だけでなくなつた、其處で島原風江戸風と八文字の内外が對立することになり、吉原の廓内には内八文字が消滅した、

散茶の朧朧

寬永度には旗本奴のみでなく、大名奴も町奴も中間奴もあつたが、著名なのは旗本奴で、最後まで殘つたのは中間奴である、大名行列の先頭に槍持の張り臂　太宰春臺が歩士以下奴隷の輩まで、左右の手を展べて高く掉り、足を舉げて地を踏み、傍若無人なる體をなすと叱つた。松平伊豆守信興も江戸廻りにて大名の道具持、鑓持の奴などゝ手を振り、足拍子ふんですれども、五里と振り續く事はなるまじ、生れも付かさる足拍子を踏むなへ[illegible]、[illegible]の時とだけ振るので、[illegible]長い道中を幾日も[illegible]續けるのではない。威嚴を見せたい爲めに脇へは手をくけ込み・袖口へは針金を入れて仕立てて済るほどな旗本奴は、自身のみならず、若黨中間にも威儀を示すために格別な行歩をさせた、それが久しく大名行列に殘つたのである、



寶暦頃の太夫　政信筆

吉原徒然草に奴の眞似とて、道中を大またにありかば則ちやつこ也と云ひ、又た八文字ふり出したる道中のしこなしともある、奴を學んだ六法は、多門庄左衛門風に右衛門等にしても振ると云ひ慣はした、女中は門手形が入る事なれど、男と生れしみやうもんには、中間の御番所の前をば、やつこをふつて一里半（風流兵竹男）、誰でも奴を振つてと云へば威張つて歩行するといふ意味に云つた、又た振り込むと云つても同様に通用した、さて此の振るといふ言葉から面白い話を生じて居る、遊女が客を失敬するのを振るといひ、失敬される

のを振られるといふ。遊女が仁雄ひするのは、彼の力味だとも威張つたのだとも見られるから、其處から意義を轉じたとも云へやう。

寛文八年の三月、茶立女といつた私娼五十餘戶五百十二人を、新吉原へ收容したので、郭內に伏見町堺町といふ町名が二つ增加した、此の私娼から公娼になつた遊女を散茶と呼んだ、それを異本洞房語園が說明して、意氣張りもなく、振らずといふ意にて散茶といひけり、其は吉原遊女共が、戯に散茶女郎といひしが、云ひ出しにして、今に散茶といひもて來りしなりとある。元祿の細見にも散茶は第三級の遊女の名稱として書かれたが、本來は私娼から公娼になつた新しい遊女を、先から居る遊女等が罵つた言葉なので、太夫格子局などゝ並べて遊女の階級に呼ぶべき名稱ではない。さうして散茶といふのは洒落なのだ、常用の煎茶はふつて出すのとふらないのと二種あつて、ふらない方を散茶といつた、其處で振らない女郎を散茶女郎といつたのである。其の振らないといふのは客を振らないことなのか、野傾色競馬（寶永五年版）に、當代はやらぬ振などゝいふしかたか、散茶がふつては、餅屋の看板出して、膃肭臍を賣るやうなものとある、此の譬喩が如何に愛嬌ではないか、是は慥に振らぬといふことを客を振らない方に解釋して居る、延寶六和のものにも同樣な解釋で、しかも振られたのを不審がつたのがある。其の後のには尙更澤山に散茶女郎に振られた話が見える。何にせよ散茶女郎は客を振らないからの名稱だと解釋された、其の方が娼家の爲めに利益があるから、江戶で最も宣傳に上手な吉原だけに、是非さう解釋させるやうにも仕向けたらう。

故參の遊女が私娼出身の新參者、しかも階級の低い散茶女郎を、客をふらないといつて嘲つたらうか。さうした洒落れたことの出來る僻輩でないといふ時、權威ある自分らが客を振るのを標榜することにならう、假にも情けの道を生命とする筈の遊女が、何も彼もない只だ振り附けるだけのものになつて好いのか。遊女も高級な者ほど苟且な消閑の一言半句も世間に傳つて、其の毀譽褒貶が忽に自身の全盛に響應する、それ故に怜悧のみならず機轉を第一とした。平常の動作、特に言語を談笑の際に注意した樣子は、時々の評判記、浮世草紙の上でも明白である。それが如何なる場合にしても、お客を振るのが、我等の權威だぞといふ意味の發表をしたとは思はれぬ。だが振らないのに相違もない。散茶は階級が低いだけに、ズラリと並んで店を張るのだ。客をば直ぐに二階へ迎へる。彼等は太夫格子のやうに揚屋で客に接するのでない。從つて道中といふこともない。廓名物の八文字とは全く沒交涉だ。我等は振らないといふ

のは道中しないこと、思ふ。客を振らないのではない。道中を振らないのである。故參の遊女が振らない人達を散茶女郎といつたのは、如何にも洒落れた嘲りなのだ。云ひ替へれば彼等は道中をしない張り店をする女だといふので、散茶の低級なことも含蓄されて居る。勿論ふつて道中をする高級遊女は意氣も張りもある權威者である。權威のない散茶女郎には道中もなければ、意氣も張りもない。その位置から廓内を我が物顔に八文字に濶歩もされぬ。客を振るといふことが意氣張りから出るために散茶の解釋に紛れをも生じる。實を云へば太夫格子にも客を振らないのが居た。散茶にも客を振るのが居た。客について振る振らぬを看板にするのは嘘である。嘘でも振らないのを散茶といふ新しい階級の遊女の看板にさせたいのは、娼家の亭主だけだらう、振らないといふ言葉を曲解する方が利益だから、無理にも道中をしないといふ意味を



安永頃の太夫　春章筆

引込ませる。しかし道中をすると、[illegible]ない、八文字を踏まねばならぬは確に看板だ。これに依つて[illegible]ふに高級遊女として何程八文字が大切であらう。看板だから立派な上にも立派にしたい筈だ。此の看板は太夫がなくても。尚ほイランの外八文字に依つて吉原に殘り、江戸の高級遊女たる權威を示してゐた。それが明治に入つて遂に消滅して了つた。それでも芝居の舞臺にはと思つたが、最近歌舞伎座の助六で、梅幸の揚卷、福助の白玉を見て失望した。さうすると怪しからぬ内八文字にもせよ、島原だけに京都風の高級遊女の俤が殘つて居るのだ。

痕跡もなくなつた外八文字と心細げに見える内八文字とは、足の運びの違ふやうに其の氣象に著しい相違を持ちながら、扮粧に於ては全く一致したものである。

近世婦女粧の基本

遊女には美人を集め、太夫格子は其の粹を拔いた　其の遊女に對して若衆歌舞伎、野良歌舞伎の俳優は、元祿前後までも人間美の競爭を絕たなかつた。古い所は措いて江戶時代に遊女の扮粧の變遷は實に夥しいことである。思ふに人間美競爭に刺戟された結果も多大であらう。其の扮裝を眺めて　總べての變遷が概して身長を增大することに傾いて居るのを見逃せない　美人の面型にも時々の流行が伴ふ、瓜實顏が好まれる時には瘦身な丈高い幹軀が釣合ひ　丸貌が喜ばれる時にはポチヤ〳〵した小作りが調和する、それ故に面型の流行のために　自然と美人の身長も時々に變つて往く。それに拘らず遊女は扮裝に依つて丈長くならうとのみする　美人を寄せ集める筈の廓内に、斯うした傾向が一定して了ふのは何の故だらう　時々の世間の好みと隔絕するのを憚らないのは不審である、世間の好みと距りがあつても、一般の婦女は競つて傾城の風俗を移さうか　俳優の扮粧に倣はうかと焦つた。人間美競爭に遊女が破れた（此の事は毋の考を發表してあるから爰では絮說しない）後は　漸く舞臺から時世粧が專ら採擇されるやうになつた。

舞臺上の扮粧、俳優術に依つて生れ付きのものより何程美しさを增すのであらうか、近來女形の湮滅から、女優を養成して代用しやうとするが、其の不成功の第一は女優の身長の乏しいことである、如何ともしやうのないのは彼等の矮小なことだ丈の低い本邦人　別けて男よりも女が甚しい、遊女の扮粧の其の一々が悉く丈高くならうとするものであるのは、魯鈍な我等にも女優養成の失敗に依ても頗る諒解される　時好に拘らず同一な扮粧法を久しく持續して居た遊女等は、拒み難い本邦女性の矮小といふ缺點を押へて、扮粧の基礎を据へたのであらう。

全國の女の衞生統計を見ると、身長の平均は四尺幾寸で、最高も五尺には達しない、試みに艷裝させても引立たぬ筈だ、其の光怪陸離たる衣裳を着せても決して立派には見へぬ、娼婦を以て高潔な女子に比較するのが惡いなら、御殿女中の服裝にしても話は同じだ、本邦婦女の美と其の扮粧について、矮小な體軀が何程の煩ひであらうか。

現在の島原で身長を第一條件として太夫を選定する、我等の目の前に行進する十五人の如きも、身長に依つて順序を極めるといふ、如何にも五尺以下の女はなかつた、友人の話では第三番の女は五尺一寸あると聞いた、一番二番は其の上の身長なのである。

我等は八文字の足許を注視した、彼等は五尺以上の身長を持

つ、[illegible]しいものがあるのに、いつも[illegible]下駄を使用する、塗下駄の高さは七寸五分程あつたといふ、これは各人の身長に依つて加減されると聞いた、七寸五分にしても五尺の女ならば　合計五尺七寸五分になる、今度歌舞伎座で揚巻に扮する梅幸のは、身長のある人ゆゑに六寸五分の下駄だとやら、其は普例のものよりも稍々低いのだといふ、島原の太夫のよりも一寸低い、大名の奥向には女六尺といつて、それだけの身長の者があつた、既に名前の通りなのは極めて稀れであるにもせよ、珍らしく眺められる女も居たさうだが、遊女のやうに足駄で揃へれば六尺女などは造作もない、また其の上に遊女は高い髷を結ふ、鬼将軍の加藤清正が立烏帽子を冠り肥馬に跨つて陣前に現はれる、大男の主計頭の頭上に鞍下に身長を増して、一丈六尺あつたといふ、其の故智を正しく高級遊女が奪つて居る、

三枚歯の塗下駄

斯く身長に異常な効験を與ふる高下駄も、余り古く使用されて居たらしくない、菱川師宣や英一蝶の書いた太夫道中の畫面には、草履穿を浮かせてある、其の頃は江戸のみか、京も大阪も草履か、[illegible]か、さもなくば[illegible]駄であつて、丈高い塗

き[illegible]らう、[illegible]六の六條[illegible]原へ[illegible]じたのたが、[illegible]しいことでもない、けれども色里一[illegible]（寛永十年刊）に塗下駄[illegible]にして、[illegible]うも云つて居る、

元禄の頃英太夫、所由あり一高[illegible]たりしが[illegible]塗下駄にへ、又新道など長の高からぬやうにとて、[illegible]の下駄を許たしむ、延宝に[illegible]の仕用し下駄を流行し、年頃の[illegible]にせらず、身の高低の差別なく、二歯下駄とはたゝぬ、

たゞ元禄と云はれると、一代男（天和二年刊）に塗下駄の首尾に、さしかけ傘迎れ降る空といひ、二代男（貞享元年刊）にさる太夫様、塗下駄の道中ゆたやかにありしを、これは見物と待つかひなく九軒の横切れとある、其等は何時から島原と関係するべき資料を持たないが、塗下駄が道中に使用されて太夫のお姓に有力なものになつたのは、元禄以前からだと思ふ、下駄は京都で早く行はれ、塗下駄も六條の廓の時から遊女が使用したにしても、八文字の塗下駄となると、元禄からではないにもしろ、其迄までの古さではなからう、くた一代男二代男の記載が二つとも大坂新町のことであつたから、これに用ひられるの一は

ないが、京都を起原とする說は嬉しくない、柳花通誌（弘化元年刊）に桐の木にて歯三枚あり、高さ六寸より八寸まで、この駒下駄を常島といふ、今は二枚の歯多しとある、殊に三枚歯の如きは大阪の創意らしく、廓中一覽の近比異體の仕用し下駄といふので考へても、道中に遣ふ高い下駄の古くないのが知れやう、

草履と雪駄の新吉原

江戸としても、新吉原つれづれ草（元祿二年刊）に、元日のありさま、太夫格子の初小袖、せつたの音高く、むつれと各別なりともあれば、隣つ揃氣には昔は揚屋女郎（太夫格子）が爪陰し草履であつたのに、今は天氣のよい日も下駄がけだと、原武太夫が寶曆から享保を顧みて歎息した、さうならば元祿享保までも草履雪駄の新吉原だつたと見える、到底江戸の遊女の塗下駄は享保以後のものだらう。

寶曆九年の江戸版晴夜詞叢圖彙には、黑塗下駄の三枚歯が書いてある、さうして駒下駄の最初は角町妓屋の采容だと傳へられたが、此の采容の時代は知れぬ、假に采容を元文寶曆の女としても、廓中一覽のいふ近比異風の仕用し下駄を使用したのではない、晴夜詞叢圖彙の挿畫では六七寸の高さとは見えぬ、未だ低くかつたのであらう、享和になつて江戸一越前屋の和國が、三枚歯を古風だといつて、角な塗り下駄にしたといふ、是は二枚歯であらう、嘉永に書いた守貞漫稿に、三都とも二枚歯を専とす、三枚歯、今も用ふるか、三都とも繪のみに見るといつた、しかし文久の一枚摺、東都名物長者には、おいらん道中、三ツ歯駒下駄とあるのみか、錦繪にしても當時オイラン揃を得意にした溪齋英泉は、二枚歯のみを描かずに、三枚歯も描いてる、今度歌舞伎座の助六に用ゐる揚卷白玉等は皆揃の二枚歯だが、島原太夫道中にも二枚歯三枚歯が混用されて居るやうに見受けた、

英泉の畫に榮之歌麿を比較するまでもなく、寛政豐國を對照して、遊女の下駄の夥しく高くなつたのに驚くだらう、守貞漫稿は又た吉原遊女用下駄の條に、小田原下駄の高き物也、表打を専とし、或に表なしもあり、必ず黑塗繻天鵞絨緒を専とす、高さ五寸五分より八寸に至る、妓品一級五分位の差ありて、六階に分つと也、晴天用也とある、現在の島原でも將た芝居でも表のない下駄だが、表の附いたのもあつたと見へる、黑塗も寶曆明和に描いた畫では側面だけを塗つて臺は白い、現在のは表のないためか全部黑い、繻天鵞絨の鼻緒に勝山鼻緒といつて、丹前勝山が工夫したのだといふ、其の勝山の時には下駄で



文久頃の道中姿　　芳幾筆

はない、明全國に、普及された、婦の中縮で引立たせたのであらう。下駄の寸法も鼓品に依つて高低する、それは體身長に従つて撰擇するとは逆つて居る、此の守貞漫稿の記載に天保以後の趣向らしい。

孰れにしても下駄から下駄になり、遂に七八寸もある特殊な高底に到達した。是れは我國の短小な本邦婦人の扮粧として、其の下駄の高さが荒誕に極めたやうではあるものゝ、或る諧和を失はない限り、所柄のまゝに奔逸したとも見られる。

や　央　公　へ

琉傳來の髷

過大といへば婦女の髷ほどなものはなからう、彼を着こなすには身長が十分でなければならぬのに　生付本邦の婦女は其の身長に於て免れ難い欠陥を固有して居る、それに足の下から其の欠陥を補償しようとして特殊な高底も生れた、それが實は甚だ遲かつた、と思ふ。

小山田與清は本邦婦人の結髪と琉球風俗の關係を知らせるために、御女[illegible]を引用した、それは「慶長十四年島津家久、琉球ヲ討取テ、琉球王ヲ江戸へ連テ來ル、本願寺ニ宿ヲナサス、琉球の小性ニ思次郎、思五郎ト云テ、年十五六ノ美童有、ジヤミセン上手也、此時マデ日本ノ女、カミヲ結フニカラワヲチヒサクシテ、ヨリ元結ニテ結、其上ヲフクサニテ包タルガ、琉球ノ美ノ結ヤウヲ見テヨリ、廣キ帯ヲシ、髪モトユヒニテユヒテ元結ノハシヲマグル也、是ヨリタケナガノ紙モハジマル也」といふので此の時から本邦婦女の結髪が高くなつた、しかし琉球風俗は何程の速力で擴がつたらう。

差し當つて頭上を覆うカツギや笠から、本邦婦女の誰が一番早く逃れたかを問ひたい、それには誰も型式の多い兵庫（立兵庫・島田兵庫・亂兵庫、つくね兵庫等）、片髷、笄わげのやうな髷の高く縮ねが大きい結髪をする遊女だと答へるだらう、琉球風の結髪は身長に乏しい本邦婦女に頭上から其の欠點を償はせるやうに教へた、教へられた中にも凄しい大村高髷を採用した遊女は　服裝に於ての俊秀である、爰で我等は寶暦の踊子風俗を想ひ出さずには居られぬ。

元文から江戸を賑はした踊子の中に、おもん、おこん、おゑんと三人、拔群に美しいのが居た、此の三人が櫛笄に贅を盡すだけでなく、髪容に独み意匠を凝した、美しく結へた髷い上に世間並に加賀笠つどら笠を乘せては、すぐに毀れて了ふので、三人お揃ひに青紙で張らせた日傘へ墨繪の柄の附いたのを翳して出た、笠から逃れた三人の踊子の風俗から、其の後の十年ほどの間に、日傘に大流行となつて全國の婦女に行渡つた、笠を

段だに高に段々高くなる、さうして下駄の方[illegible]に從く、遊女が髷を高くして頭上の髮型を除いたのは、慶長頃の六條三筋町の時からである、それ迄一般遊女の間に高帯の流行した頃に對すれば、實に五十年の開隔がある、それだけ下駄の上に遊女が早く目覺めて居た譯だ。

とは云へ遊女も頭上へ丈を伸ばすのには大に掛けたが、脚下には甚だ冷淡でなかつた、高島大髷を頭上にして、草履穿きの足元で低く行歩するのが隨分久しかつた、慶長―寛永 あゝ何たる不調和さだ。それも漸く塗下駄の三枚歯、最後の高履とすれば、慶長―天保、二百二三十年も掛つた、畢竟中間に様々の停頓があつた爲めだらう、

土佐浄瑠璃の三都對照

土佐節の正本[illegible]に因[illegible]の三都の遊女が出會つた所で、江戸の吉原には『ちよつと指櫛あら珍し』といひ、京の花月には『三つ笄に二つ櫛、げに京風のかみかたち』といひ、大阪の松ヶ枝には『二つ笄兵庫わげ、三つさし櫛に八文字』といつた、櫛の數だけでも江戸は一つ、京は二つ、大阪は三つである。遊女の櫛を指すことは[illegible]の風流を學んで、六條三筋町の頃から始まつたといひ、一枚櫛は[illegible]度の吉原[illegible]き及ぶ、これは[illegible]時には髮さ[illegible]櫛[illegible]、笄、[illegible]しいのを如く頭上の飾として、紅[illegible]けた[illegible]たいへを誇つた。これは當に反動なのであらう。さうした反動に依つて、因襲のまゝに持越される時の何程階段だつたかが考へられるではないか。淒しい反動なればこそ、洗練さといつたやうな反動も見られる。勿論それには土地の趣味傾向が伴ふ、而早く豪奢には一枚歯に依つて裝飾を新しくし、[illegible]法から反動から回復した京都さへ、[illegible]したのである。

我等は若衆形の好尚を、頭上の飾と呼んで[illegible]らぬ。それは約二十年に近い間であつたらうか、其後も假に支障を[illegible]し得なかつた。頭上の伸長を減じれば脚下の釣合ひが必要になる、片偶の丹前勝山、吉野屋の吉野が、丹前風や[illegible]の八文字も、江戸末に成熟した[illegible]法から見れば、決して[illegible]れたものでない、脚下を高くせずに頭上へ伸びて往くのを妥當な服裝とは思はれぬ、脚下が二枚歯三枚目の塗下駄になつて來れば、只だ高島大髷だけで許されなくなる、其處で裝飾が必要すべき筈だ。

本朝の太髷が[illegible]に依つて變化したやうに、これと等・似た動具を、[illegible]に

することは琉球の風俗なのだ。珊瑚の櫛などは明暦年中迄は大名の奥方でもなければ持つて居られなかつたが、元祿に民間婦女の髪飾となり、寛保には水牛の紛ひ物さへ現れた。しかしながら遊女が珊瑚を髪飾にすることは、案外遲く、殊に江戸では新吉原略記にもあるやうに、

享保の頃は木の塗櫛をさし、其後いく程もなく朝鮮鼈甲の櫛笄行はれたり、寛政中に至りては皆の眞の珊瑚さゝぬはなかりしとぞ、もと櫛一枚笄一本簪四本、耳掻の外多くさゝせまじき定めなりけるを、後にはみだりに粧しくさしよそほふことになりて、又々櫛二枚笄かんざし耳掻とも七八本に限れる由定められし也。

遊女の服裝髪飾も時々の法令と交渉がある、それにも緩緊があつて風俗と消長して往く、醉開漫話は寛保寛延の頃に象牙蒔繪の櫛笄が行はれたと云ひ、安永天明にも新造や秃は象牙の櫛笄であつたと云つて居る。珊瑚の髪飾が盛になつたのは寛政以後なのだ、だが遊女の髪飾は寛政に屈曲した、隣の浙氣が今の風は髪に油がため、櫛は足駄の歯の如くなるを二三枚さし、かんざしとて色々もやうしたるを七八本さし散しと云ふのは、贅所の[illegible]裝を倣へたのである。髪を高く大きくする外に、頭上への伸長擴大な櫛笄簪で按叫することが開始されて來た。髪飾革新の勢ひは隨分猛烈であつたと見へて、寛政七年の新吉原定書、改革で名高い松平越中守定信の時代にさへ、遊女の髪飾は櫛一枚笄一本簪四本耳掻二本の外は差させない筈であるのに、近來は濫りになつて來た。向後は櫛笄簪耳掻共に七八本限り差させることにせよとある、其の制限された七八本といふ數が、既に過多な髪飾ではないか、しかも七八本以上に制限しなかつたのは時勢であらう。

斯くの如き形勢を馴致したのは、金銀珠玉を以てする髪飾の發達では、如何にするも是程に威力を增大し得られまい、珊瑚の渠の潤ひのある軟味と透明な照りとは、眞黑な髪毛と好い配合に施彩される、のみならず櫛の高さやら樹い立てた身長やらを參酌して、其の櫛笄簪の大さを存分に增しても、何の差支もないだけでなく、却つて粉裝を富贍にし　更に外觀を立派にする、是は他の材料にない、只だ珊瑚のみの特色だらう、故に享保以後に於ける珊瑚髪飾は又た本邦婦女粉裝上の一區劃をなすべき時期だと思はれる、決して遊女だけの話ではあるまい。

一度寛政に制限した遊女の髪飾は、文化文政になつて盛り返し、それこそ捲土重來の勢を以て流行を惹き起した、珊瑚について一般婦女の讃仰も容易ならぬものであつたが、遊女の頭上は其の時代の流行を代表するものであつた、遊京漫錄（文政三

年」に大坂新町の花魁が一枚櫛に左右六本づつの簪と笄の一本を挿すのを、今年は三枚櫛に二十本簪で出たといひ、筠莖紀行（文化三年）に長崎丸山の子供が玳瑁の笄の濶一寸、長さ一尺二三寸、玳瑁の簪八九本、銀の簪二本さしたといふやうに人目を驚いた、鼈甲で拵へた派手のやうた頭をして居る遊女に、文化文政からの逸品なのである、

それを山東京山が『さしがさるかんざしは、昔にまさりて大きになりしなり、天明の頃は如何にも細く輕げなり、されば今（弘化）の如く馬蹄は頭にのせざりき』といつた、化政を中心にして前後を見渡せば僞に左樣であつたらう、櫛笄簪の長さ大さ、それが何の材料で作られて居たかを併せて、歌妓閨閣の秘鑰が明白にする、太平樂府（明和六年）の八寸長簪鼈甲、頁鑰耳搔今不新を引合ひに出すまでもあるまい、さうして玳瑁は往昔一旦制禁ありしを、其禁網のゆるみを伺ひ、鼈甲と名づけて互市を始め、遂に其玳瑁たることを知れども、知らぬ振にて公然たることになりたりと聞く（萱茅危言）此の禁制は多分正德六年であらうと思ふが、鼈はスッポンなのだから、スッポンの甲は美しいものではない、玳瑁と鼈甲とは違つたものなのに今日でも鼈甲にして了つて居る、其の鼈甲の細工も、寄せ繼ぎなどいふ巧妙な仕方を生して、明和以後は斑を自在にし、透く

[illegible]
[illegible]
鼈甲といつて[illegible]
らバッが行はれた、バッに馬爪の[illegible]
々擬製が上手になつて、[illegible]には鼈甲を[illegible]し、バッの上へ貼付し、兩三年は變色しないやうにも拵へた、京山が[illegible]を頭上にしないといつたのも、此のバッのことなのである、

五寸厚みの裾綿

遊女の衣服にも時々の法度があつた、しかし「[illegible]おの其親方より新衣を與し與ふれど、これを着るを恥とし、ふのれ〳〵が才覚もて、二かさね三かさね拵へ、大抵一ツ衣を二日とつゞけて、仲の町へ出るを恥とせし[illegible]風等、この他數人ありと聞く、寛政文化中には[illegible]兵庫屋の川岡抔、この[illegible]人ありと聞えし、其[illegible]夫といふとも、一ツ衣を手[illegible]きをなくして、十年も着る[illegible]り」（[illegible]）、晴れ着を多く拵つただけでなく、此の[illegible]考按が凝らされた、それは三つ四つ重ねて着る[illegible]にして、裾へ[illegible]山に綿を入れ、[illegible]どになる。裾の[illegible]

ふ、粧ひは幾代もあるが、元祖といふのは寛政七八年からの女だと思ふ、裾の厚い裾綿は天明に見られないものなのだ、安永天明に著しく髪飾が増大し、爰で遂に裾綿が厚くなつたのだ、

　從來遊女の裾について何の考按もなかつたが、御前義經記（元祿十三年版）に、菅原、當世やうのおぼろ染、龍門の瀧に鯉の上る勢、友禪絵にかゝせ、淺黄裏を表へ五寸ふかせ、定紋にゆづり桧、下に白無垢、中に黄無垢、一ツ前に合せと書いたのは、大阪新町の遊女の扮裝である、裏をふかせるだけは早く考へられて居た、それも五寸、是も五寸の裾綿は其の後百年掛つて案出された、裾綿の厚くなつたことは何としても下駄を高くさせずには置かぬ、天保以後と云へば、それから又た四十年ばかり經つて、吟下駄の高さが目立つて來た

　遊女の風俗に極り切つた一ツ前の褄どり、片臂張つた立ち姿、裾が重くなつては先の通りには往かぬ、褄取りは型式だけ、裾は高く揭げてある、裾を揭げれば緋縮緬が長く出て來る、緋縮緬の湯具は遊女が始めたもの、裾の鮮な色合ひは彼等に約束されたやうである、それも延寶頃には湯具の長いのを嫌つたとも聞いたが、其の後は嫌ふ所か漸々に延びて脛丈になつた、幸に長くなつて居たから、裾を高く揭げられもする、若し眞の二布であつたなら、膝から下を露出しなければならぬ。

褄取りと云へば手輕に聞へるが、二百年前の裾の輕かつた時とは、大變に模樣が違ふ、扮裝全體の釣衡からでなく、單に裾の厚さからも下駄を高くさせる、下駄は果して高くなつた、斯うなると内八文字も外八文字も、必至として頓重なものになる、是で傳統的に本邦婦女粧の落着を見た、慶長に琉球人の高髷を採用して以來、天保弘化の際まで二百三四十年間に亘つて、種々な變革を經過しながら、兎に角江戸末には一往整頓した、或る時の流行に驅られた奴振りも、裾の整頓した扮裝の華大なのに連れて、八文字は誠に恰好な濶歩であつた

　島原で見た太夫道中、裾の七尺豐かに粧つた女性に、時代后れのしたどけでなく、人間をも放れて、妖怪のやうにも見る人があらう、扮裝といふことのみに耽つて自然を忘れた失もあらう、理想に驅られて實際を逸した弊もあらう、だが傳統する精神、丈高く粧はなければならぬ天命を持つ、本邦の矮小な女性が、約三百年を一意に持續した扮粧方法なのを知つて、大膽に自然を超へ實際を忘れて、裾の行裝を整頓させたのを感歎しない者があらうか

　暫く極端な彼等を除いて、丸髷や島田の下駄の婦女も、同じ傳統の下に扮粧して居るのだ、丈高かゝれと行裝して居る、最も無理のない處を極限に往つたのだ、經便利易その他の理由は

有るにしても、丈低くかれと扮粧することを、我が男性に望まれやうか、扮粧が婦女の美のためでないなら、我等は忽に緘默しやう、さもなくば耳隠しのみならず、帽子も靴も、あらゆる洋風の行裝は、我が傳統的扮裝に逆ふからといふのみではない、丈低くするものであるから悪い、歐米の婦女は渠の身長なので見れば、丈高くと願ふ理由は些少もない、丈低う粧ふのが矮小を産む譯で、我等は却つて其の用意に感服する、只だ本邦婦女の美の爲めに、丈低う粧ふ歐米婦女に倣ふことの無意義なのを揚言する、洋風扮裝は本邦婦女美の敵である。

皮肉な時代錯誤

本邦婦女が内足なので、西洋人は、後天的畸形だといつた、それは衣服の制から生まれた習慣である、若い女性が下駄から降りて洋靴に狃れる前に、海老茶袴が必要になつた、洋靴は白



文久頃　英泉筆

然と行儀を外足にする。外足に行かすると[illegible]を蹴るやうになるので、裾を開けなければならなくなり、[illegible]で裾開きでなくなると洋靴が愈々似合つて來る。洋靴の[illegible]には島田唐輪も移りが悪い、一時には變化し切れずに束髪もオデコ隠しの頂上結びになり、漸く髷ねが後退して耳隠しとなつて、蘭傘（阿蘭陀傘の約）と呼ばれ、蝙蝠傘と呼ばれたのがパラソルと云ひ換られる時恰も頭上が促つて來て帽子が入用になつた、[illegible]の[illegible]とは逆な經過で、洋服に迴り當く道程に就いた、男性は斷髪から初めたので、女性よりも帽子が大凡そ三十年も早かつた、其處から出發しなかつた女性が、束髪を始めたのが明治の十七八年頃と思ふが、二十年掛りで漸く帽子の戴ける頭になつた、それ迄は髷や髱が妨げて頭の上を低くさせなかつた。

現代の女性は勉めて洋風扮装をするらしいが、一寸法師にな

りたい志願があるとは思はれぬ、固より本邦近世の婦女扮粧の傳統的精神を拒否するのでもあるまい、恐らくは丈高からんとする所に其の基礎があるのをさへ知らなかろう、或は自身の甚だしく矮小なのをも忘れては居らぬか、洋靴―短袴―帽子と進み、頭上へも脚下へも低く〳〵と粧つて往く、何としても一寸法師を志願するとより外には見られない、此の經過について必至な理由の聽くべきものがあるにしても、歐米の女性と身長の著しく違つて居るのを氣が附かないと見へる、洋靴と住宅建築との不便は例の過渡時代だからとも云はうが、身長問題はその筆法で往けやうとは思はれぬ。

今年も嵐山の花時になつた、春風は既に山紫水明の舊都を絞に吹いて居る、島原での京都年中行事、郭の太夫道中が皮肉なものとも思はなかつた、立派な時代錯誤であるべきものが、一寸法師を志願する時世粧に對すればこそ、我等には皮肉なものに思はれる。

與謝蕪村

―本朝畫人傳の十―

村松梢風

一

攝津國東成郡天王寺村といふ所は、古へから蕪の產地として知られてゐる。其の土地に產する蕪の種子は、國々に廣まり、天王寺蕪の名を傳へてゐる。

天王寺村は大阪から三里ばかり東北へ寄つた在所である。其處には、淀川の長堤が果しもないやうにうね〳〵と延びてゐる。そうして平野は何處迄も廣がつてゐる。春が來ると、沃野

は、ほんに寂寞な風物のやうに[illegible]しく描き出されるが、突然の春の桃の花が咲けば、今度は堤川堤の四方が一せいに咲き出して、年々歲々春の若さの短かさと儚なさとしさを謳咲させる。鷄群は日光に浴して終日嬉々として餌を漁る。牝馬は頭を垂れ、深く蹄を土に沒して睡る。牛は草をくらひ、犬は樹下に睡眠を貪ぼれり。此の時小兒は堤に登つて、花を摘み、蜻蛉を追ひ、或ひは棒を持つて遊戯する。川水は悠々として流れる。船が絕えず上下する。客船は簾の子の覆ひを掛け、武士、町人、諸國の旅人、さては都育ちのなまめいた振袖姿や、粋な年增の婦もまじつてゐる。其の人々は皆今日一日の船の旅を樂しんでゐるかのやうに見受けられる。堤防の上の道路も往來が頻繁である。野菜を擔つて大阪へ賣りに行く村人、野良歸りの里の娘、托鉢僧、傀儡師、藥賣り——稀れには此の道をも都振りした若い女が通ることがある。それは此の邊りの田舍娘が、浪花へ奉公に出て、見樣見眞似に紅粉を裝ひ、今日親里へ歸る道すがらである。茶見世の老婆の齒の拔けた世辭の聲が彼女の耳を喜ばせ、おのが故鄕の鄙びた風俗が其の眼にいかに賤しくうつるであらうか……。

彼は、此の美しい田園で今年廿歲の春を迎へたのである。廿歲の若者の心には、自然の春よりも力強い青春の、歡びや、咲[illegible]こや、[illegible]に[illegible]ども[illegible]

それは何びとにも[illegible]な[illegible]た[illegible]ど淋しい一種の[illegible]

けれども、若者は、すくなくとも現在や過去に於ては幸福な身の上ではなかつた。それは何故かと云ふと、彼が此の世に生ひ立つて來たについては、世間普通の身の上と違つた[illegible]があつてゐたからである。

天王寺村から程遠からぬ毛馬村といふ所に、彼の生れた[illegible]あつた。其の毛馬村の貧しい農家に一人の娘があつた。其の[illegible]の土地の娘達は農業に從事するよりも、大阪へ出て町家へ奉公することの方を喜んだのが普通だつた。そこで彼女も其の習はしに誘はれて、十六七の年から大阪の阿部野ケ池といふ[illegible]屋吉兵衛といふ商人の家へ奉公に上つた。すると主の[illegible]は、其の田舍娘の鮮やかな肉體に心を惹かれて、よく[illegible]ありがちな誤まつた關係を娘との間に結んでしまつた。そして彼女は妊娠した。娘は身重の體になつて毛馬へ歸り、男の兒を産んだ。それは享保元年であつた。——彼は、かうして淋しい世に生れて來たのだつた。

十一二歲の頃から、彼も大阪の商家へ丁稚奉公に[illegible]

さうして幾年か過ぎた。然し彼は商人の生活に對して子供心にも興味をもつことが出來なかつた。それでは何を志してゐるかと問はれるならば更に答に窮するには違なかつたが、只何となく自分の求めてゐる物がもつと異つた世界にあるやうな氣持がするのだつた。が、彼は其所で讀み書きやそろばんを覺えた。

其の頃母親は、同じ人の二度目の胤を宿して生んだ彼の弟を育て乍ら親元の家で暮してゐた。彼の女の運命はついにさうした寂しい道を進むやうに定められてしまつてゐた。

正月と盆の藪入りは、年端もいかぬ身で親の手許を離れて冷たい他人の家で窮屈をしてゐる子供達に取つて、どんなに嬉しい歡びだつたか。其の日が來ると、彼は大阪から自分の在所の毛馬村まで數里の道を息を切つて急いで戻つた。夏の烈日の照り付ける淀川堤が非常に長く感じられた。在所の村の風物は何も彼に親しみ深かつた。繁華な浪花の町の内と異つて、路傍の青草でも、田畑に繁る樹木でも、眞に、自然から授けられた其の土の上に、落ち付いて、靜かに生きてゐた。

茅葺きの農家の屋根が風除けの杉圍ひの上に見え出すと同時に、彼は彈かれたやうに驅け出した。驅けてゐながら、若しや母が病氣でもしてはゐないかといふ不安が、突如として胸裡に掠めたりした、早く農家に近付くことに對して謂れもない恐怖を感じたりした。けれども遂に其の門先きへ行き着くと、なつかしい母親が、弟の手を取り乍ら、門邊の柳の木の下に立つて彼の來るのを待つてゐるのだつた。

「おゝ、よう歸つて來た」

と母親は聲を掛けた。すると彼は急に悄然らしく母親の胸の邊りに眼を移しておづおづと側へ寄つて行つた。どうしても口が利けなかつた。張り切れるやうな歡びが何とも云へない甘い悲哀と變つてゐた。

母親の眼にも泪があつた。

其の夜は親子三人が一つの蒲團の上に寢た。

三四年大阪で勤めたのち彼は母親の側へ歸つて來た。何處か普通の少年と異つてゐる彼の天性が商家の勤めとは合はないことをすべての人がさとつたからだつた。そうして彼は家の農業を手傳つてゐた。田畑に出て耕し、種子を蒔き、肥料を與へ、そうして作物を育てゝ行く仕事は、辛いうちにも慰安があつた。草木だの、土だのに對して、不思議な親しみを覺えて來た。無情だと思はれてゐたそれらの物が有情と變つて來た。雲の一片が空に動いてゐるのを見ても彼は激しく感動することがあつた。

少年は[illegible]と[illegible]の快味を[illegible]へて來た。

其の口[illegible]に人[illegible]称した。

彼は、自分の[illegible]自然に対する[illegible]　これを俳諧に依つて描いて見た。俳諧といふ十七文字の詩形を[illegible]へたのは大阪で丁稚奉公をしてゐる頃だつた。俳諧は其頃一般に流行してゐた。彼は直ぐこれを覚えた。そして人から古人の有名な句などを聞かせられると、其の意味はよく解らなくても、十七文字の言葉の中に含まれてゐる何物かが自分の頭に触れるやうな気持がした。彼は何となく面白く感じて折り／＼句を云つて見た。其の習慣は村へ帰つてから一層助成された。村にも俳諧をやる人は沢山あつた。彼も其の人達の仲間へはいつて句を稽古し始めたが、稽古しない最初から彼の吐く句は人々を驚かせた。

同時に彼は書物を読むことゝ絵を描くことを覚えた。

廿歳になつた此の頃は最早蕪村の名は、天才的俳人として近隣の俳壇に重きをなしてゐた。蕪の産地といふところから彼は蕪村と号したのだつた。彼は大阪や京都でも名のある俳人と風交するやうになつた。俳諧は今では彼に取つて單なる趣味のわざではなくなつてゐた。それは彼の身をも命をも托することの出来る大きな仕事だつた。直ぐ想ひ浮べられるのが芭蕉の生涯と事業である。自分も彼の翁の足跡を慕つて此の道を広く深く分

は入つて[illegible]やうになつた。

彼は[illegible]江戸へ上つた。享保廿年だつた。

二

享保廿年は、芭蕉の歿年[illegible]四十二年目に当り、其角が歿した寶永四年からでは廿八年目に当つてゐた。芭蕉歿後の江戸の俳壇はしばらく其角に覇権が帰してゐた。そして所謂江戸座の俳人たちもいろ／＼派別した。

其角は、芭門から出て、芭蕉の風調と正反対の作句を開拓した。芭蕉が山林に踏跡したのに対して、其角は生活を市井に放浪して了へた。彼の閑寂に対して是れは豪華だつた。其角の俳諧は飽く迄も都会趣味である。

鐘一つ売れぬ日はなし江戸の春

それは其角の大江戸に対する限りなき讃美と満足との感情の発露である。芭蕉が世外に超脱して山林の閑寂を喜んだのと反対に、其角は俗社会に混在して、市井に豪奢を闘はすを以て快とした。其角の趣味は、公侯貴族より、商人、妓楼、俳優に至る迄各層の人に親しまれた。俳諧の[illegible]に座し、美酒を擁し、[illegible]て句を吐くも、敢て怪むところはなくなつた。かうして所謂、

浮世風、洒落風の一派が興つたのである。

然るに、其角が歿した爲めに、江戸の俳諧は甚だしく墮落した。角の歿後は、沾徳、不角等が勢力を振つてゐた。水間沾徳は江戸の磨ぎ師で俳諧を好み、内藤露沾の教へをうけて遂に一家を成したが、彼は頗る學力を有し、芭蕉も自句の定め難きものは沾徳に評定せしめたことがあつた。沾徳は合歡堂と號し、壇林風の俳人として、芭蕉の歿後其角と並んで頗る聲名があつた。其角は性豪放磊落、眼中自派他派の差別はなかつた。殊に沾徳とは親しく往來した。沾徳の合歡堂で俳諧を學んだ者の中には、赤穗義士の大高子葉（源吾）富森春帆（助右衛門）吉田白砂（忠左衛門）神崎竹平（與五郎）岡野放水（金右衛門）等が居た。立羽不角は江戸の人、不卜の門人で、松月堂、虛無齋、千翁などと號した。不角は俳諧によつて法眼に叙せられた。沾徳の門人沾洲が合歡堂を繼ぎ、聲望益々重く諸侯富豪皆其の門に歸して勢力並ぶものはなかつた。然し最早此の時に至つては、江戸の俳諧は救ふべからざる墮落の淵に沈んでゐた。江戸座の俳諧の特色とされるところの浮世風洒落風は極端に俗化して野卑に陥り、單なる駄洒落的遊戲と相距ること遠からぬものとなつてしまつた。其角は天成の詩人であつた。一家の特調をそなへ、俗衆の附和しがたきところがあつた。文雅に富みて口を開けば自然に俳句となつた。彼の句は、雄渾にして俊爽、其の間に詩趣を存し、江戸風の趣味はこゝにあつた。浮世風にして俗に墮らず、洒落にして野卑と近付かなかつた。が、一朝其角を失つた後の其の亞流に至つては、其の最も危險なる惡影響のみを發揮するやうになつたのだつた。

蕪村は江戸に出て内田沾山の門に入つた。沾山は江戸の人、沾徳の門人で、淺草に住み、玉柱坊、行轉軒、桂二房、長丁等と號した。彼は後に合歡堂を繼いだが、蕪村が入門した頃は沾洲を助けて一派の筆頭として勢力を揮つてゐた。江戸へ出て來たばかりの蕪村には東都の俳壇の事情といふものもよく判つてゐなかつた。沾山の名聲を聞き、又丁度便手があつたのを幸ひ其の門に入つたのだつた。然し、蕪村は間も無く其處に失望してしまつた。江都の俳壇は商賣のやうな有樣だつた。俳諧の宗匠は幇間と異る處はなかつた。そして、宗匠となるの道は只幇間より外になかつた。沾山の如きは最も幇間の術に長じてゐたがために莫大の富を作り、其の上山氣があつて事業に手を出したりして、俗臭紛々たる徒だつた。蕪村は間も無く其處を去つた。

其の頃、早野巴人と稱する俳人があつた。巴人は江戸の人、其角の門人で後に嵐雪にも學び、學識に富み、世俗の名利を厭

[illegible]人だつた。後に[illegible]十年より京都に行き、[illegible]に來て、石町の鐘つき新道に居を卜した。巴人は別に夜半亭、郢泉原、宋阿、竹雨などと號した。

巴人が江戸へ歸つて來ると直ぐ蕪村は其の門に入つた。巴人は社會の俗風と絶つて、專ら清貧を喜ぶ生活を送つてゐた。學識人格共に高く、其の句は磊落であつたが、思想的には高雅に歸依して、頗る古貌を存する俳人だつた。蕪村は初めて良師を得て、爰に彼の藝術觀は頗みに進歩した。巴人はまた頗る深切に蕪村を指導した。

然し、蕪村は未だ客氣に逸る若者だつた、名を成さんとする野心の勃々たるものがあつた。彼は江戸の俳諧道の頽廢を見て義憤を禁じ得ないことがしばしばあつた。師の巴人に向つて、世間の俳風の卑俗なことや、俳諧宗匠連の人物評などを彼が論じ始めると、巴人老人は忽ち耳に手を當てゝしまつて一言も聞かなかつた。蕪村が默するのを待つて、巴人は諄々として俳諧を說いた。

巴人は獨り身だつたので、蕪村は悉く薪水の勞をとつてゐた。そして、鍋夜の鐘の音をきゝ乍ら俳諧の教へを受けてゐた。或る夜、師と弟子は例に依つて孤燈の下に座して俳諧の相を語つてゐた。[illegible]

[illegible]化して、[illegible]

其の言葉を聞いた時、蕪村は[illegible]然として一向[illegible]た。それ以來彼は俳諧の自在を知つた。

其の頃は彼の俳諧も長足の進歩をした。當時は、儒林にも一つの機運が動きつゝあつた。[illegible]派が沈滞し、[illegible]し振はざること久しかつた。この時にあたつて、一味清新の氣を縉紳の上に投げてゐたのが、祇園南海、白川等、風流詩人の如き技であつた。そもそも[illegible]以來[illegible]學大いに開けて、佛教の如きも是れが爲めに大いに勢力を殺がれた。然し乍ら、初めに藤原惺窩以下未だ流風は修身治國主義を旨とし、倫道を說き、制度を明かにすることのみに力を盡し、その外に出てゝ千騰を揮ふものはなかつた。其の後年を經るに從つて學問益々開け、これより種々の方面に研究を重ねて、詩文の學も大いに進むに至つた。中にも木下順庵の學は博通不偏を旨とし、門下を十哲許、新井白石、室鳩巣以下種々の技に通じた人が現はれたが、殊に詩文經濟に心を潛めたのが祇園南海であつた。南海は紀伊氏、名は正卿、字は伯玉、通稱與一郎、紀州の人で、其の[illegible]文學となつた。詩文を能くし文章に巧みであつた。[illegible]を作つて

甚だ氣韻があつた。南海は「詩は畫なり」と云つた。詩の心を以て畫を描き、畫を以て詩を現はした。彼は本朝文人畫の先驅者であつて、池大雅も南海に會つて教へを受けるところがあつた。

徳川時代に於ける繪畫の自由主義は、光琳、一蝶に創まり、岩佐又兵衛、菱川師宣の門流も現はれるに至つたが、漢畫の方面に於て南宗文人の新派を唱道したものは祇南海、名古屋の彭百川等が初めてであつた

蕪村の畫はもと／＼深く一方に師事するところはなかつた。彼の畫は天性であつた。然し彼は漢學に心を寄せ盛唐及び明初の詩を深く味ふやうになつたから、其の畫はおのづから文人の風に傾いた。彼は宋元の古畫を頻りに研究した。「詩は畫なり」とする祇南海の說には最も共鳴した。

三

五元集は、其角が自選であつて、それを彼自ら淨書したもので、今は只剞劂に附するばかりになつてゐたのが、間際になつて其角が死んだ爲めに遂に此集も世に出る機會を失つてゐた。其の遺稿を、芝神明の社付某が秘藏してゐたのを、百萬坊旨原といふ俳人が大金を出して漸く讓り受けた。旨原は其の書を世

に廣めやうと思つた。そして蕪村と懇意だつたので、彼に相談を掛けて「雁宕も諾はぬやうに此の書を寫して貰ひ度い」と頼んだ。蕪村は手易く引き受けた。處が、それに着手しないうちに彼は急に旅に出ることになつた。

江戸を立つた蕪村は最初下總結城の雁宕を頼つて行つた。雁宕は同じく巴人の門人だつた。蕪村は此處に足を停めて日夜俳諧に遊んでゐた。すると其處へ偶然江戸から佐久間柳居が來合はせた。柳居は沾洲の門人で幕府旗本の隱居だつた。其の行は筑波詣での途中であつた。そこで蕪村は柳居と一緒になつて其處彼處と俳席を重ねて歩いた。

結城に丈羽といふ俳人があつた。或る時蕪村が
「少し靜かな處へ行つて獨りで暮して見度い」と云ふと丈羽が
「では私の別宅へおいでになつてはどうです、留守番の爺がゐるばかりだから靜かなことは請合ひです」
と云ふので、蕪村は早速其處へ引き移つた。行つて見ると成る程閑靜だつた。そこもまだ町の内には相違ないが、庭廣く樹木が大きく育つて、手入れもせぬと見えて梢すゝきが人の丈程に伸びてゐた。蕪村は大いに喜んで暫らく其處に滯在しながら詩想に耽つてゐた。

留守番の爺さんは、夜になると爲る事もないので、毎夜行燈

い側で念珠をつまぐつて時を過してゐた。[illegible]一夜に長かつた。

或る夜、蕪村は例に依つて奥の一間にあつて、句を捻つたり詩を呻いたりしてゐたが、やがて夜も更けたので、蒲團を引つかぶつてとろ〳〵と睡らうとすると、廣縁の方の雨戸をどし〳〵と叩くものがあつた。二三十ばかり續け樣に打つ音がした。「今時分何者が來たのかしら」と思ふと恐ろしいやうで胸が躁いだけれども、やがて起き上つて雨戸を明けて見た。すると何物も居なかつた。秋の月がたゞ晃々と荒れた庭を照らしてゐた。そこで戸を閉めて又臥戸に入つて睡らうとすると、以前のやうにどし〳〵と叩いた。又起きて見たけれども物の影だになかつた。蕪村はいよ〳〵恐ろしくなつたので留守居の爺さんの寢てゐる處へ行つて揺り起して、今の話をして「どうしたらよからうか」と云つて相談した。

「畜生、それは狸の仕業に違ひない。では、今度來たら、お前樣は直ぐに戸を明けて追つ拂ひなされ、わしは脊戸の方から廻つてくね垣（生垣）の蔭に隱れてゐて、狸を見たらひつぱたいて遣りますべい」と爺さんは云つた。

爺さんは棒を持つて脊戸口からこつそりと出て行つた、蕪村は臥戸へ這入つて狸寢入りをしてゐた。すると案の定又もやどし〳〵と叩いた。蕪村に[illegible]た。其の音を合圖に爺さんが生垣の陰から飛び出した、が、矢張つり狸は影も見せなかつた。

「畜生、何處へ失せやがつた」爺さんは[illegible]て、[illegible]中捜る隈なく探し求めたが足跡すら殘つてゐなかつた。

さうかうするうちに夜が明けてしまつた。

翌晩も同じ樣なことがあつた。それが毎晩のことになつて[illegible]日ばかり續いた。二人とも今は疲れ果てゝしまつてどうすることも出來なかつた。六日目の朝丈羽の家の番頭がやつて來た時は、二人は蒼ざめた顏をしてぐつたり弱つてゐた。「どうしたのです」と番頭が云ふので、實はこれ〳〵と此の頃中の出來事を話すと、番頭は思ひ當つたやうな顏をして「左うですか、いや其の狸ならもう今晩からは來ませんよ、今朝の夜明け頃のことでした。此の先きの鍛下といふ所で、土地の人が大層大きな古狸を鐵砲で打ち留めたといふ話しです、此の頃中あなた方を騷がせたのはシャツが仕業に違ひありません、今夜から屹度樂にお寢みになれます」と云つた。

果して其の夜から音がしなくなつた。蕪村はよく[illegible]られたけれども、考へて見ると、狸の身の上が可哀相になつて來た。此の頃中自分の處へ遣つて來たのも、旅のわび棲の淋しさを訪ひ

尋ねて呉れたのだと思へば、彼の心もあはれで、かりそめならぬ契のやうに思はれ、狸の死を悲しむ心が強く起つた。

北の翌日彼は善空坊といふ道心者を家へ伴れて來て、布施を與へ、ひと夜中念佛をして、狸の菩提をとぶらふのだつた。

秋のくれ佛に化る狸かな　　蕪村

旅で二三年の月日が經つた。すると圖らずも江戸から便りがあつて、師の巴人が重病の床に臥つてゐることを知らせて來た。蕪村は驚いて夜に日をついで江戸へ急行した。

巴人の病氣は恢復しなかつた。各地から多くの門人が足を空にして馳せ付け、看病を盡した甲斐もなく、寛保二年六月六日といふに、

こしらへてあるとも知らじ西の奥

と辭世をよんで、六十六歳を一期として此の世を去つた。

蕪村は大きな悲哀の裡に日を過した。葬式萬端執りすました後、彼は亡き師が日常句作に日を送つた其の客室に閉ぢ籠つて遺稿を整理しながら、一羽鳥といふ追悼の文章を書きかけてゐた。然し其の文は容易に成らなかつた。

蕪村は既に、俳壇一方の新人として東都に於て認められてゐた。門人を作り、一家を成さうと思へばそれも困難な事ではなかつた。人々は頻りにさうすることを勸めた。併し、蕪村の心の内部には、それと全く反對の欲求が旺んに興きつゝあつた。彼は雜閙から遁れたかつた。市塵を避けて山林の奥に走りたかつた。彼は次第に強くなる孤獨を感じつゝあつた。そしてその自身の孤獨を愛して、寂寥の中に生きようと彼は求めてゐた。名を成すといふことも更に心を引き付けなかつた。

彼はすでに頭を圓めて、釋蕪村と名乘つた。一羽鳥の書き掛けの草稿をふところにした儘、或る日飄然として石町の鐘樓のほとりの夜半亭を出で立つた。

行く春や紫さむる筑波山

武藏野に紅塵を拂つた蕪村は、一笠一杖の行脚僧であつた。彼は最早煩惱の詩人ではなかつた。自然は彼に取つて最も親しいものだつた。彼は足の向くに任せて放浪した。

蘆澤の遊行柳を見ては、

柳ちり清水涸れ石ところどころ

妙義の峯が秋の空にそゝり立つてゐるを見ては、

立去る事一里眉毛に秋の峯寒し

さうして旅を續けた。

四

松島の天麟院は、瑞巖寺と並んで名高い禪寺であつた。

或る年蕪村が奥羽に客となつて居た。やがて[illegible]てたち去らうとした時、寺の長老が古い板の一尺餘りのを取り出して、

「仙台中将何がしの殿は、無双の歌よみでした。其の中将殿が多くの人夫を使つて、名取川の水底を浚はせ、漸くにして埋れ木を堀り求め、それで料紙や硯の箱を作つて、宮城野の萩の軸を附けた筆を添へて、二條家へまゐらせられたことは名高い話です。是れは其の時の板の餘りで、世にありふれた不確かな物ではありません」

と云つて、其の埋れ木を餞別として蕪村に與れた。見ると、槻の木目のやうで鮮やかだが、水底に千歳を古りた物だから、色は黒く鐵をのべたやうで、叩くとくわん／＼と音がした。重さは十斤ばかりもあつた。蕪村はそれを平包みにして、縦りと肩へ脊負ひ込んで寺を立つた。けれども、途中でいかにも重くなつてしまつた。肩へメリ／＼と食ひ込むやうで、額からジリジリと汗が出た。やう／＼のことで白石迄出た。

旅籠屋へ着いて埋れ木を肩から下すと蕪村はほつとして、同時に一日の疲勞を激しくおぼへた。蕪村は埋れ木を取り出して撫でて見た。此の重たい荷物を脊負つて、これから先き果しもなく長い旅を續けなければならないのかと考へると、考へたゞけでも日[illegible]て、こんな[illegible]仕ぐさが珍らしい[illegible]人に[illegible]水の底に千年も埋もれてゐたといふことだが、何んで[illegible]のだらうか……と考へた。とにかく此に捨て[illegible]してしまつた。

翌日宿を立つ時、蕪村は其の厄介な埋れ木を、宿[illegible]の下へ抛り込んで置いて立ち去つた。

それから廻り廻つて結城の雁宕の許へ辿つて來た。すると其處で下野の俳人常盤潭北と出逢つた。

松島の話が出たついでに、蕪村は例の仙台中将の埋れ木の一件を思ひ出して人々に物語りした。

「然し、其の埋れ木は持つて來てゐるだらうな」と潭北が鋭く云つた。

「否、今も云ふ通り何分重たうてかなはぬによつて白石の旅籠を立つ時、簀の子の下へ押し込んで置いて來た」

「やい！それ程の珍物を捨てゝ來る奴があるものか、何といふ不風流な坊主だ」潭北は口汚く罵つて「さあ、誰でもよい直ぐに白石へ行つて其の埋れ木を取つて來い」

直ぐ様人が馳せて、奥州[illegible]川の普流の許へ事の次第を[illegible]せた。普流が手紙を添へて見れたのでそれを持つて白石の旅籠を尋ねて

「いつ〳〵のこと法師が此の家へ泊つて、しかん〳〵の物を忘れて置いて行つた、それを受取りに來た」

と云ふと、驛亭の主は深切に探し出して渡して呉れた。使の者はそれを持つて結城へ戻つて來た。白石から結城迄は七十餘里の行程があつた。

其の埋れ木は雁宕が手に歸して、魚鶴といふ硯の蓋にして持ち傳へた。

或る年の夏、出羽の國から陸奥の方へ行く途中、山中で日が暮れてしまつた。疲れた脚を曳き〳〵行くと、漸く人家が少しばかりある處へ出た。其の時分はもはや夕闇も消えて星がまたゝいてゐた。農家の前を通ると煮物の匂ひが流れて來た。一軒の寺があつた。蕪村は寺を訪ふて一宿を乞ふと、住持は快く承諾して上げてくれた。もとより山寺のことだが、無下に貧しくもないやうだつた。

「此寺は何と云ふ村ですか」と尋ねると

「九十九袋（つくもぶくろ）と云ふ村です」と住持は答へた。

蕪村は間もなく一室へはいつて疲れた體を横たへたが、程經てふと眼を醒ますと、もう夜もいたく更けてゐるのに、何やら表の方に當つて、こつ〳〵といふ物音が重たく響いてゐた。それが耳について眠れなくなつた。

「怎んな夜なかに何の音だらう？」

と蕪村は怪しく思つて、雨戸も閉めてないので其の儘表へ出て見ると、此の古寺の庭で、一人の年取つた男が麥を搗いてゐた。寺男であつた。

「客人はお寢みになれぬのかな」と、寺男は杵を休めて聲をかけた。

「わしは其方が麥を搗く音を聞いて、狸の仕業かと思ふたよ」

蕪村は聲高く笑つた。結城の丈羽が別莊に居た時の事を思ひ出した。

「狸はもつと里の方に居ります。此處らは山が深いで、猪や狼に追はれて、狸や狐は居りませぬ」

蕪村はぶら〳〵と庭の内を徘徊した。秋のやうに澄んだ月が峯の頂きを照らし、爽やかな風が千竿の竹を吹き渡つてゐる。初夜の景色は喩へんやうもなかつた。

「そなたは何んで今頃麥を搗くのかな」と蕪村は訊いた。

「はい、晝のうちは暑さがきびしいが、夜は此の通り涼しいので、搗き物をするにはもつてこいで御座りやす」

「そなたの名は何と云はつしやる」

「わしかね、わしは宇兵衛と申しますだ」

蕪村の口からは直ぐに句が流れ出た。

寂しさに堪へた月夜の宗匠哉

ひとゝせ蕪村は、日光山下鉢石の富豪なにがしの家に足を留めてゐたことがあつた。主の齋藤氏は常に源平盛衰記を愛読してゐた。蕪村は主人に向つて

「あなたが其の本を読んで聞かせて下さつたら、私がそれを絵にかきませう」と云つた。

「それは面白い」

そこで主人は盛衰記を巻頭から朗読した。蕪村は其の側らに寝転がり乍ら、主人の読んだ處を忽ち狂畫に寫して行つた。読み手がいくら急いで読んでも彼を置き去りにすることは出来なかつた。かうして到頭数十葉の狂畫が出来上つた。齋藤氏は大に喜んでそれを巻物二軸に仕立てて珍蔵した。

五

蕪村は、十年の星霜を行脚に費した。其の頃彼は何となく故郷の空が懐かしくなつた。さうして其處に自己の安住の地をもとめたいやうな気持になつた。寶暦元年の頃、彼は多年放浪の月日を送つた關東を後にして、飄々として西へ向つて旅立つた。別離に際して、盟友雁宕は「再會興宴の月に芋を食ふことを期せず、俱に乾坤を吸ふべき」の辭を餞けした。蕪村は快笑して聞いた。

京都に、[illegible]巴人[illegible]人[illegible]今[illegible]つてゐた。就中、[illegible]几[illegible]俳諧の中心だつた。[illegible]此の几[illegible]京都に永住の計を立て、[illegible]小路に[illegible]して[illegible]こゝで彼は先師巴人の號をうけついで夜半亭と號した。そして間もなく或る人の世話で妻も迎へた。

當時既に蕪村の俳名は關東に響いてゐた。其の高齊の間によく噂なしうる者は少なかつた。關西地方の俳人は蕪村の京都入りのことを知ると争つて門を叩いて其の教へを受けようとした。併し蕪村は、門人を取り立てて、宗匠を以て任ずるの意志はなかつた。だから殆んど皆それを拒絶して、僅かに少数の人々と往來して、悠々として詩畫三昧の生活を送つてゐた。彼の俳句並びに繪畫は、京都結居以来益々進歩した。

京都に於ける彼の主なる俳友は、几圭、太祇等であつた。几圭は寶暦十二年に歿したが、生前蕪村のためには無二の心友だつた。其の子の几董は蕪村門下の高弟であつた。

或る時几董が蕪村を外へ誘ひ出して

「今日は面白い處へ案内する」

と云ふから何處へ伴れて行くのかと思ふと、一條戻橋の傍の桜

風呂といふ娼家へ上るのだつた。其處で蕪村は次の句を吐いた。

羽織着て綱もきく夜や川千鳥
加茂人の火を燧音や小夜衛

太祇は几董より數年後れて明和八年六十三歳で歿した。太祇は紀逸の門人で、不夜庵、徳語、水語など號した。彼はかつて曰く「青によしなら漬と云はんより、なら茶といはんこそ俳諧のさびしみなれ。焦遂が五斗はそらにさはがし、蕉翁の三解こそ長く静かにして、鐵桿を鍼に磨かし、點滴の石を穿つをしへにも叶て、業の卒る時もありなん、かりにもおこたりすさむべからず」とて、佛を非むにも發句をし、神に額づくにも發句をした。常住起座常に發句を吐いたので、彼の句集の草稿を打ち重ねると、立つてゐる人の肩ほどの高さに達した。歿後に門人が其の句集を刊行しようと思つて整理に着手した處、起き臥しにも筆を放さず口より出づるにまかせて書き置いたものだが、さていづれを刈り捨てゝよいと思ふ句もない。撰者は眼が疲れ心がまどふて途方に暮れた揚句蕪村の處へ相談に來た。

「さうして迷つてゐた日には際限がない、大かたにして置くものだ。たゞ四季の初めの方へ出てゐる五六枚ほどを撰び取つて、初稿と題して板刻して世に出したらよろしい、二稿三稿と云ふものは、年代を經た後でも又誰れか出して呉れる人があるかも知れぬから」

と蕪村が云つたので、其の意見に從つて刊行した。太祇の一週忌に蕪村は

魂かへれ初夏の月のあるじなら
送り火や今宵定むる嫁もある

蕪村門下では、几董、百池、田福、月溪、維駒等が錚々たるものだつた。

京都へ行つてから、蕪村の交友は皆一代の名流を集めてゐた。柳里恭、皆川淇園、大雅堂、圓山應擧等とは皆親しく交はつた。名古屋の彭百川とも親交があつて、双方から訪ひ尋ねた。

蕪村は自分の繪について「吾に師なし、古今の名畫を以て師となす」と云ひ、或ひは「謝氏一家の畫」と自稱した。彼は古元明諸大家の遺墨を研究して一家を成したのであつた。彼が古畫の研究に熱心だつたことに就いて恁んな話がある。

東山の六波羅密寺に、明の董其昌が描いたといふ山水の圖があつた。或る年其の寺の開帳があつた時、蕪村は毎日參詣して怠らなかつた。寺僧が其の信心の厚いことを賞めると、蕪村は笑つて

「いや、わたしは名畫を拜みに來るのです」と云つた。

蕪村の畫くところは、誠に戲畫が多くて、殊に好んで芭蕉以來の俳書の名家の像を畫いた。其の筆致は簡雅にして、恰も兒戲の如くで、しかも興味津々たるものだつた。是れは漢畫の減筆人物法に依つたところも多いだらうが、また自ら狩野に依つたところもあつたに相違ない。屢々俳句の贊をした。後世俳畫と稱する略畫は、彼に依つて興つたのである。併し、蕪村の畫はたゞこの種の略畫のみではなかつた。往々緻密な山水畫もかいた、山水畫で彼が最も得意とするものは田園の風景だつた。田園畫家としての蕪村はまた古來の一流に位するのである。彼が廿歳の年までを過した故鄕の自然は、生涯彼の思想の根元となつてゐた。

京都結廬の後、蕪村は殆んど卅年振りで我が故鄕を訪れたのだつた。彼の故鄕に對する懷抱は名高い「春風馬堤曲」となつて生れたのだつた。

春風馬堤曲

余一日問耆老於故園。渡澱水過馬堤。偶逢女歸省鄕者。先後行數里。相顧語。容姿嬋娟。癡情可憐。因製歌曲十八首。代女述意。題曰春風馬堤曲。

春風馬堤曲十八首

やぶ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長うして家遠し
堤下摘芳草　荊與棘塞路
荊棘何妬情　裂裙且傷股
溪流石點々　踏石撮香芹
多謝水上石　教儂不沾裙
一軒の茶見世の柳老にけり
茶見世の老婆子儂を見て慇懃に
無恙を賀し且儂が春衣を美む
店中有二客　能解江南語
酒錢擲三緡　迎我讓榻去
古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず
呼雛籬外鷄　籬外草滿地
雛飛欲越籬　籬高墮三四
春艸路三叉中に捷徑あり我を迎ふ
たんぽゝ花咲り三々五々五々は黃に
三々は白し記得す去年此路よりす
憐しる蒲公莖短して乳を浥
むかし〱頻に思ふ慈母の恩
慈母の懷袍別に春あり

春あり成長して浪花にあり
梅は白し浪花橋邊財主の家
春情學び得たり浪花風流
郷を辭し弟に負て身三春
本をわすれ末をとる接木の梅
故郷春深し行々て又行
楊柳長堤漸くくれたり
矯首はじめて見る故園の家
黄昏戸に倚る白髮の人
弟を抱き我を待春又春
君不見古人太祇が句
藪入の寢るやひとりの親の側

澱河歌三首

春水浮梅花　南流菟合澱
錦纜君勿解　急瀨舟如電
菟水合澱水　交流如一身
舟中願同寢　長爲浪花人
君は水上の梅の如し花水に
浮で去こと急なり
妾は江頭の柳の如し影水に
沈でしたがふことあたはず

老鶯兒

春もや丶あなうぐひすよむかし聲

春もさむき春にて御座候。いかゞ御暮被成候や、御ゆかしく存候、しかれば春興小冊漸次出板に付、早速御めにかけ申候、外へも乍御面到、早々御達被下度候、延引に及候故、片時もはやく御届可被下候。

一春風馬堤曲　馬堤は毛馬塘也則余が故園也

余幼童の時、春色淸和の日には、必ず友だちと此堤上にのぼりて遊び候。水には上下の船あり。堤には往來の客あり。其中には田舍娘の浪花に奉公して、かしこく浪花の時勢粧に倣ひ、髮かたちも妓家の風情をまなび、お傳しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄弟を恥ぢいやしむものあり。されども流石故園の情に不堪、偶親里に歸省するあだ者なるべし。浪花を出てゝより、親里までの道行にて、引道具の狂言座元夜半亭と御笑ひ可被下候・實は愚老懷舊のやるかたなきより、うめき出でたる實情にて候。

當春の狀は同盟の社中斗にて、他家を交へず候。それ故伏水の諸家をもらし申候。御出會の節、其御噂被成、諸子腹立なき樣に、被仰譯可被下候。桃には下り候て、寬々御物がたり

而作に[illegible]したゝめ、[illegible]

二月二十三日　　夜半

六

時鳥平安城を筋違ひに

綾小路の蕪村の棲家は極く狹い草庵だつた。家主は富永太平といふ者だつた。蕪村は其の小さな家賃すら拂ひ切れず折り折り滯納した。

其の隣り町に建部涼岱が住つてゐた。涼岱も俳諧と畫と兩道に長けてゐた。併し、蕪村は俳名の高い割に其の畫を知つてゐる人が少なかつたが。それと反對に山氣のある涼岱は巧みに權門に出入するので、畫は遙かに蕪村より下だけれども一時大いに流行した。

蕪村は門を閉ぢ、客を謝し、獨り畫室に籠つて己れの好む畫をかいてゐた。或る時彼は戯れに次の文を書いた。

書畫戯之記

我に妻子眷族無し書畫をもて妻子眷族とす
我に朋友無し書畫をもて朋友とす
我に金錢無し書畫をもて金錢とす
我に衣服無し書畫をもて衣服とす
我に[illegible]とす
我近所へ行ねずして[illegible]一[illegible]とす
我に隣無し古今の名書畫をもて隣とす
我地獄極樂を知らず書畫をもて地獄極樂とす
予天下の法を守りて佛神の教化を安置すといへどもあへて知らず我小體を以て神佛とす
花七日物食はずとも書畫の句
長き日を書畫に迷ひて十二月

鳳凰都於　東山雅仙堂

蕪村は自己の書畫に對して非常なる見識を持つてゐた。それは或る時門人几董に與へた次ぎの書簡を見て想像することが出來る。

内せん子畫御さいそくのよし則在之所望候

かけ物七枚

よせ張物十枚

右いづれも尋常の物にては無之候、はいかい物之草畫、凡海内に並ぶ者覺無之候。下直に御ひさぎ被下候に御用捨可被下候。他人には申さぬ事に候。貴子ゆへ内意かくさず候。

一、かけ物七枚遣候。是は御人用次第御取り候とは御返し被下候とも、又は大略に御見斗被下御ひさぎ被下候とも、何分任

賢息使候（下略）

伊賀にも信濃にも俗なと、蕪村は釣竿を擔いで飄然として出て行つた。夕べになつて、獲物があると小兒のやうに嬉々として歸つて來た。

彼は、何よりも清貧と孤獨とを好んでゐた。

なかなかに一人あればぞ月を友

蕪村の門人に川原慶作と云ふ者があつた。一夜初更を過ぎて蕪村を訪ねたところが、門の戸がかたくとざしてあつた。慶作は心に「これはいつもより早くお寢みになつたと見える」と思つたが、暫らく樣子をうかがつてゐると、家の中ではたん／＼と物音がして、おまけに何やら叫ぶ聲がした。

「これは何か變事が起つたに相違ない」

と慶作は思つた。そこで彼はどん／＼戸を叩くと

「誰れだ？」と内から先生の聲がした。

「慶作で御座います、何卒お明け下さい」

「慶作か、待て／＼、今明けてやる」

戸を明けて呉れたので慶作は家の中へはいつて見ると、師匠の外には誰れも居ない。奥の間へ通ると、座敷へ箒木だの塵拂ひだのが抛り出してあつて、何さま狼藉の態である。

「先生何をして居られたのです」と慶作が怪しく思つて尋ねると、蕪村が云ふには、

「今夜はな、女房も娘も異方へ行つて、下婢まで伴れて行つたので、俺が獨りで留守番をして居るところぢや」

「でも只今ばた／＼音がしたのは、一たい何でございます」

「あれが聞えたか。あれはなに、此の頃芝居を見たが、芝翫といふ役者の藝がいかにも感心したから、今宵は幸ひ一人なので、戸を閉めて其の眞似をして見たのだが、何分似ないから、先刻から幾度もやつてゐたのだよ」と蕪村は答へた。

蕪村には一人の娘があつた。彼は其の娘を非常に愛してゐた。

かうした生活をしてゐても、蕪村の放浪癖は止まなかつた。彼は各地を行脚した。畿内は勿論、山陽、山陰、北陸、南海にまで及び、殆んど足跡の到らぬ隈はなかつた。

吉野では

雲を呑で花を吐くなるよしの山

花に暮はで歸るさ憎し白拍子

花に遠く櫻に近しよしの川

伊勢の山中で雨に逢うて

簑を猿にとられて芭蕉時雨かな

讃州高松で暫く旅やどりしたが、あるじ夫婦の隔てなき志を

又、其の家を立出る時

　火燵出て早足もとの野川かな

火燵ではかういふ句もあつた。

　腰ぬけの妻うつくしき火燵かな

丹後の天の橋立では三年餘りの月日を送つた。蕪村は此の土地の風景が何處よりも氣に入つてゐた。

其の間蕪村は宮津の見性寺といふ寺に泊つてゐた。見性寺の住職は竹溪と號して名のある俳人だつた。蕪村は每日海邊に出て釣をして暮してゐた。或る時、秋の初から蕪村は熱病に罹つて五十日餘り苦しんだ。寺の一番奥の一間は非常に廣い座敷で、平常は障子をひしと閉した儘出入りする者もなかつた。其の次ぎの一間に病床をかまへて、隔ての襖をたて切つてあつた。或る夜、四更ばかりの時刻だが、熱も少しさめたやうなので、厠へ行かうと思つて、ふら〱と起き上つた。厠は奥の間の椽緣を廻つて、乾の隅にあつた。灯の油が盡きて消えてしまつてゐるので眞暗がりだが、手探りで隔ての襖を押し明けて、先づ右の足を一歩踏み入れたとたんに、何んだか判らないが、むく〱と毛の生へた物を踏み當てた。蕪村はびつくりして足を引つ込めて、胸を轟かせ乍ら暫く樣子を窺つてゐたが、何の物音もしなかつた。怪しくもあり、恐ろしくもあるが、度胸を定めて、今度は左の足を先にして、其處と思ふ處をはたと蹴つたが、足に觸る物はなかつた。さきには[illegible]の毛などたつてゐたので、わなゝく〱慄ひ乍ら戸外へ出て行つて、法師や下僕などまだよく寢込んでゐるのを搖り起して、かう〱と話すと、皆起きて來て燈火を澤山照らして奥の間へ行つて見たが、襖障子は常のやうにとざしてあり、何の異状も無かつた。もとより怪しい物の影だに見えなかつた。

「何も居りはしないぢやありませんか」

「でも、わしの足に確かに觸つた」

「此の人は熱にうかされて、いゝ加減なことを云つてゐるのだ」

何だ馬鹿々々しいと、人々は腹を立てゝ寢てしまつた。蕪村はあらぬことを云ひ出して人騷がせをしたので、面目なくて、これも再び臥戸へ這入つた。すると、やがて睡りかけた時分に、胸の上へ盤石をのせられたやうな氣もちがして、非常に苦しんだ。彼が餘り大きな聲を發して呻いたので、其の聲を漏れ聞いて住職の竹溪和尙は何事かと思つて飛び起きて來た。

「蕪村先生、如何なされた、醒りなされ」と云つて搖り起した。

蕪村はやうやく人心地がついて、先刻からのことを話した。

「はゝあ、さては又あの狸沙彌が來居つたのであらう」

和尙は恁う云つて別に怪しむ樣子もなく、妻戸を押し明けて

見ると、夜はしら〳〵と明けはなれて、はつきりと見とめられるが、緣から簀の子の下へつゞいて、梅の花が散つたやうに足痕がついてゐた。其の時は庵裡の方の人々も起きて來たが、先刻蕪村がそら言を云つたとて罵つた者も此の體を見て「成る程狸だつたのか」と騷ぎ合つた。

それはよいが、竹溪老師は、餘程急いで出て來たと見えて、帶も結ばず、着物の前を押し廣げて、大きくふくれた睾丸の米ぶくろのやうな恰好なのに、白い毛がもじや〳〵と生へてゐて、大事た物は有るか無いか見えないくらゐだが、若い時から此の和尙は痔がかりの病があるとかで、其の睾丸を頼りに引きのばし乍ら、擦つて見たり搔いて見たりしてゐた。蕪村は可笑しくて堪まらないので

「和尙、よいおもちやをお持ちなされますな、朱鶴長老が終に悩んだ術とでも申されるかな」

すると和尙は笑つて

　秋ふくろや楠八疊の金閣寺

と云つた。

蕪村はうか〳〵と三年の月日を此處で送つた後、京都へ歸ることになつた。歸る時、竹溪法師は蕪村を寺から送つて出た。天の橋立の松原で二人は別れた。其の時蕪村は

　短夜や六里の松に更たらず

其の後のこと、竹溪法師は京都へ來て夜半亭を訪ねた。さて、丹後へ歸るといふ時、蕪村はこれを送つて

　たつ鴫に眠る鴫ありふた法師

蕪村は、天の橋立から歸つて來て後、其の地名を取つて自分の姓として、與謝蕪村と名乘つた。

七

明和七年に、蕪村は皆川淇園と書畫會をした。

彭百川とも蕪村は親しく交際した。名古屋へ行つて百川を訪ねたりした。百川は姓は彭城氏、名は眞淵、百川と號し、又蓬州、八仙堂等の別號があつた。名古屋本町一丁目の八仙堂といふ藥種商某の子であつた。元祿七年の生れで、長じて京都に遊び狩野派の畫家某に就いて畫を學んだ。百川は好んで支那の古畫を研究し、遠く唐宋元明諸大家の筆意を探り、最も王摩詰の遺法を慕つて、初めて南宋の畫法を悟つたのであつた。彼は通常祇南海と並んで我邦南畫の先驅者と稱されてゐる。元明畫人考、宋元明清書家名錄等の著述をした。彼はまた俳諧をよくした。俳諧は初め支考に就き、後に伊勢の乙由に師事した。支考は初め禪僧であつたが、才藻煥發の餘り終に俳諧に嫉まれて

還俗した。彼は美濃の人だが、俳諧を伊勢の涼菟に學んだ。京巴は其の才藻を異として芭蕉に師事せしめた。支考は更に一派を用して、美濃派又は獅子門統と稱した。

　蓮の葉に小便すれはお舎利かな

それは支考が還俗の時の句だつた。乙由は芭蕉の末弟で、伊勢山田の神官であつた。慶德圖書と云ひ、後中川乙由と云つた。麥畑の中に庵を結んで、麥林舎と號した。人と爲り豪放磊落で句も亦飄逸であつた。或る時麥林舎へ案內して來た客があつて「私は俳諧を學び度い志があるが、其の式が六ケ敷く思ふ、下愚の者でも道に入るべき手段がありますか」と尋ねた。乙由が答へて「志しさへ深切なればさのみ六ケ敷いものでもありません」客は又問ふた。「發句は如何樣の事を申すものですか」「只眼前の有樣を云ふばかりです」「然らば一句作つて聞かせて頂き度う存じます」「お安い事です」邊りを見廻すと、折から冬も半ばで、畠へ通ふ男がいと寒さうに鍬を肩に擔いで行く、乙由はそれを指して「あれが則ち發句の姿です」と云つて

　百姓の鍬かたげ行くさむさかな

百川の句には

　梅が香に銀葉へだつ氷かな
　猿なくや羽織の下に春の鞍

また百川が[illegible]つて人の宿所に泊して、旅立つ人に

　はなさきにふらふら出て行れに

これに對して蕪村が

　出きれいの化や梅花をあと衛門

と自身の留別の句を引いて「彼は梅花を前驅として、六里の松の径を摘へて平安の西にふりこみ、我は桜花を殿将として浪城の東に歸る。共に此道の酋長にして、花やかなりし行脚ならずや」と云つてゐる。

名古屋には久村曉臺といふ俳人もゐた。曉臺は尾州侯の藩士であつたが、俳諧に遊び、致仕して後諸國を漫遊した。暮雨庵或ひは龍門と稱した。蕪村は或る年尾陽へ遊び、曉臺の龍門の別莊に逗留して多くの書畫を揮毫した。其の時龍門の障壁に巖石の圖を描いた。又、名古屋から程遠からぬ鳴海驛には、下郷學海といふ人があつた。酒造を業とし、鳴海驛の素封家で、其性風雅にして詩文書畫を善くし、經史を宮崎筠圃に、書畫を大雅堂に學んでよくその筆意を得てゐた。平常交遊する者皆一代の大家で、就中柴野栗山・紀平洲・市川鶴鳴・十時梅厓・僧月僊等と親密だつた。

ある年の夏、大雅堂が富士登山の道すがら學海を訪ねた。其の時大雅が非常に汚れた着物を着てゐるので、學海が門弟の諸

衣を新調して進呈した。すると、大雅は其の浴衣へ蠟を以て風竹並びに詩を書し、紺屋に命じて染めさせた。布地が薄藍に染つて、書畫の部分だけ白く殘り、頗る雅致のあるものになつた。大雅は大いに喜んで、それを着て登山し、歸途に再び學海の家に宿泊した。學海は別に衣服を新調して、大雅が着てゐる浴衣を自分が貰ひ、珍藏して子孫に傳へた。

蕪村も學海と親しかつた。學海は曾て蕪村と大雅とに各々十葉づゝ小景山水の圖を畫かせ、是れを「十便十宜」と題し、二帙の畫帖に製して愛藏した。いづれも稀世の傑作で、當時諸大家の間に高評嘖々たるものだつたので、是れを見んが爲め態々鳴見へやつて來る篤志家が澤山あつた。

後年浪花の蒹葭堂の如きも、十時梅厓が學海の子の傳芳と親しくしてゐる處から、態々長島へやつて來て、梅厓の紹介で、十便十宜を借覽して研究の資となしたほどだつた。

學海の子下郷傳芳も父に似て風流文雅を好み、文人墨客との交際が廣かつたが、彼は時に豪放驕奢の遊びを試みる爲めに、終に家産を傾け、或る時金に窮して、三河の八橋無量壽寺の僧賣茶が俳句を能くして傳芳と親交のあるところから、傳芳は賣茶を仲介として、十便十宜の畫帖を、名古屋の内田蘭渚といふ人に質入れして、金十三兩を借りさせた。其の返金が滯つて十二年を經過し、元利積んで三十兩となつたので遂に受出し難くなつて流してしまつた。

序でに、蕪村が曉台の別莊の障壁に描いた畫は、今では其の邸と共に同市の鈴木總兵衛の有に歸して、愛重せられてゐる。

大雅堂は、享保八年の生れだから、蕪村よりも七歳の年下だつた。彼は卅歳の頃玉瀾と結婚して以後、洛東眞葛ケ原に草庵を結んで、眞に悠々たる書畫三昧の生活を送つてゐた。

大雅と蕪村とは、殆んど同型の性格を具へてゐた。同時代に、同じく京都に棲み、倶に新らしい漢畫の世界の開拓者たる點に於て恒に此の二人は併稱されてゐる。二人の私交に於ても親しいものがあつた。蕪村に娘が一人あつたやうに、大雅にも一女があつた。かうして兩者には餘程似よつた境遇があつたが、只一つ著しく相違してゐるのは、兩者の妻の人物性格だつた。

玉瀾は、書法を夫に學び、また冷泉爲村に就いて和歌を善くし、其の他女藝一切に達してゐた。性格また風流幽雅にしてよく夫に仕へ、琴瑟頗る相和し、大雅と倶に奇行が多かつた。(此の事既刊拙著「本朝畫人傳」中池大雅傳に詳しければ略す。)彼女は何如なる生ひ立ちを持つてゐたかと云ふと、其の母は百合

子と云ひ、京都祇園[illegible]の茶見世の[illegible]子の[illegible]であつた。梶、百合相續いで祇園社の門前に茶店を構へ、また和歌をよくして、艶名洛中に高かつた。梶は梶の葉、百合は小百合葉と云ふ歌集を出した。すると其の頃、江戸の或る大身の旗本の次男で、仔細あつて家を追はれて放浪生活に入り、京都に来つて足を留めてゐた某と云ふ者があつた。其の武士と百合とは相思の中となつて、同棲した。そして其の仲に生れた娘を町子と云つた。男も今は大小を捨てゝ、日陰の身ながら楽しい月日を送つてゐた。かうして數年經過したが、或る時思ひがけなく江戸の男の生家から遙々と人が訪ねて来た。生家の方では、彼の父が歿し、更に父兄も死んだので、彼を伴れ戻つて家を相續させなければ家名も斷絶する場合となつたのだつた。そして、人の噂で京都に居ることを知つて、彼を呼び迎へに来たのだと云つた。男は圖らずも開運の日の目に遇つたけれ共、百合を捨てゝ江戸へ歸ることは忍びないので、一緒に伴れて行かうとした。然し百合は應じなかつた。

「妾のやうな身分の賤しい女を伴れてお歸りなされては、お家の恥辱でもあり、また、貴郎の御出世の邪魔にもなる。妾は娘を育てゝ暮しますから、其れ迄の縁は無い者と諦め、今後は全くの他人となりませう」

と潔く云つてのけた[illegible]。男は東へ歸つた。其後消息も絶えてしまつた。町子は成長して、大雅の妻となつた。

遙かに後年のこと、或る時京の祇園の茶店へ一人の立派な武士が訪れて来た。玉瀾に面會を求められると、武士は此處に

「拙者は貴女の兄です」と云つた。

玉瀾は驚いて

「妾は兄弟を有つた覺えは御座いません」と云ふと武士は、

「成る程。かう申したら、不思議に思はれるのも御尤もだ。これには仔細のあること。先づ一通りお聞き下さい」

と語つて物語る處を聞くと、玉瀾の父は、江戸へ歸つて首尾よく生家を相續した。そして他家から妻を迎へて二人の子をもうけた。其の長子が今此處へ彼女を訪れて来た武士であつた。

「近年父が歿して拙者が家を相續しました。それにつき前かたから父の口より、京都の斯く〳〵の處に其方と腹違ひの妹がある事を承はり、陰ながらお懐しく存じて居りました。然るにこの度び公用にて當地へ上つたに就いて、御身様のありかを探し求め漸う今日お尋ね申した次第」と武士は云つた。

玉瀾は、一旦は驚いたが、直ぐに心に決する處があつた。

は容を改めて武士に對ひ、

「お話の節はよく解りました。併し、わたくしは豫々母親から、そちには父はない、父は何處ぞに居るだらうと思うてはならぬ、と堅く云ひ聞かされて居りました。貴郎樣のお父上も、一旦其のをな子と緣をお切りなされたからには、をな子の娘とも赤の他人になつたので御座いませう、今更親子だの、兄弟だのと仰つしやられても、女の方では存ぜぬことでありませう、それも他人の事、わたくしには、後先きも一向覺えないお話し、突然に兄弟だなぞと云はれては甚だ迷惑致します。どうぞ直ぐ樣お歸り下さいませ」

と、きつぱりと云ひ放つた。武士も返す言葉がなく、顏をうち赤めて、すごすごと立ち歸つた。

玉瀾はかういふ强い氣象も有つてゐた。貧苦を少しも意に介せず、夏の暑い日などは、素つ裸で玉瀾が琴を彈じると、大雅がそれに合はせて笛を吹く――といふやうな生活をしてゐた。

大雅の家庭生活が幸福であつたほど、蕪村は家庭に於て幸福ではなかつた。蕪村の妻に關しては確かな傳承はない。彼の妻は黠性なりしと記されてゐる。蕪村が魚を釣り出て、空手で戾つて來ると、彼女は甚だしく夫を罵倒したなどといふ話しさへある。それまではいかがと思はれるが、とにかく、俳仙蕪村の配偶者としては餘り適任でなかつた婦人であることだけは確かである。蕪村が歿して、其の遺作が俄かに市價を高めると、彼の後家は、豫々聞いてゐた日光鉢石の齋藤氏を訪ねて行き、例の源平盛衰記狂畫二卷をば、我家へ傳へると稱して賺して貰つて來て、それを京都へ歸つて高價に賣り拂つた。そんな事から非常に評判を落した。

八

或る時、大雅堂から蕪村の處へ、非常に大きな松茸を一本贈つて來た。そして松茸の句を望まれたのに對して、次ぎの返事を送つた。

二白。丸山主水月溪其外社中一統よろしく申上候との事に候。且たにざくは重ねてしたゝめ上可申候。

花翰忝拜見仕候。如仰秋冷彌無候處、御兩君御淸福珍重に奉存候。愚老無爲にくらし申候。しかれば長さ〇(まる)さともに一尺あまりの古今未曾有の珍敷見事なる大の松茸一本御惠投被下、有がたし、是は何國の產物、何れよりの御到來に候や、愚老此年迄如斯のしたゝかなるもの見請ず、愚老案ずるに、斯は丹州弓削村の邊歟、又は河州弓削村の邊の山中より生出

たるものと□□□し、恐おほくも□□今世にましまさば□□ず笠人ものをと、社中上も大わらひの事に候。時に唯今は□其最中の所故に、くはしく御返事もなりがたし。あさいは月居又は無玉子兩吉頭にて御聞可被下候。何事も拝眉の節と申残し候。

八月二十八日　　夜半

東山　大雅先生　御答

倘々、是に何とのおほせ、御所望にまかせ吟す。

松茸や喰ふにもをしくやるもをし
松茸や大から大へ花の山
松茸や鱧づけにしていつ迄も

御一笑。

また或る時の手紙。

各々三々五々がすゝめもだしがたくて乃渡拝顔、夕方すゞみ今にわすれがたくおもしろく、又々今夜も願くは一力へ向、御出かけ被下候はゞ、珍重々々。月溪、月居の兩子は粗肴の用意、御樂も大極上々飛切の米の油川意させるつもりに候。何卒御内政玉瀾の君も、ほむらなく御同道下され候様に□こもつたらし

鶯□にちつらで□し□□
風□寄や木瓜花咲く迄まて

酒百藥長
酒百惡長

酒はたゞのまねば須磨の浦さびし
　すぐればあかし波風ぞ立

御一笑。御出門あるか、いやか、喜悪左右共御返事奉願候。

月溪宅より　蕪村

東山
　大雅堂主人　玉八下

應擧とは一層親しくしてゐた。應擧は幾何か蕪村に見□□つた。應擧は享保十八年の生れだから、蕪村に比べると十七年下だつた。應擧は寫生の一派を確立し、一代の流行を作つた。古來畫師も多けれど、東の文晁、西の應擧ほど、流行を極めた者はない。蕪村、大雅の如きは素より名利をすて□□□を外にし、ただ獨りこれを樂むのみ。世に疎い仙客であつた故、應擧、文晁には、これとやゝ趣きを異にし、其の□めたる□□□一世に立つ。

狩野土佐と對抗して爲す所あらんと欲したのである、而して、兩者俱に志を得て、畫名一世を蓋ふたのであつた。

應擧文晁に比較すると、蕪村は素より、大雅堂と雖も、其の畫の行はれる範圍は狹かつた。それは未だ文人畫の初期であつた爲めに、此の畫の趣味を解する者が乏しかつたのでもある。

應擧は非常に蕪村を尊敬した。蕪村も應擧の畫才を愛して、隔てなく交はつた。應擧が畫を描き、蕪村が贊を書いたものが澤山あつた。

或る時應擧が鯉を描いて、それへ贊をせよと云ふと

丸山主水がちひさき鯉をうつしたるに贊せよとのぞみければ仕官懸命の地に榮利をもとめむよりはしかじ尾を泥中に曳んには

鮎鮠や青砥もしらぬ山清水

應擧が猫を描き、蕪村が杓子を描いた。其の合作へ、蕪村が更に筆を取つて

猫は應擧がたはむれ也杓子は蕪村が醉畫なり

箒婆も猫も杓子も踊りけり

また、應擧が黑い犬を描いた圖に

おのが身の闇より吠て夜半の秋

同じく、蝦夷の圖に

昆布で葺く軒の雫や五月雨

蕪村の畫贊には面白いものが澤山ある。或る時自畫の、狐の法師に化けたる圖に贊を乞はれ

むかし五條わたりに、なまめける法師に供せられたりけるをうな有けり。世のそしりをいとひて、みそかなるところに住みけり。いろおとろへてかの法師かよはずなりけり。女いと身をうらみてゆくりなくなりける。

しら露の身や葛の葉の裏借家

居眠る人の鼻に紙捻をさす圖に

栗飯一椀の爲に五十年の歡樂をむなしくせんよりは、巣にあそび花に戯れ、さめて後うらみなからんには

春雨や菜飯にさます蝶の夢

呉春松村月溪は、畫と俳諧と兩道を蕪村から受けた。俳諧に於ても月溪は高足であつたが、殊に畫才は夙くより現はれた。蕪村は其の畫を評して「春や、人物は呉彬に愧ぢず、花鳥は林良に唐突す」とまで激賞した。月溪は名は春、字は伯望、通稱嘉右衛門、在白また允白と號した。三菓堂と云つたのは蕪村の號を襲いだのだつた。京の金座の平役の家に生れたが、若年の頃酒色に溺れ、島原青樓の遊女の文の代筆をして纔かに口を糊した時代もあつた。後或る事情に依つて攝津の呉服の里に隱れ

て此處で春を迎へた。ここで氏を呉、名を春と稱した。彼は始め望月玉蟾に就き、のちに大西醉月に學び、更に轉じて蕪村の門に入つて、畫と俳諧とを併せて修めたのだつた。

呉春は後更に應擧の風を慕ふて、その門人たらんことを乞ふと、應擧辭して曰く、われ如何ぞ君が師たるに堪へんや、たゞ共に學び、共に勵むべきのみと云ひ、是れより莫逆の友となつた。たまたま天明八年京都の大火災の後、暫く應擧と同居して、畫道を討論して遂に其の奥旨を悟つた、と云はれてゐる。天明八年と云ふと既に蕪村の歿後のことである。かくして呉春は蕪村の風を一變し、好んで寫生をなし、一家の面目を開いた。其の家が四條通東洞院にあつたところから、世人は此の一派を四條派と稱したのだつた。

呉春の畫は、墨を用ふること豐富で、筆の代りに多く刷毛を使ひ、圓轉滑脫、濃淡自在で、且つ頗る韻致に富んでゐた。作品には小品が多く、大作は極く稀れである。彼は性質が淡泊洒落で金錢を貪らなかつたから、畫はもて囃されても家は常に貧乏だつた。彼は天性器用で非常なる多藝だつた。歌、俳諧、書、茶事、圍棋將棋、三弦等に至るまで悉く堪能だつた。其の頃大佛の宮様といふ御方があつて、大層呉春を贔屓にされてゐた。宮様も呉春に就いて畫を習はれたが、此の御方も大層御器用だつた。或る時呉春がお召しに應じて參上すると、[illegible]た。宮様が月溪に向つて仰せられるには、其の方は笛を吹くさうだが、今日の技は未だ得て居られまい、すると月溪が、若年の時笛を少々吹き覺えたことが御座りました、と申し上げた。然らば笛を吹かれよと宮様が御手づから月溪に笛を渡された。月溪は押し戴いて笛を口に當てたが、暫くひまどつてゐるので、宮様初め其の座の人々、さては月溪笛が吹けると云ひ出して困つてゐるのに違ひないと云つて、くすくす笑つて見てゐると、やがて急に吹き出した音色は何とも云へず優れてゐた。益々吹きすさんだので、滿座の人々悉く感に入つてしまつた。後で宮様は、月溪が餘りによく吹いたる褒美として、五筆畫といふものをして見しようと仰せられて、左右の手と、口と、左右の足とに筆を執られて同時に其の五筆を動かして繪をかゝれて月溪に賜はつた。

九

蕪村の門からは、呉春を筆頭として、紀梅亭、田福、横井金谷、松本奉時等が現はれて最も畫名が高かつた。

紀梅亭、名は時敏、字は子恵、晩年九老と號した。京都の人であつた。彼は貧しくて、初め岩城藍田の家に寄食をしてゐ

たが、鐵山が其の畫才に富んでゐるのを見て蕪村に師事せしめたのだつた。棋亭は研鑽砥礪して終に其の妙を極めたが、天明の火災の時、難を避けて大津へ來て、遂に大津の人となつた。最も山水に長じ、また美人を畫き、又狂畫もあつて頗る出色の筆である。其の畫法が蕪村に酷似してゐるところから、世間で近江蕪村と綽名したくらゐだつた。

龍翁は大津石川町長壽寺の住職で、蕪村に學んで是れまた蕪村と酷似した畫を描いた。棋亭が大津へ來た後は同門の誼を以て殊に親しく交はつた。

横井金谷は、名は妙憧。金谷と號し、又蝙蝠道人とも云つた。俗に、琴谷と區別するがためにカナヤ、キンコクと云ふ人である。彼は近江の國栗田郡下笠村の生れで、父は小兵と云つた。

彼は九歳の時大阪大滿北野村宗金寺の住職圓應の徒弟となつた。圓應は其の叔父であつた。其の後江戸へ出て、芝增上寺袋谷文的寮に入つて勉學した。彼は天性俊邁機警、忽ち先輩を凌駕した。寮主が歎じて、此僧後日將に一宗の法燈を提げ、後代の明鏡とならんと稱揚した程だつた。處が彼は將に業の成らうとする間際に至つて、女色のために身を破り、寺を去つて兩總地方に放浪したが、此の間に彼れは千葉流の劍法を學んでその奥儀を究めた。

江戸に還つたが、偶々老たる親の事を想ひ出して歸省しやうとして、東海道をやつて來ると、偶然のことから三島驛で修驗者の群に投じることになつた。其の後諸所の靈蹟を探つて一旦故郷へ歸り、後京都へ行つて伏見月光龍寂門上人に從つて學び漸く北野金谷山極樂寺の住職となつた。金谷の名はこゝから出たのだつた。彼は繪が好きで、其の頃から蕪村に就いて學んだ。

享和の末に、金谷は再び江戸へ行くつもりで名古屋迄來た時、女のために足を留められて蒲焼町といふ所に家を持ち、一子を儲けた。其の後住吉町の大寶院に入つて再び修驗者となつた。そして名古屋で生涯を終へた。

金谷は、一度び戒を破つて蹉跌してからは、自暴自棄、放蕩不覊の人となつて、常に落々として世間を土芥視したが、狂草の書を頗る善くし、又時には謹嚴にして緻密なものもあつた。文政三年三河國加茂郡金谷村稱滿寺に於て描いた法念上人一代記の如きは、大畫箋紙四枚に、極彩色を施し、金泥を以て其の緣起を書し、殆んど三年の月日を費したと云はれてゐる。又、彼は彫刻と篆刻を善くし、點茶を好み、製陶を能くした。曾て瀬戸に遊んで泰巖院に寓し、陶工を指圖して自家用の器具を造

らせたが、世に其の法を傳へて、金谷流の名を殘した。彼は變幻きわまりなき男子だつた。

寛政年間、三寶院門主が修驗者を召し連れて大峯山へ登ると聞いて、金谷は馳せて京都へ行き供奉を願つて許された。金谷は笈を負ひ、錢を擔つて、臨時の力士となつて登山した。其の歸路某侯の藩邸に宿泊すると、接待の藩士が彼の大錢を見て嘲弄して「そんな大錢を持つて歩いても、重過ぎて恐らくは役には立つまい」と云つた。すると金谷は憤然として蹶起して、片手で其の錢を振り廻はした後、ハツシとばかり柱へ斬り込んだ。柱は半ばから二つに截斷され、凄まじい物音だつた。人々は懼れて膝を立つる者もなかつた。

彼は畫を張月樵にも學んだ。

張月樵も名古屋の人だが、同じく名古屋の丹羽嘉言は、蕪村に畫法を問ひ、且つ友として親しかつた。嘉言字は彰甫、通稱新次郎、福善齋、謝庵、聚珍堂、名士閣等の號があつた。尾藩の重臣竹中氏に仕へた。彼は幼より經史を讀み、詩文をよくし、書畫に巧みであつた。よく元明の風格を倣ひ、山水、人物、花鳥を描き、俊情高雅であつた。嘉言は大雅蕪村に次で南宗畫の性格を傳へ、其の典範を後世に示した人であつた。

嘉言は性行洒落、物に拘泥せず、恬淡にして、酒を嗜み、禪を愛した。[illegible]は畫を需むる者多く、常に依つて[illegible]せざる風があつた。仲には此の事を知らぬ者が、[illegible]と共に門人と合作の畫幅を携へて來て、其の後に落款を求めて[illegible]いと云つて頼んだ。嘉言は其れを諾はず、[illegible]を辭して、其の描かざる所以を書して送り返した。

又或る時、名古屋本町三丁目の菓子商[illegible]が人の爲めに[illegible]景の山水を描いた。すると、横井也有がこれを觀て甚だ賞して「唐も日本も同じ寒さかな」といふ句を其の上に題した。也有は尾藩の重臣で、俳壇に重きをなし、殊に俳文を能くするを以て聞えてゐた。されば其の賛を得ることは當時人々が最も光榮とする所だつた。けれども嘉言は甚だ面白くなかつたので、默つて筆を取ると、其の繪を黑く〳〵と塗りつぶしてしまつた。

蕪村の門人に[illegible]といふ俳師があつた。まだ若い頃の話だが、或る年信濃路を遊歴してゐる時、道に迷つてある田舍の村で行き暮れてしまつた。村と云つてもところ〴〵に僅かにぽつりぽつりと家があるばかりで、秋の末のことだから、夜風は冷えて、其の心細さは云ふ樣がなかつた。どこぞの家を頼んで泊めて貰はふと思つて行くと、一軒の農家がある。[illegible]

れて見るからにわびしげな家だが、粗朶の火が温かさうに燃えてゐるのが外から見える。豐谷は其の家へはいつて行つた。すると其處に破れ布子を着た主じと見える老人がゐた。

「私は旅の繪師ですが、今日途中で道に迷つて、この通り日が暮れて難澁してゐるのです。誠に申兼ねたが、今夜一と晩だけお宅へ泊めて頂き度う御座います」

「それは〳〵嘸御難儀なことで。だが、わしの家は御覽の通りの茅ら屋の上に、蒲團もなければ食べる米もない始末、お氣の毒だがお斷り申します」と老人は云つた。

けれ共豐谷は最早一と足も進む勇氣が失くなつてゐるので、主人が斷るのを押して泊めて貰ひ度いと云つて頼んだ。老人も最後に

「今も申す通り何も上げる物はありませんが、それを御承知ならお宿だけ致しませう、さあ、草鞋でも取つてお上んなさい」と云つた。

豐谷はやつと浮み上つたやうな氣持で、草鞋を取つて爐縁の側へ行つた。

「さあ〳〵、趺坐をかいてお樂になすつて下さい、こゝらの山家では行儀も作法もありませぬ」主じの老人は鐵棒で粗朶をつつき乍ら「時にお客樣は、何處の國のお方で御座りますかな」

「私は京都です」

「はァ京のお方で御坐りますか、それはゑらい遠方で。京都は禁廷樣がござらつしやる所で、大層ゑゝ所ださうだが、わしらはまだ行つたことが御座りませんだよ」

そんな話をしてゐるところへ、やがて土間の竈の邊りで夕餉の支度をしてゐた婆さんと其の娘らしい若い女とが側へ來て、山家者らしい慇懃さで挨拶をした。豐谷が見ると、母子共に身に襤褸を纏ひ、見るかげもない窶れた姿はしてゐるが、何處やら人柄の好い處が見え、はたちばかりの其の娘は、色が白くて、眼鼻立ちも尋常なら、起ち振舞ひも見苦しからず、滿更木樵や杣の娘とも思はれなかつた。

麥ばかりの飯を振る舞はれたが、それでも飢ゑた身には山海の珍味にも勝つてゐた。豐谷は直ぐに奧の一間へ行つて、木枕を借りて横になつた。晝の疲れで間も無く睡つたが、夜が更けると身に寒さを感じてふと眼を醒ました。すると、さめ〴〵と泣く聲が障子の破れから漏れて來るので驚いて、起き上つて樣子を窺ふと、老人夫婦が娘を中に置き、頻りに別離を悲しむ有樣である。豐谷は怪しく思つて其の場へ出て行き、

「あなた方は何をそんなに嘆いてゐるのですか」と訊ねた。

すると老人は涙を押し拭つて

「實は私共は、これでも以前は相應な百姓で御座りましたが、近年不幸に遇つて家は貧乏になり、ここへ今年で三年打續く不作の爲めに、御領主樣へ差上げる年貢の途が絶え、此の儘置けば私が罪を着て水牢へ入れられるといふ今の場合、家の財産には替へられぬと申して、此の娘が權堂へ身を賣ることになり、あすの朝は早く先方から迎ひの人が來て伴れて參ることになつて居ります。今夜ひと夜が親子の別れゆへ、未練に泣いて居たので御座ります」

と悲しい事情を物語つた。雲谷も思はず貰ひ泣きをした。そして、かうして、此の家へ泊り合はせたのも何かの因縁であらう。何んとかして此の娘を救つて遣り度いものだと考へたが、旅繪師の身でもとより、金の有らう筈もない。彼は暫く腕を拱いて考へてゐたが、やがて行李の中から、一枚の花鳥畫を取り出して來て、主じに示し

「私は京都の蕪村といふ先生の門人だが、あんたが此の繪を見本に持つて廻つて、此の邊の物持の人達を頼んで繪の註文を取つて來ては呉れませんか。勿論骨は折れることだが、併しそれがうまく行けば娘さんを泥水に入れずとも濟むことです。繪を描く方は私が只で引き受けませう」と言つた。

老人夫婦は喜んだ。權堂の方は一先づ斷ることにして、夜が明けるおやぢ、爺さんは持つて廻つて歩いたが、雲谷の繪に心を神も憐愍したのか、それとも一家の不幸を思はさせたかつたのか、うまい具合に二三軒から註文を取つて來た。雲谷も喜んで、早速揮毫に着手した。師から傳授の筆を揮はず、円山の技に心血を打ち込んで描き上げると、忽ち評判が高まつて、今度は諸方からの依頼が殺到するといふ有樣で、數日の間に貸借の金額以上を稼いでしまつた。老人夫婦や娘の喜びは一方でなかつた。親子の者は雲谷を神樣のやうに敬つた。雲谷は猶數日滯在して、依頼の繪を悉く描き上げ、それをも全部主じに與へて、さて愈々暇を告げて立去らうとすると、主じは雲谷に向つて

「お前樣に折り入つてお頼み申し度い事があるご」と云つた。

此の上何を頼むのかと思ふと、何卒此の儘當家の婿になつて貰ひ度い、それが厭なら娘を貴下に差し上げますから、いづくの果までも伴れて行つて、生涯お側に置いて使つて下さりませと、夫婦は老の眼に涙を浮べて頼むのだつた。是れには雲谷も弱つた。傍で聞いてゐる娘の心も憐れだが、さればと云つて永いても謂れない事情もあるので、氣強く振り切つて、又もや行手定めぬ旅路に上つたのだつた。

十一

安永五年は蕪村六十一歳つた。其の年彼は洛の東北一乘寺村の芭蕉堂を再興した。甚だしく名聞を厭ふた蕪村にとつて、是れは殆んど唯一の公的事業だつた。彼の「芭蕉堂再興記」を茲に揭げて、筆者の勞を省くことゝする。

芭蕉堂再興記

四明山下の西南、一乘寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼ぶ、階前より翠微に入ること二十步、一塊の丘あり、すなはち芭蕉庵の遺跡なりとぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行き雲停り、樹老い鳥睡りて、頻りに懷古の情に堪へず。やうやく長安名利の境を離るといへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず。鷄犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を沽ふ爐も遠きにあらず。されば詩人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢をしのぐまうけも自在なるべし。抑いつの頃より、さは唱へ來りけるにや、草かる童麥打つ女にも、芭蕉庵を問へば、必ずかしこを指す。むべ古き名なりけらし。さるを人其故をしらず。竊に聞く、いにしへ鐵舟といへる大德、この寺に住みたまひけるに、別に一室を此ところに構へ、手自ら雪炊の貧をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしける。芭蕉の句を聞いては泪うちこぼしつゝ、あたふたと忘機逃禪の鄉を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其比や蕉翁山城の東西に吟行して、淸瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に、薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に、寒夜獨行の鉢叩を憐み、あるは鷗を着て誰人ゐますとうちうめかれしより、きのふや鷄を盜まれしと、孤山の風流を慕ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、麻の袂に曉天の霞をはらひ、白河の山越して、湖水一望のうちに、杜甫が眥を決し、つひに唐崎の松朧々たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都俳諧のたよりよければとて、折々此岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなりたまひしのち、かの大德ふかくなげきて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこびて亭の名つくるなど、異くにゝも、さるためしは多かるとぞ。しかはあれど、此處にて蕉翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず。ましてかい給へるものゝ筆のかたみだになければ、いちじるくあらそひはつべくも覺えね、住侶松宗師の日ごろや、

うき我をさびしからせよと、わび申されたる古人のおとづかたきは、此山寺に入りおはしてつすさみなるよし、此頃まで世にありし古老のふみのみちにも心かしこきが物がたりし侍りし。されば露霜のきこえやらぬ墨の色めでたく、年月流れ去り、水くきの跡などかのこらざるべき。さるを無功徳の宗風こゝろ猛く、不立文字の見解まなこきらめき、佛經聖典も捨てゝ長物とす。いかでさばかりのもの貯へ藏すべきなんど、いと騒々しき狂漢のためにいたづらに煙壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほころびにけん、びんなきわざなりなど、かなしみ聞ゆ。よしやさは追ふべくもあらず、唯かゝる勝地にかゝる餘き名の殘りたるを、あいなく打捨おかん事、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人々をかたらひ、かくの如くの一草屋を再興して、ほとゝぎす待つ卯月のはじめ、をじかなく長月の末、必ず此寺に會して、翁の高風を仰ぐことゝはなりぬ。再興發起の魁首は自在庵道立子なり。道立子の大祖父坦庵先生は蕉翁のもろこしのふみ學びたまへりける師にておはしけるとぞ。されば道立子今此の擧にあづかり給ふも、大かたならぬすく世のちぎりなりかし。

安永丙申五月望前二日　平安夜半亭

蕪村謹記

[illegible]は、誹言より賤し[illegible]時に、彼の細み[illegible]、俳詞より[illegible]して[illegible]合はもく、蕪と俳諧との一致であつた。

行春や紫さむる筑波山

尼寺やよき蚊屋たるゝ宵月夜

山は暮れて野は黄昏の薄かな

などは何れも繪畫の着想であらう。蕪村の藝術論は、彼の「春泥集序」に於て委曲が盡されてゐる、蕪村の藝術を理解する上に於て是非共一讀を要する文であると共に、廣き意味に於て古來最も優れたる藝術論の一篇である。次に全文を引用する。

春泥集序

柳維駒父の遺稿を編輯して、余に序を乞ふ。序して曰く、余曾て春泥舎召波に洛西の別業に會す。波すなはち俳諧を問ふ。答曰、俳諧は俗語を用ゐて俗を離るを尚ぶ。俗を離れて俗を用ゆ、離俗の法最もかたし。かの何がしの禪師が隻手の聲を聞くといふもの、則俳諧禪にして離俗の則なり。波頓悟す。却問、叟が示すところの離俗の說、其旨玄なりといへども、尙是工案をこらして、我よりしてもとむるものにあらずや、しかして彼も知らず我も知らず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答曰、詩を語るべし、子もとより詩を能

す、他にもとむべからず。彼疑敢問、夫詩と俳諧と、いさゝか其致を異にす　さるを俳諧を捨て詩を語れといふ迂遠なるにあらずや。答曰、畫家に去俗論あり、曰、畫去俗無他法多讀書則書卷之氣上昇市俗之氣下降矣學者其愼旃哉、それ畫の俗を去るにも　筆を投じて書を讀ましむ、況や詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。波則悟す。或日又問　いにしへより俳諧の數家各々門戸を分ち風調を異にす　いづれの門によりてか其堂奥をうかゞはんや、答曰、俳諧に門戸なし、只是俳諧門といふを以て門とす、又畫論曰　諸名家不分門戸　門戸自在其中。俳諧亦かくの如し。諸流を參してこれを一囊中に貯へ、自ら其能物を撰び　用に隨て出す。唯自己の胸中いかにと顧る外他の法なし、しかれども常に其友を撰びて　其人に交るにあらざれば　其郷に至ることかたし。波問　其友とするものは誰ぞや、答、其角を尋ね　嵐雪を訪ひ　素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日々此四老に會して　わづかに市城名利の域を離れ　林園に遊び　山水にうたげし　酒を酌んで談笑し、句を得ることは專ら不用意を貴ぶ、かくの如くすること日々、或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめの如し。眼を閉ぢて苦吟し　句を得て眼を開く。忽ち四老の所在を失す。知らずいづれのところに仙化して去るや、恍として一人自ら佇む、時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳諧の郷なり。波微笑す　つひに我社盟に歸つて句を吐くこと數千　最麥林支考を排斥す。余曰　麥林支考其調賤しといへども、工みに人情世態を盡す　さればまゝ支麥の句法に倣ふも　又同日の一筋ならざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論なし、猶元白を捨てざるがごとくせよ、波曰　叟我をあざむきて野狐禪に引くことなかれ、畫家に吳張を畫魔とす。支麥は俳魔ならんのみ、ますく支麥を罵て進て他岐を顧ず　つひに俳諧の佳境を極むべし。をしむべし　且病に臥して起つことあたはず、形容日々にかしげ　湯藥ほどこすべからず。預め終焉の期をさし　余を招いて手を握つて曰　恨らくは叟とともに流行を同じくせざることを、言終つて涙潸然として泉下に歸しぬ。余三度泣曰　我俳諧西せり我俳諧西せりと　右の言葉は　夜半老話といふ冊子の中に記せる文なり夜半老話は、余が相遇の隨筆にて、たゞもろくの人と討論せしことを雑錄したるものなり　然るに其文をそのまゝにて此集の序とすることは　誠に故有り、此文を見て波子が清韻落なるや、其ひとゝなりを知つて、その句の僞りなきことを味ふべし　かの虎の皮を引かぶつたる羊に類すべからずといふを、洛下の夜半亭に於て六十二翁蕪村書く――

俳人の流として云へば、其の好尚は必ず奇物珍品を愛賞することに昔から一致してゐたが、蕪村には其の癖がなかつた。或人が、咸陽宮の釘隱しだと云つて、脇差の鍔にして腰にもはなさず自慢してゐた。成る程金銀象嵌を以て花鳥を鏤めた古物で、千年の昔も偲ばれるやうな物だつた。が、蕪村はそれを見て、後に人に向つて「然し、何を證據に咸陽宮の釘隱しなどと云つたものだらう。荒唐の沙汰だ。却つて咸陽宮の釘隱しなぞと云はなければ、其の儘で見事な物だのに、殘念なことだ」と云つた。

名取川の埋れ木を旅舍へ置き去りにして來て常盤潭北に罵られたのも其の一例だが、其の潭北が持つてゐた高麗の茶碗は、義士大高源吾が秘藏したもので、源吾から潭北は貰つたのだが、其の茶碗を潭北が又蕪村に讓つた。併し蕪村は是れについても「まことに傳來著しきものだが、何を證據とすべきか。後にはかの咸陽宮の釘隱しと同じ類になるだらう」と云つて人に呉れてしまつた。かういふ處は餘程理屈屋で、迷信を嫌つた。

さうかと思ふと極く無邪氣で、率直で、小兒のやうな處があつた。彼は時々錢を工面しては富籤を買つた。それを門人がけなして

「先生のやうな仙人でも、富籤みたいな下等な投機をする事が面白いのですか」

と笑ふと、[illegible]

「面白いといふわけでもないが、俳諧は一生の樂みになつて、俳諧と繪を思ふ存分樂しんで居度いよ。それさへ出來れば此の世に思ひ殘すことはない」と云つた。

けれども富は皆で中らなかつたので、蕪村の如きは妨げられなかつた。終身貧乏して通した。或年の暮れに、借金取が大勢押し掛けて來るので、蕪村は其の應對の煩はしさに堪へられなくなつて、玄關の障子に貼り紙をして

　首くゝる縄切もなし歳の暮

と書いた。門を入つて來た借鬼も是れを見ては舌を巻いて、何んにも聞かずに立ち去つてしまつた。

彼は餘程滑稽の才があつた。狂歌をよくすると同時に、俳句にも滑稽的なものがあつた。併し、蕪村の本性は決して滑稽的ではなかつた。磊落で、瀟洒だと云つても、其の中に深い沈靜があるのだつた。滑稽的俳句は寧ろ彼の遊戲であつたが、遊戲と雖も、野卑に陷らず、美的感覺を失はなかつた。今其の例をあげて見よう。

　酒を煮る家の女房ちよとほれた

　蝙蝠や向ひの女房こちを見る

　月今宵めくら突當り笑ひけり

行春の尻べた掃ふ落花かな

人の世に尻をすゑたる瓢かな

梅閣に禪引する主かな

禪に團扇さしたる亭主かな

或る年蕪村は讃岐の丸龜に遊んで、其の地の妙法寺の襖を畫いた。蘇鐵山十得、水墨蘇鐵、山水等の大作が今もなほ遺つて、俗に蕪村寺の名を傳へてゐる。京都慈照寺の襖繪、水村圖、群仙圖等は、彼の代表的の作品である。

蕪村は本姓谷口、後與謝と改め、名を長庚のち寅と改めた。字は春星、蕪村、三菓堂、夜半亭、碧雲堂、紫狐庵、草々舍、四明、老窠、臥庵、落日庵等の號を用ゐた。最も初めは蕪靑と號したのを、後に蕪村と改めたのだつた。釋蕪村、又は謝蕪村等と云つた。

田能村竹田は、山中人饒舌に大雅蕪村を評して「大雅逸筆、春星戰筆、二老各有レ所レ稽古。大雅正而不譎、春星譎而不正。然均是一代作レ顯之好敵手。」と云ひ、更に「嘗觀二春星秋山行旅圖一、用筆傳彩、全然明人、至二其屋宇橋梁一、布置點景、取二諸邊邑僻境所レ有之寔景一、故景新法古、用レ意最深、高名下無二虛士一、洵不レ誣也。」と云つてゐる。

十一

蕪村は一人の娘をば非常に愛してゐた。娘の名をきぬと云つた。其のきぬに良緣があつて望まれたので他家へ嫁入りさせた。其の頃或人へ與へた手紙に

愚老儀も、當月むすめを片付候て、甚いがしく、發句も無之無念にくらし申候。併良緣在之宜所へ片付、老心をやすんじ候。來春よりは身も輕ろ相成候故、よし野卍杖のおもひしきりに候。さ候はゞ、浪花へも立寄、寛々おめにかゝり可申候。

云々とある。嫁の良緣を頻りに喜んでゐた有樣が想像される。處が、良緣在之宜所と思つたのが、行つて見ると案外良緣でなかつた。先方の男といふのが非常に貪慾で家風が甚だ面白くなかつた。蕪村も不快でゐたところへ、娘がれうまちか何かで手の痛む病ひをしたが先方では碌に醫者にも掛けて吳れない。劇しく立ち働きをさせる。そこで娘は堪り兼て、暫く暇を貰つて里方へ歸つて養生した。が、其の時いろ〳〵先方の苛酷な事をふた親に話したので、蕪村はすつかり怒つてしまつた。そして、其の儘娘を留めて置いて、到頭離緣をさせてしまつた。此の時ばかりは蕪村も腹が立つたと見えて或人へ遣つた手

紅に

なすぬ事先方より今あらけの事のみにて、しほらしき心しれなく、愚意に齟齬いたし候事多く候ゆゑ、取返申候。もちろんむすめも、先方の家風しのぎかね候。うつうつと病氣つき候故、いやいや金も命ありての事と不便に存候て、やがて取もどし申候。何角と御親節に思召被下候故、御知せ申上候。御令内様へも宜しく御傳言、愚妻もくれぐれ御致聲仕候。

と先方の親爺を罵倒して、鬱憤を漏らしてゐる。

併し、娘に關してばかりでなく、元來蕪村は好人物なので人を信用し過ぎて、度びたびに煮湯を呑まされるやうな目に逢つたらしい。門人の中でも、大魯、月居などは、一時は非常に愛され信用されてゐたものだつたが、やがて不都合な事仕出かして蕪村にゑらい迷惑を掛けたので、到頭破門されてしまつた。其の邊の消息も、次の手紙でよく想像することが出來る。

猶御安靜可御座成奉珍重候。しかれば先日以書狀略得貴意候。定て御被見被下候半と被存候。此度愚老門人月溪貴境遊歷仕候。しばらく足を休め候様に御取持ち被下候はゞ、於愚老大慶に被存候。前以得貴意候通り、此月溪と申す者は至て篤實の君子にて、中々大魯月居が如き無頼者にては無御座候問、少しも世話に相成不申[illegible]物にて御座候。もちろん[illegible]さみに以夜仰付、はいかいもよほどおもしろくいたし[illegible]衍なども上手にて候。彼是許用たのもしく[illegible]者も恐るゝ計の若者にて候。大祭月居に御手この[illegible]成候へ、又候添状仕候も愚老面目もなき仕合に候へ共、此月溪に左様の者にても無之、大祭月居が破れを洗ひ申度候。くれぐれも御令御鼓吹被下候はゞ忝奉存候。右可得貴意かくの如くに御座候。倘書中を以て追可得貴意候以上。

九月十四日　　夜半

士川様

蕪村は畫は月溪に傳へたが、彼の俳諧の衣鉢を受け繼いだ者は高井几董であつた。

几董は几圭の子で、通稱小八郎と云ひ、京都の人であつた。其角の風骨を慕つて晋明と號した。別に春夜樓と云ひ、[illegible]後詐善居士と稱した。蕪村の死後江戸へ來て、早野巴人が住んだ石町の庵跡を襲ひ、三世夜半亭となつた。

此の外に俳諧の高弟としては、江森月居、佐[illegible]、[illegible]、寺村百池、田福、大魯、維駒、我則等の徒が最も知られてゐた。

天明三年は芭蕉が九十回忌に當つてゐた。其の年、粟津、東山、一乘寺村の三ケ所に於て七日間の法莚があつた。蕪村は六十八才であつた。

九月の末、蕪村は門人達と共に宇治の奥、田原の里へ茸狩りして遊んだ。若い人達はえものを貪り争ふて行くので蕪村はひとり後れて、心靜かに探し求めて行くと菅の小の笠ほどなる松茸を五本まで得た。「あなめざまし、いかに宇治大納言隆國卿は、ひらたけのあやしきさたはかいとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや」と蕪村は云つて。

　茸見よや拾遺の茸の露五本

宇治行の後蕪村は何となく健康が勝れなかつた。それでも十月五日には淀河の夜船に乘つて大阪へ行つた。舟中夜もすがら風に冒されたのが體に障つて、大阪に着く頃から劇しい腹痛に惱んだ。直ぐ旅宿の床に就いたが、門人の志發、東菑の二人が就き添ふて、藥湯の世話をまめやかにしてくれたので、病は忽におこたりを覺えた。

　手にとらじとても時雨の古草鞋

大阪から歸つて來ると其の儘病床に臥してしまつた。持病の腹の病で、毎日劇しい腹痛に惱んだ。醫療もさまぐに手を盡したけれどもきゝめが現はれなかつた。門人達は交るぐ訪ひ慰め、或は病床に就き添ふて看病した。

冬枯の寒さもしぐれがちで、蟋蟀の聲さへもいつしか弱つて絶えてしまつた。老病は日増しに重つて行つた。

門人の維駒が、亡父召波の十三回忌の追福の爲めに、父の遺稿や其の他を集めて「五車反古」と題して板に刻することになり、蕪村に其の序を依賴してあつた。蕪村はたうから此の事を心にかけてはゐたが、病のために約を果さずにゐた。が、或日つひに病苦の中で筆を執つて其の序を起草した。是れが彼の絶筆となつた。

或夜、几董や月溪や、門人達が四五人病室に就き添ふて、四方山の談をしてゐた。すると蕪村は人々に向つて、

「おれは、かうして病で苦しんでゐても、好きな道だから句案を忘れたことはないが、夢は枯野をかけ廻るなどといふ妙境にはどうしても入れない。して見ると芭蕉は餘程豪傑だつた――」と云つて笑つた。

十二月の中ば頃から劇しい下痢が續いて、それと同時に腹痛はほとおさまつたが、食欲が更になく、衰弱の度が加つて一日毎に頼み少くなつた。妻や娘や重なる門人達は片時も病床を離れずに看病してゐた。

廿二日三日の夜は、いつよりも强く呻いてゐた。最早永くは

みつたいと思つたので、[illegible]、せめて[illegible]

のち〳〵の事をそれとなく[illegible]とする

と、蕪村は、

「いや〳〵、別つに云ひ遺す事はない。わたしはつら〳〵過ぎこし方を考へると、野總あたりから奥州の邊鄙な土地を永年遍歷して、其の間には道で病に罹つたり、或時は飢じい思ひもし、暑さ寒さに苦しめられ、心細い思ひにも辛い目にも度び度び逢つて來てゐる。其の時の事を思へば、今はかうして安樂に都の中に住んで、病氣に罹つたと云つても、醫者にも藥にも事を缺かず、其の上皆の人から誠を盡して手厚い看病をして貰ふといふのも、どういふ前世の約束か知らぬが、まことに有難いことだ。此の上に望むことはない――只、身の定まらぬ娘の行末が心がかりでないこともないが、わしが死ねば、そこらの人達の情もあらう。餘計な事を考へるのは、觀念の妨げになるは」

と云つて、蒲團を引かぶつてしまつた。

廿四日の夜はかへつて病勢が靜まつて、言語も平常と變りなかつた。けれども人々は油斷なく見まもつてゐた。すると蕪村は急に月溪の名を呼んだ。月溪が枕頭に蹲ると、

「病中の吟がある、早く筆を執つて呉れ」と云つた。

[illegible]

冬鶯むかし王維が垣根かな

うぐひすや何こそつかす藪の霜

と聞えたが、病床のやうすであつた。しばらくあつて

しら梅に明る夜ばかりとなりにけり。

それが蕪村の生涯の言葉の終りで、其の儘眠るやうに往生をとげた。母子の嘆きは云ふも更なり。此の四夜[illegible]わかちなく附き添つてゐたゝもからも、一度に聲を揚げて泣き沈んだ。

やがて曉の戸を敲いて此の事を告げると、在京の門人達や其の他親しくした人々がしばらくの間に馳せ集まつて來た。かねての遺言があつたので、病床の夜の物を取り拂ひ、淸い毛氈を敷いて蓆とし、平常衣の垢の付かないのを撰んで着せ、居士衣を装ひ、紗巾を冠らせ、生ける人の通りに袵は左に上で、頭北面西右脇臥しにして、香を焚き、華を供へ、僧を迎へて人々唱名念佛し、ひそかに亡骸に殯とした。

世の中は慌だゞしい年の暮と云ひ、日出度い春を迎へる前だつて、當分は病中の體にもてなして、枕頭を取り拂ふ頃門人へ披露した。隣國の門人は足を空にして驅け集まり、親疎となく知己舊友のとひとぶらふ者で、草庵に人を以て埋められた。正月廿五日に再葬の儀式を行ひ、遺骨は金福寺の芭蕉庵の墳の外に

とりおさめた。

茲に門人几董がものしたる無村終焉記「から檜葉」の最後の一節を掲げて、此の傳の終りとする。

我も死して碑にほとりせん枯尾花と、かねて此の山の清閑幽景をうらやまれしかば、新鶯の柳上に遊び、杜鵑の衡宇を過るより、山路の鹿、田家の雪、をのづから生業の畫圖に遊びて、東嶺にのぼる月はとこしなへに法の燈を照し、前栽の草木はとことはに匂ひて不斷の花を捧るも、かりそめならぬ奇緣なり。

主なる引用書(大野洒竹著與謝蕪村。德川三百史中、岡野知十述與謝蕪村。水島東治校訂俳聖蕪村全集。俳諧逸話全集等)

▽わが交友錄(三)

右は本號に掲載する筈にて既に諸家の玉稿を寛集したるも、頁數の都合にて次號へ繰延ばしたり。筆者並びに諸君諸彥の御宥恕を乞ふ。

廿世紀の謎 世界の驕兒 米國及び米國人の研究（第二部）

米國文學論

野口米次郎

米國の中堅は中西部である。其處には革命的な自由がある。進化的に變遷して來た修養の何物も知らない、故に物として粗雜な未成品で、建築に譬へると荒削のまゝの家屋の如きものである。進化的は妥協的の別名である場合が多く自儘滿足な樂天主義に落ちる……米國の中西部にはそんな弱い所が少しも無い。米國の中西部には革命的自由がある、故に何處までも無技巧である、無裝飾である、前後に無頓着である、無邪氣である。米國は政治的にも又文學的にも、中西部の御陰で洋々たる將來を持つことが出來る、若い希望に燃えることが出來る。東部は傳統的である……其處には修養がある、理整がある、完成がある、結論がある。然し東部が中西部から吹いて來る自由と處女地にのみ屬する心の宿を知らないとすると、東部は精神的荒廢の表象として米國史上に記憶されるかも知れない。然し東部は中西部の生氣潑剌たる力の補充を得て、更新の路を開拓することが出來る。實際の意味で、米國を背負つて立つて居るものは中西部である。東部だけを知る人は米國全體を知るもので無い。

米國中西部の大都會は市俄古である。政治的にはどうかは知らないが、ある文學上から見ると市俄古は紐育以上重要な都會である。三十年前の市俄古は、一時間に幾千頭の牛や豚を殺すので有名なストック・ヤードの都會であるに過ぎなかつた。白晝強盜のピストルが聞えたりした都會であるに過ぎなかつた。然るに今日の市俄古は、壯大な市俄古大學或は公立圖書館或は美術館を以て誇る都會である。其等以上に、市俄古は所謂・詩

しい詩』を以て誇る都會である。市俄古と新しい詩、いな『中西部と米國の新詩』位興味のある文學問題は無い。

小十年も前に市俄古の新詩はかう宣言して居る『徹頭徹尾詩の根柢を郷土に置かねばならない。北米合衆國に於ける眞實な生活狀態としつくり抱合合一して居らねばならない。』『自然の理として我々の使用にのみ適する新句法新慣用語を作つて、一層更に流動的生命を表現せねばならない。それは英國の批評家などが未だ曾て夢想だもしなかつた所のものであらねばならない。』『我々の新しい詩は所謂土着的音調を實現して、鐵道新聞活動寫眞通俗小說流行歌地方的紛擾或は博覽會或は騷々しい我我の都會、有りとあらゆる實際的狀態は悉く我々新詩人の題材となるであらう。』『我々は西へ〳〵と進んで歐羅巴を全然見捨てねばならない、さうすることで我々は他日新文學を完成することが出來る。この新文學は一地方的色彩を擺脫してホヰトマンとマーク・トウエンが着手した文學の繼續であるであらう。我々は公衆と共に歩く、何處までも公衆の必要を滿たさねばならない。そしてそれは決して公衆に服從する意味で無く、公衆の心を我々の新詩の心とする新解釋の上から來た結論である。』この有力な宣言が何處まで文學として實證されたかを私は知らない。古い信仰と感傷的態度とを離れて新文學が始まるといふ主張は、世界を通じて同じであるが、何處の國が確實に完全に文學の新時代に入つて居るかは明言されない。市俄古否米國中西部も『なにか新しい文學を產出しよう』といふ苦惱と煩悶に對しては敬意を拂ふに足る。然し何事によらず革命的心理は何であるかといふに、自己滿足の破壞から悲觀の深い意識に目覺め、其悲觀を樂天化させようとする努力に外ならない。故に其行動は急激である、又多分の皮肉も混へられて居る。市俄古の新しい詩に不純な點があるといふことも自然であらう。

今この市俄古の宣言をホイトマンの挑戰狀とを比較すると非常に興味がある。ホイトマンはかういつて居る『有ゆる美は麗はしい血と腦髓から來る。獵人樵夫早起きする者庭園果樹園田野の耕作者の熱情的な執着、男らしいもの即ち海上生活者や御者に對する健な婦人の愛、光線と戶外に對する熱情、凡てのものは誤りのない美の認知が古い多樣な形で顯はれたものである。』『大地と太陽と動物を愛せよ、金持ちを輕蔑し頼る人に施物を與へ、愚鈍なるものや狂人に味方をせよ、君の收入と勞力を他人に捧げよ、壓制者を嫌ひ神樣に關して議論するな、人民に對して忍耐で寛大であれ、知られたる或は知られざる何物にも又如何なる女にも男子等にも脫帽するな——力強い無教育者と共に、家庭の幼者と母親と共に行けよ——學校や寺院や書物

て教へられるものを滿たし、君の愛を偉大にするものを取り去れ、さうして君の眞の肉は大きな詩となつて、言葉の上でなく唇と顎の無言の線に於て、君の眼の睫毛の間君の體の各の動作と關節とに於て最も豐かな影響を持つであらう。詩人は不必要な仕事に時間を浪費してはならない。詩人は地面は既に耕され肥料を施されて居ることを知るであらう。他人はそのことを知らないとしても詩人は知つて居る。詩人は直に創造に從事するであらう。詩人の信念は騙れる所の何物の信用をも支配し凡ての愛着をも支配するであらう。」から云ふ大膽で正直な宣言が心の根抵となつて、市俄古新詩人の宣言が出來て居ると見ると、彼等がいふ如く、彼等の仕事はホヰトマンを繼續したものといふことが出來る。世界何處でも、新しい詩はホヰトマンから出發して居るともいへるし又ホヰトマンへ歸つて居るとも見ることが出來る。

然らばこの中西部の「新詩」はどういふ米國詩人で代表されて、その人々は何を語つてゐるのであらうか。中西部の詩人で既に一家を成して居るもの少くも十指に餘る。だが、中で一番有名な三詩人を上げると エドガー・リー・マスターズ・カール・サンドバークとバチユル・リンゼーである。又この三詩人の中でも特に我々の興味を引くもの は最初のマス ターズである。彼は當年五十九歳で既に終焉に近づいて[illegible]國人であるさうである。彼は[illegible]として[illegible]として、これまで彼の經歷はさう華々的で無かつたらしい。彼の詩人的名聲を一躍英米の兩世界に高からしめたのは・ゼ・スプーンリバー・アンソロヂー の一詩集であるが、其前既に數冊の出版をして居る。この不思議な名前の附いた詩集は何であるかといふに「スプーンリバー」は聞く所に依るとイリノイス州にあるハノーバーといふ一小村落を模した架空の場所であつて、この詩集に納められてゐる全詩はスプーンリバーの墓地に立てられてゐる碑銘墓誌、詰り其處に埋られて居る人物がそれぞれ眠から目覺めて自分等が經驗した生活を赤裸に懺悔自白したものである。スプーンリバーが何處であつても無くてもいゝ譯である。又米國の中西部の村落ならば何處であつても差支へないのである。詩集に納められて居る詩の總數二百十四、即ち二百十四人が特殊な告白を詩でする譯である。二百十四の性格を發揮するといふことは非常な驚異である、バルザックでもマスターズ以上に成功して居らない。今この詩集を讀むと、悲痛な性質が出雜で簡單な地方的色彩で奇蹟的によく顯はれて居る。一見すると直にこの詩集は中西部の産物だと知れる位特殊な雰圍氣で滿ちて居る。マスターズの現實的態度は勿論佛蘭西人より深[illegible]

人に近い。更に正確にいふと、特に性を取扱ふ場合の如きは、徹頭徹尾ストリンドベルヒの態度であるといふことが出來る。諸君は私と一緒に彼の一二篇を讀んで、いかに痛ましい深い現實の影が漲つて居るかを見ねばならない。一篇『エルザ・ワートマン』の如きは彼の作風と特質を知るに最も適當なものである。

『私は獨逸の百姓娘で、
靑い眼、薔薇色の頰、苦無く强壯でした。
私が最初働いた所はトーマス・グリーンの家でした。
或日奧樣が留守であつた、
主人が勝手へ這つて來て、腕で私を摑んで、そして私を接吻した。
私は頭を仰向けた……私共兩人は
何をどうしたのだか知らなかつた。
私は私の身がどうなることやらと泣いた。
泣いて泣いて泣き暮したので、秘密が段々洩れ出した。
或日奧樣のいふのに、
「もう解つてゐる、又お前を困らしやし無い。それに子供が無いから、それも引受けてやらう。」
(主人は奧樣に百姓家を與へた。)
奧樣は其處へ隱れて、
ぢきに子持になるなんと風說を立てた。
萬事よく進んで子供は産れた……主人も奧樣も親切であつた。
其後私はガス・ワートマンに結婚し、幾年かたつた。
だが……政治的集會で私がハミルトン・グリーンの演說を聞いて、
感激のあまり泣いて居るとでも側のものは思つたでせうか、
さうぢや無い。
さうぢや無い……私は云ひたかつた、
「あれは私の悴だ、私の悴だ」と。』

『ベンジヤミン・パンチーア』と題する一篇でマスターズはかう書いて居る。

『この墓場に辯護士ベンジヤミン・パンチーアと
彼の不斷の仲間、慰藉者友人であつた犬のニグが横はつて居る。
友達や子供や男や女が灰色の路を辭つて、

一人〳〵死んで仕舞つて、僕ひとり殘り、
酒場の仲間飲み仲間のニグと共に取り殘されて仕舞つた。
生命の眼には僕でも抱負もあり光榮をも見たものだ。
所が、僕より生きながらへた僕の家内は僕の心を欺いた、
さうして其欺が僕を死に至らしめた。
一度は意志强かつた僕も敗れ、面白くなくなつて、
陰氣な事務所の奥の部屋でニグと一緒に住むやうになつた。
僕の胸の骨の下にニグの骨ぽい身がくつ付いて居る……
話は語るに及ばない……どうでもよい、あゝ、狂氣の世界よ！』

市俄古は今日世界に誇ることが出來る文化の設備を持つてゐるにしても、嚴重な意味では都會を成してゐない、未成品の都會であるかも知れない。然しだ、其處が市俄古の將來を前にして居る最大理由であらう。都會としてこの市俄古位人間の研究性格の觀察に便利な場所は無い。市俄古はもとより清潔な宗教的殿堂で無い、美人も醜婦も惡人も善人も金持も貧乏人も一緒くたに坩堝に入れこれで煮られる都會である、即ち坩堝の都會である。この特質をカール・サンドバークは「市俄古」と題する一篇で歌つて居る。

『世界への豚の屠殺者、
道具製作者、小麥の堆積者、
鐵道を弄ぶ者、國民の運送屋、
騷がしい喧騷の喧嘩好きな
肩巾の大きな都會。
人はお前は背德だといふ、私はこれを信ずる、お白粉塗つた女が瓦斯燈の下で百姓の青年を誘惑してゐるのを見たからだ。
又人はお前は惡者だといふ、私は答へる、さうだ、實際に私は强盜が人を殺し逃げて又人を殺すのを見たからだ。
又人はお前は殘忍だといふ、私の答はかうだ——女や子供の顏に狂暴な飢餓の印があるのを見た。
かう答へてから私はこのわが都會を冷笑する連中に向ひ、冷笑しかへしてかういつて居る……
生きて居る下等だ强い狡猾だと頭を擧げて自慢することを喜ぶ都會が外にあるなら、見せて貰いたいものだ、
不和な小都會と際立つて違つた、堆積する仕事のなかで引力

ある惡龍を吐きつゝ勞働する背の高い大膽な强打者がある。
舌を甞めづつて飛附からうとする犬のやうに獰猛に、荒野と鬪ふ野蠻人のやうに狡猾に、
無帽で、
シヤベル動かし、
破壞し、
計畫し、
建築し、
建築し破壞し又建築し、
煙をかぶり口一杯芥にまみれ、白い歯をむき出して大笑ひし乍ら、
運命の恐ろしい重荷を背負つて青年のやうに大笑ひし乍ら、
ついぞ敗けたことが無い無智な鬪爭者のやうに大笑ひし乍ら
手首の下に脈がある、肋骨の下に國民の心臟があると法螺を吹き〳〵大笑ひし乍ら、大笑ひし乍ら！
青年の騷々しい喧噪の喧嘩好きな大笑を笑ひ乍ら……半分裸體で汗みどろになつて、豚の屠殺者道具の製作者小麥の集散者鐵道を弄ぶ者國民の運送屋であることを誇つてゐる。』

かういふ詩（假令原文は譯文より十倍も巧妙に出來て居るにもせよ）が假に二十年も以前に書かれたとしたならば、誰も詩であるか無いかを即答出來まい。時代は變化した、いな變化しつゝある。米國たる所は最早や東部に無い、中西部にあるといふ自信の上に立つて、現實を幻想化しようとするのが所謂中西部の新詩人の目的である。實際中西部の現狀を知つて彼等の作品を讀むと、如何にも自然であると思はざるを得無い。彼等の詩に觸れると英國傳流的文學の修辭は虛飾に過ぎないの感がある。英詩の傳統は彼等の恐ろしい鐵鎚に遇つて粉碎せられるの感がある。彼等中西部の詩人は其宣言でいふ如く、古い傳統的修辭を忘れて、新しい簡單な言葉で流動的生命を表現しようとするのであるが、彼等は元來英詩の傳統を血に持つて產れた連中で無い。實際をいふと、彼等はそれを捨てるの忘れるのといふ必要が無いのである、彼等はそれを持つて產れなかつたもの共である。從つて彼等の使用し得る英語の言葉は、自然に簡單なもので決して學んで單純化したもので無い。何故かといふに、彼等幷に彼等の祖先は一地方のみからの移住者で無く、一人は獨逸から又一人は伊太利から、更に又一人は英國からといふ工合で、彼等の人種が混合して居るから相互の感情や思想は單純な言葉を謀介とせざるを得無つたのである。若し新英詩は

[illegible]ならないとすると、其[illegible]に就て中西部の米國は既に一日の長があるといへる。

米國の文學少くも詩歌が今日の變化を見るに至るまでに清教文學全盛時代から七八十年の歳月を經て居る。米國の中西部が大西洋岸に匹敵されるやうな文化を作つて、國の中堅となるに至るまでに小百年もかゝつて居る。今七八十年前に逆に戻つて、米國文學が清教からどういふ工合に移動推移して來たかの歴史を辿つて見たい。

清教文學は所謂植民地時代文學の延長である、既に延長に過ぎないとすると、其文學に獨創を發見することが出來ないのは當然である。この文學を裝飾する二大文學者の一人であるロングフエローは確に善良な借用人であつたに過ぎない。彼が其當時受けた高等教育は、容易に彼をして他國の文學者の財寶と同化させて居る。彼は歐洲を漁つて美を尋ね廻り、之れを發見すると直に自家藥籠中のものとした。彼に個性が無いことを論ずる以前に、彼の時代は文學的個性を必要としてなかつたことを注意せねばならない。彼は「國家的」であるよりは「世界的」であらねばならないとして、「どんな國でも善良な詩人は國家的でない、世界的である。彼等の根は産れた土地の中にあるが、彼等の技はすべての人民に同じ言葉で語るといふ非愛國的なものゝ中で延びねばならない」と[illegible]に世界的といふことに實に國家的といふことゝ[illegible]く、實際に於て眞實に國家的であつて始めて世界的となることが出來るといふことを知らなかつた。彼は外形丈けを見て精神の洞察者で無かつた。彼は獨逸から形式を借り、西班牙から熱情を借り、佛蘭西から技術を借りそれに加味するに英國の[illegible]を以てすると理想的の世界心が完成すると信じた。かういふ說教も啓蒙時代には必要であつたであらう。然し先驅者としての彼の價値は歴史的のもので、彼が善良な傳統の使徒としての態度は尊敬に價する。彼は豫言者でなかつたが、彼は彼の時代が持たねばならないと信じた高尙な趣味に對する宣傳者であつた。彼は平凡な廣い詩の廣小路を歩いて、「更に高く」の旗を掲げた。中産階級の人間とは何か。彼等には寧ろ安定がある德性がある、家庭の人として彼等は柔和である、感情に走らない、如何な偶然事に遇つても熱烈な行爲をしない。この階級をロングフエローは完全に代表した。彼に狂人の熱愛と詩人の熱狂が無かつたが、何處までも善良な紳士であつた。

彼は社會の人として幸運兒であつた。彼は婦人を崇拜して友情に厚く時の人たれからも愛せられた。さうして年を取るに從つて彼の幸運は増されたかの感がある。彼は人生の悲哀を悟ら

ず、又悲劇に依つて人生は醜儒になるとも信じなかつた。彼は人間の愛と苦痛を歌つては居るが、宛も僧院で香を焚く隱者のやうに其香はしい雰圍氣をすかして人間を眺めた。彼に戀愛の詩があつてもそれは中性的なものが多い。然し彼の智識は彼の幸運をよく整理することが出來た。もとより彼は靈感を受けて詩を書いた人で無いが、所謂平靜な抒情詩人で、文學的努力と自制力で自分の目的を完全に達した人だといへる。彼は單純である、感覺的である。熱情的であるが決して常識の範圍を出ない。彼は學者であつたに係らず終生心の單純を維持した點は最も尊敬すべきものであると信ずる。

然し諸君がもつと嚴肅な人生の教訓を得ようとするならば、ロングフエローを離れてエマソンの殿堂に入つて彼が投げる哲學の觀幅の前に跪かねばならない。殿堂の內部には靜かな幕が垂れ、其處で終日沈思して居ると諸君は無限の變化から本原的合同の靈境に入ることが出來る。眼前に見るエマソンの顏は靜謐ではあるが寂莫で無い。彼の心の中は詩で滿ちて居る。然し彼が哲學と詩との中間に彷徨した時、彼は自分が哲學者であるか乃至は詩人であるかを問題とした。彼は時には詩人を哲學者の上に置いたやうに思はれるが、彼は永遠の音樂が與へられたとは信じたのではない。又哲學的思想が自分を反省の純白な境地に導くといふことも、彼は作詩上に大きな障碍だとは考へなかつたであらう。自然は燐火で生きて居る。神聖な靈魂が水の上に動き、山の上に休息し林中を散歩して居る。自然には了解することが出來ない唯想像することだけが出來る偉大な計畫がある。さうしてこの完全な計畫の存在する所はいつも正常であると彼は信じた。彼は滿足な微笑を忘れなかつた尊敬心の深い樂天家である。彼は萬物を一貫する生命を疑はなかつた有神論者である。彼のこの遍在性（アムニプレセンス）に對する强烈な信仰が文字と顯れる時、其處に幻想は幻想を呼ぶ文字がある。比喩は比喩を産む文字がある、神祕は神祕を誘ふ文字がある。さうして其等の文字に朗々と響く金石の聲があつて、それが忽ち熱と變じ光線と變じ風と變じ又雨と變じて眼前を走るかと思はれる。

今私共はエマソンの殿堂に集り彼の說く所を謹聽するであらう。彼はいふであらう「私は遍在性の充實に對する意識を信條とする。如何なる國の書物でも、又如何なる國の宗教でも、善良でありさへすれば、私は受入れるのに躊躇するもので無い。無宗教とは何であるか……神を失つた人間の孤獨位醜惡な不健康なものは無い」。彼は超絕哲學者と云はれて居る。然しそれは彼が「永遠無終」の最高權威を認めたといふことに外ならない。彼位、實際に於て智識を古今東西に漁つた人は無い。外的

[illegible]門[illegible]へ[illegible]なした[illegible]た
い[illegible]にエマソン[illegible]トーの[illegible]ヤリ
フト、その歸納論攷にエピクテーテスの[illegible]、これに加へるに
ストア派の道徳倫理有りとあらゆる世界の智識を持つて居た。
彼はプルタークの道徳論にも共鳴したが、又同時にモンテーン
一派の世界的觀念と大失にも贊成して居る。彼はスウエデンボ
ルクの神秘主義を誤解したが、それに飲まれたので無い。[illegible]
の修辭派の文辭的語を喜んだ傾向にあつても、彼自身これを
眞似たので無い。彼は宇宙の靈性を尊重したけれども、それが
人間社界を輕蔑せしめるに至らなかつた。彼は活眼を開いて世
界人生を眺めたが、自分はコンコードの一村民であることを忘
れ無かつた。彼の哲學に果して新しいものがなかつたかといふ
に、私は「無し」と答へねばならない。彼はロングフエロー以
上に借用人である。彼の一生は『天下に新しいもの無し』とい
ふ言葉の生きた標本であつた。彼は終生一研究者で滿足した。
嚴重な意味に於ける創造者で無かつた。彼は世界智識の[illegible]
である。丁度[illegible]のやうに借りた智識を善用したに過ぎない。
彼は世界から集めた智慧で天國を[illegible]しようとした。彼の信念
は自由であつて、彼の思想は明るい。彼に微細な部分[illegible]の不滿の
上に[illegible]、時の米國人に與へる[illegible]の習慣に加へ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]人間生活に[illegible]へて[illegible]
宙の法則を與へこれに依つて[illegible]人[illegible]
なかつてある。
然し[illegible]は聞も無く[illegible]
ノであらう。答はいふ、ロングフエロー[illegible]文學を[illegible]
か！ エマソンの倫理に何の價値があるか！ 我々は[illegible]
は只ロマンスである。我々は[illegible]と神秘との間を[illegible]
道者である。我々は運命といふ魔法使が[illegible]中に[illegible]
て、時と場所とを超越して其の[illegible]國に[illegible]いた。我
我の信ずる文學の形式に於いて、熱情は[illegible]である。我々は
神秘の前に跪く異端者だ。この驚くべき文學の[illegible]者は[illegible]
ある。彼は卓越した頭の所有者であるが、彼の文學的[illegible]には
雜音がある。彼は輕い文學を平凡に[illegible]なかつたが、[illegible]
偏た作品の重要性を制限した嫌もある。彼が詩人[illegible]に生き
れず[illegible]に想像的作品を適當な[illegible]間に[illegible]した場合、[illegible]
理智的作家で無い。彼はニユウイングランドの[illegible]者に比較す
ると、不適な環境に立つて居つたが、その文學は[illegible]
[illegible]された所が無かつた[illegible]とした[illegible]。彼は[illegible]
に[illegible]自制力を欠くロマンティック[illegible]人を[illegible]

易い情緒は堪へず運命に支配された。商人的にいふと、如何に窮乏な時でも彼は人から助けられない偏執な心を持つて居つた。友人とも爭ひ遂には絶交する、自分で敵を作つてその敵と喧嘩する、遺傳でもあつたであらうか不衛生で、常に大事な場合に成ると『だらしない自暴自棄』に誘れるといつたやうな男であつた。基督教文學者の眼から見ると、彼は確に悪魔の權化であつたに相違ない。然し彼の標榜する『美』は北方文士の倫理と感傷を破るに十分であつた。『詩は喜びであつて眞理を目的とするもので無い』といふ彼の宣言は、エマソン一派をどれだけ驚かしたか知れない。

彼は美の音樂的創造者である、所謂趣味の子供であつて思想の教師で無い。英詩壇廣いけれども、言葉の音樂家として彼以上の詩人は無い、又單純な言葉で音樂を最高潮まで發達させた點でも、彼は天下一品の感がある。彼の詩の雰圍氣は憂欝を極めてゐる。丁度死の暗い林中で孤獨の表象として谷水が泣くやうに、彼の詩の中で悪魔や地中の小さい神樣や奇怪な道化役者が寂しい獨語をして居る。美の極致は悲哀である。人間が地上生活を失つて未知の氣高い境地に入る瞬間に、悲哀な美はその絶頂に達する。彼はあらゆる美の表現中で美人の死が最も高尚であるとした、音樂的な異端者的レフレーンで私共の心に訴へる。あゝ、彼が言葉で表現する色彩のりに何といふ偉力があるであらう。彼が言葉で暗示する模樣美に何といふ光明と陰影の混合があるであらう。彼は言葉通りの異端者である、

かういふ異端者の一撃を受けた基督教文學は直に顏色を變へた。北方の文學者は自分共はアゼンス人である、又基督教は即ちアゼンで、凡て米國文化の御符はニュウ・イングランド人の手から出ると信じた。彼等は排他的で時代の變化を知る心の餘裕を持たなかつた。然るに一度彼等が彼等以外にも米國に、自分等のものと違つた文學の主張があるといふことを知つた時、彼等の一地方的文學の殿堂の屋根は落ち壁は破れつゝあることを注意した。さうして其時は既に米國文學の中心は基督教だといふ信念は衰へ、商權が漸次南へ／＼と流れて紐育へ達した時、文學精神も商權の後を追つて南下して居つたのである。文學的ニュウ・イングランドの權威は亡びて紐育がそれに取つて替つた……それは今日から六十年ばかり以前の事である。

紐育は世界的都會である、複雜な世界的コンミュニチーに入り本質的幻想から離れようとした都會である。この危險を警戒した詩人にたれでもないホヰトマンである。彼は米國を自個表現の背景として取扱たのでない、彼の文學的態度は米國の幻想更新の上に據つて居る。時代の精神が原始的理想を忘れようと

することは無い、常に[illegible]
ならない、さうしてこの理想は現實の中から創作すべき[illegible]
といふが彼の主張であつたであらう。過去の理想を[illegible]して[illegible]
來の暗示を歌つた。ホヰトマンは豫言者である。豫言者として
決して「無」から「有」を取出す手品師ではない。新しい生命
を過去に發見して將來の上にこれを有りたらしめるものが即ち
豫言者である。

米國の不變不動の理想が飛躍して流動的表現を文學の上でし
たものが、彼の有名な詩集「草の葉」である。彼の外的表現は
多種多樣であるが、彼の根柢に横はつてゐる思想は單純を極め
て居る。表面的には戰鬪的であり挑戰的であるやうに見えて
も、彼の内部精神は、丁度大海の深い底の如く、靜寂である單
調の休憩を持つて居る。彼は抱合的で萬物を受け入れてはゐる
が、決して妥協的で無い。又譲歩的で無い。彼は肯定か否定かの
二つ丈けを所有した偉大な文學者中の偉大なものである。彼の
表現は表面的に理智的に見ゑるが、人間感情が總の感激性から湧
き出る樣に極めて感激的なものである。彼の詩集は殆ど日記
の一種であると見る事が出來る。日々のテンパラメントに不同
用があるが如く、彼の作品に於ても不断[illegible]ある變化がある。彼
は自我主義者である。彼は偉大な信念を[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]的な[illegible]である。
彼は民衆主義を唱へて居るが、人間[illegible]
んだものであるが、[illegible]の問題に如何に[illegible]
い。[illegible]決定せられると信じた[illegible]此の上に豫言者の[illegible]
[illegible]心しては成らない、[illegible]國内の問題を解決する[illegible]。
私共人間は他に依つて打ち勝たれ[illegible]ものとなれば成らな
い、とホヰトマンはいつて居る。其の[illegible]
た宗教家となつたともいふことが出來る。彼は平和の詩人で無
かつた。彼は戰鬪を是認して居る。彼は何時までも好んで人生
の目的を達すべきものだと思つて居る。平等或は、平和或は
博愛といふ言葉を單に靜的に了解しなかつた。彼はいつて居る、
「自分の叫は戰爭、叫である。自分は活動的反逆を養育する。
自分と共に行くものはよく武裝しなければならない。」彼の人生
觀は勿論物質的のもので無い。

考へて見ると彼も偉大なロマンチシストであつたであらう。
彼の信念は現實の要求[illegible]て居ない[illegible]。彼こそ[illegible]
[illegible]的理想を[illegible]間に[illegible]して[illegible]

切味を欠いて居るのも當然であらう。其點が確に今日の中西部の新詩人が以て遺憾とする所である。彼等が異口同音に「ホヰトマンから出發して踏みだせ」と叫ぶ所以で無くて何であらう。今ホヰトマンの詩と前記「市俄古」の詩のやうなサンドバーグの作品とを比較すると、何處に相違點があるかと容易に發見することが出來る。文學に於ける時代の相違は如何ともすることが出來ない。時代は日々刻々變遷して行く。米國の文化も大西洋岸を離れて内地々々へと及んで行く。太陽は東から西へと進むやうに、文化も東から西へと移動するのを原則とする。爾で今日米國の新しい詩の中心が紐育に無くて、中西部の市俄古にあるといふことは自然と云はねばならない。少くも大西洋岸の文化は今日中西部まで及んで居る。

二十年前にはインデアナポリスが米國文壇の中堅であると誇たものだ。其頃は其處から卓越した詩人或は小說家がぞくぞく輩出して活躍して居つた。然るに今日市俄古を以て中心として居るといふことが確實な議論であるとすると、更に更に西へ進み、近い將來にロッキー山を越え、大西洋岸に匹敵するやうな文化の花が太平洋岸に咲くであらう。これは單に詩人の夢でなく、確な根據を持つ議論である、當てにする事が出來る想像である。さう成つた場合に太平洋岸に國を持て居る諸國はどんな態度でこの幸運なる時代を迎へるであらうか。

世界戰爭が終結した時佛蘭西の有力な一雜誌は將來に於ける太平洋の價位を論じてかう論じて居る、現下に於ける列國の出來事は、世界主要の貿易を刻々に且つ速かに大西洋から太平洋へと移動を促して居る。昔、地中海が國際貿易の中心であつた。喜望峰迂回の航路と米國經由貿易路とが發見されなかつたうちは確にさうであつた。然るにこれ等の發見されて後は、大西洋が世界通商の中心と變つた。苟も大西洋で覇權を握るものは即ち世界の隨所に於て貿易の覇權を握つたと同樣であつた。兎もかく貿易の中心が地中海から大西洋に移つたのはさう古い事ではない。然れども今や大西洋の覇權は刻々消滅しつゝある。そして遠からず太平洋がその位地を取つて代るであらう。歐洲開戰以來出現した幾多の革命の内でこれこそ偉大な世界的革命と云へる。太平洋は東に合衆國の西海岸を洗つて居る。合衆國はアラスカ購入以來北は米大陸の北端から南は墨西哥に及んで居る。太平洋は更に加奈太の西海岸を洗つて居る。加奈太はほゞ米國に等しい面積を有し前途に洋々たる未來を待つて居る。人口は合衆國だけで一億に餘り偶然の出來事が阻止しない限り、次代或は次々代になると必と倍加する。米國獨立二百年祭の頃にはその人口は少くとも二億位に達するであらう。それに加へて

今日の[illegible]

れた、合衆國は、[illegible]を[illegible]と同時に、[illegible]

ては大西洋を越えて歐洲と相對して居る。故に[illegible]國は日本の貿

用して巴奈馬運河を開鑿しこれを世界通商路の樞要に提供した。故

に米國は、[illegible]亞細亞に對し他方歐洲に相對するのみならず、歐洲の貨物を亞細亞へ、又亞細亞の貨物を歐洲へ送るに至る經路を自分のものとして居るのである。最後に米國は食物金屬其他和戰兩時に共に必要とするあらゆる物資を産出することが出來る。米國は治くその海洋を開いて他の國に滿足しない所の若い有爲の人民を收容してこれに自由權を與へて居る。かくて若し米國が今世紀に於て前世紀よりも一層の進歩を遂げず和戰兩時に於て他の如何なる國よりも更に上位の國家となることが出來ないならば、それこそ世界の奇蹟であらう。

最近まで露西亞大帝國と呼ばれて來た北部一帶の大きな地域は今では一無住の地になるに過ぎないが、間もなく現在の狀態から脱して世界貿易の最も重要な場所となることは勿論のことである。該國の天産はあらゆる方面を通じて豐富である。太平洋を横切つて廣大な貿易を行ふであらう天命を擔つて居るといふことが出來る。日本は今やその本國のみを以てしては其發展した[illegible]を何れ[illegible]、支那朝鮮の可なり大きな土地を加へた。

ては[illegible]

さく[illegible]

兩者の間にある[illegible]ない[illegible]

も驚くべき人口の國である。[illegible]

易く非常に貧しい商品[illegible]る國民で、内實には非常に富んで[illegible]

して居る[illegible]支那は實に最大市場の一であると云へる。唯この國は重要な任務を負ふ指導者を欠いて居る。勿ろ日本は兩國の立場から又廣知の國であるといふ關係から、更に又支那は日本に取つて文化の母國であるといふ理由から、支那の利益を擁護し保護する責任者を以て任じて居るのである。

この議論は世界的商業の上から言ひだちのであるが、[illegible]はこれを其儘に文學に應用することが出來る。太平洋の將來に於ける運命と希望は極めて豐饒である。從つて文學上の將來も其地位に相應しい新運命を開拓する事に相違ない。米國の[illegible]西洋岸で[illegible]が商權を失つて紐育に文學理の權威を[illegible]うに、太平洋の商權に文學が後を追つて、米國の太平洋岸が[illegible]國文化が驚くべき文學の花を咲かすに至るであらう。[illegible]はさうなるべきを希望して居る。米國の文化が今日中西部まで[illegible]て[illegible]しい時を以て商業の中心となつて居るが、又[illegible]西へと動くといふ法則に從つて、近い將來に[illegible]

きて太平洋岸に達するであらう。大西洋が一小さた池と呼ばれ居るやうに、太平洋も一條の廣くない池と呼ばれる時が來るであらう。さういふ場合に私共日本人は太平洋を隔てゝ、亞米利加に唯一時に間接する、又シベリヤを通じて三週間以内に歐洲と相握手することが出來る。文學的から見た日本の地位は重大である。若しその場合になつて、彼等西洋文化に直接貢獻する所が無かつたならば、それと二國は第三流以下に落ちたものと思はねばならない。それから米國から云つても、最早や東洋文明を度外視することが出來ない時代であつてみれば、彼等米國人の文學的將來は如何に東洋文明を受入れるかの一點に懸つて居ると云へる。これまでも米國文學に於ける東洋の影響は顯著であるが、將來はそれがもつと現實的なもの直接なものと成るであらう。

今日米國太平洋岸の都會は大西洋岸にある都會に比較すると、少くも四流五流なものと云はねばならない。然し米國文化が太平洋岸に到着した時には、オペラも美術展覽會も書籍の出版も大西洋岸なみに盛大を極めるであらう。現に南部加洲のホリウッドは全世界に活動寫眞を提供して居る。太平洋岸からマーク、トウェン、ハート或はミラーなどといふ大文學者が輩出して米國文壇を背負つて立つたことがある。それは三十五六年前のことだ。然しそれとても、理想主義を標榜するやうに僅に太平洋岸が文學國となる事を暗示して居るといふまでゞ、十五六年前には斯的の大文學者を後援する公衆を持たなかつた。然し米國文化が大西洋なみに太平洋岸へ來る時には、賢明で同情ある公衆があつて時代の傾向を奬勵維持し得るであらう。

三四十年も過ぎて、米國の世界的文化が太平洋岸まで來た時一般米國人の精神狀態も同化し開放し、騒々しい不整頓な彼等の血も環境とよく調和合同するに至るであらう。今日と比較すると彼等の文化は十層倍も力強く圓熟したものとなるであらう。反省の力で彼等の感激性も程よく安定するであらう。今日の米國文學少くも中西部に於ける新しい詩は、現實を誇張しすぎ心理研究を遊戯視する所が無いではない。人生の力說は與へないとしても、理智に傾く傍說說明に落ちすぎる。精神の飛躍を缺いて居るのは都會生活に即し過ぎるからであらう。然し將來の米國文學は人生と自然との眞實な融和で築かれねばならない。現實の複雜から高翔した生命であらねばならない。宇宙の神性が避けることの出來ない變化をする自然の法則であらねばならない。今日の中西部殊に市俄古では他の場所より遙に現實的人間生活が激烈であるといふ理由から新文學の中心と成つて居るとしたならば、將來の太平洋岸は如何なる點から文學の隆盛を來す

…るであらうか。

太平洋の波は茫々幾千萬里、シャスタ山に[illegible]…方の守護神である。太平洋岸中部の自然的代理はシャスタ山から向つて、長蛇のやうに南へと延びて居る。北にクラマット河、南はサクラメン河の二つが永劫に流れて居る。旅行者はヨセミテ溪谷に入つて自然の壯嚴を崇拜し、其處を貫くマーセット河が四周の草花を映す綺羅を見て讃美せねばならない。ヨセミテは大空に聳く大岡のオルガンを奏して暴風雨のやうな音樂を歌つて居る。此處には自然の音律を香氣の中で走らせる樹木がある。頭を擧げて高い空を眺め、頭を下げて自分の立つてゐる大地に感謝するであらう。かういふ自然で惠まれた場所から顯はれる文學は當然中西部の文學とは異ならざるを得ない。中西部の主張する新現實主義乃至は人生派は行きつまる時が來るであらう。

これが[illegible]…るであらう。[illegible]外にないかも知れない。さうしてこの西部が[illegible]洋岸の若き文學であるかも知れない。

私共東洋人は宇宙現象の神秘、我々に對する人間と自然との眞實な因緣を信ずる。私共が自然に入る時個性の辯護を忘れて宇宙に於ける人生の場所を知るのである。私共は自然を默想する。それは自個の認識を重大視するからである。かういふ東洋人の文學的態度は、將來の米國人に向へて外形的無機主義から誅れさせ、彼等に自然を了解する秘密を開かせるであらう。彼等が眞實に私共を理解するといふことは、彼等の文化が太平洋岸まで來た時に始まると思ふ。さうして此の東西の情融は、こゝに四十年の歳月を待たねばならない。

米國に於ける婦人參政權運動秘史

石井　滿

一　女の國の女權運動

アメリカは人も知る女尊男卑の國である。女の國である。この女尊男卑の國、女の國に女權運動が存在してゐるといふ

と自體が既に一つの大きなパラドックスでなければならない。しかも數多い女權運動史を讀むで行くに從つてこの女の國の女權運動がなかなか以て一と筋縄でゆかぬところを觀ると、アメリカと云ふ國の正體がますます怪しくなつて來る。

「最も早く女權の尊重されたこの國で、惡戰苦闘の結果、漸く婦人參政權が實現された千九百二十年には、既に世界の二十六箇國が婦人參政の實を擧げてゐる。」

斯う云つてある女權論者は慨嘆した。女王の誇り（プライド）を有つて居るアメリカの婦人達も實際女權運動に與つて、街頭へ現はれて見ると、自他共に許してゐた女尊男卑の道徳習慣が、要するに一個の社交的禮儀にすぎないことを痛感したことであつた。ホテルのエレヴーターで婦人が乘り合した場合には煙のやうに脱帽するアメリカの紳士達が、婦人が手袋でも落さうものならいち早く拾ひ上げて、帽子に手をかけながら恭しく渡してくれる紳士達が、而して食卓においてはレデーの着席するまでは椅子の脇に佇立することすら辭さない紳士達が、一度社會的の人格者として婦人も亦政治上の權利を要求する場合、紳士的なあらゆる禮讓を遽かに一變して冷い「否」の態度に出るばかりでなく、萬策を講じてもこの要求に耳を傾けまいとする。

社交場裡における女王がこの現實に觸れて悲憤に近い憤りの聲を上げたのは無理ではない。

「この國において婦人は財産を所有し、相續を爲し、其の事業を經營して大過なく、社會的におどろくばかりの仕事を成しとげてゐるけれども、何人も未だ嘗つて婦人を市民として考へたことはなかつた。」

「多くのアメリカの婦人達は近ごろまで自分達を愛せられ保護されてゐるものと自任してゐた。また彼女達は一種のセンテメンタルな幻想に囚はれてゐた。即ち米國の男子は彼女達の欲する何物をもよろこんで與へるものであると考へてゐた。」

「しかるに婦人達が一度活動の世界に出でゝ何物かを要求する場合、婦人達はアメリカの男子は結局そんな寛大な精神の持主でなく、ボンボンよりも高いものを要求すると忽ちにして刎ねつけられると云ふことを悟つたのであつた。」

アメリカの女權史の初期を物語るに方つてレタ・チャイルド・ドラ Rheta Childe Dorr: What Eight Million Women Want は斯う云つてゐる。

アメリカの婦人參政權運動が次第に熾烈になつて、示威運動の大行列が、オレンヂだの、黑だの、黄だの、碧だの、紫だの、グリーンだのの旗を押し立てゝ、米國の市や町を練り歩いたり、其の運動者が、紐育[illegible]をしたり、女權論者が石鹼箱

い[illegible]一たび[illegible]

群衆が[illegible]のように[illegible]たり、[illegible]たり、またこの問題が[illegible]の人々に[illegible]たり、[illegible]聞が毎日この問題について書き立てたときでさへ、多くのアメリカ人は其れを恰も毎日の朝飯のように心得て、如何にしてこの問題が生じ、果して何處から生れて來たものであるかと云ふ疑問を起すことさへもしなかつた。

この婦人參政權運動の長い行列を街角で眺めてゐる想像力の鈍い人間は、この長い行列がどの方面から、またどこから來たかも知らず、またもとより彼れの祖母や、曾祖母とどんな關係があるかと云ふことには思ひも及ばなかつたし、同時にこんな人間には、これ等の示威運動の行列だの、群衆の會合の騷動だの、宣傳飛行の繰返されることだの、日々の新聞のそれ等に就いての報道だのと云ふものは、一つ一つ無關係な事柄であつて、結局社會歴史とは無關係な現象のやうに見えたのであつた。

實際、云ふまでもなく、かかる現象は何れも一[illegible]に[illegible]て居り、[illegible]社會歴史を形るべき現象であり、また他の社會歴史と密接不可離の關係に立つてゐた

二　男性專權論への反逆

何故かと云へば、婦人參政權の要求は[illegible]行はれて來たこの[illegible]運動の[illegible]な要求である。一つの[illegible]運動とは、政治を民衆の手に返さ[illegible]とするデモクラシーの運動の其の一つであり、男子の[illegible]のがれ出ようとする。而して其の男子の保護は、從來、法律や宗教や、慣習がすべて[illegible]として要求して來たものであるが、其の羈絆からのがれようとする婦人の運動が其の一つである。而して婦人が政治上の權利を要求することは、一つの[illegible]潮流の相交錯するクライマックスとして、[illegible]いものであつた。

誰れもが云ふように近世の政治運動は政權の[illegible]である と云ふにつきてゐる。而してその點において多く[illegible]男子は專制政治の傳統と戰つて成功した。殊にアメリカは建國[illegible]から云つても、まさしく此の專制政治の傳統を永久に葬りさつた國である。しかしながら婦人は尚ほ世界的に男性の[illegible]服させ、之に服從を強いられ[illegible]た。[illegible]アメリカにおいても[illegible]らこの幾年の事[illegible]して、[illegible]反對したと云ふことは[illegible]

い。

何故かならばアメリカが曾つて英本國から獨立を叫んだときの尊貴なるモツトは何であつたか。

「代表權なき者に課稅することは暴政である。」

「文明の政府は其の正當なる統治權を被治者の同意より得る。」

と云ふことが彼等の建國の大精神ではなかつたか。勿論これは最初植民地として母國に對する叫びであつたには相違ないが、其の當時の人達にも、又百數十年を經過した後年の多くの人々にも、かかる要求をなす所のものが一面において之を他に與へることを好まないことを知つてゐた。またこの大精神は之を男子にのみ適用して婦人には之を拒絕して來た。これ救ふべからざる自家撞着ではないか。アメリカの婦人參政權可否の論議の代表的なものの一つを紹介して見よう。

一八七二年にミス・スーザン・ビー・アンソーニーが外の六人の婦人と共に、ニューヨーク州のロチエスターで、宣誓をして投票したことがあつた。勿論このときは未だ婦人に參政權が與へられてゐない時であつたので、ミス・アンソニー以下は不法の投票をした廉を以て收監される。この事件は長い紛爭の後に高等法院で有罪と決した。

恰もこの頃、ヴアジニア州にも同様な事件があつた。これはことから刺戟されて、各州において立法並に憲法の改正をすることが論じられる。比較的古い歷史を持ち、多數の人口を有する州が極端に保守的で發達が遲々として居り、なかにも州憲法の改正は其の機會が甚だ稀であつたからである。また聯邦憲法の改正も其の一方法として考へられて來た。このときに許否の論議はかなりはげしく行はれたがまづ反對論の方から云へば、

一、婦人は未だ自ら參政權を要求してゐない。

二、婦人に參政權を與へても極めて限られた範圍だけしか其の權利を利用しまい。

三、名譽ある婦人は多く參政權を利用しないであらう。

四、婦人は愛せられ、結婚して家庭の人となり男子に依つて扶養さるべきものである。從つて、男子が婦人に代つて其の權利を行使すれば十分である。

五、婦人には子女を育てる義務、家政を整へる責任がある。そしてこれは參政權よりもはるかに重大な責務であるから婦人には參政權は與へない方がよろしい。

六、婦人が參政權を得ると、彼女達は政治に熱中して、家政を忘れるであらう。

七、婦人は戰爭の場合戰鬪員となれないから參政權をも行使

[illegible]有益ではないのである。要するに婦人に參政權を與へても利益がないからよした方がよいと云ふのである。

然るに之に反して婦人にも參政權を與ふべしと云ふ人達は之等の諸點を一つ一つ論駁してゐる。

一、婦人が選擧の如何に重大であるかを云ふことに目ざめることの遅いのは事實であるが、其れは永年の間の教育の罪である。今や多くの婦人は自ら進んで參政權を要求してゐる。

二、男子と雖も、完全に參政權を行使し得る人ばかりではない。實例は婦人が參政權を與へられた場合かなりよく利用してゐる。

三、もちろん名望ある婦人も參政權を十分利用してゐる。

四、すべての婦人が結婚するとは限らない。寡婦となる婦人さへあるではないか。殊に今日までの歴史は男子が婦人の誤りを正したり婦人の爲めに、公平にその權利を行使してくれたとは云はれない。のみならず今や婦人もいろいろ社會的に活動して、直接社會に貢獻してゐるのであるから、參政權を與へるのは當然である。

五、子女を育成することは勿論重大なことであるが、これは[illegible]婦人は[illegible]少き期間の仕事で[illegible]見、成長[illegible]家庭の仕事[illegible]治的知識と經驗を有することは[illegible]必要なことである。

六、婦人が參政權を得たなら、政治に熱中して家政を見ることを忘れるであらうと云ふのは全然間違つたもので、今日は一般の人がもつと眞面目になつて政治を考へることの必要を主張する人が多くなつて來た

七、男子もすべてが戰爭の戰鬪員となるとは限らない。もとより兵役の義務があるから參政權を與へるのではない。兵役に全然關係ないが今日では婦人もいろいろな社會的の仕事に從事しつゝあるから、これに參政權を與へることは、其の利益甚だ多く、社會を淨化することになる。

しかしながら如斯は單なる婦人參政可否に就いての理論の一面に過ぎない。わたしのいひたいと思ふことはかゝる理論的の方面ではない。むしろ事實上アメリカの婦人が參政權運動の遂行した隆然たるしかも有力なる結果に關してである。

三　覆面の强敵

アメリカの婦人參政權史中で最も難物と云はれた覆面の强敵があつた。この强敵の爲めには女權軍も散々にしてやられたものである。

アメリカに於ける婦人參政權運動は其の成功を見るまでに長年月を要したばかりでなく實に他の何れの國におけるそれよりも苦戰を續けて來た。

斯く女權論者をして嘆ぜしめたものは實にこの覆面の强敵等の力が與つて多かつたことを記憶しなければならない。覆面の强敵とは何であるか、アメリカの禁酒法案に關聯する酒類釀造業者及び酒類販賣業者の組合の必死的の反對これである。この覆面の强敵は巧みに選擧場裡の勢力を支配し前後を通じ約四十年間婦人參政運動の成功を妨げて來た。アメリカの政治界を長年支配したものに奴隷問題がある。この問題は半世紀に亘つてアメリカの政界の中心問題となつてゐた。しかしこの問題については公然と戰爭まで開始され、其の效果も明白に擧げられてゐる。しかしながら禁酒問題に關して行はれた政治上の不正行爲に就いては、投票を賣買した當事者は勿論口を拭つて、之を口外する氣づかひがなく、また政黨に之が完全なる材料なるものの首領は彼等のしたことを其のまゝ發表する筈がない。其れ故のは終大終地見出すことは不可能であらうけれども、一般的の材料に依つて見ても戰慄すべき事項が少くはない。

一八六二年、アメリカ人が國を擧げて南北戰爭に從事してゐたころに酒類釀造業者の組合は出來た。越えて一八六七年にこの組合は政黨政派の何たるを問はず、苟も禁酒主義に贊成するところの候補者に對しては斷然反對する旨を宣明した。この頃には酒類釀造業者の組合はただ婦人參政權運動を以て、自分達に對する脅威とは感じなかつた。其の年、カンサス州に婦人參政權の爭ひが行はれたのに、婦人參政權論者は同地方における禁酒主義に反對な人達はすべて同樣に婦人參政權運動にも反對な連中であることを見出した。また、

一八六九年にワイオーミング州で選擧權を擴張し婦人にも之を與へることにしたら、其の年直に禁酒同盟が同州内に出來上つた。かかる一見無關係のようで、しかも顯著に二つの運動の關係を示す實例は商人をして婦人參政權運動と、禁酒運動の二つの改革の間に一味相通ずるもののあることを感ぜしめた。けれども、酒造業者をして、もつと婦人を恐れさせる確實な原因がついで起つて來た。其れは一八七三年から四年にかけての出來事で、オハイオ州でクリスチヤンの婦人達が同地方の酒場

にたいして反對したことになる。[illegible]
有名なまた[illegible]婦人を[illegible]て、酒場の前に跪いて[illegible]
祈りして酒場の中に入り、ハイフルの讃美を高唱したり、或は
讃美歌を歌つたり、跪いて酒場の廢止を祈つたりした。
斯うしたことからして七四年に同地方に婦人基督者禁酒同盟が出來上つた。この婦人基督者禁酒同盟は地方的にもまた會員の數においてもおどろくべき速度を以て發達した。

斯くして婦人は個人に對しては全然禁酒することを、而して國家に對しては禁酒法の實施を要求する所の恐ふべからざる一の運動者とはなつた。彼女等は實によく訓練されて、婦人基督者禁酒同盟は、アメリカが持つて居つた婦人の最も強大にして有力な團體となつた。なかでもフランシス・ウヰラアド夫人は長くこの同盟の牛耳を執つてゐたが、會員からは敬愛せられ、一般の人々からは尊敬されてゐた。ウ夫人は行くところにおいて聽衆を感動させ、同盟に對する偏見を解いて同志とすることに成功した。またウ夫人の激勵に依つて無數の婦人が多く正統派のプロテスタント教會から加入して來た。

疑ひもなくこれ等の事件が原因となつて、一八八一年における酒造業者組合の會議は、初めて明かに婦人參政權運動に反對する方針を取ることを決定した。何故かならば、酒造業者は禁酒法案[illegible]に反對するところの勢力となつて來た。[illegible]ば、禁酒法は[illegible]として[illegible]とは限らないが、婦人參政權運動が[illegible]した暁には、禁酒法は永久的のものとなつてしまふのであらうと考へてゐる。かくして酒造業者は遂に婦人參政權運動者とは倶に天を戴かざるの仇敵となつた。

四 暗中の策動

それから、十年も經過した後のこと、アメリカ酒造業者組合の會長ルツハルトは、彼れが婦人參政權運動を妨害したことはないと主張したが婦人參政權運動者の切抜帖のなかには有力な材料が保存されてゐた。一九一八年上院の調査委員會で酒造業者は何等婦人參政權運動妨害に關する記録も有つてゐないと云つた。しかしながら其のうちに材料はだんだんさげられて、たとへ酒造業者は公然と婦人參政權運動に敵意を表明したことはないにせよ、實際において妨害を行つたことは明白になつた。

此等の材料に依れば、最近四五十年間酒造業者並に其の關係者が婦人參政權運動に反對した戰術は次ぎの如きものである。

一、禁酒法案に反對した同一の人物が婦人參政權についても

憲法改正や、一般投票の場合、反對者の中堅を作つてゐた。

二、婦人參政權運動を防害するに要する費用は、禁酒法案に反對する爲に組織された政治委員から支拂はれた。

三、一般投票に依つて婦人參政の可否を問はれる場合之れに反對の投票を得る爲めに、各酒場に一定の投票數を割當てて之を集めさせた。

四、秘密會議において確定的に決定されたところに依つて、婦人參政權運動を防害することは出來得る限りこれを秘密にしておくことにした。

五、彼等が禁酒法案贊成者に對して行つたと同樣に婦人參政權運動に贊成する者に對してはボイコットを行ふことを

六、同樣な強制的の方法を以て、婦人參政權運動を防害する費用を得る爲め、彼等は彼等の取引先の會社から寄附金を出させることにした。

七、婦人參政運動と禁酒問題に關して評判の好い州における議員及び立法者の態度は双方共酒造業者の政治的結社に報告をとること。

八、禁酒法案を防害する爲に生れた團體は同樣の方法を以て婦人參政運動に反對した。

此れ等の諸項目に就て戰ふ爲めに要した費用の莫大なることは想像がつくが、上院調査委員に依つて、年額何程の金が集められたか、如何なる方法で其の金を集め、如何なる方法で之を使つたかと云ふことを調べることになつた。併し此の調査に依つても別段新規な材料を得ることは出來なかつた。何故かと云へば其の金は同一の出納係の手に依つて受授された譯ではなく、各州は別々に戰鬪を繼續したことではあるし、各州の法律がこれ等の戰鬪に關する收支の報告の採用を嚴重に命ずるに從つて、彼等は自衞上其の收支の實際の狀態を隱蔽することに努力した。これは防害運動に要する基金をなるべく異つた部局に分けることに依つて容易に出來ることであつた。

併し、彼等が集めた金額を推定すべきある要素はこれを知ることが出來た。例へば一九一四年にアメリカ酒造組合は百四十萬弗の預金をした。この事實から推して其の使用に近いものを知ることが出來たのである。其れは一九一三年に一樽に付半仙の普通割掛金の外に、更に三仙を戰鬪基金として醵出することが決定されてゐる。この百四十萬弗の金がこの醵金から出來たものとすれば其の年の酒の賣上高は四千萬樽と云ふことになる。四千萬樽と云ふのはおそらく其の年の實際の賣上高の三分の二には當らないだらう。其れ故に實際において年額百萬弗は組合

經營上の費用にあてるとしても、百五十萬弗は何等の[illegible]爲めに役ひ得ることになる。しかも當時において酒造業者はこの戰鬪費の三分の二を負擔し、酒類販賣業者が殘りの三分の一を負擔することになつてゐたので、彼此二百萬弗以上の金を費ひ得た筈である。しかもこの金はアメリカの國精として一度中央組合に集められ更に各州の戰鬪の必要に應じて費はれたのであるが、この場合、各州においては、中央組合から渡された金と同額の金を其の州内でこしらへる責任があつたから、この二百萬弗以上の金は實は四百萬弗以上の金となつて費はれてゐるのである。これであるから、勿論州に依つては中央組合へ納めるだけの金しか出來なかつた所もあらうが、他の州では所要額をはるかに超過して集め得たところもある。かくして一樽の酒に對する割掛金は五仙から一弗に及び、二十仙と云ふのは普通であつた。

五　强大なる惡魔、弱少なる正義

禁酒法案に對する爭鬪が最も白熱的に行はれ、從つて婦人參政權運動も亦紛糾狀態に陷つて十數年に及んだオハイオ州の如きは、年約五百萬樽の賣上があり、この激しい爭鬪の繼續する間は一樽に付五仙當りの掛金を州から中央組合に支拂ふことになつてゐたので、この期間においてはこの一州だけで百萬弗以上の資金を得たことになる。[illegible]內における[illegible]の大部分に行はれ[illegible]られたことになる。所で、しかも酒造業者は[illegible]運動資金の爲めに費つた金は最高年約八百萬弗[illegible]んだと計算せらるべき理由がある。

敵軍はかくの如く强大であるが、この强大なる惡魔軍に對して正義を唱ふる婦人參政權運動の陣營如何と見れば、これはまたいとも惨めな、しかし驚異的な、一仙、一弗と云ふ寄附金を以て苦戰を續けたのであつた。

「わたしはわたしの電車賃をさゝげます。」

見るもはかなげな痩せた小づくりの女が、[illegible]ヨークの婦人參政權の會合において、この運動の爲めの寄金が行はれたときに斯う云つた。

「わたしはわたしの電車賃をさゝげます、わたしは住宅地までの往復を歩けばいいんですから。」

これが[illegible]い國の女權運動の現實である。[illegible]婦人をいたはり助ける青年紳士はどこにゐるだらう。電車の中で婦人に坐席を讓ることを光榮とする紳士の道德はどこに存在してゐるだらう。更に又道路を橫切る場合にさへ婦人の爲めに自動車も止めて待つてるアメリカ人の禮儀はどこに[illegible]

彼等の禁酒法案及び婦人參政權運動を妨害する爲めに要する戰鬪費はひとり賣上の酒類に割掛するばかりではない。一九一三年中央酒造業者組合の會合においてパーシー・アンドレーの云ふところに依ればオハイオ州の如きは酒造業者及び其利害關係人などの運動において必勝を期する爲め、費用として五年間に百萬弗を支出したと云ふ。

惡魔は其の斷末魔まで暴威を振ふのが常である。かかる横暴なる、禁酒法案及び婦人參政權運動の妨害者に、更に力強い味方が現はれて來た。其れは酒類小賣業者の組合である。各州に支部を有する中央酒類小賣業者組合は一八九三年に組織され、この組合も亦戰鬪に要する基金を得る爲めに其の賣上げの酒に割掛をした。しかもこの小賣業者の組合は一新法を案出し、酒造業者や卸賣業者の組合もやがて之の方法に從つた。其れは彼等が彼等の事業に必要な鉛管や家財道具や、陶器や、玻璃器や、雜貨を購入するに方つて、其の支拂代金のなかの一部を組合に保留することにした。彼等は說明して云ふ「禁酒法案が實施されることになれば、われわれはこんな品物を買ふことが出來なくなる。云はばお得意の浮沈に關する問題として、われわれの事業の繼續の出來るように助勢してくれるのは當然である。」これまさしく最後の五分間までも爭はんとするの氣勢を示したものである。勿論この方法も出來るだけ秘密に行はれたのであるが、二三の州においてはしなくも數通のこのことに關する封書が婦人參政權運動者の手に渡つた。モンタナ州では婦人參政權の議案が立法者の手許において研究されてゐた時恰もこのような封書が發送され、後に投票權者の手に渡つたが、この手紙と云ふのが明白に酒造業者及び其の利害關係人と婦人參政權反對運動の關係を物語つてゐる。其の內容は次ぎの如きものである。

「この地方の酒類卸賣業者や小賣業者は一致協同してモンタナ州を全國中における無上の飲酒鄉とするように努力してゐる。これが爲めには費用が要るのである。我れわれはこの州内において婦人參政權に反對して立つ者に用意してゐる。この地方の酒類小賣業者は彼等の全力を舉げてゐるけれども彼等のみで事をなしとげることは、あまりに荷が重すぎるの感がある。この時において、我等を助けることは我等に商品を供給して利益をあげてゐる者の義務に非ずして權利である」

六　惡魔は友を呼ぶ

酒造業者及び其の關係者の婦人參政權運動に對する妨害運動に附隨してここにはまた全國ホテル業者組合が、禁酒法案に對しては公然たる、また婦人參政權運動に對しては隱然たる反對

者[illegible]

[illegible]政權運動に對する組織的の反對者となつた。これ等の團體[illegible]る視た金は自ら費つたであらうし、彼等は兩運動の反對の爲めに多額の金を費したらうが其の額何なるかは知ることが出來ない。

禁酒軍と酒造業者との爭鬪は一九一三年において其極に達した。二三の州は禁酒を實施した。法廷における判決も著しく禁酒軍に有利に與へられるやうになつた。更に有力なるは、多くの製造工業主が禁酒軍に馳せ參じて來たことであつた。勞働組合は永年の間勞働者の死亡及傷害事故に對する雇主の責任について爭つて來たが、かかる法律案は多くの州において通過した。しかるに製造工業主は從業員が酒に醉つてゐるときの方が事故の多いことを發見し、この危險から自らまぬかるゝ爲めに、この原因たる飲酒の弊を法律を以て除くことに左袒したのである。

製造工業主をして禁酒軍に投ぜしめた他の有力なる原因は、もし從業員が土曜と日曜の晩とを飲みつぶして、朝寢をすれば月曜日には能率が大に減ると云ふことである。有りの儘のことを云へばわたしはこの「打算的理由」から工業主が禁酒軍に投じたことの說明はあまり好きではない。何故かなれば、同時に又

[illegible]に、其の[illegible]の意[illegible]が[illegible]たく現はれて[illegible]雇主[illegible]であつて、何[illegible]とに依つて禁酒軍の勢力の増加したことは云ふまでもない。立法者に輿論の變化したことを自覺してますます婦人にも支配されるまた勇敢に事を行ふ氣になつて來た。反之、酒造業者はいよいよ多くの軍用金を準備するの必要を看取した。彼等は四半世紀に亘つた爭鬪が決勝戰に近づいたことを察知したのである。

酒造業者は忽ちにして一層多くの基金を得る爲めに販賣者其と五箇年契約を爲し、パアシイ・アンドレーの建策に依つて其の組織を擴張した。これ恰も一九一三年の十月、アトランティック・シティーで酒造業者組合の大會のあつたときのことである。

アンドレーはまた全國商業及勞働協會を作つて自ら會長となり、其の配下には伴つて上院議員や下院議員をしたものなどを集め之に年俸四五萬弗を與へ、中央並に各州の政界に活動りを振つた。これ等を始めとして家政會、個人自由同盟、[illegible]者同盟、商人同盟、女權反對男子同盟等々の反動團體が出來

れて、其の目的や名稱を代せ、止むに止まれない憤激からするが如く見せた公開の主張をして相當に勢力を有つてゐた。

たゞ婦人參政權運動に死力を出して反對したものにドイツ、アメリカ同盟がある。この同盟は一九〇一年に成立し七年に特許を受けた。この同盟は禁酒法案に反對したり、親ドイツの宣傳をする爲めに生れたのではないが、當初からドイツ人の酒造業者が會員中で重きをなしてゐた。この同盟の特許は一八・九年に、同盟の役員に危險なる親ドイツの行動があつたので剝奪されて仕舞つた。この同盟の特色は秘密裡に外國生れのものの投票を利用したことで、其の費用は屢々酒造業者組合の手から支拂はれた。

七　立法府における防害

酒造業者等が行つた立法府における婦人參政權運動の反對は單純な方法から始まつてゐる。第一の運動としては、婦人參政權の法律案が付附される委員會を「結合」せしめることにあつた。そしてこのことについては彼等は、――また或る一種の神秘的な力は容易に其の委員會の四分の三位を手に入れることが出來た――委員會が多忙すぎる、とか「法律案が錯雜してゐるので」とか云ふ趣旨で女權運動者に告げられてゐる要點において、この法案を葬り去る爲めのいまはしき買收が人しれず行はれたのである。

もし委員會の形勢が非と見えれば運動の手は立法官に廻つてゐた。立法上の爭ひは屢々上院にのみ限られたことがある。何故かなれば上院ではごく少數の人に依つて表決の結果を逆轉せしむることが出來るからで、ここの場合決定の鍵を行つてゐると思はれる人に對しては禁酒反對の院外團の者が彼等の全力をあげて運動したものである。

また金錢を以て買收することの出來ないものに對しては其の者の屬する政黨に酒造業者の代表者が多大の貢獻をしてゐることを思ひ知らせ、且又政黨から陳腐になつた投票者の妨害は政黨を敗亡せしむることを知らしめる。斯んな考を持つてゐて女權反對運動者は「婦人は參政權を直ちに要求しては居ない」などと說きまわる。かくして彼等の旗色がいいと見れば運動を手控へるけれども其れでも御不滿足と見れば彼等は最後の手段に訴へる。所謂ややもすれば徹底的の賄賂もやると云つた調子である。

もとより婦人達もこの本氣を知らないではないが何分にも之を訴へるには確證が與つてゐない。社會は之を知らず、又知らうともしないのである。

自己[illegible]に目[illegible]の[illegible]ことに[illegible]ける[illegible]内に[illegible]されることにはあるまい。酒造業者等は一見ての人間が彼等の道に依つて役に立つ[illegible]と云ふ[illegible]信を以て猛烈的に進んで行つた。

また酒造業者等は彼等と利害關係を同じくする鐵道、製造業者、資産業者、酒造業者等と氣脈を通じて彼等の運動に成功した。其の一例をあぐれば一八一六年に、ニュー・ハンプシャヤーにおいて鐵道業者の政治運動について公共事業が目的が調査した所に依れば、ボストン・メイン鐵道の政治上の利益の爲めに働いた者が秘密に婦人参政權運動に反對して働いてをり、甚だしきは其のなかの一人の如きは鐵道會社から俸給を請取つたばかりでなく、他の一封の金子を州から請取つた。其れは一九一二年の憲法改正會議の際代表者の一人であつたからと云ふのである。しかも其の男は女權運動に反對して、議員席においてリーダーとして大に手柄のあつたものである。なほまた調査を進めるに從つて、この鐵道が女權運動の反對運動に少なからざる金を支出してゐたことが明かになつた。

八　婦人参政の效果

かゝる婦人参政權運動に對して行はれた妨害運動は甚だをいる。ここ[illegible]いて[illegible]ことにしよう。

一九一[illegible]年にワシントン州が[illegible]また[illegible]た、婦人に参政權を與へ[illegible]たから云ふものに、酒造業者の[illegible]權運動に對する反對は漸く露骨になつて來た。一九一[illegible]年に開かれた全國酒類小賣業者大會の席上において同會長ネール・ボンナーの語は實に當時の彼等の思想を最もよく端的に告白したものである。

「われわれは教會を恐れることはない。彼等は古い戰法で戰ふにすぎない。われわれは同務大臣を恐れることはない。彼等は教會の人達の云ふことを聞く人々である。われわれはまたY・M・C・A・を恐れることはない。彼等とても格別なことをなし得るものではない。諸君、しかしながらわれわれは、婦人基督教禁酒同盟と、婦人の手中にある投票權とを恐れるのである。これ故に諸君は婦人参政權運動に反對しなければならぬ。」

一九一四年には七州において改正の[illegible]が行はれた[illegible]州は失敗に歸した。最も注目に値するのは、此等の州における酒造業者が何れも手を揃へて公然と婦人参政權運動に反對したことである。ウイスコンシン州の酒類小賣業者の[illegible]協會たる[illegible]

レス」の如きは明白に反對論をかかげたが、其の論文中に「婦人に參政權を與ふれば産業は荒廢する」と云ふ標題で次ぎのような記事をのせてゐた。

一婦人が參政權を得ることは即ち禁酒法の實施を意味する。左樣なれば百姓は玉蜀黍を作ることをやめ、ライ麥や裸麥を作ることをやめることになる。酒造業者は其の事業を中止し、酒場は閉鎖されることになる。これ眞に由々しき大事件ではないか。くり返して云ふ婦人參政權は禁酒法實施を意味する。さればこの州に住むすべての人々にして、若し其の家庭を愛し、家族を愛し、自由と權利と市民權とを愛するならば諸君は來る十月五日の憲法改正の投票日には投票場に行きてこれに反對の投票をしなければならぬ」

かゝる事例は少くない。

酒類製造業者等が自己の利益を防護するが爲めに自分達の權利と信ずる所のもののために公然と反對運動を試みることはまだしも忍ぶべく恕すべきであるが、既に述べ來りたるが如く彼等が正々堂々の陣を張らず、その秘密の手段に出でたことは、そこに道義もなく、デモクラシーの精神なく、多數者の權利の認むるところのものもない。而して彼等の行動は、此等の政治的事件の進行に注目する人々の均しく疑問とした所であるけれども、其の證據を舉げることが出來ないばかりでなく、彼等の勢力はあらゆる政黨政派の中に浸潤してゐて、極めて少數の禁酒黨の人のみしか其の眞相を說く資格がなかつた。

しかも政黨政派の關係に依つて動かされる政治のカラクリは彼等の乘ずべき絶好の對象物であつたのである。

婦人參政權運動者は永年の間、あらゆる强敵と戰つて來たが遂に一九二〇年八月に至り、聯邦憲法において「選擧權は性を理由として拒否又は制限せらるることなし」と改正せられ、婦人參政權運動の目的は一と先づ達成された。

婦人參政權が實施された直後の成績についてアイダ・ハスタッド・ハーパーは其の浩瀚なる婦人參政權史 Ida Husted Harper: The History of Woman Suffrage のなかに斯う云つてゐる。

「一九二〇年の八月に婦人參政權が實施された其の冬には各州において過去十年もかゝつて出來なかつたような澤山の進歩した法律が制定され、とりわけ婦人と子供の福利は著しく增進された。各州において職業は男子と同様に女子にも開放せられ、大學は婦人の入學を許し、特殊の宗教學校を除く大學は男女共學となつた。

婦人は一般的の意味において男子と同一の權利を得た、もと

との各方においても一般人が[illegible]において[illegible]なかりし女同權と云ふわけにはゆかぬことを知り、または[illegible]ようになつたであらうが、今や婦人達は從前と異り、其の目的を達成する手段を有してゐる。

九　惡に强きは善にも强し

かくして平和的の文明の建設に就て、アメリカの婦人が從來男子の企て得なかつたような效績を擧ぐることが大に期待されるわけである。多くの人はアメリカの婦人の怠慢にして無能なることを攻めるけれども、これ等の事實に依つて見れば、これ必らずしも婦人其の者の罪にあらずして、むしろ男子に依つて建てられた從來のアメリカの文明其のものの欠陥が、たまたま表面的の女王、實質的の弱者、婦人に依つて其の姿を現はしたものではなからうか。

ともあれ以上の事實に依つてアメリカ人の「算盤玉の正義」なるものが如何に光明と暗黒の兩面を具備してゐるかを窺知し得るであらう。しかしながら、如何に暗黒の方面が多いにせよ、遂に之を打ち破る組織的な正義の力の備つてゐることは、たしかにアメリカの今日を來たした强味である。「惡に强きは善にも强し」と云ふ昔の日本の劇作家のよく使用した言葉は蓋なくてはならない[illegible]ものがあると思ふ。

最後に最も興味ある問題として、わたしはのべておきたいことは、アメリカの婦人が直接に政治上に對したゞ、[illegible]の女の男中でない、獨立の地歩を確保するの時においても、尚アメリカは今日のような[illegible]の速力を以て文明の建設に向つて突進し續けるかどうかと云ふことである。これはたしかに一つの大なる疑問でなければならない。

何故かなれば今日までの狀態においてはアメリカの多數の職業婦人の如き、多くは單に男子に依つてなされて來た仕事を男子に代つてすると云ふにすぎず、要するに男性文明の建設に、男子の手先になつて働いてゐるにすぎなかつたのである。もとより婦人參政の終局の目的はこんなことにあるべき筈がなく、先覺の婦人は進んで現在の男子の政治家を指導し或は之と戰つて最低賃金法の施行をはじめ諸種の新法制を實施せんとしてゐる。婦人參政の効果は少くとも今後十年廿年の長きに亘つて仔細に觀察する必要がある。

わたしはこの小稿を作るに際して參考にした書物を一々あげることはさける。酒造業者等の女權運動に對して行つた妨害運動の材料は之をミセス・キャリー・チャップマン・キャット及びミ

セス・ネッテー・ロヂャー・シユラー共著「婦人參政と政治」Carrie Chapman Catt and Nettie Rogers Shuler Woman and Politics に得た。キヤツト夫人と、シユラー夫人が何れも米國の婦人參政權運動史中に特筆さるべき大立者たることは云ふまでもない。この著書がわたしの手に入つた經過は一寸說明に値する わたしの手許にあるこの書物は 兩女史が第一版として千部限りを印刷し、婦人參政運動の成功に與つて貢獻あつた後援者に贈呈した第四百八十三號に當るもので、わたしがヴアンクリツフ夫人を紐育のハドソン郊外に訪問したきとに、夫人は記念として之をわたしにおくられた ここに紹介したのは其の書のほんの一部分の概要にすぎない

顧つて日本においては今日漸く男性普選案が議會の問題となつてゐるばかりで婦人參政の運動はまだ赤熱してゐない。この運動がやがて日本の上下を通じて熾烈になる場合において、わたしはアメリカの酒造業者等より更に頑冥幾多の强敵が續々と現はれて來るだらうと想像せざるを得ない、彼等を評することとあまりに酷なるを得ない所以である。三月六日衆議院において公娼廢止案が無殘なる嘲笑裡に否定された〆。)

野球にあらはれた米國人氣質

安部磯雄

野球が米國に於ける最大の人氣ある運動競技たることは人の知る所である 此野球が米國の國民性に及して居る影響は非常なもので、それは種々の方面から觀察することが出來るが、其精神的方面に於ける影響に就いて述べる前に、先づ最初に平凡なる事ではあるが、見逃すべからざる事實として野球其物の性質に關して云つて置きたいことがある。

我國に於ては最初の間は、野球にても庭球にても、これは單に體育として考へられて來た。然るに米國に於ては餘程以前からこれを體育としてのみ取扱はず、半ばは體育としてゞあるが、半ばは娛樂として見て來た。これは社會全體のそれに對す

[illegible]學校に於ても[illegible]とを娯樂の一方面から見た側面になつて居るのであるが、今一つ體育の方面から見た野球に就いて簡單に述べるならば、野球は體育上最も適當なる運動である。素人が見たならば、野球は單に其動作が敏活であるといふ丈けのことに考へるかも知れぬ。野球技に於て選手の動作が非常に敏捷に行くといふことは、勿論野球の大事な點であるが、併し野球の實質から考へると、寧ろ第一に重んぜられるものは走力であつて、又大概の運動は此走力が根柢となつて居るのである。米國に於て專門に野球を職業として居るものゝ中には、第一流、第二流、といふ風に階級があるが、此第一流と第二流の職業團を比較して見ると、打擊や守備に於ける各人の技術は大して變りはないが、異るのは走力の一點に於てゞある。特に走力に勝れた者でないと第一流の選手たる資格がない。我國に於ても選手たるの資格が走力にあることを近頃認められて來た。斯く考へると野球が如何に體育に適當であるかといふことが誰にでも了解出來るのである。

歐洲大戰の時、米國が愈々それに參加することになつた際に、米國は大急ぎで軍隊教育を行つたが、米國の青年は平素野球や蹴球の如き運動に依つて身體を鍛へられて居たから、僅か五六ケ月にして[illegible]の兵隊を作り上げることが出來たのである。[illegible]と軍隊教育の關係に於ては[illegible]有名なるイートン、ハロー、ラツグビーなどの諸學校に於ては競技盛んに運動が行はれて居るが、英人は常に、ウオーターローつたのは斯くの如き中等學校の運動場に於ける青年達の訓練に一の戰に勝因して居ると云つて居る位である。日本に於ても將來益々野球、蹴球、其他の運動競技が盛んになつて來れば、其時は最早軍隊教育の如き必要はなくなるかも知れない。無趣味たる教練に依つて身體を鍛へるよりも、趣味ある運動競技に依つてこれをなする方が遙かに効果もあり、賢い方法であるからである。次に娯樂の方面から野球を見れば、野球はこれをやる人間の立場から見ても娯樂であり、これを見物する側から見ても亦娯樂である。茲では野球をやる人自身のことは別問題として、見物人の方から見た時に、野球は益々社會的に認められて來たのであつて、これは將來我國に於ける著るしい事實である。それは野球が娯樂としての價値を一般に認められて來たことを意味するものであるが、同時にそれに伴つて新しい現象が起つて來た。それは入場料の問題である。日本に於て野球のために入場料をとつたのは、外國から野球團が來た場合に限つたものであるが、其時に何等問題は起らなかつたので[illegible]

外國からチームを呼ぶには少からぬ費用を要するが爲めに、入場料を徴收するは當然と考へられたからである。然るに其後それを初めてから十年以上になるが、大學チームが互に試合をする時に入場料をとることになり、それがかなり問題を惹起したことがある。併し若し野球が大なる娯樂であるならば、見物人の側から入場料を拂ふのは當然であつて、別に問題となるべき性質のものではないと其當時私は考へた。問題はたゞ其入場料が野球に使用するかといふ點にある。若したゞの一錢でもそれを如何選手其人の爲に使はれたならば之れは重大なる問題である。併し今日では、我國に於ては、職業野球團と云はれるもの、他は、選手自ら入場料の分配を受けることはないから、それは最早問題ではない。然るに米國に於ては堂々たる職業野球團があつて、所謂職業團と名乘るものは、實に何百といふ數に達して居る。而してそれ〴〵リーグを作り、毎日のやうに彼地此地で試合を行つて居るのである。大都會になると一流の職業野球團があつて、今日では其數十六もあり、それ以外には都會の大さに從つて、第二流、第三流の、それのみを職業とする野球團があり、其次には半職業野球團――平常會社などで働らいて居て、土曜、日曜などの午後のみを利用して試合を行ひ、入場料を自分の收用として居る人々に依つて組織せられて居る野球團があつて、此處にも熟練した選手が居て多くの見物人を呼んで居る。最後に來るものが中學、大學の學校野球團であつて、入場料はとるが一切選手自身は其收入の分配は受けない「アマチユア」即ち職業團ならざる野球團である。野球に入場料を徴集するのは前にも云つた如く日本などに於ては屢々誤解が起り易く、今日に於ても猶入場料をとることは甚だ下品であると考へて居る人が少くないが、併し職業野球團とアマチユアの明瞭なる區別は、前者は入場料に依つて生活費を得て居るが、後者は一文でも其分配を受けて居ないといふ點にあるのであつて、此差別の一點に於てのみ入場料問題に關する後者の立場は是認され得るのである。現在米國に於て第一流の職業團の收入は莫大であつて、選手個人としても年俸數千弗乃至數萬弗を得て居るのが普通である。運動場も亦それに從つて廣大であり、三萬人乃至六萬人の觀客を收用する設備が整つて居る。斯くの如くして米人が野球技に熱中する程度は驚くべきものがあるが、今から十年程前に或雜誌に米人が一年間に野球見物に支拂ふ金は五千萬弗に達するといふことが書いてあつたが、今日では或は其二倍位に相當するかも知れない。又米國には種々の娯樂があるが、それに對して費される金額から云つても、野球は亦劇の兩位に在ると云はれて居る。其順序は活動寫眞が第一位であり、第二

位にして、[illegible]

居ることを人々は[illegible]に興味がない[illegible]

るかゞ明かである。大學に於て行はれて居るフットボールも今日甚だ盛な樣であるが、一般に行はれて居ると云ふ點から云つて、これは到底野球の比ではない。

次に野球の精神的方面に就いて論ずるならば、元來野球は團體競技であるが故に、それに依つて團體的精神を養ふことが出來るのは當然である。勿論米國人の特長たる團體的精神は必しも野球からばかり來て居るものではないが、少くとも野球好きの米國人がそれに依つて團體的精神を養はれたことは疑はれない事實である。單に團體的精神と云つただけでは其意味を十分に盡さないが、茲ではそれなしには團體的運動が不可能であつて、それに必要なる、或は其根本となるべき服從の精神を意味して居るのである。野球には特に服從の精神が必要である。此服從の精神は又自ら二方面に分れる。其一は訓練といふことであつて、他の運動競技に於ても同樣であるが、野球に於てはトレーニングが最も重要なる意味を持つて居るのである。トレーニングとは要するに運動家に必要なる條件であつて、運動家は立派な健康體の所有者であることを理想とするが故に、平常から飲食物や、睡眠時間等に就いて十分なる訓練を施すことを云ふの

[illegible]

な[illegible]

く、平常[illegible]少くない[illegible]

米國に於ては如何なる種目の競技をする人であつても、[illegible]

運動家である以上、平素嚴格なる期間の下に節制を守るの

が普通である。大學に於ては各運動部の選手は常に一室の[illegible]

で食事をすることになつて居り、特に運動競技の開始以前暫くはシーズン中は、トレンナーの選定した食物を、質に於ても、量に於ても、與へられただけを攝取し、それ以外の食物は絕對にとらない。早稻田大學の野球部が大正十年アメリカ遠征の際、ハーバード大學に寄つたが、其處で晝食をすることになつた。そして選手の食堂に案内されると、其處で選手の食べるものと同じものをあてがはれたが、其量の少いのに驚かされた。併し更に之れで食事を濟まし、試合をしたが、晩食の時には特に我々のために御馳走をしてくれた。此事は特に彼等の大學生であると云ふ理由に依るのではない。職業選手であつてもシーズン中は互に約束をして禁酒、禁煙を嚴守し、睡眠時間に付ては平常それを實行しなければならぬと主張して居る者がある位である。バイブルに昔のギリシャのオリンピックの競技の事を一つの譬喩に引用して居るが、其文句は意味を非常に適切な

と書いてある。此精神は實に米國に於て普く行亘つて居る。選手は何等の不平なく此精神に服從して居る。私の殊に感服したのは、米國に於ける、彼の有名なるボクシングの大選手デムプシーは佛蘭西のカアペンチアと試合をした時に一試合六十萬弗の入場料を得た位人氣があつたが自分から月給を出して専門家のトレンナーを傭つて居るといふことである。トレンナーは平常デムプシーの體量を計り、重量が多ければ盛んに運動をさせて減少させる方法をとつたり、食物も選定したものゝみをあてがふなど、全く命令的にデムプシーを馴練するのであるが、デムプシイも亦よく其命に服從して居る。これは米人の長所であつて、自分の傭つた人間に服從する精神が非常に面白い。人間に強制されゝば誰れでも服從するものであつて、それは恰も軍隊に於ける兵卒の如きものである。それは否應なしの強制であつて有難くないが、デムプシイの傭人に對する態度にはデモクラシイの眞髓がある。デモクラシイの意義は、誰も彼も權利を主張して我儘を振舞ふといふことにあるのではなく、我儘は出來るが自己の自由意志に依つてそれを控制して居る任意的服從の状態を云ふのである。野球に於て選手がキャプテンの命令に服從するのは選手の任意に依るのであるが、不服ならば野球をすることを止めればいゝのであつて、其所に選手の兵隊と異る點がある。自然選手が團體の一員である間は絶對にキャプテンの命令に服從する義務があるのであつて、殊に選手が互選の方法でキャプテンを選んだ場合には猶更さうである。此精神は野球競技に於て顯著なる特色であるが、此精神が米國人には非常によく行亘つて其生活を支配して居るのである。更に野球に於ける服從の第二の意味は、これも畢竟キャプテンの命令に服從するといふ其根本的な點に歸着する事柄である。元來野球は九人で試合をするのであるが、試合中に其時の出來の悪い選手は屢々他の選手に代へられることがあり、殊に投手に於てそれが珍らしくない。問題は此が日本人の性質にとつて堪へ難き事である。切角自分がやつて居るのに途中で其位置を退けられることは非常な不滿であり、甚しきは大なる恥辱であると思ひ込むに至るのが普通である。日本の野球史を見ると試合が負けさうになつても昔は投手を代へなかつたもので、それをするやうになつたのは、其後米人と度々試合をする様になつてからの習慣である。今でこそさういふ事をするのは平氣になつて居るが、昔は早大の選手の中にも、或時の試合にセカンドを守つて居た選手が出來が悪かつたゝめに他の選手に代へられたことがあつたが、其選手はそれを不快に思ひ野球部を止めたやうな例があつた。試合には誰れも其日々々の出來不出來といふものがあるから、

今日に於ての野球に[illegible]
[illegible]自分の[illegible]自分を犠牲に供しても
[illegible]といふことは[illegible]の利益にならなければといふことを考へるに至れば[illegible]なことは問題とはならないのである。

元來日本人は位置といふことを重大に考へ過ぎるやうに思ふ。又先其位置が前のそれと異ふやうな場合には、左遷されたといふ風習とか、後輩とかいふ観念が頭を支配し、自分よりも後輩の者が會長となつた場合には、自分が其下に副會長として働くのを恥辱であると考へる。然るに米人は比較的さういふことに淡泊である。ウイルソンが大統領になつた時に國務卿としてブライアンが内閣の一員となつた。ブライアンはウイルソンよりも以前にデモクラット黨の大統領候補者として三回も立つたことがあつたが、四回目にはウイルソンが立つて當選した。云はゞブライアンはウイルソンの先輩であるが、それが後輩の下に於て國務卿として働いたといふことは日本などには例の少い珍らしいことである。又ハーデイング大統領の時にも其の下にヒユーズが國務卿として働いたことがあつたが、ヒユーズはハーデイング以前に於て既にリハブリカン黨の候補者として立つた事があるのであつて、ハーデイングよりも先輩であつたかういふ事實は野球などに於ては普通に見られる現象であるが。

日本などには[illegible]
[illegible]
[illegible]といふ[illegible]
が分裂したといふやうなことも[illegible]
き事は野球團の中に於ては絶對に[illegible]得ない。[illegible]團に於てさういふ事實があれば、其野球團は必ず敗するの外に途はないからである。日本人も子供の時代から野球精神に依つて訓練されて居たならば、政治家の階段を登つて來るに[illegible]いし、延いては其精神は、國の政治の上にも現はれてくることゝと思ふ。日本の政治家の理想は大臣であるが、一度大臣となつた者は、大臣を辭めると、大臣以下の地位では働くことが出來ない。大臣を辭めたならば[illegible]て働く方がブラ／＼遊んで居るよりも[illegible]際は大臣をやつたものは其れ以外の仕事をする氣にはなれないので、大臣ばかりねらつて居る結果は[illegible]大臣が[illegible]の如くに思ひ込むに至るのである。斯くの如き心がけ[illegible]るには平常の訓練が必要であるが、其手段としては野球精神を利用することが最も有効である。以上は野球の[illegible]いて述べたのであるが、次に野球に於けるチームワークといふことの意味を[illegible]

でなく、總ての運動競技の眞精神である。フエアープレーとは要するに實力の競爭を主張することを其精神とするものであつて、それ以外の手段に依つて競技の勝敗を爭ふのを卑劣として排斥する態度である。フエアープレーの精神は米國人に於て非常によく現はれて居る。米國人は運動競技に於ては、實力の競爭以外には應援團の力が加はることさへも否定するのである。之れに反して我國に於ては、競技の勝敗は應援團に依つて左右されると思ひ、競技は恰も應援團の競爭であるかの如き觀を呈し、甚しきは應援團同志の鬪爭を見るに至ることは地方などに於いて珍しくない現象であるが、其他にもよくある例として競技に際して自己に有利なる運動場を選ばうとしたり、或は味方に都合のいゝアンパイアを求めたりするのは實力の戰であるべき競技の勝敗を其附屬物に依つて爭はうとするものであつて、運動競技に於て重要なるフエアープレーの精神に反するものであるが、斯くの如き勝たんがためには如何なる卑劣なる行爲をも辭さないといふ態度は排斥すべきである。米國に於ては寧ろフエアープレーの意味は、勝つた時よりも負けた時の態度に重きを置くのであつて、負けた時の態度が立派でありさへすればいゝのである。負けて責を應援團やアンパイヤに歸するのは負惜みであつて、それは、フエアープレーの精神に反するものである。

米國に於ては大統領の選擧後に戰ひに敗れた候補者が勝つた方に祝電を送るが、假令それが形式に過ぎないものであつても斯くの如き態度は賞讃すべき態度である。我國に於ても庭球の試合の後には兩方の選手が握手をするが、野球の試合の後にも兩方のキャップテンが握手をするやうになることが望ましいのである。繰返し云ふが如くフエアープレーとは飽く迄ものである。野味するものであつて、それは常に競技に伴ふも實力の競爭を意球團の選手を選拔するにも亦それがフエアーの方法に依らなければならないこと勿論である。學校の選手であに場合はる選拔の際に選手自身の人格や學問の成績も考慮に入れなければならぬが、技術が其本位であつて其他の點に於て情實の容るべき餘地があつてはならない。選手として運動場に立つのは級(クラス)の上下に依つて定まるのではなく、選手自身の値打に依るのである。米國に於ては會社などが社員を採用したり、昇進させたりするのは、其標準を常に其人間の實力といふ一點に置いて居る。其場合に學歷や其他の情實關係を重要視することがない。人は常に力一杯に働けば其値打を認めらる。斯くの如くにして米國の社會は潑剌の氣溢れて、其處に於ては總ての人が精一杯の力を出して活動して居るのである。茲にも米國の野球の精神は現はれて居る。我國に於ても社會は飽く迄も實力主

[illegible]
[illegible]出來るやうになつたな[illegible]た結果である。我々は[illegible]ばならない[illegible]

米國の新聞紙

美土路昌一

ショツペンハウエルが新聞紙は壁にうつる物の影だと云つたが彼のブリスベーン氏は「新聞は社會の鏡だ、新聞のいゝも惡いも即ちその儘社會の反映そのもので、その責任は社會にある」と云つてゐる。私はその說に贊成する。アメリカの新聞を見て一番に感じられるのはその國の總ての狀態を最もよく現はしてゐる事で、アメリカンジャナリズム即アメリカニズムである。若しアメリカ新聞にして世界の他の諸國と異る點ありとすれば、やがてアメリカの他の諸國と異る點である。

嘗て米國の一教育者が紐育の新聞紙三ケ月分を集めて記事の分類表を作つて發表した事がある。その統計によれば

風紀上よろしからざる記事……………三九〇〇件
不健全なる記事……………………………六八四〇件
平凡なる記事……………………………二一〇〇件
價値ありと認めらるゝ記事……………三九〇〇件

即ち報導の價値ある記事は全部の項目中僅かに三十九パセントに過ぎなかつたと云つて米國新聞紙の記事取扱に關して否定的の意見を發表した。これに對してニューヨーク・ウオールド紙は、

「それで結構だ、價値ある記事が四割近くある事は十分である。現在の社會活動の、乃至は商人の要素のうちに大體これだけ位の分置しかないものである」

と答へてゐる。

エール大學總長アーサー・トウィング・ハドレー氏は

「若し新聞に責任がありとするなら、その改良にむしろ讀者

自身にある。新聞編輯者は讀者の欲する新聞を作る。勿論編輯者のうちには讀者の要求するものよりも一層善良なる新聞紙を作らんと考へ又國民の標準を高めやうと教育を試むるものもある。然しこれはそれと正反對の考を持つ編輯者と同樣にどちらも例外であつて、一般の編輯者は一般の讀者を標準としてゐる。世間には黄色紙を論じて、黄色新聞の記者が社會と沒交渉に存在してゐるやうにいふ人がある。ある點までは彼等に責任がある事は勿論であるが、然し大部分の責任はそれ等の新聞を講讀する讀者の上に依然として存してゐる事を自覺せねばならぬ。

米國の新聞と云へば誰しも先づいふのは黄色ジャーナリズムである。この新聞の流行は即ち米國人全般が多量に含んでゐるところのヤンキーズムの反映である。然し米國のヤンキーズムを攻撃し、新聞のエロージャーナリズムを攻撃して直ちに米國國民性の墮落を斷定する譯には行かぬ、そこに非常に健全なる所謂「ミトルパセント」のアメリカニズムが存してゐる事を忘れてはならぬ。

今度歐洲大戰の當時、エロージャーナリズムを代表する彼のハースト系の新聞紙を米國内に於ける獨逸系の米國人を團結せしめ、ウイルソン大統領をして聯合國側加擔、大戰參加をせしめさしめんとして非常な活躍を試み、軍需品買入れを名として、米國の參戰鼓吹の爲めに渡米せるロンドンタイムスの社長ノースクリッフ氏と、火の出るやうな宣傳戰を行つた事がある。その際米國人の愛國心は日に〳〵高潮に達し、遂にハースト氏の經營せる新聞紙は非愛國的なりとして市民は一齊にボイコットを行つた。その中のイヴニングジャーナルにせよニューヨークアメリカンにせよ平素紐育市民から愛讀されてゐる事に非常なもので、その日々の發行部數の如き遙かに他紙を拔いてゐるものである。それが一齊にボイコットを行はれたのは新聞にとつても可成の打撃であつたが、又同時に讀者にとつても大きな苦痛であつた。宣傳競爭の結果は人の知る如く結局ハースト系新聞紙の努力は敗北してウイルソン大統領は歐洲大戰に參加した。即ち新聞の宣傳戰の勝負がついてストライキがやんだ時に、これ等の新聞紙は、餓えたる者が食を貪る如く、前よりも一層の賣れ行きを示したと聞いてゐる。浮調子な誇大妄想的な、こして全世界の異人種の總てを網羅して利害關係の頗る錯綜した國でありながら、歐洲大戰の間何等内政的に動搖を示さず所謂擧國一致の活動を示した米國に、その五十九パーセントの堅實な部分が最も力強い緊張の働きをしたのである。

米國新聞の特色は第一はその言論の自由が非常に尊重されて

ある事である、[illegible]偉大なといふ事だ、政治、經濟、社會各種の問題に對する[illegible]雜誌の自由なる評論、報道は實に羨やましい、言論の壓迫といふやうな事は全然考へられぬ。一學者はこの言論の自由に關して、

「若し歐洲に於いて米國の新聞紙に見るが如き言論の自由が尊重されてゐたならば恐らく彼の恐るべき世界大戰は起らずに濟んだであらう。言論の抑壓と事實の隱蔽は遂に戰慄すべき結果を招來した。」

と云つてゐる、又ハーバート大學總長であつたエリオット博士は

「世には米國の新聞紙が政治經濟社會の各方面の記事を公表し、甚だしきに至つては一家の私事すら公表して憚らぬと云つて憤慨してゐる人もあるが、然しその事は一面に於いて社會、産業、行政上の進歩と發達とを生むのである。勿論多少の弊害はあるかも知れぬ。然しもつと大きな一般公衆の福利の增進に對する一大公益機關としての新聞紙の力は、實にこのアメリカ共和國に、最新にして且つ最有力なる保護である。」

と云つて、新聞の言論尊重について力說してゐる。

[illegible]

オールド紙が、最近クー、クラックス、クランの表裏を一ヶ月に亙つて行つた如きは最も顯著なる例でKKK團と稱する一種の大なる暴力的秘密結社に對して敢然筆を以つて其の非を鳴らしたといふ事は褒獎に價すべき事實である。或は又排日問題の論議さるゝ時に、若し日本に於いての場合ならば直ちに一般市民から賣國的行爲として毆打を受ける程度までも、不偏の勇氣を以つて米國立法の不當を力說するといふ如き事も、口に云ふべくして實際上に於いては、頗る困難なる事で、新聞が言論の自由、尊重に對して大なる勇氣を藏して居ると云ふべきである。それだけに新聞に對する世間の理解とその勢力は頗る大である。前期の大統領選擧に際して、共和黨の大統領候補者ハーディング氏と、民主黨のコックス氏との激烈なる競爭中に、コックス氏は、西部の遊說から歸つて

「今回の政戰に米全國に於ける新聞紙の勢力は共和黨の新聞紙三に對して吾が民主黨は僅かに一を有するのみである。この新聞紙のハンディキャップは吾人に非常なる苦痛を與へる」

と語つた事がある。新聞の力といふ事を今更こゝに述べるまで

る必要はないが輿論政治のアメリカでは特にこれが痛感させられるのである。

その偉大なる勢力をうけて外交上の場合に於いて日本に常に苦い經驗を味はされてゐる。その中の二三の例を擧ぐれば最も顯著なる一例は日露戰爭後に於けるポーツマス條約の際に、米國新聞の論調の變化である。戰爭の初期に於いては米國新聞は何れも極東の一少國日本が大ロシアと戰ふといふ壯圖的の行動は、米國人を非常に刺戟して、親日論調は全米國に漲つたのである、西部諸洲にある排日新聞は捏造記事を盛に掲載して排日の氣勢を煽つたが、それでも尚日露兩全權の米國到着の當時の如きは、日本小村全權は非常なる歡迎を受けたに反し、ウイツテ伯は恰から敗軍の將を迎ふるが如き冷淡なる待遇を國民から受けたのであつた。然るに講和會議の進行につれて、その國民的感情は漸次に轉換して、日本全權の門前は雀羅を張るの有様となり、新聞は多くロシアに有利なる報道を滿載するやうな形勢となり、遂には非常なる不利の條約を結ばざるを得なくなつた。その原因は小村全權が、所謂日本の外交家の通弊なる「秘密政策」に因はれ、雲集し來る米國新聞記者に對して、何事も「秘密」の二字を以つて應酬したに對して露國全權が巧みに新聞記者を籠絡して有利な宣傳を試みた結果、新聞の論調に急轉化を來し、米國の輿論が日に日に日本に不利なる形勢に傾いたが爲めであつて、日露講和條約の失敗は日本全權の「新聞の勢力無視」に起因することは米國外交史家の何れも特筆してゐる處である。又他の一例は歐洲大戰後に於ける平和會議に際して、日本の山東問題が何れだけ苦境に陷つたかは何人も熟知する處で、米國新聞のその際に於ける勢力は實にこの問題をして今日の紛糾を招來せしむる最大なる原因であつた。更に最も長く、最も多く米國新聞の勢力に日本が災されつゝあるのは所謂日本人排斥を標榜して立つ米國の所謂ハースト系の排日諸新聞紙の勢力である。彼等が全然事實を捏造し、偏狹なる米國人の愛國心を煽動して、やゝもすれば極めて切迫せる外交關係にする兩國の關係を緊張せしむる。これ等は何れも米國の新聞の勢力の偉大を示すものである。

この偉大なる新聞紙の勢力が總て、米國の新聞をして、一面に於いて、「米國建國の基礎を確立せしむる最新最有力の機關」たらしむると共に一面に於いて「米國を毒し、又世界を毒する文化的毒ガス」たらしむるのである。シンクレアー氏はその著書ブラスチェッキに於いて辛辣に米國新聞の墮落の方面を摘發してゐる。

資本主義商權の米國は、同時に新聞に反映して、資本の力は

文化の進むに從つて資本家擁護の立場を取らしめ、米國の大新聞を存在する。その實例としては、米國新聞紙は何れも、大廣告主に對しては一切の筆を封じられてゐる、又銀行家、工業家の利益の爲めには、常に如何なる場合でもその擁護と、利益の増進の爲めに絶ゆる努力をする。甚だしきに至つては戰爭すらも誘發して憚らないとまで云つてゐる。メキシコ戰爭も、米國の石油會社の利權擁護であり、ハーストの排日もメキシコに於ける氏の廣大なる所有地の利益の爲めであり、歐洲戰爭に於ける米國の參戰も實際はウイルソン大統領の決意を動かしたのは資本家の爲めに筆を曲げた新聞の力だと傳へられてゐる。さう云へば戰爭後に於いてニューヨークに於ける有力なる新聞社長乃至幹部の收賄事件が裁判所で審判されたものが數種あつた。或はストライキの場合に於いても新聞は常に資本家側を擁護して、勞働者の爲めに不利なる結果に終らしむるものは常に新聞紙の爲めだとまで否難されてゐる。甚だしきに至つては地方新聞の如きは、昨日まで勞働者側の主張を支持して資本家の攻擊をしながら、一夜のうちに買收されて翌日より堂々と資本家擁護の論說を揭ぐるものすらある。

廣告は新聞經營の最大なる收入であつて、その增減は直ちに新聞の盛衰にも影響するのは何れの國でも變りはない。然しながら此點に於て米國は非常な差がある。例へば大新聞の廣告收入と販賣收入との百分率は前者は殆んど七十八パーセントに達してゐる位で、これだけ廣告の收益は直ちに新聞の盛衰に影響するわけである。それが爲めに廣告主の一言一句はやゝもすれば新聞の編輯者を脅迫して、その言論を封ずる事が多い、最もこの問題に關してニューヨークワールドの副社長、ドン、サイツ氏は

「余の營業局長として在任中を回顧して廣告主から色々な申出をうけた事は數回すらも思ひ出せない、只二度記憶してゐる事實は何れも公衆に關する極めて公正な意見であつた。それ以外に何もない。若しあつても決してこれを引き受けるべきでない、假令それが廣告主の結婚とか商人的の事の如き何等他に影響しない事柄であつてすら拒絶すべきだ、若しかゝる事があるならば大新聞でも大記者でもない」

と力說してゐる。現にニューヨークタイムス社は、多年の最大の廣告顧客である一大デパートメントアの不利益なる記事を揭載し、その取消しに應じなかつた爲めに、その百貨店は廣告撤廢を以つて威脅したが成功せず、數年後まで同新聞に限りその廣告がのらないといふやうな事實もある然し廣告主の新聞記事干涉は米國新聞に於いては爭ふ可からざる事實として存

在してゐる事は否定する事は出來ぬ。更に又最も米國新聞墮落の一面として、舉げられてゐるのは、輿論を起し、輿論を導く論說記者の無節操問題と前にも一寸述べた新聞の黃色的方面の害毒である。彼等は今日まで共和黨の新聞に民主黨攻擊の筆を執りつゝ翌日は民主黨系の新聞紙の論說記者として昨の政友を攻擊するが如き事は度々ある。これ等は苟しくも筆を以つて立つものの屑しとせざるもので、所謂論說の切賣りとして非常なる攻擊をうけてゐるやうだ、これに對してシカゴトリビユーンの論說記者ティー、ブレーク氏は「これは勿論喜ばしい事ではない然し、何れの政黨に屬するものでもその政綱の全部に一致する人はゐない、何れの宗教に屬する人もその全部に信仰が一致してゐるわけではない、只その大綱に從つてゐるので、新聞記者の場合においてもその新聞の社是の大綱に從ふもので、これは已むを得ない、若し特に自己の意見として發表すべきものあれば署名記事として發表すべきもので社說は個人の個々の意見ではない」と辯護してゐる。これ等はその說く人々の主觀の問題であるが、有名なる論說記者の頻々としてその所屬新聞社を動くといふ事は一般をしてこの謬りを招く事は免はれぬ。これと同樣に新聞記事の捏造私事摘發、風教上の惡影響についても常に一つの社會的問題として論議されてゐる。彼のシンクレアー氏の如きは猛烈にこの記事捏造を攻擊してゐるが實際この黃色的記事取扱は恐るべき新聞の墮落である。然しこれに對して米國新聞記者の重なる人々は「米國新聞は保守的なりと稱せらるゝ英國新聞よりも一層保守的である、米國新聞は一つとして英國新聞に見るが如き、犯罪或は離婚訴訟の如きものを一々詳細に記述して全面を埋める如き事はしてゐない」と主張し記事掲載に際しての自制的の態度について紐育大新聞の、外交部長はその實例として

部下の一外交記者は或る時米國第一むしろ世界的の牧師の驚く可き道德的犯罪を調査して來た、一度これを掲載すれば吾社は特殊として他の諸新聞を壓し得るのみならず全世界の衝動を引き起し得る事は明瞭であつた。然しその影響の如何を考へた時に、その教會は解散し、數百の宗族は職を失ふのである。それで自分は熟考の結果執つた最後の方法は、一切の記事を掲載せぬと云ふ事と同時に、その牧師と會見し一々證跡を示してその反省を促し、何等の理由を發表せずして隱退を聲明せしめた、その牧師の隱退聲明はそれだけでも可なりの衝動を與へたけれども他の如何なる方面にも影響を及ぼす事はなかつた。而して牧師は田舍に一農夫として精進の生活を送つてゐる。

といふやうなことを擧げて辯護をしてゐる。如何なるものにも兩面はある。米國評判もその一面のみを見て、これを判斷する事は出來ぬ。要するに、この世界は善惡の間に挾まれた大きな戰場である。最も重大なる要件は正義公正の完成の爲めに、最も速かに最も正確に斯くの如き惡が存在すると云ふ事を報導する事が新聞の使命である。その戰ひの勝利いかんは全體の善惡の兩面何れに偏するかを支配する。

と同時に、その戰中に於いては米國民の正義と邪惡の愛好の度をその儘反映するものと見なければならぬ。ハドレー氏の所謂善惡兩極端とも例外はあるとしても。

「活動寫眞」を生んだ米國

警視廳興行係長　田島太郎

アメリカが生んだ偉大な發明の一として活動寫眞を擧げることは强ち不適當ではないと思ふ。そこで活動寫眞の發生について通俗的にお話いたします。

西暦一八九三年、今から數へて三十二年前の三月十三日、トーマス・エ・エヂソンがニューヨークに於いてキネトスコープといふ器械を發明いたしました。之は只今の活動寫眞撮影機の起元とされて居ります。所で、エヂソンが斯んな大發明を行つた抑々は何ういふ所に由來してゐるか、其說明には先づ初步の心理學にある殘像のお話から初めねばなりません。人がある物體に眼を向ける。之と同時に物が見える。眼を轉ずれば直ちに物が見えなくなる。といふのは普通一般の人の考へでありますが、若しさうだとすれば活動寫眞は出來なかつたのであります。妖艶なニタ・ナルデーの擧措も、ルドルフ・バレンチノーの二枚目式表情も、其人に會はねば生けるもののさながらの顏や姿を見る光榮を得ないで終るところでありました。と申上げると妙に聞えるかも知れませんが、之は事實であります。實驗心理學者の經驗に因ると、人の眼が或物體に向つた瞬間、即ち網膜が光の刺戟を受けた瞬間から即時に視覺といふものは生れな

い。一定の時間が經たないと感覺は起らないのであります。其時間については學者によつて一定はして居りませぬが、刺戟を受けてから其明暗の度が明かに認められるまでには約百五十シグマ（一秒の千分の一をシグマといふ）を要し、色覺の場合に於いては、其飽和の度を充分に認めるまでには約三百シグマを要する。此現象は網膜に於ける光化學的變化のために生ずるものだとされて居ります。即ち光化學的變化によつて視神經が興奮を來たすまでには一定の時間の經過が必要とされ、此興奮を來たすまでの時間を視覺刺戟の潜伏時間といはれてゐる。之を根據として論ずれば、刺戟が去つた後、即ち物體が眼前から消え去つた後にもまだ網膜には光化學作用が繼續して行はれてゐるといふことが推論されます。之を殘像現象といはれて居ります。之を實驗しやうとするならば線香に火を灯し、暗黑な部屋へ行つて急速にグル／＼と圓を描いて見ると、圓い火の輪が見えます。次に或色、例へば赤い四角を白紙の上に置き、之を暫時見詰めて後目を閉ぢると、目を閉ぢてゐながら赤い四角が見えます。そして暫らくすると青い四角（補色）が見えて來ます。故に若し二つ以上の刺戟が相次いで急速にやつて來ると、前の刺戟によつて生じた殘像がまだ消えないうちに後の刺戟がやつて來るので、刺戟そのものとしては別々であるが、感覺としては一ツに融合して單一のものとなつて了ふのであります。此殘像現象を應用した玩具に、タウマトロープといふのがあります。厚紙を横に細長く切り、其一面にタウマトロープなる言葉を一字おきに、タマロプと左から書き、裏面には其欠字に相當する位置にウトーと書き、紙の兩端に糸を着けて急速に回轉すると、タウマトロープと明瞭に讀むことが出來ます。此玩具と同樣なる理屈に於いて極めて少しづつ變つたやうに急速に相次いで呈示すると、實際は繼續してゐない點であつても、その形は連續して運動して感ぜられるのであります。之を活動現象といひ、ヘナキストスコープは其裝置の最も簡單なものであります。

先づ斯んなものやデイダラム（驚盤）を種々工夫してエジソンは前に申上げたキネトスコープを發明したのでありますが、今から考へて見ると、實に貧弱なもので、之によつて撮影されるフイルムの幅は四分の三吋――今のは一吋であります――長さは僅かに五十呎。之が當時シカゴに開催されてゐた萬國博覽會に出品されて大評判となり、此機械で撮影された寫眞が覗き眼鏡式の裝置で見られるやうになつてゐるので、我も／＼と二ツケルをはづんだのであります。ダンスが本物と少しも變らないやうに寫眞で見える、曲馬も其通りといつたやうな具合で、

物凄いメリケン人の人氣を湧かしたのでありますが、悲しいことには先樣お代りで一人づゝしか覗けない、大勢で見物といふ譯には行きかねる仕掛けでありました。

其後一ケ年三ケ月程過ぎた一八九四年六月の六日に、米國人フランシス・チエキンスといふ男が映寫機即ち大勢で見られるやつを公開したのであります。六年の四月にはレーザムといふ男がニューヨークでエードロスコープなる映寫機を發表し、更に翌年佛人ルイ・ルミエール、ア・ルミエールの兩人が、シネマトグラフといふ映寫機をマルセイユで公開いたしました。次の年一月にも新機械が英國人のロバート・ポールといふ人によつて公開されました。かう次から次へと面當てがましく發表されて見ると、エヂソンも默つては居られません。頭から湯氣を立てながら弟子共と研究した結果、チエキンスの機械に改良を加へてバイタスコープたふものを發明いたしました。之が現在の映寫機の基礎であります。エヂソンはバイタスコープを發明すると早速一八九六年四月六日ニューヨークで之を公開いたしました。そして活動寫眞機の完成者としての光榮を擔ふことになりました。

そこで此活動寫眞機の發明について忘れてはならない偉人は英國人エドワード・マイブリヂであります、マイブリチは馬の[illegible]でありましたが、[illegible]サクラメント[illegible]二十四[illegible]もいふ一の寫眞機を並べ、シャッターに糸を結び、馬の走りに從つて逐次各機が撮影を行ふやうに工夫して、馬の運動を撮影したのであります。此實驗が初期に於ける活動寫眞研究者にどの位力強く作用したかは十分想像されるのであります。此時の寫眞は普通のガラスの乾板でありました。そこで學者達は種々考へましたが、一個の機械で、之と同等の效果を收めるのには、感光の早い乾板を何枚と無く豫め函の中に入れて置き、手際に逐次レンズに向せしめるやうに工夫すればよいと思つたのであります。併し、何にいたせ、種板がガラスでありましてはつて仕方がありません。少し長い運動狀態が續きますと、全部寫すだけ種板を入れて置くことが出來ません。之には少なからず閉口しまして、透明な紙だとか、ゼラチン等を使つて見ましたが、どうも何れを見ても山家育ち、これはといふやうなものはありませんでした。

所が、一八八六年米國人ジョージ・イーストマンといふ男がセルロイドを土台にして柔軟なフイルムを發明いたしました。之に力を得てエヂソンと其一黨は遂にキネトスコープを作り上げたものであります。之れは其フイルムに連續した活動寫[illegible]

相を多數撮影して置いて、之を背後から電氣で照らし、前から眼鏡で覗く仕掛でありました。一秒に四十六枚の寫眞が現はれるやうになつて居りました。之を見たチエキンスといふ前申した米國人が幻燈機に應用して覗くのではなく外部に透寫したのを見せるやうに工夫しました。それを更にエヂソンが改良し、バイタスコープを作つたのであります。之は一秒に四十個の畫を映寫するやうになつて居りました。映寫機は出來た。撮影機は出來てゐる。油は益々のるばかりだつたのです。

一九〇五年には遂にスタヂオまで作つて「熊使」「百面相」「バタフライダンス」といつたやうなものを作りました。何れも當時にあつては人間の作り得らるゝ最長尺であつて、それが僅か五十呎內外のものでありました。それも其筈であります。其スタヂオなるものからして一驚に値するものであります。二十呎に二十五呎の室に車を附け、其上にボール紙で小屋を圍ひ、外をコーターで塗つたといふ珍無類の代物。更に其名も珍無類、黑く塗つて車が附いてゐる所からの洒落れでありませう。ブラツク・マリヤ（囚人護送馬車）と名付け、太陽のあたる方角へ押して行つては撮影をやつたのであります。それでも其所で映したものは非常な人氣を呼び、大當りに當つたのであります。甘い汁は誰でも吸ひたい、之を見て佛蘭西でもパテイといふ會社が起り、モントリールスーボアといふ巴里の郊外とヴアサンタ市に二年後れた一九〇七年撮影所を作りました。之とても大したものではなかつたらしく、米國でブラツクマリヤの次に出來たバイタグラフ會社の撮影所は其事務所の屋根の上に作られたのだといひますから、何れも似たり寄つたりのものであつたと思はれます。

之は活動寫眞發生に至るまでの大體の經路でありまして、只今何千エーカーといふ地面を撮影に使ひ、何千といふ俳優を使用して映畫を作りますのに較べますれば、僅か二十年そこ／＼の昔のことではありますが、實に隔世の感がいたすのであります。

都市計畫から見た米國

弓家七郎

一國の文明はその都市に於て表徴せられて居る。都市を見ればその國民の有する文明の特色や程度は略々察知することが出來る。而して都市計畫は都市の姿の中で最も組織的であり且つ最も人爲的なものである。都市計畫を通じてその國民の文化や特色を語ることも決して誤れる方法ではあるまい。

米國の都市はその國と共に頗る年若である。今日五百萬の人口を擁してロンドンに亞ぐ世界の大都市となつて居るニューヨークの如きも二百年前に溯れば僅か人口四千五百の小都會にしか過ぎなかつた。今より百三十餘年前、即ち獨立當時に於ける米國最大の都市は人口六萬に過ぎざるヒラデルフイヤであつた。然るに今日に於ては人口百萬を越ゆる大都市もその數三つに及び、五十萬以上のものは十二、十萬以上のものに至つては約七十の大多數に上り、全國人口の約半數は人口八千以上の都市に居住して居る。今日に於ける米國々民は謂はゞ都市的若くは産業的國民であつて最早農村的若くは農業的國民ではない。

かくの如く急激なる發達膨脹をなした米國の都市は、たとへそれが科學的方法に依つたものではないにしても、又主として土地投機業者の打算から出たものであつたにしても兎に角く何等かの都市計畫を有しては居た。殆んど何れもの米國都市が今日に於て廣濶なる道路と適當の面積を有する街廓及び閑地を有することが出來るのは全くその賜なのである。しかしながら十九世紀の末期までに於けるこの都市計畫は何れの方面より見ても極めて幼稚なものに過ぎなかつた。昨年物故したレウイスの如きは米國には一八九三年まで都市計畫は無かつたとさへ極論して居たのである。その所謂都市計畫は殆んど碁盤型又は格子型のものゝみであつた。碁盤型とは街路が互に直角に相交叉し、縱も横もない正方形な街廓を造るものを謂ひ格子型とは長方形な街廓を造るものを謂ふ。何れも都市計畫の様式としては最も簡單にして且つ最古のものに屬する。遠く四千年の昔し、埃及やバビロンに行はれて居た都市計畫もこの式のもの

であつた。都市勃興時代を通じて、米國を風靡した都市計畫が、四千年前に行はれた、そのまゝのものであつたとすれば『造られた都市はあつた、しかし計畫された都市は無かつた』と言はれても不服のあるべきはない。勿論百數十年前ワシントンの如き近代的大都市計畫が實行せられて居る事實を否むものではないが、よく考へて見れば、あれは米國に於て實行せられた都市計畫ではあるが、決して米國人に依つて爲された計畫でもなければ又米國々民の輿論に從つて造られたものでもない。あの設計を了解しあの計畫に贊成した米國人が極めて少數であつたと言ふ事實と、その後百年間あの都市計畫が殆んど何等の影響を米國都市に及ぼすことが出來ないで居たと言ふ事實を以て自分はかく斷言することを憚らぬ。

○

ワシントンは南北兩部の政爭の結果として定められた土地で、今でも政治上及び經濟上より見て首府として最も適當なる位置にあるとは思へぬ。けれども人里に遠い曠野が選ばれた結果として、又土地投機業者及び地方的政治家の制肘外に立ち得た結果として、そこには極めて自由なる都市計畫が生まるゝことが出來た。しかも大統領ワシントンの深き信認を受けて、ここに理想的の大都市を建設すべく、設計の任に當つたものは、フランスに生れ、文化の爛熟せるパリーに育つた理想主義者、少佐ピール・シャーレー・ランフアンであつた。ランフアンは歐洲各國の諸都市、殊にルイ十四世のパリ計畫を具に調査し、若き大陸の首府として恥しからぬ尊嚴と美觀とを併有する大規模の設計を立案した。即ちその廣袤四十哩、計畫の基幹としては格子型を採用し、幅員八十呎乃至百二十呎の大街路を縱橫に相交せしめ、市街の中心を議事堂と大統領官舍とに置き、これを連絡するに壯麗なる大公園街路を以てし、更にこの二つを中心として廣濶なる二十一條の放射式街路を八方に派出し、配するに大小各種の公園、廣場、公館を以てし、更に一大運河を開鑿して市の中心部とポトマク河とを連絡せしめんとしたのである。實に彼の設計に從へば全市面積の約六割は街路、公園、廣場等に宛てらるゝことになつて居た。雄大と言はんよりは寧ろ放膽に近く、壯麗と言はんよりは寧ろ豪奢に近いものがあつた。實用と便利と經濟とより外に何物をも知らざる米國民が激烈なる反對をなしたるは當然であつた。ランフアンは彼等の粗野と無理解とを憤つて遂に米國を去つた。けれどもその計畫は大統領ワシントン及び副大統領ジェフアソンの勇氣と技監アンドリユー・エリコツトの忍耐とに依つて略々遂行せらるゝことが出

來た、世人の反對は計畫が部分進行してからも否設時だこ、に移つて來てから後も可成りに猛烈であつた。而して嘲笑するに『莫迦にだゝ廣い都市』(City of Magnificent distance)なる名稱を以てし、その都市計畫を以て全然失敗なりと斷定したるかの如く見えた。世人は全面積の過半數を街路や公園や廣場に與へたる都市が、果して市街としての體裁を備え得べきかを先づ疑つたのである。

ワシントンに比すれば、ヒラデルフイヤやニューヨークの都市計畫は頗る米國式のものであつた。それは實によく米國の國民性にも又社會事情にも適合して居た。その型は所謂碁盤型若くは格子型と稱へられるものであつたのである。ヒラデルフイヤの都市計畫は米國に於ける最も古きもゝ一つと數へられて居る。それは一六八二年ウヰリアム・ペンの指導下に土木部長トマス・ホルムスの設計に依つて建設されたもので、その廣袤は約二平方哩、所謂碁盤型のものに屬し中央に幅員百呎の大街路が縱横に交叉して全市を四個に區分し、これに並行して東西に八條、南北二十二條の小街路(幅員五十呎)が四百呎の等距離を置いて規則正しく走り、中央、二大幹線街路の交叉する地點には面積約十五エーカーの廣場が設けられ、その周圍には公館が建築せらるゝ計畫であつた。樣式から言へば殆んど總べてが

ローマ都市の模倣であつて、何等の[illegible]にして無趣味なものであるが、その簡單にして、[illegible]專門的技能を要せざることが米國人の性格と必要とに適したゝで、その後廣く多くの都市に採用せられた。

ヒラデルフイヤが計畫的に建設せられた頃のニューヨークは、僅かに毛皮の取引地として知られたる一小都會であつた。その人口は千七百年に於て漸く四千五百と算せらるゝに過ぎなかつた。從つて固より矢釜しい都市計畫問題の如きも起つては居なかつたが、それでも市街は大體格子型に造られては居た。その後新大陸の發達につれ、有力なる商業都市として次第に發達し、殊に獨立後はヒラデルフイヤを凌いで一躍新大陸第一の商業都市たるに至り、膨脹の勢ひ頗る急激であつたので彼等はこゝに一大都市計畫を樹立するの必要に迫られた。而して一八〇七年米國に於ける最初の都市計畫委員會は任命せられた。彼等は先づ當時人口八萬のニューヨーク市が二十五年にして五倍に膨脹すべきことを豫想し、市域を北に八哩擴張した。次いで如何なる街路系統を定むべきかに付き、意見は分れて議論は大に沸騰した。委員の中には勿論ワシントンの計畫に賛成を唱ふるもの、その幾部分を採用すべしとなすものもあつたと同時に、唯自己の經濟的利益のみを考慮するもの、經濟的負擔の輕から

ることのみを否ふもの皆深出所たのである。會議の場所は木材工事中の市廳舍の一室であつた。隅の方には建築材料が積み重ねられてあつた。果しのない議論の末、一人の委員は起つて建築用の金網を地圖上に押し被せて言つた。『理窟は要らぬ。これで立派な計畫になるではないか。南北に走るものがアヴェニーで、東西に横るものがストリートだ。都市は何よりも先づ人間の住む場所である。人間の住む場所としてはこの街路系統に依る方が便利でもあり、解り易くもあり又經濟的である』と。かくして格子型が採用せられた結果としてニューヨークはその後一本の放射線を入れるためにすら數億圓を投ぜねばならなかつた。

○

かくの如く非整型若くは格子型の都市計畫が全國を風靡した所以のものは、固より單純平易を愛する國民性と、計畫に參與した市民の多くが土地所有者及び土地賣買業者であつたことに因るものではあるが、その特殊の事情として聯邦政府の造つた陸地測量網の影響をも擧げねばならぬ。

新に開かれたる新大陸の植民地には所有の境界を限るべき嚴密なる區劃はなかつた。尤も人口が増加し、土地が開發せらるゝにつれて、河川山脈の如きものが自然にその境界をなすには至つたが、河川も山脈も判然としない大陸の奧深い土地は、如何にしてどの樣に區劃して宜いか解らなかつた。その面積すらハッキリと解らない程の廣大なる領土の持主となつた新政府が、如何にしてこれを統制すべきかに就て迷つたのも無理ならぬ次第であつた。トマス・ジエファソンは茲に於て、大膽にも極めて不正確なる新大陸の地圖を取り、オハイヨ河より西以及び北部一帶の圖上に縱橫の測量網を劃し、これを基準として、その開發及び統制に資せしめた。その南北に引きたる線を幹緯線(プリンシパル・ミ)と名け、東西に劃したるものを基線(ベースライン)と稱した。各幹緯線間及び各基線間の距離は三十六哩づゝで、幹緯線の數は二十四條、基線の數は十一條あつた。各幹緯線及び各基線に並行し、間隔六哩づゝを隔てゝ更に數多の界線が引かれた。かくして出來た六哩四方の一區劃には町區(タウンシップ)なる名稱が與へられた。各町區は更に間隔一哩宛の平行線を以て三十六個の區に分たれ、各區は更に四分され、八分され、十六分され、三十二分され、六十四分された。その六十四分された一區劃の面積が丁度十エーカーで、普通所有地の單位になる勘定であつた。かくして彼等は山河にも地勢にも頓着なく、さしもに廣漠たる大陸を縱橫自在に區分し、各々の區劃に番號を附して統制の便に供した。而して多く

つ場合、道路はこれ等の境界に沿ふて若くはそれに平行して敷かれた。新なる都市が建設せられたとき、街路の系統が新に定められんとするとき、その系統がこれを基準として定められたことは蓋し極めて自然の勢であつた。この系統に從ふときには街路が自然に各所有地の境界に沿ふて、若くはそれに並行して定めらるゝことが出來ると言ふ利益が、市民に取りて當局者に取り大なる誘惑であつたこと勿論である。

○

かくの如くにして出來た都市も、それが小さい間は、又その發達が緩漫であり產業が小規模である間は、まだ忍ばれることも出來る。しかしながら、それが膨張して人口三十萬五十萬を突破し、高層建築は櫛を並べて益々その高さを競ひ、總べての產業は都市に集中して工場は到るところに建てられ、住居は工場と混淆し、商店は邸宅を包圍するに至ては、最早時代の要求に適應することは困難なるに至つた。各都市は頻りにその市區を改正し、街路を修築し、その交通機關を建設し、その衞生設備を整へんことに努めた。

しかしながら、これ等の都市を支配したものは唯打算のみを重んずる土地所有者と商工業者とであり、その都市の建設に携るものは主として自由利潤の外何ものもなき市町村自治體、投機的土地賣買業者とであつた。しかも時代を支配した思想は、安價なる自由放任主義であり、狹隘なる個人主義であつた。支配するものは打算のみを知つて理想を知らず、建設するものは固より利益の外何物をも考へなかつた。而してこの形勢を一層悪化せしめたるものは米國特殊の社會狀態であつた。即ちその大都市に於ける住民は殆んど大部分が移住者であつた。しかもその過半數は南歐よりの渡來した下層の移民であつた。固より都市に對する愛着も理想もなく、その目的とするところは少したりとも收入の多からんことであり、その希望するところは一仙たりとも支出の少なからんことであつた。相共に都市を目して經濟生活の戰場なりと観じ、都市の美觀とか環境の快適とか言ふが如きものは殆んど無用不經濟なるかの如くに取扱つた。人々は都市に工場と商店との外住居のあることを忘れたるかの如くに見えた。死亡率は年々に增加し、出產率は日々に減少して行つた。經濟的又は時間的餘裕を有する者はこの生活を逃んがために郊外に居を移した。その餘裕を有せざる者は或は酒場に、或は賭博場に又或は劇の席に沈溺してその苦痛を忘れた。清さと健かさとは都市から姿を隱したるかの如くに見えた。それは實に經濟的、科學的發展の時代であつた。

この都市的沒理想の時代に一道の光明を投げたものは一八九三年シカゴに開かれた萬國博覽會であつた、綜合的天才ダニエル・ハドソン・バーナムの設計に依り、博覽會の會場として建てられた面積七十七萬坪のホワイト、シチーは實に各建築物の一大交響樂であつた、その音律的なる調和と氣韻の豐かなる街路と、風致に富める廣場とを以て、それは忽ちにして全米國の人心を惹き付けた。かくの如き淸新なる感じを與へ得る都市の存在し得ることを事實に目擊して彼等の眠れる都市改造熱は俄然として覺醒せしめられた、彼等は先づその都市をして住むに適する場所たらしめよと呼號して起つた、

先づシカゴの商業會議所はバーナムを中心としてシカゴ市の根本的改造に着手した、目下進行中である有名な大シカゴ計畫はその成果である、それは傳統的の格子型に配するに大三角網を以てし、三角形を無限に連續することによりて放射線を自由に取入れ、中央部に都心を置いて公館をこゝに集中すると共に、數多の公園廣場を系統的に配列して美觀と衞生とに備へ更に大規模なる港灣を建設し、陸上の交通機關との連絡を良くして以て産業の發達に便せんとするものである。最近に於ては更に地域制を採用して、全市を住居地域アパートメント地域、商業地域及び製造業地域に分類し益々都市の系統的發達を策進せんとして居る。シカゴに亞いでワシントンも亦その首府改造計畫の調査をなし、クリーヴランド、ピッツバーグ、サンフランシスコ等亦各々その都市計畫に着手し、都市計畫熱はこれより全國を風靡するに至つた。最近の報道に依れば既に都市計畫を作成し、若くは之に着手したる都市の數は既に百五十餘に上つて居ると言ふ。

○

都市計畫に目醒めたる米國都市の採つた態度には、流石に新興國民たる意氣が漲つて居る。彼等の計畫は飽迄も雄大であり、民主的であり、組織的であり、徹底的であり、且つ實用的である。ロスアンゼルス市が人口五十萬にして、早くも二百萬の市民を豫想して遠く二百哩の遠方に飲料水を求め、人口七十萬にして面積三百平方哩の大都市計畫をなせるが如き、ニューヨーク市がマンハッタンを中心として半哩三十哩乃至五十哩、廣袤約五千平方哩に亘る大都市計畫案を立てつゝあるが如きは、その雄大なる方面の一例である。その民主的なる點は、所謂都市計畫委員會の組織にこれを見ることが出來る。米國の都市計畫は、普通商業會議所又はその他の市民團體に依つて發案せられ、大體の骨子が造られるのを常とする。例へはシカゴの都市

計畫に商業組合及び婦人團体の要望によつて發起せられた。ニユーヨークの市計畫はラッセル・セージ財團の手に依つて現に進捗しつゝある。初期の都市計畫が何れも簡單にして幼稚なりしことも其の民主的なるが爲であつた。第三にその特色とするところは組織的なる點である。一つは都市の起源の新らしくして煩はさるゝ傳說や、顧慮せらるゝ歴史を多く有せざるためであらうが、米國の都市計畫は常に飽迄も大膽であり、科學的であり、實用的である。例へば都心を定むるにしても、公園を開設するにしても、決して目前の便宜にのみ拘はれては居ない。費用は餘計にかゝつても、事業は困難でも、大抵は將來のため最も宜しと信ぜらるゝ案を採用して居る。これは都市の發達が急速である結果でもあらう。ニューヨーク市が僅か十エーカーの小公園のために五百二十三萬七千弗の土地買收費を支出したるが如き、シヤトル市がその公館區域を造るために市の中心部を收用せんとしつゝあるが如き又カンサス・シチーがその驚くべき公園系統を完成したるが如きその適切なる例である。第四は徹底的な點である。例へば建築物の統制に付ても、彼等は先づその有する警察權を以て建物の高さを制限し、用途を制限し建物と空地との割合を規定した。然るにかくの如き制限は不當に個人の自由を束縛し、財産權を侵すものであるとの攻擊を受くるや、彼等は法律を以て[illegible]て、全市を十數區の地域に分ち、各區の[illegible]物等に關する規則を異にするや、是れ憲法に保障せらるゝ平等待遇の原則に背くものなりとして激しき抗議を受けた。憲法違反なりと判決せられた州においては、直ちに憲法の改正をなして、飽迄も當初の目的を貫徹して居る。

猶米國に於ける都市計畫運動の一特色は、その經濟的利益を頻りに高調する點である。都市計畫の如き大なる支出を伴ふ事業に對して、市民の同意と協力とを得んがためには、かゝる如き手段も亦已むを得ない方法であらう。その常に主張せらるゝ經濟的利益の一つは、或る都市計畫事業が行はるゝときには、附近の土地はその利益を蒙りて必らず地價が騰貴すると言ふことである。米國都市の如く發達の勢ひが急激なるところに於ては、かゝる議論も僞に一部の眞理を含んで居る。のみならずその經費の大部分を特別賦課制度により、徵集せんとする政策的立場から言へば、それを高調すべき理由は十分に存する。然れどもこれがために都市計畫は主として地價の騰貴を目的とするものなるかの如き誤解を生じ、經濟的利益を伴ふことの少き事業は動もすれば冷眼視せられ時としては猛烈なる反對をさへも招くことがある。例へば發達の途にある街路の改良とか、公園

の開設とかの如き事業が多大の熱心を以て迎へらるゝに反し、既に高度に發達せる街路の改善とか、保安、衛生又は美觀等のためにする取締り規則とかは往々にして猛烈なる反對を受けることがある。尤も中には保安とか衛生とか美觀とかの利益をさへ金錢的に見積りて、その效用を力說するものもあるが、これ等はその利益が直接現實的でないだけに十分なる效果はないやうである。シカゴ市は、嘗てその飲料水をミシガン湖に仰ぐと同時にその下水をもミシガンに放流して居た、その不衛生なることは言ふまでも無く、傳染病は年々增加しその死亡率は頗る高くなつた。多年の論議の末、遂に一八八九年、六千萬弗の巨費を投じて一大下水道を開鑿することに決し、數年の後漸く總べての下水をミスシッピー河に放流することによりてこの問題を解決した。某經濟學者はこの下水道が完成せざりしならば一九一二年までの間にチブスに依りて死亡せしもの一萬五千ありしならむと計算し、而してその損失を金錢に見積りて七千五百萬弗なりとなし、以て衛生設備の經濟的利益を力說して居る。これは餘りに經濟的利益萬能に傾したるものであるが、又以て米國都市計畫の一面を窺ふに足るべきものであらう。

米國のラジオの驚異

若月保治

一

たつた一日の間に、專門家でもない私に向つて、米國のラヂオについて少しく書けといふ話である。其以前新聞社にゐた頃の態度で快諾はしたものゝ、さて手許にある材料といへば何も纏つたものはない。即ちいろ〳〵な外國雜誌を引ずり出して、專門的な方面はそつちのけにして、ラヂオが米國に於て、實際如何なる方面に應用されてゐるかについて、斷片的に、手あたり放題に、少しばかり書いて見ることにする。

さて米國で此ラヂオ・ブロードアスチング即無線放送が流行

[illegible]した設何に、大正十年七月頃、ニューヨークのWJZ局が、實用的に日常係を[illegible]始められたに始まり、僅か三四年の間に驚くべき勢でこれが進步して、世界中に於て、自動車とラヂオといへば、全く米國の特有物の如き觀があるに至つたのである。

近頃の報道によると、日本にはたつた二つ、英國でもたつた五つしかない放送局が、米國には既に數百を以て數へられ、その受話裝置をもつてゐるものは數百萬人以上に及び、少くも十軒毎に一個は備へつけられ、ある會社の如き、その需要を充すべくラヂオの裝置を毎日五千づつも製造してゐると傳へられてゐる。

いふまでもなく、これは米國に於ては金が澤山あるのと、一つには、素人の無線電話取締規則が非常に寛大で、只受話裝置をもつて聽くだけなら絕對自由であるのと、放送に關しても割合に寛大であるがためで、これがために今は電波の混亂を來して、戰時などには聊か閉口するやうな狀態になつたとさへいはれてゐるのである。

二

何といつても米國のラジオは、もう決して贅澤品や娛樂品ではなくなつて、立派に實用品の範圍にはいつて、其用途の擴大と[illegible]

ゐることも驚くにたらぬことであるが、[illegible]

[illegible]ことにいふまでもないが、[illegible]樂しむものが、携帶ラヂオ裝置をもつて、音樂をきゝながら、靜に浮木の動搖を注意してゐるとか、パンの製造會社などで、職人が皆音樂をたのしみながら、愉快に仕事をするとか、散髮屋でラヂヲをそなへつけて、客をして雜談に耽けらせないで、靜にラヂヲをきかせて、散髮師が仕事をはかどらせてゐるといふやうな所も既だ少くない。それかと思ふと、またタキシーの中にラヂオをそなへつけて、客を樂ませてゐるのもあれば、或はパラソルにラヂオをそなへつけて、散步しながらラヂヲを慰んでひそかにほゝゑんでゐるといふ洒落れたのもある。かと思ふと、銀鞍白馬の貴公子ならずとも、馬を驅つて遠乘りを試みながら、頭にはラヂオの受話裝置を戴いてゐるファンもある。海軍の水兵は休息時間も甲板に身を横へて、靜に蓄音器の前にほゝゑみ、或はまた大仕掛になると、さまざまな物音をさせ、聲色をつかつて、それに色々の鳴り物を加へて、所謂無線劇として放送してゐるのもある。此無線劇は、現に米國に於ては非常な勢で流行し、劇場は毎日聽衆を以て煮えくりかへりつゝあり、それが其の興行者をして[illegible]な收入を[illegible]さし

なることゝなり、最近には佛國革命の無線劇といふのさへ行はれたといはれる。大鼓や鐘や鐵砲や樣々の器械、爆發の音などを利用して、慘憺たる光景をラヂオの上に描き出したもので、聽衆をして狂喜せしめたさうである。

それからまた音樂家にして此ラヂヲを利用せんとするもの漸く多きを加へ、已が技術を天下に傳へんとする、野心家は、靜にミクロフオーンの前に立つて手腕を揮ひつゝあり、それがまた次第に一種の流行たらん傾向があるといふのは、極めて自然のことであるといはねばならぬ。

三

ラヂオが現に米國に於て實用に供せられつゝある範圍はまた日々に其度を加へつゝあり、これも殆んど數へ切れぬ位であるが、一寸思ひついたゞけでも、可成にある。停車場とか大會堂とかの入口で、靴磨屋がラヂオをそなへて、客を引きつゝあるも一つの實用といへば、ラヂオの器械や、その他の器物を賣る行商人が、路傍でラヂオによりて客を呼ぶのも、日本の色々な商店が蓄音機によりて客をひかうとするのと同一筆法である。なかにはそれがだん／＼に極端に走つて、ニユーヨークのギンベル・ブラザース會社のやうに、見事なアンテナを設けて、それで客の注目を引かうとするやうなことにまで進んでゐる。ニウヨークの警察では、もうずつと前からラジオを搜査や犯人逮捕用に使用し、警視廳は放送局を設けて、さま／＼の必要事項を放送しては犯人逮捕に便じ、その他の場合には講演などを市民にきかせたりし、またその長官は常に受話機を耳にして、有ゆる報道を受けつゝあり、警察官は自動車や自動自轉車などに受話裝置をそなへて、西へと命ぜらるれば西へ走り、東の何の邊といはれゝばその方に進んで、まるで風にあやつらるゝ紙鳶の如く市中を飛びまわつてゐる。消防に關しても常にラジオが使用され、加州カーネー病院その他でも、患者の慰藉用や、手術の間に患者の神經を和げる一助としてラジオを用ひ、見事な成績をあげてゐる。

その他炭坑内にラジオを用ひて危險防止の助とし、又は鑛脈の探査測定にも用ひ、海底に利用して搜査に便じ、急速に疾走しつゝある列車に應用して、列車内よりの放送受話にも成功し、或場合には病氣で登校出來ぬ學生は、ラヂオによりて答案を提出し、大學教授なども亦ラジオによりて講演を放送したりした場合もあり、有名な牧師が說教に出かける代りに、ラジオによりて說教を放送することは一般に行はれ、頗る好評を博してゐる。

時々の物價や株式の相場や、天氣豫報を始めとして、重なる日常の出來事などが最も廣く放送され、それが一般社會に多大の利益を與へてゐることはいふまでもないが、最も不思議なラヂオの實用と傳へられるのは、聾者にラヂオを應用して、高聲を通じての教育をなし得ることが分つたことである。普通の肉聲ではどうしても理解することの出來ない聾者も、ラヂオならば立派に聞き得るといふことは、いふまでもなく聾啞教育上の福音であつて、既に米國に於ては、此方面に於けるラヂオの應用が漸く盛ならんとしつゝあると報ぜられてゐる。

ニウヨークの中央公園に於ての實驗によると、飛行機と地上とのラヂオは二百哩までは有効なことが證明せられ、更に海上の安全を計る爲には、到る所の燈臺よりラヂオを送つて、霧の狀態や天氣の模樣などを船舶に報ずることも行はれんとし、米國海軍の專門家は、新式のアンテナを發明して、色々の異つた波長で、同時受話と、地方放送の出來ることを可能ならしめ、之を既に巨船レヴイアサンに應用したと報ぜられてゐる。

またサンフランシスコ市のヘルマン及びフレッチーの二醫士は人體患部の振動の期間を測定するラヂオ裝置を發明して實用に供し、健全な部分のそれと比較して、診斷上に好成績をあげつゝある。

それかと思ふと有名なる大發明家エヂソン氏は、自動車に放送裝置を設け、必要に應じては、修繕その他緊要な場合に、職工を召集する目的に之を使用しつゝあると。

五

最近に米國シカゴからの報道によると、同市の一病院にては、ラヂオを用ひて癌の手術を二つ行つたといふことである。それは針のやうな一種のナイフを送話機にとりつけて、一方の電極をつくり、他の電極を患者の體と連絡したのである。かくすると、人體の組織は一種の抵抗體となりて例の針様のナイフを熱し、無出血の切開が行はれたのであると。

尚最近には小學生のラヂオ、クラスといふものを作らんことが計畫されてゐると云ひ、米國海軍の、飛行家達は、睡眠中に受話機を耳にあてゝ、ラヂオの受話を學ばされてゐるさうである。

それからラヂオの實用をして最もエキサイチングなものたらしめたのは、米國ではラヂオを政治上及政治運動上に使用しつゝあるといふことである。

昨年大統領選擧の際にも、候補者連は方々に出張して、自分の主張政綱を演說してあるく代りに、身は自分の事務所にゐながら、大仕掛な無線放送によりて用を便じ、それが却つて興味と効果を引起すこと多大であつたと傳へられる。

クーリツヂ大統領はその後議會内の大廣間に放送裝置を据附け、議會に於ける自分の演說を一般民衆にもきかしめるやうにし、更に六つのラヂオ、ステイシヤンに之を傳へて、そこから全國に大仕掛の放送を行はしむるやうにし、全國民をして自分の大演說をきかしむる便宜を與へ、大に人氣を博しつゝあるといふ。

無線電話ではないが、無線電信によりての寫眞の遠距離傳送といふことも、今日では益進歩して、最近にはニユーヨーク、シカゴ間は勿論、ニユーヨーク、ロンドン間にも實驗に成功して、英國皇太子の肖像は美事に電送されたのであつた。殊に一方から電送されたものが、まだ電送され終らない中に、再びそれが先方から電送され返すことも立派に成功したさうである。

かういふことが着々として成功し無線劇が行はれるといふことになれば、近くはオペラでも大芝居でも立派な電線電送が行はれ得ると同時に、電車も自動車も軍艦も飛行機も、無電によつて美事に左右することを實用に供し得るに至り――實際では成功してゐるが――更に進んで醫師の診察などいふことも、最早實地に往診しないでも、遠からずして無線診斷によりて行はれるに至るだらうと豫想されてゐる。

更に最近の報道は米國に於て、無線地震計の發明を報じ、ラヂオの成功距離は既に二萬八千八百哩以上に達したといつてゐる。

六

私は此杜撰なる報道を終るに方りて、最後に見出した一昨年に於ける米國の統計によりて、アメリカのラヂオが、既に一大工業として進歩し來つたことを示したいと思ふ。

即ち同年間に一會社のみが發賣したラヂオ裝置は四千五百萬に及んだといふことであるから、他の諸會社の發賣を合すると少くも總額九千萬乃至一億圓に到達すべく、其年の公許放送局數は五百六十三局、受話裝置は五百萬にして、毎日一千萬人以上がラヂオを聽く、ラヂオ工場に働くものは二十五萬人、製造者三千人、仲買人一千人、小賣商人二萬五千人であるといふから、それから一年以上を經た今日に於ては、その數は實に驚くべきものとなつてゐるだらうと思ふ。

小說 出獄者品座龍彦の告白……松永延造

小說 人癲癇……宇野浩二

小說 童貞……豐島與志雄

小說 敗たる人々……悅田喜和雄

小說 參(しん)……野上彌生子

小說 緣談窶……里見弴

小說 「惡(イーヴル)」の同意語(シノニムス)……牧野信一

小說 未解決のままに……德田秋聲

戲曲 なさけ……久保田万太郎

小說 死兒を產む……葛西善藏

戲曲 叛逆時代の將門……眞山青果



出獄者品座龍彦の告白

松永延造

私！私？……之は一體何んな人間なのだらう？厚みもある、幅もある、成る程！物質的には極めて確實な存在だ、私は何もそれを決して疑はうと云ふのではないのです。

然し、私の精神？この方は隨分とドギツいに拘らず、何となく不確かな存在のやうに自分でも感じられてならないのだ。勿論、それは暗くて重い。形のある物で喩へたら、先づ、地下の土管のやうだとでも云ひたい位だ。だのに、この土管には缺陷がある。洩れる、洩れる――さうだ。何かしら面白からぬものが泌み出しさうなのである。

だが、道ばたの犬と喧嘩をしてゐるやうな、斯んな話し方では、肝腎な所へ何時迄たつても行きつけさうもない。だから、いきなり、かまはずに、次のやうに取りかゝりませう。

さうだ。私の胸の中には二本の土管が貫通してゐた。それ等は一つの系統によつて相連らなつてゐたとは云へ、然も、何だか質をも量をも互ひに相違させてゐたやうだつた。おゝ、勿論、之は又しても一種の詭辯かも知れない。でも、私としては、ことさらに僞りや曖昧をたくむでゐる譯ではない。いや、その僞りから、何うしたら何時も遠く隔たつてゐられるかと云ふ事――に私としては隨分心を傾けてゐるのです。

かまはない。思ふ通りを打ち明けませう。前にも云つた通り、心の狀態は二た通りである。そして、その一つには次のやうな性質が含まれてゐた。

――自分が若い頃から持ちあつかつてゐる色々の慾――女以外の人間には餘り強い愛を感じない事――可成り勢力的な事――その結果、無理に體を働かせ過ぎ、勞れ切つて、氣を苛ら立たせたりする事――

いや、並べて見ると、何一つ特殊なものはない。男として、之位な性質は誰れだつて持つてゐやう。

さて、それでは次の、殘りの一つは何うだらう？

――何時も倦怠を感じる事――時々不圖性慾が缺亡する事――晝間から居睡りをしたり、背骨を柱へ押しつけて、唯だウツラ〱と物を思ふてゐる事――何うも痛みを耐へる力が足りなくて、その爲めに仰山な苦悶の動作をする事――死を考へると、狂はしい迄に氣がせき出す事――

まづ、そんな風だつた。

で、私は自分一人で考へるのだが、前者の方の性質は私の「生命の過剰」から來てゐるらしく、又、後者の方の性質

は、私が老境へ入るに從つて、しづ〳〵とその氣分を發表して來たものに相違なかつた。だから、今のは、兩分には少受太刀の氣味があつた。

いや、又、詭辯だ。私はそれから逃れねばならない。そして、もつと直接に、重要な點を話し出さう。さうだ。到到、惡い日がやつて來たのだ。そして私の身の上に妙な事件が突發したのだ。

ずつと、以前、つまり三年程前の話しです。けれど、誰れか一人位は未だ記憶してゐるでせう、方々の新聞に、ラックを溶いて、幼兒の屍骸の足へ塗る。』と云つたやうな見出しで、或る不可解な事件が報道されたではありませんか！私がその犯罪の下手人ではなかつた――勿論さうではない。然し、矢張り、この事に關係してゐて、恐も仲々重い罪に落され、結局K監獄へ投げ込まれて了つたのでした。

何う云ふ譯で、又は、何んな目的で、幼兒の足がラックで塗り上げられたか、それを答へるのは私として造作ないのですけれど、何うも私は話したくない――聽いた所で何んの利益をも皆さんへ與へないのに、私自身は大變恥かしい私持ちをせねばならないのだから。

飛び飛びになりますが、私はもつと先の事を話しませう。その方が何うも好いやうだ。

さて、私は監獄の室の中で考へた。

『一體私を斯んな端目に落したのは、私の第一の性質だらうか、それとも第二のだらうか？おゝ、實に愚問だ、この上の馬鹿は誰れにも出來ないだらう。

私はやはり一人で淋しく答へました。さうするより外なかつたのです――――

『第一の性質だ、第二の性質だなどと、云ひ譯や、こぢつけをこね上げるな。結局はこの一つ！この性質としての一つだ。私の心……この混沌としたものを見つめるが好い。』私は段々眞面目に考へ、考へして、しまひには涙さへためて、後悔と似たやうな心持ちにもなつてゐました。いや、實際、深く後悔してゐたのです――何をでせう。凡ての事をです、決してあの一つの犯罪丈ではない、そこへ至るまでの私の心中のあらゆる原因、日々の生活のあらゆる斷片をです。

よく世間の人はコツ然と悟ると云ひますが、私には、この場合でもそんな後悔の心持は味はへませんでした。早く云ふと、私の犯罪には、私として正當らしく思へる理由があつたので、急にハツと思ひついて懺悔の涙に暮れると云ふやうには行かなかつたのです。私は苦しい精進によつて、毎日少しづつ、考へを變更するやうにつとめ、その努力の斷片をいくつとなく集めて、やうやく一つの諦めなり、後悔なりを作り出した譯です、だから少さい弧線をいくつも拾つて、つなぎ合せ、圓形を描き上げると云つたやうな體裁なのでした。

さうだ。私は何の道、直線的な人間ではない。旋廻的な玉ころがしの玉みたいな人間だつたらしい。

皆さんは聞いて呉れるかしら――私が監獄の中で何んな生活を續けて來たか――と？　けれど、許して下さい。その不快な思ひ出を私は今、充分告白する丈の時間を持たない。だから、私はそれを他の日に譲らして貰ひ、私があの暗い領域で得た經驗の部分の又部分丈を、云はば雲の切れ目から一寸洩れて、直ぐ遮られる光線の如くに、ほのめかせる事で滿足せねばならない。

先づ私が服役してゐる間に、「監獄」と云ふ名稱が「刑務所」と改められ、囚人達は「受刑者」と呼ばれるやうになつた。この一事は昔、郵遞局が郵便局と變名されたのと同じやうな極く簡單な動機に依るものであつたか何うか私は知ら

たいっけれど、或る法學者は斯う云つてゐた相だ——

「極めて徐々にではあるが、監獄の內容は改良されて來た。そして刑罰は復讐でなくて、敎育であると云ふ思想が色濃くなつて來た。內容の異動に連れ立ち、もしくは先立つて、監獄と云ふ名稱も改められねば……」

之が事實なら、私は可成り幸福な時代に監獄入りをしたものに相違なかつた。

さて、飛び込むで、一番初めに困つたのは、食物の種類の急變だつた。世間の人は「臭い飯を喰ふ」と云ふ立派な熟語を持つてゐるが、正にその通り、此處で與へられる飯は麥七分、外國米三分と云ふ割合で、馴れない間の食事の辛さは唯だ經驗者だけが語り得るものに相違ない。私は初めの內、胸がつかへ、喉がふさがり、悲しみが頬のあたりに泛ふので、與へられた丈の量を平らげる事が何うしても出來なかつた。

そんな譯で私は段々痩せて行く一方だつたが、その內、到々トリ目に罹つて了つた。すると、設備はとゝのつてゐて、私には直ぐ肝油が與へられた。それが又、何と云ふ粗惡な品だらう。此の頃では、三共製藥會社などで製造する其れは薄荷の香りを加へて、隨分風味よく出來てゐるが、監獄で出すのは「ドブロク」と云つても好い程のもので、之も亦、甚だしく私の味覺をしひたげるのであつた。

とは云へ、極く僅少な慰藉が一つだけ此處にある。あの三時頃に貰ふ麥焦がしの粉は私に取つて何と云ふ魅力だつたらう。ところが、之はサジに一杯以上は許されないのだ。實に大の男に取つて、イジらしい程の量ではないか。量が少ければ少い程、私はこのコガシを愛好し、戀慕さへした。しやれて云へば、この綿屑のやうな粉が喉の粘膜迄も擦つて、すつと胸の中をコスれて落ちて行く時には後朝の悲しみがコミ上げて來るやうな氣さへしたのだつた。私はそれで、粟と、ちつとづつ甞ては、甞める間々に、一種儚い眼くばせをして、遙かに遠い何ものかを見やつたりしたものだつた。

その内に、御飯の方も大分行けるやうに、私の内臓が順應した。私は受刑者中での模範だつたので、赤の代りに青い衣服を着、又、御飯も一日二合五勺づつ食べる事を許された――次手に云つて置くが、成績が惡いものは一合五勺位しか與へられないので、空腹の苦しみから、段々善良になつて行く――。あゝ、もう一つ思ひ出した。一週に二回丈、「ダンゴ」が食べられる。之も、成績の好い奴にのみ惠まれるのだが、悲しい事に、甘くはなく、鹽がつけてあるのだ。

入浴は一週間一回しか許されない。然し、全體から云ふと、受刑者はそれ程不潔でもない。刑務所の内部は色々設備が行き屆いてゐて、貧乏な裏長屋へ住むよりは快い位である。もつとも便所は室の片隅にあるが、汚物は下から抜き取られるやうに出來てゐるのだ。

この特別の世界の中で、一つ不思議なのは「光線を遮斷する刑罰」と云ふものが、獄則を犯した囚人へ能へられる點だつた。小さい藏のやうな建物があつて、中へ入れられ、戸を閉められると、もう一分の幅の光線さへ漂つては來ない。人間は元來、光りを好む點では草木に負けない生物である。で、長い時間續く闇黒は想像したよりも以上に、苦痛の烈しいものだ相だ。もつとも此の刑罰は七日間より多くは與へられない。きつと、體に障るからだらう。さうだ、法學者は云つてゐるのだ――『罰は教育なのだから……』ハツ、ハツ、教育とは人の眼へ闇を見せる事なのか？いや、私はそんな皮肉を云ふ權利を持つては居ない。私は知つてゐる――この光線遮斷は極く温雅なお仕置きに相違ない。少くとも、」鞭と懲との相關關係を考へ出して見れば……。

話し出せば未だ切りがない、あの黒い掲示板なぞも面白いぢやありませんか。」

秋が來た

蟲が鳴く

家では誰れが泣く

なんて、歌が書かれてある。天は高く澄み、秋風がサワサと鳴つて渡る。囚人たちは色々の思ひを懐いて、この歌を讀むのだ。之は確かに淋しい。普通の感傷以上のものだ。

だが、私は別段、私が刑務所内で得た長い經驗と苦惱とをまだ少しも話し出してはゐない。それは前にも斷つた通り、別の機會に讓る可きであらう。

私は寧ろ此處で、そんな苦しみより、諦めや慰めの方を語る方が好い。さあ、それは何だつたか……。

私は斯う自分で考へたのだ——

『いや、いや、此處には未だ何かしら希望がある。私自身が昨日他所の刑務所で死刑に處せられたあの大男の高島君でないと云ふのは、まあ、何んたる神の恩惠だらう？私は何時もこの私だ。決して死刑囚の内の誰れでもない。噂に聞けば、彼れ等は首を絞められる前に腹中の汚物を完全に下すため、浣腸をされる相ぢやないか？今日は殺されると云ふ日の朝は朗らかで、庭には霜が一杯降り、何だか清淨な感じに鎮まり返つてゐる、さあ、其處へ醫者がやつて來て、死刑囚へ向つて云ふ

「氣を落ちつけて……もつと腹から力を拔いて……」あゝ、之は何たる事だ。もうグリセリンが直腸の中で泡立つて、遠い雷のやうな音を立てゝゐる。普通の場合でさへ、泡が立つたり、消えたりする響は慘い氣持ちを誘ふものだ——まして、それが絶望してゐる腹の中であつて見れば尚ほ更の事だらう。それから？——それから當然、汚物が排出される。もう腹中は空洞のやうだ。反響を起す程ガランとしてゐる。汚物と一緒にきつと大腸小腸それ自身も拔け落ちて了つたに相違ない。もう自分の體が紙バサミのやうに二つ折れになり相なんだ「無」だ！この儚さは何うでせう？い

や、それどころか、もう直ぐ絞首臺へ昇らねばならない。炎の上を歩くやうな足どりで……さうだ。伊太利だかでは既に死刑は廢止された。然し、スペインだか何處だかでは刀で首を切る昔の方法がその儘傳はつてゐる。血が霧を吹く恐ろしい事だ。所で、私は？未だ、未だ希望がある。時間――！それを待つが好い。』

未だこの他、色々と慰めの仕方や、諦めのつけ方があつた。然し、此處で一々思ひ出してはゐられない。いや、もう一つ！

K刑務所の中へ這入つて見た人は誰れも驚く事だが、あの庭の美しい花畑は何うだ？朝露に輝いて青々としてゐる所はなまじいな女なぞを見るより餘程魅力的ではないか？女と草？似ても似つかぬものを比較するなんて、之は何うした事だ？さあ、それが「慰藉」の方法なのだ。支那女と朝鮮女を比較するのは造作もない。然も、おゝ、それでは「慰め」でたく、「そゝのかし」になつて了ふ。

いや、之はラチの明かぬ話しだ。私はもつと急がねばいけなかつたのだ。忘れもしない。時が満ちて監獄を出ると、私の食欲が病的に昂進して、もう自分でも恐ろしくなつて了ふ位だつた。ことに、果實と甘い物に對して目がなくなつて了つたのは何故だらう。

それで苦しまぎれに街を歩き廻り、金があればありしだいに、私に食べる丈食べた。

信州産の青リンゴ、乾し柿の黒くて堅いやつ、價が安いため、種子のある蜜柑、森川製菓會社のドロップ、少し黴の生えたボンス、ウエルチのグレープジユース、それからオーストラリヤから來たグースベリーとブラックベリーのジヤミ、干ぶどう、バナヽ、きうかん、アップルパイ、まづ斯んなものを片はしからたしなむで見たのです。

飽食は或る落ち着いた氣分を私に與へるやうになり、從つて、之から何うして生きて行くかと云ふ問題を私に考へさ

せ、又色々の計畫を作らせました。

大體から云ふと、私は幾らか漠然とした悲しみを混ぜた所の大まかな諦めの心——早く申すと、何時死んで了つても、それで好いやうな心をはぐくみ初めてゐた。ことによつたら、自殺して了つてもかまはない——と私は何度か思ひめぐらした。

その頃、私をふと涙ぐませ、何となしに柔和なものへ思慕の情を起させたのは、私の心弱い小學教師が話した次のやうな話しでした。それは別段、教訓的のものではない……然し何かしらが私の氣に入つたのです。

その教師が語りました——

『あなたは、丘上盲啞學校を知つてますね、あそこの若い教員に、有吉と云ふ人が居まして、この頃、強い失戀をしたのです。分りますか？

彼れの戀があんまり誠實だつたから、從つてこの心の傷手は大變痛切に來た譯です。彼れはもう自殺でもして了はうかしらと思つたり、ピストルの筒口をみがいて綺麗にしたり、譯もなしに樹の枝を物色して歩いたり、海の方へ行つて涙ぐむだり、まあ、そんな事をして、つまらなく、味氣ない日を過してゐたのですね。

所が何うでせう。彼れの前へ一人の可愛い盲目の女の子が、よち／＼と出て來たんです。それが、勿論、この教員の教へ子だつたのは明かでせう。

子供は怖えるやうな擧動をして云つたのです——

「先生は其處に何してゐますか？」

「唯、立つてゐるのです。」

「あゝ、ヘレンの自叙傳から取つた一部……」

「先生が、此の間、點字で印して下さつた、あのヘレンさんの話しね……」

「あれを私、毎日手で撫でて、もう暗誦して了ひましたわ。早いでせう？」

「私が何もしないでゐる間に、貴方は大變好い事をしてゐたのですね。」

「そんなら此處で暗誦して見ませうか？」

「教へた私が忘れて了つたのに、教へられた貴方が覺えたのですか？さあ、聞かして下さい。」

そこで少女が小さいセルロイドの輪のやうな口を開いて、次のやうに初めました。

（作者註……ヘレン、ケラーと云ふのは、大概な人が知つてゐやうが、盲目で啞の女性であつた。それで、彼の女を教育する人は、大變な骨を折つて、特別な手段で、彼の女の品性や知慧を高めてやつたと云ふ話である。他の多くの聾啞の人の如く、彼の女も初めの長い間、唯だ譯の解らぬ聲を出す丈で、まとまつた言葉を語り得なかつた。目が見えぬので、發音を學ぶのに人一倍骨が折れたのは元よりである。彼の女は教師の顏や、唇、舌等へ手を觸れ、その動く樣子を眞似たのであつた。だから、少女と先生とは心を一つに合せ、呼吸をそろへる程に熱心でなければならなかつたであらう。

教師は又、色々の言葉が浮き出して書いてあるカードを造り、これらを取り合して、文意を組む遊びを教へた。ある時、ヘレンは「少女」といふ札を自分の前かけに附け、戸棚の中に入つて、その棚に「戸棚の中に居る、」と云ふ文字の札を組み合せて貼り、一つの文章を綴した。次に示すのが盲目の教へ子が暗誦したヘレンの自傳の抄譯である。）

『私が初めて『愛』といふ言葉の意味を尋ねた時のことを今でもおぼえてゐます。庭でスミレといふ花を、二つ三つ折つて持つてゐたので、これを先生のところにたづさへて行きました。サリヴァン先生はやさしく私の肩に手をまはして、抱いて、私の手に『私はヘレンを愛します。』と、お書きになりました。

『愛する。』つて、何の事ですかと、私は尋ねました。

すると、先生は私を強く抱きしめて、私の胸を指でおさへながら、『これは此處にあります。』と、書いて下さいました。その時生れて初めて私は胸の鼓動を知りました。今まで何でも觸つて見なければ分らなかつたものですから、この答へは私を非常に困らせました。私はスミレの匂ひを嗅いで、『これはこの花の愛らしさですか？』と、云ふ意味で尋ね返しました『いゝえ、』と先生は仰言ひました。

もう一度私は考へました。太陽が私の頭の上で暖かく輝いてゐましたので、私はその熱の來る方向を指して、『之が愛ではありませんか？』と聞きました。

けれど先生は頭をおふりになりました。私は大變困つて、失望して了ひました。私は自分の先生が愛を示して下されないのを可笑しいとさへ思ひました。

その二三日後の事でした。私は色々の大きな南京玉を糸に通して居りました。二つの小さいのを通したら、今度は大きいのを二つ通すと云ふ風に。私は幾度も間ちがいをしましたが、先生はその間違ひを、辛棒づよく、やさしく敎へて下さるのでした。到々私はその順序が大層過つてゐるのに氣がつき、一寸の間、玉つなぎの事に氣を集中しました。そして、何うしてこの玉を順序よく糸に通し直したら好からうかと、考へました時、先生は私の頭にさわつて、『考へる』と、お書きになりました。この時、光線のやうに、私の頭に浮んだのは、この言葉が今私の頭の中でやつてゐる行ひな

のだなと、云ふ事でした。そして、そもそも、之が初めて、私が形のない物の名を知つた動機でした。」

盲目の子が此處迄語り續けた時、石晋さんの目にやさしい涙が湧き起つて來ました。けれど、光りを知らぬ少女にはそれが見える譯もなかつたのです。

「あゝ、考へ、考へる。考へるとは何んな事なのかしら……。」と若い教員はつく〴〵思つてみたのでした。はつきりした事は分らなかつたけれど、あのヘレンが盲目で啞の身でありつゝ、やはり、その小さな胸の中で、あれこれと考へ、又、こゝに居る自分の教へ子が、ヘレンの書いたものを暗誦したりして、慰めやら、諦めやら、喜びやらを味つて、やはり何かを考へてゐるなんて、一體何う云ふ不可思議な事に起因するんだらう？と石晋さんは獨り言を言つたのでした。それから何時迄も石晋さんは何かしらあれこれと考へ續けたさうでした。』

これ丈で、小學教師の話しは終つて了つたのです。何だか、もつと先があるやうに思へてならなかつたが、又、もう、之で皆分つたやうな氣もする妙な話しですね。

それで、私は氣持ちがよかつた。夜の池のやうに心が靜かになつて、晩くなる迄眠れなかつたけれど、苦しくつて吐息をつくやうな事はなかつたのです。

『嬉しいから、目醒めてゐる、明方になる迄、微笑むだり、寢返りを打つたりしてゐる！』まあ、斯んな風でした。

それから、何うなつたでせう？

教師の話しが原因したか、それとも別の事が作用したのか、私は兎に角考へ通しに考へました。この事の原因があの話しにあると云へば、何だか無理なコジツケのやうに聞えていやだ。と云つて、それが原因でないとは誰れも斷言出來

る暇がない。何故ならば、私は、ウトウトと考へ續けてゐる内に、何十回となく、白日の下の神聖菓子のやうな口が可愛く動く場面を思ひ出しては、それを打ち消すやうな事をやつてゐたではありませんか？

いや、ラチの明かぬ話はもうやめやう。それより、飛び移つて、もう一つ別の事を話して見たいのです。面倒でも、我慢して、もう少し聞いて下さい。

私は妙な心持ちになつて、突然K市からY市へ飛び移つた。其處で私が何かしらを考へ續けた後の結果は、何んなふうになつて世間へ表れて來たか？又、それが何んな工合に世間へ關與し、影響したか？

私は入獄前、Bと云ふお人好しの瀬戸物商人に預けて置いた三千圓餘の秘密な金を返して貰ふと、すぐ、實際的に假や心を動かし初めたのでした。

私は先づN村の、あの川のほとりへ、一軒の家を建てやうとしたのです。勿論、つまらない安普請だ。設計圖を造らない内に、家の方が先へ「建て前」になつちまふと云ふ位なゾンザイなものだつた。でも、私は何だか、夢中になつて、北の方へ走つたり、南の方へ飛んだりした。そして、自分が輕業の道化役なぞでなければ好いがと自分でも心配した。

さあ、その内愈よ「建て前」の日が來ました。私はこの家が自分自身の爲めではなく、もつと別な目的の爲めに造られたのだと云ふ考へにそゝのかされ、何かしら、この家が異常に神聖なものゝやうな氣がしてならなかつた。つまり、この氣持ちは私自身が過去の自分を厭ふ餘り、發生して來たものに相違なかつた。

「さうだ。神聖なのだ。だから棟へ上る仕事師なぞに、シモがかつた病ひを持つてゐる者なんかがあつてはならない！」

と云ふ私の幼稚な、未開人的な考へだつたらうで、私は一人いトピに斯う聞いた……

『まさか、お前等の内に、變な病氣の奴は居るまいな？苦しまぎれに大神樣へ願を掛けるやうなさ……。』

『旦那あ……』と、トビは妙な表情をして答へ初めた――『大丈夫ですあ。私は妙な腰つきをしてますが、之は打ち身のためなんですあ。』

『よし、よし、』私は何だか嬉しいやら、斯んな人達が可愛らしいやらで涙ぐみつゝ微笑むだ。鼻と眼の間を通つてゐる喉がジユーつと云ひながら熱くふくれて好い心持ちだつた。

所が一つ心配な事が別の方面から起りかけてゐるのを、私は早くも感附いた。さあ、皆さんはそれが何だと思ひますか？

私は田舎大工を使つた、だのに、町の仕事師を呼び寄せた――之が何うもいけなかつた。私が横の方から看察してゐるところ、何うも一種のチグハグが其處に火花を散らしてゐるやうだつた。田舎の大工は遠慮勝ちだつた、そのために、町の仕事師はグツとつけ上つて來た。

『それい！スヂカヒへ釘だ！早く！』なぞと、首迄ホリ物をしてゐるトビの一人が叫んだ、それは命令よりも、もつと苛酷な調子だつた。田舎大工は正直に釘を打ち初めた。ところが、何のハヅミでか釘袋を下の方へと落して了つた。釘が愉快な音響を立てゝ散亂した。いや、愉快なぞとは云つて居られない。大工は慌てゝ四ツ這ひになりながら、散らばつたものを集めやうとした。それを見てゐた例のトビは一聲大きく斯う叫んだ。

『ヤア、ヤア、この大工さんは百姓上りだぜ。見ろやい、釘を撒いたら芽が出ると思つてやがらあ………。』

うまい悪口だが、之は彼等の仲間では陳腐なものなのだ。

大工は腹這つた儘で、グツと息をこらへた。彼れの顔は朱をそゝいだ。だが思ひ直したらしく、又、釘を拾ひ初め

た。顔色は段々元通りに戻つて行つた。はたで見てゐた私はやうやく息をついた。

『神聖な家だ！何うか喧嘩なぞは………』

私はそつと天へ向つてそんな風に祈願するのだつた。然も、次に起つた事は何うだらう。

例の仕事師は高い所へ上つて、一生懸命に何處かをゲンノウで打ち込むでゐたが、急に斯う云つたものだ――、

『ヤア、ヤア、こい大工さんは足駄踏入れ屋の放り上つたのだと見えて、このホゾの堅い事わい……。』

下の方で之を聞いてゐた例の大工は飛び上つて、仕事師を睨めつけた。彼れの顔は蒼白になり、眸は冷えて紫色になつてゐた。それだのに、眼だけがグラ〳〵と燃え立つてゐた 私はハツと思つた。急いで大工を後ろから抱きとめた。彼れはゲンノウを仕事師に投げつけようとあせつた。私はそれをもぎ取つた。彼れの身體の烈しい顫へが、彼を抱いてゐる私の腹から脊中へ迄も抜けて波動した。

『我慢して呉れ！』一分、二分、三分……。

大工の首筋がゆるむだ。顔色が元通りになつた。私はホツとした。

『さあ、仲なほり、仲なほり、酒？酒も持つて來てある！カズノコにカンピョウ！』私は泣き出しさうになつて、其處らを胴々廻りして歩いた。さうだ。本統に危い所だつた。

先づ斯んな風で、何うやら建て前も無事に濟むだ。ゴヘイがヒラ〳〵と風になびいて。それが向ふ岸から眺めると仲々好い景色だつた。川の流れへも新らしい柱が揺れ乍ら寫つた。私は本物と影とを比較して、何方が私の氣に入るかなぞと思つて見た。ハツ！ハツ！皆、後になつて考へれば、取りとめもない事ばかりだつた。影！風が吹いて 小波が水面に立つと、妙ぢやないか。縮むでゐた影が一倍にも伸びるんだ。

だが、全體から見て、仕事は神聖に——妙な云ひ廻しだが——兎も角、神聖に進むで行つた。喧嘩を我慢して異れた例の大工には、そのお禮として三圓ばかり、むき出しで與へた。皆むき出しだつた。何しろ、安い普請なのだ。設計圖を引くよりも早く建つて了ふやうな家なのだつた。

さて、斯うして出來上つて見ると何だか馬鹿に淋しかつた——その人の居ぬ家を、夕方なぞ、外からのぞいて見ると、新らしい木の香がして、床の上のカンナ屑が風で搖いで……私はもう堪へられない涙に襲はれて了ひました。その譯なんか、勿論、口では云へないのです。

それから私は「向上會」と云ふ、大層平凡な名の看板を、あまり目に立たぬやうにして、家の入り口へ掛けました。免囚保護のための小さい仕事に——私は二三の知人、たとへば、教誨師や、救世軍の將校やの助けを借りて、着手したのです。

そして手初めに五つ組位の免囚や、その小さい家族を引き取り、幾分か彼れ等のために盡しもし、再びあさましい犯罪へ走らないやうな色々の注意を與へたりしたものです。私はそんな時、隨分と熱心でした。目をつむつて見ると、何だか腹の底に手答へのある重みが感じられた位でした。

「もう大丈夫だ！」と私は折り折り獨りで叫びました。なるほど、いかにも私の斯んな仕事は面倒くさく、その上、困難でもある。然し、此處にうまい考へ方があるんだ。何か？つまり斯うだ、凡そ、この世間では、六ケ敷いものに本統の味があり、樂しみがある——さあ、その點に氣がつけば、もうしめたものだ。例へば、何うだい、私は幼い頃、よく南京豆を買つて食べたぢやないか。あれは實にうまかつた、所で、その時、幼い私が感じた事だが、あの豆を、子守にむいて貰ふのが何うも厭だつた。だつて、子守は私がうつかりしてると、直ぐ彼の女の口へ豆を投げ込むから。それで

私は一生懸命骨を折つて、自分の力で此の皮を剝る事に成功した　あゝ、その時の此の味のうまさ、苦役の後に來る報酬の味と云ふものは、實に二倍にも三倍にも受け取れるものだ。そら見ろ、世間では六ケ敷いものが一番樂しいのだ」だから、もつと勇氣を出せ、勇氣が出たら、それを同じ度合で持ちこたへろ、「容易い事には近よらぬ、」と力むだ昔の支那人の言ふことを何時もはつきりと思へ……。」

何だか、自慢のやうで、氣が引けるが、然もさう考へたのは偽りのない所でした。

だが、何が嬉しかつたと云つて、向上舍へ流れ込むで來た免囚諸君が私の事を『兄貴』だの『大將』だのと云つて、人なつこくして呉れる時の私の喜びに越すものはなかつたやうだ。ハムゝ。彼れ等は皆愛す可き奴等だつた。一同はそれぞれの日課が濟むと、すつかり、くつろいで、五燭の電燈の下で勝手な對話に耽つたものだつた。まづ、私はそんな談話中の二三を此處に紹介して見やう。」

金川重三郎は恐ろしく出目な男で、首の邊の皮膚が鰐のそれのやうに厚かつた。彼は以前トビ職をやつてゐたが、彼れが西の市で露店を開いて賣り出した淺漬にサツカリンが使用してあつたので直ぐその筋へ引かれて了ひ、それから、段々檢べられた所に依ると、サツカリン使用は卸し屋の親父が一人で謀なだので、金川は何も之に關係してはゐなかつたが、何だか別の惡事が一緒に露顯して、彼れは刑務所へ投げ込まれたのだ相でした。で、彼れは私に斯んな妙な話をしたものだつた——

「凡そ地面位有り難いものはないと私は思ふんだが、皆にはこれが分るかい？さう、さう、忘れもしない、Yの明米川のずつと裏に、地藏堂がある、その又、右手の裏の方を私は掘り下げたことがある——なあに、地藏堂の改築工事のた

めに、それが必要だつたのだ。所が、グン〳〵と掘つて、段々下の方へ進むで行つた拍子に、――あゝ、お地藏樣は何う思し召しになつたものだらうな――その拍子に、ゴトンと私の足が落し穴へ落ち込むだ。土を分けて、足で探つて見ると、其處は二尺四方位の穴ぼこになつてゐて、何だか冷たい風が湧いて來るやうだ。今度は手を突つ込むで見ると、變に重々しい、ドツシリしたものが指の先へさわつた。何の氣なしに持ち上げて見ると、まあ、何うだい。昔風な首かざりや鏡が出て來た。丁度、その時、仲間は別の方へ行つて居た。しめたと思つて、私は一番立派な飾りと鏡を腹がけのドンブリへ納めて了つた。其處へ折よく皆がやつて來た。

「おい穴があるぞ！」

「何穴だい？」

「口ぢや云へねい。」

それで一同で掘り返して見ると、之は又驚いた。人が這つて通れる程の横穴が其處から北の方へと續いてゐる。私は眞先に道ひづり込むで見た、一間半程行くと、今度は三疊敷程の洞が出來てゐる。その中にも鏡や飾りや劍などがグサグサとしてゐた。だが、もう取ることは出來ない、何だか勿體ないやうな氣がして。もう、寒氣が體中を粟粒だらけにしやがつた。私は唯だアーアーと叫むだものだつた。時に皆さん、地面は實に妙なもんぢやないかね？あんまりよいものは、何だか氣味が惡いぢやないか。」

この話しは私に深い印象を與へたらしかつた、何故なら、その晩、私は一人で何處かの裏の土を一生懸命掘つてゐる夢を見た位だつたもの……。耻かしい事だ。だが、人間として、こんな夢を見る位は、先づ許して貰はねばならないと私は思ふのです。」

聾だ啞だになるが、私はもう一つ別の話をして見やう。

大河原角造の事なんだ。彼れは眠れぼったいムクむだやうな眼を持つてゐる、エスキモー風な男だつた。片腕の無い片輪だつたので、その擧動は餘計に物憫されでした。彼れはナマコのやうに重々しくその唇を動かして斯う物語つた――

――

『驚いちやいけないぜ。俺は工場をしくぢつてからと云ふもの、すつかり喰ふに困ちやつた。驚いちやいけないぜ。女房も俺の所から逃げ出したくつてウツ〳〵してゐたが、うまいことにリヨウマチスで腰が立たなかつた。眼ばかりキヨトキヨトさせて、腰はぢつとさせてゐるんだ。だから家の中の事は何でも知つてゐた、やれ灯取りに穴が開いてるの、天井で鼠がお産をした事のなんてなあ……』

所が或る日の話しだ。俺は勤め口を探し廻つて、泥だらけになつて家へ歸つて見た。すると女房が居ない。さあ、俺は怒つた。けれど、考へて見るに、之は妙ぢやないか。驚いちやいけねいぜ。俺はすぐ外へ出て、隣りの婆あにその事を尋ねて見た。知らないと云ふ。俺はあつちの露路、こつちの露路、シン道と云ふシン道を探し歩いて見た。所が何うだい？驚いちやいけねいぜ。俺の女房の奴、一人の男に背負はれて、足をぶら〳〵やりながら、氣がセクと見えて、頭を一生懸命に前の方へと振つてゐるのだ。この有樣には俺もあきれちやつた。一體、その男は誰れなんだ？間男なら承知しないと思つた。そばへ寄つて行つて見ると、男と云ふのは女房の從兄に當る耕造だつた。奴は汗を一杯かいて、フウ〳〵云つてゐる。で、俺は直ぐ奴の背中から、女房を受け取つて、又、背負つて、家迄連れ戻つて來たものだが、隨分變な事もあるもんぢやないか？何でも、女房は俺と一緒ぢやウダツが上らないので耕造に賴んで背負ひ出して貰つたんだと云ふが、やつぱり俺の女房だけあるぢやないか……えい？』

この話しを聞くと、私は感じた——フフム、自分の女房を背負つて立つと云ふ所に、何だか男らしい健氣なものがあるやうぢやないか。成る程、從兄の耕造に背負ひ出して貰つた女房の心持ちも私にはスツカリ分るやうな氣がする。この女はバラの新芽へたかる油蟲（アリマキ）なんだ。男どもは蟻なんだ——まあ、私はそんな風に獨りごとを云つたつけ。

さうかと思ふと、私に次のやうな話しを初めるのは並木次郎だつた。斷つて置くが、彼れは或る金持ちの結婚式に難癖をつけて金をゆすつた事から捕へられて、別の罪狀のために刑務所入りをやつた男なのだ。顏だちはやさしく、色が白く、首が細くて前へのめり出してゐた。さうだ。彼れが云つたのだ——

『私は一時、惡い筋の客引きと云ふものをやつてゐたんですよ。之は實に男らしくないものだ。自分が何となく女見たいな氣持ちになつて了ふんだ。何でも、暗い横丁の角に立つて、斯う待つてる。向うから黑眼鏡の紳士がやつて來る。餘り上品でもなく、さうかと云つて下品過ぎもしない、丁度持つて來いの玉だ。其處で私はコツソリと近づく……「えい、今晩は、旦那え、」さう云つて袖を引く——「えい、旦那、之から向ふの横丁を眞直ぐに行つて、又一つ曲りますと、實に好い所があるんです。旦那へ、實にもう、實に好い所なんで……。」

紳士はぢつと私を見る、その擧動で大概うまく行つたか行かぬか分るんだが、まあ、私はまるで女のやうな氣持ちになつてゐる。紳士へ一寸色目さへ使つて見る——あゝその氣持ちつたら……。』

分らない男だ。斯んな奴に關り合つては居られない。だから、今度は、あの幸田松次郎の事を話さう。彼は大變な智慧者に相違ない。それでも、私に取つては愉快でない相手だつた。彼れは一時「信用購買組合」なぞと云ふものを設立して、極く惡い手段で金儲けをした男なのだが、如才のない事はそのチヨボ口とチヤプリンひげとで直ぐ察しられる程だつ

た。彼れは土地の出だから、何も彼も皆々器用だつたつて、彼れの云ふ事に——

『ねえ、品座君、私は投網の名手たんですよ。之は六ケ敷いものだ。深山のオモリが同時に大向へビシヤリと広がるやうになる迄が一修業さ。それから、曲打ちと云ふのを習ふ必要が生じて來る。つまり打ち場所に邪魔物があるとする、こんな時には、網の擴がる形を三角にでも、菱形にでも變へる事が出來なきやいけないんだ。さあ、其處で、やり方には陸打ちと、舟打ちと二つがある。が、面白いのは何と云つても、夜の舟打ちだね。秋が一番好い。彼岸十月二日前後、強雨でもあつて水が濁つてゞもゐて御覽なさい、そんな闇夜にや、魚の方で網を待つてますぜえ！』

何だか此の話しには一種の慾心が附きまとつてゐるやうで、私は厭な氣がした。それで少しコジツケだが斯う答へてやつた——

『ハツ、ハツ、貴方は水の上で投網をやるだけぢや滿足出來ないで、街の眞中で一打ち打つて見たいと思つたんだね。貴方が刑務所へやつて來たのも、初め投網で習つた或る氣持ちが原因してるんぢやないだらうか？』

それは何うでも好い。もう一つ別の話しが此處にある——その方へ急ぎませう。他でもない、松岡同助の事なんだ。彼は恐ろしく脛が長く、それも細くて、毛だらけだつた。で私は彼に斯う云つて見た事がある——

『江の島へ行くと、ザリ蟹と云ふものが居らあ。強さうな毛むくぢやらな足をしてるが、その臆病柄で、人が行くと、毛の足を貝殼の中へすつ込めて、ちつとしてらあ。』

『その通りです、その通りです。』彼はもう面目なさ相に私の前へ頭を掻いたものだつた。その松岡同助が次ぎのやうな話しをしたのです——

『いきなり申しますが、私は捨て兒をしやうとしたんですよ。』

『お前の事だから、きつと、すぐ思ひとまつたんだらうね？』

『その通りです。その通りです……』と、彼れは長い足の剩餘を持て餘しながら、女のやうに柔しく話しを續けた——

『…えゝ、私は渡り大工でした、セッチン叩きでした。それだのに、女房に死に別れちやつた。赤ん坊が一人取り殘されたけれど、私が餘り濃いミルクをやつたので、腹を惡くして毎日泣き通し、たれ通しだつた。變だね。私は濃い滋養をやつたら、早く育つだらうと思つたんだが、そのあべこべに、赤ん坊は瘦せて行くばかりだつた。私は毎日仕事を休んで子供の面倒を見ねばならない。さあ、喰ふに困つて來た。まあ、この赤ん坊は何と云ふ手足まとひだらう。その上、頭はできものだらけだ。あゝ、あゝ、と私は泣いた。私は考へた——何でも病院には親切なお醫者さんや看護婦さんが居る、だから、若し、この子を病院の玄關前へ置いて來れば、きつと、あの人たちが拾つて救つて吳れるにきまつてゐる。看護婦長さんなんかで隨分柔和な顏をしてる人があるもんだ、そんな人がこの子を可愛がつて養つて下さるだらう。さあ、それで私は赤子を背負つて、ある夕暮れ、外へと出掛けて行つた。一つ所を行つたり、來たりした。子供を捨てやうとするのに、自分が捨てられるやうに悲しかつた。所が何うでせう。私の氣のせいか、背中の子供が段々つめたくなつて來たやうだ。しまひには私の背中が水で濡れたやうに總毛立つた。私は變だなと思つて兒を抱き下して見た。すると、もう、赤子の顏はカツプシ見たいな色になり、眼はふさがつて居た。あゝ、死んだのだ。之は濟まないことをした。だが、貴方、私はそのお蔭で罪を犯さずに濟むだぢやありませんか？で、私は今でも時々思ひ出すんだが、あの赤ん坊はきつと、斯う考へて死んだのだらう——お父さんを許してやらうよ。私は神樣の所から來たのだから、又、神樣の所へ歸つて行かう——とね。きつと、さうなんだ。私は悲しくなる。神樣は私を罪から救つて下さつたかはり、子供も取り上げて了つたんだ。』

是分に違つた方へ行た　然し彼にはまだ判らなかつた　この[illegible]は彼の[illegible]から[illegible]心が悪いのではない。このアマ皮が悪いのだ　彼れはあんな内氣な大人しい人間だつたいが、いや、却つて、ごくにたらない。斯う云ふ内氣な奴が案外悪事を働く者なのかナなぞと私は考へて見たのだつた。早い話し、私には何も分りにしなかつたらしい。仕方がない。では、もう一つ別の話しへ移つて了はう。

今関作哉は汚い服を氣にしないで、頭ばかり綺麗に撫でつける癖があるので、昔からトンボと呼ばれてゐたが、彼れは何とか云ふ詩の雑誌を出してゐた男だつた。公文書僞造行使の罪で刑務所入りをやつたのだが、彼れは私の前に今度出て行く時に、紙片へ一つ詩を書いて呉れた。そして、云ひ草が立派ぢやないですか、斯うだ。

「今に、私が出世すると、この原稿に價がつくから、それ迄大切にしまつて置きなさい……」と

見て、藝をたしなむ人はそんな言ひ草をしたがるものですね。では、一體、その詩と云ふのは何んな傾向のものだつたか？さあ、それは次の通りでした。

何うか私を行かせて呉れよ
この深闇の向うの方へ
霧が冷たい橋をつくり
町の灯も見えやしない
斯んな時には川面の上に
赤い腹帯をすべらせた

若いニムフが浮み出て
焔のやうに輪をかきながら
私を背負ふて霧の橋を
音なく渡つて與れぬだらうか？
螢火色になめらかな
濡れた背中が冷たくとも
何で私がいとふものか
私はしつかり首にすがり
お前の頬をのぞきながら
息を殺して輕くなるから
何うか私を行かせて與れよ
この深闇の向うの方へ！

何うも私の見た所では、下手な詩だ。七六調と云ふ奴だが、所々に崩れが見える。八七調になつてゐる部分さへある。然し、私が面白く思ふのは此の詩は今關作哉自身の心持ちを幾らか表はしてゐると云ふ點なのです。さうです。彼れは始終、「向うの方へ、向うの方へ！」と云ふ心持ちで暮してゐる男だつた。向う、向う、遠い向う。だが其處へ行きつくと、又直ぐ、もつと向う、もつと向うと云ふ氣になるんだ。それで、到々、刑務所の中へ迄も入り込むで了つたと

は、まあ、なんたる事だらう！

おゝ、私は急に氣が附く。私は無駄なわき道へ入り込むで了つた。斯んなタメにもならぬ個々に別れた小さい話しはやめにして、もつと、私自身の生活に密接した事を持ち出さねばいけなかつた。

では、斯う云つたら何うだ。いきなり初めるが、私の地主は親切な人だつた。それで、地續きの三百坪ばかりを、無代で私達に貸して呉れたのだ。之は痩地だつたから、仕方なし馬鈴薯畑に使用され、幾人かの免囚が心を淨める一つの手段として、其處で百姓の生活を模倣して見るのだつた。又、地所の一部分は花の畑になつた。仲間に一人、植木屋上りがゐたので、計畫は容易く成就して了つたのだつた。

黄色の花のマンチウ菊、姫コスモス、金盞花、赤い花の松葉菊、それから、女學生にもてるトレニヤ、或ひは矢車草、ホウセン花。秋咲きのコスモス――未だ色々な花が私たちの家を賑はして呉れた。

殊に私の注意を惹いたのは、之等の内で一番通俗なホウセン花だつた。まあ、この花は何處にでもある、場末の町がさんの裏庭なぞに、洗濯して乾してあるジュバンの雫で濡れながら咲いてゐるのが誰れにでも目につく。所でこの花は離れて見ると、桃色の紙屑をもみつぶして莖へ貼りつけたやうぢやありませんか。然も、その一つを手に取つて見ると、中々、紙屑どころではない。實に美事な形をしてゐる。何だか、貴族の令嬢が舞踏で履くスリッパのやうだ。嘘だと思つたら、ためしに實物を摘み上げて御覽なさい。

さあ、其處で私は花を指の間へ挾むで廻しながら考へた。

『この花はゴチヤゴチヤと集まつてゐるから、遠見が實に惡い。けれど、花なんぞにも、遠くで見るとつまらなく、傍で見ると案外立派なのがあるんだな。』

何かしら理屈ばつてゐる。この上、考へたら理屈がうるさくなりすぎるし、體のためにも好くない、と云つたわけで、私は考へをやめて了つたが、それでも私の心は嬉しかつた。いや、嬉しい事は他にも澤山ある。

其處でゝす。聞いて下さい。不思議な事に、私が引き取つた兇囚の内、二人迄が片輪だつた。一人は指が三本足りず、一人は左の腕がもげた男でした。で、彼等の云ひ分は斯うだつたのです――

『手が自由でない。だから手先の職にありつけない。と云つて、頭でやる仕事は一層困難だ。だから、獨り手に暗い方へ行つて了ふのだ。』

この云ひ譯は、然し、單なる云ひ譯に過ぎぬものとして、見過さる可きではなかつたでせう。私はその中に、半分丈、眞でないものゝあるのを、直覺によつて察知してやつた。

で、先づ、そんな嘆きを、救世軍さんや、ある小學校の教師さんに打ち明けて見たのです。教師さんは聞いて考へた。考へてから云つた。

『片輪な勞働者の救濟、之を小さいながらも、自分等の手で初めて見ねばならない。人を待つてゐるのではもどかしいから。なあに、端緒をさへ開いたら、方々から補助者が出て來るにさうゐないし、又、將來は獨立した事業として認められるだらう。』

『端緒は一體何んな所にあるんです？』

『恥しい事だが、何と云つても、外國でやつてゐるのを參考に見ねばいけない。例へば……』

『ペンシルベニヤ復職局でやつてゐる仕事なんかですね？』

『さう。』それで、二人は色々な報告書なぞを集めて檢べ初めました。

例へば伐木者が脚を失つたとする。さうすると、復職局はこの人に機織りを教へる。

例へば視力と左肩の仕用力とを、ある男が瓦斯の爆發によつて失つたとする。復職局は彼れを軟物織の職工に仕立て上げる。

例へば鍛冶工が右手を失ふ。巧みな義手が與へられる。之を仕用して、元通りの仕事を働く事が出來るやうにさへなる。

其處で負傷者が訓練された新職業は、電信、無線電信、發動機工學、機械工業初步、交通事務等に互り、尚ほ色々の賣子、機器卷方、計算、書き方、ピヤノ調子合せ、時計細工、パン燒等もあると云ふ。

『何からやる可きか?』

『端緒はもうつかまつた!』

私たちは上手に相談し、利巧に働いた。で、先づ、家にゐる二人の片輪へ、各自に適するやうた新職業を與へて見やうとしたのです。何も大きく計畫する必要はない、小さくとも、實際的なのがよい、と私は思ひました。

腕のない男と云ふのは、ある人造肥料會社にゐて、しらべ皮に卷き込まれたのだし、指の足りぬ方は或る木工場にゐて、椅子を造つてゐたのだが、機械カンナの中へ手をすべり込ませて、斯んな仕末になつたのでした。で、彼れ等は頭の惡い方だから計算や書き方には不向きらしい。之からの仕事として、何んな種類のものを選ぶ可きでしたらうか?

「俺は小供の時から、手妻師をやつて見たかつたんだが……。」と、スペードのジヤツクのやうに眼の大きい、顔のしやくれた例の指無しが呟いたが、この申し出は何うも不可能のやうに見えました。所が私の所へよく來る或る學校の先生から精神檢査を受けて見たら、さう云ふ方面へ全く不向きではないらしいのが分つたし、もし、うまく手妻に熟練すれ

ば、二本指の手で藝をするのが、存外、人氣を呼び得るかも知れぬなぞと想像された。それで、私は一人で奔走して、彼れをK演藝團の下廻りに住み込ませてやつたのでした。

もう一人のエスキモーのやうな顏の方は模倣癖の强い性質で、『俺も小さい時から手妻師になりたかつたんだ。』と、云ひ出したが、私たちは一生懸命に彼れをなだめ、もつと彼れに適した仕事の方をすゝめて見たのだつた。

その内或る親切な人によつて經營されてゐる寫眞機の工場で彼れを使つて吳れると云ふ約束が出來た。それで、私は可成りな出費をして、彼れに立派な義手を與へました。

『斯う云ふものがあるとは俺は今迄知らなかつたぜ……。』と、彼れはエスキモー風の腫れぼつたい眼に淚を浮めて呟きました。さうです、彼れ等の多くは何も『より善いもの』を知つてゐないのだ。

さて、この男は右の手の甲にイカリの彫りものを靑々としてゐた。それで、救世軍さんが、この男の新らしい門出に際して、このイカリを話材に次のやうなセンベツをしてやりました。

『さあ、もう一度、その手の甲を見て下さいな、ね、イカリ！好い形のものですね。まことに廣い海を思ひ出させ、旅の事を考へさせますね。で、このイカリの話しだが、之は何も舟に上げられてゐる時と、水底へ投げ込まれた時と、別に形に於て、異る譯ではありません、それだのに、お聞き下さい、こゝです。それだのに、舟に居ては舟を止める力がなく、水へ入つて初めてその役を果すのですね。お分りでせうね。え？だから、適當なものを、適當な場所へ置いた時、初めて、そのものゝ効用はハッキリして來ると申せませう。さあ、其處です、貴方は之から愈よ、自分に適した仕事につく事が出來るやうになつた。で、之からは决して、心にも身にも間違ひと云ふものは起りますまいよ。』

救世軍さんは實にうまい事を云ふもんだ。」と、私もそばで思つた。そして、この言葉を忘れぬやうに、頭の隅に[illegible]んだ位でした。

所で、このエスキモーのやうな片輪男は人からうまい事を云はれると、自分もそれを眞似て見たいと云ふ性質だつた。だから、彼れは一寸首をかしげてゐたが、急に、途方もない事を云ひ初めた。それは斯うだつた——

『ねえ、君、救世軍さん。世の中は仲々六ケ敷くなつてるね。例へば、日本人の勞働者は石をかつぐに、エンサ、エンサと云ふだらう。所が朝鮮人の勞働者はそんな時、チンヤー、チンヤーと云ふんだよ。』

何も意味なんかありはしない。でも救世軍さんは感心して聞いてやつてゐた。さうだ、斯んなつまらない事にでも、感心出來るやうになれば、もうその人はしめたものなんだと私は又思つたりしました。

『好意を含んだ注意！之は心の中での寶玉である。この心持ちで何事をも見てやるがよい。』私は獨り微笑んでさう云つたものだつた。

注意と云ふ事に關聯して、私はその頃、一生懸命に「反省」と云ふ不思議な力を習得し初めてゐた。例へば、あのコホロギは何うです。と急に云つても分らないが、まあ、あの小さい蟲は柄にない長いヒゲを持つてゐる。そして、何も見えない所では、このヒゲの一本を前方へつき出し、他の一本を後方へと送つて、それらを振り動かしてものを探つてゐるぢやありませんか？成る程、蟲でさへ之だ、蟲でさへ之だ、將來と過去とを現在の考への中へ取り入れてゐるのだ。

だから、私は又考へた。『子供は五目並べをしてゐる所を見るに、勝ちたがらない子は單純な無駄石を打つが、賢い子は後に有効となる石を打つ。一寸見ると、それも無駄石の如く感じられるが、實は未來的な生命を持つてゐるのだ。つまり、そこには行く先の暗示があり、新らしい構成の要素がある。』

出來る事なら、私も自分の生活をぐつと引きしめて、自分の歩いて行く道に成る可く無駄石を打たないやうにしたい——まあ、そんな風に考へたやうなんでした。そして、考へては喜び、喜むでは考へました。

その頃私の伴侶になつて呉れてゐる教誨師は教誨師で、次のやうな事を云つて私に勇氣をつけて呉れた——

『いかにも、この世の中では、容易く出來ると思はれるやうな事が、仲々さう早くははかどらぬし、さうかと思つて見ると、反對に、仲々出來さうもない仕事なぞが、計畫の動機の正しいために、割合造作なく進むで行くと云ふやうな實例も澤山あるんですな。』

實にうまい、實に嬉しい。私は感心した。そして、朝は早く起きた。時とすると惡く感傷的になつて、自分の體を刺してゐる蚊を打たずにそつとつまみ上げた。すると、蚊は一寸藻搔いたが、私のつまむでゐる長い足を殘して、體丈向うへと飛むで逃げて行つたりした。さうだ。都合の惡い部分は捨てさつて、さつさと好い方へ進むで行くんだ。

然し、誰れかど此處で私に難詰しないだらうか——『お前は一番肝腎な方面、即ち向上會に於ける犯囚の教化に關する事柄を一寸も言明しない。』とね。

いや、私はそれを一番先に話したかつたのだが、やはり、幾らか遠慮して今迄控えてゐたのです。何故か？何うも、自分の柄にもない事を云ふと、皆の人が『威張るな！』と怒り出しさうに思へたからだ。けれど、聞いて呉れるなら、云つて了はう。

私は、實を云ふと、私自身、その方面の小さな一部を擔當した、が、大部分は一人の教誨師さんに委して了つたのだ。この善良な人はその道に長けても居たし、智慧のある人には智慧をもつて話し、愚鈍な人には愚鈍の形式を取つて、然も好い事を話し得るやうな性質だつた。彼れの持論は斯うであつたのを私は好く覺えてゐる——

「人間に一つの悩みには如何にも堪へ得るやうに出來てゐる。然し、三つ四つと悩みが一時に重なつて來る時には、何うも之等と爭ひ抗く事が出來なくなる。絶望して自ら死へ走つたり、自棄になつて自ら罪へ落ちたりするのはそんな時だ。それで、死と罪とは樣相こそ違へ、同じ根元から來た二つの大きな闇である。」

又、彼れは或る時、一匹の犬を私の所へ連れて來て斯う云つた――

「一つの悩み！之は寧ろ、我々に勇膽を敎へ、精進の刺戟にさへなる。所が、二つ三つ四つ！之はいけない。このいけない物を持つて街の中を行つたり來たりしてゐる人間が段々増して來たやうだ。そして、今年は又しても大變な不景氣ぢやありませんか？お金が恐ろしく太い幅をして外國へ流れ出す、それと一緒に、人間の徳や智慧迄が吸ひ出されて海の外へ消えてなくなる。可哀相な者たちが、膽臓を拔かれたやうに前屈みになつて、島の中でうろ／＼してゐる。このうろ／＼が犬に迄も傳染して來た。さあ、君、この妙な顔の犬を見てやつて下さいな。この犬はジョンと云ひます。或る容疑屋の主人に飼はれて居りましたが、その男が或る銘酒屋の女に引かゝりまして、家を逃げ出して了ひました。殘つた女房は夫の犬を毎日いじめては泣いてましたが、此の頃、この犬にシラミがたかつたので、到々、きたながつて、追ひ出して了つて、今では食事もやらないのです。所が、まだ、いけない事が續いて起つて來ました。ジョンは内障にかゝつて、片目になり、殘りの目の方とても、何れ又曇り出しさうなんです。近所のいたづらな小僧が面白半分に、ジョンの首の鑑札を取り去つて、自分の拾つた小犬にそれを附けてやり、又、別の、ふざけ盛りが「この犬を犬殺しに上げます。」と書いた手紙をジョンの首環へ結び附けました。然も、犬は眼が惡い上に、人間の字が讀めない。だから、平氣で道の眞中をその儘歩いてゐましたが、今日、或る荷車に腹の所を轢かれてね、さかさになつて、叫びながら、一生懸命、藻掻いてゐると、折も折、彼れの戀敵のハチが駈け附けて、相手に隙のあるのを幸ひ、いきなり、耳へとかぶ

りついて、まあ、そこいらは血だらけでした。それと知つてか知らないでか、宏鑪屋の女房は、コノシロを燒き返しながら「犬は歸らないでもよいから、ジョンが死んで呉れゝば好い。」なんて、口小言を云つてる仕末なのです。

眞に北のやうな犬が我々の隣りに實在する。繰り返して云はう。悪いのは二つ三つと重ねて起る所の災厄である。それは生命を滅ばさないで、然も紛碎する。誰れかよく之に堪へて、涙なきを得やう。それ故に、我々は祈る。斯かる犬に幸福の餘波でもよいから惠まれるやうに。いや、犬の話しではない。何故、私は斯う廻り道をするのだらう？　だが、このさうです。勘定高い人達はきつと向上會が何れ程の資金を得て維持されてゐるかを知りたがるだらう？　だが、この方面の心配はして呉れないでも好い。實は、以前、私立特殊小學校を經營してゐた富豪Hさんが、何かの事情でその學校を廢めたので、今迄、北の方へそゝがれた經費の半分を向上會へ寄附して呉れる事になつてゐたのです。その資金はK銀行へ預けられ、Hさんと教誨師さんとの傳票を貰つてからでないと、引き出せない規定になつてゐたから、私が自分勝手に濫費するような虞れは決してなかつた。その點も何うか皆さんに安心して貰ひたいのです。

さて教化の方は教誨師に委し、資金はHさんが出してゐるとしたら、當の私は一體何をして毎日暮してゐたか？　疑問は此處に集まる。馬鈴薯堀りや、花いぢりばかりしてゐては皆さんに濟まない。それで、仕方なし、自分の職業として、Bホテル附きのガイドを勸める事にして了つた。さうだ。人間は一度に色々の才能を持ち得ない。それで、職業なぞもさう度々新奇のものを選ぶ自由がないぢやありませんか？　私は以前にもガイドを渡世にしてゐた。だから、厭々ながら又其處へ歸つて行つたのです。この氣持ちには新鮮な潑溂としたものがない。然し、何とも云へぬ、いぢらしさとしほらしさが共の中にあつた。まあ、考へて見て下さい。皆さんの内、一度斯んな經驗をなさつた人はないかしら？　一度冷えた湯さましが又煮える。何うも鐵氣くさい。生の炭酸の澁味が欠けてゐる。だが、又、内氣ながらチーンと鳴

り出す所に、捨てゝやりたいやうな、泣き出したいやうな気持ちがむらむらおこりませんか、いや、もう一遍、開いて引き出して見よう。私の友人のNと云ふ文士は一度書き損じた原稿紙の裏へ、又、何かを書き附けてゐる、何だかいくこくて、半分ばかり悲惨だ。然も、其處に寄の日の数術子見たいな味がある。悲しまずに諦めて、一冊本に仕立てる」と云ふ気風が見える。それです。私の復職にはそんな気持ちが伴つてゐたらしいのでした。裏返しの原稿紙だ、古くて、新らしい。おゝ、私は少し説明を混くし過ぎたかしら？　では、もつと先の事を話しませう。

さあ、之で私の生活に明瞭な區切りが出來、人生の行路の半ば路に、大層眞面目な心を取り返して、一つの新らしい標木を打ち込むのだ、と、天へ感謝して見ました。

それだのに、何うも心の裏側の方が大變淋しかつた。私が表面で力めば力む程、隠してゐる方の心持ちに欠けたものが増した。それは宛もアルコールラムプの焔が勢ひ好く燃え上ると壜の中の原料が徐々減るのに似てゐたとも云はれませう。之は何故だ？　何う云ふ譯だ？　ハハア！　分つた。自分の身の廻りが他人ばかりで、親身と云ふものが散り散りになつてゐるからだな。

私は之でも一人の内縁の妻を持つてゐた筈ではないか？　それが何うして今は身の廻りに居て呉れないのか？　背、思ひ出す事が出來る。彼の女は私が未決監に押し込められてゐた頃、急に二千圓位して呉れと云ひ出した。私はそれを断つた。すると、第の狀、お余の工面をして呉れぬなら、勝手に、縁を切つて呉れと云ひ出した。縁を切つた上で何うするかと聞いたら、ハッチソンと云ふ英國人の妾になつて、當分食をつなぐのだと正直に答へた。歌にも次のやうたものがある――

お前の亭主が巡査につかまつたら

お前も誰れかをつかまへに出掛けろ

實際その通りだ。私は氣輕に彼の女を許してやつた。さうだ。私と彼の女との仲は始終この「氣輕ろ」で押し通されてゐたのだから、今更、何も驚いたり、泣いたりする要はなかつた譯だ。

だから彼の女は其の後ハッチソン氏のそばに附き切りで、段々、年をとつて行つた。今、私が淋しいからと云つて、彼の女をハッチソンから奪ひ返す程の勇氣を私は持ち合してゐない。早く云へば、彼の女は私にそれ程魅力的な働きを仕掛ける價打ちがもう欠けてゐた。その上、私には此の頃、何うも女を愛する力の方が駄目になつてゐた——之は長い監獄生活の呪はれた結果の一つだつたらしい——この駄目は永久的のものか？　それとも、ほんの一時的のものか？いや、一時的にしても、大分もう長く續いてゐる。で、私は多少心痛もしてゐたのです。或る屠牛所へ行くと、豚の一匹の臓物一切を四十五錢で賣つて吳れる。その中にソグリも這入つてゐる。之を取つて、熱を加へないでエキスを造り出すと云ふ事業を私の友人で罐詰め屋のＳ君が片手間にやつてゐたが、彼れはアンプール入れのエキスを私に吳れた。

『見本だ。試驗して下さい。』と云つたものだつた。然し、試驗の結果は少しも思はしくなかつた。斯んな體の工合が原因してか、私は何うも私の離緣した妻、淺符リン子と再び一緒になる意志が色濃くは表れて來なかつた。考へて見るに、彼の女も隨分美しかつたではないか？殊に肌が柔かで滑らかで、彼の女は好くその肩や腕をコスりながら

『手がスベる。スベる！』

なぞと、仰山に騷いだものだつた。さうだ。何に附け仰山で、時には物を罵倒したりするやうな質の女だつたが、其れ丈、私には可愛かつた。いや、よさう。彼の女に就ての思ひ出は私を大變不眞實目に返す。之は大變いけない事だ。

それより、私は自分の子供に着眼を向けねばならぬ。いやでも聞いて下さい。芸者サン子と私との間に三人の子があつた。説明は略していきなり云ふが、その内の一人はもう二十一才になつてゐる男の子だつた。或るドゼクラブの事務員、笠原貴一へそれ迄預けられてゐたが、この子の方は私が入獄以前にも一度自分で引き取つて手しほにかけて育てた事があるので、その二人の子の内では、より多く私に親しみがあつた。其處で私の考へた事だが、私はこの子、即ち正二と之から一緒に住み、久しぶりで、親身の情愛に觸れたなら、斯んな風に心の奥にくすぶつてゐる取りとめもない淋しい感じを追ひはらう可能がありさうだつた。

だから、私は豫定を確實に實現した。正二は私の家へ引き取られた。私の豫期に反して大分學問の方が遅れてゐるやうだつたから、大急ぎで、ある私立大學へ這入れるやうに、私は獨りで奔走してやつた。其處迄は上首尾であつた。然し、それから追ひ追ひ、彼の素行の上に、何かしら私の氣に入らぬものが澤山見出されて來たのは一體何う云ふ譯だつたのだらう。いや、正直に云ふと私には彼れの顔立ちからして氣に入らなかつた。まあ、何と云ふ形の好い鼻筋だらう?何だか厭な氣がする程、整ひ過ぎてゐるぢやないか?それに、睫毛の中に一つ大きなホクロがあるので、その方の眼が餘計黒づむで大きく見えてゐる。役者の造つた眼見たいだ。役者!おゝ、私はその名を憎む。私は役者が大嫌ひだつた。嫌ひな者に自分の息子が似てゐる!もう世話はないぢやないか。息子!自然で居て、然も、造り過ぎた顔をしてゐる!―私は何うも腹が立つた。これでも、ぢつと胸にこらへた。時にはこらへた無形の怒りが波のやうな筋へになつて、喉の處へ形ちでもつて表れさいした。(ハテ、私は又しても生理的に惡の捕り兒となり初めたのか。)

いや、もう一つ、厭なのは、彼れのお辭儀の仕方だつた。頭を下げるのでなくて、頭を投げ出すのだ。エイ!活動寫眞の喜劇の中から、斯んな形式を學びでもしたのだらうか?おゝ、其處にはあらゆる現代的な「浮薄」のナマな象徴が

見られたではないか？真直ぐに頭を下げない。業と曲げて下げる。それのみか、かゞむ拍子に右足を一歩あとへと引く。フム、まるで道化だ。いや、歩き方も大變惡い。業と醉つたやうなフリをする。いや、話し方も氣に入らない。何だ『さうですねえ。』と云ふ所を『さうですニー。』と發音する。その上、そのニーへ波形のアクセントを附ける。風變りを好い事とでも思つてゐるのか？馬鹿め！

皆さん、この父親は何と云ふみじめさだ。可愛がらうとした子供から斯んな風に突きはなされてゐる。でも、私は耐へた。さうだ。時間を待たねばならない。今に好い日が來るだらう。勿論、ツギをした瀨戸物からは、ツギの筋は消えない。然し、その疵に甘んじ、それを許し、それを忘却する時はきつと來る。まあ、そんな譯で、私はぢつと雨や風の過ぎるのを氣長に眺めやつたものだつた。

考へて見れば之と云ふのも罪は皆私にある。人に委して置いて、子供を立派に仕立上げ得ると云ふ規則は何處の國にも存在しない。悲しいではないか。一時、正一は小學校の模範生として、校長から賞狀だか切符だかを貰つた事さへあつた。彼れは怜悧で、實直だつた。だのに、今、此處に表はれてゐるのは何か？まあ、彼れは何うして、私に斯う色々のものをネダる事を遠慮しないのだらう？ハンティングキャップを買つて呉れ、萬年筆とシースを買つて呉れ、オーヅスエタが破れました。何故此の頃の靴は斯う切れ安いのだらう。實はベストポケット コダック が欲しい。單玉で十圓三だ。

それで私は十三圓やつた。彼れは頭を妙に曲げてお辭儀をした。それから一週間、今度はパツトレ燒き杵と材料一式と云ふ名目で七圓をねだつた。私はすかさず、

『だが、コダックと云ふのは何れだ？』と尋ねて見た。

「友達に貸してあります。」

フム、そんなボだらう。そ、一ケ月たつと彼れは「六代目」と

『お父さん、大變です。友達が私のコダックを質に入れちやつて、流れさうです。早く八圓出して下さい、受け出して來なくちや！』

エイ！ 小伜の癖に、「流れる」だの、「受け出す」なぞと、何の口でほざくか？まあ、之が時代といふものなのか？ 第一、質屋通ひをする友達なぞを半分でも持つてゐて、此の先一體何うするのだ。

私はその頃から段々細かく正二の擧動に氣を附け初めた。或る夕暮れ、彼れは何時もなら鍵のかゝる机へ抽き出しへ大切に藏ひこむ日記帳を、不注意にも机の上へ投げ出したまゝで外出して了つた。私は悪い事と思ひながら、それでも子供の將來が氣になるので、一寸、その一部を開いて見た。さうだ、一體彼れは毎晩のやうに何處へ出掛けるのか？之が一番の問題であつた。

日記には何回となく、「オルガニザチオン、ペーへ行く。」と認めてある。何？オルガニザチオンだつて？子供らしくない、長い綴りだ。何處の言葉かしらないが、まあ、私流に、つまり、ガイド流に譯せば、それはオーガニゼーションの事だ。組織だ。組だ。團體だ。ペーとは何か？Bかも知れない」B組合？何か取り引き所だ。それに又斯んな洒落た名目を業々附けるその組合長は何んな悪漢の混血兒なのか？

到々、耐へ切れなくなつて、私は或る日、正二を馬鈴薯畑の中で捕へ、いきなり、露骨に斯う聞いてやつた――

『オルガニザチオン、ペーとは何だ？』

『知りませんよ。何故？』

『さつき、若い男がお前の留守に來て、ベーから參りましたと云つたんだ。答へなさい、何故ベーなんだ、え？』

『あゝ、それなら、野球の團體の事ですよ。』

又、嘘をつく！知つてるぞ、もつと惡ふざけをして遊ぶ組合なんぢやないか？フム、困つたものだ。友達が皆惡い。獨逸人の合ひの兒なんかも又一緒なんだな。えい、えい。面白くない奴ばかりだ。例へば、此の間遊びに來た安井と云ふ青年――ありや何のざまだい？世話はない。見ろ。奴は無學な癖に利巧さうに見せかけやうとする卑しい性質を持つてゐるぢやないか。「こつやうな」と云ふ所を「コレ的」なんてホザいて平氣でゐるなぞは、もうあきれ返る段ではない。あの分ぢや、今に「腐敗的なものは瓦斯的なものを發生する。」なぞと、やり出すやうになるのが落ちさ。さうかと思ふと、あの北見の方は一層淺薄で、蒲田撮影所から流れ出す一時的な新熟語なぞを連發してさ、何うにも鼻持ちがなつたもんぢやない。「止せ」と云ふのを「ヨソエ」と云つたり、俺の事をウルサ型なんぞと陰口したり、そんなに新らしがつてる一方で、古風なナタマメの煙管なぞにも趣味を持つてろとは、まあ何たる事だ。お止し、お止し、もうあんな奴等と一緒になつてゐる事はコンリンザイならんよ。皆、駄目な奴だ。二十五錢で世界地圖を買つて見て、もうそれ丈で地球上の事は何でも分つた氣になるのが彼れ等なんぢやないか。』

私の斯んな意見を聞きながら、足の先で死にかゝつたミヽヅを蹴つてゐた正二は、風向きが惡いのを見て取ると、ああ、何たる事だ！彼れはちやんと手心を覺えてゐて、好い拔け道でも見附けたやうに、いきなり私に斯うノシかゝつて來るのだ――――

『お父さん、メヽヅは妙なもんですね。』

この小倅、ふざけやがつて！私は首筋を熱くしながら、怒鳴つた――――

『正一！きつと云ひつけたぞ、好いか、うむ、これにオルガニザチオンとは何だか云つて見ろ！』

『お父さん、私は活動写真で、一人の警視が官服を着たまゝで盗人を働く所を見たけれど、安井の話しでは、ありやあ以前お父さんのした事を芝居に仕組んだのですつてねえ？』

おゝ正一よ。お前は手心を知つてゐる。之は何と云ふ逃げ道だ！私は目指しさへ顔へつゝ高い天を見上げて涙ぐむだ。白い大きな雲が悠々と動いてゐる。後光さへさし添ふてゐる。私は驚いて目を落し、ふと自分の身のまはりを見すゑた。あゝ、風が柔和に吹いてゐる。馬鈴薯の何の奇もない葉が一つ一つ同じ速度でおとなしやかに顫へてゐる。だのに、私の心に丈、何故、この混亂がある！廻りは皆平和ぢやないか！神よ、貴方は、この父親と、この息子の仲を將來何う云ふ工合に變更しやうと心掛けてお出でなのか？

仕方がない。私は少し聲を落して云つた――

『馬鹿な！私は以前鐵道院につとめてゐたのだ。可成りな教養もあつて、或る大きな驛の助役をしてゐたのだ。だから、小さな驛の驛長より、ずつと俸給も多かつたのだ。』

『では、お父さんの罪は、何か鐵道に關係してゐたの？』

『お前は妙な子だ！』

私は不愉快でした。一體、この子は何を考へてゐるのでせう。私をうしろからぢつと眺めたりして、何をひそ〳〵と考へてるのでせう。鐵道に關した罪――たとへば、運送する荷物の拔り取り、電信を應用した何かしらのサギ、そんな事を思つてゐるにちがひない。私は一生懸命辯解した。けれども子供は唯だ疑がつてゐるやうな氣味の悪い笑ひを洩らすだけでした。

之ではいけない、もう少し家の中がシックリせねば……、それでないと、私迄又心が荒むで駄目になつて了ふ、と私は悲しみに似た心持ちで一人咳きました。

さあ、之が不快でないと誰れが云ふか？皆さんは充分察して居て下さる。だから私は餘りクドく泣き事は續けまい。好い。好い。之で好いのだ。然し、何が好いのか？

ちつとも安心はならない。私は毎日正二のうしろ姿を見やつては甲斐のない思案に暮れてゐた。時間は早く遅く色々の歩調で過ぎて行つた。そして、到々、私の眼前へ妙な事件を運むで呉れたのです。

或る日――と云つても造り事ではない――レツキとした某月某日の夕べ、私は外出する正二の跡をつけて行つて見た。さうだ。彼れは之から鼻唄まじりでオルガニザチオンへと出掛けて行くに相違ない。

然も、結果は案に相違した。彼れの足どりが○川岸をよろめいて行く頃、もうすつかり邊りは闇が濃くなつてゐた。私は彼れの影を見失ふまいとして、段々彼れとの間隔をせばめて行つた。彼れは、あの大クレーンのほとり迄廻りつくと、一寸足をとめた。その拍子にクレーンの後ろから一つの人影がよろめき出して來た。誰れだらう？

それは男か？女か？それとも私の見あやまりか？何うも暗くて凡てが判然としない。もつと近寄つて見ねばならない。然し、そのために私が恥ぢをかくやうな事でも起つたら何うする？いや、人の跡をつけるなんて、もう初めから恥ぢは掻き切つてゐる。では構はない。もつと近附いて行つてやらう。

さう考へるか考へぬ内に、私の足は獨り手に前へ進むだ。直進せずに、何だか間く歩き出した。さうだ。やはり心が怖えてゐる證據なのだ。何故、斯う怖えねばならぬのか？正二と並むでゐるその不可解な人影が既に不可解ではなくて、もう可成り明瞭に私の眼に浮むでゐる。私は電光形によろめきつゝ、更に今一息近づいた。

[illegible]男かしら[illegible]相手を伴れて[illegible]てゐる、それ[illegible]。女[illegible]
つてゐる筈がないぢやないか！ いくら、欧化が進んだつたからつて……

男と男と歩行するなんては妙だ。其の奥に何かしら「恋」が秘んでゐねばならない――私はさう決め込んで、尾行しないで、もつと近くへ寄つて行つた。何うも全部の感じが違ふ。妙にそぐはない。怪しい男の帽子はソフトでもハンチングではなくて、私の眼が誤ちでなくば、黒いボンネツトらしい。私は其処で心臓を引き締められるやうな気がした。もつと、もつと、よく看察せねばならない。はて……帽子には白いリボンが付いてゐる。それなら何も男物ではない、それに、何うだらう。其の怪しい影の歩き付きは……見る所……如何にも物柔らかぢやないか。一寸立ち止まる時なぞ、内又にさへなる。腰を曲げたりする場合も素直で、其の迹が丸く幅つたい。腕を持ち上げた、と、衣服の袖がくゞこく下へ落ちて、二の腕まで見える。其の挙動も確かに女性的である。いや、疑ひはない。あの袂は長くヒラめき八ツ口も開いてゐる。袖ツケの工合が男のとはちがふ。では、何故、帽子を冠つてゐるのか？矢張り不良な女で、斯と云ふものを好む性癖が強い奴ででもあるのか？

もつと私は接近して見た。女が一寸振り返つたが、私は早くも斜めに歩いて何気ない風を見せたので、女は別段私を不審がらなかつた。其処で、もう一度、女の頭部へ私は注意を向けた。

何でもない。帽子なのぢやない。美しい西洋髪の上から白い繃帯をしてゐるのだ。怪我か？怪我！既にそれは何となく「危険」の象徴であるやうな気分を起させるぢやないか。

困る。繃帯の女とは困る。

然も、若い女性に違ひない。その動作にネバリがある。湯から上り立てのやうに弾力がある。

ぢつと見すゑてゐると、軈て若い女は首をかしげ、手をさしのべ、正二の腕を捕へた。正二も片方の肩を心持ち上げて、體を二三度ゆすつたが、すぐ女の肩へ手を掛けて、それをずつと押した。押すとは妙だ。女は後へよろけた。よろけるとは妙だ。然し次の瞬間、正二はよろける女をぐつと前へ引き寄せた。何だらう？喧嘩か？云ひ爭ひか？おゝ、さうではない。『引き寄せる爲めに、先づ押してくる。』動作を誇張してゐるのだ。戀愛遊戯なのだ――と、私は直覺した。

私は驚いた、落膽もした。正二は未だ二十一だが、もう戀人を持つてゐる。いや、戀人を持つのは許し得る。唯だ心配なのは相手の女性が何う云ふ家の娘で、何う云ふ過去と現在とを持ち、何んな未來を豫示してゐるかと云ふ點だつた。けれど私はもうその上この二つの影の戯れを詮じ詰め、見きはめる勇氣を欠いてゐた。

私は考へ、呟き、迷ふて家路へ急いだ。正二の影、女の影、それが私の頭の中を黒くゆらぎ廻つて、何時迄もやまなかつた。仕方ない。仕樣がない。成り行きは遠慮なく進むで行くものである。いや、然し、あの女は誰なのか？はて、之は何だ、この私の心の中にしやがんでゐるのは？若しかしたら嫉妬、或ひはその隣りのものであつたら何うする？好いぢやないか、正二に戀人があつても！私にだつて若い時代には次から次と三人も四人も戀人が出來たではないか？いや、それでも正二を打ち捨てゝはいけない、彼を私と同じものにするのが私の希望だとでも云ふのか？違ふ、違ふ。私は既に過ちを完了した人間だ、正二は之から過ちをしやうとする人間だ。私は何うしても彼のほしいまゝな行動を運命にまかせてすてゝは置けない。さうだ。問題はあの女性が誰れであるかと云ふ點にある。それを知らねば、何一つ考へがまとまりはしない。

私は家へ行き着いた。もう一度、正二の日記を検べてやらねばならない！之が一番肝腎な、然し、何となく罪深い考へだつた。でも躊躇しては居られない――私は急いで彼の机の抽き出しを引いて見た。鍵が掛かつてゐる。鍵は何處に

ある、彼れの袋口の中だ。外出する時、彼れは袋口を持ち出したがらないで、案外にも、二ケ所に分けた上に、可憐な形で提げ出されてあつた。

私は抽き出しを開いた。罪の迸り次手に日記をも開いて見てやつた。然し、案に相違して、其の中には何故か一つの情事も記してはなかつた。私は一寸躊躇した。うむ、「探つてはならぬ」と云ふ神の知らせが此處に見出されると私は考へ直した、その拍子に私の視線は日記帳の上からすべつて、抽き出しの中へと走り込んだ。凡てのものが白い中に、一つ丈、黄色い光輝のあるものが私の注意を惹いた。何だか絹の紐か？紐にしては幅が廣過ぎる。リボンの切れはしだ。私はそのハシを持つて引き出して見た。リボンへ一寸縫ひを加へたシオリだ。女が呉れたものに相違ない。所で、私がこのリボンを引張つた時、一緒に出て來たのは一冊の帳面だつた。私は初めそれに注意する暇がなかつたが、次の瞬間、その表紙に「Sの手記」と書いてあるのを發見すると、急にこの方へ手が伸びた。手蹟は正二のものである。私は開いて見た。

一番初めには彼れが玉突きの「ゲーム取り」をしてゐた頃の悲哀が可成り上手に敍述してあつた。その次には、母親、浅倉リン子に對する非難のやうなものが二三頁認めてあつた。三番目には私の事でも書いてあるかと思つて注意して見ると、私の眼を早くも射たのは全く別の「見出し」だつた。

「彼の女は何うしたのか？」それが標題だつた。その下に器用な筆づかいで一つの大きな眼が描いてあつた。一示唆で、上眼を使つてゐる。

それは何うでも好い。正二の書いた女に關する手記と云ふのは大體次の通りだつた。

それはカカオ脂のやうな匂ひの、ベルガモットのやうなそよ風を起す娘なんだ。若い、そして何だかハデな衣裳で

ゐる。そら、蟲にも警戒色と云ふのを持つてゐるのがあるでせう？光つたり、鮮かだつたり……。

その若い娘はまるで背の高い昆蟲のやうだつた。髪にはガラスと銀が光つてゐた。鼈甲のやうな濃藍色のものがピラピラしてゐる。首は油が塗つてある鳩の羽のやうにツヤやかだつた。カバ色の頬紅をつけてゐた。それに、前髪を少し鋏で切つて、前へ垂れてゐた。私はこの娘を瓦斯燈の下でちらつと見ると膝がしらに力がなくなつた。胸がむら／＼した。

『あゝ……』と、私は深い吐息をついた。が、もう娘さんは後ろへと去つて行く。ふり向いて見たい。よさう。いや、向け。

すると、娘の方でも私を振り向いてゐる。心臟の中へ石が落ちたやうに、ドキドキと音がはづむ。血が波紋をかく。血管が一度に太くなる。恥かしい。

之を私は毎晩やつた。えゝ、さうです、娘さんが街を通る時間は何時もきまつてゐるんです。それに妙な娘ぢやないですか？彼の女は街上で私を見ると、驚いたやうに緊張する。それから必ず、後ろを一瞥ふりかへり、そこらに人の居ないのを確めると、今度は大膽に私の方へ寄つて來るのだ。何時でもさうなんです。

私は初め此の人が私を好いてゐて呉れるんだとは思はなかつた。その内、彼の女の眼の色が段々強くなつて來た。初めは石板色だつたか、了ひには黒漆のやうになつて來た。私はそれを思ふと病氣になりさうだつた。

到々、又、別の事が起つた。娘は私のそばをすれちがふ時、業とよろけて、私にぶつかつた。頭にある青い鼈甲がピク／＼とふるへ、耳が象牙のやうに光つた。キクツと何處か音がした。黒漆の流れのやうに視線が走つた。暖かいベルガモツト水のやうなものが吹きこぼれた。あたりは水々しい匂ひが霧のやうだつた。チロ／＼と鈴がなつた。彼の女は

そんなものを秋へ入れてゐたのかしら？
私は悪い夢に取りつかれたやうになつた。何も皆闇にしたかつた。夜が来た。闇だ。嬉しい。何も[illegible]か
石が揺れて眼を開いた。

さあ、又、強い力が私を呼ぶ。私は背の関節をポキンと伸ばすと、すぐ出掛けた。

娘が来た。緑の帯をしてゐる。半分飛んでる山鳥のやうに、足を浮かせて、前のめりになつて私の方へ寄つて来た。

もう、顔が私のそばにある。大きい花のやうだ。それが私をのぞき込む。彼の女はよろけ、私の足を踏んだ。

「あら！」と、娘は唇をほころばした。「ごめんなさいましね……貴方……。」

「かまはない……。」と、私は云ひよどむでよろけた。何うしやう。だが、私は真紅に脹れたやうになつて、[illegible]を過ぎ去つて了つた。

そのあした。一日が過ぎる。夜。私は出掛けた。

彼の女は来た。水を泳いでゐるオシ鳥のやうに、ゆう／＼と。けれど、大変遠慮して私から離れた所を、すーつと、浮むで通つて行つて了つた。あゝ。私は急に淋しかつた。何故斯んなになつて了つたのだ？

私は息を吸ひながら、振り向いた。磁石と針とが動いた。彼の女も振り向いて呉れた。青い瓦斯燈の光りがベール色をしてゐた。彼の女は私を目で捕へた。そして、眼の中の涂が乱れ散るやうに笑つた。笑つて呉れた。私は……。

然し、仕方がない。私は家へ帰つた。眠れない。濃い色ばかりが見える。

又、あしたになつた。もう夜だ。出掛けて行つて又待つ。

「今晩は！」娘が云つた。もう行つて了つた。

又、あした。闇。雨が降り出した。傘をさして出掛ける。

娘も傘をさしてる。

傘と傘とぶつかつた。傾いた。娘は私に寄りすがつた。ベルガモツトの噴水のやうだ。ヤシバタの頬が直ぐそばへ來た。恐る可き雰囲氣だ。土星に環があるやうに、この顔にも熱い環がある。環がもうさわる。砕ける。湯氣か星雲のやうだ。見えない焔のやうだ。私はたじろいだ。娘はもつと寄つて來た。腰を曲らせた。

雨が降つた。しきりに、しきりに。彼の女の襟が亂れ、その鎖骨を包む象牙の皮膚へ霧が飛びかゝつた。私も彼の女も驚いて、立ち去つた。

その翌晩、私たちはもう知り合ひであつた。幾つかの言葉が交された。私は踊つた。寢なかつた。御飯も食べず、唯、泣いたりしてゐた。そして、毎晩、毎晩、少しの間づつ會つた。

私はもう駄目だ。斯んな風になつて了つた。到々娘のマジの輪の中へ巻き込まれて了つた。

或る夜が來た。娘と私は心を躍らして一緒に歩いた。人の足音がすると、私は驚いて振り返つた。大きいクレーンの下迄來ると、

「之から何處へ行くために、私たちは斯んなに早く歩いてゐるの？」と私が聞いた。

「知らないわ。」と娘が答へた。

そんな風で二人は唯だ唯だ歩いて歩いて歩き抜いた。

何でも正二の手記と云ふのは以上の如きものであつた。

彼れ等二人は唯だ唯だ抱き付つてゐる。大變に好かやないなと二つ手には、突然、遠の事なのかさいで、何か其の以様に事實が秘むでゐるのには疑ひない所だ。では、あの女性が何處の娘かも分らぬ内に、正二はもう交際を初めたのか？ 之は何と云ふ野蕃な會合だらう、この新らしい世紀の中で行はれて好いやうなものではない。それにしてもオルガニザチオンと云ふのは斯かる會合を指してゐるのかしら？

そんな臆測を重ねてゐる内に、幾日かと又過ぎて行つた。私は一度忘れた例の女の事を又も思ひ出した。

『若いに違ひない。乳の上さへも蔽ふ程、高々と帶を締め、オハショリ無しで、帶の直ぐ下から腹を突き出し、威張つて歩くやうな女だらう、口が馬鹿に大きくつて、眞面目な時と、笑つた時とでは、別人のやうに顏の形相が變つて了ふやうな……。』

そんな女だらうか？ 私は知らなかつた。正二と彼の女とは何時もあの大クレーンの下で落ち合ふのかしら？ これなら、假りに、私がクレーンのボイル油くさい機械場へ忍むで待つてゐたら、あの女の顏を見る事も出來、彼女の教養、彼の女の親の財産など迄も知る機會をさへ捕へ得るだらう。

先づクレーンの下へ彼の女が來る。私は大膽に飛び出す。

『誰れだ！』と露骨に叫んで見る。女は驚いてよろけ、そばのレールにつまづいて、又一つよろける。足のクロブシをくじくかも知れない。これで口惜しまぎれに

『貴方こそ誰れ？』と聞きかへすだらう。

『刑事だ！』と答へたら何うだらう。(おゝ粗野な空想！) 彼の女は不意につぐむでしまふ。その間に、私は刑事風な眼で彼の女を下から上、上から下と見廻してやれる。口の大きい性質に違ひない。ただ斯んな空想を敢てする丈けに、何

んな耻ぢ知らずな悪人なのだ。

一方、正二の浮き浮きした擧動は少しも改められなかつた。それに、或る日なぞは、次のやうな感想めいた事を私の前でれい〳〵と口にした――

『私は幼い時、海へ這入つたが、何でも波が一丈程もあるやうに思へたつけ、それから、象を初めて見た時には大きさが三丈位あるやうに思ひ取れましたね。所が今になつて見ると、何でも小さく見えて仕方がない、やはり、自分の丈が伸びた爲めでせうか』

私はこの言葉が氣に入らなかつた、何故なら、彼れは私を物の數とも思つて居ないと云ふ意味をそれとなく私に打ち明けてゐるやうに考へられたからでした。私は一日胸が悪かつた。そして、その夕方、耻かしい事だ、私たちはもう耐へ切れないで口論を初めて了つた。（おゝ、私は又、回歸的に、時間的に生理的に悪魔化したか？）

それも原因は些細な點にあつた――つまり、塵芥箱の位置の變更と云ふ事だつた。もう一つは、私が鐵瓶を火鉢の上へ掛けると、その口の向きが悪いと云つて、正二は直ぐ鐵瓶を掛け變へた。それが私の立腹を買つたのだ――實際、人にも話せない愚かな事だ。

到々、興奮した正二は

『お父さんは何故卒死しなかつたんだ！』

と叫び出した。私も敗けずに、

『お前こそ、火事見舞ひにでも行つて、ビステキ見たいに燒けて了へ！』なぞと大業な口をきいた。なぐり合ひが初まつた。正二は口惜しがつて齒ぎしりをした。さうです。力は私の方が強かつた、體の幅も私の方が廣かつた。それで

正二はいきなり縁の下から籠を取り出して、向に俺の存在を外すと、直ぐ二つに掛きだめた。つまり、私が所謂云ふ所の偽な事業に適しないのを思ひ知らせてやらうと云ふのが彼れの理屈だつたのです。

私は彼れの背中へ飛び掛つた。だが、その時、身内たちが畑から歸つて來て、二人を引き分けて呉れた。それでよかつたのだ——さもなくば、きつと、何方か怪我をしたに相違なかつた。恥かしい。そこいら中は籠から轉がり出した馬鈴薯で、足の踏み場さへなかつたぢやありませんか？

その晩、外出した正二は夜中の一時頃、やつと家へ歸つて來た。彼れは眠つてゐる私のそばへ氣附かれないやうに忍び足をして近寄つて來た。私は何となく無氣味になつたので、眼を開き、そつと彼れを眺めてやつた。

『なあんだ……』と、正二は呟いて、又、向うへ戻らうとした。一體、何う云ふ積りなんだ。私は彼れを呼びとめていきなり、露骨に斯う云つてやつた——何故云つたのか分らない——

『お前には女があるな？正二！』

『なあんだ……。』と彼れはうなだれ乍ら不可解な答へ方をした。

『あれは惡い女だぞ！』と、私は息をはづませつゝ、すかさず、附け加へた。

『検べてども呉れたのかい？』と彼れは不氣味な顔をして呟いた。

『切れろ！あの女は化け物だぞ……。』

『何を？貴様こそ狸の癖に……。』正二はいきなり手を擧げた。紙に包んだ固いものを彼れはその手の中に持つてゐた。菓子でもほうり投げるのだらうと私はたかをくゝつて安心してゐた。すると、彼れはその持つてゐるものを力まかせに下へたゝきつけた。恐ろしい爆音が室中に反響した。私は驚愕の餘り飛び上つた。死なゝい迄も、何處か怪我をしたら

うと直覺した。然し別段煩りが立たない。よく見ると、硝子の破片が飛むでゐる——おゝ、彼れは電球を投げたのだ。餘り人を馬鹿にしてゐるぢやないか。

斯んな不快な事件のために、二人の間が益々遠くなつて行つたのは、もう菜々云はないでも分つてゐる。然し、此處に疑問がある——一體何故私は斯う迄正二を憎み、彼れに敵對せねばならないのだらう？此の氣持ちの原因は約まる所、何物にあるのだらう。

初めの内、私が彼れの品性を高く評價し過ぎてゐた事の一つの反動——それが重要な役をしてゐたのは勿論であるが——それ以外の原因と云ふと、私には、明確な指摘は不可能なのであつた。分らない。その頃から、私は自分が好く分らなくなつてゐたらしい。

私は苦しまぎれに、私の過去に於ける内緣の妻、澁倉リン子のもとへ驅けて行つて見た。彼れは紳士ハッチソン氏の愛妾になり濟まして、何だか馬鹿に日當りの好い西洋間にシヤがんでゐた。明る過ぎて耻かしい程だつた。壁でもカーテンでも、ベランダの硝子障子でも、皆、アルコールの焰のやうな、陽炎のやうなものを顫はせ、燃え立たしてゐた。ただ、その中で、一つ丈、壁に掛つてゐる誰れかのデスマスクらしい塑像が澁い表情をして眼を閉じてゐた。

「何故斯う明るいんだ……と。」私はリン子に呟いて見た。いや、彼の女も年をとつたものだ、自分では若い氣でゐる丈に、却つてそれが目に立つて哀れだつた。そんな大きな口をして笑はないでも好いに……と、私は内心怖えながら呟いた。そんな大股に歩いて見せないでも好いに……。そんなに勢ひ好く立ち上らないでも好いに、だが、待てよ、こいつの背中や腰の黑子、或ひは膝頭にある剃刀の痕なぞ迄をもこの私が暗記してゐると云ふのは變な氣持ちのものぢやないか？さうだ。剃刀の痕——之は彼の女が湯殿で、勿論、裸で立て膝をして、顏を剃つてゐた拍子に、過つて剃刀を膝の上へ落し

たんだ。その時も大きに面白さと紅い頬を光らして私の所へ駈けて來て、まあ、まあ、大變だなんて……おい、私は何を云ひ出してゐる!

窓が立派で、明る過ぎるのだ。何うも面白くない。彼の女の顏はもう古い。一種のデスマスクだ。笑ふと云ふ事が唯だ皺を深めると云ふ事に過ぎなくなつてゐる。駄目だ。それにハッチソンと云ふものが後ろ楯になつてゐる。ふん、盗みたくもない品物へ、見張番が附いてゐるとは何事だ。

私は倦怠して居眠りをするか、それとも、何かを云ひがかりに彼の女へ喧嘩を賣るかするより、もう道がなかつた。

『それ、貴方、もうハッチソンが歸つて來る時間ですわ!』彼の女の斯んなおどかしを喰ふと、私は夕暮れの窓を出て再び孤獨に戻つて行つた。『今度は聖ヴレンチン祭の晩にいらつしやい!』だとさ!ふん、しやれた事を云ふ。私は一寸も嬉しくはないのだ。それに彼の女へ向つて、私が正二の事を訴へても、彼の女はまるで他人の話しでも聞いてゐるやうに空とぼけてゐるではないか?私は不滿だつた。いや不滿なぞはもうとつくに超えて了つてゐた。異人臭い女め。何につけ、俺をけなして、正二の肩を持つ。若いもの好きの婆あめ。

所が聞いて下さい、此處に偶然、別の事件が起つて來たのです。

恐ろしく晴れ渡つた日だつたと記憶する。一人の若い女性が向上會の前を通つた――その拍子に、彼の女は私の窓の内部を洞でも窺ふやうな變な目附きで覗き込んだ。唯だ、それ丈なら何でもない。ものゝ三分と過ぎない内、彼の女は戻つて來て、又覗いた。それから二分!又通り過ぎて、覗き込んだ。

ハハア、この女だな、と私は直覺する事が出來た。急いで話さう。それで、私はいきなり外へ飛び出して見た。もう露骨に斯う云つて見た――

『正二さんですか？』斯と『さん』を附けてやつた。

『ナ……ニ……ノ……』なぞと彼の女は一寸ドモつた。うむ。それで分明した。女が正二の女に相違なかつたのだ。で、私はもう一つ詳しく彼の女を看察してやつた。私の無遠慮を彼の女は迷惑がつてゐたが、遂に耐へ切れなくなつて、一種の立腹を示すやうな表情をさへして見せた。私にはそれが却つて面白かつた。さうだ、この前の晩に後ろから彼の女を見た時の私の印象は過つて居なかつた。確かだ。背が大變大きい。この頃、佛蘭西で、第一の美人と評された女の背丈は五呎四吋だかだつた。その背盤の周圍は四十インチ位だつた相だ。所で、この日本人は何うか？背盤がそれ程大き相でもないのに、大變背が高い。そして大股に歩く。味がなく眞直ぐな體だ。私なら斯んな女に戀なぞは出來ない、あのリン子の若い頃を、皆さんにお目に掛けたかつたな。何うして仲々この女のやうぢやなかつたのです。一寸、屈むで見せる動作なぞにさへ、技巧を氣附かせない程度の甘い技巧があつたつけ。いや、そんな事はもう全く不用だ。

早く云はう、正二の戀人は腹立たし相に私の凝視から拔けて、向う向きに歩き去つた。逃がすものか、と私は口の中で呟くと、直ぐ後ろから聲を掛けた。

『正二君が歸つたら、さう話しませう。何處の方？貴方は……。』

私が『正二君』と敬稱を使つたので、彼の女は私を戀人の父だとは思ひ取らなかつた。いや、正二は向上會の經營者が父親に當るのだなぞとは決して口外しまい――彼れは見得坊で、その上、この事業を隨分嫌忌してゐたのだから……。

こんな譯で、この女は幾分私を輕く見て取つたらしい。

『いゝえ、學校から來たものだつて仰言つて下されば分りますの。』

『學校は何處です？』

「H小學校へ行つて云つて下されば……」

こゝに、尋ね訊す權利が私にない事を悟つたので、私は彼の女に軽く會釋をした。彼の女は急に無愛想になつたやうに、大股で向うへと去つた。

私はもう此の問題に大きい興味を持つ事が出來なかつたのを言明し得る。さうです。私は私一流の探偵の癖に捕へられて、その頃、取りとめのない居眠りを仕續けてゐたのだつたから……。けれど探偵と云ふものは必要でもない時にもやつて來る。そして、秘密は偶然な機會から明るみへ押し出されるものだ。いや、さうではない。私は間違つてゐた。私は故意にあの毛脛の男——その頃も向上會の小使ひをしてゐて呉れた例の松岡門造に何かしらを相談し、命令さへしたのだ。偶然ではない、故意だ。そして何を命令したか？云はないでも分つてゐる。色々の事を、色々の方法で探つて見て呉れろ——それだつた。

元來松岡はお人好しで、いくらか愚鈍でさへあつたが、それにも拘らず、影の中で、影の奥を探るに適する妙な才能を持つてゐた。探索は彼れ一流の氣長と内氣とに依つて、可成り委細に成し遂げられた。さて、その結果を聞くと私は驚かずにゐられなかつた。

途方もない。途方もない。松岡は何でも初め、H小學校前の小さいミルクホールなぞへ這入つて様子を聞き込んだらしい。彼れは誤魔化しに云つたのだらう——この學校に之々の済附けをした、これこれの歩きつきで、これこれの顏の人は居ませんか——。

あのミルクホールの女主人は皆が上釣つてゐて大變に噂好きだ。直ぐ彼れの質問へ乗り込んで來る。……それで、渡し舟へお客が乘るやうに——。

『あゝ分りました。あの背の高い……。』

『高過ぎる位だ……。』

『そして、眼が幾らか落ちくぼんで……』

『うむ、その癖、衰へてゐるんぢやない、大變光つた勢ひの好い眼附きをしてる……。』

斯んな工合に話しは直進したらう。結果はどうだつたか？正二の戀人は決して女教師ではなかつた。之は私の見當違ひだつた。彼の女は小學校の小使ひの所へ引き取られてゐる何でもない少女だつたのだ。いや、何でもなくはない。色深く聞いた所に依ると大層曲つた性質を持つてゐる女なのが殘らず分つて了つたのだつた。松岡はそれから、又別の口に林泉舍と云ふ家へも聞き込みに這入つた。だが、このいきさつは今細かく話す必要がない。

必要なのは、私が又しても正二と仲を惡くして二言三言爭つたと云ふ點なのだ。確か、そのきつかけは正二が斯う云つたことに依るのだつた——

『お父さんが向上舍を經營してゐるのは或る妙な理由からなんでせう？つまり、あなたのやうな前科者は何處でも雇つて呉れない。で、向上舍の經營…そのために信用…勤め先が樂に出來る…。』

この言葉を聞くと私は頭の頂が熱くなる程立腹した。

で、口惜しまぎれに、到々、あの女に就ての色々の秘術を正二へ打ち明けてやつたのだつた。おゝ、私は何と云ふ度し難い感情を持つてゐる男か！憎みが初めは一つでも、それが二つとなり、次には四つとなり、八つとなる。この烈しい計算に依つて、私は正二への憎しみをモトにして、先づ、あの背高女を輕蔑し、次には彼の女の周圍にある人々一切をさへ茶化して了つた。善良な人々も不良なものも混沌と私の心のルツボの中で馬鹿にされながら煮え返つた。私が正

一二に聞かしてやつた題目と云ふのは、浅間しくも失つて行きものこと［illegible］た何を［illegible］
略して此處に語り直さう。全く、私はあの頃、無い事を、自分の思ふ通りに［illegible］

×　×　×

正二、聞けよ。…何うだ、これ丈けでも、もう落喋したらう。所が、未だ二つ花があるんだから面白い。これとも、豚だと云ふなら、よさうか？聞きたい？極つてるさ、自分の女の事だものな。ちや、話すが、あのＫと云ふ美しい尼さんのお師匠さんの、もつとずつと年寄りな猫背の尼さんが、お寺の隣りへ、林泉舎と云ふ家を持つてるぢやないか。あれは、お前、感化事業と云ふ事をやる家なんだよ。なぜ、こんな様な顔をするんだ。分つてるのかい？感化事業なんだよ。で、その家へ、R警察署から、巡査の附添ひで、廻されて来たのが、つまり、あの春子さんなのさ。その時にや、お嬢さんぶつて、花模様の被布と云ふものを着てゐたつけ。下の着物は何んなに汚くても、ヒフをその上へ着ちまふと、人間はずつと上品に見えて来るんだ。それに、あの女つたら、随分顔を桃色に奇麗に化粧したり、髪へ光つたガラス飾りをするが、下着の襟の妙にふくらんでる事つたら何うだい。あれは、お前、襟がよごれるとは、それを取り去らないで、すぐその上へ、又新奇のを縫ひつけて、三つも、四つも、襟が重つて了つたから、あんなにふくらんでるんだぜ。で、もう、くつつける襟がなくなると、それが白粉で灰色に染まり、その上、油で黒くなつて、光つて来る迄、うつちやつて置く。それから、いよいよ、たまらなくなると、今度は一枚はがす、下のも汚れてはゐるが、未が少しは好い。又汚れる。もう我慢が出来なくなる。すると、また、はがす、さうして、あんなにふくらんでゐた襟が、到々、平らになつて、一番上等の、秘蔵の錦紗が表はれて来る。之は銀で縫ひ取りがしてあつて、鈴蘭の花がいやに美しいぢやないか。あいつの首と、よく似合ふね。まあ、今迄、話した襟の事は半分嘘なんだが、あの女の不精は丁度そんな風な

んだ。だから、年寄りの尼さんが心配して……いや、心配したのは襟の事ぢやない、もつと別のもつとえらい事だつた。

さうさ、林泉館に居ても、あの娘はホクロやエクボで顔を賑かにしてニコニコと愛嬌よくしてゐた。それは好いとして、あの女は時々、隣家の大人しい娘に悪い事を教へたり、小使錢をゆすつたりしたのだ。その内、年寄りの尼さんの下に使はれゐる下女のお金もなくなつた、それで五六人養つてある不良な男や女が檢べられた。分らない。だから、下女が口惜しがつた。

「今度、盗まれたら分るやうに、私の持つてゐるお札のへりへ赤インクを目印しにつけて置きませう」とこの下女が獨りごとを云つた。

尼さんはそれをとめて

「さう云ふ謀みにも罪がある。」と云つて、食パンの頭みたいな自分の頬べたを撫でさすつたものさ、

所が何うだい？それから十日とたゝない内、又、下女のお金がなくなつた。そして、春子さんのバスケツトの中から、赤インク附きの十錢札が出て來て了つた。まだ、その頃の春子さんにや、新米の刑事と同じやうに、隨分手ぬかりがあつたんだね。だから狸色の尼さんは落膽するより、むしろ、喜んで斯う云つたものだ――

「まだ、見込みがありますよ、何處か正直な所があるやうだ……。」

尼さんは出來る丈氣長に、この山猫娘の面倒を見てやらうと決心し、色々の方々で、まあ彼の女の心へ、善い筋をつけてやり初めたんだ。心へジョウギをあてがひ初めたんだ。

それは好いとしてさ。その内、何だか知らない眼のないやうな大きな顔の若い男が林泉館へ訪ねて來た。男の云ふに

は、

「春子を返して下さい……。」

「返せません。」

「でも、あの偉い奴は私のものです。」

「それにも増して、佛様のものです。」

男はがつかりして、大きな顔から光もなくなつて了つたやうな風だつたが、でも、割合に心の柔らかな奴だつたらしいので尼さんはこの男をも憐れがつて、或る株式會社の事務員に世話してやつたんだが、さうなると、男の奴も涙を流して喜んでゐたのは何う云ふ譯だつたらうね。それに、顔がそんな風だから事務員には持つて來いなんだ。

所が、何うだ。この大人しい男が、或る日えらく酔つ張つて、尼さんの家へやつて來た。酔つぱらふと、大きな顔の中から眼が双葉のやうに表れて來た。春子さんは尼さんの背中へすがり附いて、尻尾を巻いて、顫へてゐたつけ。男は急に叫び出した。

「尼さん監督つてのは何う云ふ事を指して云ふんだい？」

「佛様のお慈悲の加つたものですよ。」

「戯談だらう。だつて、私の春子はR警察署の渡邊巡査へ艶書を送つたぢやないか？」

それで尼さんも驚いて了つた。まるで自分が附け文でもされたやうに慌てちやつた。男をなだめて歸してから、尼さんは面眞目な言葉で云つた——

「春子さん、それは本統ですか？」

「いえ、渡邊さんに、唯だ、就職口を頼むだ丈なんですわ。」
「その必要が何處にありますか？」私が探して上げる就職口ではいけないのですか？」
「でも、餘り、御世話になり通しで濟まないですもの。」
「その言ひ譯を佛樣は喜びなさるかしら？」
尼さんは下唇を突き出して了つた。
それで、まあ、問題はハツキリしない内に、消えて了つた。消えて了つたと思つたら、又起つて來た。何故つて、例の渡邊巡査の奴、何の恥ぢもなく、堂々と、林泉會の表て玄關へ乘り込むで來やがつた。奴のニキビの治つた顔は食パンの尻のやうだつた。
「春子さんは居りますか？」斯うなんだ。髯をすつかり剃り落して、青い所を風にさらして立つてゐる。
困つて了つたのは尼さんだ。之は艶書の結果なのか？それとも唯だ就職口の依頼の結果なのか？何方なのです、と、露骨にも聞けやしない。それに何うだらう。春子は巡査の聲を聞きつけると裏から緒の切れた下駄をパク／＼云はせて、玄關の方へと延つたいにやつて來た。そして、巡査と二人、連れ立つて、門を出て行かうとするのだ。尼さんは玄關に立つた儘、考へ込むで了つた。到々思ひ切つて、嗄れた聲を張り上げて、
「あゝ、手前共に置いてある娘たちは、無斷で外出させない規則になつて居りますが……」
「御安心なさい、何より私が附いて居りますから……」食パンの横手のやうな顔の巡査は振り返つて斯う答へ、春子の丸い腕をとらへて、又、門の中へ這入つて來た。何だか譯が分らない。何のために少しの間だけ外の方へ出たのか？分るかい？分らないだらうの？もつとも別に意味はないのか知れないんだ。

巡査は少しすると、歸つて行つた。尼さんがそれを追ひ駈けて、お腹を兩手で押へながら、門の外へ出た。此の女は云ひ惜さうに巡査へ尋ねた——

「何う云ふので御座います……春子のシン底の心持ちは？」

「私に甘い色目を使ふのですけれどね……。」

「その他には……？」

「困つたものです……。」

「何かあるのですか？」

「私は斷りました。」

さうだ。春子は斷られた。女として、一番キリヨウの無いやり方ぢやないか？もう此の上の恥ぢはありやしない。あの女は何時も自動詞なんだ。

それから三日たつと、今度は服の背中へ一杯カビを出して、加島巡査が春子に會ひたいと云つて來た。

尼さんは留守で、弟子の美しい尼さんが居る丈だつた。あれはフリジヤのやうな好い人だね。

自動詞の春子さんは長い事、この巡査と相談した。背中のカビもブラシを出して來て、はらつてやつた。それで巡査は歸つて行つた。フリジヤの尼さんは心配して、巡査を呼び戻した。二階へと上げて、春子さんの聞えぬ所で、之も亦、相談した。

「春子さんは貴方へ秘密な手紙を上げたのですか？」斯う尋ねて尼さんは自分の事のやうに顏を赤く染めちやつた。

「さうではないが、渡邊君が病氣なので、代りに見廻つて上げたのです。」

何う云ふ譯で見廻るのだ？何の必要があるのだ？此の點が餘りよく分らない。分るかい、お前？

それから又一週間！春子の所へ渡邊巡査から飛び切りに贅澤な封筒の手紙が來た。尼さんが立ち會ひの上で、封が開かれた。

手紙には、小間使ひの口があるから、世話をする、行く先は大きなパン製造所の主人の妾宅だとある。

妾宅はよろしくないと尼さんは反對した。所が其處へ加島巡査が新しい服を着て這入つて來て、春子の看視は今後自分が引き受ける、長い事、お世話樣でしたと云ひ切つた。

尼さんは警察から引き受けた少女を、又警察へ返すのだから、何うも文句が附けられない。巡査と春子が去ると、ガリ〳〵板のまを引掻いた。

それから、尼さんが向うを向いて筆を取つてゐると、渡邊巡査が訪ねて來て

「春子さんは？」

「加島巡査が連れて行きましたよ。もう。」

「それなら、春子の荷物を私が引き取つて行きませう。」

「もう一つも殘つて居ません。」

「さよなら……。」

又、日がたつて、葬式會社の事務員がお爺のやうな顏をしてやつて來た。凡てあつた事、起つた事、終へた事を聞くと、彼れは齒の隙から息をシユツシユと洩らして、口惜しがり、老いた尼さんに抱き縋つた。松岡國造はその時、飛び出して、尼さんの體から、男を引き離してやつた。男は玄關へ轉がり出し、砂利の上をハダシで駈けた。眼も鼻もあり

やしなかつた。もう馬鈴薯のやうになつて、

「パン屋ですか、パン屋ですか？」と、彼れは叫んで居るやうだつたが、その先を私は知つてないんだ。

その翌る日、私がS町へ使ひに行くと、例の事務員は大きな葬式行列の前へ立つて、色々指揮をしてゐた。何だか手にプログラムを持つて

「えーい、三番、故島――白鳩のツガヒ……。それ、その籠だ。それを、こつちへ……。」

なんて、氣分は大分治つてゐるやうだつた。

それより、氣になるのはパン屋の方だ。一體、春子は小間使ひに行つたのか、それとも妾に上つたのか？まさか巡査がそんな世話をする筈もない。その點だけは安心して好い。心配なのは巡査と春子と仲が好過ぎる事だ。あとはこの先何う進むで行くだらう？又、巡査には、加島と渡邊の二人がある。一體、春子の戀人は何方なのだ？渡邊は春子の申し出を斷つたらしい。では、加島？この邊の消息は長い事私には分らずに了つたんだ。

葬式會社事務員が又林泉舍を訪ねて來た。

「パン屋の妾宅に春子はもう居りませんよ。」と、彼れは落膽して云つた。眼はないけれど、涙丈が光つてゐた。

「では何處へ逃げたんだらう？」

「H小學校内の小使室の三疊を間借りしてるんです。」

「貴方と御一緒に？」

「いゝえ、何だか、沈むだ顏をして、思ひ切り孤獨になつて見たいなんて云つてるんですがね……」

「收入は何處からあるんです？」

「今はB洋服店の裁縫部に這入り込むでゐるんです。巡査達からも六間と七間と借り込んだ相です。」

「裁縫部？では以前の醜聞を隠してゞすね？あゝ、あの女はミシンの名人なんだね？」

「拵、巡査の世話だと聞きましたが……。」

聞きなさい、正二、お前の戀人は化物だと私が前にも云つたのを覺えてるだらう？

×　×　×　×

以上の説明は大部分事實だつた。松岡國造はそんなにも委しく檢べて呉れたし、私も實は林泉會の尼さんに會つて色々話しを聞いたのでした。

正二は私の斯んな物語りを耳にすると、耻ぢで赤くなつた。赤くなる所に大變可愛味があつた。その爲めに、私の不快も水で流したやうに消えて了ひ、却つて彼が哀れにさへ見え出した位だつた。私は細々と彼れに意見をし、あの背高女、春子と手を切るやうに何度もすゝめて見るのだつた。けれど、正二は私の云つた事を凡て疑ひ、春子は隨分善良な性質の女だと主張さへし兼ねなかつた。駄目だ、私の息子は矢張り駄目なのだと私は深く落膽した。

其の後、私は何うかして、あの悪い女を正二から切り離して了はうと心懸けて、許される丈のムゴイ手段も取つて見た。正二も女も泣いた。あやまつた。私にすがつて何だか頼み入りさへした。正二は「彼の女を取り去られるのは自分の肋骨を拔かれるのも同じだ。」と云ふ意味の事を繰り返して私に訴へた。實に、私は驚く、この頃の青年と云ふのは皆斯んな風に進化――もしくは退化――して來てゐるのだらうか？遠慮と云ふものが全然欠けてゐる――いや、拵、私が悪い、正二は碌々教育も受けない野育ちの子なのだ。そんな野育ちにされたのは彼れ自身の罪ではなくて、結局、私の落度だつた、この點を私が何度繰り返して後悔したかは、知る人だけが知つて呉れやう。

所が、急に風が起つて來た。私の淋しい吐息に堪へられなくなつてか、もつと自由な世界へよばれてか、ましこは、私の家を逃亡して暫く行き方知れずになつてゐた。私は私で、もうどうにでもなれと思つて、別段、警察へも屆け出さずに置いた。と云つて、私の心が安らかで居る譯がない。私は實に、口惜しさと、淋しさとを打ち混ぜた憤みで拗れつやうになつて行つた。

丁度、その頃の事、リン子は出來る丈、美しく着飾つて、兎だか、狐だかのボアとマフなどを身に付けて、私の所へ忍んで來た。そして、何だか不快な話しを續け打ちに打ち出して、私を暗い穴倉の底へ引き入れた。彼の女は私たちのもう一人別の息子、英一と云ふのが、何處其處の市街で、何だか惡事を働いて、留置場へ投げ込まれた事迄、細かく、又、荒く、もう辻褄も合はずに喋べり立てた。そして、感心な事に、母親らしく聲を立てゝ泣いたりして、「それと云ふのも、皆、父親の心掛けが間違つてゐるから、その應報なのだ。」とうそぶいた。

この時の私の墮落が何う云ふ風にウネつて行つたか、おゝ、それは誰れも知つてゐる譯がない。私は獨りで道を步き乍ら、泣き狂つた、溝へ片足を落して、新らしい靴をよごしたりした。何うして斯うなのだ 。何うして……。誰れも返辭をして呉れるものは無かつた。

それ位の事は何でもない。次にはもつと忌はしい災難が待つてゐた。私は內々それを豫感はしてゐた。では、別に驚かなかつたか？途方もない。私は飛び上つた位だつたぢやないか。

正直に云はう。正一が警察の手につかまつたのです。一體何うしたのかと思つて、そこへ行つて見ると。

『父親が惡いから、息子も惡い。』なぞと誰れかゞ云ふのだから、默つてはいられやしない。

『何て簡單な考へだ。片假名よりもつと簡單だ。』と、私は情なくなつて呟きました。實を云ふと、私はもう腹を立てゝ

ゐた。私が斯んなに善い人間になつてゐるのに、未だ皆さんは疑つて見たり、昔の事をおからさまに思ひ出して、それを淺間しい樂しみにしてゐなさるのだ。分つてゐる。分つてゐる。

偖て、それよりも、署長さんの云ふには斯うなのです。

『お前の家のタンスを檢べる必要がある。』

勝手に檢べるがよい、所が私の家にはタンスなぞありはしなかつた。署長は本箱の事をタンスなぞと洒落れて呼ぶのだ。

『そんなら、藥罐の事を消防夫の帽子と呼ぶがよい。だが、口のついた、そして、蓋のある帽子とは何たる事ぞ。帽子それ自身が元來人間の蓋なんだに……。』何だか分らなかつたが、私は妙に署長へ反感を抱いて斯う獨語したのでした。

本箱は私が立ち合ひの上で檢べられた。所が何うです？え？全く、戯談をずつと越えてゐる事が其處に起つて了つた。本箱は本を入れるものだに、その中から、二人分の茶碗と、もうカビの生えてゐる餅菓子とが出て來た。

『こりやあ何の譯だ？』と、私は自分の家庭の不可解に驚かされて了つた。

あとで、子供に聞き正した所、彼れは私を嫌つて、食器も別のを使ひ、又、私に隱れて、菓子を食べるのを一番の樂しみにしてゐたのだと分りました。私は背中の方から胸の方へ、寒さと寂しさが突き抜けるのを感じたものだつた。

『長い間、散り散りでゐると、親子の心でも斯んなになつて了ふのか？』實に、實に私は人が居ない所で、自分の指を嚙みました。

それより、例の署長は何うだつたでせう？本箱の中には、何も面白い種がなかつた。彼れはゴミ隱しをやつてゐる青鬼の子供のやうな顏をして、鼻の穴をふくらまして了つた。

『諦觀す！成る程、この箱の中に、何かしら愛がある[illegible]。彼れは[illegible]たらしい。[illegible]と云ふ核軸を豫定せねば承知しないのが彼れなのだ！けれど實[illegible]子以外の[illegible]はしない。い[illegible]にはしい父親と、馴れない子供の間に出來た溝と似たものに過ぎなかつたのです。

考へるのが私は苦しい。この古くさい頑丈な胸が痛むでさへ來る。

息子を充分に教育し、彼れの性格の再建を試みねばならぬと心懸けて、餘り一流とは云へぬが、兎も角、あの私立大學へでも通學させる丈の運びにしてやつたのは一體何處の誰れなのか？それとても、私の養子として入學させるには赤い字のある汚れた戸籍謄本を大勢の人の眼へさらさねばならぬので、まあ、その點も色々と無理なつくろひをして、何うやら都合をつけてやつたのは誰れなのか？ それを皆さんは好く知つてゐて下さるのだ。

それだのに正二は逃げ出して、警察の御厄介。英一も何處かの留置場。之で私の心がさぞせい／＼した事だらう。ムム。さぞ、さぞ滿足な事だらう。私はもう涙も出ない。たゞ、ちつと、いきなり寒さを耐へ、眼をさける程見張つて、顏の筋が泣きさうに歪むのを制してゐる。何と云ふ業とらしさ。然も、之が自然の成り行きなのか？

その時だ！私は又、妙に、こじれて、考へ出したのは……。

『この心持ちは何んだ。之を淋しさといふのか？ それなら、淋しさ』。は何だ？ハハア、私は何か間違ひをやつてゐるんだな。何うも本統の事が一つも出來てゐないやうぢやないか？』

自分が惡い。子供が惡い。然し、叱らねばよかつた。那樣なぞせねばよかつた。

私はせめてもの罪ほろぼしに、其處で一つの善い行ひを少しばかりした。つまり、あの心臓病の甚兵衛、青ぶくれの

した倉内喜吉の女房が産をしたばかりだのに、七つになる上の子が池へ落ちて死んだので、之を始末する者が誰れもない。その親父は息が切れて、立ち居にも差し支へる。これで私が葬式一切の世話を焼き、半分丈費用をすけてもやつたのだ。思ひ出して見ると、哀れな事だ。真白い屍骸、遠く抜けて行つた幼い生命。何うして斯う云ふ事が起り得るのだ？私はあの冷い肌をさすつてやつた。私の唇は恐れと悲しさで顫へた。小さい手の指が藻掻いた形になつた儘、堅く縮むでゐるので、念佛を称へ乍ら、静かに平らにしてやつた。おゝ、小指を薬指にからませてゐた。苦しかつたらう、苦しかつたらう。

私はもう労れ切つて家へ帰つた。急いで話さう。其處へ、一人の何だか譯の分らない、口のとがつた、ズックのやうな顔色の若い女が訪ねて来て、しきりと私にお辭儀をした。

『何の用だ？　早く云ひなさい。』と、私は背中や肩の痛みを耐へつゝ尋ねた。女は啞だつた。彼の女はヅル相な眼附きをし、臆病な手附きで一枚の紙切れを差し出した。それには斯う書いてゐつた。

『――私は二年前から發作的に盗癖を生じ、夢中で人のものを掠め取るのです。あとで考へると、恐ろしくて仕方がない。然も、自分で矯正する事が何うしても出来ない。聞けば貴方は私のやうな者を正しい道へ返して下さる力を持つてお出での由、何うか私をこの苦しみから免れさせて下さい。――』

私はこの時、あまり労れ過ぎてゐて、何だか適當な分別を失つてゐた。このために、思はず斯う叫むで了つた。

「こんな偉大な力のある奴が人間の内に居るとでも云ふのかい。」

私の顔附が恐ろしかつたと見えて、啞娘は鵠のやうな叫びを上げて外へ逃げ出した。私は初めて驚き、彼の女をなだめる爲め、直ぐ跡を追はうとした。然し、私の下駄の鼻緒が切れてゐたか、何うだかして、私は駈け出せなかつた。へ

や、[illegible]にたければ、[illegible]でも[illegible]のに……。[illegible]、[illegible]へ[illegible]に[illegible]やつて[illegible]、[illegible]く[illegible]な片手落ちをしてゐるのだ。私は後悔した。そして、[illegible]の[illegible]を[illegible]つて、悲しくな[illegible]い[illegible]させ[illegible]た

凡て[illegible]が間違つてゐる。[illegible]が一切である。

もの忘れをしたやうな氣分が暫く續いてゐた。だが、その結果は隨分と惡いものでした。何故つて、暫く自分に都合の惡い事を、私はふと思ひ出して了つたのです。

夜、寢やうとすると、まるで他人のやうな聲が、自分の口から出て來るんですね、

『教誨師から借りたロムブロゾーの本を見たかい？』とか

『さまあ見ろ！』とか、

『斯んなに一生懸命に努力してゐても、やはり惡い方へ進むでゐるのかい？』とか、

『Ｌ博士と遺傳！生理的に來る惡[illegible]』とかまあ、そんな聲なんです。

皆さんにも既に分つたでせうが、早く云ふと、私は『惡い者は、その祖先から、子孫迄惡い』と云ふ考へに苦しめられてゐたのです。之は苦しい、殘酷な考へだ。自分の心より血の方がずつと有力の惡の本質ないのか？それでは、もう何うにもならないではないか！

あまりに酬いられる事の少い私のその頃の生活……良子等は私を笑つて、捨てゝかかつてゐる。待つておくれ、私はお前たちに絹の衣服を買つてやるぞ、たゞ待つて見ておいすりやよい。私が斯んなに追ひかけてゐる者が、お前等にはちつとも分らないのかい？私は魂の拔けからだ。お前等こそ私の魂なんだ。待つて見れよ、待つて見れよ、[illegible]は[illegible]た

んだよ、お前等は子なのだね？』斯んなにして私があせつても、つかむものは「無」丈だつたのでせうか！

『お父さん、私たちは之からお父さんの眞似をして、何かやり出しますよ。』答へは斯うなのです。誰れが苦しまず、悲しまずにゐられるでせうか？私はもう何も知りはしない。唯、我慢が出來なかつたのです。

『血が悪いのだ。それで斯うなるのだ』と私はまるで辯解のやうに云ひました。そして困つた事に、この考へが大層ハツキリして來て了つて、胸や頭一杯に、何時も輝を渡つてゐたのです。

『之ではならぬ！』と、私は或る朝、早く起きて、霧を喉一杯に吸ひながら、悲しみました。何か本を讀むで見やう。だが、えらい病ではないか？肌が寒く、私の顔には血の氣がなかつた。眼が貧血して、冷たいガラス玉を入れ眼してゐるやうな氣持ちだつた。

私は古い本を取り出した。ガラスのやうな眼から水が出て來た。つまり、寒さが泌み入るんでした。本には斯う書いてあつた。

――世界は唯心だ――佛語は心をもつて本となすのだ――邪正の因果――妄を返して眞に歸する事――五法自性八識無我――法身常住――生死涅槃の平等――圓通無礙――

讀むだ。だが、滿腹の時に、料理の本を讀むやうな、一種、面倒な氣分が起つてゐた。

私は無足類のやうに陰鬱になつた。皮面へサラ／＼と細い鱗でも出來たやうに、味氣なかつた。

『一體、私とは何う云ふ人間なんだ？』

私は時々驚いて斯う叫むで見た。だが一寸も驚かないと同じだつた。驚き――それは一種生き生きとした喜ばしいものに相違ない。だのに、今の私にはそんなものに感じられなかつた。

私は自分の出獄を［illegible］し、何か［illegible］なつてゐるのか分からない［illegible］
風に、落ちかなく［illegible］の上から、［illegible］してゐるやうな気持ちになつてゐるかわからない［illegible］
料理の本を読むでゐるやうな気持ちに……。玉子、乳、バタ、砂糖、何でもありやしない。

私の心は始終子を産む両棲類なんぢやないかしら。初めは水の中にゐる。肺と云ふもの無い、それが段々出来て来る。エラが段々縮むで、鰓孔がふさがつて了ふ。やつとの事で陸へ上る。だがもう心の子が出来る。心の子を見る。又エラが出来てゐる。私の心はエラと肺とを持つてゐる。水と陸を行つたり来たりする。いや、それは両棲類に［illegible］介はない。實は、もつと、緊密な事實が私の眼前に展開されてゐたのです。

聞いて呉れますか、それが何だと!?

よろしい。斯うなのでした。

私の古い汚い兄分、あの秋田要之助の事なんです。彼れは恐ろしく寒い朝、K警察署へ留置されて了つた。私は門に命を聞いて、何かしら重要な事をやつてゐるのを知つてゐて、彼れは警察の留置場から、或る人を頼むで、私へ呼び出しを掛けて来た。私は大變厭な心持ちになつた。けれども、耐忍するのは此場だと思つた。仕方なしに留置場へ行つて見た。私は彼れに會つた。すると彼れは泣いた、南京金魚のやうに眼をふくらして……。

私は署長へ嘆願してやつた――

「お願ひです、署長さん。彼れは唯だ一時間丈けしか賭博の賭場に坐つてゐなかつたのです。それに、彼れは日露戦争の殊勲者で、金鵄勲章を天皇陛下から頂いてゐる男なのですから……。」

「何？ 勲章だつて？」と、鶏のやうに咲の所へトサカの様なものをぶら下げてゐる署長は［illegible］

ボだらけな手で撫でて吹きました。そのエボには仰式なお灸がすゑてあつたつけ。

何うも此の勳章が効を奏したらしい。秋田は無罪と云ふ結果になつて了つた。

彼れは向上舍へ少しの間奉公すると云つて、私の家に居坐つたが、その内、斯う私に打ち明けた。

『私は郷里に五才の女の子が置いて來てあるんですよ。未だハシカもしない、むき玉子のやうな子なんです。』

『それを引き取りたいとでも云ふのかい？』

『まあそんな風なんです。で、私は身を切るやうな思ひをして、私の恩人松村さんに今度やつと百二十五圓借りる事が出來たから、愈よ、――あゝ嬉しい――今朝出發しやうと思ふのです。』

『それはよろしい。旅行費が十五圓、土産物が十圓、子供の養育料百圓と云ふ割り當てだから？』

それは好い。で、雄人魚のやうな彼れはB港から汽船へ乘るため、汽車でE驛迄行つたのです。所が何う云ふ廻り合せか、Oの十字街で、體をすれ合したのが、山田吉藏だつたのです。學問もなにもない、ほんのナラズ者の山田は、幸之助が何う云ふ考へを持つて、其處を歩いてゐるのかを察し得なかつた。それに幸之助は何時も雲の上でも行くやうに反りぜんと、爪先立つて、遠くの方を見て歩く癖があつたんですからね。

『此處の所をズーツと曲つて、一緒に行かうよ、好い所があるんだよ。極樂のやうな、嬉しい所さ。眼がパツチリと冴えて了ふやうな、酒がなくとも醉へるやうな所なんだ。』と吉藏は幸之助を誘つた。

二人は暗い帳場へ坐つた。電氣のある時代にカンテラがともつてゐた。彼等は初めた。敗けた。それで、幸之助は裏客に襦袢一枚になつて了つた。彼れは胸がつまつた。胸の中に大きな舌が出來て　肋骨のすきを背めるやうだつた。百二十五圓！　もう無になつて了つた。幸之助は額中ハレ上つたやうに熱く、笑ふと涙がしみ出して來た、寒いのに湯へ這

入つてゐるやうだつた。囚人仲村！ 身を切るやうな金、それを幸之助は俺へ納めてくれてゐたのだつた！ 田舎へ持つてゐるだらう。もう先へ手紙がとゞいてゐる。だのに、自分は白いジュバン一つで、痩せた雪だるまのやうになつて居る。土産の人形？ 未だ買つてない。之から買はうと思ふ。未だ之からでも間に合はう。二十九錢。安いものだ。安いが然し金がない。歳きはまつて彼れは一先づ私の家へ歸つて來やうとしたらしい。それでく日暮の構内へ這入つた。待合室。何でも其處に大勢の人がゐた。毛皮の外套を着た一人の人が他の人へ一寸鞄を見張つてゐて下さいと頼んで、切符を買ひに行つた。殘つた人が、何か云ひ忘れたと見えて、もしもしと云ひながら、之も前の人のあとを追つて駈け出して行つた。はてな、腹のくちい人のやうな鞄丈がちつとソーファの上にため息をしてゐる。それは落ちついた隱居さんのやうに何も云はない。幸之助はちよつとその把手に手をかけて見た。持ち上がる。その儘だ力を入れて引つぱつて見たのだから。それから鞄を下げたまゝ急に彼れは歩き出した。グルッとテーブルを廻つて、ストーブの前へと出た。其處に立つてゐた襟巻をしてゐるミミヅクのやうな爺さんがいきなり幸之助を捕へて了つた。

又、檢察だ、彼は留置場からはるばる私へ呼び出しをかけて來た。私は又金錢勘定の事を云ひに出て行つた。何と云ふ兩棲類だらう。何處でも水をくゞるのだ。

だが餘り長くなる――幸之助の話しはもうやめとしませう。

それより、皆さん、自身で考へてやつて下さい。私のシン底の心持ちを……。

私は幸之助の雪だるまのやうに單純な顔を見ると、もう胸がつまつて了つた。

「さうだ、この愚劣さは正直正銘の彼れの所有物なんだ。決して借りものぢやない。彼れは自我と云ふものへ蓋をしてゐない。表面へすつと奥のものをさらけ出して、雪だるまのやうになつてゐる。臆藏も何もありやしないんだ。」

私はそれが何だか羨しいやうな氣持ちになつて來ました。之は危險な心の狀態である。一歩しか餘裕がない。私は自分をふり返つて見た。ことによつたら、私は生きた自我と云ふものを餘り强ひて沒却してゐたんぢやないかな？　この『心の味氣なさ全體』はその爲めに湧いて來たカビなんぢやなからうか？　え？　誰れかうまく說明して呉れないか、この六ケ敷い點を？　私は私の血を密閉したり、封印したりして好い氣になつてゐるんぢやあるまいかしら？

本統に生きるとは何んな味の事なんだ？　モルヒネ中毒者のやうに唯恍惚してゐるのが一番好いとでも云ふのだらうか？　何かもう少し苦しみの强いのがあつたら、まだ私は幸福だらうに？　私は淋しい。子等は何處だ？　さよならとは何う云ふ意味の言辭なんだ？

それに、まあ、何たる事だ。私の心の眞中へは、何時しか非常に惡い直覺 ― 直覺だか概念だか私自身にも分らぬ――一種の諦認が出來上つてゐたのです。

それは何か？　斯うです、斯うなんです――『私の周圍に色々な顏を見せてゐる人間たちは、その命の根本でもつて、何だか、私と氣脈を通じてゐるらしい。だから彼等が不意と行ふ行爲が皆私自身の運命を暗示し、教唆し、又、時には私自身全體を象徵するんだ。』

たとへばですね。私が非常に立腹し、もう憤懣のやり場に困じはてゝ、他所の家の軒燈へ石でも投げてやらうかと、ふと思つたりして、こらへてゐる。さうすると、何うでせう。例の手妻師になつた男が酒を飲み過ぎて、何の惡戲だか知らないが、名士の家の電燈を五つ六つも破壞して了つたんだ。

そして彼れは東京の須田町を鐵砲の先へ帽子を冠して歩いて見た爲め、警官――おゝ、始終、警官だ――に捕へられ

こ了つたんでした。

さあ、其處で、私は皆さんに話すのだが、一體斯んな私の樣な妄想は眞實なのでせうか？ いや、かうである。みな、愚にもつかないコシツケなんだ。けれど、自分の運命か何うも他人の運命と似過ぎてゐるために、苦しんで仕方のない人は、決して私だけぢやないでせう。きつと、皆さんにだつて、同じやうな覺えがあるに相違ないのです。

其處で、もう一つ實例を附け加へるのだが、之はもう實に私の臓腑を血だらけにえぐり散らした事でした。

私の向上命に一寸した關係のある淺川と云ふ六十男の身の上に斯う云ふ不決な物語りが持ち上つたんです。

いや、この淺川老人と云へば、彼れの頭に就いて、一寸妙な思ひ出を私は持つてゐる。次手だから云ふが、彼れは私に、斯う話したつけ——

「私の髪の毛が黑かつた時分にや、そこへ一本でも白髪が生えると、私は氣にして、このムホン者をこくめいに引き抜いたもんだがね。その内、何うだらう。私の年は何より好い證據を髪の毛で表した。もうすつかり白髪になつちまへば、何も白髪を抜く必要はない。いや 驚く事に、今度は、ひよつと間違へて、その中へ一本でも黑い毛が生えると、さあ、それが氣になつて、私は引き抜かずにゐられないんですよ。」

うまい。實に妙だ。昔尊重されたものが、今度は蔑視される。そして、昔さげすまれたものが今度は尊重せられる。可笑しい。そして道理にかなつてゐる。

だが、本統の話と云ふのは頭の毛の事ぢやない。もつと、悲しい事實なんだ。それを之から初めませう。

この淺川は三十歳の頃、親讓りの數十萬と云ふ財産を費ひつくした揚句、妻子を置き去りにして、家を逃げ出した男なんですが、それから流浪の旅をつゞけ、色々の惡い事をし、又、その償ひに少しばかり好い事もして來たんです。私

に會ふときは、惡魔に好くある長い齒を突き出して――

『或る年波は恐ろしいものだ。この頃は我が子が戀しい、戀しくてならない。妻の事は一寸も考へないが……。』

なんて、すつかりふさぎ勝ちになつて語り聞かせるのでした。

所が、何う云ふ手づるに依つてか知らぬがその息子の居所が不意と分明したんですね。青ノレンをピラ〱さした水菓子屋の店を開いて、相當に暮してゐるのを聞くと、淺田老人はもう夢中になつて了つた。彼れは胸にかけてゐる聖母マリヤの像を取り出して、嬉し涙に暮れながら、それを額に押しつけたりする騷ぎだつた。

彼れは斯う獨りごとを云ひました――

『息子よ、可愛い子よ、私は歸つて來たよ、お前の所へな。いや、歸つて來たとは云はせぬかい？　ぢや、やつて來たのだ。私は老いさらぼへて、頭も眞白になり、額には重い皺が出來た。目はかすみ、齒も拔けて了つた。歩くと息ぎれがするし、此の頃では食もめつきり減つた。夜は何となく世の中が悲しくて寢られないし、その上、咳に苦しめられ通しだ。なあ、息子、父は勞れた、それで今は夜も日も温い巣をもとめてやまないのだ。豬のやうな氣の荒い鳥にさへ巣はあるのだ。だのに、この涙もろくなつた老人にそれが許されない譯はありやしないな。さあ、私の巣は何處なんだ。息子、私は歸つて來たよ。』

仲々、うまく云ふぢやありませんか！　で、彼れは青いノレンがかかつた水菓子屋の店頭へ出掛けて云つた。コロガキ、リンゴ、ザボン。結婚の申し込みでもする若者のやうに、彼れは何度も顏を赤くして、立ちどまつたり行つたり、來たりして、心を怖えさした。ミカン、ネーブルがある。見れば自分が昔殘して行つた、その息子がもう一人前の若者になつて、萬年筆を耳の間へ挾むだりなんかしてゐる。耳の形！　不思議だ。人間と云ふものは何う云ふ風にして育つ

んだらう？　赤ん坊の顔には、もう何処から、未來に出來る大きな特徴が、誰にでも見られるではないか？　そこで自分の子供が生きてゐるか？　自分の命の片割れが自分の知らぬ間に、もう大きくなつてゐる。そして、彼れが何かの拍子で笑つても、遠くで知らずにゐる私には別段それが響いては來ない。又、私が獨りで他人の家に居て苦しんでゐても、あの息子の胸へは何もそれが感じて行きはしない。では、息子と自分との命がつながつてゐると云ふのは嘘なのか？　あれ？　あつこせ〱と働く所が妻の若かつた頃の姿にそつくりだ。何か腹を立つてゐるのかしらな？　汚い爺いが店を覗くので、これが厭に思つてるのかしらな？　うん、私の事をちつとも氣附かないのだ。赤の他人の又他人だと、斯う上つらに思ひ取つてるんだ。だから、厭らしく感じるのは當然すぎる。所が、何うだ、私が一言、唯だ一言『これ、息子よ、お前の父は私だよ、長い間會はずにゐたな。私だよ、その私なんだよ、好し、好し、さぞお前は私にあひたくて、毎日あくがれてゐたらうね？』とでも云つてやつたら何うだらう？　さあ、急に狀態は嚴肅になる。息子の疑ひの目がしばらく眩しさうに瞬く、これから？　それからが重要なのだ。彼れはわつと泣きついて來る。『お父さん。』うむ、さう來るのだ。いや、よし、よし、私には皆分つてゐる。さぞ苦しかつたらう。さうだらうとも。會つてやるぞ、會つてやるぞ、許してやるぞ、許してやるぞ。

斯んな風に淺田は獨りで錯倒的に考へたんですな。で、彼れは到々、息子に切り出したんですよ。夢中になつて、然も内氣に、恥かしさうに、そして、幾らか親らしく見せないといけないと思つて、一種の威厳なんかも附け加へたらしいんですね。

すると、息子はすつかり不快な顔をして

『私の父はもう死んで此の世には居りませんよ。何を間違へてゐるんだ！』と來た。然も息子は頑ぐなであつて、間違ひ所

ではない。すつかり眞實の所を承知して、もう胸がつまつてゐるんだ。

『えゝ!』と、淺田は盲犬のやうによろけて了つた。『お前は、この衰れた、もう直き死んで行く父を、喜んで迎へて呉れるんだね? さうだらうとも……。』

『子供を捨てる親には用なんか無いんだ。さうだとも……。』

で、淺田は首が縮むで堅くなつて了つた。之は又、何と云ふ刎ねられ方だ! さあ、行くには行かれず、歸るには歸られない。身動きも出來やしない。一體、この原因は何だつたのだらう? それさへ、淺田老人には分らないんだ。

この事件の解決のためには、結局、この私自身が出掛けて行きました。そして息子をいくら柔しく說きつけて見ても、彼れはグツねたロバのやうに一層頑固になつて、

『母親なら引き取るが……』と答へる丈なんです。淺田もつくぐ〳〵諦めて、もう、初めの勇氣はすつかりなくなつて了つた。唯だアウアウと云ひながら、ソツ齒で冬の風を嚙むでゐた。

この時、急に店の電燈がついた。リンゴやネーブルは湯から上つたやうに快活に輝き渡つた。昔はマンコと呼ぶ、黑アバタのあるリンゴが流行したが、今はさつぱりそれが見えない。まあ、それに、此の息子は仲々のシマリ屋と見えて、果實の籠へ紙を貼つて炭取りにしてゐる。それは好いとして、私は考へた末に斯う云つた――

『では、このお父さんをお母さんだと思つてさ、さう云ふ心持ちになつて、引き取つて下さいな』

『心持ち? こんな重大な事に心持ちなんかを混ぜて何うするんです? 心持ち、心持ち、それが一生重荷になつて、私に附いて廻るぢやあないか?』

不孝な云ひ分けだ。淺田老人は傍らから私の袖を引いた。彼れの眼は眼ヤニだらけになつてゐた。私も途方に暮れ

て、カラ風の中に立ちよどむで了つた。

『昔、我が子を捨てゝ家出した私が今さら面倒を見て呉れなどと云ひ出したのが誤りのもとなんだ。死んだに定まつて淋しい思ひをするのも、元は皆自分から出た事なんだ。』

如何にも平凡な結論です。然し、平凡だと云つて何うして、之が捨てゝ置けませう。彼れも其の息子も私も三人とも涙で一杯になつて了つてゐるのに、然も周りの空氣が氷のやうにぎごちなくなつてゐる。其處です。其處です。私はどうしてもハッキリ云はねばならぬ。この面白くもない場面は一體誰れが描いて見せてゐるのだ？　淺田老人の運命が私の運命と少しも似てゐない理由が何處にあらう？

私はもう腹が立つて了つた。運命の神が鋏をもつてゐるなら、何故私と他人をつなぐ紐を切つて呉れないのだ？　この紐！　尻尾のやうなものは一體何だ？　と斯う私は叫んで苦しがり出した。えい、自分で自分の面の皮をはいて、椅子へでも張りたい位ぢやないか！

さうだ。もう簡單に話さう。

私の精神が斯んなに膿を持つて了つてゐる所へ、さうとも知らぬ例の手妻師になつた男は片方の手で白箱を下げ、片手で一人の五歳位な小供を引張つて、私のもとへ訪れて來た。

彼れは先づ自分で色々とトランプの技術をやつて私の鬱靜を慰めて呉れた。彼れがひよつと横を向くと、眼と鼻とがまるでトランプのジャックそつくりだつたのも可笑しかつた。だが、私の顔は笑ふための微細な運動をも起さなかつた。

さて、彼れは次に鳥籠から一羽の鴉を引き出した。こいつは實に妙だつた。手妻師が王と云ふと、トラムプの王を嘴でくわへ上げ、四と云ふと、その通りの札を足の爪で引ぬいた。私は度々、へ、、と陰欝に笑つて了つた。

お次は何だ？　小さい子供はトンボ返りでもして見せるのかい？　いや、ちがふ。大變ちがふ。私はワハ、、と大笑ひに笑つて了つた。一體何が起つたのか？

皆さん。この子供は實に妙だ。何故つて、歌を歌ふんです。それは好い、何でもない、たゞ不思議なのはバスの聲が出るんだ。

スパニツシ……セレナード――……

なんて、實に重い暗い聲を出して歌ふんです。まあ、斯んな事が實際にあつても好いものなんだらうか？　え？　地ならしの大きい鐵のルラが鳴るやうな聲なんだ！

さて、この妙な一團が私を慰めて呉れて歸つて行くと、私の心は餘計いけなくなり初めた。何故、滑稽さへが私にとつては一種の精神的苦惱と變ずるか？　さあ、それは知らない。然し、然し、何うも自然の法則に從つてゐない突飛なものは皆私に惡い影響を與へると云ふ事を私は朧ろげながら悟つてゐるんです。

勘定する鴉、バスの子供、あゝ、皆、危險なものだ。私の心の臓はもうふつきらうとし初めた！　鴉！　赤い王を黑い嘴でくわへて投げ出して、何だか當てものをやつてゐる！

私の精神は分裂し初めた。蜘蛛の巣のやうに、系統を保つてゐた構成が、風で吹き破られた。もう、恐ろしい破壞に近づいてゐる。それが私に實感された――皆さんは熱い湯を飲むと、胃の中が重く温かくなるのを知覺するでせう――丁度そのやうに、私は私の胸の中に何だか惡いものを温かく、又、冷たく實感したやうなのでした。

悪心の前置きと云ふものがある。それは夢や、空想い形でもつて、先づ現れて來る。何うです？　私は一切付えた夢見たと思ひます。あゝ、私はもう斯んな風だ、駄目だ。こんな夢を見た上何はきつと現實界の中にも間落が起つて來のだ。夢は私に取つて的確の豫言のやうに見える。もうこの豫言は消す事が出來ない。夢！　そんな夢のやうなものが、私の運命を鐵のやうに固い軌範で規定するのか？　いや、コジツケだ。これより、私が何んな夢と空想との中に、私自身の肉を焼きつけてゐるか？　私は偽らずに皆云つて了はう。

×　　×　　×　　×

私の心は依然として正二にこだわつてゐたらしい。何うして、斯う執念深いのか？　やはり、あの悪い女、春子が影にゐて、色々と操りをしてゐるからだ。

私の夢の中へ正二は急に表れた。彼れは口の中へ小さい管を仕込んでゐると見え、笑ふたびに、高い音を立てた。

『之は支那語でネヅミと云ひます。』と彼れは云つた。

『蛇ぢやありませんか！』誰かが云つた。

『日本語ではヘビです。之を鼻から入れて、口から出します。』正二はその通りの曲藝をして見せた。

「私はフジミになつてるんです。だから苦しくない。この通り……。』と云ふと、少年は針を頬へさし、これを口中から引張り出した。針には糸がついてゐた。その糸へ水の這入つてゐるバケツをつけて、頬の筋肉の力でこれを引き上げた。

それから、眼がしらに垂れた紐へもバケツを附け、やはり上へと吊るさげた。

其處へ春子（正二の戀人、後に詳し。）が飛んで來て

『飛んでもない！』と叱つた。

『姉さんは命の樹の實のやうだね。』と、少年は世辭を云つた。

『何處から落ちた！』雲の中で大水のやうな響がした。雪のやうなもの、火のやうなものが其處等をひらめいた。

『皆さんは「蜜の女」を知つてますか？』と少年が尋ねた。

『それは日本の話し？』

『え〻、直ぐその樹の茂みの裏に、一軒の家があつて、蜜の女は其處に淋しく住むで居りますよ。』

『何う云ふ女？』

『體から甘い蜜が出るので、それを人々に嘗めさせて、お金を儲けてるんです。』

『嘘！』

『本統！　私もさつきなめて來ました。片腕が二十五錢です。』

『君は性的の事を云つてるんですね？』

『いゝえ、唯、甘い丈の事です。貪慾の他には何も考へる暇はないんです。』

『何かしら暗い影がある。』

『兩腕ならば四十五錢に割引です。然し、一度にさうはなめ切れません。』

『私を此の惡い境地から救つて下さい。』と私は叫むだ。

『私もすつかり胃を惡くして了つたんです。蜜ですからね。然し、又治つたら、出掛けて行くつもりです。蜜の女が貴方にもよろしくと云ひましたよ。』

『嘘！』

剣が飛むだ。白い石に突きさゝり、そこに文字が表れた。「忠告」と、それに記された。

鉄の柱が又明星を毀した。

「それより、樹の茂みを別けて、中の方をのぞいて見やう。」

二人はのぞいた。草原の舞台には、樹の枝が伸びて天井になつてゐた。

私が闘争師の服装をして立つてゐた。私は人々へ向つて説明する如く云つた。

「私は駈けますよ。」

私は駈けて、向うに立つてゐる春子の方へ突き進み、そして接吻した。又立ち戻つて来て、又駈け、又接吻した。春子を抱いて接吻したり、抱かずに接吻したりした。その有様を少年は樹の葉と葉の間から一生懸命に眺めてゐた。

×　　×　　×　　×

だが以上の事件は皆夢に過ぎない。では、現實の方は一體何んな變化を初めてゐたか？

私はさつき、何だか私の泥のやうな心が悪い事を犯しさうだと云つたやうでしたね。けれど、もつと直接に告白するなら、私はもうその悪い事をし初めた。

もつとも大して悪い事ではない。だが多少とも罪でないとは云へない。又、この罪に引きづられて、他のもつと大きい恐ろしいものが表はれて来るかも知れない。

私は皆さんにもう何も云はない——その私が犯した新らしい罪については……。

私は犯して了つた。犯して了つた。もう、何も言へない。それ丈だ。併しこの秘密は何れ皆さんに見破られるにきま

つてゐる。

向上會は何だか見すぼらしくなつて了つた。それに、夕べの大雨が洩り込むで、枝の間は流れのやうだし、煙草の吸ひがらが、濡れて其處へ投げ出されてゐると云ふ仕事だつた。人は一人も居やしない。丁度手すきになつてゐて、番人の松岡迄が外へ仕事に出てゐた。郵便屋が何だか帯封した郵便物を持つて來たが、こんな家の様子を見ると、その儘、何も置かないで、急いで立ち去つて行つたやうだつた。私はそれを一町も離れた所から、ぢつと眺めてゐた。雨の中で、傘をさしながら。あゝ風が行つたり來たりする。灯火が向うの方へついたりしてゐる。

何が私の斯んな失墜の原因であつたかを確かには斷言出來る譯がない——思ひもよらぬ事だ——。何んな些末の事にも、七つ八つの重要な原因の秘むでゐるのが普通なんですから……。

けれども、私自身、私の心の中を見詰めるのに、何うも、一ついけない事がある。

「自分は駄目だ。いくら精進しても、血それ自身からして汚れてゐるのだから。見よ、私が斯んなに大人しくしてゐるのに、私の息子が、丁度私の若い時代に私がした通りの悪い事をやつて見せてゐる。彼れ等は私の影、私の魂の斷片なのだもの。」

之が大變悪い諦めとなつたのを、皆さんは直ぐ氣づくでせう。

「何うせもう仕様がない。成れ、成れ、或るやうになれ。私が善くしてゐても、彼れ等があんな風な事をしてゐる。そんなら私も同じやうにやらうではないか?」何と云ふ淺間しい獨言でせう。之は人事でない。皆私の事なんぢやないか!

私は口惜しくなりました

斯んな詩を皆さん御存知ですか？

歌ひ足りずば、いなされる
歌ひ過ぎても、きらはれる
丁度よく歌つても、讃められぬ。

それで私は、あんな悪い思ひを起し初めて了つたらしいのでした

時が立つた今、考へ直すと悲しくも残念でならない。一寸とした心のゆるみが、理由もないやうな口實を造り出して、自分を辯解して、悪事を助長するのだ。

私は再び明らかに後悔してゐます。何うかもう一度眞面目に自分を見直したいと思ひます。然し、今お話した所は、私の心の向上的努力のみではない——實は、つまらぬ口實でもつて、たやすく悪に染み込む、この情けない心のことなんです。ハイドが居ない時ジーキルがゐる。ハイドが出て來ると、ジーキルが消えて了ふ此の仕方のない心を私は何う見ませう。

私は皆さんに聞きたい。何か好い方法で私の心へ一つの利き目のある力を與へる事は出來ないのでせうか？　カセ？　さうではない。もつと自由なクツロギを持つた救ひが此の心の上に降つて來ないでせうか？

恐らく、私の斯んな懺悔の一部分の又一部分を聴いた丈でも、皆様のうちの最も親切な人は悲しみ、驚き、そして、天の一角を仰ぎながら、何か正しい者の高い御手をさぐりながら、次のやうに嘆いて下さるに相違ない——

『水で手が洗へる時に、何者によつても、心が洗へないと云ふ事があるんだらうか？

私等が一番先に考へねばならぬのは、この品座のやうな人の——善い方へ努力してゐながら、時々、極く不確かな理由から、たやすく墮落するやうなユルミを持つてゐる處には、大層悪い悪癖が、オモリのやうに掛つてゐると云ふ點である。

その苦しみを少しでも輕くしてやるやうな手段が我れ我れには何うしても出來ないものだらうか？

又若し、彼の心が永久に善い方へと轉化し得ぬとしたら、せめて彼れの息子——若い内は心も柔かく、何方へでも變化させる可能があるから——丈でも、少しづつ仕合せな境地へ連れて行つてやられないかしら？

又假りに、彼れ等迄が、惡い環境の中で、思はしくない生育をしたため、何うしやうもなく心がねじけて了つてゐるのであつたら、せめて、之れから、彼れ等が生む所の、彼れ等の幼い子孫を丈でも、喜ばしい心持ちに仕立てゝやることは出來ぬのかしら？

そんな思ひにかられ、私等は今後品座の息子等に、絶えざる注意を向け、彼れ等の心の動き方などを成る可く如實に見て行きたい。

親しみが増すと、彼れ等は色々の內輪話しを私等に聞かせるだらう。それによつて、彼等の心の持ち方を推しはかり、何とか善い方へ向つての靜かな、向上的な歩みを續けさせてやりたいものだ。』とね。

お願ひです。何うか、哀れな彼れ等に關與してやつて下さい。それにしても、私の子供等は一體何處をさまよふて、この夜更を過してゐるのでせうか？ 私は不意に彼れ等を心配する。いや、心配なのは彼等の身の上ばかりではない。この私を自分で見よ、此處に焦慮せねばならぬ大きな難關が横はる。

子供を引き上げてやらうとして、自分が引き下げられた爲め、自身に一定の深い根柢が欠けてゐるため、他への親切な

闘興も却つて身の仇となるやうな此の性格。おゝ、関心よりも先に自省が何んなに必要だかと云ふ事を意味してゐるこの心。愚かな者よ。うなだれた首を、もう一度高く保て。小さい蟲、コウロギさへ、その長いヒゲの一本を頭の後方に廻し、他の一本を前方に伸ばして、過去の經驗と未來の暗示をば、自己の現在に參照し、時間の裡に、倘ほ其の生存を全うするではないか？

　行く先を見詰めよ、過ぎ去つた道を顧みよ。刹那の喜怒哀樂に盲い墮ちた自分のやうなものに取つては、殊にこの注意が重要なのだつた。

　向上心も、繼續し通さねばいけない。既に教誨師さんは旅から歸つて來てゐる。新しい免囚が三人も、世話になりたいと云ふ話しを看守さんが持ち合せて來てゐる。以前保護してやつた松岡やエスキモーのやうな大河原が又歸つて來て、自分で火を起したり、飯を炊いたりしてゐる。さうだ。フレームを大きくこしらへて、色々な花たちに新しい裝ひをしてやらねばならない。爲す可き事が非常に多いのを私は思ひ出す。

　室内の揭示板へは教誨師の手で新らしい文字が書き記された――

計算にうとい性質を改めなさい。

無秩序を恐れる事。

ナマケを去る事。

無分別に泣いたり笑つたりせぬ事。

皆、之等の卑近な事項は彼れ等免囚ばかりにではなく、當の私にも必要なものだつたのを深く知らねばいけない。

一匹の蚊の足を指先で捕へる。蚊は苦しさで悶える。然し、一つの諦めが附くと、いきなり身體を強く振り動かし、指に挾まれた一本の足を犠牲として後に殘して迄も、その身體丈を足から切りはなして、輕く、より善き方へと飛び上つて行くではありませんか。

許して下さい、この私を……。私は再び決心しました。今度こそ、自分で自分を完全に所理し、自分の惡い足を切り捨てても、遠い彼方へのあくがれを保ち通さう。私には今こそそれが分る。さあ、之で凡て起つた事は語られました。私は私の告白を閉づるに當つて、私の取り得もない魂の上にさへ、高きものゝ手が關與してゐる事を、強く明らかに感ずるので、尚ほ更ら、新らしい惱いに身を燒かゝるので御座います。

（編者附記）本篇は『出獄者及び其一族の告白』と題する三部作の第一部にして、第二部『出獄者の妾濱介りん子の告白』及び『第三部出獄者の子正二の告白』は目下執筆中に付、近き將來に本誌に寄せらるゝ約あり。

人癲癇

宇野浩二

K――町は長い間私の氣に入りの町だつたのだ、私ばかりでない、私の學生時代の友達はみんなさういつてゐた。その癖、私たちの學校――學校ぢやあない、學校には到頭入りそこねて、そこで私はぶら〳〵と三年ばかり暮してしまつたところの、T――といふ研究所のことだ、そのT――研究所とK――町とでは、下谷と赤坂であるから隨分離れてゐる、それに、K――町そのものには別に立派な建物があるとか、有名な人が住んでゐるとかいふのでもなく、交通からいつても、電車通から可成り見捨てられた不便なところにあるのだが、それにも拘らず、いつ、どういふ時に、どういふ散步で通るのだらう、それに又、一度や二度ぐらゐ偶然に通りかかつたゞけで、どうして特にその町だけが人の記憶に止まるのだらう、ふと二三人集まつてゐる時などに、何かの話のついでに誰かの口からその町の名前が出ると、「おゝ、K――町か、あの邊はいゝ所だな、」と屹度應じるものがある。「うむ、僕もあの町は好きだな、僕も東京に住むのなら、あゝいふ所に住みたいな、」と他の者が

賛成する―「あそこは實に靜かないゝ町だな、」と合槌を打つ者がある―「僕等のやうなものには、幾ら面白いたつて、さうさか下町のごた〳〵した所には住めないし、なる程、僕もK―町のやうなところに住みたいなあ」さういふ譯でもが、別に親戚とか友人とかゞ住んでゐるといふのでもなささうだし、といつて始終そこを通りかゝるのでもなささうだし、多くは通りがゝりに一二度見たといふ程の印象に過ぎないらしいのである。そして、私自身もその一人だつたのだ。いつ、どんな時だつたかも、私は覺えてゐない。一度切りか、或は二度位かも、そして確に一人ではなかつたが、それがどんな連れだつたかも。あるひは公園へ展覽會でも見に行つた時だらうと思ふが、そこからK―町の方へ出るには、電車通へ行くのとは全く反對の方角なんだから……否、當時、私はそれがどんな方角にあるかさへも知らなかつた。何でも青葉の頃であつた。眞白な、廣い道が三方に通じてゐたやうな所であつたと思ふ。片方は公園の一部でゝもあつたか、青々した芝原で、落葉樹が疎林をなして植はつてゐた。木と木の間に、忘れられたやうに、青ペンキの共同便所があるのも、却つて油畫のやうな趣きを添へてゐた。そして、その反對の側が町なのである。どうしてそれがK――町であることを私は知つたのだらう、多分そこらの町角の塀にでも例の仁丹紫屋の町名標でも出てゐたのであらうか、兎に角、一見してその町の家々が私の氣に入つたのであつた。私のみならず多くの人々も同じ思ひをしたのであらう。それはさして人目を驚かすやうな大きいのや、立派なのやでなく、といつて私たち學生が住んでゐる町に見るやうなマッチ箱のやうなのでもなく、無論長家建でもなく、何といつたらいゝだらう、そこらの家々はそれ〴〵違つた形や、違つた大きさでありながら、さあ、何といつたらいゝか、人に擬していふと、これ等は悉く教養ある、中年の紳士のやうな落着と體裁を具へてゐる點に於いて共通して見えた。或家の塀から突き出てゐる庭木は同時に町を飾つてゐた。又或道端にある並木はその傍の家々を裝つてゐた。それは所謂屋敷町に違ひなかつた。が、屋敷町の持つてゐる冷淡さや、固苦

しさの感じからも免れてゐた。大通をそれて、横道にはひると、そこには又違つた趣きの人家々がならんでゐた。或所では片側が一面にどこかの大きな家の塀になつてゐるのもよく、又他の所では稍々小さな家々が、それぞれ違つた形をして、それで互に調和を破らずに、それで互に獨立して、小ぢんまりと建ち並んでゐるのもよい。思はぬところに古風な町の型を破つて、店に白髪の、目金を掛けた老人が一心に竹を編んでゐる籠屋があつたり、或は又町角のところにぽつりと一軒のしるこ屋があつたりするのも……この町ではポストも電柱もみな一つの裝飾とさへ見えるのだ。――こんな風にいふと、諸君は眉に唾をして、そんな詩人の夢でゝもあるやうな、調子のいゝ町つてあるものぢやない、多分作者が筆に委せて、いゝ氣になつて喋つてゐるのだらうと思ふかも知れないが、實際、これは今から十何年前に私が見た眞實の記憶であるばかりでなく、先にいつたやうな私たちの寄集まりの場合に、誰がいひ出すともなくこの町の話が出ると、私ばかりでなくみんながその印象をこんな風に、或はこんな風以上に話したり、賛成したりしたものである。而もそれはその中の誰もが連れ立つて見に行つた譯ではなく、みな別々に、思ひ思ひにそこを通りかゝつた時の印象としてなのである。「あの邊には腕白子供などといふものさへゐないのだらうか、あの町の片附きやうは、」などとさへいふものもあつた。まだピアノなどが珍しく聞える頃だつたが、その町では、それがあちこちの家から洩れて來たやうにも思はれる。町を歩いてゐる犬さへ、ことごとく筋目の通つた、何の何種といはれる良犬のやうに見做された。

だが、考へて見ると、矢張りそれは誰でもが一度は抱く少年の夢の目が見る印象かも知れない。何故といつて、今こそ、私は機會があつて、思ひ出すまゝにこんなことを語つたものゝ、私にしたつて實はその後十年以上の間、そんな町のことを一度も思ひ出したことさへなかつたのである。もしかすると一度や二度は、機會があつたかも知れないが、それさへ耳に止めずに聞き流して來た位だつたらう。現に或年妻をもらつて、新しい家を探す時にだつても、その町のこ

となど私は思ひ浮かばなかつた。それでゐて、偶然のことで、その町から十町と離れてゐないところに借家したのであるが、間もなくその家を越すことにして、近所に別の家を求めた時にも、私はつひその町を探すことを忘れてゐた位だつた。そして今度三度目に又引越す氣になつた時、さうだ、K――町の邊はいゝ所だつた、あの邊に適當な家がないか知らと思つて、偶然に探し當てたのである。だが、私は愈々このK――町に引越した當坐も、あの二十歳の時代に自分たちがそんなに賞めた所に、自分が到頭住むことになつたとさへ氣がつかずにゐた位だつた、そして、或日ふとそのことを思ひ出して「さうさう、昔、みんなでそんな風に感心したことがあつたつけ、」と心の中でいつて見たが「あつたつけ」さう思つた切りであつた。けれども、さうはいふものゝ、私が二十歳の頃その町に見たところのものは、全く片跡もないことではなかつた、それどころか、今通りかゝりに見ると、昔の通り落葉樹のまばらに植はつてゐる芝原もあるし、青ペンキ塗の共同便所(これはつひ二三年前に取拂はれたが)もあるし、思はぬところに竹籠屋もあるし、町の様子はその頃と大體變つてゐないやうに見えた、若し變つてゐると見るならば、それは見る者の目と心とのためであらう。

だが、私はこゝで何を語らうとしたのであらう。K――町、さう、K――町のことには違ひないが、かういふことではなかつたのだつた。先にもいつたやうに、或年の春、私は家庭生活を始めてから第何度目かの引越しで、偶然このK――町に住むやうになつたのであるが、それは私たちの夫婦切りの小家族が越して來たところであるから、同じ町でも先にいつたやうな大通の方ではなく、K――町の中でも、謂はゞ路次になつてゐるところの、狹い横町のとある一軒へであつた。だが、私たちの二十歳の目がそんなに間違つてゐなかつたことには、そんな狹い横町の、僅四間か五間かの小さな借家ではあつたが、見たところの體裁は、私の家も、同じ程の大きさの隣の家も、その又隣の家も、それぞれ違つた門を持ち、違つた形の構へを持つて、或家は塀の代りに低い鐵の柵があつて、そこに小竹が植えてあつたり、その

隣では小さな[illegible]を持つてゐたり、ふと思ふと同じやうな小ぢんまりした家で、右側のそれは[illegible]門を持つてゐるやうな體裁であるのに、左側のそれは格子造の意氣な無門の家であつたりするといつた風だ、はたには[illegible]違つたものであつた。だから、それ等の家々は一軒づつ別々に造られてゐるやうに見えるが、よく見るとその大部分はそれぞれくつ附き合つてゐた、前の方で三尺位離れてゐても、奥の方でくつ附いてゐたり、反對には前の方でくつ附いてゐたから奥の方では家の形が全然違ふので、あちこちが、門に離れたり、くつ附いたりしてゐるのだ、恐らく同じ家主の手で一度に建てられたものであらうが、それはどんなにその設計に頭を惱ましたことだらうと思はれる。が、この事を先に話してしまつたことは、この物語をする私の失敗であつたに違ひない、といふのは、無論今いつたやうな町の體裁であつたから、私はその家に入る時、私の家とは全然表構へその他の違つてゐる隣家との關係など、少しも考へてゐなかつた、小ぢんまりした、私たちのやうな小家族には持つて來いの、それでゐて決して體裁の惡くない、一軒建の家だとばかり私は喜んでゐた、そして、一軒建の家に見る、孤立した感じはなくて、上品で、それで近所が接近してゐることなども、私たちのやうな小家族の家には心細くなくていゝなどと思つてゐたのである。私の家には門がなかつた、多分間口は二間だつたと思ふが、右側の一間には出窓になつた格子戸がついてゐて、その下のちよつとした空地には三本ばかりの檜の木が植はつてゐた、そして左側の一間が出入口になつてゐて、素硝子の嵌まつた、細目の格子の戸がついてゐた、といつた風な、どちらかといふと意氣な造りであつた。玄關の間が二疊で、その右手の間が穴の入口のやうな感じになつてゐて、そこから螺旋階段に依つて二階に通じてゐた。この階段を上り切ると、家を前と後とに分ける一間幅の廊下が通じてゐたが、この階段を上つたすぐ右手に廊下への明りを取るための、一尺と二尺位の窓がついてゐた。（讀者諸君に、この窓のことを覺えておいていたゞきたい。）その廊下で表側の六疊の間と、裏側の三疊の間とが仕切られて

ゐるのであるが、引越した日の夕方、私はその二階の三疊の間の方の、左手につけられてある押入を片附けてゐた。さつとその中を一人で掃除して、物を入れるために、板の間にぢかにしないで新聞紙を敷かうと思つて、四つ這ひになつてその中に頭を突込んだ時、私はその押入の暗がりの中に向側から、節穴だか鼠穴だかを通して、一と所薄あかりがぼッと射してゐるのに、奇異な思ひに打たれた。「おや！」と私は心の中で叫んだ。が、すぐに、「なんだ、この向うは隣の家なんだな、」と心で了解した。その光を通して來る穴を持つてゐるところの、押入の突當りは壁になつてゐるのだ。して見ると、表からの見かけの案外にも、こゝでは壁一枚で隣同志になつてゐるのに違ひなかつた。これは少し大袈裟にいふと、穴を堀つてゐるうちに、案外なものを堀り當てたやうな驚きを私に感じさせた。私は何となくはツとしたやうな氣持で、新聞を敷かうとする計畫を止めて、四ツ這ひのまゝで耳を澄ました。私は五分近くもさうしてゐた。何故そんなに長く耳を澄ましてゐたかといふと、その家があまり靜かで、せめて二階に人がゐなくても、階下の間にでも、或は台所の方でゝも、何か人の氣配がしさうなものだと思へるのに、それが幾ら待つても、此方が意地になる程待つても、人の聲はおろか少しの物音もしなくて、やがてどちらかの天井裏の方で鼠の騒ぐ音がし出したので、私が到頭根を切らした程である。私の家ではその時丁度私一人切りだつた。細君は一時間ほど前女中を連れてどこか下町の方へ買物に行くといつて出かけたのだつた。私は急に自分のしてゐたことが馬鹿々々しくなつたので、獨りで笑ひながら、押入の中への片附物や、本箱や机の始末などを始めた。さあ、そしてどの位たつたらう、かれこれ一時間近くたつたかも知れない、或は三十分もたゝなかつたかな……？　ふと私は彈かれたやうに聞耳を立てねばならないことが起つた。いや、それは聞耳を立てるといふ程の仕草を要しなかつた。

「みいや。あら、又そんな亂暴なことをして、いけませんよ。」と猫を愛撫してゐるらしい女の聲が、全く古い形容だが

細い甘いやうな聲で、そしてどんなに美しい、優しい人だらうと思はれるやうな、甘さと、なつかしさとを含んだものである。それが間違ひなく、先まであんなに静かだつた隣の室から聞えて來るのである。この瞬間、何だか、隣の室は空家のやうにがらんとしてゐて、何にもなくて、唯その聲の主の美しい女と小猫とだけが住んでゐるやうな氣がした。

「まあ、大きな欠伸をして、お行儀が悪いのね、」と聲ははつきりとつゞいてゐる。私はいつの間にか自分のしてゐる用事の手を止めて、ぽかんとその方に聞き入つてゐたに違ひない。それは私が例の廊下にゐた時だつた。先にもいつたやうに、妙な構造の家であつたから、六疊の方の部屋だと、隣の家とは、そこに面した方は矢張り壁ではあつたが、間に隙があつて、決してその一枚の壁で隣り合つてはゐなかつた。が、幸ひ隣の女の聲は片方の、境が僅一重切りになつてゐる三疊の間の方にしたので、私はソツとその聲の方へ、なるべく近く忍び足で進んで行つた。未だ片附けかけにしてあつたので、例の押入の戸が開いたまゝだつたのが一層好都合だつた。が、そこで更に私に氣がついたことは、今いつたやうなさういふ便利な條件があつたばかりでなく、その猫に物言つてゐる女の聲は、猫にいふよりも、壁越しに私がゐるのを知つて、わざとその聲を私に聞かせてゐるのではないかと思はれるやうに聞えて來ることだつた。誇張していふと、女は猫を抱いたまゝ、猫に向つてゞはなく、まるで蓄音機にでも吹き込むやうに、私たちに共通の世に向つて一發聲してゐるのではないかと思はれる程であつた。

「あら、又そんなおいたをして、」と女の聲はつゞいた。「いけないみいやね。みいや、お前お隣様へ行つたりして、そんなおいたをしちやあいけませんよ、ね。」

「はゝあ、こいつはてつきりお妾さんだな。」ふいと私はかう氣がつくと、「なアんだ、」といふやうな、何故か拍子拔けがしたやうな氣がした。いつ誰から聞いたとなしに、K――町といふのは、一種のお妾町なんだよ、お妾とか、圍人とか、

或は株屋の別宅とか、さういふ種類の人間がおもに住んでゐる所だよ、と聞かされたことを思ひ出したのである。そんな突然のことではあり、相手の顔を見た譯ではなし、別にその女に大した興味をかけたといふ程のことではなし、又興味を持つたとすれば、お妾であらうが、お孃さんであらうがかまはない譯なのに、何故か「お妾さんだな」と思ふと共に、私は急に立上つて、片附け物のつゞきに取り掛つた。もつとも、その時私の家の階下の出入口の格子戸でも開く音がして、使に出てゐた細君が歸つて來た氣配で立ち上つたのだつたかも知れない。今はよく覺えてゐない。

兎に角、さういふ事があつたので、まあ謂はゞ「隣は何をする人ぞ?」といふ興味が忽ち失はれたとでもいはうか。つまりお妾さんの家か、なアんだといふことになつてしまつたのだから。

ところが、二三日後のことだつた。私たちは書生流儀の若夫婦のことだから、引越蕎麥なども蕎麥屋から切手で配達させておいた切りで、別に近所隣へ挨拶にも廻らなかつた。すると、午後、外の風呂から歸つて來た細君が、家に駈け込むやうに入つて來て私の顔を見るなり、「まあ、あなた、わたし困つてしまつたわ。あなた、見たことがあつて? この隣の、さあ、奥さんらしいわ、奇麗な人よ、叮寧な人でね、わたしが今そこへ歸つて來ると、『お隣の奥樣、お隣の奥樣』と呼ぶ人があるの。初はわたしのことを呼ぶんぢやあないと思つたもんだから、どん／＼行き過ぎようとすると、がらりとお隣の家の、あそこは門があつて、それに小さい格子戸が附いてるでせう、あれが開いたもんだから、思はず振り向くと、中から隣の奥さんが出て來て、わたしに挨拶をしかけたの、どうぞよろしくつて、向うからよ、あべこべね、わたし眞赤になつたわ。」

「それがどうしたんだい?」と私がわざと平氣を裝つてから聞くと、

「どうもしませんけどさ、わたし此方から挨拶に行かなければならないところを、そんな風に向うから聲をかけられたん

ですもの、非常に感じが悪かつたわ。でも、表を通つてゐるものをわざ／＼呼びかけて、而も初めていふのにね、厭だわ。」

もつとも、その時の話はそれ切りだつた。だが、時々その隣の奥さんといふ人の噂は、隣片前にだが、私たち夫婦の間に、それから時々出るやうになつた。しかし、私はまだその本人といふのを一度も見たことがなかつた。細君も別嬪だといつてゐるし、いつかの猫を相手の聞えよがしの聲から判斷しても、尋常の美人らしく推察されたので、私はどうかして一度見たいものだとは思つた。が、さう思つて、それとなく、いつかの時のやうに隣の氣配に聞耳を立てゝ見ることもあつたが、それはいつでも徒勞に終つた。隣の家は例に依つて、空家とは思はれない迄も、何か非常に靜寂な氣分で一ぱいになつてゐるやうな氣がした。唯一度だけ、八百屋の御用聞か何かに、例の優しい、そして聞えよがしの聲で話をしてゐる彼女の聲をちらと聞いたことがある切りだつた。「そんなに聲を聞かしたいのなら、いつそのこと唄でもうたへばいゝのに、」と私は心の中で思つた。「何か非常に嚴しい主人でもゐるのかな?」

そして又四五日たつた或日のことであつたが、私は私に宛てられた一通の奇妙な郵便を受取つた。差出人は「K——町人」とだけで、名前を明かしてなかつた。それが思ひ切つて拙い手蹟で、而も全文が殆ど假名文字から成立つてゐるところなどから察しると、その書き手は、その拙い手蹟はわざと左手か何かで書くことに依つて、又その假名ばかりを使用したのはわざとさうすることに依つて、彼自身を晦ますためではないかと思はれるやうにも思はれた。いふには、「昨日ぶら／＼あなたのお宅の前の邊を通りかゝつて、あなたの表札を認めた、あなたのお名前は前からかねがね伺つてゐた、」といふ風な言葉から始まつてゐた。「あなたのお名前はかね／＼伺つてゐた」といふ言葉は、どうも後になつて考へて見ると、私の弱點を突いたものに違ひない。何故といふのに、私は前にもいつたやうにうか／＼と研究所で時を

過ごしてしまつて、到頭學校へ入り損ねた位のものであるのだが、凡そ藝術に野心を持つものとして、私も亦身の不勉強は棚に上げて、機會のある毎に有名にならうと心がけて來た、だが、さういふ心がけが先に立つて、肝腎の腕の方は一向進んだとは自分でも思へなかつたが、何か彼かで、なるべく多くの人たちと交際したり、色んな會に顏を出したり、名ある人に近づきを求めたりすることに依つて、自分は少しづゝ有名になつてゐるやうな氣がしつゝあつた折柄だつた、しかし實は自分が思つてゐる十分の一もそんなにはなつてゐなかつたのである。それにも拘らずこの「あなたのお名前はかねぐ伺つてゐた」といふ文句に私は先づ誘惑を感じたのは事實だつた。この手紙の書き手はたゞ者ではなかつたに違ひない。「ところで、甚だ突然なことを聞くやうだが、」とその手紙はつゞいてゐた。斷つておくがこの手紙は洋風の書簡箋で、さつと二十枚はたつぷり費されてゐた、その上に鉛筆の拙い手蹟で、而も先にいつたやうに假名ばかりで認められてあつたものだから、私がそれを細君と火鉢の前に並んで、額を合はして讀むのに、その間細君は瓦斯にかけてある湯が沸き出したからちよつと待つてとか、臺所に御用聞が來たやうだからちよつととか、「あなた、一人で讀んぢやあいやよ、ね、待つてゝね、わたしが來るまで、」といふやうなことで手間取つたやうな譯もあつたが、大方二時間近くかゝつたものである。讀者諸君もその覺悟をしていたゞきたい。ところで「甚だ突然なことを聞くやうだが、あなたの家の左隣の奧さんを御存知ですか、」と手紙は早速不思議なことを語り始めた。「最早や交際をして居られますか、まだですか、まだなら是非心がけて交際して御覽なさい、是非々々。念のために彼女の履歴を紹介しますと、元彼女は或有名な船大工の娘と生れたものでありますが、濱町の或資産家に養女として貰はれて、そこから小學校に通ひ、女學校に通つて人と成つたのであります。女學校は人も知るハイカラ學校——佛英和女學校ですから、自然彼女は外國語、殊に佛英語が巧みであります、無論、琴三味線、茶湯、活花、和歌、俳諧等の所謂女藝には一式通じて居ります。現に次

のやうな有名な挿話があります。といふのは、彼女がまだ娘時分の頃、或日など文金高島田に結つて、その頃流行の鹿の子の帯を胸高に締めて、どこかへ用達しに行つた歸りの電車の中の出來事なのであります。その電車の中に一人日本語の少しも通じない外國人（佛蘭西人だつたさうです、が乗つてゐて、何か頻りに隣席の客や、車掌や、向側の席の學生やに物を言ひかけるのだが、誰にもそれが通じないんです。車の中には立派な髭を生やした紳士や、角帽を被つた學生やも大勢乗つてゐたらしいのですが、誰もその困つてゐるらしい外國人の言葉を聞いてやらうとするものがないのです。その時、見兼ねて突然文金高島田の彼女が、それはそれは實に流暢な言葉で通辯してやつたので、車中の人々が一時は呆氣にとられ、果は感心してしまつたといふことです。殊にその車の中に新渡戸博士が乗つて居られて、その光景を親しく見て居られたさうですが、さすがの博士も舌を卷いて驚いたと後で人にいつて居られたといふ話であります。尚その時の話に、矢張り同乗客の一人で、或（今は相當に名を知られてゐる畫家でありますが、）美術學生があつて、その時の彼女の美しい、立派な態度にすつかり魅せられた餘り、それから彼女が家へ歸る後をつけて行つて、彼女に求婚したといふやうな事件まであつたさうです。もつともそれは拒絶されたさうですが、さういふ譯ですから、その美術學生ばかりでなく、その頃の彼女への求婚の申込といふものは、それは大變なものでありましたが、その中には無論數多くの立派な求婚者もあつたでせうが、彼女にどういふ考があつたのか、ことごとく斷つたさうであります。——

「この理想の高い彼女が——」と先にもいつたやうに、かういふ文句が悉く假名で綴られてゐることを、讀者よ、思出してほしい。「面白いわね、面白いわね、」と、判じながら聲を立てゝ讀んでゐる私の頭を、自分の頭で押すやうにしていれながら細君は興がつた。「この理想の高い女がどうして今の夫と結婚するやうになつたかといふと、そこにも興味あるロマンスがあるのです。彼女の夫——高木文四郎君は、高木俊夢といふ名で呼ぶとその道の學者たちには知られた名であ

りますが　彼は大學を出て間もなくの或時にふとした機會で彼女を見た以來、七年間の間、まるで小野道風の蛙の譬話のやうに、失敗しても失敗しても、凝りずに求婚しつゞけたのであります。その熱心と根氣とに彼女はほだされたものでありませう。唯その熱心と根氣とだけにです。彼女は數多の幸福な條件を約束する求婚者を捨てゝ、彼、高木と結婚したのであります。これで見ても、彼女がどういふ女であるかといふことが略々想像されるに難くはありません。無論、高木のやうな唯一介の學者との結婚生活が幸福なものであらう筈がありません。悧好な彼女のことですから、元よりそれを覺悟で結婚したのです。だから、彼女は決して不平をいひません。その上に彼女はその美貌にも拘らず貞節この上ない婦人です。その上最も感ずべきことは、彼女は決してその才能を現さうとしないことと、その美貌を誇らうとしないことです。誠に『能ある鷹は爪を隱す』といふのでせうか。けれども、けれども、中々うつかり出來ぬ代物だ。」

私たちはこゝで思はず吹き出しながら「何だらう、突然、うつかり出來ぬ代物だなんて？」「變だわね。」と目を見合はしていつた。

終りに、「自分がかういふ手紙を書いた理由は、つまり自分は閑人だからで、自分は常々かういふ風な町内の出來事とか、町内の人の履歴とかを、閑に飽かして調べてゐるものである。そしてそれを時に依つては雜誌に發表したり、本に著したりするのであるが、この手紙は徹頭徹尾この町内への新參者であるあなたに對する、自分の深切からしたことである。自分はさういふ風な境遇のものであるから、既にあなたのことも大抵は調べがついてゐるといふことを報告しておく、——と、これはちそ。K—町人。」そして長い手紙は終つてゐた。

この手紙の内容も私たちの好奇心を誘はないではなかつたが、何よりもそれが何人の手で、何の目的で書かれたかといふことが、私たちに飽く迄探求したい不審の念を抱かせた。考へて見ても、この手紙を元にして、私から何かをゆす

らうとでもする、不良な年の頃の仕業とは思はれない。では、誰か本當に閑ないたづら者があつて、私に隣の女に戀心を持たせようとでもいふたくらみを持つてか？　それにしてもこんな閑人が……？　と考へるうちに、さうだ、この手紙の書き手は當の、その隣の女ではないかといふ疑問が起つて來た。すると、私の細君は又異説を出して、それは隣の細君でなしに、その夫の悪戯ではないだらうかといひ出した。ことに依ると、そんな手紙で私の彼女に對する好奇心をそゝつておいて、美人局でもしようともいふ計畫か知れない、などと私の細君はいつて、「あなた、本當に用心なさらないといけないわ」と眞顔になつて忠告したりした。終には、彼女は私が持前の好奇心を起したらしい様子を見てとつて、嫉妬を起したりした。が、考へて見ると、元が子供だましのやうな手紙のことなのであるから、私たちはいつか話をかへて、そのうちにそんな手紙のことなどは忘れてしまつた。時々私が思ひ出して、例の二階の三疊の間で隣の方に耳を澄まして見るやうなこともないではなかつたが、その度毎にこの不思議な隣家は氣味悪いほど鳴りをひそめてゐるのだつた。

すると、あの手紙の日から三日程後の或朝、私の家の入口が開いて、「御免遊ばせ」といふそれだけの言葉で（それは間違ひなく、いつか猫をあやしてゐた隣の女の聲に違ひなかつた）ばかに艶つぽく長く引つ張る言ひ方でいつて、玄關に入つて來た女があつた。その時、私は久しぶりで寫生にでも行かうかと思つて、二階の自分の部屋でその用意をしてゐたので、この聲を聞くと、例に依つて、はツと自分で自分の呼吸を止めながら、下に向つて聞き耳を立てた。これ迄隣にばかり聞いてゐた聲を、自分の家の玄關に聞いたのだから、私はいつもよりも一層緊張した。玄關のすぐ隣の台所にゐたものと見えて、早速細君が應接に出たやうだつた。

「まあ、奥様、御免遊ばせ」といふのは客の聲で、「あの八百屋がお宅様のおあつらへ物を私の宅へ置いて參りましたの

で、ホヽヽヽ、失禮ですけど、おとゞけしに參りましたの。御免遊ばせ、露出して……」

「それはどうも有難うございます、」と口數の少ない私の細君がいつて、その八百屋のあつらへ物とかを受取つてゐる樣子だ。

後で考へて見るのに、この事などもをかしく考へられないではない。何故かと云つて、八百屋が新規の得意の注文を、わざ／＼隣の家まで來てゐながら、そこへ托して、私の家へとゞけて來ない法はないからである。私の家はそんなに早起きではないが、女中はそんなに寝坊でもないから、戸が締まつてゐた譯はない、これは多分彼女が八百屋の小僧から彼女が持つてゐるものゝ中に私の家の注文したもののあつたのを見付けて、わざと自分でそれを預かつて、私の家にやつて來る便宜をこしらへたものと思はれるのであつた。その證據に、彼女は玄關に現れて、これを私の細君にとゞけても直には歸りさうにしないで、暫くもぢ／＼してゐた末、愛想なく玄關の間に膝をついて同じやうにもぢ／＼してゐる私の細君に、「あのね、奧樣、變なことをうかゞひますけど、」と到頭彼女の本當の用事らしいものを述べ始めた。「あの、もしか此頃お宅へどこからか、變な手紙が參りませんでせうか？」と聞いた。私の細君は困つて、左樣と答へていいものか、それともいゝえと隱しておいた方がいゝものかと迷つたと見えて、「えゝ、あの、手紙でございますか？」とおどおどした調子で口ごもつてゐると、「參りましたでせう、奧樣、參つて居りますでせう、」と隣の女は駄目を押すやうにいつて、それから半分獨言のやうに、「まあ、本當にいやになつてしまひますわ。それやもう、どなたかお越しになりましても、屹度そんな手紙が參るんでございますのよ、これで四度目でございますわ、どなたか新規にお越しになりますと、屹度そんな手紙が參るんださうでございます、本當にわたし困つてしまひますんです。でね、奧樣、誠に申し兼ねますけれど、その手紙をわたしにいたゞかしていたゞけませんでせうか、如何でございませう、本當にわたし困つて

しまひますもんですから」と彼女は永く水の流れるやうに喋りつゞけた。これに近い期間ばかりに[illegible]つたとしても、決してこれに口を挾むことが出來なかつた程に隙がない。彼女は更につゞけて、「わたし、ね、奥様、一人に嫌はれてゐる人がございましてね、多分その人なんだらうと思ふんでございますが、その人にいつでもこんな手紙を、新しく越して入らしつた御隣の方に幾度出されるんでございますの。本當にわたしそれにいつもまた迷惑致いたすんでございますよ。奥様、こんな譯でございますから、どうぞそのお手紙をわたしにお返し下さいませんでせうか？

……」

さういふ話聲を聞きながら、私は二階の部屋でしばらくの間立つたり坐つたりしてゐたが、到頭思ひ切つて階段を下りて行つた。階段を下りたところは玄關の三疊の間で、そこには隔ての唐紙も何もなかつたから、玄關に立つてゐる女は、私の足音と共に、階段を下りて來る私の足から先に目についたのに違ひなかつた。さう思ふと、私は足がくすぐつたくなるのを感じたので、駈けるやうにして下りて行つた。すると、私が彼女と目を合はすか合はさないかの瞬間に、

「あら、入らしつた！」

かう叫んで、隣の女は顔中がくずれるやうな愛嬌笑ひをした。もうずつと以前からの馴染のやうに。私はどんなに面喰つたか！。用意する間のないうちに「御面！」と打ち込まれたやうな感じだつた。だが、私も直に氣を取り直した。

「や、奥さん、是非一度おごつていたゞかなければなりませんよ。」無論多少取亂してはゐたが、咄嗟の間にこれだけの出鱈目を考へて、――奥さんのことを大變褒めてた人がありますよ。」

「まあ、どうしませう。……」

「奥さんは大變ピアノがお上手なんださうですね、是非一度うかゞはしていたゞきたいもんですな。……」

「あら、どなたがそんなことをお仰しやいまして？」と相手も負けてはゐなかつた。「どなたでせう、そんなおしやべりをなさるのは？ 長山さん？ 三村さん？ 屹度三村さんでせう。……」

無論、さういふ名前は彼女の出鱈目であるらしかつた。そして、出鱈目を並べることに於いても、私は到底彼女の敵ではないといふ氣がして、もうそれだけの言葉のやり取りのうちに、私はすつかり呑まれてしまつた形だつた。だが、相手は反對に、益々勝誇つたやうに、それからそれと、まるで尻取り遊びのやうに言葉を切らずに喋りつゞけた。話がそんな風に飛んでしまつた爲からかも知れないが、彼女は私が現れると共に、いつの間にか問題の手紙のことなど忘れてしまつた風で、それとはまるで關係のない無駄話ばかりを、唯それが切れることを恐れるやうに、次から次と喋るのが、どうやら彼女がその時私の家へ訪ねて來たのは、私を見に來たのではないかといふやうな氣がされた程だつた。だが、彼女が歸つて行つた後では、私たち夫婦の間にはやつぱり不思議な手紙だけが問題になつた。そして、あんな初めのうちは返してくれ返してくれとせがんでおきながら、歸りには手紙に就いては一言も言はないで消えてしまつた隣の女の心持は、到底計り知られないといふ結論に達した。

「何にしても、兎に角あの手紙は屹度あの人が自分で書いたのに違ひないわ」と細君は最後に憎々しげにいつた。私もそれには同感だつた。

ところで、これは左隣の家のことであるが、右隣のそれは左隣の靜かなのに引かへて、實に騒々しい家であつた。それでゐて、左隣と私の家とでは同じ家主のものだつたから、先にもいつたやうに或部分など壁一重で隣り合つてゐる程接近してゐたが、右手の家とは家主が全然別であつたから、ふと通りがゝりに見たゞけでは分らないが、家と家との側

面は、或所ではやうじて端が、そして或所では人一人位が通れる位の間隔があつたのである。だが、これ等の建物を透覗して、朝となく晩となく、この家からは人の呼ぶ聲が聞えて來た。これは耳を澄ますまでもなく、たゞ料理で仕込襲らしいことがすぐに分つた。私の家の螺旋階段を上つた右手に、一尺と二尺位の窓があることを、特に讀者諸君の注意を呼んでおいたが、この窓が即ちその隣家に面してゐるのであつた。その窓と隣家との間には三尺ばかりの間隔があつて、少し斜めに向き合つてはゐるが、その家の方にも、それは私の家の方よりずつと大きな窓がついてゐた。いふ迄もなく、こんな三尺ばかりの家と家との横合ひについてゐる窓のことであるから、それ等は眺望を目的としたものではなく、唯少しでも多くの光線を取り入れたい爲の計畫に外ならなかつた。私は何氣なく、餘り隣の聲が盛んなので、この窓から覗いて見ると、私の窓は硝子で、向うのは障子であつたが、それが開け放されてあるので、一目で向うの部屋の半分方まで見渡すことが出來た。そして私はその部屋の中の異樣な光景に目を見張らなければならなかつた。

そこで私の目が見たところに依ると、右隣の家の主人は私と同じ職業の畫家であるらしかつた。が、部屋中の壁といふ壁に立てかけてある繪絹を張つた框といひ、部屋中の疊の目も見えないほどに散らかしてある描き潰しの畫といひ、その他散亂してゐる繪具皿や繪筆から察しると、彼は日本畫家であると見えた。折柄、主人はこの亂雜な散らかりの中で、襦袢一枚になつて、大胡座をかいて、描きかけの畫の前に坐つてゐた。彼はしかしこの畫の方には向はないで、斜め後の方に向つて叫んでゐた。その聲が兩方の窓も、窓と窓との間の空間をも、筒拔けにして響いて來るやうな大聲なのだ。

「女といふものは、ぢや、もう少し色々な點に氣をつけなければいけないぢやないか、」といつた風な口調で、「貴樣のやうなだらしのないものに、大切な子供を預けられるか？」

細君はしかし夫のさういふ破鐘のやうな叱り聲の調子には馴れてゐるらしく、部屋の隅にちよこなんと坐つて、編物か何かをしてゐる樣子だつた。彼女は泣いてゐるのか、編物の仕事のためか、それとも始終叱られ通しでゐるのでそんな癖になつたのか、夫の言葉には答へないで、顏を乳の邊にまで垂れて、泣いてゐるのかと思はれるやうに、絶えず微かに、首をしやくつてゐた。彼女のすぐ傍に、表を引いて歩く籐製の乳母俥が置いてあつて、その中に子供が寢かされてゐるらしく、彼女はそれをまるで搖籃をでも搖するやうに、時々編針を持つたまゝの右手で、俯向いたまゝ、それを前後に動かしてゐた。乳母俥と彼女の邊の疊の上も矢張り書稿らしい紙屑で埋まつてゐた。そんなにも座敷中が文字通らいぱい紙屑であるためには、自然にといふよりは、主人の樣子で察しると、彼が怒りに任せてそれ等を投げ散らすのでさうなるのだらうと思はれた。

怒鳴つてゐる主人の顏を見た時、私は彼の顏を最初に見た時から「おや?」と思つたのであるが、間もなく、ふと妙な事を思ひ出した。それはその時から半年程前のことであつた。或る夕、私は友人と二人で淺草へ行く目的で上野廣小路から市内電車に乘らうとしたところが、來る電車も來る電車もあの夕方時の混雜で、辛無しく待つてゐたのではとても乘れさうになかつたので、私たちは四五台もやり過した後で、思ひ切つて少し亂暴に人を押し分けて、運轉台の方から乘り込むことが出來た。が、私たちが最後であつた。私たちのすぐ後からつゞいて來た印絆纏を着た男は「もういけません、いけません、後のにして下さい、」と車掌に止められてゐた。その男は十分酩酊してゐるらしく、「何いつてやがるんでえ、」といふ卷舌の言葉で私たちもそれを知つたのであるが、彼はさういひながら、止める車掌の手を押しのけて無理耶理に押し上つて來ようとした。

「あなた、しかしこんな風に滿員でとても駄目ですから、」と車掌は叮嚀な言葉で、「もう一二台お待ち下すつたら空い

たのが來ますから、」といひながら、前部の運轉臺も殆ど足の踏み場もないほど込んでゐたので、車掌がその醉つ拂ひが飛び上つてくるのを制止しようとしただけの仕草で、自然に階段を踏み外れて、電車の外に轉がつてしまつた。「何をぐず／＼してゐるんだ。氣をきかして早く出せ！」と車の中の客たちのうちに怒鳴る聲が起つた。その時、發車しかゝつてゐる電車に向つて、轉がつてゐる醉つ拂ひの周圍にゐた群集の中から、一人の山高帽を被つた男が飛び出して來て、「待て！」と叫んだ。その服裝なり、髯面の容貌なりから見て、壯士の種類の人間かと思はれた。彼は「亂暴なことをするな！」と叫ぶ聲と共に、運轉臺の上に飛び上つて來て、いきなり車掌を毆りつけた。見兼ねて運轉手が彼等の間に入ると、壯士風の男は尚も、「天下の憐れな勞働者を貴樣等は何故虐待するのだ？」といふ聲の下に、運轉手の頬へたをもその逞しい手で見舞つた。そこで傍にゐた私の友人が、「いや、車掌が決して悪い譯ぢやあ……」と辯解しようとすると、「君までさういふ不法に肩を持つのか！」といふ言葉と共に、壯士の手は私の友人の頬へたをも見舞つた。そこで私もむつとして、「それや無茶だ、」とはうとすると、「なにッ！」といふ聲と共に、私もぐわんとやられた。その時やつと車の外に巡査が現れ、監督がつゞいて來て、取敢えずその男を宥め下したが、その間にも車の中にすし詰にされてゐる乘客たちが、「早く出せ、早く車を出せ！」と叫ぶので、電車はその亂暴者を巡査等に托して出發した。「その男は僕を毆りました！」と走り出した電車の中から、眼鏡を叩き破られて悔しがつた私の連れが、巡査の方に向つて訴へるやうに叫んだので、「僕も毆られました、」と私も叫んだ。先からの出來事を見てゐた電車の中の大勢の客の中にも、動いてゐる電車の中から「ごろつき！」とか、「亂暴者！」「懲罰を加へてくれ！」などと叫ぶものがあつた。すると、その男は「なに！」といひながら、一間ばかり私たちの電車を追驅けて來たが、巡査が後からそれを止めた。彼は興奮してゐたばかりでなく、酒でも飲んでゐるかと思はれるやうな赤面であつたが、荒武者にも拘らず、その頓狂な子供らしい目つき

といひ、一口にいふと無邪氣や童顔の持主であつた。亂暴者にはちがひないが、子供のやうな氣性の男なのだらう。だが、私たちは折角の淺草行の途で、思はない災難を受けたことを腹立てゝ、その時は決してその男のことをそんなによくは考へなかつたのである。

今、驚いたことには、私の家の右隣の主人が、その時の兇行者そつくりの顔をしてゐるのである。私はどうかした時に、彼の顔を正面から見た瞬間、見た顔だなあと疑ひさへしなかつた、いきなり「おや！」と思つた。「この男だつたのか？」――無論、今彼が細君に向つて叫んでゐる言葉の調子もその時とそつくりだつた。

「こら、お前は太夫の汗かきといふことを知つとるか？」と彼は叫んでゐた。

「……」その時初めて編物をしてゐた彼の細君は何か答へたやうだつた。「知りません。」といつたらしい。

「知らないか？　では教へてやるが、太夫――ぢや、藝人のことぢや。藝人といふものはた、高座に出て藝をしとる時は、はたから見てゐて樂々とやつとるやうに見える。だがた、そこぢや、汗かきといふのは、……それが樂屋に歸つて來たのを見ると、襦袢から褌まで、身體中湯に入つたやうに汗びつしよりになつてゐるといふことぢや。え、おい、分つたか。つまり俺もその太夫と同じことぢや、俺のこの汗を見い！」

隣の窓からの傍觀者である私は、こゝで思はず吹き出しさうになつたので、もつとも彼の窓の方が明るく、私の窓はずつと暗かつたので、そんなところから私が覗いてゐることは滅多に知られることはなかつたが、それでも私は口に手を當てながら、首を縮めた。その時、私はまだこゝへ引越して來なかつた前の廣小路での電車を思ひ出して、この人は決して惡い人ではないのだなと氣がついたのである。すると、その二三日後のことだつたが、引越しを手傳ひに來てくれてゐた私の甥が、彼も亦私の細君などと共に、屢々隣家の聲に驚かされて、この窓から覗くことに依つて、隣の主人

の顏を見知つてゐた。）外の錢湯から歸つて來ての話に、隣りの人は餘程子供好きと見える、といふのは、今も風呂桶へ彼が六歳位になる女の子を連れて來てゐたが、湯槽の中へ槽の蓋の一枚を浮かして、その上に子供を乘せて游ばせてゐるのに、彼はその子供の乘つてゐる板をぐる／＼廻しながら、「そオら、水出だ、」とか、「そオら雨が降つて來た、」などと叫んでは、彼自身も子供のやうに燥ぎながら湯の中を踏れ廻つてゐた。幸ひ、晝間のことだから外に客がゐなかつたが、一、六十歳餘りの老人が同じ風呂に入つてゐて、ひどく迷惑してゐた。といふのは子供を乘せて浮かしてゐる板は槽の蓋の一枚であるのだから、それを槽の中で廻すにしても、縱の時は兎も角、横の時は前後につかへて廻らなかつたし、縱の時にしても、それだけで大方風呂槽一ぱいになるのだつた。だから同じ槽に入浴してゐる老人は遠慮して、隅の方で小さくなつてゐるのだが、それでも時々雨のやうに湯の滴が彼の禿げた頭に降りかゝつて來るので、到頭堪らなくなつたと見えて、「あなた、少し氣をつけて下さい、」と注意した。子供はそんなことに遠慮はないので、「お父さん、もつとかけて頂戴、もつと、もつと！」などと喜んで叫んでゐたが、父親である私の隣人はこの老人の注告の言葉を聞くと、忽ちに嚴肅な顏をしてその方に向き直りながら、「あ、あなたは幾つになられるか知りませんが、子供といふものを持つたことがないのですか？」と叫んだ。老人はその權幕に驚かされたのか、わざと微笑して、「いゝえ、孫が四人もありますよ、」と答へると、「それなら何故そんなことをいはれるのですか。子供はこんな風に自由に、遠慮なく、活潑に育てなければいけません、」と殊に力を込めて、大眞面目に叫んだ。老人は仕様がないので苦笑して、「いや、御もつとも、御もつとも、」と手拭で顏を撫でながらいつた。「さうでせう、お分りになりましたか、いや、お分りになりましたらよろしい、」と彼はいつて、又子供の方に戻つて、「愉快々々、さあ始めよう、」と相變らず板の舟をじやぶ／＼揺する遊戲をつづけた——といふのである。

かういふ話を聞くにつけても、私はこの隣人に對して決して惡い感じを持ちはしなかつたが、しかし友達になりたいとは思はなかつた、無論、女と違つて、男同志のことであるから、隣同志に住んでも屹度言葉を交し合ふことになるとは限らないが、何だか職業が關聯してゐることや、如何にもざつくばらんらしい彼の態度などから考へて、いつか交際することになりはしないかと心配したのである、で、私はなるべく彼と顏を合はさないやうにしてゐた。私の細君の報告に、「隣の方は毎日大きな匣のやうなものを背中に擔いで、――いえ、とても手ぢやあ持てさうにないやうな大きなものですよ、繪具の箱のやうなものを片手に提げてお出かけになるやうですよ。何だか畫をかきにといふよりも、大變な勞働にでも行くやうな恰好だわ、」などといふのを聞いても、私は彼に會ふのに恐れを感じた。先にいつた私の甥が又報告を齎らしていふには、「あの人が毎日あの大きな畫を描きに行く先は××の墓地なんですよ。僕、昨日、友達と二人であの墓地を拔けて來ると、大勢の人が人だかりしてゐるので、――それが隨分大勢の人だかりで、それに何だか大きな聲がするものだから、香具師か、それとも喧嘩かと思つた位ですよ。傍へ行つて見ると、あの人なんですの。それに面白いんだ、あの人の畫は何が何だかちつとも分らないんですよ。お墓を描いてゐるんでせうけど、それが立つてゐるやうなのや、轉がつてゐるやうなのや、その中に又人間の身體が半分描いてあつたり、木の枝のやうなところに人間の手が描いてあつたり　それや奇態な畫なんです。あの人はその畫を筆で指さしながら、身體を見物の方に向けて、『さあ、どうだ、この畫を見てどういふ氣がするか、いつてくれないか。諸君は專門家ぢやないかも知れん。だが、專門家でないだけに、又それ〴〵特別な意見なり感じなりがあるだらう。さあ、誰かいつて見てくれ。どうだ、君、君はどう思ふ、遠慮しなくてもいゝ、どんな感じがする？』なんて片端から見物の顏を見て聞いてゐるんです。見物といつたつて、それや學生のやうな人も大勢ゐましたが、通りがゝりの小僧とかなんかでせう、誰も返事をする代りに、しばらくみんな辛

抱してゐましたが、そのうちにどこかの隅でぷツと笑つたものがあるんです。すると今迄堪えてゐたらしい見物人は一度にどつと笑つてしまひました。さうしたら、あの人も可笑しくなつたと見えて、一緒に笑つてゐましたよ。可笑しい人ですね。――」

そんなことがあつて、何でも私が引越してから一週間もたつてからのことだつた。或日、私が二階の二疊の方の部屋で、（その部屋の方が狭かつたのだが、南向きで明るかつたので、）讀書か何かしてゐると、――若しかすると、讀書にはそつちのけにして、例の右隣の家の方に耳を澄ましてゐたのだつたかも知れない、突然右手の方からめきめきと屋根の瓦を踏んで來る足音がした。晝間のことであるから、まさか泥棒だらうとは考へられなかつたが、餘り突然のことなので、私は少なからず驚かされながら「屋根屋かな？」と思ひ直してゐると、「大和田さんゐますか、大和田さん！」と私の名を呼ぶ聞き馴れた叫び聲と共に、隣の家の主人が到頭私の目の前に現れたのである。見ると、それは多分夏近くのことだつたかと思ふが、彼は縮みの股引を穿いた切りの裸の姿で、左手に何か畫稿らしいものを一山抱えて、「御免なさい、失敬しますよ。」といひながら、見る間に私の部屋の前に來て、ひよいと欄干を跨えて縁側に立つた。「や、どうぞ。」と私も仕方なく答へた。「裸で失敬します。私は、――御存知でせう、この隣の高田高節といふものです。私も畫家なんです。ところで、大和田さん、私は今こゝに自作の畫を持つて來たんですが、見てくれませんか？」と彼はいつた。「えゝ、拜見しませう」と私がいふと、元より狭苦しい部屋の中のことであるし、殊にそこは私の細君の部屋になつてゐたので、丁度畫をかけるに適當な壁の面には、彼女の衣紋竿に通した着物が一面にかゝつてゐた。畫家はそれを容赦なく敷居のところから外して部屋の隅に投げ出してから、自分の持つて來た絹や紙に描いた畫稿を、用意して來たものと見えて、例の縮みの股引のポケツトからピンを出して、ぺたぺたと貼りつけた。その時私に[illegible]彼の畫を

見た譯だつた。」

彼の畫は今風にいふと、未來派張りとか表現派張りとかいふ流儀に近いものであつた。が、それは明らかに拙劣で、そして無茶苦茶だつた。「これはどうです、これはどうです？」といつて、何枚となく見せる繪の中には、多分いつか私の甥が見たといふ、墓場の畫らしいものもあつた。彼がいふには「僕は、大和田さん、考へるのです、この人生に於てですな、最も儼存してゐるものは『死』だと思ふのです、ねえ、さうではありませんか。だから、僕は人の死を象徴してゐる墓場といふものが我々の最も注目しなければならない題目だと思ふのですが、どうでせう？」「さうですね、」と私は曖昧な返事をした、が、それだけでは餘りぶつきら棒だと思つたので、「で、その墓場らしいもの丶中に、人間の首が逆さまに描いてあつたり、或はその人體の半身が描いてあつたりするのはどういふんですか？」と聞いて見ると、「大和田さん、お分りになりませんか、お分りになりませんかね。僕は一體どういふ風にして人間の靈魂といふものを現さうかと苦心したんです。僕は今の畫壇、殊に僕の屬する日本畫の連中が、唯奇麗な畫や、技巧に走つた細工物のやうな畫を描いてゐるのに飽き足りないのです。それから思ふと、さすがに洋畫の諸君の方が進んで居られると思ふので、今日もかうしてあなたに交際を求めに來たやうな譯なんです。大和田さん、お互に勉強しませう。手を貸して下さい、今日の二人の交際のしるしに握手をしませう！」そんな風で、彼は次々と、或は野原のやうな景色の中に電信棒が五六本立つてゐるやうなのとか、或は工場の烟突のやうなものが無數に並んでゐる中に、同じやうに無數の人間の手がさし延べられてゐるやうなのとか、悉く私には合點の行かないものであつが、それ等に對して一寸でも批評したり、説明を求めたりしたら、立ち所に彼の雄辯に苦しめられねばならないので、私はなるべく當らず觸らずの挨拶をしておいた。

やがて、畫を見ることが一應濟んで、初めて彼と向ひ合つた時、私はこんな風にいつて見た。「高原さん、僕はたしか

以前に一度あなたにお目にかゝつたやうな氣がします。それが、私はそこをいふのですが、電車の中なんです……」といふと、「いや、僕は電車といふものには滅多に乘つたことはありません」と相手に遮つた「いや、その時あなたは電車に乘つて居られなかつたんですが、車掌と醉つ拂ひ客とが喧嘩をしてゐた時に、いきなりあなた……たしかあなただと思ふんです、あなたが出て來て、車掌を毆りつけたんです。その傍に僕と僕の友人が乘つてゐたんですが、車掌のために一言二言辯解すると、あなたは生意氣なといつて、ついでに僕と僕の友人をも毆りつけたんです……」といひながら、これは少し言ひ方が過ぎたかな、と思ふ私の配慮にも拘らず、彼は突然持前の豪傑のやうな態で笑ひながら「いや、それや確に僕かも知れませんよ、僕は車掌といふ奴が嫌ひですからな。その時のことは覺えてゐませんが、始終そんなことがありますよ。その時あなたも毆りましたかね、アハヽヽヽ」といつた「いや、しかし此頃は大いに謹愼で、なるべくそんな亂暴はしないやうにしてゐます、それやどうも失敬しました。それぢやあ、もう一度握手しませう。さうですよ、これからは日本畫と洋畫とがこんな風に握手しなければ駄目なんですから、大いにやりませう!」

今一つ彼に妙な癖があつた。それは私と話をしてゐる最中に、私がうつかり私たちの仲間の間に使ひ慣れてゐる外國語の單語を挿むと、彼は「ちよ、ちよつと待つて下さい、あなたは今何とかいひましたね。マンネリズムですか、そのマンネリズムといふのは一體どういふことですか?」と彼は聞きながら、初めの時などは自分が袢であることを忘れて、襯衣のポケットか何かあるつもりで、一二度胸の邊を撫で廻してから、「しまつた、手帳を持つて來なかつた」と獨言して、「濟みませんが、ちよつと鉛筆でも萬年筆でも貸してくれませんか?」と私にいつて、自分は持つて來た何かの原稿の片端を破つて、「はあ、そのマンネリズムといふのは、どういふ意味ですか?」ともう一度私に聞き直して、それを紙切に書き記した。そんなことを四五度もしながら、「いや、お互に注意しなければいけません、僕は大いにやるつも

りです、」などといつた。丁度デモクラシイといふ言葉がはやつてゐる時分で、彼はその時の會話の際にも、飛んでもないところに二三度その言葉を使つた。見たところはさういふ潤達な氣性で、皮膚の色も活々してゐたし「ね、大和田さん、我々は誰でも貧乏です、だが、貧乏はお互にみなよく辛抱してゐます、いや、貧乏は誰でも辛抱しますよ、それは珍しいことではないが、それよりももつともつと大切なことは身體を鍛へることです、御覧なさい、僕のこの身體を、」といつて、彼はその力士のやうな逞ましい腕を私の方に突き出して見せながら、「僕はかういふ身體をしてゐますから、山の中でも、野原でも、どこでもごろッと轉がつてすぐに寢ることが出來ます、それや本當ですよ、大和田さん、現にあなたがこゝで今あなたの目の前で寢て見ろと命令するなら、すぐに寢て見ます」といふ程にも健康であつたし、髪の毛も黒く、青年のやうにもしや〳〵と生えてゐて、目はまん丸で無邪氣な光をしてゐたので、年よりも若く見えたには違ひないが、本當は四十歳をずつと越えてゐるらしかつた。

　彼と話をしてゐる間に、私は時々左隣の例の不思議な奥さんのゐる家のことを考へて、何かの手懸りを得るかも知れないと思つたので、幾度も躊躇した後で「君はこの」と左手をさしながら、聲をひそめて「隣の家の人を知つてゐますか？」と聞くと「高木殘夢とかいふ學者でせう、」と彼は持前の大きな聲で答へた。私はあはてゝ手で彼を制しながら、「大きな聲で、聞えますから、」と注意した。「妙な男らしいですよ。僕はもうこゝへ來てから三年になりますが、まだ一度も見たことがないです、もつとも外へ出ることが嫌ひで、殆ど出たことがないさうですからね。何でも二階の」といつて、彼は表の方を指さしながら、「書齋とかに年中机の前に坐りづめなんださうだ、だから坐蒲團の下の疊が腐つてゐるといふ話ですよ。」私はしかしそんな主人の話よりもその細君の方の話が聞きたかつた「細君といふのと二人暮しなんですかね？」と一層聲をひそめて聞くと、「さうでせう、」と相手は一向興味なささうに答へた。そして「いや、失敬しま

した、又ちよく〳〵來ますよ、」といふなり、ひらりと境界の欄干を飛び越えて、彼に挨拶をかはしながら歸つて行つた。

隣の女といふと、彼女はあの八百屋のとゞけ物をして來た時以來、「こんなつまらないものを貰ましたから、」とか、「貰ひ物ですけどお裾分けいたします、」とかいつては、それが大抵よく恥かしくもないと思はれるやうたものばかりだつたが、そんな物を持つて私の家へやつて來ては、三分か五分位玄關で立話をして歸つて行つた。かと思ふと、或時又彼女は私に何新聞をとつてゐるかと聞いて、「ぢや、私の方は××新聞ですから、毎日交換させて下さいませね？」と色つぽい調子でいつて、それを玄關から持つて來る代りに、裏の奥の間の緣側の、私の家の戸袋の上から突き出した。といふのは、その戸袋の向側は彼女の家の矢張り奥の間の緣側になつてゐたもので、彼女はそれをするときには、いつでも私が二階から下りての下の間に居る時を見計らつてした、それは私が別に大きな聲で話などしてゐない時でも、彼女は私が二階から下りて來るのを、恰もどこかゝら覗いてでもゐるやうによく知つてゐた。「大和田さアん、」とそこで彼女は十六七歳の娘のやうな言葉つきで呼んだ。「新聞を……」私はその聲を聞くと、思はずいそ〳〵と自分の方の新聞をまとめて、緣側に駈けつけた。見ると戸袋の上に、隣の方から突き出された新聞の端がのぞいてゐるので、早速それを取らうとすると、それは猫をじやらすやうに延びたり縮んだりするのだつた。で、やつとそれを捉まへて此方へ取つてから、私の方でも戸袋の上から此方の新聞を渡す時に、猫にするやうに二三度出したり引込めたりした。無論、その間双方とも無言だつた。そしてやつとその取引が濟むと、「どうも有難う、」と彼女の殊更らしい聲が響いた。「奥樣によろしく。」

だから、かういふ所を別に私の細君が發見した譯ではないが、彼は女性獨得の本能で、この隣の夫人を段々排斥するやうになつた。或時など、私が散歩に出ようとして家を出ると、待ち兼ねてゐたやうに隣の家の格子戸が細目に開い

て、「大和田さん、お出かけ？」と彼女はその戸の隙間からわざとのやうに半分傾げた顔を覗かせながら、「あなた、××町の方へ入らつしやらない？」と聞くので、「いゝえ、小石川の方へ、」と私がもしかするとこの會話を聞いてゐるかも知れない私の細君の思惑などを恐れながら、正直に打ち開けると、「さう、ぢやあいゝんです、」と彼女は思はせ振りた調子で答へた。「わたし××町をお通りになるんぢやないかと思つたものですから、そしたら本當に失禮なんですけど、ちよつとお願ひしやうと思ひまして……本當にわたしんとこは無人なものですから困つてしまひますのよ、おほゝゝゝ、御免遊ばせ、」といつたかと思ふと、忽ち戸が閉つて、彼女の顔は隠れてしまつた。私は狐にでもつまゝれたやうな思ひで歩きつゞけたが、その途でふとこれから尋ねようとする友人が、その日は丁度留守の筈だつたことを思ひ出したので、間もなく中途から家に引返した。歸つて行くと、細君から買物に行くのに、一緒に行つてくれないかと誘はれた。どこへ？」と尋ねると、「××町へ、」と彼女は笑ひを含みながら答へた。それから、「あなた、さきに出がけに隣りの奥さんと××町がどうとかしたつて話したぢやないの？」と細君が聞いた。彼女は私たちの會話をすつかり聞いてたかつたものと見えて、「さ、××町がどうしたんですのよ？」と聞くので、××町へ行くならお頼があると隣の夫人がいつた話をすると、私の細君は稍々ヒステリツクになつて、「ぢやあ、わたしお隣へ行つてうかゞつて來るわ、」といつた。どうせ何か買物か郵便局かの用事だらうと思つたので、「さう、聞いて來てお上げよ、」と私はわざと平氣を裝つて答へた。すると細君は出かけて行つた。そして、ぷり〳〵した様子で歸つて來て、「まあ、人を馬鹿にしてゐるわ、もういゝんですつて、さ。わたしが尋ねて行つたからかも知れないわ、あなた、尋ねて來て上げるといゝわ、」といつた。「大きな聲でみつともないよ、」と私は彼女をたしなめながら、簞笥の上に載つてゐる鏡台に向つて、ネクタイを結んでゐた。その時、すぐそこの庭にばらばらと黄色い色をしたものが落ちて來たので、何だらうとその方に目をうつすと、それは山吹の花と花瓣らし

かつた。「おやッ！」と思つて、私はいそいで縁側に出て、花の落ちて來る上の方を眺めると、隣の家の物干台にちらと消えて行く女の後姿を認めた。すぐ私につゞいて縁側に出て來た細君の目には、だから彼女は止まらなかつたに違ひない。だが、細君はすぐそれと察して「まあ、いけ好かない！」と叫んだ。私も苦笑しながら、ふと私の庭に散つてゐる山吹の花の間に、小さな結び文が混つてゐるのを發見した、細君も殆ど私と同時にそれを認めたらしかつた。彼女は突庭に足袋はだしのまゝで庭に飛び下りて、その結び文を拾ひ上げた。中には「何もおねがひすることはありませんが、ゆめ子が日々うつ／＼として暮してゐますから、どうぞ觀音様へでも、辨天様へでもおねがひして來て下さい。」細君は私が辛うじて讀み終つた時には、もうずた／＼に引裂いてゐた。そして「ゆめ子つて何、馬鹿々々しい」と叫んだ。「つまりあなたのことを夢見てるといふんでせう。これは乾度あなたの名が書けないものだから、觀音様とか、辨天様とかごまかしてあるんだわ、いやらしい。あなた！　あなたもう決してあの人と交際しちやあいけませんよ。」それから私たちが二人で買物に行く途でも、私はいろ／＼と細君から攻められた。電車通りで電車を待つてゐる時など、突然彼女は思ひついたやうに、「あなた、分つたわ、」と叫んだ。「あの山吹は花ばかり咲いてゐるけど、實がないから殘念だといふ謎に違ひないわ！」「馬鹿な、そんな馬鹿な！」と私は停留所の人ごみの中で、人々から顔を見られて赤くなりながら、わざと笑ひ聲でから叫んだ。だが、その笑ひ聲がやがて一種の滿足した微笑に變るのを禁じ得なかつた。けれども、到頭、その事があつてから、私は細君の手前、彼女と公けに交際することが出來なくなつた譯だつた。

私がこの町に越して來たのは、多分五月の頃であつたらうと思ふ。その年の七月から八月にかけて、私は細君と一緒に信州のＯ――にある彼女の叔父の家の一間を借りて、、一夏避暑生活をして送つた。そしてその留守宅を故郷から母に來て番してもらふことになつた。だから、母は孫たち（私の兄の子たち）を連れて私たちの留守に來てくれてゐた。

で、九月の或日、私は久しぶりでK——町の家へ歸つて來たのであるが、相變らず左隣の家が氣味の悪い程靜まつてゐる反對に、右隣の高原の家では、私たちが家に到着した時にはもう日が暮れてゐたのだが、何か頻りにどたばたやつてゐる音で私たちを驚かした。それに以前聞き馴れたやうな主人の吶號する聲ばかりでなく、金槌で物を打つやうな響や、或は大きな物を家の中で轉すやうな音が混つてゐるのだつた。「久しく見なかつた、高原萬歳！」と思つて、私は自分の旅裝を解く間もなく、例の二階の廊下の窓から彼の家の方を覗くと、どうしたのか、そんな夜分になつて引越し騷ぎをやつてゐるのであつた。

その翌日、彼は私の家に挨拶に來て、私が旅先から歸つてゐるのを見出すと、「やあ、あなたに會へたのは嬉しかつた、僕はもう會へないで立たなければならないかと思つてゐた、」と彼は叫んだ。「立つゝてどこへ行くんです？」と私が聞くと、「行方定めぬ雲水の旅です、」と彼は微笑しながらいつた。「どうしてそんなことを思ひ立つたのです？」「昨日です、」と彼は答へて、「僕は昨日突然考へたのです、大和田さん、あなたはどう思ひます？　人間といふものは、殊に我々藝術家が家を持つてゐるといふことは大いなる間違だと私は思ふのです。家とは何です、蝸牛の背中ではありませんか、そんなものを背負つてゐて、何の立派な藝術が出來ると思ひます、ね、さうぢやありませんか、大和田さん。で、僕は今日限り家を捨てることに決心したのです、我々藝術家が家などといふものに縛られてゐるのは愚だとは思ひませんか？」「ぢやあ、それで奥さんや子供さんたちはどうなさるのです？」と私が聞くと、「妻や子供も無論家なしになる譯です、僕と一緒に連れて行くつもりです。」「それで、雲水の旅つて、さし當りどこへ行くつもりなんです？」と私が心で呆れながら聞くと、「どこつて別に目的はありませんが、先づこれから東海道を下るつもりです。」「東海道を歩くんですか？」「さうです、野宿しながら歩くつもりです、」「奥さんや子供さんたちは？」と私はもう一度聞き直した。「無論、

一緒です、いや、……」といつてゐるところへ、彼の音無しさうな細君が顔を覗かして、「あなた、もう十分しか時間がない聲で彼を呼んだ。すると、その方を振り返つて、「すつかり出來たか。よし、今行く、」と答へた。「それで、失禮ですが、」と私は尋ねた。「金とか何とかいふ、經濟方面のことはどんな風にするんです、その旅行中の？」「それは僕は今二千圓ばかり持つてゐます。無論、金なんか一文もなくてもいゝんですがね、この二千圓は内職の刺繡の圖案とか、編物の圖案とかで儲けたのです、」と彼はそんな私の問ひもしないことをいつた。「僕のした圖案に依つて家内が刺繡や編物をするのです。——や、この話はあなたに未だしませんでしたかね？……」その時又私の入口に「父さん、」といつて、彼の上の女の子が呼びに來た。「や、よし／＼、」と彼は子供の顔を見ると、細君の時とはすつかり別の、こぼれるやうな嬉しさうな顔をして、「ぢやあ、大和田さん、失敬しますよ、御氣嫌よう、」といふなり踊つて行つた。

十分程後、私が二階にゐると、下から細君があわたゞしく駈け上つて來て、「あなた、今高原さんがお出かけですよ、御覽なさい、御覽なさい、」といつて、私を表の通の見える二階の硝子戸の方へ連れて行つた。目の下を、高原夫婦はまるで乞食のやうな恰好をして通つて行つた。傘とか、風呂敷包とか、絵具箱とか、小さな行李とか、そんな物を振り分けに前と後に背負つて、上の子供の手を引きながら、彼は通りかゝりに私の二階を見上げて、私の姿を認めると、「や、さよなら、」と彼は元氣のいゝ聲で帽子を振つた。その後から小さい方の子を背負つて、これも亦相當に大きな包を左手に提げた彼の妻が、俯向き勝ちに、そして私の家の前を通る時には俯向いたまゝで頭を下げて、高原の一間ほど後から歩いて行つた。——

高原と別れて間もなく、私もK——町をだん／＼離れ勝に日を送らねばならなくなつた。それは私の細君の病氣が元で、彼女は初め肋膜を病んで入院した。それから海岸に轉地したり、國の實家の方へ養生に歸つたりしたので、別に東

京に勤めを持つてゐない私は、大抵の時彼女と行動を共にした爲であつた。それで、いつとなくK――町の家は、その夏、私が留守番を頼んだ母や甥姪たちの住居になつてしまつた。といふのは女學校に入る姪や、專門學校の試驗を受けようとする甥やに、丁度東京でのさういふ住居が必要な時だつたからだ、そして彼等の祖母に當る私の母は彼等の世話をすることを喜んでゐた。だから、その後、私は東京に來る時は、必ずその家に足を止めたが、それはもう私のではなく、彼等のものなのであつた。だから、短くそこにゐる時は私は客であり、長く泊つてゐる時は居候であつた。

ところで、私がそこに現れると、別に知らしも何もしないのだが、必ず隣の夫人は何とか彼とか程のよい口實を設けて、私の前に現れた。が、彼女の方でも、私が細君と同道で來てゐる時には決して顏を見せなかつた。もつとも、私の細君は東京に來ると直に健康を惡くするので、彼女が一緒のことは滅多になかつたから、私はさうして半年ぶりとか、或は一ケ月目とかに、K――町の母の家に來る度に、次第に隣の夫人と接近するやうになつた。當然のことではあるが、近づいて見ると、彼女だとてそんなに變つた女性とは思はれなかつた。唯、初の頃私をあんなに驚かせた振舞は、その主なる原因は彼女が餘り退屈な生活をしてゐるために選びなかつた。「奥さん、お宅には猫はゐないんですか？」と何かの時に聞くと「えゝ家には居りませんわ、わたし生き物の世話なんて嫌ひなんですもの。」と彼女はいつた。「だつて、僕がよくこゝへ引越して來た時分、みいやみいやつていつて、猫と遊んで入らしやる聲がしたやうに思ひますが……？」といふと、彼女は別に極りの惡さうな顏もしないで、「あれは他所の猫ですよ、わたししんとこへ遊びに來てたのよ。」といつた。しかし、彼女が普通にいふ意味の戀を私にしてゐたかどうかといふことは、彼女が明らかに私に接近しようとしてゐる態度や、あの山吹の花の事件や、その他色んな場合の彼女の私に對するコケテイッシュな素振りからで、早計に定める譯には行かない。先にも度々いつたやうに、私たちに對するとそんなに賑やかに、お喋りに、お世辭よく振舞ふ彼

女のゐる家が、朝から晩まで空家のやうに――といふと違ふんだ、隣に人がゐながら、それが聲くはかの物音や話聲を立てないで住んでゐると思はれるんだ、――ひつそりしてゐるといふことが何といつても不思議に違ひなかつた。また私の細君がゐる時分に、「隣の人は實に時間の正しい人よ、」といつて驚いてゐたことがあつた。私がその譯を聞くと、何でも毎日十二時になると、奥さんが下から二階にゐる主人に向つて「御飯」の出來たことを知らせる聲が聞えるのださうだが、それがいつでも實に正確に正十二時と定つてゐるのださうだ。彼女の「御飯」と呼ぶ聲と共に下で聞えることが珍しくない、少なくとも、その聲を聞く時には、伴奏するやうに方々の正午を報じる汽笛が鳴つてゐる時で、私の家の遅れる癖のある掛時計が珍しく彼女が「御飯」と呼ぶ聲と一緒に鳴り出したことがある、それ以來、彼女のその聲で時計を合はすことにしてゐる、などと私の細君がいつた。その聲を私も二三度聞いたことがあるが、彼女のいふことは嘘ではなかつた。朝飯は何時で、夕飯は何時だか、その頃の「御飯」と呼ぶ聲は私の家で誰も聞いたものはないが、恐らくそれ等も毎日同じ規則正しい時間に行はれるものに違ひない。そして、考へて見る迄もなく、それが彼女の好みとは思はれなかつた、無論、その二階の書齋の机の前に、高原のいふ坐蒲團の下が腐つてゐるといふ程執念深く坐つてゐるところの、主人公の意見に違ひない。私はふとそんな嚴格な主人を想像すると、別に私はその細君にこちらから疚ましいことを仕掛けてゐる譯ではないが、何ともいへぬ氣味惡いやうな、憚られる氣持がした。事實、近所の評判でも、彼は非常な氣むづかしやで、その細君にも夕方錢湯に行く時と、その外ちよつとした買物とか、郵便を入れに行くこと位い外は、餘り外出することを許さない、そして彼自身はといふと、湯殿はあるが、そんな小家族の家のことだから、湯を立てゝゐるとは思へない彼の家で、どうしていつ風呂に入るのだらう、外の錢湯に出かけるのは決して見たことがない、彼の姿を見かけるのは一年中數へてほんの五六度位で外に出ることがある時だけだ、そして細君は若いが、

彼はもう五十近い、或は五十以上の年輩だなどといふのである。だから、私はまだ見ない彼だが、何といふことなく憐られた。そしてそれは同じ憐る氣持でも、別の隣人の高原に對するのとは全然違つた氣持からであつた。兎に角、高原の生活は、私と職業が同じだつたからもあらうが、私の理解の範圍にあつた。が、高木のそれは、到底私には想像さへもつかなかつた。或時、當の細君に「一體御主人は朝から晩までどういふ風にして暮して入らつしやるんですか？」と私は聞いて見たことがあつた。と、彼女は「何をしてるんですか、木念仁のことですから、わたしなんかちつともかまはないんですよ。」といつたが、主人は兎に角、彼女自身その家庭生活をそんなに樂んでゐるやうには見えなかつた。多分彼女が隣家の私にそんな風にしかけるのは、彼女の享樂の一種に違ひないのだらう。一口にいふと、彼女は彼女のその陰氣な家の外の生活に憧れてゐるのだらう、そして私に依つてそれを覗かうとするのか、觸れようとするのか。

彼女は私がK——町にゐない間に、私の母と非常に親しくなつてゐた。それから、又彼女はさうして私がK——町に現れる度に、日曜の晩なぞを見計らつては、彼女の家に私を案内して、彼女の主人と私とを近づけようと努めるやうに見えた。だが、それは私の方で避けるやうにしてゐた。けれども、到頭、或年の正月のことであつた。正月を細君の實家の方で暮して、翌日私は東京行の汽車に乘つた。だから、私がK——町の家に着いたのは二日の夕方のことであつた。私が汽車の中で夕食をしなかつたので、旅裝を解きながら母にその用意を頼んでゐた時に、表の入口が開いて聞き馴れた彼女の聲が、それが不斷にも増して正月らしい晴れやかさで、玄關に響いた。私が玄關に出て行くと、「どうです、よく分りますでせう、あなたがお歸りになるのを待つてゐましたのよ、お母様ともう約束しておきましたの、さあ、すぐ入らして下さいませ、あアら、わたしとしたことが、御年始の御挨拶も忘れてしまつて、御免遊ばせ……」と彼女は立てつゞけにこれだけ喋つた。そして、私は手を引かれるやうにして、彼女の家へ連れて行かれた。隣ではある

が、これ迄玄關まで行つたこと位は度々あるし、一度ちよつと上つたこともあつたが、そんな風に落着いて、火鉢の前に坐つたことは初めてだつた。

「御主人は？」と聞くと、「今日はずつとお晝から御年始に廻つて居りますの、」と彼女は答へてから、「主人なぞどうでもいゝぢやありませんか。そんなに堅苦しくなさらないで、さあ、お正月ですから、一つ召し上つて下さいませ、」といつて、初めから用意してあつたものと見えて、いつの間にか私のための御膳立が持出された。私は少なからず面喰つたが、まさか逃げて歸る譯にも行かないので、腰を据ゑて、飲めない口だが、注された盃を受けたり返したりしてゐるうちに、私の性分で、いつとなく落着いてしまつて、友達の家でゞも飲んでゐるやうな氣持ちになつた。無論、それには相手の隙のない持てなしに醉はされたといふことが多分の原因であるには違ひなかつた。「早いもんですわね。大和田さん、」と彼女は、私よりは行ける口らしかつたが、それでも女らしく目の縁を眞赤に染めながら、「お近づきになりましてから、もうかれこれ二年になりますことよ、足掛三年よ、」と獨得の艶めかしい目附をして、斜めに私を見ながらいつた。「そんなになりますかなア、」と私も仕樣がないので合槌を打つやうにして、「だけど、僕は彼方此方してましたから、……考へて見ますと、變なお近づきですねえ、」といふと、「本當に變ですわね。しみじみかうして二人でお話するのは初めてですもの。まア、卑怯よ、お上りなさい、私のあげたのが飲めないんですか、奥さんが恐いんですか？」私は又仕樣なしに彼女の盃を受けた。餘り調子がいゝので、何か斯う突つ張りのない台の上にでも乘つてゐるやうな氣持がするのである。それに、彼女はそんな風に若し第三者が私たちの會話を聞いたなら、さては？と思はれるやうな、一口にいふと色つぽい、馴れ馴れしい話振りをしたり、態度をするのだが、妙にそれに衒氣な作はないのである。といふのは、うつかり彼女の調子に乘つて、私が眞劍に應じたなら、「あら、まあ、これはお芝居なのよ、冗談よ、」といひさうな

所があるのだつた。それでゐて、私は矢張り何か悪いことをしてゐるやうなぎこちない氣分を時々呼び醒まされて、「あの、まだ御主人がお歸りになる時分ぢやないんですか？」と二三度も彼女に尋ねた。「いゝぢやありませんか。そんなこと、お正月なんですもの。いゝんですよ、歸つて來ても、」とその度毎に彼女は答へた。「わたしはね、それは忠實な家内なんですもの、」と彼女はつゞけた。「それは大和田さんも多分お分りでせう、かうして毎日朝から晩まで家にゐるといふことだけでも、それや、大變な勤めですよ、ね。まるで牢屋に入つてゐるやうなものですもの。むつかしい人ですからね、御飯でも何でも、それや時間の嚴しい人ですから、本當に骨が折れるんですよ。」なる程、私は彼女の家では毎日正十二時には必ず彼女が階下から、御飯が出來ました、と彼女の夫に知らす話を思ひ出して、なる程、忠實な細君には違ひないと思つた。だが、そんなにも稀な忠實な家庭の細君の一面に、これは又何といふ不思議な一面を持つて居る夫人だらうと思ふと、私は酒の醉ひが醒めるほど氣味が悪い思ひがした。その時、突然門口に俥の止まる音がして、主人が歸つて來たらしい氣配を聞いた時は、私も、そして彼女も忽ち狼狽を感じた。殊に彼女が狼狽した樣子に、私は又二重に狼狽した。が、主人が私たちの部屋に入つて來た時、彼女は忽ち不斷の調子にかへつて、「まあ、あなたは遲くまでどこへ廻つてらしつたの。御覧なさい。お隣の大和田さんは御叮嚀に御年始に入らしつて下すつてるぢやありませんか？」といふと、酩酊してゐるらしい主人は、彼女の言葉に見事にごまかされたと見えて、「これはこれは、これは新年お目出度うございます、」といひながら、ぺつたり私の前に坐つたので、私はあわてゝ唯何にも言はずにお辭儀をした。この時私は隣人の高木殘夢を初めて見た譯であつた。だが、初めのうち、私はこれが實際日頃想像してゐた、滅多に外出したこともなく、その坐つてゐる机の下が腐つてゐるなどと噂されてゐる、篤學家の高木殘夢だらうか、と不思議に思つた。私の前に坐つてゐる彼は、背のずんぐりした、羽織袴の姿が如何にも田舎者らしく見える、頭の半分禿げかゝつ

た、どこにでも見かけるやうな、除りに普通人の容貌をした男だつたからだ。

やがて、彼は細君と入れ交つて長火鉢の向うの、私と差向ひの位置に來ると、既に大分外で飲んで來たらしい酒が廻つてゐるせゐか、忽ち彼の雄辯た細君をも默らしてしまふほど、休みなしに私に向つて喋り始めた。「やあ、大和田さん

初めまして……初めましてのおしるしに　さあ、まあ一杯」と彼は始めた。「まあ一杯、さう遠慮なさるな。隠したつて駄目ですよ、君のことは以前からもうよく、交際してゐる以上に知つてゐるんだから。どうです、奥さんの御病氣は？　君があんまり浮氣するからぢやないかね、細君はお互に大事にしなけりやいけませんよ。君なんか未だ苦勞が足りないかた。失禮だけれども。君は一體女に惚れて、命までもといふ程思ひ詰めたことがありますかね、命までも、とですよ。ありますまいな。……」その時丁度彼と私とが間に挾んでさし向ひになつてゐる長火鉢の左手に、彼の夫人は稍々私の方へ寄り加減になつてゐたが、彼が「命までも」と變な節をつけて叫んだ時、私は私の膝を頻りに突つつく者があるのを感じたので、その方を見ようとすると、その前にちらと目に入つた夫人の顔が「わたしですよ、をかしいでせう」と合圖するやうに見えた。だが、主人公はそんなことには氣をつけないでつゞけた。「いや、大和田さん、私もこいつの爲にはまつたく命懸けの苦勞をしたものですよ、その時の話をしませうかな？　まあ、一杯、さあ、どうぞ、」とそこで又彼は盃をすゝめた。「お止しなさいませよ、あなた、そんな下らないお話、」と夫人はつゝましい調子で傍からたしなめた。「それぢやあ、一つ、大和田君、君の方の話を聞かしてもらはうかな。どうです、君には色々面白い話があるでせうな。時に、君の家の姫御さんの姉さんの方は中々別嬪ですな、いや、實に別嬪だ、しかし、かういつちやあ何だが、少し不良性があるやうだな、氣をつけなくちやいけませんよ、十六ださうですね、十六か、二八の花といふ所だね、さあ、まあ一杯！」

かういふ色々な彼のお喋りを聞いてゐるうちに、全く私が驚かされたことは、彼が一年中そんなに家の中に閉ぢこもつてゐながら、私の家の隣に限らず、一軒先の家のことでも、三軒向うの家のことでも、その家の人々の顔形から何をしてゐるかといふことから、どんな秘術を持つてゐるかといふことまで實に詳細に知つてゐることだつた。彼はそれ等に對して一々批評を下した。「ね、大和田君、山崎君は君の親友かね、つひ先達つて向うへ引越して來たあの……中々年は若いが好男子だね、しかし痩せてゐるね、それに惜しいことには背が低いよ、細君の方がずつと高いぢやないか、あの細君は田舍の女教員だつたんださうだね、女教員にしちゃあ隨分だらしがないね、もつとも女教員といふものが一體だらしがないものかも知れないがね、」などと彼はいつた。その山崎などといふ男は、職業が小説家でもあるから、高木と似て滅多に外へ出たことがない男なのだ。現に私の友人なのであるが、私は未だ彼が越して來てから一度も會つたことがたい位で、まして彼の細君が女教員であつたことなどは、その時私の初耳であつた。高木といふ男は歴史の研究家などといふが、朝から晩まで實はそんなことばかり企楽してゐるのではないかと思はれる位だつた。私が二三の友人から彼が或一部では知られてゐる學者で、著書などは少ないが、その少ない著書は大抵絶版物として貴重がられてゐるなどといふ噂を聞いてゐなかつたなら、私は彼をそんな風に信じはしなかつたらう。「僕は方々の物音を聞くのが好きでね、」と彼は又始めた。「それで、大和田君、アカスチコーンといふ米國製の聾が聞える器械があるだらう、——持つて來て御覽、」と彼はそこで細君の方に顔を振つていつた。「僕は何も聾ぢやありませんがね、その器械をかけると普通以上の音が聞えるんだよ。だから聾でないものが、かういふ普通に向き合つて人と話してゐる場合にそれを使ふと、あんまり聞え過ぎて鼓膜を破る恐れがあるんだがね、だから僕は大抵夜しづまつてから時々それを耳に當てゝ近所の物音とか、」話聲とかを聞くんだ。どうです、面白い道樂でせう。まあ一杯、さあ、遠慮なさるな、」そして細君の方に向つて、「どう

したんだ、アカスチコーンは？」と催促した。「アカスチコーンたらいゝぢやありませんか、」と細君は何氣なく明な顔をして夫の言葉を退けた。「はゝあ、これはこの細君もそのアカスチコーンといふ名を使つてゐるんだな、」と私は心の中で思つた。「おッと……」とその時高木は大儀さうに立上つて、便所に行つた。ところが、彼は縁側に出るのに、隔ての四枚嵌まつてゐる障子のまん中を開けて用に行つたかと思ふと、その後を閉めたのはよかつたが、何と思つたのか、外側から一番右の端の障子を開けておいて、そのすぐ前の便所に入つて、その便所の戸を開け放しながら、私たちの坐つてゐる長火鉢の方を見ながら用を足した。つまり右の端の障子をわざ〳〵外から開けたのは、便所から私たちの方を見透かすための計畫だつたのだ。「あなた、そんなに開け放しにして、寒いし、第一見つともないぢやありませんか、」と細君は彼の方を睨めながらたしなめた。そして、さういひながら、彼の方からすると、私の位置は彼女の半分陰になつてゐたのを利用して、彼女は左手をそつと後に廻して私の手を握つてゐたのには私は呆れて抵抗することも出來ずにそのまゝにしてゐた。「こゝを閉めたら大變ぢや、」とそれに對して、彼は便所の方から、おどけた口調で叫んだので、私はあわてゝ彼女に取られてゐる手を引込めた。一體この夫婦は馴れ合ひで私をからかつてゐるのぢやないか、と私は氣味が惡くなつて來た位だつた。が、彼は間もなく上機嫌で元の席に歸つて來て、相變らず「まあ一杯」を繰返して、それからそれと近所の家や、人たちの噂を始めた。どこそこの家は、主人は正直者だが小心で、從つて甲斐性なしだ、その代りその細君は中々のやりてで、何でも八王寺の藝者だつたさうだが、現に去年の暮など借金取を一々追ひ返すのに、三十圓の借金にも、五圓の借金にも、三ケ月たまつてゐる家賃にも、差別なしに一圓づつ拂つたとか、どこそこの家の老人は耳が遠いので、主人の嫁が一日に何度となく「母さん、それはかうですよ、」とか「母さん、それはかうぢやありません、」とか、あの老人が又姑根性で嫁の辭に一々聞くんだと見えて、大きな聲で叫ぶものだから、その隣の子供がその

「母さん、母さん」といふ聲が聞える度に蟲を出すので、到頭引越して行つたとか、どこそこの細君はちよつと見たところは別嬪だが、髮の毛が實は赤いといふより白茶色をしてゐるので、月に二度づつ丸ビルの美顏術師のところへそれを染めに行く、その次手に美顏術をしてもらふので、その度に二十圓づつ掛るさうだが、さうするとあの細君の化粧代だけで月に四十圓だが、主人は××會社の社員で月給百八十圓だから、隨分痛事に違ひない、その爲だらう、あの主人はこゝへ引越して來た時から裏返しにした洋服をいつでも着てゐる、それで家にゐる時は夏は浴衣で、冬は銘仙の縕袍切りだ、その外に和服といふものは持つてゐないとか、さういふ話を無數に喋つた。私も噂されてゐる人たちには濟まないが、高木の話が餘り面白いので、つひ釣り込まれて聞いてゐるうちに、ふと今は放浪の旅に出るといつてゐなくなつた、私の家の右隣の住人だつた高原萬所のことを聞かうとすると、高木は高原の名を半分も聞かないうちに、「さうさう、高原といふ男がゐたつけね。」と引取つて始めた。傍から細君が「あなた、お止しなさいよ。」と何故かそれを止めようとするのを話し手はかまはずに、「なアに、いゝよ。あいつには、大和田さん、大變弱らされたよ。あの男はあなた方が來る前の前には、今のあなたの家へどこかから越して來たんですがね。あいつは怪しからんよ、君、こいつに（と細君の方を顧でしやくつて）惚れやがつてね、元々あゝいふ外聞も何もかまはない男だもんだから、人の女房に惚れておきながら露骨で困るんだよ。あの時分はうか〳〵こいつを風呂にやれないんだ。あいつと來たら猛烈で、自分で戀文を書いては自分で表の郵便函に投げ込んで行くんだからな、ひどい時は毎日三度よこしたよ、ねえ、お前。」「あら、そんなことはないわ。」と細君はいつた。「それでね、大和田君、面白いんだ、僕は考へたんだよ、それに對抗する方法をね。大體君のところの便所を汲むのには我等の家の庭を通らないと行けないでせう、それを我輩は利用したんだ、我輩は君の家、即ちその時の高原の所へ通じる庭木戸に錠をかけてしまつて、斷然おあいやを通さないことにしたんだ。これに

に流行の質屋も困つたらしいね　到頭、やつと大家へ泣きついて行つたものと見えて、大家さんが頼みに來たよ。だが、そ

の位のことですぐ此方が參つてしまつたら、あゝいふ奴のことだから馬鹿にしやがると思つたもんだから容易に承知しなかつたんだ。そしたら、大家がこの家の家賃を五圓だけ下げるから、是非聞いてくれと頼んで來たもんだから、それで初めて許してやつたんだ。だから、今でもこの家は、君の家と同じ大きさだが五圓安いんだよ、アハヽヽヽ、まア、一杯。」

だが、私は高木の話を聞いてゐるうちに、だん〱變に憂鬱になつて來た。而もこの位世間の人から離れて暮してゐながら、この位世間の人のことを氣をつけ、氣にしてゐる男の存在が、不愉快であると共に氣の毒にもなつて來た。それにしても、彼の近所の人々に對する注意はとてもアカスチコーンで夜になつてから聞耳を立てる位のことには到底得られさうには思はれなかつた。それに、それ等の噂の對稱の人々の髮形や、歩き振りまで知つてゐるところを見ると、毎日朝から晩まで彼の二階の硝子窓から往來を通る人を監視してゐるのかと思はれる位だが、それにしても彼がそんな餘裕のない、近所の評判通り「机の蟲」といはれる程の勉强家であることも事實らしかつた。現に彼のやうな片寄つた學者にあり勝の、彼は古書とか珍本とかに特別の愛着を持つてゐて、さういふ種類のものを隨分貯へてゐるらしかつた。して見ると、彼のそれ等の智識の大部分は彼の不思議な細君に負うてゐるものに違ひないと私には思はれた。矢張り、結局、私は何ともいへない憂鬱な氣持になつて、しかし强ひられた酒のために半ば夢中の狀態で彼の家を辭して歸つた。もうこんな家へは决して足跡をすまいと、酒の爲にぐら〱する頭の中で決心しながら。

その時は、私はK――町の家には一週間ばかりゐて、すぐに又貸家に病を養つてゐる妻の方へ歸つて行つた。私は少し腰を据ゑて勉强するつもりで、そこで小さな家を借りてもらつて、妻の病氣も追々よくなつたので、二三年の間そこ

で暮すつもりにしてゐた。ところが、妻は身體がよくなるにつれて、東京へ歸りたがつた。しかし、以前ゐたK――町の家は、前にいつたやうに最早や私たちのものではなく、甥や姪たちのものになつてゐたのだから、東京に歸るとなると、新しく家を探さねばならなかつた。それに、最早や私にして見ると、高木文四郎などを隣人に持つK――町の家には戻りたくなかつた。殊にいつかの山吹の花のことがあつてからは、彼の細君と私の細君とは犬と猿との感情になつてゐたから、尚更のことであつた。ところが七月の中頃にK――町の母から手紙が來て、彼女には一二度手紙で私から適當な借家があつたら知らしてくれるやうに賴んでやつてあつたのだが、それに就いては、自分で探すのでなければ、とても人賴みでは借家拂底の際だから難しいだらうと述べた後で、もうぼつ／＼夏休みになるので、定子の外は大抵國に歸へつてしまふから、その間に私たち夫婦に來て、九月になるまで自分たちで探して見てはどうかといつて來た。定子といふのは、國から來てゐる姪のうちの一番姉の、先に高木が中々別嬪だが、不良性があるといつた娘のことである。つまり母の手紙では、いつか私たちがK――町にゐて避暑に行つた間に、母たちがその留守宅へ來たやうに、今度はあべこべになる譯であつた。私は餘り氣が進まなかつたが、妻はそれを見ると、健康は殆ど回復してゐたし、長い間東京を離れてゐたので、私が「隣にあの高木の厭な細君がゐるよ。」と厭がらせをいつても、彼女は「あんな人たち、交際さへしなければいゝんだわ。」といつて聞かなかつた。それで、私たちは七月の末に、久しぶりで夫婦してK――町の家に、半分居候の資格で住むことになつたのだ。そしてあの九月の一日の大地震に遭つたのだ。

だが、この前に高原の話で、かういふことがあつた。それは先にいつた私の姪の定子のことからであるが、彼女は次の年の春女學校を出ることになつてゐたので、その夏も國に歸る代りに、裁縫とか、生花とかの稽古のために東京に殘つてゐたのであつた。彼女に就いては最早高木の耳にも入つてゐたやうに、そんなに不良といふ程でもなかつたが、—

ちよつと人目を引く美人だつたので、[illegible]の學生たちから手紙が來るので、私の妹なども心配してゐたが、それは知らない學生たちがどうかして彼女の住居を知つて、出鱈目に出して來るのだらうから、彼女の方でさへ相手にしてなければいゝ。見たところ、彼女はそんな御轉婆娘といふやうな質でもないし、といつてそんな手紙の爲に躍氣になつて、學校に行かないといふ程でもないから、と思つて周圍の者も見過ごしてゐたのだつた。が、私が妻とその時K―町の家に行つた時分には、目に立つて彼女に宛てられた桃色や水色の封筒の手紙が多く來たので、或時何かの話の折にそのことを母に話すと、母は田舍者の老人のことで、そんなことには一向ぼんやりしてゐるらしかつた。「どうも同じ人間からの手紙らしいですよ、」と私がいふと、「さうかね、」と母は別に心配な風もなく答へた。「あなたの孫ぢやありませんか、少し氣をつけてやらなくちやあ、」と私は責めるやうにいつた。が、母の代りに私の妻がそれに就いて急にやきもきし出した。「あなた。大變ですよ。定子さんはあの手紙の男と會つてゐるのですよ。あなた、私たちが知らないんだつたら仕樣がないけど、かうして一緒の家にゐて、もし間違ひがあつたら、お國の兄さんに申譯がないぢやありませんか、」と彼女は私を責めるやうにいつた。「どうしてその男と會つてゐることが分るんだい？」と聞くと、妻は悪びれた風もなく、「わたし、手紙を見たんですもの、」と答へた。私と妻とがその事で爭つてゐると、母が「さういへばお前たちの來る少し前だつたが、一度歸つて來ない晩があつて、私心配したよ、」と相變らず何でもないやうな調子でいつた。「それ御覽なさい、あなた。大變だわ、」と妻はヒステリックな調子で何か私の落度でもあるかのやうに喰つてかゝつた。その時、表の入口が開いて、「大和田さんゐますか？」と聞いたやうな聲がした。それが高原義哲だつた。彼は[illegible]の服を一應切り上げて。當時大森に家を構へてゐるのだが。久しぶりにこの邊を通つたから、寄つて見たといつて。ふと私の妻の顔色から、そこに何か起つてゐると察したと見えて、「奥さん、どうしたんです、何か心配事でもあるんですか？」

と尋ねた。妻はそこで前後の考へもなく、姪の定子に起つてゐる事件のことを高原に話すと、「それやもつての外だ、」と彼は忽ち持前の興奮した際で叫んだ。「そんな事を捨てゝ置いては大變だ、それは屹度不良少年の仕業に違ひない。大和田さん、その男の所が分つてゐるんでせう、そしたら、一つその男の所へ行つて根本的に調べやうぢやありませんか。私はこんな事を聞いては默つてゐられない性分だ、さあ、これから大和田さん、一つその男の所へ談判に出かけませう。」すると妻が傍から加勢して、私に是非いゝ都合だから、高原さんに一緒に行つてもらつて、今のうちに何とか片をつけてしまへといふので、私も仕方なく、高原と一緒に手紙に依つて調べた相手の男の下宿に出かけて行つた。その途にも高原は始終興奮しつゞけて、ちよつとした道を交番の巡査に尋ねる時にも、「これから或不良少年を調べに行くんですが、どうでせう、結局警察に引渡した方がいゝでせうか。それとも我々の手で訓戒を加へて以後を愼しました方がいゝでせうか。君の意見はどうでせう？」などと巡査に話しかけたりするのには、私はすつかり閉口してしまつた。やがて、先方の下宿を尋ねあてゝ、在否を聞くと、當人が留守だつたので、先程からもう可成り高原の調子に附りてゐた私は、却つて安心した氣がした。と、彼は下宿屋の主人を捉へて、「學校へは怠けずに行つてゐるか、」とか、「女が遊びに來るか、」とか、「親の方から毎月幾ら送つて來るか、」などと刑事のやうな口調で尋ねたりした。下宿屋の主人を相手にそんな問答をしてゐても仕樣がないので、私は彼を促して一先づK——町へ歸ることにした。すると、その途でも彼の興奮は未だおさまらないで、「大和田さん、たしか定子さんの學校の校長は岸邊だつたね。僕は岸邊とは友達だから、彼に會つて彼の不取締を詰ろうとしませう。どうです、これから岸邊を訪問しようぢやありませんか、」などといひ出した。いつか彼と初めて會つた時、彼がいつたことは本當で、彼は私がいくら電車に乘らうとすゝめても承知しなかつた。暑い日のことだから、私はすつかり疲れてしまつたので、岸邊校長を訪問することには絶對に不贊成を稱へて、彼と一緒に

公園の道を歸つて來ると、ふと私達の歩いて行く前を、どこかの歸りらしい定子の歩いて行く姿を認めた。私にはこの時思ひついて、もう出來たことは仕樣がないから、今後のことを誡めてやつたらいゝだらうと思つて、高原にその事を話すと、彼は早速賛成して、それには定子より先廻りして家に歸つてゐて、私ではいけない、他人の高原から以後の行ひを愼むやうに誡めて、多少脅かしておく方がいゝといふ彼の説に同意した。そこで、私たちは家に歸つて、高原を、二階に坐らせておいて、私は妻と二人で階下の間で何喰はぬ顔をして待つてゐるところへ、定子が歸つて來た。私は高原に教へられた通り、出來るだけ厖爪らしい顔をして、「ちよつとお前に用のある人が來て居られるから、二階に行つてお出で。」といふと、定子は不審さうにしながら二階に上つて行つた。私の妻は彼女の後姿を心地よささうに見送つて、私と目を見合はしてにやりと笑つた。すると、間もなく、高原の例の破鐘のやうな聲が聞えて來た「まあ、そこへお坐り！」と初めに彼がいつた。「定子さん、あんたは今あんたがしてゐることが色々あるが、それで自分のしてゐることが正しいことだと思ひますか。さ、それを一番最初にお答へなさい。だまつてたのでは分らん。あんたが此間どこかで泊つて來たことも分つて居る、何の某といふ學生と文通をしてゐることも分つてゐる、こちらではあんたのすることが皆分つてゐるが、念の爲にあんたの口からそれを聞いておきたい、あんたがそれをいはぬと、わしは岸邊校長が友人だから、岸邊に頼んで調べてもらうがどうぢや。さあ、だまつてたのでは分らん。」――と、定子の泣き聲が聞えて來た。

私はその時再び後悔の念に襲はれた。私よりも妻は一層後悔し出した樣子だつた。彼女はこれを私に向けて、「あなた、あれぢや何ぼ何んでも定子さんが可哀さうだわ。」と今先彼女が、二階に上つて行く時、氣味よささうに笑つたことなどけろりと忘れてしまつたやうに、「あなた何の爲に、叱るのなら伯父さんのあなたが叱らないで、他人の高原さんなんかに叱らせるのです、あれぢやあ定子さんが可哀さうぢやありませんか？あんまりだわ、あんまりだわ。」といつて、

彼女まで泣き出した。私は當惑したから、なる程、何の爲に高原に定子を呼つてもらつてゐるのか、自分でも訝かながらなくなつて來た。すると、益々ヒステリックになつてゐた私の妻がいきなり二階に駈け上つて行つたので、私も不安になつてついて行くと、「高原さん　止して下さい。もういはないで下さい。定子はわたしの姙なんですから、わたしが責任を持ちますから、」と彼女は高原に詰るやうにして叫んだ。それには高原も弱つたらしく、もつとも彼もその少し前から餘り自分で調子に乘つて喋つてゐるうちに、自分で自分の言葉を制禦し兼ねてゐた時でもあつたらしかつたので、

「いや、それぢや、伯母さんにお任せします、」といふなり、私にも挨拶することを忘れて、そこ〳〵に階段を下りて、私たちが便所にでも行つたのかと疑つてゐるうちに歸つてしまつた。定子はそれから二日ばかり熱を出して寢た。

それから間もなくあの大地震の日だつた。まさか火事で燒けてしまうとは豫期しなかつたが　餘震の心配から、私は母と妻と定子と、さういふ女ばかりの家族だつたので、取敢ず彼女等を近くの××寺の境内に避難させた。××寺は有名な大きな寺だつたから、私たちばかりでなく、近所の人たちは誰も彼もそこを目指して避難して來た。さうはいふものゝ私は近所の人たちの顏など殆んど知らなかつた唯、さういふ場合に人々が掛け合ふ言葉をかけて、私の母や妻やに挨拶をしては私にも頭を下げる人が、多分近所の人たちだらうと思つて、私も簡單に挨拶をする位のことであつた。さういふ中で、私は女たちを待たしておいては、莫蓙とか、座蒲團とか、着替へとか、食べ物とか、さういふ必要品を時々未だ揺れてゐる家から運び出した。そして、それは未だ地震が起つてから一時間と經たなかつた頃のことだつたと思ふ、（××寺の裏門は、K——町の私たちの家のある横町の丁度突當りの位置にあつた、）私がまだ何か必要なものがあつて、その裏門から私たちの横町への道を、不斷は朝でも晝でもほんの一人か二人位しか人の姿の見えないその横町が、電車通ぐらゐに混雜してゐる中を、人や荷物の間を縫つて早足に歩いて行くと　向うの方から人の叫んで來る聲が

聞えた。さういふ場合の叫び聲であるから、忙しく往來してゐる人々も其方に耳を傾けた。「路曲にたり給へ」理由に。あはてるな、あはてるな。天の怒りだ、天の怒りだぞ」と叫ぶ聲は、はて？と思ふ間もなく、浴衣一枚で、無帽で、（彼は無帽素跣だつた。）身體に似合はぬ細いステッキを振りながら歩いて來る高原萬吉の姿を私は認めた。彼の方でも私を認めると、「やあ、大和田さん、天の怒りが來たね、どうです、皆さん無事ですか？」と私の傍に來て訊ねた。「有難う、だけど又　あなたはどうして今頃こんな所を歩いてゐるんです、大森ぢやないんですか？」と私が聞くと、「大森ですよ」、といつもと同じ調子で、「今朝早く家内を叱りつけてね、あまり氣持がむしやくしやするもんだから、淺草へ出かけたんですよ。どうです。その後定子さんは？……やあ、此間は失敬しましたな。どうです、その後訓戒のきゝ目が少しはありますか？」私はそんな事に答へてゐる暇がなかつたので、「僕、これから一寸家まで蒲團を取りに行くのです。母や女房たちを××寺へ避難さしてあるもんですから、失敬します、」といふと、「それや大變だ、手傳つて上げやう、」と彼はいつて、私が斷るのも聞かないで、「いや、かういふ場合は相身互だ」、といひながら、彼は私の家まで來て、蒲團を持ち出す手傳ひをしてくれた。途々、私は彼に「あなたがそんなに留守中なら、家の人々が心配してゐるんでせうから、早く歸つて上げなければいけないんぢやないんですか？」と聞くと、「いや、大丈夫　かういふ場合の心得は不斷からいひ聞かしてありますから。」「だつて、子供たちは？」「子供はつひ十日ばかり前に家内の里へ向けたんです。」さういふ會話をしながら、私は高原と一緒に××寺の母たちが待つてゐるところへ、蒲團をかついで歸つて來た。高原は私と違つて、その邊に避難してゐる人たちに顏見知りの人たちが大勢ゐると見えて、「やあ、やあ、」と彼方の人にも此方の人にも聲をかけてゐた。そして相變らず「天の怒りですな、」をつゞけてゐた。

その時、ふと寺の裏門の方から右往左往する群集の中に、高木文四郎が彼の細君に手を引かれて、境内に入つて來る

姿が見られた。私は彼を見るのは正月以來だつた。酒を飲んでゐない彼は、如何にも老人らしく、そして「机の蟲」らしい、如何にも氣力のない樣子をしてゐた。彼の細君は流石に氣丈者らしく、片手に夫の手を引きながら、片手に毛布と坐蒲團とを抱えて、群集の中を縫つて來た。彼女は私や私の母たちの姿を見つけると、いそ／＼と私たちの方に進んで來た。彼女はさういふ場合にも決して取亂してゐないばかりか、取亂してゐるらしい恰好にも彼女並に工風をしてゐるやうに見えた。彼女は彼女の缺點である生え際の悪さを、不斷から束髪の結ひ方に工風して隠すやうにしてゐたが、その上に新しい手拭を心中に行く女のやうな恰好にかけて、褄を下帶に斜めに挾んで、右手で夫の手を引いてゐた。何だか彼女に手を引かれて來る夫の高木は盲人のやうに見えた。彼女は私たちの傍に來ると、萬遍なく私たちに會釋してから、私の母の傍へ行つて、「この邊に失禮して避難させて下さいませ、」といひながら、そこへ毛布をひろげて、弱り切つてゐる夫を坐らせようとした。その瞬間に、「うーむ」といふやうな微な呻き聲が聞えたかと思ふと、高木文四郎は細君の敷いてくれた毛布の上に、どつさりと仰向けに轉がつた。先程からこの夫婦の行動に目を引かれてゐた私たちは、「あツ！」といつて思はず皆立上つた。棒のやうに固くなつて、毛布の上に仰向けに轉がつてゐる高木は、苦しさうな目附と共に、口から蟹のやうな泡を吹いてゐた。が、彼の細君はあわてゝゐるやうに見える割合に落着いた風で、帶の間に挾んでゐた手拭をとつて、「どなたか、あの、お冷をお持ちやございませんでせうか？」と首を傾げていつた。「お冷つて、水ですか、冷やすんですか？」と誰かゞ聞いた。「さうなんでございます、」と彼女は答へた。

その時、「何だ、何だ？」と人だかりしてゐるのを認めたらしく高原の聲が近づいて來たので、私はかういふ際には彼が役に立つてくれるだらうと心強く思つて、「高原君、大變なんだ、」と叫んだ。高原は近づいて來て、その場の有樣を一見すると、「やあ、人顛癇だな？」といつた。その言葉で周圍の人たちの中に彼方此方で笑ふものがあつた。すると、高

原は顔を上げて、「諸君、笑ひ事ぢやありませんぞ。この人は人が嫌ひなんです。だから、かういふ人中へ出ると[illegible]になるんです。笑ひ事ぢやありませんぞ。」と叫んだ。その言葉で又多くの人たちが笑つた。そこへ高木夫人がお水に濡らした手拭を持つて來て、悶絶してゐる夫の額の上に載せた。「奥さん、家へ連れて歸りますか？」と高原がいつた。そして、「戸板が一枚いるな。」と彼は獨言のやうにいひながら、それを探しに群集を分けて出て行つた。間もなく、戸板を持つて歸つて來た高原に私が手傳つて、高木夫人が附添つて、倒れた高木文四郎を彼の家に運んで行つた。……

しかし、愛宕下一町は、その翌日T町の方からの火のために、到頭類燒してしまつたのである。幸ひその町の人々に怪我はなかつたし、高木夫妻も無事にどこかへ避難したらうが、その後の消息を私は知らない。高原萬治にもその時以來會はない。もつとも彼のことだから、今日にも私の今の住居を見付けて、「大和田さん、來ましたぞ。」といつて現はれるかも知れないが……。



童貞

豊島與志雄

ぼんやりしてゐた心地を、ふいに、見覺えのある町角から呼び醒されて、慌てゝ乘合自働車から飛び降りた。それから機械的に家の方へ急いだ。

胸の中が……身體中が、變にむづ痒くつて、息がつけなかつた。頬邊から鼻のあたりに、こな白粉の香がこびりついてゐて、掌で……それからハンカチで、いくら拭いても取れなかつた。拭けば拭くほど、ぷーんと匂つてきた。

嬉しいやうで、なさけないやうで、ほーつと息を吐くと、その息の根が震へた。

晴れてるのか曇つてるのか、底知れぬ茫とした空だつた。……が、宵闇に浮び出てる軒燈の灯が、きらきらと、珍らしくて美しかつた。

よその家へでも迷ひ込むやうな氣持で、靜に自家の玄關へはいつた。誰も出迎へる者がない……よかつた、と思ふとたんに、女中が立つてくる氣配がした。それが却つてきつかけとなつて、つかつかと茶の間へはいつていつた。

「まあー、朝から出たつきり、どこへ行つてゐました。」

頂けたけのところで遅くなつて……。」

「さう、御飯は。」

「済みました。」

「やはり井上さんのお宅で……。それならいゝけれど、こんどからは、御飯はどうするかちやんと云つておかなければ困りますよ。あなたのために隨分待ちましたよ。」

それつきりだつた。……母は何にも感づいてはゐないんだな。

だが……天井からぶら下つてる電燈、茶箪笥や長火鉢、父の讀み捨ての夕刊、それを丹念に讀んでる母……昔からその通りで、そしてこれからも永遠に……。畜生、何もかも……。

「お母さん。」

「え。」

夕刊から振向いた母の眼が、曾て見知らぬ愚鈍な者の眼付だつた。

「僕は今日、素敵なものを見たんです。自働車と荷車と衝突して……。」

「そして。」

「正面からぶつかつたんです。すると……荷車を引いてた男の眼玉が、ぽんぽんと二つ共とび出しちやつて……。」

「え、何ですつて。」

「夕刊に出てませんか。」

「夕刊にですか。」

その隙に、煙草を一本袂から探つて、すぱすぱ喫つてゐたが、氣のせいか、頭髮にやはり白粉の香がくつついてゐて、どうにも困つた。

向ふの窓から、放笑しさうなのをおつとこらへた顔付で――眼付で、お千代が見てゐた。そのぽつちりした赤い頬邊に、飛んでいつてかぶりついてやつたら……林の眼の前で。

林の頸筋が、生へ際から淋しさうに細そりとしてゐた。

何だかぎくりとした。その拍子に、トトントントン、トトントントン……指先で火鉢の縁をやけに叩いてやつた。

なぜ沈默つてゐんだ。

「ダンスでも習ひたいな……。」

トトントントン、トトントントン……。

「まあー、どうしたんですよ、口の中でぶつぶつ云つて、そして……。」

トトントントン……。顔が一寸擧げられなかつた。

「僕は……ダンスを習ひたいんだけれど……。」

擦り寄つてきて、肩のあたりと腿のあたりとの厚ぼつたい重みで、焦れつたさうにトントンとやつた、彼女の肉のはづみが、今ふいに蘇つてきて、とても抵抗出來なかつた。指先から次には身體中で、トトントントン、トトントントン……。胸の底がほてつてきて、息苦しかつた。

「おかしな人ですね。どうかしたんですか。」

今迄見たこともないやうな、赤の他人の眼付で林が覗きこんでくる……とはつきり意識したが、それが見返せなかつ

た。

「少し酒を飲ませられちやつて……。」

「お酒を。」

「そして急いで歸つてきたもんだから、汗をかいちやつて……。」

出まかせに云ひ出したのが實は本當で、身體中がねとねとして氣味惡かつた。

「それでは……あの、お湯にでもはいつたら……。」

「お湯がわいてるんですか。……すぐにはいらう。」

「今加減を見させますよ。」

母が女中を呼ぶのを待たないで、もう帶を解きかけながら、湯殿の方へ驅け出していつた。

………………

首筋まで全身をぐつたりと湯に任せ、後頭部を浴槽(ゆぶね)の縁にもたせかけて、もーつとした湯氣の中から、ぼんやりした電燈の目玉を眺めてゐた。

何にも考へることが出來なかつた。身體の節々に力がなかつた。はづみをつけて動いてゐた氣分が靜まり流れて、それから、疲れきつたのろい渦を巻き初めた。それに引き込まれて氣を失ひさうだつた。きりきりと金物の軋るやうな音が……ごーつと暴風の吹き過ぎるやうな音が……どこか遠くでしてゐた。

「……お加減は……。」

はつと我に返つて立上つた。湯をじやぶじやぶやつた。——誰が加減なんか惡いものか。

「あの……お加減は如何でございますか。」

戸の外からお千代の聲がはつきりしてきた。湯の加減だつたのか。……丁度ぬる加減でよかつたが、然し、頭がふらふらしてゐた。

「丁度いゝよ。」

元氣よく答へてやつたけれど、それだけで、身を動かすのも大儀だつた。

「床をとつといて下さい、すぐに寢るんだから。」

誰にともなく大きな聲で云つておいて、湯殿から飛び出しかけた。が、……茶の間をぬけて寢室の方へ行くのには、母の前を通らなければならなかつた。着物を抱へて眞裸のまゝで母の前を……。

そんなこと、いつだつて平氣だつたんだが……。

ふと、咽せ返るやうな追想に、足が悚んでしまつた。

意氣地なしめ、なあに……。

擲つたいやうな氣持で、歯をぎりつと一つやつて、猛然と突き進んでいつた。

「もう寢むんですか。」

「えゝ、頭痛がするんです。」

云ひすてゝ、柱時計の方を見上げながらのつそりと、それでも九時半頃だと見て取つただけで、裸のまゝ母の前を通りすぎてやつた。が次には小走りになつた。

大急ぎに寢間着をひつかけて、頭まで布團の中にもぐり込んだ。

とつぷりと水底に沈んだやうな、落付くところへ落付いた感じだつた。そしてそれがなぜか、不用意の力に投げ出されたまゝ悚んでしまつて、身動きが出来なかつた。

一度……或は二度……母が様子を見に来たやうだつた。が黙つてゐた……といふより、本当にはつきりとは意識しなかつた。

二重眼瞼の眼がちらちらと動いてゐた。それが時々ぢつと真正面から覗きこんできた。

胸の奥がきりきり痛んでゐた。

「あたし、あなたが好きになつた。……ね……ねえ……。」

感情に抵抗してみるつもりだつたが、その「つもり」のために、却つて自分の方から落ち込んでいつた。

「あたし、何だか顔見られるのが嫌なのよ。」

畜生……と思つて黙つてゐると、顔が真向になつてきた。

「何を考へてるの。」

「困つた。……君が好きになりさうだ。」

「さう、嘘にせよ嬉しいわ。」

二重眼瞼の眼が、瞬くたびに微笑んでゐた。それが、なりきつたところではなく、本当に可愛いと好きになつた。

どうしたらいゝか分らなかつた。

すぐそこに近々と微笑んでゐる眼が、いつまでも消えなかつた。

それが、夢にも……現にも……朝まで続いた。他の一切にどうなつたつて構はない。その眼だけが……。

八重といふ名前の下に「さん」をつけ、「ちやん」をつけ、「子」をつけ、更にまた「子」に「さん」や「ちやん」をつけ……あらゆる名前で呼んでみた。そして最後に、八重子……。ちらちらとする眼が微笑んでゐた。

……………………

母が二三度起しに來た。上の空で返事をして、やはり頭から布團にもぐりこんでゐた。濕氣に息苦しくなると、頭を覗き出して眼をつぶつた。

我慢出來なくなつて起き上つた。もう十一時を過ぎてゐた。

「加減でも惡いんですか。」

「何ともありません。」

冷たい水で顔を洗つた。悲壯な氣持だつた。……母なんか、家なんか、何もかも、どうとでもなつてしまへ。……そつくせ、誰の顔も眞正面には見られなかつた。むつつりと默りこくつてゐてやつた。

「御飯は午に一緒に食べます。」

食ふ氣もなかつたが、さう云つておいて一寸外に出てみた。

晴れてはゐるが淡い日の光だつた。それでも强すぎた。櫻の枝に蕾が赤くふくらんでゐた。垣根の下に、青い草の葉が三つ四つ、冬を越したのか——そんな筈はないが、もう萌え出したのか——それもおかしいが、力なく首垂れてゐた。

薄暗い悲壯な氣持にとざされて、胸がしきりに痛んだ。

廣い通りに出て、そこのレストーランにはいつた。

「定食。……それから、日本酒を一本くれ給ひ。」

うつとりと思ひつめた氣持のために、裝はずして大人の態度になつてゐた。

片隅に三人の客があつた。こちらに背を向けて、白い壁と睨めつこをした。花瓶の中開きの桃の花が、淋しげに冬々としてゐた。

ゆつくり酒を飲むつもりだつたが、料理の皿が次から次へ早く廻されてきた。

氣の利かないボーイだな。……何とか云つてやらうと思つたが、變に顔を見られる氣がして云ひ出せなかつた。これでも、料理はうまかつた。チップを奮發してやつた。

二人で……あの家に行つて、名差しをすれば、彼女は來てくれる筈だつた。……そこへ、大きな地震でも來て、からがらつとなつて、二人だけ生き殘つて逃げ出す……。

馬鹿な……。だが、何もかもひつくり返つてしまへ、滅々となつてしまへ。

日の光が恐れられた。……暗く、天地晦冥になつてしまへ。

胸が切なくしめつけられて、きりきり痛んだ。二重眼瞼の眼がちらちらして、目近に微笑んでゐた。

電車や自働車や自轉車が、素張らしい勢で走つてゐたけれど、みた、宙を飛ぶやうにふわふわしてゐた。着飾つた女共が、どいつもこいつも醜かつた。通り過ぎる男共は、馬鹿げた顔をしてゐた。……だがそんな奴、俺は天下に一人も用はないんだ。

痛む胸に彼女の眼付を秘めて、一心に想ひ耽つて、當もなく歩き續けた。

犬の仔が幾匹も面白さうにふざけてゐた。

……………

決心をきめて、眼を据えながら家に歸つてきた。母の出樣一つでは、こちらにも覺悟がある、と思つてゐた。

ところが……口元に笑みを浮べて、やさしい眼付で迎へられた。

「氣分はどうなんです。」

「何でもありません。」

不機嫌にぶつきら棒に答へたつもりだつたが……。

「どうしたんです。面白さうに……にこにこした顔をして……。」

びつくりして、きよとんと首を傾げてみた。

「何か嬉しいことでもあるんですか。」

張りつめてゐた氣が弛んで、その拍子に、ふいに、飛び上りたいほど嬉しくなつた。

「愉快なことがあるんですよ、お母さん。」

とんとんと歩き廻つてやつた。それが自分でも變で、ゆつくり考へなければいけないと思ひながら、何にも考へられなかつた。計劃してたことだけがすらすらと口から出た。

「めつけ物をしたんです。素敵な書物があるんです、古本屋に。……三十圓下さい、すぐに……。」

「三十圓ですつて……」

「ええ、それで大變安くなつてるんです。早く買はないと、他にも買手がついてるんです。是非いる本なんです。」

「そんなに急いだつて……。」

「いえ、急ぐんです。……買ひたいなあ。」

堪らないやうな風をして、室の中をとんとん歩き廻つてやつた。
「そんなにほしいものなら、お父さんに話してあげませう。」
「え、お父さんに……。」
しまつた……。父の存在をすつかり無視してゐたが、丁度父が家にゐる日だつた。……だが……まあいゝや。
やけ安に落付いてきて、火鉢の側に屈み込んだ。ぼんやりして、淋しかつた。
そこへ、父がわざわざ書齋から出て來た。
困つた、困つた……といふ氣で縮こまつてゐると、父は仕事疲れらしい伸びをしてから、煙草を喫ひ初めた。
「欲しい書物があるさうだが、どんな書物だい。」
びくりとしたが、神妙さうに云つてやつた。
「英語の本です。中世紀の風俗を調べたもので、素敵な挿繪が澤山はいつてゐます。ロンドンで出たんですが、絶版になつてるから、注文してもないんですつて。それが古本屋に出てるんです。」
「うむ……。」
父は煙草の煙を息と一緒に呑み込んだ。そして咽せ返りもしないで、悠暢に落付いてゐた。
「それは面白さうだね。……ぢやあ買つてくるがいゝ。買つてきたらすぐに見せてごらん。」
「えゝ。」
母が立上つて金を出してきてくれた。
新らしい十圓札一枚だつた。受取つてから冷りとした。それをてれ隠しに、兩手で紙幣を引張つて、ぱんぱんとやつ

て見た。いい音だつた。

「何をしてるんですよ。破けるぢやありませんか。」

「はゝゝ。」と父は人の善い少し馬鹿げた笑ひ方をした。「實際紙幣の紙は、玩具にでもしてみたいくらゐいゝ紙だよ。いくら他で眞似ようとしても、決して出來ないんださうだ。」

云ひながら、少し禿げかゝつた額でのつそり立上つた。そして近眼鏡の奥に眼を一つぎろりとさして、それから向ふへ出て行つた。

何だか身が縮こまつてきた。……父は感づいてゐるのぢやないかしら。うつかりは出來ないぞ。

いつまでもぢつとして、默りこくつてゐた。

「早く行つてきたらいゝでせう。……あ、さうさう、御飯を食べてからにしますか。」

「えゝ。」

……………

食べてから餘りたべたくない腹へ、無理に茶漬を一二杯つめこんだ。

母も一緒に、干物の匂ひを立てながら、つゝましく食事をし初めた。牛乳だけを飲んだ父は、散歩代りに庭を歩いてゐた。

「こんど井上さんがいらしたら、昨日の御禮に御馳走をしてあげなければいけませんよ。」

そんなことを云ひかける母の側から、ぷいと箸を捨てゝ立ち上つた。が、さて、變に身の置きどころがなかつた。

縁側に立つてゐると、庭の植込の影に父の姿が見えた。

「お父さん、外に何か用はありませんか。」

一寸機嫌をとるつもりで云つたんだが、父は別に怒つてる風も……凝つてる風もなかつた。

「上野はどうだい。……もう咲いたかな。」

庭の隅から伸び擴がつてる、低い櫻の枝の下を、父は淺黒い顔で歩いてゐた。

「まだでせう。」

「さうかな……。兎に角この……櫻の咲きかける時分が一番眠いもんだが、お前も休みだからつて朝寢をしないで、しつかり勉强しなくつちやいけないよ。」

だが……調子も穩かだし、こちらを向ひてもゐなかつた。

あまいもんだ……。親馬鹿……子馬鹿……。

ぴよんと飛びはねて、母のところへ戻つてきた。母はまだ飯を食つてゐた。

「行つてきますよ。」

云ひ捨てゝ表へ飛び出した。

後顧の憂ひなし。……書物は賣れちやつたと云へばいゝ。

明るくて靜かだつた。何もかも晴れ晴れとしてゐた。けれど……不思議に氣持がぼやけてしまつた。何もはつきり浮んでこなかつた。

前日から、長い長い時間がたつたやうだつた。

「嘘、嘘、初めてぢやない。」

なるほど、初めてぢやない……かも知れない、と思ふほどつまらなかつた。

くそ、面白くもない……。

二重眼瞼のちらちらした眼付が、何處を探しても見つからなかつた。餘り晴れ晴れとしてゐた。

それでもやつぱり……事實は事實だ。

往來の石ころを下駄の先で蹴飛して歩いた。ころころとよく轉つた。

そんなもんだ、そんなもんだ、貞操なんて。大切でも何でもないたゞまん圓い玉、どこへ轉つてゆかうと平氣だ。溝の中へでも、青空へでも、勝手に轉つてゆけ……。

こつん……こつん……と、下駄の先に當る石ころの音が氣持ちよかつた。

昨日俺を連れ出した井上のところへ行つて、どんなもんだい……とこつちから云つてやつたら……。或は父と母との前に何もかもぶちまけて……。第一父母なんてものが可笑しかつた。

懐手の先で探つてみると、すべすべした紙幣がたしかにはいつてゐた。……大事に使はなくつちや。

あなたが好きになつたつて……馬鹿にしてやがる。

然し……どうしていゝか分らなかつた。餘りに晴れ晴れとした暢かさだつた。どこかへ……まん圓いものが轉つていつて見えなくなつてゐた。涙が出さうなほどすがすがした胸心地だつた。

どうしたら……畜生……。しきりに石ころを蹴飛してやつた。



敗れたる人々

悅田喜和雄

1

『あゝ！腹が空つた。甘藷どこぜ？』兄の清吉は土間へ入つて來るとすぐかう云つた。

『見てみい、裏口の吊棚じや！』母は腹だゝしく、見向きもしないで云つた。

清吉は母が云つたことがしやくにさわつて　―何云ひやがるどんちき奴！―と心で云つて小聲で枯すゝきの唄をうたひながら裏口の吊棚に載つてゐる籠に手を入れた。手は甘藷に觸れた。脊伸びして中を覗た。そして、大きなうまさうなのを三つほど持つて爐の間へ上つた。そこへ坐ると火箸を取つて、中の起火をかき出した。

煙草を吸ひながら寒むさうにして坐つてゐた父の馬太は、顏を上げて、緣の爛れ

た眼をバチ〳〵させ淸吉の顏を見た。淸吉は父の方を見やりもしないで、かき出した起火の上へ甘藷を投げこんだ。

戸外をバタ〳〵走つて來て、

『あゝ、寒むい寒むい！』と云つて弟の光夫は手荒く戸口の障子を開けた。そして、土間へ走り込で竈の傍へ來た。

『寒むうてたまらん！』光夫はも一度かう云つて土間から爐の間の上りたへへ腹這ひになつて、爐の火に手をかざした。

『草履ぬいで上れ！』と淸吉は云つた。

『兄やよ、イタチが居るがなう、今夜おすやつたろか？』

『おすやりや一漏きりでとれるは、』

『とつたつて、五十錢や六十錢かしないのになんすりや、それより、その手間でリンダシ（馱賃擦）でもしてみい、それがましぢや、あれやつて命がほしいは！』父は俯向たまゝで云つた。

『なんぞエサあるか知らん？魚があつたらえゝけんど、』光夫は父の云つたことに耳をかさずに云つた。

『カニでもとつてやりやえゝは、』淸吉は焙れた甘藷を出して食ひながら云つた。弟は上らないで、腹這ひになつたまゝで、兄が焙つてある甘藷を取つた。

『それ俺がんぞ、こら、食ふなよ！』と淸吉は光夫を怒つた。

『一つ呉れ！』光夫はかう云つて早食ひだした。

『があきや、取つて來て焙れ、』淸吉は取返はしなかつたがかう怒つた。

『甘藷位に喧嘩やせずに何程でも取つて來て焙れ！何のことな、三十が來るのに子供のやうに喧嘩して！』と父は小言

を詰つた。

光夫は甘藷を食ひながら立つて居間の方へ行つた。

『俺にも二つ三つ持つて來て見れ！』父はかう云つた。

『そら。』とゝ（父）は自分も食ひたいのつて怒るんぞ！』と淸吉は云つた。

『そんなにして、二つや三つゞつ運はずに籠のまゝ持つて行け！』と母は爐の前から云つた。

『漬物ないけかゝ（母）甘藷ばつかりじや胸が燒ける』と淸吉は云つた。

『戸棚にあるは欲けりや出せ！』

『上つて來い。そして早よう茶でも呑んで仕事に行かんか。われ等俺が働かんと、いつまでたつても坐つとんぢや、俺やつて身體が弱くて働けないのぢや。あゝ、これぢや困る！』父に胸で手を組んで眼をジヤク〳〵させながら云つた。

『そら、出たぞ。うんと働かんと百姓もてんて。食ひ込で了ふて年貢も出來んぞ！』と云つて光夫は父の方を見て嘲笑つた。

『一生麥飯かんで、ほけいも（甘藷）のお八つで濟すんじや。さうせにや百姓もてんでなう！』淸吉もかう云つて光夫と顏を合せて嘲笑つた。

『そら、そんなに甘藷の皮や、はしを殘したるか、もつたいない。罰あたりたじや。そんなことで百姓もてるか。みな炊くとき洗つてあるんぢや。少しこげたら食はずに捨て。灰がついたら皮を捨たりしてたまるか。そんなにすんなら焙らずに食べ、炊へてあるんでないか。』母は淸吉や光夫が爐の緣へ甘藷の皮を積んでゐるのを見て云つた。

『なんでもかんでも腹がふくれたらえゝでないか。これなんだ。半分も殘して！』と父も怒つた。

『これ腐つとんぜ!』

『少々腐つとつたつてかもたか、一寸腐つたら食はんのじや。そんなことでだうなりや!』と父は又繰返して云つた。

『甘藷の腐つたのや、石まで食はなきや百姓もてんのじや。』光夫は兄に云ふやうに、兄の顔を見て云つた。

『さうすると、そら!眼が腐つて、身體が弱くなつて働けなくなるんじや!』清吉は父弟の顔を見て云つた。

父は鼻をずん／＼鳴らせながら湯氣のたつてゐる甘藷にかぶりついて食つた。

『そりやさうと、お前明日でも親方(地主)へ行つて、米にして見たら思つたより少なかつたつて云つて、もう一割でも引て貰つて來たらだうぜ。今年ごとに二割の引つちや可哀相なぜ。他處はみな、四割じやの五割じやの引てもろとんのに!』と云つて、母のおしもは返事を待つやうに、父の馬太の顔をジロ／＼見た。

『そんなに云ふたつて、もう刈取つて了ふてやくにたつか。米にして了ふて引て與れ云ふたつてそんなわけにいくか、』と云つて馬太は俯向いて眼をじやく／＼／＼させた。

『だう云ふぞ。も一度いふて見たらえゝでないけ。お前はいつでも、親方が來た時うんと泣かんので役にたゝんのじや。川向ひの萬さん見んせ、今年のやうな年でないと小作は助からんて云ふとるでないけ。平均五割も引て貰つた云ふんないけ。親方も親方じや。默つてゐる氣のえゝ者には氣のえゝやうに引て與れるとよいのに。それをして與れんのつて困る。』おしもは歯痒さうに云つた。

『うちは親方の田を作つて上ますんぢや。親方はえゝ小作持つたもんじや!』と清吉は云つて淋びしく笑つた。

『眼の見えん親方だなう、萬さん家の五割引とうちの二割引と併見へみたらわかりさうなもんぢや、あれが見えん親方盲じや!』光夫は顔を赤くして云つた。

『云はんのつてじや、萬さんはどんなことでも云ふ、もう小作やめるつて云ふと親方怖がるんじやけんど、うちのとゝ

は小作せにや飢え死ぬやうに云ふのつて親方がみすみす見とんじや、うちのとゝつあん、親方へは何にもえゝ云はんのじやもん！』おしもはくやしさうに云つた。

『だうしても云はにや損ぢや、何て云はれても、へえ〳〵云ふて居ると皆から馬鹿にされる、あいつならかうしも何にも云ひまいと思とどん〳〵つけ込んで来るんぢや！』光夫は腹だたしく云つた。

『えゝは、萬さんのやうなことせんもんぢや、罰があたるは！』馬太は皆をなだめるやうに云つた。

『罰があたる、罰があたつてお金が譯山出来る、うまい物は食ふ、綺麗な着物は着る、どつちに罰があたるかわからない』と云つて清吉は淋しく笑つた。

『二割引て呉れたら一段に五斗位の利があるなう、一町で五石か、それから肥料代引たら何食ふて生きりや、小作さんはありがたいなう！』と光夫は皮肉を云つた。

『さうさ、そんで麥飯も食えるし、ぼけいものお八つが食えるんぢや！』又清吉も皮肉を云つた。

『一年に二十石と三十石も儲けては百姓がもてんか、麥飯やぼけいものお八つが食えなくなるか、』光夫は又かう云つて皮肉に笑つた。

『阿呆云ふな、そんでも今まで、六十三まで麥飯にもせよ、ぼけいものお八つにもせよ、食いはずしなしに、親も養つたし、お前も大きくして来たんぢや！』馬太はかう云つてキロ〳〵眼を光らせて光夫や清吉の方を見た。

『もう百姓やめたらえゝんじや、俺と兄やとが働きや、お前等二人位、毎月米の飯に魚のさしみで食へる、なう兄やよ、さうしたらだうなア！』

『さうすりやえゝが、とゝやかゝがえやめるか、百姓せにや食つて行けんと云ふは！』

『お金儲澤山しては百姓もてんか！』

『百姓もてんより、うちに百姓やめたら親方もてんぞ！』

『阿呆云ふな、働くのが役に立つか、かうして百姓をして居りやこそ田の方の垢や畑の方の垢で食つて行けるんぢや、そりや米やつて甘藷やつて、お金になるやなえゝ物は食えんが！』と馬太は云つた。

『そら出た、そら出た！』と光夫が云ふと、

『ハハ、、、ハハハハ！』と清吉は笑つた。

『今のやうな世なら、土方にしたつて山働したつて賃は澤山とれてえゝけんど、こんな世は長い間續けへん、土方や、山働は一日だけ見ると澤山儲かるやうなが一年ならすとあけへん、百姓よりおとりぢや、百姓は日割にして算用ら、一日二十錢か三十錢にかならんやうなが食つて行けるのがみようぢや、百日百拆で、十日や二十日病氣して寢たつてかはりはないんぢや、そこがさんぼうさんを作るお陰ぢや、』と母は云つた。

『そら、出たぞ、だうしても百姓やめたらほせ死ぬつてなう！』

『やはり麥飯はえゝと見えるなう！』と云つて兄弟はそろつて笑つた。

『俺もう正月から働に行くは、よかつたらお前も來い、大阪か神戸へ行つて仲仕でもしてやる！』と光夫は笑つて云つた。

『うん！』と云つて清吉は光夫の顏を見た。

『働きに出たつて何のクソになりや、叔父等見い、働きに出る、働て儲けたら父や母にお金送つてやるつて云つて出て行つたが二人が二人ながら、揃ひも揃つて親の死目にもえ逢んでないか、お金送ること云つて、今は何處に居るやら居、

處も知らさぬでないか、あんなことでだうなりや、』おしもは馬太の兒が二人が二人ともゆくゑ不明になつてゐることを云つて、怒つた眼つきで馬太を睨んだ。

『どら、話は唐中さんの晩にして働かう、もうすぐ晩だぞ、俺が坐つて居りや、お前等はいつまでゝも話して坐つとんじや、やはり年とつた親がさきに立つて働かにやならん！』と云つて馬太は立つた。

『話ばつかりして百姓もてんか、どら働かう！』かう云つて清吉が立つと光夫も一緒に立つて土間に下りた。

2

太陽が入つて了ふと、寒くて手が出せなくなつたので清吉は、侍が刀を差したやうに、熊手を腰に差し、懐手をした。そして、寒さを耐えるために『シツシツ〳〵』と云ひながら俯向て道ばかり見て歩た。

門口を入るとすぐ熊手を腰からぬいて、右手の納屋の中へ投げ込んだ。そして、後も見ないで家に入つた。

『シツシツ、寒い〳〵！』と云ひながら清吉は土間を竈の方まで行つた。

『寒むかつたどらうが？』さき歸つてゐた父は、ぼろ〳〵になつて、處々綿の出てゐる綻開着を体にあてゝ、爐の中へ這ひ込むやうにして頭の下でチロ〳〵火を燃してゐた。

『えゝ、シツシツ〳〵』清吉は父の方を見ながら燃てゐる竈の方へ手を出した。

『清吉がこゝへ來て陣取つたら何にも炊けへん、湯が沸とるは、湯使ふて上へ上がれ！どらのけ、消かゝつたでないか、早よう炊かな夜飯の間にあはぬのじや！』小桶を提げて這入つて來た母はかう云つて清吉をのかせた。

『早よう足洗ふて來て上れ、光夫は何處へ行つたんな、又イタチか？』父は斯う云つた。

『シッシッ寒い！』清吉はかう云ひながら腹這ひして爐で手をあぶつた。

『又、癖の悪い。早やう足洗ふて來い！』父は腹這ひになつてゐる清吉の顔を覗て云つた。

『どら、足洗ふて來て飯食つて寢やうか？』清吉は腹這ひのまゝ獨言のやうに云つた。しかし立たうとはしなかつた。

光夫が這入つて來た。

『あゝ！　寒む〳〵あゝ痛い！こらこら！』と云ひながら、すぐ清吉とならんで腹這ひになつて、黒く垢じみた西洋手拭で頬冠した頭を爐の中へつき出して、凍つて延びない手にハア〳〵と息を吐きかけた。

『寒いのにテンゴの皮してなんすんな！』父は笑ひながら光夫の手を見て云つた。

『ああ痛い！あゝ痛い！』と云つて光夫は手の痛みを耐へるために身體を揺ぶつた。

『寒いのにたまるか！』清吉は光夫の手を見て云つた。

『そんでもとれたら足袋一足になるんじや！』光夫は鼻をつまらせて、泣くやうな聲を出して云つた。

『しばらく懐手しとつて、ちつとぬくもつてから焙つたらえゝんじや！』父は見かねて云つた。

『懐手くらひでぬくもるけ、あゝ痛い！』

『どら、足洗ふてかうか』清吉はかう云つて立つた。そして、ドブロク入れの白徳利をころがしたやうな頬冠をねぢこんだ光夫の頭を見てにた〳〵笑つた。

『光公は今イタチにやられとんじやなう！』清吉は爐の傍へ手燭を持つて來て、も一度光夫の白徳利を見て云つた。

『見て居れ！そのかわりにお正月にはイタチがえゝ足袋穿かせて呉れるは！』光夫は負けずに云つた。

「光夫も早よう足洗ふて來い」

「今兄やが洗ひよんないけ！」光夫は不服らしく怒るやうに云つて、茶釜ごしに父の顔を睨んだ。

清吉は足のさきだけをチョコ〳〵と洗つてすぐ爐の間へ行つた。

「あら、それがだうたへ、拭て來いまア、湯使ふ云ふたつてたゞ盥の中へ足を入れたゞけでそのまゝひきにげて來るんじや、それがだうない、後前にそら、土がついてゐるでないか！」光夫の白德利は横にころげて、清吉の足を見て云つた。

「ぬもたか、痛くて洗えぬのじやひゞが一杯じや！」清吉はかう云つて座つた。

「拭かんのつてじや、そんな足して布團の中へ這入つてたまるか」父は胡座した清吉の足をジロ〳〵見て云つた

「獣の蒼皮見たいな足、それがだうなえ、どら、洗ふて來たらうか」光夫はかう云つてたつた。

「あゝ！寒むいじやの何じやのと云ふて、かうして毎晩よなべ（夜業）も碌すによいなりたれじや、俺が働かぬと皆倒かぬ、これじや困る！」馬太は父こぼしだした。

清吉は俯向て眼をジヤク〳〵させてゐる父を見た。寒むい處から暖かい家に這入つて、のんびりした心が急に、クジヤ〳〵とへし折られて了つた氣がした。そして、うんと自分の心をひん曲たいやうな氣になつた。と、壞れかゝつた人形を見てゐるやうで、うち壞して了ひたいやうな氣になつてグツと唾を呑んだ。

「兄やよ、そんなことで百姓もてんぞ、草履でも作れよこら、毎晩夜飯食つたら寢てなんいことな、ちと氣を付けて働け！ハハハハとは云ふものの俺もあたろか！」光夫はかう云つて清吉の傍に胡坐した。

「これでこそ百姓はもてるんぞ、きう働てお金でも溜めたら百姓もてんやうになる、お金が出來たら夜飯も食えぬでな

う！』と云つて清吉は笑つた。

『どら、もちつとひざを小さくせエ、そんなことで百姓がもてるか、』と云つて光夫は左の足の膝坊子で清吉の右の膝坊子を壓つけた。

『さうせられては俺の百姓がもてんでなう！』

清吉はうまくはずして光夫の膝坊子を壓つけた。又光夫はうまくはずした。兩方が膝をたてた。そして睨みあつた。

『むざ〳〵やられては俺の膝坊子がもてんでなう！』

清吉は光夫の膝坊子に氣をくばつて、故意に膝坊子を下して、光夫の膝坊子が下りて來ればすぐすつぽぬかしてやらうと待かまへた。

『さうむざ〳〵かゝつては俺の膝坊子がもてんでなう！』光夫はかう云つて、立てた膝坊子を下さなかつた。

『そら、雜炊が出來たぞ、』母は竈から大きな鍋を提げて來て爐の傍に置た。

『だうなへ、又雜炊か！』光夫はかう云つて顏をしかめた。

『雜炊も雜炊も小米におとし葉（大根の葉）の雜炊じや、うまいぞ！』清吉はにや〳〵笑ひながら云つた。

『人間の食ふやうなもの食はぬのじやもんのを、馬や牛のやうなもんじや！』光夫はこぼした。

『さうさ、これでないと百姓もてんのじや、えゝ物は全部親方へ押上げて殘りの小米におとし葉か、ハハハハハ！』清吉も皮肉を云つて笑つた。

『そりや！これなんなおとし葉ばつかりじや、これだうなこれ、おまけに長なりじや切つてない、こら！』光夫はかう云つて黑くなつた一尺もある菜葉を挾み上げて清吉に見せるやうにした。

たうち、一つ食つてやらうか、これだうな思じやぞ、病気になつてはたまらんぞ！』清吉はかう云つて食べ、、、

『これはまたえらい雑炊じや、家の叔母さんおまの云ふ、大井なうちおまそこに奉公にゐた時分に、おまへは冬が来たら寒むいからつて云ふて、毎晩雑炊じやつは、、、おとし栗ばかりで、大きな皿一皿に小米が十粒位入つとんじやつは、下男など面白がつて、

『俺茶葉ばかりさき食つて、後の口癒に米は残すんじやつて云ふておどけてゐたつは、これから見たらこれは結構すぎるぞ！』父は雑炊の入つた皿を手に載せて、これを吹きながら云つた。

『そりやこの位ぞ、これより米が少なかつたら茶葉汁じや、雑炊じやないぞ！』清吉は食ひながら弟に云つた。

『俺一つやつたろ、口癒に米だけ残して後で食つたろ、』光夫はかう云つて故意に茶葉ばかりさきに食つた、

『これだうして米を搗かんのぜ、おまけに玄米じや、なんちやうまくない！』清吉は母に小言を云つた。

『こんな悪い米搗てたまるか、搗たらみな粉になつて了ふは、これがうまくないことがあるか、』母はすぐ清吉を怒り返した。

『ありや、』光夫はかう云つて口に入つてゐた物を皿の中へ吐出した、そして、

『石か入つとつた、何だか油臭い石が！』と云つて皿の中へツイ〳〵何かを吐き込んだ。

『だうなへ、こんな物が食えるか、』光夫は這ふて行つて土間へ首を出して唾を吐た。

『少々石が入つてゐたつてかもたか、石ばかりが食えるか、噛まずに何でもかんでも呑み込たらえゝんじや！』母は眼を丸くして云つた。

『食えるか、食えるか』光夫はかう云つてやはり唾を吐へてゐた。

『拵てもらへ！』と清吉は云つた。

『いらん〱、こんな物食ふよりは寢たがましじや、イヤ〱！』光夫はかう云つて、そこへ仰向に寢て了つた。

『そんな處に寢たら風邪引くぞ、こら、光夫！』と父が云つたが光夫は返事をしなかつた。

清吉は鼻をズン〱云はせながら食つた。父は胡坐した足に肘をたてゝ食つた。

『お前なんぜそれ、鼻汁が皿へ入るでないけ、それがだうなるぜ、ありやきたない！』母は鼻汁を垂らして雜炊を食つてゐる父を見て云つた。清吉も父を見て顏をしかめた。

『それ〱皿の中へ落ちこむでないかへ、あゝ〱〱！』母は顏をしかめて云つた。

馬太は着てゐる仕事着物の筒袖をひき出して、するりと横に拭つた。

『あゝ、それがだうなるぜ、きたならてよりつけん！』母はかう云つてから又食ひだした。

清吉も顏を反向て食つた。食つて了ふと、

『寢たろか、寢んか光公！』清吉はかう云つて寢てゐる光夫の足を輕くたゝいてから立つた。

『腹が減つて眠れるか、甘藷ないんけ？』光夫は仰向に寢たまゝ云つた。

『炊たのはないは、生を持つて來てこゝの灰の中へ押込んどけ、そしたらじき燒けるは！』母は皆の食つた皿をかたづけながら云つた。

『何處にあるぜ？』

『中の間の口のふごに入つとるは』

『取つて來て燒たろ！』光夫はかう云つてたつて行つた。

母は集めた榾を持つて土間に下りた。

光夫は甘藷を四つ五つ持つて来て爐の灰の中へ差込んだ。

父はエヘン〳〵と咳拂しながら煙草を吸ひだした。

『あゝ寒い〳〵、一とあたりあたつて寝たろか！』小便して這入つて来た清吉はかう云つて爐の縁に胡坐した。そして、自分の前へ起火をかき出した。

3

爐の間の、大黒柱に打つけた五寸釘から垂れてゐる、十燭のうすぼつた光は土間へ来るともう薄暗かつた。

夜飯を食つて、暗い土間の隅で藁を打つてゐた父は、

『来い、俺もうえゝんじや、こゝで打て！』と云つた。

光夫は馬屋の口で藁をそぐつて来て、戸口から土間の隅を覗たが暗かつたので戸口の障子を締めて戸外に出た。

『打たんのか？』馬屋の口で藁をそぐつてゐた清吉は不思議さうに云つた。

『だらなへ、あんな暗い處より戸外がなんぼかえゝやらわかるか、今日は十五日か四日か？』

『十四日だらうが』

『今夜の月みい！雷氣よりよつぽど明いは、綺麗なのみ、』かう云ひながら光夫は戸口でトン〳〵藁を打だした。

『寒むくないと戸外でゞも草履作れるけんどなう！』と云つて清吉もそぐつた藁を持つて来て戸口に立つて月を見た。

『あの月みい！』

『槌あるか？』

『土間へ行け、とゝ（父）が使つてゐたのがあるは！』

『とゝ（父）早打つたのか？』

『をゝ！』

『早いなら！』

清吉は土間へ這入つた。

澄みきつて、底の小石まで一つ〳〵がぞへられる川の中のやうな靜かな月夜に、小石を投げ込むやうに、トン〳〵と内と外で兄弟は藁を打つた。

母は切乾大根にする、くずの大根を洗つて入つて來た。

『毎晩かうして、皆が夜業したらえゝけんど、うちの人らつな、もうだらもかうもならんようになつてからでないと草履も作らんのじや、毎晩二人がかうして作つてみい、三足づゝ作つても九足じや、賣り出せるは、』と云つて土間へ這入つて行つてから『あら、お前そんな處で作りよんけ、それがたうなるぜ、草履の一足や二足作つて貰つても後へ這ふ、掃除に困るでないけ！』と云つて父を怒りつけた。

『下で作れるか、この寒むいのに！』

『何が寒いぜ、誰やつて寒いのは同じでないけ！』

『あゝ、出來た〳〵、爐の緣で坐つて居ると寒むいけんど、一寸でも身體を動かすとぬくもるなら！』と云つて光夫は打た藁を持つて土間に這入つて來た。

「見たえへんか、何来たじやろ！」清吉は打ちながら云つた。

「もつと力を入れて打てまア！そんなにバッサ／＼俵が打投げるやうに打つたのでたたかれるか！」

「もう止めたんか？」

「打て打て！そんな位で来たへえるか」

「よくをえとんぞ！」

「どこで作るぞ、上で作つたろか？」と光夫は云つた。

「下で作れ、下で。掃除も出来んのに半数もごまかされてたまるか。見やな駄とる絵こちらへ持つて来て二十八本袋を作れ！」

母は怒るやうに云つた。

「へいへい！──来たか見やよッ！」

「そゝ、済んだ、よくをえた！」清吉はかう云つて自分が敷いてゐた藁をそのまゝ、光夫の傍へ出て来たりして、持つて

わた藁をそこへ投げつけてから藁の上へ胡坐した。

「ありや、カフ藁の首でないか」光夫は清吉が投げつけた藁の首を眺めて云つた。

「これで上等よ」清吉はかう云つて作りだした。

「俺の藁見て見れ、手桶が遊ぶぞ！」光夫は作りながら自分の藁の自慢をした。

「そりやさうと、お前明日二三枚方へ行つてもつて引て見れんかたのんで見んせよ、この秋から来年の[illegible]までは[illegible]や

ならんのに！」とおしもは両様さうに云つた。

「もうえゝは俺やつて一遍云ふたら覚えとるは、結婚し結婚したらのことなら、引にこぶ[illegible]出来るに！」[illegible]

と草履を作りながら云つた。
『何遍云ふたつてお前が行かんでないけ、たいがいなつこんじや、早よう行つてもう一押でも引て貰はにや皆死ぬんぞよ、』と父おしもはしつこく云つた。
『とゝあれ行つたつておけへんは、もうだうすりや、盗人にやられたと思ふて辛抱せんかつて云ふてあきらめつけて戻つて來るは！』と清吉は云つた。
父はスン／＼鼻をすゝりながら草履を作つてゐた。
『おゝ！まア何でもえゝは、俺兄やと違つて無理に百姓せいでも働きに出てやる、正月済だら今年こそ行つたる。』と光夫は云つた。
『俺やつて家を出られないことがあるか、何處に居たつてお金儲けて、とゝやかゝに送つてやりや同じでないか、』
『それがなか／＼むや、とゝやかゝが承知するかいや！』
『承知したつてせなんだつて俺が働きに出りや仕方があるか』と清吉は敗けずに云つた。
『阿呆！働きに出てえゝなりじや、叔父の書いた絵を書くんじや！』母はむきになつて怒つた。
『そりやわかつとる、俺りや働きに出たら儲け使ひにして、病氣でもして動けんやうになつたら歸つて家の者を困らせてやるんじや、』光夫はやはり敗ずに云つた。
『ほつとけ、相手にすな、云はせて置け！』父は母をなだめるやうに云つた。
『俺も働きに出てやる月に二十圓送りやとゝやかゝは米の飯で食つて行ける！』と清吉が云つたが皆は默つてゐた。
母の大根を刻む音がカン／＼と靜かなあたりにひゞいた。

4

光夫はたう〳〵頑張通して働きに出るやうになつて朝から仕事を休んで家にゐた。

『八幡さんへお詣して來たか？』さき歸つた父は、こた〳〵音をさせて中の間で何物を作つてゐる光夫に云つた。

『まだよ、』と母が云つた。

『だうしたんな父、今朝から遊びよつて、早よう行つて來い、晩になつて了ふでないか！』と父は怒つた。

『役にたつ奴でないわいな、叔父達の後繼じや、さつきから何度も何度も云ふのにだうしても行かんのじや！』と母は尻馬を追つた。

『行つて來いほら、今まで何しよんな父、今土間へ入つて來た兄も父母達の云つてゐることを聞いて云つた。

『俺もう行かんのじや、なんすんな八幡さんに詣たつて何になりや！』光夫はかう云ひはつた。

『行け、行け、行つて來い！』清吉も又怒つた。

光夫は默つて仰向にゐた。

『行けつて云ふたら早よう行け！そんな頑張坊で何處へ行つたつて相手があるか！』清吉は光夫の頑張坊が一番いやだつた。毆りつけて『うん』と承知させたいやうな氣がした。こんな頑張を何處へ行つたつて出すだらう、そして一緒に仕事してゐる人達から除け者あつかいにされて、果てには喧嘩をしてそこを出て、又他でも頑張を出して喧嘩をする又そこを出る。かうなつて喧嘩ばかりするならず者になつて世間をゴロつく光夫の前途があり〳〵と見えすいてゐるや

うな氣がするので又續けて云つた。

『何なその頑張は、行け行け！行つて詣つて來い、他處へ行つたらうちに居るやうに頑張たら相手にして呉れぬぞ、皆からにくまれて、光夫のことならたいがいさうじや、自分に力もないのに敗けずに頑張んじや！』やはり『お前等が云えば云ふほど俺は頑張んだ、』と云つたやうに俯向てゐる光夫を見ると淸吉は一層腹が立つて來た。

『行つて來い！』淸吉はついにかう怒鳴つけた。

『ハハハハ！』と光夫は顏を上げて笑つてから、『行つて來るは！』と云つた。

『早よう行つて來い、晴になるでないか！』と父は慰めでもするやうに云つた。光夫は立つた。

『他處の人には誰に逢つても大阪へ行くこと云ふなよ、云ふたら、又光公見い、叔父の後繼ぐんじやつて云ふて嗤れるぞ！』と母が云つた。

『だうしようがかうしようがほつとかんせ！』光夫はかう云つて口に行つた。

淸吉はすぐ湯を使ふ用意をした。父も母も默つて了つた。父は爐の縁に胡坐して俯向てゐた。母は爐の前の腰かけに腰をかけて、燃てゐる爐の中を見てゐた。

淸吉が湯を使つて爐の緣へ行つて胡坐すると、父が

『だうしても人間は喧嘩しないやうにせんといかん、他人が可愛がつて呉れん！』と云つた。

『そりやさうぢやけんど、うちのとゝのやうな他人が何と云つても、うんとも、すんとも云はぬ人間も困る、喧嘩位やつてのける人間でないといかん、もう、うちのとゝのやうな人はこりごりじや、傍から見る者が歯痒くてたまらん！』母は爐の方を見て云つた。

『喧嘩やかしするもんでない、ありや勝つても負けても馬鹿ぢや！喧嘩やして引合ん！』

清吉は母が云ふことがしやくなのでかう云つた。

『清吉もとゝと一緒じや、どうせ頭の上る人間でない、頭から小便たれかけても默つとる相手じや！』母はにく〱さうに清吉の顏を見て云つた。

『…………』皆は默つて了つた。少しして、

『さア、大阪大阪云ふて行くけんど、えゝのか知ら！』父は俯向て誰に云ふともなく云つた。

『そりやわかつとる、たいがい叔父の着た絣を着くんでじや！』母は顏の色を變へて云つた。いつも母が叔父のことを云ふとヒルに鹽をかけたやうに小さくなつて了ふ父がいつになく頭を上げて、

『そんなに叔父叔父云ふな、あれ等やつてどれだけ出世しとるかわかるか！』と云つた。

『わかつとらんけ、たいがい若い時には儲け使ひにして遊んで、年とつて働きが出來ぬやうになつたら、ふら〱歸つて來るんじや、何出世するぜ！』母は腹だたしく云つた。

父は默つて俯向て了つた。

電燈が明るくなつてから光夫は歸つた。

『來い〱！』と云つて、嬉しさうにニコ〱しながら爐の縁へ胡坐した。

他處へ行つたら家に居るやうに頑張なよ、きらはれるぞ！』とそこへ光夫が坐るとすぐに清吉は云つた。

『をゝ！人間は一緒に仕事してゐる者に可愛がられる位でないといかん、』と父はすぐ清吉の云つたことにつけたした。

『えゝ！わかつとる、年は無駄にとらぬはいな！』と光夫は笑ひながら云つた。

皆は默つた。家の中はシンとした。

「百姓も、もちつと食えよいとなり、働に行たりせいでも家で百姓しとりや氣樂なけんどなう！」清吉は光夫がゐなくなることを考へると急に淋びしい氣がした。百姓がも少し食つて行きよいものなら光夫は家に置きたいと云ふ氣がしてから云つた。

「親方へ云ふてもつといれ田（地代）引てもらつたらえゝんぢや。とゝが云はぬなら兄や行つて云ふたらえゝんぢや！」と光夫が云ふと。

「兄やがやつてとゝと同じや！何えゝいや！」と母がすぐ横から口を入れた。

清吉は默つてゐた。

「云ふて引て呉れんのならやめたらえゝんじや！無理に百姓せいでも他のことして儲けりや同じでないか！」

「うちの者が百姓やめて何して食つて行きや、馬鹿見たいな人間ばかりじや、物もろく〳〵云はぬやうな！」と母は怒鳴つた。

「百姓やめたつて食つて行かいで、止めたろか？光夫は大阪へ行き、とゝは次第に働けぬやうになりしたら百姓も出來ん、やめんかへ！」と清吉は赤い顔をして云つた。

「もうそんなげの悪い話やめんか、元氣のよい面白い話せんか、今夜は光夫の門出でないか！」と父が云つた。

「そら膳箱出せよ、赤の飯が出來ぞ！」と母が云つて小さい飯櫃をかゝへて上つて來た。

「お神酒（酒）の三合でも買つて來たらよかつたなう！」と云ひながら清吉は戸棚から膳箱を出した。

「そら、今晩は光夫が一番さきじや！」と云ひながら母は光夫の茶碗に赤飯をもつた。

弟がゐなくなつてから清吉はうんと淋しくなつた。飯時に膳を圍んでも、何だか家で一番大切なものを盜まれて了つたやうにひつそりしてゐた。父の顏は一層さびれて見えたし、母は相手を失つたと云ふやうな淋しさが何處となく表れてゐた。しかし、父母達の顏色の讀めた清吉は、父母達が光夫のことを云ひ出さないので——云ひ出したら一層寂しるだらう、平氣によそつて他の話をしやう、と思つても誰も他に話相手がないもので、父母達と一緒に話合つて、光夫がよい工場へでも這入つて元氣にやつてゐることを想像して父母達と一緒に喜びたい氣になつたので正午飯の膳を圍んだ時清吉はから云つた。

『光夫は廣い處であきれて口開つて居るぜ！』

『怖ろして、口入屋から外へ出んぞ、廣い處であきれて了ふて小さうなつとるは、おきなれて來るだらうか、』と父は笑ひながら云つた

『叔父御がしつかりしとつて見い、叔父の處へ行きや心配なしじや馴れるまで遊んでから仕事の口が探せるのに！』母が又叔父のことを云ひ出した。父は俯向て了つた。

『あしたハガキでも來るだらうか、あさつてだらうか？』清吉は叔父のことをくど／＼云ふのを聞きたくなかつたのでから云つた。

父も母も默つてゐた。少しして、

『だう世又叔父御の書いた網を書くんじや、始めのうちは手紙も來るだらうがお了いには又居處も知らさぬやうになる

んじや、困つたもんじや!』母は父を睨んで云つた。父は胸で手を組んで、その組んだ手を胡坐の中へ入れて這ふやうにして爐の中を見つめてゐた。

よいやうに考へて一緒に安心しやうとしてゐた清吉の心はすぐかき亂されてしまつた。父の味方をして、母をやつつけてしまいたいやうな氣がしていら〱して來た。母の顏を睨みつけて、母の口がだう動くかを待つた。しかし、母は何にも云はない。

『若い時は面白いこともして見な、こんな田舍で襤褸着て埋まつて居るやうなことで何のクソになるぜ。若い時は他處へ出て行かにや!』と清吉は赤い顏して云つた。

『オヽ!さうして代々居處もわからぬやうな人間が出來てよい物笑ひの種じや!』母は故意に落ついて、嘲やうに云つた。

『何程笑つたつて、笑ふ奴は笑せて置たらえゝんないけ、もつとしたら俺も出て行つたる!』と清吉は負ずに云つた。

『オヽそれこそ本當の物笑ひじや、さうして又親の死目にも逢えず、お葬ひには乞食じや、えゝなりじや!』

『乞食になつたつて食つて行けりや同じでないけ、監獄へでも這入たる。乞食でも百姓よりうまい物食ふ、』

『なんすんなそんなこと云ふて喧嘩して、何が面白けりや、早よう飯食ふて仕事に行かんか、お前等が諍するのを聞てゐると、俺は息が窄つて來るは、日の照らぬ穴の中へでも這つてゐるやうな氣がするは、あゝ〱!死んだらよいと思ふたつて死ねるもんじやなし!』馬太はかう云つて縁の爛れた眼をジヤク〱させた。

『お前がおたへ(妻)等が諍するのを苦に病んで死んだつてそれが何のたしになるぜ。そして又、その位の苦るしさでなんで死ねるぜ!』と母は毒々しく云つた。

清吉はクワツと腹が立つて來た。母を何かで死ぬほど毆きつけてやりたい氣がして胸がゾク/\慄へて涙がハラハラ落ちた。

『阿呆！ぶん毆るぞ！』清吉はかう云つて母を睨みつけた。母は清吉の眼を見ると直ぐ避けて俯向た。

『もうえゝでないか。繰返へ/\いやなことばかり云ふて泣たり怒つたりして何にすりや。ほかの面白い話して聞さんか。俺等はもう先が知れとんじや。ちつと顏の皺を伸して暮して見たいは！』父は爐の中の灰を火箸でいぢりながら云つた。

母と清吉も默つて了つた。

『四五日したら俺が親方へ行つていれくち（地代）のことも話して二斗でも引て貰ふて來るは。親方やつて鬼じやないんじやもの引て呉れぬこともないだらうと思ふは！』父はかう慰めるやうに云つたが母も清吉も默つてゐた。

『早よう飯食つて仕事に行かんか。仕事してゐるといやなことを考へないでえゝは！』と又父は云つた。

母は膳箱を出した。清吉は母の出した膳箱を默つてとつた。

6

母と清吉が正午飯を食つてゐると、親方へ行つてゐた父は歸つて來た。

『こんな何貰つて來たんぢや解かんか！父はかう云つて土間から手を延して爐の傍の莚の上に小さい俵を置た。

『何處に呉れたんぞへ？』母は訊た。

『親方よ、』

清吉は籠をとつて、爐の緣に置いた。

「親方に似合ぬ、澤山呉れたもんやなア！」清吉は笑ひながら中を見て云つた。

「これ燒て醤油つけて食べんか、ア、！今日の北風つて眼に泌みて、痛い！〳〵！」馬太は土間に立つて、から云つて緣の爛れて赤くなつた眼を手拭で押へた。

「今食べかけたところじや、上らん芋、食べんかへ！」母はから云つて、坐つたまゝ右へねじ向いて後の戸棚から黑い醤油徳利を出した。

清吉は起火をかき出して小さい鯛の子を、燒た。

「そして、だうであつたぜいれい（地代）の方は？」母は今上つて來て坐つた父にすぐから問ひかけた。

「あゝ、向ふへ行つて見りや向ふの云ふのも一理あるは、だうも思ふやうに行かんは！」

「思ふやうに行かんて、何遠慮があるぞ、云ふて云ふて、云ひまくつたらえゝんないけ、役に立たん口はたゝく癖にいゝことは何にもえ云はぬのじや、親方には何て云ふんぞえ？」母は歯痒さうに、眼をキロ〳〵させて、父の云はないうちに顔色でゝも見て取らうとするやうに父を見つめた。

「そんなに云つたつてこちらの云ふ通りには行かんは、」父はから云つて、手拭の端をカシ〳〵噛んで、眼に入つた土か小砂をとる時のやうに怖る〳〵赤くなつた眼におしあてた。

「歯痒もんじやなア！いつたい親方には何て云ふんぞへ？」母は父からくつてかゝつた。

『何て云やだあ！親方の云ふのもそりやあ、云ふのももつともじや、あゝ云ふのがあたりまへじや、いゝ口が高けりや高いやうにその氣はあるのつて、又其年其年で引てやる、つて云ふんじや、そりやさうじやはだ！』

『フン、そんなことで何になりや、そんなんだつたら云ふて云つたのも行かぬのも同じやうないけ、半日でも遊んだゞけ損でないけ！』母はから父を怒りつけた。

『……』父は默つて了つた。

『とゝはこんな馬日芝（小さい）のやうな鯛の子もらつて喜んで戻るんぞ、馬鹿な！』母は満吉に話かけるやうに云つて嘲笑つた。

『うちのとゝのやうな人は小作會にでも入つて會長にたのんでうまく話をつけて貰ふより外にえゝ法はない！』満吉は焼てゐる魚の手入をしながら云つた。

『その癖、小作會がある時つて云ふたら親方へつけて濟ぬつて云ふて會にや行つたことがないんじや、腰ぬけ奴つたら！』

父は鼻をズン／＼云はせながら、かわるがわるに左右の眼を、唾で濡した手拭で押へた。

母は續けた。

『小作會やつて、あの川向ふの萬さんが會長のやうになつて、かんでゐたけんど、なにしろうちのとゝのやうな腰ぬけがあるのつて一人かけあひするのがましぢや云ふて止めて了ふたんぢや、あの人は偉いは、自分一人でかけあひして今ではいれ口は平均八斗にして貰ふたつて云ふは、そんで萬さんはうちを嗤ひよるは、一石一斗のいれ口で何食つて行きやつて、一段と二段とでないか、』

『どうしても云ふ者がとくぢや、默つとつたら親方は眼が見えん、萬さんはどちらかつて云ふたら悪い人なんぢや、その悪い人には引た上に引てやる、うちのとゝのやうな右へ向け云ふたら三日でも右へ向て居、左へ向け云ふたら三日で

も左へ向て居るやうな人間には云ひわけのため位か引て呉れん！」清吉は焼た魚を皿に入れて醤油をかけながら云つた。

「うちのとゝのやうなことではいつまでたつても頭の上ることはないは、金を持きりおや！」母はかう云ひながら清吉から醤油徳利を貰つた。

「そんなら一遍わご（お前）が行つて来い、女やつて何がかもたか！」と父は云つた。

「おたへ（妾）が男であつたらあの位の親方頭上げますかへ、やつてやつてやりまくるんぢやけんど！」

「男やつて女やつて変るけ、行つてやりまくつたらえゝんないけ！」と清吉が云ふと、

「わご（お前）が行つて来い、男が二十七も八もにたつて、この位のかけあひが出来んやうなことで何のクソになりや！男が二人もあるのにその男を差置て女が出しやばれるか！」

「フフ！」清吉は、今父を怒りつけた母が自分に重荷が来かゝると逃げだしたのでおかしくなつて飯を食ひながら笑つた。

「笑ふつてあるか、本當でないか、わご（お前）もとゝと一緒で腰ぬけぢや！」母はかう清吉を怒つた。

「フフフフ！」清吉は一層おかしくなつて又笑つた。

「何がおかしけりや、笑ふとこであるか、食ふ食はぬの話でないか！」母は腹だゝしい眼つきで清吉を睨みつけた。

「もう百姓やめんか、なんでもないことぢや、麦飯食つとんだつたら他のことしたつて食えぬことないだらうぞ、俺もう毎日毎日お前等からふすべられていやになる！」と父は泣くやうに云つた。

「本當に止めんけ、だうなるぜこれが、休みなしに毎日働て、麦飯が食ひかねるんでないけ、皆がそれぞれ働かんけ、

俺そしたら大阪へ行く！』

『ほら、父親を捨てゝ家を出ることを云ひだしたら、叔父の歩いた轍を踏まうとして、行方不明の道の憂目にあはせた奴の眞似しやがらうとて！』

『大阪へ行つたつて無理に行方不明にならいでもえゝんないけ、何處に居たつてお金を儲けて送りや同じでないけ！』

『阿呆云ふな、わこらのやうな、眠つたやうな人間が何處へ行つたつてやくにたつか、大阪のやうな處へ行く人間は、人の眼玉をくりぬく位の元氣がなけりやあかん、わこもとゝと同じや、他人に唾を吐きかけられても默つて、へえへえ云ふとるやうな人間は何處へ行つたつて頭下りがするか、人間は、他人に喧嘩でもふきかける位でないとあかん！』母は又おはこを持出した。

『もうそんなことやめて呉れ、そんなこと云ひあつて何が面白けりや！』と父は云つた。

『お前もそんな泣きごとこぼさずに飯たべんけ』と母は父に云つた。

『俺親方で食べて來た、酒も一本！』と父が云ふと、

『オヽ！うまいことやつて來たなア、それぢやもんとゝが親方〳〵つてぺこ〳〵頭を下げる筈じや！』と滿吉が笑ひながら云つた。

『親方つてみようなんぢや、とゝが行くといつでも飯と酒を出すんぢや！』

『そんでとゝはひどいこともえ云はんのじやなア！』と滿吉は父の顔を見て云つた。

『誰でも同じや、其人を見ないうちこそ、今度こそ腹一杯云つてやらう、と思つてゐても逢つて見るとさうはいかんもんじや！顔見りや氣の毒になつて五つ云ふところを三つにし、三つ云ふところを一つにしてと思つてゐることの半分もえ

『云はんもんじや、おしもやつて、蔭でこそさう云つてバリ〳〵云ふけんどまさか逢つて其人の前へ行つてみ、え云ふか』と父は笑ひながら云つた。

『フン！何ぜそれ！腐つた鰯の目ン玉のやうな眼をして、何が嬉しいて笑ふのだへ、腹のたつどぐさり者、油とり奴が！』母がかう怒鳴つけると、少し明るくなつてゐた父の顔はすぐ淋びしい暗い顔にかはつた。そして腐り鰯の眼をジヤク〳〵させて母の錐のやうな視線を避けないで母の顔を見た。

『その眼玉なんぞへそりや、犬狼のやうな眼をして、とり悪者のやうな！』清吉は母のするどい、父を睨みつけた眼を見て云つた。

『何のことぬかすんな、犬狼、とり悪者、われがとり悪者じや、わしの油とりじや！』かう云つた母の眼からは涙がボロボロ落ちた。

清吉は母の眼の色が變つたので――しまつたと思つてすぐ俯向た。

『犬狼、とり悪者つて、わしがこれだけ家のために働て居るのがわからんか、ナン！クソ！』母は狂人のやうになつて身を慄せた。清吉は恐々頭を上げた。母のするどい狂人じみた眼は清吉を睨みつけた。

『ナニ！』と母は叫んだ。同時に手もとにあつた鉢や膳箱を爐の中へ投げこんだ。そのあたりは灰の煙からうずまいた。」

清吉も父も何にも云はなかつた。馬鹿のやうになつて母を見てゐた。

母は靜かになつた。氣の失つた人のやうに青い顔をして、何處を見るともなくぼんやり眼をすえて了つた。

『だうしたんぜかい（母）、だうしたんぜ？』清吉は母が死んで了ふのかと思つて慌て云つた。と、母のすんだ眼から涙がボロ〳〵落ちた。

『どうしたんぜ、どうしたんぜ?』と云つて清吉は母の傍へ行つて母の顔へ手をあて丶見た。

母は何にも云はなかつた。

『どうしたんぜ?そんなに腹をたて丶、これ〳〵!か丶か丶!』と云つて清吉は母の脊を撫た。

母は片手を眼にあて丶シク〳〵泣きだした。

父も涙をこぼした。清吉も何だか悲しくなつて泣た。

7

たまに弟から來た、一生懸命に働て、故郷へ錦を飾つて歸りたいと云ふ手紙を見ると清吉は胸を躍らせた。――俺も行つて、二人で助け合つて働て、うんと儲けて村の人達を驚かせてやらう?!――と考へた。四五日の内に父母達に話してうまく家を出よう――と思つても少しするとその熱がさめて――駄目だ。始めはこちらで麥飯を食つて働てゐたことを思つて眞面目にやるがすぐ向ふの生活に馴れてしまつて、こちらで麥飯食つて働てゐたことを忘れて、うまい物をどん〳〵食ひ、惡い遊びをする。母がよく云ふ叔父達のやうに終ひには家の方へは居處も知らさないやうになつて了ふのだ。

しかし、厭だ!家にゐるとするとこんな弱味噌ではとても食つて行けない、他人の眼へ指を突込で眼コ玉をくりぬく位の元氣がなくては食つて行けない、喧嘩を買ひかける位でないと駄目だ　清吉は自分が他人の眼コ玉をくりぬく、やうなことが出來るか出來ないかを考へてみた。

――ナニ!喧嘩もやつてやらう、蟲のよいことする奴には理屈を吹きかけてやらう!かう力んだ。しかし、すぐその

熱はさめて了つて——喧嘩買ひかけたり、理屈をまきかけたりすることは自分にはとても出來ない、理屈云つてやらうと思ふと早胸がだく／＼して舌が動かない、云ふべきことをえ云はないでうよ／＼考へてゐると胸が狹くなつて來て、ついに泣て了ふことを思ふと、

こんなことでは駄目だ、とても自分は喧嘩など出來ない——と思つて、今のさき、ナニ！喧嘩だつてやつてのける——と力んだことが、自分が隱れて惡いことをしてゐる處を誰かに見つけられたやうで、身體がゾン／＼寒くなつて恥かしくなるのであつた。

こんな處は光夫の方が自分よりよほど元氣であつた。光夫は喧嘩もやつてのける人間だつた。と清吉はよく思つた。家の後を繼ぐのは弟の方がよかつた。光夫だつたら親方をやつつけて家をよくして行くことは出來るだらう——弟がゐなくなつてからこんなことをよく考へた。そして弟がゐなくなつたことを惜いことしたと思つた。しかし、又、だうせ小作だから無理に百姓しなくても、他で働て父母達を養つて行けばそれでよいのだ、俺も働きに出よう！と思つた。すると又、それもさうだが母のよくいふやうに叔父達の拵た縮を潰ては第一に父母達が困るだらう？——と思つた。

清吉の心は毎日かうしたことで搖れ動いた。

三月頃であつた。村の有志の運動で、清吉の村から隣村まで大きな郡道が貫ぬけると云ふことであつた。これは此期に郡道として少しでもやつて置けばいつか郡制が廢止になつて、やがてこの道を縣道に編入され、ついに縣に、縣の負擔で開通させて吳れるだらう、と云ふ蟲のよい考へだつた。

村の人達はみな喜んでゐた。有志の二三人の名を云ひたゝておべつか褒に褒めたてゝゐた。これを喜ばなかつたのは

清吉だけであつた。清吉は『道路が隣村まで貫けたらよくなるぞ！』と近所の人達から話かけられると嬉しい顔をしておつきあいに、『さうぢやなア！』と云つてゐた。そして内心では測量しただけの損になつて、道路がおぢやんになればよいが、と思つてゐた。

清吉も始めは大きな道路が出來ればよい、と出來ることを樂しみにしてゐたのであるが測量してからいやになつたのである。

測量の時、村の頭株と云ふ人達は無賃で測量の手傳に行つた。川向ひの萬さんのやうな人は測量人夫に傭はれて行つた。其他の人は知つてゐる人は自分の田の方へ測量して來た時には出て行つて、それ〴〵都合のよいことにしてもらつた。しかし、清吉の家はその測量の日山で働てゐて知らなかつた。清吉が家に歸つて見に行つた時はもう清吉の家に作つてゐる田は二つにたち斷られたり、へんなかつこうになつてとても馬耕の出來ないやうになつてゐるところなつてあつた。それから少し下つた萬さん家の田を見ると、うまくのがれたり、一寸とかしつてゐる位であつた。上と下とをよく見くらべると、萬さんの田をたち斷れば清吉の田は二つにならなくて濟み、馬耕の出來ないやうな變な畦は出來なくて濟むやうに思つた。萬さんの田を助けるために迂回したために清吉の田がたち斷られてゐた。清吉はそれに氣付くと胸がだく〳〵して涙が出て來た。――オノレ！　オノレ！　と心の内で繰返した。――あの萬助の奴！　山本に清水に松本！　（村の有志）――清吉は心でかう叫んだ。――よくも俺が理屈をえ云はぬ人間であることを見て蟲のよいことをしやがつた。――と心の内で云つて、涙をこぼしながら上へ下へと歩てゐた。

『清さんよ、お前家のだらうな？』上の方からかう云つて忠吉と云ふ人が來た。清吉は涙の出てゐる顏が上げられない

やうに反向て、測量の杭を見てゐるやうにした。

『俺困つたがなう、俺がゐたらあんなことにはならんのであつたんじやけんど、山へ行つて居らなんだもんで、まア田が減るのは買ひとつて呉れるんじやのつてえゝが、なんじやつてあんなにせられて田が耕けるか、馬も牛も行けんところが出來とんじや！』と忠吉小父さんは唾を飛ばして云つた。

『…………』清吉は默つてゐた。

『お前家もこりや困るなう二つになつて、はゝ？さうか！お俺家の田と同じや、馬耕出來ん處が出來とるなう！』

『…………』

『こりや困る！』清吉が默つてゐると、忠吉小父さんは一人言のやうに云つた。

『萬助の奴より、清水さんや松本さんのやうな人が悪いんじや！』清吉は涙をこぼしながらやつとかう云つた。

『あゝさうか！萬公の田を助けるためにかうしたのか、悪いは！悪いは、松本さんのやうな、村の有志たる人が、こりや悪い！何にもえ云はぬ者はだうでもえゝつてやうに、こりや悪い、かうして道路がよくなるのならえゝがかうしたゝめに迂回が出來て道が悪くなつてゐる、晩に松本へ行かんか、行つて云はんか何遠慮がありや、云はぬと癖になるは！』忠吉小父さんは怒つて云つた。

『オノレ！松本の奴！ススス、、、』と清吉はすゝり泣た。

こんなことがあつてから清吉はこの田を見ないことにした。見ると、何か恐ろしい毒にでも觸れたやうに身體が痺れて了ふやうな氣がするのであつた。そして、――俺は駄目な人間だ、この村にゐるのは厭や！早くどこかへ逃げたい！―と思ふのであつた。そして逃げもせず、――測量しても鄰が許可しなければよいが、測量しただけでやまつて了ふと

云ふこともあるだらうし、心配しただけ損になればよいが!――と松木へ行つて話すことも忘れず心でおもひつゞけてゐた。

8

清吉と父とが山から歸つた處へ、丁度町へ眞茶を賣りに行つてゐた母も歸つて來た。

母は擔でゐた容籠を戸口に置くと、いそいで家に這入つた。そして正午飯の茶釜の下を焚きだした。

日のあたつた戸口で立つて、日なたぼつこのやうに太陽の方へ向いて眼を閉ぢてゐた父は、戸口の小便所で小便をしてゐた清吉と一緒に家に這入つた。

『どうな?よく賣れたか?』父は家に這入るとすぐ母に訊た。

『あゝ!賣れぬ賣れぬ、安い〳〵!』母はかう云つてつん〳〵してゐた。

『眞茶は肥料も澤山いるし、安かつたら肥料代もとれねだらげ?』清吉はかう問ふやうに云つた。

『肥料代もとれぬたつて賣らないでどうすりや、食ふたつて無駄でないか!』母はけん〳〵云つた。

清吉は腹が立つて來た。母がもう少し柔かく返事をして呉れるだらうと思つて清吉は云つたのであつた。のんびりした氣持になつて皆が仲よくして、暖かく靜かに落ついた家にしたいと、いふ氣で、かう云へば母ものんびりした氣持で答へて呉れるだらうと思つて云つたのが裏切れて了つた。

清吉は爐の間に上つて胡坐したが俯向て了つた。

父より母がさき上つて坐つた。父が上つて來て坐ると母は眼を光らせて、父と清吉をキョロ〳〵見た。

『お前あの、たつ田（田の名）の道見たかへ？あれあんなになつて馬が上れるかへ、人間でも重い荷擔では上れへんないけ、ありやお前、立派な赤で書た道なんぞへ、去年萬さんがあしこを畑に開いて道が狹くなつた時、おたへが云ふただらうがへ？――道まで田にせられては困るでないか！つて萬さんに云はんせ、――つて、それにお前等つな、まアえゝは通れだしすれば――つて云つて相手にせんのじや、まア一遍行つて見ておいで、腰ぬけの弱蟲が、踏みたゝくりにせられても默つてんじや、阿呆じや！』と母は怒つて云つた。

淸吉は自分の弱い處を母にさらけ出されたやうな氣がした。――チエ！又か、又か！――と心の内で呟た。同時に道路のために馬耕が出來なくなつた田のことや、たち斷られた田のことを思ひだして、毛穴から細い針でもさゝれるやうな氣がした。

父は煙草を吸つてゐた。

『田は田でたち斷られて了ふて馬耕も出來なくなつても何にもえゝ云はず、又道をあゝせられても何にもえゝ云はぬのじや、阿呆つてしようのないもんじや！どうして腹がたゝんのぞへ、何程親方の田じや云ふたつて小作しとりや自分の田のやうなものじや、あんなに馬や牛が通れぬやうな田が出來たり、馬耕が出來ぬ田が出來たら、やはり、うちの損じや、損より何よりあんなに踏みたゝくりにせられて何で腹がたゝんぜ？これ！これ！うしやうしやと牛のやうに頭上げてちつと怒つて見んせ、これ！これ！』母は俯向て了つた父を搖ぶるやうに云つた。

『そんなにバリ／＼云ふて腹を立てたつて小作をやめりや他處の田でないか、そしてそんなにこせ／＼云ふて何にすりや！山の境堺や田の畦をせせつていくら伸しても死んだ時、棺桶を擔で行く棒のたけだけが伸びんつは、罰があたるは！』と父は云つた。

『フン！これが何ぜこれナミの粮ほけ？が何になるぜこれが、こゝで云ふたつて其の味が何になるぜ、両方あたつて萬さん見んせ、どんく\お金を溜めて、村でだつてあれだけ云ひのいゝがたつて、何でも云ふやうになるでないけ！』と母は怒鳴つた。――あの萬吉萬助、田でもあゝしたし、又道をだらしやがつた、喧嘩してやらう、萬助が開た畑を壊して道にしてやらう――と清吉は考へた。

『うち（自分）が行つて道を擴げてやる、畑の方を壊して、』清吉は眞赤な顔して、眼に涙を浮べて云つた。

『やれく\、やりまくれ！つべこべぬかしやうん[さ]れ、何遠慮がありや、ひかへてゐるとみな見やがるんじや！』と母はけしかけた。

――ナニ！やつたる、やつたる！うん毆つてやる！――清吉はかう心の内で云つた

『たつ川へ上る道も狹まふても狹いなりに通れてゐたでないか、それが道路が出來たゝめ掘取られて了つて通れぬやうになつたのでないか、お前が行つて云はいでも松本さんに話ときや、松本さんから上方の人に云ふて馬が通れるやうにはして呉れるは、道路のことは皆松本さんにまかせてあるのでないか、俺が又松本さんに云ふとくは！』と父はなだめるやうに云つた。

『松本さんて、あの人がナンのクソになるぜ、あのとん欲親爺が、村のためにしてゐるんだつたらあんなえゝこ引するけ、あの人は萬助とぐるになつてゐやがるんじや、惡者じや！』清吉は涙をこぼしながら鼻をはづませて云つた

『オヽ！やれく\、飯を食つたら行つてやりまくれ、松本さんにたのんだつて、とゝ（父）の云ふことゝとり上げて呉れるか、とゝはなんでも怖ろしくて慄へとんじや！』母はかう云つて父を睨みつけた。

清吉は飯も食ひたくなかつたが一杯食つた。そして鍬を持つてたつ田へ上る道へ行つた

たつ田へ上る道は細い堀のやうになつてゐた。道路が出來たゝめ古い路は斷とられてなくなつたので道路を造つてゐた土方の人は、もとあつたものは形だけでも拵へて置かなければならない處から申譯のために造つたらしかつた。人でもその堀へ這入ば身體が自由にならない位い狹かつた。そして、少し急げば膝坊子が閊へて步けない位な坂になつてゐた。

五六間上の方から少しづつ下げて、狹い堀の處を少し廣くするとよいだらう？と淸吉は思つた。しかし、そこを廣くすれば萬吉の家の畑を斷りとらなければならなかつた。

――上をあゝして廣げて來て、この畑をあれまで斷とる――淸吉は鍬の柄を杖にして立つて考へた。――あの萬吉の萬助が怒つて來る、怒つたつて去年まではあそこまで道であつたのだ、ナニ！やつたる、怒つたら道まで盜みやがるド盜人！と怒鳴つけて喧嘩をしてやる――淸吉は胸をドキ〳〵させながら心でから呟た。――ナニ！やつたる――又から呟て鍬を振上げて鍬を使いだした。少し萬吉の畑を壞すと――これで前の道だけは取返したか知らソ――と上の道と見比べてみたりしながらやつてゐた――前の道を取り返したらよいのだ、さう廣く萬助の畑を壞してもしようがない、」

――と思ひながらやつてゐると、西の川の方で怒鳴のが聞えた。淸吉は鍬を休めて聲の方を見た。

『オノレ！かいゝ、わしく（俺）の畑を崩してだうする心算た、こらド盜人！』と怒鳴つて萬吉が田の畦を淸吉の方へ走つて來る。淸吉は顏を赤くして息をはづませた。そして、

『ナニ！ナニ！』と心で叫んだ。淸吉の眼からは淚がハラ〳〵落ちだした。

『こらへ！わしくの畑を崩してどうしやがるんなド阿呆！ド盜人！』萬吉はしきりに怒鳴つた。

『ナニ！われがド盜人ぢや！道を盜みやがつて畑にしてゐやがるでないか！』と淸吉は云つてゐるのであつたが聲は出

なかつた。

『こら！ド盗人！』萬吉はすぐ清吉の傍へ來て云つた。

　清吉は萬吉の方へ振向た。

『われがさき…………』と清吉は聲を出して云つたが——道を盗みやがつた、われがド盗人じや！と云ふのは聲には出せなかつた。たゞハア〳〵息をはづませて涙をこぼしてゐるだけだつた。

『この上の田やつて、われのものじやないでないか、づべ（尻）のドもないくせしやがつて、小作やめて見いこの道やつて何の田がありや、おつつけ取上げられて田も作れなくなるんじや、われ〳〵の田でもないのに道がだうなつたつて何事がありや！そこのド盗人！』又萬吉は早口でから怒鳴つた。

『ナニぬかす、小作だつて小作してゐるうちは俺の田じや、俺のものじやナニぬかす！』清吉はから怒鳴返したが聲が出なかつた。たゞ唇がビリ〳〵慄へた。同時に身體もわな〳〵慄へ出した。

『……ウン毆るぞ！』清吉はから怒鳴つて鍬を振上げた。萬吉は逃げだした。もう清吉は眼が見えなかつた。そこらの石を拾つて處も見ずに投げ散した。そしてすぐそこへ倒れた。そして、兩手で頭を掩つて大きな聲を出して泣き叫んだ。

しばらくして清吉が頭を上げた時はそこらには萬吉はゐなかつた。清吉は鍬を擔で逃げるやうにして家に歸つた。

9

　萬吉と喧嘩してから他人に顏を見られるのがいやだつた。いやだと思ふと故意に顏を覗く人があるやうな氣がした。

そして其眼が——清公よ、お前ド手な喧嘩したなう——と云つてゐるやうな氣がした。ことに萬吉の家の人に逢ふとた

まらなかつた。默つて俯向て顏を隱して了ふのであつた。

『よくあれだけやつゝけたなう、氣味のよいこと！』と母が飯時に爐を圍むとよく話に出した。そのたび淸吉は頭から水をあびせかけられたやうな氣がした。

『喧嘩せにやいかん、とゝ（父）のやうに喧嘩もえせんやうな人間が何のクソになりや！』から母がおはこを出すと、淸吉は頭をコツンとやられたやうに身體が痺れて了ふ『ア、、』と他の者には聞えないやうな小聲で云つて聞かないやうにする。それでも聞えて來ると頭を搔くやうに見せて、兩手で耳を塞ぐのであつた。――俺にはどうしても喧嘩は出來ない。馬鹿なことした。萬吉の家へ行つてお詫して、許して貰ふてこうか？――と考へた。壞した畑のことを思ひだしまい、と思つても鬼か何かゞ追つかけて來るやうでいつも氣になつて、ふりかへつて見るのであつた。

と、或夜、誰もゐない夜半に誰かが來て誰にも知られないやうに自分の壞した萬吉の家の畑をもと通り綺麗にして吳れてゐる夢を見た。夢であることを知つてから、――夜行つてなほしてやる誰にも見られないやうに、神様が俺に『夜の誰も居ない時に行つてもと通りなほして置け』と夢告げをして吳れたのかも知れない？と思つたこともあつた。しかし夜行つてもと通りすると云ふ勇氣もなかつた。

――俺にはとても喧嘩は出來ない――と又考へる――他人に理屈を吹きかけたりすることは出來ない、とてもこの村では食つて行けない、父は祖父が賣り殘してあつた田や山を賣つて俺達を育て、老父母を養ふことが出來たのだ、しかしもう賣る田も山もない、小作ばかりで食つて行くつて云つたつて親方（地主）と喧嘩しなくちやならない、……どこかへ逃げだしてやらうか？そして人に使はれて働てゐたら喧嘩するやうなことはないだらう、しかし他人に使はれてゐてもだん／＼他人に甘味を吸はれてゐることに氣がついて來る、腹を立てゝ泣きだす、何にも云はずたゞ泣てゐる。

大富に馬鹿らしい、……俺は母の云ふやうに女の腐つたよりおとりた人間だ、母の云ふやうにヤクザではたいて死んだ方がましな人間だ……ナニ！思ひ切つて家を逃げだして大阪へでも行つて働いてやる。仲仕でもよい、たゞ働いて毎日〳〵お金もらつてゐたら何腹がたつことがある。他人に甘味吸はれてゐる、などと考へなくて済む、そして、お金を父母達に送つてやれば父母達も小作などしなくても食つて行かれる、皆がよくなる、さうしよう……しかしだん〳〵お金を使ふことを知つて来る、儲けただけのお金をどん〳〵使ひはたす、叔父二人や弟のやうに家へはべた一文送らない、お金送らないばかりか手紙一つよこさなくなる、年とつた父母達はどうするか清吉はやはりかうしたことを繰返し〳〵考へてゐた。

――思ひ切つて、ノルかソルか一か八かやつてのける、父母達に話して、話すくて門出の祝の飯を食つて家を出るやうなことはとても出来ない。――清吉は毎日右か左かと考へて結局は、逃げ出してやらうとなるのであつた。

その頃清吉と母は毎朝早くから起きて、ふだんの仕事の邪魔にならないやうに一里余り奥へ木炭運びに行つてゐた。

清吉は内心でその駄賃が十圓に溜つたらそれを旅費にして逃げ出さうと思つてゐた。

もう母と二人の駄賃が問屋に十四五圓位溜つただらうと思つた時だつた。夕方母に云つて清吉は一人で駄賃の借用に行つた。旅費は出来た。と思ふと嬉しかつたが問屋の大きな火鉢で手を焙りながら又いつものやうなことを考へてゐると怖ろしくなつて来た。大阪へ行つて誰も知つた人のない他人ばかりの中で働かねばならない……と云つて今まで通り家にゐて働て居るのはいや！――清吉はクル〳〵円く廻つてゐる物の上に載つて自分もそれと一緒に廻つてゐるやうな氣がした。

問屋の主人がパチ〳〵算盤をハジイてゐる音も耳には入らなかつた。――出ようかやめよか？家を出るなら今だ、も

ら少しで苗代の用意したり、田の仕事をするやうになればとても出られない、さうなつて出ては親方へ田を返すと云つたつて親方だつて困る、俺が家にゐなくなつたらとても百姓は出來ない、田は全部親方へ返さなくてはならない、家を出るなら今だ、だうしよう？——清吉はそわ／＼するこんな心で、見るともなく前の雑貨店へ夕方の買ひ物に來る女や小供を見てゐた。と、チリン／＼鈴が鳴つて來たと思ふと杖と笠を一緒に持ち、何にも冠らない、ボウ／＼と髪の延びた頭へ黒くなつた西洋手拭で鉢卷をしめこんだ、ぼろ／＼の着物を着た男遍路が來た。そして、その雑貨店の前に立つて何か云つたと思ふと、次に清吉の方へ向いた時には新しいやうな敷島の袋を持つてゐた。そして、その袋から卷煙草を一本出して口にくわへた。やがて腰に吊してゐる袋からマッチを出して上手に火をつけた。そして又チリン／＼鈴を鳴らして行つて了つた。

——よし行つてやる！——清吉の心は急に生き／＼して來た。——ナニ！だうなつたつてよいこの時だ！——と呟た。わけもなく卷煙草をくわへて行つた見苦しい遍路が清吉の心に光をあたへた。——しかし、清吉にはその光を得た意味はわからなかつた。

『よし！決めた！』清吉は心でかう叫んで火鉢の上で手を揉んだ。

『十九圓五十錢じや、二人の合せて、二十圓渡しとこか？』問屋の主人は算盤が出來てからう云つた。

『丁度にしてつか、借こさへても困る！』

『小まい錢がないんじや。』

『そんなら十圓だけでえゝ！』清吉はかう云つた。そして考へた。——家に歸つたら駄賃の費用しなかつたつて云ふ、十圓あれば五六圓は持つてゐるから旅費は大丈夫だ——清吉は十圓札を一枚貰つて問屋を出た。

母はいつものやうに木炭の駄賃擔に行かうと思つて、一番鶏が鳴く頃から眼を醒してゐた。

清吉は一番鶏が鳴く一時間も前に家を出たので父母達は知らなかつた。

母のおしもは二番鶏が鳴てから起きた。そしてすぐ爐の茶釜の下を焚きつけ、門口の小川で顔を洗つて來るともう茶は沸てゐた。

『清吉！清吉起きよこら！』母は爐の次の間に寢てゐる清吉をかう呼び起した。

『…………』返事がない。

『しつこい奴じや、いつまで寢たつて同じや、こら清吉、起きんかい！もう飯食つて居らぬと呼ぶ頃ぞ、いつでも後れて恥かしいでないか、こら！』

『どら起きよか？』父の馬太は寢床の中でかう云つた。

『お前寢とらんせ、起きたつて炭擔にも行くのじやなし、火をたいて錢がいるだけ損でないけ！用のない奴は眼を醒す、起きて何かにやならん奴は起きようとしない。こら清吉、起きんかい！』おしもはかう怒鳴つた。

『…………』

『もう飯食はずに來いよ、しようのない奴じや、もうしもの人達が呼ぶだらう？』おしもはかうこげして清吉の寢床と自分のを出した。

『遲になつたら飯食はずに來いよ、こら清吉！』かう云ひながらおしもは飯を食つた。

三番鳥が泣き出した。
『早よう起きんか、こら清吉！』母はかう云つて寢間の障子を開けた。清吉の寢床はあるが清吉が居ないのを知つた。
おしもは寢床の中へ手を入れてみた。
『こらよつぽど遠から居ないのらしい！』と云つた。そして怒鳴つた。
『起きて來んせ、早よう、清吉の奴がぬけやがつた、早よう起きんせ！』
おしもは爐の間へ出て來たが馬太は起きて來ない。
『どいつもこいつもしわい奴じや、早よう起きてこんかい！』
『だうしたつんなそりや！朝つぱらから怒鳴散して！』馬太は起きて來ない清吉を怒鳴つけてゐるのだと思つてかう云つた。
『早よう起きてうせんかい、清吉の奴が逃げて行つて了つたんじや！』おしもは又怒鳴つた。
『だうしたつちや、清吉が逃げたつか？』馬太はかう云つて、處々綿の見えてゐるねまきを着て出て來た。
『ド阿呆！そのツラ何になぼけやがつて、清吉が逃げ出して了つたんじや！』おしもはかう云つて馬太の顏を睨みつけた。
馬太はけゞんな顏をしてあたりをうろ〳〵見た。
『阿呆な奴もあるもんじや、あんな腐れ叔父の書た繪をかきやがる。』と叫んでから、
『われの兄弟が惡いからじや！』とおしもは馬太を怒つた。
『…………』馬太は眼をジヤク〳〵させてゐた。

おしもは俯向て了つた　馬太も俯向た。しばらくして、

『何處へ行つたんだらう？』と一人言のやうに馬太は云つた。

『又大阪か神戸へ行きやがつたのだらうぞ？ほんにまア！腹のたつ！……』おしもはかう憎らしく云てから黙つて了つた。

『オイ！オイ〳〵！』裏の道から木炭運びに行く人達が呼び出した。

おしもは急いで立つて土間に下りた。そして裏口を開けて、

『オイ！さき行きよつてつか！』と云つた。

『何處へ行きやがつたのだらう？』おしもは土間から上つて來てから云つて、又爐の縁に坐りこんだ。

『何處へ行つたんだらう？』又馬太はかうこぼした。

おしもは俯向て何か考へてゐてから、

『どら行こ、坐つて居てもどんならん、木炭搾にでも行つたら氣がはれる！』おしもはかう云つて土間へ下りて戸口の方へ行つた。そして、戸口の障子を開けてから後戻して來て『隣の人にも淸吉が逃げ出したこと云はれぬぜ、よい氣味の皮じやつて嘲笑れるのつて、もし向ふが知つて來たら、百姓してもあかんのつて働て來るつて云ふて、働きに行つたんじや云ふんぞよ！』おしもはかう云つてから出て行つた。

『たうして逃げ出す氣になつたのだらう？』馬太は又かう一人言を云てから立つて淸吉の寢間の障子を開けて、うろうろそこらを見た。そして腰をかゞめて寢床の中へ手を入れてみた。

『何處へ行つたんだらう？』又かうこぼして爐の間へ來て胡坐した。がすぐ又立つて土間に下りた。そしてゆかドに這

ひ込んで黒くすゝけた草履を出した。やがて爐の間へ上つた。戸棚の上を覗て黒くなつた枡のやうな箱を下した。そして金槌と五寸釘一本とを出した。それから又土間へ下りた。馬太はお正月の若水汲に出る時穿た草履を土間へ釘でうちつけると、家出した者の足がたちまちの間に痛みだして歩けなくなつて後戻りすると云ふ迷信を今やらうとした。土間の隅の暗い處へ行つてしやがんだがすぐ又爐の間に上つた。

『えゝい、もうやめた。こんなことして、もし途中で足が痛みだしたら、後へは戻れず先へは行けず、人様の厄介になるやうではあれを泣かせるばかりじや。もうやめたやめた。かうなるのも俺に運がないのじや。前世からの約束ごとじや、あれ等も馬鹿じやない、出世したら歸つて來るだらう』馬太はかう一人言を言つて爐の緣に胡坐した。

（一四、二、一二。）



參(しん)

鉈の音

野上彌生子

舍監長の大脇徳子は今日は特別に機嫌が惡かつた。持藥の睡眠劑と共にいつも机の小抽斗に入つてゐる、まつ黑な、たつぷり一錢銅貨の大きさある頭痛膏が左右の顳顬(こめかみ)に貼りつけられてゐた。不斷でもあまり優しく見えない目尻が、その大きな黑のためにぴんと吊り上げられ險を持つた。眼ばかりではなかつた。この二つの黑い斑點は徳子の相好をすつかり變へてしまつた。役柄で目立つやうなおしやれこそしないが、自分の美しくないのを知つてゐるだけ、顏のことには人一倍苦勞する徳子が、この頭痛膏を平氣にくつ付けておくのは寧ろ不思議な位であつた。併し徳子が破れるやうな頭の痛をこの古風な膏藥で紛らさうとするのは、月に一度、女が平

生の推理力や常識乃至最も大事な頼みを半分以上失ふ時に限つてゐた。今日の徳子は髮さへ結ふ氣にならなかつた。朝禮の式に列するため申譯だけに櫛を入れて、無造作な引詰にしてゐるので、脫け上つた廣い額が一層廣く見え、その上に一本紐のやうに浮き出した青い筋を露骨にした。徳子はこの顏で朝から相手構はず口小言を云ひ、劍突を食はした。而してその間々にぢれつたさうに、口の右の隅が右の吊り上つた目尻に屆くほど頰を引きゆがめ、すう／＼云ふ高い音を立てて奥齒を吸つた。蟲齒が屹度一緒に痛み出すのであつた。

お晝過には徳子はとうとう床を伸べ、暫く眠らうとした。ぐつすり一と寢入したら　すべての苦惱がきれいに去つてしまひさうな氣がした。睡眠劑を二錠多く飲んだ。が、ちつとも効き目がなかつた。とろ／＼としかけたと思ふと、すぐ覺める。顳顬と齒がその度に痛みを新たにする　徳子は新銘仙の大きな夜具の中で寢返ばかりしてゐた。

頭の上の、洋風になつた引き下し窓から、白い金巾の窓掛を通して十一月の明るい日光が射し込んでゐる。授業がすまないので、寄宿舍の内外がまだひつそりしてゐる　騷がしい時は黒ひきつてがや／＼してゐるだけに、その靜けさが際立つて感じられる。たゞ時々氣紛れな風が、遠い音樂室で歌つてゐるどの級かの唱歌をきれ／＼に持つて來る、今一つ、窓のすぐ外側から、ばあん！ばあん！ばあん！と云ふ厚味のある物音が聞こえて來る。これは半月前に雇ひ入れた風呂焚の爺やが、鉈で古材木を割つてゐるのであつた。これ等はその場の寂寞に不調和ではなかつた。殊に鉈の音は、深い山中の伐木の響を思はせるやうな、しんみりした淋しさをあたりに漂はせた。

徳子の眼にはいつの間にか涙が溢れてゐた。上の眼の涙は、鼻柱を横ぎつて枕につけた眼の方へ流れ込み、其處で一緒になつた二筋の熱い水が、例の顳顬の大きな、既にかさ／＼に乾いた頭痛膏を傳つて　留め度なく流れた。徳子は涙を拭かうともしなかつた　寢返も打たなかつた。身動きさへしなかつた。その餘裕がなかつた。徳子の苦惱は單に齒や顳

―― 3 ――

門ではなくなつてゐた。

徳子はいつも斯んな時に思ひ出すあらゆることを思ひ出してゐた。自分の小さい時に母に死なれた時。その父を自由に操つてゐる若い繼母。腹違ひの六人の弟妹。彼等の生活を援助するために、毎月割かなければならない月給の殆んど四割。――それまではまだよかつた。大學の卒業間際に許婚の彼女を嫌つて、保護人の美しい娘と許婚した從兄。その華々しかつた披露式。當時の死の苦痛。――一切が甦つた。あれからもう十五年たつのだとはどうしても考へられなかつた。徳子の心の傷は、薄い皮膚一重の下でまだ口を開けて血を流してゐた。何物にも癒されなかつた。と云ふよりは、その傷を癒して呉れさうな何物にも出逢はなかつた。十五年間、何物にも、決して。――女學校の白い壁、灰色のペンキ、金巾の窓掛の中から、そんなものが假にも出現する筈はなかつた。殊に、徳子は品行方正、思想穩健を以つて聞こえた模範女教師であつた。

ぱあん！ぱあん！ぱあん！鈴が一層冴えて響く。

泣いて珍らしく赤くなつた顏を大きなくゝり枕にくつつけ、石のやうに横になつてゐる徳子は、ちよつと見ると一の寂しい素朴な音をぢつと味はつてゐるかのやうに見えた。本能はなんにも聞いてゐるのではなかつた。徳子はたゞ赤い涙できら〳〵する視線で、正面の柱に大きく 27 と出た日暦の數字を見詰めてゐた。あと四十日足らずの日は、徳子を難なく三十八にするであらう。

眠つた積りはなかつたけれども、矢張り眠つたと見える。騒々しいあたりのざわめきで眼が醒めた。生徒たちが歸つて來た。廊下をばた〳〵と走る音、それを追つ駈けて飛んで行く音、叫、笑、がちやんと茶碗か何かをタタキの上に落つことした音。徳子は顏をしかめ、寢返りをした。また頭痛と胸の痛。不眠症の常でいつも寢起の氣分の惡いのが、こ

の眉間には、甘苦しくなつた。徳子は、どうかしたら吐きさうな氣のする胸先を押へ、今一度眠らうとしたが、擾亂されたな頭に再び歸つて來たかつた。

庭の方は一層活潑であつた。大勢で喋つて行く群。何か議論めいたことを高い聲で云ひ合つて通る一團。鬼ごつこでもしてゐるらしく、きい〳〵云つて轉げ廻つてゐる人々。テニス・コートの方ではしつきりなしに球の音がする。上手に受ける度に、外づした度に、あがる歡呼と微笑の聲。これ等の聲が二つの兩耳朶を通して悉く徳子の鼓膜に流れ込んだ。

ぱあん！ぱあん！ぱあん！その間を鐘の音がゆつくり縫つてゐる。

併しその内に鐘の音は今までほど繁かなくなつた。

『爺や――手を貸して頂戴よう！――ブランコをよくするんだから。』

一年生位な高い子供つぽい聲が遠くから呼ぶ。

『はい、はい。』

老明らしい、はつきりした爺やの返事が聞こえ、同時に聲の方へ急いで行く草履の音がぱた〳〵する。暫くして引返して來て、一つ二つ、ぱあん！ぱあん！と云はせたかと思ふと、また中止する。

『爺や、今朝頼んだことをしてくれた？』

新たに近づいて來たのは、四年生位の、もうすつかり女になりきつた艶つぽい聲だ。

『はい。何でございましたでせうか？』

『厭な爺やねえ！あんなに頼んどいたのに。忘れたの？』

女生徒はあまへたやうな鼻聲を出す。

『私たちの部屋の前の竹垣がぐら〳〵になつてゐて危ないから、直しといてつていつたぢやないのよ』

『左様でしたか。何んとも早や。後できつといたします。』

『此度ね、間違つちや厭よ!』

その念の押し方——中學生と逢引の時間の約束でもするやうな調子が、徳子をむら〳〵とさせた。一體誰なのだらう。あんな聲であんな話し方をする生徒は?それだけで確かに操行點の三點位引かれてもよい。——

ばあん!ばあん!ばあん!また始めた。

五六人の生徒らしい聲が向から歌ひながら來た。足音が留まり、歌がやんだ。

『爺や、硬い?』

一人の可愛らしい聲が尋ねる。

『御覧になるほど堅ちやございません。』

爺やは相變らず言明らしい、はつきりした聲で答へる。

『ちよいと、私に一廻やらせて見ない?爺や。』

他のお轉婆らしい聲が頼む。

『私にも。』

『私にも。』

別な二つの聲が競爭で續く。

『爺やの割つてるのを見てると譯なささうね。』

これは一種に硬いかと聞いた可愛らしい聲だ。

『御覧になるほど樂ぢやございません。』

爺は相變らず京明らしい、はつきりした聲で同じ返事を繰り返す。

『樂でなくたつていいからさ。貸してよ、その鉈を、爺や!』

『あら、私が先に云ひ出したんぢやないの?ずるいわ。ねえ、爺や!』

『だつて、ねえ、爺や!』

ねえ、爺や!ねえ、爺や!……

遠くの方でまた誰かが、爺や――と呼び立てる。

何んてうるさいんだらう。――飛び出して行つて怒鳴りつけてやり度いやうな憤が徳子の胸の底からこみあげて來た。人が斯んなに苦しんでゐる枕許で、なんと云ふ騷だ。――でなくも彼等の聲は、その若々しい調子や、如何にも青春を樂しみきつてゐるやうな陽氣な可愛い響だけで、不斷から徳子には決して氣持のよいものではなかつた。爺やも爺やだ!　何故追つ拂はないのだ?――その瞬間、今までは、ついうつかりしてゐた驚くべき相像が、不意に徳子の意識を脅かした。女生徒たちのあの甘つたれた爺やの呼び方は一體何を意味するのか。――徳子はびつくりしたやうに夜具の襟を引き締め、身體を堅くした。――少くとも先の風呂焚の婆やとは女生徒はあんなに仲がよくはなかつた。彼等はしば〳〵喧嘩をした。今度はすつかり違つてゐる。一にも爺や、二にも爺や、朝から晩まで爺やだ。彼等はその鼻聲で爺やを呼び立てるために、わざとブランコの綱を切らしたり、物干をこわしたりしてゐるかの如く見える。――徳子は先の婆やがどんなに慾張で剛突張であつたか、それに較べれば今度の爺やは殆んど紳士であり、その善良と誠實か若い

生徒をどんなに悩ませてゐるかは考へようともしなかつた。その善良と誠實を知つて學校に推薦したのに彼女自身だつたことさへ忘れてゐた。否、それは決して忘れなかつた。徳子は自分の認めたものを生徒も認めたのが癪にさわるのであつた。何かを奪はれ、嘲られ、見せつけられてゐる氣がした。この感情の前には、人のよい、正直なこの年寄が、忿に忌々しい、腹の立つ、一種醜悪な存在となつた。

徳子の眼からは新たな理由の分らない涙が流れ出た。身體ぢうが汗つぽく燃え立ち、胸苦しい熱氣と共に、少し忘れてゐた顳顬と齒の痛が勢を盛り返した。徳子は夜具から身を乘り出し、左の手で上に向けた方の顳顬を邪慳に叩いた。

ばあん！ばあん！ばあん！邪魔物が行つてしまふと、爺やはまた規則正しく仕事をはじめた。

この音は、徳子にはもう我慢のならないものであつた。夜具を引きかぶつた。が、直ぐと恐ろしい權幕ではね返し、起き上つた。我を忘れた。徳子は寢卷のまゝ窓に近づくと、窓掛を引きかなぐるやうにかき寄せ、がちやんと亂暴な音をさせて開けた。

『爺や！』

徳子の聲は明かに嫉妬と、淫らなことを働いた者の激昂とで慄へてゐた。

『そんな處で薪を割ることは出來ません。裏へ行きなさい、裏へ。』

昨日も其處で割つてゐたのを見なかつたかのやうに、今日も今はじめてその音を聞きつけたかのやうに、徳子は怒鳴りつけた。

明けの日、暇を出された風呂焚の爺やは、寄宿舍の裏門からとぼ／＼と歩み去つた。

不幸な爺やは七十三であつた。しかし六十三でもなく、爺やの不幸は七十三であつたためではなかつた。

先生

第一學期には、S子は代數が大好で、英語が大嫌であつた。本統は代數の先生が大好で、英語の先生が大嫌なのであつた。

代數の先生は學校の男の先生の中で一番若かつた。

漢文と國語は同じ位好であつた。何故なれば、漢文の先生は男の先生であつたけれども、四十五位のお爺さん――十六の女學生には、四十五は救ふべからざるお爺さんであつた――であつたし、國語の先生は女教師であつたけれども、美しかつたから。

理科と裁縫と習字はすべての學課の中で最も我慢のならないものであつた。この三科の受持は、三人とも揃つて器量の悪いお婆さんで、また三人とも揃つて意地悪であつた。

學期の末に代數の先生が他へ轉任した時には、S子は死に度いと思つた。三日間弁當に箸をつけなかつた。どうして英語の先生と代らなかつたのだらうと思つた。英語の先生がいぢめて追ひ出したのだと極めた。ますます英語が嫌になつた。

二學期になるとまた急に英語の先生がよした。S子は仇討したやうな氣がして嬉しかつた。

ところが三學期になるとS子は代數が大嫌で、英語が大好になつてゐた。

代數には顔の黒い、眼鏡をかけた、男のやうな女の先生が來た。反對に新らしい英語の先生は、その代數の先生の

さんにしても不釣合でないやうな優しい、詩集を一冊出したと云ふ青年詩人であつた。」

繃帶

A子は當惑した。大變なことになつたと思つた。どうしてよいか分らなかつた。

彼女の長い袖の中から一枚の血書の手紙が出て來た。それには斯う書いてあつた。

「可愛いA子さん、私の愛を血で證明します。どうぞあなたも同じ證明を見せて下さい。　K子」

薄桃色の小さい封筒を机の下からそつとやり取りしたり、リボンをお揃ひにしたり、運動場の隅で二人寄り添つてしく／＼泣いたりすることが、學校ぢうに變な病氣のやうに流行つてゐた頃であつた。寄宿舍では殊にひどかつた。女生徒たちは寢捲を交換したり、枕のカヴアーにお互ひの頭文字を縫ひ取りしたりした。皆んなから目ざされてゐるやうな美しい生徒の上草履は絶えず盜まれた。

A子の上草履も最近に二度なくなつた。その時分から、二間おいた上手の七番室のK子が特別に優しく自分を見るのに氣がついた。其日血書の手紙を見出したのも、放課後、洗面場でK子と落ち合つた直ぐ後であつた。その時には何の氣もなしに見たのであるが、K子の右手の小指にはたしかに繃帶がしてあつた。

K子はA子よりも一級上であつた。優等生で、且つ彫刻美人と云ふ仇名がついてゐる位立派な容貌と體格の持主であつたから、その人から愛されるのは、非常な名譽と云つてよかつた。けれども氣の弱いA子は嬉しいよりは怖い方が先に立つた。血が彼女を威嚇した。自分も同じ血で返事を書かなければならないと思ふと震えた。と云つて無視さるべき事ではなかつた。その儘にして置けば拒絶の意味に取られるであらう。怖るべき復讐！そんな目に逢つてならうか。而かもA子は決してK子が嫌ひではなかつたのだから。

明けの日は教場へ出ることが出來なかつた。A子は假病を使つて部屋に閉ぢこもつた。可愛い心配は彼女を本統に病氣にした。幾らか熱さへ出た。

「A子さん、御病氣だつて。もう少しはいゝ？」

すぐ隣の十一番室にゐる同級生のN子が、午後から二時間ある裁縫をすつぽかして見舞に來た。N子は彼等の所謂親友ではなかつたけれども、A子とは仲よしであつた。

「風邪？」

快活なN子は寢てゐる友達の枕許に座り込んだ。

A子は青い顔を大形紋の厚い夜具の緣から半分のぞけ、頭をふつた。

「またたべ過ぎね？」

「私、そんな食ひしんぼうだと思つて？」

恨めしさうな淚聲を出したかと思ふと、A子の眼には本統に淚が湧いた。

「あら、厭な人。どうしたのよ。——A子さん。變だわ。——何か心配なことでもあるの？なら仰しやいよ。ね、私、

誰にも云ひはしないわ。』

丁度、A子はその苦しい惱をひとりで我慢するには堪へきれなくなつてゐたところなので、N子にすべてを打ち明け、智慧を借りようと決心した。で、口外しないと云ふ約束を何遍もさせた末、敷蒲團の下に隱しておいたK子の血書の手紙を取り出した。

『西洋紙は思ひつきね。だから散らないで斯う旨く書けたのよ。』

N子は半紙一枚位にたつたその紙の端を兩手で持ち、答辭を讀む時のやうに顏の前にかざしたまゝ、いつまでも離さなかつた。その顏には單なる驚きとは別な、强い一つの感情が現はれてゐた。

『で、どうする積り？』

N子はその表情を變へないで、而して詰問するやうに問いた。

『どうするつて？教へてよ。私には分らないわ。』

『A子さん、あんたK子さん好きぢやない？』

『だつて、血で返事を書くなんて出來ないわ。――そんなことをする氣になるほど好きぢやないのよ。乾度、なんだか怖いんですもの。』

N子の顏にあつた一つの感情は、この時俄かに生き／＼した悦の色に變つた。と彼女は或る突飛な提案をした。自分がA子に代つて血書の返事を書かうと云ふのであつた。

『ね、さうしてあんたは本統に切つたやうに小指に繃帶しておくのよ。――K子さんのしてゐるやうに。――なら決してほかの人が書いたなんて分かりはしないわ。だから、後生だから私に書かしてよ。』

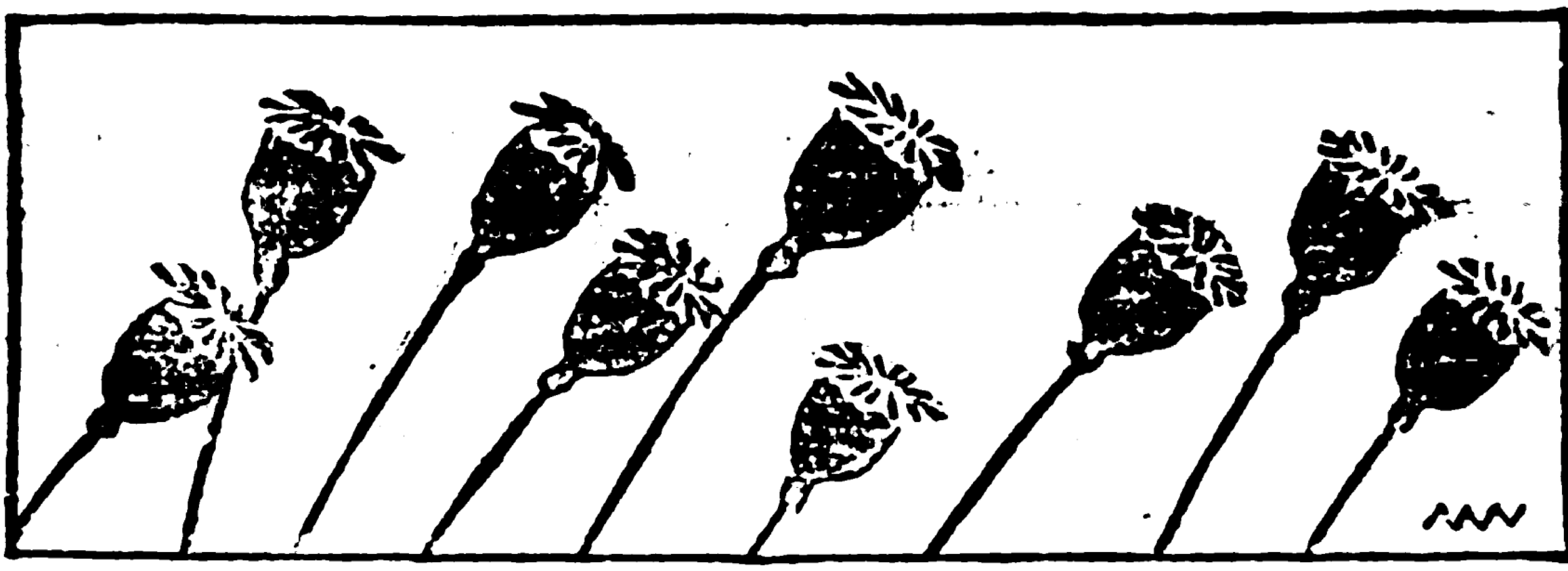
N子は熱心に說いた。而して喚ぎ落して、でも心の底では救はれたやうに悦んで、同時にもう指先ではなくたつて　と上つたA子を引き立て、同じやうな書簡紙と、ナイフと、木綿の三こ糸を揃へさせた。用意が出來ると、N子は糸の端を前歯で銜え、右手の小指の第一の關節からぎり〳〵と、丁度糸捲に捲くやうに指頭にも捲きつけた。可愛い小指の頭が熟れきつた桑實のやうに紫色になつた。ずぶり！鋭いナイフの尖は、綺麗に盛り上つた渦捲のまん中を突つ切つた、

『おなつかしいK子さん。私はあなたを愛します。愛します。愛します。』

K子は目をきら〳〵させ、息をはづませて、殆んど我を忘れたやうに、血のしたゝる指頭を書簡紙の上に走らせた。

署名は省かれた。

明けの日から東寮には小指に繃帯をした生徒が三人出來た。但し、誰と誰が不純に血で結びつけられた親友であるかを知つてゐるのは、N子だけであつた。



縁談窶

里見弴

「小父さん」

子供からの癖で、さう云つて阿野を呼びかける都留子の調子には、少しも不自然な感じはなかつた。心からの信頼が、それを覆ひ隠さうとさせたり、控え目にさせたりするやうな邪氣なしに、ぞんざいと云つてもいゝほどの露骨さで見え透いてゐた。

「小父さん、お酌してあげませう」

暫く話が杜切れてゐたあと、だしぬけにさう云つて、隅を切つた長方形い、平べッたい急須のやうな、錫製の酒器を把りあげ、眞正面の席から身を乗り出して來て、都留子は、強て晴々とした微笑ひ顔を見せた。昔より、寧、キツと見詰めた大きな目もとで笑つてゐた。

日本のより、西洋のより、一番好きな老酒を、二の、一合たつぷりはいる錫の容

器で、一杯半ほどあける間、さまして見てゐた娘が、話の杜切れ目とは云へ、急に酌をしやうと云ひ出したら、思ひもかけない烏睛の笑ひを見せられたりして、阿野は、（へーえ、都留ちやんでもね……、ちよつと生意氣やるんだな……）と云ふやうな氣持で、黙つて支那燒きの盃を突き出して注がせた。

「重いのね」

球を踏まへた唐獅子のちよツぽりを摘んで蓋をとり、なかを覗き込みながら、「あら、でももうたんとないわよ」

「ぢア、手をたゝいて、あとをさう云つといてくれりやアいゝぢやアないか」

「いやだわ、あたし」

「何故、何がいやのさ」

「あたし、手なんぞたゝいたことないわ」

お酌をしたことで、――と云ふより、さう思ひ立つた瞬間を境として、明かに娘の氣分は一變してゐた。雨に早く暮れた夕方、ぱツと、電氣が來た時のやうに、急にどこもかも生々として來た。――阿野も、それにつれて、氣分を明るくしてゐた。氣分ばかりではなかつた。荷厄介にしてゐた思考の上にもおかげで一道の光が落ちて來た。

……阿野はその日、娘の母親である川島の未亡人勝子からの、またしても「都留子の縁談についていろ〳〵御相談申上げたく」の手紙に促されて、度々のことに、今ではもう一向氣乘りのしないのを、ほかにもちよつとした用事を兼ねて、不承不精ながら、態々湘南の住居から上京して來たのだつた。まつたく、それは、何遍目か、初の頃には、そろそろ忘れかけるほど、出來かゝつては破れ、出來かゝつては破れした揚句だつたが、然しその度數の多さ、年月の永びきだけだつたら、別にさう（復かい！）と云ふやうな氣持で、おのづと眉根がより、聞かない先からくさ〳〵させられて了

ニやうなこともなかつたのだらうけれども、この半年ばかりのうちに、續け樣に起つた三つ四つの話が、うまく行きさふ、かつたり、急にまたひどく風向きが惡くなつたりして、結局みんなこはれて了つたのなどは、……十分察しはついたとしても、大部分は母なる人の、焦慮れば焦慮るほど氣迷ひが多くなり、神經質になりすぎて、ほんの一時の氣分に、どこまでも拘泥つて行つた結果に負ふところが多かつた。形はどこまでも相談に違ひないのだけれど、要するに肚の底は、女らしい迷さでちやんときまつて了つてから、話を打ち切るまでの經緯に、いろ／＼とこまかな理屈やら、纖細な心理の動きやら、洞察やら、不平やら、一通りも二通りもあつて、その胸のうちを洗ひ浚ひ氣持よく吐き出さうと云ふ時に、きまつて聞き役に撰まれる自分なのだ、と解つて來ては、いかに無爲徒食の阿野でも、さう／＼いゝ顔ばかりしてゐられなくなることがあつた。

「然しまア、結局は當人の心持次第さ」

はないのうちは、頻りにそれを云つてみた。が、母親一人の、暇すぎるほどの手元で、二重三重の箱に入れられて育つて來たやうな、その上、通つてゐた學校が、宗教の尼さんを校長に頂いてゐやうと云ふのだから、自然今もつて朝晩の祈禱を怠らないやうな、さう云ふおとなしやかな都留子にとつては、親の意思に逆つてまでも、と云ふほどの「當人の心持」なんぞ、あらう筈はなかつた。母親の心持の動く通りに、ごく内輪に、寧ろ微に、數珠しになぞつてゐるやうな賴りなさだつた。そのくせ、最後の決定となると、母親は、逆に相手の武器を取り上げた態で、「第一には、當人もあんまり進んでゐないやうですし……」と云ふ言葉で、他人の阿野なぞには、二の句をつがせなかつた。結局、馬鹿のやうに、たゞフン／＼云つて聞いてゐるが、さもなければ、「ちやまア、貴方のいゝやうにすればいゝぢやありませんか」とでも云つて、ふくれて歸つて來るよりほかには、どうにもあがきのつかない立場だつた。

けれども阿野は、一度も本氣で腹を立てたりしたことはなかつた。とゞの詰りは解つてゐながら、お愛嬌でもおべんちやらでもなく、手紙で云つてよこす相談にはすぐ返事を書くし、來てほしいと云はれゝば東京まで出かけても行くし、度々見合のやうな場合に立合つたこともあるし、――一つには、日暮しにも困るほどの暇だつたせいもあるが、持つて生れた親切氣に、ともすれば理屈から出た馬鹿らしさなど忘れて了ふ性(たち)だつたから、ぶつ〳〵呟くやうな氣持も、實は、それほど腹からと云ふわけではないのだつた。それに、田島とは、小學校時分からの古い友達で、今年二十三になる都留子が、やつとよち〳〵歩きかける頃、急性の盲腸炎で亡(な)くなるまで、かれこれ二十年近い友情は、さう云ふ早い死によつて、寧ろ一層色濃くされてもゐた。無論死水もとつてやり、引き續いて葬式萬端の指圖から、都留子には一つ違ひの兄にあたる總領の子の教育、時にはまた財政上の相談など、田島家のことゝなると、殆ど習慣的にも、わが身に引うけて世話をやく氣になつてゐた。

未亡人の勝子に對しても、結局の好意はもつてた。父親のないあと、幼少な三人の子供たちを一身に引うけて、二十年が間、まづ〳〵瑕瑾なく育てあげたほどだから、實際賢母には違ひないとしても、言語動作がいやにぎすついて、だんだん女學校の舍監じみて來るのなどは、阿野の好みから云へば「いや、とてもやりきれねえ」とでも呟きたいところなのだが、然し古い馴染で、性分の奥底の馬鹿正直や、一徹や涙脆さも知つてゐるだけに、表に現はれたところばかりで、易(たやす)くその氣になるやうなことはなかつた。今度の縁談についても、つゞまるところは、あまり自己本位な考へ方をするところから、たまには皮肉の一つも云つてやつたり、不愉快さうに押し默つて了つたりしたこともあるけれども、それもほんの一時の氣分で、大根(おほね)の好意に變りはなかつた。あとで思へば、「いかにもあの人らしい」と云ふやうなことで、微笑(ほゝゑ)ましく、時には涙ぐましくさへなつて、綺麗に忘れて了つた。また年輩から云つても、經歴から云つても、さ

ちあつていゝ筈の阿野だつた。明治何年からの、[illegible]一切の大[illegible]に生れて、なんの[illegible]せたの、ど[illegible]云ふ大した働しをしたのと、そんな、これぞと目にたつやうな使ひ[illegible]しなかつたけれど、そんなものはこれ[illegible]い金子を、だらしもなく酒と女でなくして來たのだから、せめてはすなほに人の心持が讀めて、氣をゆつたりと落ちついてゐられでもしなければ、放蕩冥利にも盡きやうと云ふものだつた。おまけに、それほどの放蕩の揚句には、大抵の人が陥らなければならない筈のところからも、仕合と彼は救はれてゐた。先代の一方ならぬ愛顧をうけた番頭が、今時には珍らしい、正しく死を決しての諫言に、法律では兎も角も、事實上は現在の主人から隠居を仰せ附かつた態で、業務はもとより、家經一切その男に任せ切つて、それ以來もう十年近い田舎住居だつた。細君は、風の昔に愛想をつかして、さつさとひまを取つて、故家へ歸つて了つたし、子供はなかつたし、一時は阿野もしよんぼりしてゐたが、何人でも手當り次第に関つて置いた女の、それぐ〵利口に身の振り方をつけて行つたあとに、最後まで踏み止まつたお藤と云ふのが、いつからともなくづるぐ〵べつたりに鎌倉の住居に一緒になつて、今では夫婦同様に暮してゐた。水の手が切れたあとまで、まごついてゐたやうな女だけに、お藤は、さう云ふ堅い暮しには向いてゐた。一年一年と、阿野の氣持も、静寂や簡粗に馴れて、くすみ、錆びて來た。交際はうるさく、東京の街は目まぐるしく、酒も、晩酌の一本を持てあますほどの、昔、夢にも思ひ及ばなかつたやうな不思議なことになつて來て、それを今ではもう不思議とも感じなかつた。盛りの頃の、一晩の小遣にも足りない五百圓と云ふ金子が、月々店から届いて來るのを、多くも少くも思はずに、女中とも三人口の一家、たゞもう安穏に暮してゐた。――そんな風だつたから、自然、丁度成金の[illegible]と對になる、あの俄貧乏の萎縮や猜疑や負惜みなどにも陥らないで、くすみはくすんだなりに、以前の[illegible]たれてゐたのだ。と同時に、所謂苦勞人らしく、卑屈なまでに自分と云ふものを揺りへらしてもゐなかつた。またぐ〵[illegible]

が殘つてゐる。つまり云へば、うつかり相手に吊り込まれて了ふやうな、尻の輕いところがないではなかつた……。

「然しね、お都留ちやんを見てゐると、なんだかかう、可哀想になつて來て仕樣がないね……」

今日の午後も、亡友の書齋だつた二階の八疊間で、勝子と差向ひに、いろ／＼と今度新たに起つて來た緣談の話最中、ふとこんなことを云ひ出したりした。

「何が？　どうして？」

「どうしてつて、貴方みたいに、毎日ずうツと續けて見てゐたら氣がつかないかも知れないけれど、この頃……たつてもう二三年この方だけれど、お都留ちやんを見るたんびにさう思ふことなんだが、――だん／＼から元氣がなくなつて來て……、この頃はまためつきり顏色も惡いし、痩せたし……」

「それア、貴方、年齡のせいよ」

「年齡のせい？　冗談いつちやアいけない。二十二三と云つたら、花で云へば眞つ盛り……」

「ですからさ、その盛りの過ぎないうちに、……一體云へば、普通よりもう三四年はおくれてゐるんですからね、それであたしも……」

「それア、おくれてるとも！一體貴方があんまり考へすごすのがいけないんだよ。なんでも物事は、かうこじらせちまつちやア駄目だ。明けても暮れても緣談々々で、三年も四年もせめ通されてみなさい　どんなに快濶な娘だつても、いゝ加減痩せちまはアね。年ごろの娘に緣談と來れア、ちよつと考へると猫に木天蓼だが、こいつが存外素人考へかも知れないて」

「そんなに云ふほど、何も、弱つてやアしませんわ」――

「弱つてますとも！　あんなに無邪氣に、快濶な娘だつたのが……」

「ですからさ、それは、貴方、年齢の加減ですわよ。いくら配前でおおてんばだつて、二十三にもなりやァ、少しは其方……」

「いゝえ、それアそれとして、あの疳の強いのは、また別ですよ。あれア全く縁談疲れだね。一生の大事だと思やア尚更、うかつにどれがどうとも云へやアしないからね。……可哀想だよ、全くあれぢア可哀想ですよ。今日の容子を見て、あたしアつくぐ氣の毒になつたね」

「だつて、結局は當人次第だつて云ふのが、前々からの貴方の持論ぢアありませんか。さうすればどうしたつて當人の意思を惜めてみるよりほかに……」

「それア無論當人次第さ。親次第や他人次第でよからう筈はないにきまつてゐるけれど、そこはなんだよ……」

「そこはどうなんですよ」

「そこは、ほんとのことを云ふと、貴方が悪いんだよ。貴方があんまり突つ込んで考へすぎるから、當人の考へてみる餘地なんぞなくなつて了ふし……」

「だつて、それア親ですもの！　貴方なんぞ、子供をもつてみたことがないから……」

「それを云はれりやア一言もないんだが……それアもう親としてどこまでも心配するのは當り前のことだし、また至極結構なことでもあるんだが、そこが中々むづかしいところでね……」

「えゝ、全くむづかしいわ」

「つまり、なんだア、端的に云つちまへば、貴方のは、少し自分の考へを喋りすぎるんだよ。自分の考へは考へとして、

出來るだけ當人には云つて聞かせない方がいゝと思ふね。さうないと、あゝ云ふおとなしい娘のことだから、知らず識らずの間に、すつかり貴方の考へ通りになつちまうんだからね。さうすれアつまり、當人次第と云ふじよう、矢ツ張り貴方次第になつちまうわけなんだから……」

「まア、なんてんでせう！　貴方も隨分出鱈目ねえ！」

「どうしてさ」

「どうしてつて、さうぢアありませんか、……たつた今貴方は、あゝ云ふ年齢のいかない者に、一生の大事がさうはつきりときめられるものぢアない、それを無理にきめさせやうとするから迷るんだつて、さう仰有つたばかりぢアありませんか」

「然しそれア……」

「ですからあたしが、あの娘の參考にもと思つて……」

「ところがね、その參考つてやつがね、うまく參考だけですんでくれりア世話はないんだけれど……」

「なんぼ都留子がぼんやりだつて、それくらゐなことは、貴方……」

「いゝえさ、決してさう云ふつもりで云つたんぢアないが、……つまり考へと云ふやつが、考へとしてだけ話せるわけのもんぢアないんで、自然そこに話してゐる人の氣持がはいつて行くからね、そいつが大きいんですよ。今度の話には、馬鹿に阿母さんが乘り氣になつてるとか、それほどでもないとか、先達までは乘り氣だつたがこの二三日あんまりよくも思つてゐないらしいとか、そんな風に、貴方の氣持が、一々お都留ちやんの方へ映つて行くんだからね。考へとか參考とか云ふやうなものなら、それアまたお都留ちやんはお都留ちやんで、相應しつかりした考へをもつてるだらう

けれど、叔母さんの氣持、と云ふことになつて來ると、これにやア手も足も出せまいからね。みすく〳〵[illegible]
がつてるところへ、自分から進んで行きたいとは、ちよつと云ひ出せまいからね」

「それぢア一體どうすればいゝの？」

「さアね、……ところで、一體貴方は、御自分の時にはどうしたんだい」

「あたしなんぞは、今とは時代も違ふし、無論兩親の云ひなり放題になつちやつたんだわ」

「ぢアまア、矢つ張りその流儀でやつとくより仕方あるまいね。ほかにもまだいろ〳〵流儀はあるけれど、與何人間てえやつは、自分のやつて來た方法が、一番間違ひないやうに思ひ込んでるもんでね、中々容易なことつちや他流へは移れないさ」

「ぢア、もしも貴方に娘さんがあつたとしたら、どう云ふ流儀で結婚させるつもり？」

「それアもう大した新しさだね。—— 絶對自由だ。自由戀愛、自由結婚！ 徹底的に絶對放任主義さ」

「なアんて！ 實際になければどんな口でも利けるわね」

「いゝえ、全くだよ。自分の娘を自分で探し出せないやうな男や、自分の亭主を自分でつかまへて來られないやうな女ぢア、とてもこれからの世の中で、一人前の働きが出來ツこありアしないよ。早いためしがあたしだ、親任せにされつた娘は、自分からさつさとおん出て行つて了ふし……」

「お金の力でつかまへといた女たちは……」

「や、その通り！……金の切目が緣の切目さ。……そこへ行くと貴方なんざア大出來の部だ」

「だつて、今更出て行かうにも、引取りてがないぢアありませんか。それとも、貴方にでもお願ひしとかうかしら、[illegible]

持の御隱居さんかなんか探して來てくださる？」

「ちげえねえ！　それよりいつそ新しく、若き燕なんさアどうです」。

「えゝ、結構！　こつちは老いたる鴎かなんかでね」

それで笑ひ話になつて了つたのだが、阿野が、即席の造語で「緣談鬘」と叫んだ都留子の陰鬱には、實際しんみりした同情がもてた。結婚と云ふ、一生涯のうちで一番華やかな、晴がましい事實を前にして、若い娘が、まづ事の重大さに氣壓され、母親の氣持に影響されて、思考の自由を缺き、感情の潑剌を失つて、――おまけに、どれもこれも、次から次と破談になつて了ふのに、心持は益々消極的に、否定的に傾いて行くばかりで、少し大袈裟に云ふなら、仕舞には緣談で命をとられはしまいかと案じられるほど、身をも心をも傷めつくしてゐるのが、哀にもいじらしかつた。せめては、その誰にも云へないことを、こつちから氣輕く指摘してやつて、「ほんとうにさうなの！もうこの頃では、緣談と聞いたばかりでぞうツとするわ！」くらゐな本音を吐かせ、凝りきつた氣持を揉みほごしてやりたかつた。そこへ行くと、同じことでも、母親の焦慮や心配には、少しも同情がもてなかつた。この方には、どこかに享樂的な感じがあつた。今度こそ、今度こそと、決定をあせつてゐる心の陰には、この永の年月つゞいて來た心配と、綺麗さつぱり手を切つて了ふ淋しさが、早くも朧げな脅威の姿を現して來てゐることも、思ひやるにさして難くはなかつた。「邪推すれば」と云ふ前置をつけて、憚りなく猜疑な想像を働かしたら、それは、抑壓された寡婦の性慾から來る、慘忍性の現はれだとも、云つて云へないことはないくらゐだつた。――兎も角、母親には、苛立ちながら、心配しながら、それでどこか樂しんでゐる氣持が見えた。全く反對に、娘は、喜ばふとしながら、それ／＼すべき筈だと感じながら、それでだん／＼氣が滅入るばかりだ、と云ふ風だつた。――その點に關する考察が、積り積つて來て、今日と云ふ今日は、半ば匙を捨てた氣持の阿

野も、柄になく、義憤めいた胸の熱さを抑へかねた気味ながらも、元来口を利きたくないからも、[illegible]うと試みたが、然し、急所を抑へて、身動きのならないやうにして置いて、その上でかれこれ云ふとなれば、無論好子には、かん／＼に怒つて了ふに違ひなかつた。さうかと云つて、遠巻きに寄せて行くのでは、鰻にぬめりを与へた例が、女に授け給ふた自衛本能で、円転滑脱、無碍自在な没論理を弄ひ、弁舌さはやかに、うまくぬるりとぬけられて了ふのがおちだつた。それでも、幾度かさう云ふ失敗を重ねた揚句、たうとう都留子の陰謀と秘密だけは是認させることが出来た。――と、思ふと、すぐもう話は、思ひもかけない方角へ逃れて行つて、

「いえね、それについても、實は、貴方に御相談ねがはふと思つてたことがあるんですがね」

と、未亡人は一膝のり出し加減に聲をひそめて、「まア、私が―そんなこともあるまいとは思ふんですけれど、あゝしてこの頃すつかり元氣がなくなつて了つたところから、ひよいとわたしの胸に浮んで來たことなんですがね、――なんかかう、自分一人で考へ込んでるやうなことでもあるんぢアないでせうか」

「と云ふと、つまり、なんですか、好きな男でも……」

「えゝ、まアさうですね……もと／＼あゝ云ふ晩熟の方ですから、まさか學校へ通つてゐた時分には、そんな氣もなかつたらうと思ふんですし、それから後は、たまさかどつかへ出かけるつたつて、わたしか兄貴殿か、……まアめつたに一人で出してやつたことはありませんから……」

いつまでも都留子が、子供のやうに思はれてならない阿野としては、ついに一度そんな懐ひをもつたこともなかつたのだけれど、もの／＼しげに聲をひそめたり、どこまでも身贔負な考へ方をする母親に對しても、一口に「そんな馬鹿なこと！」とは云ひ消したくなかつた。他人の口からそれを云はせて、自分の安心を確めたい意企が、阿野に見え透い

てゐるだけに、それまで一度も思ひ浮べたことのない事實の方へ、却つて、一足飛びに突きやられた態だつた。

「さアねえ……」

「と云つたところで、勿論、何も疑はしい事實なんぞはないんですけれど、たゞあんまりしよんぼりしてゐますからね」

「それアまア、あたしも、大抵大丈夫だらうとは思ふけれど、これぱかりは、いくらはたから嚴しくしたつて、――よしんば貴方が、つきツきりにそばにくつついてゐたつて、見る目かぐ鼻の取締りまではつかないんだから、惚れたとなれア遠慮なく惚れるでせうがね……」

「それだつて、どこの誰それとも判らない人なら……」

「いや、判つてる場合だつていくらもあるでせう。昔のお嬢様ぢアあるまいし、お輿の簾ごしに見初めるばかりが見初ぢアないんだから」

「それアさうだけれど、うちなんぞぢア、めつたに若い男が出這入りするやうなこともないんだし……」

「貴一の友達だつて遊びに來るでせう」

「あの兄貴殿と來たら、貴方も御承知の通りの變人で……」

「兄さんのお友達……なんて、小說にだつてよくある筋ですぜ。それに第一なんだア、今時の娘さんたちは、西洋の活動役者、――壁だかシイツだかの上に映つてる、それこそほんとうの幻みたいなものにも惚れるつて云ふし、さうかと思ふと、恐多くも雲井の上の御方をお見初め申して、昨年の××××なんぞは、全國に亘つて數十萬の失戀者を出したつて云ふくらゐだから……」

「冗談は冗談として、ほんとにどうでせうね」

「それアあたしンだつて判りやアしないやね。そんな無理な……」

「いゝえ、それアさうだけれど、一度貴方から、それとなく訊いてみて頂いたらどんなもんでせう。却つてこちら、藪をつツ突いて蛇を出すやうなことになつても困るとは思つてるんですけど……」

「おん婆さんの役だね？ だけど、あたしだと、男はよし、ぐツと若く見えるから、はたから見ア、お兄さんの手を握りながら、娘の方で口説いてるとことしか見えまい。そいつが辛いて」

「まア呆れた！ ほんとに貴方は、いつまで経つても馬鹿ね」

「年齢をくふたんびに利口になるもんなら、貴方なんぞももういゝ加減……」

「うるさい人ね！いゝわ、なんでもさうして茶化して了ふんなら、もう決して相談なんぞ頼まないから」

「たすかる！」

そんなことで、然し結局阿野は、その「おん婆役」を引きうけ、うちでも暑からうと云ふので、散歩がてらとして、夕方から、都留子をおもてへつれだしたわけだつた。

それは、三月にはいつて間もなくだつた、午ごろ、阿野が桁橋におりる時分から吹きだして、麻布市兵衛町の高台にある川島の二階では、硝子戸の隙で、どうかすると相手の言葉も聞き損ふほどの南々風になつたが、いゝ按配に、日かける頃にはぱツたりと凪いで、雲を吹き拂はれたあとの空が馬鹿に美しく、気温も穏かに、散歩にはもつて来いの夕方になつてゐた。

「あゝあ、あゝ！」

さう云ふ氣持のいゝおもてへ出て行つてみて、却つて阿野は、あたまとも體とも云へない疲れに氣がついた。兩肘を折り曲げ、うんと胸を開くやうに空を振り仰いで、聲に出して大きな溜息をついたりした。

「夕空の色なんぞが、もうどことなく春めいて來たね」

「えゝ、これからだん／＼鎌倉はよくなりますわね。もうぢき摘草でせう？」

「さう／＼、摘草なんてことがあつたね。もうちつと暖になつたら、一遍みんなで出かけておいでな。あつちも、地震後はすつかり汚くなつちまつたがね」

「矢つ張り、どこもかもバラックなんでせうね」

「街はもと／＼汚いんだから、新しく建て變つて、却つていゝくらゐなもんだけれど、木や草がね、地震後急に埃ツぽくなつたやうな氣がするよ。山なんぞ見ても、あつちこつち禿だらけでね」

「さうですかね」

「でも、東京よりはまだましだよ。ほんとに遊びにおいでな」

止むを得ない急ぎの用事で、自分は二三度尋ねて來たこともあつたけれど、貫一や都留子には、決して阿野のうちへ寄りつかせなかつた。無論それは、性の知れない女が一緒に住んでゐるからで、例の賢母式教育法から出てゐることゝは知れてゐたが、別に苦に病むほどのことではなし、こつちからも、ついに一度遊びに來いと誘つたりしたためしはなかつたのだけれど、ふとした調子で、なんの拘泥もなく、お世辭でもなく、すら／＼とそんな言葉が出て了つた。

「えゝ」

顎の上まで、毛糸の襟卷を掻き合せながら、娘は、反跳のない、曖昧な返事をした。

「女は、お嫁に行つて、子供でも出來ちまうと、なんにも出來なくなるから、お前さんたちぞ、今のうちに、摘草でもなんでも、せい〳〵したいことはして置くんだね」

「えゝ」

相變らずの返事だつた。尤も、氣がついてみれば、今時の娘が、摘草なんぞ、何がしたいことなもんか、と我ながらその迂濶さ加減が可笑しかつた。それから延いて、もう一つ心に浮んだのは、鎌倉の春を思ふと同時に、すぐ摘草を云ふしたこの娘も、よつぽどおくれてゐる、全く今時には珍しいねんねえだ、と云ふやうなことだつた。

「一體お都留ちやんは、どんなことが好きなんだい。阿母さんがあゝ云ふ風だから、芝居や活動なんぞ、めつたに見せて貰へないんだらうね」

「えゝ、三遍かしら、四遍かしら、……數へるほどしかつれてつて貰つたことないわ。……でもね、あたし、さう見てみたいとも思はないの」

「へえ、そいつは珍しいね。女の好きなものツてえば、芝居、蒟蒻、蛸、芋、南瓜ツて、昔から大抵相場がきまつたもんだがね」

云ひきらないうちに、都留子は、顔半分襟卷のなかに埋めて、くツくと笑ひ出した。二三歩行くと、立止つて了つて、腰をかゞめ、膝をもんで可笑しがつた。

「なアんだい」

阿野も足をとめ、微笑ひ顔を振り向けて、い

「何がそんなに可笑しいんだよ」

「な、な、なんですつて？」

こみ上げて来る笑ひに遮られながら、「も、も、もう一度、もう一度云つてみて頂戴」

「芝居、蒟蒻、蛸、芋、南瓜……かい？」

それでまた新たに笑ひ崩れたが、やつと、帯の上から横腹を叩き叩き歩き出したと思ふと、もう一度ぷツと噴き出して、

「なんですつて？芝居、芋、蛸……？」

「いゝえ、芝居、蒟蒻だよ、芝居、蒟蒻、蛸、芋、南瓜さ」

「あら、さうかしら、あたし、蛸なんぞ大嫌ひだわ」

「さうかね。然し、なにしても、女つてものは、よつぽど食ひ意地が張つてゐるんだね。それだけの中で、食べられないものつたら、芝居一つきりぢアないか」

「ほんとね。でも、それア昔の女だからよ」

「ぢア、今の女はなんだい」

「さうねえ、――テニス、編物……」

「なんだ、體裁のいゝことばかり云つてるぜ！」

ところが、ぶら／＼虎の門まで歩いて出て、阿野が好物の支那料理を食べやうと云ふことになつて、そこの、黒く冷たい食卓に差向ひに腰を卸してから、こゝ十日ばかりのうちに、馬鹿に進みかけてゐる縁談の方へ、話の筋道が向いて行くと、人が變つたやうに、忽ちまた都村子の快調が失はれて了つた。伏目であるとか、そつぽを向くとか、始終、少

しも阿野へは目をくれずに、「えゝ」と「いゝえ」を微に呟くばかりで、折角の御勧めにも、やッぱりにやつとはしなかつた。それは、幾度観察し直してみても、決して昔風の含羞(はにかみ)やきまり悪さからではなかつた。今度のからさくいつて、いよ〳〵話がきまつたとしたところで、別だん嬉しくもないし、大抵は、またいつものでんで、途中でこはれて了ふんだ、そんな風にたかをくゝつて、少しの希望も興味もないばかりか、一度々々毀れ残りの感じを強められて行く前夜や屈辱で、もうての話は一切聞きたくない、とでも云ひたげな、少し言葉を強めれば、不貞腐れた態度さへも仄(ほのめ)くのだつた。それでも、いつものやうに、母親の前だと、まだいくらか遠慮もあるのだらうけれど、なアに、阿野一人なら構ふもんか、の気持か、今夜はそれが、殊にはなはだしかつた。

引づり込まれて、阿野も、陰気な、重ッ苦しい気分になり、結婚とか、結婚生活とか云ふものに対して、機械的な、寧ろ虚無的な思索に耽りながら、機械的に、晩酌盃を唇へ持つて行くばかりで、やゝ暫く話が杜切れてゐたのだが、そこへ、突然、

「小父さん、お酌して上げませう」

だつた。さうして、雨に早く暮れた夕方、ぱッと赤気がついた燈のやうに、急にどこからどこまで生々と、華やかに明るい娘の笑顔を、阿野は眼前咫尺の間に見出したのだつた。

（さうだ〳〵、それでこそ嫁入前の娘だ！）

そんな気持で、阿野は馬鹿に嬉しくなつて了つた。

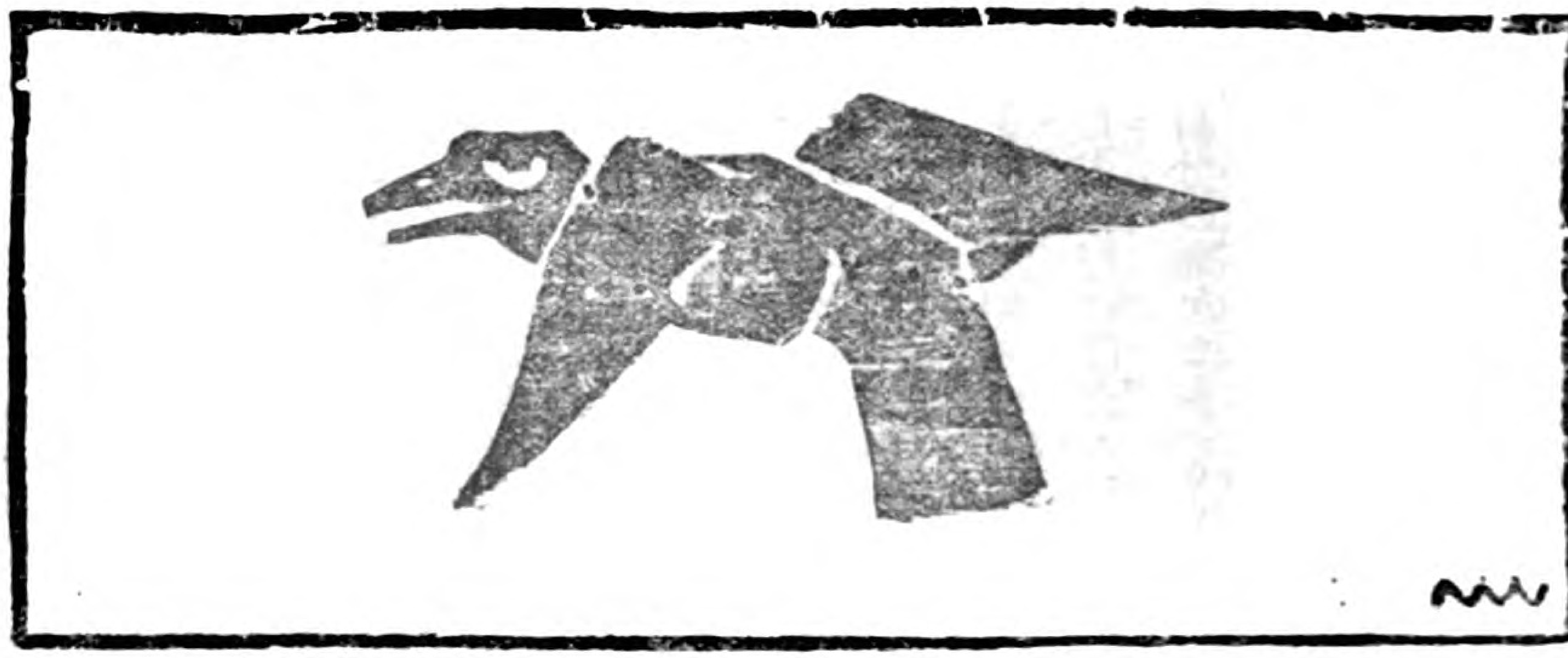
（未完[illegible]）

致死外に長くなりさうです。さうしてそんなに長くないものになりさうです。もう二日四日かゝつたらお仕舞まで書けさうな気

もしさすがさうしてゐると他の雜誌の締切に間に合はなくなりますし「直幅の夢」の時のことを考へてみてもあとをゆつくりと十分に腰を据えて書きたくなりましたから今月は未完のまゝ發表させて下さい。忙しくあとを書いて了ふのが惜しくなつたのです。御誌としては續きものは御迷惑とは重々御察し申しますが。來月はもつと早くからかゝつて必ず完了させますからどうかさう云ふ都合にして置いて下さい。

哲太郎兄

弥



「惡(イーヴル)」の同意語(シノニムス)

牧野信一

一

小田原から靜岡へ去つて、そこで雛妓のお光とたつた二人だけで小さな藝妓屋を始めたといふ話のお蝶を訪ねよう——さう思ふことゝ、米國ボストンのFに、最近の自分の消息を知らせなければならないこと——。

この二つのことだけは、近頃彼が、自ら例へて冬籠りの地蟲の心になつてゐる因循な頭に、いくらかの積極性を與へた。母や清親などゝ野蠻な爭ひをした揚句、その儘周子と三才の英一を伴れて東京へ來てしまつた彼だつた。

だが彼は、父が生きてゐた頃も母とは幾度も爭ひはしたことがあるので、今度だつてそんなことでは憂鬱を感ずるどころではなかつた。母などとは、あんな騒ぎには忘れた顔をして、顔もあからめずに會へる氣がした。苦い發作的の感情に、一時は

カツとして向ツ肚をたてるが、根が安價な心の持主である彼だつたから、一瞬時後には呆然たる魚のやうにピッカリと洞ろな眼を擧げてゐるばかりだつた。恬淡ではない、狡くて、光りを知らない痴呆性に富んだ男に違ひないのだ。

いつもの通り彼は、午過ぎまで寢床の中に縮んで、痴想に耽つてゐた。

「もう、そろそろほとぼりも冷めた時分だらうから、小田原へも行つて見ようかな！　阿母がいくら頑張つたつて、親父の生きてゐる時分とはわけが違ふんだからなア！」

彼は、上向けに寢て闊太く冷い微笑を浮べてゐた。

「ひとつ、威嚴を取り戻して來てやらうか……」

悠々と彼は、煙草を喫した。襖が立て切つてあつたから、煙りは靜かに天井まで延びて行つた。――（平氣なものだ、何と落ちつき拂つてゐることだらう。）

彼は、一杯含んだ煙りを、大きく口をあけてハア、ハア、と吐き出しながら漠然と胸の擴がる思ひに打たれたが、ふつと醒めて煙りの中に淸親や母の姿をはつきり感ずると、忽ち胸は冷汗に充たされてしまつた。

口先きだけは花々しかつたが、一たまりもなく腕力家の淸親にねぢ伏せられてしまつたぢやアないか――彼は、思はず自分の額をピシャリと平手で叩いた。そして、痩ツぽちの癖に、紐を腹の下に絞め、襟をはだけて、奇妙に太い作り聲を擧げて豪放を構えてゐた自分が、淸親の腕につかまれると、藁人形のやうに輕々と摑み出されてしまつた光景を回想して、彼は、陰鬱に顏を歪めて、深く蒲團の中へもぐつてしまつた。――彼は、堪らない溜息を吐いた。

そんな幻は拂ひ落さうとして、彼は、首を振つたり、肚に力を込めたりして躍氣になつたが、相手の橫着氣の方が强かつた。……彼は、映畫に寫つた己れの姿を、否應なく見せらなければならなかつた。

「禮儀を辨へぬにも程がある。」と、母の乾いた聲が細かく顫へながら呟いた。

「齢二十才の醉ツ拂ひなんぞは……」と、それでもいくらか息を切らせた清瀬が、靜かに盃を取りあげて、笑つた。「チヨツ！それにしても意久地のない男だな。」

「もつと酷い目に合せてやれば、よかつたんです、小面の憎い。」と母も苦笑した。

――彼も、今、もぐつた寢床の中で苦笑を洩した。と、彼の冷汗は、暗闇の中で奇妙に溶けて行つた。

「まつたく好い氣味だつた。誰だつて、あの光景を眺めてゐた者は思はず溜飲をさげたに違ひない。」

彼は、自分の慘めな姿を、セヽラ笑つてまつたく溜飲のさがる氣がした。張り切つたゴム風船を、一氣に踏み潰して、ボンとあつけない音を耳にした時のやうな、洞ろな晴々しさを感じた。反つて、冷汗に閉され、筒抜けた肉衢に沈んで行く身心に、不意と潑剌たる光りを感じた。

「……ところで、まア當分小田原行きは控へて置いた方がよさゝうだ。」

蒲團から首を出して彼は、力なく煙草を喫した。――あの時、周子も傍觀者の一人だつた。いくら味方だつたにしろ、水中に投げ込まれた蟬のやうに次第に鳴りを秘めてしまつた俺の姿を眺めたら、一瞬間は道德的理性を忘れて、わけもない小氣味好さを感じたに相違あるまい。當人の自分でさへ斯んな氣がするんだから……いや、一瞬間どころではあるまい、口にこそ出さないが、彼女の東京に來て以來の悶々しい態度から察しても、彼奴は無反省な馬鹿な女だから、あんなところから知らず識らずこの俺を輕蔑する程度が強まつたのかも知れない――。

彼は、そんなことを思つて苦い顏をした。母達に對しての自分の慘めな姿は、こんなにも膽く潤んで、反つて晴りを放つたが、相手が周子となると、彼の頑なゝ心は石のやうに武張つた。母の頑迷を憎くゝ思つた彼だつたが、母にも增

した小賢しい、小人の心の動きを嗤えることが出來なかつた。――彼の前で彼の母は、よく周子を批難したことがあつたが、今では時々彼は、その母を親しく思ふことがあつた。

「だけど考へても御覧な！一體周子の何處に取り得があるの？」と、母は云つた。

「まつたくね。」

私だつて承知してゐますよ、といふ風に彼は、にやにや笑ひながら盃を傾けてゐた。斯んな場合が、夫々この贋しく獨り好がりな母と伜が、陰險な親し味に溶け合ふ場合だつた。だが肚の底では、互ひに愚かな優越を感じ合つてゐるのだ。――私達の云ふことも聞かないで、勝手に結婚なんてした罰さ、何と云はれたつて文句は云へまい、どうならうとお前のことなんて知らないよ、だ、態ア見ろ！――母の心は、さう呟いでゐるし、また彼の心は、（低級な、悪い文學々生の臭氣が抜け切れない彼である。）――俺は、利口ぶりの人間の顔を見てゐるのが好きなんだ、何とも云ひやうのない愉快を感ずるよ、さういふ相手に接すると俺は、巧みに其奴を煽てゝやるんだ、決して喧嘩なぞはしないね、互ひの愚を觀察することは面白い仕事だ、ねえ阿母さん、――こんな他愛もない遊戲に耽つてゐた。

「琴なんぞは今時出來なくつても好いんだらうが、お茶のいれかたも知らないし、生花はおろか……」

「料理の法も一つも知らないし……。」と、彼は伴奏でもするやうに附け加へた。

「春夏秋冬、懸物の懸換へ……」

「ハツハツハ。」と、彼は仰山に笑つた。「懸物なんぞ……床の間なぞの存在を知るものですか、――。暑い日には、暑いと感じ、寒い日には寒いと、おぼろげに意識するだけですよ。」と、彼は自分のことを云つてゐるやうな氣がした。」

意識とか、感じとか、存在とか、何々的だとか、そんな言葉を臆面もなく彼に、母親などの前で使つた。

「學校などの成績は、どうだつたんだらう。」

「たしか中途で止めてしまひましたぜ。」

「親は親で、あの通りだし……。」

母は、さう云つたが、彼が餘り易々と妥協するので、いくらか退屈を感じたらしい苦笑を浮べた。「手紙ひとつ書けないぢやないか、あの豚らしい文句はどういふわけだらう。」

「手紙？」と、彼はハツと思つた。が、まさかと高を括つて「手紙は私だつて書けやしないぢやありませんか。」と、ごまかすやうな笑ひを浮べた。東京へ行つてゐた間、母に手紙の返事を彼は、時々書いたが、よく母に彼の手紙の文章中の嘘字や假名使ひの誤りの傍に線を引いて、返送して寄したものだつた。

「男とはわけが違ふもの。」と、母は云つた。母から、そんなに云はれたことは始めてだつたので、彼は烈い屈辱を感じた。だが彼は、母が何時何處で周子の手紙を見たのだらうか、と考へて見たが思ひ當らなかつた。また周子と結婚しない前、たしか四五度手紙の往復をした以外に手紙のある筈はなかつた。その手紙だつて、彼のにしろ周子のにしろ、出たら目ばかりに違ひなかつたから、一つだつて彼の記憶に殘つてゐなかつた。

「周子の手紙なんぞ、どうして見たの？阿母さんに寄したことがあるの？」

「お前に私が此間借りた本の間にはさんであつた、手紙ぢやないと思つてうつかり讀んでしまつたのは悪かつたが、」

母は、さう云ひながら茶箪笥の上に手を延して、部厚な本を彼に渡した。彼は、稍慌てゝ箱の中から、書物を抜き出した。無造作に畳んだ紙片れが、こぼれ出た。それでも彼は、思ひ當らなかつたので、擴げて讀んだ。

（おなつかしきお兄様、御歸省なされていかにお寂しですか、周はいつぞやお兄様と日比谷を散歩したときのことを嬉しく思ひ出してゐますのヨ、あの時のお兄様のおやさしきお言葉……おゝ周の小さな胸は高鳴ります……詩をつくりましてよ、ホヽヽ、お見せしようか、よさうか、でもお笑ひになりはしないこと、それは〳〵拙いのよ、ホヽヽ）

読みかけて彼は、凝つとしてゐられなかつたが、辛うじて酒で紛らせて

「手紙ぢやないんですよ、誰かのいたづら書きでせう。」と云ひながら、母に氣づかれないやうに、ふところの中でそつと苦茶苦茶にまるめた。

「せめて體の丈夫なところが取得かね。」と、母は蔑んで笑つた。

「體だつて、此頃はさつぱり丈夫ぢやありませんよ。」

「だけど、それはお前が悪いんだもの。」

遠くの、斯んな種類の家庭に伴れて来られて、常にそんな風に扱はれる周子の身を想つて、彼は憐れを覚えた。彼女は奥の部屋で、意地悪な夫と姑の微かなせゝら笑ひを耳にしながら、兄弟や両親のことを考へて、鬼の住家にでも囚はれの身になつた想ひに走つてゐることだらう——彼は、そんな風に察したりした。

それにしても、東京に来てからの彼奴の我儘はどうだ！と、彼は、ひとりで力んだ。無能、無智、不器用、そのやうな周子に、彼は、安易な組みし安さを持つてゐたのだが、それに無神経な露骨な自我を加へたこの頃の彼女には、辟易せずには居られなくなつた。はじめて主人といふものになつた彼の、小賢しい焦慮もその不用意な胸や頭を醜く、苦めてゐたには違ひなかつたが。

二

今日こゝでは、Fに手紙の返事を書かなければなるまい。彼女も結婚して三年目ださうだ、そして一人の子の母になつたといふ話だ、……そしてこの俺も、周子と結婚して既に五年か！

彼は、今更のやうにそんなことをぼんやり考へたりした。だが彼のやうな消極的な青年に、青春を謳歌したり、結婚を悔ひたり、新しい戀を求めたりする程の潑剌さはなかつたが、妄想の遊戯で、稍ともすると底の見へ透いた怪しげな想ひに走つた。今になつてFの姿を、こんな形ちで思ひ出すなどは、大變徒らなことに違ひなかつた。

「あゝ、厭だ〳〵、周子、周子。」

彼は、力もなくそんなことを呟いた。

彼が三才の時、妻を嫌つて（多分さうに違ひない、と彼は久しい前から斷定してゐた）外國へ行つた父である。少しく無法過ぎるところが不快だが、もう死んでしまつた父の話である、そして昔のことである、お伽噺のやうなものだ——し彼は、お伽噺の主人公である父の衣服を借着して、遙々と海を越えて行く薄ら甘い情けなさに醉つた。

「ヘンリーは死んでしまつたが、彼の凡庸な伜は、丁度彼が、昔々、彼の妻子を棄てゝこの國を訪れて來た時の心に比べて、何の新しさも持たない僕が、斯うしてたつた今お前の國に着いたところだよ。」

彼は、先づFにさう云はたければならなかつた。ヘンリーといふのに、異國の友達の間で稱ばれてゐる父の字名である。和名の、頭文字のHをとつたのださうだ。

「お前のやうた臆病者が、好く獨りで海を渡つて來られたね。」

Fは、青い眼を輝かせて、おどおどしながらあたりの見慣れない風景に見惚れてゐる彼の肩を輕く叩いた。

「この頃は、臆病ではないんだ。臆病でなさすぎる爲に、母や妻や子と別れて斯うして遙々と出かけて來たんぢやないか。」

「お前の笑ひ方は、ヘンリーに似てゐるよ。」

「F！　結婚してお目出たう、大變云ひおくれてしまつた。」

「お前にも同じ言葉を返さなければならない、ワタシは。」

「それを快く享け容れられる位ひなら、僕はお前の國へは來なかつた筈だ。」

「バカ！」

「お前に、いつか貰つたオペラ・グラスを僕は今でも持つてゐるよ。此方へ來てお前と一處に芝居へ行かうと思つて、あれはちやんとトランクの中へ入れて來た。」

「お前は、あの時分、ワタシに微かな戀を感じてゐたのぢやなかつたかしら？」

「――僕は、NとNの母に會ひに來たんだ。」

Nは、彼の見たことのない混血兒の姉なのだ。Nの幼い寫眞は知つてゐる。Nの母も寫眞では知つてゐる。口で云ふ程彼は、NやNの母などに會ひたくはなかつた。漠然と彼女等の存在を思ふと、たゞ薄氣味惡い氣がするばかりで、會はずに濟んで來たものならその方が樂だつた。Nのことを、まざまざと考へると父に對する好意が消えさうにもなる。得體の知れない嫉妬さへ覺ゆるのだ。

「勿論そのつもりだらう、そしてその案内役は勿論ワタシでなければならないね。」

「いや、今云つたことは嘘なんだよ。NやNの妹などには合ひたくはないんだ。」

——僕もこゝに永く滯在して、父がN達を得たやうな眞似がしたいんだよ——彼は、斯う云ひたかつたのである。

三

「着物を仕舞うとしたら、袂の中からこんなものが出て來た、今朝!」

周子は、用箪笥から、手の平に握りかくせる程小さな、古いオペラ・グラスを取り出して彼に示した。「どうしたの?こんなものを小田原から持つて來たの?」

彼は、大きな秘密でも發かれたやうに、喉の詰る思ひがした。

「いや、此間友達に貰つたんだ。」

「嘘々、あたしこれ確かに小田原で見たことがあつた。」と、周子は無造作に笑つた。「あたしに呉れない?」

「そりやアやつても好いがね、そんなもの誰にだつて必要ないぢやないか!」と、彼は、口を尖らせて苛立つた。「おや、どうしてあなたは斯んなものを袂になぞ入れて出掛けたの?」と、云ひ返せば彼がどんな返事をするか、彼自身にとつても解らなかつたが、

「でもよ、たゞ玩具によ。」と、周子は輕く笑つただけで、別段興味もないらしく火鉢の傍に投げ出した。彼も、知らん振りをして、ついこの頃になつて初めた晩酌の盃を傾けてゐた。

「ひとりで一升のお酒が、一晩目には足りないのよ。隨分あなたは此頃お酒が強くなつたわね。」

周子は、そんなことを云ひながら酒の代りを取りに立つて行つた。強くはない、大概彼は、斯る時は澤山だつた。何

を喋舌つたか？どんなことをしたか？それが後になつて解らないのは隨分薄氣味惡るかつたが、それも毎日のことゝなると慣れてしまつた。動き、喋舌り、笑つたり、憤つたりしながら、顧ると、凡てが茫漠として、死のやうな平靜──生きて、眼醒めてゐる時に左様な時間を與へられ得る──そんな風に意味あり氣に考へて、わざとらしく不思議がつたり、愉快がつたり、そして醉を心易く思つたりした。

「そりやア、强いさ！」

オペラ・グラスに就いて、周子が淡白だつたので彼は、ホッとして、氣嫌の好い聲を擧げたのである。そして無理に銘酊した調子で

「われは眼に太山を見るなり……莊周夢に胡蝶となり、栩々然として胡蝶となり　か。自ら愉して心に適するや、周なるを知らず、俄然覺むれば即ち遽々然として周なり、周の夢に胡蝶となると、胡蝶の夢に周となるとを知らず……どうだア。」などと、鼻にかゝつた聲で吟誦した。

「栗山さんの眞似なんぞはお止めなさいよ、柄でもないわ。」

栗山といふのは、酒飲みの老醫師だつた。彼が、父に死なれて悄氣てゐた頃、酒の相手になつて栗山氏が、好く彼を慰めて呉れた。栗山氏は、漢詩を作つたり南畫を描くことに堪能だつた。

少し醉つて來ると栗山氏の調子は、悉くそんな風だつた。彼には、はつきり解らなかつたが、栗山氏の詩吟で練へた

「鞭長しと雖も馬腹に到らず、だよ、事を成すは天に在り、さ。」

といふ壯朗な音聲には打たれた。

「抑々　支那の昔から、生物界は之を別ちて五蟲となした、鱗蟲即ち龍を長とし、羽蟲即ち鳳を長とし、毛蟲即ち麟を

長とし、介蟲即ち龜をと長し、そこでだ、人間は何となるかな？」

「知らないですな。」

「萬物の靈長だなんて自惚れちやいかんぞ。」

「さうですか。」

「當り前さ。人間は即ち裸蟲と稱するんだ。」

「ふむ！」

「厭に感心したね、――汝、裸蟲よ、嘆くなかれ、眼に太山を見よ、ハッハッハ。」

一寸感動すると、自信のない彼は、直ぐにその眞似をするのが癖だつた。

「眞似とは何だ！　失敬な。」

「阿父さんと一處に飲んでゐた頃は、阿父さんの口眞似ばかりしてゐたぢやないの。この頃は、またあの藪醫者の眞似か――もう少し經つたら今度は誰の眞似になるでせうね。」

周子は、そんなことを云つた。葉山氏ともだんだん遠くなつて來た、まつたくこの次はどんな種類の醉漢になるだらうか――彼も、ふとそんな馬鹿な氣がすると、輕い好奇心を感じたりした。

「藪醫者とは何だ、失敬な。」と、彼は一刻前と同じやうに威張つた。「俺だつてそれ位ひの文句は知つてゐるんだ、即ち同じ裸蟲と雖も……」

「もう止して下さいな、折角子供が寢たところなんだから……」と、周子は宥めるやうに云つた。――彼は、無氣になつて威張つたわけではなかつた。周子を、ごまかしたのだ。彼は、食膳の下のオペラ・グラスを、そんなことを喋言つ

てゐる間に、そつと取つて懐中に忍ばせた。よかつた、と思つた。――十年も前にFに貰つた遠眼鏡である。大火の時に運び出された荷物の間に、彼は中學の時に使つた手文庫を見つけ出したので、何氣なく開けて見たら隅の方に、昔彼の父が幼少の彼に送つた手紙の束と一處に、入つてゐたのだ。原稿などを入れるに、鍵がついてゐるから都合が好いと思つて彼は、出京する時の荷物の中に箱を收めて來た。

茶目氣のある彼は、そんな眼鏡を、この頃漫然と外出する時は、そつと内ふところに隱して出かける習慣をつくつた。そんな微かな秘密が、稚戯を喜ぶ彼の心に、仄かな明るさを宿した。

――前の晩彼は、泥醉して歸つて來た。友達が載せて呉れたタクシーの中で、彼の輕い體は、毬のやうにはづんで、座席から床に何度も振り落された。どうして、そんな處で降されたのか、おそらく彼が間違へて止めさせたのだらう。青白い瓦斯燈がぼツと燎つてゐる寂とした公園に彼は、立つてゐた。彼は、わけのわからぬ歌を、ブツブツと口のうちで呟きながら歩いてゐた。醉つてゐる頭が、輕くフワフワして、彼の胸には、嬉に咲く、賑やかな渦が、瓦斯燈の光りのやうに淡く點つてゐた。――また、家同志の話で、周子と醜い口論をした上句、カツとして飛び出したことなどは、すつかり忘れてゐた。

暗い、夜更けの公園だつた。

「何も彼も懐しい、懐しくつて堪らない、照子、F……いや、周子だつて相當懐しいぢやないか！」

――彼は、そんなことを呟いだ。「親父だつて懐しいが、死んでしまつたんぢやお話にならないね。親父の印象も一日一日と遠ざかつてゆく、面白いぢやないか、お伽噺になつてくるんだもの。この冬が過ぎると、一年の喪といふものが明けるわけかな、一年、三年、七年……そんなことは、どうだつて關はないんだが、こんなにも脆く親父の印象が遠ざかつ

て行くかと思ふと、一寸彼に氣の毒な氣がするな。この分で行くと、春にでもなつたら、さぞかし、心は、[illegible]々として、朗らかに晴れ渡ることだらう……それにしても、今晩は、ばかに寒いな！」

彼は、襟の中に顔を埋めた。ふところにこもつた酒臭く熱い息が、あかくなつた鼻を衝いた。……彼は、歩きながら、ふところの眼鏡に、そつと手を觸れた。

「F……暫く、とても手紙は書けさうもないよ。お前の要求どほりな！つまり、ヘンリーが死んだとなると、NとNの母のことが、どんなに俺の心を不安にするか、お前には好く解るだらう。さうなるとお蝶といふ女の話もお前にしなければならないんだが、そんな話をするとヘンリーに對するお前の好意が薄らぎはしなからうか？NとNの母が、どんなにヘンリーを憫むだらうか？なんて。ヘンリーの、實は忠實な悴は心配するのさ。あの頃のヘンリーの家庭、つまり俺たちの家庭が、どんな風で、何故彼が放蕩者になつたか？そのことも話さなければならないんだ。だから、どうかヘンリーを放蕩者だと思つてくれるな。お前のダツデイは、ヘンリーの親友ぢやないか、そしてお前は、俺の親友だつた。かな？NとNの母の消息を出來るだけ多く知らせてくれ。――いつそ俺は、思ひ切つて、この冬が去つたらお前の國を訪ることにしようかな……。」

彼は、暗く重く心細いものに胸を塞さがれる思ひがした。

「これは、みんな嘘！Nも、Nの母も、ヘンリーも、俺は何とも思はないんだ。F！俺は、お前だけに會ひたいんだよ。手紙の書けない理由も解るだらう。――馬鹿奴。」

それも嘘のやうな氣がした。彼の、醉つた感情は、單純で常に支離滅裂だつた。泣き上戸、と云はれたこともある。威張り上戸だ、とからかはれたこともある。母からは、氣狂ひだ、と云はれたことがある。

「うーむ、苦しい、あゝ醉つた〳〵。」

——暗闇だ、人通りはない、多少の奇行を演じたつて差し支へはあるまいな——。

彼は、熱くなつた眼に、手巾の代りにふところから出した遠鏡眼を、ぴつたりと押しつけた。（涙なんて、流れるのが不思議ぢやないか、拭いてしまへ〳〵。）——彼は、立ち止つた。そしてオペラ・グラスを當てた眼を空へ向けた。青く澄んだ空だつた。ところどころに星が光かつてゐたが、硝子が曇つて直ぐに見へなくなつた。彼は、眼鏡の視度を調節する輪を、無暗にクリクリと動かした。青黒い空が、近づいたり遠退いたりした。今度は、公園の夜の景色を眺めて見よう——そんなことを思つた時、彼は、酷い眩暈を感じて、危ふく倒れるところだつた。と同時に、突然魔物に襲はれる怖ろしさに怯えて、夢中で、動物園裏の家まで駈け込んだ。袂に投げ込んだ眼鏡が、石のやうに痛く手首に打つかるのも關はなかつた。

「芝居を見に行つたの、あんなものを持つて！昨夜は？」と、周子は笑つて訊ねた。いくら醉つてゐたとはいへ、あんな馬鹿〳〵しい動作をしたり、感傷に走つたり、他合もない恐怖に襲はれたり、加けに驅け出したりしたことを思ふと、誰にも見られなかつたから好さゝうなものなのに、彼は、恥しさのあまり身の縮む思ひがした。

「行かうかと思つて、出掛けたんだが途中で厭になつて友達のところへ行つたんだ。」

「何處？」

「何處だつて好いぢやないか。」

「あなたは、何でも遠回しに思はせ振りな云ひ方をするのが好きね、遊びにでも何でも行つたら好いでせう、一端怒つて出掛けた位ひなら——。」

「今日は、俺を怒らせないでくれ、頼むから。怒ることを考へると、面倒臭くつて仕様がないから。」などと彼は、有耶無耶なことを呟いで、倦し氣な聲で哀願した。

「怒つて出かけたつて、ちつとも怖くはないわよ、直ぐに歸つてくるから。」

彼は、ムツとしたが、まつたく今云つた通り、何の變化もない怒りの道程を方程式に依つて操り反すことの煩しさを思ふと、堪へることの方が遙に樂な氣がした。こんなことは珍らしかつた。

「俺が、阿母や淸親の奴と、あんな風になつて此方へ來たものゝ、俺は決してお前を甘えさせはしないよ、第一、お前なんぞを味方だとも何とも思つてゐやアしない。」

「あの位ひ苦しい思ひをすれば、澤山だ。」

周子は、もう聞き飽きたといふ風に白々しく呟いた。

「第一俺は、貴様の家へなどは決して行かないよ、交際しないんだ。」

危いな！と、彼は氣附いたので、續からうとする言葉を呑み込んだ。

「えゝ、いゝわ、あたしだつてその方が反つて氣が樂ですわ。」

珍らしく逆はないで周子は、物解りの好さを見せつけるやうに默頭いた。一寸、取り澄して眼を伏せた額の低い女の横顔を眺めると彼は、輕い反感が起つて、何かもう少し惰態な言葉でも吐きたかつたが、何よりもこの晩は、波瀾なく醉ふことを欲してゐたのだ。――殊に目立つて、彼のこの頃の癖で、如何にも潔癖らしく口先きだけは云ふが、心はいつも極めて弱々しかつた。胸の底は、酒にでも醉はない限り、いつまでも微かに慄えてゐた。彼の頭には、何の光りもなく、鈍い神經が日増しに卑屈に凋んで行く、可笑しい程惨めな影が自分ながら賤しく感せられた。――口を利けば利

く程憂鬱になる、獨りで凝つとしてゐると消えかゝる蠟燭のやうに心細くなる――そんなことを思つて彼は、獨りで薄ら笑ひを洩した。低い心のレベルで、二つのちらはらな心の動きを眺めてゐるうちに、動けば動く程消極的に縮んで行く玩具のコマになるより他に術がない氣がした。どうかね、東京の「新生活」は？などと友達に訊ねられると、彼は、にやにや笑ひながら「かうなつてから僕は、氣分がすつかり明るくなつた。」などと答へた。そして――（だが、氣分なんぞは明るくつたつて、暗くつたつて、言葉次第のことだからな。）明るいと云つたつて嘘とも思はないんだが、一寸彼は、胸のうちでそんなことを呟かずには居られなかつた。

「樂は好いが、圖々しいのは困るぜ。」

「そんなことばかり云ふ、あなたが我儘なのよ。」

「逆はないやうにして貰ひたいんだ。」

「自分こそ圖々しいのに氣がつかないの？」

「さういふ風に、一つ一つ反對しないで、少しは素直に點頭くものだよ。」

「そんなことを云つてゐた日には、どんな酷い目に遇ふか解つたものぢやない、自分の心のまがつてゐるのも氣附かないで――。」

「まがつてゐたつて、まがつたなりに素直なら好いだらう、例へば大工の物差しは、あのやうにまがつてゐたつて、それでちやんと役に立つんだからね。」

波瀾をおそれてゐた彼は、笑つて、そんな出たら目を喋舌つた。周子は、つまらなさうに顔をそむけた。

「春になつたら、俺はアメリカへ行つて來たいと思つてゐるんだ。」

さう云つて彼は、アツ、こんなことは口へ出すんぢやなかつた、と思つたか、徒らに口に出す位ひでに、これは空景氣に違ひない、決心なんてついてはゐないんだ――そんな氣がして、彼は、安ツぽい夢を拂つたやうな安堵を感じた。

「ハッハッハ、嘘だよ。」

「何云つてんのさ、もうお酒はお止めになつたらどうなの？十一時過ぎよ。」

「まァ好いさ、いろいろ俺は考へごとがあるんだから……」

「ぢや、あたし寢るわよ。」

「どうも貴樣の病氣は怪しい、誇張してゐるに違ひない。」

「勝手に思つたら好いぢやないの――自分の惡いことは棚にあげて……」

「春になつたら、また當分田舍へ……」

「春になつたら、とは何さ、同じことばかり云つてるのね。田舍と云つたつて、あたしはもう小田原は御免よ。」

「俺も小田原は御免だ。だがいつかの熱海の家は、借金の形に取られてしまつたといふ話ぢやないか。」

「と云ふ話も何もあるもんですか、あなたがバカだからよ。」

こんな話で、バカだからなどと云はれると彼は、俺はお人好しだから俗事には疎いのさ、といふ風な途方もない虚榮心を誇つた。實際には何の口も利けないが、自分の物が失れた話を聞いたりすると、夥しく小さな吝嗇の心が動いて、極めて恬淡でない通俗的な癇癪が起るにも關はらず――。

「取られるのは當り前ぢやないの。」と、周子は他人の不幸を冷笑するやうな態度で續けた。「あなたの家なんて、皆な借金ばかりで固まつてゐたやうなものさ、小田原の地所だつてもう間もなく取られてしまふだらうツて、うちのおやぢさ

ん も云つてゐたわよ。」

彼は、グッと苦い塊りに喉を突かれたが「仕方がないさ、ぢや田舎行きもお止めか、どうならうと、僕なぞは始めからそのつもりだから、平氣なものだ。」と、云ひながらも周子の父親の顏を想ひ描かずには居られなかつた。――彼が、周子と結婚した當時、彼女の家は翌日の食に不安を覺える程の貧窮だつた。その頃、彼の家は形だけは幸福だつた。彼の父は、蜜柑の山を見廻つたり、鷄を飼つたりして、老境に入る支度をしてゐた。遠い國に混血兒の妹がある――その事すら彼は知らなかつた頃である。彼は、叙情的な詩をつくつてゐた頃だつた。

「タキノや、家が斯んなに貧乏だつていふことが知れると、お前ら家へ行つて周子が辛い思ひをするだんべエから、默つてゐて呉れろうよ、おらがお父ちやんだつて、そのうちには盛り返す、おらがついてゐるんだから……」

房州邊の、あくどいなまりで周子の母は彼にそんなことを頼んだ。間もなく周子の父は、樣々な事業を拵へて、彼の父を訪れた。彼の父は、今迄多くの事業で失敗し、未だ餘憤が消えてゐなかつた爲か、忽ち形もない製藥株式會社の社長になつたり、東北銀行創立、專務取締役になつたりした。周子のところでは、大崎の裏長屋から、目黒に家を買つて移轉した。――東京から樣々な人々が出入して、彼の父は滅多に家に歸らなくなつた。彼の父は、お蝶と親しくなつた。自動車などが、定期で借り切つてあつた。お蝶の家の門口には朝鮮信託會社小田原出張所などといふ札が掛つてゐた。

「さういふ話は、沁々と俺は、もう飽きてゐる。」と、彼は眼を瞑つて云つた。

「でもね、あたし達は好いけれど英一が可愛想だから、殘るものなら何とかしてやらうツて、うちのお父さんが云つてゐますよ。あなたから、好く頼んだらどう？お坊ちやんがつてゐられる事でもないし、場合だつて……」

「そのうち頼まうよ。」

彼は、横を向いて力なく呟いだ。

「東京へ來てツから、すつかり意久地がなくなつたのね。」

周子は、さう云つて快げに笑つた。

四

「父の百ケ日前後」の頃には、愚かなりにも彼の心に病的な緊張があつた。父の幻を生々と、心に甦らすことが出來た。今では、その幻も「お伽噺」となつて哀れな餘影を、彼の眠がりな頭の隅に殘してゐるばかりだつた。

たゞ愚圖々々と、いぢけた日ばかり送つてゐても滅入るばかりだ、と思つて、彼は四五日前から、何か架空的な小說でも書かうと思ひ立つたのだが、終日机の前に坐つてゐても、たゞ物憂く情けなくなるばかりで、結局寢床にもぐつて暮してしまつた。

「神經衰弱といふ病氣なのかな！」

そんな風にも思つて見たが、酒を飮むと相當元氣になるところを思ふと、これも空々しく、彼は苦笑を洩すより他はなかつた。何の飾りもない二階の八疊の書齋には、隅の方に小机が一脚無造作に置いてあるばかりだつた。——彼は、寢轉んで恨めしさうに、その机を眺めたりした。隙間だらけの唐紙や破れ放題になつてゐる障子の穴などからは、寒い風が遠慮なく吹き込んだ。

「どうも、困つたな！」

彼は、起き上つて机の置場所を樣々に迷つたのであるが、どうしても落つけず、[illegible]たく舌を鳴した。——

彼は、小机を抱えた儘、座敷の眞ン中に突ッ立つてしまひ、腕を延し、胸を擴げて、苦々し氣に天井を眺めたのだ。

此處で、と決めて坐つて見ると、一方の机の脚と疊との間には微かな隙が生じて、肘を突くとガクリとするのであつた。

「これ位ひのことで病はされるなんて、情けないことだ。」

彼は、そんなに思つて、悲しみさへ覺えた。他人の前では、何事につけても、平氣を裝ふたり、快活を衒つたり、醉つて葉山氏の口調を眞似て、衣服や居住を意としないといふやうなことを壯語したこともあつたが、ふつと醒めて明るい日常に出遇ふと、己れの放つた矢で己れの胸を刺す思ひがするばかりだつた。破れ放題になつてゐる障子を見ても鬱陶しかつた。彼の家を訪れる者は、思はず踵を立てずには居られない程の汚れた疊を發見した。

「机の置場所が何だ、机の脚が動く位ひが何の心の妨げになるものか！」

傍から、そんな風にわざとらしく舌打つて見たのだが、いざ疊と机の脚に間隙のある机の前に坐つて、凝ッと瞑目して、想ひを空に馳せて見るのだが、如何しても五分とは保たなかつた。——家が、まがつてゐるのだ。柱と唐紙との間には、細長い三角の棒が打ちつけてあつた。

小窓の下にも置いて見た。椽側に平行して、障子を眼の前にして坐つても見た。床の間と三尺の隔てをとつて、壁に向つて煙草を喫しても見た。悉くの窓を明け放して、頬杖を突いて、爽々しく晴れ渡つた冬の空を見上げても見た。隣りの三疊に移して、汚れた壁を背にして、大業に腕組みもして見た。——皆な失敗だつた。何處を選んでも、脚と疊に間隙が生じて、机の面が水平にならないことに、彼は氣を腐らせた。

「あゝ、もう面倒臭い！」

彼は、間の抜けた溜息を洩して、机の上にどツかりと腰を降してしまつた。

「お父さんは、御勉强なんだからお二階へ行くんぢやありませんよ。」

階段の下から、周子が英一をたしなめた眞實味のない乾いた聲が聞えた。

「イヤア！」と、英一は叫んだ。おや、もうあんな生意氣を喋舌るやうになつたのかな！などと彼は、思つた。

未だ外が明るいうちから彼は、晩酌をはじめてゐた。英一は、玩具の自動車に乗つて彼の周圍をグルグルと驅け廻つてゐた。

「毎日何をしてゐるの？」

「勿論勉强だよ。」と、彼は云つた。

「英一が動物園へ行きたいんですツて！」

「お前伴れてツてやれな。」

「だつて、あなたお留守居を厭がるぢやないの？」

そんな話をしてゐるところに、周子に使ひにやらせられた賢太郎が、大きな包みをさげて歸つて來た。賢太郎は、丁年の周子の弟である。大崎に居た頃程でもないが、この頃はまた周子の里は貧乏になつて、加けに行衛不明だつた姉が父親の解らない赤兒を伴れて戻つて來てゐるのださうだつた。賢太郎は、その時分は學資に事を缺く程でもなかつたのださうだが、極端に内氣で、殺されても厭だと云つて如何しても中學の試験をうけなかつた。尋常科を卒業しただけで、漫然と成長してしまつた女のやうに優しい青年だつた。言葉使ひだとか物事の興味とかゞ、全く女だつた。尋常一年生の妹の學校通ひの服裝は、凡て賢太郎が意匠を施した。編物とか子供服などの裁縫が巧みで、わざわざ銀座通りなどへ

出かけて、服屋の飾窓を熱心に研究して、周子の古袴などで流行型の子供服を仕立てゝ妹に着せてゐた。そして賢太郎は、極端な貧乏嫌ひだつた。時には、彼は女學生の描くやうな美しい繪を描いて獨りで樂しんでゐた。――この頃自家が面白くないもので、往々泊りがけで周子のところを訪れてゐた。

「この柄はどう？　これスカートよ。」

賢太郎は、包みの中から布れ地を取り出して周子に示してゐた。

「これ、帽子の材料？　少し派手ぢやないかしら？」

「まア、あきれた。」と、賢太郎は眼を視張つた。「姉さんたんて何も知らないのね、銀座や丸ビルへ行つて御覧なさい、……赤いからと云つたつて何も派手と定つたものぢやないわよ。僕ちやんと洋服との配合を考へて、買つて來たんだから安心しなさいよ。」

「さうオ。」と、周子は下もなく默らせられてゐた。

「何だい、それは？　何を拵へるんだい。」

チビチビ酒を飲みながら、默つて奇妙な光景に見惚れてゐた彼は、突然訊ねた。

「何だつて好いぢやないの。」

「姉さんの洋服よ。」と、忙しさうに毛糸などを選り分けてゐた賢太郎が無造作に云つた。

「チエッ！」と、彼は思はず舌を鳴した。わけもなく頬の赤くなる氣がした。「ハッハッ、冗談ぢやない。」

尤も彼には、さういふ趣味を嫌ふ一種の見得もないではなかつた。

「だつて、まさか自分で出來やしないだらう。」

「女の洋服なんて簡單よ、帽子だつて直ぐ拵へるのよ。」

「厭だ〳〵。」

「だつて、あたしの着物は皆な燒けてしまつたぢやないの、あなたは阿父さんのお古があるから好いだらうけれど――。」

「だけど洋服は……」

「昨ふ小田原から北原さんがお金を持つて來ましたよ、あなたは寢てゐたから、あたしが受け取つたんだけれど。――今日半分費つちやつたわよ。あなたの云ふ通りになんてなつてゐたひには、半襟一つだつて買ふことは出來やしない。」

彼は、我慢して笑つてゐた。そんな話になると賢太郎は、悲しさうに眼を伏せてゐた。つい此頃になつて、彼の「仕事」も稀に金になることもあつたが、そんなことは少しも照子には知らさず、浮々と出歩いて有耶無耶に費消してしまつた。自分が得た金だつて、國から來る金だつて、彼には區別はなかつた。多少でも餘裕のある間は、ひようひようと出歩いて家庭に落つかなかつた。そして直ぐに不景氣になつて、家庭に居る間はケチケチと煩い小言を、女に浴せた。仕事、と云ふのも彼は、可笑しかつた。學問はなく、思想はなく、作文の術もなかつた。中學時代、作文は丁ばかりだつた。あの頃彼が、秘かに想ひを寄せてゐた照子が、文學好きで、様々な文學者の名を恰も戀人のやうに憧れて、無穩想にも彼に文科をすゝめた。文科でも始めのうちは作文の時間があつた。それは照子が、代作して呉れた。彼は、照子の作文は相當巧いと思つたが、四十五點以上を取つたことはなかつた。照子と喧嘩してしまつた後は、隣席の髮の毛の長い男が、彼を憐んで時々代作してくれた。――彼のこの頃の仕事は、小説だつた。彼の小説、といふのが、また彼には可笑しかつた。ノート・ブックに叙情詩を書き綴つてゐた頃には、獨りで多少の得意を感じたこともあつた。だが最近に彼の書く小説は、死んだ父を取り圍つた自家の家庭の不和が主だつた。然も自家の不快に向つて、吐きかけた野卑な

雜言に過ぎなかつた。それが仕事と思ふと、彼は、救はれぬ感じに打たれた。君の小說の主人公を、君はいかに見てゐるのか！」そんなことを云はれると彼は、直ぐに胸がつまつた。本當なら主人公は、私としなければならないのだが彼は、いつでも自分であるべき主人公を「彼は――」「彼は――」と、書くのであつた。小說的と思つて「彼は――」とするのではなくて、自分があまり親不孝で、そして愚昧過ぎるのがわれながら醜く思はれて、せめて主人公だけは「彼は――」として、セヽラ笑つて見逃すより他はなかつた。何と惡評されても答へる術はなかつた。五枚書いては破り十枚、二十枚書いては破りするが、それは決して出來不出來の推敲ではなかつた。「この作者、果して父親小說以外のものが書き得るや否や？」こんなことを云はれると、彼は他人の前では「何だ失敬な、三つや四ツ父親の小說を書いたからと云つて、それで俺の創作範圍を限定するなどとは無禮にも程がある。俺はこれでも想當空想の自由が利く男なんだ。」などと、まことしやかな憤慨を洩すが、云ふまでもなく大學文科の頃と何の差もない彼である。あの騷々しい親父が死んでしまつたら、もう何も書くこともなく、せめて追憶に光りでもあれば、何と批難されたつて同じやうなものを執筆するであらうが、それも今では「お伽噺」に變つてゐる。彼は、お伽噺は書く氣になれなかつた。」

「此頃、何か書いてゐるか？」と、或る友達が彼に訊ねた。

「書いてゐるか？ツて小說のことか。」

「當り前ぢやないか、厭な奴だね、文學青年がゐるまいと思つてゐやがる、三十にもなりやがつて！」

「だつて僕は、繪もかくんだからな！」と、彼は心から訴へた。以前油繪をやつたことがあるが、この頃になつて彼はいくらか繪の方に心を惹かれてゐた。

「僕は、昨夜例の小說を到々書きあげてしまつた、無慮百七十枚だ。今日は實に晴々しいんだ。」

「美しいなア！」と、彼は思はず叫んだ。この頃彼は、小説を書き終へて晴々しい氣持を味つたことがなかつたから——。「僕だつて、それやア書きかけてはゐるんだがね……。」と、彼は續けて思はず冷汗を感じた。まつたく彼は一ト月も前から或る小説を書きかけてゐることは確かだつた。

「君は、此頃非常に遅筆ださうだね。」と友達は意味あり氣に笑つた。

「うむ！」

「みつともねえぞ、——遅筆がりなんて！がりとより他思へないよ。嫉てるわけぢやないが、親父以來君の心境は、フツキレてゐるよ……」

「フツキレるツて、如何いふわけだ。」

「田舍者は話せねえな、フツキレるといふのは冷笑の言葉ぢやないよ、ふくれツ面をするねえ——推賞の言葉だよ。」

「……親父のことは云はないでくれ。」

「また泣くのかえ、止せやい、酒飲みらしくもない！」

「親父のことは、大抵忘れた……それ處ぢやないんだ、もつと／＼……」

醉つて脆くなつた彼の頭は、理性を失してもう少しで、書き悩んでゐるといふ材料（？）の話に移らうとしたが、この友達に話せる位ひなら書き悩む方も樂になるわけだつた。

「その後の母と彼」彼は、題名を想像しただけで、胸が痛み、眼が眩む思ひに打たれた。

「本格的心境小説か！」

「……」彼はうつ向ひてゐた。

「俺の今度の小説は、それ式なんだ。」

「うむ、そりやア好いな。――俺は、毎年冬は駄目なんだ、それに俺の頭は、この頃變に通俗的になつたやうな氣がする。」

「いや、それは心配するには及ばないよ。大人になることを、君は怖れ過ぎるんだよ。」

「だつて、怖れたつて仕様がないや。」

母、母、母、母、母――彼の頭の中では、薄氣味惡い文字が踊り回つてゐた。友達の言葉など頭へ入らなかつた。それを書くより他に、何の仕事も見出し得ない愚劣な大人！ 愚劣な新進作家！ 彼は、文明の世界に生きる價値のない氣がした。父から彼は、嘗て西部アメリカの話を聞いて胸を躍らせた思ひ出がある。空想でなく、比喩でなく、彼は、明日にでも素ツ裸になつて、インデヤンの國へ走しつてしまひたかつた。

「これが出來上るまで英坊は、僕の家へ伴れてつて置きませうか、え？ 姉さん。」

編物を初めてゐた賢太郎が、周子に話しかけてゐた。

「さうね、だけど？」

周子は、彼に氣兼ねした。英一だけは、貴様の家の腐つた空氣は吸せない、などゝ彼は云つたことがあるのだ。

「關やしないよ、うちの者は皆な子供好きだから、英坊だつて反つて賑やかで好いよ。」

「どうしよう！」と、周子は彼に、贊意を求めた。――彼は、返事をしなかつた。

「だつて姉さん、活動寫眞にだつて行きたいでせう。」

「えゝ、行きたいわ。」

「僕がお留守居するから、兄さんと一處に行つておいでよ。」
「兄さんは嫌ひよ。」
「さう！ まア話せないわね。」
賢太郎と周子は、仲好くそんなことを話し合ひながら、眼を凝して編物の針を動かせてゐた。

五

彼は、小說「父の百ケ日前後」で、一つの嘘を書かずには居られなかつた。小說に事寄せて、一つ嘘の說明に逃れた。あのまゝで葬りたかつた。――清親は、母の二つ年上の兄である。と書いた。その小說の清親のやうな母の兄があつたので、彼は、淚をふるつて清親を叔父と書いたのだ。――淸親は、彼の叔父ではなかつた。彼は、小說の陰にかくれた己れを、殺して好いか、慰めて好いか、解らなかつた。嫌ひだ、と書いても母は懷しかつた。

彼のペンの先きは、怪しく震へ、胸は不氣味に搔き亂された。――他に、何の仕事も出來ないこと、そして、生れながらに行き詰つた己れの頭を、憎み、呪た。

或る晩、わずかなことから彼は、周子と激しい爭ひをした。徹夜を續けて、何十枚か書き溜めた原稿「その後の母と彼」を、破いて、蒼い顏をして階下に降りて來たのだ。

「何處まで貴樣の家は、この俺に祟ることなんだらう。」

陰鬱に醉つた彼は、首を振つて斯んなことを云つた。「俺が、お前のやうな奴と知り合ひにさへならなければ、俺の家は、明るく幸福だつたんだ――また、英一を伴れて行きやアがつたな！畜生奴！」

「親切にしてくれたものを、そんなことを云ふものぢやありませんよ。」

賢太郎に惡る氣のないことは、彼も知つてゐた。たゞ周子の家庭を考へると、無性に肚がたつてならなかつた。彼は、周子と知り合ひになつた、厭な言葉だが「運命」が憎くて堪らなかつた。

「何とか製藥會社、何とか建築會社――あの方はどうなつたのかね。」

「わたしにそんなことを云つたつて、知つてるものですか。」

「ぢや何故餘計なお世話で、この間株劵や書類を親父のところへなんか持つてつたんだ。」

「あなたが、余りクヨクヨ云ふからあたしがお父さんに賴んでやつたんぢやありませんか、取れるか取れないか、そんなことは解るものですか！」

「圖々しいことを云ふな、元はと云へば皆な手前えんとこの爺が、あんなボロツ株を持ち込んだのぢやないか、親父が死んで後の仕末が俺には出來ないといふことが解つてゐれば、せめて彼奴が、彼奴といふのは手前ンとこの爺のことだよ――彼奴が、口を利いた事件だけは何とかはつきり解決をつけるのが當然ぢやないか、泥棒野郞！」

彼は、事柄の内容に就いては何の智識もなかつたから、代名詞や感投詞だけを出來るだけ毒々しく放つて鬱憤を洩した。「そりやア親父のことで俺が斯んなことを云ふのは、しみつたれてゐるけれど、何とかモーロー會社の重役などといふ名前は……」と、そこで彼は、一寸傲然と開き直つて「俺の名前になつてゐるぢやないか！」と、怒鳴つた。

「さうさ、自分が重役になつてゐて、出したお金を取り戾さうなんていふことが出來るものですか。」

「何だと、俺が何時そんなものになることを承知した。」

「あたしに云つたつて知つてるものですか！自分の阿父さんのことだつて考へて見れば、好いぢやないか、うちのお父

さんのせいにばかりしないで。自分だつてもう一人前の年ぢやないか。男らしくもない、いつまでも[illegible]のことにたんかり引ッかゝつてゐて……」

「悪魔の娘！」

二人だけだと、どんなに彼が殺気だつても、慣れ切つたやうな顔で周子は、洒々としてゐた。もとはと云へば彼の卵だらう、こんな風に取り返しのつかない教育を彼女に施してしまつたといふことも——。

「英一をたつた今、伴れて来て貰はう。」

「随分あなたも邪推深いのね。」

彼は、最も憎々しい言葉を探して、この蛙のやうな女の顔に叩きつけてやらう——などと思つた。周子は、賢太郎が編みかけて行つた自分の上着を編み続けてゐた。——悪い両親を持ち、そして小人の夫を持つたこの女は、若しかすると俺以上に不幸な奴かも知れない——彼は、そんなことも思つたが、今宵英一が行つてゐる周子の実家のことを考へると醜い焦慮を堪へることが出来なかつた。

「俺がこんなに不愉快になつてゐるといふのに、何處まで図々しい奴だらう。普通の神経を持つた女なら、ヒステリー位ひ起すのが当り前だ。野蛮人！。……洋服とは何だ、洋服とは……」

彼は、さう云ひかけると、にわかにカツとして周子の手から編物を奪ひ取つた。そして編針を四ツに折つた。なほも力を込めて編物を引き裂かうとしたが、毛糸が伸びたゞけで彼の力では破れなかつた。一寸彼は、テレたが「何だこんなもの、何だこんなもの、好い気になつてゐやアがる！」などと叫びながら、チンとそれで鼻をかんだり、ペツと唾を吐きかけたりして、唐紙に叩きつけた。フワフワとしてゐて何の手応へもないのが、一層肚がたつた。

「勝手にしろ！」と、周子は叫んだ。「煩いから默つてゐれば、何處までつけあがるんだらう。」

「生意氣なことを云ふな。口惜しかつたら何でも其處ら邊のものを叩きこわして見ろ！」

彼が、さう云ふと周子は、

「自惚れ！」と、叫んだ。「自分ばつかり好い氣になつてゐて、何といふ態だ！」そしてわけの解らないことを續けて、

食卓の徳利を取つて、簞笥に叩きつけた。彼は、反つて心持の落着く思ひを味つた。

「女郎の母親のやうだ、手前ンとこの婆アは！　娘を賣つた氣でゐやアがる。」

周子は、もう一本の徳利を取つて、また同じやうに簞笥に打ちつけた。

「これだけ損をする位ひなら、藝者でも細君にした方が餘ッ程增しだ。」

彼は、不圖まつたくそんな氣がしたのだ。それにしても藝者を細君にするには、何れ位ひの金が必要だらうか――など と思つた。熱心に、そんなことを思つた。だが自分には何の働きもないし、今では周子の親父のおかげで此方も貧乏になつてしまひ、辛うじてその日暮しが出來る位ひのもので、とてもあんな餘裕はなさゝうだ――などと、ぼつとして考へると、更に新しく馬鹿々々しい後悔を感じた。だが彼は、そんな思ひは努めて氣色に現さうとはせずに、この上亂暴をされては面倒だなどゝ思ひながら、急に猫撫聲を出して「お止め、お止め！」と、云つた。それだけでは物足りないので「この上亂暴なんてすれば、一層價打ちが下るばかりだぜ。」などと云つた。

「自分の親父は、……」

「何しろお前は、大した親孝行者だよ。」

「何云つてゐるんだい、しみつたれ！あたしの家なんぞは、今こそ落ぶれてゐるが、そんな小田原あたりの貧乏士族とは

わけが違ふんだ！」

「手前エの阿母は、千葉縣あたりの酌婦でゝもあつたんだらう。手前エも酌婦面をしてゐるぢやないか、ハッハッハ、」

俺も素晴しい道樂をしたものだ。」

「うちのお母さんなんぞは……」

周子は、それを二三遍繰り反すうちに、歪んだ眼からボロボロと涙を流した。そして音をたてゝ齒を食ひしばつた。

極度の亢奮が一寸行き詰つた時、彼女は、亢奮の先端で突然風車のやうに激しく息も切らさず喋舌り初めた。

「うちのお母さんなどは、あれでも立派なものなんだ。自分の阿母は何だ！」と、云ひかけた時周子の音聲は、異樣に白けて、滑らかだつた。「間男！間男！間男！偉さうなことを云ふない。芝居だつて、お前ンとこの家のやうな古臭いことは、此頃ぢや流行るものか！馬鹿ア！皆んな死んでしまへ！あたしは何だつて皆な知ッてゐるんだ、阿父さんが皆な、あたしに話したことがあるんだ、お前がそんなに好い氣になつてゐるんなら何んでも皆な喋舌つてやらう、友達などにまであたしの家の惡口を云つたらう！自分好がりの、おべつかつかひ奴！――自分の阿母は間男を……」

六

彼は、話聲が外に洩れない電話室のありさうなカフエーを二三軒探し回つたが、普段あまりさういふ處へ出入しないので、容易に適當な店が見當らなかつた。――雨の降り出しさうな寒い日の午後だつた。ウヰスキーを四五杯飮んでゐるのだが、心に變な屈托がある爲か、それとも陽氣が寒すぎる爲か、顏も胸も少しもほてッて來なかつた。

周子からあんな惡言を聞かされたが、その場の濁つた雰圍氣さへ通り過ぎてしまへば、事柄は古くから彼の頭を重く

してゐることなので、今更別に驚きもしなかつた。周子には、此方から云はせるやうに煽動したやうなものである。お喋舌りの女を、ポカポカと毆つて、彼は反つて清々とした程だつた。

彼は、母に電話を掛けなければならなかつたのだ。二三日うちに小田原へ行くつもりなのだが、——突然行くのが厭だつた。

彼は、いつの間にか自家の近くの公園の中を歩いてゐた。そこで彼は、自動電話を探さうと思つたのだ。二度ばかり溫和な手紙を、彼は母から貰つた儘になつてゐた。溫和！それも彼は、好もしく思はなかつた。以前の母なら決して云ひさうもない言葉が、いくつも彼の眼に觸れたのである。

自働電話では待つてる間が大變だ、ひとりでカフエーなどで凝と待つてゐるのも一層堪らなかつた——「大原の店へ行かう。」と、彼は氣づいた。彼は急に脚を速めて引き返して、乘合自動車に乘つて日本橋まで行つた。

大原の店へ行つた時は、もう夜だつた。大原は、仕事を終へたところでテーブルに凭つてぼんやり煙草を喫してゐた。

電話は、そんなに待たされもしないで通じた。

「病氣でゝもあるんぢやないかと思つた、あまり便りがないので——」

「皆な丈夫……」と、彼は云つた。

「今年は寒さが強いさうだね、そつちは。」

「えゝ。」

「此方も、何しろ家がこの通りだからね。私は此間風邪を引いて一週間も寢てしまつた。」

「もう、すつかり治つたの？」

「えゝ、そしてお前は何時歸るの。」

「二三日うちと思つてゐるんですが、どうも社の方の仕事が近頃忙しいもので……いや、歸る前の日には……」

「そして今日は何か用なの？」

彼は、默つてゐた。傍に誰か居る氣配がありはしまいか？彼は、凝と疑り深くそんな聞き耳をたてたりした。——電話なんぞ掛けるんぢやなかつた、などと思つた。

「お蝶さんから何か便りがないですか。」

「ない。」と、母は明らかに不氣嫌な氣色を示した。——これからワザと母の前で、お蝶を案じるようなことばかり云つてやらう、そんなことを彼は思ひながら

「いづれ歸つてから、いろいろ話しますが、あまり便りがないとすると、僕は今度そつちへ行つたついでに、靜岡まで行つて見て來ようかと思つてるんですよ。」

「何を云つてゐるのさ、お前は！　すつかりきまりがついて、あゝなつたんだからもう餘外なことはしない方が好いんだよ。」

「さうですかなア！」と彼は、大袈裟に默頷く風を示して、そつと快い苦笑を感じた。暫く、この頃の母の嫉妬を見たかつたので、何となく彼は懷しい思ひさへした。自分が惡德を行つてゐるにも係はらず、未だに一寸でもお蝶の話に觸れると露骨な自尊心を現はさずには居られない母を、こんな所で離れて感ずると彼は、皮肉にならずには居られなかつた。團子などを相手にして、切つ端詰つた思ひで苛々するのに比べると、母を相手にする方が心に奇妙におどけた餘裕

が出來て晴々しかつた。久し振に小田原へ行くことが、暖い國へでも行かれるやうに樂しみだつた。

「だつてお蝶さんだツて、心細いでせうからね、見ず知らずの處へお光とたつた二人で行つてゐるんぢやア！　せめて稀には僕でも行ツてやらなければ……」

彼は、さう云つて、舌でも出したかつた。お蝶の處へ行つて見たいのも確かには違ひなかつたが、勿論母になど云ふ必要はないのだ。寧ろ彼は、東京に來て以來、蟲のやうに寒さに縮んだ生活をしてゐるので、稀にはお蝶でも訪ねて、朗らかに威張りたいのである。彼が喋舌ることを徹頭徹尾感心して諾く人間は、お蝶とお光より他になかつたから――。

「そんな馬鹿なことがあるものかね、あゝいふ商賣の女なぞは呑氣なものだよ。昨ふのことなぞ覺えてゐるものぢやない、お前のやうな人の好いことを、何時までも云つて居られるものぢやないよ。」

幸ひあなたは私といふ悴があるから、こんな好い氣な熱も吹けるだらうが、どつこい！親父にとつてはあなたよりもお蝶の方が好きな人間だつたんだからなア。フツフツフ、お蝶どころぢやないんだ。あなたは知らないだらうが、Nといふ混血兒の娘だつてあるんぢやないか――彼は、こんな途方もない思ひに走つた。今迄彼は、親に對して所謂不孝な觀察を起す場合には、いくらか自責の念にも驅られたが、今では伸々と手足を延して、般若の心で笑つてゐられる氣がされた。なまじ母親を、慰めたり、同情したりする立場に置かれるよりは、こんな狀態の方が自分の心に適つてゐるやうにさへ思はれた。親父の場合よりも不氣味な不味さはあつたが、それだけに心は反つて微妙な惡辣の光りを放つやうな氣がした。――これ位ひの刺激がないと、自分のやうな鈍い神經の男は、忽ち生氣を失つてしまふに相違ない、何と云つても俺は親を相手にして徒らな觀察を回らす時が、一番生甲斐を感ずるんだ、それより他には能はないんだ。親父が死んだからと云つて、髮を切つて、墓參を業とされるよりも、見るのは嫌だが、若返つた母親を感ずる方が面白い。

術は半夜の切れかゝつたモヒ中毒患者だつた。阿母の注射で漸く心臓が躍動して來た——彼は、こんな風な荒い呼吸に走りながら、電話をかけたことに滿足した。

「いや、あしたの晩歸ります、いろいろ。書類の方だつて私が驗べなければならないでせう、晩迄に整理して置いて下さい、それで今一寸電話を掛けたのです。」

彼は、除ろに斯んなことを云つて、母の返事も聞かずに、悠然と受話機を掛けたのである。

「阿母の御氣嫌伺ひさ。今になつても僕は阿母の氣嫌を取らないと、生活することが出來ないんだから心細いよ。」

彼は、晴々しく笑ひながら大原に向つて、そんなことを云つた。

「隨分暫らく倫はなかつたね。君が此處へ來てゐるとマザーは寂しいだらう。」

「さうらしいよ。」

「あゝいふ堅い阿母さんだから、そしてしつかりしてゐるから、未だ君だつてそんな呑氣なことを云つてゐられるんだよ。少しは有り難味も解つたかね。」

古くから彼の母を知つてゐる大原は、そんなことを云つた。

「解つたね。」と、彼は戯れ氣に笑つた。母を嘲笑ふ心か？それとも己れを嘲笑ふ心か？そんな區別は解らなかつたが、彼の胸は、常人の口にしない食物を悅んで味ふ食道樂者を眞似て、口に入れた食物を丸呑みにした時と同じ探つたい空己心に滿ちてゐた。

七

「清友亭のお園さんは、この頃來ませんかね。」と、彼は母に訊ねた。
「この間一遍、阿父さんのお墓參りに行つた歸りだと云つて寄つて吳れた。」
「さう、そりア感心だね、久し振りで今晩あたり行つて見ようかな。」
こんな言葉は、半年前なら決して母の前で許されなかつたものである。
「あすこも假普請などで、また商賣を初めたんだがさつぱりはやらないさうだ。」
そんな事は彼は、知つてゐるのだ。清親との騷ぎの時の彼の本陣である。あんな騷ぎはすつかり忘れた顔をして、二人とも澄してゐるが、彼以上にその時の話に觸れられることの厭らしい母を思ふと、彼は、遠回しにでも母の虛飾を突ツついてやりたかつた。母は、彼の云ふことを大方おとなしく受けいれた。そんな母ではなかつた。――これは自分以上に母の心の方が荒んでゐるのかも知れない、野となれ山となれ（母は以前、往々その言葉を用ひて彼の放埒を責めたことがある。）――母こそ今は、そんな心になつてゐるんぢやないかしら？などと思つて彼は、功利的な心を動かしたりした。――弟の次郎が、隣りの部屋で低く電燈を降した机に凭つて筆記のペンを動かしてゐるのを眺めても、彼の胸は詰つた。彼の居ないことを好き幸ひにして、家中の者を呼び寄せて買ひ喰ひでもしてゐるだらう周子達に比べて、父を失ひ、不氣味な母に見守られ、そしてたつた一人の放埒な兄より他にない次郎が可憐に思はれたりした、いつも兄の轍を踏んで、圖太い不良青年にでもなつてくれたら、どんなに自分は救かるだらう――彼は、酷く詠嘆的にそんなことを思つたりした。
「次郎は今度も四番だかの成績ださうだ。この分で行つたら來年、四年で一高の試驗が受かるかも知れないね。」
「ふむ！」と、彼は、よく父が次郎の話になる時に示した通りな得意さを示した。次郎が隣りで聞いてゐるので、母を

相手にする彼の氣持は遠慮深かつた。地震で潰れた家の古木で建てた家の中は、この前にはそんな陰氣でなかつたので氣にもならなかつたが、今沁々と眺めると酷く殺風景だつた。

「葉山さんは？」

「風邪を引いて寝てゐるさうだ。」

こんな話をしてゐると彼の心は、忽ち滅入りさうだつた。酒を飲む彼を見て、遠慮深く不安な眼を挙げる母の様子も重苦しく感ぜられた。

直ぐ歸つて來る、と云つて彼は、外に出かけた。未だ宵だといふのに、街は森閑としてゐて、空地ばかりが多く、稍ともすると方角を誤りさうだつた。お蝶が秋まで住んでゐた掘立小屋は、勞働者相手の居酒屋に變つてゐた。焼けだされた父が、お蝶達の仕末に困つて、大方自分の手で拵へた粗末な家だつた。おでん、かん酒と書いた赤い提灯が、軒先きに懸つてゐた。彼は、入つて見ようかと思つたが、こんな處で愚にもつかない思ひ出に耽るのは馬鹿々々しいと思つて止めた。――地震の後、十四五日經つて双方の安否が知れてから、彼は周子と英一と三人で小蒸汽船に乗つて、熱海から歸つた。一年目だつた。

「阿父さんは？」

彼は、母に訊ねた。

「濱の家の方へ行つてゐる。」と、母は云つた。

父の事業熱、放蕩、母の疾妬、そんなものゝ間にはさまれて、到々彼は逃げ出すより外はなくなつたのである。母に味方して父と野蠻な爭ひをしたのも、その頃の事だ。彼奴とは一生口を利かない――父からそんな憤慨されたのであ

る。一年の間に一度彼は、小田原へ出て來たが、その時父は折好く留守だつた。――私が居なければ、矢ッ張り困ることとが多いだらう、さぞさぞ親父は呑氣にお蝶の方へばかし行つてゐることだらう――そんな心で彼は、母から父の陰口を聞いて、餘裕あり氣な微笑などを浮べてゐたところに、門の格子が開いて父が歸つて來た。

「あれは誰だ！」

唐紙を隔てゝ、父の聲がした。――彼は、ゾッとして、だが母には、顏つきだけで父を馬鹿にするといふ意味の澁面を示しながら、慌てゝ裏門から逃げ出した。一年の間に父の聲は、それだけしか聞かなかつた。母の前で、父を罵ることとか母に對する一種の諛ひとなり、かゝる醜き行爲にパラドキシカルの優越を感じようとする自らを省みて彼は、暗然とせずには居られなかつた。

「斯うなつてからは、まさか憤つても居られないでせう、ハッハッハッ。」

念の爲に彼は、母にそんなことを訊ねたりした。

「まるで意久地がありはしない、私は可笑しくつて仕様がない。」と、母は云つたが、その聲は如何にも陰險だつた。

「どうしてなの？」

彼は、母の調子に合せて、母と同じく陰險な苦笑を浮べた。

「どうして？と云つたつてお話にも何にもなりはしない。」

震災以來阿父さんは、氣が少々變になつたんぢやないかしら――母は、冷い調子でそんなことを云つた。

「まさか！」と、彼は厭な氣がして横を向かずには居られなかつた。が、あくどい說明をする母の前で大概、父がそれ以來どんなに意久地なしになつてゐるか！といふことが察せられた彼は、寂しさなどは感じなかつた。放蕩で生粋は

なかつたか、今度の母の場合とは違つて、輕く健全な自分の存在を感じたのだ。（[illegible]のことを[illegible]である。）

「僕、ちよつと濱の家へ行つて見て來る。」

「朝鮮人騒動の噂の時などは、皆な刀を持つて見附を固めたぢやないか、灯りを點けてもいけないといふので、家の中は眞ツ暗！」

「隨分怖かつたでせう」

「昔に返つたやうな氣がして、――私だつてちやんと短刀を帶にはさんでゐた。」

「ほう！ 隨分強いんだね。」

彼は、もう少しで隨分臆病な阿母さんですね と云ふところだつた。

「噂だけで、返つて氣拔けがした。――そんな騒ぎだといふのに阿父さんの姿が見へないのさ、志村（清視のこと）なんて、後ろ鉢巻で門のところに席を引いて頑張つてゐるといふ騒ぎなんぢやないか！ 阿父さん、阿父さん！ といくら呼んでも返事もしない、どうしたんだらうと思つて、探して見ると、驚くぢやないか！ 裏の空地で、長持の陰に蒲團が積んであるなかにもぐつて、狸寢入をしてゐるのさ！ 大膽ぢやない、臆病なのさ、可笑しくつて仕様がなかつた。意久地なしの腰拔けさ！」

母は、そんな例を二つばかり彼に話した。彼は、苦笑しながら窓邊を離れた。そして廣い燒野原を見渡しながら清の家の見當を眼指して、ぶらぶらと歩いて行つた。

「もぐつて入るんだよ、ハッハッハ、ちよつと器用に出來たらう。」

潰へかけの小屋を指差して父は、さう云つた。それが最初の言葉だつた。

「こんな處に、窓もあるね。」

彼は子供のやうな細い聲でわけなくもそんなことを云つた。

「もう灯りを點けなければならない——まア入つて一杯やらうぢやないか。」

斯う云ひながら父は、背中をかゞめて小屋の中へ入つて行つた。——長い間互ひに口も利かずに不和で過して來たことは、何といふつまらない話だつたらう——彼は、そんな心持で父のうしろから續いて行つた。お蝶とその老母が、水汲みから歸つて來て彼の姿を認めると、二人とも同じやうに涙を滾した。

土間に石ころで圍ひをした圍爐があつて、その周圍には手製の椅子が三つばかり置いてあつた。椅子は如何にも粗野だが、異人の子供のやうな面白味を彼は、感じた。半分が土間で、半分が板の間になつてゐた。父は、散り散りに綻の繕つた黄色い毛糸の、胸にＣの字のマークをはぎ取つた痕のある昔のスポーツ・ユニフォームを着てゐた。頭には同じ色の頭巾をかむつてゐた。彼は、笑つてその格構を指差した。

「阿母の意地惡るには驚いた、此方には毛布一枚寄さないんだ。俺は寢るのもこの儘だよ、この間トランクの底から探し出したシャツさ。」

「二十年も前に、そのシャツを着て學校の運動場で撮つた寫眞を送つて寄したことがあるやうに思ふ……」

「ロビンソン物語りかね。」

天井や窓を見渡しながら、笑つて父はそんな戯談を云つた。

「ロビンソンは獨りだぜ。」

茶飲み茶碗などで酒を傾けてゐるので、忽ちポツとして來た彼は、卑しげな笑ひを浮べてお蝶を振り返つた。

「ワッハッハ・・止せ／＼。」

「おい、お光ッちやん――お酌だァ、お酌をするだァよ、何處かその邊へ出かけて姐さんとか友達とかを四五人呼んで來ウよう。」

彼は、景氣の好い聲で、茶碗の盃を振り動かせながら叫んだ。

「呼びになんて行かなくつたつて、若少したつとやつて來るよ。」

「呑氣で面白いなァ！」

「馬鹿ァ！俺ァもう無一物になつてしまつたんだぜえ！」

「アッハッハ、仕方がないですなァ！」

なァ！とか、だァ！ぜえ！とかと語尾にばかり筒抜けた濁音を響かせながら、別に可笑しいこともないのに賑にゲラゲラと笑つてばかりゐる不思議な父と倅を、お蝶達はきよとんとして眺めてゐた。

「阿母さんが、阿父さんの意久地なしには愕いたなんて云つてゐましたぜえ、さつき！」

「勝手なことを云はせておけ！」

彼は、さつきの母の物語りを傳へて父と一處に笑ひ、お蝶達の苦笑も眺めてやらう、と謀つたのだが、前にはさういふ話になると面白がつた父にも係はらず、ふつと暗く脹れた顔をして横を向いてしまつたので、悪戯の心を突然向けさせられた。――母の云つた通り少々頭が怪しくなつてゐるのかな！　彼は一寸さう疑つても見たい位ひな淋しさを味つた。

「俺が死んでゝもしまへば好い位ひに思つてゐるかも知れないよ、彼奴等は……」

父は、そつと口のうちでそんなことを呟いだりした。

「何をつまらないことを云つてゐるんですよ。彼奴等とは何ですかね、さつぱりわけが解りやアしない。」と、彼は不平を洩しながら、病人を眺めるやうな眼つきで、そつと父を覗つたりした。タキノ家には、代々精神病の血統があるのだ。よく彼の母は、タキノ家を軽蔑する爲に「氣狂ひなんていふものは、肚の据らない臆病な人間の罹る病氣なんだよ。お前もお酒を飲むと少々怪しいよ。」などと云つたこともある。一代に一人宛出るといふ話だつた、父の叔父がその病氣を病ひ、父の弟も亦それに罹つたので、そんなことを云ひ傳へたのかも知れなかつたが――。

「俺を氣狂ひ扱ひになんかするんだから、失敬極まるぢやないか。」と、父は云つた。彼は、ゾツとした。叔父の場合で彼は、幾度も經驗したが、病ひの初めは「俺を氣狂ひ扱ひにした。」と、稱して怒鳴り出すのが常だつた。

「嘘だらう、――僕は、氣狂ひぢや閉口したからね、言葉だけでも御免だ！」

氣狂ひどころの騒ぎぢやないや、芝居ぢやあるまいし……ねえ、おい！」と、父はお蝶に呼びかけた。お蝶は、落着いた笑顔を示した。――「お蝶とお光は、この先きは法界節にでもなるかな、ハッハッハ、法界節だつて乾度面白いぞウ！」

「厭だ〳〵。」と、彼は云つた。僕ア、ひとつ……」

彼は、半分戯談に云ひ續けたが

「僕ア、ひとつ……」とまた口ごもつた。

「若旦那がしつかりしてゐらつしやるから……」

お蝶は、如何にも彼の虚勢を信じ切つてゐるといふ風に、細い眼を慎ましやかに伏せた。父と彼は、思はず酔漢らし

い眼を見合せてにやりとした。

——言ふまでもなくこの頃の父の氣持は今になつて思へば、凡そ數學の才に鈍い彼にとつても、暗算で出來る算術なのである。

八

彼が、そつとのれんの蔭から覗いて見ると、あの異人の子供の手工を想はせる椅子が二つあまつて並んでゐた。正清しく酔つて、他合もない感傷にに走つてゐる彼は、奥の方に何んな人がゐるのかはつきり解らないと思つた時に、若少しでふところからオ・ペラ・グラスを取り出して眼に當てゝ見るところだつた。ふところがふくらんでゐる格構を好む彼は、何時でも不用な物を持ち歩くのが癖だつたが、この頃ではその眼鏡を離さなかつた。

彼が、この前構友亭を伴れ出されてから、周子と英一はお蝶達と一處に、東京へ出かける日まで此處に起き臥ししてゐた。**阿母が謝まらないうちは、俺はこゝに坐つてゐて、**金でも何でも悉く横取りにしてしまふんだ。」

晝間から酒を呑みながら、お蝶を相手に彼は、強さうなことばかり云つてゐたのだ。

「東京へなんていらしつては駄目ですとも。若旦那が居なくなれば、それこそどんなになつてしまふか解りませんわ。」

彼が居なくなればお蝶はひとりにならなければならなかつた。自分が居なくなつて、既に荒れ放題になつてゐる小さな財産などはどうなるわけのものでもなかつたが、自分達が居なくなると多少でも母が清々するかと思ふと、動きたくなかつた。そして彼は、これ程でもない癖に、如何にも自分は死んだ父親の忠實な悴だといふ風なことを夢のやうに誇張して喋舌つたのである。

そんなことを回想すると彼は、今では母から返つて揉られるやうな間の悪さを覺へた。あれまで彼は、母の前で父を罵倒ばかりしてゐたのである。

彼は、白い息を吐きながら氷つた道をコツコツ歩いてゐた。暫らく歩いて、一寸振り返つて見ると、おでん、かん酒の提燈が、煙草の火程に小さく闇の中にぽつりと止まつてゐた。――望遠鏡を、あべこべにして見ると風景は、實際の距離の二倍に遠くなつて、さながら箱庭のやうに小さく映る――獨りになつた時のこの頃の彼の心境は、そのやうに熱がなく、まつたく箱庭の泥で愽へた土人形になつてゐた。ゆるやかな波の音を耳にしながら獨りで斯んな暗い路を歩いてゐると、今にも暗の中へ吸ひ込まれて煙になつてしまひさうに心細かつた。――清友亭より他に、行く處はなかつた。

「東京へいらしつたと思つたら、忽ち通人におなりになりましたわね。」

彼は、坐敷に入つて少しばかり酒を飲むと、急にぺらぺらと愚にもつかないことを喋言り出したのである。で、お園は、さう云つて笑つたのである。

「この間、お墓參りをして呉れたのだつてね、有り難う。」などと、彼は、わざとらしいお世辭を云つた。

「まア！お蝶さんから便りがありまして？」

「彼は手紙は書けないんだよ、一遍行つて來ようかと思つてゐるんだが、どうだらう。」

「それに越したことはありませんが――。」

「いや、さういふやうなことを云ふとね、阿母が嫌がるんで俺、可笑しくつて仕樣がないんだよ［――尤も嫌がらないやうになられても困るが……」

母や清親を相手に氣嫌よく飲んで見たい、さういふ我慢が出來るだらうか――彼は、そんなことを考へながら

「僕は、この二三ヶ月で急に稀臭くなつた氣がしてゐるんだ。一體二の長男といふ奴は、殊に兩親が若い時に出來た長男といふ奴は……」そんな話があるかどうか？まるで彼は、出たらめだつたが上の空で喋舌つてゐた「大體馬鹿者が多いといふ話だが、そして女にばかり甘いといふ話だが……」

「ずつと前に、お父さんにそんなことを云はれて、からかはれたことかあるぢやありませんか。」

「いや、ところで僕はそんな男ぢやないだらう？　と、君に訊いて見やうかと思つてゐるんだよ……僕ア…僕ア……」

「そんなところに、横になんておなりになつては駄目ですよツ！さアさア、稀にいらつしやつて何だねえ！ほんとに稀臭くなつたわ……おゝ、お酒臭い！」

お関に引き起されて彼は、がつくりと食卓に首を垂れた。彼は、醉つた時の癖で、トリ止めもなく胸のうちで怪し氣なことを呟いてゐたのである。――もう俺は、これから誰とも爭ひはしないんだ、中でも阿母とは仲好くしたいものだね、喧嘩をするよりは仲好くしてゐる方が親不孝なんだぜ、何故ツてツだつて俺は面白さを感ずるんだもの、……阿母さん、どうですか、そんなに勿體振つた顏つきばかりしてゐないで、酒でも飲みながら藝者の踊りでも見物しやうぢやありませんか……と、斯う云つて阿母の鼻の先へ、飲み友達でも突きつけるやうに、盃を差し出すんだ……

「そこでだ　ウワ……面白いだんべえなア！」

「若旦那！どうなすつたのようウ、今ツからそんなにお醉ひになつてしまつては、面白くないぢやありませんかね。」

「ところが若輩は、面白くつて仕様がねえだアよ。……うむ、飲むとも〳〵。」

……さア、お飲みなさい〳〵、阿母さん、ね阿母さん私は、それは〳〵親孝行たんですよ、安心しなさいよ……と、

斯う云ふと阿母の奴、忽ち芝居掛つた聲で、わたしはお前を育てるのには隨分苦勞したのだよ、何しろ阿父さんが長

い間留守で、その間のわたしの苦しみと來たら——なんて得々として吹聽するだらう——解つてゐますよ、賢夫人、さア好いからお酒をお飲みなさいようだア！婆アの辯に糞かむねえ、チエッ、薄氣味の惡い！いや、これは失禮、婆アだなんてもつての外だつた……なにしろ阿母さんは、そんなにお若くていらつしやるんですからねえ——と、一本深刻氣な皮肉を云ふのも愉快だらうぜ——一體私は、阿母さんがおいくつの時に生れたんですかな、僕アどうも算術が不得意で、半端な數の引算は直ぐには出來ないんだが、……僕アまつたく斯んな家に生れたくなかつたんだがね、おツと、何をつまらない愚痴を云つてゐやアがるんだい——

「まア、そんなことは如何でも好いんだ、フッフッフ……馬鹿にしてゐやアがらア！」

「さア、お酌ですよ。通人におなりになつた若旦那！何か歌でも聞かせて下さいませんか。」

「何だつて！ふざけるねえ、田舍ッペ！」

——……ねえ、阿母さん、あなたに歌でも聞かせてあげませうかね。それはさうと私も、春にでもなつたら思ひ切つてひとつ外國へ行つて來やうかと思つてゐるんですよ、團子の奴も泌々厭になつたし……と、云つたら、さぞさぞ阿母の奴に悦ぶだらうね、わが意を得たるが如くに、か……だが、あんな者と結婚してうちもそれからそれへ、飛んだ破目になつたものですなア！そこで、倒々阿母さんまでが——と、云ひかけてさ……

「ハッハッハ……」

「トン子さんに嫌はれますよ、そんなにお醉ひになつて……」

「ハッハッハ……」

——ハッハッハ、と、鷹揚に、肩をゆすつて笑つたら、阿母の君！どんな顔をするかな、何とか家の、何とか武士の

娘！うた、僕ア如何しても下の處へ行つて來るんだ、何も周子との結婚がうちに祟つたからと云つて、何も彼女が悪い程吝嗇だつてケチ臭いわけぢやないんだ、たゞ孫が好かなくなつたまでのことだよ、恰もヘンリー・タキノのそれの如くにさ。あんな者のセイにするのは卑怯千萬だ、キレイなことばかり聞されてゐたので、俺もそのつもりで生きて來たんだが、昔からうちなんてそんなものだつたに違ひない、阿母の若い時分なんて、何が何だか解つたものぢやない、ぢや、どうして子供まであつたのに親父はアメリカなどへ出かけて行つたんだア！俺アもう日本になんか歸つて來まいと思つてゐたんだが親父が死んだので無理に呼び歸らされてしまつたわけなんだ、などゝいふことをヘンリーが俺に話して、俺の氣持を暗くさせたこともあつた位ひだ……餘ッ程、嫌はれたらしいな、して見ると……

「阿母を呼べ、阿母を呼べ！」

食卓に突ッ伏して、泥醉してゐる彼は、ブツブツとわけの解らないことを呟いでゐたかと思ふと、突然そんなことを叫んだ。

「阿母を呼んで貰はう、何でえ、婆アの癖に白粉なんかつけやアがつて……カツ！」

「稀に歸つてらしつて、またお母さんと何かやつたんですね、いけませんね！」

「やるもやらないも、あるもんけえ！」

「悴が我儘で困るツて、此間もお母さんが滾してゐらつしやいましたぜ、旦那のある時分とは違ふんですから、若旦那が……」

「俺ア若旦那ぢやねえ、天下のヴアカボンドだア。」

「今になつてお母さんと仲が悪いなんていふことが知れると、それこそ皆なに馬鹿にされるぢやありませんか。」

「何となく、俺は、阿母の顏つきが氣に喰はんのだ。」

「戯談ぢやありませんよ、何をつまらないことを云つてゐらつしやるの？」

「あの聲を聞いただけでも、蟲唾が走りさうだ、あの色彩を想像すると、鳥肌になる……」

「……」

「聽かなくつても好いよ。これはね、西洋の芝居の聲色なんだよ。」

「そんな西洋の聲色なんかでなく、あたし達にも解る日本のを聞せて下さいよ。」

「オークション・マーケットの惡商人が、鳥の嘴を繪具で染めて、九官鳥に見せかけたが聲を出されると大變だつたから、ギユッと喉首を握つてゐると、苦悶の鳥がしやがれた叫びを擧げた――そのやうな聲だ。」

「ほんとに、日本の聲色をやつて頂戴よ。」

「阿母の顏を見るのも厭だア！」

「また始まつた、あたし悲しくなるから止めて下さいよ、そんなことを聞くと……」

――うむ、さうだ、こんな答じやなかつたんだ、阿母を相手に氣嫌よく飮まう、飮めるかなア！と思つてゐたところなんじやないか、いや、もう大丈夫だ……

「なアに久し振りで一寸親父の聲色をやつて見たんだよ、好くそんなことを云つて俺たちを困らせたつけなア！　そも間もなく、一週忌かね、三月になると。――思ふ間もなくトンネルの、闇を通つて廣野原、とかツて小學唱歌があつたね、――今ハ山中、今ハ濱、今ハ鐵橋渡ルゾト、かね。」

「三日には乾度來るツて、お蝶さんも云つて行きましたよ。」

「あんな惡い家の親父にかゝつちやア、阿母もさんざんだつたね。俺、今でも思ひ出すと氣の毒になるよ。で、無理もない、といふことになるのかな……」

「ぢや皆なで唱歌を歌ひませうよ。汽車の歌ならあたし知つてるわ。」と、隅の方にゐた小さな雛妓が云つた。

「うむ、やつて見ろ。」

「合唱よ。」

「皆なでやつて見ろ。」

「――遠クニ見ユル村の屋根、近クニ見ユル町の軒、森ヤ林ヤ田ヤ畑、後ヘ〳〵ト飛ンデユク――廻リ燈籠ノ繪ノヤウニ、變ル景色ノ面白サ、見トレテソレト知ラヌ間ニ、早クモスギル幾十里――」

「何だか面白くねえな。何かもつと景氣の好い歌をやつて貰はうか。お隣さん、喧嘩ぢやないんだから阿母に電話をかけて呉れよ。さういふわけでね、阿母を氣の毒に思ふのさ、だから一つ大いに仲善く……まつたく親父は酷いよ、自分が勝手なことばかりして罪もない阿母の惡口を云ふなんて……」

「そのおつもりで、これからは澤山親孝行をしなければなりませんね。」

「うむ、解つてゐるとも。屹度來るから呼んで呉れ、俺が醉つ拂つてしまつて、如何しても阿母が來なければ歸らない、と云つてゐると――さう云つて呉れ。」

九

「俺は甘やかされて育つて來たんだよ。そして、今も仍我儘者なのだ。この先多くの苦しい人生の經驗に出逢つて、い

ろいろ眼醒めることが多いだらう。」

友達の一人が、彼に親切にさう云つて與れたことがあつた。そして彼を本位にして、いろいろな忠告を與へて與れた。彼は、自分を本位にされて快い忠告など與へられた驗しがなかつたので、内心では可成り嬉しかつた。だが彼は、我儘者とか、甘やかされて育つたとか云ふ言葉を、好き意味に解釋して、嘗てそんな甘さに醉つたこともない癖に、わざとらしくそれらの言葉を、素直なやうに默頭いて受け容れた。さういふ態度をすれば、自分に對する相手の好意が更に増すであらう、などゝいふ風な狡い考へがあつた。相當の年齡に達してゐるにも關はらず彼は、幼稚を衒ふ姑のやうに姑息な心をもつてゐた。一體彼は、他人と相對してゐる時は、たゞでさへ朧氣な己れの個性は悉く消滅してしまつて、鸚鵡の如くひたすら相手の氣嫌を伺ふやうな心にのみなつてゐるのが常だつた。或る時は強がり、或る時は弱がり、或る時は神經質がりするが、それは悉くピエロの假面を被つた功利的の作爲に他ならなかつた。自信がなくて、さういふ結果になる彼だつたから。獨りの時は何の思想もない、たゞ人形の姿を持つた一個の物體に過ぎなかつた。だから多少でも他人の心の解る程な神經の鋭敏な潔癖家は、一時間以上彼と對話する辛棒は出來なかつた。

「苦しいことに出遇つて眼醒めるとか、成長するなどといふ纎細な感受性を、僕は、生れながら忘れて來たやうな氣がしてならない。」

「さう云ふ、云ひ回しをするものぢやないよ、取りやうに依つては隨分厭味にもなるぜ。」

寧ろ媚の氣持で彼は、云つたのであるが、忽ち相手に見破られて、彼は啞然とするより他はなかつた。

「一體君は、さういふ惡い癖があるよ。誇張して云へば、自分を輕蔑するといふ風に見せかけて、反つて相手を輕蔑するといふ……」

「戯談ぢやない。」と、彼は、思はず慌てゝ叫んだ。だが直ぐに彼は、これをも受け入れるやうにニタニタと笑ひを洩してゐた。そんな棗のある筈はなかつたのだが、そんな風に云はれると彼は、如何にも自分は辛辣な心を持つてゐるんだ、などと途方もない誤解をして、尤もらしく顔を歪めた。

「それは、たしかに惡い癖だ。さういふ獨り好がりは。……」

「獨り好がり？」

「勿論だよ、身を滅す種だぜ。」

相手は、稍々癇癪を起して、だが彼に解るやうに平易な言葉で、二三の例など擧げて諄々と批難を浴せた。その男は彼よりも二つばかり年少の文學研究家だつた。

批難されると、彼は、忽ち滅入つてしまつた。滅入つたりすることすら探つたことを覺えたが、餘計な脅迫を強ひられ一漠とした恐怖に襲はれずには居られなかつた。そして彼は、取り縋るやうに可細い聲を擧げて、倒々斯んなにわざとらしいことを云つた。「勘辨して呉れ、まつたく君の云ふ通りだ。僕は、實際自分の言葉を持ち合せないんだ。脈々ながら強ひて持たうとすれば、己れの娯に癇癪を起す言葉だけなのだ。」さう云つた時彼は、思はず齒の浮くやうな可笑しさを覺えたが、努めて神妙に續けた。「如何思はれても、それはまつたく悲しいことだが、他に術がないんだから仕方がないんだ。僕は、せめて、自分の執つた弓で自分の胸に矢を放つて、その痛さを感ずる刹那に、多少の生甲斐を感ずるより他にないんだ。これは決して遊戯ではない。痛い〳〵と叫ぶ悲鳴なんだ。それも中毒が日増に強くなつて、近頃では普通の矢では悲鳴も擧げられなくなつてしまつた。土人の使用する毒のついた矢でなければ痛痒の感じがなくなつてしまつた。それも何時まで續くことやら？ 例へば自分の胸に打ちつける矢の種類だつて、せいぜい二三種しか持ち合せな

いからね、如けに一度使用した矢は、二度目には役にたゝないぢやないか、最後の毒矢を放つて打ち倒れてしまへば寧ろ幸福かね。」

「打ち倒れてしまふことを怖れるんだよ。」

「この分で行つたら、間もなく僕の心は、君の云ふ通り、風の如くに干からびてしまふに違ひない。」

「風の如く、だなんて僕は、云はないよ。」

「一遍使つた矢を削り直すかね。いろいろ工夫をして、矢尻りを様々な形に拵へ直すかね、……ところが、その工夫の頭が無い、削り直す小刀はすつかり錆びてしまつた。」

「君は、樂天家だよ、そんなことを云つてゐられるんだから……。」

相手は、ムツとして横を向ひてしまつた。

また彼は、別の友達に斯んなことを云つた。「僕は、此頃發明家といふ者に同感してゐるよ。スリ鉢がグラグラしない道具を發明した苦學生の新聞記事を見た時も、可成りな餘徹を拂つた。これも新聞の記事だが、英國の或る男で、水の上を自由に歩くことが出來る靴を發明した奴があるぜ。」

削り直す小刀だとか、發明だとかと、こんな無稽なことを喋舌つたことを思ひ出して彼は、馬鹿〳〵しい苦笑を洩した。

母と襖を隔てゝ彼は、日本畫家の田村と退屈な話を取り交してゐた。田村は彼れよりも十歳ばかり年長の、彼の父の酒飲友達だつたのだ。――前の晩の宿酔で頭が重く、これから汽車に乗ることを思ふと、吐氣を感ずる、あしたに延ばさうかな――彼が縁側に丸くなつて、陽を浴びて寝轉びながら、そんな退儀さを想つたり、無稽な空想に走つたりして

ゐたところに、田村が來たのである。
「今日は、ひとつ私とゆつくり飲まうぢやありませんか。」
「動くと吐きさうで仕樣がないんです。」
ゲツゲツと喉を鳴しながら彼は、顔を顰めた。それだけのことを喋舌つても、胸に溜つてゐる苦い酒が揺れて、今にも込みあげて來さうだつた。「ウツ！　あゝ氣持が惡い。」
實際そんなに苦しかつたのだが、そんな狀態を隣室の母が耳にして、何か意味あり氣に感じはしなかつたらうか——彼はふと「これも遠慮した方が好いだらう。」と、氣附いた。
「昨夜は、大分愉快だつたさうですなア！」
「なアに……」
「お母さんと一處の遊興ぢや、無事で好いですね。」
「まつたくね。——ウツ、ウツ、ウツ、どうも宿醉は苦しいですね、どうも、いかん！　氣持が惡るくて……阿母がそんなことを云ひましたか？」
田村は、不決斷な笑ひを洩した。彼は、うつかり餘計な質問を附け加へたことを後悔しながら、今にも嘔吐が堪へ切れなくなりさうに激しい咳を續けた。
清友亭に來た母は、氣嫌が好かつた。あんな母を彼は、曾て見たことがなかつた。
「稀に此方へ歸つて來た時は、お酒を飲むのも好いだらうが、東京へ行つたら氣をおつけよ、お前はあまり癖の好くない質だから……」

この母の言葉の前半は、今迄の彼女なら決して云はない言葉である、そして後半は他人には母らしい心遣ひのやうに響くが、彼には穏かに聞き逃せなかつた。——癖が悪いと云つたつて僕は、たつた一遍あんな騒ぎを演じただけで、それ以外に別段阿母さんの前で亂暴な醉態を示したことはないぢやありませんか……彼は、斯う訊き返してやりたかつた。尤もらしく、母親らしい様子を取り繕つて恥も無さ氣に澄してゐる母の、黄色味の勝つた容色を眺めると彼は、常套的な猜疑を通り越して、油汗の滲む滑稽を感じた。

「普段は、優しいんですが、どうもお酒が過ぎると……親譲りの血統で——。」などと母は、巧みに笑つてお園を観た。

「でも、さつぱりしてゐらつしやるから好うござんすわ。」

「どうだかね……」と、彼は、でれでれした濁聲を擧げてせゝら笑つた。せめて、これ位ひに母親を無視した遊蕩的態度を取つて胸に凝り固まつた滑稽感を散らしたかつた。

「病氣が起るといけないから……」

「えゝ、えゝ。」と、彼は、空々しく默頭いた。

「お酒では隨分厭な思ひをしましたから。」

「御心配が多うございましたからね。」などゝお園は、縫に大業に默頭いてゐた。彼は、一層空々しい氣がしてならなかつたが、確りと堪へなければならないものを感じてゐたので——酒でも飲まなければ、反つて病氣になつてしまふ——と憎態な調子で口に浮びかゝつた言葉を慌てゝ飲み下した。何としても父親との場合のやうに陽氣になれなかつた。

「——父を賣る子！今度は何を賣るんだ。」

酔つた友達に、斯んなことを彼は問はれたこともあつた。「父を賣る子」といふ彼の短篇を讀んだ後に、若い[illegible]

「もう何にもない、すつかり賣り盡してしまつた、困つたよ。」

彼は、明るい心でこんな戯語が云へるやうになつた。妙な、厭な言葉だが、父を賣る小（子）に、今にして思へば、幼な罪を感じただけで、甘く明るい影もあつた。同じく親であるにも關はらず妙に想ひを運ぶと、どうして斯んなにも陰惨な影に覆れ、黒血を浴びる程のグロテスクな罪にばかり閉されなければならないのだらう！彼は、飽くまでも甘い好い考へから、思はず獨りで不合理を叫んだりした。また彼に、他に一つでも出來る仕事さへあれば、道徳の壁に閉され て、石のやうな生活をする方が安易に思はれた。無能地獄――そんな言葉を捕へて彼は、痴呆性に富んだ苦笑を浮べてゐるより他はなかつた。

「お酒の話なんて、面白くないなア！」

どうかして心を浮きたたせたいと彼は、切りに努めたのであるが、無暗に注ぎ込む酒に鉛になつて胸に沈積するばかりだつた。

「お母さんが來たら、唄を歌ふッて云つたぢやありませんか。」

そんなことを聞く、と彼は、顔が赤くなるばかりだつた。

「唄なんて、ひとつも知らないよ。」

「もう歸らうか？」と、母が云つた。

「えゝ……だけど折角だからもう少し……」

彼の聲は、絶へ入りさうに低かつた。

「醉はれては、迷惑だよ。」

心から迷惑さうに母は、呟いた。

「迷惑なら先へお歸りなさいよ。」と、彼は、思ひ切つて云つたのである。

「あれだ！」と、母は、苦笑した。ほんとの母なら、苦笑は餘計な筈だつた。カツとして滔々と彼の否を鳴らさなければ居られない母の筈である。「お出でと云ふから、仕方がなしに來てやつたんぢやないか、馬鹿〱しい、こんなつき合ひは私には出來やしないよ。阿父さんとは違ふんだから……」

調子づいて、阿母などに來て貰つたが、何としても面白くない、面白くないに決つてゐるさ！　あゝいふ自分の妄想は、やつぱり實現させないに限るんだ――などゝ彼は、思ひながらも、お園たちの前には、嚴格な母親の言葉に悸々してゐる風を裝つたり　或ひは、嚴格ではあるが心の溫い母親に、いくつになつても甘へてゐる好人物の倅である、といふ風な思ひ入れを示すやうな薄ら笑ひを浮べてゐた。――彼などが、如何程くどく招待しやうとも、今迄通りの頑なを保持して動かない母親を彼は、想像して、その母と戰ふことに依つて、彼女に對する惡感を少くする――そんな想ひに走つたのでもあつた。だが、母の不氣味な弱さは彼の心に醜くゝ投影して、彼のそんなパラドキシカルな活氣を縮めたのである。

「まつたく、呼んだりして濟みませんでしたな！　たゞ一寸獨りぢや面白くなかつたもので……」

云ひかけて彼は、その面白くなかつたといふのが不道德な妄想の戲れに過ぎなかつたのを後悔した。母親の眼の前で、言葉と心とがはらはらになつて、面白い自分の存在を感ずるなどといふ馬鹿氣た眞似が出來る筈はなかつたのである。――斯う氣がつくと石のやうな醉ひに沈んでゐる自分を彼は、持て餘さずには居られなかつた。眼の前に感ずる母

が、怖ろしく空々しかつた。――折角醉も回り、好きな藝者達も來たところに飛んだ邪魔物が現れた！と、迷惑なるより他になかつた。

「隨分外は寒かつたでせう、もう直ぐ歸りますからまア少しお飲みなさい。風邪でも引くといけませんからね。氣の毒でした、氣の毒でした。ハツハツハ。」

彼は、突然滑らかに氣嫌好くそんなお世辭を云ひながら、母の盃に酌をした。

その先のことを彼は、大方忘れてしまつた。午近くに眼を醒した時には、ちやんと自分の家に寝てゐた。氣嫌の惡い眞似は何もしなかつたことだけは朧ろ氣に覺へてゐるし、前の晩にも増して母が彼に、親切であることから推察しても、それは大丈夫だつたらしい、と彼は、思つた。

「まア今晩は私と、つき合ひなさいよ。」

川村は、彼の問ひには答へずにまた同じことを云つた。何か母から頼まれたことでもあるのぢやないかな？　彼は、そんな氣もした。

「僕は、今日は如何しても東京へ歸らなければならないんです。だけどこの分では、汽車に乘れるか如何かゞ怪しまれて……」

さう云つて彼は、苦しく喉を鳴した。あんな野蠻な口論をした周子ではあるが、今思ふと、あの公園裏の佗しい家が寂しく彼の心を惹くばかりであつた。周子の醜い影は消えて、哀れッぽいところだけが懐しく殘つてゐた。女のやうな弟の賢太郎と二人で、洋服の裁縫に沒頭してゐる姿を思つても、苦笑も浮ばなかつた。五六人の子供を持ちながら周子より他に頼るところのない彼女の母親も、氣の毒だつた。英一を伴れて行つたのも仕方がない。――彼は、彼女達に對

しこ斯んなにもパッシイヴな心になつて、何の抵抗も起らないのが可笑しかつた。十景のうち一つしかないやうな静かな光景だけが絶れ〳〵に佗しく浮ぶばかりだつた。

間予は、喧ましい醉ひ振りの夫の聲が止絶れた時、「あれは何の聲だらう。」と、眼を覩張つた。雨の降つてゐる秋の夜更けだつた。動物園で叫ぶ獸の聲が聞えるのであつた。「獅子かしら？虎かしら？」

「一寸、好いぢやないか。」

彼は、首を傾けて氣障な聲を擧げた。

「山の中にでもゐるやうだわね。」

「こんなこともないさ……」

「あなたの歸りが遲い晩は、あれが怖くて仕樣がないわ。」

「俺が居れば怖くはないのか？」

「…………」

そんな無意味な光景ばかりが浮んだ。――だが彼は、また東京へ戻つて彼女等に取り圍れて、打算的な愛嬌を示されて苛々することを思ふと、退儀だつた。

彼が、相手にならないので田村は、手持ぶさたになつて、隣室へ行つて母と話を初めてゐた。震災の前から飼つてゐた雞の殘りが二三羽、潰れた儘になつてゐる庭を靜かに歩いてゐた。

お蝶のことを考へても彼の心は動かなくなつた。いつの間にか彼女も徽々たる「お伽噺」の端役に變つてゐた。――

Fの遠い幻だけが、まだお伽噺にもならずに、夢のやうな明るさを、細く彼の胸に殘してゐた。その後の母と彼との生事は打ち切つて、NやNの母の空想を混ぜないFの追想をそれに換へよう――斯う思ふと、わずかな光りが味へる氣がした。

椽側の隅に古く土に汚れた書籍が一塊りになつてゐた。彼は、そこから二三冊の本を選び出して、日向で繰り擴げた。讀書嫌ひの彼は、退屈な時には徒らに辭書を眺める癖があつた。"Synonyms and Antonyms" そんな名前の字引を彼は、偶然見出した。あのオペラ・グラスを貰つた頃、これも矢張りFの贈り物だつた。例へば、"Peril"といふ文字を引くと、それの同意語として"Danger"とか"Risk"とか、"Venture" "Uncertainty" "Jeopardy" 等々などといふ同意語が擧げてあり、同時に反意語として"Security"とか、"safety"とか、"Certainty" 等々といふ風な文字が列擧されてゐるのだ。解らない文字の意味も、二十も三十も同意語、反意語で例證されゝば自づと通ずるのである。彼の英語が餘り不たしかなのと、不得手で不便なことをFは迷惑がつて、多少皮肉な意味を含めてFが彼に贈つたのである。皮肉には違ひなかつたのである。Fは、扉に斯んな惡戲書きを殘した。

"My father was a farmer
Upon the Carrick border, O,
And carefully he bred me
In decency and order, O;
He bade me act a manly part,
Though I had ne'er a farthing, O;

For without an honest manly heart,
No man was worth regarding, O."

彼には、わけが解らなかつたが、これはロバート・バーンスの詩の一節だと云つたのである。彼は、同意語と反意語」を何遍も何遍もひつくり返して判讀したのだが、事更にそんな言葉を與へられたかと思ふと、皮肉にとらずにには居られなかつたのだ。

彼は、此の頃の自分の鈍い心は常に低い程度で**うらはら**に動くばかりの氣がしてゐた。鈍くても好いから一つ所に止まりたかつたのである——そんな空想に時々走つた。

「一晩泊りで歸るなんて、珍らしいことぢやありませんか。」

「何だか、務めの方が忙しいさうなんです。」

「へえ！務めてゐるんですか。」

絶れぎれに田村と母の話が洩れてゐた。

彼は、寝轉んだ儘徒らに字引を繰つてゐた。自分がどんな幼稚な芝居氣に囚はれてゐるかも氣づかずに、微かな際などをたてゝ、數でも算へるやうにブツブツと呟いでゐた。

「惡といふ文字を探して見ようかな。……なる程あつた〳〵キタナラしい程列んでゐやアがる。……"Evil" だな！

Syn＝Ill, noxious, deleterious. wrong, bad, mischievous, hurtful, sinful, unhappy, adverse, unpropitious, wicked, corrupt, harmful, unfair, notorious, miserable, sorrowful.

Ant＝wholesome, beneficial, right, virtuous, holy, pure, happy, fortunate, felicitous, joyous, welcome,

grateful, good.

斯う讀んで見ると"Evil"の同意語は、悉く彼の心のシノニムに思はれ、"Evil"十三語には、一つも惠まれてゐない氣がして、夫々の文字が彼の眼の前で、壁を隔てゝ哄笑してゐた。だが、さう思ふと彼は「その後の母と彼」の仕事に多少の力を得た。母に對しても、周子に對しても、その彼の弱さは決して"Evil"の反意語ではなかつた。一つのうらはの心と思つたのは、皆な彼の自惚れだつた。

「Ill, noxious, deleterious, wrong, bad」

彼は、氣障な文學青年らしくそんなことを呟きながら、澄んだ空を見あげてゐたが、また激しい咳に襲はれた。

「藥を飲んだら如何かね。」

唐紙を隔てた儘母が、聲をかけた。

たゞ、いりませんﾞ！と、返事をすれば足りたのに彼は、

「藥なんぞ飲めば、反つて氣持が惡くなるばかりだ。」と、叫びながら一層激しく、今にも嘔吐が堪へ切れなくなりさうに咳き込んだ。

翌日、彼が出ける時母は、彼の外套姿を眺めて

「何だかお前の外套は、薄ツぺらで寒さうぢやないか、阿父さんのを出してやらう。」

さう云つて、襟に毛皮のついた父の外套を取り出して來た。毛皮のついた外套などは、自分に不相應でもあらうし、若者の着るべき物ではない——彼は、さう云はなければならなかつたが、云ひ損つた。そして身分の外套を脱ぎ棄てゝ、母が掛けて呉れるが儘に、後ろ向きに立つた。自分の働きが出來るまでは、絹物は一切身につけてはならない——常々

さう云つてゐた母である。彼が學生時分派手なネクタイを用ひたと云つて、鋏で切つてしまつた母である。

襟をたてると、耳の上まで埋つた。彼は、母が呼んで呉れた俥の上で、鳥打帽子の前を眉の下まで降し、毛皮に埋つた頬ッぺたの生温い感觸に擽つたさを覺えながら、停車場へ走つた。東京へ歸つたら直ぐに「その後の母と彼」を書き續けよう、さう思ひながら彼は、狡い笑ひを浮べた。外套の襟にさへぎられた白い呼吸が、鼻や眼に觸れた。（十四、二）



未解決のまゝに

徳田秋聲

一

初めて其の女が訪ねて來たとき、融は玄關に近い茶の間にゐた。その頃彼に少し不如意のことがあつて、場末の借家に逼塞してゐたが、そんな時に限つて、兎角悪事の報ひが見舞つて來たりするのであつた。聞きなれない女の聲がするので、女のおみねが出て行つて、そつと襖の陰から見透してゐた揚句、二人の間に餘所々々しい應答が取交されてゐたが、女は戸の外に立つてゐるので、言葉は聞取れなかつたが、融には直きに想像がついた。

「變な人が來ましたわ。」おみねはやがて其の女を歸してから腑におちない顔をして融の傍へやつて來た。

「秋山さんの所を聞きに來たんですけれど……。」

成程！と融は思ひ當つた。秋山は以前同じ社にゐたので、カフエにゐた其の女を

彼もよく知つてゐた。女は遠慮して、わざと秋山へ迂廻したのであらうが、融には厭な感じがした。

「ふん。」融はわざと外方を向いてゐた。

女がまさか玄關へ姿を現はさうとは思はなかつた。勿論手紙は受取つてゐたけれど、わざと返事はしなかつた。取着端がないので仕方なし遣つて來たのであらうが、一度道がつくと、また遣つて來るかもしれないと云ふ不安が、彼の心を暗くした。

「秋山さんあんな女知つてゐるんでせうか、何だか變な女ですよ。様子が判りませんから、わざと教へてやりませんでしたわ。貴方を知つてゐるんでせうか。」

「さあ、どんな女だか。」融は惚けてゐたが、恥かしく思つた。

「何だか裏店のお神さんみたいですわ。それに大きいお腹をしてゐるんですもの。」

融は痛いところへそつと觸られるやうな氣がした。ちやうど一月の末だから、六月位になつてゐる勘定であつた。そんな腹をしてまさか東京へ歸つて來はしまいと思つてゐたのに、二度ばかり寄越した手紙によつて、到頭田舍にも居堪らなくなつて、暮に歸つて來たことは融も知つてゐた。一度見に行つてやらうかとも思つてゐたが、因縁がつくと煩いと考へたので、氣にかゝりながら放擲り放しになつてゐた。

融はその女と、去年の夏頃郊外の彼女の家で、二三度逢つたことがあつた。今は死んでしまつた知人の越智のものに一時なつてゐた女で、越智が關西へ行つてから、人の妾となつたことは融も薄々耳にしてゐたけれど、それはもう餘程古いことで、融がおみねと同棲して三年ばかり經つた頃のことであつた。一度能く似た女を淺草の人込のなかに見出して、變な氣持になつたことがあつたほど、彼はその顏や樣子が好きであつたが、生れつき嘘つきで、平氣で見えすいた

嘘をついては、其場々々を胡麻化すことを何とも思はない、同時に氣の多い、男を操ることの上手な女であつた。何うみても娼婦型で、少し附合つてゐると厭氣がさすのであつたが、十八九時分の彼女は、白い滑かな皮膚と、よく均齊の取れたしなやかな體と、潤みをもつた目や、脹らみのある頬や頸などで、人好きのする様子をしてゐた。で、融も彼女と二人きりで、近い海岸の温泉宿へ行つたこともあつた。

去年の夏幾年ぶりかで、彼はその女の手紙を受取つた。あれ以來長いあひだ横濱や神戸へ行つてゐたが、この頃ちよつと東京へ出てゐる。餘り久しく逢はないし色々話したいこともある。四五日してから神戸へ歸るつもりだから此手紙を見次第濟まないけれど來ていたゞきたい。そんな意味で、その所も名前の傍に書いてあつた。彼はその女が何んな風に變つたか、何んな生活をして來て、何んな境遇にあるかに好奇心が動いたが、勿論それには彼の職業心理が鋭敏に働いてゐた。

その翌日の午後、融はどこかで飯でも食つて、話を聞くつもりで、ぶらりと出かけて行つたが、郊外のその家を尋ね當てる迄には、可也手數がかゝつた。家は安普請の平家で入口に格子戸がはまつてゐて、小杉と書いた紙の名札が出てゐた。それは彼女の苗字であつた。

女はすつかり變つてゐた。どこで逢つたところで、それは少し注意して見れば、すぐ思ひ出せる程度の面影は殘つてゐたにしても、ちよつと顔を見合つた時の印象は、すつかり彼を失望させた。丸い脹みをもつた顔が細長くなつたゞけではなかつた。あの娘々した若さが跡形もなく消え失せたのに不思議はなかつたが、どこか臆病らしく彼を見る目が冷たい卑しい感じを與へた。同じ荒んだ生活にしても、餘り惠まれた境遇でなかつたことが、一と目で感づけた。

「まあよく來て下さいました。」さう言つて出迎へた彼女は、襷や前掛をはずしながら、長火鉢や茶簞笥のある奥の室

へ誘つて、更まつてお行儀よく挨拶したが、融はむしろ来たことを後悔してゐた。

「手紙ごらん下しつて？」女は未だに訛がとれなかつた。

「多分来ては下さらないだらうと思つてゐましたけれど、其でも手紙の御返事くらゐはくださるだらうと思つて。」女はさう言つて、水を汲んで来て、畏まつてゐる融に手拭を絞つたり、羽織を衣紋竹にかけたりしてゐたが、大分たつてから傍へ坐つて、遥かに打釋けた風で、融がそんなに變つてもゐない事や、あの頃から見ると寧ろ健康さうになつたことなどを話しながら、お茶をいれてゐた。

「この家は何う言ふんだ。」融がきくと、女はにや〳〵しながら、

「これも後で話しますけれど、私の身の上は随分面白いのよ。」

「あれから何うしたんだ。」

「何年ほど前ですかね。私もあの時分は若かつたけれど、こんなお婆さんになつてしまつて。私もう三十一よ。」

入るとき顔を出したのが、五つか六つかのお品の悪くない女の子で、その子が始終傍に片足を横へ出して、不思議さうに融を見てゐた。

「この子は。」

「これがさ」と女は顔を顰めて、それも後で話すと云ふ目をした。

女がするりと裏へ出たと思つたが、歸へてから間もなく麦酒や料理が持込まれた。何を話すといふこともなし、もう日の暮方になつてゐた。

「私麦酒が大好きさ。」女はそこにべつたり坐つて、お美しさうに麦酒を飲んだ。

女の話によると、彼女はもう一年の餘もこゝに居たのであつた。京都にゐるうちに、東京の或る技師と知つて、その男の世話になつてゐたことや、その男が財界の恐慌で、經營してゐた會社が潰れたので、月々の仕送りも絶えてしまつたから、近いうち神戸へ行くつもりで、そこには一つの縁談が、以前の友達によつて纏まりかけてゐるけれど、まだ全く決めた譯でもなかつた。女の子はそれ以前に同棲してゐた、秋田の役人の子だと言ふことも、話してゐるうちに受取れて來た。

「私貴方にお金の御迷惑なら、決して持込む積りはないんですのよ。」

融が歸りがけに「少しお小使をおいて行かうか」と言つたとき、女はさう言つて拒んだ。

融のそこを出たのは、夜の十時頃であつたが、多くの疑問と興味がそこに殘された。そしてやくざな彼女の生涯らしいものを、彼女の其時其場の追懐談によつて、とにかく繋ぎ合せることができるまでには、彼はその後二度もその家を訪ねなければならなかつた。

二

神戸へ片付いてから、一度ばかり受取つた手紙は、融に取つては、餘り快いものではなかつた。最後に逢つたとき、彼は彼女からちよつと其のヒントを與へられた。

「おい、本當かい。」融は神經を尖らせた。

「さう云ふ氣がするの。けれどさう云ふこともあるから。」女もさう氣にも留めてゐないらしかつた。

最初融がそれを言つて警戒したとき、女はむしろ彼を揶揄ふやうに、その結果を豫期するやうな口吻を洩してゐた。

「もう一人できてくれゝば尚好いんだ。この子一人ぢや私も心細い。」女は言つてゐた。

融はそれを聞いて戦慄したのであつたが、それが現實化されやうとは想像もしなかつた。十年目に、一度逢つただけの彼女に、そんなにも早くさうした結果が將來されやうとは、思ひもかけなかつた。

「さうくよ〳〵心配することないぢやありませんか。若しかしてさうとしたところで、まさか貴方に迷惑かけやしまいし。」女は事もなげに言つてゐた。

しかし彼女の手紙によると、それが愈々事實であることが判明したばかりでなく、彼女の黒幕が美事に破綻を來して、いかに厚顔でも、この上その家に止まることは出來ないと言ふのであつた。

そして彼女は再び東京へ舞戻つたのであつた。

融は皮肉と滑稽を感じたが、腹立しくも思つた。係締が幾分女によつて仕掛けられてあつたことは拒めなかつた。女が明白に意識してやつたことでないにしても、前後の關係や彼女の態度や口吻から推察しうるところでは、その結果は恐らく彼女に取つては偶然で――自然からいへば必然――の結果であつたであらうが、多少それを希望してゐたと思はれる節もあつた。それに融は、それが自分の責任か何うかも判らなかつた。女の口吻を、彼女の特徴である娼婦型の性格に照し合せて、想像を辿らせて行くと、その事實の對象が外に隠されてあつたかも知れないのであつた。あるのが寧ろ自然だと思はれた。しかし又、融を呼出したのは、その對象者と手が切れたからだとも思はれないことはなかつた。餘り氣が進んでもゐないのと、神戸の縁談が、略纏まりかけてゐたところから推せば、尚更らさう考へても可い理由があつた。

しかし木伊乃取りが木伊乃にされたやうな、悪戯な運命を憤つてみたところで仕方がなかつた。それを厳粛な事實と

見れば、嚴肅にも違ひないが、融にそれをさう重大視する氣にもなれなかつた。そして初めて手紙を見たときには、怕いほど狼狽へてもしたが、眠つたり覺めたりしてゐるうちに、その氣持も薄らいで、出來るだけその考へから離れてゐたいと希つた。それはちやうど必然的な死に向つて、絶えざる恐怖を感じてゐると同じ愚かさで、いくら考へ詰めたところで何うにもならない事であつた。

しかしあの蒼白い顔をして、ぺつたり／＼した口の利き方で、廻りくどく因縁でもつけに、これから時々玄關を騷がせに來られることを考へると、融は全く遣切れなかつた。良人や親の威嚴が臺なしにされるのは可いとしても――妻や子供がそこまで無理解であらうとは思へなかつた――事實を妻の前に暴露されることは、色々の意味で堪へがたい苦痛であつた。

或日彼は事情を見定めるために、到頭思ひ切つて彼女を訪ねた。融は今日は女が來はしないか明日は來るかも知れないと、人の出入りにびく／＼しながら、持前の臆病と無精とで、つひ延ばし／＼して居たのであつた。

その頃女は新宿の方にゐた。そこは前から仲の惡い叔母さんの家で、叔母の良人の身分なぞも、勤め人だと云ふだけで、詳しいことは判つてゐなかつたけれど、カフエにゐる時分から、叔母に好感をもつてゐなかつた。融が尋ねあてゝ見ると、それは日當りの惡い裏通りの古びた門構ひの家で田舎の場末のやうに、ごみ／＼してゐた。上ると左が茶の室で、そこに子供の襁褓や褞袍や、玩弄のやうなものがだらしなく散らかつてゐた。其中に、肉のぶく／＼した四十許りの女が、近所の神さんらしい女と話してゐた。色が白く、目も張りがあつて、髮や姿にかまはないながら悧巧好い顔をしてゐた。

「お冬さん。」とその叔母が呼んだ。

奧からお冬が姿を現はして來た時、融はこの前初めて逢つたとき驚いたよりも、もつと驚いた。彼は文字通り自身の

目を疑つた。そして憫れた顔をして突立つてゐた。お冬は全く變はり果てた形相をしてゐた。色が蒼黒くなつて、皮膚にぽつ〳〵したものが出てゐた。額が妙に細つこくなつて、鼻が尖がつてゐた。白い齒が殊にも目に立つて、どこの田舍の婢かと思ふくらゐ下卑てゐた。いつもの彼女と違つてにこ〳〵してゐるのが、殊に厭らしい感じであつた。

融はすぐ其處にある段梯子を昇つて、二階へ案内されたが、部屋には書生がゐるらしく窓際に卓子と椅子がおかれて、卓子の上にインキ壺や古いペン軸、それに經濟原論だとか、銀行論だとか、そんなやうな經濟學に關する書物、歷史や地理などもあつた。

「朝鮮人がゐるんだけれど、介意やしない。」女はさう言つて、薄い座蒲團を直してくれた。

「あれが君の叔母さんだね。」融は醜いお冬の腹を見ないやうにしてゐた。

「は。嫌いだけれど、こんな時は仕方がないぢやありませんか。」お冬は顏を顰めてゐたが、お腹を氣にして羽織を掻合せてゐた。

お絲が言つて居た通り、氣をつけて見ると、實際今にも落ちるやうな腹をしてゐた。融はかうも不様な女を見たことがなかつたが、お冬が醜くければ醜いだけ、彼は救はれたやうな氣がするのであつた。其の腹にゐる小さい生命が、彼の氣持とはまるで沒交渉であるのも不思議であつた。抽象的には多少責任に似たやうなものを感じない譯に行かなかつたが、それは廣い意味での共存生活の惱みで、私有慾に伴つて來る愛着や苦痛は少しも實感されなかつた。曾て自分が始末をつけた、或る親近者の子供に感じた愛着や憐愍、そんなものすら、彼の心のどこにも入染出してはゐなかつた。彼は全く父子の觀念から自由であつた。社會的に負はなければならない、通り一遍の責任だに果せば、その事が自然のなかに融け込んで行くに任しておいても、少しも後髮を引かれるやうな哀しみを感じないであらうと思はれた。

「しかし其でいゝのか。」隨はまだ何だか腹の底に引つかゝつてゐるものがあるのを感じた。これはそれで可いとしても、自分の行爲を是認する理由とはならなかつた。辱は辱として、何時までも彼に遺るであらうと思はれた。彼はそれを悔む氣にはなれなかつた。さうした動機や因緣が、お人好しの自分のうちにあつたことを考へたゞけでも、其事が全く無駄であつたとは思へなかつた。今日はなくても、明日はあるのかも知れなかつた。

とにかく彼は彼女から早く逭れようと焦燥つたが、お多の態度は例によつて、ゆつたり〳〵したものであつた。

「……お產婆さんが來て診て、これは五月——ひよつとすると六月だと言つたでせう。私それを巧くやるつもりで、辻褄を合はしてゐたんですけれど、いきなりそんな事を言はれてしまつて、はら〳〵してしまつたの。其れを生憎で聞いてゐたものなんです。外聞が惡くて仕方がないから、今日にも媒介者を呼んで、綺麗に話をつけると言つて、悉皆怒つてしまつたぢやありませんか。」お多は平氣で面白さうに話した。

「私あんな困つたことはなかつた。私のやうなづうづうしいものでも、顏から火が出ましたの。」

「その男は何をしてゐるんだ。」

「ブローカでしたの。暮しも樂さうでしたけれど、仕方がないぢやありませんか。媒介者にも悉皆怒られてしまひました。その人は京都にゐるとき、一緒にしてゐた人なの。今は職員の奥さんになつてゐますの。」

「何にしてもひどく變れたものだね。相が變つてしまつた。」

「だから私男だらうと思ふんです。皆さう云つてゐますよ。」

隨は話を早く取決めようとした。一人あるうへに又一人あつては、體の振方をつけるにも困るだらうから、產み落したら手放してしまつた方がいゝ。さうするより外に思案がない。前後の入費は、多分のことは出來ないけれど、出來る

だけのことはする。さう云ふ風に言つて聞かせた。

「一人ぢや心細いんですから、もう一人育てゝみたいやうな氣もしますけれど……。」お冬は言つてゐたが、主張しようともしなかつた。

融は金の額や、渡す時期なども皆きめて、差當り當座の小遣を、いくらか置いて、早々そこを出て來た。

途中廣い空地があつた。融はその緣をせつせと歩いてゐた。若い人達が野球の練習をやつてゐた。それが彼に健やかな中學時代を思ひ出させた。彼は暗い氣持になつた。何時になつたら、この問題から解放されるかと思ふと、あの理非もわからない、粘着(ねばり)づよいやうな無理な女が呪はしくなつた。

三

融が約束の或る定額を送つてから、多くの日數がたつた。彼はそれが氣にかゝつて、仕事も手につかなかつた。快活にみえて實は苦勞性のお峰などに心を勞させまいと思つて、獨りで片をつけようとしてゐただけに、一層氣がとがめた。彼は子供達の顏すら平氣で見てゐることは出來なかつた。彼は子供達を瞞したやうに、自分から責めた。しかし彼等は何にも知らなかつた。お峰の心には、氣のせいか、いくらか暗い翳しができてゐるやうに感じられた。

或時また女から手紙を受取つた。若し手紙を寄越すなら、文學青年から來たらしい匿名の書方が好いと言つておいたので、その通りにしてあつた。何にも分らない風でゐながら、何彼によく氣のつくお峰の目の前をも、無事に通過したが、融は危なつかしくて仕方がなかつた。融の財布の底を、彼女はいつでも知つてゐた。一度自分の手に渡された金なら、何んな事にでも惜しみはしなかつたけれど、兎角ぼんやりしてゐられない性質に產れついてゐた。それは寧ろ苛酷

と思はれる程度で、融は憫くゝも思つた。

「もつとぼんやり育つてゐると好い。」融はさう思はずにはゐられなかつた。

でも何んな場合にも人を憎んだり、苦しめたりすることは、絶對に出來ないお峰であつた。

融はお冬に金は送つても、餘り行つてやらない方がいゝと思つてゐた。お冬と口を利くのが不愉快であつた。お冬は兎角年廻の悪いことをこぼしてゐた。占者に見てもらつたところ、當分餘り好いことはないと言はれたと話してゐた。寧ろ運のわるいのは、體の或部分にある黒子のためだと、彼女は信じてゐるらしかつたが、誰れにしても、無恥な彼女と一緒には暮せないだらうと思はれた。お冬は妙に官僚的な男が好きであつたところから、連れてゐる娘の父親も税關の役人であつた。融は官服姿の男らしい風采をした其の男の寫眞も見たが、一度お冬が子供を見せに役所へ彼を訪ねたとき、彼は叱りつけて逐返してしまつた。

「又しても强請りに來たんだな。貴樣は己に恥をかゝせやうと言ふんだらう。」

融はその男に同情できるやうな氣がした。お冬は色々の世間を轉がつて來た割りには、拗けたところや、阿婆摺れたところはなかつた。何にしても三十の聲がかゝつてゐるので、狼狽てゝもゐた。融もさうした女の成行きを、冷やかに見てはゐられないやうな氣がしたが、しかしお冬は矢張りお冬であつた。世間を好い加減に見てもゐたし、男を甘くも見てゐた。明るみの差すところへは、迚も出て行けない不幸な女に纏れついてゐた。お冬は何かに縋らうと盲目的に焦燥るだけであつた。よく荒い格子の型のある浴衣に、赤い伊達卷など締めて、娘々した銀杏返しに結つてゐた頃のお冬の若さは、どこを搜しても見出せなかつた。

たど〲しいお冬の手によつて書かれた手紙が、一度も融の心をおどつかせたが、最後に男の手蹟で書かれたらしい

一通を受取つたとき、彼は更に又新しい疑惑と困惑とに突當つた。

こつちの言つたりとほりに、約束を履行してくれ。子供の將來を見ることは、迚も不可能だから、出來る範圍で最善の方法を盡すより外はない。出向いて行つたところで、同じ事だ。融は一度そんな返辭を出しておいたのであつたが、最後の手紙によると、問題が何うやらさう單純に行かないやうに見えた。

「……一つと思ひの外、出て來たのを見ると、それが一つでなかつたので、是非一度お出でを願つて御相談申したい。」

手紙はさう云ふ風に書かれてあつた。

融はうんざりしてしまつた。勿論その手紙は遠慮がちに書かれてあつたが、文字どほりに解釋すると、そこに思ひがけない奇異な現象が、皮肉に笑ひかけてゐるのであつた。融は氣持のうへで、それを素直ぐに受容れることを拒まずにはゐられなかつた。産れた生物が世間並みに一つである場合ですら、彼は自然を惡意に解釋して、一應抗議を申し立てゝ見なければ氣がすまないのであつた。しかし其は好意でも惡意でもなかつた。冷くも暖かくもなかつた。意志も目的もなかつた。それがあるといふには、餘りにも大きな自然であつた。それは悲しむべき事でも、笑ふべき事でもなかつた。靜かに頭を垂れてゐるより外仕方がなかつた。個人事として考へる場合に、融は容易く諦めることが出來ないのであつた。

假令それが二つであつたとすると！勿論それもさう不思議なことではなかつた。有り得ない事でも、有つてはならない事でもなかつた。しかし人の身の上では、そこに二重の手數が必要であつた。

「何といふ慘めなことだらう。」

融は泣くにも泣かれないやうな氣持であつた。笑ふにも笑へなかつた。餓じくても胸が痞へてゐるやうな切なさを感

じた。

とにかく放抛つておけなかつた。

しかし融はまだ半信半疑であつた。そして其から又二三日遅延した果に、帯氏に面接することにしたが、歩く氣もなかつたので、彼は途中から辻車を傭つて駆けつけた。それは六月の初めで、陽氣が遽かに夏らしくなつてゐた。町は風が吹いて、乾いた砂埃が軽く舞いあがつてゐた。

この前お冬を訪ねたときの彼女の口吻によると、叔母の良人は被服廠のやうなところへ勤めてゐるらしかつたが、二階の朝鮮人も昼間はどこかへ勤めて、夜學校を通つてゐるやうな話であつた。二階の今一つの部屋にも寄寓者が一人ゐる氣勢で、何となく陰氣な湿つぽい家であつた。融が其家を訪ねて二三日してからのことであつたが、お峰が南京蟲にさゝれたと言つて、夜中に大騒ぎをしてゐた。外に南京蟲の來る系統がないので、融は多分その家で靴足袋かツボンに附いて來たのであらうと想像してゐたので、二階へ上つても、坐らないことにして、一脚あつた椅子に、腰を浮かして掛けてゐた。今度も叔母が下の茶の間にゐたが、出て來て融にお愛想を言ふでもなかつた。お冬は下の一室を借りて、部屋代まで拂つてゐるのであつた。世帯も別のやうであつた。融は去年の夏、郊外のお冬の家へ二度尋ねて行つたが、一度は田舎から出て來たばかりの妹を紹介された。お冬より容色は劣つてゐたけれど、女學生風のスタイルで、氣風にも不檢束な處は見えなかつた。身を寄せてゐたのは矢張この叔母の家で、一日お冬のところへ遊びに來たのであつたが、ひどく歸るのを厭がつて、姉の家を懐かしがつてゐた。その女もどうしたか、姿を見せなかつたが、お冬も此處にゐるのを切ながつてゐた。着物なども此處で脱いだのではないかと、融はお冬の様子で想像してゐた。

お冬が神戸に行くとき、質入れてある着物だけは出してやる話に、融は同意しておいたのであつたが、行く前までに

約束を果すことができなかつたので、仕方なし後から送つてやつた。融は暫らく質屋とも縁が切れてゐたので、そんな場末で女の着物など請出しに行くのは、餘り感じが好くなかつた。しかも二軒にも分けて入れてあつた。金は大した額でもなかつたが、荷造りまでして郵送するのが、彼に取つては大仕事であつた。荷はその家の番頭が作つてくれた。その中にはセルのコオートだの、錦紗の袷だの、仙銘のちよい／＼着に羽二重の帯のやうなものや、品數は十幾點かあつた。融は双鬢に白髮の出た年で、夕暮の場末の町を、車でそれを運んで歩いたのであつたが、少しでも女に愛着があるなら、未だしも幾許かの滿足があつたであらうけれど、嘘にも好意の持てない今の彼女に、そんな尻拭ひをさせられることは、ばか／＼しい興醒めであつた。しかし融はそれで漸とさば／＼した氣持になつて、吻としたのであつた。

お冬は融を二階に通しておいてから、やがてお茶や煙草盆を運んで來て、入口のところに坐つて、更まつてお辭儀をしたが、着物も小ざつぱりしたセルに着替へて、髮も取上げてゐた。産後の彼女は、去年の夏初めて逢つた時よりも見直したやうで、不様な姙娠中の面影はどこにも見られなかつた。融が焦燥つてゐるのに反して、彼女は悄れつたいほど落着きはらつてゐた。

「毎度お呼立てして、すみませんでした。」お冬はにつこりともしないで言つたが、少し怒つてゐるやうに見えた。

「貴方といへば、何本手紙を出しても、ちつとも來て下さらないんですもの。隨分薄情だと思ひましたわ。」

融は女の態度が變つて來たことに心着いた。子供を産んでから、急に强味を感じてゐるのがよく判つた。

「けどそれは仕方がないよ。」

「一度くらゐ赤ん坊を見に來て下すつても可いぢやありませんか。いくら私の子だつて、そんなに冷淡になさらなくたつて……。」

「見たところで仕方がないぢやないか。己は赤ん坊を見るのは大嫌ひだから。」

「随分ひどひですわね。」お冬は仕方なし口元に微笑を浮べて、少し打釋けた調子で、「今赤ちやんを連れて來ますから、よく御覽なさい。」

「男か女か。」

「女ですけれど、近所では皆んな好い子だと言つてゐますよ。」

「とにかく早く片附（かたづ）けた方がいゝね。この前貰ひ手があるやうな話だつたね。」

「それあ無いこともないですけれど、顔を見ると矢張さうは行かないんですよ。」

「手紙には何だか綺麗なことが書いてあつたが、一體何う云ふんだね。」融はふいと自分の疑惑に觸れて行つた。

「二人目なんです。」お冬も寂しい表情をして、「お腹が、あんなに大きかつたんですもの。私驚きましたわ。それにお乳が出ないもんですからづつと牛乳を呑ましてゐるんです。お負に片一方の方は胃腸を悪くして、まだ熱がありますの。お乳を呑ますと吐いてしまひます。今日もお醫者へつれて行つたんです。」

「消化不良だね。」

融は氣が急いだ。一氣に片附けやうとした處で、融も駄目だと思つたけれど、悠々としてはゐられなかつた。

「二人でさへうんざりしてゐるのに、三人も出られちや全く遣切れない。君も足手纏いになつて何かに不自由だし、大きい子供はあれだけにしたんだから、あの子だけは育てることにして、早く放なしてしまはないと、却つて子供の不幸だ。己にした處で、そこまで責任はもてないから。」

「責任つて、何もそんなに貴方の御厄介にならうと言つてやしないぢやありませんか。けど隣所に遣るにしたところ

で、着物の一枚も着せたり、お金だつて附けなけあならないんですからね。それも二人でせう。」

「これはさうさ、己も何うかしやう。けど成るべくあれで間に合はせるやうにして貰ひたいんだ。何だ彼だといつて、相當上げてゐるから。」

「あれは皆なお産の費用に使つてしまつたんぢやありませんか。叔母にだつて借金があつたんですから、其も拂ひましたし、毎日の牛乳だつて此頃はずいぶん掛るんです。」

お冬はねんばり〳〵した口の利き方で産婆にいくら掛つたとか、着物をいくら〳〵買つたとか、そんな事を說明してゐたが、融はよく判らなかつた。

「それにしても掛りすぎると思ふ。何もそんなにする必要はない。己は自分の子だつてそんなにした事はない。手ぼつけなしに遣られちや困るんだ。」

「それだつて御自分の子ぢやありませんか」

「何うだか」融は苦笑した。

「それが疑問なんだ。」

「だつて、あの時のことは、貴方が見てゐたぢやありませんか。」

「しかし何とも判らんね。若しさうとしたら、己もよく〳〵運が悪いんだ。あの時のことは、君も覺えてゐる筈だ。」

お冬は聞きつけぬ風をして、「今弥ちやんを連れて來ます」とさう言つて、融がそれを拒むのを、聞き棄てて下へおりて行つた。

お冬は一人だけ連れて來た。そして融の目の前に差しつけた。

「さあ見てちようだい。少し抱いてごらんなさいよ。」

融は慄然（ぞつ）とした。そして見て見ぬ振をしてゐた。

「御免だよ。」

赤ん坊は餘り好いものも着てゐなかつた。ちらと見たところ手足のすんなりした處は、お冬に似てゐたが、顔は何うやら自分に肖てゐるやうにも思へた。しかしさうと斷定も出來かねた。お冬が座蒲團の上においたところで、小さな生物は鼻の邊や額に小皺を寄せて泣面をかいてゐた。融の神經には何の應へも起らないのが不思議であつた。勿論彼は赤いうちは子供が嫌ひであつた。

大分たつてから、女はまた病氣の方の赤ん坊を抱いて來て、そこに置いた。似たやうで似ないやうな顔であつたが、骨格は瓜二つであつた。病兒はうつら〳〵眠つて、忙しく呼吸をしてゐた。

融は殘忍性に似た、利己的な或るものを自分に感じた。死ぬかも知れないと思つた。しかしそんな子に限つて、死なないだらうと感じた。さうしてそんな事を考へてゐるうちに、憐愍がどこからか湧出して來るのを感じた。長く凝視してゐるに堪へなかつた。

「おい〳〵、亂暴なことをするなよ。早く下へつれておいでよ。」

女は親猫が仔猫を啣へて行くやうに、一人一人運びおろして行つた。そして暫くしてから、又上つて來た。

しかし話は出なかつた。

「私大して御迷惑かけようと言ふんぢやないぢやありませんか。月々少しづゝ戴いて、二人とも育てゝ行きたいんです。」

終いに女はそんな事を言ひ出した。融は蔽被せるやうにそれを否認した。そして近いうち、又いくらか纏まつたものを送る約束をして、そこを出た。

四

融が行かなくなつてから大分日數がたつた。彼は悉皆交渉を打切つてしまひたかつたが、寢醒が悪かつた。お冬がいつか諦つてくれるだらうと、それが氣になつた。しかし女の方からは、何とも言つて來なかつた。

或日の晩方融が外から歸つてくると、お峰が怪訝な顔をして、こんなことを報告した。

「今日妙な人が來ましたよ。社會局のものだが、一寸先生にお目にかゝりたいつて。詰襟を着て、ちよつと立派な若い人です。」

融は薄氣味が悪かつた。

「社會局だつて。」

「え、また來るさうですけれど。」

融は疑惑のうちに、その男の來るのを待つてゐたが、それきり何の事もなかつた。

すると一月ほど經つてから、或日思ひ出したやうに女の手紙が來て、お約束のものが來ないから、是非來て戴きたい。幾日迄に來てもらへないなら、此方から出向くと言ふのであつた。融はあれ以上の要求には應じられない、此方の言ふ通りにしないのだから、應じる理由もないと、葉書を出した。

お冬は期日を過ぎて大分たつてから、到頭遣つて來た。

融はちやうど來た所であつた。子供もそこに一緒にゐた。妻が出て應對してゐたが、女はいつまでもぐづ〜言つてゐた。

「そのお金は宅が拜借したと仰やるんですか。」大分たつてからお峰の言つてゐるのが此方の話の合間に聞えた。

お冬は例のべつたり〜した調子で、何か言つてゐた。

「只今留守ですから解りませんけれど、何うも可笑しいですね。宅が餘所樣にお金を拜借してゐさうなことがないんですから。一體それは如何程なんですか。」

女はまた微聲で何か言つてゐたが、奥まで聲が通らなかつた。

大分長く玄關先で押問答した揚句、女は到頭歸つて行つた。

「何だか變な人が來ましたよ。」お峰は融の顔を見ないやうにして呟いてゐた。

「何だつて。」

「この間も來た人ですけれど、貴方どこかに借金があるんですか。」

「いゝえ。」

で、話はそれきりになつた。融は何もかも浚け出すより外はないやうに思つたが、しかしお峰はそれ以上突込まうともしないのであつた。

晩飯がすんで、夜になつてから客は歸つて行つたが、もう遲かつたので、お峰は深く訊き糺す隙もなかつた。

「變なことを言つてくる女ですね。一體何です、あれは。」

「さあ。己のものでも讀んで、モデル料でもくれと言ふんぢやないか。」

「そんな風もないんですがね。今度來たならお逢ひになりますか。」
「いや、逢ふまい、面倒だから。もう來ることもないだらう。」
「いゝえ、證文でもあるんですかつて訊いたんです。さうしたら、貴方があの人の旦那と知つてゐて、少し遊びすぎたので、ちよつと言ふので御用立してから、もう三年にもなる。利息をいれて三四百圓のものだとさう言ふんですよ。」
「冗談ぢやない。」
「貴方あの人を知つてゐるんですか。」
「知らないこともない。社にゐる時分ちよい／＼行つたカフヱにゐた女だらうと思ふ。多分さうだらう。話が面白いんで、二度も材料につかつたことがある。」
「それならさうと言ひさうなもんですね。」
「極りがわるいんだらう。一體あのたくらみの上手な女はないんだから。必要もないのに、何かしら嘘を吐かないで居られないのが、あの女の病氣らしいんだ。困つてゐるんで、そんな事を言つて來たんだらう。」
「何だか變ですね。」
お絹は何處かしつくり來ないやうな様子をしてゐたが、それ以上糺さうともしないのであつた。
融は「早く何うかしなければならない」と、いつもその事が氣にかゝりながら、女が子供を持餘す時のくるのを待つより外ないやうな氣がしてゐた。此方から足を運べば運ぶだけ、女に自信が出てくることも判つてゐたが、放抛つておけばおいたで、一度道がついたからは、せつせと向ふから足を運んでくるに違ひないのであつた。
融に取つては、それは全く不可抗力であつた。

九月の或る暑い日の午后、お冬がまた遣つて來た。磯はちやうど仕事に沒頭してゐた。お峰は娘の齒治に病院へ行つた留守で家は閑寂（ひつそり）してゐた。中學へ出てゐる子供が、玄關へ出て行つたが、吩咐どほりに留守をつかつた。磯は息を殺して聽耳を立てゝゐた。

「奥さんは。」女はきいてゐたやうであつたが、直きに出て行つた。

「子供をつれた女の人です。赤ん坊を負つて。」子供は報告した。

磯はちよつと好い機會だと思つたので、少し間をおいてから、外へ出て行つた。電車通りの活動館の前で、直きに女に追着いた。女は彼を見て、はつとしたやうに汗ばんだ顔を拭きながら、何か言ひかけようとした。

「もつと先きへ行かう。」磯はさう言つて、さつさと急いだ。そして三四町も來たところで、せか／＼追つてくる彼女を待受けてゐた。

「私暑くて仕樣がないわ。此邊に料理屋か何かないでせうか。」

「あるものか。」磯は無愛想に答へて、木陰の多い横町へ入つて行つた。そして一町ほど行くと、長い黒板塀の外に石が積んであつた。磯は又そこで彼女を待受けた。

「あゝ苦しい。貴方少し抱いて頂戴よ。赤ん坊をおろすから、取つて下さい。」お冬は甘へるやうに言つた。

磯は厭々（いや〳〵）子供を卸してやつたが、其儘お冬につきつけた。

「こんなのを連れてのこ／＼遣つてこられちや實に困るんだ。來ることだけはお斷りだよ。」

「だつて貴方が來て下さらないでせう。私叔母さんにも工合が惡いんですもの。」

「君の方でちつとも約束を履行しないんぢやないか。君にその意志がなければ何度行つたつて駄目だ。」

お多は石の上へ卸した赤ん坊を、今度は紐で負はうとして袂から細紐を出して、「ちよつと手を貸して頂戴」と言ひたさうにしてゐたが、融が恐い顔をしてゐるので、仕方なし獨りで負つて、紐をかけてゐた。

「貴方の奥さん確(しつか)りものだわ」

「そのうち人をやらう。今日は相手になつてゐられないから。」

「ちやお小遣を少し頂戴よ。これから淺草へでも行つて歸るから。」

勿論融は蟇口を袂へ入れて出て來たので、默つて札を三四枚渡した。

「あら、もつと有るでせう。」

「ちよつ、それだから厭なんだ。下司だな。」融は不快さうに言つて、さつさと其處を去つてしまつた。

三

遣切れなくなつて融が三度目の最後に其の家を訪れたのは、それから少し經つてからであつた。

その時も融はいつもの二階で、片方の赤ん坊を突きつけられた。お冬はその子が容色がいゝと言つて悦んでゐたけれど、融にはちつとも可愛いとは思へなかつた。この赤ん坊は今にもつと大きくなるとお冬の期待を裏切るやうな不器量になりはしないかと思つた。

融は今度もその子が自分のものか、人のものか、明瞭な判斷を下しかねたが、これを明瞭にしやうとも思はなかつた。けれど自分のものだと證據立てるよりも、自分のものでないことを證據立てる方が、この赤ん坊の場合一層(いつそう)困難で

あつた。そして一時では女の言葉を信じても好いと思つた。けれど融には妙な猜疑があつた。片一方の赤ん坊がお冬ので、今一つの方は下にゐる叔母の腹から出たのではないかと、彼はふとさう云ふ氣がしたのであつた。無論それは理由のない邪推であつた。たゞ叔母が同時に姙娠してゐたやうに思へるのが、唯一の根據であつた。今一つは一人の方をどこか近所の人にくれてしまつたのではないかと云ふ推測であつたが、しかし子供の前途に大した責任を感じないものゝ常として、お冬が惜しがつてゐるのも事實であつた。

「いつまでも了簡がきまらないやうでは困るぢやないか。子供の始末のできるだけのものは、上げてゐるのだから、早く何とかしたら何うかね。」融はこの前と同じやうなことを繰返した。

お冬も同じことを繰返してゐるに過ぎなかつた。若し細々食べて行けるやうな商賣の資本でも、こゝで出してもらへるなら、子供は二人とも育てようと思ふが、それよりも矢張り月々出してもらつた方がいゝと主張するのであつた。

「さうすれば私みよ子は人にやつても可いと思ふ。」女はそんな事を言つた。

「それは可けない。あの子が可愛さうだ。もう六つにもなつて、何んでも解るんだから。赤ん坊は今のうちなら何うにでもなる。」融は諭した。

「それあさうだけれど、今度の子の方が悧恰だらうと思ひますわ。」

「そんな事がわかるものか。」融は笑ひに紛らせた。女の氣持には多少同情も拂へたけれど、この女につけておいたのでは、何うせ幸福な將來の持てやう筈はなかつた。そして大きくなるにつれて、子供は何かを知るやうになるであらう。きつと知らせるであらう。女はその子供の手をひいて、態度づうづうしく彼の家庭を訪れるであらう。融が死んだあとでも融の子供たちが厭な思ひをさせられるであらう。彼はそれが歴々見えるやうに思へた。

「貴方はお宅のお子さんばかり可愛がつて、私の子供のことはちつとも考へてくれないぢやありませんか。私それが腹が立つわ。」お冬は險しい顏をした。

融にもそれが問題であつた。彼の感情は、孰もの子供に平等の慈愛をもつことを許さなかつた。人類としては平等でも、自分の子供としては嚴密な差別觀があつた。それは恐く偏執であつたが超越することは許されなかつた。

「それなら寧ろ子供を引取らう。」融は眞劍に言つた。

「可けません、そんな事は……。」

「しかし子供を同じに扱ふには、それより外に方法がないぢやないか。それですら、己には不愉快なんだ。君の腹に出來た子供と……それも己のものか何うかも明瞭してゐない、そんな子供に、同質の愛のもてやうがないぢやないか。言つて見れば君のやうな女に子供を産んでもらふことは、己の意志ぢやなかつたんだから。」融は少し激して言つた。

お冬も顏を赤くした。

「それなら、月々養育代をいたゞいて、私が育てた方がいゝぢやありませんか。」

「その期限は……。」

「貴方の出來るまで。出來なければ仕方がありませんわ、無理に戚かなくても、私が何うにでも遣つて行くぢやありませんか。」お冬はいつもの甘やかしい調子でうまく引入れようとして、

「私だつてさう何時迄も貴方に心配かけませんよ。」

融はうつかり乘れないと思つた。極めが極めにならないお冬であつた。緣を繋いでおきさへすれば、何うにでもなる――それがお冬の腹であつた。それに姙娠當時から見ると、彼女の態度も大分しつかりして來てゐた。叔母夫婦が背後

未解決のままに

にゐるからだと、綏は思つた。

「ではね、二人でいくら言つたつて、纏まりつこないんだから、叔母さんの日曜日に逢はう。」

「をりませんわ。」

「ぢや叔母さんでも可い。こんなことは第三者が入らないと、到底うまく折合はないんだ。叔母さんに最初からのことを聞いてもらはう。此處へ來てもらひたまへ。」綏は主張した。その人達に逢ふのを、何となし尻氣味惡く思つたが仕方がなかつた。

お冬は仕方々々下へ下りて行つた。そして大分たつてから上つて來たが、やはり其の主張を枉げようとはしなかつた。

「ぢやね、こゝで君の方で綺麗さつぱりしてくれるんなら、もう一度金を上げよう。それなら何うにかならんこともない。」

しかしお冬はそれに乘らなかつた。そして結局喧嘩腰で綏はそこを立つた。

六

事實がお咲にすつかり知れてしまつた。

それはお冬がそれから三度も四度もやつて來たのを待つまでもなく、最初の一度で十分であつた。

或日綏が外から歸つて來ると、お咲の態度が少し變つてゐた。しかし彼女は用心深かつた。

「今日は到頭何もかも饒舌つていきましたよ。ぐちやぐちや書くしつこい女ね。私あんな調子の女大嫌ひ。」

「用介ものだもの。僕だつて嫌ひだ。」綏は胸をどきつかせながら苦笑してゐた。

「今日は赤ん坊を負つて來ましたよ。」お峰は少し目をうるませさうにして、赤くなつてゐた。

「何といつてゐた。」

「それがちつともてきはきしないんです。何だか辻褄の合はないことばかり言つてゐますから、それから夫へと問ひ詰めてやつたんですが、詰りあの子は貴方の子でせう。」

「どうだか解るものか。そんな事を言つてゐるんだ。」

「だつて貴方も承認してゐることだと言ふぢやありませんか。」

「そんな事はない。曖昧なんだ。己もよくは見ないんだ。」

「私も變だ〳〵と思つてはゐたんです。貴方はあの人にお金を送つたでせう。書留の受取があるぢやありませんか。」

融は失敗つたと思つたが、ちよつと癪にさわつた。

「送つたつて可いぢやないか。己も無意味にやつたことぢやないんだ。何うせもう煩くて爲様がないから、話すつもりではゐたんだけれど、心配かけても濟まないと思つて……。しかし斯うなれば曝け出してしまはう。」

融はそこで大體を話した。いくらか體裁を作つて。

「實際厄介な女だからな。人が惡いんぢやないんだけれど、少しも信用の出來ない女なんだ。何しろ神戸へ片付くと言つて行つたくらゐだから、最初から引かける積りでもなかつたんだらう。歸つてからも、産れないうちには、明瞭した考もなかつたらしいんで、歸つてからも、育てたいやうなことも言つてゐたけれど、まあ、手放すつもりでゐたんだ。それが段々氣が變つて來て、僕を甘く見たんだらうが、色々んな註文を持出すことになつてしまつたんだ。一つは叔母達が背後にゐるからだけれど、あの女にも叔母達に見えがあるらしい。」

「ですけれど、そんな體でお嫁に行つたんですか。」

「さう云ふ女なんだ。そこがあの女の鼻元思案なんだ。」

「それにしても可笑しいですね。月は合つてゐるんですか。」

「僕もよく覺えないけれど、八月の半頃から九月へかけて、三度訪ねてゐるからね。僕だつて好きな女ぢやないんだし、用心はしてゐたんだけれど、話を聞出すのに何うもね。だらしなく寢轉んで話をしたがる癖があるもんだから……。」

お峰は少し顔を赤くした。

「お女郎みたいね。さうでせう、あの人なら。」

お峰は出來るだけ事實を突き留めたかつた。そして成るべく其の事を理解しようとしてゐたが、やつぱり腹が立つた。

「貴方だけはそんな事はないと、今迄は思つてゐました。そんなだと外で何をしてゐるか判らない。」お峰は抑へかねた腹立しさを口へ出した。

「しかし是は災難だよ。僕はこのために長ひあひだ何のくらゐ苦しんでゐるか判らない。」

「それは解つてゐますけれど。」

「それに女が女ぢやないか。僕は實際手甲擦りぬいでゐるんだ。」

お峰は暫くすると、いつもの調子に返つた。

「それは今のうちにちやんと片をつけておかないと駄目ですよ。子供を持つてゐられたんぢや迚も敵ひませんね。抄くやうにでもなつて御覽なさい、二人の手を引いて來ては、玄關へ坐りこみますよ。」

「今のうちは遠慮してゐるがね。」

「餘りさうでもないでせう。貸しがあるなんて、ずいぶん人を莫迦にしてゐるぢやありませんか。私はあれが腹に據ない。」

「それは言つちや悪いと思つたからだらう。さういふ風に言つておいたら、お金を出すのに己の都合がいゝとでも思つたんだらう。」

「だつて人の家へ來て、餘り私を莫迦にしてゐるぢやありませんか。私今度來たら、少し遣りこめてやりますよ。」

「いや、そんな悪い女ぢやない。いつそ悪ければ始末がいゝ。」

「あれぢやね。」

夜の更けるのもしらずに、二人でひそ〲話してゐた。融はいくらか苛が輕くなつたが、お峰がどこか殺氣だつてゐるのを、不安に感じた。

「もう止しませう。子供が何だと思ふでせうから。」

お峰はさう言つて、融の傍を離れた。

「あゝ、詰らない。私明日どこかへ行つてこよう。」お峰は立ち際に、子供のやうな調子で言つて空虚な笑方をした。

融は默つてゐた。

お峰はやがて賴りなささうに、そつちの方に延べた寢床へ入つた。別に寢室とてもなかつた。二つの床が、狹苦しいそこに並んでゐた。お峰は、後ろ髪を見せて枕に就いた。

融は吻とした氣持になつた。そして煙草をふかしたから、何時までも机に向つてゐた。」

すると眠つたと思つたお峰が、ふいに身動きをした。そして兩手を重ねた上に顔を突伏したまゝしばらくじつとしてゐた。そして彼がふいと氣づいて見ると、頸から肩のあたりが、わな〱顫えてゐた。

融は驚いた。

「何うしたんだ。」

「何うもしやしませんけれど……。」お峰は答へたが、鼻が塞つたやうになつてゐた。

「鼻が悪いの。」

「いゝえ。」さう言つて彼女は彼方へ向き直つた。

少し時間がたつた。お峰はいきなり此方を向いた。

「何だか腹が立つて仕樣がない。貴方の顔を見るのも厭になつてしまつた。」お峰はさう言つて、袂で涙を拭いてゐた。

「おや見なければ可いぢやないか。」融はすかすやうに言つた。

「私貴方だけはそんな事はないと思つてゐた。」お峰は濡れた顔に、寂しい嘲笑を浮べた。

「まだそんな事を言つてるのかい。仕樣がないな」融は舌打ちした。

「わたし何うしても我慢できない」お峰は泣聲で言つた。そして起上つて枕をそこへ投げつけた。

融はそんなにまで荒びたお峰を見たことがなかつたが、そんな氣質に衝突かつたこともなかつた。

「あれ程言つてゐるのに、解つてくれないんだね。」

「貴方のお話はよく解つてゐます。困つていらつしやることも解つてゐます。でもさうは思へないんです。何も彼も歴々目に見えて仕方がないんです。」

「少し靜かにしてくれ。」融はさう言つて、彼女を宥めにかゝつた。

七

お峰に極めつけられてから、お冬は來ることを控へるやうになつた。

お峰がどんな風に極めつけたかは、融には解らなかつた。しかしそれまで頻く遊つて來ては、融に逢ふことを要求してゐたお冬の足が、とにかく遠退いた。

しかし矢張りやつて來た。融が外から歸つて門を開けて入ると、格子戸のなかに子供を負つた女が立つてゐたりした。

融はそのまゝ裏口へまはつて、長い時間のあひだ、庭に立つてゐた。

「ちよつと上がらせて貰ひます。」女はさう言つて、上りさうにした。

お峰は出るのを厭がつて、誰かに出てもらふ事にしてゐた。

融もお峰も氣が氣でなかつた。時々方法を講じても見たが、好い智慧が出なかつた。

「私行つて話をつけて來ませう。」お峰は言つてゐた。

融は何うかすると、お峰が本當に行くだらうかと思つた。しかし矢張り躊躇してゐた。

「子供をもたれてゐると、何うしても此方が負けですから。何うにかして此方へ取れるといゝんですけれど。子供さへ取つてしまへば、安心ですよ。」

或時はまたお峰はそれを思ひ詰めてゐるのであつた。

「けど甘く取りあげたにしても。後が面倒でね。家におく譯には行かないし、人にくれるにしてもなか〱手がかゝ

る。何よりも見るのが厭なんだ。」

「でも可哀相だと思ふでせう。」

「それだと多少苦んでも可いと思ふけれど、何んの感じもないから困るんだ。」

「子供は似てゐるんですか。」

「それも能く見ない。似てゐるといへば、似てゐるやうな氣もするが……。」融は首を捻つてゐた。

あの前後の女の態度や口吻を惡意に解すれば、そこに何等かのトリツクが彼を待受けてゐたやうにも思へるのであつた。

「しかし第三回目の時……第二回目に逢つてから、少し日數がたつてゐたと思ふが、多分九月へ入つてからだらう、その時月例がないなんてことを言つてゐた。僕もをかしいと思つたけれど、しかし女が他の男に關係があつて、その時姙娠を感づいてゐて、僕に押しつけやうとして、さう言つたものとするのは、僕のものである場合と同樣、一月では少し早過ぎるからね。」融は當事者でなくては迚も判りさうもない事實の細かい說明を試みやうとした。

「何とも解りませんよ。」お峰は腑におちない顏をしてゐた。

「よく解るぢやないか。」融はさう言つて、牾かしさうに又た同じことを繰返して說明した。お峰を待つまでもなく、實は彼自身それを否定するに足る何等かの證迹を探したくてならなかつた。子供に愛着がないと言つても、あの二人の子供が、お冬と運命を共にして、どこか其處いらを流轉して歩くであらう姿を想像すると、餘り好い氣持はしないのであつた。お冬がもつてゐれば未だしもだが、それも何うなることか判らなかつた。あんな子が、人買ひの手に渡されて、辛い綱渡りをさせられたり、乞食に傭はれて大道の曝しものにされるのではないかと、彼はそんな詰らない事まで思つ

て見たりした。勿論それは其の子に限つたことでもなかつた。現在の自分の子供について、彼はもつと／＼深刻な悩みを悩み通して來たのであつた。それにお峰の子が幸福か、お多い子が幸福か、誰れがそれを決めることが出來やう。そんな事を考へた日には、際限がなかつた。人間の感じ考へ得る範圍が何れほどのものでもないのであつた。

しかしさう何も彼も背負つては、融も生きることが出來なかつた。自我がさう分裂したのでは、實際遣切れないと思つた。

「あの子供たちは、あの子供たちで自分の運命をもつてあらう。」融はさう思つて、耐へ忍ぶより外なかつた。でも出來ることなら、その子供が自分の所因でない證據を摑んでおけば、尚更ら助かるのであつた。お峰の前で、これを肯定しようとしてゐる彼の氣持が、それであつた。

「私が見ればきつと判ると思ひますよ。」お峰は自信ありさうに言つた。

勿論融にも解らないことはなかつた。たゞさう思ひたくないだけであつた。

「しかし貴方も飛んだところへ飛込んだものですね。」お峰の口から又愚痴が出た。

とにかく融は友人のS――氏にそれを持込んで行くことにした。そして或晩S――氏を訪問した。

この事がS――氏の手に一切を委かされることになつてから、大分月日が經つた。

初め融が若いS――氏の前に、珍奇なこの事實を告白した時、S――氏は直ぐ法律的形式に當てはめて、取るべき手段を講じようとした。

「何か女から金を請求して來た手紙とか、金の受取とか、さう言つたやうなものが、手許にありますか。」S――氏はい

きなり證據品の有無について尋ねた。

「最近のものなら、幾通かある筈です。金の請取といつちやありませんが、郵便局の爲替の受取でしたら。」

「とにかく明日行つて逢つてみませう。子供を此方へよこせちて、取占めてみるか、何か反證を擧げて、子供を否認してしまふんです。貴方は別にその女を世話してゐた譯ぢやないんで、たゞ偶然逢つたといふだけで、しかもさう云ふ女なら、何をしてゐたか判らないんだから、承認しないといへば、それまでぢやないですか。」

融は成程と思つたが、それだけでは安心ができなかつた。

「さあ、しかし反證を擧げることができるか何うか……。」

「いや、しかし警察の方で、その當時の女の行動や、周圍の事情を調査すれば、何か出てくるですよ。それにはちやうど好いことがあるんです。A—君の知つてゐる、K—君が、今度あすこの分署へ轉任になりましたから、仕事は爲易いんです。」S—氏は樂觀的に言ふのであつた。

「何よりも女に遣つて來られるのが遣切れないんですが……。」

「そいつは脅迫ですから、次第によつては××署のT—君にでも話して、警察の手に引渡してしまふんです。今度來たら、私に委してあるからちて、取合はないことにしておくですね。」そしてS—氏は男女關係の色々の事件について、話したりした。東京にゐる外國人と或る有名な日本の歌劇女優との事件などにも、S—氏は直接關係してゐた。

S—氏は翌日女に逢つてから、直ぐ××分署へその事件を持込んで行つた。その頃ちようど女から來た、長い手紙が外の手紙と一緒に、S—氏の手から警察へ提供されたりした。長い其の手紙では、女はもう月々扶助を受けるものと自分決めに決めて、幾月かの滯りを請求して來たのであつた。

「やつぱり何かあつたさうですよ。」
或る日お峰は、S—氏のところから歸つてくると、融を極めつけやうに言つた。
「警察で探つた結果、確かに外に男があつたことが判つたさうですよ。」
「さうか。」融も吻とした氣持になつて、
「それだと大變助かるな。」
「何うして貴方があんな女に引掛かつたんだらうつて、皆なさう言つてゐるさうですよ。貴方はもう絶對にあすこへ足踏みしては可けないんですよ。行けばまた因緣がつくさうですから。」
「困るな。已にそんな興味があると思つてゐるのかな。その男といふのは何んだらう。」融は確めた。
「何だか詰らない男ださうです。いづれ碌なものぢやないでせう。」
融はしかし、お峰の口吻で、其の子供を否定させやうとして、皆んなに脅かされてゐるのを直感した。その男の存在が疑はしくなつて來ると同時に、否定説の根據が、また危くなつて來るのに、不安を感じた。
「已はさう云ふ男と關係してゐたことが判れば、大助かりなんだ。しかしそれにしたところで、その子供が已のものでないといふことは、斷言できないではないか。」融はその事が、もつとメスで切開したやうに、明瞭にならないのに苛立ちたから、詰じるやうに言ふのであつた。
しかしお峰にはその氣持がよく解らなかつた。
「けど、あれを自分の子だと思つてゐるのは、貴方が人が好いからだと、S——さんも言つてゐますよ。」
「笑談ぢやない。まるで違ふ。」融は少しじれ〳〵して來た。

「あの女にしたところで、僕に迷惑かけまいと思つて、神戸へ行つたくらゐなんだからね。己にその子供を自分のものとは、思ひたくはない。しかしさうでないと云ふことを、誰が何うして決めてくれるんだ。」

「けれどさう云ふ男もあるのに、貴方のものと決めてしまふ必要もないぢやありませんか。」

「必要はないさ。しかし己の氣持ではもつと分明したいことが知つておく必要があるんだ。お前なぞは、初めから女を惡いものと決めてかゝつて、そこから出發しやうとしてゐるんだけれど、己にはさうは思へない。それはだらしのない女だとは言へるけれど、惡い女だとも言つてしまへない處もある。」

「けど嘘は吐くでせう。」

「嘘を吐くのは平氣さ。それだからと言つて、あの女に人間らしいところが、少しもないとは言へないんだ。あの女だつて、人並みに生きなければならんのだ。それは己があの女を好いてゐるとか、好いてゐないとか言ふこととは全然別問題だよ。」 融は體までが引締つて來るのを感じながら、苛々して言つた。

お峰は解るやうで解らなかつた。融も強いて解らせようともしなかつた。

「それで何うなんだらう。此間S—君に渡した金は、一體何うなるんだらう。」

「ですから、あれはあの女か、叔母さんの添合かを呼出して、示談が成立つたとき、警察から渡してくれる筈になつてゐるんださうですけれど、何うしても出てこないので、手のつけやうがなくて困つてるんださうです。」お峰は氣がかしさうに言つた。

融はこの事件がS—氏に引渡されてから、もう可なり長い時日を、煮え切らない氣持で悩んでゐた。S—氏の時々の報告で、うまく行きさうにも思へたが、S—氏の樂觀してゐるやうに警察に頼つてはかりゐられないやうにも思へた。

するうち暮れが近づいて來た。

或る寒い夜、Ｓ―氏が慌忙しくやつて來た。

「Ａ―君と一緒に、これからちよつとＫ―君ところへ御同行しやうと思ひます。貴方にもＫ―君に逢つて話をしてもらつておけば、此方の心證が好くなるからちて、Ａ―君が今通りに待つてゐますから。」

Ａ―君はＳ―氏の友人で、辯護士であつた。

「警察ですか。」

「いゝや自宅です。」

融は急いでＳ―氏に同行した。通へ出ると、そこの自動車のなかに、いつも口數を利かないＡ―氏が坐つてゐた。

「お寒いところを何うも……。」融はその横に腰かけて、挨拶した。

濛霧の深い靜かな宵であつた。事件がから外延的になつて來ると、融自身の氣持も圏外から眺めてゐるやうな風になつてしまつたのを感じた。皆んなと一緒に、ビヂネスとして其を取扱つてゐるに過ぎないやうに思へた。彼は神經衰弱にかゝつてゐた。この事件でいくらか酬はれたことは、お峰の愛が新らしくされたといふ事くらゐであつた。彼女をほんとうに發見したことは、しかし融に取つては思ひがけない悦びであつた。今まで彼は彼女を侮蔑しすぎたのを感じた。お峰にいくらか狼狽の色のあつたことは爭へなかつたけれど、それを一概に利己的だと言つてしまへなかつた。お峰は融より外に頼るものゝないことを、年と共にしみ／＼感じさせられてゐた。

Ｋ―氏の自宅を探しあてるまでに、三人は自動車を乗りすてゝから、大分その邊のごちや／＼した所をうろつかなければならなかつた。「警視廳警視。」嚴めしい標札が名札と共に、そこに明かるい門燈に、はつきり讀まれた。

K－氏は風邪で臥せつてゐたのを、わざ〳〵起きて、三人を引見してくれた。

「一つ此方の心證を好くしておきたいと思ひまして、今夜同行した譯ですが……。」A－氏が口を切つた。

「いや、この間から當人の叔母の亭主といふのを召喚してゐるのですが、何うもやつて來ない。こちらとしては强要することは出來ないので、實はちよつと……。」K－氏は言つたが、融に向つて、

「あれは何をしてゐた女ですか。」

「以前カフエーにゐたのです。その頃は普通の女で、善良とはいへませんが、まあ浮氣であつたといふくらいでせう。その後ずゐぶん方々流轉してあるいたので、惡くなつたやうです。暗い生活がつゞいたやうです。またさう云ふ風なたなのです。浪費家で、嘘吐きなんですが……。」融は女を惡く言つてゐる自分に氣づいて、恥かしく思つた。

「女は貴方の子だと言つてるさうですが、それは何うなんですか。」

融は途中A－氏とS－氏から敎へられてゐたことがあつた。それは子供のできる所因が、自分にないことをK－氏の前に明言しておくことであつた。彼はそこまで告白するのが、ひどく感じが惡かつた。

「たゞ向合つて坐つてゐたのでは、どうも話が引出せないので……しかし其の豫防はしてゐたのです。」融は言つてしまつたが、餘り好い氣持がしなかつた。

「それぢや貴方は、こゝのところで、女が切れてしまふと言へば、幾許か纏まつた金を出してやらうといふ心持はおありなので。」

「無論それはその積りで……何しろせつせと遣つてこられるので、絕えず脅やかされるやうな氣持で實際遣切れませんのです。」

「何とか一つ穏やかに說諭してみませう、さう云ふ女を順良に導くのが尤も望ましいことで、犯罪を檢擧することのみが目的ぢやないんですから。」

そしてK―氏は、或る若い作家の名をあげて、知つてゐるか何うかを融に訊いたりした。

「あれは私も以前少し面倒を見たことがあるんで。」K―氏は言つて、「

「酒好きで、なか〳〵面白い人間のやうですな。」

融はちよつと面喰つた。

「あれは何うして……しかしちよつと參つたな。」

「いや、大丈夫です。」K――氏も笑つた。

三人はそこを出てから、電車通りで或るカフヱを訪づれた。融は咽喉が乾いて仕方がなかつた。

「どう云ふ工合でしたか。」

家へ歸るとお峰がきいた。

「何だか餘り緊親もできないやうだ。男があるとかいふことも、別に言つてはゐない。」融は飽足りなさうに言つた。

「それに女が別に惡いことをしたといふんぢやないんだから、警察權でもつて、無暗に壓迫するて譯にも行かんだらう。」

「それやさうでせうね。」お峰も浮かない顏をしてゐた。

「しかし餘り考へないことにしようと思ふ。考へたつて同じことだ。」

融はいつになつたら、晴々した氣分になれるかと、牾かしく思つたが、二度出來たことが、たとひ其が時の力で、い

つかは知らず自然のなかへ溶けこんでしまふにしても、數學の答案のやうに、さう分明した解決が根本的につく筈もないことに心づいてゐた。時が彼の疵を少しづゝ癒してくれるだけであつた。それで十分であつた。

或日またS――氏がやつて來た。

「到頭女が××署へ出たさうですよ。」S――氏は興味ありげに言ふのであつた。

「あのぺちやくした調子でもつて、大いに辯じて行つたさうです。それなら共でいゝから、金なんか一文だつていらないつて、いくら言つても持つて行かんさうです。」

そして、

「まあ仕方がないでせう。今にへこたれて來るのを待つとしませう。しかし此方へ來るやうな事は、絶對にありません。若しそんな事があつたら、××分署へ、ちよつと電話をかければ、來てくれることになつてゐますから。」

「それさへなければね。」お峰も安心したやうに言つた。

「それに今頃はもう男を拵へてゐる時分ですよ。」

融はそれと、あの社會局だといつて來た、不思議な男とを結びつけて考へたりした。

「しかし子供は育てるさうですよ。」S――氏は附加へた。

融は全く敗亡してしまつた。事實の裏書をされてしまつたやうに感じた。

女はそれから足踏みもしなかつた。手紙も寄越さなかつた。

三年四年と月日がたつた。そして恐ろしい地震が見舞つて來た。融は一切の證文も、燒けてしまつたらうと思つた。



なさけ

久保田万太郎

登場人物

内田友吉。　袋物問屋の主人。
みち子。　友吉の妻。
きの。　友吉の母。
岸本亮一。　岸本商店主。
久美子。　亮一の妻。（友吉の長女）
和夫。　亮一の長男。
しん。　女中。
三隅善吉
よし。
ゆき。　よしの娘。
越智平藏。　下職（縫進者）

長谷朔太郎。店員（避難者）
佃　嘉　平。支配人。
岩　　吉。植木職。
し　　づ。女中。
杵屋たき。長唄の師匠。（避難者）
古谷和介。
祖父江三五郎。下職（避難者）
　外に、醫者、自警團員、内田商店員大ぜい。女中大ぜい。

□

時。大正十二年九月。（大地震のあと）

□

所。東京。――本郷駒込内田商店控宅。

その一

門内。（廣い前庭の一部）手入のよくとゞいた花壇のあひだに應接間からでも持つて來たらしい椅子のほか、涼み臺だの、はり板

をわたした⦅あ⦆ごしらへの腰かけだのが矢野にいろ〳〵拡いてある。——六七人の店員たちがめい〳〵ざつた拵へごもの〳〵しく人の出入を警戒してゐる。

九月五日。——「地震」のあとの騒ぎのいろ〳〵まだ渦巻いてゐる最中。——雲の低い日で、日が照つたり陰つたりしてゐる。（下手三四時ごろ）

強い残暑。——遠く、さびしく、蟬がないてゐる。

店員の一。（とんで來て報告する）小傳馬町さんがみえた。小傳馬町さんが……

「小傳馬町さん？」——とゐ合はすものみんな彈かれたやうに立上る。——そのたゞ店員の一は玄關のはうへ去る。——店員の二、三、四、門のはうへ行く。

間。

門のはうから、焼け出されの亮一をさきに、久美子、岩吉に抱かれた和夫、おしん、店員の二、三、四、そのあとにつゞいて出て來る。——玄關のはうから、嘉平、おたき、おしづ、店員の一と一しよに急いで出て來る。

おたき。（みるより久美子に）奥さん……（駈けて手をとる）

久美子。まア、おたきさん……

おたき。でも、まア、御無事で……

久美子。有難う。——あなたも……

そのまゝ二人とも無言。——おたき、泪を拭く。

嘉平。（亮一へ言葉ずくなに）どうぞ……

亮一。（快活に）おばアさんは？

嘉平。あちらにおいでゞございます。――さきほどからお待ち兼ねで……

亮一。何しろ神川橋がとほれないんでね。――大廻りにまはつたもんだから……

嘉平。…………

亮一。でも、助かつたよ、岩さんが來てくれて。――うちの店の奴たちは、もう、今日はみんなへと〳〵になつてゐる。……

嘉平。さうでございませうとも。……

おたき、おしづ、久美子と和夫をいたはりながら、亮一、嘉平とともゞ玄關のはうへ去る。――店員たち、始めにその人たちをみ送つて立つ。――顔をみ合せて無言。

門のはうから在郷軍人の制服を着た自警團員、二三人どや〳〵と出て來る。

自警團員の一。（上ずつた擧止でいきなり）あのう……

店員の二。（腰をかけたばかりのをすぐまた立つて）御苦勞さま。……

自警團員の一。本部からの命令で一丁目の角の人數をもつとふやすことになりました。――一人でも二人でもよろしい。――仕度をしてすぐにお出張下さい。

店員の二。一丁目の角といふと？

自警團員の一。電車通りの葉茶屋の角です。

店員の二。あゝあすこですか。……

自警團員の二。あすこは十字路になつてゐるだけ甚だ危険です。――いざといふときあすこで喰ひとめないかぎり……

店員の三。（側から）さうだ、あすこの網の目をくゞられたらことだ。……

自警團員の一。一昨日の晩から昨日にかけて暴徒の主力は大てい掃蕩したと警察ではいつてゐます。――が、まだ安心は出來ません。――まだどころぢアない　主力を失つてかへつて下ッ端の奴たちがどんなことをするか分らない。…

店員の三。　自棄になつてね……

自警團員の一。（うなづく）さうです　自棄になつて。――げんに、今朝の、富士前町と肴町と二タところから出た火も放火のうたがひが歴然としてあります。――中里の植木屋の井戸へ避難民のやうな顔をして水をもらひに立廻つた奴の、風態がどうも可笑しいと思つて取ッ摑へてみると此奴。――案の定さうです。……

店員の三。入れたんですか　毒を……？

自警團員の一。いゝ鹽梅に　まア　それだけは未然にふせぐことが出來ました。

店員の三。持つてゐたことは持つてゐたんですか、毒を？

自警團員の二。持つてゐたさうです。

店員の一。白い粉ですつてね、その毒……

門のはうから、朔太郎、藤吉と一しよに、門のそとで下りたところの自轉車を引っ張つて出て來る。――二人のその自轉車のうへにはいろ〳〵買ひあつめて來たものがつんである。

朔太郎。（元氣よく）たゞいま……

店員の二。あゝ、おかへり……

店員の三。おかへり……

　　外の店員たちも、とも〴〵、ねぎらふやうにさういふ。……

店員の二。熱かつたでせう、遠くまで……

朔太郎。熱いよりも久しぶりに自轉車にのつたら勝手がうまくつかないで……(わらふ)

自轉團員の一。(それを横合に)ぢやア、一つ、おたのみします。(かへりかける)

店員の一。すぐに上げます。――おつれたすつて下さい。(店員の五、六に合圖する)おい、君たち……

店員の五。┐
店員の六。┘……………(うなづいて立つ)

店員の二。いゝ時分に、誰か、かはりをやるから……

　　店員の五、六、自轉團員と一しよに出て行く。

朔太郎。(店員の二に)何だい?――何か出來たのかい?

店員の二。一丁目の角の要害に人數をふやすといふんです。

朔太郎。本郷の大通りのはうもたいへんだ。――横町なんかで、まるで、繩を張つてとほさないところなんかある。―

―(藤吉に)ねえ……

藤吉。あれは、うろんとみられて返事のしようでも惡かつたらすぐに叩きのめされますね。――みるから凄い……

店員の二。氣が立つてゐますからね。とにかく……

朔太郎。尤も、昨夜（ゆうべ）、巣鴨のはうから來た怪しい風體（ふうてい）の奴が赤門のまへの寺へ逃込んだつきり出て來ない。――搜らさがしても分らない。――たしかに、其奴、爆彈を持つてゐたといふので、あの近所では、昨夜（ゆうべ）、夜のあけるまでどこのうちでもまんじりともしなかつた。――青木堂で買ひものをしてゐるとき、側で、自警團の人が巡兵に話をしてゐた。――そんなことでよけい神經が强くなつてゐる。……

藤吉。あゝ、そんなことを話してゐたんですか、あすこで？

朔太郎。あゝ。

藤吉。道理で、みんな、夢中になつて聞いてゐると思つた。

店員の三。で、掴まつたんですか、其奴……？

朔太郎。掴まらないらしい。……

店員の一。どうしたんでせう？――どこへ逃げたんでせう？

朔太郎。緣の下にでもかくれてゐるんぢやアないかといつてゐた。

店員の三。だけど爆彈をもつてゐるんぢやアうつかりしたことは出來ませんね。

朔太郎。だから。――だから騷いでゐる……

（藤吉、この間に自轉車につけた買ひものをみんな下ろす。）

藤吉。（朔太郎に）これ、臺所へ持つて行くんでせうか？

朔太郎。あゝ、わたしがいま持つて行く……

藤吉。いゝえ、持つて行きますよ。――わけアありません。

朔太郎。なら、御隠居さんに一度おみせして……

藤吉。ぢやアお座敷のはうへ持つて行きませう。

藤吉、店員の一と一しよにそれを玄關のはうへ運ぶ。

店員の二。青木堂はもう店をあけてゐるんですか？

朔太郎。（椅子に腰を下ろしながら）ほんたうにはあけやアしない。――戸をまだ下ろしたまんまさ……（店員の三に）松どん、水はないかしら？

店員の四。（そばから引取つて）持つて來て上げませう。（花壇のうしろのはうへ驅けだす）

店員の二。戸を下ろしたまんまで商ひをしてゐるんですか？

朔太郎。（うなづいて）くゞりを、ほんの、申譯だけにあけてね。――でも、店のまへは、押合ひへし合ひ。――一ぱいの人だ。……

店員の一。さうでせうね。――どこでもかう不自由し切つてゐるんだから……

店員の三。それで何でもあるんですか、いつものやうに？

朔太郎。何でもと行かない。――葡萄酒だのビスケットだの罐詰だの。――罐詰だつて牛なんかのは賣切だ。――臺所でいひつかつて行つたものは何にもなかつた。……

店員の三。どうしたんでせう？――そんなに早く賣れてしまつたんでせうか？

朔太郎。暗くつてよくは分らなかつたけれど、みたところぢやア棚はもうガラ〳〵だつた。

店員の三。ガラ〳〵？

店員の一。（窓に）かくしてゐるんですよ、それは。——さうですよ、必と……

店員の三。さうかしら？

店員の一。さうだよ。——さうに違ひないよ。——それでなくつて幾ら何だつてそんなに早く賣れるわけがない。

店員の三。さういへばさうだ。——昨日とほつたときには、まだ、商賣をしてゐなかつたんだから……

朔太郎。疑へばそれは疑へる。——そこに並んでゐるものが、みんな、平常あんまり賣れさうもないやうなものばツかりだ。……

店員の二。そら御覧なさい。

店員の四、コップに水をくんでかへつて來る。

店員の四。へえ、水。……

朔太郎。有難う。（うけとつて、半分ほど一ト呼吸にのむ）——あゝ、うまい……

店員の二。井戸の水は冷めたいから……

店員の三。だから、つい、のむまいと思つても飲んでしまつていけない。——みす／＼毒と思ひながら……

朔太郎。大丈夫さ、幾らのんだつて。——こんな、君、水晶のやうな水。——泥溝の水で一日一ト晩いのちをつないだことを思つたら勿體なくつて泪がこぼれる。……（殘つた水をまた一ト呼吸に飲ほす）

店員の四。もう一ぱい持つて來ませうか？

朔太郎。さうだね。——ぢやア、すまない、もう一つ……

店員の四、コップをうけとつてすぐまた駈けだす。——その時玄關のはうから、嘉平、出て來る。

嘉平。御苦勞だつた。朔さん……

朔太郎。あゝ、たゞいま……（いそいで立上る）

嘉平。大へんだつたらう？

朔太郎。いゝえ。――いまあちらへ上ります。

嘉平。まア。いゝ。――ゆつくり、まア、休み給へ。――（店員の二に）あの、自轉車空いてゐるだらうね？

店員の二。空いてをります。

嘉平。小傳馬町の旦那がいま乘つておかへりになる。――こつちへ出して置いてくれ。

店員の二、三、とも〴〵立つ。

朔太郎。わたしのいま乘つたのは齒止めが毀れてゐる。――藤どんの乘つたはうがいゝ……

店員の二。あゝ、さうですか？（店員の三と一しよに自轉車をわきへ持ち出して工合をみたりする）

亮一出て來る

亮一。（まへのやうにやつぱり快活）どうした。長谷……

朔太郎。（慇懃に頭を下げる）どうも、このたびは……

亮一。（わらつて）おたがひだよ。――だが、お前は、ほんたうにとんだ命拾ひをしたな。

朔太郎。へえ。

亮一。あつちで、いま、おばアさんに聞いた。――被服廠へ入つたといふぢやアないか。

朔太郎。へえ。（さびしくわらふ）

亮一。それで、まア、どうして助かつた？——あすこへ入つて助かつたものは百人に一人……

店員の二。いゝえ、千人に一人だつていひます。

亮一。さうか。千人に一人か。——何でもそんなこつたといふぢやアないか？——それは、まア、さんざくな態のとこなら分つてゐる。——半年も、これ、寝たつきりになつてゐた病人。——始終、で、いま以て醫者の厄介になり、藥浸しにばかりなつてゐる病人。——いつちやア悪いが、そんな病人が、どんなうまい表裏に行つたつて、怪我一つしないで助かるつてわけがない。——さう思はないか、お前……

朔太郎。（わらつて顔を上げる）自分でも、それはさう思ひます。——足腰の達者な伯父や伯母に間違ひがあつて、わたくしに……

亮一。（聞きとがめて）伯父さんや伯母さんには……？

朔太郎。へえ。——わたくしの側に。——わたくしと同じ場所にをつたんでございますが……

亮一。やられたのかい？

朔太郎。へえ。

亮一。それは知らなかつた。——さうかい、まア……

朔太郎。…………

亮一。伯父さんや伯母さんと一しよに、何かい、お前逃げたのかい？

朔太郎。實は、六月の末からお暇をいたゞいて、房州の江見へ、わたくし、ずつとまゐつてをりました。……

亮一あゝ、どこかへ轉地をしてゐるつてことは聞いた。——江見へ行つてゐたのかい？

朔太郎。へえ。――で、先月の晦日にかへつてまゐりました。――荷物を少し持つてをりましたんで、兩國へ着きますと、すぐ、伯父のところへ俥に行つてもらひました。――綠町でございますから、停車場から、十分とかゝりません。

亮一。伯父さんは商賣は？

朔太郎。大工をしてをりました。

亮一。大工さんを？――それは知らなかつた。

朔太郎。無理をしないがいゝ、今日は疲れてゐるだらうからゆつくり休んだはうがいゝ。――伯父がさういつてくれましたんで。――ちやうど、伯父は、仕事の都合で早くかへつて來てをりました。――その日はどこへも出ずに伯父のうちにをりました。――で、泊つて、朝、眼をさますと雨がふつてをります。……

亮一。ふむ……

朔太郎。お天氣の悪いのはこまつたと思ひながら、起きて、御飯をたべてをりますと、伯母が、お朔日だからそこまでお詣りに行つて來る――。すぐかへつて來るからたのむ。――さう云つて出てまゐりました。――仕方なくぼんやり、留守番をしながら、新聞を讀んだり、江見で世話になつた人たちのところへ禮狀を書いたりしてをりました。――でも、伯母はなか〳〵かへつてまいりません。――何をしてゐるんだらうと思つて。――さう思つて簞笥のうへの時計をみに立ちました。――と、その途端……

亮一。ぐら〳〵ツと來たか……？

朔太郎。へえ。――時計のそばに文庫だと何だのと一しよに置いてあつた人形。――硝子の箱に入つた人形が急に眼の

前へ。――がら〳〵ッと、かう――くづれるやうにもろに……

亮一。ふむ……

朔太郎。逃げようと思ふと疊が波をうつてみえました。――足をすくはれて、わたくし、そこへ抛り出されました。――やつとの思ひで外へ出ると、角（かど）の、質屋の土藏（くら）がつぶれてをりました。……

亮一。…………

朔太郎。一人で途方にくれてゐるところへ、近所の仕事に行つてゐた伯父が歸つて來てくれました。――まア安心。――と思ふと今度は火事。――隣町から出た火がどん〳〵こつちへ燃えてまゐりました。

嘉平。（側から亮一に）本所のあのへんは特べつ火が早かつたらしいのでございます。……

亮一。さうだつたらしいね。――（すぐ、また、朔太郎に）で、すぐに、被服廠へ逃げたのかい？

朔太郎。へえ。――被服廠へ行かう。――あすこへ行くのが一番安心だ。――伯父も伯母もさう申したんでございます。

亮一。…………

朔太郎。あとで、これは、聞いたんでございますけれど、あすこいら近所では、どんな火事があつたつてこゝいらは大丈夫だ、被服廠といふ逃げ場があるから。――平常（ふだん）からどこでもさういつてをりましたんださうでございます。……

亮一。…………

嘉平。（側から、また）此方（こちら）はさうとは知りません。――江見にまだをるものとばかり思ひましたから、そこが陥沒いた

したと聞いて……

亮一。（遮ぎるやうに）陷沒？

嘉平。へえ。

亮一。そんなことがあるのか？

嘉平。御存じではございませんか？

亮一。知らない。——いつのこつた？

嘉平。いゝえ、一日に。——地震と一しよに……

亮一。どんな風に？

嘉平。いゝえ、それが、くはしいことは分らないでございますが、風說によりますと、江見全村がそつくりそのままに海の底になつてしまつたといふのでございます。

亮一。ぢやア助かつたものはないだらう？

嘉平。さうなつたのでは逃げるセキがございますまい。……

亮一。（ふとしみ〴〵）……さうかい？——丸の内に逃げてゐたんぢやアまるつきり何にも分らない。

（その少しまへに再び水をもつてかへつて來た店員の四、このとりやりの間に、朔太郞のそばへコップを持つて行く。——朔太郞うけとつてそのまゝわきへ置く）

朔太郞。晦日の日、停車場へ着いてすぐかへつたといふ電話だけでもおかけすればよかつたんですが。……氣のつかないことをして、みなさんに、とんだ御心配をかけました。

嘉平。しかし伯父さんところへかへつてゐることが分つてゐて、それでゐて三日まで消息がなかつたら、これこそ、みんな、どんなに心配したか知れやアしない。

亮一。(朔太郎の顔をみて)と、何だね、君はつまり二重に命拾ひをしたわけなんだね？

朔太郎。二重……？

亮一。さうぢやアないか、明日にもしこつちへかへつて來なかつたら江見で死んでゐるんぢやアないか。――一日のところでそれが助かつた。――被服廠へ入つてほんたうなら死んだんぢやアないか。――それが、また。――そこでまた助かつた。……

朔太郎。へえ、それは。――それはもうさうでございます。

亮一。(かぶせて)さうだらう。

朔太郎。……それに。――わたくしにいたすと、もう一つ。――もう一つ、わたくし、命拾ひをいたしました。

亮一。もう一つ……？

朔太郎。へえ。――今度のこの騒ぎで、わたくし。――體が、わたくし、以前どほりになりました。

亮一。以前どほりに？――どうして……？

朔太郎。被服廠を出てから、また、火に追はれ〳〵、砂村まで逃げました。――砂村から、また、市川まで逃げました。――さうして、三日の日の夕方、やうやくのことにこちらまでまゐりました。……その間、市川の百姓家でお握りを一つもらつて喰べただけ、あとは、いまも申したんですが、一日一ト晩、泥溝の水を飲んでそれこそ。――それこそ、わたくし、命をつなぎました。……(わらふ)

亮一。ふむ……。

朔太郎。日には照りつけられます。――夜露にはうたれます。――疲れて往來ツ端にも倦れば田圃の中にもやすみました。――いろんな無理なことをいたしました。――でも。――色んなそんな無理をいたしても何のこともございません。――體に何の障りもございません。……

亮一。……………

朔太郎。江見にをります間でも一丁や二丁のところはどうにかあるけました。――が、それ以上になると苦しくなりました。――息切れがいたして意地にも我慢にもうごけません。――それが。――そんなやくさな體が。――思ふと夢のやうな氣がいたします。……

嘉平。昨日聞いてわたくしも。――わたくしばかりではございません、店のものみんな、顔をみ合せたやうなしだいでございます。

亮一。「氣」だね。――それほどつまり氣が張つてゐたんだね。

朔太郎。さうでございます。――「氣」でございます。

亮一。しかし……

朔太郎。（深く信ずるやうに）いゝえ、「氣」一つでございます。――いまゝで、わたくし、いくじがなさすぎました。――いくじがなくつて病ひに負けてをりました。

亮一。……………

朔太郎。もう大丈夫でございます。――負けることぢやアございません。――これからは、もう。――これからは、も

う、生れかはつたつもりで……

亮二。それはいゝ。――さう強くなつたのはいゝ。――そこで、一つ、みつしり養生することつた。

朔太郎。へえ。――いえ、もう、打捨つて置いても平氣でございます。――間違ひつこゞざいません。……

亮二。戯談だらう。――そんな莫迦なことをいふ奴があるものか。――すこしでも快いと思つたらよけい大切にするのがほんたうだ。……

朔太郎。へえ。

亮一。轉はづみをして、お前、取つて返しのつかないことでもしたらどうする？

朔太郎。へえ――有難う存じます……（わらふ）

嘉平。だからわたしもいつたらう？――調子に乘つてむやみなことをするんぢやない。――子は大ぜいあるんだから精人はぢつとしてゐるはうがいゝ。……

朔太郎。でも、何さん、みすく何ともないのにぢつとしてはをられません。――ことに、あなた、この枝中で……

嘉平。それは、まア、さうだけれど。――それにしても自轉車なんぞに何ものることはない。……

亮一。何だ、そんなことまでするのか？

嘉平。へえ、いま、今日から青木堂が商ひをいたすと聞きまして誰かやらうと存じたのでございます。――と、この男、何でも自分が行くと申して、自轉車で、藤吉と一しよにいま本郷まで行つてまゐつたのでございます。

亮一。途中で何ともなかつたか？

朔太郎。何ともございませんでした。

亮一。後腐れはないか？

朔太郎。へえ、何にも……

亮一。しかし、いけない。――もうそんなことをしちやアいけない。――お前、いま、この最中といつたが、この最中にもし、うつかりしてお前に綴込まれでもしたらどうすることも出來ない。――手當のしようもない。……

朔太郎。大丈夫でございます。――決してもう……

亮一。いゝえ、まア、たとへばよ。――假りにだよ。……

朔太郎。…………

亮一。火事は消えた。――地震もゝう大てい大丈夫だ。――だが、まだ、いまの分だと、このさきどんなことが持上るか分らない。――大きな聲ぢやアいへないが……

朔太郎。…………

亮一。自分でめいめい自分のふせぎをする。――それだけだ。――いまは、もう、さうする外はない。――めつたな眞似をするのが一番いけない。……

朔太郎。…………（ふと接穂のないとりなし）

亮一。（店員たちのはうと向いて）長吉ばかりぢやアない。――これはみんなもさうだぜ。」

嘉平。（こくめいに）よく、また、さう申しますでございます。

亮一。ところで俺の借りる自轉車は……？

店員の二。これでございます。……（亮一のそばへ持つて行く）

亮一。此奴はいい車だ。――よく出したな……？
店員の二。へえ、ちやうど外へ乗つて出てをりましたんで
亮一。誰が？
店員の二。へえ、藤どんが……
亮一。ぢやア藤吉はこれに乗つてこつちへ逃げて来たのか？
店員の二。へえ。
亮一。そつちのは？
店員の三。これはわたくしが乗つて出てをりました。
亮一。やつぱり店にゐなかつたのか？
店員の三。へえ。――浅草までお使にまゐつてをりました。
亮一。浅草へ？
店員の三。へえ、十二階が倒れたと聞いて、これは大へんと思つて途中からすぐに店へかへりました。――けど、萬世橋まで行くともう火の手が揚つてゐて先きへまゐれません。……
亮一。ふむ……
店員の三。何にも持つてをりませんければ。――それから、また、自轉車でなければ橋は這入つてまゐりますけれど。――駄目でございます。――容身でございませんから駄目でございます。……
亮一。それからすぐにこつちへ来たのか？

店員の三。へえ。――あとへ引つ返へして上野から……

嘉平。藤吉とこれがさうやつてこちらへまゐつため、早く、市中の模様がこちらへ分つたのでございます。

亮一。それは氣がきいてゐた。

店員の三。その代り、わたくし、店にゐなかつたので自分のものを何にも出すことが出來ませんでした。

亮一。それはあたりまへだ。――誰だつてさうだ。――俺だつてこれつきりだ。（着てゐるものを引つ張つてみせる）

店員の三。…………

亮一。何もかも、綺麗さつぱり、みんな燒いてしまつた。――殘つたのは體だけだ。――俺ばかりぢやない。内儀さんだつて、子供だつてみんなさうだ。

店員の三。…………

亮一。かうなればお前たちだつて俺たちだつてかはりはない。――おんなし裸だ。――仲よくしようぜ。（わらふ）

さそはれて、ふと、嘉平、朔太郎、店員の二、三、四、みんなわらふ。――が、その笑ひは寂しくすぐ消える。……

亮一。さア、行つて來よう。――（嘉平に）かへるといつても今夜はとてもかへれまい。――明日の朝かへります。……

嘉平。…………（あたまを下げる）

亮一。それから今夜もう一ト晩待つて、それでもまだ消息が分らなかつたら、構はない。明日もう一人ひとを出して下さい。――そのはうがいゝ……

嘉平。あの、伊香保へ……？

亮一。えゝ。

嘉平。承知いたしました。――御隱居さまもあゝはいつておいでゝも、御内心では、御心配にそれはなつておいでゝございます。……

亮一。それは仕方がない。――幾らおばアさんが强情でも……

嘉平。へえ。

亮一。わたしは、お父さんは、疾うにもうかへつてゐるものとばかり思つてゐた。――だから。實は、安心してゐた。……

嘉平。いゝえ、旦那は二日か三日におかへりになる御豫定だつたのでございます。

亮一。あつちにゐる分には間違ひのないことは分つてゐる。――だが、いろ／＼風說(うはさ)を聞いて。――此奴(こいつ)はどんな風說(うはさ)が行つてゐるか分らない。――こつちのことをそれでどんなに案じてゐるか……

嘉平。左様(さやう)でございます。……

亮一。(時計をみて)これはいけない、四時だ。――(急に)ぢやあ、たのんだよ、みんな……

朔太郎。行つていらつしやいまし。……(頭を下げる。――店員の一二三、四もとも／＼、頭を下げる)

亮一、自轉車を引つ張つてそのまゝ門のはうへ出て行く。――嘉平、おくつて行く。……

間。

店員の三。(ふと蜩のなくのと聞きつけて)何だらう、あれ……?

朔太郎。蜩ぢやアないか。

店員の三。あゝ、あれが蜩つていふんですか?

朔太郎。江戸つ子はこまるな。(わらふ、――そのまゝにしてあつたコップの水を飲む。――店員の二に)酷いもんだね。――

　少しの間にもう生温くなつてしまつた。………

店員の二。熱いんですね、やつぱり………

朔太郎。(つく〴〵)さうなんだね。………

　　嘉平、忙しさうにかへつて來る。

嘉平。長谷、お前、そこに用があるか?

朔太郎。いゝえ………

嘉平。ぢやアちよつと來てくれ。………

朔太郎。………………(うなづいて立つ。――店員の四にコップをわたして嘉平と一しよに玄關のはうへ去る)

店員の三。けど。不思議だなア………?

店員の二。何が?

店員の三。朔さんさ。………

店員の二。………………

店員の三。あんな無口だつた人があんなにも口をきくやうになるものかしら?

店員の二。それは仕方がない。――どうしたつて死ぬやうに出來てゐる命を助かつたんだ。………

店員の三。うれしくつてもうたまらないんだね?

店員の二。そのわけぢやアないか。

店員の三。(嘆息するやうに)運のいゝ人つてあるもんだなア……

門のはうから、平藏、疲れた足どりで出て來る。

店員の二。あゝおかへんなさい……

店員の三。}
店員の四。} おかへんなさいまし……

平藏、無言でうなづきながら椅子のそばによる。

平藏。……あゝまゐつた。(ぐつたり腰を下ろす)

店員の二。どうでした、分りましたか?

平藏。(かぶりをふる)……駄目だ。

店員の三。分らないんですか?

平藏。分れば、もつと、景氣よくかへつて來る。……

店員の二。どうしたんでせう?――どこかで、やつぱり、死んだんでせうか?

平藏。不緣喜なことといふねえ。

店員の二。だつて、平さん……

平藏。死んだものを探してあるけるか?――生きてゐると思へばこそ、毎日、探してあるいてゐるんだ。

店員の二。…………

平藏。善公の奴、あいつ、あんなぶつきら棒な、不愛想な面はしてゐるけれど、肚は、名前のとほりの善人だ。――内

儀さんや子供が無事にこゝのうちへ來てゐるとは知らず、血眼になつてはう〳〵、先方は先方でさがしてあるいてゐるに違ひないんだ。……

店員の三。逃げるとき一しよぢやァなかつたんですか？

平藏。一しよならこんなことにならねえ。——善公、ゐなかつたんだ、うちに。……

店員の三。地震のときですか？

平藏。うむ。

店員の三。どこへ行つてゐたんです？

平藏。朝、起きぬけに、深川まで川たしに出たんだ。

店員の三。それは、また、惡い方角へ行つたもんですね。

平藏。惡い方角とははじめから分つてゐたか？

店員の三。それは、まァ……

平藏。ざまァみろ。

店員の二。だけど、あのお內儀さん——およしさんといふんですか？——あの人はもうあきらめてゐるらしいですね。

平藏。何と？

店員の二。いゝえ、死んだと。……

平藏。またいやァがる。——あきらめてゐるんぢやァねえ、人間がしつかりしてゐるからめそ〳〵しねえつきりだ。

店員の二。ぢやァないんですよ。——今朝、平さんの出て行つたあとで、玄關で、御隱居さんとさういつて話をしてゐ

ました。

平藏。何といつてゐた？

店員の二。そばで聞いてゐたんですからよくは分らなかつたけれど……

平藏。何をいつてゐやァがるんだ。——人の話をそばから聞嚙つて何が分る？

店員の三。だつて、もし、はう〴〵さがしてゐるんなら、善さん、こゝへだつて探しに來さうなもんぢやァありませんか？

平藏。こゝにゐると知れたら來るだらう。——でなきや、どこにゐるか知れるまで、まァ來ねえだらう。

店員の三。どうしてゞす？

平藏。女房や子供の行方が分らないといつちやァこゝへ來られねえ義理がある。

店員の三。義理？

平藏。（わらつて）お前たちのやうな唐變木には分らねえこつた。

店員の三。あのお内儀さん、以前、店で女中をしてゐたんですつてね？

平藏。誰に聞いた？

店員の三。みんなさういつてゐます。

平藏。以前、それは、臺所を働いてゐたことはある。——だが奉公人ぢやァねえ。——御隱居さんとは血のつゞいてゐる關係だ。……

店員の二。さうなんですか、あの人？

平藏。（ふとしみじみ）不仕合な人で子供の時分から苦勞ばかりしてゐる。
店員の二。｝……………
店員の三。
平藏。伊香保から、祖父江、歸つて來たか？
店員の二。いゝえ、まだです。……
平藏。今日はもう歸つて來なくつちアならねえ勘定だが……？
店員の二。今夜もう一ト晩待つてかへつて來なければ、明日、また、だれか人を出せつていつてゐました。
平藏。誰が？
店員の二。小傳馬町さんが……
平藏。小傳馬町さん、みえたか？
店員の二。えゝ、もう少し先刻……
平藏。旦那と……？
店員の二。旦那と、お内儀さんと、坊ちやんと、女中さん。……
平藏。それだけか？
店員の二。えゝ。
平藏。ぢやア、店の連中はみんな、芝のはうへ行くんだな？
店員の三。何です、芝つていふのは？

平藏。旦那の伯父さんだかにあたる人のうちだ。

店員の二。小傳馬町さんでも何にも出さなかつたらしいですね。

平藏。さうだらう。――あすこいらは、みんな、地震で驚いて逃げ出したあとをすつかり燒かれたんだから……

店員の二。大事ですね、とにかく……

平藏。（それにはこたへず立上る）誰でもいゝ、手拭を貸してくれ。……

店員三。これでよござんすか？（わたす）

平藏。（うけとつて）汚ねえ手拭だなア。

店員の三。ぢやアお止しなさい。

平藏。まアいゝや。――つかつてやらア……

店員の二。持つてゐないんですか、自分のを？

平藏。べら棒め、そこまで來たら怪我アしてまご／＼してゐる奴がゐたから引つ裂いてやつて來たんだ。――あゝ氣色が惡い。――汗でもうぐづ／＼だ。……

平藏、花壇のうしろへ去る。――わや／＼いひながら、そのあとに自警團員五六人（前々のものは避けたき故かりに自警團員の四、五、六、と名ける）うろんに思はれても仕方のないほどみすぼらしい身裝の和介を無理に引つ張つて出て來る。うしろに十四五人の人々從ふ。――店員の二、三、四、いそいで椅子から立つ。

自警團員の四。（あくまで昂奮したとりなしで）内田さん、お宅でこの人、御存じですか？

自警團員の五、六、和介をまへに押し出す。――和介、術なげに下を向く。

店員の二。……………（眼を光らしてみる）

自警團員の四。自分では、この人、お宅の知合だといつてゐます。

店員の二。（店員の三、四としばらく囁き合ふ。――はつきりと）うちでは知りません。

自警團員の四。御存じない？

店員の二。知りません。

自警團員の四。たしかですね？

店員の三。ついぞみたこともありません。

自警團員の四。（和介に）内田さんちやア君を知らないといふぜ。

和介。……………

自警團員の五。君は何といつた？――あつちでいまいつたことをもう一度こゝでいつてみ給へ。

和介。……………

自警團員の五。君は、はつきり、こゝの知合(しりあひ)といつたね？――君の口からさういつたね？

和介。……………

自警團員の五。返事をし給へ。――默つてちやア分らない、返事をし給へ。

和介。……………

自警團員の六。强情だな、此奴は。――しろつたらなぜ返事をしねえ。（和介をこづく）

それをキツカケにうしろに從つた十四五人の人々わけもなく、口々(くちぐち)に何か罵りはじめる。――和介、罪をまつもの〻やうに無言

——自警團員たちのなすがまゝに、そのまゝ、門のはうへ拉しられ去る。——そのとき、門のはうから、朝太郎、以吉、お花、店員の一、出て來る。——それと前後して、花壇のうしろから平藏、外に女中たち、大ぜい出て來る。

平藏。何だ。——どうしたんだ？

朝太郎。何かあつたのか？

店員の一。自警團が、いま、へんな奴をつれて來たんです。

平藏。どんな奴を？

店員の三。うちを知つてゐるといふ奴なんです。——さういつて自警團をごまかさうとしたんです。

平藏。どうしてそれが分つた？

店員の三。まるで知らない奴なんです。——それは、もう、みたこともない奴なんです。——（店員の二に）ねえ……

店員の二。さうなんです。——みるから怪しい風つきの奴なんです。……

平藏。で、お前たち、知らないといつたのか？

店員の二。いひました。——はつきりいひました。

平藏。…………

店員の三。眞どんにさういはれて可笑しいやうにぐつともいへなくなつてしまひました。——うちの名まへをいへばすむと思つたのは、こゝいらのことを少しは知つてゐる奴なんだね。……

店員の二。（うなづく）さうだ。——そんなこつた。……

朝太郎。（ふつと）が、それは……

店員の二。
店員の三。}……………（朝太郎のはうをみる）
平藏。（朝太郎のさういひかけたのに示唆された樣に）それはいけねえ。――そんな無暗な眞似をしちやアいけねえ。……
店員の二。
店員の三。}……………（平藏のはうをみる）
平藏。この場合だ――どこからどんな人が來るか分らねえ。――お前たちが知らねえからつて外のものがみんな知らねえつてことはいへねえ。
店員の二。だつて、平さん、あんな人……
平藏。あんな奴ぢやアねえ。――みなくつちやア分らねえ――みて、もし、俺にでも大きに附合のある人間だつたらどうする？
店員の二。…………………
平藏。町内の奴ら、料簡がでたらめになつてゐるから何をするか分らねえ。――誰か行つてみて來ねえ。――もう一度行つてみて來ねえ。……
朝太郎。わたしが行つて來よう。……
平藏。うん、お前ならいゝ、――お前なら分る……

朝太郎、そのまゝ、いそいで出て行く。――店員の一、とも〴〵ついて出て行く。
間。――緣の切れたやうに誰も無言。……

店員の一、たちまちといふ樣にすぐかへつて來る。

店員の一。（駈けて來ながら）知つてゐる人です。——やつぱり知つてゐる人です。……

平藏。誰だ？——知つてるつて誰だ？

店員の一。誰だかわたしは知りません。——でも剛さんは知つてゐます。——いま連れて來ます。……

誰もみんな門のはうをみる。——剛太郎、和介をつれてかへつて來る。

平藏。（和介の顏を一ト眼みるなり）矢の倉の旦那ぢやアありませんか？

和介。（力なく）あゝ、平さん……

平藏。どうなすつた、あなた……？

和介。……有難う。——有難う。（せきあげて來る泪を抑へる）

間。——再び緣の切れたやうに誰も無言。

店員の一、二、三、四、藤吉、若者たち、解せぬかほでよるともなく剛太郎のそばによる。——遠く蜩の聲……

その二

幾間もつゞいた座敷と、及び、廊下の一部。——廣い庭に面してゐる。——普請のさまにも庭の工合にも手堅い贅澤さゞみえてゐる。

廊下のある部分に二階へかよへるみちがある。——庭は目んな、ところで「その一」の前庭につゞいてゐる。

「その一」から中一日措いたあくる日。——日のいろの澁い午前。——殘暑の强いのと地震のあとゝいふ理由とで必要以上にうちのなかは明けつぴろげてある。——庭には、芝生のうへに、地震のとき避難したあとのうすべりだの何だのが、まだ、そのまゝになつてゐる。——さつした光景のどこかに、上づつた、落着かない、ほんたうでない空氣がはつきり感じられる。

伊香保からかへつて來た三五郎、そのまゝのすがたで廊下に腰をかけ、伊香保にゐる主人たちの消息を話してゐる。——おきの、おたき、おしづ、座敷から廊下に出てその話を熱心に聞いてゐる。——すこし離れて、平吉、ふみ出したそこまめの手當をしながら同じくその話を聞いてゐる。

おきの。（嘆息するやうに）……伊香保のあんなはうまでねえ!

三五郎。宿屋でも、ですから、どこでもこゝろ逃げ仕度。——お客たちも、みんな、荷拵へをして、素破といへばすぐ後ろの山へ逃げられる仕度をしてゐるんでございます。（まへに置かれ、麥湯を充したのゝコップを上げる）

おきの。だけど、また、どうしてあんなはうまでそんな騒ぎが傳はつたものだらうねえ!

おたき。（目でしみぐ〳〵）ほんたうでございますねえ。……
三五郎。そのうへ東京のことは皆目分りません。——土地の新聞を見れば、たゞもう大きな字で、東京でも横濱でもみるかぎりの焼け原で草一本生へてゐない。——死んだものは被服廠だけでも十萬人……
平藏。戯談（じやうだん）いつちやいけねえ。……
三五郎。ほんたうに、でも、さう書いてある——そのなかを××が隊を組んであばれまはつてゐる。——女子供のさかひなく人は殺す、火はつける、強盗をする……
平藏。草一本生へてゐないところで、火をつけたり、強盗をしたりするせきはないぢやアねえか？
三五郎。（苦笑ひをして）だからさういふ莫迦なことを書いてゐる。——でも（おきのゝはうを向いて）外に手がかりも足がゝりもございません。——それをほんたうに思ふより仕方がございません。……
おきの。（うなづいて）さうだらうとも……
三五郎。高崎から、いまにも、何十人何百人押して來る。——さう聞けば、また、東京にさういふやうなことがあつても、無理はないと思ひます。……
おきの。では、何だらうね。——友吉でも、道子でも、そんなふうなら、無論、うちは燒けたと思つてゐたらうね？
三五郎。それは、もう、駿河臺のお店（たな）の方はいふまでもなく、こつちのお住居はもう灰になつてしまつたと思つておいでゝした。——燒けるのは仕方がないが誰にも怪我はなかつたらうか？——間違ひはなかつたらうか？——駒込のうちは女ばかりでどうしたらう？——どこへ逃げたらう？——飛鳥山のはうへでもうまく逃げてくれたらうか？——旦那とお内儀さんと、わたくしの行くまで、それはかり案じておいでだつたさうでございます。……

おたき。御尤もですわ。——どんなに、まア、御心配遊ばしたでせう……？

平藏。と、東京から伊香保へ入つたものはお前だけか？

三五郎。昨日こつちのかへる時分に二三人やつて來た。——だが、こつちへ行く前には、まだ、だれも行つてゐなかつた。

平藏。（わらつて）さうだらうた。——三日といつちやア、まだ、どこだつてそこまでは手がとゞかなかつたらうから……

おたき。けど、ぢやア、大へんでしたらう？——東京からみえたといふんで……

三五郎。（わらつて）いゝえ、もう、それは。——驚きました。——それからそれと、しまひには、外の宿屋に泊つてゐる人たちまで押しかけて來ました。……

おたき。でも、ほんたうのことが分つて、まア、どんなにみなさん安心なすつたでせう？——ほんたうにいゝことをなさいましたね。——（おしづに）ねえ……

おしづ。…………（うなづく）

三五郎。ですが、こまつたことは、四谷のどこそこはどうだ、牛込のどこそこはどうだと聞かれて、四谷だの牛込だのは、地震で瓦ぐらゐ落ツこちたか知れないが、あとは何のこともない、火事の力の字もない。——さういふとその人たち、不足らしい顔をして、そんなことはない。——さういつて納得してくれません。

平藏。其奴はいゝや。……

おきの。いゝえ、さう思ふよ、それは……

おたき。みるかぎりの焼け原とのつけにさういはれたんでございますものね。……

三五郎。手紙を二三本言附かつて來ました。——（腹卷の中からそれらを出して）これをみんな届けてやらなければなりま

せん。…………

おきの。おなじ宿にゐる方たちのかい？

三五郎。さうでございます。——一本は小石川の駕籠町。——一本は上野の櫻木町。——一本は——さア此處だ。……

平藏。どこだ？

三五郎。湯島天神町。……

平藏。湯島ならあすこいらはきれいに燒けてゐる。……

三五郎。さうとは思つたんだけれど、工合でさうはつきりいへなかつた。——こまつたなア、これは……

おきの。駕籠町と櫻木町は？

平藏。兩方とも、生憎、立派に助つてゐます。

おきの。それは氣の毒だね。

三五郎。これが、みんな、迎へに來てくれといふ文言なんでございます。

おきの。早く、それは、屆けて上げたはうがいゝ。

三五郎。えゝ。

おきの。さういへば、何だよ、遲くも一昨日はかへるはずのお前が、一昨日の晩一ト晩待つてもかへらないんで、追つかけて昨日岩吉を、また、迎へかたがたあつちへやつたんだよ。

三五郎。さうでございますつてね。——玄關で、いま、店の人たちに聞きました。

おきの。途中で、多分、手間をとつたんだらうと思ふけれど。……

三五郎。いゝえ、あくる日すぐ立つはずの奴が、なるべくなら一しよにと旦那が被仰つたんで、ぐづ〳〵に一昨日まで延ばしてしまひました。――何としても、でも、自動車の都合のつかないことが一昨日の晩分りましたんで、それではと、昨日の朝多寡をくゝつて十一時ごろ先方を出ました。――ところが東京へ來る手合で汽車の混むのこまないの。――あげくが川口町で無暗には東京へ入れないを喰ひ、とう〳〵昨夜は、むだに川口町へ泊つてしまひました。

平藏。そんなに東京へ來るのはやかましいか？

三五郎。趣意の立たない奴はどん〳〵追つ返されてゐる。

おきの。と、友吉は、自動車のありしだいかへつて來るんだね。

三五郎。お内儀さんや坊ちやんをおつれになつちやアとても汽車へは乘れません。――それには荷物の嵩がありますから、お町さん一人の手ごちにはとても行きません。――わたくしが歸つて、とにかく代りに、誰かを改めて迎へに出すことに、實は、旦那と御相談して來たわけなんでございます。

おきの。それだと岩吉をやつたことは無駄ぢやアなかつたね？

三五郎。それだけ早くおかへりになれる勘定でございます。（コップを取上げて殘つた麥湯を飲み干す）

おたき。もう一ぱいさし上げませうか？

三五郎。いゝえ、もう……

おきの。それよりも、お前、御飯をたべたら？――お腹がすいておいでだらう？

三五郎。えゝ、有難うございます。

おきの。（おしづに）臺所へ行つて、お前、すぐに仕度をおさせ。

おたき。わたくしが行つてまゐりませう。(立ちかける)

おきの。ようございますよ、おたきさん。——おしづが行きますから。……(おしづ、臺所のはうへ行く。——三五郎に)とう〳〵、うちも、一昨日から玄米になつたよ。

三五郎。さうでございますか?

おきの。はう〴〵へたのんで置いたから、二三日うちには、どこからか來るとは思ふけれど……

三五郎。…………?

おきの。いゝえ、お米がね。……

三五郎。ですが、今度ばかりは、上下一列一たいにみんな玄米の御厄介なんですからいつそ恨みつこがございません。

おきの。さういへばさうだけれど。——でも、電燈もつかなければ、まだ、水道も出ない。——銀行は拂ひ出しをしない。——こんなことつてあるもんだらうか?

平藏。日本橋のうへを乘合の牛車がとほることを思へば、山谷の重箱ですいとんをうるのもそれほど不思議ぢやアありません。

おきの。(耳を疑ふやうに)「重箱」で?——ほんたうかい。それ?

平藏。一昨日、向島から橋場のはうをまはつたかへりにまへをとほつたら、燒けあとにさしかけを拵へて、「重箱」といふ看板をりつぱに出してやつてゐました。——これも何かの因縁と思つて入つて一ぱい喰つて來ました。

おきの。まア、あすこがね……?

おたき。「重箱」つて、あの、古いうなぎやの……?

おきの。えゝ。――(平政に)戯談ぢやーない、泪がこぼれるよ。……(寂しくわらつて、徐と、眼がしらを拭く)

三五郎。小傳馬町さんの皆さん、こちらへおいでださうでございますね？

おきの。あゝ、一昨日やうやく。――それまで丸の内へ逃げたまんまでゐたんだよ。

三五郎。さうでございますつてね。――でも、みなさん。――旦那も、お内儀さんも、坊ちやんも、べつにあの何でございますか？

おきの。有難う。――おかげで、みんな、怪我一つしないでね。

三五郎。それは結構でございました。――旦那も、お内儀さんも、あちらで、和夫はどうしたらうと坊ちやんのことをわけても御心配でございました。

おきの。根があゝいふ丈夫な子でないからね。

三五郎。……………(うなづく)

おきの。一昨日來て、昨日一日機嫌よく遊んでゐると思つたら、昨夜からすこし工合が惡くなつてね。

三五郎。それはいけません。……

おきの。いゝえ、大したことはないんだよ。……熱がすこしあるだけなんだよ。――いま、關野さんに來ていたゞいてみて頂いてゐる。……

三五郎。さうでございますか。

平政。(ふとわらつて)子供つて、しかし、いゝもんだ。――和夫さん、昨日一日ですつかりゆき坊と仲よしになつて、お姉ちやん、お姉ちやんと、あとを追つてよろこんで遊んでゐる。……

三左門。ゆき坊つて、あの、三國んとこの女の子か？

平藏。さうだ。

おたき。あのお子さんが、また、坊ちやんの御面倒をよく御覧になつて。――昨夜も、寢くまで、坊ちやんの枕もとで、ちやんとお相手をしてたげておいでゝした。

おきの。幾つだらう、あの子？

平藏。八つだと思ひました。

おきの。八つにしちやア大きいね。

平藏。およしさんに似てなか／＼はつきりしてゐます。

おきの。（嘆息をするやうに）あの子が悧口なだけよけい不憫が增すよ。……

平藏。…………

三左門。（ふとその話しを感じる。）……三國、どこへ行つたかやつぱり分らないか？

平藏。分らねえ。

おきの。お前が伊香保へ立つてから、一人で、この人、毎日はう／＼へさがしに出たんだけどね。……

三左門。生きてゐるか死んでゐるかのみとめもつかないか？

平藏。さ、それだ。――せめてそのみとめだけもつけてえと思つて、心あたりといふ心あたりは。――深川は勿論だ、本所、淺草、國公のふだん立廻りさうなところはそれからそれと大ていあるいてみたが――誰に聞いても、誰にぶつかつても相手ァわからねえ。――それよりも、知つた奴で、さういへば、どこそこで會つた――といふ者さへない。……

おきの。深川のどこへ行つたもんだらうね？

三五郎。大根でそれが分らないんですから。――二階にかぎつて、若い時分から、どこへ出るんでも決して行くさきをはつきりいつたことがないんでございます。

おきの。（ほと〳〵）口かずのすくないのもよし悪しだね。

平藏。（さういふより外はないといつたとりなしで）強情を張るもののわたしにしたつて……

おきの。┬……………？
三五郎。┘

平藏。こゝまで來れば、わたしにしたつて、生きてゐるとはもういへねえ。……

三五郎。（平藏に）およしさんはどう思つてゐる？

おきの。（平藏の代りに）およしは始めからあきらめてゐる。……

三五郎。はじめから？

平藏。といふことは、俺たちに、よけいなことを微塵いひ出させる隙をみせねえ。――いつにかはらねえ顔つきをして毎日がせいにうごいてゐる。……

三五郎。……………

平藏。およしさんにしても辛いだらうが、そばで、上げも下げもならなくつてゐる俺たちにしても隨分辛い。――はつきり泣いて愚痴でもいつてくれたらどんなにこつちも氣が樂だらう？

三五郎。でも、およしさんにしたらゆき坊のことを思ふだらうから……

おきの。それだよ。――かくすのにいゝ。――子供には、それは、聞かせないはうがいゝにきまつてゐる。――だけど外のことぢやアない。――かくしていつまでかくし通せるものぢやアない。……

平　藏。――……………………
三五郎。――
おきの。わたしはそれを思ふよ。……
平　藏。――…………………………(うなづく)
三五郎。――
おきの。おたきさんのまへだけれど、不仕合に生れついたものはどこまで行つても不仕合に出來てゐるんですね。
おたき。(しみぐ\)全くお氣の毒でございますわ。……

廊下づたひに離れのはうから關野(近所の醫者)おしんにおくられて出て來る。――直に座敷へ入つて來る。それをみて、三五郎、腰を上げる。……(おしんは關野の鞄をそこに置くと、そのまゝ、離れのはうにかへる。)

おきの。……有難う存じました。――お忙しいところを、いつも、勝手ばかりお願ひいたしまして……
關野。いえ、………(おたきのすゝめる座蒲團を敷く)
おきの。どんな鹽梅でございませう、子供……?
關野。はつきりしたことは、また、申せませんが、なにそれほど御心配なことはあるまいと思ひます。
おきの。左様でございますか。――有難う存じます。
關野。御両親にも、いま、お話して聞きましたが、夕方になつて、これで、格別お熱が出ないやうなら、ほんの、た

だ、風邪をおひきになつたぐらゐのところ。――拜見したところでは、まだ、咽喉に何にも妙なものもついてをりません。

おきの。咽喉に……と申しますと？

關野。いえ、こゝのところヂフテリヤが見えて來ましてね。――あのくらゐなお年のお子さんが大分やられます。

おきの。まア、さうでございますか？

關野。いえ、どちらでも、こゝでは、みなさん無理をしておいでゝすからね。――平生あんまり丈夫なはうでない方は。・――とりわけお子さんたちはたまりませんよ。

おきの、あれも、平生、いたつて弱いはうでございますから……

關野。しかし御安心ですよ。――ヂフテリヤになつたところで、當今は、注射といふ調法なものがあります。――それさへやれば何のこともありません。――こゝは以前と違ひます。……

おきの。さうでございませうか？

關野。（わらつて）しかしならないですめばそれに越したことはありません。――こゝでは、もう、自分にみなさん用心して、せい／＼煩はないやうにしていたゞくことです。――醫者が間に合つても藥が間に合ひません。……

關野。東京の大きな藥種屋はどこも燒けてしまひました。――ほしいと思つても手に入りません。

おきの。あゝ……

關野。それは、まア、廣い東京です。――さがせばどこかしらにあります。――が、さきをみ越して、さうして、持つてゐても商賣人は離しません。

おきの。この旅中に、まア、さういふことを……
關野。阿漕なことをします　それは……
おきの。…………
關野。ところで二階の御病人はいかゞです？
おきの。有難うございます。――おかげで、今朝は、大分よろしいやうでございます。
關野。何か上りましたか？
おきの。（おたきに）今朝お粥を喰べましたね？
おたき。かるく二ぜんほどお上りになりました。
關野。お食氣がつけばもう大丈夫。――たゞもう疲勞し切つておいでだつたんですから……
おたき。葡萄酒をあがつたせいか昨晩はよくおやすみになりました。
關野。上りましたか、葡萄酒を……？
おたき。へえ。
關野。矢つ張うすくして？
おたき。いゝえ　生のまんま……
關野。（おきのに）上るはうですか、平生……？
おきの。へえ、それは、――（わらつて）いたゞきすぎて困るんでございます。
關野。あゝ　それは……

おきの。人のいゝのとお酒とでありあまるものをみんな失してしまつたんでございます。――（三五郎のはうを向つて）和介さんだ。
三五郎。あの　矢の介の……？
おきの。あゝ。
三五郎。こちらへみえたんでございますか？
おきの。あゝ、一昨日、不意に……
三五郎。（いつそ信じられないやうに）さうでございますか……
閑野。ついでに、もう一度　拝見して行きませう。
おたき。さうでございますか？
閑野。御心配はもうないとは思ひますが……（立つ）
おきの。相すみません。――恐入ります……
閑野。鞄をもつて二階のはうへ行く。――あとから、おたき、附いて行く。
平藏。（ふと）醫者は醫者でも藥箱もたぬ、か……
三五郎。（二階のはうをみて）で、矢の介の旦那、どこかお惡いんでございますか？
おきの。いゝえ、それがね……
平藏。（わらつて引取る）話なんだよ、それが……
三五郎。……………………

平藏。もう少しで、旦那、自警團にしよツ引かれて半殺しにされるところよ。――（おきのに）それは、もう、奴らは事あれかしと待つてゐるんですからね。

おきの。和介さんも和介さんだよ。――はつきりさういつたらいゝぢやアないか、――何といはれても返事をしなければ疑られるのはあたりまへぢやアないか。

平藏。そこがいかにも旦那らしい。……

おきの。そんなことがあるものかね。――何年出入をしないからつて親類は親類ぢやアないか。

平藏。…………（わらふ）

おきの。それも、お前、うちのはうから何も愛想盡しをしたわけぢやアなし、先方の勝手に、和介さんが和介さんの勝手について、義理がわるいの、面目なくつて顏が出せないのと、自分のはうから木戸を立てゝ來なくなつたんぢやアないか。

三五郎。その後、どこにいまゝでおいでだつたんでございます？

おきの。知らない。――ごた〳〵してゐるんで、一昨日から、身にしみてまだ何にもわたしは話さない。……

三五郎。…………

おきの。入谷とかにゐると去年だか聞いたことがあつたよ。――燒けたのかい。入谷は……？

平藏。燒けましたとも。……

おきの。では、今度、そこで燒け出されたんぢやアないか？

平藏。かも知れませんね。――昨日の晩も、昨夜も、枕もとにしばらくすわつてゐたんですが、何をこつちが話しかけて

も、有難う。――平さん、有難う。――たゞもうさういふばかり。――さうしちやア、あとで、すまない、こんなにして貰へるわけぢやアない。――さういつちやア、ぼろ／＼枕のうへに涙をこぼす奴なんです。……

おきの。すむも、すまないもないぢやアないか。――相變らずこまつた人だね。

平藏。だが、どうしたんでせう、あの頭髪は？

おきの。わたくしも、一昨日、玄關を入つて來たときみて驚いたよ。――苦勞するとあんなにも白くなるものかしら？

平藏。われ／＼と、たしか、これほど違はなかつたと思ふが……？

おきの。あの人は寅だよ。

三五郎。寅なら六です。

平藏。寅で、旦那、どうしてあゝ弱いんでせう？

おきの。だから、以前、みんながよくさういつちやア調弄つたね。――利介さんの寅はお酒を飲むときだけの寅だ。……

平藏。なるほど。……

平藏、三五郎、ともにわらふ。――是よりさき、この三人のとりやりの間に、おたき、二階から下りて來て臺所のはうへ行き、金だらひと手拭とを運んで、そのときまた、二階のはうへ行きかける。

おきの。すみません、おたきさん。――さういふことはおしづにさせて下さらたいと……

おたき。（わらつて）わたくしにだつて出來ますわ、このくらゐは……（さういひながら去る）

三五郎。（平藏に）で、怪我でもなすつたのか、自棄酒で……？

平藏。ぢやアない。――いゝ鹽梅にそれでは何のこともなかつたが、そのまへ、前日から一昨日まで、客に、たゞおいて

もなく／＼はうく＼ほッつきあるいてゐたのがつまりは祟つたんだ。――ろくにものも喰はなかつたらしい。――それには、また、安心して氣のゆるんだせいもあつたらう。――玄關を上ると、すぐ、がツくりうごけなくなつた……

三五郎。…………

平藏。（おきのに）一昨日はじめてこの近所へ立ちまはつたんぢやアないとわたしはふみますね。――おそらく前の晩ぐらゐから門のまはりをうろ／＼して大きに自警團につけられてでもゐたんぢやアないかと思ひます。――さうでなければ、あなた、幾ら風つきが怪しいからつて……

おきの。さういへばさうだね。――門のまへまで來たつて和介さんにすぐに入れるはずはない。……

平藏。ですから……

おしづ、臺所からかへつて來る。

おしづ。（三五郎に）お待ち遠さまでした。――出來ましてすからどうぞ……

おきの。出來ましてすからどうぞぢやアないよ。――何をしてゐたんだね？

おしづ。ちやうど、お晝の、新規の御飯が炊けかゝつてをりましたから……

おきの。ぢやア、祖母江、仕度が出來たといふから……

三五郎。有難うございます。――そのまへに、一寸、小傳馬町さんへ御挨拶をしてまゐります。

おきの。あとでいゝよ。それは……

三五郎。へえでも。――（おしづに）離れのはうからまはりますから……（去る）

間。

平藏。……よく天氣のつゞくこつた。(行くといふこともなく立上る)

間。

およし、朔太郎をつれて買物からかへつて來る。

およし。(庭で) たゞいま。――遅くなりました。……

おきの。あゝおかへり。――御苦勞さま。――熱かつたらう……?

およし。おもてをあるいてゐるとそのわりでもございませんね――かへつてうちにゐるはうがたまりません。――(朔太郎に) ねえ、朔さん……

朔太郎。へえ……(言葉ずくなにこたへて買つて來たいろ／＼のものを廊下のうへに載せる)

およし。蠟燭を、やうやく、十丁だけ買つてまゐりました。

おきの。よく、まア、あつたね?

およし。昨日(きのふ)まへをとほりましたとき、上富士前のあの大きな荒物屋に「蠟燭あり」とたしかに書いてあつたんでございますけれど、今日(けふ)行くともうお生憎さま。――今夜ぐらゐから電燈(でんき)がつくといふのがうそと分つたんで、急に、また、引つ込めたらしいんでございますね。……

おきの。さういふことをするんだものね。

およし。あるといふことが分つてをりますから、無理をいつて、うちづかひといふのをとう／＼これだけ分けてもらつてまゐりました。

おきの。すこしは、まだ、うちにも殘つてゐるから、それだけあれば二三日の凌ぎはつくよ。

およし。明日でも、また、外へ出ましたらさがしてまゐります。

おきの。病人があるのに燈火が足しなかつたら心細いからね。

およし。わたくしもそれを思ひましてね。――でも、小傳馬町さんの坊ちやん、穴したことはおわりにならないさうでございますね。

おきの。よく御存じだね？――誰にお聞きだ？

およし。え〻、いま、臺所で……

おきの。よく知つてゐたね、臺所で？

おしづ。お師匠さんが、先刻、金だらひを取りにおいでになつてさう被仰いました。

おきの。あ〻、おたきさんが聞いてゐたね。

およし。それから、乾うどん、わけなくあると思ひましたのが、巣鴨のさきまでまゐつてないんでございますよ。――わらふ

おきの。ないかい、やつぱり？――誰の知慧もおんなしなんだね。……

およし。その代り――にはなりませんけれど蕎麥粉をすこし買つてまゐりました。――蕎麥掻きにいたしてもよいと思ひまして……

おきの。それは有難う。――蕎麥掻きとまでわたしは氣がつかなかつた……

およし。それからこれは白玉の粉、――そこにならんでをりましたから何かになるだらうと思つて買つてまゐりました。

おきの。何だつて、あれば、役に立つよ。

朔太郎。（およしに）それから、これは……？（べつにたつた大きな新聞つつみを出す）

およし。（わらつて）あゝ肝心なもの。――遠くなりました代りにかういふものをお目にかけます。……（うけとつておきのまへに出す）

おきの。何だい、これ？

およし。えゝ。

おきの。喰べるものかい？

およし。あけて御覧になれば分ります。――ねえ、朔さん……

朔太郎。…………（寂しくわらふ）

おきの。おしづ、あけて御覧……

おしづ。何でございませう、御隠居さま。……（と手を觸れ兼ねる）

およし。（わらつて）大丈夫ですわ、おしづさん。――そんな氣味のわるさうな顏をなさらなくつても……

おしづ。でも……

おきの。莫迦だね、この人は。――あけて御覧な……

おしづ。…………

平藏。いくぢのねえ奴だな。――かうやつて、かう、この紐を切ればいゝんぢやァねえか。（そばへよつてそれをあける）

おしづ。（なかをみて思はず頓狂に）まア、お饅頭……

おきの。何だね、この人は……

平藏。此奴はうまさうだ。（すぐに手を出して一つとる）――よくあつたねえ……

おきの。（つく〲）どこにあつたい、まア。――よくあつたねえ……

およし。柴井橋のそばをとほりますと。――（朔太郎に）あれは、あんまり、いゝお菓子屋がやアありませんわね……

朔太郎。えゝ、あんまり……

およし。ふだんなら知らずにとほつてしまひさうな小さな店のまへに大ぜい人が立つてをります。――何かと思つてくと、みてゐるまへで、菜箸をつんでこのお饅頭をふかしてうつてゐるぢやアございませんか。――あんまりいゝなしてゐるんで素通りするのが惜しくなりました。――それから入つて買つて來ゐりました。

おきの。賣れるこつたらうね、さぞ……

およし。えゝ、もう、とぶやうに……

平藏。うまうござんすよ。――なか〲莫迦に出來ませんよ。……（いひながら續けてまた一つ口に入れる）

おきの。何だね、お前さんばかり。――おしづ、お盆をもつておいでよ。

おしづ。どんなのを？

おきの。どんたんでもいゝよ。――三四枚、――早く……

おしづ、立つ。――そのとき、關野、おきたにおくられて二階からかへつて來る

おたき。（障子のそとから）先生。おかへりでございます。……

おきの。あゝ、どうも……（立ちかける）

關野。もう御心配はありません。――大丈夫でございます。

おきの。有難う存じます。……

關野。御當人の氣隨に、もし起きたいと被仰つたら、明日あたりもう御起になつても構ひません。

おきの。當人、そんなことを何か申しましてすか？

關野。（わらつて）何だかしきりに、もう直つた。――直つたからもう起きる。――さうばかりいつてです。……

おきの。こまつた病人でございます。

關野。いゝえ、もう、大丈夫です。――ではこれで失禮いたします。

おきの。（もう一度叮嚀に）有難う存じました。……

關野、そのまゝ、また、おたきにおくられて玄關のはうへ去る。――この間に、おしづ、菓子盆をいろ／＼もつてかへつて來る。

間。

おきの。（饅頭をそれ／＼にとり分けて）朝や、すまないが、お前、これを離れへ持つて行つておくれ。――ほんのお口汚しでございますつてね。――（おしづに）これは臺所と店の人たちへ。――一つ宛ぐらゐしかまはらないだらうけれど喧嘩しないでつてね。……（わらふ）

朝次郎、おしづ、去る。

おきの。（およしに）さア、上つて、おもたせをお前さんも一つおあがり……

およし。えゝ。――それよりもお茶を一つ淹れませう。……（さういひながら庭から上る）

おきの。お湯が、生憎、溫かつたかも知れないよ。

およし。さうでございますか？

およし、火鉢のそばによる。――おたき、間もなくかへつて來る。

おきの。おたきさん、いかゞ……?

おたき。まア、おめづらしい。……

おきの。上れ。

おたき。有難うございます。――御馳走さま……(すわる)

間。

亮一、翔太郎と一しよに出て來る。

亮一。(その一二に於けると同じ快活さで)御馳走さま、たゞいまは………

おきの。(わらつて)いやですよ。

亮一。一週間ぶりで、わたしは菊子の顔をみました。――でも、何のかのいふものゝ、あゝいふものをこしらへるだけになつたんですね、世間も……

おきの。ほんたうに……

およし。小傳馬町さんの旦那さま、ゆきが、また、お座敷へばかりまゐつてをりまして相すみませんでございます。

亮一。いや、とんだこと。――それは、こつちから、お禮をいはなければ……

およし。さぞ、いえ、うるさいことだらうと存じます。――いゝ氣になつて坊ちやんと……

亮一。坊主をよく遊ばして下さるんでこつちは大助りです。――しかし、年にして、よく分るお子さんですね。

およし。いゝえ、もう、野育ちでございますから。――ずん〳〵どうぞ、お小言をいつていたゞきます。

亮一。そんな必要は決してありません。――うちの奴も皆無しいのに驚いてゐます。……

離れのはうから、店員の一、亮一をたづねて出て來る。

店員の一。(亮一のそばによつて)……ございません。――みんな賣れてしまひました。……

亮一。賣切か？

店員の一。へえ。

亮一。其奴はしくじつたな。

おきの。何です？――何か……？

亮一。いゝえ、ズボンです。

おきの。ズボン？

亮一。自轉車に乘るのに穿くズボンをいま買ひにやつたんですけれどないといふんです。

おきの。どんなんです。――洋服に附いてゐるやうな……？

亮一。いゝえ、そんなんぢやアないんです。――よく足袋屋なんかで賣つてゐるさつな奴です。――この服裝の下へ穿くんですから……

およし。ぢやア、あの、剛さんや藤どんの穿いてゐるやうな。――今日は、剛さん、穿いておいでぢやアありませんけれど……

亮一。えゝ、あれ。――彼奴……

およし。あれなら幾らもありさうなものでございますねえ

亮一。（朔太郎に）君のはどこで買つた？

朔太郎。わたくしのは、そこの、通りの足袋屋で……

亮一。お前はどこへ行つた？

店員の一。やつぱり、その、通りの……

朔太郎。わたくしのぢやアお間に合ひになりませんか？

亮一。君ので？

朔太郎。もしお嫌でなければ。――どうせ、もう、わたくしは入らないんでございますから……

亮一。穿かないのかい？

朔太郎。へえ、もう自轉車を止しましてすから……

亮一。すつぱり思ひ切つたか？

朔太郎。へえ。

亮一。體にやつぱり覿面に來るだらう？

朔太郎。へえ。――いゝえ……

亮一。ぢやア借りよう。――空いてゐるんなら……

朔太郎。ぢやア持つてまゐります。

亮一。たのむ。……

朔太郎、去る。

おきの。どうしたんだらう、剛は？――酷く今日は沈んでゐるぢやァないか？

およし。一しよに外へ出ても、わたくしのはうから何か話しかけなければ、剛さんのはうからは今日は一ト言も口をおきゝになりません……

おたき。どうなすつたんでせう？――昨日あたりまであんなに元氣よくしてゐなすつたのに……

平藏。（わらつて）ネヂがもどつたんですよ。――あれがほんたうなんです、あの男の……

亮一。少しいまゝで調子が狂つてゐたね？

平藏。大狂ひのこんこんちき。――あんなつてわけがありません。

亮一。…………

平藏。（いつそしみじみと）親代々の肺病は地震ぐらゐぢやァ直りません……

おきの。だけど、あの男、今度のやうに運がいゝんだから……

平藏。さア、いゝか悪いか……？

剛太郎、「その一」で穿いてゐた半ズボンを持つてかへつて來る。

亮一。有難う。（うけとつて、すぐ、穿いてゐる自分のズボン下のうへから穿く）――さア出來た。――これでいゝ……

おたき。でも、よくお乗れになりますね……（わらふ）

亮一。自轉車にですか？

おたき。へえ。

亮一。冗談いつちアいけません。――昔取つた杵柄ですよ。……

おたき。……　…………（わらふ）

亮一。わたしの乗る時分には、まだ、自轉車に乗ることが酷く見得でね。……

おたき（おきのに）その時分でございませうね、伊井が初めて自轉車を舞臺に出しましたのは……？

おきの。あれは、たしか、歌舞伎座で……？

おたき。さうでございます――忠臣藏を、何でも、いきに直したやうな狂言で……

おきの。（うなづく）さうでした。――城渡しのやうな幕があつてそこへ自轉車で出て來ました。……

おたき。えゝ、さうでございました。

亮一。（打捨るやうに）いまは昔の物語。――それもね……

おたき。…………

亮一　どれ、行つて來よう……

おきの　今日はどこへ？

亮一。えゝ、今日は、淺草で……

おきの。大へんだね、それに……

亮一。わけはありません。――夕方までにはかへります。――（店員の一に）出てゐるね、車……？

店員の一。出てをります。

亮一。（おきのに）倅が駿河臺からかへりましたら、わたくしが晩に逢つてよく話す。――さういつたと被仰つて下さいませんか。……

亮一、あとから店員の一、去る。

間。

おしづをさきに女中たち、膳器にのせて、夜の食事の仕度を運んで來る。——およし、おたき、そこらの散亂つてゐるのを片附けたり食卓を擴げたりする。——その間に、おしづ、離れのはうへ知らせに行く。

間。

おしづ、かへつて來る。——あとから、久美子、おゆきの手を曳いと廊下を出て來る。

およし。まアいゝね、おゆき……

おゆき。…………(うれしさうにわらふ)

およし。(久美子に)坊ちやん、いかゞでございさいます?

久美子。えゝ、有難う。——眠いとみえていまやすみました。

間。

おきの、久美子、おゆき、およし、おたき、食卓のまはりによる。

おきの。(平藏に)お前さんもこゝへ來て一しよに喰べたらどうだい?

平藏。まア止しませう。——止して、あとで、蕎麥搔きにでもありつきませう。

おきの。どうして?

平藏。玄米の損値はどう考へてもうれしくねえ。

おたき。そんな、まア、勿體ない……

平藏。でも、はつきりさういはなかつたら、始終の手めえの立つ瀬がなくなつた……

おたき。どうしてどす？

平藏。玄米の握飯を結構だ、有難いと押戴いてよろこんだ日には、いまゝで白い米を喰つて來たのがとんだ榮耀な沙汰になる。——こちとらは、そんな、白い米を喰ふことを榮耀とも贅澤とも思つちやアゐねえ。——あたりまへなことつたと思つてゐる……

おきの。そんな奴があるものかね。……

おきの　久美子、およし、おたき、ともぐわらふ。

おゆき。（急にふと何か思ひついたやうに）母アちやん……

およし。………　………（おゆきのはうをみる）

おゆき。（あくまで無邪氣に）父ちやんが川合からかへつて來ると、また、白い御飯になるのね。……

おきの、久美子、おたき、平藏、それを聞いて思はず聲を嚥む。——久美子は箸と茶碗を下に置いて顔をそむける。

およし。（しづかに）あゝ、さうだよ。……

間。

平藏、何とつかぞ立つて庭にドりる。——一人忘れたやうにつぐなんでゐる朔太郎のそばによる。

平藏。どうした、長谷。……？

朔太郎。（空をぼんやりみ上げたまゝ）えゝ、あんまりお天氣がいゝんで……

平藏。（さそはれて同じく空をみ上げる）すつかりもう秋だ。……

朔太郎。え丶、……

……座敷では食事をつゞける。

その三

門内。（その一の舞臺に同じ）

「その二」から中三日隔いたあくる日。日のくれ〳〵。張板をわたした腰かけのうへで、（涼み臺はもうみえない）店員の五、六、五目ならべに夢中になつてゐる。――すこし離れて椅子に、店員の一、どこからか探し出して來た古雜誌を讀んでゐる。花壇のあひだに昨日から來るやうになつた蚊遣が白くしづかにともつてゐる。「その一」と同じに蜩が遠くないてゐる。――が、冷めたい、水のやうな感じが舞臺のうへにさびしく滲んでゐる。――空も、いへば、力なく曇つてゐる。

間。

店員の一。（雜誌を抛り出して立上る。――五目ならべのそばによつて）よせよ、もう。――いゝ加減にしろよ。……

店員の五。
店員の六。 ……………

店員の一。え丶、おい。――日が暮れるぜ、もう……

店員の五。――…………………

店員の六。――…………………

店員の一。（間）何だ、そこがもう三四になるぢやアないか。……

店員の五。――……………………

店員の六。――……………………

店員の一。分らないのかな、これが?――もう一つこつちへのばせばこれでいゝんぢやアないか。……

店員の五。いゝよ、分つてゐるよ。

店員の一。分つてゐたらやつたらいゝぢやアないか。――やれば一ト手で勝つんぢやアないか。

店員の五。――……………………

店員の六。――……………………

店員の一。ちえツ、下らねえ……（そこを離れる。――ふと門のはうをみて）誰だ、あれは?――（思ひもつかないものをみたやうに）小傳馬町さんだ。……

亮一、出て來る。――「その二」とはうつてかはつた洋服ごしらへで帽子も麥藁でないものをかぶつてゐる。

店員の一。入らつしやいまし……

店員の五。――（急いで五目ならべをやめて立上る）入らつしやいまし……

店員の六。――

亮一。（「その一」「その二」に於けると同じ快活さで）この間中は有難う……

店員の一。……………（默つて頭を下げる。――店員の五、六、それにならふ）
亮一。かへつて來たかい、今日、伊香保から……？
店員の一。へえ、おかへりになりました。――旦那樣も、お內儀さんも、みなさん……
亮一。何時ごろ？
店員の一。（店員の五をふり返つて）二時ごろだつたかね、あれ？
店員の五。もつと早かつた。………
店員の六。御飯を喰べてちきだつたぢやないか……
亮一。よし分つた。――別にかはつた御樣子もないか？
店員の一。へえ、べつに……
亮一。（み廻して）みんなはどうした？
店員の一。お座敷のはうにをります。
亮一。お座敷のはうに？
店員の一。旦那とお內儀さんのおかへりになつたお祝――つていふんでございますかしら？――今夜はお座敷で、みんな、御馳走なんでございます。
亮一。で、お前たちは？
店員の一。わたくしどもも、いま、あとで頂けるんでございます。
亮一。翻詰のお料理を……

店員の一。いゝえ、もう、旦那が芝へお引上げになつたあとで、肉屋でも何でもちやんともう御用聞きが毎日來るやうになりました。

亮一。生意氣いつたつて、まだ、玄米の厄介になつてゐるんだらう？

店員の一。いゝえ、もう、昨日から白いお米でございます。

亮一。來たか、米が？

店員の一。へえ、千葉から、昨日の朝 馬力でつんでたくさん來ました。

亮一。安心したらう？

店員の一。（わらつて）へえ。――それより旦那は、芝にもうお宅をおみつけになつたんでございますか？

亮一。（うなづいて）伯父のうちのすぐそばだ。――高臺で二階へ上ると品川の海が一ト目だ。――小傳馬町にゐちやアとてもみられない景色だ。……

店員の一。しかしこゝへおいでになるには隨分なみちでございますね。

亮一。こゝへ來るには遠いが慶應の病院へ行くには三十分かゝらない。

店員の一。あゝ、坊ちやんはいかゞでございます？

亮一。大丈夫だ。――ヂフテリヤときまつたからもう安心だ。

店員の一。やつぱりヂフテリヤだつたんでございますか？

亮一。さうだつたんだ。――あの日すぐ病院へ入れてよかつた。……

店員の一。何なんでございますつてね。――こゝいら近所のあたりまへのお醫者のところには、ヂフテリヤの注射の藥

はもうどこへ行つてもないんでございますつてね。……

亮一。それは、この間、關野さんもさういつてゐた。――藥種屋がみんな燒けてしまつたんでどうもならない。――さういつてゐた。……

店員の一。どん〳〵患者がふえるんで、すこしぐらゐ取つときがあつてももう駄目なんでございますつてね。……

亮一。慶應の病院でもチフテリヤは大へんだ。

店員の一。だもんですから、おゆきちやん、とう〳〵避病院へやられてしまひました。

亮一。（ふと）誰？

店員の一。ですから、おゆきちやん……

亮一。あの子、どうかしたのか？

店員の一。御存じないんでございますか？

亮一。知らない。

店員の一。やつぱりヂフテリヤになつたんでございます。

亮一。いつ？

店員の一。一昨日の晩でございます。

亮一。で、病院へ行つたのは？

店員の一。昨日でございます。――あと消毒をするんで大騷ぎでございました。

亮一。そのくせ、昨日、藤吉がうちへ使ひに來たんぢやアないか。――そんなことは何ともいはなかつた。

店員の一。悪いと思つて申さなかつたんでございませう？

亮一。悪いことは何もないぢやアないか。

店員の一。へえ。……

　　だん／＼、あたり、暗くなる。――蜩の聲もよう聞えない。……

　　玄關のはうから、嘉平、出て來る。

嘉平。（あやしむやうなとりなしで側にくる）あゝ、これは。――（慇懃に）いつおいでゞございました？

亮一。いま、もう少しまへ……

嘉平。さきほど、旦那、御無事におかへりになりました。

亮一　さうだつてね。――大てい明日かへるといふ昨日の話だつたから來て見た。……

嘉平。それは恐入ります。――でも、早速、いゝお宅がお手に入つて結構でございます。

亮一。どうにか、まア、巣だけは出來た。――しかし子供を入院させる必要がなければ、まだ／＼、わたしは、こつちのうちへ厄介になつてゐるつもりだつた。……

嘉平。御隱居さんもさう被仰つてゞございました。

亮一。いま聞いたが、しかし、ゆき坊は何だね。……

嘉平。へえ、どうも……

亮一。ゆき坊も可哀相だけれどおよしさんが何としても氣の毒だ。――どうしてゐる、およしさん……？

嘉平。附いて一しよに避病院へまゐつてをりますが……

亮一。一日でも二日でも子供があゝして面倒を見てもらつたんだ。――何とかしなければなるまい。
嘉平。へえ。
亮一。おばアさんにでも相談してみよう。
嘉平。さうなすつたらよろしいと存じます。――とにかくお通り下さいまし。――今晩は、みんな、あちらに揃つてをります。（さきへ立つて玄關のはうにかへらうとする）
亮一。君、こゝに、何か用があつたんぢやアないのかい？
嘉平。いゝえ、さうぢやアございません。――いま、玄關へ出ますと、み馴れない恰好の方がこゝに立つておいでなんで。――（わらつて）それがあなたさまだつたんでございますが……
亮一。うさん臭くみられたわけか？
嘉平。いえ、さういふわけぢやアございませんが。――眞逆、あなたさまが、洋服をお召しになつておいでとは思ひませんので……
亮一。さし當つて伯父の着てゐた奴を掠奪したわけなんだがね。――いつまで、どうも、襯衣一つで押しまはすわけにも行かないから……
嘉平。それは大きに……
店員の一。自轉車にはもうお乘りになりませんか？
亮一。この間、つゞけて二三度、芝を往復したらう。――あれですつかり體を毀してしまつた。――だから、もう、今夜は人に運轉して來てもらつたよ。……（わらふ）

第一、廊下、玄關のはうへ去る。

間。

店員の一。（ふとひいやりした空氣を感じて）すつかり變つてしまつたな。

店員の五。ふつたら大へんだな。夜警が……

店員の六。もう夜ツぴてどなくたつていゝんだね、宵の口だけで……

店員の一。いゝんだとよ。——べつにちやんと町内の夜警もこのために出來たんだ。——これに、もう、旦那もあゝやつてかへつて來たんだ……

その前後に、日、全く暮れる。——蟲、ほそ〴〵と、忍びやかに——きはめて忍びやかになく。

店員の五。（間）蟲がないてゐる……

店員の一。疾うにもうこの間つからないてゐる。——夕顔がもうあんなになつてしまつたんだもの。……

間。

門のはうから、湖太郎、ぼんやり出て來る。

店員の一。おかへり……

店員の五。
店員の六。｝おかへり……

湖太郎。（うなづいて疲れたさまに椅子に腰を下ろす）……　……

店員の一。どこへ行つて來たんです、いまゝで？

朔太郎。ほう〳〵へ行つて來た。……

店員の一。ほう〳〵つて？

朔太郎。（それにはこたへず）旦那はかへつておいでになつたか？

店員の一。え〻、先刻。――聞いておいでになりましたよ。あなたのことを。――長谷はどうしたつて？

朔太郎。何といつて置いてくれた？

店員の一。伯父さんのうちが、あと、どうなつてゐるか、それつきりになつてゐるから心配だからみてくる。――さういつて、朝、出かけてまゐりました。――佃さんがさういつてゐたやうでした。

朔太郎。（間。――それにはまたこたへず）誰かお客さまか？

店員の一。どうしてゞす？

朔太郎。い〻え、おもてに自動車がとまつてゐるから……

店員の五。あ〻。ぢやア小傳馬町の旦那が乘つて來たんだ。……

朔太郎。小傳馬町さん……？

店員の一。え〻。

「糸どん。――糸どん……」と、遠く、勝手のはうで女中の呼ぶ聲がする。

店員の一。はアい……（とりあへず猪牙がかりにさう返事をして店員の六に）糸どん、おい、呼んでゐるよ……

店員の六、すぐ立つてそつちへ行く。――間もなくかへつて來る。

店員の六。御飯になさいつて……

店員の一。御飯になさいたつて代りが來なければ行けないぢやアないか。――誰か來なくつちやア……

店員の六。…………

店員の一。奥ぢやア、外に、誰かゐると思つてゐるのかい、こゝに……？

朔太郎。いゝから喰べておいでよ。――誰か來るまでわたしがゐて上げる……

店員の六。でも、あなたは、まだ、旦那にだつてお逢ひにならないんぢやアありませんか？

朔太郎。あるきすぎて心もちが惡いからすこしこゝで休んでゐたいんだ。

店員の一。さうですか。？

朔太郎。構はないから行つていゝよ。

店員の一。ぢやア……

朔太郎。…………

店員の六。早く喰べて來ます。

朔太郎。早くでなくつてもいゝよ。――ゆつくりでいゝ……

店員の一。――…………

店員の六。――

朔太郎。それから、誰も何ともいはなかつたら、まだ、わたしは、かへつて來ないつもりにして置いておくれ。

店員の一。ええ、ようござんす。――もし、何なら、藥を何か持つて來て上げませうか？

朔太郎。いゝえ、入らない。――それほどのことはない。

店員の一。さうですか？

店員の一、五、六、去る。

間。忍びやかな雨の音。——椅子に腰を下ろしたまゝ、朔太郎、身じろぎもしない。——せぐりあげて來る泪を密と拭く。

間。玄關のはうから、和介、ぼんやり出て來る。

和介。（醉つてゐる。——朔太郎とは知らずにそばへよる）毎晩、ヤア、御苦勞さまで……（張板をわたした上に腰を下ろす）

朔太郎。……矢の倉の旦那でございますか？

和介。（思ひもよらないやうに顏をあげる。——みて）あゝ朔どん……

朔太郎。へえ。

和介。君はこんなところにかくれてゐたのか？——道理であつちに見えないと思つた。……

朔太郎。いま外からかへつてまゐつたんでございます。

和介。外から？——どこへ行きなすつた？

朔太郎。へえ、今日は。——本所まで……

和介。本所？——本所のどこへ……？

朔太郎。緑町から被服廠のはうへ……

和介。被服廠？——被服廠つていへば、君の。——君の伯父さんも伯母さんもとんだことだつたねえ。——聞いたよ。

——聞いたよ、話を……

朔太郎。へえ、有難うございます。

和介。だが、朔どん、ものはあきらめだよ。——何でも、ものは、あきらめだよ。——なるやうにしかならない。——なるやうにしかならないのが世の中だ。……

朔太郎。…………

和介。だから、わたしは。——早い話がわたしはこの間。——この間こゝへ來たときだ。——ねえ、自警團がわたしを捕へてこゝへつれて來たとき、知らない、みたこともない男だ、店の若い人たちがさういつた。——無理はない、知らないんだから無理はない。——だからわたしは何とも思はなかつた。——仕方がないとあきらめた。……

朔太郎。…………

和介。だからわたしは何ともいはなかつた。——自警團が何と云つてもわたしは何とも返事をしなかつた。——いまも。あつちで、その話が出て、どうしてあのとき返事をしなかつた、默つてゐるから、畢竟、あゝいふことになるんだとみんなにいはれた。——だが、わたしにすると、ことがあゝなつたら、あゝ曲つたらいくら自駄んだふんだところでどうなるもんぢやない、——自駄んだふむだけ無駄だ。……

朔太郎。…………

和介。わたしは、あのとき、これはもう駄目だと思つた。——自警團にもう殺されるものと思つた。——これも約束、——みんなこれも約束だと思つた。——といふのは、わたしは、こゝのうちへ來られない人間だ。——公然晴れて來られない義理になつてゐる人間だ。——知つてゐるだらう？——知つてゐるだらう、君は、それを？……

朔太郎。…………

和介。來られない義理になつてゐるところへ。——來まじきところへ來たのがそも〳〵の間違ひだ。——誰が惡いんで

もない、自警團が悪いんでもなければ、店の若い人たちが悪いんでもない。――わるいのはわたしだ。――車を横に押したわたしが悪いんだ。……

朔太郎。旦那……

和介。えゝ？

朔太郎。わたくし、――旦那のやうにわたくし……

和介。………？

朔太郎。ものを――さういふ風にものを――。お仕合だと思ひます。……

和介。（遮ぎるやうに――朔太郎のいふことはうけつけずに）それはさうだ。――君のいふ通りだ。――ほんたうにわたしは仕合だ。……（ふと眼を拭ふ）

朔太郎。……………

和介。このうちで今度してくれた手厚い介抱。――みんなもう親切に痒いところへ手のとゞくやうにいろ〳〵よくしてくれた。――そんなにしてもらへるはずはない。――そんなにしてもらへるはずのないわたしなんだ。――つく〴〵わたしは――二階であの絹布の厚い蒲團のうへに寢かされながらさ。――寢かされながらつく〴〵わたしは罰當りだと思つた。……

朔太郎。…………

和介。それはいゝ。――それはまだいゝ。――わたしは今日といふ今日。――今日といふ今日人のなさけが骨の髓までしみとほつた。……

朔太郎。…………

和介。といふのは友さんだ。――君の御主人だ。――ねえ、伊香保から今日かへつて來て、座敷へ上るかあがらないに――上るか上らないかに、和介さんはどうした。和介さん、もう體は直つたか？――聞いたんだらう。こちらから行つたものにいろ〳〵。――わたしが來てこれ〳〵しか〳〵といふことを。――わたしはうれしくつて思はず泪が出た。――泪が出て口がきけなかつた。……（流れる泪を拭ふ）

朔太郎。…………

和介。わたしは友さんに借財があるんだ。――一生もう返せるあてのない不義理な借財があるんだ。――それを。――それを、君……

朔太郎。…………

和介。と、また、今夜だ。――さ、和介さん、久しぶりで一ぱい飲まう。――みんなも、まア、かうして無事におたがひが逢へたんだから一ぱい飲んでくれ。――さういつてわたしをどこへ据ゑたと思ふ？――自分の隣だ。――友さんの隣だ。――さアこつちへといつて無理に、わたしを。――いくぢのないこのわたしを、そこへ、自分ですわらせた。……

朔太郎。…………

和介。（急にわらつて）で、まア飲んぢやつたんだ。――いゝ心もちに飲んぢやつたんだ。――おかげで酔つぱらつた。――すつかり酔つぱらつてしまつた。――けど、いゝだらう？――酔つぱらつたつていゝだらう、朔どん？――ねえ、勘辨してくれ。――今夜のところは、一つ、大負けに負けてかんべんしてくれ。――古い馴染だ。――君とは

え。古い馴染だ……

くど〳〵辻褄の合はないことをいひながら横になる――そのまゝそこにねてしまふ。……

間。蟲の音。

朔太郎、花壇のかげへ行つて誰かゞ脱ぎ捨てゝ行つた古絆纏をもつて來て和介のうへに着せる。――門のはうから自警團員二三人提灯をもつて入つて來る。

自警團員。べつにかはつたことはありませんか？

朔太郎。ありません。

自警團員、そのまゝすぐ、かへつて行く。

間。蟲の音……

朔太郎。力なくまた椅子に腰を下ろす……

（十四年三月）



死兒を產む

葛西善藏

この月の二十日前後と產婆に云はれてゐる大きな腹して、丈夫がづんぐりなので醬油樽か何かでも詰めこんでゐるかのやうな恰好して、おせいは、下宿の子持の女中につれられて、三丁目附近へ產衣の小ぎれを買ひに出て行つた。――もう三月一日だつた。二三日前に雪が降つて、まだ雪解けの泥路を、女中と話しながら、高下駄でせか〳〵と步いて行く彼女の足音を、自分は二階の六疊の部屋の萬年床の中で、いくらか心許ない氣持で聞いてゐた。自分の部屋の西向きの窓は長い間〆切りにしてあるのだが、前の下宿の裏側と三間とは隔つてゐない壁板に西日が射して、それが自分の部屋の東向きの窓障子の磨りガラスに明るく映つて、やはり日增に和らいで來る氣候を思はせるのだが、電線を鳴らし、窓障子をガタピシさせてゐる風の音には まだ〳〵冬の脅威が殘つてゐた。

「早く暖かくなつて吳れないかなあ!……」と、自分はほとんど機械的に斯う呟く。……

やがて、新モスの小ぎれ、ネル、晒し木綿などの包みを抱へて、おせいは歸つて來た。
「そつくりで、これで六圓幾らになりましたわ。綿入り二枚分と、胴着と襦袢……赤んぼには麻の葉の模樣を着せるものださうだから……」彼女は枕元で包みをひろげて、斯う自分に云つて聞かせた。
「さうかねえ……」と、自分は彼女のニコ〳〵した顏と紅い模樣や鬱金色の小ぎれとを見較べて、擽つたい氣持を感じさせられた。
「ほんとに安いものね。六圓幾らでみんな揃ふんだから……」
自分はクルリと寢返りを打つたが、そつと口の中で苦笑を噛み潰した。
六圓幾ら――それはある雜誌に自分が談話をしたお禮として昨日二十圓屆けられた、その金だつた。それが自分の二月中の全收入……こればかしの金でどう使ひやうもないと思つたのが、偶然にもおせいの腹の子の産衣料となつたと云ふ譯である。そして彼女はあの通り嬉しさうな顏をしてゐる。無智とも不憫とも云ひやうのない感じではないか。それにつけても、呪はれた運命の子こそ哀れだ……惱ましさと自責の念から、忘れかけてゐた作部肋間の神經痛が、また疼き出した。……
斯うした生活が、丁度まる二ケ月も續いてゐるのだつた。毎日午後の三時四時頃に起きては十二時近くまで寢床の中で酒を飲む。その酒を飲んでゐる間だけが痛苦が忘られたが、曉方目がさめると、ひとりでに呻き聲が出てゐた。裝飾品と云つて何一つ無い部屋の、晝もつけ放しの電燈のみが、佗しく眺められた。
長い間自分は用心して、子を造るまいと思つて來たのに――自然には敵はないなあ！――丁度一年前「蠢くもの」と

云ふ通でおせいとの醜い啀み合ひを書いたが。その時分もおせいは故意にかまた實際にさう思ひ込んだのか、やはり妊娠してると云ひ出して。自分をしてその小說の中で。思はず。自然には敵はないなあ！と嘆息させたのであるが、その時は幸ひに無事だつたが。月から計算して見て。七月中旬亡父の三週忌に歸鄉した、その前後であるらしい。その前月おせいは一度鎌倉へつれ歸されたのだが。すぐまた逃げ出して來た。その解決方に自分から鎌倉に出向いて行つたところ。酒を飲んでおせいの老父とちよつとした立廻りを演じ。それが東京や地方の新聞に大袈裟に書き立てられて一ケ月と經つてゐない場合だつたので。かなり億劫な歸鄉ではあつた。鄉里の伯母などに催足され。またこの三週忌さへ濟まして置くと當分厄介はないと思ひ。勇氣を出して歸ることにしたのだが。そんな場合のことで一層新聞のことが業腹でならなかつた。そんなことで。自分はその日酒も飲んではゐたが。いくらかヤケ氣な氣持から。上野驛まで送つて來た洗ひざらしの單衣着たきりのおせいを鄕里につれて行つて。謝罪的な氣持から皆に會はせたりしたのだが。その結果が一層面白くなかつた。弘前の菩提寺で簡單な法要を濟ませたが。その席で伯母などから散々油をしぼられ、ほうほうの體で歸京した。その前後から自分は節制の氣持を棄てた。その結果が。あと十日と差迫つた因果の塊りと、なつたと云ふ譯である。…………

あゝ。それにしても。何と云ふ面白くないことだらう！書き出してからもう十日も經つてゐると云ふのに。まだ五枚と進んでゐないのだ。いや。書くことが何もないのだ。それに。實際物を書くべく如何に苦患な狀態であるか——にも拘はらず。S君は每日根氣よくやつて來ては。袴の膝も崩さず催促を續けてゐると云ふ光景である。アスピリンを飲み。大汗を絞つて。やうやう四時過ぎ頃に蒲團を出て。それから書けても書けなくても。自分は一時間餘り机に向はなければならない。そして一枚でも渡さないと。彼は歸つて吳れないのだ。無論雜誌の締切りに間に合はないことを承知

でゐて、彼は意固地になつてゐるのだ。

「よし／＼、屹度うまく逃げてやらう。何もかも一切棄てゝしまはう……」斯う自分は、ほんとうに二三日前に決心したのだ。そして仙臺に居る弟に電報を打つたのだ。

明日か明後日、弟は出て來ることになつてゐる。あと十日と迫つたおせいの身體には容易ならぬ冒險なんだが、産婆も醫者も無論反對なんだが、弟につれさせて仙臺へやつちまふ。それから自分は放浪の旅に出る。

仙臺行きには、おせいも無論反對だつた。そのことでは「蠢くもの」時分よりも一層險惡な睨み合ひを、毎晩のやうに自分は繰返した。彼女の額にも頭にも生瑕が絶えなかつた。自分も生爪を剝いだり、銚子を床の間に叩きつけたりしては、下宿から厳しい抗議を受けた。でも昨今は彼女も諦めたか、茶間部屋の隅つこで一尺程の晒しの肌襦袢を縫つたり小ぎれをいぢくつたりしては、太息を吐いてゐるのだ。

何しろ、不憫な女には違ひない。昨年の夏以來彼女の實家とは義絶狀態になつてゐたのだが、この一月中旬突然彼女の老父危篤の電報で、大きな腹をして歸つたのだが、十日程で老父は死に、ひと七日を濟ます早々、彼女はまた下宿に歸つて來た。母も姉たちもゐるのだが、彼女の腹の始末を附けて呉れようとは、實家では云つて呉れなかつた。「他所へでもやつて産ませる位ゐなんだから、嫁も居ることだし、お産の世話は出來ないから……」母に斯う云はれて、彼女もさすがに悄然とした氣持で歸つて來たのだつた。

産婆の世話で、どこかの病院かで産まして、それから下宿の下の三疊の部屋でもあてがつて、當分下宿で育てさせる——大體さうと相談をきめてあつたのだが、だん／＼時期の切迫と共に、自分の神經が焦燥し出した。

「あなたの奥さんのうちは財産家なんで、子供の面倒も見て呉れるんで、それで奥さんのことゝ云ふと大事に思ふんだ

らうが、わたしのうちはね、貧乏でね、お産の世話もしないと云ふんでね、それでわたしのことゝ云ふと、どつこまでもさうして馬鹿にするんだね？　さうなんだらう？　この悪黨野郎が！・・・」おせいは斯んなことまで云ひ出して、血相を變へて、突かゝつて來た。

「馬鹿！　誰がそんなことを云つた？・・・お前の腹の子を大事に思へばこそ、誰も親身のものゝゐない斯うした下宿なんかで、育てたくないと云つてるんぢやないか。それにお前なんかには、迚もひとりで赤んぼうなんか育てれやしないよ。赤んぼがゐなくたつて、この通りぢやないか……」

「そんな言ひわけは聞かないよ、赤んべえだ。……育てれなけりや遣つちまへばいゝぢやないか、お金を附けて遣つちまへばいゝぢやないか」

「そんなこと出來やしないぢやないか。だから仙臺へ行け……」

「行かないよ。誰が行くもんか、そんなに邪魔にされて。……赤んぼがほしいが聞いて呆れら、自分の餓鬼ひとりだつて傍に置いたこともない癖に……」

「………」自分の拳固が彼女の頰桁に飛んだ。……

ほとんど一ケ月ぶりで、二時過ぎに起きて、一二町離れたお湯へ入りに行つた。新聞にも上野の彼岸櫻がふくらみかけたと云つて、寫眞も出てゐたが、成程、久しぶりで仰ぐ空色は、花曇りと云つた感じだつた。まだ宵のうちだつたが、この狹い下宿街の一廓にも義太夫の流しの音が聞えてゐた。

「明日は叔父さんが來るだ……」おせいはブツ〳〵つぶやきながらも、今日も白いネルの小蒲団を縫つてゐた。新モス

の胴着や綿入れは、やはり同じ下宿人の會社員の奥さんが縫つて呉れて、これも出來て來て、彼女の膝の前に重ねられてあつた。

「一體どんな氣がしてゐるのかなあ?……あんなことをしてゐて。……やはり男性には解らない感じのものかも知れないな」と、自分は多少の憐憫を含めた氣持で、彼女のさうした様子を眺めて、思つたりした。

「蠢くもの」では、おせいは一度流産したことになつてゐる。何ケ月目だつたか、兎に角彼女の所謂キユーピーのやうな恰好をしてゐたのを、彼女の家の裏の紅い桃の木の下に埋めた――これも自分が呪ひ殺したやうなものだ――斯うおせいに云はしてある。で今度もまた、昨年の十月頃日光の山中で彼女に流産を強いた、と云ふやうにでも書き續けて行かうとも思つて、夕方近くなつて机に向つたのだつたが、年暮れに未知の人からよこされた手紙のことが、悚然とした感じでふと思ひ出されて、自分はペンを措いて塞ぎ込んでしまつた。

これは、自分と同姓の、而も自分とは一廻り下の同じ亥年の二十六歳の、K刑務所に服役中の青年囚徒からの手紙だつた。彼の郷國も、罪名も、刑期も書いてはなかつたが、しかし兎に角十九の年からもう七年もゐて、まだいつ頃出られるとも書いてないところから考へても、容易ならぬ犯罪だつたことだけは推測される。――兎に角彼は自分の「蠢くもの」を讀んでゐるのだ。

で、自分はまた、手文庫の底からその手紙を取出して、仔細に讀んで見た。

刑務所の書信用紙と云ふのは赤刷りの細かい罫紙で、後の注意と云ふ下の欄には――手紙ノ發受ハ親族ノ者ニノミ之ヲ許ス其度數ハ二ケ月毎ニ一回トス賞表ヲ有スル在所人ニハ一回ヲ増ス云々――斯う云つた事項も書き込まれてある。そして手紙の日附と配達された日との消印の間に二十日程經つてゐるが、それが檢閲に費された日數なのであらう。そ

してその細罫二十五行程に、ぎつしりと、ガラスのペンか何かで、墨汁の細字がいつぱいに認められてゐる。一寸してちよつと不思議に感じられたのは、その文面全體を通じて、注意事項の親族云々を聯想させるやうな字句が一つとして見當らないのだが、それが單に同性と云ふだけのことで検閲官の眼が誤魔化されたのだらうとも考へられないことだし、して見ると、この文面全體に溢れてゐる感じが、恐らく係りの人を動かしたものとしか考へられない。所謂、悔悛の情云々――さう云つたところだつたに違ひない。自分はその二三句をこゝに引いて見よう。自分としては非常に忸怩とした、冷汗を催される感じなんだが。――かうした凝膚な罪人が尚幾年かを續けねばならぬ囚人生活の中から唯今先生の爲に眞劍な筆を走らしてゐますことは、何か知ら深い因縁のあることゝ思ひます。ぶしつけな不遜な私の態度を御赦し下さいませ――尚もく深く身を焦さねばならぬ煩惱の絆にシツカと結びつけられながら、身ぶるひするやうなあの鐵枠や或は囚舍の壁、鐵扉にこの生きた魂、罪に汚れながらも自分のものとしてシツカと抱いてゐねばならぬ魂を打つけて、血まみれになつてゐるその悲惨さを體味しながらそれでも一條の灯を認めて姑息ながらに生きてゐるは「蠢めくもの」其他などに現はれた先生の藝術云々――モグラモチのやうに眞暗な地の底を掘りながら千辛萬苦して生きて行かねばならぬ罪人の生活、牢獄の生活から私が今解放されて滿足を與へられつゝあるのは云々――私に生きて行かねばならぬ私であることを訓へて下さつた「蠢めくもの」は私の醒めがたい惡夢から這ひ出さして下さいました――私がこゝから釋放された時何物か意義ある筆の力を以て私共罪に泣く同胞のために少しでも捧げたいと思つて居ります――何卒紙背の微意を御了解下さるやうに念じあげます云々――

終日床の中にゐて、やうく匐ひ出るやうにして晩酌をはじめたのだつたが、少し醉ひの廻りかけた時分だつたの

で、自分はその手紙を讀んで何とも云へない憂鬱と、惱ましい感じに打たれた。自分の作のどう云ふ點がほんとに彼を感動さしたのか——それは一見明瞭のやうであつて、しかしどこやら捉へどころのない暗い感じだつた。恐らくあの作の持つてゐる罪業的な暗い感じに、彼はある親味と共鳴を感じたのでもあらうが、それがひどく缺陷のある稚拙な彼の文章から、自分にさうした曖昧な印象を與へたものであらうと思はれたが、それにしても「泥濘に物は書けない……」自分は一種の感動から、斯う心に叫んだのだつた。彼はあの作の動機に好意を持つてゐて呉れてる。モグラモチのやうに蠢めきながらも生きて行かなければならぬ、罪業の重さに打わなゝきながらも明るみを求めて自棄してはならぬ——斯う云つた彼の心持の眞實は自分にもよくわかる氣がする。と云つて自分のあの作が、それだけの感動に値ひするものだとは決して考へはしないのだが、第一にあの作には非常な誇張がある、決して事實そのものゝ記錄ではないのだが、それがこの青年囚徒氏に單純な記錄として讀まれて、作品としての價値以上の一種の感激を與へてゐたと云ふことになると、自分は人間としての良心の疚しさを感じない譯に行かないのだ。どつちにしたつて同じことぢやないか？——自分は斯うも思ひたかつたのだが、泥濘に物を書いてはならない——さうした氣持を拂ひ退けることが出來なかつた。餘りにも暗い刺戟的な作——つまりはその基調となつてゐる現在の生活を棄てなければ、出て行かなければ——それが第一の問題なのだが、ところがどうだ？……ます〳〵深味に落ちて行くばかりではないか？「蠢めくもの」以前、またその後の生活だつて、決してこの未知の青年に對して恥ぢないやうな生活を、自分にはして來てゐるとは、云へないのだ。

たまらないやうな氣持から、自分としては滅多にないことなんだが、寒い風の外に出て、三丁目附近のレストラントに出かけて行つた。十時を過ぎてゐた。自分も鎌倉から出て來て一年餘りの下宿生活の間に、三四度も來たことのある

階下の廣い部屋だつたが、その晩は思ひがけなくクリスマスの夜だつた。入口の隅のクリスマスの樹――金銀の眩い裝飾、明るい電燈――その下の十幾つかのテーブルを圍んだオールバックにいろ〳〵な色のマスクをかけた青年たち、斷髮洋裝の女――彼等の明るい華かな談笑の聲で、部屋の中が滿たされてゐた。自分は片隅のテーブルでひとりで幾つかの强い酒の杯を重ねたが、思ひがけなかつたその晩の光景は、一層自分の氣分を滅入らせたのだつた。あの鐵柵の中の青年の生活と、斯うした華かな、クリスマスの假面をつけて粉や七面鳥の料理で葡萄の杯を擧げてゐる青年男女の生活――そしてまた明るさにも暗さにも徹し得ない自分のやうな人間――自分は醉ひが廻つて來るに從つて、淚ぐましいやうな氣持にさへなつて來て、自分の現在の生活を出ると云ふためからも、斯うした怪しげな文章など棄てゝ、あゝした不幸な青年たちに直接に、自分として持つて來たすべてを捧げたい――さうしたところに自分の救ひの道があるのではあるまいか、などゝ、いつものアル中的空想に囚はれたりしたが、結局自分はその晩の光景に壓倒され、ひどく陰鬱な狂ほしいやうな氣持で、十二時近く外へ出たのだつた。……

自分はその前年の九月の震災まで、足かけ五年間、鎌倉の山の中の古寺の暗い一室で、病氣、不幸、災難、孤獨、貧乏――さう云つたあらゆる慘めな氣持のものに打挫かれたやうな生活を送つてゐたのだつたが、それにしても、實際の牢獄生活と較べてどれほど幸福な、自由な、靜かな惠まれた生活であるかを思つて、自分は尙自分の乏しい精力で、自分だけの仕事をして行かうと云ふ勇氣を失はずに來ることが出來た。が、あの高い煉瓦塀の中での一切の自由を奪はれたやうな苦役生活の八年間――どれほどの重い罪を犯したものか、自分なんかにはほとんど想像もつかないことではあるが、何しろ彼はまだ當年十九歲の、謂はゞまだ少年と云つていゝ年齡だつたのだ。それがそれほどの重大な犯人……?そしてまた、さうした八年間の實際の牢獄生活の中にも、彼はまだ生の光りを求むる心を失はずにゐるかのやうに

も思へる。そしてまた、彼はこのさきまだ何年位ゐ今の生活を續けなければならないのか——そのことは彼の手紙に書いてなかつた。……

四月二日朝、おせいは小石川のある産科院で死兒を分娩した。それに立合つた時の感想はこゝに書きたくない。やはり、どこまでも救はれない自我的な自分であることだけが、痛感された。粗末なバラツクの建物のまわりの、六七本の櫻の若樹は、最早八分通り咲いてゐた。……

——十四年三月——



叛逆時代の將門

眞山青果

主要人物

平　將門　下總國豐田の豪族
同　將賴　將門の弟、御厨三郎
同　將平　同、大葦原四郎
興世王　武藏國權守
郡司　武芝　同國の豪族
藤原　秀鄕　下野國の豪族、田原藤太
菅原　景行　文章博士、道眞公三男
多治　經明　栗栖院常羽御厨の別當
藤原　維幾　常陸國守
同　爲憲　同目代、維幾の子息

平　貞盛　將門の從弟、常平太
藤原　玄明　常陸國廳の小使
百濟　貞連　武藏國守
神官　某
巫女　某
東の君　將門の妾
京御前　貞盛の妻
桔梗　同　妾
其他――

この脚本は本誌新年號に掲げたる脚本「平將門」と二部戯曲をなすものなり。史料の出所、脚色の用意等、總て前篇に同じけれども、もし前篇を見ずして此篇のみ讀む讀者には、將門の親屬關係、貞盛との抗爭心理などに、或は明瞭を缺く點なしとも云ふべからず。既に此篇を一部獨立の脚本となす以上は、それ等の説明を要することと勿論なれど、一方前篇を知れる讀者に向つては、重復して解釋する煩瑣の耐へがたきものあり。故にそれ等の説明は、近く劇場に上演する際に書加ふることゝして、こゝには總て省略に隨ふことゝせり。

第一幕

時――天慶己亥二年、九月下旬。午后より薄暮。

處――下總國鎌輪の宿。平將門の本館。今の岡田郡鎌庭村にて、當時の豐田郡に屬せり。

前篇戯曲平將門の序幕より五年を經たる後。將門の威勢やうやく近國にふるふとともに、來附の百姓多く、所領ひろく富も加はりて、家居のさまも次第に宏壯となり、建築式樣にも著しく京都風を加味して優美となれり。舞臺にあらはるゝ處は、下手そとなる中門口より高き廊を渡りて寢殿づくりの泉殿にもなずらふべき雅致ある一構なり。細流をひいて廊下を流し、前面に泉水をたゝへ、そのなかに石木を配して瀟洒たる小島の景をつくる。橋あり。青柳しだれかゝる。

その日は將門の一子(五歳)の初詣での祝宴の日なれば、屋内の調度裝置もきらびやかに、疊を敷き坐を設け臺盤折敷の食器を置き、中央に大なる州濱などかざる。

暖かく明るき秋の日。渡鳥の囀り時々聞ゆる。

幕明く。――郎黨比都目、子諸の二人。酒器など持ちはこびゐる。いづれも新調にて改まりたる服裝。

村の童六七人、廊の外より同音に囃し立てつゝ入り來る。

童等　和子の祝ひだ。お供餅(そなへ)くれせえ。おふくでくれせえ。

子諸　餓鬼めら、また這入つて來たか。

童等　(唱ふやうに)和子の祝ひだ、おふくでくれせえ。おふくで、おふくで、おふくで――。

子諸　えゝ、これ。

子諸、折敷に盛りたる小さき團餅を庭上に投げる。童等折重なりて拾ひ合ふ。

比都目　さあ、出ろ〳〵。みな出て行け。

童等　和子の祝ひだ、お供餅くれせえ、おふくで、おふくで。

比都目　え〻煩さい。蛭田に放りこむぞ。

童等はまた同音に囃し立てつ〻遁げ去る。

子諸　（廊の方に耳を立てゝ）何んだ、何を怒つてゐるのだ。

比都目　また弟君のことだらう。

子諸　四郎のとのも惡い。今日のこの日に、何處をほつき歩いてゐるのだ。

比都目　大方、藤代の三日市にでも浮かれてゐるのだらう。京都からさすらひの傀儡どもが大勢來てゐるさうだ。

子諸　苦々しい話だ。

二人は呟き去らんとする時、三郎將賴と兄の將門と言ひ爭ひつ〻廊を渡り來るため、二人は避けて立つ。三郎は祝日らしき服裝にて、烏帽子など行儀よくつけたり、將門は三十六歲、舍弟三郎は三十二歲。少しく酒氣あり。

三郎　（面膨らして）きやつのこと、おれに云つても判るものか。

將門　居なければ居ないで、庇ふことはないのだ。おれは今の今まで、舍弟について、四郎が結城寺へ詣つてくれたとばかり思つてゐた。

三郎　誰が庇ふものか。おれは面も見たくないのだ。

將門　が、今日の日を忘れる筈もあるまい。何處へうせたのだ。

三郎　おれが知るものか。(郎黨に)比郡目、武藏の客人をここへ案内せよ。

郎黨等去る。

將門　すると何か、四郎は何うあつても、莊司の乙娘との婚儀は不承知だと云ふのか。

三郎　おれは、きやつに煮湯を飮ませられたんだ。仲に立つたばかりにおれは、男の莊司の前に、怠狀を取られる場合なのだ。莊司方で怒るのは當然だ。

將門　四郎は菅家の姫を……やはり思ひ諦めないのかなあ。

三郎　女子に嫌はれて、へろへろ泣き廻る、――おれは蟲唾が走る。

將門　しかし、おれに盾ついて何うするのだ。今日の吾子の初詣でには、あれは介添に立つて、諸事宰領してくれる約束なのだ。吾子一生の吉日に、けちをつけろと云ふものだ。

三郎　見掛け次第、蹴倒してくれる。

將門　あいつ……そんな無勘辨なやつかなあ――。

三郎　おゝ、兄者。(ふと思ひ出して)そこは昨日玄明を、上總の叔父のところへ使にやつたのか。

將門　うん、遣つた。(と少し狼狽する。)

三郎　そこも知つてるだらうが、あれは常陸の國廳でもひどく評判が惡い男なのだぞ。百姓の味方のやうな顏してゐるが、國司との間に立つて、うぬが私腹を肥してゐると云ふ噂だ。

將門　何、それほどの惡者でもない。(と紛らすやうに云ふ)それにおれとは同じ里に育つて、童友達なのだ。

三郎　何の用で上總などへ遣つたのだ。

將門　（拳に顳顬をコツ〳〵叩き）酒だ、酒だ。おれは昨日もひどく醉つてゐた。（羞らふやうに笑ふ）

三郎　上總の叔父者が病氣だと云ふが、その見舞にでも行つたのか。

將門　然うぢやないのだ。おれは醉ふと、無闇に人をよろこばせたくなる癖がある。萎れ返つてゐる者の顏を見ると、好し、こやつをおれがよろこばせてやらう……その時は惡氣でない、心から然う思ふんだ。

三郎　然し――

將門　あいつと飲み出す時から、おれは然う思つたよ。玄明が常陸で評判が惡くて、身の置處なさにおれに隨つてゐるのを知つてるから――あゝ、こいつ又おれは悅ばせを云ひたくなるぞ、困つたものだ、と氣をつけながら……酒が醒めると案の定それをやつてるのだ。この春、武芝のことでも散々してゐるのに、何うしておれは斯う醉ふと人に諂ひ氣が出るのだ。

三郎　玄明が兄者に、何か口說き立てでもしたのか。

將門　然うぢやないのだ。（苦笑）たゞきやつが妙に沈んでゐるのを見ると、無上に斯う、慰めてやりたいやうな氣がするのだ。人がおれを羨んでゐるなと思ふと、おれは耐らなく苦しくなるんだ。何んだか斯う……罪を償ひたいやうな氣がするんだ。おれの使者に上總にでも行けば、彼の肩身も廣からうと考へたのであらうな。はゝはゝ。

三郎　はゝはゝゝ、馬鹿な。

將門　そしては、事を繁くして後で苦しんでゐる。武芝のことでもおれは後悔してゐるのだが、懲性もない酒だ。

三郎　然し、上總へ使をやつたのは惡いことではない。おれは然うあるべきことだと思つてゐた。

與世王（少し改りて）豊田の主。わしのためにも、そこは好い智識であつた。百姓と胡麻殻は搾るほど脊が出るなぞと、京都の先輩だちの話に聞いて赴任して來たが、なか〳〵そんなものではない。農民の怒りは武人の怒りより恐しい。百姓の心にそむいて、國の政治のならぬことを、わしは初めて知つたよ。三郎にも禮を云ふぞ。

將門　然う云ふのが、和殿の腹中のいさぎよいところだ。その賢さがこの春の武芝一揆を鎮めたのだ。けしてわれ等づれの功名ではない。

與世王　けれども愉かつたぞ、三郎。はゝはゝ。數百の官兵のなかに、和主たちたゞ兄弟二人で國府の廳に乘り込んで來て、頭ごなしにわしを怒鳴りつけるのだ。こちらは京都流に衣冠かいつくらふて、新任國司の威勢を見せやうとしてゐるところへ、いやとでも云はゞ傍なる切燈臺で、おれを擲りつけやうと云ふ剣幕だ。はゝはゝ。

將門　醉つてゐたのだ。はゝはゝ。（忸怩たるが如く、額を撫てゝ悲しく笑ふ）

與世王　二人とも、臭かつた〳〵。はゝはゝ。

三郎も笑ふ。武芝も笑ふ。

與世王　然しそのために斯ふして、武芝やほかの郡司だちとも懇ろに話し合つて、國の政治が滑かに行はれるやうになつたのだ。京を出る時に、新任の挨拶ながら太政大臣家に伺候すると、流石は老練の政治家だ。忠平公はわしを間近く召し寄せて、訓戒をたまはつた。地方の任に赴くものは、わが權威を急いではならぬ。政治は土地の百姓にあづけるところで、その土地の豪族郡吏等の歡心を失ふてはならぬ、とあつた。が、然し、こちらは新任の氣を負ふてゐる。そんな生溫るいことでは、公家の威權が立つものか、好しおれは權門の威勢をうしろに着て、三年間未納の租税を一季に皆納して功名を京都にあげて見せやうと、實は相役の經基朝臣と申し合せて、この武芝

つ都から陸奥に行く途にかゝつたつたが、見事に失敗してあの一揆騒動だ。はゝはゝゝ。流石に忠平公は、達眼達務の政事家だと、恐れ入つたよ。

郎黨某入り來りて、將門に何やら囁く。

將門　然うか。それは惡い、いま參らう。(と、その郎黨を去らしめ) 景行卿がむづかつてゐられるさうだ。今日の好者ゆゑ、機嫌をそこなふてもなるまい、行つて來る。

興世王　打遣つて置け、癖になる。ありや自儘泣上戸で、父君の筑紫流罪の一卷をくどき立てゝ一吹ひ吹ひないと、酒がうまく醉はないんだ。

將門　しかし、然うもなるまい。

興世王　そして、京都から叙任の辭令はまだ下らないか。

將門　(少しうろたへて) あれは和主の早推量だ。そのやうなことのある筈はない。

興世王　いや、然うではない。わしは確かなる筋からの注進に聞いたのだ。三郎、いよ〳〵兄者は官人だぞ、下總の大椽は動かぬところだ。

三郎　それは嬉ばしうござります。

將門　つ、つまらぬ事を云ふな。(赤くなりて) おれはそんな、身ではない。

武芝　いや、その事なれば、諸方の沙汰でござりまする。武藏の内亂を鎭撫のかどにて、近々京都よりは、大椽の職任命の官使が下ると聞いて居ります。の、權の守のとの。

將門　嘘だ、嘘だ、流言だ。三郎、客人にもてなし賴むぞ。

将門、叱るやうに言ひ放ちて、坐を立ち、去る。

與世王（その後姿を見送りつゝ）何んだ、きよと〳〵沈着かない。かれは七位の外官ぐらゐでは、不足に思つてゐるのか。

三郎　然うは……ございますまい。在國の武士が居ながらにして官途に拜するとは、家にとつての面目にございます。

與世王　その筈だよ。これと云ふもみな、忠平公の贔負によるのだ。輕う思つては濟まぬ。それに先日この内命を初めて打明けた時には、その身もいたう悦んでゐたのだ。父良將は鎭守府將軍をも拜した後ゆゑ、これで亡父への孝養も立つと感佩してゐたのだ。

三郎（酒盞をすゝめつゝ）心が木の葉のやうにゆらぐ男ゆゑ、あゝ云ふのも一時と思はれます。それにしても、兄者に恩命の沙汰といふは、この夏頃からと思ひますが、今以て延引してゐるのは何うございませう。

與世王　されば、わしもそれを考へてゐるが、これには仔細がある。かならず經基の業だ。

武芝（手を打ち）なる程、これは然うあらう。

三郎　經基？

與世王（盞をあげつゝ）うむ、和主は知るまい。貞純親王の御子で、やはり源氏姓を賜つた仁だ。

三郎　お名は聞いて居ります。六孫王と仰せらるゝ方でございまするか。

與世王　それが此度、わしと共に、わしの次官たる武藏介に任官して、當春同道して京都から赴任したのだ。そして着任早々、（武芝を指示しつゝ）この男のあの騷擾に際會したのだ。根が公達そだちの、世間見ず、血氣の若殿だ。農民の暴動ぐらゐは、官府の威勢で一睨みに睨み据えられるものと思ふてござつたのだ。わしが和主たち二人が調停の斷を立てゝ、武芝の農民と和議を結ぶとするのを、飽迄に不同意なのだ。人民に媚びて、公家の權威を失

ふものだと云つて、一徹にわしを攻撃なさる。近つてこの上は民を征討せずに、百姓の申し狀をゆるすならば、然やうな長官の下に吏務はつとめられぬ。京都に訴へて裁斷を待つと、悪鬼としてわしを責めたが、わしはそれにかまはず將門の忠言にしたがつて、農民等の租稅未納を三箇年猶豫する約束をしたのだ。わしも然し、次官の建議を全るで無視するのは、少し亂暴ではあつたが、えゝこゝが決斷だと思つたのだ。

三郎　初めて聞いた。あの時そのやうな内情でござりましたか。

興世王　（次第に醉を發しつゝ）そりや隱してゐたのだ。はゝはゝゝ。あの時、經基の意見など氣振りにも出して見ろ。和主たち濫妨者ども、何う狼藉を働くか知れたものではない。惡くすると、（頸を叩いて）これが無い、これがない。はゝはゝゝ。

三郎　それでは、經基朝臣はそのため御歸京されたのでござりますか。

興世王　有様は恐しくなつたのだ。和主たち二人が國府の庭にあばれ込んだ時には、介殿まつさをになつて、縁のかげにガタ／＼顫えてゐた。坂東さむらひ、荒男と名には聞いたが、見るが初めてだ はゝはゝゝ、恐氣をふるつて、這々の體にて都に逃げ歸つたのだ。はゝはゝゝ。

三郎　然し、それでは、朝臣の申狀によつては、守のお身にもかゝはりませう。

興世王　うむ、興世王は將門武芝と同類になつて、公家に謀叛のきざしあるとか云つて、しきりに院門宮家を讒訴してゐるさうだ。はゝはゝゝ。しかし太政大臣殿の肚はまだ白状しない。弱者の藉口にまどはされて、わしを疑ふほどの奸條はならぬ筈だ。直ちに御教書をもつて、事の次第を問はせられて來たから、わしは近隣五箇國の國守等の證明書を添へて、一伍一什を明細に報告したのだ。すると折返してわしに褒賞のお言葉があつたによつて、

わしはその時の將門の働きを申し述べて、相當の恩賞が是非あるべき旨を切に内願して、そつ後そのゆるし文を内々頂いてゐるのだ。

三郎　然うか……。それではたゞの取沙汰ではない。

與世王　詰まるところ、これがわしの藤原家への奉公なのだ。諸國の田地は諸國の武士を頭人として、その下に農人が耕してゐるのだ。それを藤原一家が京都に懷手してゐて、富の全部を誅求しやうと云ふのは間違つてゐる。藤原氏は何代になる、先祖鎌足公の勳功が何時まで光つてゐるものと思つてゐる。な、武芝、然うだらう。と次第に醉を發して）春日神社の金箔だけで、子孫永世に世の盛りを見やうとするのは、押が太いと云ふもんだ。諸國の武士だつて人間だ、目が覺めて來る。鹿山は犬に追はせて人が射ると云ふ習があるけれど、犬だから好い、人間は自分の口にはいらぬ鹿を、何日まで犬になつて追ひ廻してゐるものか。な、三郎、然うではないか。

三郎　（強く二度ほど頷づきて）然うだ。然うだ。

與世王　だからまろは、京都から官人が下降するたびに然う云ふ。足下たちは時勢を知らない。眞に藤門の榮華を續けやうと思はゞ、狩犬にも一臠の肉塊を與へよと云ふのだ。諸國の武士豪族を籠絡して、狗どもの腹をへらさぬ間だけが、どうやら藤原の威勢がつゞくのだ。まろはこたび地方に赴任して見て、初めてこの眞諦をさとると共に、さすがに關白どのゝ着眼の高いのに恐れ入つたと云つて聞かせるのだが、經基などの凡庸輩にはそれが解せないのだ。經基ばかりぢやない、官位だほれの京都の紳冠者どもには、一人だつてこの生きた政治のわかる者はない。第一、右大將の實頼卿あたりからして、藤原家の勢力を過信してゐる。諸國のこの狩犬どもの實力を知らないのだ。官位權柄の前には、いつまでも尻尾を振つて、手を舐りに來るものと思つてゐる。

三郎　（笑ひながら）狗はひどいなあ、われわれも狗か。

興世王　狗だとも、はゝはゝ。なかにも和主たち兄弟は、獒犬と云ふ恐しい大犬なのだ。だからおれは、和主たちを怒らせぬやうに、斯うして國の爲政（まつりごと）にもはからひをしてゐるのだ。おれの方が却つて、經基などより人の惡い政事家なのだ。

武芝　道路の噂に聞きませば、關白殿下と右大將の君とは、とかく御親子の間が不和合のやうにも聞きまするが……。

興世王　親子の位爭ひだ。實頼卿も最う四十だ。父君にかはつてそろ／＼政治の實權を握りたい歳だ。然し老練な忠平公の目からは、まだ／＼黄吻の弱輩と右大將を見てゐる。たゞ藤原家あるを知つて、天下に勢ひといふものゝあることを知らないと輕視（みくび）つてゐるから、容易に關白職を右大將に讓らうとしない。實頼卿にすれば、それが不平でたまらない。事ごとに父君殿下の政治に對抗を企てゝ、いま京都の政治は二派に分れて軋轢をつゞけてゐるのだ。だから地方への下文（くだしぶみ）なども、その意見がまち／＼で、時には取捨に迷ふやうなこともあるのだ。

武芝　それはしかし、御親子の間に、益のないことゝ思はれますな。

興世王　未熟者ほど功名を急ぐのだ。經基がまろの眞意を解せずして京都に逃げ歸つたと同じく、右大將の側近では、關白殿の極意は分らない筈だ。實地練磨の功をつまない若殿原は、殿下が諸國の豪族武士（と、三郎の背など叩り）現に斯う云ふ狩犬どもを巧に操縦してゐる苦心を察しないで、ひたむきにその武力に媚びて、公家の信を失墜するもの……因循だ、姑息だと罵り立てゝ憤つてゐるが、然うぢやない、然うぢやない、はゝはゝ、その因循姑息と見えるところが老練者の術なのだ。なあ、三郎、然うだらう。

三郎　また狗か。（苦笑）

興世王　いや、この時代は犬が結構なのだ。實力もなく實權もなく、虛名を擁して都大路をねりまはる殿上人よりは、自由に耕して自由に食つて、わが天地を開拓する諸國住人の方が、はるかに生甲斐ある生涯なのだ。京都生活の窮屈さを見ろ。男も、女も、みな、虛禮虛飾にあくせくして、のび／＼とおのが肺臟で呼吸してゐるやつは一人もない。おのれのなかに、皆おのれを失つてゐる。それ、何故だ。生活そのものが嘘なのだ。

三郎　出たな、はゝはゝ。

興世王（話の腰を折られて、三郎を見る）何が——

三郎　まあ好い、それで。（と、武芝と顏を見合はせて、笑ひゐる）

興世王　彼等は自分で自分を養つてゐない。他人に耕させて、われが食ふと云ふ根元の嘘に氣がつかない。そこに生きた人間があり得る筈はないのだ。みな亡靈だ。衣冠束帶した權力の亡靈なのだ。だから今諸國の地方官が國々に赴任して、在國の任期がみちても、或は再任を願ひ或は辭官してまで、その國に永住する者が多い。それ、何故だ。京都生活の虛僞につく／＼愛措がつきて、山澤の間にわが生を追ふの自由さを初めて知るからなのだ。わかつたか、三郎。現におれなどもその一人だ。もうおれは歸らぬ。京都は駄目だ。

三郎　それ、何故だ——が、出るところだらう。はゝはゝ。

興世王　馬鹿にするな。なあ武芝、おれも今度は新田を開發して、永世土着の本據を武藏野につくるつもりだ。なあ武芝、あの馬込の原は望みがあるぞ。あれを開墾すると、廣大な莊園になるぞ。協力して遣らう、おれは大に遣る。なあ、武芝。

武芝　たゞ農人に不足して困ります。然ら農人と云へば……（三郎に）そこは、將城境まで出向いて、大勢の蝦夷など

もを奴隷に買つて來られたと云ふではござりませぬか。その模樣が承りたいと思つてゐる。

三郎　何、たかゞ一部落、八九十人の蝦夷どもなのだが、兄者にひどく叱られました。(と苦笑してゐる)

興世王　和主は、裸馬を乘り廻して、青竹をもつて蝦夷どもを擲り／＼、次第に官地まで侵略してゐると云ふではないか。弟を相馬の莊に分家したが、彼の性分で餘りに富を急ぐので困ると、兄はわしに愁訴してゐた。濫妨が過ぎると、今に京都から睨まれるぞ。

三郎　何、兄者が因循過ぎるのだ。兄者こそ今の勢に乘ずれば、下總半國に領分をひろげられるのだが、その心がないので困る。

　將門、急がしく出で來る。

將門　三郎、三郎。

三郎　何んだ。

將門　塗籠から結城絹を十端ほど、臺に据へて出してくれ。

三郎　何うするのだ。

將門　話が諄くてならぬ。引出物を不足におぼすのだらう。

三郎　景行卿か。

將門　(前額をコツ／＼叩いて) 頭腦が痛くなつた。

三郎　だからあんな者を、今日の尊者などに招ぐことはないのだ。

　三郎呟きつゝ出て行く。

將門　おれはあの卿を卑怯者だと思つてゐたのだ。
興世王　おゝ、豐田の主。(と、盞をさし)あんな奴は打捨てゝ置け。何うだ、さ、一つ酌まう。(と立つて來る)
將門　然うだ。が……………然うもなるまい。あれを歸してから、そことは徹夜でも飮まふ。兎も角、歸して來る。
興世王　(立つて手を取り)打遣つて置け。あんな老爺に、何の禮儀がある。
將門　けれども、官位のある人だ。
興世王　官位ならおれにだつて、從四位の上がある。はゝはゝゝ。坐れ、坐れ。(と無理に坐らせ、盞を持たす)全體、和主は律儀過ぎる。もう少し大膽に、尊大になれ。今東國に和主と肩をならべる者に誰がある。常陸合戰以來、貞盛は這々の體で京都に逃げ歸るし、常陸源氏の一族はすつかり屏息して、そこの鼻息をうかゞつてゐるのだ。
將門　(煩さゝうに)それは最う分つた。そこは醉つてる。
興世王　醉つてゐても、わしは僞りを云はぬ。なあ、武芝。
武芝　然やうでござりますとも、當時近國に於いては――。
將門　もう好い。(と荒らかに武芝を叱り)興世の主。そこは何も、おれを然う英物にする要はあるまい。有りのまゝの將門で交つてくれゝばそれで好いのだ。追從ぐちを聞くと、腹が濁つて見える。
興世王　追從とは何んだ。(少しむつとする)おれは和主の有りのまゝの姿を云ふのだ。
將門　おれの懼いことは、今まで母家の客人たちに散々聞いて來た。(不快さうに庭面を見詰めて)おれは皆に擧め稱へられると、心が寂しく、孤獨になるんだ。(と少し涙を含み)おれは、そこばかりは尋常に、おれを普通の平人としてつきあつてくれる者と思つた。そこ達は、人にむごい。(と歎息)

興世王　……。（不審さうに將門を見詰むる）

將門　（又顏を上げ）好いではないか。何故おれは人と同じ足音を立てゝ、同じ木の下をくゞつて、小さく、咲出に——人と同じやうに生きては惡いのだ。おれを然う、人々の間から取り離すことはないと思ふ。今日は、吾子の五つの初誕だ。おれは世間並の父として、子のために、世間並な祝ひ酒を酌み交はして、世間並な情愛に醉ひたいと、おれは思つてゐるのだ。何故、おれを然う寂しがらせたいのだ。

興世王　そこゝそ、醉つてるな。顏色が蒼くなつた。

將門　おれは、頭が痛いのだ。

興世王　うむ、例の恩命一條で、そこは皆に祭り上げられ、羞澁んでゐるのだな。はゝはゝゝ、何も恐がることはない。

將門　然うだ。これは云つて置かなければならぬ。その恩命の一條だ。（屹として坐を向け）わしが當今代賊蔡勵を鎮撫したかどにて、下總の大椽に任じられる内報があると、最初に言觸らしたのは貴所だぞ。

興世王　言觸らす……？それは事實だ。

將門　聞け。おれはその恩命を希つたことはない。

興世王　願つても願はなくとも、それは關白殿からの任命なのだ。

將門　そんなら何時……何時、その、叙任がくだつた。

興世王　それは内報だ。正式にはいつ叙任あるか、それは知らないが……　然し事實は事實だ、僞りにされてはこまる。

將門　おれは大椽に任じられることを、希つてはゐない。好いか、第一に、それを忘れてくれるな、おれはそこを責め

なければならない。

興世王（當惑さうに）小次郎。今日は何うしたのだ。

將門　常陸の下役をつとめる、玄明（はるあき）といふ者から聞いた。京都ではおれに恩命どころの沙汰ではない、貴所や武芝などとおれが同志になつて、かへつて亂民を唆かすと云ふ嫌疑があるのだ。

興世王　そりや有つた。經基は然う讒訴したのだ。

將門　まあ、聞け。で、京都では、上總下總、常陸、上野、武藏、この五箇國の地方官を更迭して、おれ〳〵に脅迫を加へやうとしてゐるのだ。

興世王　うむ、その話もあつた。右大將側の公卿達は、みなそんな空想の議論を主張してゐるのだ。

將門　おれは任官し得ない失望から、和主を責めるのぢやないぞ。和主の輕率と、不信義を嫌ふのだ。もと〳〵おれは、現在のまゝで何んの不足もない。また武藏のことも然うだ。おれは手柄とも何んとも思つてゐない。酒の上、一日の客氣から、隣國の事件にまで參當して、事を繁くしたことを自分で恥ぢてゐるんだ。

興世王　ま、わしの話を聞け。なる程、今京都には政治の意見が二派に分れて、關白殿下と右大將と御親子の間に爭論あることは知つてゐる。

將門　その話おやない、聞け。和主がもしおれを親友と思ふならば、おれのこの粗暴と、客氣と、ものに出過ぎる惡癖とに手綱を加へて、おれを抑へ、おれを鎭めてくれるのが當り前なのだ。それをおれが大椽の叙任があるなど言觸らして……

興世王　大椽の内介は、事實だ。おれは殿下からの御内書を持つてゐる。右大將がいかに躍鬼となつても、天下の萬機

はいま父だ殿下の掌中にあるのだ。

將門　えゝ、然うぢやない。おれはそれを云つてるのではない。

與世王　それなら何んだ。

將門　えゝ、おれは貴所と話すまい。おれは、大祓の叙任を、決して待設けてゐない。それだけ云つて置くぞ。

將門、不快さうに庭面の一所を見詰める。

與世王　おれも言葉が荒かつた。（と語氣を改め）しかし和主は、初めその内命を話した時に、わしに向つて悦んだではないか。

將門（庭を見詰めたまゝ）家のためには悦んだ。（と投付けるやうに云ふ）

與世王　家のために悦んだと云ふのは、自身のためには悲しんだと云ふのか。

將門　もう　好い。

將門、ブイと立ちて去る。三郎戻り來りて、擦れ違ひたれど、言葉も掛けず。

三郎（兄の後姿を見送りて　座につきつゝ）何うしたのだ。

與世王　何か　機嫌にさはつたやうだ。例の任官の話をしたゞけなのだ。

武芝　わたくしども口を出す事ではございませぬが　殿はすこし御酩酊ではございませぬか。瞬目やゝ強いやう……れます。

與世王　然う云へば　少し涙含んでゐたやうだ。

三郎　何、酒が過ぎたのだ。今日で祝日が三日つゞいたのだ。亂酒のあとでは、いつも物悲しくなる男なのだ。

武芝　四郎のとのは、どうなされました。

三郎　あいつには困ります。兄者も、それに心を痛めてゐます。

興世王　菅家の姫に戀して、その失戀に苦しんでゐると云ふではないか。

三郎　書物を讀んだのが惡かつた。この頃は、背中に翼のついてゐる人のやうなことを云ひます。

　將門、悄然として戻り來る。

將門　三郎。上總の叔父者からの使者だ。おぬし會つてくれ。

三郎　病氣が差重つたのではないか。

將門　それは分らぬ。

三郎　叔父者はそこに對面を求めて來たのだらうが、全體對面する氣なのか會はない氣なのか。

將門　玄明が今日、行向つてゐる筈だ。返事はこの方からと云へ。

　三郎、去る。將門、座につく。

將門　今の程は、わしも言葉が過ぎた。武芝の郡司にもあやまる。どうもこの頃は、氣がムラ／＼してならぬ。（と苦笑する）

武芝　時候のせひではございませぬか。

將門　おれはこの頃高い危い木の枝に登つて、下を見て眩暈するやうな心持だ。（寂しく笑ふ）

興世王　そこの癇癪で、おれまで酒が醒めた。はゝはゝゝ。（と酒盃をとり上げ）そのうち一緒に、那須の湯にでも行かう。

將門　うむ、おれも久しく狩獵に出ない。

興世王　今聞けば、上總の良君が病氣なのか。

將門　老病だ。この冬はもつまい。

興世王　いつぞやの合戰以來、和睦にはならなかつたのか。

將門　うむ、あの儘引分れになつて、双方とも押默つてゐるだけだ。和睦するにも、今更その端緒もないからなあ——。

興世王　何も端緒などいるまい。そこから見れば叔父御、內方から見れば父上だ。大病で伺ひたいと思ふのはもつとものの次第だ。

將門　おれは然し、怨み通して死なれた方がいゝと思ふ。叔父の悴達は幼弱だ、おれを敵として死ねば、殘つた悴たちが心元ないから和睦すると云ふなら、おれの考へてる叔父が賤しい人になる。それが厭だ。

興世王　好くもいろ／＼に考へる男だ。はゝはゝゝ。

將門　恐れる人が、一人づゝ消えて行くといふのは、寂しい事だ。（と凝つと一所を見詰める）

三郎、遽しく入り來る。

三郎　兄者／＼。貞盛が京都から下向したのだ。常陸の大椽に任じられたのださうだ。

將門　（流石に愕然として）何。貞盛が大椽——

三郎　聞くほど、呆れた臆病者だ。大椽に任ぜられても兄者を恐れて、再三辭任の愁訴をしたが、公家のお許しなきためトボ／＼と下向したが、直直に常陸の國廳に赴任しかねて、迂回して上總の叔父のとの[illegible]たさうだ。

將門　……（熱心に三郎を見詰む）

三郎　しかし叔父御は立腹して、對面をゆるさなかつたさうだ。無論、兄者の意趣を恐れたのだらう。叔父御は子息た

ちの將來を考へて貞盛を助けて兄者に怨まれては、上總の家が立たぬと思つたのだらう。

將門　……？

三郎　貞盛か。彼はまだ常陸へは赴任せぬと云ふから、何處か其邊りをうろついてゐるのだらう。叔父御は貞盛をかくまつたと思はるゝが心苦しさに、今日わざ〳〵使者を立てゝ寄來したのだ。

將門　然うか………。(大息、沈思。たそがれゆく庭面を見詰める)

興世王　話中だが、まろには何うも飲込めないなあ。貞盛の家とこの家とは、五年以來むすぼれて解けない怨敵の間柄だ。その貞盛を大椽に任じて常陸におこすとは、殊更に爭端を求めるやうなものだ。日頃練達の關白殿にも似合はぬ。大椽と云ふのは聞誤りではないか。

三郎　わしもその不審があるから、使者に問ふた。やはり然う云ふ。

興世王　然し、然うかなあ………。

將門　(屹と顏を上げ)三郎、兎に角使者を歸せ。おれには咄嗟の思案がない。

三郎　叔父者はそれにつけても、そこ夫婦に、是非生前の對面をしたいと云ふて、明暮(あけくれ)佛間に看經(かんきん)して、そこの來着を待つてゐるさうだ。何んと答へる。

將門　それも考へる。歸せ。

三郎去る。

舞臺やうやく暗く、母屋の方の歡聲、田樂歌など聞ゆる。

武芝　との、との。(と興世王に)もしや京都に、何か變動があつたのではござりませぬか。

興世王　いや、そんな事はない。何かの間違ひだ。變動があれば、第一、わしに宣符が下る筈だ。

武芝　然し……。

將門、急に手を叩き人を呼ぶ。比都目來り、跪ふ。

將門　吾子はまだ初詣から歸らないか。暗くなつて來た。

比都目　たゞ今、黒人を坂迎へにやりました。したが、御厨の別當が路次の警固につかれたさうでございます。お氣遣ひはございますまい。

將門　何、常羽の經明が吾子の警固に立つた。誰が頼んだ。

比都目　四郎のとのが見えませぬゆゑ、三郎のとのゝ御計ひでございます。

將門　（舌打して）然う云ふやつだ。三郎を呼べ。

比都目　は。

比都目、去る。

將門　武藏の客達。おれはつく〴〵たよりなき弟どもを持つた。

興世王　何うしたのだ。

將門　經明も經明だ。將門の子だから、倔強の丈夫が、恥もなく物具つけて從者に立つのだらう。その心が卑しい。

興世王　それは然し親切だ。父儀のことゆゑ……

將門　いや、嫌ひだ。（遮つて云ふ）然う云ふ命りかな事をするのは、おれは嫌ひだ。豐田の百姓で澤山だ。名も位も欲しくない、百姓だ、おれは豐田の一農夫で澤山だ。威儀をつくろふのは、おれを苦しめるのだ。經明の、諂ひ男め。

渡殿に醉ふたる足音。泥醉してまつはりつく景行を持て餘しながら三郎、入り來る。菅原景行、六十三四、白髮、白髯、狩衣、烏帽子。

景行よろぼふて廊に尻をつく。三郎それを打棄てゝ兄の前に來る。

三郎　兄者、何んだ。

將門　（大聲）馬鹿者。

三郎　う。

將門　四郎がゐぬなら、何故われが介添に行かぬ。叔父が舅の警固しては、恥にでもなろのか。御厨の別當に先を驅けさせるやうな、この家はこんな家ぢやない。おれは嫌ひだ。

三郎、面ふくらして無言。景行よろ〳〵起きて來る。

景行　將門ぬし。老人、爛醉ぢや。はゝはゝ。殊に過分の引出物で、痛み入る。祝歌申さうよ。伊勢の海の淸き渚の潮間に……。（と扇にて手拍子、催馬樂めける歌）

將門　は……、は……。（三郎を睨みつゝ答ふ）

景行　莫告藻や摘まん、貝や拾はん……はゝはゝ。（興世王を見つけて）おゝ、武藏の權の守、來てゐるな。

興世王　三位卿。久しく對面しませぬ。（苦々しげに云ふ）

三郎、プイと去らんとする。

將門　（赫として）三郎。

三郎　何んだ。（睨む）

景行　まあ好い、小次郎。（と將門の手を取り）話がある、來い、來い。——

　　景行、無理に將門を興世王の前に坐らす。

景行　ところで興世ぬし。そこに聞けば分かるだらうが、こたび關白殿からこの小次郎に、恩寵の沙汰でもあるやうに聞いたが、眞實かな。

興世王　はい、そのやうな噂もございます。

景行　さて／＼、この家は吉兆つゞきだ。富といひ武力といひ、勇名威勢……先づもつて近國隨一の武士ぢや。それに官位の沙汰まであれば、それこそ尻に箕ぢや。めでたい、めでたい。

　　將門、苦りきつて聞きゐる。

景行　ところで、小次郎。和主は相馬の莊を與へて、三郎を分家したからには、その弟の四郎にも、いづれは土地を附與して一家の主となす心であらうな。

將門　はい。かれの心次第でございますが、大篠原の新地一面は、四郎に配分する心で居りました。

景行　大篠原の新地……うむ、然うか。さて、それに就いての相談だが、四郎は幼少よりのまろの教へ子だ。どうだ、聟に取らうか。

　　將門、景行の顏を見る。

景行　聞いてゐるだらう、はゝはゝゝ。わが末姫と四郎との經緯だ。はゝはゝゝ。（と輕薄さうに笑つて）わしもあの姫だけは京住居させたう思ふたが、併また考へると……思案はいろ／＼ぢやて。はゝはゝゝ。そこが下總の大株となれば、われ等の所領も永世安堵といふものぢや。今の武名に官位が添ふたら、先づ／＼、藤原の威勢もこの

國へは狼藉しさうにない。どうだ、四郎を聟にしやう、吾が聟に取らう。

將門　………

景行　氣遣ふな、氣遣ふな。親のわしが取りもつのぢや。はゝはゝ。姫に否やのある筈はない。最惜しの姫ぢやが——

この家が氣に入つた。小次郎、謡しやう、謡しやう。

將門　（吃りつゝ）四郎は男子だ。あれにも、あれの分別がござりませう。吾子が遅い——何うした。

將門、立つ。景行、見上げる。

（道具廻はる）

同　第二場

時——前場と同日、夜。

處——同じ館内の東門口

正面やゝ下手寄りに、築地にて手法を略したる四足門立つ。館の東門を内部より見たるところ。築地あり、下手を切掛垣にてしきり、垣の内に植込の梢茂る。上手は大臣外よりかけて、岩疊づくりの板屋を見す。厩舎なり。舎内の一部を分ちて土間となし、秣を積み。農具を置く。内部は暗くして見えず。舞臺には季節の樹木三四本。門外に篝を焚く。

三郎は秣置場の戸口に立ち。高聲に罵りゐる。暗きなかより酔ふたる四郎の聲の聞ゆる。百姓三四人。不安

さうに遠くより眺めて囁き合ふ。鐘の音默する時、母屋の方より振鼓、銅鈸子、拍木などの音賑々聞ゆ。

三郎（苛立ちて）出ろ、出ろ、出て來い、四郎。

四郎　………。（何か云ふ、聞えず）

三郎　何イ？何。出なければ引擦り出すぞ。兄者は散々の立腹だ。

四郎　………（聞えず）

三郎　兄者ばかりではない。おれが用がある。出て來い。

四郎　煩さいなあ！睡ぶたうてならぬ。

三郎　瘋れ男。にしは四つ足の秣にくるまつても眠りたいか、出ろ。

四郎　………

三郎（農夫等に向ひ）松火もて來い。引擦り出してくれべえ。（百姓の躊躇するに苛ちて）えゝ、持て來い。

農夫等、仕方なく去る。

四郎（ガサ〳〵と秣を搔き分け）騷々しい。（暗きより出て來り、顏や頭の乾草を拂ひ除けつゝ）そして三郎、何の用だ。

四郎、二十三四歲、神經質にて銳き顏、裝束の袖などちぎれて、亂がはしき姿。

三郎　その、その面を見ろ。（忡々しく指示し）よく日の下に立てる——

四郎　ふん、又初つた。（苦笑。そこの秣桶にベタリ腰をおろす）

三郎　女にうとまれて吠面するのが學生か、色紙短册をたんと書き散らして、學何の果は泣ッ面か、おれには薄氣味い！

（唾を吐く）

四郎　はゝはゝ。（兩手をグタ〳〵と膝について、面白さうに笑ふ）

三郎　それは好い。おれの體面はどうしてくれる。おれは兄者に頼まれて、和主を莊司かたに聟入りする、仲人に立つてゐるのだ。

四郎　それは、好きやうに頼む。

三郎　それなら、何故舅の家の酒を一度でも飮んだ。

四郎　飮んだから頼むのだ。それにおれは、莊司の娘を嫌ふたのではない。おれ自身を嫌つてゐるのだ。その譯がわかれば、誰も怒る人はない筈だ。

三郎　何。

四郎　（生欠伸の涙を目に溜めて、肌寒むさうに一所を見詰めて）おれはなあ、三郎。この頃初めて、老子の道德經と云ふ本を讀んで、虛無と云ふ言葉を覺えたのだ。おのれなく、人なく、善とすべきものなく惡とすべきもなく、渾沌として剖つべからざる虛無の世界なのだ。

三郎　（厭々しげに）おれは無學だ。

この時、將門百姓等に導かれて來る。二人の爭論を見て、百姓等を退かしめ立木にかくれて聞く。三郎のみ將門に心づく。

四郎　分つてくれと云ふのぢやないよ。（苦笑）たゞ、最う少し心の世界をひろくしろと云ふのだ。兄者も和主も、おのが心のうちに、寂かな深い淵を見詰めることの出來ない人だ。名利の世界に齷齪してゐるのが憫然なのだ。

三郎　四郎。（足踏み）おれは誰何に何う答へれば好いのだ。

四郎　先づだ。まあ……聞けよ。和主はこの頃、禁令を犯して、蝦夷の奴隷を買つて来たさうだ。作人をしいたげ奴隷を凌辱して、官林を盗んだり社寺地を侵したりして、狂者のやうになつておのが相馬の領分をひろげてゐるさうだ。が、その富は一體、和主に何を與へるのだ。

三郎　又似非仁義か。はゝゝ……。おれは生きなければならないんだ。

四郎　臆病者。

三郎　（屹として）何。

四郎　可哀さうに思ふんだ。和主は兄者に分家してもらつた相馬領が、次第に擴張して、富を積むほど、心が騒いで不安になるのだらう。積まれた富を見たいのではなく、何か……目に見えぬ敵に逐はれるやうな心で、無理に自分を増大して、その不安から免れやうとあせつてゐるのだ。古諺に、強鳥はおのが翼あるを知らず、と云ふ。和主などは、唯おのれに翼あるを信じて救はれたいために、夢中に、物狂しく足掻き苦しんで、大事な一生を狂ひ飛びに飛んでゐるのだ。臆病者だ。

三郎　この――。

　三郎、じりじりして歯噛みしつゝも、將門を憚りて怺ゆる。

四郎　飛ぶも好いよ、狂ふも好い。たゞ人を苦しめ、自分も苦しみ、飛んで、狂つて　最後にぶつかるところに壁はないか。和主が増大するほど、同時にその壁も厚くなる――その壁には心づかないか。分るか。三郎。和主にはそれが分るまいなあ……。壁はいつでも、現に今でも、和主の鼻頭を擦つてゐるのだ。

三郎　四郎。おれは荘司への返辭を聞いてゐるのだ。

四郎　それは小さな問題だ。(顏をそむけて嘆息する)

三郎　小さな問題なら、舍兄が面皮をかいても好いのか。

四郎　お前はうつけ者だ。

三郎　何、うつけ者だ？

四郎　もう好い。(立ち上がる)

三郎　四郎。(赫として弟の手頸を摑む)

四郎　何をする。

三郎　むゝ………

三郎、弟を捩ぢ伏せんとする時、將門その間に割つて入る。

將門　三郎、待て、四郎はおれに貸してくれないか。

三郎　(弟を睨みつゝ)こいつ、おれを侮りきつてゐる。地鞴になる。

將門　荘司の方も、おれが好きやうにはからふ。任せてくれ。

三郎　うむ………。

三郎、弟の片頰をしたゝか捻り上げ、荒らかに去る。

四郎は將門を見て、やゝ羞恥の心あり。衣裳など掻つくらふ。將門は無言。やゝ暫くの間。饗宴の音樂、微かに聞ゆる。

將門　(やがて呻くやうに) 誰が惡いのでもない、おれの過失だつた。(嘆息) 所詮、三人の心をひとつに繋ぐことは出來なかつたのだ。四郎、おれはお前を責めも怒りもしない。たゞお前の生涯を幸福にするために、おれにも一言、助言だけさせてくれないか。

四郎　(俯向いて、掌面など見てゐる)

將門　失ふた戀の痛手に、惱み苦しむと云ふのは、恥じることでも賤しいことでもない。身をやぶるまでに思ひ詰めて、一心を外にまぎらはせぬとこに、弱いながらに美しさがある。おれのやうな粗野者には味はれぬ涙だが、それでもしみ〴〵と身に滲むやうな時がある。無理におれが、郡司の娘に身入れさせやうとしたのは間違つてゐた。

四郎　………

將門　(弟を見て) 四郎、和主京都に上つて見る氣はないか。關白殿下に添狀つけて、お前が生活するほどの財力は、わしが豐かに貢がう。奴婢も心のまゝに召連れるがいゝ。なるべくは勸學院に修業して、景行づれに劣らぬほどの、名譽の博士になればいゝではないか。菅家の姫が和主に戀をこばんだのは、和主を嫌ふた譯ではないのだ。姫は京都の文物にあくがれて、この東國の未開を嫌つたのだ。東國人ゆゑにと疎まれたので、決して人間が厭はれたのではない。

俯向ける四郎の目より、涙が土に落ちる。

將門　お前が嘗て、云つた事がある。藤原氏は京都に、おのれの力でひらいた文物開明をもつてゐる。東國人は東國に、おのれの作つた文物をもつてゐない。民百姓どもが京都文物にあくがれをもつてゐる間は、何時までも京都の奴隸はのがれぬと云つたな。今になつて、おれはつく〴〵さうだと思ふ。われ〳〵初め、内心には京都依崇の心

が根になつて、京都の沙汰と云へば、いつも心がをのゝき騒ぐ。絹を染めるにも都ぶり、家を建てるにも京都風、心は必ず京都の支配をうけてゐるのだ。これは男がわが足もて土に立たぬと同様、恥しいことだが仕方がないのだ。

四郎　………

將門　實はな、斯う云ふのは、お前をあの景行卿から獨立させたいのだ。お前は、景行卿を通して京都を見てゐるから、自然と師匠に頭があがらないのだ。景行とは何人だ。なるほど前内大臣菅原道眞公の三男で、學者でもあらう。しかしやはり藤原氏の權力に壓しられて、京都を逃出して來た落伍の人ではないか。そして京都を笠に來て、やつと農園をひらひて、やつとこの國に生活のたづきを見出した、云はゞ流浪の人ではないか。われ／＼の祖先と何處が違ふ。われ／＼は三代前に京都を投出され、彼は自分の代に京都を逃げ出した――たゞ、時代の上の違ひのみなのだ。それなのにその娘が、東國人だからとて和主を賤しめる、そんな謂れがない筈だ。時が少し京都に近いと遠いとでそれまで人に尊卑をつけられるものと思ふか。おれは考へると面白くなくなる。だから和主も京都へ上つて、お前の京都を背に負ふて歸つて來ればいゝではないか。四郎、然うせい／＼、な、然うせい。お前は京都から威張つて歸つてくればいゝのだっ（と、傍に寄りて肩など叩く）

四郎、俯向いて凝つと地面を見つむる。

將門　實はな、おれはつく／＼景行の京都ごゝろが賤しめられるからなのだ。北野天神の御子息でも、文章博士でも、人間の賤しさは見て穢ないものだ。おれも今まで京都を畏れる心から、あの人を畏れて來たが、日向に立せて裸體を見ると、やはり身の慾より考へない、平俗人だ。おれは今日まで、あん者を恐れてゐたかと思ふと腹が立つ。何處に、人間の尊さがあるのだ。

四郎、チラリと兄を見上げる。

將門　おれが急に斯う云ふのは、不思議だらう。が、仔細があるのだ。仔細を聞けばお前だつて、必ずかの卿をさげすむに相違ないぞ。多年信仰の人物に自分と同じ卑しさを見るのは、小兒が空に見詰めた虹がパッと隱れたやうなもので、心寂しくもあるが、然し――――何となく勇氣もつくものだ。お前が菅原家に疎じられたことは、決してお前の恥辱にならないぞ。兄の贔負ぢやない、お前はかの卿などより、餘い深い心をもつてゐるのだ。京都に上つてな、名譽の學者になつてくれ。四郎、な、然うせい。

四郎、俯向きて低く啜り泣く。

將門　何を泣くんだ。泣くことぢやない――――。好し、聞かせる。景行卿は急にお前に、末姫をめあはしてもいゝと云ふのだ。それは何かおれの身に、京都の沙汰を聞いたのだらう。な、確に然うだ。それで急にわが家と結びたくなつたのだ。その一條で澤山だ。な、あの人の心底はそれで分かる。それだけお前は勝つたのだ。な、今度は學問だ。京都に上つて、景行以上の學匠になるのだ。

この時、飾馬の鈴の音賑かに聞え來る。百姓二三人、馳出し來りて門外に出る。

將門　あ、吾子が歸つたやうだ。（と門に出て見て）歸つた、歸つた、歸つて來た。（と戻り來りて弟に）さ、さ、四郎、泣くことはない。お前は立派に、一人立ちの學者になれるんだ。自分のために、自分の一生を祝ふべき時だ。莊司の方は、兄がどのやうにもはからふ。不平に齦をやぶる時ではないぞ。疲れてゐるやうだ。寢所に行つて休め休め。

四郎、思はず兄の手を握りて何か云はんとす。

將門　もう好い、好い。行つてゆつくり休め。自分の手足は大切だぞ。はゝはゝゝ。

四郎、歔欷しつゝ走り去る。將門その姿を見送りて、譯もなく再び大聲に、怡しげに大笑しつゝ、そつと目頭の涙を指にて拂ふ。

鈴の音近づき、村童らの撒物をねだる聲賑かに聞ゆる。

栗栖院常羽御厨の別當、多治經明入り來る。三十四五歳。胡籙を負ひ弓をもち、小腹卷せる警固の服裝。調度掛の從者を隨ふ。

經明　（磊落に笑ひながら）や、遲くなつた。心配した事であらうな。

將門　經明。和主を勞したとは知らなかつた。弟どもの無禮をわびるぞ。

經明　馬鹿なこと。おれの方から望んだのだ。はゝはゝゝ。

將門　吾子の名聲だ。和主ほどの丈夫に警固さるれば、一代の語草になる。

經明　藤太が繰り返しそこに好しく云つてゐた。

將門　藤太？

經明　秀鄕よ。田原の藤太だ。

將門　どうして今日、田原の藤太に面會したのだ。

經明　あいつ、如才のない男よ。和子のために結城寺に、祝宴の用意して待つてゐたのだ。寺の僧都から樣子を聞いてゐたものと見える。

將門　それは困つた。（と當惑して）田原ほどの豪族に出迎はせる吾子ではない。それにわしすら未だ、一度の對面も遂げなかつたのだ。

經明　はゝはゝゝ。そこは自分を知らないのだ。下野の國内でも、そこの威勢はすばらしいものだ。通路の里々でも、

みな奔走してわれ等を迎へてくれた。

將門　然うか……草臥れたらう。酒など飲んでくれ。

經明　うむ。

　　經明、從者と共に去る。
　　鈴の音、門外に止りて將門の一子、狩衣につゝまれ郎黨黑人に抱かれて、眠りつゝ入り來る。五歳。その後より將門の妻、東の君、二十三四、笠をつけ行旅の姿にて歸り來る。乳母羽生の女、侍女三四人、郎黨五六人隨ふ。松明を持つ。

將門　おゝ吾子……眠つてゐるのか。(と近付き見る)

東の君　ついそこまで、松明の火をよろこんで居りましたが、馬の背にゆられて、心持よく眠りました。

將門　起すな〳〵。黑人、風ひかせぬやうにしろ。

　　黑人、去る。

將門　(突然、妻に) 田原の主の饗應をうけたと云ふではないか。

東の君　吾子のために、この上なき馳走でござりました。

將門　おれには意趣が飲み込めない。秀郷と云へば、近國隨一の豪族で、去る延喜年中には公家に謀叛して、流罪の刑法をうけたほどの英雄だ。思慮に富み、學問もある人だと云ふが……。(と思案して) 年は六十二三と思ふが、骨格などは何のやうな人物だ。

東の君　見たところは、一向の老翁と思ひました。なあ、羽生。

羽生の女　痩々と骨ばつて、馬の老さらばつたやうな人にござります。

將門　穢ない言云ふな。(と睨み)そして、おれを何んとか云つてゐたか。

東の君　たゞ最う、との丶武勇と俠氣とを賞めたゝへて居りました。流石は皇子の裔ほどある。東國武士の棟梁はこの和子の父君ぢやと、吾子を抱へて頰擦りするやら、足拍子を踏んで舞ひ歩くやら、聞くわたしの方が面映いやうでござりました。

將門　吾子を抱いて舞ふたとは。はて……わしは深慮沈着の人と聞いてるがなあ。どのやうな心なのだ。おれには分らぬ。

東の君　思ふに、との丶大椽敍任の噂を聞かれたのではござりませぬか。

將門　それ、云つてゐたか。(思はず首を突出し、唇を嚙む)

東の君　もう國々の噂になつて居ります。諸人によろこびを述べられました。

將門　そこは、何と答へた。

東の君　は。(突然の問ひに驚き、良人の顏を見る)

將門　得て、女にはあるものだ。(苦々しげに)人のそやしごとを眞實にして、若しや……などゝ思ふことがある。お身は秀郷の言葉にそばへて、誇らしい擧動などなかつたらうな。わが良人を自慢するのは、見て、苦々しいものだぞ。

東の君　との、それでは若しや大椽敍任の御沙汰は、影もないことでござりまするか。

將門　おれは知らぬ。おれは女子の教へを云つてゐるのだ。

東の君　然し慥かに、田原のぬしもそのやうに申してゐられました。(とやゝ失望して云ふ)

將門　えゝ、おれの知つたことではない。おれは初めから望みはしない……だから、だからおれに、お身にも云つたのだ。お身は、聞かずに心當にするから、それで失望するのだ。おれの知つたことではない。

東の君　(打萎れて)然うでございましたか……。

將門　煩さい。みな疲れてる。憩はせたらどうだ。(不興氣に其邊を歩む)

東の君　はい。(と、不審さうに去らず)

將門　上總の父君から、大病の使者も來てゐる。三郎に聞け。

將門、星空を仰ぎつゝ、呻吟するやうに歩み廻る。

東の君、乳母、從者など母家の方に去る。

常陸國廳の官人、藤原玄明、馬を馳らせ來りしさまにて、大汗になり入り來る。將門と同年配。やゝ狡猾使佞らしき態度の男。行縢をつけて旅の姿なり。

玄明　豐田のとの。散々の爲體になつた。

將門　おゝ、玄明。さつき和主と行違ふて、上總の叔父御から使者が來た。

玄明　うむ、それは聞いた。(べつたりとそこに腰かけて)困つた事になつた。

將門　叔父者の病氣はそれ程の大病か。今に今といふでもあるまい。

玄明　うむ、それは氣遣ひない。

將門　そしてわしに和睦を望むと云ふのは、子息どもが年弱ゆゑ、後に殘る常陸の所領を心配したのだらう。わしさへ常陸を侵略せぬと誓へば、叔父者は安心して死ねる人なのだらう。

玄明　（顔を上げて）豐田のとの、困つた。常陸の國守が更迭になつた。
將門　（別に氣にも止めず）然うか、新任は誰だ。
玄明　しかとは分らないが、藤原維幾卿ではないかと思ふ。おれの身の大事となつた。おれは上總からの歸途、ふとその注進を聞いて、絶對絶命と覺悟した。
將門　何か、あつたのか。
玄明　うむ……おれはもう常陸の國内に身の置き處がなくなつた。已を得なければ出奔だ。
將門　何うしたのだ、玄明。
玄明　この交迭は只事ではない。事によつたら關白殿下が辭職して、京都は右大將の天下になつたのではないかと思ふ。
將門　何、玄明。和主、そんな注進を聞いたのか。
玄明　うむ。
將門　そんな事はない、いや、確かにそんな事はない。（と不安を拂ひ除くるやうに云ふ）世はまだ〳〵、關白殿の天下だ。大丈夫だ。大丈夫だ。心配するな。おれが保證する。それよりは上總の模様が聞きたい。さ、母家に行かう。
玄明　うむ……
將門　はゝはゝ。まるで疲馬か樹影につまづいたやうだ。はゝはゝ。さあ立て。はゝはゝ。（と止度なく笑ふ）

（幕）

第二幕

時——天慶二年十一月下旬。昔。

處——將門の本館。前幕に同じ。屋内。

將門本館の母屋を内部より見る。平舞臺を廣く、正面背景に前栽を望むやうに裝置す。宏壯なる建築。上手の一室は曹司めきたる疊敷きにて、繪模樣の唐紙障子に圍はれ、几帳など置く。それに續きて廣き板敷の室あり。侍所なり。その兩室の外を廂の間とす。その間の長押に帽額簾をかゝぐ。廂の間の外に蔀を上げたり。侍所には圓坐、炭櫃などの調度そなはる。

幕明く。常陸國廳の使者、史生高泰、將門の弟三郎將賴、多治經明と對坐してゐる。

高泰　何うも居ら[illegible]云はるれば致方ないが、確かに玄明はこの豐田分に逃げ込んでゐると、訴人あつて聞きました。新國守[illegible]立腹ゆゑ、匿はれては後難があらうと思ふ。

三郎　例の[illegible]しは見掛けぬ。知らぬ。

高泰　そこ[illegible]のとのは知られぬ筈がない。

三郎　なら、[illegible]やれ見は今日、不在だ。

高泰　將門のとの、[illegible]世、その男氣は聞いて居ります。玄明を憫んで、懷に入つた窮鳥ともおぼさるゝか知らぬが、それでは道理に違ふと思ふ。玄明は長年國廳の帳簿を欺きて租稅を掠めた上、こたび新任の國守より嚴しい詮議をうけると、亂暴にも、正稅帳を燒き拂ふのみか、行方河内兩郡の不動倉の米穀を盜んで出奔した無法人、常陸方

からは亂人と申すべき害毒でござる。引渡さるゝが順當だと思ふ。

三郎　それは兄者に申さるゝ言葉だ。わしどもは今日相馬の郡から、他用あつて參つたものだ。知らぬ、知らぬ。

高泰　（むつとして）然やうか。では罷り歸つてその旨を國守に申告いたさう。が、念のために申すが、そこにも京都このたびの御變革はお聞きあることゝ思ふ。關白殿下の辭表後は、萬機は若殿實頼公の掌に握られてゐる。常陸の新國守維幾朝臣は、無二の右大將方なのだ。しきつて常陸に反抗あつては、この家にも何うかと思ふ。

三郎　同時に、こちらへも飛脚が來てゐる。なるほど忠平公は關白職の辭表を出されたが、まだ上の御裁可はないさうだ。右大將の念願も、繪にかいた餅にならねば好いがと、田舍侍どもが囀つてゐるさうだ。のう、經明。

經明　はゝはゝゝ。

高泰　然し、此度の地方長官の變更を見たら、およそ政府の意嚮も知れる筈だ。先づ常陸に維幾朝臣、武藏には百濟の貞連朝臣、下野には藤原の弘雅朝臣だ。この下總をとりまく三國の大守が三國とも同時に改任になつて、それが皆若殿實頼公の昵近者といふのはなあ………。はゝはゝゝ。わし共は不思議に思つて居ります。（と立ち上がる）何れにも、火急の返り事をお待ち申す。

三郎　心得た。

史生高泰、歸り去る。三郎、長押の際まで立つ。

三郎　（見送りつゝ）はゝはゝゝ。何うだ、經明。なか〳〵鼻先の勢ひは強い。

經明　うむ、この頃の國司はみなあれだ。權柄を見せる氣なのだらう。

三郎　しかし、まさかに關白殿が辭職にはなるまいな。若し、然うなつたら事だぞ。

經明　それだから、覺悟をしなければならない。

三郎　田地を菅原家の名田にして、莊園を營むのか。—

經明　何うもそれより外に、おれには思案がない。

三郎　景行か。おりや……あいつ嫌ひでなあ。

經明　嫌ひ好きを云つてる場合ぢやない。新任國守等もまだ京都の雲行きをうかゞつて、手を下さないから好いが、いよ〳〵天下が右大將の世ときまれば、國々連合してわれ〳〵武人を壓迫して來るのは目に見えてゐる。

三郎　そりや然うだらう。政府の用意は出來てゐる。

經明　噂の通り、官林官地、社寺領の檢地などを嚴しく行はれたら、御互に新田の大半は沒收だ。殊に和主などは痛事だ。所領の三つ一つも殘るまい。

三郎　兎も角も、兄者に說得しやう。

經明　いや、兄者を動かさうには、先づ四郎だ。

三郎　それも然うだ。

藤原玄明、外面を注意しつゝ不安さうに入り來る。面色憔悴して氣力なし。廂の間に立つ。

玄明　（怯えたるやうに）申し、常陸の使者は歸りましたか。どのやうな口上でござりました。相馬のとの。

三郎　誰だ、玄明か。（と振返つて）おぬしは飛んだ災難を持込む人だ。何日まで兄者に迷惑をかけてるのだ。出羽へ旅立つと云ふのは何うなつた。

玄明　館のとのが、先づ色氣をうかゞへと仰せられますゆゑ………

三郎　嘘を云へ。兄はおぬしの所置に當惑してゐるのだ。

玄明　いや眞實でござります。現に昨日も仰せられまいた。

三郎　おぬし、泣言を云ふからだ。それほど惡びれる位なら、何故不動倉など盜んだ。惡徒らしくもない。

玄明　あれは全く、未納をごまかすために農民どもの讒言でござります。倉庫に火を放つたのは百姓どもの所爲に相違ございませぬ。

三郎　分かるものか。

玄明、嘆息して悄然として去る。

經明　（見送りつゝ）兄者も又、あんな者にかゝらつて餘計な世話を求められる。

三郎　あれなどは、いざと云へば逐出もするが、最う一人の掛人には閉口する。

經明　然う、聞いた。この頃この家に、武藏の興世ぬしが食客となつてゐると云ふではないか。

三郎　毎日々々の酒盛り騷ぎだ。あいつは辯口がうまいから嫌ひだ。

經明　何故武藏にはゐないのだ。

三郎　新任の長官貞連朝臣は賢賴方だ、着任以來かれを邪魔物にして、政治の相談などはしないと見える。權の守、それが不平で國にゐられないのだらう。

經明　あれは土地の勢力者と結託して、自分が武藏の國司に昇任する野心だつたのだぞ。この家などに取入つたのも、下心はそれなのだ。

三郎　然うとも、關白どのが兄者への贔負を利用するつもりだつたのだ。あれで腹が黑い、油斷のならない男だ。

經明　いま時田舍へ流込む京都者はみなあれだ。なまじ官位などあるので田舍人が次第に惡くなる。(外を見て)おゝ、四郎が歸つて來た。說いて見やう。

三郎　先づ、そこから話して見てくれ。おれでは、すぐ喧嘩になる。

經明　うむ。(と立つて)四郎、四郎。(と奥の方に呼ぶ)

四郎　(隣の室)誰だ。おゝ、御廚の別當か。

　四郎出て來る。手に經卷らしきもの四五卷もつ。

經明　經文らしいな。何處へ行つて來た。

四郎　うん。(微笑)石毛寺の律師に會つて來た。(と長押に立つてゐる)

經明　(圓坐を出して)まあ坐れ。近頃よく寺通ひするが、何かあるのか。

四郎　うん、少し……發起するところがあつて。

經明　まさかに、坊主になるのではあるまいた。

四郎　どうだか分らない。(笑つてゐる)

經明　はゝはゝゝ。思はせぶりなわろだ。この間までは女房ごとに泣きさまだれてゐるかと思ふと、今度は三藐三菩提か。はゝはゝゝ、立つてゐないで、坐れ。

四郎　急ぐのだ。これから學田寄附の勸進帳を作文しなければならない。

經明　學田？學校でもたてるのか。

四郎　この宿に大伽藍を建立して、京の勸學院にもおとらぬ大學校を附屬するのだ。いづれはそこへも寄進を請ひに行

く。その時は莫大の布施を頼み申す。

經明　はゝはゝ、何んの夢を見て覺めないのだ。

四郎　そこだちには分るまい。（愉快さうに笑つて）わしはこの東國に京都を建てゝ見せる。そして、そこたちを救つてやるのだ。（と去らんとする）

經明　待て〳〵、おれはまだ救はれてゐない。はゝはゝ。

四郎　三十年待たしやれ。植えた木に初めて花が開きます。

經明　三十年どころか、今日に差迫つて出向いて來たのだ。まあ、膝を組んでくれ。三郎もこの通り、思案にくれてゐるところだ。今となつては、和主の智識を借りるよりほかないのだ。

四郎（坐つて）それは、何事だ。

經明　所領の問題だが、三郎もわしも立行かなくなつて來たのだ。萬一關白どのが辭職して、血氣の右大將の世になるやうな場合があれば、われ〳〵も安閑としてはゐられぬ。今から覺悟しなければならないのだ。

四郎　だから云はない事ではない。三郎にも、壁に鼻を擦られるぞと云つたのはそれだ。夢中になつて、所領を廣めれば廣めるほど、向ふ壁が厚くなると云つた筈だ。壁とは藤原氏だ。

三郎（苦々しげに）學生面するな。今それ云つて、何になる。

經明　まあ然う、語尾を咎めるな。（と三郎を制して、四郎に）然う云へば、然うだが、それは過ぎたことだ。武藏常陸下野の新國司が外から壓倒して、法令通りにこの國の田地檢査でも行はれるやうなことがあると、それこそわれわれは亂離忽敗だ。工夫をつけるのは今のうちだと思ふ。

四郎　そこたちは、當面の問題を論じてゐる。わしに工夫を求めるなら、この學校が最上の工夫なのだ。東國人が東國の文物、おのれの文化をもたないうちは、何時まで經つても獨立が出來ない、京都の奴隷だ。わしはそこを慨くから、學問をもつて東國人に自立の精神を養ひたいと思つてゐる。學問、制度、文物、それ等の權威が京都公卿に掌握されてゐる間は、何を云つても無駄だ。

三郎　四郎。それで今から學校を建てるのか、はゝはゝゝ。（腹を抱いて笑ふ）

四郎（むつとして）和主は笑ふがいゝ。おれは兄者に賴んで、大葦原の田地をすべて學校建立の料足にあてやうとしてゐる。京都と東國、これは永世の問題だ。百年二百年をかけて爭ふべき大きな問題なのだ。

三郎（顏を突出して）で、兄者は何んと云つた。許したか。

四郎　無論許して貰ふ。おれに自信がある。

三郎　許せば、兄者は大痴漢だ。

四郎　和主とは話をしない。（と、憤然として對の屋に去る）

經明　四郎、四郎……。（と呼掛け、三郞に）和主も惡い、怒らせてしまつた。

三郎　あんな夢話し、聞いてゐられるか。東國に京都だ……？はゝはゝゝ。

將門　賑やかだな。おゝ、經明も來てゐるな。

　將門、厩越しに聲かけて入り來る。平常の服裝。

三郎　たんと待つた。小鷹でも擱えに出たのか。

將門　うゝん、野路を歩いて來たのだ。冬の日が暖かい。

經明　どうだ、京都の模樣は。變つた風聞はないか。

將門　又京都か。この頃は京都が朝夕の話料になつたやうだ。はゝはゝゝ。（思出して）うん、常陸から使者が來たと云ふ。玄明の事か。

三郎　兄者。あれは早く引渡したが好い。惡くするとあいつは、和主の頸に繩をつける奴だ。かゝらふだけ兄者の損だ。

將門　追捕の兵士でも向けやうと云ふのか。

三郎　そのやうな事もあるまいが、和主も上總の叔父御から常陸國内に遺産をうけてゐるではないか。その國の長官に睨まれては、何彼と不便宜だ。

將門　うん、何んとかしなければならぬ。おれも然う思つてゐた。然しあれは、玄明にも可哀さうなところがある。正税の帳簿を欺いたのは前國司の命令らしいのだ。

經明　貴所がとゞめて、兎に角氣色をうかゞへと云ふから、出羽へ出奔するのを見合はせてゐると、玄明自身は然う云つてゐた。

將門　いや、それは虚言ではない。わしは醉ふと……それを云ふのだ。はゝはゝゝ。（と羞つて）是非救はふとも、救はなければならないとも考へてゐるのではないが、彼が萎々として、涙ぐんで……恩になつたの、この恩儀は一生忘れないのと、斯う、何んだ、膝を突いて改めて暇乞されると——あの男、平氣でそれをやるのだ——おれは、では出て行け、それが云ひなくなるのだ。せめて默つてゞもゐれば好いが、まあ好い、何うにかなる——必す云つてしまふのだ。はゝはゝゝ。

三郎　然しそれでは、兩方のためにならぬと思ふ。

將門　今日は極める。何んとか所置をしなければならないのだ。眠ながら常陸に領地を讓られて見れば、國守と爭端をひらきたくないと思つてゐる。一足でも他國に踏み出してゐるのだから、これもこれで氣をつけなければならないっはゝはゝ。

經明　就いてだが、館のとの、今日は三郎と相談があつて來た。

將門　また京都問題ではないか、何うでも好いとしやう、何れとも決定した上で、慨くならその時機からよ。もう、倦きた。

三郎　兄者はそれで好からうが、吾々は何とする。一家の棟梁たる兄者の手にかばはれずば、吾等の立つ瀬がなくなるのだ。

將門　（弟を睨めて）年來嫉妬をはたらいて來た酬ひだ。

經明　との、それでは困る。この際は是非便宜にはからつて貰はねばならぬ。諸國武人總體の問題なのだ。

將門　（まだ三郎を睨めつゝ、憎々しげに）お前は全體童の時から、手に握つたものは、死んだ鳥でもはなせなかつたやつだつた。（手眞似する）おのれの財産はそれほどかなしいか。

經明　との、まあ好いよ。それでだ、いろいろ考へた。所詮この時勢になつては、銘々に小さく割據して生きることは不安でならぬ。所在作人豪族が、みな一つに團結して、京都の壓制に抗はなければならないと思ふ。で、三郎やわしは勿論郡内の諸族が、みな家人の禮をとつて、そこを棟梁と仰がうといふに一致したのだ。

將門　誰に理つて、そんな協議を——

經明　話が中途だ、終ひまで聞いて貰ひ度い。さて然う一致した上でも、まだ安心とはいはれない。棟梁たる與平公にさへ辭表をせまるほどの向見ずの若殿原だから、飽迄官僚の權柄をもつて殺到することゝ思ふ。これを防ぐには、

この郡總領の田地を名儀だけ菅原村の天滿宮に寄進して、その社地領に改めるのだ。

将門　(屹として) 何、田地を景行卿の莊園にする?

經明　それは名儀だけだ。總ての支配は、そこにあるのだ。道眞公の薨去以來、時平公一族の横死や紫宸殿に雷火の祟りによつて、藤氏一門は今極度に菅原家に畏怖してゐる。現に朝廷ですら始終北野天神社に奉幣して、菅家の鬱憤を慰めやうとしてゐる。

将門　(突然、破れたやうに) はゝはゝゝ。

經明　そこは笑ふが、眞實なのだ。陰陽博士の勘文にも、近年天下に兵革の兆動くは、みな菅公の憤怒のためだと、上書してゐるさうだ。今、藤原氏の我意をふせぎ、專横に逆ふのは菅原の名門より外にないのだ。

将門　はゝはゝゝ。

經明　そこの武勇をもつて菅原家の名聲を背に着れば、いかな剛屈な國守も頭を上げるものはないと思ふ。そこさへ承諾なれば、わしは今日にも行向つて、景行卿の認狀をかならず貰ふて見せる。

将門　もう舍せ　腹が痛くなる……はゝはゝゝゝ。

經明　然し——

将門　馬鹿な、はゝはゝゝ。

　　興世王、襖の服にて庭の畑をブラリと通りかゝる。

興世王　(覗き見て) 何んだ、何を笑つてゐる。

将門　おゝ、起きたのか。(目の涙を拭つて、又) はゝはゝゝ。

興世王　小次郎、まだ酒にならぬか。日が永うて屈託する。」

將門　酒は、燈火を見てからにしたいな。入らないか。」

興世王　三郎、密談なのか。遠慮せう。

將門　何、關はん。今面白い話があるのだ。

興世王　何んだ。（と、拔入れ手のまゝ入り來る）玄明のやつが、枕元に來てくど〳〵と口說き立てるので、あつたら夢を見損ふた。話と云ふは何んだ。（と　無精らしく圓座に片あぐらする）

經明、三郎。やゝ憚りて坐勢を改める。

將門　景行を本家と賴んで、此邊一帶の田地を天滿宮の非園にするのださうだ。この輩、苦しくも考へたものだ。はゝはゝゝ。

興世王　そりや好からう。天滿宮なら稻妻が不斷にあつて、田の實りがしつかりとあらう。はゝはゝゝ。

三郎（膝頭を握り詰め）兄者。ではそこは不同意なのか。

將門　考へて見ろ。

三郎　吾々一族は、立枯れになつてもいゝのだな。

將門　三郎、お前は藤原氏を罵つて、武人の獨立を主張した男だ。それが地主になると、急に國守の權威が恐しくなつたのか。馬鹿者。

三郎　何。

將門　世話に、鼻を曲げても息を吐くと云ふ。恥づべき事にしてゐるのだ。この學田側は、わが父君が開墾した田い

た一生懸命の地だ。昇行づれ流浪人の名田にしてまで、子孫にうけ傳へやうとは思はない。

三郎　然し時勢が時勢だ。檢斷をうけたら何うする。

將門　爭ふ。例へ官人でも謂れなき凌辱はうけない。券面に照して、わが家の富は飽まで保護する。それでも、それ以上に侵入して來れば、國家が無法なのだ。京都に坐食してゐて、人民の辛苦を奪ふといふ無道はない。土は人のものだ。耕す者のものだ。藤原一姓のものではないのだ。

經明　然し、それを爭ふなら、起つて戰爭する外はない。

將門　おれは然うではない。おれの田地に不當の所得があると極まれば、おれは政府に返す。然し政府が道理を曲げて、無法におれの富を侵略するなら、おれは大牧の秣刈りになつて馬を飼ふ。そして政府を輕蔑してやる。而前に立つて、人民の糧(かて)を盜むものだと、聲を立てゝ云つてやる。

三郎　はゝはゝゝ、そりや和主一人はそれでも好いだらう。一門一族を何うする。

將門　みな名々に考へべき事だ。徒黨を結ぶのは卑怯だ。

三郎　駄目だ。經明、歸らう。

經明　うむ。

興世王　はゝはゝゝ、三郎。待て。今度の京都政變についてなら、それほど不安がることはないぞ。考へやうでは、外にいくらも工夫があるよ。主(ぬし)たちは狼狽してゐるやうだ。

三郎　（不快さうに對者を見てから）何故でござります。（と坐る）

興世王　和主たちは京都の實狀を知らないが、今度の政變は和主たちが不安がるよりは、京都の若公卿だちの方が、諸

國武士を不安に思つて狼狽した結果なのだ。それと云ふには、一昨年以來西國に純友等の海賊が蜂起して鎮定しない。そこへ今年四月の大地震だ。東西兩京の人家が悉く破壊して、天皇は常寧殿の前に五丈幄の假屋をつくつて、十四五日の間も野宿されるといふ大變事だ。それに隨つて盜賊が起る、亂民が騷動する。流言だ、蜚語だ。そこへもつて來て、博士出雲惟香の占ひに、これ東西の兵亂の兆なりとの上奏があつたのだ。女房たちの若公達が狼狽したも無理はない、彼等は初めて、諸國に武士といふ恐しい階級あることを知つたのだ。何日かも主に云つたな、諸國の犬は自分の番犬ではなく、自分等の手を嚙む強犬だつたのに、初めて氣がついてうろたへたのだ。そして關白忠平公に迫つて、諸國の武士に極端な壓迫を加へやうとしたが、殿下はさすがに現代第一の政治家だ、右大將などが騷ぎ出す遙かの昔に、武士階級の恐るべき威嚇たることに氣がついて、着々と政治をその方面にめぐらしてゐたのだ。はゝはゝゝ、何うして／＼着眼が高い、遠い。

三郎　その話は、もう度々聞いてゐる。

興世王　和主たち唯狼狽して騷ぐより、こちらから進んで出て、京都の若公卿たちを安心させてやれば好いのだ。

三郎　――？

興世王　はゝはゝゝ、分らないか。兄者が上京するのだ。今東國の武勇者として目差されてゐるのは兄者が随一だ。そりや武藏の諸將もあれば、下野に田原藤太もゐる。然し、これ等より兄者を重く見てゐるのは、先年貞盛が兄者に攻め討たれて都に逃げ歸つた上に、今年また經基の讒言がある。京都ではいま兄者を渾名して、外都鬼王とさへ呼んでゐるさうだ。（將門を見て笑ひつゝ）おれどもから見れば可愛い男だが、百五十里へだてゝ京都から見ると、この男の姿が鬼に見えるらしい。はゝはゝゝ。

將門、悶苦しさうに額など撫でゝ、よそ見して庭の方など見る。この少し前より藤原玄明、事ありげに其邊をうろ〳〵してゐるのを見付ける。

將門　玄明ではないか、何か用か。(と立たうとする)

玄明　(ヘドモドして)うん、何あに――後でも好い。

將門　入れ。

玄明　うん、何。――

將門　入れよ。何をそんなにおど〳〵してゐるんだ。

玄明、おづ〳〵しつゝ入り來る。末坐に蹲まる。

三郎　(膝を進めて)で、兄者が上京して何うするのだ。

興世王　關白家に伺候して、身の忠節を誓ふのだ。經基の讒言あれば、彼と檢非違使廳に立つて、明白なる對決にも及ぶのだ。

三郎　然し、關白殿下の辭表が既に御裁可になつてゐたら何うする。

興世王　和主たちはそれだから若い。はゝはゝゝ。

將門、柱にもたれ姿勢を頽して、玄明の萎れたる顏色を笑ふ。時々、顋など突出して、玄明を揶揄する。玄明、その度に固くなりて、苦しさうに嘆息を吐く。將門、面白さうに笑ふ。

興世王　若殿原は、もと〳〵怖いから騒ぐのだ。そこへ鬼と恐れるこの男が、武具をなげ出して伺候すれば、豐田の小次郎も人間であつたと初めて氣がつく。はゝはゝゝ。これに第一、自惚れづよい京都公卿の自尊心が滿足する。

東國隨一の將門でさへこの通り伺候した、藤原氏の威勢を見よやと、すつかり有頂天になるに相違ない。關白親子のなかもそのため融和するし、和主たちの所領も安堵する。おれは、これより外の策はないと思ふ。はゝはゝゝ。何う思ふ。何うだ。（得意さうに笑ふ）

三郎　經明。—

經明　うむ。

三郎と經明は顏見合はせて思案する。將門はそれ等にかまはず、玄明を嘲弄してカラ〱笑ひゐる。

興世王　この頃中の話では、四郎が勸學院に上京するといふ。おれはこの上ない機會だ、小次郎も一緒に上洛せよとすすめてゐるのだ。和主たちからもすゝめて兄者を上京させれば、景行の、莊園のと、狼狽して苦いはからひにも及ばないのだ。それに、わし一人のためから云つても然うだ。わしは貞連づれの下に働くのは厭だが、長官として一度地方政治のために盡力して見たい。位置は權守でも澤山だ。思ふまゝに手腕をふるつて見たい。小次郎から關白どのに願へばその存慮もかなふと云ふものだ。京都下りの貞連などに、この複雜な國政がとれるものか。自惚れではないが、そこには又美妙な機微があるのだ。はゝはゝゝ。

將門（玄明を揶揄しつゝ、ふと興世王の言葉が耳に入り、不興氣に）おれは都へなど上らないぞ。勝手に決められては迷惑だ。

興世王　けれども、まあ、そこは協議なのだ。

將門　厭だ。おれは京都を離れて生きたいのだ。京都の名も聞きたくない。見ろ、おれが京へ上ると聞いて、玄明はびく〱してゐる。はゝはゝゝ。（と指示して笑ふ）

三郎等玄明を見る。玄明は狼狽して俯向く。

興世王　厭だと云つても、やはり京都の支配をうけてゐるのだ。

將門　支配をうけてゐるから忘れたいのだ。

興世王　無茶だ。

將門　そこも最う、好い加減に、武藏の長官を思ひ切つたら何うだ。貞連の惡口も、未練らしく聞えていけない。

興世王　然うか。おれはそんな積りではなかつた。(不快さうに沈默す)

將門　こりや制度の問題なのだ。こんな愚かしい時代があるものではない。人間に階級をつけると云ふのが、間違つてゐる。何故、生れた人間が生きてはいけないのだ、食つてはいけないのだ。支配する者と支配される者と、何んで差別があるのだ。藤原の忠平――そのまゝの名でいゝ、そこいらの農民賤者の小童に生れて見ろ。忠平と云ふ名に後光も射すまい。はゝはゝゝ。考へりや可笑しくなることなのだ。はゝはゝゝ。そんな者に、忠節も名符もあるものか。投出して考へろ、馬鹿々々しいことだ。

一同やゝ意外の表情。

將門　(少し亢奮して)けれども、それが現在の制度だと云はゞ仕方がない。惡い時、惡い生れだといふ外はない。だからおれは、その制度を、見まい、聞くまい、觸れまいとしてゐるのだ、目の底から見詰めて、その制度を賤しんでゐるのだ。もう論議するのはやめろ。おりや最う……倦々した。何うともなれと思つてゐるのだ。なあ、玄明。はゝはゝゝ。

興世王　(笑つて)大分、四郎の論にかぶれて來たな。

將門　うむ、然うだらう。おれはあいつに、この國のほかの、廣い世界の書物の話を聞くと、胸がひらけるやうな氣がする。時は今ばかりではない。國はこの國ばかりではない。

興世王　然うかなあ……。（笑つて立つ）三郎、經明。何うだ、酒でも飮まう。

三郎　うむ。

將門　唯だ――。（興世王の笑ひを不安さうに見詰めて）おれが斯う云ふのを、和主たち……或ひは、おれが何日ぞやの大掾拜任に失敗した、その不平からと思はれるかも知れない。思ふ者もあるだらう。なる程、一時はおれも不快だつた。こちは望みもしなかつたのに押付けて置いて……人を悦ばせたり煽らせたりする。官位に拜しかねたことより、犧牲にされたことが不快だつた。しかし、今はその不平などおれにはないぞ。

興世王　分つてるよ。はゝはゝゝ。しかしまだ關白どのゝ辭表が決定しないのだ。

將門　（舌打して）それが、聞きたくない。

興世王、笑ひながら去る。將門、その後姿を不快さうに睨みつける。

經明、三郎も立つ。

三郎　（ふと心付きて）玄明、和主に話があるが、和主いつまで兄者の腰に縋りついてゐるのだ。（と座らうとする）

玄明　……。（萎れる）

將門　（振り向き、手を振つて）あ、好い〱、その事はいゝ。

三郎　兄が何んと云はふと、餘りに心無しな男だ。

將門　好い、好い、賴まん。（と、舌打して）餘計な口を出すな。玄明のことは、おれが捌く。

三郎、經明、去る。

玄明　（悄々して、涙含み）との、是非がござりませぬ。わたくしは出羽へ參ります。（畏まる）

將門　それは好い。一度おれに委せたのだ。

玄明　しかしそれでは、一族中の憎しみがかゝります。

將門　何んとかなる。まあ好い。」

玄明　然し——。

將門　諄い男だなあ。（顏を顰める）

玄明、悄然として去る。

將門、立つて其邊を歩む。正面の大柱に兩手をかけ、力試しなどするやうに、力をこめて兒童らしき所作などする。「カラ／＼と笑ふ。雀の聲喧し。

この時、庭の方に、「和子、危ない、あゝ危ない。」など呼ぶ乳母の聲のみ聞ゆる。やがて笑聲。

將門　あ、何うした、何んだ。（と簀子に驅け出し、前庭に遊ぶ吾子を見る心持にて）そりや不可ん、鐙が逆だ。馬手に鐙をとつて、馬手だ／＼、（とわが手を見せ）この手だ……然うだ／＼。ぐんと鐙を踏ん張るのだ。はゝはゝ。

將門、腹を抱いて笑ひゐる時、妻の東の君、塗籠の方より入り來る。

東の君　との、何事でござります。

將門　見やれ、吾子が比都目に木馬を習ふてゐる。あ、危なさうな腰だなあ。はゝはゝゝ。待て、とゝが敎へてやる。（と、出やうとする）

東の君　との。

將門　あん。

東の君　田原の内君から、又しても消息が參りました。

將門　秀卿の内君から？何んと云ふて來た。

東の君　やはり是非もつてとのに對面をとげなければ、心がとゞかぬと云ふて參りました。これは必ず、お會ひなされずばなりますまい。

將門　會ふのを避ける心はない。長者の足を勞しては相濟まぬゆゑ、わしの方から來春早々訪ねると云つたのだ。お身はそのやうに内君への返し事を書かなかつたのか。

東の君　でも、先がしきつて訪れるものを、とゞめる譯にも參りませぬ。

將門　それでは禮儀に缺けるのだ。

東の君　けれども田原のとのゝ望みは、一門同樣の禮をわが家にとり、とのを東國の棟梁と仰ぎたいと、縷言に仰せ越されて居ります。

將門　お身にも困るなあ。秀鄕は東國一の武勇者だ。年も違ふ。長者の方から訪問を受けては、わしが笑はれる。一門の禮などゝ、飛んでもないことだ。

東の君　しかし、先方ではたゞ面會を拒むやうにも思ひませう。

將門　來年早々、わしが行向ふ。それで好い。（庭を見て）おゝ見事々々。その勢だ。あ……又、手が違ふた。はゝはゝ。比都目、その手綱を二束ほど寸をつめて見やれ。少し手が伸びる。

比都日　（陰の聲）斯うでございますか。

將門　然うだ、その加減だ。好い〱。（振向いて、妻に）時に上總から何か云つて來ぬか。叔父どの丶供養は何日に決つた。わしも今度はかならず參列するぞ、臨終の時にも參り合はさず、殘り多い。然し、お身は長年の不與がゆれて、親子の對面をしたのだから、先づもつて本懐であつた。吾子も祖父君を見覺えて仕合せだ。

東の君　老人の涙もろく……吾子を抱き上げては、明暮泣いて居りました。

將門　然うだらう……とも。（目を瞬き）人は人を憎む筈はないのだ。叔父君とも多年敵味方になつたが、思ひ出すのはやはり人としての叔父者だ。死なれて見て……會ひたくなつた。

東の君　父にもその心は、定めて切なふございましたらう。叔父甥のなか、聟舅のなかでも……所領のために爭つて、げに現世は修羅道だと繰言に申して居りました。

將門　（顳顬を拳にて叩きつ丶）眠だなあ……この世は眠だ。（外に氣が付き）吾子、何うした。泣いてゐるではないか。膝頭を擦り剝いたか。は丶は丶、勇者だ〱。泣くものではない。（又、妻に）だからおれは、この頃、世の中を小さく生きたい。

東の君　（顏を上げて）世の中を小さく生きる？

將門　人に云はれぬ事だが……おれは近頃、深い惱みがあるのだ。おれには、自分の知つてゐる外に、何か、强い力と云つたやうなものがあるのではないか、とさへ思ふ。既に年來の、常陸源氏との戰爭が然うだ、またこの春の武藏の騷動なども然うだ。輕く濟むべきことが何時も手重くなつて、おれが步み出すと必ずそこに、風が立ち、土が、石が、動くやうな氣がしてならない。そしておれは、そのたびに大きくなる。おれは從來の所領ですら有

り餘ると思ふのに、こたび叔父者が亡くならせたゝめ、常陸領に莫大な田地をうけなければならなくなつた。おれはそれが、苦しくなるのだ。

東の君　わたくし、父の遺産をうけて歸つたのが、いけなかつたのでござりまするか。

將門　然うは云はない。おれはな、斯う……野にかくれて咲く花の小さなやうに小さく、靜かなやうに靜かに、音もなく、聲もなく、斯う……靜寂に生きて行きたいと思ふのだ。

東の君　(微笑して)けれども、それはなりますまい。

將門　お身、考へて見よ。お身も他人が、靜かに、小さく、弱く、そしてその生のために悩みながら生きて行くのを見るときに、何となく細々した、うるはしい、もの悲しい感動を起しはしないか。起すだらう……誰でも起す。

東の君　(微笑)先づ――。

將門　何故おれだけが、自分のなかに弱さ、はかなさ、醜さを眺めて、ひとり熟々と、うるはしい涙ぐめる目をもつて、自分に感動しては不可ないだらう。おれはな小兒の時から、自分が大きい、偉いと思ふ時には、いつも眩暈するほど苦しくなつた。ひとり枯草の野に寢轉んで、蒼空を見詰めながら、自分の醜さ、拙さ、愚さを考へて慨き悲しむ時に、涙は頬を流れるけれど、心は何とも云はれぬうるはしさと、沈着いた心安さとをもつことが出來た。浮世を逃れる、やすらいの寢床は、たゞ一つそこにあつた。それなのに、おれは今、その一つの寢床から逐ひ出されるやうな氣がする。

東の君　(外を見てゐたが)田原のとのを、可笑しきまでに恐れさせるも、やはりその心からでござりませう。(と笑ふ)

將門　おれは羨しい。あの木のやうに、靜かに聲立てずに、一つの石から一つの石と、堅固に自分を築き上げて來た人

は羨しい。あの主などは、本當に自分が積んだ石垣の上に坐ると、云つて好い。あれが本當の生涯なのだ。おれなどは自力で生きて來たのではない。たゞ時の運に幸ひされたゞけだ。

東の君（笑ふ）

將門（苦々しげに）お身はいつも笑ふ。お身ばかりもたゞおれを良人として見てくれゝば好いのだ。おれは段々家からも田地からも離れて、孤獨になるのだ。

東の君　それなれば、從弟貞盛のとのは何う思はせられます。

將門（屹として顏を上げ）貞盛？（と、迷ふやうに妻を見詰める）

東の君　とのは、貞盛のとのを世にない勝れ人のやうに云ふてゐられましたが、昨今の爲體は何んと御覽じます。常陸の大椽に任じられながら、とのを恐れて國府の廳に入ることもならず、所在の民家にかくれて、今以てとのゝ氣色を窺つてゐるではござりませぬか。

將門　………？

東の君　あれが男たるものゝ所爲と云はれませうか。稀人の所作と云はれませうか。全體とのは、弱き者、悲しき者にいさなはれて、譯もなくおのれを失はせらるゝ弱い病ひがあります。みな見て、笑ふて居ります。

將門　病ひだ？

東の君　おのれに具はる器量骨柄を、何故に然うは慨かせられます。わたくし、可笑しうてなりませぬ。從弟ながら貞盛は、とのに父を打たれてその復讐もならず、這々の體にて都に逃げ歸り、こたび公家から常陸大椽の職に任ぜられては、恐れて任國の務めも見ませぬ。女としてさへ恥かしい、慨かはしいことではござりませぬか。

將門　ここは先年、常平太に命を助けられてゐる。忘れるな。

東の君　これはわたくしへの恩、彼の人の性情とはおのづから事が違ひます。上總の父が歿つて臨終に對面をゆるさなかつたのは、とのを怖ると云ふよりは、彼の際限ない卑怯を憫んだのでございます。

將門　でも、男どのゝ葬ひの日には、彼も上總に來てゐたと云ふではないか。

東の君　見られた姿ではございませぬ。唯一人、打寄つて懇に語らふ者もなく、供養師のかげにしよんぼりと差俯向いて、涙ぐんで居りました。口のわるい弟どもは、あれ見よ常陸のそら大椽、そら大椽と爪弾きして笑ひました。わたくしはそれを見て、とのが此度の大椽拜任にもれたのを、心から嬉しく思ひました。

將門　(痛みに觸れられし如く、屹として) 何んだ。

東の君　例へ國は違つても、貞盛と同じ大椽なれば、わたくし望みに思ひませぬ。無位無官に生涯過ぎても、東國の將門と世上に恐れられる方が、遙かに凜々しく勇ましいと思ひます。關白殿下の辭表と聞いた時には、最早や世の燈火も消えたやうに思ひましたが、今では結局それをよろこうで居ります。

將門　それは然うだ。官位によつて榮耀に思ふは誰にしても恥だ。然し……貞盛だ。お身は、心から彼を卑怯者と賤しめるか。(熱心に妻を見詰め、言葉に力を入れて) 何處かに勝れた性を見なかつたか。何處か、何處か……何か無かつたか。何んでも好い。眼なり、唇なり……女のよろこぶものでもいゝ。何か勝れたものを見なかつたか。

東の君　いゝえ、一向に見ませぬ。泥でつくねた人形の雨にくづれたやうな人に見ました。

將門　然うかなあ……。(全身の汗が發散するやうに悄然たり)

東の君　(微笑を含みて) との。

將門　う………？

東の君　それならとのは、この年頃の貞盛の所業を見て、心から卑怯とは思はせられませぬか。おのれに勝れた杨人と、今でもやはりあがまへる氣がござりまするか。

將門　うむ……。

東の君　とのは餘りに、おのれの大さを忘れてゐられます。

將門　(急に顏を上げ) 斯うは云へる。おれは、貞盛のやうにはなりたくない、と。また……おれは成らない。

東の君　ほゝほゝ、その一言でござります。すべて女は、男のその言葉のもとに、心やすう憩うて居ります。わたくしばかりではない、一門一族、みなとのゝその一言をたよりとして生きて居ります。

將門　それを云ふな。おれは買ひ被られてゐる。そんなおれではない。たゞ靜かに、小さく生きたい。

東の君　(笑ひを抑へて) けれども、それはなりますまい。

將門　何故ならぬ。

東の君　世間が許しませぬ。(と、笑つてゐる)

將門　何。

東の君　最早や世間は、豐田の小次郎とは云ひませぬ。東國の將門と呼びはやして居ります。(と笑ふ)

將門　(初めて氣がつき) あ、吾子は何うなつた。

東の君　先程乳母に抱かれて、臺屋の方へ歸りました。――

將門　然うか………。

將門、蟀谷を叩きつゝ柱にもたれて何か考へゐる。東の君はその當惑の姿を見て、心から可笑しさうに笑ふ。

將門、それを知りて目を瞑ぶる。東の君、ます〳〵笑ふ。

四郎、草し終れる勸進帳を持ちて入り來る。

四郎　兄者。願文が出來た。これ、見てくりやれ。

將門　後にせい、後にせい。

四郎　心力をこめて書いたのだ。見てくりやれ。兄者。

將門　(煩ささうに) えゝ、おれに唐文字が讀めるか。

郎黨某、走り來る。

郎黨　との、との。

將門　何んだ。

郎黨　田原のとのゝ、前使の者が參りました。間もなく到着なされます。

將門　何、秀郷のとのがわせられた。(と、強く驚き) ど、ど、何處だ、何處だ。(と狼狽する)

郎黨　あれ、あの蹄の音がそれでござります。

將門　(東の君に)衣服だ、衣服だ、困つた……髻も亂れてゐる。四郎、早く出迎へ、早く、早く。衣服だ、衣服、衣服。

將門、狼狽しつゝ東の君を催促して塗籠の方へ去る。

四郎、郎黨、正面に入る。

他の郎黨來りて、居間に坐席など設ける。

やゝありて、田原藤太秀郷静かに入り來る。六十五六の老人。堅實さうなる人物。質素なる服裝。

四郎　(畏つて) たゞ今、兄者が對面いたされます。

秀郷　(坐りつゝ) 突然に驚かせ參らせて、館を騷がせました。思ひ立つと老人の氣せはしなさ、笑ふて下され。はゝはゝゝ。

四郎　恐れ入りました。

秀郷　在所に屈まつて、更に他所を見ませぬゆゑ、今日御分内へ入つて、目を驚かしたことぢや。開墾の行届かれたこと、全く我を折り申した。それに、百姓のかまどの賑かしいのは、何よりもつて珍重いたした。

四郎　みな、兄者の丹精でござります。

秀郷　流石に將門のとのぢや。いや、驚き入つた。

この時、隣室あたりの板敷を踏み鳴らして、狼狽して走り違ふ二三人の足音聞ゆる。四郎怪しみて立たんとせしが、客の悠然たるさまに憚りて立たず。

藤原玄明、顔を青褪めて、顫えながら駈け來る。

玄明　との、との、大事になりました。常陸の國から檢非違使を向けて參りました。との、との……常陸から……。

四郎　(驚きを鎭めて) 兄者はこゝに居ない。塗籠だ。

玄明　四郎のとの。大事になりました。追捕の人數が門前に……。

四郎　客人がお坐すのだ。

玄明、叱られてうろ〳〵しつゝ走り去る。

室外の足音險しくなる。秀郷は瞑目して端坐。四郎も耐りかねて、様子を確むべく立ち去る時、遠く蹄の音など聞ゆ。將門、衣服を改めて、煩さく縋りつく玄明を拂ひ除けつゝ、急がしく入り來る。

將門　待て〱。下野から長者が見えたのだ。後で聞く、後で聞く。

玄明　との、わしの命はとの次第でござります。三郎のとのは、必ずわたしを常陸へ渡します。

將門　分つた。煩さい。何處か、か、隱れてゐろ。

將門、玄明を突き飛ばしてツカ〱と入り來る。

將門　おゝこれは、田原のぬし。(と下手に平伏して)痛み入つた。わしから訪れるところであつたのに……痛み入つた。

秀郷　いやこれは、初に見參いたす。内方同志には消息を通はせながら、つい、疎怠に過ぎ申した。

將門　去月は又、吾子のために御造作でござりました。

秀郷　いや〱、何んの。はゝはゝ。

三郎、走り來り秀郷に目禮して何やら兄者の耳に囁く。

將門　(驚きつゝも)いや〱、そりやならぬ、成らぬ。わしが何うにも計ふ。待たして置け、待たして置け。

三郎　渡さぬなら、早く裏門から出奔させるのだ。

將門　(秀郷を憚りつゝ)まあ、好い。待たして置け。それよりも客人に早く酒だ。酒もて來い。

三郎、不平ながら去る。

秀郷　何か、事ありげに見えまするが、わしには決して御斟酌には及びませぬ。どうか、坐を立たれて、どうか。

將門　（結び忘れし狩衣の紐を慌てゝ結びつゝ）いや、仔細ござりませぬ。ほんの小事でござります。

秀郷　さて實は、（と沈着いて）今日斯う唐突に館を驚かしたは、別儀ではござりませぬが……貞盛のとのゝことぢや。貞盛のとのと、そことの間の不和を、老人に扱はせて貰ひたいと思ひましてなあ。

將門　（畏つて）は。

秀郷　四五日前に、貞盛のとのが、遙々とわしを訪ねて見えて、いろ／＼との話があつた。然し、つゞまるところは貴所との不和を悔んでゐられ、その和睦の結ばれぬうちは、國の政治も手につかぬ有様なのぢや。

將門　は。

秀郷　それに就いても、お互に困惑するのは、この夏中からの京都の變動ぢや。關白殿下は薨去のまゝ、世は右大將の世とも定らず、相も變らず軋轢をつゞけてゐられるが、苦しむのはわれ／＼のみだ。右とも左とも宙に迷ふて、この年もはや暮れやうとしまする。

秀郷　打明けて申さうなら、今の京都は親子互に爭ふて、わが勢力の扶植に夢中だ。實はの、との、過日若君實頼公から頼み思ふ旨の御内書がわしのところへ下つて參りました。わしを家人につけやうとのお心らしいが、わしは迂濶にこのお答ひは出來ぬと思ふた。

將門　は。

秀郷　豐田のとの。もうこの時勢は、お互諸國の住人が連合して、京都の祭當をさける時だ……と、わしは考へた。京都の變動ごとに心を狼狽して、あれに付きこれに付きする時ではないと思ふた。それで、これは老人の狡い考だ

が、そことわしと盟約の上に、そこは依然關白どのに附き、わしは表面若殿方に附き、双方表裏を別にしたなら、互に相補ふて京都の無道をのがれやうと思ひました。場合によりては、そことわしとが兩名の隙間策を案出しても、御親子の間の和平を計はふとさへ思ひます。それにはそこと、貞盛の不熟が何よりの邪魔になります。知つての通り、貞盛は隨一の實頼公方ゆゑ、この謀計の裏をかゝれる心配があります。

將門　は。

　この時、室外の足音また激しくなり、三郎バタ〱と駈け來る。

三郎　兄者、兄者。常陸の人長（くわちやう）が兄者に對面したいと云ふ。

將門　（赫として）客人ぢや。

三郎　會はずば家内を探すと云ふのだ。

將門　思ふやうにせいと云へ。

　三郎、去る。

將門　それでは、貞盛は、心から和睦を望んで居りまするか。

秀郷　いや、望む段ではない。……將門のとの、庭前が騷々しい。出て對面されては何うあらう。わしの話は急ぐことでない。

將門　（この時は別人のやうに度胸を据えて）何、騷ぐことではござりませぬ。常陸の落人をかくまふたゞけでござります。へろ〱の檢非違使どもに何が出來ませう。

　檢非違使の火長某を先に、五六人の追捕者、土足のまゝどや〱と上り來る。

將門　（怒りて突立ち）何者だ、狼藉するか。
火長　常陸の廳から、藤原玄明を追捕に參つた。
將門　玄明など、居らぬ。
火長　訴人がある。
將門　知らぬ。
火長　よし、屋内を隈なく、詮議する。
將門　何？（と思はず傍なる几帳に手を掛くる）

三郎を初め郎黨等も出で來る。その勢に檢非違使等はやゝ辟易して尻込みする。

火長　もし逢つて、玄明をかくまはぬとなれば、國府の廳まで同行が願ひたい。このまゝ歸つては、吾々の役が立たぬ。
將門　何。
火長　（恐れながらも）玄明を匿はぬ潔白の身なら、別に國府廳を恐れられる筈もあるまい。
將門　好し、何處へでも行く。待て。然し客人がある。客人と話のすむまで、壺屋に立つて待つてゐろ。逃げも隱れもしない。

火長等、仕方がなく去る。將門、又座に戻り來る。

（幕）

第　三　幕

時——天慶二年十一月下旬。前幕と同日、午後より薄暮。

處——常陸國府廳の郭外。今の新治郡石岡町は當時の國府廳所在地なり。

國府郭外の物見が岡とも呼ばるべき地點。常陸街道に面す。うちひらけたる田圃の末に、遠く霞ケ浦の森々を望み、地勢丘陵を負ふて要衝の地をなす。赤松三四本聳立ちて、蔦かつら纏ひつく。その樹間より筑波山（湖水と反對の位置）巍然として立つを望み、上手にやゝ離れて宏壯なる國府廳の建築を見る。坂道を拖して陣の幕を張り、床几を構ふ。武具など飾り、盾をつき、威容を示す。往來臨視の番所なり。

幕明く。腹卷きして半武裝せる隨兵一人、小高き松の根がたに立ちて、遠く街道を望見す。通行の農夫、僧侶、番匠、販婦など五六人、不安さうに番兵を見て、囁き合ひつゝ通り過ぐ、番兵の傍に寄りて、同じく望見せんとして睨み付けらるゝ者などあり。

隨兵の伍長、佐伯の高文、坂を下り來る。

高文　左平次、何うだ、氣色は見えないか。

左平次　何んのこともない。さまで心配はあるまい。

高文　若との〻剽悍にも困るなあ。郎黨泣かせだ。（と尻をつく）

左平次　一體騷動ずきなのだ。功績を急ぎ過ぎる。

高文　公達そだちで、東國氣質（かたぎ）を知らないから困る。

左平次　今に悉々歸つて來るだらう。これに懲りるがいゝ。

高文　國境を越して隣國まで追捕に向ふとは、少し亂暴過ぎた。それに相手は手だれ者だ。權柄すくには靡く男ではな

いのだ。

左平次　焚火でもしやうか、筑波颪に五體が冷えきつた。

高文　然うしやう。

　二人は焚火に薪を加へて、溫る。前使の者、慌しく走り來る。

前使　とのゝ御歸館ぢや、御歸館ぢや。」と觸れ流して通り過ぐ」

高文　（怪みて）何、とのゝお歸りだ。急に、何うされたのだ、

左平次　途中、この騷動を聞かせたのでもあらう。

高文　然うかも知れない。（幄舍の方に）皆出ろ、御歸館だ。

　幄舍より軍兵數名出て、土に蹲る。常陸國守藤原維幾、史生桑丸、郎黨三四人を召連れ、狼狽して歸り來る。鹿島社神拜の途中、變を聞いて歸り來りしなり。五十三四。物體らしき人品なれど決斷を缺く。

維幾　やい、高文。若とのが豐田の領に檢非違使を向けたとは實正か。

高文　（恭しく）ない。

維幾　大椽は何うした、貞盛朝臣もそれに同志したのか。

高文　大椽のとのには、しきつて御諫爭のやうに見うけまいた。

維幾　大事にならねば好いがなあ――。あの血氣には厭ねる。（と、嘆息）そして、國内の軍兵をも驅り集めたのか。

高文　各郡より催促いたして、都合四千ほどの人數でござります。

維幾　それでは、昨日來の催しではないな。豫てよりわしの鹿島神社神拜をはかつて、密々に計畫をして居つたのだ

な。困つたものだ――。

秦丸　そして左平次、君とのはやはり檢非違使等と一緒に、玄明追捕に向はせられたのか。

左平次　君とのは毛野川手前に陣を張つて、將門の館に向ふたのは火長以下の人數との注進でござりました。

秦丸　あ、それならば未だしもだ。(と、ホッと安心する)

常陸大掾、平貞盛、入り來る。將門の從弟にて、前左馬允たり。三十三歳、擧動閑雅なれども面上に憂愁あり、平常の服裝。

貞盛　おゝ、守のとの。よく歸らせられました。

維幾　御臣。わしはあれほどここに、賴み申したではないか。(涙をハラ〳〵と流して)これは、何としたことだ。

貞盛　(俯向いて)わたくしの力には及びませんでした。

維幾　忰の我性は知つてゐる。けれども何んとか仕方があつたらうと思ふ。ここはこの國の、重職をもつとめる人だ。無官の小わつぱの狼藉をそのまゝ見られろといふことはない。

貞盛　みなわたくしの、無能のためでござります。

維幾　(目を瞬き)死ねば自業自得だ。わが子のために傷むのではない。國の大事を引起しては、公家に對して申し開きやうがない。

貞盛　………

維幾　過日もそこに申した通り、關白殿下からわしに御内沙汰があるのだ。例へ官賴公より嚴しき咎めをうけるとも、この際は構へて諸國武士と事を起さぬやうにせよ。今西國の動亂中に、東國に變事ありては、國を二つにして作は

ねばならぬ。これ國難必死の時とせねばならぬと、條理をつくしての御沙汰であつた。わしは素より若との右大將に恩顧をうける者だが、老公殿下の國家を憂ふる至情に感じて、それでわざと、玄明の處分も延々にしてゐたのだが、せがれはそれを知りませぬ。たゞわしの政道を手溫し、緩怠ぢやと一圖に思ひ詰めて、無謀にも今日の仕儀に及んだと見える。困つたことになりました。

貞盛　守のとの。留守をあづかるわたくしの懈怠でござります。京都の詰問には身をもつて答へる決心で居ります

維幾　いや。そこ一人の責任にはしない。延れぬ場合は、わしとて覺悟はあるが——あゝ、何んとしても途方にくれた。

貞盛　實は昨日御發足後に、京都から糺問の使が下向しました。

維幾　(喫驚して) 何んぢや

貞盛　いや、長官にはかゝはりなく、貞盛の身に官符が下りました。

維幾　はあて。

貞盛　九月京都を發足する時、わたくしは右大將閣下より一つの任務をうけて居ります。それは着任早々自ら將門を糾問して、經基申狀の如く、彼に謀叛の實證の有無を明らかに取調べた上、直に政府へ答申せよとの嚴しい密命でございました。然しわたくしは……今以てその任務をはたしませぬ。昨日の官使はその詰問の使者なのでござります。(と、憂はしげに云ふ)

維幾　(驚きつゝ) そして官使には、何人が下られました。

貞盛　中宮少進、多治眞人が下りました。その官使を憚り申すところより、今日御子息のお思立にも、しきつてお止めは出來ませんでした。

維幾　うむ、まだ京都の政狀は安定しないか――斯く法令が二途に出ては、まことに當惑する。

この前、よき間を見て隨兵等は幔舍に退き、高文殘りて街道を見る。秦丸は焚火に近づく。

高文（遠く望みつゝ）との、との、若とのがたゞ一騎、松原がくれに馬を走らせ……御歸館の體と見きいた。

維幾　何、爲憲が殺つて來た。（と望み見て）うん、然うか、無事で歸つた。（と、悦びつゝ貞盛の傍に來て）これにしても、檢のとの、將門の糾問はいかゞ計らはれる。官の使まで下つた上は、よも等閑にはなるまい。何うせらるゝ心算だ。

貞盛（愁然として）それに就いて、考へて居ります。

維幾　と云ふと……何うだ、何う考へてゐるのぢや。

貞盛（足元の土を見詰めて）所詮は……この國を離れて、漂浪の旅にのぼるより外はござりませぬ。

維幾　え、何と云ふ――

維幾の息男、藤原爲憲、馬を飛び下りたるところにて、大汗になつて戻り來る。二十五六歲、強壯なる青年。

爲憲（陰より大聲に叫び）それ、皆、出合へ、出合へ！左平次、高文。みな陣の用意だ。（と、入り來る）

維幾（走り寄りて）爲憲、何を騷擾するのだ。

爲憲　父上、合戰だ。（狼狽の語調にて、後方を指示し）將門が今來る、來る。しかも手兵は三、四百に足るまい。たんきるに取圍んで、一騎も漏らすな。高文、銅鑼を撃て、金鼓を鳴らせ。

この時、幔舍の隨兵、郎黨、左平次などみな出で來る。

維幾（子息の腕を握りて）これ、沈着け。模樣を語れ。將門が來るのか、寄せて來るのか。何うした、語れ。

爲憲　(亢奮の極、夢中に腕を振廻して)將門は、身が引立てたのだ。罪人隱匿の科によつて、引立つた。今來る、馬を打たせて來る。然し、追々に伴類一族が追付くやうだ。高が五百に足りない雜兵だ。恐るゝな、國府には四千の精兵がゐる。馬蹄にかけて蹂躙してやる。はゝは……はゝはゝ。(嘲謔のやうに哄笑する)

維幾　爲憲。(と背後より兩手にシツカリ抱いて)落付け。では、玄明隱匿の科を申開きに、將門は常陸の國に出頭するといふのか。

爲憲　はゝはゝ。おれの手柄だ。おれだ。はゝはゝゝ。(と夢中に腕を振廻はし)この爲憲が、外都鬼王を誅戮して見せる。おれだ、おれだ。はゝはゝ。

維幾　爲憲、爲憲。それは取逆せてゐる。鎮まれ。

爲憲　貞盛の大椽。そこは何故に佩かせらる大刀だ。邊土の田舍侍を増長されるのは、お身たち武官が怯懦なためだ。藤原氏の威名を失墜するのは、みなお身たち武職の臆病からだ。

維幾　爲憲、言葉が過ぎる。

爲憲　貞盛、漸刻にしるしゝて一刻待て。おれは將門を首にして、國家の害毒をのぞいて見せる。おれだ、爲憲だ。はは……はゝはゝ。

(爲憲、酒に醉ふたる人のやうに亢奮する。)

維幾　左平次。(と簡目して呼ぶ)

爲憲　高文、何故銅鑼を鳴らさぬ。出陣の用意だ、高文、左平次、合戰だ、合戰だ。はゝはゝゝ。

(爲憲、左平次の肩に凭れかゝりて、倒るやうにして去る。)

維幾　泰丸、そち付いて行つて、兵共を騒がせるな。兵士等にも厳命して、決して喧擾さしてはならぬ。例へ将門が押し寄せても、鎮まり返つて、一兵も郭外に出してはならないぞ。司人にも好く申し渡して置け。

史生泰丸、承つて去る。

維幾　困つたものだ。親をないがしろにする。（と嘆息）これみな京都の祟りだ。世はいよいよ末世になつた。（貞盛に気がつき）そして、御同。そこは今、漂浪の旅にのぼるとか云つたが、それは何う云ふ趣意なのだ。

貞盛　案内によれば、こたび陸奥の大守として平維扶が任国に罷り下ると聞きました。幸ひ維扶はわたくしの縁者にござります故、当分それを便つて、身を奥州に避ける覚悟をきはめました。

維幾　然し、そこはそれまでに、かの将門を恐れらるゝか。

貞盛　いや、将門ひとりの問題ではござりませぬ。諸国武士の土地に根ざす勢力は恐しいものでござります。公家の権柄をもつてしても、彼等はもはや動じませぬ。やがて彼等の時代も来ませう。

維幾　去りながら、お身も常陸の豪族、あまたの伴類があるではないか。縁者の将門を恐れて、官職を捨てゝ奥州に遁竄されたとあつては、世の聞えも悪しかるべし、外に思案がないものか、なう御同。

貞盛　悲しいことに、わたくしは幼少より、京地の栄華のみ夢見ました。土地の人望はもとより、勇気も気概も、所詮従兄の小次郎には及びませぬ。京都より如何なる譴責をうけましても、到底彼と拮抗する力量は、貞盛生れながらにして持ちませぬ。（太息して）身にとつてはこゝが絶対絶命の場所かと心得ます。

維幾　うむ……。

検非違使の一人、駆け来る。

某　おゝ、との。（と立止り）たゞいま下總の將門が着到あられます。

維幾　何、將門が來る。續く人數はどれ程あるぞ。

某　追々と馳せ加つて、四……五百もござりませうか。然しその人數は四五丁はなれて、道に警護いたすのみにて、將門は一人檢非違使に圍まれて、下野田原のとのと馬をならべて路々笑ひ興じながら悠々とうたせられます。

維幾　田原のとのとは、秀郷か。然うか。（と聞き、やゝ安堵して）うむ、秀郷が來合せれば、至極重疊だ。彼は熟練の老功者だ。定めて事を破るやうな筈はない。それに付けても、府内の兵士を嚇してはならぬ。朝臣も加勢して、兵士等の鎮撫を賴み申す。いさ、同行しやう。

貞盛　（決心して）いや、わたくしは小次郎に對面して、事の次第をはからひませう。

維幾　いや、それは拙だ。秀郷が同行するなら、彼に打任せて、一應模樣をうかゞふが好い。彼も激越してゐて、どのやうな騷ぎにならうも知れぬ。何事も老人の智慧ぢや。さ、一緒にござれ。さ、大椽のとの。

維幾、無理に貞盛を誘ふて府中に去る。檢非違使、隨ふ。

舞臺寥廓、やゝ暮色いたる。遠寺の鐘聲。

長き間ありて、突然、からからと笑ふ將門の愉快さうなる哄笑を聞かせて、一行は出で來る。先頭に立てるは檢非違使の火長（くわちやう）にて、五六人の放免下司など鉾をかつぎ武裝して輜重に警固する後につゞいて、將門、秀郷、平服のまゝ騎馬にて入り來る。

將門　然し……。待て。（と不承さうに馬を止め、秀郷を待合せ）從弟太郎は、職をやめやうとでも云ひまするか。

秀郷　先づ、その心がないでもない。それでわしは見かねました。

將門　はつきり云つて下さい。それは間違ひありませぬな。

秀郷　何分、あの仁は氣も心も弱々し過ぎ申す。

將門　馬鹿な話だ。そんな事あつてなるものか。(と頬膨らし)田原のとの。わしは端的の言葉のほか、聞えぬ男だ。廻りくどうなく、斯うと云つて下さい。從弟太郎は、それほどわしを恐れますか。

秀郷　立話にもなるまい。下りて話しやうか。

將門　うん。

將門、云ふより早くひらりと馬を下り、不安さうに秀郷を見詰む。

火長、それを見て驚き走り寄る。

火長　こりや成らぬ〳〵。話があらば國府廳に着いてからだ。

將門　喧しい。(と睨み)大事な話だ。

秀郷　馬を下りつゝ、廳の使。大事ない。こゝはこの老人が引受ける。話の間をすこし憚つてもらひたい。

火長　なれども、太守の詮議すまぬうちは、大事の囚人だ。

將門　(火長を見て)何、囚人だ。はゝはゝゝ。(と怒りもせず面白さうに笑ふ)

秀郷　府廳に歸つて申すがいゝ。豐田のとのは直ぐ後から。田原の藤太が同道いたさう。然う申せば濟む。(と馬を下りる)火長放免等去る。

將門　焚火がある。老人、こゝがいゝ。(自身薪など加へ、火を燃しつゝ)わしには何分にも飲込めない。玄明の事などより、從弟の身が心配になつた。わしはそれほど太郎の心を騒がしたとは思はないが――何んとしたことであ

らう。(と當惑さうに秀郷を見詰める)

秀郷　(靜に手を焚火に翳しつゝ)貞盛のとのも今は全くの孤立の身、國内に誰一人便りにする者もないのだ。下總の叔父御は歿しられるし、水守の良正のとのとは、先年そことの合戰に敗れて、きたなくも京都へ逃げ歸つたとて、義絶同様の勘氣をうけてゐる。心憂いことのみつゞくのぢや。

將門　――――?(熱心に見詰むる)

秀郷　國廳にあつても、政務が手につく筈はない。隨つて、奥深かく垂籠めて、寂しい憂愁の日を送つてゐなさる。壯年ざかりの身に、見ても傷々しく思ひます。若しそこに、從弟の身を最惜しむこゝろあらば、この際はこの老人に打任せて、總ての宿怨をはらはせらるゝやうにありたい。

將門　藤太のぬし、それは違ふのだ。わしに怨恨など、毛頭あらう筈はない。合戰のならひ、誤りとは云ひながら、わしは彼の父國香を殺してゐるのだ。わしは彼に赦されなければならない身だ。折れて、蹴られてその上に、彼に赦しをうけなければならぬ。

秀郷　その事だが、それは過ぎた事だ。その昔の事をであたぐり立てゝは、却つて間に仇立つと云ふものだ。それはもう云はぬ事にせられて、今の貞盛のとのの身を憫れまれたいのぢや。

將門　いや然うではない。これは大切のことだ。國香の伯父を殺したのは、わしのあやまりとは云ひ條、伯父の卑怯なのだ。毛野川堤防のことにつき、わしと常陸源氏との間に爭論が起つた時、伯父はその仲裁に入つて、何方にも味方しないと誓つたのだ。それなのに伯父は卑怯にも、わしを欺いて内々常陸方に味方してゐたのだ。その後合戰に及んで、源氏の館を燒き拂ふと、その燒跡から伯父の死體が掘り出されたではないか。いかに源氏の勢ひに

まかれると云ひながら、伯父は實に耻なき人と、わしはその時に涙がこぼれた。

秀郷　それは云はひでも貞盛のとのは知つてゐる。知つてゐるからその後そこを責はしないのだ。今更わびるの故されるのと云つては、却つてそれは穏かではない。先づその事は、水に流してだ。

將門　そりや厭だ。(頭を反らし、腕を組み)物に蓋をした裁きはわしは嫌ひだ。責められるところは責られ、謝まるところは謝つて、その上の和平でなければいやだ。(不平さうに)そこも仲人に立つ位なら、その黒白は先づつけてくれなければなるまい。

秀郷　然うすりや、勢ひ兩方の非が出る。

將門　出たつて好いではないか。(語氣にやゝ對者を輕侮する調子あり)白は白、黒は黒だ。それを明らかにするから和睦もなるのだ。

秀郷　けれども、それをわしの口から出しては貞盛のとのを辱しめることになる。從弟君も現在父上の耻辱は聞きたうあるまい。

將門　聞かないと云つても、事實は事實だ。何故然うそこは事を繕はふとするのだらう。聞いたほどの仁體にもない人だ。

秀郷　(少しむつとせしが抑へて)わしはたゞこの際、武人一統を連合して一致の行動をとりたいと思ふばかりぢや。常陸不總下野の作人豪族が團結して、京都の政府に嘆願したら、今のやうな不安な政治に苦しむことはなからうと思つて、それでわざ〳〵下野から老人が馬を乘り出して來ました。そこと貞盛のとのとは、何れも坂東平家の嫡流だ。京都兩派の軋轢も、そこたち二人の和合によつて、仲を直すまいものでないと思ひました。

將門　(不滿さうに)それでは二人は、そこたちの都合のために、傀儡になつて和睦するやうなものだ。心からの和睦ち

やない。

秀郷　(老猾さうに微笑しつゝ)しかし、豐田のとの。

將門　何んだ。

秀郷　凡そこの世に生きる者に、心からの和睦といふが、そこはあらせると思はるゝか。

將門　何――?(眉を顰め、顳顬を拳にて叩く)

秀郷　はゝはゝ。なる程そこも、まだ世の辛苦を蹈み足らぬ。何うも――若いは、はゝはゝ

將門、不快さうに無言。秀郷、それを見てカラ〲と笑ふ。

この時、街道方にどつと人聲して、三郎將賴、大汗になりて驅け來る。

三郎　兄者、やうやくに追付いた。(と息を吐き)何故わしにも知らさず館を出たのだ。

將門　(屹と街道を見て)あの機物(磔刑の具)は何んだ。

三郎　兄者。わしは何のやうに折檻されても仕方がない。兄者の身を思つて、おれはしたのだ。恕えてくれ、恕えてくれ。

將門　ぬし、玄明を渡す氣になつたな。(と、咄として弟を睨む)

三郎　兄者の身が最惜しいからだ。大事の身を、あれ等風情の命に換えて何うするのだ。一門眷族に縋らるゝ身ではないか。兄の手に縋りて、泣くやうに云ふ)兄者、よく考へて見てくれ。

將門　(街道に向つて)玄明の繩を解け、こゝへ、連れて來い。

三郎　わしは自分の所領をかなじんで、それで急に國守を恐れると云ふが、然うばかりではない。客氣にまかせて、條理なく爭ふのは、兄者のために惜まれるのだ。兄者、今日の所業は輕忽だ、輕忽だ。

將門　(弟を振り拂つて繩を解け、えゝ、繩を解くのだ。(と足踏みしておせり立つ)

郎黨比都目、諸肌脫ぎにして縛り上げたる藤原玄明を引立て來る。玄明は衷心の體、將門を見て初めて縋り付きて泣く。

將門　(玄明を引寄せて)こゝに居ろ、こゝに居ろ。動くな、動くな。(と動轉して、譯もなく周圍を睨め廻すのみ)

秀鄕　(何か考へて)では、兎に角、わしが貞盛のとのに對面して、熟談を遂げて參らう。またその玄明のことも、一應は國の守に哀願して見ませう。どうか總勢を鎭めて、暫くお待ち下されい。三郎ぬしにも賴み申す。

將門　(空嘯きて)……何れとも。(と肩にて呼吸してゐる)

秀鄕、凝つと將門を見詰めて、思案しつゝ去る。

暮色やうやく迫る。長き間。

三郎　(頭を擡げて)兄者。

將門　煩さい。

將門、凝つと何か考へる。間。玄明、寒さにガタ〳〵顫える。

三郎　兄者。

將門　煩さい!

暫く沈默して、焚火の焰のみ次第に明るし。

この時、國府の郭内もの騷がしく、國府の子息爲憲、史生泰丸、高文等に擁られつゝ出て來る。爲憲、袍を括りあげ、腹卷など着けたり。

秦丸　いや、それはなりませぬ。國守のとの丶お言葉でござります。

爲憲　邪魔すな。まろは官使多治の朝臣から、直接の嚴命をうけたのだ。例へ父上とて遮りやうはないのだ。無法者の將門に對面する。

秦丸　しかし、くれ〴〵事を穩便にはからうやうにと、父君が……

爲憲　國のためだ。

爲憲ツカ〳〵と將門の前に來りて、突立つ。

打傾きて沈思せる將門、足音を聞いて目を上げる。

爲憲　豐田の將門と云ふは和主か。うむ、それでも、匿はぬと云ふ玄明を召連れて來たな。

將門　誰だ、おぬし。

爲憲　館の次郎、爲憲だ。父維幾の目代をつとめる者だ。

將門　何んの用だ。

爲憲　出廳が手間どるから、その催促に來たのだ。先以て、罪人玄明を受取らう

將門　何んだ。

爲憲　和主、玄明は知らぬ、匿はぬと檢非違使に抗辯したではないか。知らぬ玄明が何故こゝにゐるのだ。横道者。玄明を渡せ。

將門、その權柄ぶりを小面憎く、横を向いて笑ひながら、何か郎黨に眴せする。比都目、泣きゐる玄明の肌など入れる。

爲憲　國廳に召さるゝ分際にて、手兵を引連れるとは狼藉極まる。用合侍とて、餘りに作法を知らぬやつだ。早々作刀を追拂らへ。

將門　おれが連れて來たのではない。後から跟いて來たのだ。（と笑つて相手にせず）

爲憲　こやつ、まろを弱年だと蔑にするか。まろの命は官府の命令だ。官の使も都より下向してゐる。即刻兵卒を追ひ歸して、政所に謝罪せよ。ようせずば、叛逆の罪名に問はるゝぞ。何を躊躇する、早くせい。

將門　（煩さゝうに舌打ちして）もう好い。歸れ。

史生、高文等來りて、切りに爲憲をなだめる。

爲憲　こやつ――まろを侮るな。まろは右大將のとの恩顧の者だ。多少の賦力をたのみに官兵に逆らふとは、大膽不敵の曲者だ。

將門　はゝはゝ。

爲憲　こやつ、こやつ――。（と身悶えして口惜しがり）何故も兵を解散しないか。玄明をおれに引渡さないか。府中に今、四千の軍兵が屯してゐる。まろの命令次第で、直に引ツつゝんで、一騎ももらさず打取るぞ。將門、何故答へぬ。えゝ、こいつ、煩い――

爲憲、怺えず躍りかゝらんとするを、高文等が支へる。史生秦丸は何か考へて、國守の方へ歸り去る。將門、ふと立ちて歩む。笑ふ。

爲憲　將門、何故答へぬ、緩怠だ、無禮だ。將門。

將門　わろの惡足掻が可笑しいのだ。弱腹さだちの和郎たちは、すぐ其の兵のと頼みにする。四千の官兵が何んだ。那ッ

國人の目には、藁でつくつた人形だ。愚かしいこと云はぬものだ。もう歸れ。おれは藤太の沙汰を待つてるのだ。

爲憲　玄明を渡せ。常陸の罪人玄明を渡せ。

將門　えゝ煩さい小冠者め。（と舌打して）それ、受取れ。

　將門、突然玄明の襟を掴んで、爲憲の前に突き出す。玄明、泣き叫ぶ。

將門　たゞは渡さぬぞ。國守維幾と引換に渡さう。國守を連れて來い。

爲憲　何。（と少し逡巡する。）

將門　わいら國司は、農民から賄賂は取らぬか。又、無法の租税を收斂はしないか。玄明を責めるなら、國府の官人すべてが罪人だ。何故玄明一人を下手人にするのだ。おれは汝等の無法の政治を、惱々するほど實證を知つてゐる。國守に玄明をつきつけて、その論斷を明かにしやう。玄明を掩ふのではない、正義を爭ふのだ。國の守を連れて來い。

爲憲　（將門の勢に恐怖しつゝ）何。

將門　顫えるな。最早東國には、その權柄は行はれぬのだ。正しきをもつて爭ふなら、おれは何時でも正義に從ふ。玄明一人を罪人にして、おのれ等の强惡をごまかさうとする、その態度は面憎いのだ。惡人盜賊のふせぎもつかずに、租税を誅求するのみが官人の職掌なのだ。然やうの官人は、人民のものではない、無川の游害だ。歸れ。

　この少し前、史生秦丸に誘はれて、貞盛、出で來り聞く。

貞盛　小次郎。

將門　あ！（と立竦み、透し見て）あ、太郎でないか。

貞盛 （懷しさうに歩み寄り）久しかつたなあ。

將門 うむ……。（と慌しく目に浮く涙を拂つて）うむ、太郎か……。

貞盛 いつぞや和主の都上りに、おれは會ひかねて殘り惜しかつた。

將門 うむ、惡かつた〳〵。（と流るゝ涙を拭き）あの時對面しなかつたのは……おれが惡かつた。今に悔んでゐる。悔んでゐる。（と泣く）

貞盛 （爲憲に）こゝはわたくしが謀らひます。お任せ下さい。

爲憲 かならず玄明を受取るやう――そこの職分だ。

爲憲郎黨と共に去る。

貞盛 （三郎を見て近寄る）そこは、三郎であらう。然うか。

三郎 （座り直して）常陸の太郎か。

貞盛 一族みな……離れ〳〵だ。（と寂しく笑ふ）

將門 （涙を飲み、從弟の手をとり）まあ、來い。こゝへ來い。（と、焚火の傍に座らせ）おれは顚動して、目がけなかつた。思ひがけないので、ハッとした。はゝはゝゝ。それにお身の顏がそつくりだ。薄暗に透して、おれはあツと思つた。はゝはゝゝ。好く似てゐる。

貞盛 うん、誰に？

將門 うん――。（初めて氣がつき、言葉に詰り）凛々しくなつたなあ、うん凛々しい。幼少の時には、とてもこの骨柄に成人せうと思はなかつた立派な武官だ。うむ、立派な武人だ、はゝはゝゝ。（と紛らし笑ひつゝも止度なく涙流る）

貞盛　わしは京でそこの武名を聞いて、久しう逢ひながら悦んでゐた。

將門　うゝん、おれなどは駄目だ。（靠らつて）田舎馬が林を食つて、年とつたやうなものだ。自分の拙さは知つてゐる。（と笑ひつゝ耳を立て）三郎、街道が騒々しいやうではないか。

三郎　うむ、おれも然う思つた。

三郎、比都日と共に去る。遙かに街道の方に、人馬の聲聞ゆる。貞盛と將門、焚火に手を翳してゐたる。暫く無言。

將門　しかし、會つて見ると、急に言葉がないものだなあ。はゝはゝ。

貞盛　うむ……。（と何か考へてゐる）

將門　そして、秀郷に會つたか。

貞盛　うむ。

將門　あれも根ツから方便者だ。押續ひが多くて、潔くない老爺だ。

貞盛　うむ……。

將門　會つて見るとさて高い山もないものだなあ。

貞盛　うむ……。

貞盛、焚火を見詰めて沈思。頷肯くのみ。

將門　（心配さうに）何うした。何を屈託してゐる。

貞盛　うん……何んでもない。

將門　太郎、ちよつとその手を見せろ。（と貞盛の手に指を觸れて）然うだ。これだ。はゝはゝ。太郎。和主この手の

傷を覺えてゐるか。

貞盛　うん？　(瞑想を破られ、初めてはつきり將門を見る)

將門　(その視線に狼狽しつゝ)　忘れたか。忘れたか。はゝはゝゝ。然うだらう。こりやな、和主が八つぐらゐの時だ、國分の尼寺の庭に、大きな熊蜂の巣があつてな、おれが石を投げて巣を荒して、おれは常守の老爺に荒繩で縛りつけられた。その時和主――。

貞盛　(突然)　小次郎、頼みだ、今日は穩和しく引上げてくれないか。

將門　(話の腰を折られて)　あん……？

貞盛　言條は和主にもあるだらう。しかし實は京都から今、嚴重な糺問使が下つてゐるのだ。その手前、國の守も途方にくれてゐるのだ。

將門　そこが云ふなら、わしは引いても構はんが……。然し玄明のことは何うなる。

貞盛　それはこの場合……まあ、和主のところ次第に任せて、更に何一種を引かしてもらひたいのだ。軍兵を率ゐて國廳近くを騷がしたとあつては、官府の聞えも穩かではない。わしは何うで覺悟してゐる身だから好いけれど、あの老年の長官が氣の毒だ。

將門　然しあの小悴の罪狀は憎いぞ。他國分に檢非違使を踏み込ませ、理非も問はずに人を囚人あつかひにするとは不都合極まる。何故下總の國廳を經て、順序をつくして來ないのだ。

貞盛　それは興世の無謀だつた。その責はかならず貞盛の身に受けやう。

將門　(ふと思出して)　和主、大掾職のこころがあると聞いたが、それは眞實なのか。

貞盛　うん、疾くよりその覺悟でゐる。

將門　何故だ。わしはそこの任官を悦んでゐたのだ。

貞盛　今日ほど官人のむづかしい時代はない。わしの望みは、最う京都に絶えてゐる。

將門　けれども和主は、若殿實頼公の恩顧をうけて、從五位の官位があるではないか。殿上にも立ち交はれる人だ。和主の前途は、望みに滿ちてゐるではないか。

貞盛　然うばかりも云はれないよ。（と歎息）その位にゐれば、人の知らない辛勞もあるものだ。

將門　然うかなあ、おれは悦んでゐたがなあ……。

貞盛　時勢は變る。今が官人にとつて、もつとも危い時代なのだ。

將門　時勢が變るとは、うむ、京都の親子喧嘩か。ありや然し、自體馬鹿な話だなあ、親子で權力を爭ふもいゝよ。しかしその度に政治の大本が變動するとは何うしたものだ。今日の政治が明日の政治でなく、その度兩途に迷ふて迷惑するのは人民だけだ。おれ等の郡内なども、地主はみなその不安に當惑して、耕作も手につかないと云ふ有樣だ。考へてくれなけりや困る。

貞盛　京都も地方も、みなそれで吏務が滯つてゐるのだ。

將門　官人は仕方ないさ。人民が困る。地主などは何うするのだ。政治は藤原一門の玩具ではない。人民總體のものだ。人民に返せ、政治を人民に返せと――斯う諸國擧つて叫び出したら、關白親子は全體何うするつもりだらう。（自ら氣が付いて）はゝはゝゝ、太郎、おれも偶には、柄にないことを云ふだらう。はゝはゝゝ。それにしても和主は、官途を退として、その後のはからひは何うするのだ。常陸に土着して作人になるのか。

貞盛　すこし遠國に……放浪するかも知れない。

將門　何。

貞盛　おれは世のすがれ者だ。父の時から京都をねがつて、わが故鄕をもたない身だ。京都の生活は人をたよつて動搖し、東國の生地は既にわが手をはなれてゐる。生きやうにも根を下さう本據のないのだ。(と涙含む)

將門　弱いこと云ふな。おれがゐる、小次郎がゐる。はゝはゝ。

貞盛　おれのこの弱さは、この東國の鬪爭に耐へない。また父の念願にも背く。所詮わしには、常陸の住居はならないと思ふ。

將門　何故ならぬ。それこそおれの、そこの父君に始終願つたところなのだ。一門一族相扶けて、皇族の血統をにくこの東國に殘さうと云つたが、叔父君は優雅すぎて、その決斷がつかなかつた。和主までそんな弱音を出して何うなる。

貞盛　小次郎、然しわしはやはり父の子だよ。(何氣なく云つて、立つ)

將門　(思はずギクリとして) 何、太郎。

貞盛　父の子と云つた――。

貞盛、將門の聲の險しきに不審して、繰返して云ふうちに、はたと口を噤んで、將門を見詰める。將門、無言、熱き眸にて見る。

貞盛　兎に角小次郎、今日は事なく引上げてくれ。わしの家は父の代から管領公の家人についてゐるのだ。その勘氣を蒙つては、家のためにも身のためにも濟まぬ。官使の催促うけぬうちに、どうか今日は引いてくれ。

將門（苛々して）貞盛、それならば何故和主、おれと敵にならない。卑怯だぞ。

貞盛　卑怯ぢやない。おれは和主に、武力に於てその敵ではないのだ、恥しいことだが、おれは自分の弱さを知つてゐる。

將門　心に憎んで、その勢につくのは卑怯ではないか。和主は口で合はせて、心に怨念を抱いてゐる。父が卑怯だつたやうに、おぬしも卑怯の上に枕するのか。

貞盛　それとこれとは違ふ。わしの云ふのは、そこの家は關白家、わが家は右大將家、銘々の支配に從ふからは、所詮末始終の親睦はならない運命にあると云ふのだ。それ故おれは、妻子をつれて陸奥に漂泊するのだ。

將門　うゝむ、然うぢやない。和主はおれを憎んで身を避けるのだ。

貞盛　それは誤解だ。小次郎、おれほどそこを崇めてゐる者はないのだ。おれは弱冠の時から、始終そこを思慕して來てゐる。

將門　それが京都言葉といふものだ。人の目を見て、言葉を躱すな。憎むなら男らしく憎め。おぬしはおれの狂暴を恐れて、心底にもない裏腹を云ふのだ。親に似て、おぬしも卑怯者だ。

貞盛（苦しさうに）父上の話は、何うか許してくれ。

將門　おぬしが卑怯だから出るのだ。叔父はおれを欺いたのだ。業火に死んだのは自業自得だ。おれはおぬしが、それを恥ぢてゐると思つた。

貞盛（悄然として）おれの心が、和主には分らないのだ。

將門　何……？

三郎、慌しく駈け來る。

三郎　兄者、今の物音は興世王が、驛馬を驅つて後詰(ごづめ)に來たのだ。

將門、顫えつゝ貞盛を睨む。

三郎　あの男の騷動ずきには困る。今、ひツ叱つてやつた。

將門　貞盛。おぬしは何故然うおれを恐れ憚るのだ。何故手を握つて、五分々々の話が出來ないのだ。おれはおぬしより、たゞ力が強く生れたのだ、運が好いのだ。それが善でもなければ惡でもないのだ。おぬしは恥づべきことを恥ぢないで、恥づまじきことを恥づる卑怯者だ。

貞盛　………

將門（ホロ〳〵と泣きつゝ）お前は、おれを、父の敵として憎まば、憎まれても好い、憎まれ通す。また、おれは、憎みそのものには敵對はしない。けれどもお前が心を僞つて、おれに媚びるのを見ると我慢がならない。おれは、おれは、昔の太郎に、そんな卑劣さを見たくはない。（と泣く）

貞盛　三郎、兄者は氣がたつてゐる。わしの心は何れ分る時があるだらう。どうか今日は、事なくこゝを引上げてもらつてくれ。國の守が心配せられやう、わしは歸る。

貞盛、歩みかゝる時隨兵四五人、松火を持ちて迎ひ來る。

將門　待て、おれはその長老顏が氣にくはない。貞盛、貞盛………（三郎を拂つて、貞盛に追縋りつゝ）おぬしは、事を曲げて繕ふ必要は何處にある。又、おぬしはおれを、無理と思ふかも知れない。何故この無理を通さうとせんだ。貞盛、何故お前はおれを拒つて、そして、そして、おれを赦さないんだ。例へ卑怯、恥づべき叔父でも、これを殺して物は惡事だと思ふ。子として父の仇を憎むのは、それだけで善事だと思ふ。何故おぬしは、こゝに男

心を立てられないのだ。

貞盛　小次郎、もう許してくれないか。おれは苦しい。

將門　うむ……こいつ、このまゝ置くべきやつではない。

將門、貞盛を引据えて刺殺せんとす、三郎、背後より兄を羽交締にして抱きとむ。

三郎　兄者……兄者……無法が過ぎる。

將門　(身を踠きて)うむ、あの……面を見ろ、臆病者、卑怯者。

三郎　兄者。

貞盛、悄然として去る。

將門、その後姿を凝つと見詰むるうちに、涙止度なく流るゝ。

隨兵等、將門に構ふる心にてゆつくり後に殘り、後去らんとす。

將門　(何か考へて、急に)その隨兵待て。

隨兵等、屹と身を構ふる。

將門、ツカ〳〵と行き、倒れ伏せる玄明を引立て來る。

玄明　との、何んとせらるゝ、との、との……との。(と泣き叫ぶ)

將門　(玄明を隨兵に渡して)大掾のとのへ、身が引出者だと云へ。

隨兵等、泣き狂ふ玄明を引連れ去る。將門、兩手にて頭を抑えて、頽るゝやうに松の根に坐す。微かに嗚咽の聲、指の間よりもるゝ。三郎も俛頭れて言葉なし。

興世王、武裝の姿にて腹立しげに入り來る。

興世王　三郎、玄明を國府方に渡したと云ふは事實か。

三郎　うん、渡した。

興世王　大事の證人を何故渡した。

三郎　あれは、常陸の國の罪人だ。

興世王　うつけ者。玄明は國守に對決させて、その奸惡を彈劾する大事の證人たのだ。それを渡して何うするのだ。

三郎　（横を向きつゝ）國守と爭ふ筈がないから渡したのだ。

興世王　然うか。和主は、そんなに國守に媚びたいのか。

三郎　媚びるのではない。玄明の罪狀に連坐する因緣がないのだ。

興世王　然し、地方官人の姦惡を糾彈するのは、諸國住人の義務だ。

三郎　それは、和主一人のねがひだ。和主はたゞ失職の不平を、地方官すべてにもらしたいのだらう。

興世王　………。

三郎　他人の勢をかりて、わが不平を晴らすのは穢い心だ。

興世王　然うか。然う見えるか。おれには又、徒に官府に恐れをなす、和主たちが賤しく見える。

三郎　何。

興世王　食客の身だ。餘り大きなことは云ふまいな。はゝはゝゝ。

興世王、不愉快さうに去る。

三郎　兄者、霜空に冴えて來た。夜をこめて歸らう。

將門　…………

三郎　玄明を渡したのを悔むのか、兄者。あんなものは蝗蟲(いなご)同樣の命だ。兄者が悔むほどの人間ではない。はゝはゝゝ。この野犬では、人馬にものかふこともならぬ。せめて土浦の宿まで引かう。

將門　うん、然うしやう……。

三郎　貞盛の從兄にも、然し困つたものだ。おれで官位がつとまるのかなあ。どこが性根なのだ、おれにはまるで分らない。何んのために、わが父祖の地をすてゝ漂泊するのだ。京都びとの心は、おれ等には分らない〳〵。はゝはゝゝ。兄者、行かう。

將門　うむ……。

三郎　人も馬も疲れてゐるのだ。行かう。士卒を犒つてやらうよ。兄者も草臥れたらうが立てよ。みな待つてゐる。

將門　うむ。

將門、氣力なく立上りしが、足進まず。立止る。

三郎　待て〳〵、それでは乘り馬を曳いて來やう。

將門　（突然）三郎、貞盛は陸奥路に落ちると云つたな。

三郎　うむ、然う云つた。

將門　五年前、彼を信濃路の雪に追込んだことがあつた。

三郎　然う〳〵、千曲川の河原で遠矢を射かけたことがあつたよ。

將門　十三騎、山沿ひに遠く、薄闇にまぎれて落ちて行く姿を……おれは、岸際に馬を立てゝ、凝つと見送つたことがあつた。

三郎　あの合戰ほど、張合ひない陣はなかつたなあ。はゝはゝゝ。獸のない夏山を追ひ廻したやうなものだ。はゝはゝは。

將門　（突然）三郎、おれはもう一度貞盛の存念を聞きたくなつた。

三郎　馬鹿なことを云ふ。そこを府中にやらるゝものか。

將門　それも然うだなあ。（笑つて）けれども、何んだかおれは……心に沈着かないものがあるんだ。

三郎　歸らう〳〵、夜が深ける。

將門　うむ。

　將門、トボ〳〵歩み出す時、坂上急に騒がしく、どつと笑ふ人聲、拍手の音聞え、玄明猿の如くまろびつゝ逃げ歸る。髪も眉も、片小鬢とゝもに剃り落されて、將門に縋り付く。

將門　（吃驚して）玄明か、何うした。

玄明　貞盛のとのゝ哀訴にて、からく生命だけは助かりました。

將門　貞盛にたすけられた？

玄明　貞盛のとのは、即刻辭職して、明日は奥州へ旅立たれると申されました。後には小次郎もわしの心を知らうと、涙ぐんでゐられました。

將門　後に知る？何故それを今知らされないのだ。長者顔してわが卑怯をかくすか、それともおれを苦しめる氣か。三郎。與世王を呼べ。彼を使ひして、貞盛に會ふ。

三郎　兄者。せつかく穩便にことが濟んだのだ。

將門　えゝ、呼べ。

　　三郎、仕方なく走り去る。

　この時、坂の上に夥しき松火の火見ゆ。藤原爲憲、坂口に顯はる。

爲憲　下總人、下總人。

將門　(赫として) 誰だ。

爲憲　まろだ。貞盛の哀願によつて、玄明の罪狀をたすけ、併せてそちの隱匿の罪をゆるさるゝ。

將門　何。

爲憲　恩命だ。拜謝せい。

將門　帝(わは)。おのれは將門の命を殺し、また助けるの權能があると思つてゐるのか。貞盛がわが命を救ふと云ふなら、おれは厭だ、恥辱だ。

爲憲　恥辱でも、そこに立つてゐるのが救はれてゐるのだ。

將門　何……。(とガタ〳〵顫える)

玄明　(狼狽して) との……との……との……。(と縋る)

　　坂の上にて、どつと笑ひ聲。

將門　玄明、われ死んでくれ、われの死ぬ時なのだ。

玄明　との。何んとせらるゝ。

將門　思はうけぬ。助かるまい。(玄明を突出し　科人を引渡して、國守に對面しやう、貞盛に會ふ。國府の奥へ路をあける。

玄明　との……との……との……

將門　國守を出せ、貞盛を出せ、貞盛……貞盛を出せ。

將門、玄明を引摺つて、大路に坂路を上る。

松火の灯、動搖す。

(幕)

第二場

時——前に同じ。

處——常陸國府廳の正門。

前場より一刻ほど過ぎたり。下總軍の侵入に府中五千の兵は敗北して逃走し、國府の正廳廨舍は兵燹のために燒亡せり。正面の正門は半ば燒け爛れたるまゝ煙を吐き、牆內の建築には餘燼未だ消えず、諸帳簿器具武器など其邊に散亂し、**馬の斃れたるあり、人の死せるあり、**光景狼藉酸鼻を極む。

幕開く。將門、正門前に立ち煙のなかに立文やうのものを讀む。擧止つれを失ふて沈着かず、總身の筋肉自然**に痙攣するもの丶如く、そこに立ちこ丶に立ち、**始終動き廻はる。郎黨、從人やゝ離れて命令を待つ。遠く鬨**の聲聞え、鐘を亂打し、火炎また新に起るもの丶如し。**

將門　これではまだ文書が足りない。國守自分の不明を陳謝する文章はこれでも好いが、皆爲憲の亡状を悔悟するところが不足だ。今日の騒動の源因はあの小冠者めだ。親として教への足らざりし罪を、十分に陳述させて置け。後の證據になるのだ、十分に書かせろ。

黒人　は。

將門　鄭重にあつかへよ。官位のある人々だ。粗相あると後難があるぞ。

黒人　は。

將門　好かつた、然し、なあ、糾問使も國守も無事であつたのは、何よりだ。後日の辯證がこれで立つ。（と、立文を渡し）それから朝臣二人は、にしが警護して直ちに鎌輪の本營へ引上げろ、逃げられては大變だぞ。

黒人、畏つて去る。

鐘聲はげしく、火を避くる老幼婦女、伏しまろびつゝ舞台を通り過ぐ。三郎將賴、來る。疲勞困憊して、土に尻をつく。

將門　（避難民に）慌てるな。もう火はない、火は來ない。それ、危ない。風は巽だ。慌てるな、慌てるな……。（と見送り、三郎に心付く）三郎、また火が移つたやうだな。何處だ、大概らしいな。

三郎　うん、然うらしい。何分軍兵は早りきつてゐる。燒け放題だ。

將門　斯うなりや仕方がないのだぞ。こりや勢ひだ。何方から仕掛けた合戦でもない。おれがお前をつれて府内へ入ると、同時に戰爭になつたのだ。（と、不安さうに三郎の顏色を見る）

三郎　然うだとも、斯うなりや誰も悔みはしない、行くところまで行くのだ。

將門　おれはたゞ貞盛を探したのだ。――これが、合戰になつた。

三郎　あいつ、何うした。これまで探しても姿がない。

將門　まだ遠くは逃げまい。いづれ、この界隈にゐる。

三郎　それに秀郷は何うした。

將門　うん、これは逃げた。早速のきく老爺だ。

三郎　しかし、合戰ほど氣の緊張るものはないな。世に、所謂坊主の女房を盗むほど眞剣はないと云ふが、おれはやつぱり戰だ。はゝはゝゝ。

將門　後が疲れる。

三郎　然うだ。

將門　あ、また驛術の方へ移つたぞ。もう大抵にしないかなあ。

三郎　やめられるものか。みな澤山だ。はゝはゝゝ。

火焔をこがし、人馬の聲聞ゆ。

興世王、弓杖つきつゝ入り來る。脊部に少し負傷す。

興世王　おゝ二人、こゝにゐたか。方々と探した。

三郎　よう京都。今日は働いたな。どうだ小便は出ないか。初陣の時は、妙に小便がつまつて氣になるものだ。はゝはゝゝ。

興世王　馬鹿にするな。はゝはゝゝ。

將門　興世王。そこは貞盛の行衛を見ないか。

興世王　あの臆病者は遠うに遁げた。あんな者は、もう目にかけるな。さて、この後だ。軍立ては何うするのだ。

將門　軍立て？

興世王　然うさ。これほどの大事を惹起してゐながら、安閑としてはゐられまい。一國の廳を掠奪すれば謀叛だぞ。

將門　おれは今、維幾朝臣に迫つて怠狀を書かせた。もと〳〵この騷ぎは爲憲の小童の越權から起つたことだ。糺問使と連署して、爲憲の不埒を謝罪させたところだ。

興世王　小次郎、何うかしたか。馬鹿なこと云つてる、はゝはゝ。國境を越えて軍兵を動した上、國廳まで燒拂へば、罪は重逆だ。一枚の文書で事がすむと思ふか。馬鹿な……はゝはゝ。

將門　然し、爭ふまでも理非を明白にしなければならぬ。

興世王　武藏にも下野にも、そのための國守がゐるのだ。公家の沙汰を待つまでもなく、明日にも兵を進めて征伐に向つたら何うする。

將門　しかし、しかし……おれは公然の裁判をうけたい。おれは貞盛を求めて府内に侵入したのだ。この合戰とて、何方から先に仕掛けたのか、それすら分らないのだ。おれに罪あらば潔く裁斷に服するまでだ。

三郎　兄者、そりや駄目だ。興世ぬしの言葉が條理だ。

將門　あん、何故。

興世王　はゝはゝ、こりや困るなあ。

將門　だが、人民はわれ等の味方だ。國守等の無道には懲りはてゝゐる。おれは人民を味方として、藤原家と理非を爭

はう。もし爭端をひらかば、藤原家の政府か、人民の政府か、この箇所だけでも爭ふ。されはもう忠平もない、實頼もない、政治者そのものと爭ふべき時だと思ふ。

三郎　然し、その政府と爭ふ前に、近隣諸國が連合して、われ等の領分に殺到したら何うする。爭ふ前に滅亡だ。

興世王　將門。一國を討つも公の責はのがれず、坂東八州を取るも罪は同じだ。斯うなればもう、國々を擄掠して、八國の國廳をわが手におさめて、正々堂々と政府に問責しやうではないか。この勢に乘じて押し出せば、下野武藏相模兩總、なに一溜りもあるものではない。東國人獨立の時が來たのだ。はゝはゝゝ。

鐘聲、叫喚の聲。

將門　あ、又火がうつッた。

興世王　まあ坐れ、小次郎。和主の腰の下に八國の人民があるのだ。

將門、悠々と坐る。凝然として沈思。

（幕）

第四幕

時——天慶三年正月某日。

處——下總國葛飾八幡社。今の市川村國府臺附近。

八幡社境内の舞殿を舞臺の中央より上手に寄せて装置す。參道はその背後を通して、上手奧の社殿に向ふ。建築様式はかなりに佛教建築の影響を受け、純粋の八幡造とは云ふべからず。下手に一の鳥居あり、その左右に透塀つゞく。その塀内に水手舍、舞殿などを見するもよし。

銀杏の大樹四五本立ちて參道を奥深く見せ、鳩など遊ぶ。

薄明く。春らしくうらゝかなる日光、舞殿にあふる。その一隅の柱に凭れて、將門の弟四郎將平、うつらうつら眠りゐる。胡籙は負ひたれども、殆んど平時と異ならぬ服裝。疲勞甚しき體なり。

八幡社の社人、下司二人と共に酒甕を据え、舞殿に荒筵を敷き、折敷に堆く盛れる食物など搬びゐる。將門の豐田軍の凱陣を迎ふる用意なり。百姓の四五人、遠く彳立ちて不安さうにその光景を見る。

社人（百姓等に）これ、にし等もちうツそり立つてゐずに、參道の落葉でも掃除しないか。もはや時刻だ。

農民甲　軍勢が到着しても、われ等の災禍にはなりませぬか。

社人　五箇國を徇へてめでたく凱陣なさるのだ。その氣遣ひはよもあるまい。

農民乙　なれど、府内の富者衆は、校倉をからにして、みな四方に逃げ去りました。

社人　下總は本國の郷貫だ。そのやうな狼藉はなさるまい。安堵してゐるが好い。

農民甲　（互に顔を見合せて嘆息）、なあや、我折つたものだ。

同丙　この凶作つゞきに、合戰まであつて、何ぜうすることだ。

同乙　農民はどこに生きるだ。困つたなあや。

社人　これ（眠れる四郎を指示して、百姓を警しむ）

　百姓くど〳〵呟きつゝ、去る。

　菅原景行の家司毛野丸、旅裝にて入り來る。

毛野丸　（社人に）もの申す。將門のとのが本日武藏の國から凱陣なさるは、實狀にござりまするか。

社人　こなた、どれからわせられた。

毛野丸　豐田の郡、菅原の莊から參つた。三位卿からのよろこび使ひでござる。

社人　（四郎を指示して）そこに御座るが御一族のお方ぢや。

　社人等準備終りて、去る。

毛野丸　（見て）おゝ四郎のとの。毛野丸でござります。

四郎　（目を覺まして）おゝ、毛野丸。わしはつい眠つたのか。

毛野丸　四郎のとの。こたびは大層な勢でござりますなあ、はゝはゝゝ、破竹の勢といふのはこの事でござりませうか、國内一統がまたく震駭いたしました。

四郎　（聞くを好まぬ如く）景行卿にはお變りないか。

毛野丸　有様は、今日も自身に境迎せらるゝところ、所勞によつて果しませぬが、三日厨の役をつとめるため、酒、肴ものゝ盜物を持參いたしました。

四郎　まるで、國の守の赴任のやうだ………（と冷笑す）

毛野丸　下野の國も上野の國も、豐田の軍勢がまだ國境を越さぬうちに、國府をひらき穀倉を獻じ、國の稅帳も印鑰も

みな將門のとのにを捧げて、降參したと云ふではござりませぬか。

四郎 (愁然として) うむ、聞かしやる通りだ。(と嘆息する)

毛野丸 武藏の國は何うでござりまいた。かてね武勇自慢の國ゆゑ 少しは抵抗でもござりましたか。

四郎 これは長官が聞怖ぢて、十日も前に京に逃げ歸つたとやら……府廳のなかには一兵もなかつた。

毛野丸 まるで草木も靡くといふ勢ひでござりますな。はゝはゝゝ では手も濡らすに 五箇國の政治をとのゝ掌に握られたのでござりますな。はゝはゝゝ。(と輕薄さうに手を拍ちて笑ふ)

四郎 まづ 然う云つても 好いかも知れないなあ。

毛野丸 との 廣大なものでござりますな。なる程皇子の裔は別だ。三位卿もいたう感慨してゐられました。

四郎 ……。)不快さうに沈默)

毛野丸 との、豐田平氏の世はこれからでござりまするな。はゝはゝゝ。何せい、皇子の裔におはすることぢや、坂東は愚か日本半國を領ずるとも、誰が非分なりと申しませうや。尊いことでござりまする。

四郎、答へず。目を瞑りて柱に凭れる。

毛野丸 との、との……。(と呼びかけて氣がつき) あ、然うぢや。われ等は荷駄馬をそのまゝにして置いた。御免なされ。

毛野丸ひき去る。

鳩の聲折々聞えて、舞台沈默。午前の日光、けなやかに降る。

興世王、鎧姿にて四郎を探しつゝ來る。

與世王　四郞。四郞。軍勢は早や到着するのに……四郞。（と來りて、四郞を見て）何んだ、眠つてゐるのか。

四郞　目を瞑れるまゝ考へてゐるのぢや。

與世王　又か。（苦々しく舌打して去らんとして、立戻り）四郞、兄者の前に溜息でもついて見ろ。和主、その時は仇だぞ。

四郞　何んで……？

與世王　陣中には、一人の嘆息ほど恐るべきものはない。大將でも、雜兵でも、考へると云ふ言葉ほど危險なものはない。三軍の勇氣を沮喪するも、もとは一人の溜息だ。（と殺氣を帶びて睨む）

四郞　（氣弱くも目を逸しつゝ）おれの溜息は、自分の思ひが破れたためなのだ。合戰にかゝはりはない。

與世王　（嘲弄して）あ、また、東國文物獨立の夢か。

四郞　心の計謀には順序がある。事の成功よりは、致せる思ひが次第を趁ふて、ものに顯はれるところに歡喜があるぢや。懸力の行ひには、その順序がない。歡喜がない。例へ成功しても、それは空だ。

與世王　和主の夢が破れたとでも云ふのか。

四郞　わしは心の考へをもつて、百年の後に、東國の文化をつくりたかつた。

與世王　それは和主一人の失望だが。然し、構へて、兄者の前に意見がましきことなど云はゞ、作州一同その儘には行かぬぞ。兄者があの頃、氣に衰への見ゆるも、傍に溜息を吐くやつがあるからだ。一軍の勇氣にもかゝはる、おれが赦さぬぞ。

四郞　………

興世王　農兵等はみな、刈入れの收穫を悲しんで、懷郷の念に驅られてゐるのだ。一匹狂へば千匹の馬が狂ふ。泣顏するな、腐れ儒者め。行つて神職を呼んで來い。國廳からの嘆願があると聞いた。

四郎、萎れて去る。興世王、舌打してその後姿を睨む。

玄明、鎧姿、急しく入り來る。

玄明　御子のとの。總勢もはや到着にござります。

興世王　將門は何うした。酒はもはや醒めたか。

玄明　騎馬にゆられて、心地よげに夷曲などを唱ふてゐられます。

興世王　あのコツ／＼と顳顬を叩く、あれが病ひだぞ。あれの出る頃には、左右ともにその加減がなくてはならぬ。

玄明　なれども、われ等づれの申すことなど……

興世王　用ゐぬとて、棄てゝは置かれぬ。彼は今、彼一身の將門ではない、總勢八千の標目なのだ。八千の命は彼にあるのだ。

神職吉田東嶽、社人をつれて出て來る。東嶽はもはや頽齡の老人。

東嶽　これは早や、(と愕きつゝ)御着到でござりまするか。當社の神職東嶽にござります。(と跪いて拜する)

興世王　前使の者を走らした筈だ。注文を見たか。

東嶽　はい、はい。御案内によつて、拜殿社殿ともに打淨めてござりまする。それに所在の郡司郷長などより、よろこびの酒甕、肴どもなど夥しい送物にござります。はい。

興世王　酌とる者には、近隣の乙女等を驅り集めて置けばよかつた。

東磨　はい。ちやくとこれに心付きまいて、總てその筈に致しました。

興世王　豐田を出て二月ぶりに、五箇國の主となつて凱陣するのだ。みな本國下總娘の柔肌にこがれてゐるのだ。はゝはゝ。

東磨　その奔走は、致します。何分にも本社々領の安堵の御計ひを祈たてまつります。

興世王　これは馳走次第だ。はゝはゝ。大將軍に勇みをつける者あらば、莫大の社地も寄進しやうよ。

東磨　豐田のとのには、御鬱氣にでもござりまするか。

興世王　常と病ひとの境の見えぬ人だ。既に國守方の嘆願あると云ふが、國府廳はもはや明渡しの準備を終つたであらうな。

東磨　これはもう御念にも及びませぬ。國守のとのには、諸帳簿、印璽、鎰の類まで取揃へて、社内の一室に、豐田のとのの御着陣を、先程から相待たれまする。

興世王　嘆願とは何んだ。

玄明　（進み出て）これは、わたくしが聞きました。成らぬ。

興世王　何んだ。

玄明　せめて國境までなりと、女車を一輪つかはされたいと願ひまする。國内の人民に、わが面、女どもの面を見らるゝのが、恥がましいのださうにござります。

興世王　命の際まで、まだ外聞を繕ふか。はゝはゝ。玄明、例の馬追唄でも歌ふて、囃し立てゝ送り出せ。

玄明　素よりその積りで居りまする。は　はゝゝ。

この對話の中途に、將門、一人つか／＼と入り來る。いきなり酒甕の柄杓をとりて、息も吐かず、がぶ／＼と酒を呷る。その三杯目ぐらひに、興世王、將門に心づく。

興世王　(進み寄り、臂をとり) 何うしたのだ。(と睨む)

將門　乾いてならぬ。

興世王　又――

將門、飲半しの杓を投げて、ドタリと舞殿に腰掛ける。

興世王　當國の長官は、はや國廳をひらき、捧げ物をもつて、社內にそこを待ちうけてゐるさうだ。

將門　よろしきに賴む。玄明、受取つて來い。(と柱に凭れる)

玄明、當惑さうに興世王の指揮を待つ。

興世王　(神職に) 社家。神前の用意はよいのか。凱旋の奉幣をするのだ。

東儀　畏りました。

東儀と社人、將門の前に拜をなして去る。

興世王、凝つと將門の横顏を見詰めて、立つ。

興世王　小次郎。そこは隨兵どもに祟られる時が來るぞ。(重く) 用心せいよ。

將門　酒を飲んでは惡いのか。

興世王　落着け！

將門　玄明。(と顏を上げ) 經明はまだ常陸から歸らないか。音信(たより)はないか。

玄明　まだ一向に……（與世王を憚りつゝ）その沙汰を聞きませぬ。

將門　手伸びな奴だなあ。蕪間の里から貞盛を生捕つて來るのに、もはや三日になる。賴もしうもない奴だ。（と舌打ち）

玄明　貞盛のとのは、又しても蕪間の隱處を逐電されたのではござりますまいか。

將門　生捕らずに歸つたら……奴、その儘には置かない。

與世王　小次郎。

將門　何んだ。

與世王（苦々しげに）そこは今、誰を敵として軍旅を動かしてゐるのだ。

將門（横を向いて）和主に聞いてはゐない。

與世王　國を二分して、京都を敵に軍立ちしてゐるのだ。貞盛一人が何うしたと云ふんだ。餘り人の膽を苛立たせるものではない。

將門　和主たちは直ぐ、一國の半國のと云ふ。然し、國なんて言葉は、おれの耳には遠い音樂だ。貞盛を探し求めるところほど、おれは眞劍になれないのだ。（冷かに笑つて）おれは、空虚なことは嫌ひだ。

與世王　例へ嫌ひでも。もう勢がゆるさない。（と笑ふ）

將門（赫として）おれはもう豐田に歸るぞ。歸る〳〵。

與世王　それは今日の軍議にある。和主ひとりの自由にはならないことだ。

將門　下野、上野、信濃、武藏、下總。（と指を伏せ）これで五箇を虜領してゐる。それでおれは、何か滿足される力を自分に感じられるか。増すものはたゞ不安だ。苛立しさだ、目に見えぬもどかしさだ。和主でも三郎でも、始

終日の下の皺がピク／＼と動いてゐる。小流れの音を聞いても、妙にみな涙含む。おれ一人が怯懦なのではない。考へて見ろ。

興世王、無言、少ししらけたる心になる。

將門　勝軍は悲しいものだ。おれはいつも、耳の底がしいんと鳴る。おれたちは無人の野を、勝つた／＼と、自分の耳に聞かせるために、怒鳴つて、叫んで、狂ひ廻つて斃るまで歩いてゐるのだ。森然とすると、耐らなく心が寂れて來る。おれたちは皆、おのれを見失ふてゐるのだ。

將門、立つて又柄杓にて酒をがぶ／＼呷る。

將門　(柄杓を持ちながら) おれは歸るぞ。豐田に歸るぞ。相模の國を奪へば、足柄の峠が心がゝりになる。伊豆をとれば、駿河の國が不安になる。何處まで押しても、心の臆病が去らないのだ。(酒を飲み／＼) 押出した勢だ。引かうとは云はない。然し、敵のない軍は厭だ。鬪ふなら豐田で澤山だ。歸る、歸る／＼。豐田へ歸つて、軍勢を待つ。おれを怯懦だと云ふが、和主等のこゝろも裏返して見ろ。皆同じなのだ。

將門、言葉吃り／＼て、又酒を飲まんとす。

興世王　(傍に寄り、靜かに) 兎に角、酒だけはやめてくれ。何れ評議次第とする。(と、そつと嘆息する)

將門、もとの坐に戻りて、どかりと腰掛ける。兩手を膝に置いて、凝つと地面を見詰める。

この時、參道の方を拜殿の方へ行く鎧武者の姿、二三人づつ十四五人、樹の間がくれに通り過ぎる。豐田軍の頭立ちたる者なり。

玄明　おゝ、總勢が着陣いたした。國守の方はいかゞ計ひます。

興世王　仕方がない。おれが代理する。小次郎、後から來いよ。

興世王と玄明、拜殿の方に去る。

鳩の聲。將門、沈思。やがて又立上りて酒甕の傍に行き、柄杓を取らんとする時、弟四郎入り來る。

四郎　兄者。

將門、その靜かな聲に驚き、思はず柄杓を落す。

將門（ホツとして目を瞠り）ほ……、四郎ではないか。（と肩にて息吐く）

四郎　神前に、凱旋の祝儀があるさうだ。（と、これも疲れたやうに腰掛ける）

將門　然うか。今行く。

將門、四郎と離れて又腰を掛ける。長き間。

本社の方より、篳篥の音神さびて聞え來る。

四郎（暫くして）兄者、おれは一つ聞きたいことがあるのだ。豐田を出て、國々を行軍する間も、おれは始終それが氣になつてゐたのだ。

將門（俯向けるまゝ）何んだ。

四郎（靜かな聲で）恐しい言葉を出さなければならないのだ。

將門　あん？

將門、愕然として顏を上げ、不安さうに弟を見詰むる。

四郎　兄者。兄者はこたびの企てを起した時、心のうちに、おれは皇子の裔だ——こい考へがあつたか何うか、それを

聞きたい。」

將門　あ――

四郎　これはこの國では、恐しい言葉だぞ。既に奈良の都の時にも、この言葉に惑はされて、大義を誤つた僧侶がある。その先つ世にも、このまどはしをうけた皇子がある。この言葉には咀ひがかゝつてゐるのだ。

將門　（狼狽して）お、おれが爭ふのは藤氏の一門だ。萬民を腰に附けて今の政府と鬪はふとしてゐるのだ。

四郎　然うか。それなら好い。この國にあつては、それが最後の壁なのだ。例へ藤原氏を破つても、制度、政治を破壞しても、この最後の壁の前には身が竦まなければならない。

將門　（困惑しながら）知つてゐる〱、それは知つてる、

四郎　兄者。わしは何日ぞや、去る延長年間に起つた渤海國の革命事蹟――大赦契王が臣下より起つて、東丹國を創業した經過を詳しく話したことがあつた。あれは新しい智識として話したのだ。あの放縱なる思想と、皇子の齋と云ふ言葉を結びつける時に、兄者、體が顫へるやうな考へが浮ぶのだぞ。兄者、分つたか……分つてゐるな。

將門　うむ、分つてゐる。もう云ふな。

　將門、苦しげに立上る時、三郎入り來る。

三郎　兄者。みな揃ふて待つてゐるのだ。樂の音が聞えないのか。

將門　うむ、參る……今參る。

三郎　國守の印鑰を、興世王などに始末させて何うする氣だ。

將門　うむ。今參る。

將門、三郎の後に從つて本堂の方に去る。
四郎、一人殘りて嘆息。奏樂の音、拍手の音、微かに聞え來る。
漸くして將門一人、逃れるやうに歸り來り、苦しげに酒の柄杓を取る。
どつと打笑ふ聲して、廊下の武士ども、拜殿を下りて入り來る。その名は、伊和員經、坂上遂高、文屋好立、平將文、平將爲、以下十三四名、いづれも鎧姿。興世王、三郎將賴、藤原玄明、など後より來る。その他、神職東麿、社人など從ふ。

東麿　さ、との用意の坐になほらされませ、さ、横坐に。

將門　舞臺の正面に坐す。興世王、三郎その左右に坐す。四郎は少し離れて後方に、他の一同は土間に間隔つくりて坐す。

神職社人、一同に神酒の土器を與へて去る。

三郎　さ、酒だ。二月ぶりの國入りだ、みな泥のやうに醉ふべえ。

興世王　それ〱女ども、酒だ〱、酌とれ。（と呼ぶ）

里の乙女六七名、入り來る。酒肴を一同にすゝめ、酌する。

興世王　そこで、醉はないうちの評定だ。これからの軍議を何んとする。

三郎　軍議？何んの軍議だ。明日船出して、相模の國を襲ふのではないか。今更ら、何を云ふのだ。

興世王　しかし、若し異存の者あつては、ならない。

三郎　誰に異存があるのだ。それは最う決定してゐる話だ。阪東は八箇國だ。一國も缺いてはその甲斐がない。

與世王　然し、衆議となれば、われ等の意見のみにもなるまい。

三　郎　（一同に向ひ）相模出兵に、誰か、異議をさしはさむ者があるのか、名乗れ、誰だ。

一同、顔を見合はせて無言。將門、乙女に注がせて苦しさうに飲む。

三　郎　（與世王に）見ろ、誰も異存がないではないか。こゝまで來て弱音を吹く者があらば、三郎がそやつと決鬪する。

與世王　それでは明日にも、順風次第に船を出すな。

三　郎　素よりの事だ。

與世王　好し、それと治定すればおれも飲む、乙女たち、酒をはやらせろ。

三　郎　飲め／＼、わが世の花が今咲くのだ。はゝはゝ。

一同、同音に笑ふ。將門、默然として飲む。

神職東賢、慌しく走り來る。

東　賢　申し／＼、異變の大事でござります。（と畏まる）

與世王　（膝を立て）何んだ。

東　賢　たゞ今、勝軍の神樂を奏しまするうち、社内の巫女に神憑りして、八幡大菩薩の御託宣がござりました。

與世王　何んの託宣だ。

東　賢　世に恐ろしき御神託でござります。

三　郎　酒飲みに社内の地を貸されぬとでも云つたか。はゝはゝ。

東　賢　八幡大菩薩がお使者に立ち、蔭子、平將門にわが位を授けまつらん、其位記は左大臣正二位菅原道眞の靈魂に

より表する旨、畏しき御託宣ございました。

三郎　何、兄者が九五の御位につく。田舎社主め　はゝはゝ。

一同どつと笑ふ。

東膺　いや〳〵僞りではございませぬ。慥に、唯今——。

興世王　では將門に諡號を奉つて　この後は新皇様と呼ばねばなるまい。はゝはゝ。

東膺　そのため八幡大菩薩は、八萬の軍勢を起して、御味方に馳せ參じられます　三十二相の音樂をもつて——

興世王　煩さい。そのやうな事は、酒の肴にもならぬ。社地には濫妨をはたらかない。安心して歸れ。

東膺、一同に笑はれて悄然として去る。

三郎　（見送つて）何んたるうつけ者だ。

興世王　あれでも、身にあるだけの智慧をしぼつて來たのだ。はゝはゝ。

一同、どつと笑ふ。その間も、酒を飲む。

將門、度々の酒に醉を發して、傍の行器を引寄せて俯伏しゐる。

興世王　（四郎を見て）四郎、何うした、和主も一つ飲まぬか。

四郎　わしは飲まぬ。

興世王　御託宣によつて、兄者が九重の御位につけば、さしづめ下總に京都を造營せねばならぬぞ。和主かねての念願通り、東國文物の獨立がなるではないか。はゝはゝ。祝ひに、來て飲め。

四郎　わしは、わしの考へを夢とは思はぬ。何日の時にか現はれる。

興世王　さて、石井の亭南を王城として。然うだ、浮橋のあたりを山崎とでもするかなあ、四郎。はゝはゝゝ。

三郎　それなら、相馬領の大井津が京の大津に當るだらう。はゝはゝゝ。四郎、夢話も程にして置け。

四郎　何んとでも云へ。わしは眞劍に、この東國のために考へてゐるのだ。（と、口惜しげに涙を拂ふ）

三郎と興世王、腹をかゝへて大笑する時、多治經明、鎧姿、大童になりて、貞盛の妻京御前をつれて來る、京御前は上衣を剝がれ、ほとんど半裸體とも云ふべき姿にて、後手に縛せらるゝ。

經明　との、との、只今常陸より歸りました。

將門　おゝ經明か。（むつくり起きんとして思案し、兩手に顔を俯伏せるまゝ）そこは貞盛を、捕りかねて歸つて來たな。

經明　面目ないが、貞盛は三日前に、また蒜間を逐電して、かいくれ姿を現はしませぬ。吹く風のあとを探すやうに。地にも空にもまるで形を殘しませぬ。

將門　憎い從弟だ。どこまでおれを惱ますのだ。

經明　との。その代りに、內君を引立てゝ參りました。折檻を強めたら、貞盛の行衞を白狀せぬことにござりますまい、

將門　何、女房を捕つた。

將門、ぎよつとして顔を上げ、京御前を見る。京御前、恥と恐しさに打伏して泣く。

將門　あゝ……。（と手を振り）この姿は何んだ。衣を着せよ、衣を着せろ。（と、又行器に突伏し、拳にて切りに顳顬を叩く）

經明　だが、剛情なる女房にて、恥しめねば口を開きませぬ。

將門　えゝ、おれの從弟だ。

將門、大盃をとりてぐ〻〻と飲む。經明、面膨らして京御前を引立て〻行く。

この時まで、ひそ〳〵囁き合ひて箸など鐃にして戯れゐたる土間の一同、手を叩いてどつと笑ふ。

興世王　何んだ、何うしたのだ。

玄明　（立上つて）やれこれで、除目の面倒も濟みまいた。

一同　は〻は〻。

興世王　何んだ

玄明　とのが新皇の位につかせらるれば、文武百官が無くてはならぬ。そのため評定して、除目を放ちまいた。先づ宰人興世王のとのは前官によつて武藏の國守。舍弟平將賴朝臣は下野守、上野守には常羽御厨の別當多治經明、常陸の介には斯く云ふ藤原玄明朝臣――

將門　煩さい！　女を連れて來い！

將門、手にせる盃を投付ける。一同驚く。

將門　うむ、憎い貞盛だ。女房を連れて來い。

四郎　（憂はしげに）兄者。兄者……。

將門　（一點を見詰めて）あいつ……心からの卑怯者であつたのか。

經明、京御前をつれ來る。椽の上に座を與ふ。

將門　（酒氣を吐きつ〻、躍り寄り）和御前、くろめやうとて成らぬぞ。貞盛の在處が聞きたい、聞かしてくれ。わしは貞盛を苦しめるのではない。彼の心が聞きたいのだ。何處へ遁がれた、聞かしてくりやれ。

京御前　（決心固く）知りませぬ。

將門　和御前の隱す心は分つてゐる。されど、わしが彼を求める心にもなつてくれ。わしは彼れを知りたいと苦しみつつ、何うしても彼の心が分らないのだ。或日は彼を怯懦とも賤しむ。卑怯とも憎む。然し、夜深けてふと覺めて彼を思ふ時……おれは、何うしても彼を憎み得ない何かゞあるやうな氣がする。底から光る、彼の螢の光りを、おれは肌に感じるやうにも思ふ。おれは彼を、憎んでよいのか、惡いのか、それが分らなくなるのが苦しいのだ。顫える事はない、亂暴はしない、敎へてくれ。

京御前　日大三寶にかけてわたくしは………

將門　これ、誓ふものではない。わしはな、今日戰に勝つた、名も立つた。けれども、けれども……それはたゞ運だ、時なのだ。（酒氣を吐き）人が人を賤しめ憎むとは、そのやうに輕いものではない。おれは自分を欺くために、彼を賤しめる人になりたくない。この目で明らかに見て、それから彼を憎み賤しめたいのだ。言葉を換へて云へば、彼の賤しさ憎さを見て、おれの正しさ大きさを信じたいのかも知れぬ。それでも關はぬ。おれは何うしても、自分を高いところに見上げることは出來ない。謂ふ如く、貞盛が賤しく耻づべき男なら、おれは初めて自分を信じられる。貞盛も見たい、おれも見たい、人の眞實を見たいのだ。おれは決して貞盛に危害を加へる者ではない。分つたか、おれのこの心の惱みが分つたか。さ、云へ、云へ。

京御前　何のやうに問はれても、わたくしは知りませぬ。

將門　（對者の肩を叩き）女の身で、衣を剝がれ、馬上に曝され　耻だ。强情はるほど耻を見なければならぬ。わしも先年、彼に妻を助けられてゐる。和御前にもいたはりの心を失はぬ。貞盛は何故わしを恐れるのだ。先には陸奥

に潜伏すると云ひながら、何故今日まで帝御前などに隠れてゐたのだ。さ、[illegible]……。

京御前　もはや……殺されたがいゝ。云ひませぬ／＼、云ひませぬ。

將門　何――。

京御前　とのは弱くも正しき人ぢや。そこのやうな無道人ではない。殺して下され。[illegible]……。

　將門、突と立ちて京御前を後より蹴倒す。

將門　貞盛をおれが賤しむやうに、和御前もおれに賤しまれたいのか。

京御前　死にたい……死にたい……。

將門　うむ……。（と歯噛みして）おれを飽くまで苦しめるか。玄明この女を両肢に引裂け。[illegible]

玄明　（仰天して）何んと仰せられまする。

將門　えゝ、女を凌辱するのだ。女ばかりではない、貞盛を辱しめるのだ。おれの心は裂けさうだ。[illegible]ずば、おれの心は破れるばかりだ。玄明、早くせよ。帳を張れ。屏風をつくれ。

三郎　（背後より抱き）兄者。氣が狂つたか、惣勢の見る前、何んの醜態だ。

　四郎、飛下り行きて京御前を介抱する。

將門　世に、節操なき男ほど賤しきはない。おれは女を辱かしめて、貞盛の怒りを見たいのだ。[illegible]を張れ……。えゝ頼まぬ。おれが引立てる。

　將門、三郎を振り放して京御前に小躍りかゝらんとす。三郎、又取り付く。

將門　おれは七國を駆けめぐつても貞盛を探し、彼と一騎打の勝負をする。[illegible]

によつて定むるの外はない。女を渡せ、女、女……。（と身をもあがき足を踏はる）

三郎　（決心して）與世王！（と、目配せ）

與世王　もう是非がない。

與世王、憤然立つて、三郎と共に捩伏せる。傍に有合ふ栅にて抑え付くる。

將門　何をする、何をする……女を渡せ、女を、女を渡せ。（と栅を撥上げて、女を追はんとする）

與世王　（一同に向つて）何を見てゐる、みな來い。

一同、どやどやと駈上りて、栅にて將門を抑える。

その間に京御前と四郎、遁れ去る。

將門　（手足を踠き）三郎、與世王、おれを殺すか……殺すのか……

三郎　（涙を拂つて）死ね、氣違ひ！一同のためだ。

將門　うむ殺せ……殺せ……。おれはおまへ等の犧牲にあげられてゐる身なのだ、お前たちがおれを擔ぎあげるのは、みな名々の不安と慾のためだ。恐怖と不安とをおれ一人に預けて、お前たちはそれを遁れやうとしてゐる。味方ではない……お前たちが敵だ。敵だ、敵だ……。

三郎　（栅の上に坐りて）それ騒げ。それ怒鳴れ……。（と泣く）

將門　お前たちは、おれ一人を高い樹の上に上げて、その、その樹の下に憩はふとしてゐるのだ。敵だ、敵だ……。

三郎　騒げ、騒げ、騒げ……。（栅を抑えて、聲立てゝ泣く）

四郎、走り來る。

四郎　兄者。貞盛の行衛が知れた。豐田から飛脚が來た。

將門　うむ……

四郎　貞盛は下野に逃げた。秀郷の軍兵を借りて一萬餘騎、毛野川を渡して郡内へ責め入つたさうだ。

將門　うむ……。

　　將門、析を撥返す力もなく、たゞ低く唸るのみ。

與世王　三郎覺悟する時だぞ。

三郎　もう、何うなつても仕方がない。

將門　貞盛……貞盛……うむ、うむ……

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も一度「カロツト」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此品を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御訪問申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其席で榮川堂主は自身來社せる次第を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして一般社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると此社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は紙煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました抑も紙煙草等吸へないですね」、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に各社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其席で更に店主は口を開いて「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに貴社でカロツトが多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も能く煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量の香氣を含有せるを以て朝夕人も亦共有せる喫煙用の凡てを少量に與ふると同時に温雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは好き刺戟と清爽とを永く口中に發し一時之を口に試みたる者は全く煙草に對するすべき嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る際に口中惡臭を發する事又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他會歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を治すべし。

カロツト（凡百日分）

パイプ ベークライト製付	壹組	貳圓五十錢
パイプ 象牙製サック入付	壹組	參圓五十錢

送料（内地 十八錢 鮮、朝、樺 四十九錢）
引替送料（内地 三十錢 鮮、朝、樺 五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森入新井町不入斗四五一
榮川堂
振替東京五二九壹壹

代理店 東京市京橋區瀧山町十三番地 大下堂

詩聖タゴール著　佐野甚之助譯

（內容見本呈上）

創作ゴーラ

ポイント活字・八百頁
口繪數葉更紗表裝優美
定價金參圓八拾錢
書留送料金貳拾參錢

忽三版

詩聖タゴール生涯の二大使命は、一は外に對つて古來印度の特産たる貴き心靈界の或物を全世界に宣傳すると、他は內に對つて三億生民の現代の疾苦を救ふとにある。思想の衝突に悶え宗教の中毒に僃れ、政治に苦み、社會に惱める祖國の實情を背景として、力强き信念と、愛國の精神とに燃ゆる青年ゴーラを藉り來り、之に配するに美女、貞婦、懦夫、義人を以てし、波瀾重疊の間に自己の大使命を說いたのがこの小說である。理智の雪峰！愛の恒河！そこにも性の苦杯が酌まれた。殉教の烈火が燃え立つた。而も其眞劍味に讀者は必ず襟を正し、その深刻味には涙の涌くのを覺えぬであらう。されば宇宙の核心から迸り出た大靈感は一讀、再讀、三讀何物かを讀者の肉に、骨に、髓にまで烙き附けねば措かぬ空前の大文字である。

懸賞募集

全篇七十六章現在各章の題目なし。四版より新に附すべき各章の適切なる題目を廣く讀者より募集す。

一等　金百五拾圓・二等　金五拾圓・三等　金貳拾五圓・四等　金拾五圓五人・五等定價五圓以上の書籍十人

選　者　文學博士　高楠順次郎氏・文學博士　木村泰賢氏・水上瀧太郎氏・松岡讓氏・譯者佐野甚之助

應募期限　大正十四年四月三十日迄に大雄閣懸賞係宛送附のこと。

發賣　京都市西六條　振替大阪一〇八一五番　興教書院

發兌　東京小石川關口臺町五　振替東京六六九二九番　電話牛込七六八番・六七〇番　大雄閣

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東海堂
同京橋區銀座三丁目	北隆館
同京橋區元數寄屋町	至誠堂
同日本橋區本石町	盛林堂
同本郷區春木町	盛文館
大阪市北區梅田町	盛文館
同北區梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

●定價 金八拾錢 郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

前金	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓拾六錢
	以上郵税共	

▲[illegible]

●廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社

正路喜社　帝國通信社　日本廣告社

信稻社　金蘭社　星社

振替貯金口座 [illegible]

電話代用 [illegible]

中央公論　婦人公論 [illegible]

大正十四年三月廿五日印刷納本

大正十四年四月一日發行

發行所　中央公論社

印刷所 [illegible]

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◎本號特價金壹圓八拾錢　郵稅金五錢

東京小石川研精社印刷